## 剣の銘(な)は。

2018年9月22日

　魔族の支配する魔界の一番奥にその城はある。魔界の最深部に位置するその城はもちろん魔族の王、魔王の城。その更に一番奥、つまるところ魔王の玉座の間にて、二人は対峙している。

　片や、やや細身なれども芯の強さを伺わせる青年。白銀の甲冑を着込んでおり、その手にはやはり白銀の長剣を構えている。世間に言うところの"勇者"と呼ばれる存在である。

　もう一方は容姿端麗な婦人であるが、その頭には羊のような角が生えており、禍々しい雰囲気のローブを纏っていた。手には黒い刀身の細剣。こちらはこの城の主、魔王その人である。

　二人は言葉を交わすこともなく、剣を合わせる。勢いよく振りかぶり切りかかった勇者の剣を、魔王は躱さずに剣で受け止める。並の剣であれば剣ごと真っ二つになっていたであろう、と思わせるほどに力強い一撃。勇者の剣と比較して魔王の剣は細身だが、その刀身の細さの違いを感じさせることもなく、魔王の剣は耐える。

　二人は飛びすさり、再び剣を合わせる。今度は魔王の突きを勇者がその剣の刀身の横腹で受け止める。並の剣であれば、刀身ごと貫かれていた、と思わせるほどにその突きは鋭い。しかし、勇者の剣はやすやすと受け止めている。

　何度か剣を合わせていくが、両名とも自分の得物を信頼しきった動きである。そうしているうち、二人の顔には困惑の色が浮かび始める。

　互いの立場を考えれば、その得物がともすれば神代より伝わる特級品であろうことは想定済みではあった。

　だが、逆に言えばそれだけの業物同士でこれだけ打ち合って耐久できるのはあまりにもおかしい。

　その困惑は互いに伝わり、やがてどちらからともなく剣を下ろす。

「魔王よ、今更ながらつかぬことを聞く」

「うむ、よい。勇者よ、それはおそらく我も聞きたいことであるゆえ」

「では、問おう。その剣を打ったのは誰だ」

「やはりか。我もその剣を打ったのが誰かを知りたい」

「ではやはり？」

「うむ、お主の想像している人物で間違いない。あの偏屈な鍛冶屋の手になる作だ」

　そう言うと、魔王は剣の柄頭を勇者に向けた。そこには太めの猫が座る姿が刻印されている。

「やはりそうか、あのオッさん……」

　勇者もそう言いながら、自分の剣の柄頭を魔王に向けた。そこには、魔王のものと同じ刻印が施されている。

「おそらくこうなることを見越して、双方に対して剣を打ったのであろうよ。全く食えぬ輩よな」

「これ以上は全くの無駄だな」

「うむ。どちらかの体力が尽きれば、ということではあるが……」

「これまでで分かった。アンタと俺じゃ互角だ」

「で、あろうな。それでどちらかが勝利を得たとしても、その後、疲れ果てたほうが討ち取られる。意味はなかろう」

「では、答えは1つだな」

「相分かった。少なくとも我かお主の代では休戦することを誓おう」

「あのオヤジにも伝えておくが、いいな？」

「うむ。

「では、そのようにさせてもらう。何かで会うこともあるだろうが、それまではさらばだ」

「承知した。さて、我も触れを出す準備をせねばな……」

　そうして二人は互いに反対側を向いてその場を去る。もはや最初に対峙した時の張り詰めた空気はなく、弛緩した空気が流れる中、対照的な二人は、同じ人物の顔を思い浮かべている。

　一見するとなんと言うことのない、幾らかの歳を重ねた男の顔を。

# 第１章 異世界での暮らし方編

## 異世界に転移する

2018年9月23日

　パッと見た限りでは日本と何ら変わらない森。しかし、俺はここが日本どころか、そもそも地球上ですらなく、さらに言えばもうあの世界でもないことを知っている。

　ここは、

　そもそもは残業に次ぐ残業でもうテッペンを回ってから会社を出て帰ろうとした時、フラフラと歩く野良猫を見つけたところから始まる。

　その野良猫に負けず劣らずフラフラと歩きながら駅に向かっていた俺は、その猫が道路のど真ん中へフラフラしたまま向かっていくのを見てしまった。

　その向こうからはトラック。全く減速する様子はなく、猫には気がついていないだろう。疲れていたのか何なのか、それを見た瞬間に俺は猫に向かって走っていた。

　俺が猫に近づくたびに、トラックも猫に近づいていく。これは純然たる競争だ。俺とトラックのどちらが先に猫に到達できるか。速さで言えば当然トラックの圧倒的勝利だが、距離で言えば俺のほうがかなり近い。

　しかし、ある程度まで近づいたのに届かない場合はトラックの一人勝ち（どういう意味の勝ちなのかどうかは一旦置いといて）である。

　俺と猫の間がドンドン縮まり、そして俺の手が猫の胴体をひっつかんで放り投げた。その直後、ドン、と言う音ともに俺の身体は宙を舞い、薄れゆく意識の中で、火事場の馬鹿力ってあるんだなぁと的はずれなことを考えた。

　どれくらい時間がたったのかは分からない。すぐなのか、それともかなり長い時間なのか。俺はふと

　意識が何かを認識しているのは確かだが、これは果たして「起きている」と言えるのかはかなり怪しい。意識がはっきりしているとも言えるし、朦朧としているとも言える、そんな曖昧な状態だ。そこに語りかけてくる"声"があった。かなり若い女の声だ。

「やあ、目を覚ましたかい？」

「この状態をそう呼べるのならそうだな。起きてるよ」

　俺は端的に事実だけを答えた。この”声”でのやり取りも、明確に音波が耳に届いて「聞こえている」と言うことではないし、逆に俺も肺から空気を送り出し、声帯を震わせて音波を発しているわけではない。

　この感覚を表現するなら、テレパシーかも知れない。誰かが自分に対して、そういった意思の疎通を図ろうとしていることが感じ取れる、逆に俺は誰かに向かって意思の疎通を図ろうとしている、と言う非常に迂遠なイメージでの"会話"だった。

「とりあえず魂に欠損はないようだね。本来、魂の保存はボクの権能で許される範囲を少しだけ超えてしまっているんだ」

「ふむ。言っている意味がよく分からんな」

「まぁ、簡単に言えば、君は"あの世界では"死んでしまった。普通、あの世界に限らず、どの世界でも死んでしまった人間の魂は

　そうだね、キミのやっていた仕事風に言えば、確保していたメモリが解放されるようなものさ。で、ボクはそのメモリを解放されないようにロックをかけたんだけど、これは本来ボクの権限ではやっていいことではない、ってこと」

「なるほど、状態そのものは分かった。で、これからどうしようって言うんだ？」

　俺は不思議と落ち着いていた。「お前は死んだ」と言う非常に重要なことをさらりと宣言されたにもかかわらずだ。

「良かった、落ち着いているね。大変申しわけないんだけど、今はキミの認識を少しいじって、死に対する概念を一時的に希薄にさせてもらっている。

　そうしないとキミの魂が壊れてしまう――さっきの例えで言えば、本来は解放されているべき、と気がついてしまったメモリは

　そうなれば当然その中のデータは消し飛んでしまい――キミという概念は肉体も魂も消滅してしまう」

「ふーむ。それも今は冷静に理解できる。」

「うん。ありがとう。それで、キミはこうなる前に野良猫を助けたね？」

「ああ。それは間違いない。俺は猫が好きだからな」

　齢は40をいくばくか過ぎ、”外見的には完全にヤクザ”、”そこまで行かなくてもカタギには見えない”などと言われる外見の俺であるが、割と可愛いものは好きで、猫は殊更大好きだった。

　それと連日連夜の激務、寄る年波で落ちた体力、それに伴って限界以下まで落ちた思考能力、これら全てが（完全に間違った方向にではあるが）奇跡的に噛み合ってしまった結果、俺自身にああ言った行動を取らせたのだろう、とこうなった今ではそう思う。

　それは突き詰めれば「猫が好きだから」と言うただその一点の理由に尽きるのだ。

「結論から言えば、アレはボクで、ボクは”

「ある。SFやらファンタジーやら、そういった作品には結構触れてきてたからな」

「なるほど。それなら少しは話が早いか。ボクはその平行世界を渡り歩いて、他の平行世界に悪影響を及ぼすようなものがないかを見張る、というのが役目なのさ」

　そういう声（ではないが）からは少し自慢げな様子が伺えた。まぁ確かにそのような役目はよほどの人物でなくては務まるまい。

「へぇ、結構偉いんだな」

　俺は素直に褒めた。

「ま、とは言ってもピンキリで、ボクはキリの方から数えたほうが早いんだけどね」

　どうやら褒めて損したようだ。

「でも、余人に務まるような役目でないことは分かって欲しいかな。平行世界への影響の兆候を見逃して、実際に手を打てる段階を超えちゃったら大変だからね。実際に手を出すのはボクの領分じゃないんだけど、まぁ、ボクの役目が分かったところで、解説に戻ろう」

　居住まいを正し（たように感じ）、彼女（らしき気配）は言葉を続ける。

「キミの居た世界ではボクは猫の姿でその”見張り”の役目を続けていた。そこでドジって死にかけたところをキミが助けてくれたと言うわけだ。ついでに言うとここはボクたちみたいなのが使っていい事になっている世界と世界の隙間だよ」

「世界を見張るような役目のやつが、トラックにはねられたくらいで死ぬのか？」

　俺は素朴に思ったことを聞いてみた。そんな重要な役目のやつが普通の生物と何ら変わらない、と言うのはシステムとしては非常に大きな脆弱性に思える。

「それについては、"死ぬ"のはあくまであの世界でのボクの

　そうしないとやたら物理強度の高い生物として記録されかねないからね。で、ボクの仮の肉体が死んだところでさほど世界に影響はない。元々あの世界には影響を与えないように肉体を作っているからなんだけど、キミの場合は肉体が死んでも、それはそれでちょっとした問題が発生するんだよ。

　さっきまで話していた平行世界との兼ね合いだ。キミは平行世界は微妙な差異しかない世界もいくつも存在している、と思っているかい？」

「ああ。少なくとも俺の知識、と言うか、読んだり遊んだりしてきた作品ではそうだった」

「例えば、キミが"今日はちょっと飲んで帰るか"と思い、そうした結果、帰る時間にちょうど電車が遅れて家に帰るのがひどく遅くなってしまった、と言う世界と、"いや、やはり家にはまっすぐ帰ろう"と帰った結果、電車の遅延に巻き込まれずに済んだ世界に分岐している、ということだね」

「そうだな」

「端的に言えば、世界は

　例えば早く帰って近所の夫婦喧嘩を耳にして通報してしまうことで、そこの家庭の調和が乱れた結果、生まれてこない人物がいて、そうなると世界にとっての損害が発生する、とかね。

　"歴史にifは存在しない"と言うやつさ。本来の意味とは意味合いが異なってくるけれどもね」

　わかったようなわからないような説明だ。俺は黙ることで話の続きを促した。

「と、横道に逸れすぎたな。ともかく、世界はそうなってる。細かい分岐によって世界が枝分かれしない以上、"この世界に似た世界のキミ"はあくまでもキミ1人だ。他には存在しない。

　で、キミはあの時点で死ぬべきでは本来なかった。ボクを助けたせいだ。これは世界にとってイレギュラーとなるし、キミにとっても同じ話なのさ。

　もちろん、ボクにもね。三者三様にイレギュラーだったため、この世界にはキミの代わりを補填することになった。

　あの世界として辻褄を合わせるためには"奇跡的に無傷で死ななかったことにする"のが手っ取り早いんだけど、助けたのがボクで、ボクはキミが死んだところを観測してしまった。こうなると完全になかったことにするのは無理なんだよ。

　ボクは"複数の世界の状態を監視して報告する"のが仕事だから、見てしまったものは複数の世界に報告され記録されてしまう。

　そうなると、あの世界への影響はどうあれ、キミは一旦あの世界では"死ぬ"んだ」

　話の雲行きが怪しくなってきた気がする。

「とすると？手のうちようがないように聞こえるが、そんな状態で俺の魂だけを保存した理由はなんなんだ？」

「うん、この世界にはキミの代わりを入れるとして、他の世界にキミの存在を入れ込むことになった」

「それはやっても大丈夫なのか？今まで聞いてきた話を考えると相当にまずそうだけど……」

「うーん、なんと言ったらいいのかな。あの世界ではキミがいない状態で、キミの代わりを入れるか作るかして、バランスを保っていくしかないんだけど、同じように誰かがいない代わりに、キミを入れ込む余地がある世界がいくつかある、というのが一番わかりやすいと思う。

　まぁ、ボクの担当している世界の中から選ぶ必要があるから、数は少ないけどね」

「つまり、"存在の入れ替え"のようなものを行う、と？」

「お、物わかりがいいね。助かるよ。そうだね、ものすごく簡単に纏めてしまうとそうなる。

　そうすれば元の世界では死んだ、と言う事実は変わらずに次の世界でもちゃんと存在し続けられるというわけさ」

「なるほどね。質問いいか？」

「どうぞどうぞ。」

「そうする理由はなんだ？」

「あー、うん。今から説明するのもそこでね。簡単に言えばボクのミスで目の前で死ぬはずでない人が、1人死んでいくのは寝覚めが悪いってことかなぁ。

　あとはまぁ、世界同士のつじつま合わせだよ。そうするだけの理由がこちらにはある、とだけ今は思っておいて欲しい。」

「ううむ、納得してるかと聞かれると微妙に納得はできないな。でも、どのみち選択肢もないんだろ？」

「そうだね。そこについては謝っておくよ。なので、キミには世界を選択する権利と、いくつかその世界で優遇――平たく言えばチートだね、を与える事ができる。チートによって行き先の世界のバランスとか、他の世界のバランスが崩れることは基本的にはないから、安心して要望を言ってくれ」

「そうだな……」

　俺は考え込む。せっかくもらった二度目の人生だ、あんまり無駄にはしたくない。バランスが崩れることがない、という事はそんなに凄い能力だったりはしないのだろう。そうなれば遠慮はいらないか。俺はそう思い、要望を口にした。

「俺はものを作るのが好きだったから、ものを作って生活できる世界だといいな。だから、能力もそれに合わせたものにして欲しい。

　欲を言えばそこで一人で自活できる能力も欲しいかな。あとはさっきチラッと話したが、猫が好きだから、可能なら猫を飼いたい。要望はそれくらいだ」

「ふむ……」

　今度は"女の声"のほうが考え込んでいるようだった。

「送れそうな世界を考えると、送り先は剣と魔法の、いわゆるファンタジー世界になるがいいかい？」

「かまわない。」

「それじゃあそれに合わせた能力を与えることにするよ。ものを作ると言ってもいろいろあるけど、希望は？」

「刀鍛冶とかに興味があったな。」

「じゃあ、

　余っているリソースは言語と生産系を優先的に、戦闘とかその他諸々に回しておくよ。自衛もいるだろうからね。

　生活には必須じゃないから、魔法の方は最低限にしておくけどいいかい？」

「ああ、それでいい」

「あとは……年齢はどうする？別に何歳が入っても大丈夫にはするから、好きな年齢を言ってくれたまえ。

　それこそ10代から、あんまり選ばないとは思うけど70歳代でも問題ないよ」

「ううーん。別にそんなに若いことに魅力は感じないからな……」

　とは言え、それなりに長く第二の人生を歩みたいものである。長いのか短いのかよくわからない時間考えて、出した結論は――

## 家をもらう

2018年9月24日

　年齢を声に伝えたあと、俺はゆっくりと意識を失った。そして次に目を覚まして、この森にいると言うわけである。

　俺はそろそろと立ち上がった。心配していた

「これか……」

　意識を失う直前まで、女（らしき気配）は俺に説明を続けていた。その中の一つがこの頭痛だ。

『キミの存在が世界に馴染む瞬間、頭痛がするかも知れない。それはキミに与えたスキルや知識や経験をキミの脳と身体にマッチングさせた証拠だから安心して欲しい。』

　女はそう言っていた。

「大した能力じゃないんだろうから、もうちょっと加減してくれても良かったんじゃないか？」

　そうひとりごちながら辺りを見回す。特に目立つものはない。

『とりあえず住めて鍛冶ができるところは用意するよ。あと食べ物や材料なんかも少しね。』

　とも女は言っていたが、さて、ここにはないのだろうか。わざわざ転移先から離れたところに用意しておく必要もなさそうなのだが、もし遠いところだったら厄介だな。最悪、探し当てられない可能性もある。

　そう思った瞬間、視界がその端に何かを捉えた。確実にさっき見回したときにはなかったものだ。俺はびっくりしてそちらに向き直る。すると、なんとそこに小屋と呼ぶにはいささか大きすぎる建物があるのだ。

「いったいなんなんだ……」

　女の説明からすればおそらくここに住め、と言うことなのだろう。さっきまでなかったのが、”本当になかった”のか、”見えないようになっていた”のかは分からない。状況を考えるといずれにせよ安全なのだろうとは思う。

　しかし、俺は慎重にその建物に近づく。貰った能力のせいなのかどうかは分からないが、屋内に気配がないことが

　念の為、窓の下をかがみ込むようにしながら、自分の姿を屋内にさらさないように扉に向かう。扉にはシンプルな取っ手と鍵がついていて、回すようなノブはない。そっとその取っ手を引くと、抵抗なく扉が動いた。特に鍵はかかっていない。俺は空いた扉の隙間から中を伺う。気配も

　俺は普通に立つと、扉を開け放つ。途端、くぐもった「カランコロン」と言う音が聞こえて、ギクリとして思わずしゃがみ込んだが、特になんの反応もない。ホッと胸をなでおろして中を見渡してみると、中は昔に前の世界でスキー旅行へ行ったときに泊まったコテージのようになっている。

　その時と違うのは２階がないことと、カウンターキッチンでなく、日本家屋で言うところの土間にあたるような、かまどと食器類が収納されている棚があり、キッチンはそこであると言うことだ。さらにその奥には扉がある。

　そこに紐が伸びているのに気がついた。どうやらさっきのカランコロンと言う音は、あの扉の向こうから聞こえてきたらしい。

　扉を閉める（またカランコロンと音がした）と、"かんぬき"があるのに気がついたので、一旦かんぬきをかけ、中に入ると、大きな部屋には結構な大きさのテーブルと椅子が数脚置いてある。

　上を見上げると、天井はかなり高い。鳴子のような物が見えるが、音のくぐもり方からしてもさっきのはアレが鳴ったのではないだろう。

　となると、アレを鳴らす何かが他にあるということだ。気にはなったが、一旦置いておいて見回すと、部屋の隅に扉が３つある。そのうちの１つをあけてみると、どうやらトイレのようである。

　さっき見たときに寝具が見当たらなかったから、残り２つのどれかが寝室なのだろう。俺はその片方の扉を開けてみる。そこそこ大きめの机と書棚のようなものがある。どうやら書斎だったようだ。

　もう１つの扉を開けて確認すると、予想通り、そちらは寝室である。そこそこ大きめのベッドと、サイドテーブル、小さな丸椅子が備えてあり、さながらビジネスホテルのようでもある。さて、次はいよいよ大本命だ。

『鍛冶ができるようにしておくよ。』

　そう言っていたからには、それなりの設備が整っていることを期待したい。とは言っても、おそらくは長いこと１人で操業することになる(弟子をとったりするつもりも今のところはない)のだし、原料生産のための木炭高炉みたいなものを備え付けられても扱いに困るが、それなりの物が欲しいところだ。

　俺は期待半分、不安半分の心持ちで土間奥の扉を開ける。果たせるかな、そこには金床や鎚はもちろんのこと、るつぼを熱するための炉だけでなく、火床やレン炉のような製鉄炉も備え付けてある。おおよそ鉄（鋼）の武器と呼ばれるものは西洋剣も日本刀も、小さなもので言えば矢じりなんかも全てここで製作することができそうである。

　これらの道具や装置の使い方については、この世界に来たときに"インストール"されていて、なんとなく分かる。たしかにこれなら、あのひどい頭痛を受けたかいがあろうと言うものだ。鍛冶場には小さなカウンターが設けられていて、その向こうにちょっとしたスペースがあり、更にその向こうには外へと続いているらしい扉があり、かんぬきがかかっている。

「なるほど、営業はここで、ってことか。」

　つまり、向こうは居住スペース、こちらは作業場兼販売所というわけである。こちらの作業場にいる間に、もし居住スペースの扉のかんぬきをかけ忘れていて、お客さんが来ても、こっちにある鳴子が鳴ってわかると言う仕掛けのようだ。見ればこっちの扉には居住スペースにつながる紐が見える。こちらに来たときは向こうで鳴る、と言うわけで、地味にありがたい機能とは言える。

　そうやって一通り室内を確認して、俺は居間に戻ってくる。まだ完全にはここで暮らしていくのだという実感はない。そうは言っても"向こう"に戻る方法は皆無なので、覚悟を決める必要はある。

　向こうでは天涯孤独で、死んだ

　俺は頭を振って思考を追い払い、これからの事に集中することにする。その途端、腹が「グゥ」と言う音を鳴らして、食事を催促した。体は嘘をつかないな、我が体ながら若干呆れてため息をつく。台所にはなにがしかの食糧があるだろう。俺はドアの向こうの台所へと向かった。

## 生活をはじめる

2018年9月25日

　ドアを開いて、台所へ戻る。腹が減っているのだが、前の世界のように５分程度でぱっと食べられるような便利なものはないだろう。棚を見て、どんな食材があるかを確認する。豆と野菜（ほぼ根菜類）、燻製されたおそらくは豚の肉が収まっている。置いてある

　鍋はすでにかまどにかかっていたので、その鍋に大きな水がめから小さな水がめで水を移し、かまどに火をつける。火は自分で

　魔法の振り分けは最低限だ、と言っていたが、生活に便利なこの辺りは「最低限」に含めてくれていたようだ。自分で火を熾すのもロマンではあるが、生活でとなると面倒だし、こういうのはありがたい。

　ふと気になったのは、火を簡単な、それこそ最低限と言われるほどの魔法で起こせるなら、冷蔵庫のようなものがあってもおかしくはなさそうなものだが、それが見当たらない。実際に野菜は乾燥させたものと、採れたてに見えるものが置いてあるだけだし、肉についても干したものしかない。冷蔵技術につては特に発達はしてないか、あったとして相当な高級品で、こう言うおそらくは人里から少し離れた感じの場所には、似つかわしくない感じのものなのだろう。

　鍋に入れた水が沸騰して湯になったので、そこに切った塩漬け肉と野菜、豆を入れる。豆はレンズ豆のようなものと大豆のようなものがあったが、今回は大豆のようなものを入れることにする。木製のお玉でかき混ぜながら加熱を続ける。

　グラグラと煮える鍋を見ながら、これからの生活について考える。金はここで鍛冶をして稼ぐとしても、食糧や調味料（当面は保存料と兼用である塩のみだろうとおもう）、そして水の調達をどうするかだ。いきなり俺の作ったものが売れるかは分からない。それを考えれば、ここの食糧が尽きる前に調達する方法を考えなければいけないだろう。

　今日はこの目を覚ました時間が果たして午前なのか午後なのか、夕暮れ後はどんな感じなのかをこの家で確かめてみて、明日に森の探索を行うことにしよう。なにせ俺はこの森がどれくらいの広さなのか分かっていないのだ。

　もしかしたら地理情報が頭に”インストール"されているかも知れないが、そもそもここがどこなのかが分かっていない。なるべくなら一番近い人里を見つけて、この森がどこにあるのか、どれくらい広いところなのか、どういう場所なのかを知りたい。そうしないとこのあと何十年か続く「余生」を過ごすには不安が大きすぎる。

　鍛冶屋であるからにはそのうちに来客もあるだろう――とは言え、いつになるのかは見当もつかない――し、その時に「ずっとこの森で一人で暮らしていた」というのはおかしすぎる。もし、この森が頻繁に人が入ってくるような場所なら、入ってきた人は突然現れたこの家を不審に思うだろうからだ。もし人里に出ることがあればその辺りも探りを入れないといけない。"お引越し"の直後だから仕方ないが、やることが満載だ。

　あれこれ考えているうちに、鍋が煮えた。棚から木製のお椀をとり、お玉で鍋のごった煮をよそう。悪い匂いではない。木のスプーンですくって口に運ぶ。想定を微塵も越えない、塩漬け肉と根菜と豆を煮込んだスープの味だ。とは言え、別に不味いというわけではなく、普通に食べられる味である。これなら、そもそも食えずにジリジリと精神が削られていくということもそうそうないだろう。俺は同じ味が続いても平気な

　スープを腹に入れて少し経ったがまだ日が沈む気配はない。直接は木々の葉が邪魔になってよく見えないが、午後だとしてもまだ結構日が高いようなので、少し外を探索することにする。居住スペースに置いてあった剣鉈をとって腰につける。

　このときまでそれどころではなかったので今更気がついたが、今の俺は麻の服とズボンに、革のベストと言う所謂"RPGの村人"スタイルだ。この格好なら突然誰かに出くわしても特に不審がられることはないだろう。いやまあ、ここがとんでもなく辺鄙な場所であった場合は別だが。

　ともあれ、体感で２～３時間ほど水場を探して、見つからなかったら戻ってくることにしよう。俺は外へ出て、扉に鍵をかけると、森へ踏み入った。

## 森の中で見つけたもの

2018年9月26日

　日が高いからか、それとも木の間隔が広いからか、森の中はめちゃくちゃ暗いというわけではない。

「それでも早めには戻ってこないとダメだろうな。」

　そう一人ごち、手近な木に剣鉈で印をつけながら奥へ進んでいく。もうすでに家は見えなくなっているが、俺の体に"インストール"されている知識や経験があるので、家の方角はなんとなく分かっている。この辺の頭の中のズレは、少しずつ解消していかないといけないだろう。鍛冶屋の仕事の方でも、"前の世界"では全くの未経験の俺だ。おおよその仕事は"インストール"された分でもできるとは思うのだが、そこは俺の記憶にはない部分だ。そういったズレを日々の作業で解消していかなければいけない。

　ただ、そこに不安はあまりない。今こうやって森を探索している間にも、知識や経験が少しずつ体に馴染んでいくのが分かる。とは言っても、何のタイミングでズレが戻って、家の方角が分からなくなるか知れたものではないので、念の為に木に印を入れていくことは止めない。また、その道すがらに頭の経験が教えてくれる解熱や傷の化膿止めに用いる薬草なんかをポケットに入る分だけ摘んでいく。確か家には無かったはずだ。「確実に取りにいける薬草」と言うのは、この世界ではなかなかに重宝することは間違いない。ここは結構いい場所かも知れない。

　そうこうして、体内時計で小一時間ほども経った頃、水があるらしい音が聞こえた。こっちの世界では貴重になる給水ポイントを見つけたようだ。音のする方に向かうと、果たしてそこには湖があった。俺のいる方は下流らしく、少し遠くに湖水が流れ出ていく川が見える。

　反対側の岸辺はここからでは見えないので、結構大きな湖なのだろうか。ここまでは道中は薬草やらなんやらを探り探り来たので、他には目もくれずに来れば、おおよそ１５分程度でたどり着くだろう。これでおそらくは水については解決だ。毎日何往復かしないといけない可能性はあるが、一日の大半をあの家で過ごすことを考えれば、ちょうどいい運動になるだろう。明日から早速日課にしたい。

　ついでに湖を覗き込んでみた。水に映っているだけなので分かりにくいが、どうやら俺の年齢は希望通りの30歳くらいらしい。まぁ、それなり以上の腕の鍛冶屋（にしてくれたと思っているし、”インストール”の経験と知識ではそうなっている）で、しかも最近引っ越してきた、となれば20歳やそこらでは説明がつかない。どこかで修行を積んだ後、なにかから逃れるようにしてこの地にふらりとやってきた鍛冶屋、くらいのカバーストーリーがなくては怪しいにも程があるだろう。あってもそれなりに怪しいのに。

　まだ日が沈むには早い、と身体が教えてくれているので、もう少し湖のほとりを探索する。水辺を歩きつつ、時折立ち止まって水の中に目を凝らしたりしていると、いくつかの発見があった。まず、ところどころにキイチゴのような実をつけた低木や、リンゴのような実をつけた高木がある。"インストール"された知識によれば、これらの果実は食べられるらしい。食材のストックはまだあるし、確保した食材を持ち帰るための道具を持ってきていないので、今日のところは諦めることにした。

　目を凝らして水の中を見ると、湖の水はここで湧いているようで、今ここからは見えないが、もしかするとこの周囲の何処かに山でもあるのかも知れない。水は綺麗で、魚が住んでいる。これも釣ったり漁をしたりする道具を持ってきていないので、今日は獲ったりはしない。後日の楽しみだが、鍛冶屋をやってて果たして釣りや漁を楽しむ暇はあるのだろうか。

　生計は鍛冶屋でたてるのだから、当然本来はそっちが忙しくてそんな暇もないのがいいには決まっている。まぁ、もしそうなってから定休日を決めて、その日にでも来ればいいか。ワーカホリックよりスローライフだ。

　そうこうしているうちにいい時間になった、と身体が告げてくれているので、もうすぐ戻るか……と思ったとき、草むらの陰に横たわる何かを見つけた。150cmくらいあるだろうか。

　手が届かないあたりまで来ると、全貌がわかった。その動物、いや、動物と言っては失礼かも知れない。その

「これは今すぐ運ばないとヤバいな。」

　俺は正面から抱き起こす。すると、そこには革鎧に覆われてはいるが、思ったよりしっかり張り出した胸がある。ギョッとしてしまったが、そんなことをしている暇はないので、脇に頭を入れ、体全体を肩に担ぎ上げた。前の世界で言うところの”ファイヤーマンズキャリー”である。

「女の子ならお姫様抱っこのほうがロマンチックなんだろうが、こっちのほうが早いからな。すまんが我慢してくれ。」

　その見た目に反して、軽く担ぎあげることができてしまったのにも驚いたが、俺は急いで”家”に戻るのだった。

## 人助けをする

2018年9月27日

　虎の獣人の女の子を肩に担いで、急いで家に戻る。少し奥まで行ったので余分に時間はかかったが、予想通り、湖の一番近いほとりから家まではおおよそ１５分ほどだった。その間にもどんどん女の子は力を失っていく。それでもまだ、ぬくもりが失われていく感じはないから、ギリギリで間に合ってくれると信じたい。

　家について一旦そっと女の子を下ろし、鍵を開けて扉を開放する。作業場の方からくぐもってはいるが派手めにカランコロンと鳴子の音が聞こえる。俺は急いで中に入ると、寝室に向かう。寝室の中をあさると、戸棚にシーツがあったので、それを２枚引っ張り出して、リビングのテーブルの上に置く。

　そのまま作業場へ向かい、また探しものを始める。今度は針と糸と刃物だ。少し時間がかかったが、なんとか両方とも見つけることができた。針と糸は本来は剣の鞘の細工に使うもののようだが、今はそんな事も言っていられない。刃物は売り物のナイフだ。こっちもそんなこと言ってる場合ではないので持ち出す。

　次にキッチンに移動し鍋に水を張って中に針を入れて火にかける。湯が沸くまでの間に、リビングに戻ってテーブルの上にシーツを１枚広げ、外に寝かせっぱなしになっていた女の子をそこに横たえた。ないとは思うが処置中に誰か、あるいは何かが入ってきても面倒なのでかんぬきをかける。

　さて、ひとまず革鎧を脱がせたいのだが、ベルトが血か何かで固まっていて外れないので、持ってきたナイフで切ってしまう。

　それで革鎧を脱がせるかと思ったら、下に着込んでいるシャツにも血がついていて張り付いてしまっている。こっちもナイフで（ベルトを切るときよりはだいぶ慎重に）切ってしまう。外れた革鎧を傍らに置き、次にシャツを真ん中から切り裂いて一旦脱がし、脇腹の他に大きな怪我をしていないか確認する。全体が毛に覆われていて分かりにくいが、逆にこれですぐに分かるようなら大きな怪我ということだ。結局、あちこちに切り傷はあるものの、とりあえず処置したほうがいいのは、脇腹の大怪我だけなことがわかった。そこからはジワジワと血が滲んでいる。この間ずっと、女の子は苦しそうではあるが気がつく様子はなかった。

　怪我の様子を確認したところで、鍋の湯が沸いた。適当な大きさに切ったシーツを沸いた湯に浸して少し待ってから、切ったシーツと一緒に針と糸を取り出す。

「こう言うときは”インストール”さまさまだな……」

　さっきまで行っていたことも、”インストール”のおかげで手際良くできたが、それでもそれなりに知識のあったことではある。これから行うことは”インストール”の知識と経験なしでは全くと言っていいほどできない。

　湯から取り出したものをテーブルに持っていき、濡れたシーツで脇腹の傷口を拭う。

「グゥっ」

　女の子が顔を歪めて唸るが、それでも気がつく様子はない。拭った傷口にまたうっすらと血がにじむ。その傷口を針と糸で縫い合わせていく。麻酔無しだからこれもかなり痛いはずだ。一針入れるごとに女の子が顔を歪める。罪悪感が胸を苛むが、これもこの子を助けるための処置だ。我慢してもらうしかない。

　”インストール”のサバイバル技術のおかげで、到底外科医並みとはいかないが、とりあえず大きな傷の縫合ができた。本来は自分が助かればそれでいいような技術なので、見栄えは良くないかも知れない。そこは気がついたら謝ろう。

　縫合した傷口にさっき採取した化膿止めの薬草を磨り潰して、湯を加えたものを冷ましてから塗りつける。その上からガーゼ代わりの切ったシーツを当てて、更に包帯代わりの細く切ったシーツを巻き付ければ、一番大きな怪我の処置は完了だ。後はさっき傷口を拭ったシーツをまた湯に浸して、それで体全体を拭きながら、本当に他に怪我はないか確認する。もちろん裸の女の子なので気恥ずかしさは少しあるが、今はそんな場合でもないことは身体も頭も承知していて、なに一つ反応させずに一通りの処置をした。

　鍋の湯がまだ沸いているので、一旦火を落とす。まだ十分に熱い湯を木の椀の中ほどまで取って、今度はそこにさっき取った解熱の薬草を入れる。少し経つと、爽やかな香りが立ち上ってきた。前の世界にあったミントに似ている。この薬湯を木さじですくって冷ましながら、女の子に飲ませる。完全に何にも反応しないような気絶状態であれば飲ませることはできないが、幸いにも唇に木さじを近づけるとコクリと飲み込んでくれたので、椀の中身はすべて飲ませる。これで少しは鎮痛にもなるだろう。

　容態が急変しないか、テーブルの上に横たえたまま小一時間ほど様子をうかがっていたが、徐々に呼吸が落ち着いたものになってきたので、再び彼女を移動させることにした。いくらなんでもテーブルの上で寝たままでは治るまい。俺は彼女をお姫様抱っこの体勢で抱きかかえると、開けっ放しにしていた寝室のドアから中に運び込んで、ベッドに寝かせた。もちろん掛け布団（洋式なので布団と言っていいかはともかく）をかけてあげることは忘れない。

「ふう……」

　やたら疲れた。適当とは言え、大きな怪我の処置を行ったのだから当たり前だが、それよりも処置中は張っていた気が完全に抜けたのが大きい。今日は外も出歩いたし、なんだか盛り沢山な一日だった。今から飯を食うにしても、一旦休憩したい。サイドテーブルのところにある丸椅子に腰を下ろして体を休めよう。

「とりあえず明日は水汲んできたら、作業場で作業をはじめようかな……でも時々はこの子の様子も見ないとだし、どうしようかな……」

　腰を落ち着けて、今後の事を考えていると更に疲れが、と言うか、眠気が襲ってきた。この眠気の感じは前の世界でも何度か経験がある。”寝落ち”するやつだ。

「いかん、寝ちゃったら飯……が……」

　抗ってはみたものの、抵抗虚しく、”インストール”でない経験の通り、俺の意識は心地よい暗闇の中に沈んでいった。

## 猫を飼う……？

2018年9月28日

　首元に不思議な感覚を覚えて、目が覚めた。いかん、完全に寝入っていた。あの子は大丈夫だろうかと目を開けると、当の本人が俺の首に片手をかけていた。

「まぁ、こうなる可能性も考えないではなかったが。」

　俺は努めて冷静な声で言った。首にかけた手には力はこめられていない。本気で力を入れていたら、あえなく俺の２回目の人生は開始１日にして、寝入ったままあっさり終了していただろう。

「とりあえず、怪我は大丈夫か？」

　虎っぽい顔をして、こちらを睨みつけている女の子に声を掛ける。その言葉が予想外だったのだろう、一瞬キョトンとした表情をしたが、すぐにまた表情を戻して言った。

「まだ結構痛むけど、まぁ、治りそうだ。」

「そうか、それは良かった。」

　俺は心底ホッとして微笑みながら言った。助けようと思って助かったのだから、素直に嬉しい。

　すると、女の子は今度はキョトンとした顔のままで、

「お、おう……」

　と言った後、顔をそらす。この手を掴んで外すなら今がチャンスだろうが、それをしてこの子の機嫌を損ねるのは多分

「アンタ……見たのか？」

　彼女の手に少し力が入っている。俺は最初よりも更に冷静になるよう心がけつつ答える。

「処置するのに必要だったからな。誓って言うが処置以外には何一つ触れてないからな。」

「本当だな？」

「ああ。」

　彼女はしばらくじっと俺の目を見つめていたが、やがてフッと軽くため息をつくと、俺の首にかけた手をひっこめた。

「とりあえず、信用するよ。」

「そうしてくれるとありがたい。」

「嘘をついたときの人間の匂いがしなかったしな。」

「そんなのが分かるのかお前!?」

「犬系の獣人とは違って、大きく心が動いたときだけな。今、すげぇ驚いてるだろ。」

「あ、ああ……」

　処置した時にいらん気を起こしてあちこち触ったりしていたら、さっきのタイミングで嘘がバレてお陀仏だったと言うことか。２日目にしてやたら綱渡りさせられている気がするぞ……。

　俺は寝室を漁って、自分の着替えを渡す。

「とりあえずこれを着ろ。」

「アタシの服は？」

「血でベトベトだったし、処置するのに脱がせる必要があったから切った。」

「……そうか。」

「大事なものだったのなら、すまない。」

「いや、そんなことはない。ただのボロさ。」

　今更ではあるが、着る間後ろを向いておいた。

「ところで、アンタはこの家の持ち主だよな？」

　着替えた女の子が質問してきたので、俺は彼女の方を向いて答える。

「そうだ。」

「こんなとこで何してんだ？」

「鍛冶屋だ。」

「鍛冶屋？」

「ああ。……とは言っても、昨日ここに住み着いたばかりの新参者だが。」

　いつから住んでいることにしようか迷ったが、ここは正直に話すことにする。彼女はおそらくこの辺りを知っている。下手なことを言うのは下策だと思うからだ。

「こんな家、この森にあったかな……」

　しめた、彼女はここがどこか知っている。

「ん？俺が昨日来たときにはあったぞ？」

　これ自体はほぼ事実だ。この家が突然

「まぁ”黒の森”のこっち側にはあんまり来たことないから、見落としてたのかも知れねーな。」

　”黒の森”か。”インストール”された知識に該当があった。心の中でだけ拍手喝采だが、あまり大きく心を動かしすぎると、こいつに感づかれる。知識と地形を照らし合わせれば、ここの大体の位置はわかる。

「ここは東の方だからな。」

「ああ。アタシは北と西でねぐらを回してるから、あまりこっちには来ない。」

　良かった、合ってた。

「たまに来たと思えば

「なるほどね。」

　そんなヤバいのもいるのか。多分彼女は弱い方ではない。虎の獣人とは言え、女一人でこの森をウロウロすると言うことは、少なくともそれをしても問題ない、身を護るすべを知っていると言うことだ。

　だが、今は怪我も治りきってないし、ここで放り出すのもなんだかモヤっとする。そこで俺は切り出した。

「で、一つお前に話がある。」

「なんだ。」

「怪我が治るまでは暫くかかるだろ？」

「ああ、多分な。アタシたちは人間よりはだいぶ頑丈に出来てるが、このくらいの怪我だと、まぁ２週間ほどは狩りとか探索は無理だ。」

「じゃ、ここに住まないか？」

「は？」

「別に何かあるわけじゃない。俺は越してきたばかりだし、これから先、

「まぁな。」

「それに多分ここにいたほうが暮らしは安定すると思うぞ。少なくとも雨風しのげて煮炊きには困らん。」

「なるほどな……」

　彼女はじっと考え込む。虎っぽいので単純にずっと見てたいのもある、と言うのは言ったら滅茶苦茶怒られそうなので言わない。

「わかった。怪我が治って、普通に動けるようになるまではここに住むよ。そっから先はそれから考える、ってのでどうだ？」

「おう、構わないぞ。」

「じゃ、そういうことで、よろしくな！」

「おう！」

　こうして、俺の「猫を飼いたい」と言う願いは、「虎の獣人の女の子と一緒に暮らす」と言う予想外な形でおそらくは達成されたのだった。

## はじめての製作物

2018年9月29日

「そう言えば、お前なんて名前なんだ？」

「サーミャ。」

　この子はサーミャと言うのか。

「いい名前じゃないか。」

「……」

「どうした？」

「可愛くてあんまり好きじゃない。もっと強そうな名前が良かった。」

「……ゴンザレスとか？」

「ぶっ」

　吹き出すサーミャ。次の瞬間にはベッドにひっくり返って笑い転げている。

「あはははははは！なんだそれ！！あんたセンスないな！！！あははははは！！！！」

「うるせぇ。このセンスだけは親がくれなかったんだよ。」

　憮然とした顔で俺は答える。

　ネーミングセンスの無さだけは、前の世界で４０年ちょい生きても改善されなかった弱点だ。……他の諸々のついでに、ここのチートを貰えばよかったかも知れん。

「まぁ、お前が気に入らないつっても、家族がくれた名前だろ。似合ってるよ。」

「うっ、あ、ありがとう……」

　泣いたカラスがもう笑った、ならぬ、笑った虎がもう照れた、だな。

「さて、とりあえず水汲んでくるか。少し家を離れるが、大丈夫か？」

「ああ……でもその前に。」

「ん？なんだ？」

「アタシはアンタの名前聞いてない。」

「ああ。エイゾウ・タンヤだ。」

「北方人みたいな名前だな。家名もあんのか。」

「……まぁな。」

　”インストール”の知識によれば、前の世界のアジア人に近い人間の種族は、東ではなく、北に住んでいるらしい。なので北方人という言われかたをする。

「いや悪い、別に詮索するつもりじゃなかったんだ。ここらで家名まであるのはそんなにいないから、珍しくて。」

「いや、いい。気にするな。こんな変なところで、鍛冶屋を始めようって理由は分かってもらえたみたいだしな。」

「ああ。アンタも大変なんだなぁ。」

「そうでもないさ。」

　今のところは。それは言わずにおく。

「だから、できれば名前だけで呼んでくれると助かる。」

「ああ、そうするぜ。エイゾウ。」

「ありがとうよ、サーミャ。」

　中くらいの大きさで、中身が空の水がめ２つを、棒の両端に吊るす。運搬用の水がめみたいで、口のあたりに穴を開けて縄が通してあった。

「重そうだな……」

　しかし、これができなければ、今後の生活にも影響が出てくる。サーミャも手伝ってはくれるだろうが、それに頼っていたら、彼女が出来ない時に往生してしまう。

　俺は意を決して棒を肩に担いだ。

　予想に反して、２つの

「いや、違うな。これは……」

　水がめが軽いの

　今そのことについて考えるのはよそう。とりあえずは水だ。俺は湖へ向かった。

　往復で３０分ほど、俺は湖へ行って２つの水がめに水を満たし、戻ってくる「日課」を終えた。その道中、それなりの容量の水がめだったにも関わらず、重すぎて動けないということはなかった。やはり俺の筋力は増強されているらしい。

　これは何故なのか、気がついてからずっと疑問だったが、サーミャと朝飯（豆と塩漬け肉のスープ）を食べて、傷を癒す必要があるサーミャを寝室に追いやった後、いよいよ鍛冶の仕事に取り掛かったときに理由がわかった。

　最初に作るものは何がいいかと考えて、小ぶりのナイフを作ることにした。大物は時間がかかるし、何より”インストール”の知識と技術を身体になじませなければいけない。そうなると小物でいろんなものをたくさん作ったほうがいいだろう、と思ったのだ。

　火床に魔法で火を入れ、木炭に火が回るまで待つ。火が回ってきたら、ふいごを操作して、鉄を入れた時に鍛造できる温度まで上げていく。

　サービスなのかなんなのか、資材を置いておくところに、幅４センチ、厚みが１センチほどの鉄板があったので、やっとこで掴んで火床に突っ込む。再びふいごを操作して、適切な温度まで上げる。ちょうどいい温度になったら取り出して、金槌で叩いて鍛造する。この時にわかった。当たり前すぎる話だが、この時に筋力がいるのだ。

「なるほどね。」

　ニヤッと笑いながら、ナイフにしたい鉄板を叩いて形を作っていく。叩くたびにキラキラと光りが散る。日本刀の工程に近いが、今回はあれほど繊細に作業はしない。

　ちょうどいい形になったら、一旦冷めるまで置いておく。冷やしてる間に昼飯だ。

　ゆっくりと昼飯を食べて、そのあとサーミャに近くに街がないか聞いてみる。ここから四半日ほどのところに、大きくはないが街があるらしい。日帰りは出来るだろうが完全に一日仕事になるな……。

　再びサーミャを寝室に放り込んだら続きだ。と言っても、工程はほぼ最後の方に近くなっている。火床の火は完全には消えてないが、温度は下がりきっているので、木炭を足して再び上げる。木炭の確保も必要になってくるな。

　日本刀だと、この工程では炎の色で温度を見極めるため、夜間にやるのだが、俺の場合は”インストール”にプラスして、鍛冶を最大限にしてもらっている影響か、まだ日が高いが温度がわかった。

　適切な温度まで「ナイフのもと」の温度を上げたら、水に入れて急冷する。「焼入れ」だ。今回は焼きを入れない部分は作らないので、土は塗ってない。

　焼入れしたナイフを砥石で研いで、この工房初の製作物である「ナイフ」が完成した。特に実用を目指してはないので、”ヒルト”は作ってない。”ハンドル”も板状の鉄むき出しだが、使う時になったら紐かなにか巻けばいいだろう。

　今はとにかく、こいつが完成したことが重要なのだ。

　とりあえず、切れ味を試してみなければ。実用を目指してはないとは言え、全く斬れないのでは意味がない。俺は麦わらの束を、割る前の薪の上に置いて、ナイフを振り下ろした。

　スパッと麦わらの束が切れた。

　……台の代わりにした薪ごと。これは一体何が起きてるんだ……。

## 確認してみる

2018年9月30日

　試しに作ったナイフで、試しに麦藁の束を切ったら、台にしてた木ごと切れた。

　事実だけを端的に述べたらそうなるのだが、すこし、いやかなり受け入れがたい状況だ。だって試作品だぞ。”インストール”の恩恵があるし、試作品でも初めて作るものだから、かなり真剣には作ったが、こんな魔法でもかかってるみたいな切れ味は、ちょっと求めてない。切れすぎて危ない。

　もしかしたら、剣の才能かなんかのチートでも与えられたのかと思って、昨日サーミャの服を切るのに使ったナイフで同じことをしてみたが、藁束はきれいに切れるものの、さすがに台にしたものまで切れることはなかった。

　つまり、この結果は剣（ナイフか？）の腕前もいくらかは関与してるかも知れないが、基本的にはナイフそのものの性能だ。

　しかし、前の世界でも「牛刀をもって鶏を割く」って言葉があるが、このナイフはまさにそれだ。肉を切ろうと思って、まな板まで切ってしまうような包丁を使いたい人は、あんまりいない。

　ただし、このナイフは武器としては有能かも知れない。通常、ナイフは装甲を持たない相手には有効だが、革の腕甲でもつけられていたら、威力は大きく減じることになる。だがこのナイフなら金属製はともかく、革製なら貫通も切断もできそうだ。

　どのみち、これを売り物にするわけにはいかないな。幸い試作だからと小さく作ったし、俺の護身用にしよう。

　さっき叩き切ってしまった木を、ナイフの厚みと同じ厚さに割って、ナイフの形を切り抜く。ニカワを塗って板を両側に貼り、形を整え、抜けドメの革帯を、刀の鞘で言うところの鯉口に取り付けたら、簡単な鞘の完成だ。とりあえずこれで持ち運びはできる。

　しかし、製作物が全てこのクオリティで出来上がってしまうと困るな。俺は急いで今回作ったナイフと同じくらいの大きさの板金を３つ用意して、火床を準備する。

　今からこの３つを鍛造するわけだが、昨日以上に力を込めたもの、やや手を抜いたもの、完全に手を抜いたものの３つに作り分ける。大きさはほぼ同じにした。俺の護身用よりはちょっと大きい、前の世界で言うところのサバイバルナイフくらいの大きさになる。

　そうやって３つ打ち終わったところで、ちょうど日が暮れてきた。残りは明日の朝こなそう。傷を癒やすために寝ていたサーミャを一旦起こさなければ。

「おい、そろそろ晩飯だぞ。起きろ。」

「うぅーん。」

　サーミャはゴソゴソと寝返りを打つ。ええい、妙に色っぽい声出しやがって。

「寝るのも大事だが、飯食わねぇと治るもんも治らねぇぞ。ほれほれ起きろ。」

　俺が掛け布団を引っ剥がすと、それでようやく起きた。引っ剥がしてから気がついたが、これサーミャが寝るときは何も着ない派だったら、結構ヤバかったな。今後は気をつけよう。

「もうこんな時間か。結構寝たのに寝ても寝ても眠いぜ。」

「大怪我をした後だからな。体が血を作ったりするために、動かさないようにしようとしてるんじゃないか。」

「へぇ、エイゾウって物知りだな。」

「そうでもないさ。」

　昨日は真っ暗になる前に寝落ちしてしまったので、出番が無かったが、寝室には魔法で明かりを灯すランタンがある。”インストール”の最低限に含めてくれていたらしく、俺にも使える。もうだいぶ暗いので、早速使ってみたら

「エイゾウって魔法も使えるのか!?」

「簡単なやつだけな。」

「やっぱ家名持ちはすごいな……」

　と、サーミャに感心された。最低限でも使えない人、いっぱいいるんだなこの世界。

　居間に移動して晩飯を食う。朝昼食べたスープに根菜を入れて火を入れ直す。二人分なので食糧の消費は増えたが、それでもまだ結構もちそうだ。

　とは言え、このまま２ヶ月や３ヶ月もつ量ではない。それまでの間にこちらで金銭を稼ぐ方法を見つけなければいけない。基本的には街に行ってここの物を売ったり、修理を受け付けたり、といったことになるだろう。

　ただ、とりあえずはサーミャが満足に動けるようになるまでは、あまりこの家から動かないようにしたい。流石に自分のいない間に、せっかく助けた子の身になにか起きては寝覚めが悪すぎる。

　晩飯の間に、とりとめもない話題をする。生まれの話なんかはお互いに察して避けているが、サーミャは普段の暮らしのことや、俺は元いた世界の自然の話だ。すごく高い山があって、その頂上では雪が溶けないのを見て感動した、とかそう言う話であれば話しても問題はないだろう。

　飯を食ったら、ふたりとも寝ることにする。俺は書斎の机で寝ることにした。前の世界で慣れてるからな。サーミャがそこに寝るといったのだが、少なくとも傷が塞がるまではそれはさせられない、と強く言って渋々ながらも納得してもらう。こうして２日目が過ぎた。

　翌朝、前日と同じように起きて同じように朝飯を作り、同じようにサーミャを起こして飯を食わせる。飯とは別に湯を沸かして、サーミャにはそれで体を拭くように言いつけてから、俺は水を汲みに出る。水を汲むついでに、俺は水浴びだ。湖だからか、結構水が冷たい。それでもさっぱりした気分になって水とともに戻ってきた。

　さて、これで昨日の３つのテストの続きができる。３つ力の入れ具合を変えたナイフに、３つとも同じように焼入れを行う。研ぎは最低限刃物として切れるようにだけしてみている。終わったら持ち手に革紐を巻いて滑り止めにして完成だ。

　そうこうしていたら、あっという間に昼頃なので、昼飯にする。その時、サーミャにお願いをした。

「サーミャ、すまんが、これ食い終わったらちょっと手伝ってくれ。」

「いいけど、アタシは鍛冶のことはわかんないぞ。」

「いいんだよ。俺じゃなきゃいいんだから。」

「まぁ昨日一日横になって、今日はだいぶ調子もいいし、いいけど。」

「それじゃ頼む。」

　これを頼んだのは、試し切りの結果に俺の剣術の腕前（のようなもの）を関与させないためだ。これで一番力を入れたので台まで切れるようなら、おそらくはナイフの性能、ということになる。

　昼飯を食べ終わった後、二人で作業場に移動する。

「ここにあるナイフ３本の切れ味を、右から順に試してほしいんだ。こっちの台に藁束をおいて、それを切る。」

「わかった。お安い御用だ。」

　サーミャは作業イス（ただの丸太を切ったものだが）に腰掛け、台の代わりの薪に藁束を置き、近くに置いておいたナイフ３本のうち、一番右端のものを取って振り上げると、勢いよく切りつけた。

　バサッ、と音がして、藁束は切れた。だが、ナイフの刃は薪にはほとんど食い込んでいない。藁束だけを切っている。

「すげぇなこのナイフ。エイゾウって腕がいいんだな。」

「ありがとうよ。じゃあ次だ。」

「おう。」

　サーミャは気が乗ってきたのか、ウキウキと次のナイフを手にとって、先ほどと同じように切りつけた。

　再びパサッと音がして、藁束が切れた。ナイフの刃が結構薪に食い込んでいる。だが、薪ごと切れてしまう、というようなことはない。

「ふーむ、切れ味はこの程度か。」

「いや何言ってんだよエイゾウ！めちゃくちゃ切れるじゃねーかこのナイフ！すげぇな！！」

　サーミャは大興奮だが、俺は安堵半分だった。つまり恐らくは、かなり真剣に製作しなければ、

「まぁまぁ。じゃあ最後だ。」

「お、おう、わかった。」

　至って冷静な俺に面食らいながら、サーミャは最後の一本、今回の真打ちと言えるナイフを手にとって、切りつける。

　音はパサッではなかった。音がしなかったのだ。しかし、サーミャの持ったナイフは、薪の中ほどまで食い込んでいる。

「？」

　あまりの事態に、サーミャはついてこれていないようだ。

「腕引いてみろ。」

「お、おう……」

　そうしてサーミャが腕を引いた途端、まるで漫画かアニメのように、ズルっと藁束と薪が切れた。

「え、え、なんだこれ。」

　サーミャが慌てている。

「落ち着け、その状態で慌てると、めちゃくちゃ危ないぞ。」

　俺がサーミャに声をかけると、サーミャはこっちを見て、

「あ、そ、そうだな。ごめん。」

　と、少し落ち着きを取り戻した。

「いや、いいんだ。説明してなかった俺が悪い。」

　そりゃこんなことが、突然目の前で起きたらビビるよな。俺だってビビる。俺は予想してたから、そうでもないだけだ。

　しかし、これで確定した。俺に与えられたチートで最優先の鍛冶屋、とんでもない性能のものを作れる、と言うチートだったのだ……。

## 街へ向かう準備

2018年10月1日

「しかし、こりゃ３本目は普通の売り物に出来ないな。」

「え？そうなのか？」

　サーミャが驚いて言う。俺は

「刃物の取り扱いを十分に知ってるやつならともかく、そうでないやつが、この切れ味のもの使ったら危なすぎるだろ？」

　と答える。

「あー、そうかぁ……」

　がっくりした様子のサーミャ。

「まぁ、ちゃんと刃物の扱いがわかってるやつになら、売ってもいいけどな。」

「おっ、やったぜ。」

「ん？なんだ？欲しいのか？」

「お、おう。狩りして捌く時に、これくらい切れ味がよかったら楽だなぁって。」

「じゃあやるよ。」

　俺は前のがあるし、このまま持ち主を待つのはかわいそうだし、何よりサーミャは知らんやつでもない。

「いいのか!?」

「おう、かまわんぞ。普通に売れるものの合間に鞘作るから、ちょっと時間をもらうけどな。」

「それこそかまわないぜ。これだけの物をもらうんだから、そこで駄々こねても仕方がねぇし。」

「じゃあ、しばらく待っててくれ。」

「おう！」

　なんかちょっと餌付けしてる感じになってきた。いや、住まわせてるから、実質餌付けしてるようなもんか。

　とりあえず、これで作るべきものの方向性は決まった。あまり凄いものは作らずに、そこそこのものを作りつつ、翌々日くらい仕上げで修理も受け付ける、ということにしよう。

　となれば、しばらくは”数打ち”に集中したほうが良さそうだ。俺にとっては大したことのない出来、と言っても普通よりはだいぶ切れ味のいい刃物だから、不評を買うようなことはないはずだ。

　それから５日ほど、小剣やナイフなどの他に、クワと鎌、斧をいくつか作った。新しく作ったものは、切れ味のいいものも、自分用に作ってある。

　この５日間、サーミャはおとなしくしていた。あまり体を動かさなすぎるのも、体がなまるだろうと、試し切りには参加させているが、そのときも全力を出している風ではない。

　そのことについて聞いてみると、

「いや、早く怪我を治してエイゾウのナイフとかを使ってみたいから……」

　と言われた。そうかそうか。今度なんか新しいの作ってやろうな。遠回しにでも褒められると弱いのだ、俺は。

　そうして６日目、俺が

「今から抜くが、痛むぞ。」

「おう、わかった。」

　そうして縫ったぶんの糸を抜いていく。サーミャは痛そうだったが、声を上げることなく耐えていた。

「よし、終わり。」

「いてて、ありがとな。」

　新しい包帯を巻いた上から、抜糸あとをさするサーミャ。

「ところで、サーミャ、一つ聞きたいんだが。」

「ん？なんだ？」

「獣人が街に行くのは問題があるのか？」

「いや？特に用がねぇからあんまり行かないってだけで、罪を犯してるとかなけりゃ衛兵に止められたりってことはないぜ？」

「そうか。」

「なんでだ？」

「いや、明日あたり一回街に行ってみようかと思ってな。俺はこっちの街には不慣れだから、護衛と体慣らしを兼ねて、付き合ってもらえると助かるんだが。」

「いいぜ。」

「あっさり受け付けるんだな。」

「まぁ、エイゾウに世話んなってるのは確かだし。ちょっとでも助けられるならお安いもんだぜ。」

「ありがとう、助かるよ。」

「おう。それじゃ、ちょっと今日はもとのねぐらに行ってくる。」

「そうか。気をつけてな。」

　これは、もうここに住むって決めたようなもんだな。そう思ったが、多分それを口に出すとへそを曲げるだろう。あまり感情に出して勘付かれても面倒なことになりそうなので、黙っておいた。

　サーミャは夕方頃にはいくつかの身の回り品と共に戻ってきた。

「それだけか？」

「ああ、アタシたちは時々ねぐらを移動するんだよ。だからそもそも物はそんなに持ってない。」

「なるほど。」

　狩猟民族に近いのかな。そう言えば飯の時に出る話題は狩りの話が多かった。でも、ここに住む気が（おそらくは）あるということは、定住が出来ないというわけでもないようだ。

　この辺の話は、また住むって言ってきた時に聞いてみよう。

　そして次の日、朝の水くみだけ済ませたら、街へ出かける準備をする。と言っても日帰りなので、大した旅装は必要ない。今日はナイフと鎌、斧、クワを持っていくことにするが、斧とクワは嵩張るので一本だけだ。サーミャは護衛を兼ねているので、ナイフだけ持ってもらう。売り物でないナイフは、今腰につけていて、服装は自分の服だ。

　俺はいつもの服に斧とクワ、複数の鎌と言う出で立ちで、怪しいっちゃ怪しいが、まぁ逆に言えば、売り物を持ってきたようにしか見えない、とも言えるだろう。

　あとは寝室のサイドテーブルの隠し棚から、銀貨を数枚失敬してきた。多分俺のだけど。

「用意はいいか？」

「ああ。」

　この世界で初めて街に出る期待と不安を胸に、俺達は出発した。

## 道中にて

2018年10月2日

　街は森の中を２時間、そこから街道に出て１時間のところにある、とインストールの知識が教えてくれた。

　つまりは往復６時間、この間、森と街道と言う、決して安全とは言えないところを、それなりに金目の物を持って行くわけだから、用心してしすぎることはない。

　道連れにはサーミャがいるが、あくまでも俺が一人ではなく、普通の人間よりは身体能力が高いだろう（ここらは飯の時の話で類推した）獣人と一緒にいる、と言う、良からぬことを考えているやつへの、威圧効果を見込んでのことだ。

　前にもサーミャ自身も言っていたが、おそらく後１週間ほどは、あまり激しい運動はしないほうがいいだろう。今はゆっくり体を動かして、もとの感覚を少しずつ取り戻していってほしい。

　そんな事を考えながら、森の中を進んでいく。ここらはまだ結構木が多いから、朝早い以上に暗い中を進むことになる。これ、雨の日は暗すぎて、日帰りするつもりなら街に行くのは無理だろうな。と、サーミャがピタッと足を止めた。

「なんかいるのか？」

「気配と少し

　サーミャはそう言うと、ソロリソロリと歩を進める。さすが虎の獣人、森の中なのに音がほとんどしない。少し離れた木にたどり着くと、そこから向こうをそっと伺う。

「ああ、ありゃ

「おう、今日の目標は街にたどり着くことだからな。」

　俺たちはその「樹鹿」のいる辺りを迂回して進む。ちらっと振り返ると、その名の由来になった、この辺りの木の枝にそっくりな角を生やした、大きな鹿が、ゆっくりと草を食べていた。

「あんな図体で角がよく引っかからないな。」

「いや、デカいのは時々引っかかって折れてる。」

「え、そうなの？」

「狩りができるようになって、捕まえたら見せてやるよ。デカいのは一回か二回折れた痕がある。あいつらのは角鹿のと違って、突いたりするのには使わない擬装だから、別に折れても、どうってことないんだよ。」

「なるほど、よく出来てんなぁ……」

　生物方面の知識は元々ないし、インストールされているのも、学術的なものではないので、こう言うのを見聞きするのは面白い。前の世界のそう言うテレビ番組を見ているようだ。

「そのかわり、蹴ったり頭突きしたりして来る上に、身体がデカくて体力がかなりあるから、接近戦だとだいぶ厄介だぞ。」

「へぇ。もし俺が狩りするときは、気をつけよう。」

　樹鹿を迂回してしばらくは、何事もなく進むことが出来たので、一旦休憩にする。かなりの距離を進んだが、あの家の場所は俺もサーミャも覚えている。軽い食事を取りながら、二人でそんな話をする。

　森の中に住む獣人は、においとかちょっとした違いを記憶しているらしい。俺はインストールされた、森の中で生きるための知識やら経験やらだから、まさに

　小休止してまたすぐに歩みを進める。もうここから街までは基本的には休憩なしだ。途中、いくらかの森に住む動物に出くわしたが、基本的には大人しい動物ばかりで、肉食系のやつらには出会わなかった。

　もしかしたら、サーミャの匂いか何かを感知したのかも知れない。獣人の年齢はよくわからないが、俺は御婦人に「お前の匂いで獣よけになってる」と言うほど、オッさんになりきってはいないので、そのことは黙っておいた。

　やがて、木がまばらになり始め、森のそばを通る街道が見えてきた。あそこを通れば街まではもうすぐのはずだ。

　ただ、ここいらは大きな森があるために、畑やなんかもこちら側には広がってないため、人通りは多くない。……とサーミャが言っていた。

「それにしても人が通らないな。野盗が出放題じゃないのか。」

「それでも道には違いないから、たまに衛兵隊が見回りに来てるぞ。」

「なんでお前が知ってんだ。」

「アタシもときどきは街にいるものを買いに行くからだよ！」

「ああ、そりゃそうか」

　いかに森に住む獣人、とは言っても、どうしようもないものはたくさんある。例えば、塩。あるいは衣服なども（被毛に覆われてはいるんだが）必要になれば、生地を買ってきて仕立てたりすると言う。その時の対価は狩ってきた動物だ。

「衛兵隊も馬鹿じゃないから、決まった間隔で回ってきたりせずに、幅もたせたりしてやってくるんだよ。だから、ここを通る人間を襲うのは結構博打だな。森から何が出てくるか分かんねぇ……と普通は思ってるみたいだし。」

　ここらの衛兵隊は職務熱心らしい。感心なことだ。

　野盗が獲物に襲いかかっている間に、森から狼でも出てきたら、立場が一気に変わってしまう。実際にそんなことは少ないにしても、その博打を打つべきかどうか、と言うことなのだろう。

　そんなことをくっちゃべっていたら、遠くに街の外壁が見えてきた。

　さあ、もう一息だ。俺とサーミャは少し気合を入れ直すと、やや上がったテンションのままに街に向かって歩いていった。

## はじめての売上は？

2018年10月3日

　街の外壁が見えたら、後はもうそんなに距離はない。

　”外”壁とは言っても、それはあくまで「最初に街が造られたときの外壁」で、今は柵が更にその周りを囲んでおり、その中にも市街がある。今回、俺たちが用があるのはそっちの方だ。

　市街とは言うが、ここはそもそもは壁外

　住んだり、店を構えたりしなければ、かかる金は最小限。その代わり、税を納めない者は領主の庇護の全てを受けることは出来ない。とは言え、治安が悪くなって困るのは、税を納める者も同じだから、犯罪があれば衛兵は取り締まってくれる。しかし、それはあくまでも

　新市街の外からの入り口の方に近づくと、入口の近くで街道に目を光らせている衛兵の姿が見えた。基本的に誰でも入れるとは言え、この街や、他の街でも問題を起こした者は当然入れない。そうした者が入ってこないか、見張っているのだ。

「ちょっと良いかい？」

　街に入ろうとした俺たちに、衛兵が声をかける。若い男だ。身につけているのは革鎧だが、使い込んだ跡が伺える。

　ダラッとして見えるのに、短槍を持った身のこなしにも油断がない。年齢によらずなかなか出来る男らしい。

「はい、なんでしょう？」

　努めて朗らかに俺は答えた。視界の端で、サーミャが笑いをこらえているのが見える。お前後で覚えとけよ。

「ちょっとここ最近じゃ見ない顔だからね、この街に来た目的を教えてくれ。」

「

「他には？」

「今日はありません。確認します？」

「おっ、話が早いな。助かるよ。」

　禁制品とか持ち込もうとしてたら厄介だろうからな。前の世界にいた頃から、こう言うときは協力的に振る舞うに限る、と思っている。まぁ、見た目のせいか、却って怪しまれたことも、一度や二度ではないが。

「よし、大丈夫だな。」

　俺たちの荷物を探っていた衛兵が言う。俺とサーミャが持っていたナイフを見られたときは少し焦ったが、特に何も言われなかった。多分、売り物の方と同じようなものと思ったんだろうな。

「くれぐれも、問題を起こさないようにな。」

「もちろんです。」

　これで俺たちは、晴れて町に入れる。少しワクワクしてきた。

　道行く人に場所を訪ね、自由市を目指す。自由市は決まったお金を払えば、そこで物を売ってもよい、となっている場所で、逆に言えばここ以外で勝手に物を売ってはいけない、と言うことでもある。こっちの世界では、のんびりとモノづくりをして暮らしていきたい俺であるので、積極的にルールには従っていきたい。

　街に入って程なくして、俺とサーミャは自由市に着いた。入り口のところで銀貨を支払い、販売許可の木札と販売台を受け取ったら、空いているところを探す。一番いい場所は俺達よりもっと早くに着いている商人や、地元の工房の人間に取られているので、少しでもマシっぽいところを探して陣取る。

　陣取ったところで、販売台の上に売り物のナイフと鎌を並べ、クワと斧は立てかけておいて、これで販売準備は完了だ。

「それじゃ今日は頼むな。」

　サーミャに声を掛ける。今日の大事な用心棒だ。

「おう、つっても立ってるだけだと思うけどなぁ。」

　サーミャは肩をすくめて言うが、まぁ何があるか分からんからな。

　そして2時間ほどが何事もなく過ぎた。悪いことが起きないのは良いことなのだが、物も売れない。近くを通る人に声をかけたりしても、なかなか売れてくれない。こういった製品は、耐久性が高いので、そうそう買い換えるものでもないのは確かだが……。

　とは言っても、他に作って気軽に売れそうなものはない。根気よく通って売れるのを待つしかないかも知れないが、そうなると手持ちの金が心もとなくなっていくな……。

　そうしてジリジリとした気分で顔は険しくなり、サーミャをちょっとオロオロさせ、客足を遠ざけてしまいながら客を待っていると、数少ない知った顔が現れた。俺たちが街に入る時にチェックをした衛兵だ。

「やあ、売れてるかい？」

「いや、全然ですね。」

「あれ、そうなのかい？」

「ええ。」

「じゃ、ちょうど良かった。ナイフを一本売ってくれないか？」

「え？」

「君たちをチェックした時に、こりゃ業物だなぁと思ってさ。今のがもう研ぎにも直しにも出せないから、新しいの欲しいと思ってたんだ。交代の時間までに売れちゃってたら、がっかりするところだよ。」

「それはどうも。ありがたい話です。」

　そう言いながら、俺は並べてあるナイフのうちの一本を渡す。

「どうぞ、抜いてみてもいいですよ。」

「お、いいのかい？」

　ウキウキとナイフを抜いてみせる衛兵。

「やっぱりいいな、これ。いくらだい？」

「銀貨で５枚になります。」

　この値段はここに来る前に、サーミャと相談して決めた。街の人間でもギリギリ買える値段、がこの辺らしい。

「そんな安くでいいのかい？」

「もちろんですとも。」

　数打ちだし、だいぶ手を抜いてるやつだしな……。

「それじゃ、これ。」

「はい、確かに。ありがとうございます。」

　俺は衛兵から銀貨５枚を受け取った。これが俺が自分で作ったもので直接手に入れた金、ということになる。結構感動するな、これ。

「これの切れ味が良かったら、同じ衛兵隊の連中にも勧めとくよ。」

「いいんですか？ありがとうございます！」

　俺は喜色満面の笑みで衛兵に言った。衛兵はひらひらと手を振って去っていく。

　結局、この日はこの一本だけが、俺の売上と言うことになった。次に続くといいな、そんなことを話しながら、俺とサーミャは家路についた。

## 予想外

2018年10月4日

　初めて街へ行って、ナイフを1本だけ売った翌日、俺は朝からナイフを作っていた。全然力を込めていない、「数打ち」のやつだ。そして、作りながらつらつらと考える。

　街に行った時にわかったのが、自由市で農具はそんなに売れるわけではないということだ。ちょっと考えたら当たり前で、新市街のほうの住人は、商人やそれを当て込んだ職人たちが主だ。彼らは基本的には農具を買わない。

　そして、壁の中の旧市街から壁外の畑に出ていく農民たちについては、領主が畑を貸している小作農は、当然領主から農具を借りているし、自分たちの畑を持つ自由農民にしても、領主お抱えである壁内の鍛冶屋（領主が貸す農具の作成や修理も担当している）から農具を買ったり、修理を依頼するだろう。それで言えば、わざわざ自由市へ来て、農具を買ったりしなくても良いのだ。

　今にして思えば、「旅の間の護身に」と、ナイフや長剣、それに長短の槍を売っている店は俺達の他にもあったが、農具を売っている店は皆無だった。それに気がついていれば無駄に鎌を並べる必要はなかった。ここが昨日の一番の反省点であり、在庫の鎌とクワをどうするかが、今後の悩みどころだ。まぁ、家の周りの草を刈って、畑を耕せばいいか。「生産系のスキルはついてる」と言ってたし、多分それなりになんとかなる。

　とりあえず今後の主力商品はナイフであることは間違いない。その他の武器類が衛兵達に売れてくれればいいが、領主の私兵としての側面もある衛兵たちが、長剣や槍を買ってくれるとは思えない。基本的には支給品だからだ。

　あの衛兵がナイフを買ってくれたのは、ナイフは支給された武器という扱いではなく、作業時の私物兼用ということなのだろう。

　とは言え、商人たちや、その護衛のために、いい武器を作っておけば売れるタイミングもあるだろう。ナイフの合間を見て作っておかなくては。

　しかし結局、この日は一日中ナイフの製作にかかっていた。目下の稼ぎ頭はこいつになりそうだと思うからだ。そして、夕食の時である。

「なぁ、エイゾウは矢じりは作れるのか？」

「ん？ああ。大丈夫だと思うが、なんでだ？」

「もうちょっとしたら、狩りに戻ろうと思うんだけど、その時にエイゾウの矢じりの矢があったらいいなぁって思って。」

「なるほどなぁ。わかった。作っとくよ。」

「やりぃ！頼んだぜ！」

「ああ。あ、それと明日、街に行くから頼むわ。」

「おう、任せとけ！」

　矢じりを作ってもらえるのが、よほど嬉しいのか、やたら上機嫌なサーミャ。そんだけ喜ばれたら、こっちも作り甲斐があるってもんだ。

　翌日、前と同じルートで街へ出た。今回も何事もなく、思ったより安全なのはいいが、完全に一日仕事なのがちょっと困ると言えば困る。

　前と違う衛兵のチェックを受け、街に入り、自由市で店を出す。このあたりも一昨日と全く同じだ。違うのは今回扱う商品がナイフのみ、と言うことである。

　あとは品数が減っているので、今回は試し切りした麦藁の束を置いておいた。ナイフ自体は一番手の入ってないものだが、それでも並のナイフよりはだいぶ切れ味がいいことがすぐ分かる。客もやりたがるだろうと思って、切ってない麦藁も用意してある。さあ、今日は前よりも売ってやるぞ。

　果たして、試し切り展示の効果なのか、昼過ぎ頃までには２本、行商人風の男に売れていった。この時点で前回超えだ。心の中でガッツポーズをする。

「エイゾウ、今めっちゃ喜んでるだろ。」

　サーミャにそう突っ込まれたが、それも気にならないくらい嬉しい。

「そりゃあ前より売れてるからな。この調子だともうちょっと売れるぞ。」

　サーミャは一瞬面食らった顔をしたが、すぐに、

「ああ、そうだといいな。」

　と朗らかな笑みで返してくるのだった。

　しかし、予想に反して、そこからは全く売れなかった。途中でサーミャを一回お使いに出して、売上金の一部で塩漬け肉と麦と豆を買ってきてもらったのだが、サーミャが行って帰ってくるまでのそこそこの時間、俺はまた大層暇な時間を過ごしたのだ。

「今日はもうこんなもんかねぇ。」

　俺がボヤく。

「まぁ、前は超えてんだし、いいんじゃねぇの。」

　そう返すサーミャ。

「まぁ、そうなんだけどさ。」

　そうして、今日は店じまいするか、と思った頃、大きな変化があった。革鎧を着込んだ男が５人ほど現れたのだ。手に武器は持ってないが、着ている革鎧にあるのはこの街の紋章――つまり、衛兵隊だ。その一団がまっすぐこちらに向かってくる。

　サーミャが

　なるべくならそうはなって欲しくない。その俺の心配を他所に、その一団の先頭の男が言ったのは、

「お前んとこか？マリウスにあのナイフ売ったのは。」

　であった。マリウスと言う名前に心当たりはないが、ナイフを売った人間には心当たりがある。

「はぁ、お名前は存じ上げませんが、あの若い衛兵さんでしょうか？ちょっと優男な感じの。」

「そう！そいつだよ！やっぱここであってた。まだ売り物のナイフはあるか？」

「ええ、ありますよ。あれからまた作りましたし、今日もそんなには売れてないので。」

「よしよし、じゃあ今ある分全部くれ。」

「えっ？全部ですか？」

　言われた言葉がいまいち理解できず、俺が困惑していると、男は、

「そう、全部だよ。昨日と一昨日の２日間、あいつが新品のナイフを見せびらかしてきやがって、見てりゃ切れ味も一級品じゃないか。しかも高くない。俺たちもああいうのが欲しかったとこなんだ。売ってくれよ。」

「いや、そりゃ売るのは構いませんけど……」

「なんか問題あるのか？」

「いえいえ、ある分でいいんですね」

　俺が心配したのは、いくら私物でも衛兵隊全員に出回るほど売ってしまうと、壁内の鍛冶屋≒領主に目をつけられやしないか、と言うことだが、とりあえず今ある分は売ってしまおうと考え直した。

「えーと、今残りは８本です。全部で銀貨４０枚ですね。」

「ほいよ、４０枚。数えてくれ。」

「はい。１、２、３……３９、４０。はい、確かにいただきました。ではこちらをどうぞ」

「おっ、抜いてもいいか？」

「どうぞどうぞ」

　鞘からナイフを抜く男。”マリウス”くんより、抜き方が更に手慣れている。もしかしたら、衛兵の中でも偉い立場の人間かも知れない。

「そちらの方もどうぞ。」

　他にいた衛兵の人たちにもナイフを手渡す。みんなそれぞれナイフを抜いて、ためつすがめつしている。しまった、この人数だとちょっと異様だな。

「やっぱり良いものだな、これ。」

「ありがとうございます。」

　男に褒められたので慇懃に返すと、男たちは満足した様子で去っていった。

　さっきの様子が異様だったのと、そもそも衛兵の鎧を着た男たちが、ゾロゾロやってきて物々しくなってしまったので、周囲の人たちに詫びておく。

「どうもお騒がせしてすみませんでした。」

「いやいや、ちょっとびっくりしたけど、物が売れるってのは良いことだよ。」

　俺のスペースの直ぐ側で、織物を売っていた恰幅のいい商人にそう言ってもらえたので、俺はほっと胸をなでおろし、今日の営業を終了したのだった。

## 増やす

2018年10月5日

　作ったナイフが１０本全て売り切れた。

　それ自体は疑いようもなく喜ばしいことなのだが、当然のことながら、次を作るまでは在庫がない。しばらく街に売りに行くのは休みだ。

　その間は製作を頑張っていくしかないが、その前にやっておきたいことがいくつかあった。

　まずは新しい製品の開発。とは言っても大層なものではなく、そろそろ長剣をいくつか作ろうと思う。これが行商人（あるいはその護衛の傭兵）に売れればいいな、と言う思惑である。ナイフよりは利益が多少良いだろうし。矢じりも作るのを忘れると、サーミャにめちゃくちゃ拗ねられるだろうから、そこは忘れずにおきたい。

　そして、家の拡張だ。サーミャが増えたのもあるが、よくよく考えれば客間がない。この家は”黒の森”の端には近いが、街から来るには一苦労と言った距離だ。普通の注文客なら、打ち合わせや作ったものの引き渡しだけして終わりだろうからまだいいが、もうちょっと付き合いの深い友人や取引先、みたいな人が来た時に泊まるにも泊まれない。かと言って、なんだかんだで遅くなった時に、森に放り出すわけにも行かないだろう。とりあえず２部屋増やしておけば、しばらくは平気かと思う。

　それには材料が必要だが、あいにく乾いた材木がない。このあたりの木を伐れば材木は手に入るが、乾くまでに早くても２週間ほどはかかる。更にそこから部屋を作るとなると、もっと時間はかかるだろう。だが街で買ってくるにも、ここは少し遠すぎる。俺は仕方なしに現地調達を決めた。

　さっきも言ったが、ここは森の中だ。周囲に材料はいっぱいある、が、それを入手するには道具がいる。斧と大鋸だ。斧は以前に作ったものがあるが、あれはあくまで”市販むけ”の品であって、俺が使うことは想定してない。なので、俺が使う専用のものを作成する。

　……何だかドンドン作るものが増えている気がするが、作るのは好きなので気にしないようにしよう、うん。

　まずは斧と鋸だ。斧は板金を重ねて火床で熱し、叩いて厚い板金にしたら、形を作って焼入れして作る。木を伐り倒すために作ったので、刃は鋭くはしてない。

　大鋸は板金を叩いて薄めの鈑金にし、タガネでノコ刃を作ったら、ヤスリで研いで完成である。簡単に言っているが、慣れてないせいもあって大鋸だけで１日仕事だった。

　その合間の息抜きに、矢じりを作ることも忘れない。矢じりは木型に粘土を貼り付けて型を作り、それを砂の中に埋めて鋳型にしたら、炉で溶かした鉄を流して冷めたところで取り出す。湯口にしたところを加熱してシャフトを突っ込む穴を作り、その後で研いで鋭くすれば矢じり自体は完成である。このあと、サーミャが持っているシャフトに固定する作業があるが、それはサーミャが狩りに出る前日くらいの作業で問題ない。

　さて、いよいよ伐採である。家の周囲はちょっとした広場のようにはなっているが、それでも鬱蒼とした森の中であることには変わりない。もう少し庭というか、畑予定地を広げてもバチは当たるまい。

　斧やらを作っている間は、運動がてら水くみ（ただし瓶は一つだけの半分くらい）やその他にも、食事以外の雑事をサーミャにお願いしていたが、今日は鋸の手伝いをしてもらう事になっている。食事がずっと俺の担当なのは、サーミャ曰く「アタシが作るより、エイゾウが作ったほうが美味いからに決まってるじゃん！」とのことだからだ。……なんとでも言ってくれ、褒められるとチョロいのだ、俺は。

　俺は作った斧をひょいと担いで、木の前に立つ。そして野球でノックをするような体勢になると、そのまま斧の刃を木に打ちつけた。

　コーン！と空まで抜けるような小気味よい音が、かなりの音量で響くが、木に変化はない。……かに思えたが、木がズルっと打ちつけたのと逆の側に滑って倒れる。ズズーンと重い振動があたりを揺らす。

　断面は前の世界で製材機に通したあとのように綺麗だ。自慢の製品ではあるが、この

　今後の事も考えて、もう一本だけ伐ることにする。打ち下ろし方向に伐るのも忘れない。再び大きな音と振動がして、無事に２本目も伐り終えた。

　伐った木の枝を斧で払う。普通は細い枝は剣鉈のほうが良いんだろうが、そこは俺ご自慢の斧である。何の苦労もなく切り払えた。そうしたら適当な長さで今度は垂直に斧を叩きつける。またまたコーン！と言う音が響いたが、何も起きなかったように見える。しかし、これはちゃんと切れているのだ。その証拠に、ぐっと押すと伐った長さでゴロリと転がった。それを何回か繰り返して、板材にする準備ができると、

「サーミャ！」

　俺は大きな声で家に呼びかけた。ややあってサーミャが家から大鋸を持って出てくる。呼んだらついでに持ってきてくれるよう頼んでおいたのだ。

「いよいよアタシの出番か！」

「ああ、だが無茶はするなよ。つっても、そんなに力はいらないはずだが。」

「わかってるよ。エイゾウが

「俺の道具だからな。」

「じゃあ心配いらないよ。サクッと切っちまおう。」

「おう。」

　俺とサーミャと二人で倒れた木を挟み込むように立つ。間には大鋸。コレで横方向に切って板状にしていく。普通ならそれなりに力も必要だし、時間もかかるが、豆腐を切っているかのように、なめらかに進んでいく。

「わはは！なんだこれ！気持ち悪ぃ！」

　あんまりにもなめらかなので、サーミャが笑い出す。

「あんまり笑って、ガタガタにするなよ？」

「わかってるって！ちゃんと気をつけてるよ！」

　結局、１回大鋸を入れるのに１０分とかからなかった。

「この調子なら、今日中には切り分けるのはできそうだな。」

「そうだな。普通ならもっとかかるんだろうけど、エイゾウの道具だからなぁ。」

　間に昼食や休憩を挟んだりして、丸一日かけることにはなったが、板材の切り出しと乾燥のために積み上げる作業は完了できた。

　さて、いよいよ明日から長剣の製作に取りかかれるぞ。

## ねんがんの

2018年10月6日

ロングソードをてにいれたぞ！

殺してでもうばいとる

な　なにをする　きさまらー！

　と言うこともなく、とうとう一本目のロングソードを作成した。

　この茶番を一人でやってるのをサーミャに見られて、

「なにしてんだ、エイゾウ……」

　と呆れられた以外の被害はない。

　ロングソードは、うちの矢じりの製法に近い方法で作成した。木型（雄型）を作り、粘土で木型を覆って乾いたら、半分に割って雌型にする。木型は何回か使えるが、やがて

　雌型を砂の入った樽の中に埋めて、炉で溶かした鉄を型に流しんで、冷めたら取り出し、”バリ”の部分を取ったら、加熱して細かいところをちょっと形を直して、最後に焼入れして軽く研いで本体は完成。あとは柄に革を巻いたり、鞘を作ったりする。

　基本的には”一般モデル”の出来にしてあるが、何本か製作して、１本だけ”高級モデル”だ。この高級モデルの柄頭には「太った猫の座り姿」の彫刻を施すことにした。前の世界のSNSで見た、お気に入りのかわい

　鞘やこういった彫刻は本来は専門の職人が担当するが、そこは鍛冶屋で作れる製品に対するチート持ちの俺である。インストールされた経験がまだ馴染んでないのでパーフェクトとは言い難いが、見られる出来の物ができた。

　もちろん合間に矢じりを作ることも忘れない。

　結局、ナイフの新規在庫とロングソードの製作で５日程かかった。そろそろか。

「エイゾウ」

　ちょうどロングソードの彫刻を終えた頃、サーミャが

「なんだ？」

「そろそろ狩りとかに戻ろうと思う。」

「そうか。じゃあ矢じりを取り付けてやるから、シャフトを作業場の方にもってこい。」

「うん。」

　俺は先に作業場へ行って、このところ合間合間に作った矢じりとハンマーを用意する。そこへサーミャが細い棒を何本も持ってきた。

　その棒を矢じりに開けてある穴に突っ込んだら、ハンマーで慎重に叩いてカシメていく。ここで歪めて取り付けたりしたら、当然ながら精度には多大な影響が出るので、持てる力の全てで作業した。

　我が事ながら、さすがチート持ち、ほぼ完璧に取り付けられている。多少の狂いはあるかも知れないが、そんじょそこらの職人では出せない精度にはなっている……はずだ、多分。

　そうやって１０本も作業した頃、サーミャが口を開いた。

「あのさ」

「うん？」

　俺は作業しながら返事をする。

「前にここに住まないかって言ってただろ？」

「おう。言ったぞ。」

「あれ、まだ有効だよな？」

「もちろん。無効だと言った覚えはないからな。」

「アタシ、エイゾウに助けてもらって、よかったと思ってる。ここに来て、まだほとんどなんにも出来てないけど、手伝いは楽しいし、飯のときにエイゾウが話してくれることは面白かったし、エイゾウがなんか作ってるところを見るのは好きだ。だから……」

　そこでサーミャの言葉が止まる。獣人の年齢は、人間の俺には分かりにくいが、声や仕草からして、俺よりはだいぶ若いはずだ。そんな年齢の子が、オッさんと一緒に暮らす、と言うのは、例え

「だから、一緒に住んでもいい……？」

「そりゃあ、俺が住もうって言ったんだから、お前さえ良ければいいに決まってるだろ？」

　それを聞いて、俺の背中をバシンと叩きながら、サーミャが言う。

「やった！ありがとな！エイゾウ！」

「いってーな。」

「いいじゃん！アタシが嬉しいんだから！」

　そう言って笑うサーミャの顔は、短い間だが一緒に住んできた中で、一番輝いていた。

「ときにサーミャよ。」

「ん？なんだ？」

「お前いくつなんだ？」

「いくつって見りゃ……ああそうか、人間には分かりにくいんだったか。」

「若いんだろうなということくらいは分かるけどな。」

「５歳だよ。」

「……はぁ！？５歳！？」

　俺は驚いて声を上げた。若いとは思っていたが、５歳というのはちょっと想像を超えすぎている。獣人のお子さんは、こんなにしっかりなさっているのだろうか。俺が５歳の頃は、多分なんかこうもっと子供だった。

「そんな驚くなよ。獣人と人間じゃ、歳のとり方が違うらしいぞ。」

　ああ、なるほどな。前の世界でも（多分こっちでもだろうが）、犬や猫と人間では歳のとり方が大きく違う。それと似たようなことなのだろう。

「じゃあ、人間で言うといくつくらいなんだ？」

「えーと、２５歳って言ってたかな。でもここからはあんまり外見は変わんなくて、人間が８０年生きるとしたら、アタシらは５０年くらいって、前に聞いたことがある。」

「なるほどなぁ……」

　寿命の差はあるのか。それでも普通の犬や猫に比べたらかなり長い。倍はある。

「エイゾウは？」

「ん？」

「エイゾウはいくつなんだよ？」

「ああ、俺か。俺は３０歳だ。」

　”中身”は４０越えてるけどな。前に湖で見たのは確かに３０歳頃の俺だったから、３０歳で通るはずだ。

「３０歳かぁ。」

「どうした？」

「いや、なんか、アタシも５歳だけど、その中で会ってきた人間の歳を考えたら、もっとオッさんなのかなって。」

　獣人だからなのか、鋭いなこいつ。

「安心しろ、人間でも獣人ほどじゃないけど、３０歳はもうオッさんに片足突っ込んでる。」

　俺はそう言ってごまかすことにした。

「さて、喋ってる間にできたぞ。」

「おっ……おおーー！いいじゃん！！やっぱエイゾウのはいいな！」

　サーミャが取り付けられた矢じりを見て興奮している。

　うら若き乙女が矢じりではしゃぐ、と言うのは若干異様にも思えるが、まぁ、自分の仕事で喜んでもらえるのは素直に嬉しい。

「ありがとよ。」

　そう言っておいた。

## やがて日常になる

2018年10月7日

「サーミャさんや。」

「なんだよ気持ち悪いな。」

「ひどいわぁ。まぁ、それはともかく、ナイフと新商品のロングソードが出来たんで、また街に行って売ろうと思うんだが。前に行ってから１週間ほど経つだろ？せっかく覚えてくれそうな人もいるのに、長いこと行かないで忘れられても、もったいないし。」

「それもそうだなぁ……よし、付き合ってやるよ。」

「狩りの再開もあるのに悪いな。」

「いいよ、別に。そっちは急がないし。」

　そうして俺とサーミャは、街行きの用意をして出ることにする。

　サーミャは弓とナイフを持つ。いざという時でも遠距離から攻撃できる手段はあったほうが良い。それに弓から放たれる矢の矢じりは俺の

　俺の方は売り物のナイフをまとめてザックに収め、道中の簡易食は別のポーチに入れて、腰にさげる。ロングソードはどうしようか迷ったが、ザックの上に固めて縛り付けておいた。一本だけは左腰に下げておく。護身用ナイフは懐だ。

　そして、（この格好、前の世界のイラストで見たやつだ！）と内心大喜びしていたら、しっかりサーミャに気づかれた。

「何喜んでるんだ？」

「いや、ロングソード売れたらいいなぁって。」

「ふーん……」

　かなり怪しんでいるが、サーミャがそれ以上追求してくることはなかった。時々変なところで喜ぶのにも慣れてきたのか、それとも職人は変人揃いだと思っているのか。

　森の中を行く。ロングソードの分、いつもよりはかなり重いが、筋力が強化されているので、特に歩みが遅くなるようなことはない。これでしょっちゅう休んだりしないといけないようなら、荷車の導入を考えるが、今のところはそれが必要な感じではない。

　ただ、例えば短槍とロングソードを２０本ずつ、とかになってくると、そもそも物理的に持ち運びが困難ではあるので、いずれ導入が必要になる時は来てしまいそうだ。……それに合わせて、今のうちから木を伐っておいたほうが良いかも知れないな。

　間に小休止を挟み、もうあと３０分もすれば街道に出る、と言うところで、サーミャが立ち止まった。何かがいるのだ。

「何がいる？」

「血の臭いがキツくて分かりにくいな。肉を食うやつがいる。こりゃ森狼か……。こっちにはおそらく気づいてるぞ。」

「どうする？」

「ちょっと様子を見よう。血の臭いがするってことは、多分なんか獲物を捕まえて、食ってるってことだから、それで満足したらこっちには向かってこない。」

「なるほど。」

「向かってきたら……」

「向かってきたら？」

「その時はエイゾウの腰に下げてるそれを、役に立てるときだな。」

　ここは森の住民としては先輩の、サーミャの意見を聞くほうが賢そうだ。

　ややあって、サーミャが静かな声で言った。

「やっぱり向こうから離れてった。」

「そうか。」

　俺はほっと胸をなでおろした。腰の得物もいざとなったら役には立つが、そうは言っても売り物なので、なるべくなら売れなくなってしまうようなことは避けたい。そうしなくて済んだのは僥倖だ。

　再び街道に向かって歩きながら、俺はサーミャに聞いた。

「森狼って何を捕まえてるんだ？」

「何って色々だよ。大概は樹鹿だな。後は草兎とか土鼠とか。樹鹿はアタシたちも狩るけど、アタシたちは心臓以外の内臓を食わないの知ってるから、おこぼれにあずかろうって来る奴らもいる。」

　”草兎”と”土鼠”について聞いてみると、”草兎”は耳が細く緑色になっていて、草のように見えるから。”土鼠”は土色をしていて、土に穴をほって生活しているから、だそうだ。

　基本的にこの森の生物は擬態・擬装をして、敵の目を欺くことで生き延びてきたらしい。つまり、上空とかから見えにくい森に住みつつ、分かりにくいようにする必要があった、とすると、食物連鎖のピラミッドの上位に、目のいい生き物がいるんだろうな。例えば竜とか……。

「なぁ、竜っているのか？」

「竜？アタシは見たことないけど、いるって聞いたことはある。」

　いるのか。見てみたい気はする。でも、見て生き残れる自信はないなぁ。この２回目の人生の、最後の楽しみくらいにとっておこう。

　街道では特に何事もなく、街にたどり着くことが出来た。入り口で番をしていたのはマリウス氏である。

「ああ、どうも。」

　俺の方から声をかける。

「おお、アンタたちか。姿を見せないから、心配していたぞ。」

「いやぁ、在庫がなくなってしまったもので、作ってました。マリウスさんのおかげですよ。」

「あれか。あれは俺もちょっとビックリしててな。問題になってたらすまん。」

「いやいや、問題なんて滅相もない。」

「それなら良いんだが……。今日の売り物はそれかい？」

「ええ、いつものナイフと、今回からロングソードも売ります。」

「そうか。またあとで見に行くかも知れないから、よろしくな。」

「はい、お待ちしております。」

　マリウス氏と挨拶を交わしたら、自由市へ向かう。前と同じように金を払って、販売台を設置し、そこにナイフを数本と、ロングソード１本を並べた。ほど近い場所に前回隣だった織物商がいたので、片手を上げて挨拶する。さぁ、今日の営業開始だ。

　どうせしばらくは暇なので、その間にサーミャにお使いを頼む。１週間ほどで食糧もそこそこ目減りしたから、その補充だ。代金は前回の売上分で余裕で賄える。

　今回はサーミャがお使いに出て戻ってくるまでに、４本も売れた。どうやら衛兵隊が愛用してくれていて、目にする機会がそこそこあるようだ。

　ナイフの他に、ロングソードも２本売れている。２本とも買ったのは同じ人物だ。遠くまで行き来する行商人で、自分で使うためと、１本は遠くで転売するらしい。もし売れなかったとしても、持ってて困るものではないからと笑っていた。少しでも多く確実に売れる品を運びたいだろう行商人なので、恐らくは売れるあてがあるんだろうなとは思う。

　しかし旅かぁ、旅もちょっと憧れるな。もしめちゃくちゃ余裕ができたらサーミャを連れて社員旅行でも決め込むか。いつになるかわからんけど。

　そして帰り際に、マリウス氏がおそらく同僚氏１名を引き連れてやってきてくれたおかげで、ロングソードがもう２本売れることとなった。

「良いんですか？売れるのはありがたいですが、武具のたぐいは、領主様から貸与されているのでは？」

「そりゃ衛兵としての職務で使う分はそうだが、

　そう言ってウィンクするマリウス氏は、いつもの何割増しか、優男に見えるのだった。

## 狩りの時間

2018年10月8日

　ナイフはそこそこ、ロングソードも結局の所”高級モデル”以外は完売と言う、上々の結果を得ることが出来た。食糧も買い込んだし、これでまた向こう１週間は余裕で暮らせる。

　家に戻ってきて、買い込んだ麦のうち、挽いて粉になっているぶんを、いくらか木製のボウルにあけて、水と塩を入れて練っておく。しばらく寝かせるので、その間に買い込んだ食糧の整理だ。サーミャは明日から狩りに出るので、まだ日が出ている今のうちに弓の調子を見ておくらしい。

　一通り終えたら、練っておいた生地を薄く伸ばして、フライパンで焼いていく。前の世界で言う、チャパティとかの無発酵パンみたいなものだ。これと干し肉と根菜のスープで夕食にする。

「弓の調子はどうだ？」

「ん？ああ、別になんとも無かったよ。２本ほどエイゾウの矢を使ったけど、バッチリだ。」

「そうか、それは何より。明日は何を捕まえてくるんだ？」

「んー、樹鹿か、猪かなぁ……。あとはいればなんか鳥も獲りたいな。」

「獲れれば食生活が広がるな。」

「そうだな。楽しみだぜ。」

　サーミャは明らかにテンションがあがっている。虎の獣人としての血もあるんだろうなこれ。街に出かけていて疲れているし、お互いに明日があるので、その日は早々に床についた。

　翌日の朝、革鎧を身に着け、弓を背負ったサーミャを見送る。昨日焼いた無発酵パンに、干し肉の弁当を持たせてある。

「行ってらっしゃい。大黒熊に出くわしたら、すぐ戻ってこいよ。」

「わかってるよ。いってきまーす。」

　サーミャはすばやく去っていった。さて、俺も仕事にかかるか。

　とは言っても、今日は基本的には減った在庫の補充だ。ナイフ４本。ロングソードは今日は無理だろうから、明日だな。鉄材の在庫はまだ結構あるが、これもそのうち尽きてくるだろうから、調達先をそのうち探す必要がある。今のペースで売れてくれれば、継続的に卸してくれる先を探したほうが良さそうだ。

　しかし、それでもここまで持ってきてもらうわけにもいかないだろう。何回か街と往復してわかったが、この森に住んでいて、ほぼ被害なしに行き来できるのは、事前の危険を察知してくれる、サーミャの貢献によるところがかなりある。

　例えば、昨日でもうっかりオオカミたちの食事の現場に踏み込んでしまっていたら、どうなっていたかはわからない。撃退は出来ても無傷ではなかったかも知れないし、何より、かなりの時間を消費してしまっていただろう。そうなると今度は暗い森の中を帰る

　それを考えると、そろそろ荷車が必要か。しばらくは在庫を持っていくのも大丈夫そうだが、いずれ限界も来るだろうから、今のうちに所持しておくのも、いいかも知れない。導入を考えよう。

　導入するとして、自作するのか、購入するのか……。自作するなら、また木を伐って材木を確保する必要がある。でも、２週間かかっても、その間に街に行くのは２～３回だと思うし、それくらいの間なら余裕だろう。せっかくだし、自作してみて、どうしようもなかったら購入することにしよう。

　夕方頃まで、そんなことを考えながらナイフを作っていたが、クオリティ自体は今までの”一般モデル”と変わらない。チートだからと言われればそれまでだが、ここまで集中しなくても、そこらの鍛冶屋より良いものが作れてしまうのは、良いことなのかどうか、ちょっと悩みどころではある。

　ただ、ものを作って暮らしていく、というのはそう言うことなのかなぁ、とも思うし、せっかくの２回目の人生なので、もらったものはありがたく活用させてもらうとしよう。

　出来上がったナイフをしまっていると、サーミャが戻ってきた。

「帰ったぞー。」

「おう、おかえり。」

　出迎える俺を見て、サーミャがもじもじしている。

「なんだ、どうした？」

「いや、なんか……今、ちょっと……嬉しかったから……」

「ああ……。家帰ってきたら人がいるっていいよな。」

「う、うん。」

　前の世界では、結局俺が掴むことのなかった幸せだ。サーミャはどうなんだろうな。俺に助けられてよかったとは言ってたが、もし大黒熊に襲われなくて、普通にそのまま森の狩人として、他の獣人と結婚して子をなすような人生があったのだろうか。

　いや、”ウォッチドッグ”の言い分だと、あそこで少なくとも俺じゃなかったとしても、誰かに助けられてはいたことにはなる。それが俺でよかったのかどうか。本当に俺でよかった、と思ってもらえるようにはしていかなきゃな。

「で、獲物は？」

「樹鹿を仕留めた。はらわたは抜いて、今は湖に漬けてある。また明日の朝一で取りに行こうぜ。」

「おう、じゃあ明日運ぶの手伝うか。とりあえず手を洗ってこい。」

「うん。」

　そして、いつもどおりの食卓の風景だ。

「どうだった？矢とナイフの調子は。」

「めちゃくちゃ良かったぜ！矢は深くまで刺さるし、その後ナイフで捌いたときも、すんなり捌けてめちゃくちゃ助かった。」

「そうか、役に立ててよかったよ。」

　そのあと、いかに奮闘して樹鹿を仕留めたのか、身振り手振りを交えた解説が行われ、俺はにこやかにそれを聞くのだった。

　翌朝、俺とサーミャは湖にきた。作業場から縄と斧を持ってきている。

「ええと……」

　サーミャが沈めたあたりがどこだったか探っている。

「あ、あれだ。矢が刺さってるだろ。」

「おお、確かに。」

「あそこからもうちょい奥だ。」

「行ってみるか。」

　そこに近づいてみると、水の中に大きな鹿の身体が沈んでいた。

「まずは岸まで引っ張り上げる。エイゾウ手伝ってくれ。」

「おう。」

　二人で鹿の足を持って引きずる。多少浮力があるのか、思ったよりは楽だ。

　岸まで運び上げたら、適当な大きさの木を２本ほど斧で伐り倒して、それを適当な長さに切りそろえ、縄でまとめて荷台のようなものを作る。その端に別の縄をくくりつけて、引っ張れるようにする。その上に鹿を乗っけたら、移送準備完了だ。俺とサーミャで一緒に引っ張る。

　俺たちの力が強いのか、鹿が思ったより軽いのか、スルスルと動く。４０分ほどで家についた。さぁて、これから解体だ。

## 狩りの結果とお手伝い

2018年10月9日

　樹鹿を家の近くまで運んできたので、手近の木に逆さ吊りにして、皮を剥いでいく。ナイフの切れ味がとんでもなく良いのもあるのか、あっという間に皮を剥ぎ終わる。

　頭を落とす前に、サーミャが角の部分を指して言った。

「ほらここ、折れた痕があるだろ。」

「お、ホントだ。」

　言われて見てみると、枝が折れたかのような痕があちこちに残っていた。

「この大きさだからな。森狼とかから慌てて逃げる時に、どうしても角がぶつかるんだよ。」

「へえぇ、こうやって見るとよく分かるな。」

「だろ？」

　サーミャが得意げに言う。こう言う知識があるのは純粋にすごいと思う。

「内臓は抜いてあったが、どうしたんだ？」

「そのへんに置いときゃ、狼どもが食いに来るよ。そうじゃなくても森に還るし。」

「なるほどなぁ。」

　自然に任せる、と言うことか。前の世界でこう言うことをするといろいろ問題があるんだろうが、ここでは問題にされない。

　肉を切り分けると、前の世界でも見たことあるような感じの肉が並ぶ。

「残った骨は？」

「ここからちょっと離れたところに行って捨てる。これも狼が食ったりするからな。」

「なんかしょっちゅうやってると、そのうちついてきそうだな。」

「たまにいるらしいけどな。」

「やっぱいるのか。」

「ああ。ついてこなくても、獣人とか人の匂いがするやつは襲われにくい。自分たちで狩りをしなくても、それなりの獲物貰えるのがわかってるからな。」

「賢いんだな。」

「ああ。でなきゃ、この森じゃ生き残れないからな。」

「そりゃそうか。」

　うかつに狩人に手を出しまくっていたら、今度は自分が狩られる側だ。

　その日の昼食と夕食は、樹鹿の肉を焼いて食うことにした。残りは干し肉にするために作業場に吊るしておく。あっちはほぼ毎日火を使って仕事してることもあって、温度も高いし、湿度も基本的には低いからな。でもそのうち、燻製小屋とか、倉庫とか欲しくなるんだろうな。

　それもあって、肉を吊るす作業が終わったら、木をまた伐って木材にする準備をして、その日の作業を終えた。

　翌日はサーミャの狩りはお休みだ。そう言う風習があるのだとか。まぁ、そんなに肉を獲ってきても消費しきれないし、獲りすぎて数を減らさないため、とかそう言うことで決まった風習なんだろうな。

　なので、今日はちょっと作業を手伝ってもらうことにした。

　今日作るのはロングソードなので、まず木型に粘土を塗るところを手伝ってもらう。

「なんか面白いなこれ。」

「だろ？」

　若干、粘土遊びに近いからな。割って砂に埋めるところは俺がやる。割った時に綺麗に型が取れているのを見て、また喜んでいた。

　次はやってもらうのは、バリ取りだ。型からはみ出て固まっているところをハンマーで叩いて落とす。一本手本を見せて、残りをやってもらう。

「おー、これも面白いな！」

「そうか、じゃあ残りもよろしくな。」

「おう！」

　俺はその間に刀身の仕上げをする。この日は２本仕上げることが出来た。

　２日ほどこんな感じでサーミャに手伝ってもらいつつ、減ったロングソードの在庫の４本を完成させた。

「じゃ、今日は狩りに出てくる。」

「おう、行ってらっしゃい。明日はまた街に出るから、あんまり無理しないようにな。」

「わかった。行ってきます。」

　手を振ってサーミャを見送る。彼女はひょいひょいと下生えを乗り越えながら森の奥へ消えていった。

　さて、俺は次の製作物にかかるとするか。

　作れるもののバリエーションは、多いに越したことはない。ナイフ、長剣ときたので、次は槍を作るとしよう。

　材木を作る時に払ってとっておいた、木の枝の中から１４０cm位あるものを選んで、棒状に削っていく。長い棒が出来たら、次は穂と石突の作成だ。

　穂の部分は板材を叩いて四角柱にし、根元にする部分を円柱にして伸ばし、棹が入るようにしておく。穂先の部分は叩いて鋭くしていき、四角錐と円柱の組み合わせのような形にしたら完成にする。もう少し刃などをつけるものもあるが、初めてなので今回は刺突専用にしてある。

　石突きは穂の部分と同じ重さの鉄を円柱状にし、やはり棹が入る部分を筒状に加工したら、反対側を少しだけ尖ったような形状にして完成。

　穂先の焼入れが完了したら、石突きと共に棹にはめ込んで、短槍が出来上がった。

　今回は初めての製作なので”特注モデル”にした。だから売り物にはできない。もしサーミャの他に護衛が増えるような事があれば、その人に持たせるのはありかも知れないが……。

　この日は短槍１本仕上げて終わった。これも魔法併用の道具や、俺のチートがあるおかげで、多分本当はもっと時間かかるんだろうな。そんなことを考えながら、仕事場の火を落とし、肉の乾き具合を確かめて、今日の仕事を終えた。

　そろそろ夕食の準備でも始めるか、と思ったところに、サーミャが帰ってきた。

「おかえり。」

「た、ただいま。」

　照れるサーミャ。こっちも照れるから早く慣れてほしい。

「今日は何を獲ってきたんだ？」

「今日は木葉鳥だよ。」

　２羽ほどの鳥を掲げるサーミャ。大きさは前の世界でのカラスくらいで、見ると翼がこのあたりの木の葉に似ている。この森では鳥も擬態しているのか。これは見つけるのも射落とすのも苦労しただろう。サーミャは多分腕前が良いほうなのだろうと思うが、それでも２羽だけしか獲れなかったのが、その証拠でもある。

「じゃあ、今日はそいつを使うか。」

「おう、楽しみだ。」

　まずは羽を毟る。風切羽は綺麗な翡翠色をしていたのでとっておいて、使えるようなタイミングがあれば装飾に使うことにした。あとはひたすら毟る。体の方の羽毛もとっておけば布団や枕に出来るのだろうが、サーミャに聞いたところ、「木葉鳥でそれするやつは、あんまりいない」とのことだったので諦める。量もそんなにとれないみたいだしな。そう言うのに適した鳥の羽毛は、毟ると体が小さくてもすごい量になると、前の世界で聞いたことがあるから、多分向いてないんだろう。

　羽を毟って、産毛を魔法のコンロで炙って焼いたら、腹を開いて内臓を取り出す。多分、砂肝やらレバーやら食えるんだろうが、今回は捨てることにした。サーミャも「あんまり食わない」と言ってたしな。

　胸肉を切り離して、手羽とモモを関節のところで切り分けたら、肉としての準備は完了だ。塩だけで焼いて食うことにする。

　今日は樹鹿のスープと焼木葉鳥、無発酵パンで少し豪勢な夜を過ごした。

「明日また街に行くけど、これなら塩漬け肉は買わなくても良いかもなあ。」

「おう、またアタシが獲ってくるよ。」

「頼んだぞ。」

　俺はそう、笑って言うのだった。

## あたらしいもの

2018年10月10日

　翌日。俺とサーミャは街に向かっていた。護身用に槍を持ってくるか悩んだが、まだ試してないので置いてきている。明日にでもやらないとな……。

　今回は何事もなく街についた。入り口の衛兵は今日もマリウス氏である。

　手には支給品の短槍を持っているが、腰には”間違えて持ってきた私物”のロングソードを佩いている。

「お、今回はちょっと早かったな。」

「ええ、在庫ができたので。」

「なるほど。品揃えは変わってないのか？」

「そうですね、今日は前と同じです。」

「そうかぁ。ロングソードはあるんだよな？うちの連中にも言っとく。」

「ありますよ。ありがとうございます。」

「あー、それと。」

「なんでしょう？」

「いや、いいや。自由市に行ったら分かる。」

「……？わかりました。それでは。」

「ああ。」

　マリウス氏にしては、やたら歯切れの悪い物言いがひっかかるが、今日は物を売りつつ、塩やなんかを買って帰るのが目的なのだ。俺たちは自由市の方へ向かった。

　今日も商品は俺だけが持っているので、販売スペースへはまず俺一人で行く。サーミャにはその間に買ってきてもらう、と言う算段だ。

　いつもどおりに金を払って、販売台を受け取り、スペースに向かう。受付のオッさんにも少しは覚えられてきたらしく、今日はいつになく愛想が良かった。

　前と同じところは埋まっていたので、少しズレたところに販売台を置いて、開店準備を始める。織物商は今日は見当たらない。今回は俺たちが早めに来たので、日が合わなかったのか、しばらくは来ないのか……。知り合いがいないと、ちょっと寂しいな。

　今日の商品は前回と同じなので、テキパキと準備を進めて、開店準備は完了だ。もちろん自由市では、開店時間なんてものはないので、準備完了はイコール開店なのだが。

　そうして、昼前まで待っていると、前回ロングソードを買ってくれた行商人の男が来た。

「おう、どうだい調子は？」

　気軽な感じで声をかけてくるので、俺も同じように返す。

「いやぁ、今日はダメだねぇ。」

「１本もかい？」

「１本もだ。」

「じゃ、ロングソード、ある分買うよ。」

「えっ！？いいのか？」

「ああ。前に持っていったのが、売り先で好評みたいでな。もう何本かくれって言われてるんだ。」

「なんだ、それ知ってたら、もう１０本も

「職人のくせにがめついな、お前は。」

「ずーっと１週間も鉄を叩いてるとな、たまにゃあ銀を拝みたくなるんだよ。」

「なるほどな。わかるぜ。」

　そうして、二人で笑う。行商人の男は本当に４本とも買っていってくれた。今日の目的はほぼ完了だな。

　今日も”高級モデル”も持ってきてはいるのだが、これは、と言う客が現れないので売れずにいる。しかし、それではいつまでも売れないので、どこかで見切りをつける必要はあるだろう、次くらいに行商人のやつが来たら、あいつに任せてもいいな。

　そんなことを考えていると、サーミャが買い出しから戻ってきた。今日買ってきてもらったのは、鹿肉を塩漬けにするための塩と、昼飯の屋台メシ。屋台メシの方は、固く焼いたパンの上に、焼いたイノブタのスライス肉を載せて、その上から甘辛いソースをかけた、と言う説明のまんまの料理だ。ピザともハンバーガーとも違うが、なかなか美味いので、ここに来るときはこれが常食なのである。壁内だといろいろ面倒な決まりがあって、それぞれ別に買ってこないといけなかったりするみたいだが、ここは壁外の自由市、そんな決まりはないので、こうした料理にありつける。

　そうして腹を満たし、”

「ありゃドワーフだ。珍しいな。」

「少ないのか？」

「この辺りじゃあ、あんまり見ないな。アタシも１回だけ森に来たやつを街道まで案内した事があるけど、それっきりだ。」

「そうなのか。」

　レアなものを見ることができているのか。これはちょっと嬉しいな。それにドワーフ。聞き覚えのある種族名だ。いるんだな……。この調子だとエルフもいそうだ。今度サーミャに見たことがないか、聞いてみよう。

　そのドワーフの女性は、販売台に残っていたナイフを見ると、慌ててこちらに向かってきた。顔を見ると、鼻はやや丸いかな？というくらいで、後はほとんど人間と変わらない。しかし、腕や脚周りがガッチリしている。前の世界で言うボディビルダーほどではないが、ジムできっちり鍛えている感じ、と言えば分かるだろうか。

「あ、あの！」

「はい。なんでしょう？」

　勢い込んで話しはじめる女性に、少し圧倒されながら応対する。

「衛兵隊の人のナイフを作ったのは、貴方ですか！？」

「ええ、そうですが……」

　サーミャが少し自分の位置を変えた。多分なにもないと思うが、ちゃんと護衛としての仕事をしようとしてくれているのが、なんだか少し嬉しい。女性はこちらの様子に気がついたふうもなく続ける。

「このナイフは衛兵隊の人のものと同じですか？」

「ええ、そうです。」

「見せてもらっても？」

「どうぞどうぞ。」

　女性は鞘からナイフを抜いて、刀身や柄のつくりをじっと観察する。そして、しばらく観察したあと、言った。

「ここで一番出来の良い商品を見せてもらえませんか？」

「え、まぁ、いいですけど。」

　一番出来の良い商品か……。今見ているナイフも、そこらの鍛冶屋には負けない出来だと思うが、そのナイフを見て、「これ以上を見せろ」と言うことは、それがあることを確信しているのだろう。いずれ売ろうと思っていたものだし、見せることは構わない。

　俺は”高級モデル”のロングソードを腰から外して、女性に渡した。女性はやたら

　女性はナイフのときよりも、かなり丹念にロングソードを観察し続けた。あまりに長い時間観察しているので、何をしているのかと興味を持った別の男に、ナイフ一本を売りつける時間の余裕もある（まいどあり）くらいだったのだ。その間も一心不乱に女性は剣を見続けていた。

　そして、流石にそろそろ返してもらおうかと思った頃、

「ありがとうございました。お返しします。」

　ロングソードを鞘に収めて返してきた。

「どうも、ありがとうございます。」

　と、俺がそれを受け取った瞬間、女性が動く。サーミャがそれに反応して、俺の身体を後ろに引っ張りつつ、自分が前に出る。

　しかし、女性が取った姿勢は、俺への攻撃ではなく、足を折り曲げ、地面に手をつき、頭を下げた姿――土下座だ。

　この世界って土下座あるの！？と驚く俺をよそに、女性は自由市の真っ只中で、土下座姿のまま叫ぶ。

「わたしを弟子にしてください！」

　俺はしばらく、キョトンとすることしか出来ないのだった。

## 弟子

2018年10月11日

「か、顔を上げてください。」

　俺は慌てて女性に声をかける。しかし、女性は動こうとしない。

「お願いします！私を弟子に！」

　これはもしかして弟子にするまで、

　周囲にもなんだなんだと人が集まりつつある。俺はともかくこの女性と、何よりサーミャをあまり好奇の視線の中に置いておきたくない。

「とりあえず、店じまいをしてしまいますから、それから話を聞かせてください。」

　それで女性はひとまず立ってくれた。すかさず、俺はバタバタと店じまいをする。衛兵が来る前に立ち去りたい。あんまり衛兵には迷惑をかけたくないのだ。

　俺がこれまでの最速タイムを叩き出して片付け、販売台を持ち、３人で返却場所へ向かおうとした瞬間、マリウス氏と出くわしてしまった。だが、やけにのんびりしているな……。

「おー、ドワーフのお嬢さん、ちゃんと会えたのか。良かった良かった。」

「はい！おかげさまで！」

　にこやかに返事をするドワーフの女性。あぁ、マリウス氏が朝言ってたのは、この人のことか……。

「マリウスさん、別に朝言ってくれてても良かったのに。」

　俺はマリウス氏にゆるく抗議する。

「いやまぁ、言ったところで結果は変わんないし、どうしようもなかっただろ？」

　それはそうなのだが、こう、心の準備というものがあるのだ。

「それに普段仏頂面なアンタの、あんなに驚いた顔が見られたから、俺にとっては儲けものだったな。」

　やけにタイミングよく出てきたと思ったら、巡回かなにかにかこつけて遠くから見ていたらしい。

「酷いなぁ……」

「まぁ、許してくれや。ここらじゃあ、こう言うことくらいしか楽しみがないんだよ。」

「貸しにしておきますからね。」

「了解いたしました！」

　最後はおどけて敬礼までするマリウス氏。悪い人じゃないとは思うのだが、こういうノリがちょっと苦手な部分はある。とにかく貸しにしたからな。

　マリウス氏にも別れを告げ、販売台を返し、新市街にある宿屋に来た。ご多分に漏れず、１階が酒場で２階が宿泊施設になっている。このドワーフの女性は、３日ほど前からここに逗留しているそうだ。

「私はリケ・モリッツと言います。」

　と、女性は名乗った。デカいジョッキ――ガラス製ではなく、小型の樽に取っ手がついたようなもの――を抱えているが、頼んでたのエールじゃなくて

「家名？」

　ボソリとサーミャが疑問を口にする。だが、

「あ、いえいえ、モリッツは家名ではなく、工房名です。」

「工房名？」

　今度は俺が疑問を口にする番だった。サーミャは隣でエールをちびちび飲んでいる。

「ええ。ドワーフは基本的に、いくつかの家族で集まって工房を持ちます。そこで生まれたり、暮らしたりする人は、自分の名前以外に工房の名前を名乗るんですよ。私だとモリッツ工房のリケ、と言う意味です。」

　部族とか、村の名前を名乗るようなものか。

「俺の名前はエイゾウです。こっちはサーミャ。」

　サーミャがちらっと俺を見た。多分”タンヤ”の方を名乗らなかったからだろう。別にリケさんには言ってもいいのだが、酒場では誰が何を聞いているか分からないからな。こっちの世界にある家名だったら、面倒なことになるし、わざわざそんな危険を

「よろしく。」

　ぶっきらぼうにサーミャが言う。

「こちらこそ、よろしくお願いします。エイゾウ、さん……北方の方なんですか？」

「ああ。出身はね。ちょっと色々あって、”黒の森”に住み着いて、そこで鍛冶屋をしています。」

「なるほどそれで……」

　俺の話を聞いて考え込むリケさん。

「どうかしましたか？」

「ああ、いえ、これだけの物が作れる鍛冶屋を、ここに来るまでに見なかったのはなぜか、と思ってましたもので。」

「ああ……」

　俺はカップの中身をチビリと飲む。水で割ったワインで、そんなにうまくはない。……見た目に反してアルコールに弱いのだ俺は。

　まぁ、普通は森の中に工房は作らないよな。もうちょっと流水に近いところで、水車なんかで鎚を動かしたりするらしい。前の世界で鍛造するのに使う油圧式のハンマーとかが近いのかな。俺の場合は森の中に用意されてたから、問答無用だが。

「その辺の事情は深く追求しないでいてくれますと、助かります。」

「そうですね。特に興味もないですし。」

　あっさり言うな、リケさん。

「それで、弟子になりたいと言うのは？」

　俺は話の流れを軌道修正する。

「あ、はい。その話ですよね。ちょっと話すと長くなるんですけど。」

　リケさんはジョッキの中身を

「私と弟達は工房を出て、研鑽を積むべく各地の工房を尋ねて回っていました。これはと思う工房があれば、そこで弟子入りさせてもらって、やがて元の工房に帰ってその技術を使い、新たな物を作りだし、再び弟子入りした工房に還元する。それがドワーフの生き方です。」

　え、そんなのインストールには無かったぞ。動物の細かい生態とかは入ってないから、こう言うのも入ってないんだろうか。まぁそっちのほうが楽しみはあるが……。

「そんな、下手をしたら技術が流出するようなこと、みんな断らないのですか？」

「はい。ドワーフに弟子入りを願われるのは、普通、工房にとっては名誉なので。それにうまく行けば、自分の工房にもメリットがありますからね。」

　だけど鍛冶屋でない普通の人間は知らないから、あの時、弟子入りの驚きより好奇って感じの目線だったんだな。壁内の鍛冶屋に見られてたら、やっかみを受ける可能性はあるってことか。さっさと立ち去ったのは正解……いや、

　リケさんは続ける。

「それで、３日ほど前この街に着いた時に、さっきお会いした衛兵さんが、ナイフを使っているのを見て思わず聞いてしまったんです。それを作った人に弟子入りしたいので、住んでいる場所を教えてください、と。その時はこの街の鍛冶屋だと思ってましたからね。」

「ふむ、それが私のだったと。」

「はい。ですが、名前も住んでる場所も知らないが、週に一度は自由市に来る。前に来たのがちょうど１週間ほど前だったから、そろそろ来るんじゃないか、そう言われました。」

「確かに今はそんな感じですね。」

「それで今朝、弟たちを旅立たせて、ロングソードも見せてもらいました。やっぱり弟子入りして、この技術を身に着けたい、そう思っています。」

「なるほど。……ん？」

　今気になることを言ったな。

「弟さん達はもうここにはいないんですか？」

「ええ。彼らには彼らが向かうべき工房がありますので。」

　ニッコリと微笑むリケさん。

「じゃあもし、ここで私が断ったら……」

「女の一人旅で、次の工房を探すことになりますね。」

　いや、それは危ないにも程があるだろう。と言うか見越して言ってるんだろうな……。ここは観念するか。我ながら甘々だとは思うが。

「分かりました。弟子入りを認めます。」

　隣でサーミャが大きくため息をつく。すまんな。でも予想してただろ？

「いいんですか！？」

「はい。ただし、４つあります。」

「は、はい。なんでしょう？」

「１つめ、私は今回のリケさんみたいな、自分を犠牲にする覚悟で、というのは嫌いです。今後はやらないでください。」

「はい。」

　居住まいを正して、頷くリケさん。

「２つめ、うちには十分な部屋がありません。最初はその建築からになります。」

「はい。モリッツ工房でも、家族に子供が生まれたりしたら、部屋の建て増しを工房のみんなでやっていたので、大丈夫です。」

「３つめ、さっきとちょっと被りますが、鍛冶以外にもいろいろ手伝ってもらいます。」

「はい。弟子入りってそう言うことですので。」

「４つめ。」

「はい。」

「敬語はやめにしよう。俺もリケって呼ぶから、リケもエイゾウって呼んでくれ。」

「いえ、そう言うわけにはいきません、親方！」

　それを聞いたサーミャがキョトンとしている。

「お、親方……」

「ええ、私は弟子なのですから、親方と呼んで敬意を表すのが

　サーミャはとうとう堪えきれずに笑いだした。お前覚えとけよ。

　こうして、だいぶ先になるだろうと思っていた俺の弟子が出来たのだった。

## 新しい住人

2018年10月12日

　リケは早速今日、家に来る。また迎えに来るから、明日にしたらどうか、とは言ったのだが、今日のうちに来たいと熱望するので、聞き入れた。あまりボヤボヤしていると日が暮れて危ないので、早く帰れるように、リケにも荷物を纏めてもらう。

　幸い（？）にもいつ場を離れるとも分からないので、いつでもパッと纏めて出立できるようにはしてあったらしく、すぐに２階から降りてきた。しかし……。

「大丈夫か？その荷物。」

「ええ。これでここまで来たんですから。」

「そりゃそうか。」

　リケは自分の半分ほどもある大きさのザックを背負っていたのだ。旅の途中で施したのか、あちこち補修した跡がある。でも確かにリケの言う通り、この荷物でここまで来たんだから歩くのは平気か。

「それじゃ早速行こうか。サーミャがいるとは言っても、日が沈んでしまうと厳しい。」

「分かりました、親方！」

　元気よく答えるリケ。そのうち親方呼びは止めさせよう……。

　俺たち３人は、急ぎ足で街道を行く。俺とサーミャはともかく、リケは結構な量の酒を呑んだし、荷物も大きいのに、足取りはしっかりしている。これがドワーフということなのか……。そして、いつもよりも２０分かそれくらい早く森の入口に着いた。

「ここからは森の中を行くから、はぐれないようにな。」

「はい、親方。」

「万が一はぐれたら、アタシが見つけてやるけど、大声は出すなよ。ヤバいのが来てたら、呼び寄せちまうかも知れないからな。」

　サーミャが注意をする。

「は、はい。わかりました。」

「１時間くらいで一旦休憩にするから、そこまでは頑張ってくれ。」

「はい！」

　そして俺たちは森の中を進み始めた。リケは心配するほどではなかったが、やはり森の中をずっと歩くことには慣れていないらしく、時折木の根や草などにつまづきかけている。それでも俺たちに遅れを取ることはない。最初の休憩まではすんなりついてくることが出来た。

「リケ、足の調子はどうだ？痛むとかあったら言えよ？」

「いえ、大丈夫です。なんともありません。」

「こう言うところでは、無理するのが一番危ないからな。違和感があったらすぐに言ってくれ。」

「はい。分かりました、親方。」

　そして、再び出発して１時間ともう少しほどすると、我が家についた。ギリギリ日が落ちきる前で、我が家は薄明かりの中に佇んでいる。道中、結局リケはコケることも、足が痛いと訴えることもなかった。

「ここが俺達の家、兼、工房だ。」

「わぁ、結構大きいんですね。」

「まぁな。」

　少なくともいきなり現れてビビる程度にはデカいさ。

「足は大丈夫か？」

「はい。平気です！思ってたより歩きやすくて！」

「そうか。とりあえず中に入れ。」

　俺は鍵を使って閂を外し、扉を開けた。

「はい！」

　パタパタと入っていくリケ。その後をサーミャがついていく。

「サーミャ。」

　そこに俺は声をかけた。

「ん？なんだ？」

「ありがとな。」

　俺はサーミャが歩きやすく、しかも、他の生き物に会う可能性が低いルートを選んでいることに気がついていた。

「お、おう……。」

　照れながら慌てた感じで家の中に入るサーミャ。リケが親方って言って笑ったときの仕返しもあるが、こいつ、こう言うところ可愛いよな。

　リケとサーミャに寝室で旅の埃を落とさせ、俺は書斎で落とし、ぱぱっと食事の用意をして、３人で食卓を囲む。

「さて、来てもらったのは良いが、寝る部屋は余ってない。なので、しばらくサーミャとリケの二人で寝室に寝てもらう。」

「え、いやそんな悪いですよ。お二人のところに入ってしまうのは。私は野宿の用意もありますので、そこらの床にでも寝かせていただければ。」

「ん？今でも俺とサーミャは別々に寝てるし、特に変わらんが。」

　実際、今もサーミャは寝室、俺は書斎で寝ていた。何度かサーミャが寝室を譲ると言ってきたのだが、その度に俺が断っていたのだ。ちなみに、今は毛布に包まって寝ているので、思いの外快適に睡眠できている。

「えっ、そうなんですか？ご夫婦なのに？」

「ぶっ！？」

　俺より先に、サーミャが口にしていた樹鹿のスープを吹き出した。

「ばばばばばばバカ！なんてこと言うんだ！アタシとエイゾウはそんなんじゃねぇよ！」

　恐らくは顔を真赤にして、サーミャが猛烈に抗議する。獣人の顔色ってよく分からないんだよな。

「そうなんですか？私と会ったとき、サーミャさんが親方をスッと守ったり、その後もチラチラ目線で会話してたり、親方も言葉の端々でサーミャさんを気遣ってたので、てっきりそうなのかと……」

　不思議そうにするリケ。俺とサーミャが出会ってまだ１ヶ月くらいしか経ってないが、その間ほぼずっと一緒にはいたから、ある程度は以心伝心になっているので、自然と言葉を発さずに意思を伝えがちにはなっている。サーミャが大体汲んでくれるし。しかし、しっかり見てたんだな……ちょっと恥ずかしい。

「まぁ、そう言うわけで、俺とサーミャは、今のところ何でもない。家族のようなものではあるけどな。」

「同じ工房で暮らしてますもんね。」

　ドワーフの価値観だと、同じ工房で暮らすイコール家族か。

「そんな感じだな。」

　ちらっとサーミャの方を伺うと、だいぶ立ち直ってきたのか、縮こまってスープを飲んでいた。いかん、こう言うところか。

「まぁ、そう言うわけなので、女性二人は寝室、男は書斎、と言う部屋割りで行く。これはこの家の持ち主であり、工房の親方である俺の独断で変更は不可とする。」

「はい。」

「へぇい。」

　リケとサーミャが返事をする。多分納得はしてないんだろうけど、ここはコレで押し通すしかない。

「まぁ、それも各々の部屋ができるまでの我慢だ。」

「そう言えば、木材はあるんですか？」

「ああ。十分な量を確保できている……はずだ。そろそろ乾燥しているだろうし、明日からでも取り掛かろう。」

「分かりました！」「おう」

　こうして、我が家には新しい住人が一人増えたのだった。

## 道はまだ半ば

2018年10月13日

　翌日、朝飯を食い終わった俺とリケは、俺が２週間前に材木を積んだところにいた。サーミャは弁当を持って、狩りに出ている。「今日の獲物はできたら樹鹿がいいな……」と言っていたので、期待したい。

「さて、今日からはこの材木を使って、部屋の建て増しをしていく。ただし、間違いなく時間がかなりかかるから、一日の半分を部屋の建て増し、もう半分で鍛冶仕事になる。」

「わかりました。」

「それじゃ、始めるか。」

「はい、親方！」

　元気よく返事をするリケ。それじゃあ、作業に取り掛かろう。

　サーミャに聞いたところ、ここらでは地震も少ないし、雨もそんなには多くないらしい。実際ここに来て暫く経つが、降雨にあっていないしな。気候的には、前の世界のドイツ辺りに近いのだろうか。この森の名前も”黒の森”――ドイツ語で言えば

　それはともかく、基本的にはそんなにジメジメしていないようなので、礎石は置かずに、直に柱を埋める方式で増やす部屋を作る。前の世界の話だが、多湿の日本でも伊勢神宮の式年遷宮が２０年に一度であることを考えれば、ここでなら住む家かどうかと言う違いはあるにせよ、柱そのものは同じかそれ以上にもつはずだ。なので、この方式で問題ないだろうと考えた。

　柱を建てるための穴を、前に作った鍬の柄の部分を、刃と直角ではなく、平行につけるように手直ししたもので掘っていく。この辺りの地面だけなのか、それとも森全体がそうなのかはサーミャに聞き忘れたが、結構固い土をしている。

　この固さは出来の良い鍬と、強化されている筋力がないと結構厳しいと思う。俺にはそれらがあって良かったと、心底転移させてくれたやつに感謝する。

　やがて結構深く掘れたので、そこに柱になる材木の端がかかるようにしたら、材木を縄でくくって引っ張っていく。俺とリケの二人でグイグイ引っ張っていくと、やがて穴の縁に材木の端が引っかかり、材木が立ち上がって、穴にストンと落ちた。

　立って柱になっている材木を俺が抱えて何回かドンドンと叩きつけて、底を固める。その後は材木を俺が抑えて、リケに穴を埋め戻してもらって、とりあえず柱を建てることができた。

　同じ作業を午前中いっぱい繰り返して、２部屋分くらいの柱を建てた。でもこれまだちょっとグラつくから、明日にでも補強入れないとダメだな。

　午後はリケお待ちかねの鍛冶の時間だ。とりあえず俺と並行して、ロングソードを作ってもらうことにするか。一般モデルは在庫ないしな。なので、昼飯の前に型を２つ作っておく。昼飯を食べたら、鉄を溶かして型に鋳込むわけだが、今回は俺は火入れと

　冷めるのを待つ間、今度はナイフの在庫を作る。これは俺がまずやってみて、その後リケにやってもらう。

　教えようにも俺の鍛冶の能力はチートだから、教えようがない。それに今回は一般モデルなので、そんなに力も入れられないから、「見て盗め」方式なのが申し訳ないが、今日のところはこれで学んでもらおう。

　板金を取り出し、火床で熱したら、鎚で叩いて形にするが、あまり力は入れずに形を作る程度にとどめておく。その作業の間、リケは一瞬たりとも見逃すまいとしていた。

「どうだ？得るものはあったか？」

「ええ。親方、やっぱり凄いですね。鉄の声が聞こえてるみたいです。でもこれ、本気じゃないですよね。」

「わかるか？」

「そりゃもちろん。全然力が入ってませんでしたし。なにより、あの見せていただいたロングソードと比べたら一発です。」

　ああそうか、リケは高級モデルを見ているんだった。

「今日見せられるのはこれだな。また明日、もう一つ上を見せる。」

「いいんですか！？」

「ああ。弟子に出し惜しみしても仕方がないだろう。今日のは売り物にするための在庫を作るからこうしただけだ。」

「ありがとうございます！親方！」

　リケは今にも飛びついて来かねない勢いで喜ぶ。

「それじゃ次はリケだ。」

「はい！」

　リケは俺と同じように火床で板金を熱し、鎚で叩く。ドワーフだからだろうか、その姿には力強さがあった。

　やがて板金はナイフの形になった。やっとこで掴んだままのそれを持ち上げ、俺の方を見る。

「どうでしょう？」

　言われて見てみたが、俺の作る一般モデルと比べても遜色はない。ただ、熱して叩いている間に、ほんのわずかだが、バラつきのようなものが出てしまっている。なんと言うか、鉄の組織がそこだけ違うかのような。これが

「いい出来だ。だが、まだまだ上を目指せる。俺は教えるのが下手で、見て盗めとしか言えないが、確実に昨日見せたロングソードは打てるようになる。」

　俺がそう褒めると、リケは

「はい！精進します！」

　と、はつらつとした笑顔で応えるのだった。

## 補給線は大事

2018年10月14日

　ロングソードの方もリケに見せたが、こちらも一般モデルなので、

「素晴らしいですが、やはりあの時見せていただいたものとは違いますね。」

　と言う感想だった。こっちも明日見せることにして、今日はそのための型だけ作っておくことにする。

　型を乾かして、鍛冶場の火を落とした頃、サーミャが戻ってきた。

「ただいま。」

「おう、おかえり。どうだった？」

　俺が聞くと、サーミャはニンマリと笑って、

「任せろ、大物の樹鹿を仕留めたぜ。」

　と誇らしそうに言う。

「おお、やったじゃないか。今日も湖に沈めてあるのか？」

「ああ。血を抜いて冷やさないと、

　住人が一人増えたこともあるし、これから食料は少し多めに確保していっても、問題はなさそうだ。

「それじゃ飯の支度をするから、二人とも体拭いてこい。」

「おう。」

「わかりました。」

　そして夕食。根菜がなくなりつつあるので、麦と肉と豆のスープのような粥のようなものを作る。タンパク質が多めだが、俺もリケもサーミャも体を動かす仕事だからいいだろう。

「明日はリケも一緒に鹿を運びに行くか。」

「いいんですか？」

「人手は多いほうが良いからな。」

「それじゃあ、ご一緒します。」

「うん、頼むな。」

　この辺りはどこかの段階で、二人だけにやってもらうことになるかも知れないし、今のうちに作業に慣れておいてもらうのは、悪いことではない……はずだ。

「そう言えば親方。」

「ん？なんだ？」

「そろそろ、鉄石や炭の備蓄が

「そうなんだよなぁ……」

　そう、流石に今日明日無くなるというものでもないが、そろそろ鉄石（鉄鉱石）や木炭の量を気にする必要が出てきた。今までは貰った資材で回していたから、売上はまるまる儲けになっていたが、ここからは原価がかかってくることになる。なので同じ原価で利率の良い高級モデルも売っていく必要が出てくるだろう。

　しかし、一にも二にも原料がないとどうしようもない。

「作業始めたのは最近だから、仕入先とかがないんだよな。だましだましなら、１ヶ月位はもちそうなんだがな……」

「その間に買える先を見つけないと、と言うことですね。」

「うん。今度街に行った時に、マリウスさんか行商人にでも聞いてみるか……」

「私も

「頼むな。」

　とりあえず出たとこ勝負しかない。ああ、そうだ。

「サーミャ。」

「ん？」

「矢じりの調子はどうだ？」

「絶好調だぜ。樹鹿は大物になると背中あたりの皮が硬くて、

「そうか。あ、そう言えば、心臓は狼にやらないって言ってたよな？どうするんだ？」

「森の土に埋める。」

「埋める？」

「うん｡そうやって森に魂を帰すんだ。そうしたら、森が新しい命にしてくれる。」

「なるほどなぁ。」

　原始的な信仰のようなものか。リケも「ほー」っと感心しているので、獣人か、この森の中だけの風習のようだ。

「サーミャは明日は鹿を捌いたら休みだろ？また手伝うか？」

「おっ、いいのか？」

「別にかまわんよ。」

　そうやってリケの仕事をサーミャが、サーミャの仕事をリケが手伝ってくれるようになると良いなぁ、と思っているのだが、はてさてそうなるだろうか。

　翌日、３人で湖まで向かう。俺は水がめと斧を持参だ。まずは丸太の運搬台を作るが、斧で木を伐る時に、

「お、お、親方！これは！？」

「ん？ああ、この斧か。」

「これは本当に素晴らしいですね！！」

　とリケが大興奮してしまった。昨日のうちに見せとけばよかったか……。

「使ってみるか？」

「いいんですか！？」

「ああ。めちゃくちゃ切れるから気をつけてな。」

「はい！」

　俺が渡した斧をリケが構える。なんか、これはこれでドワーフ感すごいな。

「いきますね！」

　リケは斧を木に向かって打ち付ける。コーン！と気持ちのいい音が響いた。だが、見た目は何も起こってないように見える。

「？」

　リケが不思議そうにしているので、俺は声を掛ける。

「危ないから下がれなー。」

「え？は、はい！」

　リケは俺に言われたとおり下がりながら、俺に訴える。

「音はしたんですけど、手応えが全く無くて……」

　だよな。

「まぁまぁ。もうそろだから。」

「？」

　そうしてリケを振り返らせると、ちょうどその時、リケが斧を叩きつけたのと逆の側に、木がズルッと倒れていく。

「ええーーーーっ！？」

　大声で驚くリケ。サーミャが

「ビビるよな、あれ。アタシも最初見た時、ちょっと気持ち悪かったもん。それなのにエイゾウは平気な顔してるし。」

　と同情している。そうか、前の時、そんな事を考えていたのか……。

「とにかく、こういうふうに切れるので、十分に注意して扱うように。」

「わ、わかりました。」

　おそるおそるという感じのリケだが、さっきのでコツは掴んでいたらしく、４本ほどの木を伐り倒して丸太に加工する。

「なかなか手際がいいな。」

「似たようなことはやってましたからね。」

　増築とかするならそりゃそうか。俺たちは丸太同士を縄でくくってまとめる。

「よーし、それじゃあ引き上げと行くか。」

俺が声を掛けると、サーミャが沈めたところに向かってザブザブと湖に入っていく。結構深そうだな。俺とサーミャの身長なら余裕があるが、リケはギリギリかも知れない。

「リケはちょっとこのへんで待っててくれ。」

「はい。」

そうしてサーミャがいる辺りに向かうと、かなりの大きさの鹿が沈んでいた。体長が２メートル超えてるかも知れない。

「おお、デカいな。」

「だろ。一回手負いにしたけど、それでも逃げるもんで、仕留めるまでに時間かかっちまった。」

「そうだろうなぁ。」

この大きさだと、ここに沈めるのも一苦労したはずだ。

「これは大変だっただろう。えらいぞ。」

「へへっ。」

俺の褒め言葉をサーミャは素直に喜ぶ。

まずはリケのいるところまで、俺とサーミャで鹿を引っ張る。そこからはリケも一緒に引っ張ったので、割とすぐに岸まで引っ張り上げることが出来た。

その後は前と同じく、丸太の運搬台に鹿を引きずりあげて固定したら、水がめに水を汲んでそっちも固定する。これで移動準備が完了したので３人で運搬台を引きずる。

たっぷり３０分ほどかけて、我が家に戻ってくることが出来た。

　さて、ここから解体だ。デカブツだけあって、前回よりも持ち上げるのに苦労した。皮を剥いでしまう作業自体は前とそんなには変わらなかったが、特注モデルのナイフの切れ味に、リケがまた驚いていたくらいだ。

　俺とサーミャは日常的に使ってるから、余計なところを切ったりとかしないが、慣れてないと皮を切ってしまったり、内臓を取り出す時なんかにも、傷つけてはいけない臓器（膀胱や胆嚢、大腸なんかがそうだ）を傷つけてしまいそうだな。

　今日はリケに高級モデルを見せる約束をしているが、ナイフはリケ用に特注モデルでもいいかも知れない。

　鹿は大柄だったにも関わらず、速やかに食肉へ姿を変えていた。肉の量は体格相応に多い。

「これだけあれば、３人とも大食らいでも２週間は余裕で持つな。助かるよ、サーミャ。」

　俺がそう言うと、サーミャは

「そ、そうか？じゃあまた獲ってきてやるよ！」

　と嬉しそうに言うのだった。

## 家族と手伝いと

2018年10月15日

　解体した鹿の肉は今日すぐに食べる分だけ取り除けて、残りは干すのと塩漬けにするのとに分ける。干すのはまた作業場だ。干す作業はリケに手伝ってもらった。

「初めてここに入った時、なんで肉が干してあるのかと思ったら、こう言うことだったんですね。」

「そのうち貯蔵庫でも作って、そっちに干したいけどなぁ。」

　出来れば炭小屋とか燻製小屋なんかも欲しい。俺、一大事があったら炭小屋に隠れるんだ……。

　そうこうしている間に昼になったので、昼飯は麦粥に鹿肉ステーキと

　昼飯が終われば鍛冶仕事である。型は昨日のうちに作ってあるので、鉄を流せば形はできる。魔法で炉に火を入れる時に、リケが言った。

「そう言えば、親方は魔法が使えるんですね。さっきお昼ご飯のときも使ってましたけど。」

「ああ。簡単なやつだけな。」

「鍛冶とかも出来るのにすげぇだろ。エイゾウは家名持ちなんだよ。」

　唐突にサーミャが割り込んで自慢している。いや、お前が自慢することなのか、これ。

「え、そうなのですか？」

「あ、ああ。俺は

「そうだったんですね。謝られることはありません。むしろ納得がいきました。」

　リケの隣でサーミャがドヤ顔をしている。わかったわかった。

「家名はなんとおっしゃるんですか？」

「タンヤだ。」

「タンヤ。それでは私は、リケ・タンヤですね。」

「なんでそ」うなるんだよ！」

　後半はサーミャだ。

「だって親方の家名がタンヤと言うことは、ここはタンヤ工房。ドワーフの慣習では、家名でなく工房名を名乗りますので、弟子入りした私はリケ・タンヤと言うことに。」

　そう言われると、筋は通っているように思える。だが、

「わけありだからな。どうしても必要になったら、工房名はエイゾウってことにしてくれ。」

「分かりました。では、リケ・エイゾウということで。」

　うーん、慣習とは言え、自分の名前を女の子が名乗るのは気恥ずかしいものがあるな。そう思っていると、

「ずるい！」

　突然、サーミャがそう言い出した。

「アタシも同じの名乗る！」

「ええ……」

　何言い出すのこの子。

「アタシもサーミャ・タンヤか、サーミャ・エイゾウって名乗っていいだろ！？」

「うーん。」

　リケはドワーフの慣習として、工房名を家名のように名乗る、と言うのがあるから仕方ないが、獣人にもそう言う慣習があるってサーミャから聞いたことないんだけど……。

　でも、ここで断る理由もない。サーミャは家族だし。そもそも、住まないかと言ったのは俺なのだ。

「まぁ、いいぞ。」

「やった！」

　俺が許可すると、サーミャはやたらはしゃいでいた。

　そうこうしているうちに炉の温度が上がってきたので、

　鉄が溶けたので型に流す。俺のやるほうはサーミャが、リケのやる方はリケが流した。流し終えたら炉の方は火を落としてしまい、火床の方に板金を入れて熱する。今はやってないが、そのうち誰かから個別に発注されたときは、折返し鍛錬とかやりたいな。

　今日はナイフも高級モデル……のつもりだったが、せっかくだから、本気のものを作るか。工程自体は変わらない。いつもより遥かに集中し、丁寧に叩き、焼入れなんかもギリギリの温度を見極め、研ぎも指先の感覚に神経をとがらせる。

　そうして出来たのが本気で作った特注モデルだ。

「すごいです！素晴らしいです！人間でこんなものが作れるなんて！」

　リケは大興奮している。

「このナイフはリケにやるよ。」

「いいんですか！？」

「ああ。

「分かりました。私もここを目指して精進します！」

「おう、頑張れ。」

　しかし、特注モデルでも作業時間は一般モデルの１．５～２倍に収まる。高級モデルなら一般モデルとは、ほぼ誤差レベルの作業時間に収まるだろう。そう考えるとこれからは原価もかかってくるし、リケの一般モデルと俺の高級モデルの二本立てとかでやっていくのが良いのかも知れないな。

　その後はリケがナイフを作る。手際は俺と比べても遜色はない。ただ、確かに若干ではあるが、バラつきのある部分がある。コレだと使っているうちに弱い部分が先に壊れて、結果的に全体としてはその分脆いとか、硬くなりきれてない箇所の切れ味が落ちる、とかそう言う事はあるか。

　俺はチートとインストールで、どこを叩けば均一になるか、また均一のまま、思ったとおりの形に作ることが出来るかは分かる。何気なく叩いていても、そこは間違いなく作業ができる。まさにチートだ。

　それにさっき集中して作業した後によく見てみて気がついたが、特注モデルの場合はなんというか、鉄の組織が輝いているかのように感じる。そりゃ普通、鉄のナイフごときで丸太がスパーンと切れたりはしないからな……。

　何か変化が起きているんだろう、と言うことは分かるが、何が起きているのかはインストールにも該当する知識がなかったので分からない。この辺りは入れといてくれても良かったのに。

　チートで分かったことをリケに教える。リケは真剣に聞いていた。しかし、細かい経験は実際にはリケのほうが遥かに上だから、奇妙な感覚だな。

　次はロングソードだ。バリを取るところまではサーミャに任せる。

「やっぱ楽しいな、これ。」

「そうか。手が空いてるときは頼むな。」

「おう！」

　そうして、後は俺が引き継ぐ。ナイフと違ってこっちは鋳鉄だが、同じように形を整えつつ、鉄を均質化かつ高品質化するように叩く。こっちも高級モデルなので、一般モデルより丁寧に作業をした。

「ああ、これはあの時見たのと同じですね。」

　リケに見せると、こう言う感想が返ってきた。

「そうだな。品質的にはあれと同じはずだ。」

「しかし、さほど手を入れているように見えませんでした。」

「あぁ、斧とかナイフを見てたら分かるか。そのとおり、全力ではないよ。」

　俺がそう答えると、リケは俺の手をじっと見つめていた。作業場に沈黙が流れ、火床の炎のゴウゴウと言う音だけが響く。

「親方は一体……いえ。私の目指すところが分かりました。」

　リケはそう、何かを決意した顔で言うのだった。

## 商談成立

2018年10月16日

　その日はナイフ４本（”特注”１本、”一般”３本）とロングソード２本で終わった。このペースなら、次に街に行くまでには十分な在庫が出来るだろう。

　それから４日ほど、狩りのない日はサーミャに手伝ってもらいつつ、午前中に新しい部屋の普請を進める。立てた柱には筋交いを入れて補強しつつ、梁を通す。床になる部分には根太とその上に床板を張っていくが、この時に廊下も作ってある。新しく家の外壁になる部分が部屋の外側の壁になり、その内側に廊下が伸びていく方式だ。これなら、部屋が増えても採光をしつつ配置ができる。もし部屋がもっと増えたら、廊下が回廊になり、外側に部屋が並んで中庭ができる予定だ。

　もしまかり間違ってそれ以上の数になるなら、建て替えるか、ちゃんとした建築技術を持った職人を呼んで、２階建て以上の家に改造する必要が出てくるだろう。今のところ俺にその予定はないが、サーミャもリケも元々予定などしていなかったのだから、備えあればなんとやらだ。

　この期間中の狩りではサーミャは鳥を４羽ほど捕らえており、その日の夕食は豪華になったが、大物を狙わなかったのは、家造りや鍛冶の手伝いが少し楽しくなってきているのもありそうだ。鳥なら俺たちの手を煩わせることはあまりないからだろう。

　そして、その間の鍛冶の出来上がりと言えば、ナイフが合計で１４本、ロングソードが６本。これだけあれば、売るには十分だな。代わりに野菜や木炭、鉄石を仕入れてこないと。

　次の日、俺達は３人で街に向かう。リケがうちに来てからは初めてだ。途中で休憩を挟み、この日は何事もなく街に着いた。入り口にはマリウス氏がいる。

「おお、あんたらか。」

「ええ。」

「ここに来るのは、大体は週に１回ってとこか。」

「そうですね。」

「うーん……。」

「どうかしたんですか？」

「いやな、何人かにナイフとロングソードを買いたいから、作ったやつを教えてくれって言われてるんだよ。」

「ああ、なるほど。」

　うちは基本的に週に１回は自由市に来るが、その日付は正確ではない。と、なれば前の世界で言うと月曜日に来たからと言って、必ず買えるものでもない、と言うことだ。それで客を逃すのはウチとしても本望ではない。

「そこはなんか考えますよ。うちが直接店を構えるとかはないですけど、代わりにどこかに卸すとか。」

「そうしてくれ。そうすりゃお前さんも儲かるだろうし。」

「ええ。ありがとうございます。」

　俺が頭を下げて感謝を述べると、マリウス氏は手をひらひらと振って返した。

　うーん、たしかにそろそろ高級モデルまでなら、どこかに卸してもいいな。今のところはだいたい完売のペースだが、リケも加わって作る在庫が増えると、そうも言ってられないだろう。

　それに定期的に鉄石やら木炭を買うと言っても、俺たちが来ないことには引き取られないわけで、在庫しておいてもらう場所も必要になるだろう。

　それを考えると、俺達が店を持つのはともかく、店を持つ商人と取引を始めるのは悪くない。そうすれば今までのように丸一日街にいなくても済むし、メリットは多い。今後の方針として考えよう。

　いつもの通りに自由市で販売台を設置していると、何回かロングソードを買ってくれた行商人がやってきた。

「おお、アンタか。今日はまだだぞ。」

「見りゃ分かるよ。俺からアンタに相談があってな。」

「相談？」

「ああ。俺は今度、この街で店を出すことになった。自由市とかじゃない、ちゃんとした店だ。」

「おお、そいつはおめでとう！」

「ありがとうよ。それでな。今まで色んなものを扱って来てて、各地につてがあるから、そう言うのをまとめて売る店にするんだ。壁内はともかく、新市街の方は売り物に制限はないからな。」

「ほほう、楽しそうだ。」

「うん。それで相談というのは、アンタの作る刃物や武器を、その店で扱わせてくれないかと言うことだ。」

「いいのか？」

　さっき悩んでいたことがもう解決してしまうから、願ったり叶ったりではあるんだが、話が出来すぎてや……いや、マリウス氏は知っててあの話を振ってきたな。衛兵だからか、色んな話が流れ込んでくるんだろう。どんどん借りができるな。なんかあったら積極的に手伝ってやろう。

「構わんともさ。アンタのロングソードの品質は、俺がよーく知ってるからな。」

　”よーく”のところを強調するところからして、まさかどっかで使ったのだろうか。ちょっと今は聞く勇気が出ない。

「俺も卸先があればな、とは思っていたところだ。そちらが良いなら、お願いするよ。」

　俺は承諾する。

「おお、ありがとう！そうそう、俺はカミロってんだ。改めてよろしくな。」

　手を差し出すカミロ。俺はその手を取りつつ、

「俺はエイゾウだ。ちょっとわけがあって、”黒の森”に住んでる。卸すタイミングは１週間に一回程度、もしこれより大幅に延びるときは予め言っておく、ってことでいいか？」

「あんなとこに住んでんのか。お前みたいな腕前ならどこでだって……いや、わけありの北方人か。それなら仕方ないのかもな。獣人にドワーフの護衛までついてたら、滅多なこともないだろ。卸すタイミングはそれでいい。」

「助かるよ。それと商談成立ついでに頼みたいんだが。」

「なんだ？」

「うちにある鉄石と炭の残りが減ってきていてな。幾らか融通してくれる先を探してるんだが、知らないか？」

「ああ、そんなことか。じゃあ俺が探して仕入れといてやるよ。」

「いいのか？」

「構わんよ。代金はお前の卸してくれる品の代金から引いておく、ってことでいいかい？」

「ああ、助かる。」

「それじゃ、改めて。」

　俺とカミロは改めてガッチリと握手を交わしたのだった。

## 一つの決断

2018年10月17日

　早速今日から商品をカミロに卸すが、今日のところはナイフ１０本とロングソード４本だけにとどめている。それぞれ１本ずつ高級モデルを入れてあって、その分も貰った。残りのナイフ４本とロングソード２本は、せっかく自由市のスペースを取ったし、自分で売っておきたいので手元に置いておく。

　結局この日はナイフは２本、ロングソードはマリウス氏の同僚さんが１本買っていったのが売上である。多分、見かけて買おうと思ってる感じの人にはもう行き渡って来たんだろうな……。卸したぶんの売上がちょっと心配だが、カミロに頑張ってもらおう。

　自由市で商売している合間に、サーミャとリケをお使いに出して、干した根菜や塩、麦類を買ってきて貰っている。帰りに会えたら礼を言おうかと思ったが、マリウス氏は見かけなかった。今後も１週間に１回は卸しで来ることになるとは思うので、またその時だな。

　帰りはほとんど荷物もないので、行きよりも３０分ほど早く帰り着くことができた。なんだかんだ1日仕事なので疲れはあるし、この日は買ってきたものをちゃんと棚にしまったり、旅の汚れ（日帰りだけど）を落としたりしたら、早めに寝てしまうことにする。

　翌日からは再び建設と鍛冶の日々を続ける。今度から俺は高級モデル、リケは一般モデルの製作にかかる。あとは新しい武器の製作もだ。とは言っても、今度からショートソードも作ると言うだけの話ではある。ナイフ、ショートソード、ロングソードの3つの長さで、それぞれに高級モデルと一般モデルが存在する、と言うのが暫くの間、「エイゾウ工房」のラインナップになる予定だ。ショートソードは長さが違うだけで、作り方はロングソードと同じにしている。扱いやすい長さや用途を考えて選んでくれ、というわけだ。

　そして、2日ほど過ぎて部屋と廊下の壁を張り終わり、鍛冶屋仕事の在庫もいくらかできたあたりで、事件が起きた。サーミャが狩りに出たのだが、その時に大黒熊に出くわしたのである。それを聞いた俺の頭に、サーミャと出会った日の光景が蘇る。

「おい、大丈夫か！？怪我はないか！？」

「お、おう。大丈夫だよ。気がついた時点ですぐ逃げて来たからな。かなり離れてたし撒いたとは思うけど、アイツは鼻がいいから、もしかしたら追って来てるかも知れない。」

「そうか……」

　サーミャが無事なことに一先ずは安心しながら、これからどうすべきか考える。もし追って来た時にどうなるかだ。この辺りをしばらくウロウロしていて、どこかでバッタリ出くわしでもしたら面倒であるのは間違いない。

　一番出くわす確率が高いのは、毎朝水汲みに出る俺だが、サーミャもリケも家の外に出るときはある。その時に出くわしたら……。

　俺は頭を振って、悪い考えを頭から追い出した。これはこちらから何とかするしかないな。ナイフで立ち向かうのは論外だろうし、今から特注モデルのロングソードを用意している暇はない。しかし、作ったきり試してなかった特注モデルのショートスピアを試してみる、ちょうどいい機会と言えなくもないか。

「ちょっと出てくる。」

「え、おい、まさか。」

「居たら片付けてくる。扉は俺が帰ってくるまで、どっちにも閂をかけておけ。」

「だったらアタシも！」

「いや、何かあった時にお前達を守ったまま、退却出来る自信が俺にはない。俺にはちょっと心得がある。サーミャの弓の腕を信用していないわけじゃないが、ここは俺に任せてくれないか。」

「くそっ……絶対帰ってこいよ。」

「親方、私からもお願いします。絶対に帰ってきてくださいね。」

「ああ。せっかく出来た家族なんだ。残してくたばったりはしないさ。」

　俺は作業場に置いていたショートスピアを手に取り、外に出た。言いつけどおり、サーミャたちが閂をかける音を聞いて、森の中へ入っていく。

　今日はやけに森の中が暗いと思っていたら、雨が降り出した。こっちの世界に来てからは初だな……。俺は「こっちに行くとヤバそうなのに出会う

　サーミャに聞いておいた話だと、雨を抜きにしても普通ならとっくに巣に戻っていてもおかしくない。そして、それならば俺のチートの勘はもう危険を感じなくなっているはずだ。それがない、と言うことはまだこの辺りをうろついている。もしかしたら”人”の味を覚えてしまった奴かも知れず、その考えは、前の世界で見た、熊に襲撃された事件を俺に想起させる。そうなると、もうこの森に暮らす獣人を含めた、人間に仇なすものになってしまっている可能性が高い。今日なら雨で俺の匂いもハッキリしないだろうから、俺にもチャンスがある。それなら今日やるしかない。

「腹をくくれ、英造。」

　前の世界では猫一匹救うのに自分の命を差し出したやつが、こっちの世界では熊一頭を殺そうとしている。その皮肉に苦笑が漏れる。俺はゆっくりゆっくりと、

　俺の危険察知や生存本能やサバイバルの知恵、その他すべての感覚が最大音量でこの場所は危険だとアラームを鳴らし始め

　俺は、”ヤツ”を見つけた。

## 消える命、残る命

2018年10月18日

　”大黒熊”とはよく言ったもので、確かにデカかった。前の世界のテレビで見た、デカいヒグマくらいありそうだ。

「サーミャが襲われたのは、こいつではないのかな……。」

　こいつ相手だと革鎧とか関係なしに、一発であの世行きの気しかしない。そいつは俺が近づくのに気がついたから逃げたのだろうってことだし、多分違う個体じゃないかとは思う。この何週間かで一気にデカくなった可能性は捨てきれないが。

「すまんな、お前に恨みがあるとかではないんだが。」

　願わくば、こいつの巣に腹をすかせた子熊がいたりしないことを祈りたい。俺はゆっくりと槍の穂先を熊に向ける。いろんな能力が俺に危険を知らせているが、不思議とワンパン貰って終わり、と言う予感はない。確実に勝てる、とも思えるような状況ではないが、俺にはチートがついてる、と言う感覚が今はありがたい。

　のそり、と熊が立ち上がる。ますますデカい。俺の身長の二倍近くあるように思える。それでも俺は腰を低くして、穂先を向けることを止めない。熊は再び四つん這いになって、俺の方に駆け寄ってくる。こうなったら俺の足では離脱は無理だ。俺かアイツか、どっちかが息絶えなければ終わらない。

　飛びかかってくる熊の腕をギリギリで

　熊はすばやく体勢を変えてこちらに向き直る。だが先に体勢を作っていたのは俺の方だ。すばやく槍を突き出すと、槍は難なく熊の脇腹に突き立つ。

　すばやく槍を抜き取り、飛び退ったがギリギリで熊の前足に追いつかれ、衝撃が胸を襲う。飛び退っていたおかげでなんとか衝撃は最小限で抑えられたが、それでも肺の空気が全部出ていくかと思った。こらえて後ろに転がりながら体勢を立て直す。３０歳に若返ってて良かったぜ。４０だとこうはいかない。今度は逆に前に飛び込みながら、熊の前足を頭上スレスレで躱し、懐に飛び込んだ。一見すると熊に覆いかぶさられているようにも見える。

「俺の勝ちだ。」

　その体勢のまま、槍を熊の体に勢いよく突き刺した。スルスルと抵抗なく刺さっていく。前にサーミャが切れすぎて気持ち悪い、みたいなことを言ってたが、たしかにこの感覚は慣れないな。そのまますぐに深くまで槍が進むと、熊は俺を払い除け、俺は衝撃でゴロゴロと転がり、槍からは手が離れてしまった。

　しかし、今のは手応えがあった。熊は胸に突き立った槍をどうにかしようと

　熊は倒れたまま少しの間暴れていたが、やがてそれも静かになった。何かあったらナイフ一本だが、何もないよりはマシだろうと考え、護身用のナイフを抜いて、ゆっくりゆっくり、そろりそろりと近づいていく。呼吸をしている様子はない。少しためらわれたが、足の先でつついて反応がないことを確かめる。相変わらず動きはない。一応警戒を解かずに、刺さったままの槍を抜く。ゴボリと血が溢れてきて、毛皮と地面を濡らし、緋色が雨と混じって広がりながら地面に溶けていく。その間も全く反応はなかった。

　仕留めたのだ、と確信した瞬間、腰が抜けた。当然だが、あんなギリギリの命のやり取り、前の世界では１回もしたことはない。それに今回は完全にチートとインストールに頼って戦闘をこなした。相当ギリギリだったのは言うまでもない。

　はぁーっと一つ大きなため息をつく。それで人心地ついた。緊張が解けてくると、体中に痛みが走る。当然ふっとばされた時に、無傷ではなかったからだ。擦過傷も打撲も無数にある。改めて体を動かしてみた感じ、骨は折れてないようなのが幸いだ。これで骨が折れていたら、しばらくは建築も鍛冶もできない。今でも最低１日位は休む必要があるだろう。

　まじまじと

「よいしょ。」

　槍と一緒に熊の腕を肩に担ぐ。流石にめちゃくちゃ重い。確かヒグマのオスの小さいのでも、２５０キログラムくらいあるんだっけか。重いが、そのまま引きずっていく。雨が降っているから、血も抜けるだろう。あちこちの怪我もあり、雨で足元も多少不安定になっているせいもあって、思うようには進まない。こうしてる間に別の熊や狼に襲われたら面倒なことにもなるので急ぎたいが、それで熊や狼の気配を見落としたら意味がない。一歩一歩踏みしめるように進んでいく。

　来たときのたっぷり倍の時間をかけて、家まで半分ほどの距離まで戻ってきた。ありがたいことに

「うわぁっ！」

　ナイフを抜く暇もあらばこそ、俺はそのまま地面に押し倒される。押し倒した

　それはサーミャだった。俺の首に手をかけていた時が可愛く思えるほど、完全に怒った目をして、熊の方を向いている。俺は起き上がって声をかけた。

「サーミャ！俺は大丈夫だ！そいつは仕留めてある！」

　その声にビクッとしてこっちを振り向くサーミャ。

「本当か？ホントのホントに平気なのか？」

「ああ、あちこち擦り傷やら打ち身やらで痛みはあるけど、大きな怪我はないよ。」

　それを聞いたサーミャがまた俺に飛びついてくる。多少不意を打たれたが、さっきと違い、俺は受け止めることが出来た。

「良かった……良かったよぉ……アタシ、アタシ……」

　泣きじゃくるサーミャの頭を、俺はずっと撫で続けるのだった。

## 新しい部屋？

2018年10月19日

　また茂みがガサガサと言う。今度はわかった。サーミャは森で暮らしてたし、虎の獣人だから、足音を消して気配を殺すのは得意中の得意だが、彼女は違う。

「リケ。」

「お邪魔でしたかね、親方。」

「いや、そんなことはない。」

　ない……はずだ。サーミャはまだ俺の胸に頭を押し付けてグスグス言っている。獣人のほぼフルパワーで抱きすくめられているので、傷や打ち身が痛むが、それは言わないほうがいいな。

「サーミャさんが言うには親方の戻りがあまりにも遅い、倒してるならとっくに戻ってるはずだ、だそうでして。二人で様子を見に行こうと。」

「外に出たら危ないかも知れんのに……」

「まぁまぁ、

「なるほどな……」

　それでサーミャはまず俺を取り返すために、俺に飛びかかってきたのか。肩に熊の腕だけ乗せて動いてると、パッと見は熊に肩のあたりを咥えられたまま、運ばれているように見えなくもない。”恋する乙女”のところには気づかなかったことにして、心配して来てくれたことに違いないし、礼を言っておこう。

「ありがとうな。」

「いえ、それはサーミャさんに。」

「サーミャもありがとう。」

「うん……」

　サーミャは先程よりは落ち着きを取り戻してきたが、まだ離れようとしないので参ったな。

「とりあえず、家に帰ろう。な？」

　そう言って頭を撫でながら促すと、

「うん……」

　サーミャはようやく離れてくれた。

「それで親方、熊は完全に仕留めたんですか？」

「ああ。

「大黒熊と戦って生き残れる人間って、そうそういないと思うんですけどね……。ましてや一介の鍛冶屋で倒せる人って、ドワーフでもそんなにはいないですよ。」

「そこはほれ、わけありだからな。」

　ニヤッと笑う俺。

「まぁ、そういうことにしておきます。」

　リケはため息をつきながら、とりあえずは流してくれた。

「よし、それじゃあ運ぶか……」

「大丈夫か？怪我してるんじゃないのか？」

　サーミャが気遣ってくれるが、

「いやまぁ、もうあと半分くらいだし、それくらいならいけるいける。」

　と、俺は虚勢を張る。虚勢とは言うものの、多分時間をかければ本当に無事帰れると思うし。

「まぁ、エイゾウがいいんならいいけど。」

　俺とサーミャで熊の腕を片方ずつ担いで引きずる。リケには槍を持たせた。短槍のはずだが、リケの身長だと長めに見える。リケは歩きながら槍の出来を見ている。アレは特注モデルだからな。

「見ながら歩くと危ないぞ。」

　俺は前の世界での、歩きスマホを注意するような事をリケに言う。言っても刃物だからな、槍。本当に危ないからやめような。

　途中で湖の近くまで来たので、サーミャと相談して、そこで明日まで沈めておくことにした。後は小半時も歩けば我が家だ。

　家に帰り着くと、ドッと疲れが襲ってきた。でもまず身体は拭かなきゃな……。フラフラとおぼつかない足取りで台所に向かい、魔法でかまどに火を入れる。

「湯とご飯の用意は私がしておきますから、サーミャさん、親方を寝室へ。」

「おう、わかった。」

　ん、俺が寝室なのか？

「いや、俺は書斎で……」

「良いから怪我人は言うこと聞いとけよ。」

　有無を言わせない感じのサーミャの語気に気圧される。

「お、おう……」

「じゃあ、肩貸してやるからな。行くぞ。」

　そうして俺はサーミャの肩を借りて、寝室に入る。よくよく考えたら、俺の家なのにここを使うのは初めてだな。新しい部屋みたいだ。

　このまま横になると、ベッドが泥だらけになるので、一旦丸椅子に座る。

「いてて……」

　擦過傷の方はそうでもないが、打撲のほうが結構痛みだして来たようで、あちこちが痛い。

「お、おい！」

　サーミャが慌てた様子で声をかけてくる。

「ああ、大丈夫だ。あちこち打ち身があってそれが痛いだけだよ。骨が折れたりとか深い切り傷とかはない。」

「ホントに？」

　うるうるした目で俺の目を覗き込んでくる。

「ああ。」

　そう聞いてサーミャはホッとした顔をする。サーミャって結構心配性なんだな。そう思ったが言葉は飲み込んだ。あんまり言うと拗ねる気がしてならない。

「とりあえず体を拭かなきゃな……。サーミャ、湯が湧いたら教えてくれ。」

「お、おう。ちょっと様子見てくる。」

　部屋を出ていくサーミャ。久方ぶりの静寂がやってきて、身体が猛烈に休息を欲し始める。これは身体が安全を認識して休息を最優先にしはじめているな。これはまずいな……。このままだ……と……かく……じ……つ……に……寝……

　なにかフワフワとした感覚を頭に感じて、俺は

　慌てて身体を起こすと、ビックリした顔のサーミャがいて、俺もビックリした。

「お、おはよう。」

　なんと言っていいか分からず、そんなことを言ってしまう。サーミャはビックリした顔のまま、

「お、おう。おはよう。」

　と返してくれた。

「俺、寝てたのか。」

「あ、ああ。ぐっすり。身体を拭かないと悪い風が身体に入る、ってリケが言うんで、二人で湯で拭いてベッドに寝かせたんだよ。下着は脱がせてないけど。」

「そうか……すまないな。」

「別に気にすることじゃないよ。」

　俺は再びベッドに横になる。ちょうどそこにリケが入ってきた。

「あら、親方。起きたんですね。」

「ああ。リケもすまないな。」

「いえいえ、いいんですよ。そうそう、サーミャが”エイゾウがー！”って……」

「わーーーー！！！」

　突然サーミャが大声を出す。ほとんど虎の咆哮だ。

「ばばばばバカ！それは言うなよ！！」

「あら。別にいいと思うのに。照れ屋さんね。」

　焦るサーミャを軽くあしらうリケ。この辺はリケが何枚か

「二人とも、さん付けで呼ぶのはやめたのか。」

「ええ。そうしましょう、って親方を寝かせる時にサーミャと話し合ったんです。ね？」

「おう。一緒に暮らしてるんだから、そっちのほうが良いと思って。」

「そうか、いいことだ。」

　俺は心の底からそう思う。サーミャの言う通り、これからいつまでになるかはともかく、おそらくは１ヶ月程度ではなく、もっと長く一緒に暮らすのだから、お互いにやりやすい形のほうが良い。

「リケも俺のことは親方じゃなくて良いんだぞ。」

　しれっと俺も混ぜてみたが。

「それはダメですよ、親方。」

　あっけなく撃墜されてしまったのだった。

## 今度は本当に新しい部屋

2018年10月20日

　バタバタしたが、この日と翌日は鍛冶仕事を休みにし、翌日、熊を湖に取りに行く。重い熊を引き上げ、

　その後はいつもどおり運搬台をこしらえて家まで輸送する。熊の腕を持って運搬したときはリケに手伝わせられなかったが、運搬台があれば一緒に運べるので、手伝ってもらう。

　鹿よりもやや時間がかかって家についた。その後の捌く工程そのものは、ほとんど鹿と変わらない。無論、皮の固さや骨格、内臓の違いなどはあるが、作業しないといけない内容はほぼ同じだ。本来ならば作業しにくさとかが段違いなのだろうけど、特注モデルの切れ味のナイフ3本があれば、どうということは無かった。

　手の部分は珍味だとも聞いたことがあるが、処理がやたらめんどくさいらしいので、今回は食肉にするのをやめておいた。次回があるかどうかはわからないが、またあの死闘を繰り広げるつもりもないので、基本的には口にしない食材ということになるな。

　いつもより大量の肉が取れてしまったので、昼飯は豪勢にした。熊の肉は処理が悪かったのか、多少味は悪かったが、思ったよりは全然美味かった。残りは保存が効くように干したり塩漬けにしたりするが、しばらくはサーミャが樹鹿を獲らなくてもいいくらいの量がある。腐らせたらもったいない。

　昼飯を食い終わったら俺は休み、リケは鍛冶、サーミャは部屋増築の壁張りの残りをする。この日はそれで終わった。

　翌日、今日の作業を一通り終えたら、明日は街に行って卸す日である。昨日休んだぶんがあるので、水汲みと部屋の増築はリケとサーミャにやってもらうことにして、俺は朝イチから鍛冶に集中する。ナイフ、ショートソード、ロングソードの高級モデルをそれぞれ3本ずつが目標だ。

　ショートソードとロングソードの型を作って、鉄を流してバリをとり、一般モデルよりは少し集中して、鎚を振るって形を整える。型を乾燥させたり、鉄が冷めるまで待つ間に、ナイフの作業もやってある。

　最後にまとめて焼入れをして、研いで完成させた。ここまででギリギリ一日かかる。おそらくこれは

「あんまり集中してて、昼メシの声もかけていいか迷った。」

　とはサーミャの言だ。

　すべての作業を終えたので、作業場の火を落として片付けていると、サーミャがやってきた。

「今日はもう終わりか？」

「ああ。なんとか思ってた数出来たよ。」

「そうか。じゃあ、ちょっと来てくれ。」

「おう。」

　ウキウキした様子で俺を先導するサーミャ。俺はのそのそとその後をついて行く。

　一緒に居間に戻ってくると、なんとなしに違和感がある。ないはずのものがある、と言うよりは、あるはずのものがない。

「ああ。」

　居間の一角、寝室の前に開口部が出来ている。違和感の正体はあれだ。

「部屋が出来たのか？」

「おう、2部屋な。廊下もつながった。」

「おお、凄いな。」

「今日、メシのとき以外はずっとやってたからなぁ。」

　サーミャの後について、廊下を覗くと、そこにリケがいた。

「おう、リケ、ご苦労だったな。」

「いえいえ、サーミャが頑張ったからですよ。」

　最近の作業で結構完成しつつあったとは言え、今日できるとは思ってなかったな。

　廊下があって、そこに部屋の入口がある。ちゃんと傾斜のある屋根もかかっていた。

　ただ、扉は間に合ってないし、寝具や家具もないので、本当に「部屋ができただけ」と言う状態ではある。それでも逆に考えれば、それらを用意できれば完了ではある。

　効率よく作れば2～3週間ほどで揃うだろう。

「先に扉と寝具と家具を作って入れなきゃなぁ。」

「え、部屋に扉をつけるんですか？」

「ん？」

　リケになんか凄いことを聞かれた気がする。

「そりゃあ、つけるだろ。女の子の部屋だぞ。」

「いや、普通お客さんとか、家長と奥さんの部屋でもない限りはつけないですよ。」

　あー。なるほどね。そう言うことか。

「まぁ、そうかも知れんが、一介の鍛冶屋の家に書斎と寝室がちゃんとある、って時点で色々おかしいんだ。ここは俺の要望ってことで、弟子とか家族の部屋にもつけることにさせてくれ。」

「親方が良いんなら、私は別に構いませんけど。サーミャは？」

「アタシも構わないぜ。そもそも家に住んだことないからな、アタシ。」

「ああ、そうでしたね……」

「じゃあ、そう言うことで。簡単でも良いから、蝶番作んないとなぁ。」

　”チート”で作れば割と楽にできる気はするが、武器や農具とは違い、細かい作業にはなることは間違いない。どこまで”チート”で対応できるか試すには、ちょうどいいようにも思えるな。その意味でも扉はぜひともつけておきたい。

　熊肉の夕食を終えて、寝る時間になった。今日からはまた俺は書斎、女子２人は寝室だ。新しく出来た部屋はまだ使えないからな。女性陣は今日も俺が寝室、と言うことにしたかったようだが、もう痛みはかなり引いてるし、そろそろ日常に戻す必要もあるから、扉に引き続いてわがままを言わせてもらった。

　さあ、明日はまた街に出る日だ。今までと違って、カミロに卸すだけではあるが、売れた代金と、カミロが仕入れに成功していれば、鉄石、それに木炭の引取もある。

俺は遠足前の小学生のように、ワクワクしながら眠りについた。

## 初の卸売

2018年10月21日

　翌朝、水くみをこなした俺は、サーミャ、リケと一緒に街へ行く準備をしていた。

「今日は武器を卸して、鉄石と炭を仕入れたら、あとは塩くらいですぐ帰る予定だが、なんかしておきたいこととかあるか？」

「いえ、私は特には。」

「アタシもないよ。」

「そうか。じゃあまっすぐ帰ることになるかな……。その分は作業時間にあてよう。」

「わかりました。」

「おう。」

　在庫の輸送は俺とリケで分担する。パッと見には小さい女の子のリケだが、ドワーフだけあって筋力はめちゃくちゃある。サーミャも虎の獣人で力はあるのだが、護衛だから、あまり余計な荷物は持たせたくないのだ。

　３人で”黒い森”の中を行く。今日も何事もない、かと思っていたが、２回ほどサーミャが森狼の気配を感じ取って移動を中止したり、ついでに休憩をとったりした。

「俺が熊を始末しちゃったからかねぇ。」

「それもなくはないけど、アイツらそろそろ子供生まれる時期なんだよ。」

「母親に食わせる分か？」

「そう。後一月もしたら、子狼連れてるところが見られるかもな。かわいいぞ。あんまり近づくとダメだが、遠くから見てるだけの分にはなんもしてこない。」

「聞いてると、この森の狼はずいぶん大人しいのね。」

　リケが疑問を口にする。それは俺も思っていた。人間がいたら襲いかかってくるのかと思っていたのに、積極的にちょっかいをかけなければ、この森の狼は何かをしてくることはないようなのだ。

「ああ、ここは何だかんだ言って、樹鹿だの草兎だの、獲物が多いから、そっちを狩ればいい。木が多いから逃げ場所を限定しやすいし、狼たちにとってはそんなに難しい狩りじゃないな。それと……」

「それと？」

「アタシとエイゾウは強いからだよ。リケはどうかな。ともかく街にいるような普通の人間は襲われる。簡単な話、一番弱い獲物だからな。前に人の匂いがするやつは襲われにくい、って言ったけど、あれは森の近くに住んでるようなやつの場合さ。」

「なるほど。私はあまり一人では出歩かないほうが良さそう。」

「そうだなぁ。出るときはアタシかエイゾウを連れてったほうが良いな。」

　見た目に反して筋力も度胸もあるリケではあるが、別に武の腕が立つ、と言うわけではない。森狼に襲われるリスクを考えたら、俺かサーミャを連れて行ってくれたほうが良いだろう。

「それにしても、身重の母親の分の獲物も獲るって、森狼はえらく家族思いなんだな。」

　今度は俺の思ったことだ。

「頭もいいからなぁ。

「ホントにそうなのか？」

「まさか。でもそう思わせるくらいに、頭がいいのは確かだな。平地にいる狼とは比べもんにならない、ってのは旅してきたやつに聞いたことがある。」

「へえ。」

　楽に獲物が狩れるのに知恵を発達させてきたのか……。いや、楽だからこそ、知恵を発達させる余裕ができたのか？失敗率がそれなりに上がっても大丈夫、と言う試行錯誤が可能な余地が無いと、そもそも試したり出来ないからな。異世界はこう言うところが面白い。

　そんな会話を交わしながら、森の中を進んでいく。結局この後、街道から街まで特に何も起きなかった。街道でも週に１回程度しか行き来しないとは言え、野盗のたぐいに遭遇したことがない。サーミャやリケを除いたとしても、街で獣人や亜人が冷遇されている様子もないし、この世界は思いの外進んだ世界なのかもな……。もしかしたら壁内に入ると、様子が違っている可能性もあるけど、それをわざわざ確認するつもりもない。

　今日の衛兵はマリウス氏ではなかったが、一緒にロングソードを買っていってくれた同僚氏だ。俺のロングソードの出来を

　聞いていたカミロの店に行ってみると、思っていたよりデカい店だった。広さもだが、２階がある。

「大きいですねぇ……」

「うん。俺もちょっとビックリしてる。」

　こんな

「こうやって見ると売りもの、って感じがするな。」

　サーミャが感慨深げに言う。

「そうだなぁ。自由市だと販売台に置いてるだけ、ってなりがちだからな。」

　それに俺にはディスプレイのセンスもないからな。そんな俺でも、結構良い扱いをされているな、と感じるディスプレイだった。

　そうやってあれこれ見ていると、カミロがやってきた。

「おう、来てくれたか。とりあえず、ついてきてくれ。奥で話そう。」

「わかった。」

　俺達はゾロゾロとカミロの後をついていく。２階に上がってすぐくらいの部屋に通された。商談とか会議のためにしつらえた部屋なのだろう、それなりの広さがあり、大きな机と椅子が並べてあった。カミロは俺達に着席を促すと、対面側に自分も座った。全員が席についたので、俺から切り出す。

「今日はナイフとロングソード、それとショートソードも持ってきた。どれくらい引き取る？」

「ん？ああ、そっちは持ってきたやつ全部でいいよ。実際、結構売れてるんだ。」

「そうなのか。なら良かった。にしてもデカい店だな。名が通った行商人だったのか。」

「ああ、まぁそれなりには。あと、うちは一般市民にも旅人にも、同業にも分け隔てなく売るから、どうしても品数は増えるし、その分、店も大きくなるのさ。」

　なんか前の世界にも似た感じの店があったな。この世界で画期的ならぜひ繁盛してほしい。俺の武器がその一助になってくれると嬉しいのだが。

「なるほどなぁ。」

「それよりも、だ。」

　カミロが真剣な顔つきをしている。鉄石が仕入れられなかったとかだろうか。

「ん？なんだ？鉄石が入ってないなら、また来るだけだから別に構わないぞ？」

「いや、そうじゃない。実はな、お前に特注で一本剣を打って欲しい、と言う依頼が来てるんだ。」

「特注か……」

　俺の打つ特注モデルの性能を考えると、おいそれと打ってやるわけにもいかないが、しかし、それを言い続けていたのでは、いつまで経っても特注モデルは身内専用ということになってしまうからな。どこかで誰かに提供する必要はある。

　俺が考えこんでいるのを見て、カミロが言う。

「まぁ、お前がダメだと言うなら、俺の方から断っておく。」

「これは、と言う人に売るのは、やぶさかじゃないんだがな……」

「そうなのか。じゃあ、多分大丈夫だな。剣の腕前も、人格も保証するよ。」

「ふむ……」

　しかし、自分でも見極めたい。とは言え、こう言う事があるたびに会いに来るのもなぁ……。あ、そうだ。

「じゃあ、俺の工房まで一人で来られたら、打ってやるってことでどうだ？」

「いいのか？」

「ああ、お前には場所を教えておくよ。」

　森狼がうろつく”黒の森”を、うちの工房（兼自宅）まで来られるなら、それなりに腕も立つと判断していいだろう。そう言うやつになら、打ってもいい。

「じゃあ、そう言っておく。」

「今後もカミロがいいと思ったやつには、同じ条件で教えていいからな。」

「わかった。」

「サーミャもリケも、すまんがそうさせてくれ。」

「親方の言うことに異論なんてないです。」

「アタシも右に同じ。」

「すまんな、ありがとう。」

　そして、俺はカミロに家の場所を伝え、今回の取引に移るのだった。

## お持ち帰り

2018年10月22日

「それで、鉄石と炭は手に入ったのか？」

　俺はカミロに尋ねる。

「もちろんだ。結構な量が入った。」

　カミロはこともなげに答えた。たしかこの辺りはそんなに大きな山は無かったはずだから、炭はともかく、鉄鉱石の方はどこか遠方から仕入れてきているに違いない。結構な値になるのではなかろうか。

「じゃあ、今回のうちの工房の分だ。」

　今日持ってきた品を並べる。カミロは一つずつ品質を確かめる。

「”いいやつ”はこの分か。他は”普通の”だな？」

「ああ。今回”普通の”は、ほとんどリケの制作だが、うちの工房として恥ずかしくない出来なのは保証する。」

　俺がそう言うと、リケがバッとこっちを見るのがわかった。いや、別に卒業じゃないぞ。お前は高級モデルが作れるんだから、そこまでは頑張ってもらうさ。

「なるほど。それじゃあさっき言ったとおり、全部うちで買い取るよ。それで、鉄石と炭なんだが、見てもらったほうが早いな。ついてきてくれ。」

　カミロは下にいた店員とは別の人を呼んで、俺達が卸した武器のうち、ショートソードだけ店頭に出す指示を出すと、ここに来る時に上がって来たのとは別の階段に誘導する。

　その階段を降りると、倉庫になっていた。かなり広い。この店の大きさの幾らかはこの倉庫のせいでもあるようだ。その倉庫に所狭しと商品が並んでいる。これだけの物を集められるコネと資金力があれば、もっと大都市でいい店をかまえられそうなものだが、その辺は”わけあり”なのだろう。聞くのはやめておいた。

「で、ここにあるのが鉄石と炭だ。」

「本当に結構な量だな……」

　カミロが言ったとおり、結構な量の鉄鉱石と木炭が積んであった。これだと俺とリケが全力で完全に

「毎回この量仕入れられる、とはいかんがな。でも概ねこの量を毎週仕入れることは出来る。」

「この量ならだいぶ減っても問題ないぞ。むしろ大分余るくらいだ。余ったらうちの方でも備蓄していくから、この量でも困ることはないと思うし。」

「そうか、なら良かった。それで値段だがな……」

　カミロが伝えてきたのは、この量で今日卸した商品の1/4ほどだった。逆に言えば、今日卸した分の1/4程度の量を毎週卸せば、うちは今後少なくとも鉄については困ることがない。

「ずいぶんと安くないか？ちゃんと儲けてもらっていいんだぞ。」

「大丈夫だよ。これでも儲けは結構出てるんだ。」

「そうなのか。じゃあ遠慮なくその値段でいただくよ。」

「基本的にはこの金額でいいのか？」

「ああ。大きく変わるときは都度相談てことにはなるが。」

「わかった。」

　改めて商談成立だ。俺とカミロは握手を交わす。

「しかし、流石にこの量は今日運べないな。」

「そりゃそうだろ。」

「荷車の扱いは……ないよな。」

「ない、と言いたいが、実はうちで使ってない荷車が一台ある。使ってはいないが、まだ十分現役で使えるし、手直しすればしばらくは大丈夫ってやつだ。薪にしちまおうかと思っていたが、お前さん達がいつも荷車使ってないのを見て、譲る機会がありそうなんで置いといたんだ。」

「持って帰る手段ができたら、今日は十分だよ。」

「よし、じゃあ譲ってやろう。」

「いくらだ？」

「タダでいい。」

「タダ？いいのか？」

「どうせ使ってないし、”お得意様”には優しくしとくんだよ。」

「ううむ……」

　カミロの言葉に嘘はなさそうだ。わけありで

「なんでそんなに良くしてくれるんだ？」

　だが、俺は確認してみる。嘘をついていたとして、こんな質問でボロが出るとも思えないが、単純に俺が納得できるかどうかと言う話だ。

「正直な話をするとだ、先がありそうな仕入先だからだな。良い品質のものをそれなりの値段で卸してくれるやつ、ってのは重要なんだよ。そう言うところには恩を売っておくに限る。」

　なるほど。完全に好意だけ、と言うわけでもなさそうだ。俺はこの言葉でカミロを信用することにした。

「じゃあ、すまんが、ありがたく頂戴しておくよ。」

「おう、持ってけ。」

「悪いついでに塩とワインも貰えるか。その代金は卸した商品の代金から引いてくれていい。」

「わかった。言っておく。それじゃあ積み込みと代金の計算をしておくから、小半時ほど時間を潰してきてくれ。」

「わかった。それじゃ、よろしくな。」

「おう。」

　こうして、カミロのところを出て、時間を潰すことになった。

「しかし、時間を潰せと言われても、俺は今までずっと自由市にいたから、あまりよく分からんな。」

　俺はそうサーミャとリケに漏らす。

「そうなんですか？」

「塩だの肉だのの買い出しは、ずっとアタシが行ってたからな。エイゾウはずっと自由市で店番してたし。」

「店といえば、リケと話をした宿屋くらいしか、ろくに知らん。」

「じゃあ、今日はどこに何があるか見て回りましょうか。」

　ガヤガヤと活気のある新市街をウロウロする。それなりの店舗を構えている区画や、自由市ほど粗末でも乱雑でもないが、ほとんど屋台のような店舗が立ち並んでいる区画があって、色々な商品を扱っていた。ただ、時々は複数ジャンルの商品を扱っている店もあるが、ほとんどは単一だ。これで商売が回っている、と言うのは自由市なんかのおかげで人が多いせいだろうか。そもそも店の数が多い。俺がその辺の疑問を口にすると、

「この街は”黒の森”を迂回するときの中継点ですからね。南から来た人が東に回るにせよ、西に回るにせよ、この街を通ることになるはずです。親方たちは普通に”黒の森”を行き来できるから実感ないでしょうけど。」

　リケが答えてくれた。なるほど、確かに普通の人は越えられないなら、回り込む必要がある。中継点が軍事的にも文化的にも要衝なのは、前の世界でも変わらない。

　そして、サーミャは完全に分かってない様子だ。そこで住んでる上に移動もしてたら実感ないわな。俺も似たようなものではあったが。

　そうして出来た店をいろいろと見て回っているといい時間になったので、カミロの店に戻ると、荷車に鉄鉱石と木炭、塩の袋とワインの樽が積まれていた。荷車は大八車のように平たいのではなく、後ろを除く三方に軽トラの荷台のような低い柵がついていて、後ろだけ柵がない。基本的にはこの後ろから積み下ろしをするようだ。馬がいない荷馬車、と言うのが一番イメージに近いかも知れない。見たところ、まだ積載量には若干の余裕があるように見える。

「おう、戻ってきたか。」

　今度はカミロが直接出迎えてくれた。

「それじゃ、これが今回の金な。」

　と袋に詰まった金を差し出してきた。一応中を改めてみたが、合っているようだ。

「確かに。じゃあ、また来週に。」

「おう、待ってるよ。」

　こうして、荷車と言う輸送手段を獲得して、俺達は帰路に着くのだった。

## 来訪者

2018年10月23日

　荷物が積み込まれた荷車を俺とリケで引っ張る。サーミャは護衛なので引っ張らないが、荷車に乗ったりはせずに一緒に徒歩で帰る。重いには重いけど、車輪のおかげで大して速度を落とさずに行けそうだ。

　森で車輪がスタックしないかが気になるが、前に土を掘ったときの感じではフカフカでは無かったし、多分大丈夫だろう。最悪の場合はサーミャに押してもらったりする必要があるかも知れないが。

　街道でも３人連れがゾロゾロ歩いているだけ、よりも確実に何かを持っているのがわかる荷車のほうが襲われる確率は高くなるとは思う。今までサーミャが何も反応してなかったので、そもそもいなかったのだとは思うが、いたときのリスクは上がっているのは間違いない。ただこっちは特注モデルの弓で武装した虎の獣人であるサーミャと、及ばずとは言え俺もいるから、ちょっとのことではなんともないとは思うが、危険はないに越したことはない。

　その辺をサーミャにも話して、帰りはいつもよりも注意してもらうことにする。結局の所、この日は街道では何も起きなかったが、備えあれば憂いなしだ。今後は帰り道は注意して帰ろう。行きはよいよい帰りは怖い、である。

　森に入った後も、予想していた通り、車輪が大きく沈み込んでしまってスタックするということはなかった。少し心配していた「木と木の間を荷車で通れるのか？」については、”黒の森”でなら大丈夫である。そもそも荷車もそんなに幅があるわけじゃないからな。

　とは言え、それなりに整備されている街道と同じかより楽、と言うことは流石になく、やや苦労しながらの移動にはなった。

「多少は道を整備したほうが良いのかな。」

「でも親方、そうしてしまうと、うちに一人で来るって条件がやたら楽になりますよ。」

「それもそうか。」

　あれは一応、うちに来るだけの実力者には特注を受け付けると言う話ではあるので、道を作って「道沿いに来れば来られるよ」だとあんまり意味がない。それじゃ豆腐屋にお使いに行くようなもんだ。ちょっと失敗したかな。

　とりあえず大きな問題は何もなく、家までたどり着くことが出来た。毎回こうだとありがたいんだが、時々は問題も起きることだろう。その時に最小限で抑えられるようにしなくちゃな……。

　荷物を荷車から下ろして、家と作業場に運び込む。塩とワインはともかく、鉄石と炭を運び込むのは、３人でやってもそこそこ時間がかかった。なんだかんだでほとんど一日仕事だな。これは例えば、荷車を傾けて搬入できるような何かを考えたいなぁ。

　この日は麦粥と干してあった熊肉と根菜を買ってきたワイン（と水）で煮込んだもので、ちょっと豪勢な夕食だ。臭みが抜けていい感じになってて、サーミャとリケにも好評だったので、時々やるか。

　明けて翌日、俺とリケは武器を作る原料となる板金づくりをするが、サーミャは「鳥か兎か獲ってくる」と言って出ていった。鹿じゃないのは、多分明日また手伝いする気なんだろう。肉の在庫も十分だしな。

　武器を作る前に、仕入れた鉄石の品質を元あった在庫と見比べる。インストールとチートを使っても、やや元あったほうがいいようには見えるが、そんなに大きく違うようには見えない。

「どうだ？リケ。俺にはそんなに変わらんように見えるが。」

　俺は見ていた２つをリケに渡した。

「そうですね。親方の言う通り、ほぼ同じ品質だと思います。誰が目利きしたのかわかりませんが、なかなか良い”目”をしてますね。」

「じゃあ、仕入れた方から使うか。」

「はい。わかりました、親方。」

　俺は魔法で動く製鋼炉に魔法で火を入れると、炭と細かく砕いた鉄石を入れる。別の魔法で風を送りつつ、しばらく待って同じ工程を数度繰り返せば、鉄－－正確には鋼ができる。普通のレン炉や

「よし、やるか。」

「はい、親方。」

　取り出しつつ、ある程度の大きさで固めておいた鉄を再び火床で熱し、取り出す。金床で俺とリケで叩いて板状にして、板金を作る。そこそこ手のかかる作業だ。

　最初の一枚が出来たので、俺とリケで品定めをする。

「悪くないな。」

「そうですね。むしろ置いてあるものよりも、良いように見えます。」

「そうか。リケが言うなら間違いないな。続けよう。」

「はい！」

　結局、板金づくりは夕方になってサーミャが帰ってくるまで続いた。

「ただいま。」

「おう、おかえり。リケ、キリもいいし今日は

「分かりました。親方。」

　ぱぱっと仕事場を片付けて、サーミャのところへ行く。

「今日は何を獲ったんだ？」

「今日はウサギだよ。」

　例の耳のところが草みたいになってるウサギだ。３羽も確保しているが、大きさはそんなに大きいわけではないので、捌くのには時間はかからなかった。肉の量もちょうど３人分くらいだ。そんなわけで昨日に引き続き、今日の夕食は豪勢になった。無発酵パンに根菜と鹿の塩漬け肉のスープ（俺とリケの昼飯の残り）、それにウサギのステーキワインソースである。

「おお、ウサギって美味いな！」

「だろ。獲るのが難しいんだけど、今日は運が良かったな。」

「このウサギの味はいいですね。」

　思いの外美味かったウサギに舌鼓を打ちつつ、この日を終えた。

　次の日、朝の水くみと朝食を終えて、ショートソードとロングソードの制作に取り掛かかっていると、手伝っていたサーミャが突然ピクリと手を止めた。

「どうした？」

　俺はサーミャに声をかける。サーミャがやや緊張して、

「誰か来た。」

　と工房の外に通じる方の扉を見た瞬間、その扉がドンドンドン！と叩かれる。

「カミロに言われてきた！剣を打っていただきたい！」

　そんな声を伴いながら。

　俺はどっこいせと立ち上がり、扉を開けてやるべく、そっちに向かっていった。

## オーダーメイド

2018年10月24日

「はいはい、今開けますよ。」

　俺は扉に向かって声をかける。すると扉を叩く音が止んだ。大きくため息を付きつつ、

　ゆっくりと扉を開けると、旅装の女性がそこに立っていた。赤毛の髪を短くし、体は要所を金属（多分鋼だろう）で補強した傷だらけの革鎧で覆われている。腰には道具袋と、ショートソードを２本下げ、マントを羽織った背中には色々な道具が入っているのだろう背嚢を背負っている。背はずいぶんと高い。180cmくらいあるかも知れない。パッチリとした目の顔には刀傷があった。

「いらっしゃい。」

　多少面食らいながら俺が声をかけると、女性は破顔一笑して名乗る。

「アンタがカミロのところの武器を作ってる職人か？アタイはヘレンってんだ。」

「その通り。俺はこんなとこで鍛冶屋やって、武器を作ってるエイゾウだ。とりあえず入ってくれ。」

「ああ。ありがとう。」

　作業場にあるスペースに案内し、置いてあるテーブルに向かい合わせに腰を下ろす。サーミャは俺の後ろでずっと警戒を解いてない。多分大丈夫だろうとは思うが、俺はそのままにしておいた。

「とりあえず、ここまで一人で来たのは間違いないな？」

「ああ。」

　頷くヘレン。俺はチラッとサーミャを見る。サーミャも頷いた。俺も周囲に気配は感じない。

「途中、狼とかには襲われなかったか？」

「いや？兎みたいなのは見かけた。アレかわいいな。」

　うむ。確かにかわいいが、俺達昨日食ったな。おそらく狼たちはヘレンが強いと判断したのだろう。ヘレンは続ける。

「で、ここを見つけるのが大変だったけど、煙が見えたんで来れたんだよ。」

　ああ、鉄を吹いたときの煙を辿ったのか。それでもここまで来るのは

「じゃあ、約束通り剣を打つが、どう言うのがいいんだ？」

　俺がそう言うと、ヘレンは腰の剣を両方鞘ごと外してテーブルの上に置いた。

「アタイは今傭兵をしている。そこで使ってる得物がこの剣なんだけど、もっと頑丈なやつが欲しいんだ。戦場だとろくに手入れできないことも多いし、その状態でもちゃんと”使える”かどうかが命を分ける。」

「なるほど。」

　女性で傭兵かぁ。色々苦労も多いんだろうな。どうしても顔の刀傷が一番目立つが、あちこちに大小様々な傷がついている。

「……この剣を見てもいいかい？」

「ああ。構わないよ。」

　俺は2本の剣を両方共鞘から抜いて見てみた。まだ全然実用に耐えうる状態だし、いい作りをしている。ただ、片方が若干傷みが進んでいるようだ。

「いい剣だ。打ったやつは良い腕してるよ。弟子に見せるのは？」

「別に構わないよ。」

　俺はリケの方を見た。リケは近寄ってきて、2本あるうちの片方を見る。

「たしかに良い腕です。これ以上の物が欲しいとなると、確かに親方に頼むしかないかも知れませんね。少なくとも私は親方しか思い浮かびません。」

「ドワーフに言われるってことは、やっぱりアタイの見込んだ通りの腕ってことだね！」

　リケの感想に乗っかって、ヘレンが言う。声がデカい。うちは周りに何もないからどんだけ大声を出そうが関係ないが、耳鳴りがするかと思うくらいの大声だ。戦場とかだと声が通らないのが致命的だったりするんだろうなぁ、とは思うがもうちょい遠慮してほしいもんである。

「そんで、どういう使い方をするんだ？」

「どうって？」

「いや、実戦でどう振るうのかを知りたい。打つときの参考にする。」

「そうだなぁ……言葉では難しいから、実際に見せてもいいかい？」

「ああ。」

　ヘレンが先に外に出て、俺とサーミャ、リケが続く。作業場の扉を出た先は下生えもそんなになく、そこそこの広さになっているので、そこで構えたり、剣を振るったりしてもらう。

　ヘレンは二刀流だった。とは言っても、両方を同じように扱うと言うよりは、片方で牽制してもう片方で斬りつける、みたいな動きだ。驚くほど動きが速い。あれだと牽制に使ってる方が早めにダメになるだろう。痛みの差があんまりないのは、ローテーションしてるとかなんだろう。

「うーん……」

　すごい速度で剣を振るっていたヘレンが動きを止めた。

「どうした？」

「相手がいないといまいち……。そうだ、アンタ相手してくれよ。」

「俺か？」

「そう。」

「サーミャ……こっちの獣人の子じゃダメなのか？」

「アンタのほうが強そうだから。」

「ううむ。」

　どうしよう。チートがあるから、多分それなりには相手できるとは思うが……。まぁいいか。見せてもらうだけだし、そんなに本気で打ち込んで来たりはしないだろう。それに、直に受けたほうが見えるものもあるかも知れない。

「よし、わかった。サーミャ、その剣貸してくれ。」

「え、でも。」

「大丈夫だよ。」

　俺がそう言うと、サーミャは渋々と言った感じではあったが、持っていたショートソードを渡してくれた。

「よし、それじゃ始めるか。手加減してくれよ。」

　俺はそう言いながらショートソードを構える。

「そんなの、冗談……だろっ」

　しかし、ヘレンがすごい速さで打ちかかってきた。

「うおっ！？」

　俺はそれを受ける。だがしかし、それは牽制の方だ。もう片方がやはりすごい速さで襲いかかってくる。俺は手首を返すようにしてそれを受けると、手首を戻す動きでヘレンに斬りかかる。

「おっと！」

　ヘレンはそれを牽制の方の剣で受け、もう片方で俺の空いている胴を狙うが、剣が届く前に俺は一歩引いて間合いの外に出ている。

「アンタやるじゃん。」

「いやいや、勘弁してくれよ……」

　ニヤッと笑ってヘレンは先程にもまして速いスピードで打ちかかってくる。俺はそれを受け流す。

　そういったことをおおよそ１５分ほど続けた。

「いやぁ、アンタ強いな！」

　デカい声でヘレンがそう言って動きを止める。

「動きを見るだけだってのに、本気で打ちかかってくるなよな……」

「本当は最初の２～３撃を寸止めで終わらせるつもりだったんだけど、”雷剣”のアタイの剣を受けられるやつなんて、そうそういないから、ちょっと熱くなっちまった！ごめんな！」

　戦闘民族脳は勘弁してほしいものである。

「まぁ、今ので良く分かったよ。そうだな……２日後に完成させられそうだから、また３日後に来い。」

「ん、今日は帰らなきゃダメか？」

「残って何するんだよ。」

「休憩したらまた打ち合い。」

「それじゃ俺が剣を打てないだろ！さぁ帰った帰った！」

「あ、待って！水だけくれぇ～……」

　そうして、水を補給したヘレンは一旦街に帰っていった。

　さて、特注の剣を打ってやらなきゃな……。

## 特注品～ショートソード～

2018年10月25日

　無事ショートソードの特注品２本を受注とあいなったわけだが、

　多少納品する数は減るが、これまでに結構な数を卸してるから問題ない……はずだ。それにヘレンを寄越したのはカミロだし、文句はないだろう。今日できる限り集中して作業しておけば、最低限度は確保できる。

　そうと決まれば、テキパキと型の作成と流し込みを済ませ、バリ取りをし、最後の仕上げを俺とリケがやる。その間に、型の作成からバリ取りまでをサーミャにやっておいて貰うことにして、時間短縮だ。みんなで黙々と作業をこなす。サーミャもすっかり作業に慣れてきて、この調子なら、そのうちちゃんと鎚を持たせることも不可能ではないかも知れない。

　この日はなんだかんだで結構な数のショートソードとロングソードが出来た。明日からはヘレンのショートソードに取り掛かることにしよう。

　一夜明けて、朝の日課と朝食を終えたら、俺とリケは作業場へ移動する。サーミャには薬草と果物の採集を頼んだ。今日手伝ってもらえることはあんまりないからな……。

　作っておいた板金から、ショートソード１本分の板金を積んで、火を入れた火床で熱し、リケと俺とで叩いて延ばしていく。ある程度延びたら、タガネで真ん中に

　形ができたら、冷えるのを待ってからもう一度全体を耐久力が増すように叩き、ヤスリやカンナのような道具で表面を綺麗にする。その後、柄になる鉄の棒を、接いだところが脆くならないよう、熱して叩くことで繋げる。そうして出来たものの刀身を火床でもう一度熱したら、水で急冷して焼入れする。

　ここで一旦、耐久力のテストをすることにした。昨日俺が作った一般モデルのショートソードを持ってきて、固定した特注品めがけて振り下ろす。キン！と澄んだ音がして、振り下ろしたショートソードが止まるが、特注品には傷一つない。何度か打ち付けたが、全く傷がつかないので、テストは良しとした。

「このショートソードは卸しに回せないなぁ。」

　俺は自分の持っているショートソード見ながら言った。よくよく見ると刃こぼれが起きている。こっちは一般モデルだから、刃が欠けるのも相応に早いのだろう。

「研ぐか打ち直せば、十分卸しに回せるのでは？」

　リケがナイフを打つ手を止めてそう言うが、俺はかぶりを振った。

「品質的にはそうでも、試し切り以外のことに使ったものを売るのは、俺の美学に反する。打ち直して、うちで使うことにしよう。」

　これがもっと切羽詰まった状況ならそうも言ってられないのだろうが、幸いにして懐は暖かくはないにせよ、困るほどではない。であれば、俺の美学に反することは、なるべくならしたくないのだ。

　俺がそう言うのを聞いて、リケがクスリと笑う。

「当たり前なんですけど、親方は本当に頑固な職人さんなんですね。」

「そうともさ。」

　俺はニヤッと笑ってそう返した。少しは俺がやりたかったことに近づいている。それはなかなかに幸せなことだ。

　さて、テストも済んだので、仕上げにかかる。刀身は磨くのと、刃の部分を研いだら、刀身側の仕上げは完了だ。そうして出来た刀身のところに、熱して加工した鍔を取り付け、柄に鹿の革（サーミャが獲ってきたのを加工したやつだ）を巻き、柄頭に太った猫が座っている姿をタガネで彫り込んで、俺の作る特注品の１本目は完成したことになる。

「よし、１本目が出来た。」

　俺は出来たショートソードを掲げた。刀身が火床の炎を反射して輝いている。

　ヘレンの打ち込みを思い出しながら、軽く振ってみる。見た目よりもずいぶん軽く感じるが、具合は良さそうだ。その様子を見ていたリケが、居ても立ってもいられない様子で、

「見せていただいても？」

　と言ってくるので、

「いいぞ。」

　と俺はリケに渡す。

　渡されたリケは、ショートソードを元素の一つ一つまでも見逃すまいとするかのように、細部にわたって見ている。角度を変えたり、軽く振ったりもしている。

「出来はどうだ？」

「これは普通の……いえ、多少の才能のある人が到達できる領域のものではないですね。親方の事情に触れるようで申し訳ありませんが、親方を失ったことは、北方にとっては大きな損失だと思います。」

「それほどかね。」

「はい。間違いなく。」

　リケは完全に真顔で俺に答える。まぁ、普通のものであるとは俺も思ってはない。丸太をぶった切るナイフを作れる技術の全てで作った剣だ、まともなはずがない。今回は完全に耐久力に主眼をおいて作成したから、例えばこいつで大きな岩に切りかかったとして、多少は切り込める（それがそもそも異常ではある）だろうが、真っ二つとはいかない。

　だが、この一本をチートとインストールを駆使して作ってみてわかった。俺はその気になれば

　逆に言えば、仮にそれを両立出来る素材――ミスリルとかオリハルコンとか呼ばれるようなものだ――が手に入ったとして、それで最上のものを作るのはよくよく考えなくてはいけない。

「どうかしましたか？ご気分を害してしまったでしょうか。」

　リケが心配そうに俺の顔を見ている。

「いや、何でもない。少し考え事をしていただけだ。気分を害したとかいうことはないよ。」

　俺は笑ってリケの頭をガシガシと撫で、少し怖い考えに落ちていきそうになっていた自分を引き戻した。

## 納品

2018年10月26日

　この日は結局その１本だけを打って終わることにした。もう１本は明日だ。リケもナイフを仕上げたので、火床の火を落として今日の作業は終わりにする。片付けをしている間に、サーミャが採集から帰ってきた。

「ただいま。」

「おかえり、どうだった？」

「ん～、まぁまぁかな。」

　サーミャがおろした籠の中には解熱と化膿止めの薬草と、リンゴに似た果実、それと木イチゴのような果実が入っている。

「なんだ、結構採れたじゃないか。」

「時期が良ければ、もうちょっと採れた。」

「いやぁ、薬草はともかく、果実はこれ以上あっても腐るし、これで良いよ。ありがとうな。」

　むくれ気味のサーミャをフォローしておいた。

　夕食はいつもの感じのメニューにリンゴ（に似た果実）をつけて、ほんの少しだけ豪華になった。

「ああ、これ初めて食べたけど美味いな。」

　その果実を食べて、俺は言う。味もほぼリンゴだが、当然のことながら品種改良なんてされてないので、甘さはそんなにない。前の世界でもそんなにしょっちゅうは食べなかったが、それでも馴染み深い味というのは、ホッとするものである。

「たまに、めちゃくちゃ酸っぱいのがあるんだけどな。」

「ああ、ありますね。子供の頃に、どれが酸っぱいやつか、とかやりましたよ。」

　サーミャとリケが言う。まぁ自然のものだとそうだろうなぁ。そのうち加熱調理したものも試してみたいところだ。

　この日はサーミャとリケが食べてきた果物の話をして盛り上がった。ミカンぽいのとか、スイカみたいなのもあるみたいなので、そのうちカミロに頼んでみよう。

　翌日。俺とリケは今日も鍛冶仕事、サーミャは何か獲物を獲ってくるらしい。サーミャのサイクルを狩り→手伝い→採取→狩り→手伝い→街→休みにして、週一で休むのはありかも知れない。元々はその予定もあったしな。今後の予定として頭に入れておこう。

　さて、今日は２本目の製作にとりかかる。とは言ってもやること自体は昨日と全く同じだ。昨日は探り探りだったが、今日は昨日と同じでいい、と言うのが分かっているので、昨日と比べて３時間近く早く片付いてしまった。

　せっかくなので、昨日のと合わせてショートソードに装飾を施すことにする。表面を整えたのと同じ道具で、刀身の真ん中を平らにしていく。少しでもずれると重量バランスが崩れるので、慎重に作業をしなければいけない。平らにし終わったら表面を綺麗にして、軽く振っておかしくなってないか確認だ。やってみたが特に振り抜きなどで違和感が出るようなことはなかった。

　平らにした部分にタガネで意匠を彫り込む。これもバランスが崩れてはいけないので、チートの力を借りて重さのバランスが狂わないように入れていく。２本ともに入れたあと、バリが出ているのを落とす。ここまでやっていたら、ちょうど稼いだ時間ぐらいまるまる使ってしまった。前の世界でもプラモとか作ってたし、こう言う作業好きなんだよなぁ……。

　この日サーミャが獲ってきたのは鳥の方だった。下ごしらえが終わったら、芸がないがチキン（葉鳥だが）ステーキにする。その代わり今日は昨日サーミャが採ってきた木イチゴ（のような果実）と、うちにあるワインを使ってラズベリーソースのようなものを仕立てた。

「おお、すげぇなエイゾウ！」

　サーミャが飛び跳ねるかのように喜んでいる。時々すごく子供っぽいんだよな。肉体的には２５歳でも、精神が５歳とは言わずとも２５歳には到達してないんだろう。

「こら、行儀が悪いぞサーミャ。」

「だってこんな凄いのめったに見ねぇもん。」

「そうですね。私の

　リケも今日の料理にはちょっと驚いているようだ。聞いたことはないが、リケはおそらく人間で言えばそこそこの年齢だろう。今まで大きく取り乱したことがない……鍛冶に関わるもの以外は、だが。

「まぁ、今日は俺の初の特注品完成日だからな。お祝いだ。」

「なるほどねぇ。そりゃ、おめでとうだ。」

「ありがとう。」

「私からもおめでとうを言わせてください。」

「ああ。リケは少し手伝いもしてもらったからな。ありがとう。」

　この日の夕食はは飲み物にワインも注いで乾杯し、それなりに盛り上がる夕食になったのだった。

　翌朝、俺が水を汲んで戻ってくると、見たことのある姿が家の前にいる。

「またずいぶんと早いな。」

　俺は声をかけた。相手はニカッと笑うと、

「今日見られると思うと、いてもたってもいられなくってさ！夜明け前から急いできたんだ！」

　赤髪の長身――ヘレンがそう言った。目がキラキラしている。夜明け前からの行動しててこのテンション。どんだけ元気なんだ。

「朝飯とかまだなんだろ？食ってけよ。俺達も今からだ。」

「おっ、良いのか？」

「客を外に放り出したまんま、のんびり朝飯食ってられるほど、図太くないんだよ、俺は。」

　俺とヘレンは家の方に入る。

「そのへんに座っててくれ。」

「あいよ。」

　ヘレンは

　その後は、この日の朝食はいつになく騒がしかった、とだけ言っておこう。

　朝食を終え、ヘレンに急き立てられて、全員で作業場にやってくる。

「さて、お待ちかねの品はこいつだ。」

　布でくるんだショートソード２本をヘレンに渡す。

「見てもいいか？」

「もちろん。」

　ヘレンはバッと布を引っ剥がすのかと思いきや、そろそろと壊れ物が包まれているかのようにゆっくりと

　とうとうその全貌が

「”雷剣”って言ってたからな。二つ名を装飾に入れさせてもらった。ちょっと振って具合を確かめてくれ。バランスは崩してないはずだ。」

　俺がそう言うと、ヘレンは恐る恐る両方の柄を握り、ヒュンヒュンと音がするほど速く振り回す。不思議と危なさは感じないが、あの中にちょっとでも入ればあっという間に切り刻まれてしまうだろう。

　舞うかのような”試し”はしばらく続き、やがてピタリと止まった。ヘレンは肩で息をしている。

「どうだ？」

　俺はヘレンに声を掛ける。ヘレンは俯いている。剣を放り投げ……ようとして、作業場の床にそっとおいたかと思うと、

「すげぇ！すげぇよこれ！完璧だ！！やっぱりアンタに頼んで良かったよ！」

　そう”叫び”ながら、俺を抱きすくめる。

「そうか、喜んでもらえ……いてててて！いてぇよ！！」

　全力で俺を抱きしめつづけ、それはリケとサーミャが無理やり引き剥がすまで続いたのだった。

## 戻る”いつも”

2018年10月27日

「耐久性は一応試したが、もし何かあったら直すから、カミロの店かここに来てくれ。できれば実戦で使う前にな。」

　なんとかヘレンのベアハッグから解放された俺は、作り手の責任として告げる。何かあったら直しはするが、戦場でそれが起きたら直しに来るも何もない。相手の顔がちゃんと分かって、要望に応えて作ったものだから、普段の”数打ち”よりもそのあたりがすごく気になった。

「わかった。訓練はしょっちゅうやってるから、その時に気になったらまた来る。」

「ああ。それで代金だがな。」

「いくらだい？」

「お前の払いたい値段でいいぞ。」

「え、いいのか？アタイは相場とか知らないぞ？」

「かまわない。特注はそいつの納得する値段を貰うことにしてんだ。」

　理屈だけで言えば、一般モデルであれば２日で結構な数を作れるのだから、最低それだけは貰うべきなのだろう。それにこれ幸いと銀貨1枚渡して終わり、と言うやつもいるかも知れない。

　だが、ここまで来てでも欲しい、と思うようなやつだし、変な値付けはしないだろう。俺の手間賃以外はショートソード２本分の鉄石と木炭の分稼げれば、赤字ではあるが作れなくなるということもない。

「うーん……」

　ヘレンは相当に悩んでいる。相場を知らないって言ってたからな。俺としては金貨１枚も貰えれば御の字なんだが。

「じゃあ、これだけで。」

　ヘレンは雑嚢から袋を取り出し、袋から金貨２枚と銀貨数枚を取り出した。

「十分だよ。」

「出したあとで言うのもなんだけど、それでいいのか？今使ってるのよりちょっと高めにしたんだけど。」

　今使ってるやつも大枚

「別に問題ないよ。元のやつもいい出来してるから、俺のもそれでいい。ちょっと多いかも知れないって思ってるくらいだ。」

「お、おう……」

　こうして代金を払い終わったヘレンは手をブンブン振り、「ありがとなー！」などと叫びながら、森の中へ消えていく。あの様子なら帰り道に大黒熊に遭ったところで、喜んで試し切りの相手にしそうだ。ヘレンが見えなくなると、俺達は誰からともなく家の中に戻っていった。

「しかし、すごい力だったなぁ……」

　俺はそう呟いた。それこそ大黒熊くらいあるんじゃないのか、あの膂力。

「アタシらが全力出しても、エイゾウから引き剥がすのに苦労したぞ。」

「声も大きかったですねぇ。」

　サーミャもリケもそれぞれに強い印象を持ったようだ。まぁアレだけの人物はそうそういない。ドワーフと獣人両方に全力を出させる人間が、うじゃうじゃいたらちょっと困る。

「とりあえず、今日はショートソードとロングソード作って、明日納品しに街に行くぞ。」

「おう。」

「わかりました、親方。」

　そして、ショートソードとロングソードを作り始める。たった２日違うことをしていただけなのに、”いつも”が戻ってきた感覚がする。いつもどおりに準備をして、いつもどおりに手伝ってもらい、いつもどおりに作る。俺がここで暮らしはじめてからそんなに経ってはないが、いつの間にかこの光景は”いつも”になってたんだな。ちょっとぐっと来たが、なんとかサーミャにもバレずに済んだ。

　その日の夕食の時、

「金銭的には余裕ができたし、来週はちょっと鍛冶仕事をやめといて、家のことをするか。部屋の扉やベッドもまだ全然手を付けられてないからな。」

　俺はそう提案した。

「そうですねぇ。作った数で言えば今回も十分でしょうし、１週間くらいなら大丈夫だと思いますよ。」

「おっ、じゃあアタシも手伝う！肉はまだまだあるんだろ？」

　リケとサーミャも異論はないようだ。

「じゃあ、そうするか。次の次に行くときまでにベッドの毛布をカミロに調達しておいてもらおう。」

　翌日、俺達は作った商品を荷車に載せて街へ向かっていた。今回はいつものにプラスして、今まで在庫にしてあった鎌も半分ほど積んである。行きは大した重さでもないし、移動速度は徒歩のときとそんなに変わらない。森でも街道でも特に何かに出くわすこともなく（”かわいい”ウサちゃんなんかを見かけることはあったが）、街についた。早速カミロの店に向かい、カミロを呼び出してもらう。

「よう。」

　カミロはいつもどおりの様子で俺達を出迎えてくれた。

「よう、調子はどうだい。」

「まぁ、ぼちぼちってところだな。売れなくて困ることはないが、売れすぎて困るものもないよ。」

「そりゃあ、ぼちぼちだ。」

「だろ？」

「ああ。」

　俺とカミロは笑い合って、俺は納品の報告をする。

「倉庫のところに荷車を置いてある。今回はいつものと、鎌をいくつか持ってきた。昔売ろうと思ったんだが、俺のところでは売れなかったんでな。いらなかったら引き取ってもらわなくても大丈夫だ。」

「いや、あっても困らんから引き取るよ。一緒に計算させておこう。おい。」

　カミロは部下を呼ぶと、引き取りに向かわせた。

「それと、来週は卸しに来られないが、問題ないか？」

「ああ、問題ないが……。何かあったのか？」

　カミロがすごく心配そうな顔をする。俺はなんかやらかして”黒の森”なんてところに住んでいる、

「いや、特に何かあったわけじゃない。来週は家のことをやろうと思ってな。鍛冶の方は休みだ。」

「なるほど。じゃあ次は再来週だな。」

「ああ。それとできるなら、その時までにベッドに敷く毛布なんかを２セット揃えておいてくれないか。」

「２セットだな？わかった。探しとくよ。」

　そのあと、ヘレンの話をしたり、塩やワインに野菜を買い込んだりする。代金は売上から天引きだ。さっきのも含めて、こうしたやり取り自体は前々からやっていたわけではなく、比較的最近始めたものだが、これも”いつも”になりつつある。こっちの”いつも”も長らく続けばいいな、そんなことを思いながら、俺達は街を後にした。

## 部屋の扉

2018年10月28日

　街を出る時に、塀のところの衛兵さんを見たが、今日もマリウス氏はいなかった。来たときもいなかったので、次来るときにいなかったらちょっと聞いてみよう。彼がうちのナイフやロングソードを買ってから、結構な期間が空いている。なにか不具合があればカミロの店なりに持ち込むとは思うが、なるべくなら状況を聞いておきたい。

　荷車に塩、ワインの樽、鉄石、木炭を積んで街道を行く。後もう少しで森に入る辺り、と言うところで、サーミャが足を止めた。

「どうした？」

「血の匂いがする。」

　サーミャが弓の準備をする。場に緊張が走った。

「賊か？」

「わかんない。音は聞こえて来ないから、襲われたとしてもういないとは思うけど、用心しろよ。」

　丸っこい耳をピクピク動かしながら、サーミャが言う。リケと荷車を残すわけにもいかないので、ジリジリと進んでいくことにする。

　やがて、現場であった

「こりゃあ狼か？」

「たぶんそうだと思うけど、賊がそう見せかけるためにやってるかも知れない。狼はめったに森からは出ないからな。」

　俺が尋ねるとサーミャがそう返してくる。なるほどな。狼に見せかけておけば追手がかかることも少ないか。

「サーミャは用心してくれ。俺とリケはちょっと急ぐことにしよう。」

「わかった。」

「わかりました。」

　結局の所、家に帰り着くまでは特に何事も無かったし、急いだおかげでいつもより早いくらいだったのだが、ドッと疲れがきた。我が家ってありがたいなぁ……。

　それと同時に何もなかったとは言え、今回の件は今まで

「ということで、明日からは扉なんかを作る。俺が蝶番を作るから、二人は扉本体を頼むな。」

「わかりました。」

「わかった。」

　夕食時、明日からの作業について軽く打ち合わせる。まずは扉、その後ベッドだ。これらが出来れば、３人がそれぞれの寝室を持てる。そこまで話したところで、

「あー！」

　俺は気がついて叫んでしまった。

「ど、どうしたんだよ、エイゾウ。」

　サーミャがびっくりしている。リケも負けず劣らずだ。

「いや、そう言えば客間作ろうと思って忘れてたんだった……」

　すっかり忘れていた。今のままだと客間がない。うーんと考え込んでいると、

「書斎を改造しては？」

　そうリケが提案してきた。

「親方の……今は私とサーミャが使ってしまっていますが、あの寝室はまだ結構余裕がありますし、あそこの椅子やテーブルなんかを書斎のものに入れ替えて、棚を一つ持ってくるくらいなら、大丈夫だと思いますよ。そうすれば書斎にベッドも入りますし。」

「なるほど……」

　確かにそれで行けそうな気がする。ベッドの寝具が一つ足りないが、どうせすぐには客も来ないだろう。こないだヘレンが来たけど。最悪、俺の部屋の寝具を引っ剥がして持っていけばいい。

「じゃあ、そうするか。ベッドを一つ余計に作らないとな。」

「最初は私達のベッドを作って慣れてから、お客様用のを作ったほうがいいでしょうね。」

「そうだな。」

　これで明日からの方針は決まった。金には全くならないのだけど、たまにはこう言う時があってもいい。

　翌朝、俺は作業場に入って、板金（新しく作ったほうだ）を熱して、薄く伸ばす。適当な大きさに切り分けて、それぞれの

　作業場から外に出ると、リケとサーミャが扉と格闘している。でももう半分以上は出来てるな。

「蝶番は出来たから、俺も手伝うぞ。」

「あ、親方。お願いします。」

　今二人が作っているのはそのまま二人で作ってもらうことにして、俺は新たにもう一つを作ることにする。切り出してある材木を四角に組み合わせて外枠を作ったら、そこに合わせて横板を張り、斜めの梁と中央に取っ手をつける。鍵がかかるようにはしない（閂はつけるが）ので、取っ手はとりあえず押し引きが出来ればいい。

　俺が格闘している間に、リケとサーミャは扉を完成させていた。

「作業場に蝶番置いてあるから、二人で取り付けておいで。」

「おう、わかった。」

　サーミャが笑顔で言う。彼女は狩りも嫌いではないようだが、こうやって手伝いで家のものを作ったりするのが、最近は気に入っているようで、肉が十分にあれば何かと手伝いたがる。このまま行けば、一人でもできるし、鍛冶でも大工でも役に立っていってくれるだろう。肉は大物が１頭獲れれば、保存が必要なくらいだし、積極的に手伝いができるようにしていってもいいな。例えばヘレンの時みたいに、俺が普通のを作れない時にリケを手伝ってもらうとかだ。

　夕方ごろまでかかったが、扉が出来たので俺も取り付けに向かう。部屋の前に行くと、リケとサーミャがパタンパタン扉を開け閉めしていた。

「どうだ？」

「ええ、問題ありませんね。こんなに軽く開け閉め出来るものなんですねぇ。」

「俺謹製の蝶番だからな。」

「冗談抜きにそれはあると思いますよ。」

　そんな会話を交わしながら、俺は扉の取り付けにかかる。そろそろ釘の補充分も作らないとな……。

　こうして２つの部屋に扉が取り付けられ、いよいよ家の体裁が整ってきたのだった。

## ベッド

2018年10月29日

　扉を取り付けた翌日からは、予定通りベッドの制作にかかる。ちゃんとした売り物にするようなベッドだと後６日程度で作るのは無理だと思うが、素人が自分で使う分なので、凝ったつくりも必要ない。

　客間用は迷ったが、そんなに長逗留する客もいないだろうと言うことで、多少粗末でも我慢してもらうことにした。貴族なんかだとこの辺メンツなんかもあって、そう言うわけにもいかないのだろうが、うちはただの鍛冶屋だからな。

「という事で、今日からはベッドだが、

「わかりました。」

「おう。」

　今日も１台はリケとサーミャで、もう１台は俺が作る。作業場は外だ。この辺りだけ広場みたいに開けているので、日も差してきて気持ちがいい。今日は寸法に合わせて材木を切って、組み立てる前の段階まで行けたら御の字だ。明日組み立てて運び入れ、最後に客間用のを作って模様替えをする、のが今後６日程度の予定になる。

　寸法は俺の部屋にあるベッドが少し大きめなのだが、新しい部屋にも十分入るし、入れても他のものを置くスペースは十分なので、それを基準にする。ものさし代わりにいくつかの木材をベッドのサイズに切ってしまい、それをサイズの基準に、木材を切り出す。高さなんかも同様だ。

　そうしてドンドン木材を切り出していく。鹿なんかを捕まえた時に運搬台にした丸太を乾燥させて材木にしてあるから、材料自体は十分まだ残っている。

「親方、ここお願いします。」

「おう。」

　時々頼まれて、ほぞを切ったりしながら、部品を作っていく。数を作ったりしないといけないので、何だかんだで時間がかかっている。結局この日は部品一式を作って終わってしまった。

　翌日、今日は組み立てと搬入だ。作っておいた部品をドンドン組み立てていく。前の世界で部品売りだった家具でも、結構時間がかかっていたことを考えると、かなりの時間がかかることが予想される。木槌の扱いはそんなに難しくはないが、正確に組み立てる、と言うのは簡単なようで難しい。結局、組み立ては昼過ぎまでかかってしまった。

　出来上がったベッドを新しく作った部屋に運び込んでいく。

「ベッドが入っただけでも、人の暮らす部屋って感じするな。」

「そうだなぁ。アタシは元々ベッドとかない暮らしだったけど、ここに来てからベッドがあるのが普通になって、ベッドがあったほうが部屋って感じはしはじめてるよ。」

「ドワーフも部屋はあったりしますけど、雑魚寝だったりするので、個人個人に部屋と言うのはちょっと緊張しますね。」

「あれ？リケは部屋の建て増しとかやってたんじゃなかったか？」

「やってましたけど、基本的に１家族１部屋、みたいな感じなので、ベッドとか入れずに棚とかだけだったりしますね。流石に家族でもない異性同士が同じ部屋、と言うのは無かったですが。」

「なるほど。」

　一人一つのベッド、ってのに慣れてるほうがおかしいのかも知れない。街の人間（壁内と壁外問わず）がどうなのかはわからないが。

「まぁ、これで我が家の形が出来てきたな。」

「だな。」

「ですね。」

　この日は折角なのでワインを夕食に出して軽くお祝いにした。

　そして次の日。

「今日は客用のだから、ちょっと凝った作りにするか。」

「どうするんです？」

「えーとな……」

　自分たち用のには”宮”を作らなかったが、客用のものには宮を作る。装飾用の彫刻も考えたのだが、ちょっと華美になりすぎると判断して入れないことにする。それをサーミャとリケに伝える。

「なるほどな。」

「わかりました。」

　宮の分の材料の切り出しも今日行う。早ければ今日中に組み立てまで行けるかと思いながら作業してみたが、宮の分もあってか、終わった頃には中途半端な時間になってしまった。

「今日は終わりにして、残りは明日やろう。」

「おう。」

「はい。」

　余った時間で作業場に入り、釘なんかを作っておく。釘は四角い和釘に近いものだ。そこそこの数を作って在庫は確保できたので、この日の仕事はすべて終えることにする。

　明けて次の日。ベッドを組み立てる前に、模様替えだ。リケとサーミャの部屋から棚以外の家具類を居間に運び出し、書斎から寝室に机や椅子、棚を一つ移す。空いたところに寝室にあった家具を運び込んで模様替えは終了だ。この時点でもそこそこ時間がかかった。これは昨日やっておけばよかったな、と後悔するが後の祭りだ。急いでベッドの組み立てをする。多少バタバタしたが、組み立て作業自体は前にやっていることもあってか、思ったよりはスムーズに終わる。それでも、もうほぼ日が暮れてきている。急いで運び込まなければ。

「そっち気をつけてな。」

「おう。」

　俺とサーミャで書斎に客用のベッドを運び込む。客用と言いつつも、暫く使うのは俺なのだが。運び込み終わった頃にはもう日が暮れていた。

「ちょっと時間かかっちまったな。」

　俺が反省の弁を口にすると、

「まぁ、しょうがねぇよ。慣れてる作業でもなけりゃ、こんなもんだろ。」

　サーミャが慰めてくれる。リケも

「まぁ、こんな作業は今後そうはないんですし、これくらいでも良いんじゃないでしょうか。」

　と言ってくれた。

　こうして何だかんだと慌ただしかったベッドづくりも一段落し、我が家が一層我が家になったのである。

## 休暇

2018年10月30日

　バタバタしたが、ベッドは揃った。後は街に行った時にカミロが寝具を揃えてくれていたら、部屋を移して終わりだ。家具のたぐいは、サーミャもリケもふたりともに使っていない。そのあたりに置きっぱなしだ（服なんかはさすがに包みみたいなのに入れてあるが）。サーミャは定期的に

　とは言え、前の世界の価値観が強めなのは承知の上で、年頃の娘さんが一人部屋になったんだし、折を見て家具も作っていこうとは思う。まずクローゼットからかな……。

　翌日、家のことを始めて6日目、この日は何かあったときのために予備日にしておいたのだが、特に何事も起きなかったので、完全に暇である。なお翌日も本来であれば街へ行って納品する日なのだが、今週は行かないのでやはり暇なのだ。今日急いで作って持っていくことも考えたが、カミロには行かないと言ってあるし、考えれば怪我をして休んだ日を除けば、もう長いこと休みらしい休みをとっていない。

　そこで、今日と明日は思い切って休みと言うことにした。とは言っても、別段娯楽があるわけでもない森の中なので、出来ることは限られている。この世界にもそれなりに暇な時間を過ごすための遊戯はあるようで、カミロの店でもそれっぽいものは見かけたのだが、やたら高かったので買ってないのだ。

　前の世界の遊戯、例えばオセロや将棋なんかを持ち込むのも手ではあるが、せっかく違う世界に来たんだからそう言うのはなるべく避けて、身近で出来ることをしていきたい。となれば、ここは最初の頃にやりたかった

　そして小一時間後、俺達３人は湖にほど近い清流に来ている。そう、魚釣りに来たのだ。初めてこの湖に来た時に見えていた、流れ出ている部分に当たる。家からはそこそこあるし、川は家から離れていく方角へと流れているので、こっちに来ることはあまりない。だが今日と明日は休みだ。明日はともかく、今日は一日ここでのんびり過ごすのも悪くない。うまく行けば晩飯も確保できるし。……そう言ってるとボウズなのがお約束ではある。

　釣り針は作った釘を加工して作成して持ってきた。うちにあった一番細い糸を釣り糸、森で拾ったいい感じの枝（もしかしたら樹鹿の角かも知れないが）をナイフで形を整えたものを釣り竿にして、餌は川の石をひっくり返したところにいた、なんかの幼虫らしき長い虫を使う。

　俺が虫を針にひっかけて見せると、サーミャもリケも特に騒がずに同じようにする。サーミャは森で暮らしてるから、色んな虫とその幼虫を見る機会があるとは思うが、リケが騒がないのは正直ちょっと拍子抜けだ。聞いてみたら、

「いや、山にもこう言うのはいっぱいいますよ。小さい頃はよく遊んでましたし。」

　ということだった。なるほど。

　３人でちょっとバラけて糸を垂らす。透明度が高いので、魚の姿が見えている。向こうからもこちらの影は見えているから、多分なかなか食いついたりしないだろうな。

　禁止漁法なんてものはないし、石打漁なんかをすれば、確実に手に入りはするのだろうが、これはあくまで休暇のレクリエーションなのだ。結果を追い求める必要はない。こうやってボウズのときの予防線を張っておかねばな……。

　昼飯時になったので、家から持ってきた無発酵パンに干し肉をワインで煮込んでもどした物を挟んだ、サンドイッチと言うか、タコスと言うかのようなものを頬張る。形状的には、前の世界の中華街なんかで売ってる、クワパオ（角煮バーガー）が一番近いかも知れない。思ったよりも美味いし、ピクニック感があっていい。なお、ここまでの釣果はゼロ、と言いたかったのだが、サーミャが１匹、リケが２匹である。前の世界のイワナによく似た３匹は、持ってきた小さめの水瓶の中で泳いでいる。釣果ゼロなのは俺だけだ。サーミャ曰くは

「エイゾウは殺気が出すぎなんじゃねぇの。」

　とのことだったので、午後はその辺を意識してみよう。

　午後になってしばらくは誰にもアタリがなかった。おそらく餌を食う時間から外れたのだろう。休憩がてら、そのあたりになっていたブルーベリーみたいな実を摘んだりして少し時間をおく。この実が食べられるのはサーミャに確認済みだ。

「この森にはよく似たやつで毒なのがあるから、エイゾウとリケだけのときは、絶対に採ってその場で食べたりするなよ。」

　と注意もされた。

「食べるとどうなるんだ？」

「毒が回るのは食って２時間くらい経ってからだけど、悪けりゃそのまま毒で死ぬ。良くて一昼夜しびれる。良い方でも、２時間うろついたあとでたどり着くような森ん中で、しびれて一昼夜も動けなくなったらどうなるかは分かるだろ？」

「そうだな。気をつけるよ。」

「そうしてくれ。」

　痺れてそのまま死ぬこともある、ってことは多分呼吸器官も麻痺させるんだろうな。そんなことになったらチートを持っていようが関係なく手の施しようがない。気をつけなきゃな。

　そんなふうに時間を潰して、また川に戻ってきた俺達は、再度糸を垂らす。リケが２匹釣ったから、魚の割当自体は１人１匹ある。

　ある、が、それはちょっと家長として、親方としての沽券に関わると思うのだ。なんとしてでも１匹は釣って帰りたい。そう思っていると、サーミャが

「エイゾウ、釣りたすぎだろ！」

　と爆笑している。そう言えば強い感情はサーミャにバレるんだったな……。リラックス、リラックス。自然体で行くんだぞ、英造。そうやっていると、

「さっきの親方は私から見ても、釣りたいのが分かりました。」

　とリケもクスクス笑っている。

「そ、そんなにか。」

「おう。」

「ええ。」

　二人して深く頷いてくる。俺はちょっとしょんぼりしながら糸を垂らした。

　それから結局誰にもアタリが来ないまま、そろそろ帰る時間になった時、俺の釣り竿にガツッと引っかかるような感触が来た。

「おっ！」

　アタリだ！落ち着いてアワセると、ビビビッと引っ張る感触が来た。多分かかったな。そのまま竿を立てて糸を手繰り寄せる。まだまだ感触は続いている。ここで焦りすぎると確実に逃げられる。そっちのお約束の方はなんとしてでも避けたい。糸が弛まないように手元に魚を引き寄せていく。

　近くまで引き寄せたので、糸を引っ張り上げて魚を釣り上げた。これでなんとか面目は保ったか。

「やっとこ１匹釣ったぞ。」

　サーミャとリケの両方が釣り上げたものに比して、いささか小さめではあるが、釣果として１匹は１匹だ。やや呆れた感じのサーミャを気にすることなく、俺達は家路についた。

　その日の晩は、折角なので外で焚き火を焚いて、そこで釣った魚を焼いて食った。もちろんめちゃくちゃに美味い。久しぶりの魚の味、というのもあるが、こういうキャンプ風の雰囲気もあるんだろうな。

　こうして休暇１日目は大満足で終えることが出来たのである。

## 休暇２日目

2018年10月31日

　昨日は魚釣りを大いに楽しんだ。俺もなんとか１匹は釣り上げてギリギリでメンツを保てたしな。今日は休暇の２日目だ。昨日とやることが同じでは芸がない……し、今日釣れなかったら立ち直れない。俺はなるべくリスクは回避したいのだ。かと言って、折角の休みに仕事をしてしまっては、ワーカホリック一直線だ。そこで仕事でもなく、かと言って遊びでもないことと言えば……。

「今日は畑を作ります。」

　俺は部屋を作る時に組み替えたクワを、元のクワの形に戻して、新しい部屋の廊下の外――部屋が増えたら中庭になるところに来ていた。

「はい。」

　鎌を持ったリケが答える。

「いや、それは良いんだけどなんで畑なんだ？」

　そう尋ねるのは同じく鎌を持ったサーミャだ。

「今、野菜の

　多分、原種みたいなものは、そこらに生えてるんだとは思うが、この世界でもそれなりに”食える”野菜は別にあると思う。実際人参ぽいやつはハツカニンジンよりも俺の知っている人参に近い。なのでその辺りを生産すればいいかなと言う目算だ。

　あとはもし芋が手に入った時に、予め栽培する場所を確保しておきたい。前の世界では中世頃には欧州にまだ伝播してなかったと思うが、この世界ではそもそもそう言う欧州や南米といった区切りはない（ここらはインストールの知識で大雑把に知っている）ので、世界全域でそれだけに頼るということはないものの、麦やなんかと一緒に栽培はされている。

　ただこの辺りでは、もともとあまり出回ってないか、農民で消費しきってしまうようで、市場で見かけないのだ。もしかすると、自分たちで消費する量だけを生産するようにとか、そう言う規則でもあるのかも知れないな。

　リケとサーミャにその辺りを説明する。リケは感心した顔で言った。

「晩御飯のときのお話でも思ってたんですけど、親方っていろいろご存知ですねぇ。」

「そうだろ。エイゾウはなんか妙に物知りなんだよなぁ。」

　そう引き取ったのはサーミャだが、”妙に”は余計だ。いや、前の世界の知識に、インストールの知識も合わさっているから、”妙に”というのもそんなに間違いではないのか。俺は複雑な顔になったが、とりあえず作業を始めよう。

　あくまで自前の畑を整備するだけなので、これなら自分で定めた「今日は仕事はしない」というルールにも抵触しない。前の世界で休みの日に、借りてる畑の手入れをするようなものだ。

　ひとまず３人で”中庭”の草を鎌で刈っていく。一般モデルだが、切れ味は十分すぎるくらいある。そこそこの広さを刈り取ったところで、ちょうど昼頃になったので一旦作業をやめる。広さ的にもこんなもんでいいだろう。

「昼飯食ったら、リケとサーミャの分のクワも作るか。」

「いいのか？」

「とりあえず今日使えればいい、ってレベルのもんだけどな。」

「十分だと思いますよ。」

　結局、鍛冶をやることになってしまったが、これはまぁ、家のことだからノーカンという事でお願いします。

　昼飯を食い終わったら、３人で作業場に移動する。作ってある板金を熱して形を作るところまではサーミャとリケにやってもらって、仕上げを俺が担当する。

　火床に火を入れると、リケは板金を熱し始めた。やがて板金が赤熱するとリケは取り出して金床の上に置く。そこをサーミャが大きく四角くなるように金槌で叩く。ここまでなら多少歪みなんかがあっても、俺が直せる。ある程度の大きさになったものをもう一度熱し、リケがさっきとは別の金床に置いたものを、俺が引き継いで金槌で叩いて最終的な形と仕上げを行う。力の入れ具合は高級モデルだ。その間にリケとサーミャは次の板金を熱して伸ばす作業だ。サーミャが叩いている間に俺が熱し、俺が叩いている間にリケが熱する。いつになくスムーズに作業が進んで行く。最後に俺が2つ目のクワの刃を仕上げて、今日の鍛冶仕事は終わり。建築やなんかで余った木材で良さそうなものを選んで棹にする。これでクワが３つになった。

　かかった時間は何だかんだ３時間程度で終わってしまった。あと２～３時間は畑の方が出来るな。ただ、実際に一仕事終えたのだから当たり前だが、一仕事終えた感が凄くて若干やる気が出ない。しかし、お嬢さん方は自分たちも製作に積極的に参加したクワの使いごこちを知りたくてしょうがないらしい。

　再び畑に戻ってきて、３人で土を耕す。前にも言ったかと思うが、この森の土は基本的に固い。しかし俺はチートで貰った筋力で、リケとサーミャは高級モデルのクワの力と若さで、順調に土を掘り返す。

　前の世界で見たＴＶ番組で、荒れた畑を３人で直して野菜を作り、その野菜で料理を作るってのを見たことあるが、ちょっとアレを思い起こす情景だ。ただ、アレと違うのはこっちは道具やなんかのおかげで、かなり作業が早い。３時間後には一旦土の掘り返しが終わった。ただし、日が暮れてきつつあるし、まだ掘り返しただけで、畑と言う感じではない。やや消化不足だが、これは逆に次の休暇の楽しみにとっておけると言うことではある。……雑草なんかがまた伸びないように次の休暇を早めに取る必要が出てきたが、これもまぁ、積極的に休暇を作るきっかけとして、良いとしよう。

　こうして俺の休暇は終わり、翌日からまた仕事が始まる。ただ、前の世界で月曜日を迎えたときのような憂鬱な気分はない。この世界の生活が相当気に入ってるらしい、俺は自分でそう思うのだった。

## お仕事再開

2018年11月1日

　今日からはいつもの仕事が始まる。初日は使った分の板金を作り、翌日からナイフやショートソード、ロングソードを作る。今回から板金のときもサーミャに手伝ってもらうことにした。3人で溶かして固めて延ばしてと言う作業をする。固めている最中のものは手が出せないが、それ以外の溶かすのと延ばすのは分担できるので、効率は上がっているように思う。

　最終的に前造ったときの１．２倍程度の量が作成できた。鉄石はまだまだ残っている。と言うか、これだけ作っても減る量より仕入れてくる量のほうが遥かに多くて、一向に減る様子がない。これはそのうちカミロに仕入れはいらない、って言わないといけない日が来るかも知れないな。

　翌日からは武器類の作成をする。そう言えばカミロに聞いてはないのだが、種類を増やすのは良いのだろうか。短槍なんかは特注モデルではあるが、実戦を経て使い物になる事自体は分かっているし、問題なければラインナップに加えたいんだけどな。

　ともあれ、最初はショートソードとロングソードを作る。手順なんかは当然今までと同じだ。ただし、少しずつ効率が上がってきている。鉄を溶かしてから型に流し込んで、バリを取るところまではサーミャに任せっきりで良いから俺も楽だし、高級モデルの方に注力できるからありがたい。3日位はずっとこの作業を続けて、結構な数を揃えることが出来た。これ次の2週間はまた納品なくても大丈夫なんじゃないかな、って数だ。

　次の2日はナイフにかかる。これはサーミャに手伝ってもらうものもないし、肉の備蓄もそろそろと言ったところなので、サーミャは狩りに出かけた。矢じりもちょいちょい補充してやらんとなぁ……。作るのは以前と同じように俺が高級モデル、リケが一般モデルである。手順もいつもどおりだ。夕方頃まで作って、そこそこの数が出来た。俺も明日は一般モデルにしようかな。そんな事を考えながら、作業場の片付けをしていると、サーミャが帰ってきた。

「ただいま。」

「おかえり。どうだった？」

「おう、今回は大物の猪を仕留めた。」

「おお、やるなぁ。」

「当たり前よ。」

　自慢げに胸を張るサーミャ。狩りの腕はほんとに良いよな。

「矢じりは大丈夫か？」

　俺はサーミャに懸案事項を確認する。

「あー、一発で刺さるし丈夫だから、そんなには減ってないよ。予備があると嬉しいかな、ってくらい。」

「そうか。それは良かった。」

「猪の頭って相当固いんだけどな。一発でブスッといった。多分鉄の兜でも抜けるんじゃないかな……。」

「そ、そうか。」

　うーん、火力がオーバーすぎるかな。まぁ、矢は矢だし、当てる弓の腕がないと意味ないから、銃をこの世界に持ち込むのと同じようなことにはならないか。

　明日３人で引き上げる算段をして、今日のところは終わりだ。

　翌朝、３人で湖へ向かう。そこそこ深いところに沈めてあるので、俺とサーミャの２人で引き上げるが、その間にリケには運搬台を周辺の木を切って用意してもらう。サーミャがつけた目印のあたりまで行くと、水に沈んだ緑っぽい毛皮の猪の姿が見えた。この森の猪は、体の毛に苔（か地衣類かは俺にはよくわからないのだが）のようなものが生えてて、全体に緑っぽい。これでしゃがみこんだら、パッと見には茂みのように見えるのだろうな。

　にしても「大物」とは聞いていたがデカいな。前の世界でも２mくらいのやつはそれなりにいるらしいのだが、こいつもそれくらいありそうだ。よいせ、と声をかけて引きずっていく。岸にたどり着くと、リケが丸太を用意していた。それを３人で協力して縄でくくり、運搬台を作ったら、頑張って猪を運搬台に引きずりあげる。あとは家までそれを引っ張っていくだけだ。俺はチートでの、サーミャは獣人、リケはドワーフとしての筋力があるから、３人で力を合わせればそんなに苦にはならない。

　とは言え、行きにかけた時間よりも、たっぷり１時間ほどは余分にかけて帰ってきた。すぐに家の近くの木に吊るす。この後は皮を剥いで捌いていくが、俺はそっちは手伝わずに、運搬台を

　鹿と同じように、今日食べる分を取り除けたら、残りは塩漬けにしてしまう。昼飯は猪肉ステーキと相成った。食べてみると、たしかに豚に近い味がする。しかしこちらのほうが野性味と言うか、臭みに近いのだが決して嫌な臭いではない、と言う感じがある。

「猪も美味いなぁ。」

「そうですね。豚とは違った味わいでなかなか。」

「だろ。この森の猪は良いもの喰ってるらしくって、他所より美味いって旅のやつから聞いたことがある。」

「へえ。そうなの。」

「でも、狩るのが難しいんだよな。めちゃくちゃ気は荒いし、頭の骨とか硬くて矢が通らなかったりするし。」

「じゃあ、俺の矢じり

「そこはほんとにそうだぜ？」

　何のてらいもなく言うんじゃあない。照れるだろ。

　午後からはナイフの製作をする。そこそこの量は確保できそうだし、一般モデルだから、最初の方の工程をサーミャにもやらせることにしてみた。ちょいちょい手伝っていたからか、割と筋がいい。とは言え、ほとんどド素人なので、出来上がる少し前でもお世辞にもいい出来ではない。そこは俺が最後に一般モデルに仕上げる。

「親方もだけど、サーミャも結構何でも出来るよね。」

　リケがサーミャに話しかける。リケはサーミャにはくだけた口調で話すのだ。

「うーん、そうか？さっきのとか、エイゾウのに比べたら全然ダメだったしなぁ。」

「親方と比べるのは間違ってるよ。」

「そりゃそうか。」

　そう言って笑い合っている。良いな、こう言うの。俺はなんとなくほっこりした気持ちになって、うっかり高級モデルを作ってしまわないよう、気をつけるのだった。

# 第２章 エイムール家騒動編

## 怪しい雲行き

2018年11月2日

　街へ行く日が来た。今日はカミロの店で商品を卸して、寝具を引き取ったら帰るが、マリウス氏の剣の状態も気になるので、確認もしておきたい。

　荷車に作成した在庫をくくりつけて積載する。1週間鍛冶仕事はしなかったとは言え、積載量がいつもより多いので、重さがあるが俺とリケで引っ張る分にはほとんど誤差だ。

「２週間前の帰りにあんなの見たからな。今日は行きも十分注意していこう。」

「わかりました。」

「おう、任せとけ。」

　俺も腰にはショートソードをさげていくことにした。前にヘレンのショートソードにぶつけたのを打ち直したやつだが、切れ味は十分すぎるくらいあるから、護身には役立つだろう。いつもより慎重に進む。狼ならまだしも、賊であれば普通の人がこんなところを通行する、と思っているとは考えにくいが、用心するにこしたことはない。途中一回の休憩を挟んで、森の出口までは普通にやってこれた。一旦そこで停止して周囲を伺う。

「どうだ？俺は何も感じないが。」

　気配であれば、俺でも集中して感じることができる。しかし、熟達者に気配を殺されてしまえば、分からなくなるだろう。そこらの賊にそんな真似ができるとは思えないが、それが出来るやつが居たら危ないしな。ここは消そうにもなかなか消せない、匂いを感知できるサーミャに聞いてみる。

「アタシも感じないな。血の匂いも人の匂いもない。」

「それなら大丈夫か。街道も気をつけて進もう。」

「おう。」

　気配を見落とさず、異常があればすぐ対応できるくらいの速度で街道を行く。用心しながらなので、いつもより歩みは遅いが、街へは無事にたどり着いた。立っている衛兵は今日もマリウス氏ではない。マリウス氏と一緒に剣を買いに来た同僚氏だ。

「こんにちは。」

「おお、あんたらか。こんちは。」

「最近、マリウスさん見ませんけど、何かあったんですか？」

　俺は単刀直入に尋ねる。遠回しに言ってもあんまり意味なさそうだしな。

「あー……あいつはちょっと前から、都の方に行っててな。」

　やや言葉を濁し気味に答える同僚氏。まぁ答えにくいなら仕方ない。他から聞くまでよ。

「そうですか。いえ、剣の調子が気になったもので。あなたも気になってきたら、カミロの店に行って相談してみてください。」

「おお、そうか。いや、何回か使ったが今のところは平気だよ。」

「そうですか。それは良かったです。」

　俺はニコニコしながら応えたが、内心でヒヤッとしたものを感じてもいた。俺が作ったものが

　そんな決意は胸にしまったまま、同僚氏に続ける。

「そう言えば、2週間前にここから1時間ほど行った森の辺りで血の跡を見かけましたよ。森の方に引きずられたような跡も。」

「ああ、ちょいちょい報告あったな。最近は巡回を増やしてるからか、なんともないが、また何か見かけたら次来たときでいいから教えてくれ。」

「わかりました。それでは、マリウスさんにもよろしくお伝え下さい。」

　やはりこの街の衛兵隊は、俺の思っているよりずっと勤勉だ。待遇が良いのかな？

　俺たちは同僚氏に会釈をして、街へ入る。今日も大通りは荷馬車や荷車を引く人が大勢いて、活気がある。その大通りから少し外れたところにカミロの店はあるので、俺達がそっちの方へ曲がっていくと、人通りが極端に減る。暗いとか、極端に狭いと言うわけではなく、用のない人間があまりウロウロする感じのところではない、と言うだけではある。そこをゴロゴロと荷車を引きながら俺達は進んでいく。そう大した時間もかからずに、カミロの店についた。

　荷車は倉庫のそばに回しておいて、そこから店の人を呼び、倉庫の扉を開けてもらったら中に荷車ごと突っ込んで、カミロを呼び出して貰いつつ、２階の商談部屋（とは俺がそう呼んでいるだけなので、実際カミロ達がなんと呼んでいるかは知らない）へ入ってカミロを待つ。程なくしてカミロと番頭さん――と俺が内心呼んでいる人――がやってきた。部屋に入って開口一番カミロが言う。

「待たせたか？」

「いや、全然。」

「商品はいつもの通り？」

「ああ。ナイフと長短両方の剣とを倉庫に入れてある。２週間分には足りないが、１週間分としてはちょっと多いくらいだ。もし余分が出たら置いといてくれ。」

「いや、２週間でお前のやつは全部売れてな。持ってきたやつは引き取るよ。」

「そうか。それはありがたい。で、寝具とかは手に入ったか？」

「そっちは問題ない。２セットだったか？」

「それが、あるなら３セット欲しいんだ。」

　ベッドを作るときまで、客間のことを完全に失念していたので、１セット分寝具が足りないのだ。まぁ、今日ここになくても、次までに揃えてもらうか、自由市あたりに行って調達するかだが。

「ああ、確か在庫はあるはずだ。じゃあ、それといつもの鉄石と炭と、塩とワイン、でいいか？」

「すまんな、助かる。」

「なに、お互い様よ。」

　話がまとまったので、カミロがちらっと番頭さんに目配せすると、番頭さんは頷いて部屋を出ていった。

　番頭さんが部屋を出ていったのを確認した俺は切り出した。

「ところでカミロ、都の方でなんか起きてるのか？」

「どうしてだ？」

「懇意にしている衛兵さんが、しばらく前から都に行って戻ってきてない、って聞いたからな。街を守る衛兵が都とは言え、他所の街に行くの自体がそうあることじゃないし、それが里帰りだとしても、そんなに長くはならないだろ？その人には俺のナイフとかを買ってもらったり、その他にも色々と世話になってるから、ちょっと心配でな。」

「なるほど……」

　まくしたてる俺の言葉に、カミロは考え込む。考え込んでる時点でどこまでかはともかく、何かを知っていると白状したも同然だが、彼は商人だし、その辺りは分かってやってるんだろう。

　やや重い沈黙が部屋に充満する。やがて、カミロは少しだけ教えてくれた。

「今、都の方はきな臭いことになっている。国王様がどうこうと言うよりは、もう一つ下の上級貴族連中だな、その辺で何か起きそうな感じだ。多分その衛兵さんはその辺りに関係があるんだろう。……これ以上はお前のためにも言うわけにはいかん。」

「そうか。すまんな、ありがとう。」

「気にするな。くれぐれも余計なことに首を突っ込むんじゃないぞ。」

「わかったよ。それより、言われてないから情報料はタダで良いんだよな？」

「あっ、お前そう言うところ商人よりえげつないな！」

　そう言って俺とカミロは笑い合う。互いに互いがその都のゴタゴタには巻き込まれないように、そう祈りながら。

## 暗雲

2018年11月3日

　その他にも少しカミロと世間話をして、カミロの店を出る。今日はもうこのまま帰るだけだ。マリウス氏の件は俺がどうにか出来るようなものでもなさそうだし。一介の鍛冶屋だからな。補給しないといけないものはカミロのところで揃ったから、よそで買い込まないといけないものもない。畑に蒔く種やなんかを買うのは、畑がちゃんとしてからでいいし。

　前に来てから2週間あったから、鉄石なんかは2週間分かとおもったが、俺達が1週間しか鍛冶仕事をしない、と言ったのをちゃんと考慮してか、荷車に積んである鉄石と炭は1週間分で、こう言う配慮ができるから、カミロは商人として成功しているのかも知れないな。

　街を出る時に見てみると衛兵さんは朝に見た人だった。まぁカミロのところ行ってそんなに経ってないから当たり前といえば当たり前なんだけど。会釈をしながら傍を通り過ぎる。街道に出れば後はいつもと同じルートだが、警戒は怠らずにする。見渡す限りの大草原で、渡る風が荷車を引いて火照る身体に気持ちいい。思わず気を緩めそうになるが、それをしては意味がない。

「こう気持ちがいいと、気が緩むな。」

　俺がそう言うと、

「安全なら、行楽に良さそうな日和ですしねぇ。」

「エイゾウの気が緩むのも分かるよ。」

　リケもサーミャも同意してくれた。だよなぁ。とは言え、そこらでのんびり昼飯でも、と言うわけにもいかないのが辛いところだ。せめて気持ちのいい日和を楽しみながら行こう。

　そして、あと幾らかで森に入る、と言ったところで、サーミャが足を止めた。丸っこい耳を忙しなく動かしている様子からすると、何か聞こえているらしい。俺はサーミャに声をかける。

「賊か？」

「わかんない。でも争ってる感じの音だ。ちょっと先だな……」

　サーミャはそう言って俺達をチラッと見ている。行くべきかどうか迷っているのだろう。

「よし、じゃあサーミャは先に行って様子をうかがってくれ。賊や狼が誰かを襲っているようなら、構わんから助太刀しろ。俺達もなるべくすぐに追いつく。危なくなったらこっちに逃げてこいよ。」

「わかった。」

　サーミャは頷くとブーツを脱いで走り出す。虎の獣人である彼女の本領発揮だ。速いのにほとんど音がしない。

「さて、じゃあ俺達も急ぐぞ。」

「はい！」

　俺とリケは全力で荷車を引く。振動が大きくなるが、バランスを崩して横転したりするほどではない。街道で良かった。これが森や整備されてない道だとこのスピードは出せなかっただろう。積荷は基本くくりつけてあるから、大丈夫だと信じて道を急ぐ。

　時間にすればほんの僅かだろうが、俺には途方もなく長い時間のように感じた。俺の耳にも複数の人間が激しく争っているような物音が聞こえてきた。ええい、ままよ。

「リケ、こいつは一旦ここにおいていく。ついてこい。」

「はい。」

「ただし、現場についたら、少し離れた場所にいるんだぞ。」

「わかりました！」

　旅をしてきただけあって、リケも自分の身を護るくらいのことはある程度出来るのだが、それ以上となると厳しい。いかに俺の特注モデルのナイフを持っていても、当たらなければ切りようがない。なので、直接戦闘には関わらないようにしてもらう。俺とリケは荷車を置くと、音の方へと駆け出す。

　走り出して間もなく、その光景が見えた。３人ほどの男が、サーミャと女性に襲いかかっている。サーミャが弓矢で、女性がロングソードで男たちをいなしているが、女性の動きが

「何してんだ

　とあらん限りの声で叫ぶ。男たちの視線がこっちに逸れる。

「おい、あいつを片付けろ。」

　男の１人がそう言うと、俺に１人が向かってくる。俺はそいつに全力で上段から斬りつける。男はその俺の剣を自分の剣で受けるが、思ったよりも衝撃があったのだろう、弾き返したりできずに、一瞬動きが止まる。そのスキを見逃さず、俺は斬りつけた時の勢いを生かして、男の胴をめがけて二撃目を放つ。対応出来なかった男の胴の中ほどまで刃が食い込んで、ゴボっと男は口から泡混じりの血を吐いた。

　男の胴から剣を抜いた俺は、男が倒れるかどうかを見届けずに残る２人に向かって剣を構える。残る二人が逃げるなら逃げるでいい。数の優位は逆転したのだし、普通ならそうする。

「クソっ。」

　だが、残る２人はそうせず、悪態をついただけで片方が俺に向かってきた。女性は疲弊しているし、虎の獣人、つまりサーミャも女だから、俺さえ始末すればまだなんとかなると思っているのだろう。俺は相手が間合いを詰めてくる間に、片手でナイフを抜いた。片手にショートソード、もう片手にナイフである。相手が抜いたナイフを警戒する様子もなく、横薙ぎを放ってきたので、俺はそれを身体から少し離れたところで、ナイフの刃が直交するように受けた。

　いや、受けたと言うのはいささか語弊がある。相手の剣はナイフに触れた箇所からすっぱりと切り落とされているからだ。おかげで衝撃もなく空振りになってガラ空きの胴に、１人目の男と同じく剣を叩き込み、やはり胴の中ほどまで刃が食い込んだ。残るは１人だ。

　どう、と倒れる音がしたのを聞いたのか、最後の１人が逃げようとしたが、そこへサーミャが矢を射掛け、放たれた矢は身体を貫き、最後の一人も地に伏すこととなった。普通ならああはいかないんだろうが、あの矢じりは俺の”特製”だからな。

　意識を集中してみたが、他に気配は感じられない。残党がいたら面倒だったが、それもないようなので、俺はほっと胸をなでおろし、リケを呼んでから、サーミャと女性の元へと駆け寄った。

## 事情

2018年11月4日

「怪我はないか？」

　俺はサーミャと女性に駆け寄りつつ、サーミャに聞く。

「ああ。アタシもこの人も大きな怪我はないよ。」

「そうか。」

　俺はホッとしつつ、女性の方を伺う。思わず助けたが、この女性の方が何か良からぬことをしていて、俺が斬り倒した男たちこそ官憲のような何かだった可能性もなくはないのだ。

　斬り倒した、か。俺は初めて自分で作ったものを、作られた意味に合う使い方をした。当然、前の世界で人を

　心の何処かに鈍く重いものがあるのは確かだが、後悔や恐怖と言った

「どうした、エイゾウ。傷でも受けたか？」

　サーミャが心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。俺は

「いや、俺も怪我はない。ありがとうな。」

　とぎこちない笑顔で返した。

「さて、お嬢さん。」

　俺は襲われていた女性に尋ねる。金色の髪が輝く頭には何も装着していなかったし、じっくりとは見てないので、パッと見は普通の旅装に見えていたが、マントで見えにくかっただけで、胸甲と鎖

「お嬢さんが何者で、なぜ襲われていたのか聞かせてもらえるかい。」

「……。」

「まぁ、事情があるだろうし、語りたくないのは分からんでもないんだが、これだけの人数を斃してしまった以上、そこに理由がないと俺達が衛兵にでも尋問されたときに困るんだよ。だから、俺達を助けると思って教えてくれないか。」

　女性は俺の目をじっと見つめている。綺麗なアンバーの瞳だ。目鼻立ちがしっかりしていて、俺にも多分こっちの世界でも美人と言っていいだろう。しかし面影に見覚えがあるな。前の世界の洋画の女優かな。

「まず、助けてくださり、ありがとうございます。」

　ややあって、話す決心がついたのか、女性は語りだした。

「わたくしはディアナ・エイムールと言います。都に住んでいたのですが、色々あって、とある方のところに身を寄せることになったのです。しかし、そこへ辿り着くギリギリで追っ手に襲われてしまって。あなた達が駆けつけてくださらなかったらどうなっていたことか。」

　家名持ちか。だとすると、色々ってのはカミロが言ってた”上級貴族のゴタゴタ”だろうか。このお嬢さんが嘘をついてないか、チラッとサーミャを見ると、横に首を振った。嘘はついてないようだ。

「なるほど。事情はわかった。となると、これをどうするかだな。」

　俺は少し離れたところに置いたままの死体を見やる。隠すなら隠すでグズグズしていると巡回が来るだろう。逆に知らせるなら巡回を待つ手もある。そう冷静に考えている自分が少し怖いが、そうも言ってられない。

「隠しましょう。」

　俺が逡巡していると、女性――ディアナがそう言ってきた。

「いいのか？まぁ普通の賊ではないんだろうが。」

「ええ。追っ手ですから、撃退されたことが判明するまでは時間が稼げます。」

「その間に”とある方”のところへ行けるはず、ってことか……」

「はい。」

　追っ手が”悪いやつ”と限ったわけではないが、ここまで来たら乗りかかった船か。

「よし、じゃあ森の中に入れてしまおう。リケ、すまないが荷車を引いてきてくれ。」

「わかりました。」

　リケにはそう指示をしたが、別に死体を荷車に載せたいわけではない。リケが取りに行っている間に森に運び込んでしまうのだ。

「サーミャは手伝ってくれ。」

「あいよ。」

「すまんな。」

「何言ってんだ。今更だろ。」

　俺達とディアナは死体の腕だけを持って、森に引きずっていく。こうすれば狼かどうかわかりにくくなるし、俺達に血がついたりもしない。まさか少し前に話をしていたことを自分たちがやるハメになるとはな。

　全力で引きずってしまえば、そんなに時間はかからない。ものの半時ほどで２週間前に目撃したような状態になった。端ではあるが、森の中だ。巡回の衛兵も覗いたりしないだろう。その頃にはリケも荷車を引いて戻ってきている。

「よし、じゃあ俺達は家に帰るが、その前にディアナさん。”とある方”ってのについて教えてくれないかい。何か力になれるかも知れない。」

　俺がそう言うと、ディアナは迷っている様子を見せた。まぁ、命を助けられたとは言え、知らんオッさんにホイホイと話せる事情なんてそうはない。だが、やがて口を開いた。

「その方は兄が教えてくれた方なんですが、

　ほほう。俺みたいな人っているもんなんだなぁ。

「最近になってこの辺りに寄り付いたそうなんですが。」

　へぇ。俺と似た境遇なのか。ちょっと興味あるなその人。

「大変腕のいい鍛冶だと……」

　ん？

「兄の愛用しているナイフも剣も、その方の手になるもので、今の件が片付いたらその方に調整してもらう、と言っていました。」

「あの、ディアナさん。もしかして貴方のお兄さん、マリウスって名前でこの先にある街で衛兵をしていた方では？」

　俺が思わず丁寧な口調で尋ねると、ディアナは

「はい。マリウス・アルバート・エイムールがわたくしの兄ですが、なぜご存知なんです？」

　とキョトンとした顔で返してきた。

## 匿う

2018年11月5日

「ディアナさん。」

「はい。」

「お兄さんの言う”とある方”ってのは、多分俺のことだ」

「えっ！？」

　ディアナは怪訝な顔をしている。だよな。助けてくれた人が実は探してる人でした、なんて都合のいい話がそうそうあるわけがない。俺だって同じ状況で言われたら、「おお、そうですか！そいつぁ好都合ですな！」とはならないだろう。でも、ほぼ間違いなくそうなのだから仕方ない。

「俺達の家ってのは、この”黒の森”の中にあってね。余程でないと来れないはずだから、ディアナさんが逃げていて、匿うと言うなら一番いい場所かも知れない。」

「その方に会うには、まずカミロと言う商人を頼れ、と兄は言っていました。」

「じゃあ、間違いない。俺が商品を卸しているのはカミロのとこだけだし、うちの場所を知ってるのも、カミロともう１人だけだ。」

　実際にはヘレンの方は直接うちに来て、正確な位置を知っているから、彼女から漏れていれば話は別だ。とは言っても、ホイホイ漏らすようなヤツで無いと思うし、言った２人だけと思っていいだろう。

「お名前を聞かせていただいても？」

　ディアナがこちらをじっと見つめながら言った。そう言えば名乗ってなかったな。

「ああ、すまない。俺はエイゾウと言う。こっちの獣人がサーミャで、このドワーフはリケだ。」

　サーミャとリケが軽く会釈する。タンヤの方は今は名乗らない。

「エイゾウさん……」

　ディアナは俺の名前を繰り返す。思案顔なのは思い当たるからなのか、それとも思い当たらないからなのか。見ているだけの状態では分からない。

「とりあえず、追っ手を倒して２日くらいは時間稼ぎができてるんだろ？だったら今日の１日は一旦うちに来ておいても良いんじゃないか？」

　俺はそうディアナに促す。あまりここでモタモタしているわけにもいかんのだよな。この状況で巡回が来ても説明は不可能じゃないが、そもそもそんなことになるのが面倒だし、なにかボロでも出したら目も当てられない事態に陥るのは確実だ。

「……分かりました。今日のところはお世話になります。」

「よし、じゃあサーミャは周辺の警戒。俺とリケで荷車を引こう。ディアナさんは出来ればサーミャと一緒に周辺警戒してくれ。」

「分かりました。お願いしますね、サーミャさん。」

「おう。」

　こうして俺達は移動を開始する。流石にこのままここから森に入るわけにはいかないので、いつも入る辺りよりも更に１５分ほど進んでから森に入った。そして森に入って半時ほど経ったとき、みんなに声をかけた。

「一旦休憩するか。」

「おう。」

「はい。」

「わかりました。」

　三者三様の返事が返ってくる。俺はディアナに水を渡して、サーミャを呼ぶ。

「サーミャ、ちょっと。」

「ん？なんだ？」

　サーミャはすぐにやってきた。

「後をつけられてないか分かるか？俺は何も感じてないが。」

　小さな声でサーミャに聞く。

「んー……いや、そう言うのはなさそうだぜ？匂いも気配もない。」

　言われたサーミャは、集中して鼻をヒクヒクさせていたが、すぐにそう答えた。

「そうか、なら良かった。」

　遠くから監視してるやつがいて、尾行されていたらどうしようかと思ったが、どうやらそれはなさそうだ。俺達が大人数で荷車もあるとは言っても、森の中で見通しがきかないし、尾行は相当困難だろうとは思うが、念には念だ。

　その後も警戒しつつ進んだため、いつものたっぷり１．５倍は時間をかけて我が家に辿り着いた。

「ディアナさん、済まないが先に荷物を降ろさせてくれ。」

「もちろん構いませんよ。わたくしも手伝いましょうか？」

「うーん……」

　まぁ、客であって客でないようなものだし、それくらいは良いか。鍛冶仕事なんかはさせられないが、働かざる者食うべからず、だ。

「じゃあ、お願いしようかな。どれをどこに持っていけばいいかは教えるから。」

「はい。」

　そうしてディアナにも手伝ってもらって、鉄石と炭を作業場に運び込み、塩やその他は家の方に運び込む。ディアナの手伝いもあってか、いつもよりはやや早く片付いた。寝具はまだ寝具がないベッドにそれぞれ配置する。これで全部のベッドが使えるようになった。サーミャとリケは寝室の荷物を自分たちの部屋に運び込む。そうしないと俺が寝室に移れなくて、客間にディアナを入れられないからな。その情景を見ながら、

「狭い家だが、しばらくは我慢してくれ。」

　と俺がディアナに言うと、ディアナは

「いえ、”黒の森”の中にこんな場所があったんですね……」

　と感心したふうに返してきた。

「まぁ、君のお兄さんが言っていたように、住み着いたのは割と最近だがね。……と、片付いたみたいだから、客間に案内しよう。」

「はい。」

　客間（元書斎）に案内する。ベッドは宮付きなのでちょっといい感じに見える。つけててよかった。

「そんなに豪華な部屋じゃないが、元々そんなに客が来ることは想定してなくてね。一介の鍛冶屋の家にしては豪華だと思ってくれるとありがたい。」

「いえそんな。十二分に立派な部屋だと思います。」

「とりあえず、装備を外して、旅の埃を落とすと良い。あとでサーミャかリケに湯を持ってこさせよう。」

「すみません、助かります。」

　俺は手をひらひらと振って部屋を出た。

　さて、これからどうしようかな。ディアナにもう少し詳しい事情を聞く必要はあるだろうが、聞いてしまうと多分戻れないよな。あとは話だけ聞いているとディアナは貴族のお嬢さんっぽいんだが、俺みたいな鍛冶屋にも腰が低くて丁寧なのが気にかかる。お兄さん――マリウス氏に話を聞いていたから、と言うだけなんだろうか、あれは。それにしてはサーミャにも丁寧に接してるしなぁ……。ともかく、晩飯が終わってからででも、ディアナに聞いてみないとな。

　俺は自分の埃を落とすべく、新たに自分の部屋となった寝室へ向かうのだった。

## 都の話

2018年11月6日

　俺は旅装を解いて、４人分の湯を沸かした。それぞれ自分の部屋で身体を拭き清めたら、ダイニングで夕食だ。夕食はバラ（猪）の塩漬け肉とレンズ豆っぽい豆のスープに、無発酵パンとそれにワインである。うちだとそれなりに豪勢だが、はてさて、ディアナの口に合うかどうか。

「こう言うものしかなくてすまん。口に合うといいんだが。」

　もう少し恐る恐る口に運ぶかと思ったが、ディアナは躊躇なく口に入れた。

「……どうだ？」

　それを見てむしろ俺のほうが恐る恐るで聞いた。

「美味しいです！」

　アンバーの目を輝かせて、ディアナが言う。しかし、周りがビックリしているのに気がついたのか、

「あ、す、すみません……」

　すぐにしょんぼりしてしまう。

「いや、口にあったなら良いんだ。良いとこのお嬢さんの口に合うか、みんな心配してただけだよ。」

「そんな、良いとこのお嬢さんなんて。」

「まぁ、メシが美味く食えるのが一番だ。メシがマズいと何もする気が無くなるからなぁ。」

　俺はしみじみと言う。前の世界で仕事がツラい時でも、美味いメシが食えればなんとかなったもんだ。

「エイゾウもマズい飯食ったことあんのか？」

　サーミャが話題に乗ってくる。

「そりゃあ、何度でもあるさ。」

「そうなのか。アタシはエイゾウはずっと美味い飯しか食ってないもんだと思ってたよ。」

「そんなことはないぞ。例えばだな……」

　俺は前の世界の話を、それと分からないように話し始める。こうしてこの日の夕食は「食べた中でマズかったもの」の話題で盛り上がる。ディアナも「珍味」と聞いて食べた、何かわからない肉が相当マズかった、と言う話をして場を盛り上げていた。

　そんな楽しい夕食が終わった頃、俺は話を切り出した。詳しい事情を聞くかどうかは少し迷ったが、ここまで来たら今更だろう。

「さて、じゃあディアナさんが都を追われることになった理由について、教えて貰えるか？」

ディアナは少し躊躇していたが、すぐに

「分かりました。それでは……」

　と、

　ディアナ（とマリウス氏）の実家は、俺達が行っている街の辺りも含めた領地を治めるエイムール伯爵。エイムール伯爵には３人の息子と１人の娘（もちろんディアナのことだ）がいた。３人の息子は長兄リオン、次兄カレル、そして三男のマリウスだ。当然、伯爵の家督を継ぐのは長兄のリオン、そのはずだった。１ヶ月ほど前、エイムール伯爵とリオンは、国境付近に出たと言う魔物の群れを討伐するために、私兵を引き連れて出かけた。

　本来であれば、リオンはともかく伯爵まで出ていく必要はなかったはずだが、そろそろ伯爵は完全に隠居し、リオンに実権の全てを引き継がせるつもりだったようで、そのデモンストレーションの意味もあったらしい。逆に言えば、国軍を動かさず、私兵のみで、しかも伯爵とその跡取り御自らの出陣、となれば、その出現した魔物の討伐も大した話にはならない、と言う想定だったはずだ。

　だが、そんな予想は完全に裏切られた。伯爵、リオン共に討ち死に、私兵も壊滅状態になって敗走、命からがら帰ってきたところによると、「やたら強い魔物が何もかもを倒していった」そうだ。だが、その凶報を受けて戻ったマリウスが調べたところ、不審な点がいくつもあった。衛兵として数々の”斬られた”遺体を見てきたマリウスから見れば、伯爵もリオンも、受けた傷が爪や牙ではないように見えるし、そもそも「魔物の発生自体が本当だったのか？」と言うところから怪しい、と言うのがマリウスの見立てである。

　さて、そうなると俄然怪しいのはカレルだが、当然簡単には尻尾を出さない。黙っていれば家督の継承権はカレルにくる……はずだった。だが、そこに大きな問題が発生する。記録を調べたところ、カレルとマリウスの継承順位が逆だったのだ。カレルは妾腹の子、マリウスは正妻の子であるため、マリウスが誕生した時点で継承順が変わってしまった。その事実は記録官により記録はされたが、カレルを産んだときに母親である女性が亡くなってしまったので、家の中では４人共、正妻の子として育てられたのである。

　そうなるとカレルは継承権を自分のみにするため、マリウスにあれやこれやをなすりつけようとする。が、マリウスは当然その前後はずっと別の町で衛兵をしていた。策略があったとして指揮を執るなんてことは非常に難しい。それで今のところは睨み合いが続いており、時々カレルがマリウスにちょっかいをかけている、と言うのが都の今の状況というわけだ。ただこれも長くかかりすぎて、エイムール伯不在が長期となると爵位剥奪、とかもあり得るので、そろそろどちらかが動き出す頃合い、でもあるようだ。

　ディアナが狙われているのは、ディアナも正妻の子のため、例えば彼女がどこかの貴族の息子を婿にでもとれば、その時点で継承権が変わりかねないので、今のうちに排除しておこう、と言う目論見らしい。そこでマリウスは（おそらくは）俺のところに預けて、自分がカレルをなんとかするまで安全を確保しておこうと、送り出したのをカレルが察知して襲われたのがさっき、と言うのが事の全てである。

「ふーむ。」

　俺は考え込んだ。そうなるとディアナを預かるのは１週間や２週間ではないだろう。うちの懐事情的には問題ないのだが、ディアナが耐えられるかどうかだな。てかマリウス氏もディアナも伯爵家の人間かよ。でもこれで、マリウス氏がただの衛兵にしては妙に目利きなのも、街の壁内の機微に通じているのも何故なのかは分かった。

「都……と言うか、マリウスさんの状況も、ディアナさんの状況も分かった。その上でだが、ディアナさんをウチで預かるのは問題ないが、ディアナさんはそれで大丈夫なのか？」

　貴族とわかった以上、本来は腰を低くしたほうがいいのかも知れないが、いまさら態度を変えるのもなんなので、俺はそのままにする。

「大丈夫とはなんでしょう？」

「いや、事が終わったあとでも、一介の鍛冶屋のところに年頃の娘さんが、他に女性がいるとは言え、転がり込んでいるなんてのがバレたら、貴族的にはアウトなんじゃないか？」

「その辺りは兄がうまく処理してくれていますので、エイゾウさんはご心配いりません。」

「後はこの生活が１～２週間どころじゃなく続くかも知れないが、そっちも大丈夫か？」

「凄く短い間ですが、サーミャさんもリケさんもいい人なのは分かりましたし、私は心配していません。もちろん、エイゾウさんも。」

「ふーむ……」

　それなら、別にうちで預かる分には構わないか。

「じゃあ、後は本当にうちで預かってくれ、と言う話なのかどうか、だな。」

「ここに来て分かったんですけど、確かにここ以上に身を隠すのに適した場所もないようには思うので、ほぼ間違いないかと。」

「まぁそりゃそうだが、一応、な。」

　渋るわけじゃないが、もし違うところだったらほとんど誘拐と変わらない。

「何か分かるようなものがあればなぁ。」

　ボソリと言った俺の言葉に、ディアナが反応した。

「あ、そう言えば、カミロさんあての手紙を預かっていたんでした。」

「それを読めば分かる……？」

「ええ、恐らくは。」

「しかし、他人あての手紙を覗くのはなぁ。」

「いえ、私のことなんですから、構わないでしょう。持ってきますね。」

　さっと立ち上がり、客間に消えていくディアナ。

　俺はそれを見て、もしかしてここの生活が気に入りそうなのでは、などと呑気なことを考えてしまうのだった。

## 手紙とこれから

2018年11月7日

　ディアナが手紙を持ってきた。まぁ、この世界だと前の世界みたいに信書開封罪みたいなものはないだろうしなぁ。万が一を考えてか、封蝋に紋章は入っていない。俺はナイフで封筒を開ける。

『カミロ殿　貴殿のことであるから、都で起きていることのおおよその状況は掴んでいることと思う。』

　と言う書き出しから始まった手紙は、さっき俺達がディアナから聞いたような内容が綴られていた。そして、最後の方に

『ついては、私の妹、ディアナをある人物に預けたい。私は住んでいる場所を知らないのだが、私の剣を打った鍛冶屋だ。彼は辺鄙な場所に住んでいると聞く。彼のところであれば身を隠すのも容易だろう。彼は貴殿のところに商品を卸していると言うし、彼が来るまで妹を預かってはくれないだろうか。』

　とある。この後も多少続いているが、ここが読めればとりあえずは良い。

「これで確定したな。マリウスさんはディアナさんをうちに預けるつもりだった。だから1つ手間が省けた、ってことだ。」

　更に言えば、ディアナがカミロのところに行かずに済むということは、その分足取りが追いにくくなるので、これはちょうど良かったのかも知れない。追手の壊滅に気がついた頃には、痕跡はだいぶ消えてしまっているだろうし。

　俺の言葉を聞いて、全員が頷く。

「なので、ディアナさんにはしばらくうちにいてもらう。家の周りの木の生えてないとこまでなら、一人でうろつくのは構わないが、それより遠くの場合は俺かサーミャを連れていくこと。でないと狼に食われる。」

「わかりました。」

「男に相談しにくいことは、サーミャかリケに相談してくれたら良い。」

「よろしくお願いしますね。」

　ディアナがサーミャとリケに向かって頭を下げる。

「おう、遠慮なく聞いてくれよ。」

　サーミャが笑いながら返す。

「ああ、そうだ、ついでで悪いが聞いておこう。ディアナさんは何で俺達みたいな、普通の庶民にまで丁寧に接するんだ？駄目と言うわけじゃないが、貴族なんだから、もっと砕けて接してくれていいんだぞ？」

　俺は気になっていることを聞いてみた。こっちがめちゃくちゃに無礼なのは心の棚に上げておく。

「命の恩人だから……ですかね。」

「うーん、もしかすると、これからここでの生活も長くなるかも知れないし、別に砕けた態度だからってスキあり！とかは言わないから、出来れば砕けた態度してくれたほうが、お互い楽で円滑に暮らせると思うんだが……」

「わかりました……じゃない、わかったわ。貴方がそう言うなら、そうする。」

「おう、そうしてくれ。」

　やれやれ、これで少しはのんびりした生活に近づけられるぞ。プチ亡命者みたいなのを匿っておいて、のんびりも何もないもんだとは自分でも思うが。

「よし、じゃあ今日は疲れてるだろ。今日のところはさっさと寝ちまおう。」

「はーい。」

「おう。」

「はい。」

　三者三様の返事が返ってくる。こうして盛り沢山な一日はようやく終わりを告げたのだった。

　翌朝、朝に一番早く起きるのは水汲みに行く俺だ。一度リケが「そう言うのは弟子の仕事」とやろうとしていたのだが、こう言うのがないと体をあんまり動かさなくなるような気がして、ずっと俺が続けている。行って戻っておよそ半時ほどだ。帰りは瓶2つに水も入るから、それなりの運動にはなる。

　帰ってきたら、サーミャとリケが起きてきているので、汲んできた水で3人で顔を洗うのが日常だったが、今日からはそこにディアナも加わって4人で顔を洗い、歯を清める。俺が朝食の準備をしている間に、女性陣が洗濯をする。前の世界みたいに、トースターでパンを焼いてる間に卵料理、とか無理だから、準備の時間で十分に洗濯は可能だ。

　洗剤は木炭を燃やしたときの灰をとっておいて、専用の瓶に水と一緒に入れておいたものである。前の世界でも洗剤に使ってたらしいし、それなりに理に適っているのだろう。探せばムクロジみたいなサポニンを含んだ植物もあるに違いないが、それを探すのはだいぶ先の話だな。

　朝飯は麦粥と、塩漬け肉のスープだ。このスープは多めに作っておいて、昼飯、夕飯と具材が多くなっていくようにしてある。これにより、調理の手間をなるべく少なくしているのだ。３人（今日からしばらくは４人）でワイワイと食事を摂りながら、その日の予定を決めるのも、朝食時の大事な役割の一つである。

　この日から３日はショートソードとロングソードの製作をすることに決まった。これならサーミャがディアナに教えることも出来るからな。サーミャが教えながら、ディアナと２人で木型に粘土を塗りつけて、型を作っていく。

　粘土もそのうち仕入れるか探すかしないといけないかもなぁ。湖があってそこで水が湧いてるということは、不透水層があるってことだろうから、そこまで掘って粘土層があればそれを使うか。粘土混じりの土、ってくらいの感じでも用途には十分だからな。まぁコレも今は後回しだ。

　その後の工程は変わらない。手伝いにディアナが増えただけだ。バリ取りまではサーミャとディアナがやる。ディアナは貴族のお嬢さんの割に、ハンマーを振るう力はなかなかのものだ。逃げてきた時に胸甲とかつけてたし、そもそも追っ手に襲われて俺達が駆けつけるまでは１人でなんとかしてたんだから、剣の腕に覚えがあるんだろう。後は俺とリケがそれぞれ仕上げていく。その間にサーミャとディアナが次の用意だ。

　この日の出来はなかなか良かった。効率的には前と変わらないくらいだが、１人慣れてないのが入ってこれなら全然問題ない。ディアナが出来たばかりのロングソードに興味を示したので、許可して振らせてみる。俺のチートと比べると落ちるようだが、それなりに剣術を習っていたようで、サマになっている。

「結構やるじゃないか。」

「ありがとう。でも、まだあの時のエイゾウさんに勝てる気がしない。」

　あの時ってのは助けた時のことだな。

「エイゾウはこう見えて強いからな……」

　サーミャが混ぜっ返す。

「こう見えては余計じゃないか？」

　俺は口をとがらせて反論する。しかし、

「でも鍛冶屋があんなに強いって普通は思わないですよ、親方。」

　サーミャにリケの援護射撃が飛んできたところで、俺はわざとらしく肩を落とし、みんなで笑うのだった。

## 稽古

2018年11月8日

　翌日、昨日作ったのは俺もリケも一般モデルだったので、今日は俺が高級モデルで、リケは一般モデルを作ることにする。とは言っても手順や人員はディアナを含めて変わらない。4人で作業を分担して作っていく。昨日何回かやったからか、ディアナの手際も昨日よりだいぶ良い。ディアナが流したほうのショートソードを見たが、

　難しいのはここで本気で消し込んでしまうと特注モデルに近づいてしまうと言うことだ。それはおいそれと売るわけにもいかない（なにしろ本気で作ったものに迫ってしまう威力だ）ので、高級モデルの範囲内でとどめておく必要がある。程々で叩くのを止めて、焼入れ、研ぎ・磨きの仕上げをした。

「ふむ。」

　出来上がりを確かめると、十分に高級モデルとしての仕上がりになっている。ディアナの作った”剣の素材”は昨日より大分いいとは言え、当然素人作業のものなわけだが、そこからでもチートの能力であれば、普通に高級モデルに持っていけるのか。凄いな。

　そうやって高級モデルの出来を確かめていると、ディアナが話しかけてきた。

「あら、それは？」

「ああ、こいつは昨日作ってたのとは違う、”少し良いショートソード”だ。昨日のより値段も高く売れる。」

「見てもいい？」

「ん？ああ。構わないぞ。握りとか仕上げてないが。」

　ディアナが

「これは……凄いわね。」

「でしょう？私も最初見た時びっくりしたんですよね。」

　何故かリケが胸を張っている。

「ええ、都でも数えるほどしか作れる鍛冶屋はいないわね。」

　感心しながらディアナが言う。逆に言えば何人かは作れるやつがいるってことか。じゃあ市場に流れても「良い出来の武器」で済むってことだな。実際ヘレンが持ってたのはウチの高級モデルには近かった。俺が作ったやつのほうが辛うじて良い……かも知れない、くらいだ。とは言っても今後ガンガン増やすと、それはそれで「これを打ったのは誰だぁっ」と言うことになりかねないので、程々にしとこう。

　昨日と同じくらいの数を作った頃、ディアナが切り出してきた。

「エイゾウさん。」

「ん？」

「１回手合わせ願えない？」

「んん？俺と？」

「ええ。」

「剣で？」

「もちろん。」

　ディアナも戦闘民族なのかよ。まぁでも気晴らしになるならいいか。ちらっと窓の方を見るとそこそこ日が傾いている。

「じゃあ、そろそろ暗くなってくるから１回だけな。」

「ありがとう！」

　なんでそんなに嬉しそうなのかね……。

　万が一があってもいけないので、一般モデルの刃を落とす。まぁ鉄の棒で本気で殴られたら無事では済まないので、気休めと言われてもあまり反論はできないけど、当たったときの怪我の度合いが全然違うからな。

　さすがに作業場でやるのは色々問題があるので、外に出て二人で対峙する。サーミャとリケも出てきて見物だ。

　剣の先を合わせて一礼し、距離を開ける。

「いつでもいいぞー。」

　俺は気楽に声を掛けるが、ディアナの方は真剣な顔だ。剣を構えてジリジリと間合いを詰めてくる。俺も剣をダラリとした感じで構え、待ち構える。突然、ディアナが姿が消えたかと思うほどの速度で突っ込み、その勢いのまま、首あたりを狙って剣を振るってくる。俺はだらりと下げた剣を跳ね上げるようにして弾き、戻す勢いで突っ込んできたディアナの肩口を狙う。

「くぅっ！」

　今度はディアナが弾かれた剣を戻す勢いで、俺の剣を弾いてなんとか

「あ、エイゾウがちょっと本気だ。」

　サーミャが言っているのが聞こえる。少しだけな。

「ふっ！」

　俺はそこからディアナに打ち込み続ける。肩に胴に頭に脚に。最初は対応できていたディアナも少しずつ動作が追いつかなくなってきている。そこを狙って俺は胴を狙うフェイントを仕掛ける。

「あっ！？」

　ギリギリだったが、何とか引っかかってくれた。腕が下がったところを狙って、首筋に剣を叩き込む――直前で寸止めにする。

「これは俺の勝ちでいいな？」

「……うん。」

　これで一本勝負は俺の勝ちに終わった。

「これだけ体を動かすと、なかなかに

　３０歳に若返っているし、普段水くみや鍛冶仕事やでそこそこ体を動かしているとは言え、やはりオッさんの身体でほぼ全力は

「エイゾウさん、それでもまだ完全に本気じゃないでしょ。」

　恨みがましい目でディアナがこちらを見てくる。

「ん？まぁな。完全に本気を出すのは、命のやり取りがあるときだけだ。」

「本気じゃないのに、全然太刀打ちできなかった……」

「いや、でもディアナさんも結構やるじゃないか。」

　これは俺の素直な感想だ。齧った以上に学んでいるなら、これでも十分だと思う。

「エイゾウさんにかかったら、”剣技場の薔薇”とまで呼ばれた私が”結構やる”どまりなのね……」

　あれ？なんか認識がズレている気がするな。

「サーミャ。」

「ん？なんだ？」

「俺ってそんな強いのか？」

「何言ってんだ？めちゃくちゃ強いと思うぞ？少なくともアタシは１００回やって１回も勝てねぇよ。」

「えっ。」

　そこにリケも口を挟む。

「そもそも、ヘレンさんのあの剣を受けて何ともない時点で、相当の手練だと思いますよ。」

「えっ、そうなの？」

　俺はてっきり、あれはヘレンが手加減してるんだと思っていた。貰ったチートも、護身用の最低限だと思ってたし……熊を倒せるくらいの護身用ってなんだよ、って話はあるか。いや、でもそれくらいでないと、この森じゃ暮らせないしな。

「ヘレンって、あの”雷剣”のヘレン？」

　俺がショックを受けていると、ディアナがそう聞いてくる。

「あ、ああ、確かそう言ってたな。」

「ヘレンの剣を受けて立ってたの？」

「四半時くらい打ち合ったかな……」

「そんなに！？」

　なに、ヘレンってそんなめちゃくちゃ強い子なの。確かに強いなとは思ったけど。

「”雷剣”のヘレンって、剣が素早すぎてついた二つ名なのよ。それで傭兵として名を馳せて、貴族の間でも知っている人間は多いわ。」

　ディアナが説明してくれた。俺は衝撃から立ち直れてない。

「そのヘレンの剣を受けて大丈夫どころか、打ち合いまでするなんて……」

　ディアナはディアナで別の衝撃を受けているようだ。俯いて何か考え事をしている。

「と、とりあえず終わったし家に戻ろう。な？」

　俺が帰宅を促そうとディアナの肩に手を置こうとしたが、そこに肩はなかった。

　下を見やると、足を折り、地に伏すような姿勢で手を地面について頭を下げるディアナがいる。この姿勢、前に見たな。土下座だ。やっぱりこの世界って土下座あるんだなぁ……。

　俺はこの後予想できる事態から目をそらすことに注力するのだった。

## ２人目の弟子

2018年11月9日

「私を弟子にしてください！」

　土下座のまま俺に頼み込むディアナ。えーと、これはどうしたもんかな。ちらっと見ると、サーミャもリケも２人共ニヤニヤしている。覚えとけよ。

「……１日１回、仕事が終わってから稽古をつける、ってのでいいなら。」

「いいの！？」

「ただし、ちゃんとした剣術を学んだわけじゃないし、教えるのは苦手だから、稽古では見て学べよ。」

「わかった！ありがとう！」

　ディアナはやたらはしゃいでいる。うーん、こう言うことではしゃぐってことは、これ実家では相当お転婆だったのでは……。幼少期のマリウス氏の苦労が偲ばれるな。ともかく、これで俺の日課が一つ増えることになった。大した時間でもないだろうから全然いいけど、成長してきて時間かかるようなら再考しよう。

「ああ、それと……」

「なに？」

「俺を師匠と呼んだり、畏まったりするのは禁止な。」

　先に言っておかないと、リケみたいに固定化されるからな。

「うん、わかった。」

　こうして俺に２人目の弟子（鍛冶屋のほうじゃないけど）が出来たのだった。

　翌日。弟子ができたことはともかくとして、今日も剣を打たなければいけないことに変わりはない。今日まではショートソードとロングソードの生産を続ける。これまた昨日までと変わらない人員、作業内容である。サーミャとディアナが型と鋳込み、バリ取りまでをやって、俺とリケが仕上げていく。今日も俺は高級モデル、リケは一般モデルを作って、昨日と同じくらいの数ができた。

　その後は稽古だが、昨日と同じように刃引きしてあるとは言え、鉄剣でやるのは危ないので、木材を”よく切れる”ナイフでパパっと加工して木剣を2本作る。こう言うのにもちょっとチートが働く（生産系だし武器なので）から、パパっと作ってもそれなりの物ができるのがちょっと面白い。

　昨日と同じように、剣を合わせて一礼する。俺は今日は昨日とは逆に、ディアナの攻撃をひたすら捌くことにした。ディアナの攻撃は鋭いし速い。ちゃんとした剣術を習っているからだろう。

　しかし、俺の自己流のほうが絶対的に強い、と言うつもりは全く無い。ちゃんとした剣術は、そこまでの命のやり取りの上に出来たものだと、俺は思っている。であれば、当然その積み重ねがない俺の自己流は、あくまでも俺にだけ使えるものであって、才能やらの大小はあるにせよ、修練を積めば誰でも強くなれるちゃんとした剣術、武術のほうが強い。俺とディアナの稽古も1対1だから圧倒できているが、極端な話、100人対俺、だとどう考えても勝てない。対処できないし、その100人が俺には作れないからな。

　だが、ディアナにしてやれることはある。そのちゃんとした剣術にプラスして強くさせることは出来る……と思う。うまく行けばディアナが発展をもさせられるかも知れない。まぁ、そこまでディアナがうちにいるかどうかも分からないのだが、出来る限りは付き合ってやろう。

　昨日のこともあってか、今日のディアナは色々と試している。どうやれば俺の体勢を崩せるか。俺の注意を本当に打ち込みたいところから逸らすにはどうすればいいか。今のところ、その試みは俺のチートがうまく検知して上手くいってないが、やることとしては間違ってないように思う。

　一つ困るのは、ディアナが世間から見て、どれくらいの強さなのか全くわからないことだ。俺も俺自身の強さがよく分かっていない。これが鍛冶の話であれば、出来上がりの品があるし、試し切りやらインストールなんかでどれくらいの品物なのかはわかるが、サンプルが少ないと、ディアナがそこらの兵士くらいの強さなのか、それとも稀代の剣士と呼べる強さなのかが分からない。どうもチートとインストールから受ける感覚だと並よりは上っぽいのだが、いまいち判然としなくて、どこまで鍛えれば良いのかが掴みにくい。これについては、今後の課題にするしかないか。

　四半時より少し長いくらいの時間打ち合って、今日はそこで終わりにする。

「どうだ？なにか掴めたか？」

「ううん。今日はあんまり。色々試しちゃったから。ああ、でもどれをどうしたら駄目なのか、どう返されちゃうのかは分かったから、掴めたとは言えるのかな？」

「そうか。まぁ、ゆっくりやろう。」

　俺がそう言うと、ディアナは一瞬キョトンとした顔をしたが、すぐに

「うん！」

　と笑顔で返事を返してくれた。

　翌日からはナイフの作成だ。サーミャは途中まで出来るようにはなったのだが、ディアナもいるし、木の実とかの採取をお願いした。まぁ、あの二人なら大丈夫だろう。念の為、人の気配が少しでもしたら、直ちに戻ってくるようには言ってある。

　俺とリケで板金を伸ばし、整形し、仕上げる。やや効率は落ちるが、クオリティは当然維持されている。手伝いがいないので、俺は最初から高級モデル、リケは一般モデルだ。それと、今回は俺が高級モデルを打つところを何本分かは、リケに見学と言うか、手伝ってもらって技術を盗んでもらう。

「どうだ？」

「うーん、まだまだ私で追いつける気がしません。」

「そりゃあ、俺は師匠なんだから、１ヶ月やそこらで追いつかれても困る。」

　俺は笑いながら言う。リケは少しむくれながら返してくる。

「でも、早く上達したいんです。」

「じゃあ、明日もリケに手伝ってもらうか。」

「いいんですか？」

「もちろん。でなきゃ、弟子入りした意味がないだろう？」

「まぁ、それはそうなんですけどね……」

　リケは困ったような顔で笑いながらそう言う。

「前に言ったかも知れないが、お前はやればかなりのところまで行けると俺は思ってる。気長に、と言うわけにもいかないんだろうが、焦らずしっかり伸ばしていこう。」

　俺がそう言うと、リケは

「はい！親方！」

　今度は晴れやかな笑顔で返すのだった。

## 伝授の一歩目

2018年11月10日

　仕事場の片付けをしていると、サーミャとディアナが帰ってきた。この時間まで外にいたってことは、人も来なかったし、それなりに収穫が多かったのだろうか。

「ただいま。」

「おう、サーミャもディアナもおかえり。」

「ただいま。この辺りって、結構いろいろあるのねぇ。」

「他に人とか住んでないから、いろいろ残ってるんだろうなぁ。」

　サーミャとディアナが採ってきたのは、前に見たリンゴみたいなやつと木イチゴみたいなやつ、それに今回は新顔がいる。ツルッとした外見で、前の世界だとイチジクに近いような見た目だ。じゃあ今日はこのイチジクっぽいのを晩飯のときに出すか。収穫が多いのかと思ったら、全般にはそんなに数はたくさん取ってなかった。まぁ、腐ってももったいないし、別に問題があるわけではない。

　俺とディアナはそのまま稽古に移る。そこそこ疲れてるとは思うが、ディアナの希望で今日も行うことにした。結果は、昨日と同じように手合わせして、四半時経たないくらいで切り上げることとなった。さすがに今日は動きが悪いし、無理してもあんまり意味ないからな。ディアナは悔しそうにしていたが、2日や3日で急に強くなるなんて、どだい無理な話なのだから、ゆっくり時間をかけてやればいいのに。俺がそう言うと、昨日みたいにキョトンとした後、渋々頷いていた。

　晩飯はいつもの無発酵パンにスープと、イチジクっぽい果物だ。こいつはこのまま食べられることをサーミャに確認してある。晩飯を片付けたらイチジクっぽいやつにとりかかる。前の世界のイチジクよりも皮は分厚いが、手で剥けるし、そのまま食べていいのも、そして何よりその味もほぼイチジクだった。リケもディアナも初めて食べるらしいが、気に入ったようだ。

「これは前に食べたことある感じの味で美味いなぁ。こう言うのも森にあるのか。」

「数はないけどな。でも、うちで食う分くらいなら平気だよ。」

「ほほう。

「だな。」

　なるほど、それで帰ってくる時間の割に、収穫量はそんなになかったんだな。しかし、こうなると砂糖が欲しくなってくるな。ジャムとか作って果物の保存を良くしたい。砂糖の値段をカミロのところでちゃんと見ておけばよかった。ちらっとしか見てないから、値段をハッキリ覚えてない。なんかそこそこ高かったような記憶だけがある。ジャム作れるって結構な量があるよな。色々落ち着いたらカミロに相談しよう。

　この後、ディアナに都で食べた果物の話を聞いたりした。スイカみたいなのがあるのは前にサーミャとリケから聞いたが、普通のイチゴとかバナナみたいなのもあるっぽい。うーん、試してみたい。でもこれも落ち着いたらだな。

　翌日、今日はサーミャとディアナは狩りに出かけた。肉はまだあるし、今日のところは最悪1頭も狩れなくてもいい、と言う判断のようだ。ディアナが普段着ているのは、ちょっと凝った部分がある感じの服なのだが、今日はシンプルなやつを着ていった。「狩りは都にいた頃に何回か行ったことがある」とは言ってたが、多分ここの狩りとそれは違うし、狩りってあんまり女性の好むもんでもないと思うが……やっぱりお転婆娘だったのだろうか。今度マリウス氏に会ったら聞いてみよう。

　俺とリケは今日もナイフの製作である。リケは俺が高級モデルを作るところの手伝い……と言うか見学もする。昨日約束したからな。板金を火床で熱し、”歪み”や”ムラ”があるところを叩いて

「今の作業でここまで詰めることができる。俺はこれ以上詰められるが、ここで止め……」

　いや、待てよ。

「いや、最後までやろう。」

「え、良いのですか、親方。」

「ああ。ディアナに渡す分を作ればいい。」

「あ、なるほど。」

「よし、じゃあやるか。」

「はい！お願いします！」

　俺は板金を再び火床で熱し、残った歪みやムラを叩いて消していく。もう殆ど残ってないが、根気よく潰さないと全てはなくならない。何度か熱すると叩くを繰り返し、ようやくすべてが消えた。表面がキメ細かく輝いている。

「最終的にはここまで詰められる。」

　板金を見るリケの目は、火花のように輝いていた。俺の出した板金の隅から隅まで、分子の１つも見逃すまいとするかのように見ている。俺のものと、リケのものの何が違うか。俺はチートで一目瞭然レベルで理解できるが、リケはそうではない。ここから学び取っていってもらわなければならない。

　リケがじっくり見たと判断した辺りで、次の作業をする。形を作る作業だ。これも俺はチートでどこを叩けば、この状態を崩さずに形を作れるかがわかる。リケが「鉄の声が聞こえているよう」と言う

　やがてナイフの形が出来た。それをリケに見せる。

「わかるか？」

「はい。さっき見せていただいた時と質が全く変わりませんね。」

「その通り。じゃあ仕上げるぞ。」

「わかりました。」

　焼入れをするべく火床に形が出来たナイフを入れると、風を送って温度を上げる。

「俺はちょっと”特殊”だから、ギリギリの温度は火を見れば分かるが、リケは夜中にやるとかして見極めた方が良いかも知れない。」

「いえ、ドワーフであれば、大体のところは分かるので、見極めてみせます。」

　そうなのか。あぁ、そう言えばリケも普段から俺と一緒に焼入れしてたな。

「よし、じゃあちゃんと見てろよ。」

「はい。」

　静かな声でリケが言う。俺も真剣に温度を見極める。温度はジワジワと上がっていき、ドンピシャの温度になった。俺は素早く火床からナイフを取り出して水で急冷する。

「今の温度だ。」

「はい。おおよそは掴めたと思います。ものにするのは時間がかかるとは思いますが。」

「よし。」

　この後、火床の炎にかざして、焼戻しをする。この時の温度もリケには習得してもらえるよう、集中して、ここだというタイミングを教えた。これをしないと脆いまんまだからな。

　焼戻しまで終わったら、磨きと研ぎをする。研ぎもここで失敗したら意味がないので真剣に、だ。この作業もリケはじっと見ていた。

「うーん、ここ何本かで一番いいかも知れないな、これ。」

　チートの感覚が馴染んで来たのか、単に俺が慣れただけか、なかなかのいい出来だ。出来上がりをリケに見せる。

「そうですね……。私には私に打っていただいたのと、ほとんど違いが分かりませんが、でも確かにこっちのほうが少し良いかも知れません。」

　あの時の作業工程って、ほとんどリケには見せてなかったからな。あの時見せていれば良かったかも知れない。

「まぁ、目指す先はここだな。」

「はい。頑張ってみせます。親方。」

「おう。」

　俺は笑顔で、若い鍛冶屋の前途に光あらんことを祈るのだった。

## 生きることの一かけら

2018年11月11日

　リケに特注モデルの製作を見せた後、高級モデルを何本か作り、今日はここらで終いにするか、となった頃、サーミャとディアナが帰ってきた。

「おかえり。獲物は狩れたのか？」

「ただいま。おう、結構デカい鹿が狩れたぞ。」

「おお、そいつは凄いな。ディアナもおかえり。」

「ただいま。ああ、疲れた……。」

「お、どうしたんだ。」

「ああ、ディアナには

　勢子は狩りのときに、獲物を弓の射手の前まで追い出したりする役目のことだ。と、すると、かなり走ったり動き回ったりしたはずだ。それも森の中で。そりゃあ疲れるよな。サーミャも容赦がない。

「そりゃ大変だったな。２人ともお疲れさん。ディアナは今日の稽古は休みでいいか？」

「ええ。流石にこれではいい動きができないわね。」

「だよな。じゃあ今日の稽古はなしで。作業場を片付けたら晩飯にするから、土を落としたら、部屋で休んでな。」

「はぁい。」

「おう。」

　そうして２人とも台所の方へ向かっていく。

「じゃあ、俺達は作業場片付けるか。」

「はい、親方。」

　こうして今日一日が終わるのだった。

　明けて翌日。朝一番に全員で森に向かう。俺は水瓶、サーミャはロープ、リケは斧を持っている。それにしても、毎回思うがリケが斧を持つとなんか凄くドワーフ！って感じするな。ドワーフだから当たり前なんだけど。

　ディアナだけが手ぶらだが、ワクワクを隠しきれていない。昨日自分（とサーミャ）で狩った獲物だから、その回収が楽しみなんだろう。……お転婆だったかどうか探るのはもう止めた。探るまでもない。

　森の中を４人で行く。３人よりも目は多いし、気配を感じられる人間が１人増えているので、安全度は増したと言えるかも知れない。そもそも、４人も人間がいるのを襲おうって動物はあんまりいないので、逆に言えば、俺達に殺気を向けてくるようなのはかなり怪しいことになる。

　ディアナを匿ってから、６日が過ぎようとしている。追っ手がディアナを捕捉するのに失敗したことは、カレル陣営もそろそろ把握しただろう。そうなると今度はディアナの行方を探しにかかるはずで、その候補の一つに”黒の森”があがることも、何らおかしいことではない。

　それでも、捜索しながら並の人間では命を落としかねない森を行くのだから、辿り着くにも相当の時間を要するとは思うが、なにせうちは盛大に煙を出すので、ヘレンの時みたいにあっさり見つかる可能性もある。その辺りも考えればそろそろ慎重になるべき頃かも知れないな。

　そんな事を考えながら、湖へと到着した。俺とサーミャとディアナが鹿を引き上げる間に、リケが木を伐り倒す。俺とリケが運搬台を作っている間に、サーミャとディアナで水瓶に水を汲んで、あとは全部運搬台に乗っけたら引っ張って運ぶだけだ。引き手が４人になったので、以前より断然速い。前に引っ張った時の1.2倍くらいの早さで家に到着した。後の工程はディアナを除く3人でぱぱっと済ませてしまう。もう3人共手慣れたもので、あっという間に鹿は肉になる。

「肉ってこうやってできるのね。」

　ディアナが感心したような、考え込むような感じで言う。これも多分”普通のお嬢様”なら卒倒もん……と思ったが前日にサーミャが内臓を抜く現場に居合わせて、特に何もなかったようなのだから、相当に肝が座ってんだろうなぁ。

「そうだな。こうして解体して肉になる。」

「昨日、私が追っかけて、サーミャさんが仕留めるまでは生きてた鹿なのよね。」

「そうだぞ。そしてそれは、今までディアナさんが口にしてきた肉も変わらない。」

「そうなのよね……」

　ずいぶんと考え込んでいる。屠殺して解体するところなんか、庶民はともかく、貴族はまず見ることはないだろうからな。

「まぁ、そうやって命をもらうってことを意識してればいいんじゃないか？」

「命をもらう、か。」

「そう。その命で俺達は生きてるんだよ。」

「なるほど……」

　なんかちょっと説教臭い話をしてしまった。これだから年は取りたくない。

「エイゾウがなんかうちの爺ちゃんみたいなこと言ってんぞ。」

　サーミャの一撃が心に痛い。

「うちじゃそう教えられたんだよ。」

　俺は語気弱く返す。

「北方じゃそう教えるのか。獣人みたいだなぁ。」

　サーミャが感心したように言った。

「北方全体がどうなのかは知らないが、少なくともうちでは『全ての物に魂がある』って教わった。」

　うちでは、と言うか前の世界の日本の観念だけどな。

「森にも？」

「森にも、そこの木々にもだ。だからこそ、それを切っていろいろな形で使って、その中で暮らす、と言うことには感謝がなくちゃいけないって、俺も爺さんに言われたなあ。もちろん木以外にもだぞ。」

「なるほど……」

　今度はディアナが感心している。あんまり文化圏の侵害みたいなことはしたくないんだが、40年以上それで暮らしていると、どうしても感覚が抜けない。

　場がしんみりしてしまったので、俺は努めて明るく言う。

「今日は休みだし、昼はこの肉であれ作ってやるから楽しみにしてろよ？」

「おっ、やったぜ！」

「わぁ、楽しみです！」

　サーミャとリケがそれに乗っかる。ディアナはキョトンとした顔で

「あれって何？」

　と言っているが、サーミャもリケも「昼になったらわかる」と言うだけで、みんなで肉を持って家に戻っていく。

　昼飯と夕飯の分以外の鹿肉は干したり塩漬けにしたりして、昼飯は好評だった鹿肉のステーキ木いちごソースである。あとは無発酵パンとスープ。そのうちパンも干しぶどうかライ麦かの酵母で発酵パンにチャレンジしたいところだな。

　食べる前に、ディアナが

「北方……と言うか、エイゾウさんの家では、こう言うときに感謝のお祈りとかはあるの？」

　と聞いてきたので、

「そうだなぁ……。じゃあやってみるか。手と手を合わせて。」

　全員で合掌する。

「いただきます。」

『いただきます。』

　俺に続いてみんなが唱和する。

「エイゾウ、”いただきます”ってどういう意味だ？」

「『あなたの命をいただきます』とか、『自然の恵みをいただきます』とか、『準備してくださった料理をいただきます』とか、そう言う感謝が主だな。」

「へぇ。じゃあ、これからもやろうぜ。エイゾウの家なんだし。」

「俺は構わないが、2人はそれでいいのか？」

「ええ。構わないわ。」

「もちろんですよ、親方。」

　こうして、我が家では日本式の”いただきます”と”ごちそうさま”が食事の挨拶となるのであった。

## 相談

2018年11月12日

　今日は休日なので、鹿を解体して昼食をとった後は、夕食前までみんな思い思いのことをして過ごすことにする。

　俺は矢じりを作ることにした。サーミャの補充分もあるが、今後ディアナも弓矢を使うかも知れないからな。リケは俺が仕事場に火を入れるならと、ナイフ製作の練習をしていた。

　サーミャとディアナは庭（と言うか単に家の前というだけだが）で弓の練習をしていたようだ。元々気が合うのか、採取と狩りに出かけてから仲がいい。ディアナもサーミャも、相手が誰でも気にしない性格というのもあるとは思う。

　夕食前に四半時ほどディアナと稽古をする。２～3日でそんなに大きくは変わるわけがないが、少しずつでも何かを掴んでいければいい。

　夕食は鹿肉を薄切りにして焼いたものに、いちじくと赤ワインのソースを絡めた焼き肉風にする。甘じょっぱい感じで悪くない。3人には割と好評だった。

　翌日、今日は街に行ってカミロに商品を卸すが、ディアナを一緒に連れて行くわけにはいかない。何があってバレるかわかったものではないし。一番いいのはディアナをここに置いたままにして、俺とサーミャとリケの3人で向かうことだ。そうすれば俺達の行動はいつもと全く変わらず、露呈することも限りなく減らせるだろう。ただ、万が一を考えれば、ここに他にも誰か1人は置いておきたい。

　そうなると誰を置いていくか。俺は論外として、サーミャかリケってことになる。リケは戦闘能力がないし、この森に詳しいわけでもない。となるとサーミャか。何かあったらサーミャなら森の中を逃げられる。なんなら、かつて”ねぐら”だったところで数日くらいなら何とか出来るだろう。

　ここにサーミャを置いていくと、どうしても道中の警戒が薄くなるが、そこは俺がカバーできそうだ。いざとなったら俺も強いみたいだし。

　それらを3人に説明する。とりあえずは3人共納得してくれた。

「いいぜ、他にやりようもねーし。」

「ごめんなさい、私のために。」

「気にするな。悪いのはディアナさんじゃない。」

「そうですよ。ディアナさんはご自分の身の安全を第一に考えてください。」

「みんな、ありがとう。」

　ディアナは涙ぐんでいる。マリウス氏には早いところ解決してもらわないとなぁ。それはそれとして、本来なら遅くても５日ほど前にはカミロのところにいるはずのディアナがここにいる、と言うことは俺達の他には知らないわけで、マリウス氏が心配している可能性も結構あるのだよな。

　そんなわけで、マリウス氏からカミロに当てた手紙は俺が持って行くことにする。

「それじゃあ、いってきます。」

「いってらっしゃい。」

　サーミャとディアナに見送られて、俺とリケは家を出た。

「さっきも言ったが、サーミャがいない分、警戒が薄くなるから、注意して進もう。」

「分かりました、親方。」

　目安としては、いつもの1.5倍くらいの時間がかかるだろうな。森の中をゆっくりゆっくり進んでいく。カミロに行く時間は言ってないのと、別にいつ行ってもほぼ平気そうなのが救いだ。

　途中2回の休憩を挟んで、やっと森を出るあたりまで来た。いつもなら2時間程度だが、今日は3時間を少し過ぎたくらいかかっている。森を出る前に辺りを伺う。特に誰かがこちらを注視しているような感じはない。ササッと森から出る。これで少しは安心できるな。

　そうは言っても、街道上も安全が確保されているわけではない。十分に危険が存在する場所であるので、警戒しながら進む。すぐにディアナが襲われていたあたりに差し掛かる。流石に1週間もたっているので、特に何かがあった痕跡はもうない。追手の行方を知っているのは、俺達だけの可能性が高そうだ。

「もう何もないな。」

「そうですね。

「少なくとも、俺達に何らかの嫌疑がかかることはなさそうで良かったよ。」

「今何か言われると厄介ですからね。」

「そうだな。」

　そんな会話をしながら、街へ向かう。結局、ここでも特になにか起きることはなかったが、やはりいつもよりはかなり時間がかかっている。これは今日は基本往復するだけになりそうだな。

　街の入口には当然マリウス氏はいない。今回は同僚氏でもなかったので、軽く会釈するだけにして、さっさとカミロの店に向かうことにした。同僚氏がいたらそれとなく探ることも出来たかも知れないが、まぁ、それは今言っても仕方のないことか。

　街に入ってしまえばこっちのもので、仮に追手がこの辺りをウロウロしていようと、商品を卸しにやってきただけの鍛冶屋に聞くことなんか、そうあるわけがない。俺とリケは程なくカミロの店についた。

　いつもの通り、倉庫に荷物を入れさせてもらい、カミロを呼んでもらう。いつものとおりに商談を終えたので、俺はカミロに切り出した。

「すまんが、少しお前に話がある。」

「お、なんだ？」

　俺はここでちらっと番頭さんを見た。カミロも頷いて番頭さんの方を見やる。番頭さんも頷いて、スッと部屋を出ていった。パタンと静かに扉を閉めていったのを確認して、俺は懐から手紙を出す。

「こいつを預かっている。この手紙の持ち主には了解を得た上で、中身は俺も確認している。」

「ほう？」

　カミロは封を切ってある手紙を読み始めた。すぐに眉間にシワが寄る。最後まで読んで、ため息をつきつつ、

「これをあんたが持っていて、今日二人だけで来たと言うことは、そう言うことと解釈していいのか？」

　と言ってくる。

「そうだな。お前の思うとおりだよ。ディアナさんはうちにいるし、事情はわかっている。お前は結構前からこのあたりの話を知ってた、という事でいいな？」

「ああ、その通りだ……俺はあんたを巻き込みたくなかったんだがなぁ。」

「そうもいかなかったんだよ。」

　俺は前回の帰りにディアナが襲われていた現場に居合わせたことを説明した。

「なるほどね。それはマリウス達には願ってもない幸運だったな。」

「まぁ、直接うちに来れたからな。」

「そうだな。この手紙は俺が始末しておこう。」

「ああ、頼む。で、俺は”わけあり”で係累もないから、マリウスさんを直接支援することはできない。腕前がどうあれ、一介の鍛冶屋が貴族の諍いに口を出せないからな。」

　これは何の偽りもない事実だ。直接手伝ってやれることがあればいくらでも手伝うが、一介の鍛冶屋が裏から貴族に手を回してどうこう、なんて真似は不可能である。

　カミロは頷きながら言う。

「まぁ、そりゃそうだ。」

「ただ、鍛冶屋として手伝える事があれば手伝ってやりたい。だが、俺は1週間に1回しかここに来ないだろ？連絡がどうしても遅れるのが心配でな。ここに来る頻度を増やすことは可能だが、それをして怪しまれたら元も子もない。そこで毎日連絡を取る方法はないかと思ってな。」

　カミロは俺の話を聞いてじっと考え込んでいる。俺はそのカミロに声を掛ける。

「おい、もう十分巻き込まれた後だ。俺が巻き込まれないかどうかは気にするな。」

「……それもそうか。」

　そしてカミロは俺に連絡手段を伝えたのだった。

## 連絡

2018年11月13日

　カミロのところを出て、家路につく。今回はいつもの鉄石と炭、それから塩とワインの他に、干した根菜類と、ちょっとだけだが胡椒も仕入れた。街を出る時にも衛兵さんに会釈をして出る。考えてみれば立ち番が同僚氏でなかったから、いつも３人で来てるのに今日は２人と言うのがバレづらくて、丁度良かった気はするな。

　帰りもいつもより時間をかけて警戒しながら進んでいく。結局の所、いつもよりも大分遅くにはなったが、特に何もなく家に帰り着く事ができた。

「ただいま。」

「お、エイゾウおかえり。」

「おかえりなさい。」

　持ってきた荷物の運び込みをサーミャとディアナにも手伝ってもらう。サーミャとリケが鉄石なんかを作業場に運び込んでいる間、俺とディアナで塩やワインを台所に運び込む。その作業中、

「あら、これは胡椒？」

　ディアナが胡椒に気がついた。

「ああ。カミロの店にあったから、買ってきた。あんまり大量に使う気はないけど、味が断然良くなるからなぁ。」

「あれ、じゃあ、エイゾウさんって胡椒使った料理食べたことあるの？」

「あっ。」

　しまった。この世界では地域差によって極端に高額ではない（少なくとも同じ重さの金と同額ということはない）が、気候の関係で栽培地が限られるため、それなりに高級な品ではある。

　それを食べたことがある、ってのは普通はそんなにない。さっきのはたまたま口にした程度の人間がする発言でもなかったし。

「うーん、俺は”わけあり”だから普段は内緒にしているんだが、”タンヤ”と言う家名がある。”エイゾウ・タンヤ”がフルネームだ。」

「魔法が使えるから、何となくそうかなとは思ってたけど、やっぱりそうなのね。」

「家名持ちとは言っても、わけありだから、エイムール家のためにうちの家が出張るってのは無理だけどな。」

　そもそも、同じ家名の家が存在したとしても、そこは当然俺の家ではないから、出張らせる家は存在しない。

「他の２人は知ってるの？」

「一応な。秘密にしといてくれ、って言ってあるからディアナさんにも言ってなかったとは思う。ディアナさんも秘密にしといてくれよ。面倒くさいことに巻き込まれかねない。」

「わかってるわよ。私も家名持ちだから、その辺の面倒くささは理解してるし。」

「それはそうか。」

　しかも、まさにそれで難に遭ってる最中だしなぁ。

「よーし、これで運び終わったかな。」

「そうね。」

「今日の晩飯は期待しててくれよ？」

「ええ、もちろん。」

　ディアナが笑顔でそう言ってくれて、俺は心底ホッとするのだった。

　その日の晩はいつものスープに砕いた胡椒を少し入れてみた。折角なので、塩漬け肉で日にちが経ってないものも塩抜きして焼き、胡椒を少し振ったものも出す。

「おー、美味いな！」

　大喜びなのはサーミャだ。獣人だとほぼ自給自足みたいな生活だから、胡椒みたいなものは使わないらしい。そもそも保存は乾燥だよりで、塩を使うこともそんなにないそうだ。

「親方の言ったとおり、一味違って美味しいですね。」

　リケも喜んでいる。リケの家でも保存は主に塩で、胡椒は使ってなかったらしい。ドワーフの男は大食いなので、胡椒なんか使ったら、あっという間に破産する、と笑っていた。

「あら、これくらいの胡椒でも全然美味しいのね。私はこっちのほうが好きかも。」

　そう言うのはディアナである。貴族には逆に胡椒の味しかしないような料理もあるらしい。それはちょっと俺も遠慮したいな。

　胡椒が安定して供給されるのかは知らないが、あるときはなるべく買ってくるようにしよう。

　明けて翌日。俺は朝の水汲みを終えたら、すぐに森の入口に向かう。他の３人は朝飯を食べた後、作業場でショートソードやロングソードの製作に取り掛かるはずだ。

　俺は森の中を進んでいく。いつも静かな森の中ではあるが、今日は朝早いこともあってかより一層静けさが深い。まだ森が目を覚ましていないかのようだ。その中を１人下生えを踏みながら行くと、やたらに自分の足音が大きいように感じてしまう。今日は俺一人だから、護身用のナイフとショートソードだけで、警戒をしていると言ってもすばやく移動できる。その素早さがかえって物音を大きくしているように感じて、いきおい速度を落としがちになりつつ、森の入口を目指して進む。

　やがて、いつもよりもかなり早く森の入口あたりに着いた。手近な木の一本に登る。子供の頃もそんなに回数をこなしたことがない木登りも、チートやインストールでなんとかこなせた。ここでじっとしていれば、街道を見つつ、姿を隠すことができる。

　なので身動きせず、街道を見張る。最初は良かったが、半時もすると決して若くはない肉体が辛くなってくる。しかしゴソゴソと動けばここに俺がいることがバレてしまう。なので少しずつ少しずつ体を動かす。

「スナイパーみたいだな……実際やってることはほぼ変わらんか。」

　俺はそうひとりごちながら待つ。

　それから１時間の間、幾人かの道行きがあったが、そのどれも俺の待ち人ではない。更にそこから１時間、やっと俺の待ち人が来た。その待ち人は街の方からきて、俺からほど近い位置でキョロキョロと辺りを伺い、誰もいないことを確認すると、街道脇にある森側の茂みに何かを隠して、そのまま都の方へと歩き去って行く。

　俺はその姿が見えなくなるのを確認しつつ、周りから誰も近づいていないことも確認して、木から素早く降りて茂みに走り寄る。そこに袋があったのでそれを回収して素早く森の中へもどり、街道から見えない位置で袋の中身を確認する。その中にはちいさな紙、そして薄緑のリボンが入っていた。紙には「確認したか？」と書いてある。

　俺は懐から取り出した筆記具で紙に「確認した」と書き込むと、再び茂みに戻り、街道側からは見えにくい場所に薄緑のリボンをくくりつけ、そこから少し離れたところに手紙を隠した。あとは森に戻って家に帰るだけだ。

　これがカミロと決めた連絡の方法である。カミロは街から都に行く人間と、都から街に行く人間を毎日入れ違いにするという方法で人をやっている。そこで、街道沿いの茂みに手紙を隠すことでやりとりをするのだ。街から都に行く人間が手紙をこの辺りの茂みのどれかに隠す。俺はそれを受け取ったら、元々隠された茂みに リボンを付けて返事を隠す。都から街に行く人間が目印を元に手紙を回収し、カミロに届ける。

　七面倒ではあるが、コレなら１日に１回カミロと連絡を取ることができ、かつ俺が街に行く必要もないし、カミロも街から出る必要がない。ただし、緊急時にはカミロが直接来ることでそれを示す。このときはもう目撃がどうとかではない。

　さて、これでマリウス氏を助ける下準備は整った。後は要請に俺が答えられるかどうかだ。

## 次の一手

2018年11月14日

　家に帰った俺は、昼食をサーミャ、リケ、ディアナの3人と食べて、午後からショートソードとロングソードの製作にかかる。午前中に俺が作業できていなかった分は数が減るが、この作業ペースなら納品するには十分な数だろう。胡椒を入れても１週間想定の1/2程度作れば、今の卸値なら４人食っていける。

「しばらくこの体制になるけど、これなら大丈夫そうだな。」

「そうですね。一般モデルが多めにはなるとは思いますけど、特に問題はないかと。」

「だなぁ。」

　リケがメインで作業をするので、俺は初日から高級モデルを作っていく。これはナイフの製作に移っても同じだ。都で動きがあって連絡が必要なくなるまでは変わらない。

　”仕事”が終わったらディアナと稽古だ。少しずつ動きが良くなってきているようには思う。ただ俺から一本取るには、まだかなりの時間がかかりそうな気配ではある。まぁ気長にやるか。俺が上手いこと教えられれば良いんだろうけどな。

　稽古が終わって夕食を済ませたら１日が終わる。また明日も連絡を待ってから仕事の予定だ。

　結局、３日ほどは特に何事も起きなかった。特に大きな内容のない手紙のやり取りをして、戻って鍛冶仕事をし、稽古をして飯を食って寝る、と言ういつものルーチンが３日続いただけだったので、ショートソードもロングソードも、そしてナイフもそれなりの数が出来ている。変化があったのは次の４日目だ。

　いつもの通り、木の上から茂みに手紙を隠すのをチェックして、隠した手紙を回収する。森の中で手紙を確認すると、

　『明日、一人で都に行く準備されたし。ここに迎えに来る。鍛冶仕事でどうしても必要な物があれば持参のこと。説明は都に行く途上で行う。』

　とあった。ずいぶん急だな。緊急っぽいのに、カミロが直接来なかったのは明日俺を迎えにくる必要からだろう。今日俺が街に向かうわけにもいかんし。鍛冶仕事で必要なものと言えば炉なんだが、持っていくわけにはいかんし、別に持ってくることを想定はしていないだろう。

　それ以外には特にない。強いて言えばハンマーがそれなりに手には馴染んで来ているが、チートにかかれば道具の質はどうとでもなる。これを書き、なおかつ俺を呼び出すと言うことは、都で俺に鍛冶仕事をやれと言うことだろう。まぁ、それでマリウス氏の役に立てるなら吝かではない。

　俺は了承の言葉を書いて、再び手紙を隠し、リボンを茂みに結びつけて、家に帰る。

　家に帰って昼飯の時、俺は都に行くことを説明した。

「そう言うわけで３人は留守番を頼む。期間はちょっと分からんが、２週間より長くなるようなら、一旦帰らせてもらえるようにはするよ。」

「鍛冶はどうしましょう？」

「続けてくれ。備蓄が結構あるから、しばらくは平気なはずだ。肉はまだ結構あるよな？」

「ああ。いざとなったらアタシが獲ってくるよ。」

「すまんが、頼んだぞ。街に行くのは休んでいい。どうせカミロはいないし、前に２週間行かなかったこともあるから、怪しまれはしないだろう。」

「わかった。」

「ディアナさんも、ここを離れないように。」

「わかったわ。ごめんなさい、私の家のために。」

「それは気にするなって言ったろ？」

「うん……」

　しょんぼりするディアナ。

「俺もディアナさんのお兄さんには、借りがあるからな。それを返すだけだ。」

　俺はつとめて明るくそう言う。ディアナもなんとかそれで折り合いはつけてくれたようだ。さっきよりも大分顔が明るい。

「さて、それはそうとして今日も仕事をするぞ。」

　昼飯も終わった俺は作業場に入ってそう言う。高級モデルは俺しか作れないからな。ナイフの高級モデルを集中的に作ろう。いつもよりはやや速度を重視する。チートのおかげで、品質はさほど落とさずに、次から次へ高級モデルが完成していく。

　この日の作成量は午前は作っていなかったにも関わらず、通常１日あたりの１．２倍ほどを作成することができた。これだけあれば、帰ってきてからすぐ卸しに行っても大丈夫だろう。

　この日の夕飯は少々豪勢にして、遠征の前の壮行会のようなことをした。明日からは飯作るのも俺じゃないしな。

　翌朝、木の上から街道を見張りつつ、朝飯の無発酵パンに塩漬け肉の薄切りを挟んだものを頬張る。いつもの護身用のナイフの他には特に何も持ってこなかった。もし何かあって、ハンマーを都に置いてくるようなことになったら面倒だし。

　ゆっくりと朝飯を食いながら街道を見ていると、遠くの方から馬車がやってきた。あれがカミロかな。

　やがて点のようだった馬車はなかなか大きな荷馬車（と言っても、デカい荷車を馬が牽いてると言った風情だ）で、それが近づいていることがハッキリしてくる。俺はさっさと朝飯を呑み込んでしまうと、御者の顔をじっと見た。間違いなくカミロだ。俺は周囲に人がいないことを確認すると、そろそろと木から降りて、森の中から馬車の様子を見張り続ける。

　やがて馬車は停止し、カミロが一旦降りて荷台の方に回り込む。俺は周囲を伺いつつ、素早くそこに近づいた。

「よう。」

　俺はカミロに声をかけた。カミロは驚いた風もなく、

「あんたか。さっそくで悪いが、荷台に乗り込んでくれ。」

　と返してきた。

「わかった。」

　俺は荷台に飛び乗り、御者台の近くまで移動する。それを見たカミロは御者台の方に移ると、馬車を走らせ始めた。思ったより速いな。

「早速だが手短に話すぞ。あんたには都で剣を打って貰いたい。出来れば今日明日中だ。」

　馬車を走らせながらなので、やや大きな声でカミロが話しかけてきた。俺も同じような大きさで返す。

「構わんが、何本だ？」

「１本で十分だ。なるべく良いやつを頼む。」

　となると特注モデルか。

「いいぞ。だが、理由を聞かせてもらってもいいか？」

「ああ。マリウスさんの家……つまりはエイムール家には家宝の剣があってな、それが盗まれたそうだ。盗まれた時の状況から見て、内部の人間しか知らないスキを突かれているし、マリウスさんはカレルがやらせたと踏んでいる。」

「それがどうして俺が剣を打つことになるんだ？」

「そう急ぐなよ。カレルは家宝の剣を盗み出されたことをもって、マリウスさんに後継者の資格なし、としたいようだ。カレルは取り返す算段を整えるべく情報収集中、と言ってるそうだが、おそらく自分の手元にあるんだ、取り返すも何もないわな。」

「お家の大事な家宝を盗まれるなんて、どういう管理をしていたんだ、お前には後継者の素質はない、俺が取り返して後継者として相応しいことを示す。ってことか。めちゃくちゃ怪しいが、そこは誰も突っ込まないのか？」

「カレルやその腹心たちは、家宝の剣が盗まれたときに都の近くにはいなかったからな。それがかえって怪しいが、盗み出したやつとの繋がりも何も出てきてない以上、疑いは疑いでしかないし、持って帰ってくれば、それは実績には違いない。ただ、探し始めてすぐに取り返しました！だと怪しいにも程がありすぎるから、まだ見つかってないことにしてるんだろう。」

　マッチポンプって言葉が恥ずかしくなるくらいの自作自演だな。

「そこで、あんたの出番だ。マリウスさんは、盗み出された家宝の剣が偽物

「え、それって……」

　恐ろしい想像が頭をよぎる。いや、まさかそんなことは。だが、カミロの言葉はその想像のとおりだった。

「そう、あんたがエイムール家の

## 都入り

2018年11月15日

「ち、ちょっと待て。新しい家宝の剣ってことは、俺の剣がエイムール家の家宝になるってことか？」

「そうなるな。盗まれたほうは”偽物”だから、当然マリウスさんが持っている”本物”が家宝だと言うことになる。で、その”本物”はお前の作ったものだ。」

「俺の作った剣がそんな事になって良いのか……」

「家宝の剣、つっても国宝でもないんだし、神様とかエルフが作ったんじゃなくて、最初にそれを打った人間がいるんだから、それと同じことだろ。」

「それを言われると、そうなんだが。」

「ここはマリウスさんの手伝いをすると思って諦めな。」

「うーん。」

　まぁ、家宝と言ってもやたら出来の良い剣に過ぎないのだから、それ以上の出来の剣を作ってしまえば「素晴らしい、さすが家宝として継いでいるだけある」となる、のだろうし、実際それだけの価値にはなるんだろう。

　国宝や、伯爵より上位の家格の家の家宝を作れとなると、材質やら製法やらで、ただの鋼では太刀打ちできる範囲を超えると思うが、伯爵家くらいなら、まだギリギリめちゃくちゃいい鋼、とかだろうし、ギリギリなんとかなるかも知れない。一応、マリウス氏には剣の材質を聞いておくか……。

「あんたがヘレンに打った剣を見せてもらったが、あれは相当の業物だって俺でも分かる出来だった。あれが打てるなら大丈夫だ。」

　考え込んでいる俺にカミロが声をかけてくる。

　ああ、今のところ唯一世間に出ていった、あれを見たのか。それで大丈夫と言うなら大丈夫なのだろうか。いまいち不安は拭いきれないが、乗りかかった船だ、やるしかないか。

「わかったよ。ただ、いくつか条件が重なると厳しいな。例えば、材質が鋼以上のものだったりすると危うくなる。なるべく良いものを作るようにするが。」

「ああ、それでいい。で、悪いんだが、そこに箱があるだろ？そこに隠れててくれないか？」

「これか？」

　確かにそこには大きめの箱がある。しかし俺が入るには少々小さいような。

「ああ、それだ。」

　チラッとこっちを振り返ったカミロが言う。俺は言われるままに箱の蓋を外すと、中を覗き込んだ。そこは思ったより深くなっている。と、言うか明らかに物理的に深さが合ってない。なるほど、そう言うことか。荷車に細工がしてあって、見た目よりもより多く物を運べるようにしてあるのだ。これなら俺一人は隠れられるな。俺はその中に潜り込むと、蓋を自分で閉めた。

　箱の中に隠れて結構な時間が経った。少なくとも俺が軽く居眠りするくらいには時間が経っている。馬車だし、街道が整備されているから、徒歩よりは相当早いのだと思うが、それでもかなりの距離を進んだと言うことだ。

　それからさらにしばらく馬車に揺られたあと、ガタンと大きく揺れて、馬車が止まる。周りは騒がしい。どうやら都の入り口についたようだな。

「次の者！」と呼ぶ声があちらこちらから聞こえるように感じる。前の世界で言う国境線の入国審査みたいになっているのだろうか。箱の中だからよく分からないのがもどかしい。馬車は時折進んでは止まる。衛兵の呼ぶ声もそれに従ってどんどん近づいてきている。

　やがて、俺達の番になったようだ。

「お前は行商人か。」

「へい。いくつかの品を運んで参りました。」

「少し改めるぞ。」

「へい。」

　２人の歩く音が荷車――つまり俺のいる方に近づいてくる。衛兵らしき足音が荷台に上がったかと思うと、俺とは反対側の荷物の蓋を開けたりしているようだ。その足音と蓋を開ける音は少しずつ俺に近づいてきて、相当肝を冷やしたが、結局は俺のところまで来ることなく、そのまま荷台を降りていった。

「よし、いいだろう、通れ。」

「へい。ありがとうございます。」

　カミロは慇懃に返すと、馬車を進める。やがて、街の中に入ったのか、喧騒が聞こえてくると同時に、馬車の振動が変わった。車輪の音も違ってくる。それでもまだカミロは俺に「出ろ」とは言わない。迂闊に出たり物音を立てたりしてはいけないと言う状況は変わらないようだ。

　街に入ったと思しき後も、道を曲がったり坂を登ったり、時折止まったりしながら、結構な距離を行く。やがて、止まった後に少し進んで、今までとは明らかに違う馬車の振動を感じると、再び馬車が止まった。目的地かな。

「おい、出ていいぞ。」

　カミロの声がする。俺は待ってましたと言わんばかりに蓋を開けて、箱から出ると、荷台でうーんと身体を伸ばした。腰がゴキゴキと音をたてる。前の世界の年齢のままだったら、腰が痛すぎて立てなかったかも知れない。

「ああ、辛かった。」

「だろうな。すまんが、あんたがここに入ったことを知られるわけにはいかんのでな。」

「わかってるよ。」

　俺は苦笑しながらカミロに返す。

「で、ここはどこなんだ？」

「ここはエイムール家所有の鍛冶場だ。私兵の武器なんかはここで作ったり、補修したりしているらしい。」

「ほほう。それにしてはやけに静かだな。」

　こう言うところだと水車を利用した鎚が動いてたりして騒がしいもんだと思っていたが。

「今は操業を止めて、マリウスさんが信頼できる何人かの職人だけ残してるみたいだからな。」

「なるほどね。」

　そりゃ”本物”を作り出すところを、大勢に見せるわけにはいかんわな。

「よっと。」

　俺は荷台から飛び降りる。ここはあくまで荷物を運び込むところのようで、火床やらはない。箱の中にいたから分からなかったが、ふと外を見ると、日がやや傾きかけてきている。朝一で向こうを経ったから、馬車でもかなりの時間がかかったということだな。

「さて、それじゃ急ぎ準備するか。」

「おう。俺達が着いたことは今マリウスさんのところに報告にやらせたから、すまんが早速取り掛かってくれ。」

「分かった。」

　俺はカミロに示された扉を開ける。さて、マリウス氏の一世一代のお手伝い、始めますか。

## 失敗と成功

2018年11月16日

　鍛冶場の中を見てみると、火床とフイゴ、金槌その他が揃っている。他に目を引くのは大きな鎚だ。見てみると上の方で外に軸が延びている。水車で動かすやつだな。動かし方はインストールが教えてくれるから、何とかなりそうだ。

　火床は魔法対応じゃないので自分で着火する必要がある。火床に炭を入れたら、火口になる木の皮と麦藁、それに板金とハンマーを持って金床に向かう。

　金床に板金をおいたら、裏返したりしながら端をハンマーで思い切り叩いていく。これをしばらくやっていると、板金の端が赤熱してくるのだ。木の皮に麦藁をのせて、そこに赤熱した板金を触れさせると、麦藁に着火する。それを急いで火床に持っていき、敷いた炭のあたりに置いて、あとは炭に火がつくまでフイゴを操作だ。

　しばらくフイゴを操作して、火が

　十分に火が回って温度が上がってきたので、置いてあった中で一番良さそうな板金を突っ込んで熱する。熱し終わったらまずは伸ばす作業だ。熱した板金を金床に載せてハンマーで叩く。なるべく組織のようなものが均一になるようにしていくが、なんだか感覚がいつもと少し違うな。ハンマーが違うからか？工房から持ってくれば良かったかな。こいつは特注モデルなので集中しながら叩いて延ばす。

　やがてロングソードの長さになった。ここからは形を整える作業だ。熱して叩く作業で、形を作っていく。完成した形は、刃の部分が直線的なロングソードだ。質実剛健さが出ている。

「おっ、出来てきたのか。」

　今までどこにいたのか、カミロが声をかけてきた。

「ああ、形はな。」

　俺はそう答えながら、火床に剣を入れて、温度を上げていく。焼入れの準備だ。フイゴを操りながら、ピッタリの温度を見極める。やがて、思ったとおりの温度に剣が熱されたので、火床から取り出して素早く水で急冷する。十分に温度が下がったら、また軽く火床の火に

「ううーん。」

　俺は困惑していた。

「どうしたんだ？出来たんじゃないのか？」

　カミロが俺の様子を心配している。

「いや、出来るには出来たんだが、この出来ではなぁ……」

　そうなのだ。俺が特注モデルを作った時の、煌めきのようなものがこの剣にはない。これでは良くて高級モデルの出来だ。この短時間でそれが出来てしまうのも十分チートではあるのだろうけど、次代の家宝を作ると言うのにこの出来ではな。

「十分いい出来に見えるけどな。」

「いやぁ。これじゃなぁ。」

　うちの工房と同じように薪も置いてあったので、その上に麦藁を置いて、今打った剣で斬りつける。麦藁はスパッと切れた。薪には刃が

「おお、凄い切れ味じゃないか。」

「いやぁ……これじゃないんだよなぁ……」

　カミロは興奮しているが、当然俺の特注モデルの切れ味はこうではない。これは高級モデルどまりだ。俺は自分のナイフを取り出すと、それで麦藁と薪を切る。麦藁は薪ごとストンと切れた。やはりちゃんと特注モデルだとこの切れ味だよな。

「お、おい、今の……」

「ん？ああ、俺が本気を出すと、これくらい切れる物が作れる。」

「そ、そうなのか……」

　カミロはちょっと引いている。そうか、ヘレンのは本当に外見を見せてもらっただけで、切れ味とかは見せてもらわなかったんだな。

「あんまりあちこちで言うなよ。」

「わかってるよ。と言うか、こんなの言ってもそうそう信じてもらえねぇよ。」

「そりゃそうか。」

　ナイフで藁束はともかく、薪まで切れちゃうんだもんなぁ。

「ちょっと何本か試してみるよ。」

「この打ったやつは？」

「欲しけりゃ譲ってやるよ。格安で。」

「相変わらず、がめつい鍛冶屋だよ、あんたは。」

カミロは笑って言った。

　俺はその後２本ほどナイフを作ってみたが、どれも高級モデル止まりだった。もうとっくに日は落ちていて、カミロの姿もここにはない。

　俺はここで作った高級モデルと、俺の護身用の特注モデルを見比べてみる。やはり輝きのようなものが全く違う。高級モデルにもある程度の輝きはあるが、特注モデルのほうは自ら光っているようにすら見える。心なしか、作ったときよりも、今のほうがずっと輝いているようにも見えるな。この違いはなんだ……。どうすればここの材料でこの輝きを生めるんだ。

「いや。そうじゃないな。」

　俺は気がついた。ここの材料だけで作ったもので上手くいかないならば、ここじゃない材料も使って作れば良いのだ。

　俺は火床の火を強くすると、そこにバラした護身用のナイフを入れて熱する。赤熱したナイフを取り出し、３分の１くらいに切り分ける。小さめの板金と切り分けたナイフを交互に板金の上に載せて、濡らした薄い麻布で巻いたら、そこに麦藁を燃やした灰をくっつけて、火床に入れて熱する。赤熱して塊に見えるそれを取り出し、チートをフル活用して、ここの板金と切り分けたナイフの鋼がくっつくように、ハンマーで叩く。

　この作業を何度か繰り返し、まとまったら、今度は延ばすようにハンマーで叩くが、まだここでは目的の長さまでは延ばさない。ある程度延びたら、真ん中に切れ目を入れて、折り返してまたまとめる。この作業を１５回ほど繰り返した。

　こうして出来た塊をまた熱し、今度は目的の長さまで延ばしていく。このときになるべく組織のようなものが均一になるように、ムラのようなものを消すように叩く。今度は最初に打った時の違和感はない。

　目的の長さまで延びた。ムラや歪みなんかは全く無い。ここから形を作る。熱して叩いてを繰り返す。折角消したムラや歪みが再び出ないように、真剣に見ながらだ。

　やがて出来た形は、最初に打ったようなものではなく、刃の部分が優美な曲線を描くものだ。最初に打ったときは意識しなかったが、家宝と言うなら、これくらいデザインに凝っていたほうが良いだろう。焼入れと焼戻し、磨きと研ぎもチートで全て完璧に仕上げる事ができた。

　俺はじっくりと出来たばかりの刀身を眺める。この輝きは確実に”特注モデル”だ。麦藁と薪を持ってきてセットし、そこに今作ったロングソードを軽く振り下ろす。

　次の瞬間、ロングソードの刃は地面に接し、ズルリと切れた麦藁と薪が、その両側に散らばっているのだった。

## 家宝の完成

2018年11月17日

　これで刀身そのものは完成した。そこらの剣では文字通り”太刀打ち”出来ないだろう。ただ、これをこのまま納品するわけにはいかない。家宝にしてはやたらとシンプルだからな。

　タガネを借りて（ハンマーやその他も借り物だが）、刀身に彫刻を施していく。この辺もチートの力を借りて、重量バランスを崩さず、強度も落とさず、かつ刃の曲線に合うように優美な文様を入れていく。植物の葉と茎のように見えるようなやつだ。剣先の方には花が咲いたような模様を入れる。これらは裏と表に入れていくから、結構な重労働である。これ下手したら刀身打ってる時より大変なんじゃないのか……。まぁ、だからこそ家宝としての格が上がる、ような気がする。

　チートのおかげで、迷わず、下書きなんかもなしで作業を進める。かなりの時間が経って、やっと刀身に彫刻を入れ終わった。次は鍔と柄頭だ。鍔にも植物が絡んだような文様を入れる。鍔の文様は立体的に見えるような彫り方である。鍔の真ん中にはエイムール家の紋章も入れてみた。柄頭は花の蕾のように見える彫刻だ。

　いつもの”座った太めの猫”は、革を巻いたら見えなくなるところに小さく入れた。ちょっとした”イースターエッグ”だな。

　彫刻を入れたときに出た”バリ”をヤスリを使って綺麗にしていく。文様がよりはっきりしてきたので、そこで止める。気がつけばもう相当遅い時間のようだ。眠気が凄い。これはこのまま作業続けても意味がないな。年をとってから、こう言うところの見切りはやたら早くなった。

　俺は火床の火を消すと、鍛冶場の中にあった毛布に包まって横になった。

「－きろ。おい、起きろ。」

　ゆさゆさと誰かに揺さぶられて目を覚ます。

「うーん。」

　俺はゆるゆると目を開ける。俺を揺さぶっていたのはカミロだったようだ。

「まったく、昨日出来ないって落ち込んでるかと思ったら、のんきに寝てるんだものなぁ。」

「いやぁ、徹夜は体に良くないからな。」

　カミロの言葉に俺は横になったまま、のんびりと返す。これも剣の本体が出来ていなかったら、こんなにのんびりはしてられなかっただろうけどな。

「身体は資本、ですか。」

　そこにカミロとは違う、聞き覚えのある声が聞こえた。俺は慌てて飛び起きる。

「マリウスさん！」

　そこでにこにこしているのは、街の入口なんかで散々見た、あの優男の顔だった。身体はあのちょっとボロっちい革鎧ではなく、立派な服を着ている。腰に佩いているショートソードは俺の打ったものなのが、嬉し恥ずかしい。

「お久しぶりですね、エイゾウさん。」

　マリウス氏は俺に丁寧に挨拶をしてくる。流石にこのところのゴタゴタで心労があるのだろう、顔に幾らか

「マリウスさん、私の名前をご存知だったんですか？」

「今回の件を頼むときに聞きました。名前も知らないまま、と言うのは内密の話にしても無礼ですし。」

「なるほど……。マリウスさん、私にそんな丁寧に接してくれなくて良いんですよ。街で会った時みたいで良いんです。」

　マリウス氏に丁寧にされると違和感が凄くて、会話がぎこちない。

「いえ、当家の恩人になる方に、無礼な真似はできません。」

　街で衛兵やってたときからそうだったけど、気が回るんだよなマリウス氏。

「いえいえ、こちらこそお気遣いは御無用です。私はあなたに借りがあるんですから。」

　俺がそう言うと、

「それでは、お互い同じ立場という事で、お互いに丁寧なのをやめる、と言うのでは？」

　ニッコリと笑いながら、マリウス氏が提案してくる。これ、呑まないと多分このままだよな。それもやだなぁ。

「わかりました……いや、わかった。そうさせてもらう。」

　こうして、（おそらく次期）伯爵とタメ口で話す鍛冶屋が生まれてしまった。

「とりあえず革を巻いてしまうから、少し待っててくれ。時間はあるか？」

「ああ、まだ大丈夫だ。」

「よし。」

　俺は剣の柄に革を巻く。チートの手助けで素早くキッチリと巻くことが出来た。

「これでよし。振るってみてくれ。」

「分かった。」

　俺はマリウスに剣を渡した。マリウスは受け取った剣を見て、

「綺麗な剣だな……」

　と感嘆している。少しの間、そのまま眺めていたが、我に返ったように剣を振り始めた。綺麗な剣筋だ。同じ剣術を習っていたのだろう、ディアナの剣筋によく似ている。ただ、ディアナの方は女性だからか、やや速度を重視した動きだったのに比べて、マリウスの方はもう少し弾くような動作が多く、パワータイプと言うか、そんな印象を受けた。

　しばらく一心不乱に剣を振るっていたマリウスだが、やがて動きを止めたので、俺は声をかけた。

「どうだ？」

「凄いよ、この剣は。今まで持ったことのある、どの剣よりも凄い。」

　心底からといった感じで、マリウスは言う。

「まぁ、俺の作れるほぼ最上級だからな。そんじょそこらの剣には負けない……」

　おっと、忘れるところだった。

「そう言えば、”元の”家宝の剣の材質は何なんだ？」

　これを聞いておかないとな。かなりいい出来ではあるが所詮は鋼だ。オリハルコンだの、アダマンタイトだのといった魔法の金属で出来ていたら、その出来が多少悪いぐらいでは俺の剣は負ける。

「あの”偽物”はエイムール家が伯爵の爵位を貰ったときに一緒に下賜されたもので、当時の王が、王国で一番腕の良い

「つまり、ただの鋼ってことか。」

「その通り。」

　とりあえず一つはクリアだ。普通の人間だとオリハルコンとかは無理なのか。俺はいけるのかな……。

「あと一つ、家宝は今まで見せたりはしてなかったのか？」

「内々の儀式の時なんかには持ち出すが、それ以外では門外不出だからな。うちの記録にも”王から爵位と剣を下賜されたので”うんぬんしかない。」

「じゃあ、”家宝と聞いていたあれと形が違うぞ”と外野が騒ぐことはないわけか。」

「そうなるな。」

　じゃあ、大丈夫か。前の世界の博物館的な感じで展示とかされたことがあったらどうしようかと思ったが、どちらかと言うと神具とかそう言う扱いで、衆目に晒されたことはないようだ。

「どうにもならなくなりそうだったら、比べてしまえばいい。”偽物”に、この”本物”が負けなければ、”恐れ多くも王から下賜された剣”がどちらなのかは分かるだろ？」

　マリウスはニヤリと不敵な笑みを浮かべて、そう言うのだった。

## 家宝の納品

2018年11月18日

「さて、じゃあ次は鞘だな。」

　俺はカミロとマリウスに声を掛ける。

「ああ、そうか。鞘もいるよな。」

　カミロがそう言ってくる。普通のロングソードなら、特に気にせずにパパっと作って終わりなんだが、さすがに家宝となるとな。

「まぁ、この後どれくらい家宝にするのか知らないが、家宝と言うなら、それなりの鞘がいるだろ？」

「明日までに出来るのか？」

　これはマリウスだ。

「まぁ、出来るところまでにはなるけど、今日中には仕上げるよ。」

「あまり華美にしなくていいぞ。”偽物”の鞘もさして華美ではなかったからな。」

「そうなのか。じゃあ、そんな感じで作っておこう。」

「ああ、頼む。」

　ここで彼らは一度出ていった。次に来るのは完全納品の時だ。さて、始めるか。

　基礎は木製にする。材料として置いてある木の中で、古めで詰まっているものを選ぶ。この辺の目利きもチート頼りだ。家宝なのに新しめの木なのは、最近作り直した、と言えなくはないので大丈夫だろう。国宝とか神器とかだと鞘の作り直しもなかなか大変なんだろうけどな。

　木の上に剣を置いて、大きさを測ったら、剣の形に木をくり抜く。半身ずつでくり抜いた木の板を二枚用意し、ニカワで張り合わせたら、試しで作った”高級モデル”のナイフで外形を作っていく。彫刻もこのナイフでいけそうなので、真ん中に花の茎と葉のような文様を一本だけ入れる。

　そこまで終わったら一回全体をナイフで綺麗にする。

　次に、蜜蝋を布にとって全体に塗っていく。それなりに高い品だとは思うが、まぁ家宝の鞘だ、ケチケチすまい。

　結構な時間をかけて塗り終えたら、次に火床に火を入れる。あまり大きくない板金を熱し、ハンマーで叩いて薄く延ばしていく。延ばした鋼の板は、鞘の縁取りに使うのだ。普通はかなり時間のかかる作業だが、チートのおかげで一度で望む長さと形になった。

　鞘の周囲に延ばした板を取り付け、タガネで彫刻を施していく。こちらも植物の葉のような文様だ。やがて日が沈む頃、ようやっと鞘が完成した。起こされたのは割と朝早かったし、マリウスとカミロもそんなに長居はしてなかったので、鞘一つで相当の時間をかけたことになる。それでも普通なら、下手をすれば１月ほどもかかってしまいそうな作業を１日で終えたのは、やはりチートと言う他ないな。

　鞘に剣を収めてみると、なかなか凝った作りに見える。これなら”偽物”に見劣りはしないだろう。１人ほくそ笑んでいると、カミロとマリウスがやってきた。

「調子はどうだ？間に合ってないなんてことはないよな？」

　カミロが朗らかな様子で聞いてきた。これは出来上がってないことを微塵も考えてないな。その信頼が嬉しくもこそばゆい。

「ついさっき出来上がったとこだよ。これでどうだい？」

　俺は出来たばかりの剣と鞘を２人に見せる。

「おお……」

　マリウスが感嘆の声を漏らす。

「これなら、”偽物”に対抗することも容易だろう。」

「そうか。なら良かった。」

　にこやかに言うマリウスに、俺はややぶっきらぼうに返す。ちゃんと自分が作ったもので喜んで貰えるのは嬉しいが、気恥ずかしさのほうが今はまだ大きい。

「エイゾウ、本当にありがとう。」

「なに、あんたには借りがあるからな。それを返しただけさ。」

　マリウスが右手を差し出してくる。俺はその手を取ってガッチリと握手した。

「とりあえず今日のところは休んでくれ。また明日の朝迎えに来る。」

　カミロが俺に言う。

「ああ、分かった。」

　夜中にこっそり出て行きたいところだが、門は夜中は閉まっているだろうからな。朝早い時間、ごった返してるときに紛れて出てしまうほうが怪しくないのだろう。

　俺は素直にカミロの言葉に従って、寝てしまうことにした。

　翌朝、カミロが迎えに来るよりも早くに目が覚めた。置いてある水瓶の水で顔を洗ったりして、家に帰る準備だ。とは言っても、持ってきたものはないので、大層な準備はない。試しに作ったナイフのうちの１本を、ここで潰した護身用の代わりに貰っていくことにするくらいなものだ。家に帰ったら新しく特注モデルを１本作って、それを護身用にしよう。

　日が昇ってやや経った頃、カミロとマリウスが来た。それに他にも何人か女性がいる。え、何事？

「おはようさん。よく眠れたか？」

　カミロがニヤニヤしながら言ってくる。俺は戸惑ったまま、

「あ、ああ。お前たちが来る前に起きられたよ。」

　と答えた。前の世界で椅子寝とかはしょっちゅうしてたからな。戸惑っている俺に、今度はマリウスが声をかける。

「急で悪いのだがな、こいつに着替えてくれ。」

　そう言いながら、豪奢な服を見せてくる。

「え？」

　俺の戸惑いはより一層深まる。今から帰るだけなのに、わざわざ豪華な服に着替える理由はなんなのだ。

　完全にテンパっている俺を他所に、マリウスは一緒に来た女性たちに、

「彼はこう言う衣服に慣れてない。着替えるのを手伝ってやれ。」

　と命じている。女性たちは頷くと、俺を取り囲んだ。

「い、いや、待ってくれ。なんで着替えるんだ！？」

　俺はほとんど悲鳴に近い声をあげる。その間にも女性たちはテキパキと命令をこなそうと――つまり、俺の服を脱がそうとしている。俺は服を抑えながら２人の答えを待つが、２人共ニヤニヤしたまま、答えを返さない。あまり力を入れて抑えると服が痛みそうなので、一瞬力を緩めたりするが、女性たちはそのスキにドンドン服を脱がしてきて、俺は下着だけになった。こうなったらもう新しい服を着せてもらう他ない。豪奢な方の服は確かに俺じゃ着方がわからんからな。

　どうしようもないので、俺はされるがままにした。

「失礼します」

　と言って、女性たちが絞った布で身体を拭いてくる。そう言えば風呂がないからろくに清めてなかったな、などと思い返す。

　変な抵抗もしなかったからだろう。そうやって現実逃避をしている間に、着せられる方は早く事が片付いた。

　服はマリウスの服に似たデザインで、貴族っぽい感じではある。事態に頭が追いついてなかったが、よくよく見ればカミロの身なりも大分良いものになっていた。

「それで？俺にこれを着させてどうするんだ？このまま帰らせる、ってわけじゃないよな？」

　俺が憮然とした表情で二人に聞くと、マリウスは笑いをこらえようともせず、笑いながら言った。

「これから、我が兄上殿と対決するのさ。それに貴殿も付き合ってもらう。」

## 対決のはじまり

2018年11月19日

　着替えた、と言うよりは着替えさせられた俺は、マリウスとカミロと共に、馬車に揺られていた。どうしても憮然とした顔になってしまう。この姿をサーミャやリケに見られてないのだけが救いだ。

「そう怒るなよ。お前だって”偽物”は見たいだろ？」

　カミロがとりなしてくる。

「見たくないとは言わんが……。」

　国王下賜の家宝、となればそれなり以上のものだろうし、気にならないかと言われたら、気になるに決まっている。

「これは俺の要請なんだ。二人を巻き込んでしまったし、顛末については二人に知っておいて欲しいからな。」

　マリウスが言う。俺もそれ自体に異論はない。

「それで、俺はなんでこの服を着なきゃならなかったんだ？」

　俺が引っかかっているのは、その一点だけだ。

「包み隠さずに言えば、ただの鍛冶屋をそう言う場に同席させるわけにいかない、ってことだ。俺はくだらない話だと思うが。それで貴族の服を着せた。」

　マリウスが答える。

「で、エイゾウは北方から来た俺の客と言うことにしてある。カレルも何人か連れてくるそうだから、客人を連れて行くことは問題にはならないだろう。カレルにしてみれば、第三者の立会いの元に、高らかに奪還を宣言できたほうが都合がいいのもあるしな。カミロ殿についても同じさ。行商人の情報網で話が広まることを期待してるんだろう。さもなきゃ、”行商人ごとき”の同席を、あのカレルが認めるわけがない。」

「なるほどね。」

　”行商人ごとき”はマリウスではなく、カレルの言葉だろう。マリウスは次期伯爵のはずだが、貴族にしては”進歩的”だ。街で衛兵してりゃ色んな人見るだろうし、その経験が活きているのだろうか。行商人がよくて鍛冶屋はダメ、と言うのも、情報の拡散を考えたら分からない話ではない。

「その辺りが全部裏目に出るということか。」

「そうなるな。」

　俺と言う第三者に見られるのも、カミロと言う情報網を持った行商人に見られるのも、カレルの失敗を広める結果にしかならない。カレルが友人知人を連れてくることも、同じ結果を生む。それであっさり認めてくれればいいが。俺はそう思わずにはいられないのだった。

　やがて大きな屋敷に到着する。ここがエイムール伯爵家の屋敷だろうか。

「ここがメンツェル卿の別邸だ。」

　マリウスが教えてくれるが、俺には聞き覚えのない名前だ。

「メンツェル卿は、この国の侯爵だよ。」

　カミロがフォローしてくれた。侯爵ってことは伯爵より一つ上か。

「へぇ。エラいとこに来たな。」

「父上がメンツェル卿とは旧知の中でね。父上よりは若いが、懇意にしていた。その縁で、この件についての裁定を任されてもいる。」

　そう言うのはマリウスだ。なるほど。侯爵くらいだと国王に対する報告も直接だったりするんだろうな。

　屋敷で馬車を降りると、使用人さんだろうか、物腰の丁寧な若者が案内をしてくれ、広い部屋に通される。俺達が来たときは、まだ部屋には誰もいなかった。マリウスが席に座ったので、そこの近くに俺達も腰を下ろす。こう言うときの席次は俺には良くわからないのだが、前の世界とさほど変わらないようだ。”本物”の家宝の剣は、布に包んだ状態で、マリウスのそばに置いてある。

　ややあって、３人の男が入ってきた。そのうちの一人が不敵な笑みを浮かべている。どことなくマリウスに似てるから、あれがカレルか。特にいけずそうな顔とかではない。たまたま、欲に目がくらんでしまったんだろうなぁ……。残りの二人もそれなりの地位の人間なんだろう。カレルたちは俺達に向かい合う位置に腰を下ろす。

　カレルが来るまでは、俺達となんだかんだと小声で雑談をしていたマリウスだったが、入ってきた途端に口をつぐんで黙り込んでいる。

　そこから更にいくらか経って、豪奢な服を着た壮年の男性が入ってきた。がっしりした体躯に、口ひげと頭髪をピッチリと整えている。あれがメンツェル侯爵か。俺達は一斉に立ち上がる。侯爵は上座に着席すると、俺達にも着席を促した。

「さて、エイムール家から家宝の剣が奪われ、それをカレル殿が取り返したという事であったが？」

　侯爵がカレルたちに問いかける。がっしりした体躯から受けるイメージに違わぬ、低いどっしりとした声で、この声で怒鳴られでもしたら、大抵の人間は震え上がるだろうな、と思わせる。

「はい。国境付近にいる賊の仕業でしたが、昨日なんとか取り戻してまいりました。」

　カレルの方は高めだが落ち着いた声だ。布に包まれた長いものを出すと、それは剣だった。マリウスが言っていたとおり、あまり華美な装飾のない、素直な鞘に収まっている。鍔や柄の作りも同様で、良い腕の職人の手になるものであることが見て取れた。

「それで、私に裁定を仰ぎたいこととは？無くなったものを取り返したのであれば、それで問題はなかろう。後はエイムール伯爵をそこのマリウス殿が継げば、万事解決ではないのか？」

　侯爵がカレルに返す。侯爵はカレルにあまり良い印象がないのか、それとも元々こう言う感じの人なのか、つっけんどんな物言いだ。

「いえ、家宝を盗み出され、手をこまねいているだけだった者は、伯爵家の長に相応しくないのではと存じます。」

　カレルがマリウスをちらっと見ながら反論する。始まったか。その言葉を聞いて、侯爵は考えこんでいる。

　カレルの言っている事は分からなくはない。家の大事なものを盗まれて、バタバタしているだけで何も出来なかった、と言う人間が、そこそこ以上の家格の家の家長として相応しいかと言うと、それは怪しいとは思う。家格が高ければそれだけ関わる人間は多い。彼らはもちろん、領地の人々の生活が家長にはかかっているのだ。家長にはこう言った困難を解決出来るだけの能力が必要で、今回マリウスはそれを示せなかった――ことになっている。

　それらは勿論、本当に家宝が盗み出され、賊に対して手をこまねいているだけだった場合の話で、今回はそうじゃないからな。だが、そうじゃないと証明することも俺達には不可能だ。カレルが自分が引き入れた賊を始末している可能性もあると俺は思っている。その場合は「家宝が盗まれたので、賊の居場所を突き止め、始末し、取り返した」と言うカレルの話は表面上は整合性が取れているし、何より”嘘ではない”からな。

　だがしかし、俺達には切り札がある。こっちはこっちで中々の綱渡りだが、カレルが思いもよらないような切り札だ。

　マリウスが口を開く。

「一つよろしいでしょうか。」

「構わない。言ってみたまえ。」

　侯爵が促す。

「私がゆっくりしていたように見えたのは、あの家宝は偽物だったからです。本物は手元にあったので、じわじわと賊を追い詰めればよいと考えておりました。それが手をこまねいていたように見えてしまったのは、大変に反省しているところでありますが、素早く片付けるか、じわじわと追い詰め、締め上げるかの違いである、と言うことはご承知いただきたく。」

「ほう？」

　マリウスの反撃に侯爵が片眉をあげる。ガタンと言う音がしたので、そちらを見ると、カレルが思わずだろう立ち上がっていた。

「ここに、その”本物”があります。」

　マリウスが傍らに置いていた布の包みを解き、鞘に収まった剣を出した。俺の打った”本物”の剣を。

## 決着

2018年11月20日

「そんなはずはない！」

　カレルが大声で叫ぶ。実際に「そんなはずはない」んだから、そりゃ当たり前だけどな。

「カレル殿、落ち着きたまえ。」

　侯爵がカレルをたしなめる。渋々と言った感じでカレルは席に着く。同行の２人の様子を伺うと、片方は単に驚いているが、もう片方は苦々しげにしている。驚いてる方は事の詳細を教えてもらってなかったようだな。ある意味幸いしたとも言える。苦々しげな方は貴族っぽい服を着ているが、もし貴族なら、もう少し本心を隠すことを覚えないと、権謀渦巻くところに行ったら、あっという間に取り殺されるんじゃないか。

「それで、”本物”とはどういうことかね？」

　侯爵はマリウスに尋ねる。

「ええ、父の残した文書で分かったのですが、実はエイムール家では儀式などの時、対外的には”偽物”を用意して使っておりましたが、実際には別に”本物”があったのです。”国に一大事あれば、家督を継ぐものが本物を持って国難に立ち向かえ”、父の残した文書にはそうもあります。」

　マリウスは懐から紙（おそらくは羊皮紙だろう）を取り出して、侯爵に差し出した。侯爵はそれを受け取り、目を通している。

「ふむ、確かにエイムール伯の字だな。」

　侯爵の言葉にカレルの目が見開かれるが、そりゃお前、こんな話のときに念入りに偽造してないわけがないだろ。旧交のある人間の目をごまかせるとなると、腕の良いやつに頼んだには違いないだろうが、そこはカミロの仕事だろうな。チラッとカミロを見ると、一瞬だが俺にウィンクをしてきた。おっさんがおっさんにウィンクすんなよ。

　カレルが何かを言おうとしたが、マリウスは先んじて立ち上がり、

「兄上はこの文書が見つかった頃、なにやら他所に出かけておいでで、今日までお会いすることもかないませんでしたので、お伝えするのが遅れました。大変申し訳ない限りです。」

　そう言って頭を下げる。カレルは浮かせかけた腰を再びおろした。怪しいには怪しいが、辻褄は合ってるな。

「だ、そうだが、カレル殿はなにか異論はあるか？なければ問題なし、と陛下にはご報告差し上げようと思うのだが。」

　侯爵がカレルにとっては死刑にも等しい言葉を、それとは知らず投げかける。だが、今ならまだ「血気に

　家督相続はもう無理かも知れないが、この場でベストなのはその結末だと俺は思う。その後、マリウスが親父と兄貴の死因の捜査をしている間に身を隠すなり、取引するなりすればいい。

「いえ、やはりこちらが”偽物”で、あちらが”本物”などという言葉は信じられません。」

　だが、カレルはこの場での決着を望んだ。望んでしまった。それこそがマリウスの置いた駒の前にキングを置く行為であるのに。

「分かりました。であれば、その証を立てましょう。」

　マリウスは事もなげに言う。俺の製品に対する信頼の証ではあるが、若干勘弁して欲しい面もあるな。

「如何にして行う？」

「実際に試したほうが早いでしょう。お庭をお借りしてもよろしいですか？」

「構わぬ。カレル殿もそれでよろしいか。」

「ええ。」

　移動のため、全員が席を立つ。カレルはもう隠しもせずに、マリウスの方を睨みつけている。それをマリウスは余裕綽々に受け流すのだった。

　こうして、侯爵邸の中庭で最後の対決が行われることになった。お互いに”家宝の剣”を持っているが、さすがにこれで切り合うわけではない。

　中庭の土に俺の作ったほうが突き立てられている。我が作品ながら、抜いたら王様になれそうな雰囲気だな。そこに槍を持った若い兵士が近づいてくる。彼はこの屋敷の衛兵――侯爵の私兵だ。今から彼が俺の作った剣の横腹を突く。もしそれで剣にダメージがあれば、俺が作ったものが”偽物”と言うことだ。ただ、チラッと見たが、あの穂先の出来なら、俺の剣は材質がただの鋼であろうと50回は耐える。

　果たして20回ほど兵士くんが突いたが、槍の穂先がダメになっただけで、俺の作った剣には傷一つない。

「バカな……」

　小声でそう呻くのはカレルだ。そりゃそうだろう。たった1日や2日でこんなもの用意できるはずがない。普通ならな。侯爵も感嘆した様子で剣を褒める。

「さすがは国王陛下より下賜された剣だ。美しさと強度を兼ね備えておるのだな。」

「さようでございます。これぞまさしく”本物”と呼ぶに相応しいかと。」

　そこにマリウスが乗っかっていく。まずはうちの剣の性能は見せた。

「それでは、カレル殿の剣だな。」

「はい。」

　カレルが同じように土に剣を突き立てる。そこで侯爵が

「おい。代わりの槍を持て。」

　とさっきの兵士くんに命ずるが、

「いえ、それには及びません。」

　マリウスはそう言うやいなや、カレルの”偽物”の横に刺さっていた”本物”を抜くと、”偽物”に斬りつけた。金属音も何もなく、”偽物”が中程から断ち切られる。カラン、と断ち切られた上半分が音を立てて転がった。

「この強度、この切れ味、これらを持ってこちらが”本物”であることは間違いないと思われますが、いかがでしょうか。」

　マリウスがニッコリと侯爵に対して勝利を宣告する。

「う、うむ。これほどの切れ味、戦場に出れば一騎当千の働きができるであろう。これこそ本物に間違いあるまい。」

　さすがの侯爵も、目の前で起きた出来事にやや理解が追いついてないが、これを見せられたら認めるも認めないもない。驚きながらも、本物はどちらかを宣言した。

「と、言うわけで、

　やや持ち直した侯爵がそう宣言する。これで終わったな。さっさとこいつを脱いで家に帰りたい。そう思った時、

「うわぁぁぁ！！！」

　カレルがそう叫んでマリウスに飛びかかろうとした。手にはナイフを持っている。俺はチートのおかげでその動きを捉えることが出来たが、ここからでは間に合わない。だが、その瞬間、俺は別の動きを捉えた。マリウスだ。

　マリウスの右手が俺の剣を握ったまま、物凄いスピードで跳ね上げられ、まるでそこには何もないかのように、

　音もなく断ち切られ、泣き別れになったカレルの上半身はマリウスに届く前に、どう、と言う音を立てて地面に転がった。

## 後始末

2018年11月21日

「閣下、お庭を

　マリウスが侯爵に頭を下げる。この辺りは土だから入れ替えなんかは簡単だろうが、それで終わる話でもないだろうからな。だが、侯爵は怒ったりはせず、このような陰惨な場であるにも関わらず、笑って言った。

「いや、気にせずとも良い。いやはや、素晴らしい太刀筋で”賊”を討ち果たすものだな、

　今、マリウスを「殿」ではなく、「卿」と呼んだな。つまり、これは侯爵がマリウスを伯爵と認めたということだ。そして、カレルを”賊”と言ったということは、侯爵としては、彼はもうエイムール家の一員から外れたのだ。

「しかし、当家の恥をお見せすることになってしまいました。今後何かございましたら、なんなりと。」

「うむ。そこまで言うなら覚えておこう。おい、そこの二人。」

　再び頭を下げるマリウスに侯爵は頷き、カレルの連れてきた二人に声をかける。

「は、はい。」

「な、なな何でしょう。」

　二人は起きたことに頭が全く追いついていないようだ。ある程度予想してた俺達と違って、向こうは完全に想定外だろうからな。

「ここで起きたことは他言無用である。もし漏らした場合は……わかっているな？」

　えらくドスの聞いた声で脅す侯爵。予想に違わず、二人は震えながらガクガクと頷いている。可哀想に。

「よし。おい、誰か！」

　侯爵は使用人を呼んで、二人にはいち早く引き取ってもらった。二人にとってもその方がありがたいだろう。俺達も中庭を離れて、元いた部屋に戻る。後は侯爵家の使用人が片付けるらしい。

　その場に置き去りになるカレルを、マリウスが一瞬だけ、悲しそうな目で見ていたのが印象的だった。

　部屋に戻ると、今後の方針についての打ち合わせを侯爵とマリウスが始める。俺達は席を外しても良かったし、侯爵もそうしたかったようなのだが、マリウスが

「閣下には多くを申し上げることが出来ず、大変心苦しいのですが、彼らには事の顛末の全てを知る権利があるのです。」

　と押して、侯爵もそれを認めたため、同席することと相成ってしまった。

　まず、マリウスがエイムール家と伯爵の爵位を継承する。これはもう1週間以内にも行うらしい。盛大な式典は無いにせよ、内々で行われる祝宴はあるようなので、家に帰ったらディアナをすぐに送らなきゃな。後でマリウスとカミロと算段しなければ。

　そして、カレルの処遇についてだ。遺体は一旦こっそりとエイムール家の墓所に埋葬するが、公式には知慧を身につけ、後々マリウスの補佐をするために、諸国を周ることにしてしまう。これは街の人々の包み隠さない声を得るために、身分は隠して行うので、気遣いや詮索は無用であると諸国には伝えられる。普通、他国でも伯爵家くらいの人間が来たら、それなりのもてなしが必要だが、それはいらないし、スパイではないから安心してくれ、と言うことだ。

　これらが簡単にまとめた結論で、エイムール家のゴタゴタはこれで一件落着と言うことになる。

「それでは、よろしくお願いいたします、閣下。」

「ああ。こちらこそ。」

　マリウスと侯爵が立ち上がって握手を交わす。まとめれば短いが、時間にすればそこそこあった打ち合わせもこれで終わりだ。やれやれとは思うが、それは顔に出さずに俺も立ち上がる。そこに、侯爵が声をかけてきた。

「ときに、卿のお客人は、剣術の心得がおありなのかな？」

　射抜かれるような目でこちらを見ながら聞いてくる。

「いえ、特にはございませんが。」

　俺は内心ドキドキしながら答える。終わってホッとしたところでこういうの、ホントやめて欲しい。

「先程、あやつの動きにいち早く反応していたのが、そちらだったのでね。腕に覚えがあるお方かと思い伺った。」

「なるほど……。護身のために多少の剣は振るえますが、剣術と呼べるようなものではとても。」

　俺がそう答えると、侯爵の目がスゥッと細められて、威圧感が増す。

「まぁ、そう言うことにしておこう。いずれ機会があれば、お手合わせ願いたいものだ。」

「いえいえ、とてもそんな腕ではございませんので、ご勘弁を……」

　俺は冷や汗をかきながら頭を下げる。侯爵はそれを見て、笑いながら部屋を出ていった。

「いやぁ、エイゾウは凄いな。」

　侯爵が出ていった後、声をかけてきたのはマリウスである。さっきまでの

「何がだ？」

　俺には何が凄かったのか分からない。ただただ恐縮していただけだ。

「最後のあの時、侯爵閣下は相当に威圧してたのに、受け流してただろ？」

「そうなの？」

　いや、なんか威圧感あるなぁとは思ってたけど。

「あれは並の人間なら、言葉を発することすら出来ないぞ。」

「隣にいた俺でも結構来たくらいなのに、そんな気配もなく普通に受け答えしてるんだものなぁ。」

　マリウスに乗っかって、カミロもぶーぶー言ってくる。あれってそんな凄いことだったの。

「閣下は武でならしたお方でな。

「それはそれは……」

「悪い人ではないから、そこは心配するな。俺もお忍びのお客人で通すよ。」

「そこは本当に頼んだぞ。」

　これ以上、面倒くさそうな人に目をつけられてたまるか。俺は心底マリウスの健闘を祈らずにはいられなかった。

## 帰還

2018年11月22日

　３人で侯爵邸を辞して、エイムール家の屋敷に向かう。もう諸々が済んだのだから、一刻も早くこの服を脱ぎたい。俺は都に着いた後、真っ先に鍛冶場で作業し、そこから直接侯爵邸に行ったのでエイムール家に行くのは初めてである。

　エイムール邸は侯爵邸よりも小さくはあるが、立派な門構えの邸宅だ。俺とカミロは応接間だろうか、立派な内装の部屋に通された。マリウスは今はいない。多分よそ行きの服から着替えてるんだろう。俺も着替えたい……と思っていたら、使用人らしき中年の男性に

「エイゾウ様、こちらへどうぞ」

　と俺だけが呼ばれた。

　廊下を使用人の人と歩く。応接間に来るまでの廊下もそうだったが、前の世界で受けたイメージのように、壺やら鎧やらは飾ってない。ところどころにタペストリーが壁を飾っている程度だ。そんなに長くもない距離を行くと、部屋があり、使用人の人が扉を開けて、

「どうぞ、お入りください」

　と促す。俺が素直にその指示に従って部屋に入ると、中には女性の使用人が何人か待っていた。後ろで扉が閉められる。とは言っても、別に何か"大事なこと"が起きるわけではなさそうだ。傍らに畳まれた俺の服がある。

「着慣れないと大変でしたでしょう？今、お着替えをお手伝いいたしますからね。」

　女性の使用人の人がテキパキと貴族の服を脱がしていく。着方がわからないから、脱ぎ方もさっぱりだったので助かる。こう言うのは下手に抵抗すると、かえって時間がかかることを今朝学んだので、されるがままにしておく。自分の服も自分で着られるが、着せてくれると言うなら、もうそれに従おう。

　手慣れているのだろう、あっという間に着替えが完了して、いつもの俺の村人Aって感じの格好になった。実に落ち着くな。ああ言う豪奢な服は俺には合わない。俺が開放感を楽しんでいると、使用人の女性たちがクスクスと笑っている。

「なにか？」

「いえ、エイゾウ様はそちらのお姿の方を、殊の外好んでおられるようだなと思いまして。」

「ああ。俺はただの街のおじさんだからなぁ。それにほら、こっちの方が似合ってるし、格好いいだろう？」

　俺が茶化すように、笑いながらそう言うと、

「ええ、本当に。」

　使用人の女性たちはより一層笑うのだった。

　着替えも終わったので、案内してくれた使用人の男性と一緒に、元の応接間に戻る。中ではよそ行きより大分ラフな感じの服に着替えたマリウスとカミロが、お茶を飲みつつ談笑していた。

「おお、戻ってきたか。」

　最初に反応したのはマリウスだ。

「ああ。着替えると、肩がガチガチになってたのがよく分かるよ。それに、俺が貴族に向いてないってのもよーく分かった。」

　俺は笑いながら返す。カミロがそれに乗っかって、

「違いない。どっちの格好でも、お前さんに対して畏まろうって気持ちがちっとも起きないしな。」

　と混ぜっ返し、俺達３人全員で笑うのだった。

「さて、今回の件については大変世話になった。礼を言う。」

　マリウスが頭を下げる。

「最初に言っただろ。街でさんざん世話になったんだ、これはその恩返しさ。」

「そうそう。エイゾウはともかく、包み隠さずに言えば、俺だって伯爵家との繋がりができたんだ、俺は大したことしてないし、気にしなさんな。」

「そう言ってもらえると大変ありがたい。」

　マリウスが気弱そうに微笑む。普通に考えたら俺達は伯爵家の重大な秘密を握っているからな。俺達がそれを使って、積極的に何かしようという気がないことは伝わったようだ。

「それで、大々的に褒賞を与えるわけにはいかないのだが、心ばかりの礼はしたい。」

「俺は今後も取引を続けてくれたら文句無いよ。伯爵家と取引があるってだけで十分に釣りが来る。」

　カミロが要求を出す。ずいぶん控えめだが、伯爵家御用達商人となれば、それだけで箔が付くのも事実だろう。

「わかった。カミロが扱っているものは、今の贔屓のところを圧迫しない程度に取引しよう。エイゾウは？」

「俺か？」

　とは言われてもなぁ。正直これが欲しい！ってものは……ああ、あれがあったな。

「珍しい鉱石の情報が欲しいな。鉄石ではなく、もっと珍しいやつ。」

「

「ああ。まさにそう言うのだ。」

「"情報"と言うことは、実物はいらないのか？」

「手に入れられる情報があればいい。後はカミロに頼んで入手してもらうよ。」

「じゃあ、伝手を当たってみよう。見つかったらカミロに言えばいいんだな？」

「ああ。頼む。」

　俺がカミロを見ると、カミロは頷いた。カミロに聞かずに話を進めてしまったが、どうやらやってくれるようだ。ありがたい。

「それと、これは今のとは別の報奨になる。何も言わずに受け取ってくれ。」

　俺とカミロに小さな袋が渡される。中を見ると、数枚の金貨が入っていた。

「おいおい……」

　俺は辞退しようとする。しかし、マリウスはじっと俺を見つめて、首を横に振った。これはあんまり固辞するのも良くないか……。

「じゃあ、すまんが頂いておくよ。」

「ああ。」

　マリウスは今度は頷くのだった。

　話が一通り終わって、そろそろ帰るかとなったので、俺はマリウスに聞いた。

「そう言えば、ディアナさんを連れて帰らなきゃだよな？祝宴があるんだろ？」

「ん？ああ、そうだな。一刻も早く爵位を継いだことを正当化しないといけない。」

　なんだ？今、一瞬返答に詰まったな。衛兵してた頃のマリウスに雰囲気が近寄ってもいた。まぁいいか。

「じゃあ、カミロと協力して２～３日で連れて帰るよ。いいよな？」

「おう、こっちは大丈夫だ。」

「じゃあ、頼んだよ。こっちもそれに合わせて各所に連絡をしておく。」

　最後の打ち合わせも終わったし、後は帰るだけだ。離れていたのは３日だが、早くも家が恋しい。俺は、はやる気を抑えながら、エイムール邸を辞して、家路につくのだった。

## "ただいま"

2018年11月23日

　行きは隠れている必要があったが、帰りはその必要もない、と言うことで、俺は都の道を行く荷馬車の荷台に座って、都の風景を眺めている。御者はカミロの店の店員さんで、カミロは一緒に御者台に座っていた。こうしておけば俺は荷物番に見えるからな。エイムール邸を出たときには、もう既にそこそこ以上の時間が経っていて、今は昼を回ったくらいだ。

　さすが都と言うべきか、多種多様な人たちが行き交っている。犬や猫っぽい獣人や、身長が低い割に体つきが

　一度門をくぐり（そこが貴族と一般市民との居住区の境だそうだ）、そこからさらに半時ほど行って、都の大門をくぐる。これも行きは見なかったものだが、見てみるとやたらデカい。縦が6メートルくらいはありそうだ。帰りの道すがら、カミロに聞いてみると、

「なんでも昔の国王様が巨人族と和平を結んだとき、巨人族が入れるようにと、あの大きさになった、ってことらしいが、まぁ、本当かどうかは怪しいな。」

　という事らしい。そう言う伝承もゆくゆくはちょっとずつでも調べてみたいものである。

　行きはチェックがあったが、帰りはほぼ素通りだった。立っている衛兵はチラッと俺達の方に視線を走らせただけで、すぐに俺達の後ろにいる別の荷馬車に目線をやっている。この衛兵の目が節穴というわけではなく、単に俺達が怪しくなかっただけだろう……と思いたい。実際、来た時はともかく、帰りは止めたところで何も出ないしな。

　門を出ると、緑の絨毯の中に茶色と青のクレヨンで線を引いたかのような、街道と川が見えた。川は遠目でも太陽を受けてキラキラと光っていて、街道は目の前からずっと地平線の向こうまで続いているのがわかる。緑の絨毯は背の低い草の草原と、遠くの畑である。ぐるりと頭を巡らせると、別の方角にはなかなか標高の高そうな山脈が、そちらの守りをする城壁であるかのように

　位置的には、あの川はうちの近くの湖から流れ出ているものとは違いそうだ。山はどうだろうな。うちからは見えないから分からんな。

　しばらくはそんな景色が続き、まずは都が地平線の向こうに消え、山脈もどんどんその高さを減じて、やがては見えなくなる。都からの街道なので、時折は人とすれ違ったりもするが、基本的にはだだっ広い中を馬車を走らせるだけだ。やがて景色を眺めるのも飽きてきたので、時折カミロと雑談をする。例えば、街では見かけなかったエルフの存在だ。

「エルフか？あいつらは基本的に自給自足で、自分の里から出てこないからな。この辺りの街で見かけることは、まず無いな。」

「そうなのか。」

　でも、いるにはいるんだな。

「ああ。たまーに必要な品を買い求めたり、武者修行の旅に出たやつを見かけるくらいで、俺みたいな行商やってあちこち回った人間でも、そうだなぁ、人生で両手の指くらい見たら多いほうかもな。」

　前の世界で読んでいた話なんかだと、割と人間の街に馴染んでたりするものもあったのだが、この世界では籠もっているタイプのようだ。今日で相当な数の種族を見たし、一度はエルフもお目にかかりたいものである。

　そうこうしているうちに、辺りが橙色に染まりはじめた。馬車のペースは徒歩よりも相当早いので、まだ太陽が空にあるうちに森の入口に辿り着く。だが、今から森の中を進んでも、途中で真っ暗になるのが必至なので、カミロに松明を一本譲ってもらうことにする。多分彼らは日が落ちきる頃に、街に到着できるだろう。

　荷台の松明と火打ち石を持って馬車から降り、カミロに礼を言って別れた。さあ、あともうひと踏ん張りだ。

　家の方向はチートとインストールで分かるので、そちらに向かって急ぐ。一応周囲に気をつけてはいるが、どうしても気が急いて早足になる。それでもやはり途中で日が完全に落ちてきつつあったので、慌てて松明に火をつけた。こう言うのはまだ見えてるうちにやらないと、見えなくなってからじゃ遅いからな。

　気が急いて早足になった分、時間を稼いだが、さすがに暗くなった森を松明を掲げて歩くのに早足は無理だ。むしろいつもの往復よりもやや遅いペースでしか歩けない。気が焦ってしまうのだが、それで警戒が疎かになったりしてもいけないので、必死に気を落ち着かせて真っ暗な森を進む。俺でも中々不気味さを感じるし、みんなと行くときはなるべく夜中は避けよう……。

　松明の明かりもそろそろ危ういかなと思い始めた頃になって、ようやく我が家に辿り着いた。そんなに間が空いてないのに、ちょっと懐かしささえ感じる。ゆっくりゆっくりと家の扉に近づいていく。

　もう後数歩で扉に辿り着く、と言うところで扉が開いた。そこにサーミャ、リケ、ディアナの３人ともが立っている。びっくりした。ただいまを言おうと思うのだが、うまく言葉が出ない。しかし、

「エイゾウ、おかえり。」

「おかえりなさい、親方。」

「エイゾウさん、おかえりなさい。」

　３人にそう言われて、

「ただいま。」

　胸が温かいもので満たされるのを感じながら、俺は何とか言いたかった言葉を口にすることが出来たのだった。

## お嬢様の帰宅

2018年11月24日

　みんなは俺の無事の帰宅を喜んでくれた。そんな俺はと言えば、家に帰ってきたら安心したのかどっと疲れが出たので、３人に断りを入れたうえで細かい説明は明日にさせてもらい、旅の埃を落とし、夕食を食べてすぐに床についた。

　翌朝、みんなと朝食を終えた俺は、そのまま都での出来事を説明する。カレルの最期については説明するか迷ったが、ディアナも伝えていいと言うので、正直に話した。

「そう……そうなのね。」

　ディアナは俯いて話を聞いていたが、顔を上げるとそう言った。眉根がこれ以上無いほど寄せられている。

「カレル兄さんは、今回の件が起きるまでは、皆に優しい人だったの。幼い頃は私ともよく遊んでくれたの。父上やリオン兄さんとも、もちろんマリウス兄さんとも仲は良かったわ。」

　ポツポツと話すディアナ。俺達はそれをじっと黙って聞いている。

「それがこんなことになるなんて……」

　顔を手で覆ってしまうディアナ。それをリケとサーミャが慰めている。元々は家族との仲は悪くなかったのか。それが表面上だけで、実際は鬱屈したものを抱え込んでいたのか、何かのきっかけで突然そうなってしまったのか。今となってはもう知りようのないことだ。

「取り乱してしまってごめんなさい。」

　ややあって、落ち着いたディアナが言う。

「気にするなよ。実の兄貴が死んだと聞かされて、平然としてるやつとは仲良くなれそうにない。それに、死ぬ前に何したかはともかく、死んでしまったらみんな同じだ。向こうに帰ったらこの事は内密にされてしまうから、今のうちに思う存分悼んでやれ。」

「ありがとう、エイゾウさん。」

　微笑むディアナ。俺は照れ隠しに手をひらひらと振るのだった。

「あー、それでだな。明日の朝一番でディアナを都に送ってくる。」

「えっ？」

　ディアナが驚いた声で言う。いや、そりゃ片付いたんだから、そうなるに決まってるだろう。

「ゴタゴタは片付いたし、爵位の継承で祝宴とかあるらしい。それにディアナが出ないのはありえないだろ？」

「それはそうだけど……」

「まぁ、祝宴は俺も出るしな。」

　そうなのだ。「来てる客人が”事が片付いたからおさらば”とばかりにいなくなったらおかしいだろ？祝宴には侯爵閣下も来るぞ。」とマリウスに言われてしまった。そう言われたら参加しないわけにもいかない。ディアナを送るついでに俺も参加することになっている。

　俺がそう言うと、ディアナもそれならと応じてくれた。

「じゃあ、また２～３日くらい空けるんですね？」

「そうなるな。サーミャもリケもすまんな。」

「いえ、私は別に。でも、早く帰って来ないとサーミャは拗ねるかも知れません。」

「ばっ、何言ってんだよリケ！」

　笑いながら言うリケに、顔を（たぶん）真赤にして、サーミャが食ってかかる。場が笑いに包まれて、この場はお開きとなった。

　出かけるのは明日だから、今日のところは俺も鍛冶の仕事をする。数日ぶりの我が工房での作業だが、ほんの数日なこともあってか、特に手際に衰えなどはない。いつもどおりに高級モデルを作れた。リケたちもこの数日一緒に作業してたのだろう、テキパキと一般モデルを作成している。この光景も見納めか。

　鍛冶仕事が終わったら、ディアナと稽古だ。見違えるほどではないが、確実に腕を上げてきている。この調子ならゆくゆくは俺をも凌ぐ剣の使い手になるかも知れない。それを見られないのが残念だが、家に帰っても頑張って欲しいものである。

　今日の夕食は少し豪勢にする。明日にはサーミャとリケはディアナと会えなくなるからな。そんな空気を察してか、それとも俺のいない間に仲良くなったのか、３人はいつになく明るく話をしながら夕食を食べていた。

　翌朝、いつもより早く一連の朝の日課を終えた俺とディアナは、森を歩いていた。ディアナの荷物は俺が持っている。もともと急の脱走だったから、そんなに荷物はないし、俺の筋力なら軽いものである。街へ行く時よりかなり早い時間に、森から出ることができた。

　俺達が森を出てからそんなに経たないうちに、カミロの荷馬車がやってきた。御者台にはカミロと店員さんが乗り込んでいる。俺とディアナは止まった馬車の荷台に乗り込む。

「よう。」

「おう。ディアナさん、乗り心地悪いと思いますが、どうぞご勘弁を。」

「いえ、無理を言って乗せてもらってるんですから。それに、兄もお世話になりました。ありがとうございます。」

「いえいえ、私達商人は利があれば、そこに与すると言うだけのケチなもんですから。」

　カミロが謙遜して言った。それを見て、俺が珍しいものを見たとニヤニヤしていると、それを見咎めたカミロが

「エイゾウは後で覚えとけよ。」

　と脅してくる。俺が肩をすくめて「おー、怖い怖い」と身を縮こませると、馬車は笑いに包まれながら発車した。

　道中は特に何も起きることなく、都に辿り着く。門のところで入る時に検問があったが、カミロが見せた札のおかげか、チェックはざっと一通り見るだけで終わりだ。何を見せたのか、カミロに聞いてみる。

「ああ、エイムール家出入りの商人の札だよ。これがあると色々便利だからな。」

「だろうな。」

　そうか、カミロは伯爵家の後ろ盾つきなんだよな。今後もその辺りを上手く使ってやっていくんだろう。

　小１時間ほどでもう一つの門を抜け（このときも札が大いに威力を発揮した）、俺がこの街で知っている数少ない場所、エイムール邸に到着した。

　馬車が止まり、俺が先に降りる。手を差し出しながら、

「どうぞ、ディアナお嬢様。」

　とおどけてみせると、

「何言ってるのよ。」

　と呆れたような怒ったような顔をして、でも、しっかりと手を取って降りてくれた。

　さて、あとはこの家の人に任せよう。荷台に載ったディアナの荷物を降ろしてディアナの方を見ると、前に見た使用人の女の人達に囲まれて、帰宅を喜ばれている。それなりに長い期間だったしなぁ。俺は荷物を囲んでいる使用人の人に渡すと、別の使用人に連れられて、中に入るのだった。

## "おかえり"

2018年11月25日

　俺とカミロが通された部屋には、マリウスが待っていた。２日ほどぶりだが、心持ちやつれたように見える。

「ずいぶんお疲れのようだな。」

「ん？ああ、祝宴はごく限られた人達で執り行うとは言え、その前の国王陛下への謁見と継承のご報告の準備やら、継承記録の手続きやらなんやらで、てんやわんやだよ。」

「そりゃあ大変そうだ。」

　貴族は貴族でやることがいっぱいなんだな。あらためて俺にはできそうもない。

「それで、祝宴はいつやるんだ？」

「明日だ。」

「明日？ずいぶん早いな。」

「父上と兄上が

　俺達庶民にはなんとも七面倒な話だな。

「じゃあ、俺達は明日祝宴に参加して、明後日帰るわけか。」

「そうだな。それまではゆっくりしていってくれ。」

「わかった。世話になるよ。」

　そしてマリウスが出ていった。その後はまた使用人の人に連れられて、俺とカミロは客に用意された部屋に案内される。

「何かございましたら、ご遠慮無くお申し付けください。」

「わかりました。ありがとうございます。」

　使用人の人は一礼をして出ていった。机に椅子、ベッドと一通りのものが設えられ、壁にはタペストリーがかかっている。タペストリーにはどこかの戦いの様子が描かれていた。味方の側には甲冑を着込んだ騎士たちが、敵側にはおどろおどろしい姿をした、おそらくは魔物の姿が描かれている。爵位を貰った時に剣を下賜されたと言うことは、多分そのきっかけになった戦いの様子なんだろう。

　こうした戦いを経て１人の人間の栄誉の証となった剣を、偽物としてしまうことについては忸怩たる思いがないではない。そこには単なる剣の出来不出来以上のものがあるはずだ。他にいい方法も思いつかなかったが、俺の手でぶち壊してよかったのかどうか。どこかに捨ててしまっているのでなければ、うちで預かって、せめてうちで保管していこう。そうすることでくらいしか罪滅ぼしはできない。あとでマリウスに交渉してみるとするか。

　夕食前、部屋へ案内をしてくれた使用人の人――名前を聞いたらボーマンさんと言うらしい――に、「ディアナお嬢様がお呼びですが、いかがなさいますか？」と聞かれたので、素直に応じることにした。多分ここでもやるつもりだろうなぁ……。

　はたして連れて行かれた先は中庭で、そこに動きやすい服のディアナが木剣を２本持って待っていた。

「ここでもやるのか。」

「当然でしょ。」

　ディアナがニヤリと笑いながら言う。お前それお嬢様っぽくないから止めたほうがいいぞ。

「まぁいいか。それじゃ始めよう。」

　剣の切っ先を合わせて一礼すると、間合いを空けて、いつもの通り打ち合いを始める。合計で半時ほど経ったので、一度俺が手を止めると、ディアナが息を上がらせながら言ってきた。

「ハァ……ハァ……一度、エイゾウさんの……本気を……見せてくれない？」

「本気かぁ。」

　これも今日で最後だし、一回くらいはいいか。

「よし、じゃあ最後にいくぞ。」

「ええ。」

　ディアナがどこから打ち込まれても平気なように剣を構える。それを確認してから、俺は本気で踏み込んで、本気で打ち込んだ。ディアナはピクリとも動けていない。首筋に俺の木剣が当たる直前で、剣を止めた。

「これが俺の本気だ。」

「全く見えなかった……」

　俺にそう言われたディアナはがっくりと肩を落としている。

「この数日でもメキメキ腕が上がってるんだし、鍛錬すればいくらでも上は目指せるだろ。」

　俺が剣を引きながらそうフォローすると、ディアナはぱっと顔を輝かせて

「本当!?」

　と大層喜び、もうその笑顔が見られないと思うと、胸が締め付けられるような感覚を覚えるのだった。

　稽古を終えて、湯浴みをさせてもらった後は夕食だ。今日はエイムール家の人しかいないので、気楽な夕食になった。会話の話題はディアナがうちに居る間に経験したことが主で、マリウスは嬉しそうにその話を聞いている。俺がその合間合間に補足をし、カミロはいろいろ感心している。そうして夜は更けていった。

　翌日、マリウスは朝から国王陛下へ報告に向かった。記録官への手続きは済んでいるらしいので、国としては、この国王陛下への報告で爵位の継承は完全に完了する。後の祝宴は家としてのものだ。使用人の人達はボーマンさんも含めて忙しそうにしている。内々とは言うものの、それなりに賓客を招いての祝宴なので、ちゃんとした準備が必要なのだ。

　一応は俺達もそのお客さんの１人だが、準備優先という事で、朝食や昼食は夕食のパーティーの準備の残り――要は

　合間の時間はこれも邪魔にならないように屋敷の中をウロウロしたりして過ごす。今日はまだディアナに会っていないが、どうやらマリウスに着いて陛下と謁見したりしているらしい。少し残念だな。

　俺達の協力がどれほど功を奏したかは分からないが、祝宴の準備は粛々と進んでいき、本番を迎えた。

　エイムール邸の食堂に大きな卓が囲まれるように配置され、俺達は決められた席に着く。囲まれた中央に料理がおかれていて、給仕さんたちが樽から注がれたワインの入った酒杯を配っている。来客が揃い、酒杯が行き渡ったところで、マリウスが立ち上がる。凝った刺繍の入った服を着ている。あれが当主としての正装なんだろう。

「皆さん、本日はこの祝宴にお越しいただいて大変ありがたく存じます。」

　朗々とした声が食堂に響き渡る。

「本日、私、マリウス＝アルバート＝エイムールは伯爵の爵位と、エイムール家を継承することに相成りました。」

　拍手が巻き起こる。チラッと見れば侯爵も拍手をしていた。

「それでは、エイムール家の今後の繁栄と、皆様との変わらぬ繋がりを祈って、乾杯！」

「「乾杯！！」」

　皆で酒杯を

　祝宴の晩餐会は粛々と進んでいく。中央の料理を給仕さんが取り分け、各人に配る。街では見ないような料理が色々あって面白い。いくつかは真似できそうだし、家帰ったらサーミャとリケに作ってやろう。

　晩餐会が終わると、今度は舞踏会だ。いずれも格式の高いものではないが、晩餐会と舞踏会を行うのが祝宴の時の決まりらしい。格式が高くなるとそれぞれ別に開催される。ただ、”舞踏会”とは言うものの、酒も飯も十分に腹に詰め込んだお歴々が華麗にダンスできるかと言うと、それは勿論そんな事はないので、舞踏会とは名ばかりで実際には立って軽く飲み物を飲みながら話をする場である。

　そこで俺はディアナを見つけた。さっきまではちょくちょく誰か彼かに話かけられていたのだが、今は丁度隙間ができたらしい。

「ちょっとよろしいかな。」

「あら、エイゾウさん……素敵なお召し物ね。」

　そう、当然だが俺は例の貴族っぽい服を着ている。侯爵も居るし、公式にはマリウスの北方の友人――つまり、北方ではそこそこの地位の人間と言うことになっているからな。

「肩が凝るよ。」

　俺は苦笑しながら言った。苦笑しながらではあるが、包み隠さない本心でもある。

「ディアナさんもよくお似合いですよ、そのドレス。”薔薇”と呼ばれるのに相応しい。」

　ディアナもこう言う場なので当然ちゃんとした服を着ていた。赤を貴重としたドレスだが、華美に過ぎない、抑えめの刺繍がとても似合っている。

「お上手ですわね。」

　ディアナは顔を赤くして言うが、それが酒のせいなのか、照れているのかはよく分からない。

「本心だよ。ホントに似合ってる。しかし、これも見納めか。残念だな。」

「あら、そうかしら。」

　ディアナがいたずらっぽい笑みを浮かべて言ってくる。

「え、おい、今のは……」

　俺が言葉の真意を聞こうとした時、ディアナは別の人が、俺には侯爵が近づいてきたので、その応対をすることになった。侯爵とはインストールの知識をフル活用して、北方出身の人間と言う設定を破らないような、通り一遍の話しかしないようにする。あんまり話し込んでボロを出してもいかんしな。しかし、こうして話すと気のいいオッさんではある。去り際に俺の肩を叩いて「エイムール家を頼むぞ」と言っているのが印象的だった。

　結局、ディアナと話が出来たのはこの一回きりで、祝宴はお開きになり、帰宅するもの、用意された部屋に戻るものに別れ、俺は部屋に戻って衣装を着替えさせて貰った後、酔っているのもあって、すぐに寝てしまうのだった。

　翌朝、ようやく全てが片付いて家に帰る日が来た。都に来ることも、そうそうなくなる。ごくたまには来る用事も出来るかも知れないし、その時に挨拶に来ればいいな。

　特に持ってきた荷物もないので、早々にカミロの馬車のところまで行く。馬車のところには、カミロとマリウス、使用人の人達が待っていた。朝が早いからか、ディアナの姿はない。

「エイゾウ、今回は本当にありがとう。」

「なに、前にも言ったが、街での借りがあるからな。いい領主になれよ。」

　マリウスと俺はガッチリと握手を交わす。

「あ、そうだ、例の”偽物”はどうするんだ？」

「ああ、あれか。途中で切ってしまったし、お前に直してもらおうと思って、馬車に積んであるよ。」

　直すのか。それでこの家に残るなら、それで別にいいか。

「直した後は戻せばいいんだな？」

「いや、そのままエイゾウのところで預かっておいてくれ。」

「いいのか？」

「ああ。偽物とわかったものを置いておくのも不自然だが、あれは事情が事情だからな。」

　実際の本物はあっちだしな。気持はよく分かるし、そうさせてもらえるなら文句はない。

「分かった。直した後は大事に預からせてもらうよ。」

「頼んだぞ。ああ、それともう一つ預けておきたいものを、一緒の箱に入れてあるから、そっちも頼む。」

「ん？武器か？」

「まぁ、そんなようなものだ。扱いに困ってね。」

「へぇ、分かった。そっちも責任持って預からせてもらうよ。」

「どっちもお前のいいようにしてくれて構わないからな。」

「わかったよ。ディアナさんによろしくな。」

　そうして俺は荷馬車の荷台に乗り込み、馬車が動き出す。小さくなるエイムール家の人達に手を振り、エイムール邸に別れを告げ、そのまま都からも無事に出ることが出来た。

　帰りの道中、カミロと何だかんだと話をするが、どうも気がそぞろである。その辺りに水を向けてみてものらりくらりとするだけなので、そこには触れずに話をした。

　やがて昼を過ぎるころ、森の入口に到着する。カミロとも一旦ここでお別れだ。店には卸しに行くからな。

「帰る前に荷物を降ろしていけよ。」

　カミロに言われて思い出す。そうだった、預かりものがあるんだった。

「どの箱だ？」

「御者台のすぐ後ろの箱だよ。」

「これか。」

　俺は言われた箱を開けようとする。あれ、この箱って確か……。

　箱の蓋を開けると、そこには布の包と、それを抱いた女性がいた。女性とはディアナである。

「ディアナ！」

　俺は思わず声を上げた。さん付けも忘れている。

「来ちゃった。」

　ディアナは茶目っ気たっぷりに笑う。

「いや、来ちゃったって……家はいいのか？」

「それについては、兄さんから書簡を預かっているわ。これよ。」

　ディアナが差し出した手紙を受け取る。そこにはこう記してあった。

『やあエイゾウ。君がこれを読んでいるということは、私とディアナ、カミロの目論見は成功したということだろう。君の驚く顔が見られないのが堪らなく残念だが、こればかりはどうしようもない。諦めよう。さて、”もう一つの預け物”だが、俺が伯爵になったことで、一気に彼女の”価値”が上がってしまった。

　元々伯爵家の一員ではあったが、上に３人の兄がいる状態と、男子が１人だけと言うのとでは、残念だが”価値”が違ってくる。当然、色々煩わしい事も起きる。それから遠ざけるための方策と思って引き受けてくれないか？』

　なるほどね。分からなくはないが、強引な手を使うものだ。

『追伸：ディアナは本当に思うようにしてくれて構わないからな』

　そんな一文もあったが、俺は無視することにした。やれやれとは思うものの、またあの笑顔が見られるなら良いか。

「まぁ、ここまで来ちまったら仕方ない。一緒に帰るか。」

「うん！ありがとう！」

　ディアナはいい笑顔で微笑むと、箱の中から出てきた。

　折れた”偽物”の剣とディアナの荷物も箱から出し、荷馬車を２人で降りて、手を振ってカミロと別れた。

　荷物はあるが大した重さでもないので、スイスイと森の中を進んでいく。二人共言葉少なだが、別にどちらかの機嫌が悪いのではない。少なくとも俺は何を話していいか分からないだけだ。

　しばらく歩いて、もう家の前についた時

「迷惑……だったかな？」

　ディアナが立ち止まってそうつぶやく。

「迷惑？そんなふうに思ってたら、あそこで追い返してるさ。」

「ホントに？」

「ホントに。俺は気の利かない、頑固な鍛冶屋だからな。こう言うときに嘘をつく度胸はないな。」

「ああ、なるほど、確かに。」

「そこで納得するなよ。」

　ディアナがクスクスと笑う。

「ほら、家に入るぞ。」

「ねぇ、エイゾウさん。」

「エイゾウでいい。」

「え？」

「うちの家族になるんだったら、”さん”はいらない。」

「うん、わかった、エイゾウ。」

「よし。」

　俺は先に家の扉に向かって歩き始める。

「エイゾウ！」

　ディアナが後ろから呼んできた。俺は振り返る。

「ただいま！」

　俺は笑って返す。

「おかえり、ディアナ。」

# 第３章　エルフの剣編

## 新しい”いつも”

2018年11月26日

「と言うわけで、今日からディアナがうちの家族になった。」

　都から帰ってきた俺が宣言すると、拍手が起きる。したのはサーミャとリケの２人だけではあるが、俺以外の全員でもある。異論はないようなのでホッとした。

「改めて、今日からお世話になります。ディアナ・エイムールです。よろしくお願いします。」

「よろしくな、ディアナ。」

「よろしくね、ディアナさん。」

　ディアナと２人が挨拶を交わす。一昨日くらいまで一緒に生活してたので、ぎこちなさは皆無だ。しかし、リケとディアナが気になる会話を交わしていた。

「ね、上手く行ったでしょう？」

「ええ、リケの言うとおりだったわ。」

　ん？

「おい、それはどう言う……」

「乙女の秘密です。ね、ディアナさん。」

「ねー。」

　ディアナはいつの間にかリケとも仲良くなっていたらしい。良いことなのだが、一抹の寂しさもあるな……。あ、そうだ。

「ディアナ、ちょっと待っててくれ。」

　俺はディアナに声をかけて、自室に戻り、目的のものを戸棚から取り出すと、居間に帰る。

「こいつを渡しておこう。」

「これは？」

「俺の”特製”のナイフだ。うちは護身用も兼ねて１人１本持ってる。家族の証みたいなもんだ。」

　渡したナイフをキラキラした目で受け取るディアナ。抜いて刀身を眺めている。

「切れ味は目にしていると思うが、めちゃくちゃ切れるから、注意して扱えよ。」

「分かったわ。とても綺麗ね。」

「でしょう！そのナイフは、親方の作品の中でも指折りの傑作ですよ！」

　なぜかリケが胸を張って自慢している。それを見たサーミャは呆れ顔で笑っている。そんな”いつも”にディアナの笑顔が加わった。俺にはそれがとても喜ばしく思えるのだった。

　この日の夕食は俺が用意した。干し肉のワイン煮と無発酵パン、根菜のスープ、それにワイン。ディアナがうちの家族になったお祝いの”祝宴”である。

「やっぱり、エイゾウが作る飯が一番美味いな。」

　サーミャが感慨深げに言う。

「そうなのか？」

「ええ。親方がいない間の食事は持ち回りで作りましたが、親方の味を越えられたことは一回もありませんでした。私も実家の工房では作ってたんですけどね。」

　ディアナは目を逸らしているから、自分で料理をしたことはないんだろう。

「じゃあ、俺が戻ってきて万々歳ってとこだな。」

「食事に関しては特にそうですね。」

　リケがクスクスと笑う。それでみんなもどっと笑い、エイムール邸の晩餐会で食べた料理の話に花が咲いた。

　翌日、朝の日課である水汲みその他を終えて、朝食の時、俺は話を切り出した。

「１週間分の一般モデルの在庫はあるんだよな？」

「ええ。親方がいない間も、ずっと生産は続けてましたから。」

「それじゃあ、卸す量は十分だな。」

「アタシたちも手伝ったし、結構な量が作業場にあるぜ？」

「よし、じゃあ今日からは新しい部屋を作ろう。ディアナの分だ。」

「いいの？」

　問うてきたのはディアナである。

「良いも悪いも、家族なんだから、家族と同じ部屋のほうが良いだろ？」

「ありがとう。」

「どういたしまして。ディアナにも手伝ってもらうからな。」

「勿論よ。」

　こうして向こう一週間ほどの予定が決まった。

　こまめに材木を確保していたのが功を奏した。あと２部屋作れるくらいは余裕がある。逆に言うと、２部屋作れば材木が底をつく。そこで俺はまず斧を使って家の周りの木を伐り倒して、材木を新たに確保する。ちょいちょい伐ってたから、少し庭が広くなった気がする。そのうち切り株を始末して、新しい木が生えるようにしないとな。

　俺が木を伐っている間に、新しい部屋の整地と基礎の杭の作業を３人が進めていた。リケは前にやっているし、３人共普通の人よりは力があるのもあってか、前のときよりも大分進みが早い。しかし、１つ気になる点がある。

「どうして２部屋分の作業してるんだ？」

　そう、どう見ても作業は２部屋分なのだ。今回はディアナの分の部屋を確保するのが目的だから、１部屋分で良いはずだ。

「どうせエイゾウのことだから、また家族が増えるだろ。」

「いや、そんなことは……」

　ない、と言おうとして、言いよどんだ。そもそもサーミャもリケもディアナも、全員予定にあったわけではない。となれば、何かしら予定外のことが起きて家族が増えることは十分ありえるのだから、その時にまたバタバタ増設するよりも、今２部屋作っておいたほうがいい。たしかに道理である。

「使ってない間は物置にしてもいいか……」

　俺が認めると、サーミャはため息をついて作業に戻った。

　それから５日間、部屋の増設の作業で過ごした。朝起きて日課を終えたら、部屋の作業、昼飯を終えたら昼からの作業をして、夕食前にディアナと稽古をして、夕食を食べたら寝る。そうして５日間を過ごしたが、部屋の増設の作業は前にやったこともあってか、スムーズに進んで、５日目にはもうほぼ完成していた。前は廊下の突き当りだったところが空いて、そこからさらに廊下が延びており、サーミャとリケの部屋と同じ見た目の部屋が２つ並んでいる。ただし、部屋の入口にはまだ扉はなく、家具も入れていない。

「出来るもんだなぁ。」

「そうねぇ。」

　ディアナは前の時には参加してないので、感慨もひとしおのようだ。

「明日は扉とベッドを入れて、それで完成だ。明後日はカミロのところに製品を卸しに行くが、ディアナも来るよな？」

「ええ、もちろん。家業なんでしょう？」

「うちは鍛冶屋だからな。獣人にドワーフ、伯爵家のお嬢さんまでいるが、あくまで頑固なおっさんがやってる鍛冶屋だよ。」

「変な鍛冶屋ね。」

　ディアナがクスクスと笑いながら言う。

「まぁ、そこは全く否定できないな。」

　俺は苦笑して返した。

　これもまた、うちに増えた新しい”いつも”の光景の一つだ。

## 増えた家族と増える"いつも"

2018年11月27日

　翌日、テキパキとベッドと扉の材料の切り出しを終えて、組み立てを始める。蝶番や釘なんかは前回作り置きしておいたので、その分の時間も節約できている。備えあれば憂いなしだな。ベッドはサーミャとリケに任せて、俺とディアナで扉を作っていく。自分の部屋の扉なんだから、多少気合いを入れてもらわにゃな。

　さすがのディアナも大工仕事はやったことが無いので、教えながら作業を進める。枠が歪んで扉が収まらない、なんてことになっても困るし、そこだけは俺がやったが、後はほとんどディアナがやった。剣を振るっていたからか、鎚で叩くのも初めてにしてはなかなか堂に入っている。

「こう言うのも、楽しいものね。」

「１人で黙々とやると途中でうんざりするかも知れないが、こうやってみんなで１つのものを作るってのはいいだろ？」

「そうね。結構気に入ったわ。」

「時々はこう言う作業もあるが、やっていけそうか？」

「もちろん。この程度で音を上げてしまいそうなら、そもそも来てないもの。」

　ディアナが笑って言う。

「それは違いない。」

　俺もそれにつられて笑うのだった。

　ベッドの方は前に作ったことがある２人の作業だから、扉よりも先に出来たようだ。

「お、じゃあ運びこんじまってくれ。」

「分かった。手前の部屋で良いのか？」

　サーミャがディアナに聞く。

「ええ、そっちで良いわ。」

「ほいよ。行こうぜリケ。」

「うん。じゃあサーミャはそっち持って。」

　サーミャは獣人、リケはドワーフだからか、かなりの力がある。ベッドを軽々と持ち上げて運んでいった。

「よーし、じゃあ俺達も扉をやっつけちまおう。」

「分かったわ。」

　それから幾らかの時間で扉が出来上がった。なかなかの出来だ。

「いい出来だな。」

「そうなの？」

「ああ。隙間なく板を打ち付けるのは、これで結構難しいからな。」

「良かった。使い物にならないとか言われたらどうしようかと。」

「俺が見ててそんなヘマさせるわけないだろ？」

「それもそうね。」

「安心しろ、お世辞抜きにいい出来だよ。それじゃあ取り付けに行こう。」

　ディアナもサーミャ達ほどではないとは言え、そこそこ力がある。俺とディアナの２人で扉を運び、取り付けは俺がやる。扉の取り付けはすぐに終わって、先に運び込まれていたベッドとで、ディアナの部屋の完成だ。

「今日からここがディアナの部屋だ。屋敷と違って随分狭いとは思うが。」

「いいのよ、これで。ここに来て、必要な広さってそんなに無いんだな、って分かったし。」

「そうか。」

　ディアナは何かにつけてこの生活に馴染んでくれようとする。前に来た時点である程度馴染んではいたが、あくまであの時は半分は客だったからな。こうしてくれるのはありがたい。

「これでいよいよ家族ですね！」

　リケがディアナにニッコリと笑いかける。

「ええ。改めてよろしくね、リケ。サーミャも、改めてよろしく。」

「おう。まぁ、メシの美味さは保証されてるからな。」

　サーミャが胸を張って言うが、それ作るの俺だろ。俺の料理を気に入ってるなら、まぁいいか。

　この後、客間からディアナの荷物を運びこみ、ディアナの部屋が完成した。

　翌日、カミロのところへ品物を卸しに行く。以前はディアナが街へ行けなかったので４人で行くのは初めてになる。俺とリケが荷車を引き、サーミャとディアナが辺りを警戒する。歩みの早さは今までと変わらない。時々、草兎や他の小動物の姿を見かけて、ディアナがはしゃいでいた。見た目が可愛いからな。後々食う時の障害にならないと良いが。途中１回の休憩を挟んで街道に到達する。

「どうだ？俺はいないと思うが。」

「アタシも特には感じないからいないと思う。ディアナはどうだ？」

「私もよ。」

　念の為、森から街道に出る時はチェックする。今回も何もないようでなによりだ。

「よし行くか。」

　俺達は荷車を引いて街道を行く。もう幾度も行き来した道だが、今日はディアナがいる。それだけで何となく新鮮な気がしてくるな。あの街の衛兵は仕事熱心なので、全く警戒しなくていいと言うことはないが、野盗の心配はかなり低い。マリウスがいなくなって、その分の人手があればいいんだが、こればっかりは変わってやれないしな。何かしてやれることがあったら、なるべくしてやりたいものだ。

　予想通り、特に何事もなく街に着いた。立ち番はマリウスの同僚氏ではないので、会釈だけして通り過ぎようとする。そこへ立ち番の衛兵が声をかけてきた。

「おっと、１人増えたか？」

　日に何人も通るだろうに、よく覚えてるな。

「ええ、まぁ。」

「モテモテじゃないか。羨ましいな、色男さん。」

「いやぁ、そんなんじゃないですよ。」

「ちょっと"新入り"のお嬢さんの目と手首を見せてもらってもいいかい？」

「ええ。」

　衛兵はディアナの目と手首の辺りを見る。

「すまなかったね。奴隷とか誘拐で無理やり連れてこられた子は、目と手首を見たら分かるのさ。目と手首のどこをどう見たら分かるのかは秘密だけどね。協力ありがとう。行っていいよ。」

「どうも。」

　俺達は４人で会釈して街に入る。色々な人を見てると、ああ言う術も身につくんだろうな。あまり習得して嬉しいたぐいの技能ではないが、あの人もそれなりに辛酸を嘗めてきたに違いない。

　そして俺達は、いつもの通りにカミロの店に向かった。倉庫に荷車を入れたら２階へ上がる。店員さんや番頭さんも慣れたもので、すぐに商談室に通された。ただ、心なしか倉庫の人も店員さんも増えている気がする。

　そんなに待たずにカミロが商談室に入ってきた。

「よう。」

　俺からの挨拶も気軽なものである。カミロはディアナがいるのを見つけて言った。

「おう。ああそうか、ディアナお嬢さん今そっちにいるんだったな。」

「そうだぞ。お前たちは本当にああ言うやり方好きだよな。」

「知ってただろ？」

「知ってたけどな。そう言えば、随分人が増えたじゃないか。」

「ああ。おかげさまで儲けが増えてね。伯爵家出入りともなると、都に人だけ置いて

　前の世界で言えば、大阪本社で東京事務所、みたいなもんか。今から都に倉庫付きの大店となると大変そうだが、最悪店として機能さえすればいいなら、なんとでもなるんだろう。

「なるほど、そりゃ良いことだ。」

「そうだろ？それで、今日もいつものでいいのか？」

「あ、今回は火酒と寝具が２セットあったら、そっちも貰えるか？」

「おう、あるぞ。支払いはいつもの方法でいいよな？」

「ああ。よろしく頼む。」

　俺が頷くと、カミロは番頭さんに目をやる。番頭さんは頷くと部屋を出ていった。後は荷物の積み下ろしの間、カミロと都にいた時の話をする。俺やディアナが話してなかった内容（ディアナは知らなかった部分もあるが）を、サーミャやリケも楽しそうに聞いているのだった。

## 新製品

2018年11月28日

　いくつかの物を仕入れて、カミロの店を出る。街は都ほどは大きくも人が多くもないが、都に負けず劣らず活気には溢れている。その中を男１人女３人で荷車を引いて通る（引いてるのは俺とリケの二人だが）わけだから、目立つには目立っている。ただ、荷車がなければ似たような構成のグループはちらほらいる。ほとんど全員が旅装を纏ったままだが、あれらが冒険者と呼ばれる人たちだろうか。

　俺はこの世界では"鍛冶屋のオッさん"として二回目の人生を全うする気でいるが、別のチートを貰っていたら、あんなふうに旅をしていたのかも知れない。そう思ってぼんやり旅人たちの姿を眺めていたら、

「なんだ、エイゾウ、旅にでも出たいのか？」

　サーミャに見咎められた。その声でリケとディアナもこっちを気にしたのが分かる。

「まさか。"わけあり"で北方からここまで流れてきたんだぞ。もうあんな苦労はゴメンだ。」

　俺は作り話でごまかす。サーミャ相手だとバレないかどうかでヒヤヒヤはするが、「わけあり」も「よそから流れてきた」も嘘ではないからな。流れてきた移動手段がちょっと尋常じゃないだけだ。

「まぁ、物見遊山でちょっと出かけるなら、良いかも知れないな。」

「ふーん。」

　サーミャはそれっきり、その話題には興味を失ったようだ。とりあえずバレなくてホッとした。と、同時にリケとディアナがホッとため息をついたのが聞こえた。

「なんだ、どうした二人とも。」

「親方はこう、危なっかしいんですよね。別に鍛冶の腕前がどうとか、誰かに襲われそうとかではなくて、突然前置きもなくフラッと居なくなってしまいそうな感じがします。多分サーミャも同じこと考えて、それで聞いたんだと思いますよ。」

　リケがそう言うと、隣でディアナがウンウンと頷いた。まぁ、他の世界からフラッとやってきたのは事実だからな。

「少なくとも"家族"に黙っていなくなるようなことはないよ。」

「はい！」

　リケを含めた３人がそれを聞いて安堵の笑みを浮かべていた。

　帰り道も警戒をしつつ進んでいくが、特に何事もなく無事に帰り着くことができた。今日までディアナの一件を除いては特に何事も起きてはいないが、これはなかなかに幸運なのだろう。この世界に神様がいるのかは知らないが、いるなら感謝しておこう。

　家に着いたら、荷物を運び入れる。サーミャとディアナには家へ火酒や塩なんかを運んでもらって、鉄石と炭は俺とリケで作業場に詰め込む。鉄石の消費が補給に追いついてないな。とは言え、何があるか分からないし、まだ鉄石は貯め込めるから、しばらくはカミロに供給してもらっても問題はあるまい。やばくなる前に倉の建設しても良いかもな。

　そうして、荷物を一通り運び終えると、サーミャが俺を呼んでいる。

「どうした？」

「雨の匂いがする。風向きと合わせると、ちょっと長引きそうだぞ。」

「どれくらいだ？」

「はっきりとはわかんないけど、１週間はない。３日くらいかな。」

「そうか。」

　流石に３日分の水を確保しておけるだけの水瓶はない。とりあえず往復３０分程度だし、明日の分は今日汲みに行っておくか。

　水を汲みに戻ってきたら、夕食の準備をする。今日は”いつも”のメニューだ。胡椒を追加購入したのでスープには少し多めに入れてある。この日の夕食はここまで旅をしてきたリケと、時々父親に連れられて遠出していたディアナの、２人が行ったことのある場所の話で盛り上がった。鉄石なんかは都を出ている時に見えた山から採掘されているらしい。機会があれば見学に行きたいところだ。

　翌日、恐らくは夜半過ぎから降っていたであろう雨が降り続いている。結構な雨脚なので、昨日のうちに水を汲みに行った俺の判断を、自分で心から感謝した。

　今日は

「おつかれさん、ディアナ。」

「あなた達っていつもこんなことしてるの？」

「週に一回はこれやらないと、材料が無くなっちまうからなぁ。」

「あなた達の力が強いのって、こう言うのもありそうね。」

「サーミャとリケは元々強いのもあるけどな。俺はそうかも知れない。」

　俺のはチートで貰った分もあるけどね。話を聞いていたサーミャとリケがふざけて力こぶを作っている。サーミャもリケも中々立派な力こぶだ。それを見てディアナが吹き出し、作業場が笑いに包まれ、この日の作業は終わりになった。

　サーミャの言ったとおり、翌日も雨が続いているが、昨日よりは大分マシだ。ササッと水汲みだけ行ってしまおう。

「ひゃー、濡れた濡れた。」

　思いの外しっかり濡れて水汲みから帰って来ると、ディアナが

「おかえりなさい。体拭くんでしょ？はいこれ。」

　と、布を出してくれた。

「お、ありがとう。」

「どういたしまして。」

　ニコリと笑うディアナ。俺は照れた顔を見られないように、ササッと部屋に戻るのだった。

「今日は俺は新しいものを作ります。」

　３人の控えめな拍手が響く。

「何を作るんですか！？親方！」

　リケが目をキラキラさせながら飛びつかんばかりに聞いてくる。こう言うの本当に好きだな、リケは。

「ハルバードだ。」

「ハルバード？」

　サーミャはピンとこないらしく、首を傾げている。戦場に出るんでもなけりゃ、そんなに見ないよな。街の衛兵も持ってたのは短槍だし。

「あー、槍と斧が合わさったみたいなやつだ。」

「何だよそれ、強そうじゃん。」

「強いさ。」

　場合にもよるが、突くと切る以外にも色々出来るハルバードの方が、対応の幅も広いだろう。俺が言うのを聞いて、ディアナが質問してくる。

「でも、ハルバードなんか作ってどうするの？売れるの？」

「ああ。売る先の

　ディアナの質問に、俺はニヤリと笑うのだった。

## ハルバード

2018年11月29日

　俺は言葉を続ける。

「まぁ、最初だから5本も売れればいいか、とは思うけどな。」

「で、どこに売るの？」

「街の衛兵隊。正しくはその上、つまり君の兄さんだな。」

　衛兵隊の人たちは今、短槍を使っている。そして、それを与えたあの街の領主は、誰あろうエイムール家なのだ。マリウスがエイムール家の三男坊だった頃、衛兵として赴任していたのも単純に言えばそれが理由である。衛兵隊長でなかったのは七光り呼ばわりが嫌だったとかなんだろう。

　そして、マリウスはおそらく自分が衛兵だったときから、もう少し良いものが欲しいとは思っていたに違いない。でなければ、わざわざ俺から剣を買って私物だ、と言い張る必要はないからな。半ばは父親や兄に対する遠慮もあったとは思うが。

　なので、今回ハルバードを作って街の衛兵隊向けにエイムール家に買わないか交渉すれば、売れる見込みはあると俺は推測している。売れなくてもカミロに買わないか聞いてみればいい。それでも売れなかったら、まぁその時だ。立場をフル活用してしまっているが、それに見合う出来のハルバードは作るし。別途訓練がいるかも知れないが、それはまぁ……マリウスに考えてもらうとしよう。

「なるほどねぇ。兄さんなら買うかも。」

「だろ。それじゃあ、リケと皆は一般モデルの製作頼むな。」

「はい、親方。じゃあ、今日はショートソード作ろっか、サーミャ、ディアナ。」

「おう。」

「ええ。」

　そしてみんな自分の作業を始める。

　俺は板金を熱して、まずは槍部分の穂先を作る。普通の槍の場合はある程度"切る"機能も必要になってくるが、ハルバードなので「突く」に特化した、三角錐に形を整えていく。「切る」は斧部分にお任せだ。穂先が細いと耐久性に難が出るかも知れないので、太く短めで作る。後で組み合わせるため、根元は加工せずに少し残してある。

　その形ができたら、別の板金で斧と

　これで2つのパーツが完成する。槍部分と斧・鈎部分だ。槍部分の根元と、斧・鈎部分の真ん中を、それぞれ細い円錐を縦に割った形に広げて接合したら、仕上げの作業だ。

　焼入れ、焼戻しと斧部分の研ぎをして、頭部分の仕上げが完了する。この辺りは完全にチートの能力だよりで温度や叩き方、品質を制御した。折角なので今回のはそこそこ集中して、高級モデルの品質で制作してある。

　この後、柄に頭と石突き（少し尖ったスパイク状にしてある）を固定して、やっとこさハルバードが完成する。柄にするための木材は外なので、また後日だな……。作成はそれぞれの武器の組み合わせのようなものではあるが、頭に柄を繋ぐための袋状の加工なんかは、チートがないとこの短時間では無理だったな。

　短時間、とは言ったが、ここまでチートとインストールに頼っても、手探り半分だったのでかなりの時間が経過してしまった。明日からはもう少し早く作れるようになるだろう。

　ちょっとだけまとまった時間が空いたので、その時間でエイムール家の騒ぎの時に潰してしまった俺の護身用ナイフの代わりを作る。これは特注モデルなので板金を叩いて延ばすときからチートフルパワーの完全集中だ。じっと見定めて、鋼の成分のようなものが均等になるように、そして輝きのようなものが出るように叩いていく。

　やがて全体が綺麗になったら、形を作り、仕上げ加工をする。この辺はもう何度もやっている作業だ。違うのはどこまで集中して作業するかだけである。完成したナイフは、やはり強い輝きのようなものが出ている。都で打った時にこれが出なかったのはなんだったのだろう。とりあえずちゃんと良いものが出来てよかった。今はそれで良しとしよう。

　気がつけば、俺が打ったナイフを、リケ達３人も真剣に見ていた。

「はぁ、やっぱり親方が本気を出した作品は、美しさが違いますねぇ。」

　陶然とした面持ちでリケが言う。こう言うときのリケはちょっと怖い。

「リケほどはわからないけど、本当に綺麗ねぇ。」

「アタシもよくわかんないけど、凄いものだってのはよく分かるぜ。」

　ディアナとサーミャも褒めそやしてくる。

「３人共ありがとう。でも、これが都では出来なかったんだよなぁ。」

「そうなんですか？」

「うん。それで仕方なく俺の護身用のナイフを混ぜて打ったら、なんとか上手く行った。」

「ああ、それで今日"特注品"を作ってらしたんですね。」

「そうだ。で、ここで作るといつもの品質で作れたから、ここになんかあるんだろうな……」

　俺の言葉で他の三人も考え込むが、思い当たることはなかったようだ。

「つっても、これで困ることと言ったら今はここ以外に移り住めない、ってだけで、そもそもそのつもりもないから、実質何もないのと変わらないな。」

　俺はそう言ってハッハッハと笑う。だが、なにかでここを放棄しないといけない場面が来ないとも限らない。

　その時のために、なぜ都では出来なかったのかは、合間を見つけて探っていく必要があるだろう。今の俺達でわからないと言うことは、俺達の知っていること(インストールも含め)以外の何かしらの専門知識を持った人の助けがいるとは思うのだが、そもそも、それが何の専門知識なのか、まずはそこからだ。

「さて、ちょうどいい時間だ、仕事は上がってメシにしようや。」

　俺がそう言うと、「ヒャッホウ」とサーミャが喜び、リケにたしなめられるのだった。

## 完成と教育？と

2018年11月30日

　翌日、サーミャの言ったとおり、雨はまだ降り続いていた。それでも昨日より更に雨脚が弱まっているようだ。水を汲みに行ったが、昨日ほどは濡れなかった。

「明日には止んでくれるといいが。」

「そうねぇ。お洗濯が出来ないものね。」

　そうなのだ、この３日洗濯が出来ていないので、洗濯物がそこそこ溜まってきている。幸い、５日分ほどは各人とも下着の替えがあるので、まだ平気ではあるが、明日止んでくれないと流石に困る事になる。ただこればかりは祈るしか無い。

　今日も俺はハルバード、リケたちは一般モデルの製作をする。サーミャもディアナも少しずつ手際が良くなっているようだ。この調子なら俺が一般モデルを手伝わずとも良いかも知れない。実際に昨日もそれなりの数が出来てるし。これなら俺は俺で自分の作業に集中できるな。

　果たして、この日は２本分のハルバードの頭と石突きを作る事ができた。作業自体は昨日やったのと変わらないからな。ただ、ナイフとかと違って手間が段違いに多い。仮に一般モデルに品質を落としたとしても、大量生産は無理そうだ。手間が多すぎるから、リケたちに作らせるのもなぁ……。それなら槍とかそっちのほうが良いかも知れない。

　少し時間が空いたので、その時間で矢じりの補充をしておいた。明日雨が上がったら、サーミャとディアナは採集か狩りに出るだろう。そろそろ肉の在庫も心許ない。１週間やそこらは平気だし、ケチれば２週間だって持たせる自信はあるが、それはちょっと寂しいからな。また長雨が来るとも限らない。補充には行ってもらおう。

　次の日、サーミャの言ったとおり、雨は上がっていた。外に出てみると、まだ水たまりなんかもあちこちに残っている。それでも上がり始めた朝日が世界を金色に染め上げ、森の木々の影とであたかも一幅の絵画のような光景である。早起きは三文の徳とはよく言ったもんだな。

　水を汲んで戻ってきたら洗濯が始まるが、今日は量が多い。すぐには終わりそうにないし、水もいつもより使いそうなので、もう一度汲みに戻ったりした。俺はあんまり洗濯物手伝えないからな。前の世界ほど色っぽい感じのものではないとは言え、やはり女性の下着を洗うところに参加するのは、彼女たちが気にしなくても俺がなんともいたたまれない気持ちになるので遠慮している。家事分担として、食事は俺の担当だから許していただきたい。

　やや遅めの朝飯を終えたら、サーミャとディアナは狩りに出かけていった。サーミャがやたらと機嫌が良かったのだが、どうも矢じりを補充してもらったのが嬉しいらしい。リケに聞いた。「乙女心ですよ、乙女心」とリケは言っていたが、どんな乙女心なんだ、それは。

　俺達、鍛冶場組の今日の作業は俺がハルバードの続きで、リケは一般モデルのナイフの製作だ。これは元々サーミャとディアナはそんなに手伝えないやつだからな。

　２人ともが鍛造の作業なので、作業場に鎚の音が常に響き渡る。作っているものが違うので、響く音が少し違う。それがまるで大きさの違う楽器を二人で奏でているように聞こえて、少し楽しい。

　俺の作業の合間に、リケの作ったナイフを見てみるが、少しずつ腕は上がっている。以前よりも、バラつきのようなものが格段に減っている。ここで「お主にも鉄の声が聞こえるようになったか……」とか言えれば良いんだろうけど、あいにく俺はチートでその辺をやっているので、いまいち分からない。なので俺が何を見てどう叩いているかを観察して会得する"見て盗め"方式しか出来ないんだよな。

　リケのナイフを見せてもらったので、勝手が違うが高級モデルのハルバード製作を見学してもらう。１つ目はもう作ってしまったから、今日２つ目のものになる。槍、斧、ピックそれぞれ違うものの組み合わせだから、俺がそれぞれをどう作るのか、どう組み合わせているのかを学んでくれたらいいのだが。

「どうだ？」

　完成したハルバードの頭部分を渡す。受け取ったリケはしげしげと眺めると

「それぞれの部分の完成度もさることながら、接合部分も凄いですね。元々一枚だったように見えます。」

　といつものように品評を始める。とりあえずはリケに見せても問題ないクオリティのものには仕上がっているようで安堵する。

「で、何か掴めそうか？」

「ええ。親方には追いつけそうにはないですが、見ていていくつか試したいことも増えました。」

「それなら良かった。ちゃんと教えてやりたいが、どうにも説明がなぁ。」

「いえいえ、こう言うのは普通、盗み見て覚えるものですよ。親方は優しいくらいです。」

「これからも見たい作業とかあったら、遠慮なく言ってくれていいからな。」

「はい、親方。精進します！」

　リケは決意に目を燃やしながらそう言った。

　さて、今日は雨も降ってないし、ハルバードの仕上げをしてしまおう。外においてある材木を持ってきて、２mの棒を５本作る。特注モデルのナイフと、チートで正確に綺麗な棒が大して時間もかからずに作れてしまうのは、何度思うがつくづく

　その棒の両端にハルバードの頭と石突きをそれぞれ釘で取り付けたら、ようやっとハルバードの完成である。ちょっと試したいが、流石に作業場内で２mの長さのものを振り回すのは無理がある。俺は外に出て、振った感じを確かめることにした。

　もう少しすれば、朝は金色に世界を塗っていた太陽が、今度は橙色に世界を染め上げるだろう。だがまだもう少しだけ、空は青さを保っている。そんな中で２mのハルバードをいない敵に向かって、ただ単に振り回したり、槍で突いたり、斧で薙ぎ払ったり、ピックで足元を払ったりしてみる。ピック部分と斧部分は丁度釣り合いが取れているし、頭部分と石突きのバランスも悪くない。ちゃんと使いこなせれば、短槍１本よりは役に立ちそうには思う。

　そうやってしばらく一通りの動きを何回か繰り返し、太陽が今日の仕事を終えようとするころ、俺も"試し振り"の仕事を終えた。すると、パチパチと拍手の音が３つ聞こえる。

「あれ、サーミャとディアナ帰ってたのか。」

「おう、とっくにな。ただいま。」

「ただいま。エイゾウってハルバードの扱いも出来るのね。」

「２人共おかえり。見ての通りの腕前だけどな。」

　自分ではロングソードよりもいい動きが出来ているようには思えないが、ロングソードのときは超強いみたいなので、ディアナがああ言うってことは、ハルバードでもそこそこ強いらしい。ホームディフェンス用に２本ほど特注モデル作ろうかなぁ。

「そんなことより、みんな戻ってきたならメシにしよう。サーミャとディアナは今日は何を獲ったんだ？」

「そうそう、聞いてくれよ！今日はな……」

　そんな事を話しながら、俺達は家の中へ戻っていくのだった。

## アフターケア

2018年12月1日

　翌日、サーミャとディアナが仕留めた、サーミャ曰く「デカい」猪を湖から引き上げた。サーミャがデカいと言うだけあって、確かにかなりの大きさだ。前の世界でも猪の体重は70kgほどあると言うが、これは

　皮を剥いだりして食肉にしたら、相当減るとは思うが、それでも向こう2週間は平気な量になるだろう。いつもどおり運搬台を作って引いていく。荷物は大きいが、4人だから引くのは楽だ。

　戻って捌いたが、やはり相当な量の肉が確保できた。

「これならしばらくは平気だなぁ。」

「また来週くらい獲ればいけるか？」

「ああ、それで十分だよ。」

　むしろ在庫が増えると思う。

「じゃあまた来週だな。何がいいかなぁ。」

　サーミャは大物が獲れて機嫌がいい。

「この森で大型の獲物は熊……はともかく、猪と鹿以外は何がいるんだ？」

「デカいのはそれくらいだなぁ。もう少し小さいのなら大狸ってのがたまにいる。」

「大狸？」

「これくらいの丸っこいやつ。ちょっとかわいい顔してる。」

　サーミャが手で大きさを表す。７０センチくらいか。たしかに狸にしてはデカいな。

「美味いの？」

「まぁまぁだな……。不味くはないけど、鹿と猪の方が数が多いし美味いから、わざわざ獲ることもない。」

「なるほど。よほど他の獲物が獲れないときくらいか。」

「だなぁ。」

　そんな会話をしながら、肉を塩漬けにしたり、干したりする。今日食べる分は勿論別だ。

　この日の昼飯にはソテーした猪肉に火酒――ブランデーをかけて、塩コショウしたステーキを出したが、サーミャとリケは勿論、ディアナにも好評だったことを申し添えておこう。

　午後は俺とリケは鍛冶仕事をするが、サーミャとディアナは繕い物をするらしい。大きくほころんでいるものは無いが、ちょいちょい傷んでいる部分はあるみたいだからな。

　みたい、と言うのはもちろん下着も含むからだ。確かにそれは俺じゃ出来ない。なので二人に任せて、俺達は鍛冶仕事に集中する。

　分担はいつもどおり、俺が高級モデルで、リケが一般モデルだ。作る速度は俺が早いが、リケは今日まで作っていた分があるので、明日も作れば十分な納品量が確保できそうである。鍛冶場に炎の音と、鎚の音が響く。真っ赤に熱された鉄をステージにして踊るように、鎚がその上を跳ね、次々と製品が形になっていくのだった。

　翌日、弁当を持たせたサーミャとディアナは採集に出かけた。果物と野菜を探すらしい。俺とリケは今日も鍛冶場だ。

「リケもたまには外に出たいか？」

「どうしてです？」

「いや、リケはずっと鍛冶場仕事だろ？サーミャたちは外出てるからな。」

「出たくないと言えば嘘にはなりますけど、ドワーフはこれが本分ですし、それに十分楽しいですから。」

「そうか。それなら良いんだ。」

「お気遣いありがとうございます、親方。」

「いや……うん。」

　そうして２人で鍛冶仕事を始める。夕方前まででも、そこそこの数が作成できた。この調子ならいつもより多いくらいかも知れないな。明日は休みにするか。そう思ったとき、販売スペースの扉が叩かれる。かなり力強く叩いている。びっくりしているリケをその場に残して、扉に向かうと聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「エイゾウ、いるかー！」

　相変わらずバカでかい声だ。

「今開けるから待て！」

　俺も負けず劣らず大きな声で怒鳴り返し、扉を開ける。そこには長身で赤毛の女が、大きな刀傷があるが愛嬌もある顔に、満面の笑みを

「よっ、久しぶり！」

「よう。よく来たな。入って座れよ。」

「おう、ありがとう。」

　女――傭兵で素早さから二つ名を”雷剣”と呼ばれるヘレンは、ズカズカと入ってドカリ、と座る。実際の音はそんなにしてないが、動きが大きいからか、動作もうるさいように感じる。俺はリケに言って、ワインを水で割ったものを、お茶代わりに用意してもらう。

「それで？今日は何の用なんだ？不具合でもあったか？」

「いや、目立った不具合はないよ。ただ、アタイ今度ちょっと遠くの戦地に行くことになってね。その前に手入れとチェックをお願いしときたいなと思って。」

「ああ、なるほどな。」

　俺はヘレンから２本のショートソードを受け取ると、刃こぼれがないか、歪みが出てないかをチェックする。

「これはだいぶ使ったか？」

「んー、あれから訓練で１週間で、その後はこの近くの野盗退治とかそう言うのでウロウロしてて、合間合間にこれで丸太相手に練習したりもしたから、それなりには。」

「なるほど。」

　刃こぼれは殆どないし、歪みもなしと言っていいレベルだが、逆に言えば多少はあると言うことだ。どんな膂力でどれだけ使えば俺の特注モデルをここまで痛めつけられるのだろうか。やはり実戦に出さないと分からないことってあるもんだな。

「あ、そうだ。」

　思いだしたかのようにヘレンは立ち上がる。

「ん？どした？」

　俺は何事かと身構えた。

「その剣、アタイのイメージ通りにめちゃくちゃ頑丈だった。やたら切れるし。命を救って貰ったことも何度かある。」

　ほほう。するとこれで剣を受けたり、その他にも無茶な使い方はしたんだろう。それでこれだけ耐えたら十分ではあるか。材質自体はただの鋼だしな。

「礼はいくら言っても足りないが、言わせてくれ。ありがとう。」

　そう言ってヘレンは右手を差し出してくる。

「……これが俺の仕事だからな。やると決めた仕事はキッチリやるさ。」

　俺は差し出された手を握る。ギュッと握られた手が痛かったが、今はそんな事よりも、嬉しさの方が勝っている。

「親方ってほんとに素直じゃないですね。」

　ため息をつきつつ、笑いながらそう言うリケの言葉を無視できるくらいには。

## お手入れは大事

2018年12月2日

「刃こぼれや歪みはほぼ無いし、向こう半年くらいは大丈夫だと思うが、一応直しておこう。」

　握手をしたまま、俺はヘレンに声を掛ける。

「ああ、よろしくな。」

「じゃ、直しちまうから、ちょっと待っててくれな。」

「なぁ。」

「ん？」

　ヘレンがおずおずと声をかけてくる。剛毅一筋かと思っていたが、そうでないこともあるらしい。

「直してるの見てちゃダメか？」

「いや、別に構わんが。」

　作業を見て理解できるとも思えないが、それくらいのことなら別に断るほどのことでもない。火を使う時は危ない（場合によっては1000℃近いし）から遠慮して貰う必要があるかも知れないが、研ぎとこのくらいの歪みの直しなら火は使わないからな。逆に火を使って焼入れやら焼戻しやらの意味がなくなる方が怖い。

「よっしゃ！ありがとな！」

　バンバン背中を叩いてくる。やっぱり剛毅だな。女傑と言う言葉がよく似合う。

「親方、私も見ていいですか？」

「ああ、勿論。」

　リケも見学を希望したので、快諾する。むしろリケの場合はちゃんと見ておいてくれたほうが良い。多分それが分かってて、言いだしたのだとは思うが。

　まずは歪みをとる。と言ってもそんなに大きく歪んでもいないので、金床に置いて叩くだけだ。チートの力でどこをどれくらい叩けば歪みが戻るのかがわかるので、慎重に叩いていく。普段の鍛冶仕事とは違った、静かに澄んだ音が響いた。

　1本目の作業を終えると、俺は剣をヘレンに渡す。

「ちょっと具合を見てくれ。」

「あいよ。」

　ヘレンは剣を受け取ると、少し離れたところで振り回す。危なかっしい感じが一切ないのは、彼女の剣の腕前なんだろう。

「お、おおー！？」

　ヘレンが驚きの声を上げた。

「すげぇよエイゾウ！最初と同じくらい馴染んでる！」

「あの程度の歪みを直したからって、それでちゃんと分かるお前も凄いよ。」

　これは包み隠さない正直なところだ。熟練した職人の指は数ミクロンの誤差も分かると言うが、それと同じものを感じる。

「じゃあ、それで問題ないんだな？」

「勿論さ！新品みたいだ！」

　返ってきた剣を再度見れば、本人が言う通り、相当使い込んでいるのだろう、柄の革巻きに何度か巻き直した跡がある。

「ついでに革巻きもこっちで直すか？」

「いや、そっちはアタイの手に馴染んでるからいいよ。そうなるように巻いてるし。」

「じゃあ、刀身のところだけ直すよ。」

「ああ。」

　俺はもう１本も歪みを慎重に直していく。静かな鍛冶場に再び澄んだ鎚の音が響いている。リケもヘレンも自分の呼吸音が作業の邪魔になるとでも思っているかのように、息を潜めてじっと作業を見ている。

「なぁ、ヘレン。」

「ん？」

「見てて楽しいか？」

「うん。見てると職人だなぁって感じがする。」

「いや、紛れもなく鍛冶職人だぞ、俺は。」

　鍛冶屋はなりたてに近いけどな。

「それは分かってんだけど、アタイの父ちゃんが職人で、色々作るの見てたから。」

「へぇ。何の職人だったんだ。」

「馬具職人。アタイは色々あって家を出ちゃったけどね。」

「馬具職人か。そっちも面白そうだ。」

　専門職って感じがする。蹄鉄とか釘は鍛冶屋の領分だから、そのへんはやってもいいかもな。

　そんな話をしながら、少しずつ歪みをとっていく。全部の歪みを正した頃、ヘレンがぽそりと言った。

「エイゾウはアタイがなんで家出たのかって聞かないんだな。」

「興味がまったくないわけじゃないけどな。女のそういう過去は基本的に聞かないことにしてんだよ。」

「聞いて酷い目にあったことがあるとか？」

「かもな。昔に何食って美味かった、とかならいくらでも聞いてやるよ。よし、こっちも終わったぞ。」

　今しがた直し終えた１本をヘレンに渡して具合を確かめてもらうが、問題はないようなので、次は研ぎをする。

　神経を尖らせて――とは言ってもチートの恩恵が大なるところではあるのだが――刃を研いでいく。リケもヘレンも真剣な目つきで俺の手元を注視している。やがて刃こぼれが消えたところで止めた。

「これでしばらくは平気なはずだ。」

　仕上がった一本を渡す。ヘレンが仕上がりを確認していると、作業場の鳴子がカランコロンと音を立てた。

「ありゃ、もうそんな時間か。」

「この鳴子はなんだ？」

「家の方の扉が開くとこっちのが鳴るんだよ。」

「じゃあこっちの扉を開けたら？」

「家の方の鳴子が鳴る。」

「へぇ、面白いな。」

「今みたいにどっちかを空けてることもあるからな。便利だよ。多分うちの人間が帰ってきたな。」

　はたして、いくらもしないうちにサーミャとディアナが作業場にやってきた。

「ただいま。あら、お客さん？」

「おかえり。ああ。前にうちで剣を作った人だよ。」

　ヘレンがペコリとディアナに頭を下げる。

「あ、ヘレンじゃないか。元気してたか？」

「おう、ピンピンしてるよ。」

　サーミャは前に来た時に顔合わせてるから知っている。人懐っこいやつなので挨拶も気軽だ。

「ヘレンって前に言ってた、"雷剣"のヘレン？」

「ん？ああ。そうだけど？」

　ディアナが俺に聞いたが、答えたのはヘレンだ。それを聞いたディアナの目が輝く。

「ヘレン。」

「ん？なんだい？エイゾウ。」

「直しの代金の代わりに、ディアナ……そこのお嬢さんと稽古してくれないか。」

「お、そんなんでいいのか？」

「ああ。その間にもう一本仕上げとくよ。」

「よっしゃ、じゃあ任せとけ！」

「お手柔らかにな。」

　俺はいつも使っている木剣をヘレンに放り投げる。ヘレンは見事に受け取ると、ディアナと外に出ていった。ディアナが目に見えてウキウキしてたな。ヘレンってそんな有名人だったのか。

　俺はそれを見送りながら、自分の作業に戻るべく、まだ研いでない方の剣を手にとるのだった。

## 上には上

2018年12月3日

　研いでなかった方の仕上げも終わり、作業場の後始末をしているところで、ヘレンとディアナが戻ってきた。俺の予想に違わず、ディアナはこっぴどくやられている。ヘレンがそうそう手加減するわけないからなぁ……。

「どうだった？」

　俺はヘレンとディアナのどっちにともなく聞いてみた。

「あー、あれだな。お嬢は基本の動きは良かったけど、もうちょっと、綺麗じゃないやり方を覚えたほうがいいかもな。」

　答えたのはヘレンの方である。と言うかディアナはまだ肩で息をしていて答えられそうにない。本来は２本のショートソードを操っての攻撃を得意としているヘレンだが、１本でも圧倒したんだろうな。"雷剣"の面目躍如と言ったところか。

　一方のディアナはどこから剣が飛んでくるか分からないままの対応を強いられていたのだと思うと、これは同情せざるを得ない。

「目潰しとかはかけてないよな？」

「それはしてないよ。フェイントは山程かけたけど。」

　さすがに本当の"なんでもあり"というわけではなかったらしい。でもこのフェイント、蹴ると見せかけて、とかそう言うのを含んでると思う。俺はそれをやってないから、剣だけを使うというのが前提のディアナじゃ対応できなかったのは、容易に想像できる。

　逆にディアナの剣筋は素直すぎて、ヘレンにはフェイントもろくに通じなかったに違いない。最近はその辺りも出来るようにはなってきているのだが、流石に数々の戦場をくぐり抜けてきた、二つ名まである傭兵とは比べるべくもない。

「でも、御前試合でやった王宮の何とかってやつよりは全然強いと思うよ。お嬢はエイゾウが鍛えたんだろ？」

「ん？ああ。基礎の剣術は全くだけど、うちに来てからは俺が稽古つけてる。」

「やっぱりな。フェイントの癖がエイゾウに似てた。似すぎてたからこそ対応が楽にできたんだけど。」

　１回打ち合った相手の癖を覚えて次には対応してくるとか、ヘレンも十分にチートくさいやつだな。いや、戦場だと初見で対応できないと、そこで自分の終わりを意味するときもあるから、当然といえば当然なのか。引き出しを増やして、対応できるシチュエーションを増やすのは理にかなっているようには思う。

「エイゾウはこのヘレンと四半時も打ち合ったの……？」

　息が整ってきたディアナが俺に聞いてくる。

「まぁ、そうだな。あの時は確か二刀流だったか。」

「……上には上がいくらでもいるって思い知ったわ。」

　ディアナが肩を落としながら言うと、リケがうんうん頷きながら、落とした肩をポンポン叩いて慰めている。なにか通じあうところがあるらしい。

「よっし、それじゃあエイゾウもやろうぜ！」

　ノッてきたぜ！みたいなノリでヘレンが言う。

「なんでだよ。やらねえよ。」

「ええーっ。」

「ただの鍛冶屋だぞ。現役の傭兵に敵うもんかい。」

「いいじゃん、やろうぜ。」

「やらないって。それよりも、もう大分遅いがどうするんだ？別にうちは泊めても構わないが。」

「あー。もう外が暗くなってきてるな。」

「街までは結構あるし、真っ暗の森を帰すのも俺達も気が引けるから、泊まってけよ。」

　丁度ディアナの部屋が出来て客間使えるしな。うちの３人娘もうんうんと頷いている。おそらくはこの地域最強とは言え、この中を女性を帰すのはよろしくない。

「んー。じゃあお言葉に甘えて。」

「明日は俺達も街に行くし、ついでに送ってってやるよ。」

「おお、ありがとう。」

「ついでだから気にすんな。」

　今日の夕食と明日の朝食は１人分消費が増えるが、これくらいなら気にする必要もないだろう。今日はちょっと腕によりをかけるか。

　こないだちょっと豪勢な飯にしたが、今日も負けず劣らず、肉を多めに使ったメニューにして、全員から好評だった。ヘレンが「胡椒使うと美味いんだなぁ……」と言っていたのが印象的である。金持ってんだから買えばいいのに。夕食中の話題はヘレンが行ったことのある街の話だ。傭兵として各地をまわっているし、立場的にもよりアンダーグラウンドなところも知っているだけあって、中々に興味深い話がいろいろ聞けた。娼館かぁ……。いや、興味はない。ほんとですよ？

　翌朝は水を汲んできた後の日課にヘレンも加わる。５人いると流石に洗い桶も狭いな……。洗濯もヘレンが参加していた。楽しんでいたようなので何よりだ。

　街へ出る準備をしたら早速向かう。俺とリケが荷車を引いて、他の３人が周囲の警戒である。ヘレン１人が増えただけだが、安心感が物凄い。傭兵稼業をしていると隊商の護衛なんかを頼まれることも多いらしく、その辺りの話をしながら森を出た。

　街道に出ると一気に景色が開けた。青いキャンバスにところどころ白い絵の具を落としたような空に、遠くまで緑の絨毯が広がっている。毎度のどかな風景だなとは思うが、見通しが良いということは、遠くから俺達の姿を確認することも可能なわけで、野盗などにとってはむしろ都合のいい話になってしまう。

　ただ、ヘレンの話では、この辺りの主だった野盗は退治しているから大丈夫、だそうだ。何せ、その退治の先頭に立ってた人間の言うことだから信頼性が物凄い。とは言え、討伐に引っかからなかったような小物はまだいるはずなので、最低限の警戒はしつつ街道を行くことにする。

　男１人に女性４人、しかも荷車付きと言う編成にも関わらず、何事も起きずに街にたどり着いた。女性陣がやたら強そう、と言うのもあるだろうが、基本的には街の衛兵たちの努力も大部分に寄与していることとは思う。

　今日の立ち番は前にディアナをチェックした衛兵氏だ。俺達を見ると一瞬ニヤッとした後、すぐに顔を引き締める。

「またおモテになることで、と思ってたんだが、そこの女性はまさか"雷剣"か？」

「ええ。ちょっと知り合いでして。」

「アンタ一体何者なんだ……」

「至って普通の鍛冶屋ですよ。」

「普通の鍛冶屋が"雷剣"と知り合いだったりはしないよ……。まぁいいや、騒ぎは起こすなよ。」

「ええ、もちろん。」

　とは言え、そもそも知り合いだったのはカミロだろうし、伯爵家三男坊としてのマリウスとも知人だったみたいだし、アイツの交友関係のほうが俺にとっては謎だ。

　ともあれ衛兵さんに会釈して街の入口を通り過ぎる。ヘレンとはここでお別れだ。

「別にカミロには用事ないからなぁ。また戻ってきたら具合見てもらうと思うし、その時はよろしくな！なんか土産持っていってやるよ！」

　そう言ってヘレンは自由市の方に立ち去っていった。彼女が無事で戻ってきて、剣の具合を見られればそれが一番の土産だろうと、そう思わずにはいられなかった。

## 納品と入手

2018年12月4日

　ヘレンと別れた俺達は、そのままカミロの店に向かう。卸す商品の種類が１つ増えてはいるが、手順自体は変わらない。倉庫に荷車を入れて倉庫番の人に挨拶をすると、２階に上がって商談室へ行く。

　そのまましばらく待っていると、カミロと番頭さんがやってきた。

「よう。調子はどうだい。」

「まぁまぁだな。伯爵家出入りってことで信用が増えた分、商いも大きくなり始めてはいるよ。」

「おお、良かったじゃないか。」

　マリウスにとってはどうだったかは分からないが、少なくともカミロにはいい結果になっているようだ。

「今日持ってきたのはいつものか？」

「いつものと、ハルバードを５本ばかり持ってきた。」

「ハルバード？なんでまた？」

「この街の衛兵さん用に、"伯爵閣下"に売りつけてほしいんだよ。」

「ああ、なるほどな。」

「いけるか？」

「大丈夫だろ。回す先は他にもあるし、うちで買い取るよ。」

「そうしてもらえると助かる。」

　これで商談成立だ。俺もカミロもマリウスが買わないとは思ってないが、万が一買わないとなっても、売る先があるならいい。

「それで今度はこっちの話だが。」

　カミロは少し声を潜めた。

「変わった鉱石が欲しいって言ってただろ？」

「ああ。見つかったのか？」

「まぁね。まだ情報だけで入手はしてないが、"閣下"からの情報では、北方から流れてきた"アポイタカラ"が都の方にあるらしい。要るんなら押さえとくぞ。」

「いいね。押さえといてもらっていいか？」

「分かった。手遅れだった時はすまないが。」

「見つかっただけでも十分だよ。それで、いくらになるんだ？」

「金貨３枚。」

「それはまた、なかなか値の張る話だな。」

　俺はヘレンの剣を打ったときの金と、こないだのエイムール家騒動の報奨金で買えるから良いが、普通の鍛冶屋がおいそれと買えるような値段ではない。

「だが、それを金貨２枚にまけてやる方法がある。」

「面倒事はごめんだぞ。」

「なに、そんな面倒くさいことにはならんさ。伯爵閣下とは別のルートから

「なるほど、それの加工賃か。」

「そう言うことだ。」

　原材料費抜きで加工賃で金貨１枚、なら悪い話ではない。ミスリルを扱う機会までついてくるわけだし。

「うちの工房の刻印を目立たないところに入れるのは大丈夫か？」

「ああ、それは問題ない。」

「よし、引き受けた。」

「じゃあ、そう言うことで。」

　カミロが番頭さんに目線を送ると、番頭さんは頷いて部屋を出ていった。その後は都の様子や、よその街の様子なんかの話をしていると、荷物の積み込みが終わったので、俺達も部屋を出て、そのまま倉庫の荷車を引き取って家に帰る。帰りは行きとは違う衛兵さんが立ち番をしていたので、会釈だけして通り過ぎた。

　帰りの街道は行きよりも緊張の度合いが大きい。ミスリルを積んでいるからな。４人もいて、護衛の２人も手練ではあるが、高価な素材は緊張するなと言われても無理だ。小物でも高価な素材があると分かれば、一攫千金を狙ってくることは十分ありえる。なるべくはいつも通りを心がけたい。

　時折カサコソと茂みが音を立てるが、サーミャ曰くはどれも「風か小動物」とのことで、森に入るまで何事も起こらず、俺はほっと胸を撫で下ろした。正直、野盗に警戒しないといけない街道よりも、気をつけないといけないのが熊くらいである森のほうが気が楽だ。

　結局の所、特に何事もなく家に帰り着く。いつもの通り、食材なんかをサーミャとディアナに運び込んでもらい、鉄石と炭、ミスリルは俺とリケだ。ミスリルは銀色に輝いてはいるが、見た目は他の金属と大きく違うようには感じない。ちゃんと加工すれば薄く光るそうなのだが、今はそんなこともない。とりあえず今日は運び込むだけにしておいた。

　翌日、ミスリルが気にはなるが、１週間分の板金を作るほうが先なので、まずはそれから処理してしまう。４人で手分けして作業をしたので、結構な数を補充できた。

　そして更に翌日、いよいよミスリルの鍛造に取り掛かる。ミスリルの鍛造となると、そうそうあることでもないので、リケは半分手伝い、半分見学、サーミャとディアナは見学である。

　ミスリルをヤットコで掴むと、火を入れた火床で温度を上げていく。普通の銀だと鉄が加工できる温度まで上げると融けてしまうが、ミスリルは全くそんな様子もない。チートで加工可能な温度に達したことを見極めたら、金床においてハンマーで一打ちする。鉄とは違う、ガラスを叩いたときのような澄んだ音が鍛冶場に響く。普通の鋼ならこの一打ちでもそこそこ変形してくれるのだが、ミスリルは思いの外変形してくれない。

「これは厄介だな。」

「親方の鎚でも難しいですか。」

「ああ。ほとんど変わってない。加工賃もう少し分捕っとくんだった。」

　俺がそうボヤくと３人がクスクスと笑う。それを聞きながら４～５度叩くが、もうそこで加工できる温度を下回った。俺は再び火床に突っ込む。

「これは大分手こずりそうだぞ。」

「ミスリルですからねぇ。普通の鍛冶屋の手に負えるものじゃないですし。」

「そりゃあそうなんだが。」

　今まで鋼をヒョイヒョイと加工していたことを考えると、この手こずりようはなかなか歯がゆいものがある。

　そうは言っても着実に加工していくしかない。俺は火床から取り出したミスリルに再び鎚を振り下ろすのだった。

## ミスリルの細剣

2018年12月5日

　熱したミスリルを叩いて細く伸ばしていく。同じ長さまで伸ばすのに、通常の鋼の２～３倍ほどの時間がかかっているように思える。ただ、さすがはミスリルだなと思うのは、鋼だと必ず発生している組織のムラのようなものが無いことだ。伸ばすことに集中できるのはありがたい。

　後はやたら軽いのも伸ばす作業を楽にしている。何度も火床に入れるなら、軽いに越したことはない。とは言っても、叩くべき場所を間違えるとすぐにダメになってしまいそうな感じもあるし、伸ばすときに断面が菱形になるように端が薄くなるように、チートをフル活用して叩かないと、とんでもないことになるので、叩くこと自体に相当の集中力を要する。

　そうなると作業するには時間をかける以外にないが、それも叩いた時の音がとても澄んでいるので割と楽しい。３人もこの音は気に入ったようで、

「綺麗な音がするんだなぁ。」

「楽器みたいだよね。」

「サーミャもリケも気に入ったのね。私もだけど。」

　口々に音を褒めている。勢い、叩く速度も上がる。その分ほんの少しだけ伸ばすスピードも上がるのだった。

　間に昼飯を挟んでも、まだ伸ばす作業は終わっていない。更に叩いて伸ばしていく。

「飽きないか？」

　ずっと作業が続いているので、俺は３人にそう聞いた。

「いや？見てると結構楽しい。」

「私はこれも勉強になりますので……。それにミスリルの鍛造なんて実家でも見たことないですし。」

「そうそう。音も綺麗だし、叩いて少しずつ伸びていくの見てると飽きないわ。」

　三者三様に否定の言葉が返ってくる。

「そうか。それなら良いんだ。」

　俺は再び鎚をミスリルに振り下ろす。やがて、一番太い幅が2.5センチほど、長さ1メートルほどの、断面が菱形で先端が少し細くなった板に、棒状の握りが付いたミスリルの棒が出来上がった。板部分の先端は剣の切っ先になるので、更に少し叩いて鋭くなるように調整をする。これで基本の形自体は完成した。

　そこからいきなり研ぎを入れていく。鋼であれば焼入れや焼戻しが必要になるが、ミスリルにはいらない。十分な加工設備と一定以上の腕前があれば、量産に向いている気はする。実際には原材料の流通量が十分でないし、加熱もシビアなので前の世界のようにコンピュータ制御が可能ならまだしも、流石にまだそこまでは文明が進んでいないこの世界では、バンバン量産できるものでもないだろう。

　普通の砥石で果たして研げるのか不安だったが、チート最大活用でなんとか研ぐことが出来る。これもほんの少しでも角度やなんかがズレたりしたら、一発で刃がダメになってしまいそうな感触が指先から伝わってきた。集中を切らさないようにゆっくりゆっくりと研いで、刀身に刃をつけていく。

　砥石の上で刀身が動く度に、シャランと涼やかな音が流れ、見学者達の耳を楽しませている。忍び足をするようにそろそろと刀身を動かして、たっぷりと時間をかけてやっと刃をつける事ができた。

「よし、これで刀身はできたな。」

「もう振るえるの？」

　ディアナが頬を紅潮させて聞いてくる。

「握りに革も巻いてないし、護拳もつけてないが、振るだけなら。」

「やってみてもいい？」

「スッポ抜けると危ないから、外でな。」

「うん、わかった。」

　俺はディアナにミスリルの細剣を渡す。

「わ、軽いわね。」

「"羽毛のように軽い"とまで言われることもあるが、そこまでではなくても、鋼と比べたら棒っ切れみたいに軽いよな。」

「ええ。この軽さなら突きも素早く繰り出せるわね。」

「だろうなぁ。じゃあ外に出よう。」

　俺達はゾロゾロと外に出た。みんな一様に目が輝いている。当然ながら俺もミスリルなんてものを見るのは

　まずは何もない状態でディアナがレイピアを振るう。基本的には前後左右に動き回って突きを繰り出す動きだ。軽いからか、それなりに鋭く突いているのに、すっぽ抜ける様子はない。突きの速度もショートソードとレイピアの違いがあるとは言え、相当に速くなっているように見える。さながら舞を舞っているようで、サーミャとリケは動きに見入っていた。

　レイピアは「斬り」も出来る武器なので、「斬り払う」と言うほど大きくは動かさないが、突く動きに斬る動きも織り交ぜてディアナが動いている。この動きも、いつもの稽古の時よりも随分と速いように思う。

「武器が軽いからか、だいぶ動きが速いな。」

「やっぱり？なんだか身体自体が軽く感じるし、レイピアが軽いから体力の消耗も少ないみたい。」

「なるほどなぁ。」

　武器は軽いに越したことはないよな。重さ自体が武器のハンマーなんかはともかくとして、斬る、突くの武器はそこまで重さはいらないからな。

「じゃあ次は的ありでやってみるか。」

　俺は材木を立ててみるだけの的を用意した。

「これを突いたりすればいいの？」

「うん。倒れるかも知れないから気をつけろよ。」

「わかったわ。」

　ディアナは剣を的に突きつけるように構え、スゥッと息を吸い、ゆっくりと吐く。辺りをただ風の渡る音だけが覆う。おそらくは数秒ほどの時間が数分以上にも感じたとき、

「ハッ！」

　気合一閃、ディアナが持てる力の全てをレイピアに注ぎ込むかのように突きを放つ。

　レイピアは狙い

　そこにはレイピアの切っ先の形の穴が穿たれていて、さっき突き刺したように見えたのが、「そう見えただけ」ではないことを俺達に雄弁に物語っている。

「これは……凄いわね……ほとんど手応えがなかった。」

「さっき何もないところに突きを放っていたときと感覚的には変わらない？」

「そうね。ほぼ同じだわ。」

「なら、上手く行ってるな。貸してみろ。」

　俺はディアナからレイピアを受け取ると、先端部分を

　だが、俺は１つあることを思いついた。ディアナにレイピアを戻すと、作業場から縄と板金を持ってくる。それをさっき的にした材木にくくりつけた。

「よし。今度はこいつを突いてみろ。」

「うん。わかった。」

　ディアナは素直に頷くと、再び構えて、今度はさっきよりもやや気楽な感じで突きを放つ。チリンと軽やかな音が辺りに響いて、くくりつけられた板金にはやはりレイピアの切っ先の形に穴が空いている。再びレイピアを確認するが、やはり歪みも刃こぼれも、傷すらもついていない。

「これはちょっと、とんでもないものを作ってしまったかも知れない。」

　俺がそう言うと、見ていた３人は神妙な面持ちで頷くのだった。

## 銀色の憂い

2018年12月6日

　ミスリル製レイピアの刀身は完成したが、これを世に出す、と言うことについては若干の躊躇がある。これ１本で世の中が大きく変わるとは思っていない。そこらの鍛冶屋が打った数打ちのショートソードであっても、それで１００人から襲いかかられたら、さすがに無事では済まないだろう。

　だがしかし、これで例えば道を塞ぐ岩を砕くことが出来るとなれば（そしてそれは可能だろうと思う）、通れなかった道を通ることが出来るようになり、それは戦の結果を大きく左右しうる、と言うことである。

　それを世に出してしまっていいのだろうか。ヘレンのショートソードは材質自体はただの鋼だったし、エイムール家の家宝になった剣も材質もあるが、滅多に外に出る品ではない。

　作ったのはレイピアだから、おそらくは戦場の最前線で積極的に活用されるものではないと思うから今回はいいと判断したとしても、今後もこう言うものを作るたびにいちいち悩むのか、と言う話はある。そろそろこの話には決着をつけないといけないだろうな。

「なぁ、みんな。」

「なんだ、エイゾウ。」

「なんでしょう、親方。」

「なぁに、エイゾウ。」

　俺が話しかけると、三者三様に返事をしてくれる。

「俺はこいつを世に出していいんだろうか。これは下手をしたら色々なところに災いを招くかも知れない。折れず、曲がらず、しかして切れる。切れ味はとどまるところを知らず、岩をも砕くだろう。そんなものを世に出してしまうのが、俺は正直怖い。その先にあるものを、俺は果たして背負いきれるだろうか。俺はそれが不安で不安でたまらないんだ。」

　俺は素直に今の心境を打ち明ける。４０を超えた大の男が、とは自分でも思うが、これ以上は俺が耐えられそうにない。

　そんな俺を３人はじっと見ていた。誰か俺を見限ってここから出ていくかも知れない。そうなったらそうなっただ。俺の器はそこまでだったと言うことでしかない。

　庭に静寂が訪れる。再び聞こえるのは風の渡る音だけだ。

「ふふっ。」

　次に俺が耳にしたのは笑い声だった。

「エイゾウも人間だったのねぇ。凄いものを作るから、そんなことには無頓着なのかと思ってたわ。」

　ディアナが微笑みながら言う。

「私も親方は人間離れしてらっしゃるので、気にしないかと思ってました。そう言うのは使い手の問題で、作る方は気にすることじゃないですよ。私はそう教わってきましたし、鍛冶屋は大体みんなそうです。親方くらい凄いものを作るとなると、気をつけたくなる気持ちは分かりますけどね。」

　リケもニコニコしている。

「そうそう。作ったものが護国の剣となるか、侵略の

「どうしてもエイゾウには重い、ってんならアタシたちにも担がせてくれよ。"家族"なんだろ。」

　サーミャが肩をバシバシ叩きながら言ってくる。その痛みも不思議と心地良い。

「みんな、すまんな。ありがとう。」

　俺はみんなに頭を深く下げて、目からこぼれ落ちるものをそっと拭う。その頭を誰かがそっと抱いてくれる。すると、今度は足元に抱きつかれ、続いて後ろから抱きすくめる感触があった。

　森の中の４人家族は、しばらく1つの塊になっているのだった。

「よし！」

　俺は頭を上げると、パン！と自分の頬を張った。もう迷わない。俺のこの世界での仕事は作りたいものを作って、それを世に出すことで、誰かのためになることだ。

「おっ、いい顔になったな、エイゾウ。」

「俺はもともと格好いいだろ。」

「えっ。」

「えっ。」

　そして４人で笑う。この家族なら大丈夫。やっていける。

「今日はこの辺にして飯にしよう。」

「やった。飯だ飯だ！」

「こらサーミャ！はしたないって言ってるでしょ！」

　はしゃぐサーミャをリケが嗜め、ディアナが微笑ましそうに見ている、いつもどおりの光景が戻ってくる。俺は晴れ晴れとした気分でその光景を眺めていた。

　翌日は鍔と護拳を作る。ここはミスリルにはせずに鋼にしておく。レイピアの鍔は籠型というか、複雑な曲線の組み合わせで出来ていて、ミスリルで加工するには難しいし、曲線の一本一本は細いので、さすがのミスリルと言えども激しく使えば歪みが出るかもしれないことを考えれば交換ができたほうが良いだろう、との考えからだ。

　鋼なら細工師に頼めば高いが作ってもらえるだろうし、俺の手を離れた後も大丈夫だろう。今日はリケたちは一般モデルの製作で、見学はしない。

　全体の作業を開始する前に、刀身の根元で、鍔で隠れる部分に、我が工房のマークである"座っている太めの猫"をタガネで彫り込む。タガネはミスリルに負けないように、焼入れと研ぎ直しをしておいたので、多少力は必要だったが、何とか彫刻することができた。

　板金を熱して細い棒状にしていく。昨日はミスリルの加工を一日中していたので、やけに加工しやすいように感じる。チートも活用はしているが、それでもかなり速いペースで細い棒が出来る。

　それをある程度の長さで切って、∫や§のような形にしていく。そのあと、それらを組み合わせて球状にする。イメージ的には前の世界の公園にあった”地球儀”の遊具みたいな感じである。……あれも俺が向こうの世界からいなくなる頃には大分減ってたな。

　ともあれ、そのような感じで刀身の根元から、握りを握った手がガードされるように組み合わせた籠のような護拳を完成させた。

　護拳部が完成したので、それに組み合わせる鍔を作成する。護拳の棒の太さと同じような太さの棒を作り、それの両端を球状にする。鍔が出来たら護拳に組み合わせて一旦は手元が完成した。

　手元の部品を組み合わせる前に、革を握りに巻いていき、柄頭に留めて握りを仕上げた。これを先にしておかないと護拳で面倒くさいからな……。握りも出来たので、鍔と護拳を刀身に組み合わせる。

　組み上がってみると、優美としか言いようのない細剣が出来上がった。これならどこに出しても恥ずかしくない出来だ。

　そして、俺はこれを世に出すかどうか、もう迷いはしなかった。

## 納品前の"いつも"

2018年12月7日

　レイピア本体が完成した翌日、鞘がまだ出来ていないので、鞘を作ることにした。特に指定がなかったし、とりあえずで作って気に入らなかったら別に

　外の材木置場から適当な長さの板を２枚切り出して、作業場に持っていく。後の作業は今までの鞘づくりと変わらない。型を取って大まかに切り出し、張り合わせて、削る。今回は鞘の先端と、日本刀の鞘で言うところの"鯉口"の部分に鋼の板で補強を入れてみた。見た目には白木の鞘に補強が入っているような感じだ。凝るならここに鹿の皮でも張ったり、彫刻を入れたりするのだろうが、今回はこのまま納品することにした。

　鞘１本程度を作るなら大して時間はかからない。ましてや今回のは「間に合わせ」の鞘だしな。残りの時間は一般モデルの作成途中のもの――型から取り出しただけのショートソードやロングソードをいくらか分けて貰って、高級モデルの製作にかかる。こうやって見てみると、以前に見たときよりもサーミャが鋳造したのも、ディアナが鋳造したのも、どちらも品質が上がっている。以前よりも一般モデルは勿論、高級モデルにするための労力が少なくて済みそうだ。

　２日ほどかなり集中して剣を打っていたからか、ついつい集中してすべてのムラを消しこんでしまいそうになる。だが、それをしてしまうと特注モデルになってしまう。「作りたいものを作って世に出す」ことに躊躇はないが、それとこれとは話が違うのだ。そもそも１本金貨１枚はする代物（値段は俺の気分次第ではあるが）が、おいそれと売れるわけもないので、当面は高級モデルがこの工房の量産品としては最高級となる。

　想像通り、元の型から出たばかりの品が良かったので、早くに高級モデルが仕上がった。そのうちディアナにも、もうちょっとだけ鎚を持たせても良いかもなぁ。この日も十分な数の在庫が確保できた。この調子なら明日ナイフをつくれば、卸に行くのに十分な数を確保できそうだ。明後日は久しぶりにゆっくりと休みにしても良いかも知れない。前の休みの後、エイムール家のいざこざがあって全然休めてなかったからな。ミスリル製のレイピアの作成は色々と大変だったし、ちょっと休みたい。

　そして、その日の夕食のときに翌々日を休暇にする提案をすると、満場一致で可決された。

　翌日は休みに備えてか、サーミャとディアナが狩りに連れ立っていった。ディアナは最初こそ帰ってきたら完全にバテていたが、ここ何回かは帰ってきてからもまだ余裕が残っている。森の中を歩いて走ってだから、さぞかし体力がついていることだろうなぁ。

　それは日々の稽古にも顕れていて、日々少しづつではあるが、前より俺の打ち込みに対応できる時間が延びてきている。詳しくはわからないが今のままでも、もしかしたら普通の兵士程度であれば、体力を尽きさせて勝つことが出来るかも知れない。このまま行けばこの地域一もあるかも知れないなぁ……。

　俺とリケの鍛冶場組はナイフの製造に取り掛かる。リケが一般モデル、俺が高級モデルである。ここらはほぼ流れ作業のようなもので、お互いにサクサクとナイフを作っていく。心なしかリケの製作速度が上がっているようにも思う。流石に俺の速度には勝てないが、割といい勝負が出来そうなタイミングもあった。みんな少しずつ腕を上げてきているんだなぁ。

　そのスピードで黙々と作り続けたので、卸すには十分すぎるほどの数を確保でき、夕方前にはその日の作業を終えることができた。そこへ、鍛冶場の鳴子が鳴ってサーミャとディアナの帰宅を教えてくれる。

「お、丁度良かったな。」

「そうですね。私ここ片しちゃいますね。」

「おう、頼む。」

　俺とリケはテキパキと鍛冶場を片付けて、家に戻る。そこには帰ったばかりのサーミャとディアナが弓矢を含む荷物を下ろしているところだった。

「おかえり。どうだった？」

「ただいま。おう、大物の鹿を仕留めたぜ。」

「そうか、それは明日引き上げるのが楽しみだな。」

「おう、期待しててくれ！」

　サーミャが胸を張って得意そうにしている。一方、ディアナは少し

「おい、サーミャ。ディアナはどうしたんだあれ。」

「ああ、あれな……」

　サーミャはやれやれと言った感じでため息をつく。

「鹿を仕留めて

「ああ、なるほどな……」

　パタパタと尻尾を振る子犬のような子狼の姿を想像してしまうと、そりゃ可愛さでメロメロになるのも頷ける。

「その親子はどうしたんだ？」

「抜いた腸をやったら咥えてどっか行ったよ。アタシ達が狩りしてるの知ってて待ってたんだなあれは。」

　サーミャは「心臓はちゃんと埋めたけど」と続ける。つくづくこの森の狼は賢いな。しかし、この様子だとディアナは上手いこと餌付けしたら飼えるかも知れないって知ったら、飼うと言って聞かないだろうな……。それだけは耳に入れないようにせねばいかん。

## 休暇と納品と

2018年12月8日

　ディアナが、子狼がいかに可愛かったかを夕食の間中力説した翌日、朝の日課を終えた俺達は、デカい鹿を引き上げるべく森を歩いていた。

　さっきからディアナがソワソワしているのは、今日も子狼がいないかどうか気にしているのだろう。俺も前の世界では野良猫の親子を見かけたら、しばらくはその付近を通るときにいないかどうか注意するようになったから、気持ちはわかる。だが、そうやって探していると滅多に現れないものなのだ。俺が野良猫を探したときもそうだった。

　果たして、狼の親子は発見できずに湖に着いた。ディアナのテンションが目に見えて落ちているが、人はそうやって学んでいくのだ……。

　前にサーミャ達が仕留めた猪もかなりの大きさだったが、今回の鹿もかなりデカい。これ体長２ｍくらいあるんじゃないのか。

「これは仕留めるのに苦労しただろ？」

「エイゾウ特製の矢じりだったし、今回は当てどころが良かったんだろうな、ほとんど即死だった。」

「おお、それは凄いな。」

「いやぁ、普通の矢じりだったら、帰るのは日が沈みきるかどうかのギリギリになってたと思う。」

　サーミャが遠回しに褒めてくれたので、素直に「ありがとよ」とお礼を言っておいた。

　リケには大きめの木を伐って貰うよう頼んでおいて、残る３人で頑張って引き上げる。最初は多少の浮力があってその分は楽だったが、岸に近づくにつれて重くなってくる。サーミャ（と今は俺にディアナ）の筋力が、普通の人間よりはかなり強いから何とかなっているが、これは普通の人間が２人だけだったらちょっと厳しいのでは、と思わせる重さだ。こないだの猪と合わせて、肉の貯蔵量がかなり増えるだろう。

　大きめの木で作った運搬台に、４人で引きずりあげる。このときも、いつもより苦労して引き上げた。もちろん、引っ張るのも運搬台が大きいこともあるが、鹿の重さも相まって、帰りにはいつもより時間をかけることになってしまった。

　家に戻って吊るすのも一苦労はしたが、その後はあまり変わらなかった。切れるナイフでササッと処理できているのもあるにはあるが、手慣れてきているのも大きいだろう。ほぼ毎週捌いてるからな。肉と今回はサーミャの要望で腱をとってある。腱は後で弓の弦にするらしい。塩漬けにするのも限界があるので、今回はかなりの量を干すことになった。鍛冶場のあちこちにぶらんと肉が吊り下げられて、なんだか肉屋のようである。やはりどこかで燻製小屋兼用の貯蔵庫を作る必要があるな……。

　昼飯は鹿肉のソテーである。そして、ここからは完全に休暇なので、昼間からワイン（リケは火酒）も出した。世界が違っても、昼から飲む酒は美味いな。元々こっちの世界でも昼から酒と言うのはままあることではある（水の代わりに飲むということはほぼないが）ので、俺以外の３人も肉と酒を楽しんでいた。

　午後からは三々五々、それぞれの好きなことをする。サーミャは弓の手入れ、リケは細工物の作製、ディアナは剣術の稽古だ。俺は中庭に作ろうとしていた花壇兼家庭菜園の整備の続きである。前からほったらかしになっていたので、土はある程度の柔らかさを保ってはいるものの、雑草は生えまくっていた。これは耕し直すか。

　作業場から鍬をとってきて、耕し始める。前よりは大分楽なので、３人の手伝いは特に必要ない。やってることはある種、鍛冶の仕事に似ているが、こちらは売り物でもなんでもないので、気楽さが段違いだ。身体を動かすのは嫌いではないし、畑仕事もたまにはやっていかないとなぁ。

　何とか１人でも中庭を耕し終えた。土が結構フカフカになっている。本当ならここで土をふるいにかけたりしたほうが良いのだろうが、今後どれくらい手をかけてやれるかも分からんからな。再びここが雑草畑にならないようにだけ気をつけていこう。

　夕食は鹿肉のワイン煮込みにしてみた。ワインは明日また仕入れるから、気にせず使ってしまう。こう言うのがあると休日だったって感じがあるな。この日は話も盛り上がり、明日からの英気を十分に養うことが出来たのだった。

　翌日は街へ商品を卸しに行く日なので、荷車にみんなで荷物を積み込んで、森の中を行く。俺は金貨を２枚持ってくるのも忘れない。森の道中は、時折鹿なんかの動物に出くわすくらいで、特に危険はなかった。……ディアナが必要以上にキョロキョロしてたのは子狼を探してたのだろう。

　街道も警戒は怠らないが、いつもどおりの、のどかな風景が広がっている。サーミャとディアナにちょくちょく確認しても何事もない。そのまま街に着くことができた。

　今日の立ち番は前の帰りに見た衛兵さんだ。マリウスの同僚氏はどうしたんだろうな。あの人も俺の製品を買ってくれたから、少し気になる。マリウスのときみたいな事になってないと良いんだが。そんなことを思いながら、会釈して街に入っていった。

　カミロのところに着いたら、いつもどおりの流れである。ただし今日はミスリルのレイピアを荷車から下ろして直接持っていく。流石にこれを置いたままには出来ないからな。

　商談室で待っていると、これまたいつもどおりにカミロと番頭さんが現れた。カミロは部屋に入ってくると、俺の持っているものに目をつける。

「おお、出来たのか。」

「なんとかな。一苦労も二苦労もしたよ。」

　俺は持ってきたレイピアをカミロに渡す。受け取ったカミロはレイピアを鞘から抜く。俺の打った細剣は、それ自体が淡く発光していて、護拳と相まって我ながら中々に神々しい。カミロは刀身を見て満足そうに頷くと、

「確かに。やはりお前に頼んで正解だったよ。」

「そうか。気に入ってもらえたんなら良かった。」

　俺は表情には出さないように努めながら、内心でほっと胸をなでおろす。

「それで、言ってた"アポイタカラ"なんだがな。」

「ああ、どうなった？」

「確実に入手できる算段が整った。」

「おお、やったじゃないか！」

「まぁな。ただミスリル以上に貴重なものだから、手続きやらでもう少しかかりそうだ。」

「そうなのか。まぁ、それなら仕方ないな。」

「すまんな。」

「アンタのせいじゃないんだ、気にするな。」

　俺はそう言って、懐から金貨２枚を取り出す。

「とりあえず、こいつは持ってきちまったから今払っておくよ。」

　そう言ってカミロに渡し、受け取ったカミロはいい笑顔で

「まいどあり。」

　そう言うのだった。

## 依頼者

2018年12月9日

　特殊な内容がちょっとあった以外は、いつもどおりの取引だ。番頭さんがうちの荷車に積み込む内容を伝えに部屋を出る。

「ああ、それでハルバード５本だが。」

「どうなった？」

「"伯爵閣下"に快くご購入いただけたよ。」

「まぁ、買わないとはあんまり思ってなかったが。」

「それで、"伯爵閣下"からのご依頼なんだが。」

「ほほう。なんだ？」

「あのハルバードをもう３本ほど売って欲しいらしい。屋敷の衛兵に持たせるんだと。」

「なるほど。承った。」

　特注モデルの製作依頼なら本人にうちまで来て貰う必要があるが、そうでないなら単に依頼を受けるだけだ。帰ったら忘れないうちに作ってしまおう。

　その後は、いつもどおり世の中の情勢についてなんかの話だ。今のところ、俺が世間の動きの話を聞く唯一の機会である。前の世界ではインターネットで世界の裏側の暴動の話をキャッチできていたことを考えると、たった１人から週に一度限られた地域の話を聞いているだけ、と言うのは落差が凄いな。何か他にもそれなりの手段を確保したほうが良いのだろうか。急ぎではないから、ゆっくり探っていくとしよう。

　特にどこかで大きな戦争があるとか、大きな討伐（

　ただ、確定情報ではないものの、きな臭い話と言うか、辺境域で小規模な魔物との小競り合いや、国境や水利権を争う小競り合いなんかは発生したり、しそうだったりするそうだ。いずれも大規模にならなければいいが。

　カミロの店を出て街の入口を通り過ぎる、そう言えば、立ち番の人はハルバードをまだ装備してないが、訓練にも相応の時間がかかる。すぐには配備できなかったのだろう。再び会釈だけして通り過ぎた。

　街道でも森でも特に大きな事は起こっていない。警戒は常にしているが、いつもどおりのんびりしたものである。そのまま家について、みんなで荷物を運び入れ、今日の街へ行く目的は完了した。

　翌日からは鍛冶の仕事だ。板金を作り、俺はハルバードを、リケたちはその他の武器を製作する。ハルバードは以前も作ったし、さして苦労なく３本を作りあげた。

　ここまでにかかった時間はおおよそ２日半、３日目にあたる今日は、残り半日が空いている。屋敷の衛兵に持たせるという話だったので、空いた半日でハルバードに彫刻を施していく。

　前にミスリルに彫刻を入れるため、タガネを強化したのが功を奏したのか、スイスイと彫刻を施すことができ、３本のハルバードは完成した。儀仗用に使うにはいささか無骨に過ぎるが、屋敷の衛兵が門を守るために持つには、十分にハッタリが効いている。

　注文品の製作を終えたので、翌日からはカミロの店に卸す品の製作に移る。リケは引き続き一般モデルの製作、サーミャとディアナは狩りに出かける。肉は十分にあるから、半分は森のパトロールのようなものだろう。そうして"いつも"の日常が始まった。

　明日はサーミャたちが狩りを休むだろうから、今日はナイフの方を製作する。俺とリケでそれぞれ板金を熱して叩き、ナイフを作っていく。鍛冶場にゆったりとした炎の音と規則的な槌の音が響く。合間に焼入れの時のジュウッと言う音や、シュリシュリと言う研ぐ時の音が交じる。昼飯を挟んでそれを夕方前まで続けたのち、

　ある種の音楽のように響いていた音に、別の音が混じる。それは作業場兼売り場の扉をノックする音だ。ヘレンの時のように遠慮のない感じではなく、おずおずといった感じだ。いや、ヘレンの扉が壊れるかと思うようなノックと比べたら、大概が大人しいことになってしまうな。

「はいはい、今行きますよ。」

　俺は「どっこいしょ」と立ち上がり、扉に向かう。声が聞こえたのか、ノックの音は止んだ。

　扉の閂を外して開けると、そこには女性が立っている。リケよりも背は高いが、サーミャよりは少し低い。全体的にほっそりとした体型を旅装に包んでいる。切れ長の目に肩あたりで切りそろえられた白銀色の細い髪も印象的ではあるが、何より目を引いたのはその耳だ。細く長く尖った耳。

　俺の前の世界で得た知識と、インストールでの知識が同じ答えを返してくる。彼女はエルフだ。

　エルフの彼女は細い声で言う。

「こちらがエイゾウさんの工房で間違いないですか？」

「ええ、ここが私、エイゾウの工房です。」

「良かった。お願いしたいことがございまして参りました。」

「なるほど。ここではなんですから、どうぞ中へ。」

「はい。ありがとうございます。」

　俺は彼女を中に案内する。彼女は素直に従って入ってきた。リケが手を止めてこちらの様子を伺っているので、俺は大丈夫だと手振りで合図して、水で割ったワインを持ってきてもらうよう頼んだ。

「どうぞそちらにおかけください。」

　エルフの女性は頷くと、荷物をおろし、スッと音も立てずに椅子（丸太だが）に座る。一応簡単なテーブルもしつらえてあり、そこにリケが持ってきた飲み物をそっと置くと、女性は軽く頭を下げて感謝を示した。

「それで、私に頼みたいこととは？」

「これです。」

　下ろした荷物の中から布で包まれたものを取り出し、テーブルに広げた。俺は中に包まっていたものを見て目を見張る。

「貴方には、こちらを修復していただきたいのです。」

　女性は乞うような目でこちらを見て言った。

　テーブルの上には、いくつもの破片になった、ミスリルの剣が置かれていた。

## 依頼の内容

2018年12月10日

「なるほど……」

　俺は広げられた破片を前に唸る。

「それで、どの程度の修復をご依頼でしょうか。」

　元のまま、完全に分からないほどの修復なのか、形さえ同じであれば良いのか。後者なら明日にも出来るかも知れないが、前者なら苦労することは明らかだ。前の世界であったフレスコ画の修復のようなことにはしないが。

「勿論、完全に元の通りにしていただけるなら、それに越したことはありません。」

　鈴の鳴るような、と言う形容が正しく似合う声で、依頼者の女性は言う。

「ですが、それが不可能であれば、可能な限りでも構いません。」

　つまり、俺に出来る限界まではやって欲しいと言うことだ。実際には大したキャリアではないが、そう言われると職人の血が騒ぐのも確かである。

「あともう１つ、ここへはお１人で来られたんですね？」

「ええ。１人です。」

　サーミャがいないから詳しくは分からないが、少なくとも周囲に気配はなさそうに思うし、嘘もついてなさそうだ。あの条件は一から作る時の場合の話でもあるから、とりあえずは良いか。

　受けようかどうか考えていると、女性は少し早口で

「あの、道中で身隠しの魔法を使いましたけど、それではいけなかったでしょうか？」

　と聞いてくる。俺が考えているのを、１人で来た、と言うほうだと思ったらしい。身隠しの魔法なんかあるんだな。

「いえ、手段はともかく、お１人で来られたなら問題はないですよ。」

　俺は微笑んで答えた。あれもそんなに厳密なつもりはないからなぁ……。それを聞いた女性は心底ホッとした様子である。

「それではこのご依頼お引き受けいたします。」

「本当ですか！？」

　ガタンと立ち上がって大声を出す女性。今結構な音量だったな。

「あ、す、すみません……」

　打って変わってシオシオと椅子に座り直す。一瞬だったが、たぶん今のが地なんだろう。そうでないと、こんなところに来ようとは思わないだろうしなぁ。

「いえ、お気になさらず。それで、いつ頃までに完成させればよろしいでしょうか？」

「早ければありがたいですが、遅くても２週間ほどでお願いできますか？」

「分かりました。」

　２週間か。それなら割といいところまで持っていけるようには思う。

「あの、それでですね、大変申し訳無いんですが、修復の間は毎日様子を見せていただきたいんです。」

「と言うと？」

「エイゾウさんを信用しないわけではないんですが、ものがものですので、万が一があると……」

「ああ、なるほど。」

　ミスリルであるのも勿論そうだが、パッと見に由緒のありそうなものでもある。万が一にも俺がこれを持って逐電でもしてしまうと、大変なことになるのは火床の火を見るより明らかだ。

「それは構わないんですけど、毎日通うの大変じゃないですか？」

「いえ、この庭の一画を貸していただければ大丈夫です。」

　当然といった風に言ってくるが、家のそばとは言え、森の中で女性が寝泊まりって問題なくはなかろうか。盗賊の類はいないだろうが、狼や熊は普通にいる。

「この辺り、凶暴な獣も出ますよ？」

「え、この家の周囲の魔力の濃さなら多分近づいてこないですよ？」

「え？」

　初耳である。そう言えばうちには魔法関連に詳しいのがいない。

「"黒の森"は魔力が特に多い土地ですが、この家のあたりは特に魔力が濃くて、それで木が生えてないんですよ。それで、そう言うところは普通の獣なんかは近づかないんです。ご存知でこの場所を選んでらっしゃると思って感心していたのですが……」

「いえ、全く知りませんでした。」

　そもそも選択の余地はなかったのもあるしな。しかし、どうりで狼がたまたま通ったり、リスが材木でくつろいでたりといったことがないわけだ。

「私がこの場所を聞いたのも、貴方の打ったミスリルのレイピアを見て、魔力を綺麗に織り込む技術があると確信してのことですが、もしかしてそれも……」

「職人の勘です。」

　チートです、とは言えないからな。とはいえ、意識して打っていたわけでもない。それを聞いた女性はガクンと肩を落としている。すまんな。

　しかし、これで２つの事がわかった。このエルフの人がここに来たのは、俺が打ったレイピアをおそらくは納品して２～３日以内に見て、その後カミロのところに行き、うちの場所を聞いてだろうと言うこと。

　もう１つは、俺の打った特注モデルの性能と、都で同じことをしても何故ダメだったのかの理由だ。この人の言うことから考えると、魔力を織り込んで作った製品はより強くなる、と言うことなのだろう。この場所の魔力が強いから、存分に魔力を篭めることが出来るが、都だと魔力が薄くて十分に篭めることが出来なかったのが、あのとき起こったことだ、と推測できる。十分に魔力を含んだ俺のナイフを混ぜることで、上手くいったのだと考えれば、全ての話の辻褄が合う。

「その話は一旦置いておいて、大丈夫だとしても、女性を外に置いておくわけにもいきませんし、幸いうちには客間があります。何かと不便もあるかと思いますが、そちらにご滞在ください。」

　肩を落としていた女性は少しは立ち直ったのか、その言葉を聞いて

「よろしいのですか？奥方が３人もいらっしゃるのでしょう？」

「……家族は女性が３人いますが、妻はおりませんので、どうぞご遠慮なく。」

　この情報の出処はカミロだな。今度会ったら覚えとけよ。

「では、お言葉に甘えまして。」

　エルフの女性は少し戸惑っているようだったが、やがて頭を下げた。ヘレンは遠くに出かけるっていってたし、しばらくは来客もないと思うから大丈夫だろう。

　そこにカランコロンと作業場の鳴子が鳴った。サーミャとディアナが帰ってきたのだ。二人にどう説明したものかと思いながら、俺は家に通じる扉を見やった。

## 共同生活の開始

2018年12月11日

　思った通り、サーミャとディアナが帰ってきていたようで、鳴子が鳴って程なく作業場と家を繋ぐ扉が開いた。

「ただいま……お客さん？」

「ああ。えーと……」

　ディアナに聞かれたが、そう言えば名前を聞いてなかった。

「リディと申します。」

　エルフの女性――リディさんは立ち上がり、お辞儀をした。

「こちらは剣の修復の依頼をしにいらした方だ。」

　俺が補足する。すると、

「ディアナと申します。エイゾウ工房に身を寄せておりますので、どうぞお見知り置きを。」

　ディアナは狩りの時の動きやすい服のまま、ヒラリと貴族の礼をした。服装はともかく、ああ言うの様になるよな。ガチの伯爵令嬢なんだから当たり前だけども。エイムールの家名まで言わなかったのは警戒してるのかな。それなりの身分だったことは今の挨拶でバレているとは思うが。

「アタシはサーミャって言う……ます？」

　サーミャはなんだか変な事になっているが、おいおい覚えればいい。ディアナに任せようか……。

「私はエイゾウ工房に弟子入りしております、リケと申します。」

　リケは卒なくペコリとお辞儀をする。一番普通なのがリケかも知れない。見た目が幼いから、ものすごくアンバランスな感じはするが。ともかく、これが我がエイゾウ一家の面々だ。

「それでだな、リケは聞いてたから知ってると思うが、この剣は大事なものなので、修復の間はうちに逗留されるそうだ。」

「不躾なお願いで申し訳ございませんが……」

　リディさんがそう言うと、ディアナは喜色満面で

「まぁ、エルフの方と一緒に暮らせるの！？」

　と盛り上がっている。何歳か聞くのは忘れたままだが、好奇心についてはサーミャよりも遥かに上だ。

「いや、あくまで監視のようなもので、暮らすのとはちょっと違うぞ。」

「でも生活は一緒なのよね？」

「そりゃまぁ、うちにいるからな。」

「じゃあ、ちょっとの間でも暮らせることには変わりないじゃない。」

　せっかく喜んでいるし、これ以上反論して水を差すこともないか。

「まぁ、そう言うわけで、晩飯を作ってる間に、ディアナとリケで客間の準備しといてくれ。」

「わかったわ。」

「わかりました。」

　ディアナとリケは頷いて家の方に戻っていく。

「サーミャたちは今日は何を捕まえたんだ？」

「葉鳥だよ。５羽ほど。」

　やはり肉の貯蓄は十分と見込んで小さめのを狩ってきたんだな。とは言え、１人１羽あれば十分に腹は膨れるから都合は良いな。

「じゃあ、俺とサーミャは急いで羽をやっつけちまおう。」

「おう。」

　俺とサーミャが家に戻ろうとしたとき、

「あの……」

　か細い声で引き止められる。

「私も手伝いましょうか？」

　そう申し出てくるリディさん。申し出はありがたいと言えばありがたいが、お客さんだしなぁ。

「鳥を捌くのは里でもやってましたから、大丈夫です。」

　そうなのか。この世界のエルフは普通に肉も食うということらしい。野菜しか食わないと言われても、うちには干した根菜くらいで、この森の奥ではなかなか供給もままならないから助かる。

　果物なら多少はなんとかなるが、女性とは言え大人が満足に１食分食えるだけの量ではないからなぁ。次カミロのところに行くときは、野菜を多めに仕入れておくか。

「すみません、助かります。お願いできますか。」

「はい。」

　俺がお願いすると、リディさんはここに来て初めて、笑顔を見せてくれたのだった。

　俺とサーミャとリディさんで鳥の羽を毟る。大鍋に湯を沸かして、そこに鳥をくぐらせ毟っていく。そこそこの時間がかかって毟り終えたら、ナイフで捌いて部位に切り分けて肉にしていく。

　そこで客間の準備ができたので、リディさんには荷物を客間に入れておいてもらう。リディさんと俺以外の面々は使った道具の手入れをしたりしている。俺はその間に夕飯をこしらえるのだ。

　今日はリディさんも来たし、チキンソテーのワインソースでちょっとだけ豪勢にした。ワイン（とリケは火酒）も出して、「いただきます」と「乾杯」の両方をする。

　リディさんは最初戸惑っていたようだったが、こうやってワイワイ賑やかに、その日あったことの話とかをして夕食（朝飯も昼飯も似たような雰囲気ではあるが）をとるのが、うちの流儀だと言うと納得はしたようで、途中からちょくちょく会話に加わっていた。

　２週間くらいはここで過ごしてもらうことになるかも知れないわけだし、少しでもここの生活に馴染んでくれれば幸いである。

　翌朝、水汲みを終えて身の回りを整える。やはり洗い桶５人だと若干狭い感じがするが、ヘレンがいたときと違うのは、体の大きさの違いだろうか。あの時ほどの狭さは感じない。

　それらが終わると朝食をとる。いつもの根菜と塩漬け肉のスープに無発酵パンのメニューだが、リディさんは特に文句はないようで、俺はこっそり胸をなでおろすのだった。生活環境が変わったときに、何で１番心を折られるかって、飯が口に合わないことだからな……。少なくとも俺はそう思っている。

　朝食が終われば、その日の作業の予定を立てる。俺は言わずもがな、リケは俺の作業の見学で勉強してもらうとして、サーミャとディアナにどうするか聞いたところ、２人も直すところを見ておきたいらしい。別に断るようなことではないので、リディさんの許可を得た上で、俺も許可した。

　リディさんも当然ながら俺の作業の見守りである。つまるところ、今日は全員が俺の作業を見学する日、と相成った。

　まぁ、特にそれでなにか問題があるわけでもない。俺は全員を引き連れて作業場の扉を開けた。

## 修理

2018年12月12日

　作業場に入り、まずはパズルだ。やや幅広の剣の刀身が大小８つほどの破片になっている。まずはこれを元の形に組み立てる。当然ながらこの作業に鍛冶の腕前は関係ない。リディさんも含めて５人で賑やかに刀身パズルを組み立てた。最終的にはこの形に組み上がると言うことになる。

　ミスリルなので気を使わなくていい部分が多い。鋼だと再加熱すると組織が変成してしまうので、接合した後の調整が大変だ。ミスリルだとそれがないが、そもそも接合すること自体が大変なので、手間としてはどっちもどっちか、鋼はチートで接合後の調整もなんとかできそうなので、ミスリルのほうが大変かも知れないな。鋼を再調整でどうにか出来る辺りが、まさにチートではある。

　まずは刀身の柄に近い側からくっつけるので、火床に火を入れる。勿論魔法だ。

「そう言えば、エイゾウさんは魔法が使えるのですね。昨日も

　その様子を見ていたリディさんが指摘する。うちの恒例行事のようなもんではある。

「使えると言っても、今はこの着火と、少し風を起こすくらいですけどね。」

「それだけでもそれなりの修練は必要でしたでしょうに、魔力についてはほぼ知識がない、と言うのがなかなか不思議ですね。」

　リディさんはニッコリと笑いながら言ってるが、笑顔が怖い。魔力について知らない、と言うことについては全く信用してないんだろうなぁ。俺は魔法は「最低限」という事で貰ったもので、修練とかはしてないし、サーミャは勿論、リケもディアナも魔法については全く知識がない。強いて言えばディアナが他の二人よりは魔法について詳しいくらいで、伯爵家令嬢レベルが知らないのだから、よほどの専門家でもないと知るはずもない……いや、待てよ。

「ディアナは魔法については詳しくないのか？」

「わ、私はそっちの勉強はあんまりしなかったから。」

　目を逸らしながらディアナが答える。これはサボっていたな。使えると色々便利ではあるが、使えなくても困らないという状態で、おてんば娘が剣術の方を重要視したのは容易に想像ができる。

「そうか。別に怒ったりしてるわけじゃないから、気にするな。」

「そ、そう？」

　あからさまにホッとするディアナ。でも、こう言う妹がいて、エイムール家はさぞや明るい家庭だったんだろうな。

「と、言うわけで、私も詳しくないですし、うちのものも詳しいものがいないので、その辺りについては不明を恥じるばかりなんです。」

「なるほど……」

　リディさんは考え込んでいる。俺は着火した火が十分に回ったので刀身の柄側と、そこに一番近い破片をヤットコで掴んで火床に入れ、風を送って加熱する。リディさんは考え込みつつ、俺のその様子をじっと見ている。魔法周りの話はあんまりツッコまれても「何となく使えるようになっただけで、特に何か意識してるわけではない」以上の情報は出せないけどな。

　チートを使ってギリギリの温度を見極め、２つを同時に取り出す。接合する部分とその周囲の温度が上がっているので、リケにも手伝ってもらい、くっつけて鎚を振り下ろす。これが鋼ならホウ砂なんかがいるところだが、ミスリルはありがたいことにこれで何とかくっつきそうな気配がある。ただ、普通に打ち延ばしたときよりも温度も鎚の働かせ方もシビアだ。ミスリルの武具を新造するよりも、こっちが出来る鍛冶屋はなかなかいないのではなかろうか。

　３回ほど打っただけで、もう適正な温度から外れてしまった。ギリギリくっついてはいるので、そのまま火床に入れ、接合部分だけが加熱されるよう、炭の位置を調整して風を送る。

「これはなかなか骨が折れるな。」

　俺は思わずつぶやいた。

「何とかなりそうですか？」

　眉根を寄せてリディさんが尋ねてくるが、思いの外近い距離からの声でビックリした。実際に顔が結構近い。ちょっとドギマギしながら答えを返す。

「まぁ、難しいですが、元には戻せると思いますよ。ただ、やたらと時間がかかりそうですね。２週間あればギリギリかとは。」

「そうなんですね。ありがとうございます。」

「いえ、仕事ですから。」

　俺は再び火床に目を戻す。そろそろいい温度になってきている。再びピッタリの温度で取り出し、鎚で叩く。丁寧に、隙間ができてしまわいないよう、このキラキラしたものが崩れないようにだ。３回叩けば少しくっつく、と言うのがチートで分かる。出来れば少しペースを上げてきたいところだが、それで崩れたら元も子もないからなぁ。再び火床に入れて加熱を始める。

「エイゾウさんはやはり魔力の流れが見えてますね。」

　今度は少し離れた場所からリディさんの声が聞こえる。

「そうなんですか？」

「ええ。ちゃんと流れが途切れないように叩いてますよね？」

「いや、なんというか、キラキラした粒みたいなやつがバラバラにならないように、と。」

「それですよ！」

　ズイッとリディさんが近寄ってくる。視界の大部分が、長いまつ毛に縁取られたサファイア色の瞳に占拠される。荒い鼻息を肌で感じそうなくらい近い。俺が気圧されて動けないでいると、リディさんは居住まいを正した。

「コホン。失礼しました。ともかく、それが魔力です。やっぱりエイゾウさんは感知できてたんですね。それとは知らなかっただけで。」

「みたいですね。」

　鋼を打つ時は他にも組織の偏りみたいなものも見えているが、そっちは黙っておこう。

「これで私の中の疑問が１つ解消しました。」

　ニコニコと上機嫌なリディさんを見て、

「それは大変ようございました。」

　俺はぎこちなく返し、火床から剣を取り出すと、再び鎚を振り下ろすのだった。

## 方針転換

2018年12月13日

　そのまま、昼過ぎまでかかって破片の１辺をくっつけた。くっつけた箇所のチェックをする。キラキラした粒子みたいなもの――リディさんが言うには魔力は崩れてはいないものの、接合部分で一旦途切れている。指でなぞってみたが、特に継ぎ目は感じない。と言うことはこれは物質的な継ぎ目ではなく、純粋に魔力がここで途切れているということだ。そんな感触ではなかったが、もしかすると内部では完全に接合できてない可能性もある。

　この状態で使い続ければ、いずれ何らかの問題が起こるだろう。いくつかの破片になるほど酷使されていたものだ、修復したら再び酷使するだろう。武器なのだし、そこで問題が起きたら命にかかわる可能性が高い。

「リディさん、ここ分かります？」

　今接合した部分を指し示しながら、リディさんに見せる。リディさんはしばらく目を凝らしてじっと見ていたが、やがて

「なるほど、ここで魔力の流れが切れていますね。」

　と呟いた。

「リケは分かるか？」

　俺はリケに剣を渡す。リケはリディさん以上の時間をかけてチェックしていたが、

「なんとなくは分かりますが、接合部が綺麗にくっついてる方に目が行きますね。」

　と剣を返してきた。なんとなくでも分かるなら上々だと思う。このまま成長していって欲しい。他の２人は鍛冶も魔法も専門ではないので言わずもがなである。それでも少しは見えるようなのは、ミスリルの性質なのか、２人が時々鍛冶仕事を手伝っていたからなのか。

「リディさん、これがこの状態なのはマズいですよね。」

　聞くまでもないことだとは思うが、一回壊れたので儀礼用にするから、見た目だけ整っていればいい、なんて話なら別だ。

「そうですねぇ。可能な限りは元の通りに、が希望ですので……」

「ですよねぇ……」

　俺は腕を組んで考えた。真っ平らになるほど叩けばちゃんとくっつくかも知れないが、今度はそこから戻す必要がある。うーん、だとすると、もういっそ根元に残っている部分の上に破片を積んで”積み沸かし”のようにして、鍛接した塊を作ってしまい、そこから伸ばしたほうが綺麗に行きそうな気はする。元の形に戻せる自信は……ある。チート頼みではあるが、この力ならおそらくは平気だろう。

　そうなると、問題はリディさんがそれを許してくれるかどうかになってくる。構成している材料は全く同じだが、ほぼ新造と変わらなくなってしまう。”テセウスの船”の逆のような状態ではあるが、「果たしてそれは同じものか？」と言う問題の本質は同じだ。

　ただ、そもそも「くっつけるだけ」と言っても、壊れたときに細かな破片までは回収されていない可能性が高い。字義通りの完全な「元通り」はそもそもが不可能なのだ。それを考えたら、くっつけるのも、打ち直すのも大差ないようには感じなくはない。要は見た目は完璧に修復できるから、物体としての連続性か、性能のいずれを選択するかなのだ。

　俺はそのようなことをリディさんに説明した。形は完璧に元に戻せるだろうことは特に念入りに説明しておく。

「つまるところ、破片をそのままくっつけるか、新しく打ち直すかの２択です。見た目はどちらも全く同じものとして修復出来ることは保証します。」

　その言葉を聞いて、リディさんは悩んでいる。多分打ち直しても２週間あれば間に合うだろう。細剣の時と違って、好き勝手に形を作れないし、あの時よりも今回のほうが刀身の幅が広いから、その分の時間はかかるだろうが。

　ただ、他にどんな問題で時間を取られるかは分からないので、間に合わせたいなら早いに越したことはない。理想はもちろん、今すぐである。とは言っても、打ち直すとなってから「やっぱやめた」というわけにはいかないので、ホイホイと決断できるようなものでもない。

　静かに火床で炭が燃える音が作業場に流れる。決して時間が止まってしまったのではないことを、その音だけが教えてくれている。俺達は静かにリディさんを決断を待った。

　リディさんは俯いたままだったが、やがて顔を上げる。眉根を寄せた真剣な顔がそこにあった。

「打ち直してください。」

「後戻りできませんが、構いませんね？」

「ええ。お願いします。元のように使えることが一番なのです。」

「わかりました。それではお任せください。」

　俺はリディさんのややもすれば悲壮ともとれる表情とは対象的な、朗らかな笑顔で請け負った。リケやサーミャ、ディアナもほっと胸をなでおろしている。

「さてと、それじゃあ再開しますか。」

　頬をパンと張って気合を入れる。リディさんの覚悟に負けないような仕事をしないと、エイゾウ工房の名折れというものだ。

　形状自体はスタンダードなロングソードで、特に彫刻などはない。刀身の幅と長さ、厚みを記録するのに、外から材木を持ってきて組み立てた刀身パズルと同じ幅、長さと厚みに揃えた。これなら途中で宛てがいやすいかなと思ったのだ。

　破片のくっついた根元部分を火床に入れて加熱していく。やがて加工できる温度まで上がったので、鎚で叩いてくっつけた辺りを四角くまとめていく。細剣のときよりも更に硬さを感じる。内部に隙間が残っていたら大事なので、しっかりと丁寧に叩いてまとめる。

　何回か繰り返すと、剣の途中から小さめの四角い板がついているような姿になった。その板の上に、崩れないように破片を乗せていく。それを藁縄で覆うようにくくりつけて、火床に入れて加熱。鋼のときと違って酸化皮膜に全く気を使わなくていいのは、ほんの少し楽が出来る。

　ミスリルの外側がやや融けるくらいの温度まであげて火床から取り出し、鎚でササッと藁縄の燃え残りを払って、一瞬待って温度をほんの少し下げてから叩いてまとめていく。流石に一回でまとまりきった感じはない。先程の硬い手応えも相変わらずだ。

　加熱、叩く、伸びてくるので折り返す、加熱、叩く、折り返すを数度繰り返したが、まだまだ完全にまとまっている感じがチートでも感じられない。

　ふと気づけば、もう大分日が傾いてきている。このミスリルは思ったよりも時間がかかりそうだぞ、そんなことを思いながら、俺は今日の仕事を終えることをみんなに伝え、夕食の準備に取り掛かるのだった。

## 苦戦

2018年12月14日

　翌日、今日の見学者はリケとリディさんだけで、サーミャとディアナは「エルフの人がいるから」と果物やなんかを採取しにいった。こっちの世界でも何となくそう言うイメージあるんだな。昨日の晩もリディさんは普通に肉食ってたのに、イメージと言うのはそうそう頭から離れないものである。

　まだまとまりきっていないミスリルの塊付き剣を、火床に突っ込んで加熱する。頃合いになったら、取り出して叩く。心なしかどんどん手応えが硬くなってきているようにも思う。その分まとまってきた感触もあるのだが、キラキラした粒子――魔力も少しずつ増えているような……。

「リディさん。」

「はい。なんでしょう？」

「これ、魔力が増えてませんか？」

「増えてますね。さすがはエイゾウさん、魔力を織り込むのが非常に巧みです。」

　ああ。これがそうなのね。鋼のときにもこんな感じの粒子がちょっと見えてたな。

「心なしか硬くなってきている気もするのですが。」

「でしょうね。やはり貴方に頼んで正解でした。」

　うんうんと、ただ１人満足しているリディさん。説明は特にない。リディさんはあれか、自分が知ってることは相手も知ってると思っちゃうタイプの人か。前の世界で勤めてた会社にもいたな。

　ともあれ、硬くなってきているのを否定しないということは、もしかして、この世界のミスリルは魔力を含むと硬くなるのだろうか。でも、細剣を作った時はこんなことなかったけどな……。

　とりあえずはその事は頭から放り出して、魔力を含むと硬くなるということだけを考える。チートの力を集中して、鍛接が上手くいかないようなことがないように、丁寧に叩く。

　今まで意識はしていなかったが、どうやら俺はこのときに魔力を注ぎ込んでいるらしい。鎚を振り下ろすごとに当たった時の手応えが、ほんのわずかずつだが重くなっている。その分叩く力も増やしていく必要があるので、なかなかの重労働だ。

　作業を何度か繰り返す。その度に手応えが重くなっていったが、やがて重くならなくなった。もしかすると「魔力を織り込む」限界にきたのかも知れない。そうだとありがたい。これ以上重いと加工に苦労しすぎる。

　結局、鍛接が終わるのに昼過ぎまでかかってしまった。これはこの後の作業が大変そうだな……。少し遅めの昼食を３人で摂って、午後からは続きだ。

　ここからが本腰を入れる必要がある。火床で加熱をして、叩いて伸ばす。鋼のときと工程、内容としては何一つ変わりはない。だが、難易度が格段に違う。破片の接合の時もそうだったが、魔力を維持したまま加工可能な温度と、鎚を入れて大丈夫な箇所が非常にシビアで、大して伸ばせないうちに再加熱が必要なのだ。

「これは細剣の時以上に骨が折れるな。」

　俺は思わず愚痴る。

「親方でも大変ですか。」

「ああ。高いところに渡した細いロープの上を、全力疾走しろと言われてるようなもんだ。」

　リケの言葉に俺は素直な心情を返した。ミスリルでこの調子だと、アポイタカラが来たときにどうなることか、今から気が重い。

　ふと見ると、リディさんが心配そうにこちらの様子を伺っている。いかん、クライアントがいる前でこういうことを言うのは、職人としての自覚が足りんな。

「時間はかかりますが、しっかり元には戻しますからね。」

　俺はできるだけにこやかにリディさんに向かって言う。リディさんの表情が見るからに安堵している表情になった。よし、頑張ろう。

　この日、結局出来たのは１/３ほど伸ばすことだけだった。まだ剣のかたちには程遠い。これでリケの勉強になっているだろうか。明日は街に行く日だから、明後日から剣を伸ばし終わるまでは、リケには製作をしてもらったほうが良いかも知れないな。ついでに、次に行くのは２週間後にさせてもらおう。リスクヘッジは多少過剰なくらいでちょうどいい気がする。生活資金ならまだまだあるし、そっちは焦ることもあるまい。

　採集に出かけていたサーミャとディアナが採ってきたのは、ブルーベリーのような果実と、ペパーミントっぽい匂いのする葉がたくさんだった。夕食の前に、小さい瓶に火酒を入れて、よく洗ったブルーベリーを漬け込んでおく。いくらかは今日の夕食の時のソースに使おう。ペパーミントっぽい匂いのする葉も、よく洗って少しかじると、前の世界のペパーミントよりも葉の匂いが強めにするが、ほぼペパーミントなので、明日の朝にでもこの葉っぱでミントティー風にするか。

　夕食のソースも、ブルーベリーそのものも、リディさんは勿論、全員に好評だった。火酒にブルーベリーを漬け込んでいるので、そのうちみんなで呑もう、と言うと、そちらもみんな目を輝かせていた。こう言うところはリディさんも含めて全員女の子だな。中でもリケが飛び上がらんばかりだったのは、とりあえず目を瞑っておこう。こう言うところはドワーフだなぁ……。

　この日の夕食はリディさんの里で食べていたものの話で盛り上がった。前に言っていたとおり、普通に鳥や鹿なんかも食べるらしい。ただ、里には結構大きな畑があって、根菜やら葉物野菜の割合が多めだそうだ。こうやって里を出たときの好き嫌いはない、と断言していた。

　さて、明日は街へ行く日だ。明後日からの作業もあるし、頑張らないとな。

## 可愛いは正義

2018年12月15日

　翌朝の朝食時、いつものメニューにミント（っぽい植物）を熱湯に入れたミントティーみたいなものもつけてみる。やや草っぽい味もするが、口当たりが爽やかでいいな。こう言うのならお茶代わりにするのはありかも知れない。ちょっと考えておこう。

「私達は今日は街へ商品を卸しに行くんですが、リディさんはどうします？着いてきていただくのは構いませんよ。」

　リディさん１人置いていっても多分やることないしな。男１人に女性４人、しかも３人は獣人にドワーフにエルフ。目立つことこの上ないが、あの伯爵閣下が頑張ってくれているうちは、大したことにもならないと思う。気がかりなのはミスリルの剣だ。これは置いていっても大丈夫なもんだろうか。これを守るために、ここにリディさんが残ると言うなら別にそれでも良い。パパッと盗んで行って困るようなものは特にない。金貨はまた稼げばいいしな。強いて言えば鍋釜の類は持っていかれると飯食うのに困るから勘弁して欲しいってくらいか。

「私も着いていきます。剣はここなら安全でしょう。」

「わかりました。それじゃあ、準備だけお願いします。」

「ええ、分かりました。」

　リディさんは頷くと、客間に消えていった。意外なほどあっさりと同行を希望したな。俺が知らなくて、リディさんには分かっていることが、この場所にはまだまだありそうな気がする。……まぁ、そう言うのはおいおい分かっていけばいいか。俺は自分の部屋に入って出かける準備に取り掛かった。

　荷車を引くのは俺とリケの仕事だ。流石にリディさんに頼むわけにもいかない。聞いてみると目は良いようなので、サーミャとディアナと一緒に周辺への警戒をお願いすることにした。

　しかし、このままいつまでも人力で引くのも考えものかも知れない。そのうち荷物が増えるとは思うし、何より目立つのだから多少でも機動力は高いほうが良さそうだ。と、なると餌の問題はあるが、どこかの段階で馬の導入は考えていくべきか。だがこれも後々の話だな。

　緑の光の中に、黒っぽい縦の線――木の幹がそびえる中を進んでいく。ざわざわと木の葉が騒ぎ、心地よい風が流れていく。こう言った木々の声はリディさんには聞こえているのだろうか。流石にそれはエルフと言う種族に夢を持ちすぎか。

　ディアナは相変わらずキョロキョロしている。気持ちは凄く分かるぞ。すると、サーミャがピタリと足を止めた。

「ヤバいやつか？」

　俺も足を止めてサーミャに聞いてみる。

「いや……うーん。」

　サーミャの耳がピコピコ動き、鼻をヒクヒクさせている。意識を集中して、何がいるのかを探ろうとしているのだ。

「ああ、これはアレか。」

　耳と鼻を動かすのを止めて、サーミャはゴソゴソと自分の懐をまさぐっている。すぐに何かを取り出すと、少し離れたところにある茂みの付近へポイと放り投げた。目を凝らしてみれば、それは干し肉である。

　すぐにガサリと茂みが揺れて、小さな影がピョコッと飛び出す。茶色い子犬の様な姿の獣、つまりは狼の子供だ。

「―――！」

　ディアナが大きな声を出して驚かさないようにキャーと叫んでいる。器用だな。

　しかし、なるほどこれは愛らしい。ほぼ子犬のようなものだ。パタパタとしっぽを振りながら、干し肉をガフガフと食らっている。たしかにこれはやたらと可愛いな。思わず俺の目尻も下がる。いつの間にか隣に来ていたディアナが俺の肩をバンバン叩いてきた。普通に痛い。何に感動しているのかは分かってるから落ち着け。

　やがて食い終わった子犬、ではなく子狼がこちらに向かって尻尾をふりふり、

「わん！」

　と鳴いた。また肩にバンバンバンバンと衝撃が来る。落ち着け。

　子狼はちょっとこっちに来そうになっていたのだが、いつの間に近づいたのか、スッと大きな狼が現れた。状況的にアレが母親だろう。すると、子狼は一目散に母狼に向かって駆け出し、じゃれ付き始める。それはそれで、とても心なごむ光景だ。

　母狼はあやすように鼻先で子狼をあしらうと、茂みの向こうに親子連れ立って去っていった。

「なるほど、前にサーミャが言ってたが、あれは確かに可愛いな。」

「でしょ！！！！」

　ディアナがもうほとんど咆哮と言っていいほどの大声で叫ぶ。耳が物理的に痛い気がする。

「あれを探したくなる気持ちが分かるくらいには、可愛いのは間違いない。」

「でしょでしょ！」

「でも、母親がいるのを引き離して来るのはかわいそうだからなぁ。」

「ああ、そうねぇ……」

　少し肩を落とすディアナ。

「たまーーーに親から見放されたり、はぐれたりしてるのがいるから、そういうのなら良いんじゃねぇの。」

　サーミャがポロッとそう漏らす。それを聞き逃さなかったディアナがすごい勢いで復活する。

「そうよね！よーし、そう言う子がいたらすぐ助けてあげなくちゃ！」

　鼻息も荒く、ぐぐっと握りこぶしなんかも作って決意を固めていらっしゃる。

　俺とリケ、リディさんは顔を合わせ、思わず溜息をつくのだった。

## 今回の商談

2018年12月16日

　道中で大きなハプニングもあったが、他には特に問題なく森を抜け、森の中とは違う危険が待ち受ける街道に出た。俺達はあからさまに目立つから、森の中以上に警戒する必要がある。

　サーミャが五感全てで警戒し、ディアナはさっきまでとは違う視線を周囲に向けている。リディさんも少し遠くを見やったりして警戒してくれている。やはり目が増えると安心感も増すな。

　ゴタゴタはあったものの、エイムール家の統治がちゃんと行き届いているのか、街道で特に大きなトラブルに遭うことはなかった。ここでなんかあったらディアナは気が気でないだろうし、ほんの僅かでも何かが起きないでいて欲しいものだ。

　街の入口には今日も同僚氏でない人が立っていた。得物はまだ短槍で、ハルバードではない。この人の顔もちょっと覚えてきたな。聞いてみるか。

「こんちは。」

「おお、あんたらか。こんにちは。」

　衛兵さんは愛想よく、だがしっかりとリディさんの方を見て挨拶を返してくる。

「つかぬことをお伺いするのですが、マリウスさんと仲の良かった方は、どこかへ移られたのですか？あの方にも私の剣をお買い上げいただいているので、その後の調子などはいかがかと思いまして。」

「ん？ああ。ヤツはマリウスに呼ばれて都に行ったよ。」

「なるほど。それでお見かけしなかったんですね。ありがとうございます。また都に赴いた際にでも尋ねてみることにします。」

「おう、そうしてやってくれ。」

　そう言って俺たちは会釈をして通り過ぎる。今の衛兵さんの話だと、伯爵に呼ばれて行ってるのだから、栄転と言っていいのだろう。しかし、街の衛兵さんもまだ「マリウス」呼びなのか。ここらは規律が緩んでいるととるべきか、それとも衛兵時代からの付き合いからの親愛ととるべきかは、ちょっと難しいところだな。

　ざわざわと色んな人でごった返す通りを進む。やはりエルフであるリディさんが珍しいのか注目を浴びており、時折不躾な視線を隠そうともしない輩もいる。ただ、不思議なことにちょっかいをかけてくる奴は誰一人としていない。迂闊なことをすると酷い目に合う――それが真実かどうかはともかく、希少性とも相まってか、少なくとも巷間には広くそう思われているようだ。自分が知っていることを相手も知ってると思う癖も含めて、割と普通の人（エルフだが）なんだけどな。

　しかし、これほど注目を集めてしまうと気が重くないだろうか。俺はそこだけが心配だった。

　やがてカミロの店につく。ここからは屋内だし、リディさんも少しは気が休まるだろう。いつもの通りに倉庫に荷車を入れて、商談室に向かう。今日はいつもより少し時間がかかってからカミロがやってきた。

「おう、忙しそうだな。」

「まぁぼちぼちな。」

　そう言えば、カミロはいつ来ても普通に自らやってきて相手をしてくれる。人や物の管理に集中して実務は全くやってないからなのだろうか。だとしても打ち合わせやら何やらと被ることはあるだろうに。その辺を聞いてみると、

「お前らが来るタイミングは大体決まってるから、そのあたりの予定を空けてあるだけだよ。」

「もし来なかったら？」

「それはそれでやることがあるから、別に困らない。」

「なるほどね。」

　俺としてはなにか負担になっていると良くないと思ったのだが、どうもそんなことはないようなのでひとまずホッとした。

「それで今日の取引だが。」

「ああ、まずはこいつだな。」

　カミロが番頭さんに視線を送ると、番頭さんが手にした布の包みをテーブルに置いた。そこそこの大きさがある。番頭さんが包みをとると、縞状に青い部分の入った鉱石が転がり出てくる。

「これが？」

「そう、アポイタカラだ。」

　これがそうか。なかなか手応えがありそうだ。今はミスリルに集中しているから、実際に扱うのはちょっと先にはなるな。

「手間を掛けさせてすまんな。」

　番頭さんが再び包んでくれたそれを受け取る。

「その分はちゃんと貰ってんだ。気にすんな。」

　カミロは笑いながらそう言った。

「欲しいものはいつもどおりで良いのか？」

「ああ。今回は納品の数が少ないから、万が一足りなかったら言ってくれ。その分は貨幣で払うよ。」

　今までの実績から言えば、今回の納入量でも十分に賄えるはずだが、何らかの商品が値上がりしてたりするかも知れないからな。一応いくらかはお金も持ってきている。

「先週の半分もあれば余裕だから大丈夫だろ。足りなかったら次の納品から合わせて差し引くから貨幣はいらんよ。」

「すまんな、助かる。それとだな。今は特注に取り掛かってるから、来週は来ないことにしようと思う。」

「ああ、そうだったな。分かった。じゃ、うちの品も多めにしておこう。」

「おう、ありがとう。さっきお前が言ってたとおり、足りなかったら次から引いてくれ。」

「言われなくてもそうするよ。」

　こうして今回の商談も無事に終了した。都の様子やそれ以外の様子をカミロから聞く。マリウスは元気にやっているようだ。ディアナもそれを聞いて安心したようである。ただ最近は辺境の魔物の動きが活発化しているようで、討伐軍が編成されるかも知れないと言う話である。エイムール家騒動のときの、カレルが言った魔物が湧いているというのはどうも嘘だったらしいが、それが現実になりつつあるわけか。大変だな……。そうなった場合に、カミロを儲けさせるためにはキッチリ納品していく必要があるな。なるべく増産できるようには準備していこう。

　その後も益体もない話をいくらか交わし、俺達はカミロの店を出た。

## 追加設備

2018年12月17日

　カミロの店を出てから家に着くまで、街の連中にリディさんが注目を集めていた以外は特に何事も起きなかった。そもそもが美人だしなぁ。それがエルフだからなのかはよく分からないが。リディさんがトラブルに巻き込まれるのが一番困る事態だったので、それがなくてホッとした。

　家に着いたら、みんなで荷物を運び込む。アポイタカラも作業場へ入れてしまう。リディさんも根菜なんかの軽めのものを家へ運び込むのを手伝ってくれた。

　運び込みが終わったら、いつものとおり休暇である。休暇と言っても、街に出た時は思い思いの作業をするような感じだ。今俺は特注モデルを受注している身ではあるが、リディさんに断って、いつもどおりに過ごさせてもらうことにした。

　折角なのでアポイタカラを触ってみることも考えたが、鍛冶仕事になるし、さすがにこれは後回しにすることにして、作業場に欲しかったものを作ることにした。

　作業場内にある、鞘なんかを作った余りの木材をかき集めてくる。そこそこの大きさのものもあって、俺の作りたいものには足りそうだ。

　ナイフの切れ味に任せて、材木からパーツを切り出していく。この切れ味も魔力が関係していたんだなぁ。今度から特注の時はもっと意識してみるか。釘を使わずに、なるべく噛み合わせなどだけで組み上がるように切り出したので、切り出しには時間がかかったが、なんとか組み立ての時間を確保できているので、そのまま組み立てにうつる。

　やがて不格好だが、ミニチュアの家のようなものが完成した。手のひらサイズである。形式については詳しくないのでそれっぽく作っただけだが、本来収まるべきものがこの世界にはいないと思う（少なくともインストールされた知識には該当がなさそうだった）ので、とりあえずは良しとする。

　木材から切り出した板で棚を作って壁に取り付け、その上にミニチュアの家のような形のものを置いたら、"かんたん神棚"の完成だ。元日本人としては、こう言う場所に神棚がないのが何となく落ち着かなかったので作ってみた。本当は家の方に作ったほうがいいのかも知れないが、個人的にはこう言う作業場にあるのが似つかわしい。

　この世界の神様的に

　台所から小さい皿と小さいコップにそれぞれ塩と水を入れて、一緒に棚に置いておく。朝の日課にこれの交換も加えないといかんな。俺はかんたん神棚に一礼したあと、柏手を打って、夕食の準備に取り掛かった。

　翌朝、水を汲んできた俺は先ず神棚の水と塩を下げてきて、新しいものに入れ替えた。捨てるのはもったいないので朝食のスープに使ってしまったりする。後の行動は朝食が終わるまでは大して変わらない。

　朝食が終わって今日の作業分担を話し合う。俺は当然ミスリルの剣の打ち直しを続けるが、今日からしばらくはリケ、サーミャ、ディアナは一般モデルの製作をしてもらう。２週間後ではあるが、それなりの納品数は必要だしな。リディさんは俺の作業の見学と言うか、見張りと言うか、まぁそんなようなことをすることになった。

　作業場に入ると、俺は神棚の前に行き、二礼二拍手一礼をして今日の作業の安全を祈る。この祈りを受取る先がいるのかどうかは分からないが、やっぱりこう言うのがあると、意識の切り替えがスムーズに行く気がする。これだけでも作ったかいがあるというものだな。

　俺が拝礼（のようなものだが）をしていると、リケが話しかけてくる。

「親方、今何をしてらしたんですか？」

「北方の我が家に伝わる、神に祈る儀式だ。」

「あの変わったお家のようなものは？」

「あれはそうだな……各家庭に設置する簡易神殿のようなものだよ。」

「へぇ、北方はそう言う風習があるんですね。」

「うちの家だけかも知れないし、どれくらい効果があるかは知らないけどな。」

　興味を持ったリケの質問に答えていく。

「エイゾウさんは家名をお持ちなのですか？」

　その会話を聞いていたリディさんにも質問される。そういえば言ってなかったな。

「ええ。ただ、こんなところに住んでいることからもお分かりかとは思いますが、ちょいとワケありでして。」

「なるほど、それで普段は名乗っておられないのですね。」

「そう言うことです。」

　リディさんはふむふむ、と頷いている。気になったことは確かめずにいられない性格なのだろうな。

「親方、さっきやってたのって私達もやっていいですか？」

「ん？ああ、構わんぞ。別に秘儀とかでもないし。」

　リケがおずおずと言った感じで聞いてきたが、こう言うのは家族全員でやったほうがいいので、俺は快諾した。「私もいいですか？」とリディさんが言うので、こちらも快諾しておいた。

　４人に二礼二拍手一礼を教えて、俺はさっきもやったがもう一度やる。獣人とドワーフと人間とエルフ。出身も種族も違う人々がこうやって同じことをしているのは、「いただきます」の挨拶のときも思ったが、グッと来るものがあるな。

　こうして我が家にまた１つ、"いつも"が増えるのだった。

## 打ち直し

2018年12月18日

　みんなで拝礼をしたら、作業に取り掛かる。火床に火を入れ、風を送って温度を上げ、上がってきたらミスリルの剣を突っ込んで加熱する。それとは別に炉の方にも火を入れておいた。こっちはリケ達が作業する分だ。

　ミスリルの温度が上がって、加工可能温度の中でもギリギリ上になったら取り出して鎚で叩く。ガラスのような澄んだ音が火事場の中に響き、キラキラと光が舞う。１回でも多く叩けるように素早く叩いていく。

　しかし、ここで適当に早く叩けば良いと言うものでもない。少しでも手元が狂えば、その分織り込まれた魔力が抜けてしまうのだ。そうならないよう慎重に、しかして素早く叩くという２つを同時にこなさないといけない。確かにこれは扱える人間は限られるだろう。大半が魔力を理解しない鍛冶屋ではなおさらだ。俺も魔力を真に理解していたかと言われれば怪しいが、それでもちゃんと魔力の流れは見えている。

　そして、ちゃんと魔力の流れが見える人は、魔法が使える人間が相当限られるこの世界であれば、鍛冶屋なんてせずに魔法使いになれば、それだけで人生安泰なので、結果「人間の鍛冶屋でミスリルを正しく扱えるものはほとんどいない」と言う状況になると言うわけだ。

　おそらくはほぼ限界まで魔力を溜め込んだミスリルは、澄んだ音はするが手応えは非常に重く、伸びが悪い。数回叩く間に加工可能な温度から外れてしまう。俺は再び剣を火床に入れて加熱し、取り出し、叩く。俺がミスリルを叩いたときのガラスのような音と、リケが一般モデルを作るのに剣を叩く金属音が作業場に大きく響く。その傍らでは、サーミャとディアナが型を作り、炉で溶かした鉄を流している。

　火と風と鎚と人とがそれぞれの音を出して、それぞれの仕事をしている。この空間がとても心地よいもののように、俺には思えた。

　それはそうとして、ミスリルが全然伸びてくれないので、進捗が非常に悪い。それでも２週間の期限には間に合いそうなのが救いだが。

　結局この日は、残り2/3のうちの半分、つまり、1/3を残すところまで伸ばすことが出来た。多分これでも普通の鍛冶屋に比べれば相当早いはずだが、いつもの鋼の剣よりも進捗が遅いのが、なかなかにストレスになる。打った時の音が綺麗なのが救いだ。正直あれがなかったら、更に進捗が遅れていたかも知れない。

　だが、これからアポイタカラやその他のまだ見ぬ鉱石を考えると、ミスリルの打ち直しでへこたれているわけにもいかない。これを乗り切って自信にせねば、だ。

　翌日、昨日の進捗を考えれば、今日も俺は日がな一日ミスリルを叩き続ける日である。新しく日課にした神棚の水と塩の交換、拝礼も忘れない。リケたちは今日も一般モデルの制作だ。リディさんも今日も変わらず俺の作業の見学をすることになっている。とは言え、俺が鎚でミスリルを１日ひたすら叩いて伸ばしているところを見ているだけなのだが。

「リディさん。」

「なんでしょう。」

　火床にミスリルを入れて加熱しながら聞くと、相変わらずのクールで透き通るような声でリディさんは答えた。

「見てて楽しいですか？」

「そうですね。普通の作業なら丸一日見ていると、どこかでつまらないと思うかも知れませんが、エイゾウさんの作業は普通ではないので。」

「それはどうも。」

　おそらくリディさんなりに褒めたのだろうと判断してお礼を言う。実際普通ではないしな。

「それに、エルフの寿命は長いので、人間の１日よりも１日を短く感じるのです。」

　理知的だが、どこかのんびりした雰囲気だなぁと思っていたら、なるほど、感じる時間が違うのか。待てよ、だとするとサーミャの５年間って１日が相当長かったんじゃなかろうか。残念ながらチートを貰っていても人間の身である俺には絶対に分からない感覚である。

「音もいいですね。ここまで綺麗な音が出せる鍛冶屋は私の里にも、よその里にもいませんでした。」

「鎚を打つ人によって音が違うんですか？」

「ええ。効率よく魔力を込められるほど、ミスリルはいい音を出します。エイゾウさんのレベルで出来る人は、エルフの鍛冶屋でもそんなにいないと思いますよ。」

「ほほう。」

　視界の端でリケがウンウンと頷いているのを気づかないふりをして、熱されたミスリルを鎚で叩きながら、俺は相槌を打つ。叩かれたミスリルは綺麗な音を響かせた。

「ここまでの音となると、ミスリルの精錬度も影響しますけどね。」

「そうなんですか？」

「ええ。鋼はそうはいかないでしょうが、ミスリルは純粋に近づくほど魔力を蓄えやすく、打った時の音も綺麗になります。」

「ははあ、なるほど。」

　俺はそのなかなか鳴らないらしい音をさせる。これで前にミスリルの細剣を打った時と感触が違う理由は分かった。あの時のミスリルは"精錬度"が今回のものよりも低い――つまり、不純物が多かったのだろう。その分魔力が籠もらずに、より少ない労力で打つことが出来たと言うのは、そうズレた想像ではあるまい。

　そのうち精錬度を上げる方法も探っていこう。ガラスのような綺麗な音を聞きながら、俺はそう思うのだった。

## 住処の話

2018年12月19日

　結局ミスリルを延ばしきるまで、延べ3日かかってしまった。勿論、このままではただの凝った握りのついた棒でしかないので、明日からは形を作っていく作業が必要になる。

　ただし今日はここまでだ。根を詰めて徹夜してもいい仕事は出来ないからな。前の世界で好きだったアニメ映画でもそう言っていた。

　翌朝、水汲みから戻ってくると、リディさんが家の外に出て、木の幹に手を置いていた。

「おはようございます。外に出てると危ない……ことは基本ないんでしたっけ。」

　危ないですよ、と言おうとしたが、そんなことはないと言われたのを思い出して言い直す。

「ええ。これだけの魔力なら普通の獣は近寄りません。」

　鈴の鳴るような、しかし透き通った声でリディさんが答える。

「それは何か危険を察知するとかそう言う？」

「そうですね。魔力が濃いところは魔物がいたりすることが多いので。」

　俺はそれを聞いてギョッとした。

「この辺りは魔力が濃い、と言うことは、もしかして突然魔物が湧いたりするんですか？」

「いえ、そんな事は滅多にありません。この森でも場合によっては獣が魔物になるかも知れませんが、基本的には元の獣と性質は変わらないですからね。ごく稀に凶暴化したりする時もありますが。」

　それはそれで厄介な話だ。魔物になった獣はきっと魔力の濃い薄い関係なく、ここに来るんだろうなぁ。待てよ、前に仕留めた熊はもしかして魔物になってたんじゃなかろうか……。サーミャが怪我した時（もう随分前のことのように感じる）はまだそこまでじゃなかったとして、その後で魔物になってたから、俺がヤバいと感じた、と言うのはありそうだ。あれがヤバくなったとして、最終的にどんな魔物になっていたのかは未知数だが、早めに片付けることが出来てよかった。ん？待てよ。

「それじゃあ、ここで動物を飼うのは……」

「あまりおすすめは出来ませんね。ただ、エイゾウさんもディアナさんも二人でされている稽古を見ていると、剣の腕は相当に立ってらっしゃるようですので、

　本当の最悪の場合は、とんでもなく悲しい別れになるということか……それは辛いものがあるな。滅多にそんなことにはならないから大丈夫、と言う考え方もあるか。こればっかりは運命の巡り合わせだ。それにもし馬を飼うとしても大丈夫そうなのは安心した。

「洞窟なんかだと魔力が

　サラッと魔物誕生のメカニズムを教えてくれるリディさん。そうなのか。この付近で洞窟があったという話はサーミャやディアナからも聞いたことはないが、もし見つけたら近寄らないように言っておこう。

「そう言えば、外に出て何をなさってたんですか？」

　ひとしきり納得した俺がそう聞くと、リディさんの目がスゥッと細められた。

「あ、これお尋ねして大丈夫でしたかね。問題あったら今の言葉は忘れてください。」

　リディさんの反応を拒絶と受け取った俺は、慌てて発言を取り消そうとする。

「いえ、大丈夫です。魔力を取り込んでいただけですから。」

「魔力を？」

「ええ。食事は食事で必要なのですが、エルフは魔力も必要とするので。」

「なるほど。」

　それで街中では余り見ないのか。都にもいなかったのも、魔力が必要だが街や都では魔力が取り込めないからと考えると、当然であるとは思う。これ以上は聞くだけ野暮というものだと思い、俺はふむふむと頷くと、水を汲んできた水瓶を再び担いで家に戻ろうとする。

「エイゾウさんは」

　そこへリディさんが声をかけてくる。

「これ以上聞かないのですね。」

　ほとんど表情の感じられない顔と声だ。俺は答えた。

「私も男ですから、リディさんみたいなとんでもない美人に興味はありますが、聞かないほうが良いこともたくさんある、と知っているだけですよ。」

　そしてわざとらしくニヤッと笑うと、家の中に入った。ちょっとかっこつけ過ぎだったかな。

　今日の作業は俺は相変わらずミスリルの剣、リケたちは一般モデルを継続して作ることにする。リディさんは俺の見学と言うか見張りと言うか、まぁそんな感じのことだ。

　昨日までは伸ばすことに集中すれば良かったが、今日からはそう言うわけにもいかない。打ち直す前にとった木型と比べながら打つ必要がある。チートがあるとは言っても、当然その分は作業の進捗も悪くなる。いかにしてそのストレスを少なくしつつ作業ができるか。それがこの先の鍵になっていくだろう。

　いつもの通り神棚に手を合わせたら火床と炉に火を入れ、作業開始する。ミスリルを熱して取り出し、金床に置いたらその横に参考にするために置いた木型を見ながら鎚で叩く。チートを使ってどこを叩けばいいかを探りながらだ。鎚の一振りごとに澄んだ音と綺麗な火花が鍛冶場に現れる。

　俺の横ではリディさんもその様子を見ている――のだが、今日はなんかちょっとだけ距離が近いな。作業もいよいよ詰めの段階に入ってきたのは確かだし、興味を持ち始めたのだろう。それはそれで良いことだな。俺はそう思いながら、火床にミスリルの剣を突っ込んだ。

## 細工は流々

2018年12月20日

　ミスリルの剣を加熱して鎚で叩いて、わずかに形を変える。基本的にはこの繰り返しだ。打ち直し前の型と見比べ、チートをフル動員してその形になるように鎚を操る。

　今日も１日じゅう、作業場に澄んだ音が響き渡ったのだった。

　この日に出来たのは剣の形を整える工程の１/３くらいだ。やや剣の形っぽいかな？と思えるようにはなっている。ということは、また３日ほどかかって整え、その後の仕上げで３～４日位かかるわけか。２週間にはやや余裕を持って間に合うが、卸す商品の製作は間に合わない感じだな。１週分納品をスキップしておいて良かった。このペースなら間に１日休暇を入れることも可能だろうし。

　翌日、水汲みから帰ってきたがリディさんはいなかった。朝飯のときに他の３人にそれと分からないように聞いたみたところ、要約すれば「別に毎日でなくても大丈夫」という答えが返ってきた。まぁ、そうじゃないとここに来るまでの間では魔力が補給できなくて難儀するだろうし、当たり前か。

　今日の作業も基本的には昨日と同じである。昨日の朝もやったことを今日も行い、作業を開始する。火と槌の音が作業場に響く。作業中、リケ、サーミャ、ディアナの３人は黙ったまま作業しているわけではない。なんだかんだ話しながらである。時々リケが集中しないといけない場面で黙る時はあるが、それ以外では繕い物なんかのここでの日々の生活の話や、ディアナの都での話なんかを結構なことしている。

　別に俺の集中もそれで途切れるわけでもないので、特に何も言ってはいない。前の世界みたいにスマホで音楽を流しながら作業、というわけにも行かないから、ラジオ代わりみたいなものだ。

　俺の方はというと、リディさんにちょいちょい話しかけたりもしている。大抵は食べ物の話で、俺が喋ってリディさんが答えたり、頷いたりである。今日は以前から気になっていたことを聞いてみた。

「答えるのに差し支えなければで良いんですけどね。」

「はい。」

　翠の瞳に紅く熱したミスリルを映しながら、リディさんが相槌を打つ。

「そもそもこれってなんで壊れたんですか？」

　俺のチートでもそこそこ難儀する代物である。元から相当の業物であっただろうことは想像に難くない。で、あればちょっとやそっとで壊れるようなものでもないだろう。それが大小様々な破片に砕かれるほどの事態とは一体なんなのか、俺が気になっていたのはそこなのである。

　何をすれば業物のミスリルソードを砕けるのか。俺で再現可能であるなら、その工程を再現して、それでも砕けないものを作ってみたい。純粋に職人としての興味が湧いての質問だった。

　リディさんは少し目線を下に向ける。多分答えて良いのかどうか考えているのだろう。ややあって目線を俺に向けた。

「魔法に関わることなので、あまり詳細は教えられませんが、ミスリルの武具はある手順を踏むことで、その魔力を引き出して魔法に使う事ができるようになります。その剣の役割はそのためで、いざと言うときのために、里の大事な物として保管されていたのです。里であることが起きて、それを使わないといけなくなったのですが、限度を超えて引き出してしまうと……」

「壊れると。」

　俺が後を引き取ると、リディさんはコクリと頷いた。なるほど、「元に戻してほしい」かつ、それを「魔力を織り込むのが上手」な人に頼んだ理由はそれか。

　ある程度以上魔力を込められる人間（エルフでもドワーフでもいいが）でないと、"魔力電池"としての役割が果たせない。かと言って、電池の役割さえ果たせれば良いのかと言うと、里の重要な文化財なのだろうし、適当な作りに修復されたものを置いておくわけにもいかない、とそう言うわけだろう。

「なるほど……」

　俺はそう言いながら鎚をミスリルめがけて振り下ろし、そのあと火床に入れた。ちょっと当てが外れたな。今リディさんの言った方法で壊すことは俺たちには出来ないし、そもそも壊れるのを防ぐ方法もない。

　例えるなら”オランダの涙”のようなものだ。俺たちはオタマジャクシの頭を叩くことは出来るが、尻尾を折ることは出来ないし、尻尾を折れば全体の破砕を防ぐ方法はない。

　だからと言って、今の話が無意味だったわけではなく、ちゃんと収穫はあった。魔力を引き出す方法はごまかされたので、恐らくは里か種族としての秘伝なのだろうが、ミスリルが魔力電池として使えるという事実だけでも、十分に有益な情報である。他にも里で起きた出来事についても、リディさんは具体的な内容は語ろうとしなかった。

　無理に聞き出すような話でないことは容易に想像できるので、俺は「よく分かりました。ありがとうございます。」と礼を述べて、それきりこの話についてはしないことに決めたのだった。

　更に翌日、ようやく大まかな形が整った。木型と比べても勿論細かい部分での違和感はまだ残っているものの、ほとんど遜色のないところまでは完成している。あとはこいつをどこまで完璧に仕上げられるか。俺はより一層気を引き締めてかかるべく、顔を両手でパンと張るのだった

## 仕上げを始める

2018年12月21日

　今日からはいよいよ仕上げに取り掛かっていく。作業前にじっくりと剣を眺めて修正点を見極める。最初の頃から比べて随分と剣の形になったなぁ。何度か繰り返し確認したが、特に魔力の損失などはないようである。この状態を保ったまま、最後の仕上げをしないとな。

　剣を火床に入れ、加工したいところだけが熱されるように、チートを使って炭の置き方や、風の送り方を調整する。加工可能な温度まで上がったら、取り出して鎚で叩く。思ったように叩けたら、木型と比べてちゃんと同じになっているか確認する。これの繰り返しだ。

　今日はサーミャとディアナは狩りに出ている。なので作業中の会話は、俺とリケとリディさんの３人で、剣と木型を比べている間などはリケとリディさんの２人で話している。リケの作業は一般モデルのナイフ作りだ。

　最初の頃はこの２人での会話もぎこちなかったが、もう１週間ほど一緒に暮らしているからか、打ち解け始めているようには見える。

「私は親方みたいに魔力の流れを掴むのが得意ではなくて……」

「ドワーフの方は魔力よりも、鉱石そのものの状態を掴むことに長けておられる方が多いとは聞きます。」

「少しでも親方みたいになるにはどうすればいいんでしょうか。」

「あの方はどうも常人の器を大きく越えているようなので、目指すのは大変かと思いますが……」

「それは分かっているんですけど、コツのようなものだけでも良いんです。」

「……では、私も長くはここにいないのですが、その間、練習しましょうか。」

「良いんですか？いえ、お願いします！」

　リケが頭を下げ、リディさんが少し困ったように微笑んだ。前に俺もあんな表情になったな。ドワーフとエルフ、俺の前の世界の知識だと反目し合うこともある種族同士が教えたり、教えられたりする仲になるというのは良いものだ。こうしてしばらくの間、リケの作業中にリディさんが魔力周りについて教えることになった。俺の作業の監督は「エイゾウさんの腕前はもう分かっているので、別にいいと思います。」という事で免除になった。

　ただ、その後も時々はこっちをチラチラと見ていたので、最低限の確認はしてくれているらしい。それなら俺も自分の作業に自信が持てる。ある程度まで作業したあとで、ここが違うあそこが違うと言われるのが一番面倒だからな。前の世界で何度煮え湯を飲まされたことか……。悲しくなるからこのへんでやめておこう。時々俺の方でリディさんに確認をしてもらえばいいだけの話ではあるし。

　この日も予定していた程度の進捗で作業を終えることが出来た。リケの方は魔力を見る練習なんかもあって、進捗はあまりよろしくなさそうではある。しかし、次の納品はまだまだ先だし、そもそも納品量を確約しているわけでもない。

　それよりも、リケが成長して高級モデルを作れるようになってくれることの方が大事だ。それが出来るようになれば、例えば一般モデルは俺が速度優先で量産し、高級モデルをリケが作る、などの分担も可能になるし、今回みたいに俺の都合で納品に行けないということもなくなるだろう。そうして少しずつでも「実家の工房に帰れる」という自信をつけていってもらいたい。

　作業場を片付けていると、サーミャとディアナが帰ってきた。特に何も持っていないので、大物のほうを仕留めたのだろう。尋ねてみると、やはり大きい猪を仕留めたのだと言う答えが返ってきた。今日もディアナが勢子を務めたようだ。

　こっちも役目を入れ替わったり、同じ役目が出来るようになったほうが、選択肢が広がる。弓の練習自体は空いた時間に２人でやってるみたいだし、そのうちディアナにも弓を作ってやらんといかんな。

　蛇足ながら、子狼には会えなかったとディアナが嘆いていた事を申し添えておく。

　翌朝、５人で連れ立って家を出る。勿論、街へ行くのではなく、猪の回収である。リディさんは家にいてくれても構わなかったのだが、ついてくると言うので一緒に行くことになったのだ。ただ、特にいつもと違うことはない。サーミャとディアナが先頭に立ち、リディさんと斧を持ってドワーフ感MAXのリケが真ん中、俺が殿で念の為、周囲を警戒しながら歩く。程なくして沈めた場所に着いた。結構な大きさの猪が沈んでいる。俺とサーミャ、ディアナで湖の岸に引き上げるが、その間にリケが木を伐って運搬台を作る。木を伐るのはリケ１人で十分すぎるので、ロープをくくるのをリディさんにも手伝って貰った。

　おかげで引き上げる頃には運搬台は完成しており、俺達はそのまま台に猪を引き上げて固定、少しの休憩の後、家まで持ち帰った。引っ張るのをリディさんに手伝ってもらうかは迷ったが、そんなに力は強くないらしいので、今回は見送りである。忘れそうになるが、お客さんだしな。

　家についたら皮を剥いだり解体して肉にしたりする。リディさん以外は特製のナイフを持っているので、作業効率を考えてリディさん以外の人で作業する。手分けすれば肉になるのはあっという間だった。リディさんもその辺り、特に忌避感とかはないみたいなので、エルフの里でも同じようなことは行われているのだろう。必要性から森を含めた魔力が豊富にある地域に住んでいると言うだけで、基本的には人間とほぼ変わらない生活のようである。

　作業中にリケにも聞いてみたが、ほとんどのドワーフが鍛冶屋を生業としている都合上、鉱山などに近い場所に居を構えるだけで、別段人間と大きく違う生活をしているわけではないらしい。エルフとは違って魔力を必要としないため、時々街に出て商売を始めたり、弟子入り

　そんなことを考えながら、後片付けと昼食の準備のため、家の中に戻るのだった。

## 御覧じろ

2018年12月22日

　猪の肉を保存するものと、近々消費してしまうものに分けたら、昼飯の準備を始める。前にブルーベリー（正確には”らしきもの”だが）を漬け込んだブランデーを少し使ってブルーベリーソースのソテーである。相変わらず好評なようで何よりだ。

　昼飯を食ったら午後の作業を開始する。当然俺はミスリルの剣の仕上げ、リケはナイフ、リディさんはそれを見ながら魔力の訓練に付き合い、サーミャとディアナは庭で弓の練習だ。

　もうかなり木型に近くなってきた剣を火床に入れて加熱する。もちろんチートはフル活用だ。熱が上がったら取り出して、何度か鎚で叩いて少しだけ形を変えたそれと木型を見比べて思い通りになっているか確認。その繰り返しを今日もやる。地道な作業なので、全く同じことをしているようにも思えてきたが、ちゃんと木型と見比べたりすると、それに少しずつではあるが近づいている実感がある。

　ミスリルが加工できるベストな温度域から外れたら再度加熱するが、その合間にリケ（とリディさん）の様子を見てみると、ほんの僅かずつだが上達はしていっているようだ。なんとなしに打っているナイフにキラキラしたもの、つまり魔力が増えているように見える。……勿論、そう見えているだけで、実際どうなのかはあとでじっくり見てみないことにはだが。

　このままリケが上達して魔力をふんだんに込められるようになったら、高級モデルは２つの意味を持つことになる。一般モデルは普通の加工のみを行い、魔力もほとんど込められていないものだが、高級モデルはその素材を最大限に加工したものと、加工自体は普通だが、魔力がかなり込められているもの、だ。特注品はその両方ということになる。

　ただ、できればリケにはまず、素材のみで最大限に加工した高級モデルを作れるようになってほしい。そっちのほうが魔力が込められるだろうし、魔力の薄いところでも応用が効く技術だからだ。実際、俺が打ったエイム―ル家の家宝の剣は、魔力入りにする前でも、鋼の剣としては自分で言うのもなんだが相当の業物だった。リケには先ずそこを目指してもらい、そこから更にもう一歩を考えて欲しいのだ。

　だが、俺ではチートだよりで具体的に教えることが出来ない。リディさんがいる今のうちに、覚えさせてもらえることは覚えさせてもらって、素材を引き出す方はその後で俺がちゃんと見てやれば良いようには思う。一連の作業をしつつ、俺はそんな事を考えた。サーミャがここにいたら「エイゾウが真剣に考え込んでるぞ」と言われかねないな。俺は苦笑して、以降は作業のみに集中することにした。

　翌日も俺とリケ、リディさんの作業は同じ内容だ。サーミャとディアナは収集に行くらしいので、あるものを持ってきてもらうように頼んでおく。みんなで神棚に二礼二拍手一礼して、作業と採集の間の安全を祈る。さあ、今日の仕事開始だ。

　作業自体は全く昨日と変わらない。光景も音もだ。リディさんがリケに魔力について教えている。リディさんはそこそこ身長があって、リケは低めである。パッと見には母親が娘に手ほどきをしているように見えなくもない。その幸せは俺は前の世界ではとうとう掴めなかったが、これはこれで掴めたと言えるのかも知れない。このところ同じ作業で集中を続けようと固まっていた俺の心がほぐれるような気がした。

　この日の作業でほぼほぼ完成と言っていい出来になってきた。木型と比べてもほぼ差がわからない。これで完成と言っても遜色のない出来ではあるが、チートを使って確認すれば、まだ完成に至っていないことがよく分かる。完成は明日だな。

　作業場を片付けていると、サーミャとディアナが帰ってきた。今日の収穫はキイチゴみたいなやつと、桃っぽいやつ、それと、

「頼んだやつ採ってきてくれたのか。」

「おう、これで良かったんだろ？」

「ああ。ありがとうな。」

　サーミャが出してきたのは、この間採ってきたミント、ただし根っこごとまるまる１株である。

　今日のところは水につけておいて、明後日にでも中庭に植えるのだ。もしミントと同じなら、それだけで放っておいてもそれなりに繁茂してくれるに違いない。前の世界で水耕栽培したがエラいこと生い茂ったからな。しなかったらしなかった時考えよう。もしこれで栽培できたら、気軽にミント茶が飲めるようになるから楽しみだ。

　次の日、いよいよ俺は最後の仕上げにかかる、という事で、他の４人は自分の作業を止めて、俺の作業の見学をするらしい。

　全員で神棚にお詣りする。作業の無事と、今日の完成を祈っての二礼二拍手一礼。気持ちがサッと切り替わる。この心持ちだと、今まで適当にやっていた火床への火入れもどこかしら儀式のようにも感じた。

　昼をやや過ぎ、もう殆ど修正するべきところも無くなった。最後に木型と比べながらチートで見極め、完全に仕上げる。

　これでもまだ最後の工程がある。研ぎだ。形はもう既に元の剣だが、これでは刃がついていないので斬れない。これもチートを活用して慎重に慎重に刃をつける。研ぐと当然その分は磨り減るし、魔力が抜けてしまうかも知れないので、今ある集中力の全てを使って研ぐ。硬い刀身の感触が手を伝い、ガラスのようなシャランと言う音が聞こえてきて、槌で叩いたときとは別の音が耳を楽しませてくれた。

「よし、これで完成だ。」

　俺がそう言うと、リディさんも含めた４人がわっと歓声をあげる。改めて出来たものを見るが、この剣の元々の形はこうだったと確信できる。

「リディさん。」

「はい。」

「完成いたしました。お確かめください。」

「はい。それでは。」

　剣を渡すと、リディさんはそれこそ剣の組織一つ一つを見るかような視線でチェックを始める。大丈夫だという確信はあるが、今回は依頼が依頼だけにどうしても固唾を飲んでしまう。リディさんが悪いわけではなく、元のもの、と言うのは多分に本人の思い込みも入っているからな。それにそぐわないなら、それはそれで失敗だと俺は思っている。そうなったらやり直しもあるだろうし、場合によっては期日に間に合わないと言ったことも起きるかも知れない。そう考えるとますます体が縮こまる。うちの３人娘も同じような気持ちなのか、チェックをするリディさんを射抜かんばかりの目でじっと見つめている。その気持ちは非常にありがたいが、余り見つめるとリディさんがチェックしにくくなるかも知れないから、程々にしときなさいよ。

　リディさんが剣を台に置いた。チェックが終わったのだ。流石に俺もリディさんをじっと見つめる。４人からの視線にリディさんは一瞬だけたじろいだようだったが、すぐに気を取り直すと

「ありがとうございます。求めていた以上の仕上がりになっています。」

　とそう言った。

「やった！」

　サーミャが大喜びで立ち上がり、リケ、ディアナと抱き合っている。俺も嬉しいが、１つだけ気になる点があった。

「あの、求めていた”以上”とはどういうことでしょうか……？」

　怒りなどではない、悲しみでもない、純粋に聞きたいことを、俺は口にしていたのだった。

## 過ぎたるは及ばざるが如し

2018年12月23日

　「求めていた”以上”」とリディさんは言った。普通に考えれば良いことではあるはずなのだ。クライアントの求めるレベルよりも良いものが作れたのだから。ただ、今回は修復を求められて、「元と同じもの」とご希望だったのだから、元を超えるのが良かったことなのかは疑問だ。この辺についてはちゃんと的確なレベルで抑えるということが出来るようになっていかないといけないな。

　はたして疑問の答えはすぐにリディさんから返ってくる。

「ええ。依頼としては元の姿に戻していただくことでしたが、元の姿なのは勿論、織り込まれている魔力の量は大元よりもかなり多くなっています。

　あの使い方ってのは魔力電池のことか。確かに一定以上引き出すと壊れるならそこまでのマージンは多いに越したことはない。とりあえず余計なことをしたのではないと分かったので、一安心だ。

　元の魔力の量がどれくらいか分からないが、それなりに多かっただろう。それを使い果たして剣が壊れるような事態、と言うのが何だったのかは少し気にかかるところではある。どう考えても聞いていいような内容ではなさそうなので聞かないが、また壊れたら直してあげよう。

「それで、代金なのですが。」

　ああ、そう言えばそう言う物が必要だったな。いろいろ勉強にはなったので、格安でも良いのだが、とりあえずはあの基準で言うか。

「１人でいらした場合は、お客さんの言い値で構わないことにしているのですよ。なので、リディさんの思う金額をお支払いください。」

「そうなのですね。うーん……」

　細い顎に手を当てて考え込むリディさん。顔が小さいし物静かな印象のある人なのでそう言う仕草がすごく似合うな。最後に家に来た客がヘレンと言う真反対の人間だったからと言うのもあるとは思うが。

　しばし考えた後、「ちょっとお待ちを」と言ってリディさんは家に戻っていった。その合間に復元（＋α）したばかりのミスリルの剣を構えてみる。作業中に実感していたことではあるが、ミスリルだから凄く軽い。同じ重さの鋼だと、肥後守は言い過ぎにしても、ナイフかもう少し大きいくらいの刃物しか出来ないだろうな。

　振り回してみるのは、お客さんの品物なので止めておいた。新たに打ったものなら試し斬りの名目で振ることも出来るが、これは修復品だからなぁ。

　ほんの少しの時間のあと、リディさんが小さな布の袋を持って戻ってくる。多分あれが財布と言うか、まとまったお金が入っている袋なのだろう。

「お待たせしました。」

　その袋の中から、金貨と見慣れない薄い板を取り出してきた。金貨は５枚程度だが、薄い板の方はよく見れば宝石のようである。それが２枚。相場があまり分からないが、おそらくはかなりの値段になっているはずである。

「本来であれば、これだけの魔力を持ったものを打っていただいた場合、もっとかかるのかも知れませんが、お支払いできる限界がこれなので。」

　うーん、やっぱりなんか多い気もするな。材料は持ち込みだったし、リケが色々教えてもらったのもあるし、俺も勉強になったことはいっぱいある。ああ、そうだ。

「えーと、それじゃあですね。」

　そう言いながら、俺は金貨を１枚リディさんの手に戻した。

「この金貨１枚分の、リディさんの里で育てている野菜の種を、この家の場所を聞いた商人に届けてもらえませんか？エイゾウ宛だって言えば通じると思いますので。もちろん、里の方々のご迷惑にならない分だけで結構です。もし余ったら種を季節ごとに分割して、とかで結構ですので。あ、もしかしてエルフの里の野菜とかって門外不出だったりします？」

「いえ、そんなことはありません。普通に人間の商人に売ることもあります。ですが、よろしいのですか？」

「ええ。街に行った時にご覧になったかと思いますけど、あの商人とのやり取りと同じ感覚ですので。」

　これだと値引きにはなってないが、リディさんの住むエルフの里に金貨１枚分の金が帰っていくので、とりあえずはそれで自分を納得させることにするのだ。

　……ヘレンの剣や、エイムール家騒動のときに貰った金の話をしたら、リケとディアナに「キッチリ貰っておかないと、自分の腕を安く売ることになるし、それだと他の鍛冶屋の立場もないだろう」と怒られたので、直接的な減額は控えることにした。今回も本当は金貨３枚位貰えたらいいなーと思っていたくらいなのだ。怒られた時、サーミャもよく分かっていないようだったが、あれは多分金額が大きいので実感が無かっただけだな。日用品の相場は普通に知ってるし。

　リディさんはまたも考え込んでいるようだったが、ややあって

「それではお言葉に甘えまして。」

　と渡した金貨を袋の中に戻してくれた。もう１枚くらいリケの授業料と称して戻しても良かったかも知れないが、それで多すぎると固辞されたら意味ないしな。

　ひとまずこれで今回の依頼については万事収まりがついた。となれば、今日は打ち上げだな。俺はちょっとだけ豪華な食事の準備をするべく、作業場の片付けを始めるのだった。

## お別れ

2018年12月24日

　夕食は家にある酒と肉を大量に動員して、リディさんの送別会みたいにした。お客さんなので、送別会と言うのもおかしいのかも知れないが、それなりに生活を共にしてるからなぁ。そう言えば、滞在費も払ってくれようとしたのだが、その辺りはリケに魔力周りを教えてくれたことと相殺、ということにした。

　人間だと家名持ちでも無ければ魔法が使えないこの世界で、魔力の知識というのはなかなかに貴重な情報だとは思うので、これで相殺になっているかは若干怪しいが、リディさんの中では剣の修理代は若干足りてないって感じぽいし、それも含めてお互いにそれで納得しているので良しとする。

「今回は非常に興味深いものがたくさんあって、正直に言えば、楽しかったです。修理の依頼はそんなに来ないほうがよいとは思いますが、また他にも頼みたいことがあれば、ぜひともこの工房にお任せしたいです。」

　リディさんは送別会の最後にそう言った。

「ぜひ、エイゾウ工房をご贔屓に。」

　俺も笑顔でそう返した。

　翌朝、今日はリディさんが森から魔力を吸収していた。「帰りに使う身隠しの魔法の分」だそうだ。エルフは強力な魔法を扱えるようだが、それでも一人旅は危なかろうと思うので、リディさんはよっぽど剣の腕も立つのかと思いきや、街道なんかでは身隠しの魔法を使って見えないようにして、街のすぐ近くとかで解除すると言った方法でやってきたので、一通りの護身以上のことは出来ないらしい。森に入ってからうちに来るまでもその魔法使ったって言ってたしなぁ。

　という事で、朝飯をリディさんも含めた５人で食べ、リディさんが出立の準備を終えたら、森の入口までみんなで送っていくことにした。こうすれば少しでも魔力の消費を抑えられるだろうし。

　サーミャを先頭に、俺、リディさん、リケ、ディアナの順に並んで移動する。今日は荷車がないので、俺は熊を倒した時に使った槍も念の為持ってきている。よくよく考えれば、今日納品とかにして、街までリディさんを送っていける体制にしたほうが良かったな。迂闊だった。もし次があればそうしよう。

　森の入口までは特に何も起きなかった。鳥やらの小動物には出くわしたが、彼らが危害を加えてくるようなことはない。リディさんがエルフなので、もしかしたら森の動物と会話とかそう言うことがあるかと、ほんの少し期待したが、別段そう言うこともなかった。魔力が必要かつ扱いに長けていて、長命である以外の基本的なスペックは人間と変わんないしな……。

「皆さんには本当にお世話になりました。」

　リディさんが右手を差し出す。

「こちらこそ。またいつか来られることを、あの家でお待ちしています。」

　そう言いながら、俺はその手をそっと握る。

「またな！」

「今度来るまでに、魔力の扱いの練習しておきますね！」

「今度来る時は、エルフの剣術とかも教えてね。」

　３人もリディさんの右手を取って別れを惜しんでいる。

「それではまた！」

　リディさんがそんな声量で声が出せたのか、と驚くほどの声で別れを告げる。俺たちは互いに手を振りながら、姿が小さくなるまで見送った。

「行っちゃったなぁ。」

　ぼそりとサーミャが言う。元々は一匹狼（虎だけど）だったサーミャではあるが、一旦気を許した相手にはそれなりに寂しさを覚えるらしい。

「まぁ、なんか作って欲しいものがあればまた来るだろ。」

「そうね。エイゾウしか作れないものもいっぱいあるみたいだし。」

　俺がフォローすると、ディアナが後を引き取る。そうして俺たちは森の中へ戻っていった。

　森の入口までは往復で４時間くらいあるので、今日の時間のほとんどを使ったことにはなる。なので、昼飯を食ったあとは休みと言うことにした。俺はもちろんミントの植替えである。

　昨晩であるが、リディさんに

「もし植え替えるなら、壺か何かに入れて育てたほうが良いですよ。」

　と言われたのでそうすることにした。使ってない中くらいの素焼きの壺の底に穴を開けて、土と一緒に根っこのついたミントを入れて、外に出す。下には余った木材を加工した受け皿を敷いておいた。木材だから時々はチェックしてやらんとなぁ。

「伸びた茎が地面につくと、そこから根が生えて増えるので、時々は確認して垂れ下がってきたやつは切ってください。」

　とも言っていたので、夕方の稽古の前後のどっちかにでもチェックするようにしよう。長く家をあける時は家の中の窓際に移すとかしたほうが良いかも知れないな。帰ってきたらそこら一面にミントが、てものちょっと恐怖だ。畑に植えるものが決まるまでのまさに”埋め草”にするつもりだったのだが、リディさんの里からそのうち種がなんかが来るなら、むしろ増えすぎるのは邪魔になるし、ミントには適度に育ってもらおう。

　そう言えば、うちにはベランダがない。洗濯物は庭に立ててある背の高い杭にロープを張ってそこに干しているのだ。勿論屋根はない。洗濯バサミもないので、ロープにかけるか通す形でやっている。そして屋根がないので、そんなに降らないとは言え、雨の日は一切洗濯物が出来ない。

　陰干しになっても、干せるならちょっとしたものの洗濯くらいは出来るだろうし、森の中だが日差しの強い季節にはそこで涼むことも出来るだろう。プランターならぬ壺栽培の植物が増えたときもそこに置いておけるし、作っておくメリットは結構あるようには思えるな。貯蔵庫周りが先決だとは思うが、その辺りが片付いたら作ることをみんなにも提案しておこう。

　その後は中庭の土がまた雑草だらけにならぬように耕し直したりして一日を過ごしたのだった。

# 第４章　魔物討伐隊遠征編

## 楽しみの前に

2018年12月25日

　翌日からは普通の鍛冶仕事を再開する。アポイタカラに取り掛かりたいのは山々だし、十分な収入があったとは言え、継続的な仕事というのもやっていかないと、時々来る依頼だけに頼るわけにもいかないからなぁ。

　なので、サーミャとディアナに鋳造するところまでをやってもらって、そこからの仕上げを俺が行う形での高級モデルのショートソードとロングソードの作製を３日ほど行うことにする。その間、リケはナイフの製作だ。カミロ曰くは武器もそれなりに売れるが、日用品との境目にあるような、こう言ったナイフも売れ筋らしいからな。

　ただ、ナイフは日用品に近いだけあって、価格が高い高級モデルよりも、お手頃感の強い一般モデルのほうがよく売れるらしい。武器の方は命を預けるからか、高くても高級モデルを買っていく人が少なくないとか。なので今はできるだけ売れ行きにそった納品量を心がけるようにしている。勿論、どれをいくつと言った発注があれば話は別だが、カミロからそう言った注文が来たことは、こないだの伯爵閣下からの要請だったハルバード以外では無い。

　だから今の所、納品量は俺の胸先三寸で決まってはいる。でも、この辺りもそのうち要望が来るかも知れないのは、計算に入れておく必要があるだろうな。

　魔力の話をリディさんから聞いたので、今回最初の１本はそこを意識してみる。いつもどおり、ムラのようなものを見つけて、平均化していく。この時には魔力はほとんど込められていない。薄く入り込んでいるようではあるが、特注品の時に比べるとすごく僅かだ。

　やはり高級モデルと特注の一番の違いは魔力の量と言って間違いない。高級モデルでは素材そのものを最大限に活用しているから、それなりの努力と才能がいるとは思うが、普通の人間でも到達できるので、都でも何人かは近いものを作れる職人がいると言うのも納得できる。

　前にも思ったが、高級モデルであればたくさん世の中に出しても問題あるまい。特注だと魔力の含有量でおかしいことを見抜く人もいるだろうから、こっちはあんまりガンガン出すのも考えものだな。

　そんなことを考えながらも、３日ほどの作業は順調に進んで、次の納品までに十分な量を確保できた。リケも一般モデルのナイフを大量に製作できたようだし、高級モデルのナイフはそんなに数もいらないっぽいので、後１日俺がナイフを作れば、２週間分ではなく１週間分ではあるが次の納品には十分な量になる。まる１日休みにしてもどうにかなる計算だ。更にもう１日空いてるから、そこで何をするかだな。

　アポイタカラを触るのもいいとは思うが、ミスリルで苦戦したことを考えると、３～４日くらいはまとまった時間が欲しいところではあるし、俺個人の持ち物で、別にお客さんが待っている品物でもないから、追々どこかで時間をしっかりとってそこで取り掛かろう。

　なので、３日目の夕飯の時に、翌々日から２日間を休暇にすることを３人に告げた。

「じゃあ、また魚釣りにいこうぜ。」

　すると、サーミャがそう提案してきた。

「まるまる２日じゃなくてどっちかだよな？」

　違うとは思うが、一応確認しておかないとな。

「もちろん。」

「じゃあ、

「やった！」

　大喜びするサーミャ。こう言うところは肉体年齢よりも、実際の年数っぽさがある。忘れそうになるが、年数だけで言えば５歳だからな。

「サーミャとディアナは狩りに出るなら明日出て、明後日の休みに回収する算段にしておいてくれ。」

「おう。」

「わかったわ。」

　だとすると、俺の明後日の休みの午後は釣り竿作りかな……。流石にリールは作れないが、ディアナの分の竿と針がいるし。リケは多分リディさんに習った魔力の練習でナイフか何かを作るだろうと思うので、それならどのみち鍛冶場に火を入れることになるし都合がいい。

　別に鍛冶の仕事が嫌になったわけではないが、同じことだけしてても気が滅入る瞬間はどうしても出てきてしまうし、こうやって休日の予定を考えるのは、前の世界でもそうだったが頑張ろうという気になってくる。やはり休みは大事なのだ。定期的な収入の確保は出来てきているし、今後はもう少し余裕を持って休日も定期的に取り入れていきたいところだな。

　そんな決意も新たにした翌日、予定通り俺とリケはナイフの製作、サーミャとディアナは狩りに行った。

　俺が高級モデル、リケが一般モデルで、俺はチートがあるから手早く仕上げていく。リケも腕前が上達していて、一般モデルであれば俺よりはまだ遅いものの、一般の鍛冶屋と比べたら驚くほど早く仕上げられるようになっている。これは確かにそろそろ高級モデルが作れるようになりたいだろう。

　リケにとって今が一番の試練の時かも知れない。そこらの鍛冶屋よりは相当腕前がいいが、ある程度以上の腕前にはまだ到達できてはいない。それが分からないような才能や腕前であれば逆に気にならないのだろうが、リケはそれが理解できるだけの才能と腕前を持っているし、リディさんのおかげで魔力を鍛冶に取り入れる端緒を得たから、もう一つ上に至るために何が必要なのか、必死にもがいて探していることだろう。

　そう言うところを親方の俺がしっかり指導できればいいのだろうが、なんせ俺のはチート仕込みの技術なので教えることが出来ない。自分が何をしているのかも、半分くらいは分かっていないのだ。俺もちゃんと自分の技術を理解して教えられるようにはしていかないといけないな。

　今後の計画にまた１行を書き加えながら、俺はナイフにする板金に鎚を振り下ろすのだった。

## 休み１日目

2018年12月26日

　そこそこの数のナイフを作って、１日を終えた。ここからは間にサーミャとディアナが狩ってきた獣を引き上げると言う作業があるが、基本的には２日にわたる休暇のはじまりだ。否が応でもテンションが上がってくる。

　ウキウキと作業場の片付けをしていると、サーミャとディアナが帰ってきた。今日の成果を聞いてみると、「デカめの鹿」だそうだ。デカいなら腱なんかも置いておけば使えるな。そうサーミャに聞いてみると、

「そうだなぁ。そろそろディアナにも弓を持たせてやりたいし、今度頼んでもいいか？」

　とのお言葉だった。俺は鍛冶屋ではあるが、鞘なんかを作ることが出来ることから分かるように、弓も作ること自体は可能である。勿論チートを使っての話だし、鍛冶で作るもののように特級品と言うわけにはいかないが。

「そうだな、次の休みにでも作るか考えとくよ。」

　動物の角や骨なんかを組み合わせた複合弓もインストールの知識だと、もうこの世界でもあるらしいのだが、作るのは一手間どころでなく時間が掛かるから、作るとしたら木製の単弓だな。貼り合わせなんかを試すかどうかは別にして。

　どのみち狩りに出るならディアナにも弓がいるよなとは思っていたし、渡りに船ではある。アポイタカラの着手が伸びるかも知れないので、一旦そこまでに特性だけでも確認しておいたほうが良いかも知れん。

「ありがとな、エイゾウ。」

「私からもお礼を言うわ。ありがとう。」

「なに、弓はそんなに作ったことがないし、これも勉強だ。」

「親方って武器はもちろん、料理から家具からなんでも作れるんですねぇ。」

　自分の作業の片付けを終えたリケが会話に加わってくる。

「まぁなぁ。色々手を出していたら、色々作れるようになってしまった、ってとこだな。」

　俺はリケに返すが、これはほとんど嘘だ。俺が貰ったチート能力で一番優先されたのは勿論鍛冶だが、残りのポイント（のようなもの）で貰えるうち、優先されたのはこの世界の言語と生産と戦闘である。

　それで貰った戦闘能力が熊と戦って勝てたり、おそらくは当代随一であろう傭兵と渡り合えたりと言ったことを考えれば、特化してないとは言え全般的な生産の能力もある程度知れると言うものである。つまりはそこらの普通の人間と比べれば大幅に上回るものが作れるのだ。俺の鍛冶仕事で言うところの、高級モデル一歩手前の一般モデルまでは作れる。その「生産」の意味する範囲がどうもかなり広く、おおよそ”作る”ことに関しては概ね適用されるらしい。

　だから色々作れるだけであって、色々手を出してきたわけではない。俺の作るメシが美味いのも実はチートのおかげなのだ。

　ただし、逆に言えば、その道の達人には到底かなわない。ヘレンとお互いに真正面から打ち合う分には長いこと凌げるが、ヘレンが完全に俺の命だけを狙いに来た場合には多少耐えられたとして、結局討ち果たされてしまう、と言うのと同じだ。

　ついでだが言語の能力については、今のところ”共通語”とも言うべき、この世界でいろんな種族が一般的に使っている言語しか喋ったりしていないので、どこまで適用されるのかはわからない。少なくとも狼達と会話できるようなものではないので、もっと意味のある、例えば存在するのかは分からないが、地方のリザードマンが話すリザードマン西方弁、なんかだと理解できる可能性はある。

　ともあれ、そんなチート能力を使って、今度の休みに弓を作る前に、明後日の釣りに向けて明日は釣り竿と針を作らねば。

　翌日、４人で鹿を引き上げてきた。なかなかのデカさだ。今までの中でも指折りの大きさなので、腱なんかも結構な長さが期待できるな。ほぐして糸状にしてから撚り合わせたりするので、長いに越したことはない。その工程はサーミャが知っていたりするので実際の作業は任せてしまおう。

　いつも通り手早く解体し、肉と皮と骨にわける。骨は使えなくもないのだが、加工の難しさの割にはさほど良いものも出来ないので捨ててしまう。皮の方は腱と同じくサーミャが処理を知っているのでそっちに任せている。サーミャ以外の人間は肉の保存作業だ。勿論傷まないうちに食べる分は別にとってある。今回の昼飯ではシンプルに焼くだけにしたが、毎度凝ってなくてもこう言うのでも十分に美味い。

　昼飯の後は翌日に備えて竿と針を作る。糸は前回と同じくうちにある一番細い糸を利用するので作らない。

　竿にする枝を森の中で探す。オッさんだがかつては男子なので「なんかいい感じの枝を探す」スキルは習得済みなのだ。実際にそう言うスキルが有るのかは分からんが、男の子ってそう言うの見つけるの得意だよな。前に使った竿もあるので、今回は２本ほど"いい感じの枝"を調達してきて、ナイフで形を整える。ここでいい感じにしなるように加工するのがポイントだ。もちろんチートで加工するので抜かりはない。

　竿が出来たら今度は針だ。普段は剣やナイフを作っているが、こう言う細かい作業のほうが集中力を要する。３０歳に若返った恩恵か老眼が始まってないのが救いだろうか。もしかしたら筋力を増強していくれているのと同じで、視力も増強されているのかも知れない。近いところを見るのは眼球の筋肉が関係してるって前の世界で聞いたことあるし。

　休みでナイフづくりの練習をしているリケのキンと言う派手な音に、小さなチッチッチッという音が混じって作業場に流れる。聞きようによってはハイハットを刻んでいるように聞こえるかも知れない。リズムだけでメロディーはないから音楽と言うにはいささか足りないものが多いが、こう言うセッションは悪くないな。

　こう言うものにチートを使ってしまうのはどうかと思う瞬間はあるが、針の出来が釣果に影響するかも知れないことを考えると、使わざるを得ない。仕事にはそれなりを力を、趣味には全力を、だ。

　こうして、俺の持てる全ての力をつぎ込んだ釣り針７本（予備含む）が完成し、翌日の釣りの日を待つのだった。

## 休み２日目

2018年12月27日

　翌日、今日は皆で近くの川へ釣りに行く日だ。今回は前回と違ってきっと釣りには慣れてないであろうディアナがいるので、俺の他にボウズ候補がもう一人いると言うことである。別に競い合っているわけではないが、こう言うのは仲間がいてくれたほうがいいからな……。火口や昼食を入れたバスケット、それに湯を沸かす用のポットやその他諸々を背負袋に入れて俺が持った。さて出発だ。

　今日も釣りに行く川はうちから少し離れたところにある川だ。サーミャとディアナにも確認したところ、一番大きな川がここから更にうちから離れる方向にあるらしい。ここは支流と言うか、湖から流れ出ている川のうちの一つなのだとか。大きな川まで行くとちょっと遠くて、ほとんど街に行くのと変わらない時間がかかるらしい。確かにそれは遠いな。それに大きな川は水深もあるだろうから、渡るのには苦労しそうだ。一度見てみたくはあるが。

　釣りに適していそうなポイントを４人で探す。前に釣りをしたあたりも良さそうだが、他にも良いポイントが無いかを探る。やがて釣りをするのに良さそうなところがあったので、そこの川原に敷物を敷いて、そこに昼食の入ったバスケットを置いて陣取る。そこらの石をひっくり返して餌を確保したら、いよいよ釣りの開始だ。

　ディアナも普通に餌の虫を針につけることができた。もう少し騒いだりするのかと思ったが、全然そんなこともなく拍子抜けした。聞いてみたところ、

「だって、子供の頃兄さん達とこう言うので遊んだし。」

　とのことである。そう言えばそうだったね……。父君のご苦労をちょっと偲んでしまうところだ。

　４人で散らばって川面に糸を垂らす。ちょうど日が照ってキラキラと光っている。流れはそんなに早くもなく、風もそよいでいてのんびりするにはとても良い場所だ。こう言う落ち着いた休日もいいな、と考えていると、パシャッと水が跳ねる音がした。サーミャが早速釣り上げたらしい。

「おー、デカいな！」

　俺は思わず声を上げる。１５センチくらいの川魚が糸の先で暴れまわっている。糸が切れないか少し心配になったが、サーミャはスムーズに手元へ引き寄せると手早く針を外した。

「どうよ！」

　釣ったばかりの魚を掲げて誇らしそうにするサーミャ。デカいからそうしたくなる気持ちが凄く分かる。俺たちは竿を小脇に抱えて「おー」と拍手をした。一番槍はサーミャがとったが、俺達も負けてはいられない。夕食に１品増えるかどうかでもあるし、これで全員ボウズで痛み分けと言う話は無くなってしまったからな。

　その後は釣り上げたことで魚が警戒したのか、それとも騒いだのがいけなかったのか、なかなかアタリが来ない。

「ちょうどいい時間だろうし、一旦休憩して昼飯にするか。」

　俺がそう言うと３人も同意したので、みんなで準備に取りかかる。折れて落ちている枝を探してきて焚き木にし、火を焚いて川の水を汲んだポットに湯を沸かす。摘んでおいたミントの葉っぱを煮出したら、木製のカップに注いで昼食を開始した。前の世界で、こんな感じで女の子がキャンプするアニメとか見たなぁ。今は１人おっさんが混じってしまっているし、あんまりゆるくもないけども。

　昼飯を食べながらワイワイと話をする。既に１匹釣れたサーミャは、余裕の表情で釣り方の講釈を垂れていた。１人で暮らしてた時は木の皮で作った目の荒い網みたいなので獲ったこともあるらしい。今うちに網はないし、食うためだけではないから、のんびりと竿釣りをしているが、食うために漁をするなら網か

　昼食も終わって落ち着いたら、再び思い思いのところに陣取って釣り糸を垂らす。太陽の位置が変わっているからか、朝とは川面の光り方が違って見える。川魚も眩惑されて餌を食ってくればいいのだが。

「キャッ！」

　小さく悲鳴を上げたのはディアナだった。どうやら魚が食いついたらしい。サーミャがすぐ横で色々と指示を飛ばしている。ディアナはその指示に従って魚を無事に釣り上げた。稽古で日常的に剣を振るっていることと関係があるのかは不明だが、指示を聞きながらだった割には動きに無駄がない。釣れた魚はすんなりディアナの手に収まった。

「ほらほら、どう？」

　喜色満面の笑みで俺に釣った魚を見せてくる。サーミャが釣り上げたよりは一回り小さいものの、サイズとしては十分な大きさだ。

「やるじゃないか。おめでとう。」

　俺は素直にディアナを褒め称えた。前の世界だったら確実にスマホで写真を撮る場面だが、あいにくこっちの世界にスマホはおろか写真もなさそうだ。類似の魔道具か魔法はあるかも知れないけれども。魔剣打つから譲るか教えるかしてくれって言ったら、そうしてくれそうな人に今後出会ったらそうしてもらおう。

　その後、リケも１匹を釣り上げ、またも釣果なしは俺だけとなってしまった。前の時はここから気合が空回り気味だったので、そこらは抑え気味に粘る。粘っている間にサーミャが更にもう１匹を釣り上げて、これでエイゾウ家のノルマは達したとばかりに近所を散策している。いや、アレは自分がいないほうが釣れる確率が上がるだろうという、サーミャなりの優しさなのだ。きっとそうだろう。

　やがて、そろそろ帰らないといけなくなってきた頃、最後にもう一投だけしてみることにした。勿論ここまで俺にアタリはない。少し待ってもうだめかと思った時、竿がぐんと引かれる感覚があった。

「おっ！」

　上手く合わせてフックさせようとした時、スッと手応えが無くなった。バレたのだ。俺はガクーンと膝から崩れ落ちる。どうやら生産のチートは釣りには効果がないらしかった。当たり前か。

「ま、まぁ数は十分なんだから良いじゃない。ねえ？」

　ディアナがサーミャとリケに同意を求める。

「お、おう。デカいのはエイゾウにやるし！」

「そうですよ。こう言うのも家族で助け合いですよ、親方！」

「みんなありがとうな……」

　みんなのフォローが胸に沁みるぜ。

　流石に時間もギリギリだったので、さっさと片付けて家に帰ることにする。

　その晩の焼き魚は丁度の塩加減にしたつもりだったが、俺のだけ妙にしょっぱいような気がした。

## 道

2018年12月28日

　翌朝、一晩眠ってやや立ち直った俺は、朝の日課をこなして街へ行く準備をする。荷車に作った剣とナイフを積み込んでいく。このあたりの作業はもう頭が半分寝ていようとも出来るな。

　積み込みはいつも種類ごとにまとめて大きな布で簀巻きにして、ドンと置いて縄で固定する。ナイフは同じことを蓋のない箱に入れてやるだけである。この箱はカミロのところで買った小物（胡椒とか）を入れて持ち帰るのにも使うので、なかなかに重宝しているのだ。

　この荷車も毎度役に立ってくれているが、中古品でもあるし、ちょっとガタが目立つようにはなってきた。あと１回や２回の往復でどうにかなるというほどではないが、どこかで修理してやらないといけないとは思う。……チートを使えば作れそうな気がするが、流石にボールベアリングとか、トーションバー式サスペンションはやりすぎだよな。

　今日も荷車を引くのは俺とリケで、サーミャとディアナが護衛としてついている。緑色の風景の中を荷車がガタゴトと進んでいく。鳥の声以外には風が吹いた時に葉擦れの音がするだけなので、荷車の音が殊更に大きく聞こえる。

　往来するのが１週間に１度程度だし、元々この森の土は固いので、ほとんど毎週通るこの森の中でも、

　今日も間に休憩を挟みつつ、森の入口まで無事にやってこれた。途中、サーミャが何度かコースを変えたりしたのはその先に何かいるからだろう。そういったことも考えると入口側に道を整備するのは難しそうだ。路上で出くわす時の対応がかえって面倒になりかねない。

　ここからはいつもどおり街道を行く。前の世界のローマ帝国のように石畳で整備されているわけではないが、十分に固められていて歩きやすい。見晴らしのいいところだし、衛兵隊が巡視しているので野盗もほとんど出ない。だが、殆どでないということは、たまに出るということでもあるわけで、油断はできない。いつもどおり警戒を怠らずに進んでいった。

　今日も何事もなく街の入口まで辿り着いた。衛兵さんがいつもの鋭い眼差しで通行人をチェックしている。確認する勇気はないが、多分普通にしてても犯罪者が分かったりするんだろうな。こっちをチラッと見て、幾分視線の厳しさが緩んだ衛兵さんと挨拶を交わして街へ入る。

　行き交う人々の足で十二分に踏み固められた道を行く。俺達と同じような荷車や馬車もすんなりと走っていて賑やかだ。勿論、俺たちの荷車も街道以上に軽く感じる。あの壁の中は石畳で整備されていたりするんだろうか。俺は元々は街の外壁だった壁を見やりながら、そんな事を考えた。

　前回と違って、カミロの店に着いた後にやることはいつもどおりだ。いや、前回もそんなに大きく違ったわけではなかったか。店に俺たちが卸す量と、欲しいものの話をしたら、いつもなら後は雑談だ。今日は少しだけ違っていた。

「エイゾウのとこはたくさん剣を作るとなると、どれくらい作れるんだ？」

　カミロは俺にそう切り出した。

「品質を落として、なおかつ１種類でいいなら、普通の方は今の６倍近くはいけると思うが。高級な方を作らなくて済む分、作る量は増える。」

　俺が一般モデルを量産速度優先で作ったら、おそらくはリケの２倍程度の速度で製作が可能である。と言うことはリケ３人分なので３倍の速度で、剣であればナイフを作る時間をまるまる剣にあてれば２倍で６倍である。

「なるほどな……」

　それを聞いてカミロが考え込む。

「入り用なんだったらやるぞ？　ただし、他の納品は諦めてもらうことになるが。」

「それなんだよなぁ。」

　うーん、とカミロは悩んでいる。俺たちの商品を小売してるだけじゃないらしいので、そっちの都合をどうするか考えているのかも知れない。毎回全部買い取るということは、ちゃんと売れてるということだろうし。それなりの数を毎回買い取って、不良在庫をどんどん増やすほど、カミロは甘くない……と俺は思っている。カミロの商人としての才覚への信頼でもある。

　カミロはしばらくうんうん唸りながら考えていたが、やがて

「よし。」

　と顔を起こした。即決のきらいがあるカミロにしては、珍しく長考していたな。

「次の納品は、全てロングソードでお願いできないか？　数は多いほど良い。」

「さっきも言ったが別にかまわないぞ。来週の納品は、全部普通のロングソードでいいんだな？」

「ああ。ちょっと待っててくれ。すぐに戻ってくる。」

　カミロはそう言うと部屋を出ていった。なんでそんな数が入り用なのかは気になったが、要ると言うなら要るんだろう。敢えて理由は聞くまい。

　はたしてカミロは宣言通りすぐに戻ってきた。手には２枚の紙を持っている。羊皮紙などではなく、亜麻や木綿なんかで作られたものである。そこにはいくつかの文章が書き付けてあった。

「２枚が同じことを確認したら、片方持っていってくれ。」

　俺にその紙を差し出しながらカミロが言う。俺は書類に目を通した。その書類を要約すれば「来週までにありったけのロングソードを用意してくれ。その暁には十分に報酬を払う。支払いはロングソードとこの書類と引き換え。」ということだ。カミロのサインも入っている。言うなればこれは発注書だな。報酬額が具体的に書かれてないのは、納品量をこっち次第にしてくれているからだろう。例えば５０本、と具体的に書いてくれても良かったのだが、そこは不慮の事態の場合にカバーできるようにしてくれたと思っておこう。発注書にしては随分曖昧だが、持ちつ持たれつだ。

「確かに。」

　片方の内容を確認し、もう１枚が同じ内容であることと、カミロのものらしき拇印が割印として押捺されていることを確認した俺はその発注書を懐にしまいこんだ。

## 受注生産

2018年12月29日

　注文の話が終わったら、後は帰るだけだ。カミロに挨拶をして店を後にする。

　よくよく考えれば、特注とか俺から売り込んで、と言うか売りつけて追加発注（ハルバードのときの話だ）、みたいなの以外でちゃんと依頼を受けてものを作るのは初めてかも知れないな。その最初がカミロで良かったとは思う。

　街の入口の衛兵さんに会釈をして通り過ぎる。チラッと見ると、持っているのはまだ槍だった。ハルバードの訓練は行われているのだろうか、そんな益体もないことを考えてしまう。ハルバードを追加してくれと言ってきたということは、この街の衛兵隊でも運用するつもりであるのだとは思う。そうでないなら最初に納めたのをそのまま屋敷の衛兵に回せばいいだけだからな。

　まぁ、そこはマリウスが考えることか。俺が気を揉んでも仕方ない。俺はハルバードのことを頭から追い出して、リケに歩調を合わせることに専念した。

　帰りも街道はのんびりした風景が広がっている。時々、警戒をしてもなにもないから、警戒しなくてもいいんじゃないかと思うこともあるが、カミロの話でも時折は野盗が出たりしているし、少し前にヘレンも大きな盗賊団の討伐をしたと言ってたからな。気は抜けない。こう言うのは気を抜いた瞬間にくるしなぁ……。

　はたして、この日も街道には何も出なかった。普通の人間であれば、この先の森の中のほうこそ警戒を怠れないのだろうが、俺達にとっては勝手知ったるである。むしろ気が楽なくらいだ。

　ただ、森の動物達をいたずらに刺激することは望むところではないので、なるべく出くわさないよう、サーミャが中心となって警戒はする。

　ちょくちょく動物たちの近くを通ったが、特にトラブルは起きなかった。その代り、ディアナが焦がれている子狼に出会うこともなかったので、彼女のテンションは幾分下がることになってしまったのだった。

　家に着いて、荷物の運び込みを終えたら、そこから今日は自由時間だ。

　俺は明日からの量産に備えて、あらかじめ型を用意しておくことにした。このところサーミャとディアナにやってもらっていたから久しぶりだ。木型に粘土を貼り付けて乾かし、鋳型を作る。その作業を夕食の準備の時間まで繰り返すと、かなりの数になっている。これなら明日からの量産に困ることはないな。俺は一つ頷くと、夕食の準備のために家に戻った。

　翌日、朝飯の後の作業分担の時間。俺たちはいつもの朝食後のテーブルに座ったままとは違い、作業場に移動し、神棚に拝礼してから、打ち合わせを始める。

「あの場にいたから知っているとは思うが、我がエイゾウ工房はロングソードの量産を依頼されている。なので、今日からは俺も含めて全員それにとりかかかる。」

　俺がそう言うと、３人から言葉は違うが同じ意味の言葉が返ってくる。

「できるだけ効率よく動こう。ディアナは型を作り続けてくれ。」

「わかったわ。」

「サーミャは鋳型に流し込む作業。バリ取りも今日はやらなくていい。」

「おう。」

「リケと俺で仕上げていくぞ。」

「はい。わかりました。」

「急ぐことは大事だが、焦って事故を起こさないように気をつけていこう。１つ１つの動作はゆっくりでもいい。確実に安全にこなすんだ。『ゆっくりはスムーズ、スムーズは速い』ってのを頭に入れて作業してくれ。」

「それは北方のことわざかなにかか？」

　俺の言葉をサーミャが混ぜっ返してくる。

「まぁ、そんなようなもんだ。」

　実際は前の世界で、特殊部隊の訓練なんかで言われる言葉だけどな。

「よし、それじゃ取りかかろう。」

「「「はい（おう）」」」

　こうして、我が工房初の大量受注生産が始まった。

　そうして気合を入れたはいいものの、火床と炉に火を入れないことには始まらない。火を入れて温度が上がるまでの間は、４人全員で型を作る作業をして過ごす。これらの型も早ければ今日中には全て使い切ってしまう。

　型は焼成して組織が変わってしまうほどのことにはならないので、ある程度は再利用できるが、いくらかは損失も出るので、いずれ補充の必要性が出てくるだろう。ひょっとすると今回の量産が片付いた頃には新しい粘土の補充が必要になっているかも知れない。だが今はとにかく量産を目的として作業するのみである。

　炉の温度が上がり、鉄石を入れて融けた鉄を取り出し、その後で型に流し込んで冷えるまでの間も、俺とリケは出番がない。このタイミングだと一番忙しいのはサーミャだ。融けた鉄をせっせと型に流し込んでは、炉に追加の鉄石を放り込んでいる。このペースなら俺たちが仕上げに取りかかった後も、手持ち無沙汰になることはなさそうだ。サーミャのほうがそうなる可能性はあるが、そうなったら型作りの手伝いで回していけるだろう。

　やがて冷えてきた剣を型から取り出し、ヤットコで掴んで鎚で叩いてバリを落としたら、火床に入れて加熱し、「いいところ」で取り出して今度は仕上げるために鎚で叩く。俺が先に始めたが、リケも負けじと鎚を振るって仕上げを進めていく。チラッと見た限りでは、高級モデルとまではいかないが一般モデルとしては中々いい出来だ。

　２人の鎚の音が大きく響き、そこに炎と風の音、サーミャとディアナが作業する音が混じる。今までも度々こう言う状況はあったのだが、今回はちゃんと目的をもっての作業だからか、いつもより更に一家総出という感じがする。

　そうして、一家総出のロングソードの最初の一本を俺は仕上げ終えた。

## 量産

2018年12月30日

　この体制は、一度波に乗ったら結構な数ができそうだ。朝に割り当てたとおり、ディアナが型を作り、そこにサーミャが鉄を流し、あとは俺とリケが仕上げる。鋳型は１本ごとに作り直しが必要になるから、いちばん大事なのはディアナが型を作成する速度かも知れない。俺たちが１本仕上げるより早く１つ出来ているので、今の所は型が無くなりそうな気配はない。最悪の場合は型が補給されるまで鍛造に切り替える手もなくはないが、どうしても品質に差が出るからなぁ。

　うちの工房をフル回転させると、常に高温の物体、それも融けた鉄や赤熱した鉄が複数作業場のどこかには存在すると言う状況になる。つまり物凄く暑い。カミロのところに品物を卸した翌日なんかは板金を作るので似たような状況にはなるし、量産してない時でもこれに近い状態ではあるが、これは思っていた以上に暑いな。

　俺は３人に作業の合間合間に必ず水分補給することを伝える。３人からは了解の言葉が返ってきた。この辺りの気候はそんなには厳しくない、とインストールされた知識にはあった。そうなると実家で同じような状況を体験しているであろうリケはともかく、他の２人は熱中症なんかの知識は乏しい可能性が結構高いからなぁ。直接的な怪我は勿論、こう言った事故も防いでいきたいものだ。

　この日は前日の準備も手伝ってか、１０本も製作することが出来た。１日の生産量としては上々もいいところではないだろうか。数打ちで品質をかなり妥協した結果ではあるが、ちゃんと武器としての最低限の性能は確保されている。何本か出来が悪いのをピックアップして試し斬りをしたが、特に不具合のあるものはなかった。

　仮に戦に使うのだとしても、１回や２回の戦闘でダメになることはあるまい。明日からもこの調子で作っていけば、カミロが恐らく想定している量は上回ることが出来るだろう。

　ディアナの作ってくれた型もまだまだ残っている。粘土のほうが先に尽きないかの心配が必要になってくるレベルだ。総計で５０か６０かそれくらいの数が出来たら、ディアナにも鋳造の方に回ってもらうのも手だろう。明後日くらいの進捗でそこらを考えよう。

　翌日も同じように準備をして「数打ち」のロングソードをガンガン作成していく。リズミカルな鎚の音が作業場を占拠する。ああ、そう言えば。

「ドワーフの工房では、こう言うとき歌ったりしないのか？」

　俺はリケに聞いてみた。ドワーフにも仕事歌のようなものがあるのかどうか、ちょっと知りたかったからだ。

「え？」

　リケはキョトンとしている。もしかしたら無いのかな。

「いや、鍛冶で剣やなんかを打っている時に歌う歌があったりするのかなぁと思ってな。俺はこの仕事は長くはないし、”家”も別に鍛冶には関係してなかったから、この工房にはそう言うのがないが。」

「ああ。ありますよ。」

　やっぱりあるのか。

「ちょっと聞かせてくれないか？」

「ええ～……」

　恥ずかしそうにするリケ。宴会でいきなりかくし芸を要求しているようなものではあるか。

「恥ずかしいならいいんだ。ちょっと気になっただけで。」

「いえ、大丈夫です。」

　まだ少し顔が赤いが、意を決したように目に力が籠もっている。しまったな、上司から言われたら断れない人もいるんだから、もっと慎重に頼むべきだったか。

　しかし、せっかくやる気になってくれているのだ。ここで今更やらなくていい、と言うのも悪い気がする。ここは一つこのままやってもらうことにしよう。

　ヨーホー　ヨーホー　オイラ達ャ　山の妖精さ

　鎚を振るって鍛冶仕事　いいものできたらごきげんさ

　ヨーホー　ヨーホー　鍋釜鍬に　なんでもござれ

　鎚を振るって一仕事　夜には酒がまってるぜ

　ヨーホー　ヨーホホー

　リケは可愛らしい声で鎚を振るってリズムを取りながら歌った。流石に日本風の歌詞でも節でもないが、こう言うのも良いな。

「何だリケ、上手いじゃないか。恥ずかしがらなくても良いのに。」

　俺は作業の手を止めて拍手した。サーミャとディアナも拍手している。それを受けてリケは照れくさそうにする。

「上手下手よりも、これ、いかにもドワーフって感じで恥ずかしいんですよね。家を出るまではあんまり気にしてなかったんですけど。」

　確かに、俺が感心したのも「ドワーフっぽいなぁ」と言う部分も結構ある。俺も何気なくしていることを「人間っぽい」と言われたら恥ずかしいかも知れない。ただ、

「別にドワーフっぽくても良いんじゃないかとは思うけどな。俺だって人間っぽいんだろうし、サーミャは獣人っぽいし。種族を理由にリケにあれこれ言ってくるやつがいたら、エイゾウ工房の面々が黙っちゃないさ。」

　我が家はなんせ伯爵家と繋がりがあるのである。そこに頼るのは最終手段ではあるが、頼れば解決するのであれば、俺は家族のために、躊躇なくその手段を行使するだろう。サーミャとディアナもウンウンとばかりに頷いている。

「ありがとうございます、親方。それではドワーフの名に恥じないような鍛冶屋にならないといけませんね。」

　リケは再び鎚を手に取ると、機嫌よく振るって、先程よりも朗らかな声で仕事歌を歌うのだった。

## 大量納品

2018年12月31日

　その後も順調に製作を続け、この日は９本が作成できた。５０本オーバーはほぼ間違いなく達成できそうな感じだな。逆に言えば６０本を超えることはなさそうだ。明日からの型の作製数上限がこれで分かった。限界までとは言うが、５５本を目標にすればよいだろう。

　この日の夕食の時は歌の話になり、ディアナも歌声を少し披露していた。なんでも教養の一環として、貴族は男女問わずある程度の歌なら歌えるし、踊りも同様に貴族なら誰でもある程度は出来るらしい。

　と、なると家名持ちたる俺も、本当はこの世界の歌をなにか歌えてしかるべきなのだろうが、チートには含まれていないし、インストールされた知識の中にも歌の情報はない。

　かと言って前の世界の歌を歌うわけにもいかない。歌詞が日本語かせいぜい英語だし。”第九”だけはドイツ語で歌えるけど、こっちの世界の言葉でも曲でもないことには変わりないしな。

　なので、リケとディアナには大変申し訳無いのだが、今は一介の鍛冶屋で歌えないということにしてしまった。不義理なのは分かっているので、機会があったらこっちの世界の歌を覚えて披露するか……。

　翌日、最終目標を５５本であることと、目標到達にはあと３６本であること、それを達成するには１日９本の制作が必要であることを３人に伝える。ディアナには３６本分の型が出来たら、後はサーミャと一緒に鋳型に流し込む作業をして欲しいことを合わせて伝えた。もしかすると６日目には時間の余裕が出来ている可能性もあるが、その場合は休みにすればいいだろう。出来ても半日もないだろうし。

　とりあえずは集中して作っていけば間に合うことがほぼ確定なのだし、今日の作業に集中せねば。作業場に火と風の音が静かに響き、やがて鎚の音が響いていく。昨日歌ったら吹っ切れたのか、時折リケの歌声が交じるようになった。レパートリーもいくつかある。元々仕事歌とはそう言うものだと言われればそれまでだが、鎚のリズムに合わせて歌うと言うよりは、歌のリズムで鎚を振るうように俺もリケもなっていた。特に邪魔でもなんでもないし、黙々と作業するときよりも集中できている気さえする。前の世界でも静かな方が集中できる人と、BGMがあったほうがいい人がいたが、俺は後者なようだ。この日は１０本が作製できた。これで残り２６本である。

　翌日にも１０本ができ、残り１６本となったところで、型の作成も完了となった。粘土がリサイクル出来るから何とかなったが、ある程度の在庫はそろそろないといけなさそうだな。この付近で粘土が取れればそこで採取してくればいいのだが、分からないので、カミロにでも適当にきめの細かい粘土を調達してきて貰う必要がある。今の納品のときにでも頼んでみるか。

　更に翌日、翌々日と作業は進み、無事に５５本を仕上げることが出来た。

　ちょっと考えれば分かることではあったが、ディアナを鋳込みに回したとして、仕上げる俺とリケは最大速度で仕事を回せていたのだから、日に１０本を上回ることなどそうそうあるはずもなく、結局６日目に７本を生産し、ほんの僅かに休暇が取れたくらいで終わった。大変ではあったが、目的がはっきりしているとそれはそれでやった後の達成感が大きいな。今後は普通の製作でも週いくつと決めておくのも良いかも知れない。勿論時間が余ればその分は休みにしてしまえばいいだろうし。カミロのその方が都合がいい可能性はある。いずれ話をしてみるか。

　５５本を仕上げた翌日、今日は納品の日だ。かつてない量のロングソードを１０本ごとの簀巻きにして荷車に積む。その後の行程はいつも通りだが、重さが半端ではない。荷車に積んでいても中々の重さを感じる。幸いにも車輪が土に沈み込むようなことはないのだが、この様子だとロングソード５５本分以上の重さを運搬する時はよくよく考えないといけないな。あるいはいよいよ馬を導入するか、だ。

　いつもよりも歩みは遅いが、それでも何とかいつもより少し遅いくらいで済むような時間にカミロの店に到着できた。

　カミロの店についても手続自体は変わらない。いつもと違うのは発注書をもってきたことくらいなものだ。商談室に入ってきたカミロと番頭さんに、発注書を渡す。

「ロングソード全部で５５本。ちゃんと作ってもってきたぞ。」

　ちゃんと、と言っても別に数を確約していたわけではなかったけどな。

「いやはや、エイゾウはいつも俺の期待を超えるな。」

　カミロはちょっと芝居がかった口調で言った。なのでどこまで本気で言っているのかは分からない。

「どれくらいだと思ったんだ？」

「腕前を侮っていたわけじゃないが、単純な話でもないし、４０本かそれくらいかと。」

　なるほど、俺が６倍とは言ったものの、単純に時間を費やせばそれだけ生産力が上がるものではない、というのを見越してそれくらいと見積もっていたのか。そう考えてくれるのはありがたいと言えばありがたい。

　例えば、これで「じゃあ来週までに１００本な」てなことになった場合、今８時間作業していたとして、１６時間作業したら１１０本出来るから余裕だ、と言う話かというと、そうではないからな。その辺がわかっている発注者はありがたい……ような気がする。

　カミロがちらりと目配せをすると、番頭さんが頷いて出ていった。数を確認しにいったのだろう。信頼があってもきっちり確認してくれる方がありがたい。

「今日は別にいるものはあるか？」

　番頭さんが出ていったあと、カミロが切り出した。これもいつもどおりの流れだ。

「粘土がいるんだ。今日でなくてもいい。柔らかくてきめが細かいのがありがたい。」

「粘土か。うちで扱ってる陶器の工房をあたってみるよ。」

「すまんな、助かる。あと、馬が欲しい。あの荷車を人力で引くのもそろそろ限界に来てそうだ。正直、ここまで来るだけで一苦労でな。帰りはほぼいつもどおりだからいいが、かさばるものとか、重いものを買った時に困りそうだから、今のうちに手を打っておきたい。」

「なるほどな……。分かった。そっちも伝手をあたってみよう。」

「すまないが、頼んだぞ。」

「なぁに、弟子１人の小さな工房に５５本も打たせた罪滅ぼしさ。」

　カミロはそう言ってウィンクするのだった。似合ってないぞ、カミロ。

## 打診

2019年1月1日

「それで、今度はこっちからの話なんだがな。」

　カミロはそう言って少し声を潜めた。俺達は身を乗り出す。

「ある程度予測しているとは思うが、これだけ大量の剣が必要ということは、つまりそれだけの兵隊が動くということだ。」

「まぁ、それはな。」

　そりゃそうだ。カミロは手広くやっているとは言え、唐突に４０本ものロングソードが必要になる状況といえば、国軍か私兵かはともかく、どこかでそれなりの兵隊が動く以外にはないだろう。

「それで、お前の納めてくれた剣に問題がそうそう起きるとも思ってないが、ロングソードの納入先からできれば従軍して欲しいと打診が来ている。」

「ふむ。」

「従軍とはいっても、後方の補給部隊に随伴してだから危険は殆どない。」

「じゃあ、移動先の補給陣地で修理するのが主な仕事ってことか？」

「よく分かってるな。その通りだ。」

「期間は？」

「長くても９日間かそこらだな。３日で行って３日行動して３日で帰ってくる。もし１日で済めば１週間で終わって帰ってこられるよ。」

「ふむ……」

　それくらいなら、３人に家を任せて留守にしていても大丈夫かな。飯の問題はまぁなんとかしてくれるだろう。３人共連れて行くわけにもいかないだろうし、誰か１人だけ連れて行くのもなぁ。１人だけを家に置いていくのもしたくないので、２人連れて行くという選択肢もない。となれば俺が１人で行ってくるのが良さそうだ。

「俺が１人で行く、と言うのは大丈夫か？例えば従者が必要とかは？」

「いや、補給部隊は一纏めだからな。飯のなんかは専門の連中がやるし、天幕の設営もそうだ。エイゾウは露天になるが火床や金床なんかの設置とさっき言った修理だけが仕事だな。」

「なるほど。それじゃあ、やること自体は本当に着いていって直すだけなんだな。」

「ああ。」

「最後に確認だが、軍はどこのもので、何をしに行くんだ？」

「先に何をしに行くかを答えよう。魔物の討伐だよ。」

「戦ではないのか。」

「時々小競り合いはあるが、４０人超を引き抜いて派兵しないといけない戦場は今のところこの国にはないよ。次にどこのものか、だが。」

　カミロはそこで一旦言葉を区切った。

「エイムール伯爵家だよ。国王から兵士を預かって、討伐隊を編成して赴くことになった。」

　ディアナが少し息を呑んだのがわかった。なるほど、マリウスか……。

「エイムール伯爵家は元々、魔物討伐で名を馳せて爵位と家名を貰った家柄でもあるし、相続についてはひと悶着あった後だからな。侯爵が一度は問題なしとしてはいるので、表立ってなにか問題が起きるということはないが、ここらで実績をあげておいたほうが後々面倒も起きにくいのさ。」

「なるほどねぇ。」

　こう言う話は一介の鍛冶屋で、世間と隔絶して暮らしている俺のところには入ってこないし、実際には貴族の家の出でもなんでもないから、解説してくれるとありがたい。にしてもマリウスはまた七面倒な話になってるんだなぁ。

「そう言うことなら、喜んで参加させてもらうよ。」

　今度はディアナが少しホッとした表情を見せた。彼女は俺がかなりの剣の腕前を持っていることを知っている数少ない人間の１人だからな。何かあったら俺がいる、てのが安心できるポイントなのだろう。

「そう言えばいつからなんだ？」

「来週の納品の後にそのまま都に行けばいいと聞いている。うちから馬車を出してやるよ。」

「そうなのか。もっと急ぐのかと。」

　下手したら今日からと言われる可能性もあるとは思っていた。

「まぁ編成とか最低限の訓練とかあるだろうからな。」

「ああ、そりゃそうか。」

　マリウスも小隊レベルとは言え、指揮なんて経験は殆ど無いだろう。少し前から準備を進めていたとしても、よほど危急でない限りはそれなりの準備をしてから行くのがいいに決まっている。

　そして危急でない魔物討伐なら、おそらくは寄越された兵士もほとんど新兵同然だろう。これで上手くいけば指揮経験のある貴族と実戦経験のある兵士が手に入るし、万が一があっても国としては立て直しのきく範囲だからな。その場合はエイムール家としては中々の痛手ではあるだろうが。

「まぁ、話はわかった。準備はしておくよ。」

　俺の基本的なミッションは勿論従軍しての修理だが、裏のミッションはマリウスを何が何でも生きて連れ帰ることだ。どうしようもない場合もあるだろうとは思うが、その場合でもなるべく生きて連れて帰ってくることを最優先目標としたい。そのためには、兵士たちに万全の装備でいてもらうことだ。それもなるべく一般モデルの範疇で。高級モデルは若干の魔力要素が絡むし、流石に俺でも時間はかかるからな。

　従軍の話がまとまった辺りで、番頭さんが袋を持って戻ってきた。

「今日買いこむのはいつもと同じでいいんだよな？」

「ああ。来週は２週間分用意して欲しいところだが。」

「じゃあ、今日の払いはこれだ。」

　カミロは番頭さんがもってきた袋をそのまま俺に渡す。持った時に重かったので確認してみると、ロングソード５５本分から今日買った品物の分を差し引いたにしてはやたらに多い。

「やたらと多いみたいだが？」

「急がせた分の料金と、彼から"あの時"の迷惑料込みだよ。その分は彼から貰える事になってるから気にすんな。」

　特急料金と、家宝を打った時に少なかった分か。これ戻すとまたややこしいことになるんだろうな。

「わかった、じゃあありがたく。」

　俺は袋を受け取ると、カミロの店を後にするのだった。

## 出立

2019年1月2日

　帰ってから６日間、俺達は至って普通に過ごしていた。いつもの通りのスケジュールで製作をしたり、狩りをしたり、飯を食ったりだ。なのでいつも通り１週間分の数を作って終わっておく。効率の良い作り方は分かったが、別に必要のないときまでそうする必要はないしな。

　前にも１度それなりの期間家を空けたことがあるし、みんなの反応的にはお父さんがちょっと出張してくるくらいの感じである。特にやたら心配したりとかはない。

　納品をする日の朝、いつもの通り納品物を積み込んだあと、愛用の金槌や念の為の干し肉、包帯代わりの布切れ（一応煮沸消毒済み）なんかを愛用の背負い袋に詰め込んで、納品後の出立にも備える。一通りは向こう持ち……前の世界で言えばアゴ、アシ、マクラ付きではある。そうは言ってもレベルがぜんぜん違うが。あとはギャラの問題だが、これは向こうで直接マリウスに交渉できればと思う。

　いつも通りに街に向かう。森の中も街道も十分に警戒をしながら進む。特に何事もなくカミロの店に着くことが出来た。毎度特筆すべき事は起きない（鹿や猪に出くわすがすぐに向こうが逃げたり、こっちが避けたり、街道で隊商と出会ったりと言ったくらいのことはよくある）が、こう言うのは警戒を怠った途端に問題が起きるものなので、いつであっても警戒は怠れない。

　カミロの店に着いた後も基本的には普段どおりだ。納品物の確認と購入物の確認くらいだが、今回は俺が遠出して次の納品には来ないから、購入物は１週間分ではなく２週間分になるのが大きな違いではあるが。一通りのやり取りが終わったら、いよいよ出発だ。馬と粘土についてはまた今度になる。おそらくは早くても２週間後だろう。どのみち今もらってもな、と言うところではある。粘土の在庫については、ナイフメインで作るように言ってあるから、なんとかもつだろうし、万が一無くなったらナイフだけでもいいとは言ってある。

「それじゃあ行くか。」

　話が終わるとカミロが促す。

「そうだな。じゃあ行くか。」

　全員で部屋を出て倉庫の方に行く。荷物を積んだうちの荷車の前に、カミロの店の荷馬車が前に馬を２頭、後ろにうちの荷車を繋いだ状態で置いてあった。

「途中まではうちの馬車で引くよ。都の帰りにそこそこの荷物載せていくから、これくらいなら平気だろ。」

　とのことだったので、遠慮なくお言葉に甘えておくことにする。俺たちは全員自分たちの荷車に乗り込んだ。程なくして連結馬車は出発する。ガタゴトと揺れながら、いつもより遥かに高い視線で街中をのんびりと進む。まだそんなに速度がないのは重いというよりは、まだ街中なのでスピードを出すと危ないからだろう。

「やっぱり馬が牽いてくれると便利だな。」

「そうですねぇ。」

　のんびりと変わりゆく町並みの風景を見ながら俺がそう言うと、リケが返してきた。馬を調達するということをカミロに話した後、そう言えば御者を忘れてたなと思っていたら、リケが多少扱えるらしい。実家の工房で納入に行く際にはそこそこの大きさの馬車を使っていたらしく、たまにリケが御者をしていたそうだ。家で馬の世話もしていたらしい。

　よく考えれば、複数の家族が総出で鍛冶仕事してたら、納入もそれなりの数になるわけで、いかにドワーフが力持ち揃いでも荷車を自分達で引くのは効率が悪いだろう。荷馬車を使うのが自然である。なので、とりあえずは馬が来てもひとまずは慌てなくても済みそうだ。

　街を出る時に顔見知りの衛兵さんに手を振って挨拶すると、向こうも手を振ってくれた。今日もまだハルバードではないが、おそらくは討伐部隊のほうであんまりこっちに手が回ってないんだろう。それも合わせると、さっさとカタをつけて帰ってこられるように俺も積極的に協力したいところだ。

　街道に出ると馬車の速度が上がる。急なカーブなどはないので、思ったより速い速度だ。少なくとも歩く速度よりはかなり速い。

　前に都から帰ってくる時に乗った時は荷がほとんど俺（とディアナ）だけだったから速かったのだろうと思っていたのだが、それよりかなり重くても、関係なしに早く進むことができるようだ。森の中ではこの速度は出せないだろうが、それでも楽だし速度も早いだろう。もっと早くに導入しておけばよかったな。

　いつもよりかなり早い時間に森の入口に到着した。うちの面々とはここで一旦お別れだ。これから１週間ほどについて再確認したら、軽くハグをして「行ってきます」だ。別に今生の別れでもないしな。うちの荷車を分離したカミロの荷馬車に乗り込んで、振り返ると森の入口でみんなが見送っていたので、軽く手を振っておいた。

　引く荷がだいぶ軽くなった馬たちは意気揚々と街道を都に向かって走る。都から帰ってきた時は荷物も少なかったので１頭立てだったが、今回は２頭立てだからというのもあるのか、あの時と比しても速いように思う。前の帰りに見た景色がややエキサイティングな流れ方をしているし。

　そして、ひょっとしたら二度と見ることはないと思っていた都の外壁と、その向こうに一回り大きな壁のようにそびえる山々を見ながら、俺は再び都に入るのだった。

## 合流

2019年1月3日

　しばらくぶりに都に来ると、やはりその活気に気圧される。前に来たときと同様、人数自体もそうだが、種族の数が街とは段違いだ。街だとドワーフやマリート、獣人がせいぜいだが、リザードマンもいるし、今回は普通の人間の倍はあろうかと言う身長の人がいたので、カミロに聞いてみたら巨人族だった。都でも見かけるのは珍しいそうだが、別におかしい話でもないらしい。

　エルフは街でも都でも見かけないが、これはリディさんが言っていたように、魔力を摂取する必要があるので、魔力の豊富なところ以外にはあまり行かないからだ。

　そんな人々が道を行き交っている。他所の大都市でどうなのかは知らないが、この都では種族が何かは気にされない。宿なんかでは、椅子やベッドの都合があるから多少は考慮されるだろうが、逆に言えばそれくらいなもので、少なくとも往来をはばかるような状況では全く無い。

　技術的な面ではともかく、そんなところはこの世界では随分と進歩があるように俺には思えるのだった。

　都の大通りを通り抜けて、外壁より一回り小さい壁にある門に向かっていく。この壁は最初にこの都が出来た時の外壁を補強したものらしい。街の方にある壁と似たようなものか。街の方にある柵が壁になると都に近くはなるようには思う。

　門番にカミロがおそらくエイムール家出入りの証を見せるとあっさり通され、石畳に舗装された都の内街を荷馬車が行く。ここに来るとさっきまでの喧騒は嘘のように無くなっているが、それでも活気が無いわけではない。静かなりの活気というものがある。ゆっくりと街中を荷馬車は進んで行き、やがてテントの並んだ広場に到着した。なるほどここが駐屯地か。ここに集められた兵士たちはずっとここにいるわけじゃないからな。

「それじゃあ、俺はここまでだ。こいつを持っていくといい。」

　俺を降ろしたカミロが紙を出しながら言う。ざっと見ると今回の討伐に従軍する鍛冶屋であって、エイムール家が招聘したという証明みたいなものが書かれている。これを受付かなにかに見せればいいのか。

「ありがとうな、助かったぜ。」

「いいってことよ。」

　俺とカミロは手を振って別れた。ここからはマリウスがいるとは言え、別に軍師でもないからつきっきりではない。輜重隊と一緒なのだろうから、その面々とは仲良くしておきたいものだな。

　駐屯地の衛兵にカミロから貰った書類を見せる。衛兵は受け取った書類に目を走らせると、近場の兵士を呼んだ。

「ここで少しお待ち下さい。」

　呼ばれた兵士は俺にそう言った。やけに畏まっているが、多分エイムール家直々の招聘であると言うのが効いてしまっているようには思う。見た目どう見ても街のオッさんのはずなんだけどな。待てと言った兵士はそのまま走り去っていく。後には衛兵と俺が取り残された。

「貴方も今回の討伐隊には参加するんですか？」

「ええ。補給部隊の護衛としてついていくことになっています。」

　若い衛兵はやや緊張した面持ちで俺の質問に答える。俺も何気なく聞いてしまったが、こう言うのってあんまり答えちゃいけないんじゃなかろうか。新兵なんだろうなぁ。話しはじめてしまったから、このまま話すか。

「なるほど。書類にもあったと思いますが、私は補給部隊で皆さんの武器や防具を修理することになったエイゾウと申します。」

　護衛の人なら顔を合わせる機会も多いだろう。俺は自己紹介をしておいた。

「私はデルモットと言います。お見知りおきを。」

　デルモットさんは優雅な仕草で一礼した。どっかの貴族の次男坊か三男坊、ということなのだろう。これで名をあげられるといいな。

　その後もちょくちょく取り留めもないような話をした。街のオッさんに見えるが、なんかそこそこ身分の人かと思ったらしい。職人でも貴族お抱えだったりすると、爵位こそないにせよ、なかなかの身分だったりはするらしいからなぁ。俺はお抱えと言うよりは、ただの御用達と言うか、納入業者くらいだと思っているので関係ないし、くれると言っても身分はいらない。色々なしがらみにかかずらうのが面倒くさい。その手間暇で新しい武器なんかを作っていたいのだ。

　マリウスはここで兵士たちと寝食を共にしているらしい。「私もかつては諸君と同じ一兵卒だった」と言うのが酔った時の口癖だ、とデルモットさんは笑っていた。この様子なら人心掌握は上手くいってそうだな。

　ややあって、「待て」と言った兵士が戻ってきた。

「討伐隊隊長が会いたいとおっしゃっております。」

「ああ、じゃあお伺いいたします。」

　俺は自分の方から向かうことにした。伯爵閣下がこんな駐屯地の入口に出迎えとか、どんな鍛冶屋だよって話でしかないからな。ただ、場所は分からないので、俺は案内を頼んで、兵士の人についていく。

　ついていった先にあったのは、他よりも豪華な天幕だ。

「隊長、お連れしました。」

「入ってもらえ。」

「かしこまりました。どうぞ。」

　もはや懐かしい感じもする声がして、兵士さんに促されて、俺は天幕の中に入った。

## 出征前日

2019年1月4日

　駐屯地の中でも豪華な天幕に入ると、見知った顔が２つあった。もちろん片方はマリウスだ。そしてもう片方はマリウスの同僚氏である。二人共なかなかに豪奢な服を着て、俺の高級モデルのショートソードを佩いている。天幕の中には他の人間はいない。

「よく来てくれたな、エイゾウ。」

　マリウスは右手を差し出した。俺はその手を取る。

「なに、実入りのいい仕事だって聞いたからな。」

　俺は笑いながら言った。伯爵に対するには気安いが、俺の他には同僚氏しかいないし、マリウスの態度から多分ある程度は話してあるんだろう（流石に家宝を新造したとは言ってないと思うが）と推測してだ。

「そちらもお変わり無いようで何よりです。」

　マリウスとの握手を終えた俺は同僚氏に向き直って言った。

「ああ。久しぶりだな。」

　同僚氏も俺に右手を差し出した。俺はその手を取りつつ改めての挨拶をする。

「エイゾウと申します。ご存知とは思いますが、鍛冶屋をしております。」

「俺はルロイだ。今はマリウスの副官をしている。改めてよろしくな。あと、俺にもそんなに丁寧にしなくていいぞ。立場的にはそう変わらん。」

「では、遠慮なくそうしよう。」

　ルロイの許可を得たので、この３人の時には気軽に接することにした。元々顔見知りだし、お互い気楽な時を知っているからな。

「それで、今回は修理のみということだったが、それで正しいか？」

　俺はマリウスに尋ねる。

「ああ。道中は仕事が無いだろうが、向こうについてからは傷んだ武具の修理を頼むことになる。」

「報酬は？」

「遠征中の飯がこっち持ちなのと、普通の兵士の遠征時の手当、それと武具を１つ直すごとに歩合で報酬を出す。」

　次に答えたのはルロイだ。

「ほほう。」

　悪くない条件である。普通に仕事するよりは稼げないと意味がないのは、俺であろうとなかろうと関係ないから、こう言う条件なんだろうな。俺だと直すのも早いだろうから、歩合も一般的な鍛冶屋より多く貰えそうなのが普通とは少し違うところだ。

「直した数の勘定はどうするんだ？」

「補給部隊付きの文官が行う。補給物資の出入りはそいつが担当してるからな。」

　今度はマリウスが答える。

「なるほど、了解した。最後に、出発はいつだ？」

「ちょうど昨日に一通りの訓練を終えたところだ。今日は１日休みにしてある。」

　それで訓練なんかの音が聞こえなかったのか。

「なので、明日ここを発つ。」

「わかった。」

　これで事前の確認は完了だ。後はもう出発を待つのみか。

　マリウスが兵士を１人呼び、俺を天幕に案内するよう言いつける。俺はその兵士に恐縮しながら、他の補給隊と共同生活を送る事になる天幕に送り届けてもらった。

　補給隊天幕は中々に大きかった。近くには馬車と馬が別々に繋がれている。少し離れたところに簡易かまどがしつらえてあり、蒸気を立ち昇らせていた。

　俺はここまで案内をしてくれた兵士にお礼を言って、先ずはかまどのところに向かう。そこには恰幅のいい口髭のオッさんが２人の若者と一緒に、鍋と格闘していた。

「補給隊に招聘された鍛冶屋のエイゾウです。どうぞよろしく。」

　邪魔になるかと少し心配しながら大きめの声で声をかける。

「おう！俺はコック長のサンドロだ！あっちがマーティンとボリス！飯は俺たちが面倒見てやるからな！」

　俺の心配は杞憂だったようで、サンドロが若い方の２人――背が高いほうがマーティンで低いほうがボリス――を地鳴りかと思うようなデカい声で紹介すると、２人は鍋を混ぜながら会釈した。俺はパタパタと手を振って返す。

「あっちに馬番のマティスがいるぞ！」

「わかりました！ありがとうございます！」

　やはりデカい声で教えてくれたので、俺も負けじとデカい声で返し、馬のいる方に向かった。

　その辺りには馬が何頭も繋がれてあり、中々の喧騒だ。そんな馬たちの間を背の高い男がのそのそと言った風情で歩き回っている。俺は手を振って気がついて貰えるようにした。今度はデカい声だと馬がびっくりしそうで、かわいそうだしな。

　俺が手を振っているのに気がついた男は、やはりのそのそという感じで近づいてきた。

「すみません、お仕事中に。補給隊に招聘された鍛冶屋のエイゾウと言います。」

「これはご丁寧に。皆さんの馬車の管理をします、マティスです。今は馬たちの様子を見ていただけですから、お気になさらず。」

　背が高くてなかなかのイケメンだが、若干口調が間延びしていて、のんびりした印象をうける。

「ここには騎士さん達の馬はいないのですか？」

「騎士の方々は専属の馬番がいますので。」

「ああ、そりゃそうですよね。」

　よく考えたら当たり前だった。一定以上の身分の人達は色々と専属がつく。マリウスも、本来は料理人や鍛冶師なんかも専属で付いてもおかしくないのだが、伯爵家の三男坊とは言え衛兵だったからか、みんなと同じがいいと言っているのだそうだ。流石に小間使いと馬番だけは本当に最低限の体面もあって専属らしいが。

「文官の方は天幕にいらっしゃるんですかね？」

　俺がマティスに聞いてみると、

「ああ、あの方は今日は自宅に戻られているかと。」

「そうなんですか？」

「ええ。兵士や我々と違って、事前にここに留まる理由があんまりないですから。」

「それじゃあご挨拶は明日ですねぇ。」

「そうなりますね。」

　マティスに一時の別れを告げて、俺は天幕に足を向けた。

## 遠征開始

2019年1月5日

　天幕は大きかったが、中に人はいなかった。物も殆どないが、明日出発なので外の馬車に積み込んであるんだろう。荷物を下ろして、一旦ゴロリと横になる。長いこと馬車に揺られていたので、腰とケツに来ている。明日から３日間はほぼ馬車だという話だし、体は若返っているとは言えども、これは覚悟していたほうが良さそうだ。

　暇を持て余しそうだったので、持ってきたナイフで落ちていた木を削って像を作って暇つぶしをする。一応ギリギリ生産のチートが働くのか、１時間ほどして、なかなかいい感じの女神像が出来た。俺の荷物の上に鎮座させて、遠征の無事を祈っておいた。

　そんなことをしている間に、ちょうどいい感じに夕食の時間である。補給隊天幕近くにワイワイと兵士が集まって、食器を片手に列を作っている。俺もボリスから木のお椀を受け取ると列に並んだ。

　列を進んでいくと、サンドロとマーティンが鍋からスープを椀によそい、パンを渡している。スムーズに列は進んでいき、俺の番になった。

「おう、アンタか！しっかり食ってくれよ！」

　サンドロがデカい声で挨拶しながらたっぷりと椀にスープを盛ってくれる。

「ありがとう！」

　俺は笑顔でスープとパンを受け取った。明日の朝食からしばらくは硬いパンだが、今日はまだそんなには硬くない。これから１週間は硬めのパンが続くようなので、一時の食い納めではある。

　兵士たちが集まって座っている辺りに俺も向かい、適当に腰を下ろして食べ始める。めちゃくちゃ美味い、と言うわけではないが、特にマズいということもない。俺が家で作っているスープに味も近いが、うちの方が材料とか調味料が高級な分、少し美味いようである。それでも限られてるであろう材料でここまで美味い料理が食えるなら、討伐隊に参加できてよかったと思う兵士も多いことだろう。

　明日から移動先までは１日２食だと言うし（休憩はある）、移動中はスープの類ではなく、タレのようなもので煮込んで戻した干し肉を、パンに乗っけたものが主食になる。移動中はかまどの用意と撤去が大変だし、食器洗うのも手間になるからだろうな。

　飯を食い終わったら食器を戻す。ボリスが回収を担当していた。

「ご苦労さん、大変だな。」

「なに、これが仕事でさぁ。２年前の戦についてった時はもっと大変でしたぜ。」

　食器を返しがてら俺が声を掛けると、ボリスは笑いながらそう答えた。背は低いが、体つきがやたらガッチリしていて、街道で出会ったら確実に警戒するであろう風貌だ。「また天幕でな」と言い残して俺は天幕に帰った。

　日が落ちたら、駐屯地では見張り担当以外はさっさと寝てしまう。補給隊は見張りを言われることはないから、全員さっさと寝ることになる。仕事が特殊だしな。俺もあやかることにして、仕事を終えて天幕に戻ってきたサンドロやマティス達と一緒に寝た。どこでも寝られる人間でよかったと思う。

　翌朝、簡単に身支度を整えたら、なるべく早く朝食を済ませる。朝食は昨夜と同じスープに、硬いパンである。これはスープに浸して柔らかくして食べるが、浸さないと食べられないほど硬いわけでもない。焼いてそんなに経ってないからだろうか。ほとんど流し込むように食べ終えた。この辺りは前の世界で仕事が忙しかった時の経験が活きたな。あんまり活かしたくない経験ではあるが。

　朝食の時間が終わると、バタバタと天幕やかまどが片付けられ、どんどん荷馬車に積み込まれていく。何十人もの兵士が協力して動いて、小一時間ほどで全ての積み込みが終わった。その合間にマティスが馬車に馬をつないでいく。御者は兵士たちがそれぞれ担当するようだ。俺やサンドロたちも補給隊に割り当てられた馬車に乗り込む。

　そこへ、小柄な女性が慌てた様子で飛び乗ってきた。

「ぎ、ギリギリで間に合いましたです……」

　息も絶え絶えになっているが、間に合ったなら良かった。俺がそう思っていると、隣りに座ったマティスがボソッと

「アレがそうだ。」

　と言った。あまり多くは話していないが、マティスはぶっきらぼうかつ端的な物言いをする。この場合は「昨日話した文官は彼女だ」と言う意味なのだが、圧倒的に言葉が足りてない。分かるからいいか……。

　俺は息も絶え絶えな女性に近づくと、声をかけた。

「大丈夫ですか？水を飲みます？」

「あ、はい。ありがとうございますです。」

　女性は俺が差し出した水筒を受け取って２口ほど飲む。一息ついた頃合いを見計らって、俺は再び声をかけた。

「私は補給隊に鍛冶屋として招聘されました、エイゾウと申します。どうぞお見知りおきを。」

「あ、ご丁寧にどうもです。私は補給隊付き文官のフレデリカ・シュルターと申しますです。鍛冶屋と言うことは、修理をなさるです？」

「ええ。そのように伺っています。」

「修理が必要な武具は一旦私に申告が来ますです。来たものについて、エイゾウさんに修理を依頼しますので、それの修理に集中していただけたら助かりますです。」

「わかりました。」

　修理は申告制なのか。まぁ、しょうもない修理をしてしまうとその分俺は儲かるが、出費はかさむしな。しょうもない修理にかかずらうのもストレスが溜まるものではあるので、予めシャットアウトしてもらえるなら俺も助かるしな。

　こうして主な補給隊メンツを乗せた馬車はゆっくりと走り出し、いよいよ遠征が始まったのだった。

## 遠征の途上

2019年1月6日

　討伐隊の乗った馬車は都のメインストリートを通って都の外に出る。アピールの意味もなくはないが、単純にデカい馬車が通れるのがこの道くらいと言うだけだ。ちらりと馬車の外を見ると、いつもどおりの様々な種族が称賛とも侮蔑ともつかない目で、沿道から隊列を見送っている。帰ってきたときには拍手と称賛の中、帰って来られるといいのだが。

　街へ行くのとは違う方角の街道を馬車は進んでいく。乗り心地はすこぶる悪い。まだ若いマティスやマーティン、ボリスはマシなようだが、俺とサンドロのオッさん組は腰とケツにきてボヤいているし、フレデリカも尻が痛いとボヤいている。あんまり触れるのは、この世界でそんな概念があるかはともかく、セクハラになるので俺は触れないでおいた。後でクッションかなにか用意してやるか。

　太陽が中天を過ぎる前、１度休憩が入った。俺たちはいそいそと馬車から降りて体を伸ばす。腰のあたりからゴキっと言う音がした。なかなかに辛い。近くに川があるので、水はめいめいで汲んでくる。川には兵士達も大勢水を汲みにきている。下流の方では顔を洗うものもいた。

　上流の方にはマリウス達の姿も見える。馬車旅が辛いのは鎖で客室を吊った懸架式の馬車である彼らも変わりないようだ。しきりに腰のあたりをさすっている。板バネだとマシだったりするんだろうか。前の世界と、この世界を比較すると先の技術だから普及させるのは本意ではないんだよな。

　馬車に戻って荷物から干し肉を切り出して齧る。俺は今日も体を動かすこともないし、こう言うのをゆっくり噛んで空腹を紛らせれば、夕食までは十分もつだろう。馬車の外では他のメンツも同じようにしていた。が、今馬車にいるフレデリカ嬢は何も口にしていない。パラパラと今回の補給品の目録だろうか、それを見返している。

「何も食べないのですか？馬車酔いする可能性はありますが、なにか口にしておいたほうがいいですよ。腹が減りすぎると頭が回らなくなりますし。」

「持って来るのを忘れましたです。」

　俺が尋ねてみると、事も無げに言うフレデリカ嬢。

「こう言う仕事は初めて？」

「はいです。普段は税の徴収量の計算とかをしてますです。」

　普段はデスクワークか。まだ若いようだし、そこまで気が回らなかったのだろう。

　俺は干し肉をもう１切れ切り取って、フレデリカ嬢に差し出した。

「若い人はちゃんと食べないとダメですよ。」

「いえ、そんな、エイゾウさんの消費予定が狂うです。」

「もう切り出しちゃいましたし、余分に持ってきているので大丈夫ですよ。どうぞ、遠慮なく。」

　フレデリカ嬢はそれでも渋っていたが、再び強く薦めると「じゃあ」と口にした。ゆっくりと噛んでいる様子がリスのようである。しばらくはモゴモゴとたべていたが、やがて目を見開いた。

「干し肉なのにおいしいです！」

「我がエイゾウ工房の特製ですので。」

　感嘆の声をあげるフレデリカ嬢にニッコリと笑って返す。実際、今回持ってきた干し肉は塩の他に胡椒もきかせてあるし、肉は黒の森産樹鹿肉の特製だ。売ったら結構な値段になるだろうが、うちは鍛冶屋なので自家消費のみで販売する予定は全く無い。嬉しそうに干し肉を齧るフレデリカ嬢を眺めながら、俺も自分の分を食った。

　１時間弱の休憩を終えたら、再び馬車に乗り込んで移動だ。気が重いが夕刻までの辛抱である。半日も過ぎて、お互い最初の緊張が無くなってきたのか、会話も増える。今はお互いの仕事の話で盛り上がっている。サンドロのおやっさん達は都で結構大きな食堂をやっているらしい。そっちに行けばもっといいものを食わせてやると笑っていた。１週間も店を休んで平気なのか聞いてみたが、しばらくは他の店から手伝いが来てくれるそうだ。おやっさんの人望が伺える。

　マティスはエイムール家の何人かいる厩番の１人らしい。普段は今日マリウスが乗っている馬の面倒も見ているそうだ。今回の遠征での専属はマティスの上司にあたる爺さんがやっているらしい。マティスが来る前からいたから、そっちがやるのは当然だろうと、いつもの間延びした口調で言っていた。

　フレデリカ嬢はさっきも自分で言っていたように、税関連の仕事だ。徴税吏ではなく、集まった税のあれこれの仕事だそうだ。完全にデスクワークだな。ここには討伐隊編成の話の時に上から指示されて来たらしい。指揮系統はマリウスの下だが、管理は国が行う。討伐隊の資材は国から支給されている。国家の資材の出納を行うから、指揮官が直接管理するのは不都合があるのだろう。

　俺は辺鄙なところに住んでいる鍛冶屋とだけ言った。カミロの店に品を卸してて、その伝手でここに来た、とも言ってある。流石にマリウスから直接招聘されたと言う話をしたら、ただの鍛冶屋ではなくなるからな。

　日が沈むよりかなり前に野営に適したところが見つかったので、今日はそこで野営を行うことになった。天幕やかまどを積んだ馬車から兵士たちが荷物を下ろしていく。かまどの設置にはサンドロのおやっさん達も関わるし、食材の消費の管理はフレデリカ嬢が、１日馬車を引いてお疲れの馬たちにマティスが飼い葉や水をやっていて、それぞれ忙しそうである。

　手持ち無沙汰なのは俺だけだった。なにか手伝おうかと思ったが、下手に手を出せば邪魔になりそうなので、飼い葉を食べて水を飲み終わった馬と共に

「暇だな……」

「ブルル……」

　一緒にその光景を眺めていた。

## 到着

2019年1月7日

　やがてあちこちに天幕が並び、かまどからは煙が立ち上る。篝火台に薪が積まれるが、まだ日が落ちていないので着火は先だ。天幕を張り終えた兵士達はメシが出来るまで一時の休憩だ。

　ここは水場が近くにないので、メシに使う分と補給する水は樽に積んでいる分で賄うことになる。明日の昼休憩はまた水場の近くで行うらしいので、減った分はまたそこで補給だ。どれくらいの水を使ったのか、フレデリカ嬢が記録している。野営地に着いてからは、フレデリカ嬢はあちこち走り回ってかなり忙しそうだな。

　総勢５０人ほどの兵士達と、１２日間分の食料、薪と３日分の水、かまどを含む調理器具、それに鍛冶仕事ができるセット、それらを運搬する馬たちの飼い葉を馬車で運ぶと考えると、かなりの馬車が動員されている事になる。

　戦争であれば、移動する兵士の数の桁が違うから、わざわざ馬車で兵士を運ばずに歩かせるし、ある程度は徴発などもするから割合で言えば馬車の数は減るのだと思うが、いずれにせよ兵站は大変だ。

　メシが出来ると長蛇の列ができる。こればっかりは解消のしようもない。俺たち補給隊は列がなくなってから向かう。サンドロのおやっさん達と一緒にメシを食うためだ。夕飯は干し肉を煮込んで戻したものを、硬めの皿状に焼いたパンに乗せたものである。パンは硬くはあるがガチガチというわけでもないので、そのまま食える。皿代わりと言うわけだ。ここには水場がないし、食器洗う水がもったいないからな。

　補給隊は護衛のデルモットさん達も一緒に和気あいあいとメシを食う。こう言うところで一緒の釜の飯を食って仲良くなっておくと、いざという時にお互い助け合おうって気になれるし、何よりメシは楽しく食うのが一番だ。なんだかんだと話をしながらメシを食い終わった。

　メシが終わったら日が沈むまでは自由時間である。俺はフレデリカ嬢に余っている布切れと針と糸がないか聞いてみた。すると、パタパタと荷馬車に歩いていく。歩き方もなんかリスみたいだな。全般的に小動物感溢れるお嬢さんである。俺も何となく和みながら後をついていった。

「こちらの荷馬車のものなら大丈夫です。エイムール家の資材で、自由に使っていいと言われてるのです。」

「なるほど。ありがとうございます。」

　俺が礼を言うと、フレデリカ嬢はペコリとお辞儀をし、パタパタと去っていった。

　少し探す手間はあったが、毛布と布切れ、針と糸も見つかった。予備や着ている服が破れた時に繕うためのものだろう。全て他にも予備があるし、戻せるようにしておけば問題なかろう。

　天幕に戻ると、布切れで袋を作る。戻せるように裁ったりはせずに、半分に折って両端を縫い合わせる。綿を詰めるわけではないので、縫い目は荒くてもいい。縫い合わせたら、裏返して毛布を詰めて、開いている口を縫い閉じたら、簡易クッションの完成だ。明日フレデリカ嬢にプレゼントしよう。女性は別の天幕だからな。迂闊にオッさんが近寄って、あらぬ誤解を受けてもつまらんし。

　日が沈んで篝火が焚かれた。今日はもう寝るだけだ。不寝番の兵士以外はみんな天幕に戻る。俺たちも例外ではない。さっさと毛布にくるまって横になると、思いの外疲れていたのか、すぐに睡魔が眠りの世界へ連れて行ってくれた。

　翌朝、日が昇る少し前に目が覚めた。コック組はとっくに起きているようだ。よく働くな。俺ものそのそと起き出して、自分の荷物から水筒を取り出すと、一口飲んで天幕の外に出て、体を動かす。今日も一日馬車の中だから、積極的に体を動かさないとな。

　日が昇ると同時にメシが始まる。朝メシも補給部隊は全員でとる。今日の予定行程の話なんかをしながらワイワイととる。それが終われば全てを馬車に積み込んで出発する。俺たちも馬車に乗り込んだ。

「フレデリカさん。」

「はいです。」

「これをどうぞ。」

　俺は昨日作った簡易クッションをフレデリカ嬢に渡す。

「これは？」

「あー、尻の下に敷いてください。多分だいぶマシなはずです。」

「ああ、なるほどです。ありがとうございますです。」

　フレデリカ嬢はニコニコと受け取ると、いそいそと尻の下に敷いた。アレはむしろ俺に必要だったのではと思えてくるな。まぁ、いいか。

　クッションの上で機嫌よくしているフレデリカ嬢はますますもって小動物のようだ。その光景は馬車の中の面々を随分と和ませている。これだけでも作った甲斐はある。

　この日の昼休憩も前日と同じく水場の近くだ。馬車を降りる時にフレデリカ嬢に

「お尻の痛みがだいぶマシになりましたです。ありがとうございますです。」

　とお礼を言われた。可愛らしい子だし、素直に嬉しいな。作ったもので喜ばれると嬉しいのは、鍛冶仕事でもこう言うのでも変わらない。思わず頭を撫でそうになるが、なんとかこらえることが出来た。

　その後は目的地まで昨日と同じことの繰り返しだった。多くの武装した人間が行軍しているところを襲う野盗や獣はそうそういないだろうし、天候も特に崩れることもなかったからな。

　こうして３日目の夕刻、俺達は目的の洞窟そばの広場に野営を開始した。明日の朝からは陣地設営がはじまる。

## 任務開始

2019年1月8日

　昨晩は移動後だったので、あくまでここには野営の準備だけしたが、今日からはここが討伐隊の前線基地となる。なので、それに合わせて追加の設営が必要だ。

　居住空間としての天幕は野営の時のままで十分だが、指揮所として使う大きめの天幕が兵士達によって新たに設営されていき。別の場所には杭が打たれて、簡易の馬房のようなものが出来ている。

　そして、ここでの我が仕事場となる簡易の鍛冶場も作る。穴を掘って柱を２本立て、屋根代わりの布を貼った。三角形の斜辺が布、底辺が地面で、他が開口部と考えると分かりやすいかも知れない。レンガで火床を一番広い開口部の方に作る。フイゴの風がちゃんと送られるように、レンガを組まないといけないのが一苦労だな。助かったのは、鍛冶場の設営にも鍛冶屋のチートが有効なようで、どの辺りにどれを置けば効率よく仕事ができるかが"分かる"。あの家をなにかで放棄しないといけなくなった時に再建するためだろうか。

　天幕の設営を見てても、効率の良い設営とかは分からなかったので、あれは生産でも鍛冶屋でもないらしい。……当たり前か。

　今回は炉は置かない。あくまで火床で熱して直せるものまでで、それ以上の作業はしない予定だ。２週間とかそれ以上かかる場合には炉と鉄石を持ってきたほうがいいんだろうけどな。

　デルモットさんにも手伝ってもらって、金床を火床の近くに置く。後は炭の入った樽と水の入った樽を持ってくる。それに、ここまでの行軍で空になった小さめの樽３つを底を上にして、１つは金床の近くに椅子代わりに、もう１つはその椅子の側に道具置きとして、最後の１つは砥石台として置いておくと、だいぶ鍛冶場らしくなった。

　後は自分たちの天幕にある荷物から鎚とタガネ（特製になったやつだ）に、女神像を取ってきて、女神像を柱に棚を作って設置する。地面に置くのは流石に憚られる。

　道具置きに炭を火床に放り込むためのスコップ、ヤットコを立てかけ、上に家から持ってきた鎚とタガネを置いて、砥石を砥石台に設置すれば、エイゾウ工房出張所の完成だ。修理くらいなら幾らでも引き受けられそうである。

　出張所の様子を眺めていると、フレデリカ嬢がパタパタとやってきて、同じく出張所の様子を見て感嘆の声をあげる。

「わ、凄いです。どう見ても鍛冶屋さんです。」

「そりゃ私は鍛冶屋ですからねぇ。」

「ナイフとかハサミとか売ってもらえそうなのです。」

　フレデリカ嬢はニコニコと笑いつつ、書類に何かを書き付けながら冗談を言う。

「戦地価格なのでお高くなっております。」

「エイゾウさんはなかなかガメついのです。」

「へぇ、あっしはケチな鍛冶屋なもんで。」

　俺とフレデリカ嬢は笑いながら軽口をたたきあう。

「炭と水はなくなりそうになったら私に言ってくださいです。エイゾウさんが作業できる時間帯は指揮所にいますです。あと、来る前に言ったように、修理依頼は私が持ってくるです。それだけ修理して欲しいです。私を通さないものは報酬に入りませんので、注意して欲しいです。」

　じゃあ報酬度外視でいいなら、フレデリカ嬢を通す必要ないってことか。そう思ったが、おくびにも出さずに

「わかりました。」

　俺はニッコリとそう言った。

　出張所を開店したはいいが、当然まだ仕事はない。手持ち無沙汰なので、おやっさん達の調理ナイフでも研いでやるかと、陣地内を調理場に向かって歩いていると、革鎧を着たリザードマンとマリートの兵士が戻ってくるところだった。洞窟があるとか言っていた方角からだから、おそらくは偵察だろう。そのまま指揮所の方へ歩いていく。

　他の兵士達は伐ってきた木で柵を作ったりしている。流石にエルフや巨人族の姿はないが、リザードマンやドワーフの兵士達はこの討伐隊にもいる。柵を作る場所をドワーフの兵士が指示し、それを聞いて人間の兵士達が、木を組み合わせて柵を設置したりしている光景が目に写った。

　それを横目に調理場へ向かう。サンドロのおやっさんが包丁の手入れをしていて、２人の若い衆は見当たらない。――おやっさんと言ってはいるが俺の精神と歳はそんなに変わらなかったりする。ただ肉体の方は若返ってるから、それに合わせて呼ばないとな。

「やあ、おやっさん。」

「おう、エイゾウか。どうした？」

「いや、仕事場を作ったのはいいんだけど、当面は仕事がなさそうなもんで、そのナイフでも研いでやろうかと。」

「ああ、そりゃそうか。今日にも１回は出るつっても、まだ先だろうしな。戻ってくるまではお

「そうなんだよ。暇を持て余すのもなんだからさ。料理人の命だろうから、無理にとは言わないけど。」

「いや、そう言うことならお願いするぜ。俺のはもうほとんど終わっちまってるが、あいつらのがまだあるんだ。」

「そういや、あの２人は？」

「兵士さん達と水汲みに行ってるよ。」

「なるほど。」

　みんな忙しいんだなぁ。俺もそのうち忙しくなるんだろうか。俺が忙しくなるってことは、それだけ武具が損傷してるってことだから、良いことではないんだよな。それを考えると忙しくなるのも考えものだ。

「これとこれと、あとこれかい？」

　俺は３本の包丁を手にとって、おやっさんに確認する。

「ああ、よろしく頼むぜ。」

「ほいよ。小一時間で戻すよ。」

「おう。」

　包丁を手にブラブラと出張所に戻る。これ街中だったら完全に絵面がヤバいな。今でもそこそこヤバいが。

　その時、兵士達が集合しているのが見えた。踏み台でもあるのか、高い位置にマリウスの顔が見える。出発前に檄を飛ばしているんだろう。だとすると、ちょっと急がないと包丁研いでる最中に戻ってくることもあり得るな。

　俺はブラブラと散歩でもしているような歩みを止めて、そそくさと自分の作業場に戻るのだった。

## 出張所、操業開始

2019年1月9日

　包丁3本を抱え、慌てて出張所に戻ってきた俺は、砥石を水で濡らしてそのうちの一本を研ぎはじめた。手入れが行き届いていて状態は悪くないが、チート込みとは言え、プロとしての腕の見せどころだな。

　チートを使って、適切な角度で刃を研いでいく。最初は全体を軽く打ち直してやろうかと思ったが、時間が差し迫っている可能性もあるので、砥ぎだけに集中することにした。

　流石にチートでも刃の研ぎ直しだけで性能を向上させられる範囲には限度がある。まぁ、まな板を切ってしまうほどに仕上げてしまうと若い衆が困るので、そこまで性能を向上させる必要はそもそもないんだが。

　刃を研いだだけだし、元々手入れはされていたので、３本を処理するのにも思ったほどの時間はかからなかった。最後に水で流した後、布で拭き取って調理場へ戻る。

　途中で討伐隊が集合していたところを見たが、そこにはもう誰もいない。いよいよ討伐に向かったらしい。今日はどんな魔物がどれくらいいるのかを調べるための威力偵察だろうから、被害がほとんど出ないうちに戻っては来るだろう。あんまり油を売っている時間は無さそうだ。

　調理場に着くと、マーティンとボリスも戻ってきていて、水の入った樽を調理場に並べていた。サンドロのおやっさんは夕飯の材料を用意している。

「おやっさん、仕上がったぜ。」

「おう、ありがとよ。」

　俺は包丁をおやっさんに渡す。おやっさんは渡された包丁をじっと見ていたが、夕食の材料を手に取り、汚れをさっと落とすと鍋の上で切り始めた。見事な手付きで切られた材料は、ほとんど同じ大きさになって鍋の中に収まっていく。

「お見事。」

「それを言うなら俺の方だ。エイゾウ、お前良い腕してんなぁ。あいつらに使わせるのがもったいないぜ。」

「元々の手入れが良かったし、それに……」

「それに？」

「それが仕事だからな。」

「なるほどな！」

　おやっさんはガハハハと豪快に笑った。

「明日で良ければ見るよ。」

「おお、じゃあ頼まぁ！」

「あいよ。」

　俺はヒラリと手を振って調理場を後にする。後ろからおやっさんの「お前ぇらこいつを粗末に扱ったら承知しねぇぞ！」と言う怒鳴り声が追いかけてきていた。

　途中自分たちの天幕に寄ってから出張所に戻ってきた俺は、すぐに火床に炭を敷いて火を熾しはじめた。討伐隊が戻ってきて、依頼を受けてから始めても良いんだが、なるべく早く片付けてやりたいし、それに今日は今のうちに確認しておきたいこともある。

　炭に火が回り、十分に温度が上がってきたので、俺は天幕に立ち寄った時に持ってきた板金を１つヤットコで掴んで火床に入れる。何かあった時のために、少しだけ持ち込んでいたものだ。

　おやっさん達の包丁だと、作業を途中でほっぽって修理にかかるわけにも行かないが、これなら好きな時に作業を止められるからな。炭を余分に使うとは思うが、フレデリカ嬢に怒られたらその分は天引きしてもらおう。

　フイゴを操作したり、炭を追加したりと言った作業をしながら、板金を加工可能な温度まで熱していく。この辺、いつもの作業場でないことに加え、魔法が使えない不便さもあって、いつもどおりの時間とはいかず、時間がややかかってしまった。

　討伐隊が戻ってきていないかを気にしつつ、金床に熱した板金を置いて愛用の鎚で叩く。この辺りの作業はいつも通り行う。

　そう、いつも通り

　何度か叩いて材質的な均整が取れたので、俺はチートを更にフル活用して、今度は魔力の粒子を纏わせるようにしていった。

　すると、いつもよりもかなり薄くではあるが、性能の底上げには十分な魔力が槍の穂先に籠もっていく。

「なるほどね。」

　リディさんに聞いた魔力が澱むと魔物が生まれるという話と、近くの洞窟に魔物がいると言う話を合わせて考えれば、すぐに分かる話ではあったが、こうやって実際に作業すると実感できる。

「ここには魔力が満ちてるんだな。」

　俺はそうひとりごちる。更に言えば――と、ここまで思ったところで、人が来る気配を感じて、俺はヤットコで掴んだままの穂先を作業場の隅に目立たないように置いておく。

　やって来たのはフレデリカ嬢だった。後ろに２人がかりで樽を持った兵士がついてきている。

「エイゾウさん、この樽の中の武具の修理をお願いしますです。こちらが一覧になりますです。」

　フレデリカ嬢がピラッと書類を差し出し、俺は受け取って目を通した。ロングソードが数本欠けと曲がりが出ているのと、丸盾が２つほどだ。少しちょっかいをかけてすぐ戻ってきたって感じだな。これならさほど時間はかかるまい。

「承りました。」

　確認したので俺は返事を返す。

「では、よろしくお願いしますです。終わったら指揮所までお願いしますです。」

　フレデリカ嬢はペコリ、とやはり小動物を思わせる動きの礼をすると、兵士達と去っていった。弓とか使ってたら、矢の補充の計算とかいるから大変だよな。

　俺はフレデリカ嬢の苦労を思いながら、自分の作業に取り掛かるべく、樽の剣を抜き取って火床に突っ込んだ。

## 初日のお仕事

2019年1月10日

　火床に突っ込んだロングソードだが、加熱しないといけないと言うことは相当歪んでいるということだ。普通こう言うのはちゃんと直そうと思うと非常に時間がかかるものなのだが、今回はチートに頼ってしまうことにする。

　歪んでいるところだけを熱して、歪みを戻すのに必要な温度まで上げていく。しかし相当に歪んでいるな。どういう使い方したんだこれ。突き刺した後、抜けなくて馬鹿力でこじったとかだろうか。そうだとしたらドワーフか獣人、リザードマン辺りの仕業か。

　温度が上がったので、歪みを叩いて取っていく。こうやって直せるところまで温度を上げて柔らかくしてしまうと、再度焼入れしても元のようにはならないのだが、そこはさっき確認したことが活きてくる。

　叩いて直しつつ、少しずつ魔力を織り交ぜて、再焼入れした時に周りと同じ硬さになるように調整するのだ。その塩梅は勿論チートで掴んでやっていく。こうして一部にだけ多く魔力を纏った剣のその分を焼入れ、焼戻しをして磨くと、見た目にも性能的にもほとんど元通りのロングソードが復活した。

　ただ、切れ味が同じと言うだけで、同じ場所でこじったりした場合には当然ここだけ魔力が含まれているので、多少強度が増していることが分かるし、見る人が見れば補修に魔力を使ったことはバレるだろう。

　しかし、全体に魔力を入れてしまうと高級モデル以上にならざるを得ないからなぁ。今はこの補修で良しとしよう。

　他の歪みの少ないロングソードと、盾については熱したりせずにそのまま叩いて直す。盾は多少

　刃の欠けが大きめのロングソードは応急として研ぎだけ行うことにした。あんまり大きいなら鉄片を継いで直す必要があるかも知れない。普通ならやらないが、戦地での応急処置だから十分ではあろう。

　今回持ち込まれた中には無かったものの、大きな亀裂の入ったもの、折れてしまったものがあれば、それらは修理されずに廃棄となる。修理できるかどうかのチェックは俺が判断するので、今回はそこまでいった武具はなかったことになる。

　さっきの大きく歪んだやつも修復不能、としても良かったのだが、今回はさっきやった方法が上手くいくかの確認もあったので、こう言ってはなんだが「ついで」ではある。

　１つだけ言い訳をするなら、手早く修復する手法を確立しておくことで、最悪予備のロングソードが無くなってしまった場合でも、歪んだものを修復して使ってもらうことが出来るように、と言う狙いはある。……いやほんとに。

　一通りの作業が終わったので、預かっていた書類を持って指揮所に向かう。もうお日さまも今日の仕事を終えるために、最後の一仕事の世界をオレンジに染める仕事をしていて、その中を夜に備えて篝火を用意する兵士達がうろちょろしている。ちょっと急がなきゃな。飯も食いっぱぐれちまう。

　指揮書の天幕に入ると、マリウスとルロイ、他に何人かの兵士があれこれと話し合っていた。明日の本格的な討伐戦に向けての作戦会議を延々としているのだろう。

　片隅の簡易机で何やら書類と格闘しているフレデリカ嬢を見つけた俺は、書類をフレデリカ嬢に差し出した。

「今日の分は終わりましたよ。」

「さすがエイゾウさん、早いのです。」

「今日はものも少なかったですからね。」

　フレデリカ嬢は書類の一覧を指さしながら言う。

「ここにあるものは全部です？」

「ええ。修復不可能なものはありませんでした。」

「わかりましたです。後で兵士に取りに行かせますです。今日はお疲れ様でしたです。」

「それでは失礼します。」

　フレデリカ嬢に一礼して天幕を出ようとする時に、チラッとマリウスの方を見ると目が合ったので会釈をすると、一瞬だが珍しいものを見た、と言う顔をした。そりゃこう言うところで一介の鍛冶屋が伯爵に気安く「調子はどうだい？」とか言えるわけがなかろう。

　出張所に戻って、後片付けをする。パパっと片付けが終わってしまったので、どうしたものかと思っているところに、丁度よく兵士さんが直した武具を引き取りに来たので、「ご苦労さんです」と言って引き渡す。

　これで今日の仕事は完全に完了だな。おやっさんの所へ行って、飯食って寝よう。

　辺りには夜の帳が降りはじめていて、暗がりを篝火が照らす中、おやっさんのところ――つまり調理場の方へ行くと、チラホラと兵士の人達も遅めの夕食を摂っている。シフト交代のタイミングで食いに来てるのだろうか。

　補給隊も俺とフレデリカ嬢の他はもう食い終わったそうなので、フレデリカ嬢には悪いが先に頂いてしまうとするか。

　今日のメニューはやはり干し肉を煮込んだものではあるが、少し根菜やジャガイモっぽい芋などと煮込んだシチューに近いものであった。

　そう、芋である。うちの庭に植えて育ってくれれば大変に助かるであろう作物の芋。これは遠征から帰ったらおやっさんに仕入先を確認せねばなるまい。

　そう決意しながら、おやっさん達の作ったなかなかに美味いシチューを俺は頬張った。

## 2日目のはじまり

2019年1月11日

　おやっさんの夕食を食い終わって、食器を戻したらあとはさっさと寝てしまおう。明日が本格的な討伐なら、忙しいのは間違いない。早めに寝て英気を養っておかないと、３０歳の身体では体力が心許ないことになってしまう。

　自分たちの天幕に戻って毛布をひっかぶり横になると、思いの外疲れが溜まっていたのか、睡魔は早く訪れてくれた。

　翌朝、日が昇ってすぐくらいの時間に起きて軽く体操をしたあと、身支度を整えて調理場へ向かう。おやっさん達はもう既に朝メシの準備を終えて、俺達が食べに来るのを待ち構えていた。

「おはよう、おやっさん。」

「おう、おはよう！」

「おやっさんは朝から元気だなぁ。」

「おおよ！元気を分ける側がしみったれた顔してちゃあ締まんねぇからな！」

「プロだね、おやっさん。」

「あたぼうよ！」

　確かにこのおやっさんの元気さは見習うべきところがあるな。俺は朝飯のスープとパンを受け取って、簡易テーブルへ向かった。

　スープには具材がゴロゴロ入っていて、朝からしっかりした内容の飯だ。兵士とかはこれくらい食わないとやってられないだろうしなぁ。パンもこっちに来てから焼いたのか移動中に出ていたものと比較して柔らかい。昼ごろまでに忙しくなる可能性もあるから、俺もしっかり食っておかないといけないな。

　急ぎ気味に食べている兵士の人達を横目に、俺はゆっくりしっかりと食事を摂る。少々心苦しいところはあるが、年齢とやる仕事が違うから、その辺りは納得して貰うことにしよう。

　そうやって食べていると、フレデリカ嬢が朝食を持ってこちらへやって来た。

「エイゾウさん、おはようございますです。」

「フレデリカさん、おはようございます。」

　フレデリカ嬢は俺の向かいに飯を置くが、随分と眠そうである。

「眠そうですが、昨晩は遅くまで？」

「はいです。伯爵様が遅くまで作戦を練っておられたので、それに合わせて補給品の計算をしてましたです。」

　言い終わると、ふわぁと可愛らしいあくびをするフレデリカ嬢。

「それはご苦労様でした。ですが、あまり夜更かしはいけませんよ。若い女性の美容の大敵と聞きますからね。」

「ありがとうございますです。ですが、私が美容を気にしても仕方ないです。」

　フレデリカ嬢はそう言うが、マリウスのとこのパーティーで見た貴族のお嬢様と比べても普通に可愛らしいのだし、今みたいな野暮ったい服じゃなかったらほっとかない男は多いと思うけどな。

「フレデリカさんは、もっと自信を持っていいと思いますけどね。貴族のお嬢様と比べても」

　俺はスープを口に運びながら言う。

「いえそんなです……」

　フレデリカ嬢は口ごもる。照れているのかどうかは判別できない。朝から気まずいのもなんなので、話題を変えよう。

「そう言えば、今日は修理が多くなりそうなんですか？」

「うーん……」

　フレデリカ嬢がスープを掬った木製の匙を口に咥えたまま考え込む。視線は正面だが、焦点は俺を見ていない。

　これは彼女についてこの数日で分かったことの１つで、考え事をする時はどこか遠くを見たようになるのが特徴なのだ。

「おそらくは増えると思いますです。ある程度の”損耗”は覚悟する、と伯爵様は仰ってましたです。」

「なるほど。」

　と言うことは数が多いか、強敵がいたかのどちらかか。昨日はそれがある程度まで分かったところで戻ってきたのだろうな。

　フレデリカ嬢が考え込んでいたのは、どこまで鍛冶屋に話していいか考えたのだと思うが、補給計画の一環として教えてくれている、あたりだろうか。

「でしたら、炭をもう２樽ほど持ってきていただいた方が良さそうですね。火床もあれでなかなか炭を使いますので。その状況だと手助けを頼める状況でない可能性もあります。」

「わかりましたです。手配しておきますです。」

　フレデリカ嬢は虚空を見上げて、「炭を２樽エイゾウさんのところにです」と３度呟いた。これが彼女の癖の２つめで、紙に書いたりせずに大事なことを覚える時は、こうやって３回口に出して覚える。

「お手数ですみませんが、よろしくおねがいしますね。」

「もちろんです。」

　フレデリカ嬢は今日も小動物のような微笑みで俺に応えた。

　その後は取り留めもないような話を２～３して飯を終わる。結局、彼女がなぜ今回補給品回りの文官に抜擢されたのかは聞いてないな。実戦経験がないと言う話だったので、やはり実戦経験を積ませるのが目的だろうかね。

　朝飯を済ませて出張所へ向かう途中、フル武装の兵士達が集合しているのを見かけた。出発はまだ先なのだろう、整列はしていない。と、その中に昨日は見かけなかった姿がある。細身で耳の長い男たち――エルフである。

「やっぱりか。」

　エルフの姿がある事に俺は驚かなかった。昨日試したとおり、ここらあたりは魔力が結構ある。

　であれば、定期的に魔力を吸収する必要があり、そういった場所でしか暮らせないエルフたちがこの辺りに居を構えていても全く不思議はない。自分の住むところに魔物の不安があれば、取り除くのを手伝おうという思考は当たり前だからな。

　魔力の供給が必要で、しかし近くに洞窟などの魔力が澱む空間があれば魔物のリスクがあるってのはなかなかに難儀な話だ。

　俺はほんの少しの同情をしながら、今日の自分の仕事に集中すべく、再び出張所を目指した。

## 職人の道具

2019年1月12日

　と、張り切ってはみたものの、討伐隊の出発もまだなのに俺に仕事があるわけもない。おやっさんに言って、昼過ぎまで寝てたほうが良かったかも知れん。

　今から二度寝……と言うのもなんだか具合が悪いし、何かを手伝うと言っても出発直前のこの時間に手伝えることなどほぼない。

　で、あれば、出張所の隅に目立たないよう転がっている槍の穂先を仕上げて、準備運動とするのが良かろう。俺はそう判断して、昨日の作業で残った炭に着火を始めた。

　火が

　十分に温度が上がったので取り出して鎚で叩き、形を整えていく。これは誰かに渡すつもりもないので、特注モデルの作り方でやっているが、工房本店のある黒の森よりも、こちらのほうが魔力が薄いのは確実だな。能力の底上げはされるが、向こうで作るほどの性能にはならなさそうだ。

　同じようにナイフを作ったとして、本店だと台の丸太ごと切れるが、出張所では半分から１／３食い込んで終わり、と言った感じである。それでも十分な性能ではあるんだが。

　そうやって作業をしていると、兵士が4人ほどで炭の樽２つを持ってきてくれた。存外に早かったが、フレデリカ嬢も今はまだそんなに忙しくはないはずだ。討伐からみんなが戻ってきたら、その時は地獄の釜の蓋が開くことになるが。

「ああ、すみません。そこの樽の横に置いておいてもらえたら大丈夫です。」

「分かりました。」

　兵士達は樽を置くと去っていった。もう部隊は洞窟に向かっただろうから、彼らはきっと護衛として残された人達だ。もしかしたら休憩時間を削ってしまった可能性はあるな。そう考えるとほんのちょっと罪悪感があるが、

　そこへ、バカでかい声が発信元と共にやって来た。

「エイゾウ！俺のナイフを見てもらいに来たぞ！」

　サンドロのおやっさんだ。そういや、昨日そうするって俺が自分で言ったんだったな。年をとると忘れっぽくなっていけない。

「あいよ。」

　俺はすっかり忘れていたことをおくびにも出さずに返事をする。２本の包丁が渡された。大小２本の牛刀っぽい形のものである。若い衆のも形はほとんど同じだったが、小さい方２本と大きいの１本だったので、大きい方はしょっちゅう使うものでもないのだろう。

「そうだな、小半時もあれば終わると思う。」

　２本の包丁を確認しながら俺は言った。さすがはおやっさんだ。手入れがほぼ完璧である。いい職人は道具そのものも一級だが、その手入れも一級品だ。自分の腕や手や指先も同然だからな。

　こと包丁の手入れだけに関して言えば、リケよりもおやっさんの方が上回る部分があるかも知れない。

「そんくらいなら見てってもいいか？」

　おやっさんが珍しくあまり大きくない声で（つまりはそれでもでかい声だということだが）尋ねてくる。おずおずと言った感じがないのは

「別にいいけど、つまんないかも知れないぞ？」

「いやぁ、俺が手入れする時の参考になればと思ってな。」

　なるほど。別に断る理由は元々なかったが、そう言うことならますます断る理由がなくなる。俺はおやっさんの要請を快諾した。

「ちょいと調整するのに叩くけど、びっくりすんなよ。」

「おう。」

　一応おやっさんに断っておく。いきなり叩いて気分を害されてもつまらんしな。

　包丁を金床に乗せてチートで確認すると、腕のいい職人の手によるものなのだろう、なかなかのものである。

　うっかり魔力でも籠めようものなら、えらい切れ味になってしまうので魔力は籠めず、しかし、わずかな歪みや組織のバラつきを直すように、しかし形は変わってしまわないように気を使って叩く。こう言う事ができるのもチートさまさまではあるな。

　この作業では加熱はしない。見たところ焼きが入っているので、これで加熱してしまうと小一時間どころの仕事ではなくなるからな。

　２本ともそうやって歪みや組織のバラつきをとった。うちの工房で言うところの高級モデルでも出来の良いやつくらいになる。

「は～。」

　そこまでの作業が終わると、おやっさんが感嘆の声を上げた。

「何してるかさっぱりわかんねぇな。」

「そりゃあ、この作業はそうだよ。普通の手入れでやる範囲じゃないし。俺だって、おやっさんたちが料理の仕込みで何してるかなんてさっぱりだからな。」

「そりゃそうか。」

　実際には職業が違うこと以上の隔たりがあり、並の鍛冶屋でも俺が何していたのかは恐らくわからないだろうと思うのだが、俺はそう言っておく。おやっさんは素直に信用してくれた。

「こっからは分かると思うぞ。」

「おっ。」

　研ぐ行程はおやっさんも手入れで散々しているだろうし、細かいところは分からないかも知れないが、概ね何をしているかは分かるだろう。

　俺はいつもよりゆっくりめに研いでいく。もちろんチートを使って、より切れ味が良くなるようにだ。基本的には角度の問題だが、さっき調整した分、普通に研いでも切れ味は上がっていると思う。

　これも元々の手入れが良かったので、さして時間はかからなかった。おやっさんの腕前なら使う分には自分で手入れで十分問題ないだろう。

「ほい、これで

　仕上がった包丁２本をおやっさんに渡す。

「おお、すまねぇな。」

「これで美味いメシ作ってくれよ。」

「そっちのほうは任せとけ！」

　いつにも増してでかい声で、おやっさんはそう請け合ってくれたのだった。

## 大忙し

2019年1月13日

　おやっさんの包丁の手入れを終えたので、穂先の仕上げに取り掛かる。

　包丁の手入れの間に下がってしまった火床の温度を、フイゴを操作して再び上げていく。炭の火持ちが良かったので再着火の必要がないのが助かる。

　ヤットコで穂先を掴んで火床に入れて、炭を追加し風を送る。落ち着いたように見えた炎が再び息を吹き返し、穂先の温度を上げていく。

　やがて、焼入れに適した温度に上がったことをチートで察知した。火床から素早く取り出し、水に入れて急冷する。

　ヤットコから手に鋼が硬くなっていく感触が伝わってきた。その感触から頃合いを再びチートが教えてくれて、水から取り出す。じわっと呼吸を始めたかのように、穂先から湯気が立ち上る。

　あとは細かい凹凸を砥石で磨いて

　出張所を出て、エイムール家の資材を積んだ馬車に行く。あの馬車に積んであるものならフレデリカ嬢に断る必要もないし、何かあっても最悪後で俺がマリウスに直接弁償すれば済む……と思う……ので、便利遣いさせてもらうことにする。

　洞窟に行った部隊がいつ戻ってくるかは分からないので、素早く探さないとな。ゴソゴソと馬車の中を探っていると、いろんな長さの棒をまとめたものが出てきた。これは多分、突撃防止のじゃなくて、ここを囲む柵に使ったやつの余りだな。

　であれば、おそらくはもう使うまい。陣地転換もないだろうから、柵を追加することもないだろうしな。

　その中で丁度ぴったりよりも少しだけ長さのある棒を取り出して、出張所に戻った。

　出張所に戻ってきた俺は、持ってきた棒をちょっと切り落として、ぴったりの長さにした。切り落とした方もこれはこれで使うのだ。

　穂先の柄を差し込むために広げてあった部分に、棒の先を突っ込んでカシメる。これで槍のほうが完成した。石突は作らない。多分実戦で使うこともないだろうしな。

　切り落とした短い方の棒――というか切れっ端をナイフでくり抜いて小さなカップをつくる。そこに水筒の水を入れて、女神像を置いてある棚に一緒に置いておく。槍は女神像を置いている柱の下に奉納代わりに置いておいた。

　そんな事態が来ないほうが良いのは当たり前として、万が一この槍を使うよう事態が来たら、この女神様のご加護を得られるといいのだが。なんの女神様なのかは俺もわかってないのがネックだな。

　やることが無くなってきたなと思ったら、今度はマティスがやって来た。

「蹄鉄を直して欲しいのだが、いいか？」

「ん？ああ、いいぞ。」

　金にはならんのだが、別に断ることもないなと思い、引き受けることにする。もっと暇を持て余すかと思ったが、なんだかんだで忙しいな。

　俺が了承すると、マティスは馬蹄をいくつか渡してきた。チートで確認してみると、確かに歪みが出ているな。加熱するほどでもないので、直接金床で叩いて直していく。

「いい蹄鉄だな。」

　チートで分かったが、使っている鉄が割といいものだ。こう言うと語弊があるが、馬蹄にはもったいないくらい気もするな。

「わかるか。」

　マティスはいつもの間延びした、だがしかし少し喜色を含んだ口調で聞いてくる。

「ああ。そりゃ本職だからな。作りもそうだが、材がなかなか良いな。」

「そうか。」

　更に喜色を増した声音でマティスが言う。表情があんまり変わらないので分かりにくいが、こいつ以外と素直なのかも知れない。

　そこそこ時間がかかったものの、全部の蹄鉄を叩いて直し終えた。全てチートを使い、かつ、武器じゃないので強化しても問題ないと判断して魔力もそこそこ籠めたので、おそらくは並の蹄鉄より遥かに長持ちするだろう。

「ほい、終わったぞ。」

「すまないな、感謝する。」

「気にするな。これも経験だ。」

　俺は手をひらひらと振って応える。

「エイゾウは蹄鉄は作らないのか？」

「うーん、頼まれれば作るだろうけど、今は武器がメインだな。」

「そうか。」

　マティスはそう言ったが、やはり表情が余り変わらないので悲しいのか納得しているのかは分かりにくい。そのうち蹄鉄の発注が来ることも考えたほうがいいのかな。

　マティスは蹄鉄を受け取ると、再び間延びした話し方で礼を言って簡易馬房の方へ向かっていった。

　これで一息つけるかと思った途端、更に次の仕事が舞い込んできた。洞窟に向かった討伐隊が戻ってきたらしく、フレデリカ嬢が修理依頼書と兵士が持った樽に満載の武具と共に出張所に襲いかかってきた。

「エイゾウさん、すみませんです！これ全部直してほしいです！」

　フレデリカ嬢がいつになく焦った感じで言ってくる。修理して欲しいと言う武具の量を見ると、負傷者なんかもそれなりの数が出ていそうだし、指揮所はてんやわんやなんだろう。

「承知した。とりあえず置いてってくれ。」

「お願いしますです！」

　フレデリカ嬢は再び慌ただしく去っていく。これから他の資材の管理もあるだろうし、本当にお疲れ様である。

「どれどれ……」

　俺はフレデリカ嬢を見送ると、渡された依頼書の目録をチェックし始める。

## 大量修復

2019年1月14日

　リストにはロングソードがたくさん、盾が少々、鎧の胸当てが１つあった。なかなかの激戦を想像させる。今日で片がついたのなら良いのだが。

　兵士達が持ってきた樽の数も４つほどある。これは今日中には終わらんかも知れんな。俺は樽の中から全てを一旦取り出した。

　樽４つぶんの武具は流石に量があった。出張所に所狭しと居並んでいる。俺はそいつらを直す時間が少なくて済む順番に並べていく。

　なるべく直す時間が短いものを修復することで、１つでも多くの武具を使用可能な状態に戻していきたい。そうすることで同じ時間でも使える武具が増えることに繋がるだろうし。いざと言うときには、その１つがみんなの生死を分けることがあるかも知れないからな。

　まずは軽く歪んだロングソードの修復から行う。火の用意もいらないし、作業工程事態も叩くだけとシンプルだ。

　むろん、１回や２回叩けばすぐ直るようなものは、そもそも不具合が起きていると認識されておらず、持ってきてはないだろう。つまり、修復には最低限それ以上の時間がかかることが確定している。

　だが、こいつらから片付けないことには始まらないので、１本を手に取ると、金床に置いてチートで歪みをチェックしながら鎚で叩いていく。

　やや強引ではあるが、チートのおかげで大して時間をかけずに１本を修復できた。これが後２桁近くある。ホッとしたりげんなりしている暇はないし、俺は修復し終えたものを樽に入れて、次の１本を手にとって叩き始めた。

　ガンガン修復を続け、軽い歪みの修正が必要なものは全て修復し終えたので、それらが入った樽に研ぎが必要なものを一緒に入れて、砥石台のそばに持ってくる。空の樽も持ってきて、砥石台のそばに並べた。

　ロングソードの入った樽から１本を抜き出して、チートで確認しながら研ぐ。出来栄えは余り気にせずに、使える状態になればいい。同じ作業は纏めてやったほうが効率がいいので、研ぎの作業だけは纏めてできるように調整したのだ。

　そんなに経たないうちに１本が仕上がる。チートを使わない状態ならもっと時間のかかる作業ではあるが、チートで出来栄えを気にせずにやるなら、さほどでもない。

　この後も桶から取り出して研いで仕上がったら別の樽へ、と言う作業を繰り返していき、やがて研いでない方の樽には何もなくなった。

「これでロングソードは一旦は終わりか。」

　２桁と少しの剣が前線に戻せる状態になった。大きく歪んだ数本はまだ未修復のまま残っているが、補充としては十分な数を確保できたと言っていいだろう。

　次に盾２つを修復する。片方は叩いて直せるが、もう片方は穴が空くほど凹んでいて、補修するには熱さないとならないし、熱する場合、盾では持ち手を外したりなんだりとするのが非常に時間がかかるので、こっちの方は一旦修復不能と判断する。

　叩いて直せる方の盾も、剣以上に叩いて直す必要があるのはチートで確認しても確かだな。さっさと取り掛かろう。

　盾は緩やかにカーブしている。なので、凹んだ部分はそれに沿って修復する必要がある。当て木をするのが良いのだろうが、ここはチートでなんとかしてしまおう。

　まず最初に凹みを逆側に叩き出していく。こうしてまずは平らに近い状態まで戻す。このあと、魔力が少し入るようにしながら、カーブが戻るように角度をつけながら叩き出す。普通ならこんな修正では元の性能にはならない。

　前の世界で言えば、一度中央を凹ませた空き缶を元に戻そうとするようなものである。一見すれば元に戻ったように見えるかも知れないが、よくよく見ればあちこちにひずみが出来ている。

　それと同じで裏から叩いてもそう上手くは事が運ばないものだが、そこはチートと魔力の合わせ技でなんとかしてやるのである。

　やがて、盾はほぼ元の丸みを取り戻した。確認すれば細かい歪みはまだあると思うのだが、前線で修復する範囲としては十分だろう。

　ここでもう日が傾きつつあった。まだ胸当ての修復が残っているのだが、これは今日中に仕上げる必要があるやつなのだろうか。大きく歪んだロングソードは亀裂が入っていたり、全体の加熱が必要だったりで更に時間がかかりそうなため、修復を見送ることにするとして、そこの確認がいるな。

　俺はリストを手に一旦出張所を出て、指揮所に向かうことにする。

　指揮所の天幕に入ると、中は落ち着きを取り戻しつつあった。俺が修理している間に、帰還してからかなりの時間が経っているだろうからな。マリウス達も作戦を練るためのテーブルの辺りに居て言葉をかわしているが、喧々諤々ではなく、確認を繰り返すような感じである。

　フレデリカ嬢が修理の依頼に来たし、撤収の命令も降りてきていないから、失敗か成功かはともかく明日も作戦が続くのだろう。明後日までは延長しても予定のうちだから、今日は比較的損害が軽微なうちに撤退してきたのかも知れない。

「フレデリカさん。」

「あ、エイゾウさん。終わりましたです？」

　そんな指揮所でも、比較的忙しそうにしているフレデリカ嬢に声をかける。

「いえ、後は胸当てが残ってます。時間的にそろそろ日が落ちるので、今日修復するなら篝火がいりそうなので、今日中に修復が必要そうならその手配をと。」

「なるほどです。胸当ては予備があるので、明日以降でもかまいませんです。」

「あとですね、この辺の盾と剣がここでは修復不能です。どうしてもと言う場合は直せますが、かなり応急になりますね。」

「分かりましたです。修復できない分はそのままで大丈夫です。今日修理が終わった分は後で引き取りに向かわせますです。」

　修復不能と判断したものをリストで指差すと、フレデリカ嬢は新しい紙を取って、そこに何かを書き付けていく。支払いに影響するし、帰った時に別途どこかで修復（するか鋳潰してしまうかはともかく）する依頼書みたいなのもいるだろうから、多分そう言ったたぐいのものだろう。

「それじゃあ、これはまた明日持ってきますね。」

　俺は持ってきたリストを手に取る。

「明日には片付くと良いですね。」

「ええ、そう願ってますです。」

　俺は指揮所を後にする。明日からの修復の予定を考えつつ、出張所に戻った。

## 業務範囲外

2019年1月15日

　出張所に戻ったら、そのまま片付けをする。引き取りに来るまでの間、胸当てのチェックをした。基本的には叩けば直せるだろうが、少し加熱の必要がある。

　直すところだけ加熱すればいいが、念の為ベルト類を取り外さないといけないので、そこが手間のかかるところだ。

　兵士達は片付けを終えてから、そんなに経たないうちにやってきて、修理を終えた武具を引き取っていく。また頑張って働いてこいよ。

　その後はおやっさんのところへ行って晩飯を頂いたら寝るだけだ。滞在の延長は予定通りなので、食材を切り詰めたりといったことはまだ始まっていない。今日も十分に美味い飯を食って自分の天幕に戻ると、睡魔が速やかに訪れてくれた。

　翌朝、起きて身支度を整えたら朝飯を食いに行く。兵士も何人か食いに来ていたが、見る限りは皆まだ士気も落ちていない。おそらくは今日で片を付ける気だろうし、今日頑張れば晴れて凱旋、と言う思いが彼らを支えているのだろう。

　逆に言えば、今日で決めないと明日は怪我やなんかで数が減った上に、士気もガタ落ちしている手勢で攻略しないといけなくなる。相手とこちらの状況にはよるが、そうなったら一度撤退して再度やってくるか、援軍を待つしかない。

　今日の夕方早馬を飛ばして、６日ほど頑張れば援軍の先遣隊は補給物資付きでたどり着くだろうし、その２～３日後には援軍の本隊もやってこれるだろう。

　だが、その失敗はエイムール家の将来にとって良くない影を落とすことが容易に想像できるし、援軍の出征費を誰が出すのかとなれば国よりはエイムール家の方が按分が大きくなるだろうから、是が非でも今日決着をつけるはずだ。

　とは言っても、俺はせいぜいその手助けをするくらいだろう。そんなことを思いながら、飯を食って出張所に向かった。

　出張所についたら火床で火を熾し、温度が上がるまでの間で胸当てのベルトを外す。なかなかに手間はかかるが、なんとか外すことが出来た。

　チートを貰った範囲は鍛冶屋だし、一応は防具でも有効なはずなんだよな。今のところは手間の割に出来る数が少ないし、ナイフみたいに生活用品として売れるわけでもないので作ってないけど。

　温度が上がってきて、さあやるかと思ったところへ若い兵士が走ってやってきた。指揮所からちょっと離れてはいるが、息が上がっているので、相当に急いだのだろう。

「すみません、伯爵がお呼びです。」

　兵士は俺に言った。

「伯爵様が？」

「ええ。急ぎの用だとかで。」

「わかりました。向かいます。」

　火床の始末が気になるが、放置してて問題になるようなことはないので、俺はすぐさま向かうことにした。

　兵士について指揮所に向かう途中、広場になっているところで金属や革の鎧をつけた兵士達が集合していた。ルロイがチェックなどの報告を受けている。もう少ししたら洞窟へ向かうのだろう。今日で片をつけられるよう、頑張って欲しいものである。

「伯爵閣下、鍛冶屋をお連れしました！」

　天幕に入ると兵士がマリウスに報告する。個人的な友誼はともかく、ここでは伯爵閣下と一介の鍛冶屋だ。兵士の言いかたに異論はない。

「うん、ご苦労だった。ちょっと皆控えてくれ。」

　マリウスは鷹揚に返すと、人払いをする。ゾロゾロと数人の兵士とフレデリカ嬢が出ていった。フレデリカ嬢が心配そうな目でこっちをチラッと見ていたが、多分処罰とかではないはずだ。もっと悪い事かも知れないが。

　こうして指揮所の中は俺とマリウスの２人だけになった。

「わざわざ人払いまでするって、ことはなにか重大なことでも？」

　俺とマリウスの２人だけになったので、俺はざっくばらんな口調で話す。

「うん。大した事ではない、と言えば大したことではないんだが……」

　マリウスにしては珍しく口ごもる。

「別に今更遠慮することもないだろ。まぁ、勿論その分は貰うけどな。」

　俺は笑いながら先を促した。

「それじゃあ、エイゾウにはすまないのだが、洞窟への護衛をして欲しいんだよ。と、言っても俺じゃない。近くのエルフの里の人だ。魔物の発生源を封じ込めるのに協力が要るのでな。」

「兵士では手が足りないのか？」

「いや、割り当てることは不可能じゃない。ここの陣地の護衛から２人ほど引き抜いてもここの防備は大丈夫だろうし、そうすれば頭数的には問題ないんだが、いかんせん実力がな……」

「ああ……」

　ここに来ているのはほぼ新兵だ。１０人単位を取りまとめる隊長なんかはそれなりの経験者が来ているが、彼らは彼らで自分の仕事がある。

　そして護衛とは対象の身の安全は勿論、自分の身も守れなくてはいけない。いざという時に身を賭して守る覚悟があるかどうかとは別で、護衛があっさり死んでしまっては護衛の意味がないからな。

「俺はただの鍛冶屋だぞ。」

　ただの鍛冶屋に頼むはずがない、と言うのはわかった上で俺は一旦抵抗を試みる。

「エイゾウは腕が立つだろ？」

　無駄だった。騒動の時に侯爵閣下にも煽られてるし、その時の威圧を受け流したのをマリウスは知ってるからな。

「わかったわかった。ただし、鍛冶屋のおっさんが護衛になる理由だけは用意しておいてくれよ。」

「そこは『彼は武術を極めんとする心が高じて、自らの武具を追求すべく鍛冶屋になった。そのうちそちらが性に合うようになっただけで、新兵よりは腕が立つ。』で通るだろ。」

　既にカバーストーリーまで用意されていた。俺は肩をすくめて、やや

「もう出るんだろ？」

「ああ。護衛対象とはここを出て少し行ったところで落ち合うことになっている。」

「わかった。それじゃちょっと用意してくる。」

「頼んだぞ。」

　俺はひらりと手を振って承知したことを示すと、自分の持ち物を取りに天幕へと走った。

## 出陣

2019年1月16日

　まずは自分の天幕に戻って、自前のショートソードを取る。急いで作業場に戻り、余分な炭は外に掻き出して、火のついてるものは中央にまとめておき、手前にレンガを置いて火の着いた炭が飛んでいかないようにしておいた。飾ってある女神像をお守り代わりに懐に入れ、槍を取る。全長１２０センチくらいだし、洞窟が相当狭くなければ有効だろう。護衛と言うからには、それなりに遠間で攻撃できる武器があったほうが良いだろうからな。

　いざ放棄しないといけない時は、穂先だけでも持って帰るようにしないとな。

　２つの武器を持って、再び指揮所に戻る。俺用だろうか、上半身用の革鎧が用意してあった。

「こちらが私のでよろしいですか？」

　天幕の中にはフレデリカ嬢も含めて他の人もいたので、俺はマリウスに丁寧な口調で話す。

「ああ。それを使ってくれ。おい。」

「はっ。」

　マリウスは俺の言葉に応えると、近くの女性兵士を呼びつけた。その人が鎧を持って俺に着せ付けてくれる。俺も着慣れてないからな……。

　しかし、それにしても手慣れているな、と思ってよく見ると、前に貴族服の着替えをしてくれたエイムール邸の使用人の人だ。向こうもこちらが気がついたのが分かったらしく、クスリと笑った。

　鎧を装着すると、さながら軽装歩兵のようではある。ファランクスに入るには盾が足りないが。使用人の人が離れる時にかろうじて俺に聞こえるくらいの小声で「よくお似合いですよ」と言ってくれたがなんだか気恥ずかしい。

　俺が照れていると、じっとこちらを見ているフレデリカ嬢に気がついた。

「エイゾウさんは軍隊の経験があるのです？」

　目が合ったフレデリカ嬢はそんなことを聞いてくる。

「いや、全く。だから着せて頂いてたんですよ。」

「なるほどです。でも、似合ってますです。」

「ありがとうございます。」

　俺は微笑んで会釈した。さて出発しないとな。チラッと見ると、マリウスと使用人の人がほのぼのした表情になっていた。まさか、フレデリカ嬢が指揮所にいるのは癒やしのためじゃないだろうな。

　指揮所を出たら、広場にいる兵士達の後ろに並んだ。俺は後で直接マリウスの指揮下に入るらしい。

　俺が並んでそんなに経たないうちに、マリウスが指揮所から出てきた。兵士達が号令で整列し、敬礼する。いわゆる挙手の礼ではなく、胸に拳を当てるような形だ。

　マリウスが手を上げると、全員が手を下ろした。

「諸君、今日こそあの汚らわしい者共に鉄槌を下し、我々が完全に勝利を収める日である！」

　マリウスはみんなを見回しながら大きな声で言う。

「残念ながら、今回程度の功績では諸君らに褒美を望むだけ与えようとは言えない。我がエイムール家の宝物庫も空き部屋になってしまう。空いたそこに住みたいと言う者がいれば、滞在費が得られるのでそれもありかも知れないが。」

　兵士達がどっと笑った。いい傾向だ。ジョークとしての出来はともかく、笑えなくなったときがいよいよ追いつめられたときだからな。

「今日はいつか望み通りの褒美を得るための第一歩を、諸君らが踏み出すのだと思って奮闘して欲しい。諸君らの最初の1勝として、諸君らの歴史に残ることを私は期待している！」

　ワーッと言う歓声。これで士気が上がって今日の討伐が成功するといいんだが。

　洞窟へはルロイが先導して大多数の兵士たちが先に出ていった。整然と並んで意気軒昂である。足並みも何となく揃っていて、突然出くわしたら相当な威圧感があるに違いない。

　護衛対象との合流は、別働隊として俺とマリウス、そして少数の兵士で向かうらしい。特殊作戦、と言うわけではなくて、単に大勢の兵隊をわざわざ遠回りさせたくないだけだそうだ。

　１万人の兵隊を単に公園から出し入れするだけでも相当な苦労があると言うし、それよりはるかに規模が小さくても少しでも指揮する回数は減らしたいに違いない。

「予定地点はこちらです。」

　兵士の１人が先導する。この人もエイムール邸で見かけた記憶があるから、使用人の中で武術の心得がある人を近衛として連れてきているんだろう。

　彼（彼女）らを今から護衛する人の護衛に回せば良かったのでは、と一瞬考えたが、マリウスの近衛がいなくなるからダメだな。

　森と言うには樹の数が少ないが、林と言うには少し多いくらいの森の中を進んでいく。材木林としても管理されているのだろうか、ところどころ下の方の枝が剪定されているのが印象的である。

　時間にすると四半時よりはもう少しかかるくらいの頃、樹の数が少し増えたな、と思ったところにエルフの女性が俺達から見て向こうを向いて立っていた。そこには彼女をここまで護衛してきたのだろう、何人かのエルフの男性が控えていて、会話を交わしている。

「あの女性の方です。」

　先導してきた兵士がマリウスと俺に向かって言った。それを聞きつけたのか、エルフの女性が振り返る。

　切れ長の目に肩あたりで切りそろえられた白銀色の細い髪、そして長い耳。エルフとしてなら別にどうと言うことのない特徴。だが、俺は相当に驚いた。

　――護衛対象のエルフの女性、それはリディさんだったのだ。

## 護衛

2019年1月17日

「リディさん……？」

　驚きのあまり、俺はリディさんの名前を呼んでしまっていた。初対面にしておいたほうが好都合なことが多いのだが、もう遅い。

「エイゾウさん！？」

　リディさんも割と大きめの声で俺の名を呼ぶ。切れ長の目が滞在期間中には見たことがないほどまんまるに見開かれていて、その驚きの大きさを示していた。

「２人は知り合いなのか？」

　マリウスが興味を隠しもせずに聞いてくる。この聞き方はマリウスの手引きでこうなったわけじゃないな。ニヤニヤしてないし。

「え、ええ、以前に頼まれて仕事いたしまして。」

　隠す必要もないので、俺は正直に答えた。リディさんはもういつものクールな顔に戻り、黙って頷いている。でもこれ多分ちょっと照れてるな。

「なるほど。朴念仁の顔をして、なかなか隅に置けないと見える。」

「そんな、お戯れを。」

　マリウスが少しニヤニヤしながら言ってくる。明らかに新しいおもちゃを見つけた時の目である。俺は今の立場を崩さないように必死に抑えて返事をするのがやっとだ。

「では、紹介する必要もないと思うが、彼女が護衛対象だ。任務は彼女を洞窟最奥部まで無事に連れて行くことにある。」

「承知しました。身命を賭してお守りします。」

　マリウスと俺はかしこまったやりとりをする。実際は知った仲なので、少々気恥ずかしい。

「エイゾウさんが護衛してくれるなら、心強いです。よろしくお願いしますね。」

「ええ、お任せあれ。」

　気恥ずかしい俺の気持ちを知ってか知らずか、リディさんは花の咲くような笑顔で言うのだった。

　護衛とは言え周囲に兵士もいるし、そもそもそんなに凶暴な獣も滅多にはいないらしいので、洞窟に着くまでは割と気楽なものである。それでもいつでも槍を突き出せるよう、最低限の警戒は怠らない。

　やがて森が途切れ、草原が広がる。向こうにはさほど高くはなさそうな山が見えているが、おそらくはあの麓に洞窟があるのだろう。少し前を行っていた兵士が、本隊の通過した跡を見つけ、俺達はそこを辿っていく。

　人が通ったあとだから、ほとんどの獣は他所に去った後だろう。俺たちのほうが人数は少ないが、それでも襲いかかってこようと思う獣はそうはいない。

　程なくして、ぽっかりと口を開けた洞窟が見え、その前に１０人ほどの兵士が集結して洞窟の入口を警戒していた。他の人達は既に内部に突入しているようだ。

「では我々も内部へ。」

　残っていた１０人のうち、隊長らしい男が俺たちに向けてそう言う。俺たちは頷いて同意を示した。マリウスとその近衛はここで留守番と言うか、流石に中に入って指揮を執るようなことはない。いざというときには入るんだとは思うが。

　１人が入口のそばで焚いていた焚き火から松明に火を移して、明かりにする。先遣隊が片付けてくれたのか、小半時ほど進んでもなにかに出くわすようなことはない。

「それにしても深いな。」

　俺は思わずそうつぶやいた。

「うむ、かなりある。昨日一度は最奥部まで行ったのだが、障害なく進んだとして、１時間ほどはかかっただろう。」

　とすると４キロメートル弱ってところか。たしかに深い。枝分かれがほとんどなく、正しい道筋の方に先遣隊が松明を設置してくれているので、迷うことはないのが救いだな。

　こう言うところで明かりを使って心配なのは酸素だが、長いこと燃えているようだから、空気が出入りするところはあるのだろう。風は感じないので心配は残る。

「長いほうが澱んだ魔力がより溜まりやすくなります。澱んだ魔力が一定を超えると魔物が湧くと言われていますが、詳しいことは分かっていません。」

　リディさんが解説をしてくれた。逆に言えばこれくらいのところでないと、自然に魔物が出現することはほとんどないのか。

　黒の森は魔力は多いが、魔物が湧くことは滅多にない理由がよく分かる。だが、言わないということはないものだと思っていたが、サーミャに洞窟の有無は聞いておいたほうがいいかも知れない。ある日突然そこから湧いてこられても困る。

　さらに少し進むと、くぐもった感じで金属音が聞こえてきた。この状況で聞こえてくるということは戦闘音だろう。反響してるだろうから、遠いのか近いのかは判然としない。

「そう言えば、最奥部まで行ったのに、昨日は片付かなかったのかい？」

　急ぎ気味に歩きながら、隊長に聞いてみる。走らないのは走ってたどり着いたところで、万全の状態とは言いがたいからだ。

「ああ。ちょっと強いのがいてな。念の為撤退することにしたのさ。」

「なるほど。今日俺たちが行くのは？」

「そいつを倒さないと魔物が湧くのが止まらないんだが、新兵たちじゃどうしてもな。ここの里の人達が倒し方を知ってるって言うんで、連れてくってのが今だ。」

　リディさんをモノ扱いしたくはないが、敵の基地を爆破するために必要な爆薬を敵基地奥深くまで運び込む、みたいなものか。そうと決まれば安全に奥まで連れて行くだけだ。

　俺たちは大きくなりつつある戦闘の音に向かって、ズンズンと足を進めていった。

## 戦い

2019年1月18日

「親玉かなんかを倒さないといけないってのは、一体どうしてなんだ？」

　俺は隊長に聞いた。

「魔物とは澱んだ魔力の塊です。」

　答えたのは隊長ではなく、リディさんだ。静かだが、はっきりとした声である。

「澱んだ魔力からは魔物が生まれます。」

「生き物、ってわけではない？」

「はい。竜や魔族達、あるいは元々命あるものが魔物になった場合はともかく、魔力から生まれた魔物は我々のように生きているわけではありません。魔力から生まれて、ただただ増える。そして命あるものに対して襲いかかるのです。」

　まるで、前の世界のコンピュータゲームに出てくる敵モンスターのようだ。どういう生活をしているかは分からず、ただ無限に出現し襲いかかる。

「倒したらどうなるんです？」

「身に宿した魔力ごと消えます。命あるものがなった場合は体が残りますが、魔力は消えてしまいます。」

　前に倒した熊が魔物だったかどうかは分からない、ってことだな。魔力から生まれたものでないのは間違いないが。

　魔力はなにかエネルギーのようなものだと思っていたが、どうやらちょっと違うらしい。少なくとも保存則がきくようなものではない。存在していたのに消えるエネルギーなんて不思議すぎる。

「親玉を倒さないと、その魔力から魔物が生まれる。生まれた魔物の魔力を元に更に魔物が生まれる。」

「ええ。」

「それじゃあ、放っておくと際限なく増えるじゃないですか。」

　ねずみ算ならぬ魔物算だ。

「そうですね。普通はほんの少しずつしか湧いてこないのですが、なんらかのきっかけで大量の魔物が湧いてくると、大変なことになります。それが少し前に起きました。ここで。」

「えっ。」

　今サラッとヘビーそうなことを言ったな。気にはなるが深追いはしないでおく。

「それは辛うじて撃退したのですが、少し魔物が残ってしまいました。しばらくは私達で増えないようにだけはしていましたが、全てを倒せずにいるうちに、また同じことが起こりそうだったので討伐隊を派遣してもらったんです。」

「なるほど。」

　エルフは親玉を倒せるが、たどり着くまでの道が作れない。討伐軍はたどり着くまでの道は作れるが、親玉を倒せない。お互いをフォローしあって殲滅しましょう、と言うことか。

　そんな事を話しているうちに、戦闘の音がかなり大きくなってきた。松明の明かりがゆらめくのが見え、剣のものだろう、反射する光がこちらにも飛び込んでくる。そこが少し広間のようになっているらしい。ここから見える限りでは大混戦だ。

「よし、あんたはエルフのお嬢さんをしっかり守れよ！」

　隊長が大声で俺に言ってくる。

「言われなくても合点承知！！」

　俺は負けず劣らずデカい声で怒鳴り返し、槍を構えてリディさんを背後に匿う。兵士達が俺たちの前に出ていって露払いを始めた。

　いよいよ戦闘の真っ只中に突入すると、ここの魔物の姿が松明の明かりの中で見えるようになる。

　こう言うとリケに怒られるかも知れないが、ドワーフぐらいの背丈で緑の肌。頭には毛がなく、突き出した鼻にらんらんと黄色に輝く目。細い枯れ枝のようなアンバランスな手足が体から伸びている。

　俺の知識の中で１番近いものをあげるならゴブリンだ。ただ、俺の知っているゴブリンだともう少し文明的と言うか、被服を纏っていたり、ちょっとした武装をしているものだが、こいつらは身に何一つ纏っておらず、武器も長く伸びた爪と、乱ぐい歯になった牙で、ほぼ獣同然に見える。

　そいつらが兵士に飛びかかったりするものの、大半は防がれて逆襲を食らっている。切り捨てられたゴブリンは血しぶきなどは上げず、倒れるとそのまま黒い灰のようになって消えていく。なるほどこれは生き物ではないな……。

　時折飛びかかられて間合いを見誤ったのか、兵士が勢いよく振った剣が空振り、地面の岩に強く叩きつけられたりもしている。確かにあれは歪むし欠けるな。戻ったら直せるやつはきっちり直してやろう。

　前は兵士達が露払いしてくれているので、俺はリディさんを守りながら、背後を重点的に警戒しつつ先へ進む。途中、兵士達の隙間をすり抜けて来たのか、ゴブリンが１匹近づいてきた。

　兵士達には当てないように手にした槍を突き出すと、狙い

　さっき見た実体のなさと、手に伝わる感触が一致しなくて実に気持ちが悪い。特注モデルと同等の性能とは言え、若干は肉に刺さる感触があるからだ。

　素早く槍を抜くと、ゴブリンは倒れるより前に消え去っていった。後には何も残らない。

　そうして広間を横断するだけで、４匹ほどのゴブリンを屠った。兵士達も怪我をしているものはいるが概ね無事であり、ゴブリン達はその数をかなり減らしている。

　その戦闘を背後に、俺達は洞窟の最奥部、ボスの待ち構えるところに飛び込んでいった。

## 死闘

2019年1月19日

「最奥部はこの奥だ！」

　隊長が俺とリディさんに声を掛ける。広間の端に入り口のようなものがある。

「２人ここで守れ！俺たちは中に入る！」

　兵士は頷くと、入り口の横に１人ずつサッとついた。露払いをしてくれているときも思ったが、この隊は全体でも練度が高いほうなのだろうか。

　まぁ、そうでないとリディさんを連れてくる護衛にはしないか。彼女は決戦兵器でもあるわけだし、道中で失われたら意味がないものな。

　入り口に飛び込むようにして入ると、さっきほどの広さではないが、なかなかの広さの空間に出た。俺たちの前に兵士達が展開する。

　松明に照らされたそこには、多数のゴブリンと、そのゴブリンを遥かに大きくしたようなゴブリンがいた。

　俺も身長が高い方ではないが、俺よりも背が高い。だが、外見はゴブリンを筋肉質にしたくらいなもので、衣服を身に着けていないのも、特に武装もしていないのも普通のゴブリンと変わらない。あれが親玉だな。ホブゴブリンとでも呼ぶか。

「俺たちは周りの雑魚を片付けるから、アンタ達は親玉を頼む！」

「おおよ！」

　隊長の怒鳴り声に、俺も負けじと怒鳴り返す。いよいよだ。俺は槍の柄をギュッと握りしめた。

　隊長たちが自分の言葉通り、ホブゴブリンの周りのゴブリンを蹴散らしていく。隊長は一刀で切り捨てているが、他の兵士達は少し手間取っている。

　ホブゴブリンもボーっとしているわけではなく、兵士にゴブリンと共に襲いかかろうとしていて、自分の相対している敵を片付けた兵士や、俺が援護して辛うじて事なきを得ている。

　なるほど、昨日はこれで攻めあぐねて撤退したんだな。今日と違って昨日はまだ数もいただろうし。俺達とホブゴブリンの間にもゴブリンは多数いて、まだホブゴブリンと腰を据えて戦える状況にはない。

　それにしてもデカいのにホブゴブリンは動きが素早い。何度かゴブリン越しに攻撃を加えられないかと試したが、多少傷つけはするものの、その状況ではなかなか致命傷が与えられない。

　然るべき場所に当たれば、この槍なら相手の皮膚が多少硬かろうとやすやすと貫くが、当たらなければどう仕様もない。もどかしいが、道ができた時に素早く接敵できる位置でチャンスを伺おう。

　そうやって戦っている間にゴブリンは数を減らし、隊長達がゴブリンを抑え込んで、俺達とホブゴブリンとの間に道ができた。俺とリディさんはホブゴブリンに接近していく。

　２対１。数的にはこちらが有利だが、だからと言ってこの槍をブスッと刺してハイ終わりというわけにはいかないだろうな。

　ゴブリンとホブゴブリンを引き離すべく、俺はホブゴブリンに向かって槍を突き出す。ホブゴブリンは予想に違わず素早くそれを避けた。それに負けず劣らずの速度で俺は槍を引き戻して再び突く。当たるとは思っていない。ホブゴブリンも距離をとってそれをかわす。

　これを繰り返して、俺はホブゴブリンとゴブリンとの距離を稼いでいった。合間合間にホブゴブリンも攻撃をしてくる。俺を狙う分には最悪多少食らったところで、と思うが、リディさんに目標が向かった場合にはそうはいかないし、こっちに気がついたゴブリンの妨害もあるので必死に防衛しなければならない。

　戦闘のチートもつけてくれたのは大正解だったな……。このチートがなかったら人を守りつつ、敵をあしらっていくなんて芸当できそうにない。俺は心の中であの時の彼女（？）に礼を言っておく。笑うような「どういたしまして」という声が聞こえた気がした。

　やがてゴブリン達の邪魔が入らない距離までホブゴブリンを引き離した。そろそろリディさんの出番だな。

「これから何をしたらいいんです？」

　ホブゴブリンの攻撃を凌ぎつつ、リディさんに指示を仰ぐ。一応仕留められないかやってみるが、リディさんを気にしながらなのでなかなか難しい。

「エイゾウさんは魔物の動きをなるべく抑えててください。その間に準備をします。合図をしたら伏せてください。」

　ハッキリした声でリディさんが答えた。俺は頷いて了解の意を伝える。だが、倒してしまっても構わんのだろう？という一言を言いかけて飲み込んだ。よくよく見るとさっき傷つけた箇所の傷がもう塞がっている。これはもしや――

「魔力で回復するのか！」

　俺は思わずそう言った。今度はリディさんが頷く。

「純粋な魔力では回復しないのですが、澱んだ魔力があれば回復します。」

　兵士がゴブリンを倒すのに手間取っている理由や、昨日大人数で来たにも関わらずホブゴブリンを仕留められなかった本当の理由はそれか。めちゃくちゃ厄介だな。

　だがボヤいても仕方がない。俺はリディさんの準備が終わるまで、ホブゴブリンの相手をしなければいけない。仕留めるつもりで槍を繰り出すが、素早いし回復するしで、なかなかそれは難しそうである。熊とは違うよなそりゃ。であれば手数を増やして他のことを出来ないようにするまでだ。

　俺は狙いは二の次にして、とにかく手数だけを重視して槍を突いていく。時折はホブゴブリンの体に当たって傷をつけるが、それもそんなに経たないうちに塞がってしまう。

　ホブゴブリンもやられっぱなしではなく、俺に集中して攻撃してくる。２～３度リディさんを狙った時に、当たればそれで終わっているような攻撃を俺が加えたからだろう。感情があるかは知らないが、さぞかしヒヤッとしたことと思う。少なくとも学習能力はあるらしい。

　槍を突いて多少のスキがあるところを肉薄して蹴りを放ってくる。ゴウと言う音がするほどに鋭い蹴りで、当たれば少なくとも戦闘を続行できるような状態ではなくなるだろう。俺は体を捻ってそれをかわしつつ、引き戻した槍を繰り出したりもするが、これもかわされた。

　そうやってどれくらい経っただろうか。ずっと命のやり取りをしているので、正確な時間は分からない。少なくとも四半時程は経っているだろう頃合いで、リディさんが叫んだ。

「伏せてください！」

## 勝利

2019年1月20日

　リディさんの声を聞いて、俺は素早く伏せる。伏せると言うよりも、もはや倒れると言ったほうが早いくらいに。

　俺の体の上を青白い光が駆け抜けていった。ホブゴブリンはそれを見て飛び

　バシッという音がして、ホブゴブリンが仰向けに倒れる。これで消えてくれれば倒したことになるが、どうだろう。

　俺は素早く体を起こして、槍を構え直す。様子を伺っていると、ホブゴブリンは消えずに立ち上がり、吼えた。

「グォォォォォォォッ！！」

　ビリビリと空気が揺れる。流石に効果があったらしい。獣と同じかどうかは分からないが、手負いのほうが厄介かも知れない。第２ラウンドの開始だ。

「ダメでしたか……」

　俺の後ろでリディさんがつぶやく。あれに耐えたのは予想外だったらしい。

「あれをもう１回ってできます？」

　なんとなく出来なさそうだなとは思いつつ聞いてみると、その予想に違わずリディさんは首を横に振る。

「あとはこれを使うしか……」

　リディさんが腰に下げた剣を見せる。あれは俺が直したミスリルの剣か。魔力電池として使えるらしいが、それをするには手順がいるんだったな。

「そう言えば、それを使うのに必要なことって何なんですか？」

　ここに来て逡巡があるということは、なにか

「命ですね。」

「えっ。」

　普段と変わらない口調でとんでもないことを言われ、一瞬理解が追いつかない。

「命と引き換えにすれば魔力を引き出して、もう１度先ほどの魔法が使えます。」

「じゃ、それは無しで。」

　リディさんに詳しく説明されて、素早く却下した。何となくリディさんがうちにあの剣を持ち込んだ経緯が見えてきた気がするが、今はそんなことよりもホブゴブリンを仕留めることに集中しよう。

「……はい。」

　リディさんは少しためらった後、頷いた。

　リディさんの魔法が使えなくなったと言うことは、俺のチートでなんとか仕留めるしかないと言うことか。

　観察していると、流石にさっきの魔法が効いたらしくて、動きが鈍ってはいる。これなら俺が仕留めることも無理ではないかも知れない。明日にはどうなっているか分からないし、このタイミングを逃すのはうまくなさそうだ。

「俺が仕留めます。」

　俺はそうリディさんに宣告する。さて、これで後戻りはできないぞ。

　ホブゴブリンは再びリディさんを狙う。あの魔法を警戒してのことだろうが、それをするとスキができる。

　俺がそれを見逃してやる義理もないので、槍を突き出す。ホブゴブリンも予想はしていたのか、あっさりとリディさんへの攻撃を放棄して避けた。

　そこに追いすがって何度か槍で突いていくが、ホブゴブリンはかわしていく。だが、少し前に同じことがあったときよりも、俺の攻撃が当たっているし、傷の治りも遅い。

　普通の生物相手なら、このまま持久戦に持ち込んで勝てると思うのだが、いかんせん普通の生物ではない。持久戦に持ち込むと澱んだ魔力を吸収されてしまう分、こっちが不利だ。

　俺はホブゴブリンの攻撃を受け流しつつ、こちらからも攻撃を繰り出して機会を待った。槍の柄の後ろ半分を片手で持ち、もう片方の手は石突（今回はつけてないが要は端だ）を持つ変則的な構えをする。

　どちらの攻撃も致命傷にはなっていない。だが、俺にも少しずつだがホブゴブリンの攻撃が当たりはじめた。あちこちに打ち身や切り傷が増えていく。あの爪に毒がなくて幸いだ。

　そして、待っていたチャンスが訪れた。俺が攻撃する素振りを見せると、ホブゴブリンはかわそうとする。俺は全力を込めて槍を突き出し、ホブゴブリンは真後ろへ跳ぶ。この瞬間を待っていた。

　俺は突ききる直前で片手を槍の柄から手を離し、石突の方の手で槍を押し出す。強化されている筋力で十分な速度がのった槍は、ちゃんとした槍投げの構えで投げるときと比べれば遥かに弱々しくはあるが、ほんの僅か空中を

「ギャッ！？」

　狙いが定まるようなものではないので、狙っていた胸の中心には当たらなかったが、ホブゴブリンの腹部あたりに槍が突き刺さる。流石に跳んだのと同じ方向に槍が飛んできては避けようがない。

　ホブゴブリンがたたらを踏む。俺はその時には既にショートソードを抜いてホブゴブリンの懐に飛び込んでいた。

　ホブゴブリンは何とか体勢を立て直そうとするが、俺は腹部から生えている槍の柄を押し込んでそれをさせない。再びスキができる。俺がショートソードを胸に突き入れると、

「グギャッ！」

　と苦鳴をあげて横に倒れた。これで勝負あったな。

　俺はすかさずショートソードを今度は倒れたホブゴブリンの首に振り下ろし、首は胴体と離れ離れになって、やがてどちらも消滅した。

　それを見届けて、俺は糸が切れた操り人形のようにくずおれる。流石に体力の限界だ。視界の端に涙目で駆け寄ってくるリディさんが見える。

「大丈夫ですか！？」

　俺のそばで顔を覗き込むようにかがみ込んでリディさんが聞いてくる。相変わらずきれいな目してるな。

「だ、大丈夫です。怪我はなくはないですが、致命的なものは１つもありません。ああ、疲れた……」

　俺が息も絶え絶えにそう言うと、リディさんは軽くポカリと俺の頭を小突いた。

## 勝利の後で

2019年1月21日

　ホブゴブリンは澱んだ魔力の塊で、周囲のゴブリン達にも影響を与えていた。それが無くなったらどうなるかと言うと、俺たちを護衛してくれていた部隊の人達があっさりとゴブリンたちを始末しはじめた状況からも明らかだ。

　俺も手伝ったほうがいいのかも知れないが、言われた任務ではないし、さっきまでの戦闘で打ち身、擦り傷、切り傷等々に加え、体力ゲージも空っぽだ。辛うじて体を起こせるくらいで、俺は持ってきていた水筒から水を飲んで体を休める方を優先させる。もしヤバそうな人がいたら助太刀に入ろう。

　念の為、リディさんにはそばにいてもらっているが、ここが制圧されるのも時間の問題だな。魔物たちは発生源かつ強化される元が消えたのだから、補給の一切が失われた軍隊と変わらない。そんな軍隊がどうなるかは火を見るより明らかと言うものだ。

　状況を見つつ、聞くかどうか迷ったが、俺はリディさんに尋ねていた。

「直した剣、あれは誰かが命を張ってここの魔物を倒すのに使ったんですね。」

「ええ。先程倒した魔物よりも更に強いのが発生してしまっていて、それを倒すにはそうするしか無かったんです。」

「あれよりも強いとなると、そうでしょうね……」

　ホブゴブリンよりも強いとなるとゴブリンロードとかオーガとかそんな感じのなんだろうな。他に被害が出る前に片付けたから、カミロのとこまでは情報が来なかったに違いない。

「普通は１体倒せば次まではかなり間が空くのですが、今回は想像以上に早くて……」

　ボソリとリディさんが言葉を続ける。

　それで討伐隊にお出まし願うことになったのか。その間、なんとか食い止めて討伐隊の到着を待っていた、と考えるとなかなか壮絶な戦いであったことが容易に想像できる。

「これでしばらくは大丈夫、ってことですかね。」

「ええ。ほぼ間違いなく。さすがに３回も連続して発生するほど、この森の魔力は濃くはないですから。そもそも２回連続することが異常ですし。」

　なるほど。それなら一安心ではあるのか。気がつけば周囲からは戦闘の音がほぼ消えている。隊長たちがゴブリンを殲滅したのだ。

「それじゃ向こうと合流しましょうか。」

「はい。」

　リディさんのいつもの冷静な声が、少し憂いを帯びていることに俺は気が付かないまま、隊長達の元へ２人で向かっていった。

「アンタ大したもんだな！さすがエルフの嬢ちゃんの護衛を任されるだけあるぜ！」

　隊長が俺の肩をバンバン叩きながら言う。怪我の有無を抜きにしても痛いって。姿はズタボロだが、勝利した興奮からかやたらに元気だ。

「俺はただの鍛冶屋なんだけどねぇ。」

「そこらの鍛冶屋があんなに上手く槍を扱えるもんかい。」

　そりゃそうだ。俺は苦笑する。

「まぁ、色々あってな。あんまり吹聴はしないでくれよ。」

「わかってるよ！それじゃ戻るか！」

「ああ。」

　隊長を先頭に、最奥部から出ていく。リディさんは俺のすぐ後ろだ。どこかに１匹残ってて襲いかかられたりしたら目も当てられないからな。

　最奥部から出ていくと、広間でも丁度最後のゴブリンが倒されつつあった。さっき見かけなかったルロイの姿もある。脇道にでもいたのかな。

　ルロイはこっちをチラッと見ると、そっと頷く。俺も軽く頷いてささやかに互いの健闘を称え合う。手が空いた兵士達数人が、無事俺たちが出てきたのを見て歓声をあげると、それは広間中に広がった。

　俺たちは歓声の中、そのまま広間を突っ切り、来た道を戻って洞窟の外に出る。先に１人報告に走らせたのだろう、そこにはマリウスが満面の笑みで俺たちの帰りを待っていた。

　そばにはフレデリカ嬢もいて、俺が出てきたのを見てホッとした顔になった後、リディさんを見てむくれたような顔をする。

　隊長達はマリウスの前に整列して

「エイゾウ殿、リディ殿の助力もあり、魔物の親玉を無事討ち取ってまいりました。残りは今ルロイ様が掃討しております。ですがもはや時間の問題かと。」

　隊長が正式に報告を述べる。フレデリカ嬢はそれを書き留めているようだった。

「うむ。よくやってくれた。」

　マリウスは鷹揚に頷くと、全員に起立を促す。

「とりあえず、皆が戻ってくるまで、体を休めていてくれ。」

「はっ。かしこまりました。」

　隊長達は敬礼をして、洞窟の前の広場の方に向かっていく。俺とリディさんもそちらに向かおうとすると、マリウスに呼び止められた。

「ああ、諸君らはこちらへ。」

　と、前線指揮所なのだろう、駐屯地にあるよりはかなり小さいが、それでもそこそこ立派な天幕へ案内される。俺とリディさんは顔を見合わせると、マリウスの後をついていった。

「ついてきてもらったのは他でもない、褒賞の話だ。」

　天幕に入って他の目がなくなると、マリウスはそう切り出した。マリウスの近衛――つまり使用人の人は何人かいるが、ここにはフレデリカ嬢もいない。

「”エイゾウ”には鍛冶以外の仕事もさせてしまったからな。」

　マリウスはそう続ける。俺を「エイゾウ殿」ではなく、「エイゾウ」と呼んだということは、俺もそうしていいということか。

「なに、そもそも呼ばれた時点である程度は槍働きも覚悟してたよ。親玉を倒したのは俺じゃなくて、他の誰かになるってことも。」

　それならばと、俺もいつもの口調で話す。リディさんがびっくりしてるな。口調にか話した内容にかは分からないが。どっちもか。

　さっき隊長は俺が仕留めたとは言わずに、俺とリディさんの助力もあって仕留められたと言った。記録的には俺とリディさんは協力までで、仕留めたのは他の誰かと言う話でも別におかしくはない。

「察しが良くて助かるよ。」

　マリウスは少し困ったような、悲しいような顔をして言う。本当は俺が倒したことに出来たらいいのだが、そう出来ないことをすまないとは思っているのだろう。

「気にするな。俺にはその気持ちだけで十分だよ。」

　俺は本心からそう言った。

「ありがとう。まぁ、そんなわけでこの件に関する褒賞の話を、あのお嬢さんのいる前でするわけにいかなくてね。」

「そんなこったろうと思った。」

　フレデリカ嬢の前で話をすると、それが記録として残りかねないからな。彼女はあくまで国から派遣されたお役人であって、エイムール家の家臣ではない。エイムール家の不利になるかどうかは、彼女からすればどっちでもいいのだ。

「で、リディさんまでついてこさせた理由はなんだ？」

　単に俺に対する扱いの話なら俺にだけ話をすればすむわけで、わざわざこんな裏側を見せる必要はないはずだ。

「そこはちょっと彼女から依頼された、もう１つの依頼に関わってくるんでね。それと怪我の手当をさせよう。」

　マリウスはウィンクしながら言う。カミロや俺みたいなオッさんと違って、イケメンがやると似合うもんだなぁ。俺はマリウスの近衛の人に手当を受けながら、そんな益体もないことを考えるのだった。

## エルフの里と彼女の依頼

2019年1月22日

　マリウスは話を続ける。

「ある程度話を聞いているかも知れないが、俺たち討伐隊が派遣されてここに来るよりも前に、大量発生は起きていて、すでに被害は出ていた。もちろん、エルフの里だ。」

　俺は怪我の手当を受けながらチラッとリディさんの方を伺うが、特に表情に変化はない。

「その時にはなんとか食い止める事ができたようなんだが、被害があまりに大きくてな……」

　その時にあの剣を使ったんだな。命がいるという事だったから、犠牲になった人がいるのだ。

「里の人数が激減してしまって、このままでは立て直しも無理だ。そこで、このエルフの里は放棄され、里の人達は他の里などに移動することになった。」

「そこの洞窟は？」

「国が管理することになる。里も朽ちるに任せると野盗なんかが住み着きかねないから、そっちに軍を駐屯させて、洞窟と今俺たちが駐屯している広場は主に新兵用の演習場として使われる。」

「……ああ、無限に実戦の相手が生まれてくる演習場、ってことか。」

「その通り。」

　どれくらいの頻度で湧いてくるのかは知らないが、エルフ達だとどうしても普段の生活もあるだろうから、そんなには洞窟に行くことも出来ない。であれば、気がついたらわんさか湧いてた、と言うこともあっただろう。

　その点、軍の訓練ということなら２日に１回ほど潜ったり出来るだろうし、そうして中を掃討すれば、滅多なことでは強力な魔物が湧いてくることはなさそうだ。

　今までそうしてこなかった理由は気になるが、里に気を使っていたとかなんだろう。

「それで、俺にリディさんから頼みたいことってのはなんだ。」

「率直に言えば、リディ殿をお前の家に住まわせて欲しいんだよ。」

「は？」

　俺は間抜けな声を上げる。いや、エルフ達は他の里に移るんじゃなかったのか？

「この里の人達は他に移ってしまう。そうすると、エルフの人々の知識を借りたい時にはより時間がかかることになる。」

「ここが一番、都に近い里だったのか。」

「そうだ。なので、１人は近いところに残しておきたい。それなら都に住んでもらうのが一番だが、エルフの人達はそうはいかないらしいじゃないか？」

「はい。」

　リディさんが頷く。エルフは魔力の補充がいるからな。都みたいに魔力が希薄なところだと、数日の滞在はともかく住み続けるのは厳しいだろう。厳密には数日に一回、黒の森まで来て補充すればいいのかも知れないが、効率は良くないな。

　マリウスは話を続ける。

「それが出来るならそもそも都に住んでるだろうしな……で、聞いてみれば都から一番近い場所だと黒の森、つまり、お前の家が一番都合が良いって聞いてな。彼女からの依頼ってのはそれだ。」

　再びリディさんがコクリと頷く。条件に合致するところとなると確かにうちがベストではある。

「リディさんは良いんですか？」

「エイゾウさんのご迷惑でなければ。」

「迷惑ということはないです。ただ、里の人達と離れることになりますよ。」

「ええ。分かっています。」

　家族とかもいるだろうに、そのあたりはいいのかな。でもそのあたりで複雑な事情があったらと思うと、聞くのも

「分かった。引き受けよう。」

「ありがとうございます。」

「俺からも礼を言う。」

　リディさんとマリウスが礼を言ってくる。

「それには及ばないよ。」

　俺は手を振って応えた。リディさんが来てくれることは、うちにもメリットがある。多分「借りたいエルフの知識」ってのは魔法周りだし、それは今のうちにはないものだからな。それで魔法まわりの現象については全く無知のままで過ごしてきたのだし。

　リケも魔力を応用した鍛冶ができるし、Win－Winと言うやつだ。

　こうして、「追加の依頼」の話は終わった。マリウスは準備金をなにがしかの名目で用立てると言ってくれたのだが、それは断った。

　うちに住んでもらう以上は家族でありたい。準備金が用意される家族なんて、俺は１つの事例しか知らないからな。俺にそのつもりはないのだから、受け取るわけにはいかない。

「鍛冶の仕事した分はちゃんと貰うからな」とはちゃんと言っておいたが。

　マリウスたちと話し終えて天幕をみんなで出ると、討伐隊の他の面々も洞窟の外に出てきていた。

「うちに帰るまでが遠征」かどうかはともかく、今回のメインミッションについてはこれで完了である。

　俺たちが天幕から出てきたのを見て、

「集合！」

　とルロイが号令をかけた。怪我をした兵士と、その手当をしているもの以外がずらりと並ぶ。俺とリディさんはそそくさと列から遠ざかった。

「諸君、今回は大変にご苦労だった。諸君らの働きのおかげで無事にこの地に巣食う魔物共を一掃することができた。」

　居並ぶ兵士たちにマリウスが演説し、それをフレデリカ嬢が書き留めている。国からのお目付け役でもあるのだろう。

　彼女にその認識があるかは甚だ怪しいところだが。

「出発前に話した通り、諸君らに思いのままの報奨を与えることはできないが、今回の経験で得たものは多いと私は信じている。」

　前の世界だと「やりがい搾取」と言われかねないが、今回のこれはお互いそれで納得せざるを得ないだろうな。実際に、実戦を経たことがあるかどうか、と言うのは大きいと思うし。

「今回は幸いにも命を落とすものはいなかった。だが、己の身を捧げて重症を負ったものはいる。彼らの献身と勇気を拍手で讃えてくれ！」

　ワッと拍手が巻き起こる。俺とリディさんも拍手をした。

「さあ、それでは帰還しよう。凱旋だ！」

　再び拍手と歓声が巻き起こり、それはいつまでも続くかのように思われたのだった。

## 戦の始末

2019年1月23日

　喜びの喝采を上げた後、兵士達は駐屯地へ戻る。リディさんはエルフたちと一緒に一旦里へ戻り、明日改めて駐屯地へ来て一緒に帰る事になった。

　駐屯地に戻ってくると、サンドロのおやっさんたちが食事を用意して待っていた。そう言えば、昼なんかとっくに過ぎている。

「みんなお疲れさん！さあ、しっかり食ってくれや！」

　おやっさんが兵士達の喧騒に負けない大声で叫ぶと、緊張が解けて急に空腹を意識した兵士達が簡易食堂に走って向かっていく。

「そんなに慌ててもメシの量は変わんねぇぞ！」

　おやっさんがそう言って、場は残った兵士達の笑いに包まれた。

　俺はちょっと先にやっておきたい事があるので、出張所に向かう。そこに護衛してくれた部隊の隊長が「おいアンタ！」と声をかけてきた。

「今日は本当に助かった。それと……すまないな。」

　隊長は眉根を寄せている。隊長はホブゴブリンを倒したのが俺だということを知っているから、その手柄が俺に来ないのを気に病んでいるんだろう。

「なに、一介の鍛冶屋のおっさんがそんな名誉貰っても嬉しくはないから、別にかまわんのさ。金にならんしな。」

　俺は笑いながら右手を差し出した。隊長は困ったようなはにかんだような顔でその手をグッと握りしめてくる。今までの経験が伺える、ゴツゴツとした手で。

　戦いでの栄誉はチートで賄っている俺なんかより、こう言う人が貰ったほうが良い。俺は改めてそう思った。

　出張所に戻ると懐の女神像を棚に置いて、今回の無事のお礼を言っておく。

　槍のほうも予想外に世話になったので名残惜しいが、心の中で礼を言った上で柄を外して穂先だけにした。こいつは家に帰ったら、もう一度柄と石突をつけてやろう。

　俺は指揮所に向かう。先にこっちに来たほうが効率は良かったのだが、先に女神像を棚に戻しておきたかったのだ。指揮所に入ると、喜びと興奮と、そして明日の撤収のための準備でなかなかに騒がしい。

　俺はぐるりと見回して、机にかじりついているフレデリカ嬢を見つけた。ちまちま物書きをしている。彼女はこれから向こう１週間ほどは忙しいはずだ。一番休めるのは帰還中の馬車の中かも知れない。

　心苦しいが、これも仕事なので俺は話しかける。

「フレデリカさん、ちょっと良いですか？」

「あ、エイゾウさん。はいです。ちょっとだけお待ちくださいです。」

　フレデリカ嬢は帳面への書き付けを終えると、こちらに向き直った。途中で別の話すると、元の仕事に戻った時に何してたっけ、ってなるよな。

「なんでしょう？」

「今日の修理の有無を確認したいのと、片付けた鍛冶場の資材やらを片付ける人手がちょっと欲しいんです。」

「ああ、なるほどです。」

　フレデリカ嬢は机の上の書類をバサバサとめくって、１枚を眺めながら言った。

「ええと、今日は修理はないです。壊れた武具はいくらかあるんですけど、帰りは予備でまかなって、戻ってからまとめて修理に出すので間に合いそうなのです。エイゾウさんには申し訳ないですけど。」

　ここで直すと俺に払う金がかかるからな。俺から見れば、その分儲けられたのがなくなるってことではある。

「いえ、お気になさらず。今日はもうヘトヘトなんで、むしろありがたいくらいですよ。」

　これは謙遜やら遠慮ではなく、偽らざる心境だ。一応普通に行動はできているが、さすがに戦闘までこなして、さあ修理だ！と言えるほどの元気はない。

「ありがとうございますです。撤去に使う人員は後で向かわせますので、その者たちにお任せくださいです。」

「わかりました、ありがとうございます。フレデリカさんも根を詰めすぎないように頑張ってください。」

「はいです。」

　フレデリカ嬢はこっちがホッとするような笑顔で笑いながら言った。その朗らかな笑顔に見送られて、俺は指揮所を出る。修理がないなら後は片付けるだけだな。

　出張所に再び戻って、火床の炭やら

「戻って力仕事させちゃって悪いね。」

「いえいえ。これも仕事ですから。」

　まだまだ若い感じの兵士たちは２人１組で出張所の中の物を運び出していく。その間に俺は棚の女神像やらをしまいこんで、張っていた布をたたみ、出張所は姿を消した。

　短い間だったが、自分の作業場がなくなると少し物悲しさがある。所々に残った道具の設置跡が、廃工場を見たときのような物悲しさを余計に掻き立てている。

「世話になった。ありがとうな。」

　その跡にそっと手を置き、礼を言って、俺は出張所を後にした。

## 都への帰還

2019年1月24日

　自分の天幕に戻る途中、馬車と騎兵が数騎出ていくのが見えた。恐らくは今回の先触れとして、先んじて帰還するのだろう。

　その日の夜はそこかしこで盛り上がる姿が見られた。篝火のそばで踊る者、歌う者など様々だ。酒は持ってきてないようなので、この盛り上がりようでありながらも全員

　俺はそんな様子を眺めながら、おやっさんやマティス達補給隊と一緒に夕食を摂っている。遅い昼飯として食べたあれ、もし今日に殲滅が出来なかった場合は夕食になるはずだったらしい。後は帰るだけなので、昼夕両方のメシが出た、と言うわけだ。

　その分おやっさん達は仕事が増えているが、おやっさんは

「なぁに、１回作るも２回作るも変わんねぇよ。」

　と笑っていた。絶対そんなことないと思う。

　時間が遅いので、今日の分の書類をやっつけたフレデリカ嬢も一緒に食べている。なんでかは分からんが俺の隣に座っていて、懐いた子犬さながらである。ディアナに見せたら、俺の肩を連打しつつ連れて帰るって言いそうだな。

　話は自然と今日の勝利についてが主で、ついていった俺は主におやっさんと若い衆に色々聞かれたりした。もちろん、最後誰がホブゴブリンを倒したのかについてはぼかしておいたが。

「それじゃあ、エイゾウは大した儲けにゃなんねぇなぁ。」

　おやっさんがそう言う。

「そうでもないよ。」

「そうか？まぁ、エイゾウが納得してんなら良いけどよぅ。」

「ありがとな、おやっさん。」

「おう。」

　おやっさんが珍しく照れている。若い衆２人が茶化して怒鳴られ、俺達は大いに笑うのだった。

　翌朝、支度を終えた俺が馬車の方へ向かおうとすると、そこにリディさんが待っていた。

「リディさん、おはようございます。」

「おはようございます。」

　俺が挨拶をすると、ふわっとした声で返事を返す。荷物を持ってあげようかと見てみると、背負い袋１つっきりで他には何も持っていない。

「あれ、随分荷物が少ないんですね。」

「ええ。元々私達はそんなに物を持たないですし。」

　そうなのか。寿命が長いと物に対する執着が減るとかあったりするのだろうか。手持ち無沙汰になってしまった。

「あ、そう言えば。」

　リディさんが少し慌てた感じの声を出す。

「例の件、あれは他の里に移ったものがやってくれることになりましたので、心配いりませんよ。」

　そう俺に言ってくるのだが、はて、例の件とはなんだろう。……ああ。

「作物の種の話ですね。」

「ええ。カミロさんのところに届けてくれる手はずになっています。」

「状況が状況ですし、別に気にしなくて良かったんですけどね。」

「いえ、そんな真似はできません。」

　最初にうちに来た時には、もう里を放棄することが半分確定していたのだろうから、あの要求を飲んだのもその辺りを考慮の上、ってことか。

　当初はリディさんがうちに来る話ではなくて、遠くに行ってもリディさんがカミロのところに行く予定だったのかも知れないが。それを考えるとあの条件はちょっと失敗だったかも知れない。

　今後似たような条件を出すときは居住区域が街からどれくらいのところなのかは聞いておこう……。

　俺とリディさんの次にマティス、その次はフレデリカ嬢が来て、最後に調理場の片付けがあったおやっさん達がバタバタとやって来て馬車に乗り込む。

　フレデリカ嬢は乗り込むなり、渡してあったクッションをお尻の下に敷いた。まだ持ってたのね、それ。

「いやぁ、エルフってのは

　おやっさんがストレートに感想を述べた。前の世界だとセクハラと言われかねない内容なので、俺は内心ヒヤヒヤする。

「なるほど、こんな別嬪の嫁さんだったら、貰える金は少なくても大儲けだな！」

　ガハハと笑いながらおやっさんが言う。その瞬間にフレデリカ嬢がギギギと壊れたブリキ人形みたいに首を回して、こっちをじーっと見始めるのが分かった。ちょっと怖いから勘弁して欲しい。

「いや、嫁とかそんなんじゃないよ。わけありで隠遁生活しているようなおっさんと添い遂げるとか可哀想だろ？」

　俺はしかめっ面で否定する。大きな影響を及ぼすことはないと聞いていても、俺はこの世界ではイレギュラーであることは変わりない。そんな俺が所帯を持つ、と言うのはまだちょっと考えられないな。

　こんな理由言ったところで、誰も理解できないから言えないのが辛いところだ。

　俺がそう言うと、フレデリカ嬢が視線を外すと同時に、今度はリディさんがじっとこっちを見はじめた。今日はなんなんだ一体……。

　この話以外には特に俺がヒヤヒヤするような話題も出なかった。

「エルフの里が被害を受けたらしい」「それに伴ってリディさんが引っ越しして、それは別に結婚とかではない」と言う２点を考えたら、何があったか多少は想像がつく。そんな地雷原に突っ込んでいくやつもそうそういない。

　こうして帰還の２日間、時折おやっさんがデリカシーの無さを発揮することはあれど、特に気まずすぎる雰囲気が場を支配することもなく、馬車は無事に都へと向かっていった。

## 凱旋

2019年1月25日

　洞窟の駐屯地を出てから３日目。今日はいよいよ都に戻る日だ。朝は皆いつもどおりだったが、途中の水場での休憩の時には頭を洗ったり（もちろん水で流すだけなのだが）顔や体を濡らした布で拭ったりと、出来る範囲で身ぎれいにしている兵士の姿が多かった。

　休息が終わって再び隊列が進み出すと、やがて、都の向こうにそびえる山脈が見えてくる。あれが見えてきたらもう都までは大した距離はない。それを見て、

　風を切って走るような速度ではないから酔うようなことはないが、この調子だと日が沈むよりかなり前に都に到着しそうだ。

　あれこれしていたら今日中には家に帰れそうにないのは変わらないので、俺とリディさんにはあんまりメリットはないが、兵士やおやっさん達にはありがたいことだろう。

　そして、都の外壁が見えてくる。いよいよだ。隊列は妙な静寂に包まれ、馬の蹄と馬車の車輪が回る音だけがやけに響いて聞こえる。その緊張と静寂は壁の門に近づいた時に破られた。

「討伐隊が帰ってきたぞ！」

　門の上で見張りをしている兵士が叫ぶ。街に入ろうと列をなしていた様々な人達が一斉にこちらを振り返り、やがて拍手と快哉を叫ぶ声が辺りに満ちていく。

　俺達の隊列はその中を今度はゆっくりと進んでいき、優先して門をくぐっていく。それに対して不満を言う者は俺が見た限りではいない。皆が積極的に道を開けて通してくれている。

　喝采は隊列よりも早く都の中にも広がっていき、通りを行く間、俺達はずっとそれを聞き続けることになった。

　帰ってきてすぐにこの歓迎っぷりは先に戻った隊のおかげだろう。先に俺たちが勝利して戻ってきたことを喧伝してくれていればこそだ。

　その喝采は都の内壁の門をくぐっても続き、やがて最初に駐屯していた広場に辿り着くまで止まないのだった。

　広場にたどり着いて、兵士達が整列する。先に戻っていた隊の連中も一緒だ。俺達補給隊はその後ろに並ぶ。内壁の内側は貴族が多く居を構えていることもあり、高級住宅街的な要素もあるのだが、着衣から判断してお使い中の使用人をはじめ、貴族と思われる男女も見物に来ているようで、なかなかに騒がしい。

　物珍しさでキョロキョロしていると、数人と目が合う。最初は俺を見ているのかと思ったが、隣に立っているリディさん――つまり、エルフが珍しくて見ているのだとすぐに気がついた。ただし１人を除いて。

　侯爵閣下は意外と暇なのだろうか。ごまかしが効かないくらいに目があったので会釈だけしておくと、ニヤッと笑って頷いた。悪いおっさんじゃないんだよな。

　キョロキョロを続けていると、反対隣のフレデリカ嬢に服の裾をクイクイと引っ張られたので、俺はキョロキョロするのを止めた。

　踏み台（馬車に乗り降りするときに使うものをそのまま持ってきている）が用意され、そこにマリウスが上る。ざわついていた場が水を打ったように静まり返る。

「諸君、今回の遠征は誠にご苦労であった。我々が向かう以前に、エルフの里に多大なる被害が出ていたことは非常に残念に思う。犠牲者に黙祷を捧げたい。」

　俺たちはみな目を閉じて、リディさんの知人、もしかしたら家族も含まれるかも知れない里の犠牲者に黙祷を捧げる。静かなので、見物人たちも黙祷してくれているようだ。

「しかし、諸君らの尽力で

　兵士たちが剣を抜いて捧げ剣の敬礼をする。後ろからでも割と壮観だ。俺たちは文民なので、軽く頭を下げるだけにしておいた。無礼にはなるまい。

　再び周囲がワァっと沸き立つ。これでマリウス、つまりエイムール家の出征が成功したことが上流階級にも知れ渡ったわけだ。こう言うセレモニーで成功を広告しておくことで、将来色々有利なんだろうな。

「それじゃあまたな！絶対店には来てくれよ！」

「ああ、うちの家族と寄らせてもらうよ。」

　おやっさん、マーティンとボリスの３人と手を振って別れる。１週間ちょいとは言え、出来た知り合いと別れるのは少し寂しいものだな。

「エイゾウさん、お世話になりましたです。仕事が早くて助かりましたです。あと、クッションも。」

　フレデリカ嬢の荷物が膨らんでると思ったら、あの簡易クッションを失敬してきたようだ。そんなに気に入ってもらえるなら、もうちょいちゃんと作ればよかったな。

「フレデリカさんは今から大変だと思いますが、食事と睡眠はしっかり取らないとダメですよ。美しいレディの嗜みです。」

「はいです。わかりましたです。」

　フレデリカ嬢は愛くるしい笑顔で笑いながら言う。俺は思わずくしくしと頭を撫でてしまったが、フレデリカ嬢に嫌がる様子がないのでしばらく撫でた後、握手をして別れた。

　デルモットやマティスたちはこの場の後片付けがある。邪魔になるのも忍びないので、軽い挨拶にとどめておいた。デルモットはともかく、マティスはエイムール家の人間だし、会うこともそれなりにあるだろう。

　他の兵士たちも片付けをしはじめていて、見物人もいなくなった。侯爵閣下もいつの間にか姿を消している。そんなバタバタとした別れの余韻を感じていると、マリウスの近衛、つまりはエイムール家の使用人が呼びに来た。

「エイゾウ様、ご主人様が家までお連れするようにと。」

「わかりました。ありがとうございます。」

　さて、俺ももう一仕事だな。そんなことを思いながら、俺はリディさんと一緒に使用人の後をついていった。

## 成功報酬

2019年1月26日

　使用人の女性に従って、内街の道を行く。それなりに喧騒はあるが、内壁の外と比べると段違いに静かである。今はエルフのリディさんがいるから、余り注目を集めさせなくて済むのはありがたい。

　いつもは馬車に乗っているのでゆっくり見る暇がないが、こうやって低い視線で見てみると、なかなかに楽しいな。

　基本的には石造りの家が多くて、馬車の通れない道は結構入り組んでいる上に壁が高い。これは日本の城下町が迷いやすいようになってるところがある、とかと同じ話だろうか。

　気になって使用人に聞いてみると、

「まぁ、そう言う目的がないでもないですが、真実はもっと単純です。」

　という答えが返ってきた。

「と、言うと？」

「今は外壁が出来ましたが、大昔はこの辺りは町の端っこだったんですよ。なので、皆が適当に建物を建てた結果、こうやって道が複雑になったわけです。」

「なるほど。守りには都合がいいから、建物を綺麗にするときも区割りはそのままにしたってことですか。」

「ええ。その頃には皆それなりの地位になっていて、いまさら土地を取り上げるのが厳しかったのもあったらしいですけど。」

　なかなかに現実的な話である。翻って言えばここは大きな戦禍によって、焼け野原になってしまったことはないと言うことだ。そうなったら取り上げるも何もない。ちゃんとした地籍図なんてないだろうし、ここぞとばかりに区画整理が始まるだけだろう。

　ともあれ、そんな曲がりくねった道を行くと、使用人が「こちらです」と、道の脇にある金属製の扉を開けた。おそらくは勝手口と思われる。俺とリディさんは扉をくぐった。

　はたしてそこは勝手口であった。入るとこじんまりとした部屋になっている。テーブルが置いてあるがやけに天板が分厚いし、窓は窓というより

　窓のフチは部屋の内側の方が装飾のように斜めに落とされているが、これって外から中に矢を射かけやすくしてあるんだよな。

　部屋の出口は片方に重厚そうな金属の扉が一つあるだけだし。これはもしや。

「裏口からの侵入者を撃退する仕組み……？」

「よくお分かりになりましたね。そうです。裏口からあっさり突破されたんじゃダメですからね。」

　使用人は笑いながら言った。この街の貴族が皆そう、と言うよりはエイムール家が武勲で身を立ててきた家だからだろう。

　使用人にまでその薫陶が行き届いているのはドン引きすべきか、感銘を受けるべきなのか、少し迷うところではある。

　そのまま俺とリディさんは以前来た時に入った応接間まで通された。「こちらで少々お待ちください」と使用人が退出していく。

　相変わらず応接間にしては質実剛健を絵に描いたような内装だが、俺みたいな貴族じゃない人間にとってはこっちのほうが落ち着くからいい。

　リディさんと今後について話をするが、うちでしばらく一緒に暮らしていたので、誰が暮らしててどういう生活をしてるか、なんかはとっくにご存知である。

　なので、そう言う話はちょっとだけするに留めておいて、何がしたいかを聞くことにした。どうやら植物を育てたいらしい。

「畑の

　俺がそう言うと、

「いいんですか！？」

　と目を輝かせる。俺は頷いた。

「むしろ、管理してくれる人がいてくれたら助かります。俺とリケは鍛冶、サーミャとディアナは狩りと採集ですし、ちゃんとした知識がないので、耕したはいいものの放置気味でして。」

　だからこそ、ほとんど手入れしなくても平気なペパーミントを選んだのだ。リディさんが来てくれるなら、アドバイスに従って地植えにしなかったのは正しかったな。

「なるほど。じゃあ、任せてくださいね。」

「はい。お願いします。」

　こうして、我が家の食料確保手段が、狩猟採集と農耕という２本立てで行われることになった。

　とは言っても、朝植えて夜にはトマトがなってると言う話ではないので、しばらくは狩猟採集がメインの確保手段であることに変わりはないし、カミロからの購入も続けないと、仮に畑が上手くいきはじめても大人５人分の食料確保は難しいだろう。

　そんな話をしていると、マリウスが使用人を２人つれて部屋に入ってきた。さっきまでの豪奢な服や見事な甲冑は脱ぎ捨てて、かなりラフな格好をしている。

「待たせたかな？それともお邪魔だったかな？」

　ニヤニヤ笑いながら、開口一番そんな事を言うので、俺は「どっちでもない」とぶっきらぼうに返した。

「２人とも疲れているだろうし、正直に言えば俺もかなり疲れてるから、さっさと話を終わらせよう。」

「そうしてくれ。」

「まずは２人に礼を言っておこう。助かった。」

　マリウスが頭を下げる。外でやったら大騒ぎになるだろうな。伯爵が一介の鍛冶屋に頭を下げる、なんてことは。家の中だからできることだ。

「で、エイゾウについては仕事として依頼した分、ちゃんと形で示さないといけないわけだが。」

「ああ。」

　俺は報酬があるから参加したのだ。まぁ、他の貴族に頼まれた時に断れるなら断ってたとも思うが。侯爵閣下に頼まれた場合は分からんな……。

「まずこれが依頼にあった分の報酬になる。」

　使用人の１人が革袋と書類、筆記用具を差し出した。中を確認すると、銀貨がたくさん入っている。金貨１枚分よりやや少ない、と言うあたりだろう。兵士はもう少し少ないのだろうから、ちゃんと修理代も含まれていると見て良さそうだ。

「確かに。」

　革袋を自分の背負い袋にしまうと、書類にサインをした。報酬を受け取ったことを示す書類で、担当者みたいなところにフレデリカ嬢の名前もある。

　これも明日からはじまる彼女の戦争の１ページになるってことか。俺はリスが餌を食べる時みたいに、書類と格闘している彼女を思い返して、心の中で応援を送った。

　俺が書類を返すと、マリウスがざっと改めて、使用人に渡す。

　これで俺の仕事も終わり……だと思っていたら、マリウスが更に話を続ける。

「で、こっちが討伐に直接参加してくれた分と、修理の歩合の追加分だ。」

　もう１人の使用人が小さな革袋を差し出してくる。中を改めようと持つと、大きさの割にやけに重い。

　その中には、金貨がぎっちりと入っていた。

## エイムール邸にて

2019年1月27日

「おいおい、これはどう言うことだ？」

「見ての通り、報酬だよ。」

「いや、それは分かるんだが……」

　俺は額の話をしているのだ。何をどうしたら洞窟に潜っていったのと、修理の歩合でこんな量の金貨になるのか。俺がそれを伝えると、マリウスは苦笑しながら言う。

「普段は金、金と言う割に、貰う正当性についてはえらく拘るよな。」

「いわれのない金を受け取るわけにはいかないってだけだ。」

「めんどくさい職人みたいな事を言うんだな。」

「そりゃ、めんどくさい職人だからな。」

「そうだった。うっかりしていたよ。」

　俺とマリウスは笑いあった。

「それは変な金じゃない。つじつま合わせなんだよ。」

「つじつま合わせ？」

　マリウスが頷いて続ける。

「エイゾウには重要なアレを作って貰ったことがあっただろう？」

　アレ……？ああ、家宝か。リディさんがいるから具体的には言及しないのだろう。

「あったな。」

「あの時は不自然にならずに動かせる金額があの額で上限だったが、今回は隠れ蓑がいっぱいあるんでな。あの時に俺が足りてないと思った分が上乗せされている。だからつじつま合わせだよ。」

「なるほどね。」

　あの時、俺に渡した金額では不足しているとマリウスは考え、今渡そうとしているわけだ。誤魔化し方も深くは聞くまい。

　ただ、普通の方法ではないだろうから、そう言う手段をとってまで用意してくれたのだとすると、これは受け取らないのも誠実ではないようには思う。

「わかった。今回は受け取るよ。」

「そうしてくれ。それはエイゾウが受け取るべき正当な報酬だ。」

　俺は金貨の詰まった小袋を背負い袋に入れた。まさかこんなおっさんの背負った袋に、しばらくは遊んで暮らせるだけの金が入ってるとは誰も思わないだろうな。

「さて。これで報酬周りの話も終わったし、エイゾウは帰るだけか？」

「ああ、もう特に用事はないな。」

「とは言っても、今日は帰りつけないだろう？」

「まぁね。宿でも取ろうかと思っているとこだよ。」

　無理に帰れなくはないが、そこまでする必要を感じてはいない。どこかに宿を取って（もちろんリディさんとは部屋は別だ）、明日の早い時間に都を出れば、徒歩でもその日のうちに家にはたどり着けるはずである。

「それならうちに泊まっていくといい。客室も空いてるし。メシでも食べながら話をしよう。」

　渡りに船ではある。リディさんを普通の宿屋に泊めても平気だろうか、と言うのは若干心配でもあったし、ここはお言葉に甘えておこう。

「すまないな。じゃあ、そうさせてもらうよ。リディさんもそれでいいですか？」

　リディさんは「都のことはよく知らないので」と頷いた。

「それじゃあ、早速だがまずは部屋に案内しよう。頼んだぞ。」

　後半は来ていた使用人２人にかけた言葉だ。２人は頷くと、「こちらへどうぞ」と俺とリディさんを先導して案内を始めた。

　２人とも女性だが、俺のチートが武術に覚えがあることを教えている。生半可な人間が彼女たちを押し倒そうとしようものなら、次の瞬間に床に転がっているのは自分だろう。怖いわぁ、このお家。

　きらびやかさはないが、剛健さのある廊下を進んで、俺とリディさんは別々の部屋に招き入れられる。

「お湯をお持ちしますので、こちらでおくつろぎください。」

「ああ、助かります。ありがとうございます。」

　遠征の間、水で濡らした布やなんかで可能な限り身ぎれいにはしていたが、同じことでも湯でやるのと水でやるのとでは気持ちよさが格段に違う。いずれ家に五右衛門風呂でも作るべきかなぁ……。

　お湯と着替え――シンプルな構造のものだったので、着替えさせて貰う必要はなかった――を貰って体を綺麗にすると、人心地がついた。俺の服は今洗えば明日の朝には乾いているだろうという話だったし、洗ってくれるということだったので、お言葉に甘えてお願いしておく。

　ベッドにごろりと横になる。久しぶりのふわっとした感触が心地よい。それにしても、道中の馬車の乗り心地は酷かった。鎖や革紐で吊り下げる懸架式はあるようだが、それ以上のサスペンションはまだないので、あの乗り心地も仕方ないものとは言える。

　だが、前の世界でも板バネは古くからあったみたいだし、そこからしばらくはサスペンションの発展もあんまりなかったようなので、板バネは少し先んじて導入しても良いかも知れない。

　そんなことを考えていると、いつの間にか意識が闇の中に消えていった。

「……ま、……さま。……きてください。エイゾウ様！」

　ゆさゆさと俺の体を揺さぶる感覚。せっかく寝てるのに、と思って揺さぶる手をそっと掴む。

「キャッ！」

　驚いた声が小さく響いて、俺は目を覚ます。目をまんまるに見開いたエイムール家の使用人と目が合った。俺は自分の肩に置かれたその人の手を上から握っている。

　一瞬状態が分からなかったが、すぐに理解して慌てて離す。

「す、すみません！」

「いえ、驚いただけですので、お気になさらず。」

　俺が謝ると、使用人は微笑んで言った。

「私、どれくらい寝てましたかね。」

「１時間かそれくらいだと思いますよ。部屋にご案内したあと、夕食の準備ができてから、こちらに伺いましたので。」

「なるほど……。別に手首を極めてくださってよかったのに。そしたら一発で目が覚めました。」

「エイゾウ様が不埒なことをするお方なら、遠慮なくそう致します。」

　使用人はクスリと笑うと、「失礼します」と言って俺の髪をちゃちゃっと触って直し、食堂へ案内をはじめた。

　夕食はマリウス、俺、リディさんの３人でとった。話題はどうしても今回の遠征の話になる。俺は洞窟内部での出来事を詳しく語った。マリウスは興味深く耳を傾け、リディさんが時折補足を入れる。

　マリウスは指揮の方の話だ。上は上で指揮する、と言うことが大変だと言うことはよくわかった。

　いくら補給や負傷した兵士の管理、小隊ごとの指揮統制はそれぞれ専門がいるとしても、全体の統括指揮はマリウスの仕事だからな。一部をルロイが肩代わりしたところで、最終的に決定しないといけないのはマリウスだ。

　今回は目標もハッキリしているし、相手も本拠地を変えるような相手ではなかったから良かったが、魔族や人間相手の戦だったらこう

　戦は世の常だし避けることは難しいだろうから、マリウスには自分を含めて１人でも無事に帰還させられる名指揮官になって欲しいものだ。そんなことを思った。

## 家に帰るまでが遠征です

2019年1月28日

　翌朝、かなり早い時間に起きて、出立の準備を整える。今日はようやく家に帰る日だ。もうかれこれ１０日間も家を空けていた事になる。

　家に帰れるのが確定すると、一刻も早く帰りたくなってくるのはなんでだろうな。それだけあの家が俺の居場所だということか。

　マリウスからは朝食も一緒に、と言われていたのだが、昨日の今日では俺以上に疲れているだろうし、その分休めと断っている。その代りと言ってはなんだが、俺から是非にとお願いして、朝食は使用人の人達と食べることになったのだ。

　もちろん使用人用の食堂の場所は知らないので、自分に充てがわれた部屋の外で待つことにする。

　部屋の外に出ると、同じく準備を終えたらしいリディさんが立っていた。

「リディさん、おはようございます。」

「エイゾウさん、おはようございます。」

　二人で朝の挨拶を交わす。家に帰りついた瞬間から、リディさんはうちの家族ということになる……はずだ。他の３人が拒否しなければの話ではあるが、３人とも普通に受け入れるだろうとは思っている。

　種族も立場も違う５人で仲良く朝の挨拶と神棚に手を合わせるのが出来たら、これほど良いこともない。

　益体もない話を２～３したところで、使用人がやって来た。ボーマンさんだ。確かこの家の使用人の中では結構偉い方の人で、恰幅がいい男の人だからよく覚えている。

「おはようございます、ボーマンさん。」

　俺は挨拶をする。ボーマンさんは少し驚いたような顔をして、

「おはようございます。エイゾウ様、リディ様。エイゾウ様が

　と挨拶を返してくれた。

　ああ、使用人の名前なんか普通は覚えないのか。でも俺はこの世界だと家名持ちではあるが、貴族ではないからな。

「そりゃ、名前を教えていただいたんですから、覚えてないと失礼でしょう？」

「そんな滅相もないことです。」

　ご主人様のご友人だからそれなりの地位にいるんだろう、と想定するのは全くおかしいことではないのだが、俺は公的には完全に何の立場もない鍛冶屋のおっさんだからなぁ。

　恐縮したおすボーマンさんをなだめながら、俺とリディさんは使用人用の食堂に案内してもらった。

　使用人用の食堂には、朝から仕事のある人と非番の人以外は、朝食時全員集まる事になっているらしい。

　ただ、非番の人も大抵朝はいつも通りの時間に起きるので、結果今仕事がある人以外はほぼ全員が集まっている事になる。

　エイムール邸はめちゃくちゃに広い家ではないが、それでも伯爵家の家屋である。２桁に近い人数が集まっていた。遠征隊にいたマティスの姿も見える。彼はこの屋敷の馬番だからな。

　皆が俺が鍛冶屋に身をやつした元貴族だと思っているとすると、状況的に前の世界の話のテンプレにある「世間知らずのお嬢様がハンバーガー店に行きたがる」みたいなことにちょっとなってしまっているが、気にしないほうが良さそうだ。

　朝食の時に若い女の子に聞かれたので、遠征のときの話をした。お転婆はエイムール家の気風なのだろうか、陣地での暮らしよりも最後の洞窟制圧の話を聞きたがった。

　エイムール家の使用人ではあるが、念の為ホブゴブリンを倒したのが俺だということは言わないでおいた。「暗かったし、隊長だったか他の誰だったかわからない」ということにしてある。リディさんはやや不満げだったが、理由はきっと理解してくれるだろう。

　朝食を終えて、使用人の皆の仕事の邪魔にならぬよう（ボーマンさんに言わせれば「お客様のご出立をお手伝いするのも仕事です」ということだが）、さっさと出立することにする。

　そこへ、見知った顔が現れた。

「カミロじゃないか。」

「おう、昨日こっちで都合があってな。討伐隊が戻ってきたって聞いたんで、今日戻るんでついでに送ってやろうか聞きに人をやったら、もう出発するって言うもんだから慌てて来たんだよ。」

「ああ、それはすまないことをしたな。徒歩で帰るつもりにしてたもんでな。」

「で、一緒に帰るか？」

「そうだな。お言葉に甘えさせてもらうよ。」

　マリウスといい、カミロといい、持つべきものは人の縁である。

　俺とリディさんでカミロの馬車に乗る。ギリギリで起き抜けのマリウスがやって来たので、一時の別れの挨拶だ。

「それじゃまたな。」

「ああ。またな、エイゾウ。」

　手を振るマリウスとボーマンさん達使用人に見送られて屋敷を出る。見知った馬車からの風景が流れていき、外街に差し掛かり、そこそこ早い時間だと言うのに賑やかな道を抜けて、外壁の門を出る。俺は振り返って聳える外壁と城、その背後の山脈をみやった。

　次にここに来るのはいつになるだろうか。そのときにはおやっさんの店に立ち寄ってみたいものだ。

　中にたっぷりと水を抱え、重そうにしている雲が遠くを流れていく。こちらには乳白色の空が広がり、草原とのコントラストを描いていた。いつもの通りの街道である。

　道中、カミロにも遠征について色々聞かれた。ホブゴブリンの話はカミロにも倒したのが誰かは言わないでおいたが、多分カミロのことだから察してしまうだろう。彼ならエイムール家の不利になるようなことはすまい。

　警戒は怠っていなかったが、街道では何も起こらなかった。道中のカミロの話ではこのところ人が襲われる事態が増えているらしい。

　奇妙なのは何かを探しているだけで、それを持っていないと分かるとそのまま解放することと、被害者が襲われた相手を覚えていないことだ。

　巡回を増やしているが犯人が見つかってないらしいので、「実質被害はないみたいだが、今度うちに卸しに来るときは気をつけろよ」と注意を受けた。

　森の入口でカミロの馬車を降り、手を振って別れる。あいつとは週１ペースで会うから、別れもそっけないものである。

　もはや勝手知ったる森の中を進んでいく。時折、リスみたいな小動物が木の上にいたりする。見るとフレデリカ嬢を思い出すが、これは流石に失礼だろうか。

　途中で狼や熊に出くわさないといいなと思いながら歩いていると、遠くから猛然とこちらに近づいてくる音が聞こえた。たまたまこっちに走っているのではなく、確実に俺たちがここにいるのがわかっていて、ここを目指している。

　俺はショートソードを抜いて、何が来るのかを見極めようとした。

## もう一つの凱旋

2019年1月29日

　下生えをものともせずにこちらに向かってきた足音の主は、いよいよ俺の前に姿を表した。

　虎のような被毛に覆われた獣人の女性――

「サーミャじゃないか。」

　俺は構えていた剣を鞘に収めた。緊張が一気に解けて、その分の疲労感がどっとやってくる。サーミャは俺に近づくとポコポコ俺の胸を殴り始めた。本気ではないのだろうが割と痛い。

「痛い痛い。なにするんだ。」

「拗ねてる……と言うか、どうしたら良いのか分かってないのよ。」

　突然別の方向から声がした。ディアナだ。俺は無言で殴り続けるサーミャの拳を、手のひらで受け止める。

「狩りの途中だったのか。」

「ええ。サーミャったら、”エイゾウの匂いがする”って言ったかと思うと突然走り出すんだもの。」

　ディアナは完全に呆れた様子である。サーミャが森を走るのについてきたにしては息がそんなにあがってない。体力がどんどんついてきているのか……。いや、それはともかくとしてだ。

「どうしたら良いかってのは？」

「結構長いこと帰ってこなかったんだもの。久方ぶりで嬉しいけど、どう甘えていいか分かんないってとこでしょ。」

　その言葉でサーミャは一瞬動きを止めたかと思うと、一発バシッと俺の手のひらに思い切りパンチを放った。

「痛ぇ！」

「フン。今度はもっと早く帰ってこいよな。」

　サーミャはそれだけ言うと、踵を返してノシノシという音が聞こえるかのように歩いていく。あの方角は家のほうだな。

「いいのか？」

　どうやら、サーミャは今日の狩りを中止するつもりのようなので、俺はディアナに聞いた。

「大物はこの間仕留めたし、明日になっても十分余裕はあるから平気よ。」

「それならいいか。」

　俺もサーミャが久方ぶりに帰ってきた、とかだったら仕事をほっぽり出して迎えに行くもんな。それじゃ、お言葉に甘えて一緒に帰るか。

「おい、そんなに速く歩くなよ！」

　俺はサーミャにそう声をかけながら、４人一緒に家路を歩んでいった。

　家が近づくと木々の間から煙が見えた。リケが鍛冶仕事をしてるんだろう。こうやって見ると、ある程度まで近づいたら、あとはうちまでは普通に辿り着けそうだな。あの条件を抜きにしても良からぬ輩がやってこないとも限らないし、なんらかの対策が必要だろうか。

　そんなことを歩きながらサーミャとディアナに話していると、

「必要ないと思いますよ。」

　と、リディさんが呟く。

「そうなんですか？」

「ええ。簡単に言えば、あの家には”人避け”がかかっています。招かれた客を含むあの家の者であるか、人避けが効かないほど強い力を持つ者、あるいは人避けを認識して回避できる者以外では、あの家があることが分からなくなるはずです。」

　リディさんが強めの口調で断言した。あの家にそんな能力があったとはなぁ……。この世界に来た時、俺が家を認識できてなかったのはそれだったのかもな。

　そう言えば獣はともかく、迷い人や黒の森に住んでいる獣人が家を訪ねてきたこともないな。煙は目立つから見えれば好奇心旺盛な獣人はやってきそうなものだが、来なかったのにもそう言う理由があったわけだ。

　４人で森の中を進んでいく。勝手知ったる森の中、見覚えのある木を見つけるたびに、帰ってきたんだなという実感がわいてくる。久しぶりの帰宅に感傷的になっているのはサーミャだけではないらしい。

　家について、玄関の扉を開けた。少しくぐもった鳴子の音が響く。パタパタと音がして、作業場に続く扉から出てきたのはリケだ。

「サー……親方！おかえりなさい！」

　サーミャたちが予定外に早く帰って来たと思ったらしいリケは、びっくりした様子だったがすぐに駆け寄ってきた。流石に殴ったり抱きついたりはしてこない。

「ああ。ただいま。」

　俺は返事を返しながら、家に帰ってきたことを噛み締めていた。今回は多少の怪我はあるにせよ、ほぼ無傷で帰ってくることが出来たが、次やその次があった時にそう出来るとは限らない。せっかくの二度目の人生なのだ、大事にしていかないとな。

「さて、改めてということになるが。」

　荷物を下ろしてすぐに今のテーブルに集合した皆を見回して俺は言う。

「リディさんがうちの家族に加わることになった。詳細はあとで話すが、どうか承知して欲しい。」

　そんなことはないと思うが、万が一にも嫌がられたらどうしよう。そう思って、サーミャ、リケ、ディアナの３人の表情を伺うと、呆れたようなニヤけているような表情をしている。

「絶対こうなると思ったんだよ。」

「親方だもんねぇ。」

「そうねぇ。エイゾウだものねぇ。」

　納得の仕方に引っかかるものはあるが、拒否ではないのでホッとした。

「それじゃ、リディさん、いや……」

　家族になったのだから敬語はなしだ。親しき仲にも礼儀ありとは言うが、これは礼儀の範囲から外してしまおう。それがエイゾウ工房の流儀だからな。

　リディ以外の４人の声が重なる。

「「「「エイゾウ工房へようこそ、リディ。」」」」

# 第５章　荷車と魔族の刀編

## 久方ぶり

2019年1月30日

　リディを迎え入れる最初の挨拶は済んだので、今日はもう皆仕事を休みにして歓迎会をしようと言うことになった。

　その前にそれぞれ皆それなりに汚れているので、先に汚れを落とすことにした。この魔力併用かまどで湯を沸かすのもなんだか懐かしい気がしてくる。

　沸かした湯をそれぞれに配って、各自の部屋で体を拭いて汚れを落とす。リディはしばらくは来客用の部屋が自室だ。

　やはりと言うか、我が家唯一の男である俺が一番早く体を拭き終える。とりあえずは夕飯の用意を始めるか。

　１０日間のブランクがあるが、逆に言えばたったそれだけでしかないので、十分に体は動きを覚えている。ただ体が半分勝手に動くのと、懐かしい感じがするのとは別の話なのも確かだ。

　女性陣はリケとリディが最初に居間にやって来た。鍛冶仕事もなかなかに汚れるし、汗もかくからなぁ。

「親方には休んでいただいたほうが。」

　とリケが言うのを

「これも久しぶりだからやらせてくれよ。」

　と断ったりする。今日は移動だけで他には疲れるようなこともしてないし、リケはちゃんと仕事してたんだから、その分休んでくれて良いのに。

「リディと魔力の勉強するのはどうだ。これからは教えてもらい放題だぞ。」

　それを聞いてリディが頷く。人に教えるのが好きっぽいとは思っていたが、どうやらその印象は間違ってなかったようだ。

　リケもその誘惑には抗えなかったみたいで、リディと居間のテーブルで横並びに並んで魔力の流れを見る方法、というのをはじめた。

　それを見て俺は再び夕飯の準備に戻る。こう言う光景が新しいいつもになると良いなと思いながら。

　スープの仕込みが終わったので無発酵パンを作ろうと準備を始めた時、チラッと居間の方を見ると、サーミャとディアナも居間に戻ってきてリケとリディの勉強会に加わっている。

　見ている感じではリケが一番飲み込みが良くて、次がディアナ、サーミャといったところか。これは種族的な魔力との相性の違いも結構ありそうな気はする。

　そんなこんなの間に夕飯が完成したので、皆でテーブルに並べていく。

　流石に昨晩食べたエイムール邸での食事のような豪華さ（と言っても家風が家風なのでかなり質素なほうらしいのだが）はない。リディも食べたことがあるエイゾウ工房のメニューと味だ。歓迎会なので果実を漬け込んだブランデーなんかも大盤振る舞いする。

　歓迎会は結局俺の遠征報告会も兼ねてしまった。３人が聞きたがったからである。洞窟での戦闘はこの３人にはごまかす必要もないので、俺が倒したことは正直に話した。

　リディがうちに来ることになった経緯も、遠征報告の流れで話すことになった。

「ここには私たちもいるからね。何でも言ってね。」

　それを聞いたディアナが泣きそうな顔でリディに言っている。リディ以外ではサーミャが微妙ではあるが、皆自分の意志でここに来てるからなぁ。選択肢のない状態でここに来ざるを得なかったのはリディだけだ。

「男はエイゾウだけだし、気楽に過ごしていこうや。」

「サーミャはもうちょっと淑やかさを学んだほうがいいと思う。」

　サーミャとリケもリディを励ましている。むくれたサーミャをリケがからかったり、それをディアナがなだめたりして、見ているリディも笑ったりしている。

　これからの生活は多分きっと上手くいく。根拠はないが、俺にはそう確信できた。

　翌日、久々に自分のベッドで眠ることが出来た俺は、スッキリとした気分で水汲みに出かけた。森の朝の空気が気持ちいい。湖で水を汲んで戻ってくると、リディが木に手をおいて魔力を摂取していた。

「おはよう。リディ。」

「おはようございます。」

　昨日の歓迎会の時、リディに敬語はいらないと言ったのだが、「これが素の口調」とのことだったのでそのままだ。

「昨日の今日だが、生活に不安とかあったらすぐに言ってくれよ。」

「みなさん親切ですし、前に来た時を考えたら不安はありません。」

「そうか。それならいいんだ。」

　それで再びお互いの作業に戻る。リディとはこんな距離感で接することが増えるんだろうな。

　朝の支度やらメシやらを終えて、今日から鍛冶仕事を再開する。

「と、その前に。」

　俺は遠征のときの荷物から、遠征中に作った女神像を取り出して、神棚に

「こんなのいつ作ったんだよ。」

　サーミャが呆れた口調で言ってくる。

「遠征の行き道でだよ。時間があったからな。」

「親方こう言うのも作れるんですねぇ。」

「なかなか

「そこはかとなく魔力を感じます。」

　女性陣に口々に品評されてはいるが、不評ではないので、そのまま全員で拝礼をした。

　さて、今日も頑張りますか。

## いつもの仕事

2019年1月31日

　朝の拝礼が終わったら、サーミャとディアナは狩りに出かけていった。

　リケは昨日までの１０日間で十分な一般モデルの在庫を作っているし、今回の遠征で俺がかなり稼いだこともあって、納品のための製作は止めてリディと魔力のこめ方を練習することにしたようだ。

　俺は当然高級モデルを作る。今日から４日間それに打ち込んだら、カミロのところへ納品へ行く予定にした。一般モデルの数だけ確保できていれば、カミロの商売としては十分成り立つからな。

　作業の準備を始めるが、出張所とは違ってテキパキと作業の準備を進めることができている。やっぱりちゃんとした作業場と、そうでないところは勝手が違うな。置いてある道具の違いも大きいのだが。

　手早く準備を終えたら、まずは肩慣らしに板金を熱してナイフを作り始める。修理と製作では多少ならず勝手は違うが、鎚を振る、と言う作業自体は変わらない。

　それでもやはり慣れた環境で慣れた仕事とあって、効率の良さは出張所とは段違いだ。うっかり特注にならないようにするのが大変なくらいである。

　俺とリケが鋼と格闘している途中、１度リディがリケと二言三言交わしたかと思うと、ふらっと出ていって、また何事もなかったかのように戻ってきた。何をしていたのか聞いてみると、ミントの様子を見に行ってくれていたようだ。

「やはりミントは生命力が強いですね。」

「そんなに？」

　俺が聞くとリディは頷く。

「ほとんど手入れした様子がないのに、すくすくと伸びています。」

　リディは少し嬉しそうな顔で言う。こう言うところは実にエルフのイメージにぴったりである。これは早めに畑をどうにかしてあげたほうが良さそうだ。

　ついでに倉庫なんかも建てるか。また２週間ほど納品を休めば、余裕を持って建設できるようには思う。家族も増えたことだし、備蓄は備蓄としてちゃんとして行きたい。乾燥が終わった肉はそっちに置いておきたいしな……。

　いっそしばらくは２週間おきと言っておいたほうがいいのかも知れない。この際建てておきたいものはガンガン建てて行くのだ。怪しい賊がウロウロしていると言うし、なるべく出くわす機会を減らしたほうが何かと不都合がない。

　不都合があるとしたら、カミロの商売に差し支えるときくらいだ。と言っても、カミロのところにはもう随分な量を卸している。

　十分売りさばけるだけの販路はあるようだが、２週間で必要になる数もそんなに多くはあるまい。困るようならまたその時考えよう。

　何本か高級モデルのナイフを作った後、俺は意識を集中させて特注モデルのナイフに取り掛かる。別に注文があったわけではない。リディの分だ。

　なんとなくの感覚、と言う状態ではあるが、魔力を取り込むようにして板金を叩き、形を出していく。

　加熱も鍛造もチートを使ってギリギリのラインを見極める作業になるが、もっと大きなものならともかく、これまで何本も作ってきた特注モデルのナイフなので流石にスムーズに製作が進む。いつもの通りに猫を

　結局のところ、高級モデルよりも少し時間がかかるくらいで製作することが出来た。これ１週間ほどで５０本量産したらなかなかに脅威だな。

「リディ。」

　特注モデルのナイフが出来たので、リケと魔力をこめる練習の続きをしていたリディを呼ぶ。

「なんでしょう。」

「これは俺が家族の証として渡しているナイフだ。なのでリディにも渡しておく。」

　リディにナイフを渡す。受け取ったリディはしげしげとナイフを眺めた。まぁ、家族の証みたいになったのは最近と言うか、護身用に渡してたらそうなっただけではあるんだが。

「めちゃくちゃよく切れるから、十分注意して取り扱ってくれ。」

　俺は自分のナイフを木材へ縦に振り下ろした。音もなくナイフが木材を唐竹割りにする。リディの目が驚きで一瞬見開かれたが、すぐに平静を取り戻したようで、落ち着いた声音で言う。

「分かりました。ありがたく頂戴いたします。」

　そして、

　今日の分の仕事を終えて、片付けをしていると作業場の鳴子がカランコロンと音を立てる。サーミャとディアナが戻ってきたのだろう。

　家と作業場を繋ぐ扉が開いて、サーミャとディアナが入ってきた。ただいまとおかえりの挨拶をする。

「今日はどうだった？」

　俺はそう聞いたが、この時間まで外に居たのだからそれなりの獲物が捕れたのだろう。

「今日は鹿だな。デカいのだ。」

「やったじゃないか。」

　サーミャが胸を張って宣言するくらいだから、かなりデカい獲物だったのだろう。そのデカさをディアナも別の方向から語る。

「その分苦労はしたけどね。」

「ほんとにご苦労さん。俺たちもここを片付けて上がっちまうから、みんな体を綺麗にしておけよ。」

「「はーい。」」

「「わかりました。」」

　俺が今日の仕事の終了を宣言すると、４人の声が響く。狩猟組と生産組で言葉が違うのが少し面白い。

　こうしてまた新しい”いつも通り”が始まるのだった。

## 増える家族

2019年2月1日

　翌朝、朝の支度と拝礼を終えたら、湖へ獲物を引き上げに向かう。前にリディがいた時と同じように５人だ。一度やっていることもあってか、スムーズに鹿を引き上げることが出来た。

　女性としては筋力のある３人とは言え、３人の時はこうスムーズにはいかなかっただろう。苦労が偲ばれるな。

　家まで運び終えたら後はいつも通りだが、今回はリディにナイフに慣れてもらうためにも俺は手伝わずに、サーミャとリケとリディの３人で解体してもらう。俺とディアナは処理の済んだ肉から家に運んだり、不要な骨やなんかを片付けたりだ。

「このナイフは本当によく切れるのですね。」

　ぼそりと、しかしはっきり聞こえる声でリディが言う。

「でしょう！親方の特注品は凄いんですから！」

　誇らしげに自慢するのは俺でなくリケだ。もうこう言うのも定番の光景になりつつあるな。

　ちゃんと作ったものを褒められるのは悪い気はしないが、気恥ずかしさはまだまだ抜けない。俺も自分の作ったものに対して、俺が作ったと心の底から言えるようになっていければ良いんだがな。

　獲物が無事に肉となったので、昼食はその肉と果実漬けのブランデーで焼き肉っぽい感じのものを作った。うちの肉食系女子（物理）には相変わらず好評である。リディも特に嫌がったりはせずに美味しそうに食べていたから、好みの味ではあるようだ。

　今度からちょっと特別な時はこっちを出していこうかな。

　昼食を終えたら思い思いのことをして過ごす時間である。俺は納品物製作のために、リケはリディと一緒に勉強のために鍛冶場で作業するので、時間が短いだけでやっていることは昨日とさして変わらない。

　サーミャとディアナは剣の稽古をするらしい。サーミャがディアナに弓を、ディアナがサーミャに剣を教えることで、いざと言うときの底上げを図っているのだ……とディアナに説明を受けた。

　家に帰る直前にカミロから聞いた話を考えると、そうしてもらえるのはちょうど都合のいい話だし、今後街道を行き来するときに、少しでも無事に帰還できる確率をあげるためにも頑張って欲しい。

　この日は俺はそこそこの数のナイフを作って作業を終えた。リケは前よりもこめられる魔力の量が増えてきているらしい。

　これは俺もそろそろ高級モデル製作からも引退だろうか。冗談めかしてそう言うと、

「いえ、素材を最大限活かすところまでは全然出来てませんので。」

　と真面目くさった顔でリケに言われた。それじゃあ、俺も追いつかれないように頑張らないといけないと思うが、俺のはチートだからな……。

　その後の２日間は俺はサーミャとディアナに注型までやってもらって、残りを俺が仕上げる方式で高級モデルのショートソードとロングソードを製作した。

　サーミャとディアナの手際がこの何日間かでまた良くなっているような気がする。大量生産の時に掴んだコツをものにしているようだ。

　これなら時折手伝ってくれると助かるな。手の空いているときにでも注型してバリを取るところまでをどんどん作っておいてくれると、後で俺かリケが仕上げるだけで済むようになる。

　そうすれば週に１日くらいは完全に手が空く日が作れて、休日にできるわけだ。夢が広がるな。

　その間、リケとリディはと言うと、少し魔力の勉強はお休みにして、中庭の畑の整備をしてくれるそうなので、お願いしておいた。いつもいつもすまないねぇ。

　そうしてカミロの店に卸しに行く日が来た。１０日でリケが作った在庫は結構な数になっている。リケも一般モデルの製作速度に関しては、かなりのところまで来ていたからなぁ。

　それらを積んで、荷車を引いていく。いつも通り、俺とリケの仕事だ。他の３人には例の謎の賊の話をして、周囲の警戒をいつもより強めにしてもらう。賊が森に入り込んでいる可能性もなくはないし。

「そう言えば、人を襲うけど大きな被害は何もない、ってのはとっ捕まえた後どうするんだろうな。」

　荷車を引きながら俺は疑問を口にした。聞いた話だけなら賊は特に困るような被害は出していないのだ。

「襲ったと言うなら、多少の怪我くらいはさせてるだろうし、そっちの処罰は受けるんじゃないかしら。とは言っても街で酔って暴れて喧嘩したのと変わらないような被害だったら、１日か２日牢屋に入って終わりでしょうね。」

　ディアナがその疑問に答えてくれた。なるほど暴行には問われるのか。でもそんなことしょっちゅうなのか、刑罰も軽いみたいだ。

「じゃあ探してる割には捕まえても大した罰は与えられないと。」

「今の所は賊の目的が分からないからなんとも言えないけど、そうでしょうね。」

「なるほど。」

　とは言えそれで街道を行き来する人が減れば流通に関わってくる。マリウスは遠征から戻って早々の問題発生で大変だろうが、頑張って欲しいところだ。

　目が増えたおかげなのか、街の衛兵隊の仕事のおかげなのか、はたまた賊が捕まったためか、街までは特に何事も無く到着することが出来た。

　入り口で番をしているのは何度か見かけたことのある衛兵さんだ。エルフのリディを見てちょっと驚いた顔をしたが、それ以上特に何も言ってこなかった。

　賊の対応で忙しかったりするんだろうな。増援を頼もうにも遠征に出てしまっていたし。もう少ししたら増援も来るかも知れないから、それまでの辛抱だ。俺たちは会釈してそこを通り過ぎた。

　街をカミロの店に向かって行くが、道中やはりリディが注目を集めてしまう。２週間に１回でも、定期的にやってくればそのうち町の住民は見慣れるだろうか。そうであることを願いたい。

　特にちょっかいをかけてくる輩もいなかったので、無事にカミロの店にはたどり着いた。これまたいつも通りに倉庫に荷車を入れて、店員さんに声をかけ、商談室に向かう。

　少ししてカミロ（と番頭さん）がやってきた。

「おう、久しぶり……ってわけでもないか。」

「こないだお前の馬車に乗っけてもらったからな。ここで会うのは久しぶりだが。」

「モノはいつものとおりに？」

「ああ。ちょっと数にバラつきがある。”普通の”が多めだ。」

「なるほど。それでも問題ないよ。」

　カミロがチラッと番頭さんのほうを見ると、番頭さんは頷いて部屋を出ていく。納品の手続きをしに行ったのだ。

「賊はまだ捕まってないのか。」

　いつもの世間話の途中で俺はカミロに尋ねた。これで捕まってくれていれば帰りは少し楽だが、衛兵さんの様子から察するにまだだろうな。

「ああ。俺もあれから２回ほど都と往復したが、出くわさなかったんで、もしかしてと思って伯爵に聞いたら、まだだと言われた。」

「そうか……」

　予想通りではあるが、帰りはまだリスクが残っているというわけだな。気をつけて帰らないと。

「で、だな。」

　カミロが立ち上がりながら言う。

「ちょっとついてきてくれ。」

「ん？ああ。」

　俺たちも立ち上がってゾロゾロと先導するカミロについていく。

「前に馬が欲しいって言ってたろ？」

　歩きながらカミロが言う。向かっている先は倉庫ではないようだが、どこだろう。

「ああ。流石にそろそろ人力で引いてくるのも限界だと思ってな。用意できたのか？」

「まぁ、そんなところだな。」

　そう言うカミロについていくと、店の裏手にある庭のようなところに出た。ここは表からも倉庫側からも見えにくいところになっていて、おそらく普段は入荷した荷物を一時的においておいたりするところなのだろう。

　おそらく普段はと言ったのにはわけがある。そこにはちょっと普通ではないものの姿があったからだ。

「馬じゃないがこいつを用意した。走竜だ。」

　カミロが自慢げに言う。そこにはずんぐりむっくりしたトカゲのような生き物――カミロが言うところの走竜が

「クルルル……」

　と小さな声をあげながら、こちらをつぶらな瞳で見ていた。

## 走竜

2019年2月2日

「走竜……？」

　俺は思わずカミロに聞いた。インストールの知識はこの世界の大まかな地理や常識を教えてくれても、生物なんかの細かいことは入ってなくて分からない。

「ああ。走

　デカいトカゲを竜と呼ぶのは前の世界でも似た感じではあったな。コモドオオトカゲもコモドドラゴンとか言ってたし。こっちの世界でも似たような感じなのだろう。

　ズングリムックリしたトカゲ、とは最初に思ったが、一番近いのは馬サイズの

　鱗が前の世界のグリーンパイソンとかエメラルツリーボアみたいに綺麗なエメラルドグリーンで、可愛らしさに華を添えている。目はいわゆる爬虫類目だが、つぶらでクリクリしている。

　つまるところ、爬虫類を可愛いと思える人なら、相当に可愛いと思える外見をしていると言うことだ。

　うちの女性陣でも、少なくともディアナは爬虫類が苦手ということはないらしい。さっきから俺の肩が連続攻撃を食らっている。可愛いのはわかったから落ち着け。

「この子は何を食べるんだ？」

　姿からは草食っぽい感じを受ける。肉食だと肉を食いちぎるから、顎や首の筋肉が増えてあまり首が長くならない、みたいなことを聞いた記憶がある。

　ただ、こっちの世界の生物が前の世界のような進化をしたとは限らないからな。

　魔力なんてものもあるし、そもそも同じ進化をしてきたのならエルフや獣人、ドワーフが存在しないし、ドラゴン自体はいるって話もある。

「なんでも食べる。そう聞いて、ここに来てから肉や飼い葉なんかをやってるが、どっちも食べた。」

「そうか。」

　まさかの雑食である。うちの周りは森で草もあるし、肉の調達もできるから、食わせるものには困らないか。

　もしくは猫みたいに基本は肉食だが、植物も食べると言うことかも知れない。前の世界で豆苗やバジルを美味そうに食べる猫の動画を見たこがあるし。

　この辺は実際に与えて量を見ないと分からないだろうな。

　そうだ、量だ。食う量によってはサーミャやディアナの狩りを増やさないといけないし、カミロのところから飼い葉を仕入れることも必要になってくる。

「１回の食事でどれくらいの量を食べるんだ？」

「うーん、そんなに食わないって聞いていたんだが、ここに来てしばらくしてからもりもり食べるようになったな。」

「ふむ……」

　環境の変化によるストレスか何かで暴食してるのだろうか。でもそれなら元々食べるのが食わないのが普通だし、しばらくしてから食い始めたってのはつじつまが合わないな。

　そうやって俺が考え込んでいると、

「エイゾウさん、ちょっとお耳を。」

　と服の裾を引きながら、リディが声をかけてくる。

「ん？なんだ？」

　俺は素直に耳をリディに寄せた。リディがカミロには聞こえない声で耳打ちしてくる。

「走竜にはドラゴンの血が入っています。れっきとしたドラゴンの末裔ではあるんです。」

　ふむ。雑食だったりするのもそう言うところから来ているのか。

「それで、ドラゴンは魔力も食べます。足りない分は食事で補うので、おそらくはそう言うことかと。」

　そこまで話すと、リディは俺から離れた。

　なるほどね。都や街には魔力が少ない。リディ達エルフが都や街に定住しないのは定期的に魔力を摂取する必要があるが、魔力が薄くてそれが出来ないからだ。

　都ほどでかいところで走竜を見なかったのも魔力が薄いと餌をじゃんじゃん食べるから、それなら荷曳き馬なりを飼ったほうがコストパフォーマンスがいいってことで、飼う家がほとんど無いに違いない。

　逆に言えば、うちなら魔力問題は解決だ。周囲の獣が寄らないくらいに濃いのだから、餌が要らない可能性もある。

　きっと元々飼われていたか捕獲されたかした場所は、そこそこに魔力の濃い場所で、それが薄いところに来たから、魔力が不足してきて食べるようになったのだろう。

　それなら、うちで飼うには都合の悪いことはないな。

「最後の質問だが、お前のところでは飼わないのか？」

「ああ。うちの規模で１頭だけ走竜がいても仕方ないし、長い距離を常に行き来するには走竜はちょっと目立つからな。」

　カミロの言う目立つ、は見た目もそうだが餌代が半端なくかかるという認識から見れば、維持できるだけの金を持っていることを示してしまう意味も含んでるな。

　一介の鍛冶屋がそんなのを飼ってるのは不自然ではあるんだろうが、せいぜい１～２週間に１回街と家を往復するだけなら目撃される時間そのものは少ない。

　興味を持って調べるやつがいても、このところメキメキと頭角を現している商人と伯爵と関係がある鍛冶屋なんて怪しすぎて手を出そうとは思うまい。

「よし、じゃあうちで飼うよ。」

「まいどあり。値が張るが、いいな？」

「ああ。」

　今の我が家は懐が暖かいのだ。伯爵閣下から頂いた金貨がかなりあるからな。

「よし、それじゃあ売った。金は次来るときでいい。」

「あ、次に来るのは２週間後にしようと思うんだが、かまわないか？」

「かまわんよ。来るんだろ？」

「ああ。じゃあ、その時に金を用意しておくよ。」

「わかった。俺はお前らの荷車を繋げるように言ってくるわ。」

「頼んだ。」

　そしてカミロは倉庫の方に歩いていった。

## 竜車

2019年2月3日

　カミロが倉庫に向かって、その場に残った俺達は新しく家族になった走竜を見ている。

「触ってもいいのかな？」

　ディアナがおずおずと聞いてくる。

「うちの家族になったんだし、いいんじゃないか？」

　俺がそう言うと、ディアナはそっと走竜に近づいていく。走竜はその様子を見ているが、特に身を引いて警戒したりする様子はない。

　ディアナの手が走竜の肩の辺りに触れたが、やはり走竜はその様子を見ているだけだ。

「わ、温かい。」

　見た目は完全に爬虫類なのだが、温かいのか。ディアナがそのまま肩の辺りを撫でていると、走竜が首をぐいっと動かした。

　気に入らないことでもあったかと思ったが、走竜はむしろディアナの肩に頭を擦り付けている。やられていることのお返しをしているような、そんな感じに見える。

　そのままディアナが頭を撫でると、走竜は目を細めて

「クルルゥ。」

　と鳴いた。それを聞いたディアナの目尻が地面につくんじゃないかと思うくらい下がっている。

　人に触られても嫌がっている様子は全く無いな。走竜という生き物自体が人懐こいのか、それともこの子が特別人懐こいのかは分からないが、こうやって触れられるのがストレスにならないのは助かる。

　ディアナが触って大丈夫そうだと分かると、他の３人もおずおずとだが触りに行った。やはり走竜は嫌そうにはしない。触っている人に頭を擦り付けたり、小さく鳴いたりするだけだ。

　俺も首筋を撫でてみる。触ると確かに温かみを感じる。普通の爬虫類なんかとは全然違うのに、触り心地は蛇のそれに近くてスベスベだ。しばらく撫でていると、俺の頭に自分の頭を擦り付けて、「クルル」と鳴いていた。

　やがてカミロが戻ってきて、繋げる準備が出来たと言う。

「とは言っても、お前らが家に帰るまで持てばいいってくらいのものだから、家に着いたらちゃんとしてやれよ。」

「分かった。」

　ちょうど板バネを装備した荷車に改装したいと思っていたし、修繕も必要だったので都合は良いな。

「装具はおまけしといてやるよ。」

「おう、助かるよ。」

　カミロの店の店員さんがおそらくは馬用のだろうと思うが、荷車とつなぐための装具を走竜に装着していく。このやり方は覚えておこう。

　とは言っても、見ているとめちゃくちゃ複雑なわけではない。最初の１～２回は俺達も手間取るとは思うが、すぐに慣れるだろう。ふと見ると他の４人も真剣に店員さんの作業を見ていた。

　倉庫の方に走竜を引っ張って行き、人間が引くための取っ手の横棒が除去され、無理やりだが走竜とつなぐための棒が２本延長されていた。なるほど、こりゃあ急ごしらえだな。

　走竜の後ろから覆いかぶさるようにして荷車を持っていき、走竜の装具と接続する。これで簡易の馬車ならぬ竜車の完成だ。御者台はなく、荷車の荷台に置かれた箱に座って操縦することになる。

　今日の御者はリケだ。実家で馬車を操ったことがあるのは彼女だけだし、俺もチートの範疇には含まれていないだろうからな。家に帰ったら折をみて皆練習したほうがいいんだろうな。

　カミロから今日の売上を受け取り、買った品物を荷車に積み込んだら、全員で乗り込む。リケが手綱を走竜の体に当てると、「クー」と一声鳴いて、ゆっくりと歩き出した。流石に重いのか最初はグッと力を入れる感じだったが、動き始めたら足取りが軽やかになってきた。

　進んでいく車の上から俺はカミロに手を振って別れを告げる。いつもは俺が荷車を引いているから、この光景は新鮮だ。これからはたびたび目にする光景にはなるのだろうが、なかなかに感慨深いものはある。

　街の中をゆっくりと竜車が進んでいく。やはり珍しいのか、注目を集めている。少し面白いのは、走竜を見て一瞬驚いた顔をした後、リディを見ると納得した顔をするやつが結構いることだ。

　おそらくはエルフくらい珍しいと、走竜を立てた竜車に乗っているのもおかしくない、と言うことだろう。納得して余計な詮索をしないでいてくれるなら、それに越したことはない。

　街から街道に出ると、リケが少し速度を上げさせた。荷車の揺れがそれにつれて酷くなる。耐えられない程ではないが、やはり早めに板バネ式のサスペンションを搭載して快適にしたいところだ。

　乗り心地はよくないが、快適な速度で進んでいるのでだいぶ気が紛れている。

「楽だな。」

「そうねぇ。歩かなくて済む、っていうのは乗り心地を別にしても楽は楽ね。」

「あとはこの子がどれくらい物を運べるかですね。」

　リディがディアナに続けて言う。

「少なくとも人が２人で運べる量に、俺達が乗った分は余裕ってことだな。」

　それを受けて俺は答えたが、まだまだ余裕があるのか、それとも限界なのかは試さないことには分からない。わざわざデッドウェイトを運ばせる気にはならないので、どこかで試す機会が出たら、と言うことにしよう。

　そんな事を話している間に、森の入口へ辿り着く。俺とリケの２人で荷車を引いていた時と比べて倍近く早い。この分だと家に着くのもかなり早くなりそうだな。

　そんな事を思いながら、竜車は森の中へ入っていった。

## 環境整備を始める

2019年2月4日

　森の中を竜車が進んでいく。そもそも荷車のときにも普通に通れたので、ここが通れるかどうかは余り気にしていない。

　それよりも、走竜がこの森を怖がったりしないかのほうが心配だったが、今の所その気配はない。魔力を食べるということだから魔力を怖がることはないとは思っていたが、森に住んでいる獣の気配に怯える可能性はあるなと思ったのだ。

「さすがに熊とかが近寄ると怯えたりするかな？」

　俺はサーミャに聞いてみた。

「走竜は知らないからなぁ……。でも、その可能性は高いと思うぜ。ここらの熊は凶暴で強いしな。って、エイゾウは戦ったからよく知ってるか。」

「まあな。」

　もはや懐かしささえ感じるほどだが、ギリギリの戦いではあった。チートがなけりゃ、あの時確実に死んでただろう。

「じゃあ、走竜が怯えたら要注意ってことか。」

「そうなるのかな……？まぁ、そうなったらアタシも気がつくだろうけどな。」

「そりゃそうか。」

　俺達の中でもサーミャは一番鼻が利く。走竜とどっちが鼻が利くかは不明だが、致命的なことになる前に気がつくのは確かだ。

　今のところはどちらの鼻にも危ないものは引っかかっていない。狼達の獲物になるような”弱いやつ”でもなければ、襲ってくるものが少ないこの森は街道なんかよりむしろ安全だ。

　森に入って道がなくなり、地面の様子も街道とは段違いに悪いが、なかなかの速度で竜車は進んでいる。つまりは揺れも相応に酷いと言うことだ。人が引くより格段に速くて、そんなに長い時間この状態でないということが救いだな。

　荷物については多少気を使う必要があるが、外に転げ出たりと言うようなことも今のところはない。どれもそのまま積んでいるわけではなく、樽や箱に入れている。

　それでもガタンと大きく揺れたりすることはあるので、サスペンションの装着は早めにすべきではある。俺達の腰や尻のためにも。

　やはり、いつもよりかなり早い時間に家にたどり着くことが出来た。乗り心地を別にすれば、随分と楽なことには変わりない。もっと早くに導入すべきだったとは思うが、こういうのは実際に体験してみないとなかなか分からないものである、と言い訳しておこう。

　リケとリディで走竜を馬車から外している間に、残りの３人で荷物を家に運び込む。外す時にはもう一度装具の付け方を確認するよう頼んでおいた。前の世界ならスマホで写真を撮って状態を記録しておけるが、この世界じゃそれも出来ないから覚えるよりほかない。

　自分たちの体を綺麗にするのと一緒に、走竜の体も

「よしよし、今日は頑張ってくれてありがとうな。」

「クルルルルル。」

　ペタペタと首筋を軽く叩いてやると、走竜に顔をベロンと舐められる。ネコ科の動物みたいにザラザラしていないので、柔らかくてくすぐったい。

　その後、空いていた樽に水と入れて持ってきてやる。まだ昨日の肉で塩に漬けてないのが少し残っているのでそれも一緒だ。

「ここらの地面に生えてる草は食べられそうなら食べていいからな。あまり遠くには行くなよ。」

　俺がそう言うと、走竜は分かったとばかりに一声鳴いた。俺はもう一度頭を撫でてから、家に戻った。

　その日の夕食時、話題はやはり走竜の名前の話である。いつまでも「走竜」呼ばわりも出来ないしな。

「そもそも雄か雌かも分からないんだった。」

　カミロに聞くのを忘れていた。聞いても「わからん」と言われるような気はしないでもないが。哺乳類のように外形的に判断できる特徴は見ていない。体の大きさから言って、あればすぐ分かっただろうし。

「そうなると、どっちでもおかしくない名前よねぇ。」

　ディアナも思案顔である。

「馬に名前をつけるときのお約束みたいなものはないのか？」

「ないわね。聞いた中で一番すごいのは他所の国の貴族が持ってる馬で、ヘニング・ヘルマンⅢ世かしら。名馬の子孫ってことだったみたいだけど。」

　馬なのに家名プラスⅢ世とは恐れ入る。安い買い物ではないし、気持ちは分からんではないが。名前だけ聞いたら「侯爵閣下ですか？」とか聞いてしまいそうだ。

　しばらくはああでもないこうでもないと続いたが、

「クルルルって鳴くから、クルルで良いんじゃないのか？」

　サーミャがそう言った。雄だった場合にはちょっと可愛らしい響きだが、違和感はないな。凝った名前のほうが違和感がある。

「良いわね。」

「クルルちゃんが似合ってると思います。」

「異議はありません。」

　ディアナもリケもリディも特に反論はないようである。

「じゃ、クルルってことで。」

　こうして走竜改め、クルルが我が家の一員に加わった。

「それで、クルルを雨ざらしには出来ないし、屋根と壁だけの小屋を作ってやろうと思うんだが。」

　このあたりは雨もしょっちゅう降るわけではないし、木々である程度遮られはするが、家族を雨ざらしというのもかわいそうだ。

　俺の提案は特に反対するものもおらず、翌日から総出でクルルの小屋を作ることになった。いつ雨になるかはまさに天のみぞ知る、だからな。

　寝る前に皆でクルルに名前が決まったことと、おやすみを言いに行くと、クルルは「クゥー」と一声鳴いて、地面に丸くなって目を閉じた。前の世界なら確実になんとかグラムに上げている光景だ。

　俺は肩にディアナの連続攻撃を１０コンボほど喰らいながら、家に戻り翌日の作業に備えるのだった。

## 竜小屋建設開始

2019年2月5日

　明けて翌日、朝一の水汲みに行こうとすると、クルルがもう起きていた。ウロウロするでもなく、座ったままじっとしている。もしかしたら魔力でも摂取しているのだろうか。

　俺が近づくと、頭をゆっくりとこちらに向けた。

「おはようさん。一緒に水汲みに行くか？」

「クゥ。」

　クルルはゆっくりと立ち上がる。

「おっ、じゃあちょっと待ってろ。」

　俺は慌てて家に戻り、水汲み用の瓶をもう一つ持ってきて、クルルの首元からぶら下がるようにした。

「きつくないか？」

「クー。」

「よし、それじゃあ着いておいで。」

　俺がそう言って先導すると、ゆっくりと後をついてくる。走竜に散歩がいるのかは分からないが、これから２週間は街へも行かないし、毎日こうやって多少なり運動させてやったほうが良いのかも知れない。とりあえずは今日往復して様子見だな。

　いつもと同じくらいのペースで進んで、湖にたどり着いた。俺は顔を洗ったりするのをここで済ませてしまうことにする。５人で桶に並ぶと流石に狭いんだよな……。

　ついでなのでクルルの体も改めて拭いてやった。ついでに目や鼻のあたりをチェックして、人間で言うところの目やにや鼻水が出てないかを確認する。特にそう言うものもなく、健康ではあるらしい。

　そう言えば、走竜が風邪とかひいたらどうするんだろうな。専門の医者がいたりするんだろうか。

　人里離れたここだと呼んで来るのも一苦労だからなあ。人間（獣人とドワーフとエルフ含む）が病気になったときのことも少しは考えておくべきか。

　俺もクルルもさっぱりしたところで、水を瓶に汲んでいく。クルルに運んで貰う分はとりあえず瓶の半分くらいにしておいた。

「重くないか？」

「クルル。」

「じゃあ、今日はそれだけ頼むな。帰ろうか。」

　クルルの様子を伺いながら家に戻るが、特にふらついたり立ち止まったりと言った様子はない。明日はもう少し運ぶ量を増やしてみるか。

「ご苦労さん。また明日も行こうな。」

「クー。」

　クルルの首から瓶を下ろしてやる。明日も行くことを聞くと、心なしかクルルも嬉しそうにしているようなので、やはり毎日連れて行ってやるのが良さそうだ。

　瓶を下ろしたクルルは昨日やった肉の残りを少し齧る。見てみると昨晩も今齧ったくらいしか食べてないようだ。

　１食あたりであの量しか食べないとすると、明日までは余裕でもってしまうな。下手をすると人間より食う量が少ないんじゃなかろうか。恐るべしエコ生物。

　クルルにまた後で、と言い残して俺は家の中に戻った。

　朝飯やなんやかんやを終えて、今日の作業に入る。遅くとも１週間以内にはクルルの小屋を建ててやりたいところだ。文字通りの掘っ立て小屋だし、すぐに建てられるとは思うが。

　中庭に面するところに柱を建てるための穴を掘っていく。道具は特注モデルに仕上げたショベルである。この辺りも土は固めだが、特注モデルと増強された筋力のおかげで早く穴が空いてくれた。

　小屋の広さはクルルに来てもらっての現場合わせにした。クルルがゴロンと横になってもまだまだ余裕がある広さにしておいたので、そこそこ広い。

　掘った穴に柱にする木を引っ張ってきて立てる。ロープを掛けて引っ張るのはクルルも手伝ってくれたので、かなり捗った。俺の筋力がいくら増強されているといっても、走竜みたいな”専門家”には敵わない、ということだ。

　柱を立て終わると、今度は梁を渡していく。梁といっても立派なものではなく、最低限建造物としての構造を保てるようにするためのものではある。チートを使って噛み合わせを上手く作り、釘も併用して落っこちてこないように固定する。

　屋根の棟木やらも組み上げると、小屋の外形が見えてきた。後はここに屋根板やら壁板やらを張っていくわけだが、その前に小屋の床に穴を掘った時に出た土を敷いて、周りの地面よりも少し高くしておく。

　こうしておかないと、肝心の雨が降った時に水が流れ込んできてクルルが困ることになるからな。

　作業自体は部屋を作った経験のあるサーミャ達もいるし、運搬はクルルがいる。リディも慣れないなりにちゃんと手伝ってくれたのでかなりスムーズに進んだ。

　それでも普通に考えたらこんなペースで建築は無理だが、そこはチートさまさまというやつではある。

　この日はここまでで日が暮れてきたので、板張りをするのはまた明日だ。俺はこの日の作業終了を皆に告げた。

　作業後、体の汚れやなんかを落としてさっぱりした後、リディに聞いてみる。

「クルルが飯を食べる量がかなり少ないようなんだが、あれはやはり？」

「そうですね。この森の魔力は他と比べても多いですから、それでほぼ足りてるんだと思いますよ。」

「やっぱりそうか。」

　後は飼われてたにせよ野生にせよ、やたらと賢い。細かいところまで理解しているかは不明だが、少なくとも何を言っているかまでは理解している。そもそもの希少性もさることながら、値が張るというのはそんな部分もかなりが占めるようには思う。

　まぁ、それを省いても、もうかなり可愛く思えているのは事実だ。

　家畜のための小屋と言うよりは新しい家族の部屋――掘っ立て小屋の離れではあるが――を作る気分になっている。

　明日には完成させたいな。そんな事を思いながら、夕食の準備に取り掛かるのだった。

## 竜小屋の完成

2019年2月6日

　翌日、起きて水を汲みに行く時、今日もクルルと一緒に向かう。クルルには今日昨日よりも多い水瓶の3/4ほどの水を運んでもらったが、まだまだ余裕そうだ。これなら一杯に入れても十分運べるだろう。

　今日の作業は基本的に板を張っていくわけだが、大きさに合わせた板を切り出すところからだ。これは俺とサーミャが材木置場で行う。どんどん板を切り出していって、小屋までは他の３人とクルルが運んでいく。

　クルルが運ぶときは板を口でくわえて、結構器用に持っていってくれるのだが、最初のうちディアナがやたらハラハラしていた。子供を見守る母親のようである。気持ちは分からんでもないが、多分そんなに心配しなくてもクルルは平気だと思うぞ。

　チートで作った特注モデルのノコギリを使ったので、板はあっという間に量産できた。木材がそこそこ減ったが、なんだかんだで確保するあてはある。

　それに今までだと少し遠くへ行って切り出してくる、なんてこともしなかったが、クルルに運んでもらえればそれもできる。どこかのタイミングで多めに確保しておくのはありだな。

　作った板で壁を作っていく。凝ったことをするなら、柱に溝を掘って板をそこにはめ込むとかそういうことをしたほうが良いのだろうが、今回は急ぎでもあるし、普通に柱に板を打ち付けるだけにしている。

　ただし、壁は完全に覆ってしまうのではなく、上の方は開けるようにする。屋根の庇がかかるようにするので、雨が直接は吹き込まないはずだ。

　屋根自体も板葺きにするが、雨漏りなんかは雨の時に確認するしかない。板と板の端が被るようにはしていくので、おそらくそんなには漏れてこないはずだ。イメージ的には日本であった

　あそこまで手間のかかることは出来ないが、同じようにすれば近い効果は得られるだろう。

　バタバタと作っていったが、手分けの効果とチートも合わさって、日が沈む前にはなんとか形ができた。

　柵やドアについては正体不明の賊が万一このあたりに来た場合も考えたが、人間（か獣人かドワーフかはたまたエルフかリザードマンか）であれば柵やドアを作ったところで意味はないし、クルルも賢いので別に作る必要もないだろうとみんなの意見が一致したので作らなかった。

　前の世界みたいに繋いでおかないと違法なんてこともないので、完全に出入り自由の放し飼いということにはなる。

　一応は小屋の体裁が整ってはいるが、やはりこう入れるだけ、といった風情ではある。十分時間が取れそうな時にここを物置に改築して、ちゃんとした畜舎（竜舎？）を別に作るのもいいなぁ……。

「クルル、今日からここがお前の部屋だ。」

　ペタペタとクルルの首筋を軽く叩きながら言うと、

「クルルル。」

　クルルは中に入ってぐるぐると周り、ごろりと横になると

「クー！」

　と鳴いてフンスと鼻息を出した。気に入ったらしい。気に入ったんなら良かった。急ぎでも作ったかいがある。

「寝るときや、雨のときはここに入ってね。何かあったら家の壁を叩いてくれたらいいから。」

　ディアナがクルルを撫でながら声をかける。クルルは言われた事がわかっているのか

「クルル。」

　と返事をした。

　なお、今回はディアナと離れていたので、俺の肩が無事であったことを併せてご報告差し上げたい。

　夕食時、みんなで話し合って今後の予定を決めていく。次にカミロの店に卸しに行くのは１２日後だから、日数的な余裕は若干あるものの、今のうちにやっておきたいことが山程あるのだ。

　俺はとりあえず急務と思われる荷車の改造を今後４日ほどかけて行い、その間リケたちは通常の仕事――板金や一般モデルの制作、狩りや採取、畑の整備をして貰う。

　俺は荷車の改造が終わり次第、普段の鍛冶の仕事に戻って、十分な数の製作ができたら残りの時間をまずリディのものになる部屋のドアとベッド製作に当てることにした。

　もし間に合わなかったら、更に次の２週間の最初に作ることになる。今は客間があてがわれているので不便はないと思うが、家族としていつまでも客間と言うのも、俺としても心苦しいものがあるので、急ぎ目で作業したいところだ。

　翌日もクルルと一緒に水汲みに向かった。今日は家から出るとそこでもう待っていたので、水瓶を渡してやった。来て３日程度だが、クルルの中でも習慣にはなってきたらしい。

　今日は水瓶いっぱいに水を汲んでクルルに持たせたが、問題なく運んでいる。重い荷車を運んでも大丈夫だったのだし、これくらいは余裕か。

「今日もありがとな。」

「クルル。」

　俺とクルルは連れ立って家への道を戻って行くのだった。

## 新しい技術

2019年2月7日

　今日からは予定通り荷車の改造を行う。今の荷車は前後車軸が１本ずつ通っていて、その両端に木製の車輪が備わっている方式のものだ。

　一番簡単なのはこの車軸と車体の間にバネを挟み込む方式だが、曲がることを考えたら前輪は車軸からアームを伸ばして、そこに車輪をくっつける方式のほうが良さそうだ。この場合、バネは車輪のあたりに搭載することになるだろう。

　自動車と違って、車輪自体が向きを変える必要はないし、前輪でも後輪でも動力を伝達することについては考慮する必要がない。その辺りの設計が楽なのは助かる。

　後は無理やり延長されている接続部分の作り直しが必要だ。となると、荷車も荷台部分と車輪を再利用するくらいで、その残った部分もところどころ補修が必要だったりするから、全体を作り直すのとどっちが早いかはギリギリ残す方ってところだな。

　次に考えるべきは板バネの材質だ。普通に考えれば鋼を使ったほうが良いのだろうが、この辺りの木は硬いし、木をバネに使うことも不可能ではないとは思う。

　チートを使えば板バネに使える形を作るのは容易い。だが、金属製の板バネが世間に出回ってもいいかどうかだ。

　少し考えた末、結局木製にしたところで、それを見た誰かが鋼に置き換えたら同じこと、というのに気がついたので最終的には鋼で作ることにする。

　ただし、形状試作は木で行うことにした。いくらチートがあると言っても大きさの調整なんかはそれなりに手間だからな。木製なら愛用のナイフで形状を変えるのは簡単だ。

　今日からリケたちが板金を作っているはずなので、多く作ってもらうよう頼んでおく。本当は自分で作るべきなんだろうが。俺がそう言うと

「いえ、こういうのを親方から言われてやるのが弟子本来の仕事ですよ。」

　とリケにフォローされた。すまんな。

　クルルの小屋を建てたときに大量に作った板材の余りを割って細長くした後、長さを変えた板を作る。湯を沸かして板を曲げ、それらを重ねたら原理的には板バネ式サスペンションに使われるものとほぼ同じものにはなる。

　試作品なので真ん中あたりを釘で止めて、倒れないよう台座代わりの板に固定する。板バネの上には別の板を置いて、更にその上に小さな樽を置いてみた。

　板を片手でそっと支えて、もう一方の手で樽を上から押す。すると、グニッとした手応えがあり、離すと樽がポヨンと弾んだ。バネ自体の形としてはこれで良いわけだ。

　この一連の作業は生産扱いなのだろう、手早く作業ができた。どこまでが生産としてチートが適用される範囲になるんだろうな。料理もどうやら生産に含まれているようだし、もしかすると裁縫なんかも入ってくるかも知れない。

　洗濯も試したが、他の人がやるのと比べても大して違いが無かったので、流石に生産ではないと言うことらしい。

　今はこの作業が優先としても、何がどこまで出来るのかは把握しておいたほうが良さそうではある。

　それはともかく荷車の改良だ。先程の板バネセットをもう1つ作り、丸太をぶった切って車輪（と呼ぶには相当雑だが）を4つ、適当な棒を拾ってきて加工した車軸も２本製作した。

　車軸の両端にかんたん車輪を固定して、前輪と後輪が出来た。前輪と後輪は左右一箇所ずつ前後方向に板を渡して、そこに車軸を回転できるように固定する。後輪は板と車軸の間に板バネが入るようにし、前輪側はその分の高さを稼いである。

　これらの作業の細かい部分はほぼチートだよりだ。自分の能力で出来るようにはなりたいが、出来るようになったところでチートとの区別ができるのだろうかと疑問はある。

　今は元素人がこれだけの作業をホイホイこなせるのは間違いなくチートだと言えるが、今後１０年２０年やって能力が馴染んだ時に、果たしてそれはチートと自分の能力のどちらなのか。

　……１人で作業していると、どうもいろいろ考えてしまっていかんな。少し休むか。

　それで気がつくと、クルルがそばで座って作業を眺めていた。今日は水汲み以外にしてもらう作業もないからな。

「来てたのか、クルル。」

「クル。」

「じゃあ、ちょっと手伝ってもらうか。」

　車軸の間に渡した板の上に更に板を置くと、パッと見た目は貨物列車の台車のようになった。耐久力はほぼないだろうが、これはこれで簡単な作業程度には使えるかも知れない。

　その台車っぽいものに縄をくくりつけ、板の上にさっき使った空の樽を置いた。縄はクルルが引っ張れるように、クルルの体にも結んである。

「締め付けられたり、痛かったりしないか？」

「クルル。」

「よし、じゃあ庭をぐるぐる回ってくれ。」

「クル！」

　俺が言うと、クルルは庭を回る。構造が構造なので旋回はどうしても強引になる。空の樽は一度弾むとゴロンと横になって、最初に曲がった時にそのまま落ちていった。

　それを見てクルルは止まろうとしたが、

「そのまま歩いていいぞ。」

　と言うと、再び庭を回り始める。バネの上に乗っている重量が極端に軽いので分かりづらいが、前輪と後輪を比べると後輪がサスペンションが効いた動きをしているように見える。

「とりあえず後輪はあれで行くか。」

　俺はひとりごちたあと、嬉しそうに庭を回るクルルをしばらく眺めていた。

## 一歩ずつ

2019年2月8日

　その後も後輪部分の構造を試してみたりして、金属に置き換えた時のベストであろう形を作り出した。あとはこの構造を実際の荷車に適用すればいける……はずだ。

　その作業自体はまた明日前輪部分が試作できて以降と言うことになる。なぜなら、なんだかんだでもう日が暮れてきていて、リケ達は今日の仕事を終えているからだ。

　クルルはと言えば、今日一日遊んでもらったくらいの感覚らしい。楽しいんなら良かった。また明日も手伝ってもらうだろうしな……。

　翌日、昨日組み立てた試作台車の前輪を一度取り外す。昨日作った後輪部分を参考に、更に同じ板バネセットを２つ作る。

　簡単に言えば、前輪の左右を独立させつつ、間にこの板バネを挟み込むことができれば、エイゾウ工房特製荷車の基本構造は完成するわけだが、言うは

　前の世界の知識を持っていて、完成の形をおぼろげでも知っている俺であってもこれだけ苦労するのに、全くの手探りで作った前の世界の人達は本当に凄いな。

　色々試したが、几と言う字のような構造の足の先端部分に車輪がついている形が良さそうだ。上の部分を台車の一番前に、出ている足が左右独立して動くようにし、伸びている足にバネを設置する。足の先に丸太を切った車輪を取り付けたら一応の完成だ。

　今日もクルルが見学に来ていた――と言うより本人（本竜？）としては遊んでもらいに来ているのだろうが――ので、昨日と同じようにクルルが引っ張れるようにしたあと、庭を回ってもらった。

「クルルルル。」

　機嫌よくクルルが庭を歩く。昨日よりはかなり回りやすくなっているようだ。ちょっとした凸凹も多少吸収できているように見える。

　昨日の樽は軽すぎたからか、すぐに落ちてしまったので今日は小さい樽に水を入れたものを載せてみる。重量にして１０キログラム前後と言ったところか。台車が僅かに沈み込む。

「よーし、これでまた回ってみてくれ。」

「クルー。」

　トットットッとクルルが庭を回り始める。重さがあるからか、台車が曲がっても樽はすぐには落ちない。凸凹していると思しきあたりでポヨンと柔らかく揺れている。その揺れで水がこぼれたりはしているが、何もないときのようにガタンと衝撃を受けている感じはない。同じものを馬車に搭載したらフレデリカ嬢の尻も少しは守れそうだ。

　見ているとあちこちの負荷が気になるが、荷車に搭載するときはチートを使った特注モデル性能の鋼を使うから力技とは言えなんとかなるだろう。板バネを真似する人には申し訳ないが、懸架方式を含めてそのあたりの改良は自力でお任せしたい。

　前の世界でも「現代技術で再現不可能。同じものを作っても同じ耐久性にならない」みたいなものがちょくちょくあったみたいだが、もしかすると同じような話なのかも知れないな。

　この日はこの台車が完成して終わってしまった。明日からは荷車本体に取り掛からねば。

　更に翌日、余っていた板を組み合わせ、荷台として台車に据え付けて小さな荷車として使えるようにした。

　オール木製だし、チートを使ってなるべく円になるように削ったが車輪は丸太の切りっぱなしなので、耐久性や使用感には難が多々あるとは思うものの、ちょっと使ったり、クルルが

　いよいよ荷車本体の改造に取り掛かる。まずは車輪を外し、荷台の傷んでいる箇所を補修する。まだもう少しは行けそう、と言うところもついでなので直してしまう。チートのおかげで釘無しで板を接いで補修できた。ところどころ色が違うが、まぁこれは味の範疇だろう。車輪の方も傷んでいる箇所は木材から部品を作って置き換える。

　ここから先は鍛冶仕事の範疇なので、作業場に入る。リケたちがショートソードとロングソードを作っていた。ディアナとリディが型を作り、サーミャが溶けた鉄を流し、リケが仕上げる。そのおかげか、俺が入った時点でそこそこの数が出来ていた。

　俺は完成したうちの１本を手に取ってみる。まだ一般モデルの範疇ではあるが、もうほぼ高級モデルに近くなっている。魔力も入ってきているようにも見える。リケも確実に成長してるんだなぁ。

「良いじゃないか。」

「いえ、まだまだですよ。親方の言う高級モデルを安定して作れるようにならないと。」

　目標が高いことはいいことだ。あれこれ言うのも野暮なので、俺は「頑張れよ」とだけ言って自分の作業に取り掛かる。

　まずは板バネにする鉄の板の作成からだ。板金をいくつか取り出して、そのうちの１つを火床で熱して叩く。久しぶりの感覚と音が体に響き、思わず懐かしさすら感じてしまう。

　その感覚に、こっちに来て１年も経たないうちに身も心もすっかり鍛冶屋になってたんだなぁ、そんな益体もないことを考えた。

## 部品生産

2019年2月9日

　懐かしい感覚を味わいながら、板金を伸ばして細長い板状にしていく。長さや厚みなんかはチートだよりだ。硬さは特注モデルでやる。

　鋼をただ伸ばすだけではあるので、１本目はすぐにできあがる。バネ１箇所辺りに７本ほどは長さを変えて必要だから、同じようにして伸ばしたものを用意した。１番長いものだけは両端を丸めて、小さな筒がついているような形にする。

　ナイフを作るときならこのまま形を作っていくのだろうが、今日はこのナイフになる前の状態のまま焼入れなんかの処理をする。そう言えば前の世界でもトラックの板バネはそこから削り出してナイフにするのにちょうどいいんだっけか。

　今の俺は逆にナイフの材料から板バネを作っている。そう思うと、なんだかちょっと面白い。

　板金を伸ばすのとちょっとした細工だけだったので、あっという間に作業を終えたが、前輪部分の試作で時間をとっていたこともあって、この日はこれでタイムアップとなる。細かいパーツや組付けはまた明日だな。

　翌朝、水汲みの時に試作品のミニ荷車を使ってみることにした。水瓶に蓋をかぶせて、縄でミニ荷車に固定する。これは商品運搬のときの、荷車の使用状況の簡単な再現でもある。昨日も実験はしたが、これで問題なければ問題ないことに確信が持てるというものだ。

　今朝もクルルは家のすぐ外で待っていた。クルルにミニ荷車を引っ張るための縄をくくりつける。

「今日はこれで頼むな。」

「クルル。」

　クルルはガラゴロとミニ荷車を引っ張りながら、一緒に俺と歩き始める。中身は空の水瓶だが、空の樽よりは重量がある。結構安定しているし、時々ガタンと揺れる以外では不安定になることもない。

　クルルも特に牽きづらそうでもないので、とりあえずは問題なしと判断する。本番は水を汲んだ水瓶を載せてからだ。

　湖について水瓶に水を満たしていく。ミニ荷車に載せると、流石に大きく沈み込む。重量としてはかなりあるからな……。

　水瓶に蓋をして首の部分に縄を絡ませて荷車に固定する。さあ、これでどうだ。

　結論から言えば、ミニ荷車自体は普通に成功できた。蓋をしていて縄で固定しているから水も漏れないし、倒れないのは当たり前なのだが、揺れがかなり少ない。これなら荷車につけたとしても同じ効果が期待できるな。

　ただ１つ失敗だったのは、クルルが少しつまらなさそうだったことである。どうも朝の水汲みでは荷車などではなく、自分で運びたいらしい。

　俺は苦笑しながら、明日からはクルルに運ばせることを約束した。

　朝の日課をすべて終えたら、俺の今日の作業はパーツ作りだ。リケ達は今日もショートソートとロングソードを作業分担で作る。

　今日作るパーツはバネをまとめるものや、バネを荷車に固定するもの、車輪や車軸、台車をところどころ補強するための薄い板などである。ミニ荷車を参考にして、実際の荷車に取り付ける大きさをチートで作っていく。

　このチートがなかったら、いちいち寸法を測って作って……とかになっていただろうとは思うが、そこはチートだ。バネを荷車に固定するパーツなんかはそこそこ複雑な形状だったりするのだが、正しい寸法で正しい形状を一発で作り出すことができる。

　俺なら仕組みさえ知っていれば、初期の自動車でも作れるかも知れないな。だが、そう言うものを作るつもりは今の所は全く無い。なるべくこの世界に合わせた良いものだけを作っていきたいものだ。

　スムーズに流れる分担された流れ作業の横で、バタバタとワンオフのパーツを作成していく。その真反対の光景が少し奇妙にも見える。パーツの一揃いが完成し、俺は「どっこいしょ」と、パーツを抱えて荷車のところへ向かった。

## 改装完了

2019年2月10日

　部品をバラした荷車のところへ持っていく。今からこれらを組み付けていくが、前の世界とは違う部分があるので、そこはアレンジが必要になってくる。例えばナットやボルトなんかは使わず、ピンや

　これらは整備性や耐久性に影響を及ぼす。俺はチートで作った部品と日々の点検でその辺りのフォローをするが、真似する人たちには自力で改善をお願いしたい。

　まずは後輪から組み付ける。荷台の後ろ側に板バネセットと荷台を連結するための部品を取り付け、そこに１番長い板バネの筒状にした部分が連結されるようにする。

　板バネは弓状なので伸ばしたときと縮んだときで、弓で言う弦の部分の長さが変わる。連結する時にはそれを吸収するような部品が必要なのだ。これは片方のみに取り付け、もう一方は直接荷台と連結する。

　板バネセットをまとめるような部品で板バネをまとめたら、その部品の１番下にある筒に車軸を通し、両側に車輪を付けたら構造としては完成する。

　潤滑油は前の世界でも鉱物油が一般的になる前には使われていた豚脂、つまりラードである。うちの場合は猪脂だが。後は菜種油なんかも使うらしいのだが、うちは猪脂が豊富にあるからな。

　一旦ここで前輪を仮に組み付けて（取付用の部品は材木を加工した）、引っ張って試してみようとすると、いつの間にか来ていたクルルが鼻息も荒く待機していた。

　長い距離を牽いてもらうわけではないので、装具は着けずに縄で代用する。

「痛くないか？」

「クルルゥ。」

　問題ないかどうか確認してみると、平気そうなのでそのまま庭を回ってもらった。機構自体はうまく動いているが、ところどころおかしい箇所もあるので、外して調整してまた牽いてもらってと言うことを繰り返す。

　日が沈むかどうかと言った頃合いでやっと調整が完了した。ひとまずはこれで後輪は完成とする。前輪と装具の連結部分は明日だな。

　翌朝、今日の水汲みはクルル自身に持たせてやった。クルルはご満悦である。

　そう言えば、走竜が物を牽きたがったり、運びたがったりするのはなんでだろうな。賢いので生物としての本能以外の部分でもなにかありそうな気はするが、残念ながら生物学のチートはないし、インストールでもその辺りの知識は入ってないのでさっぱり不明だ。

　とりあえずはクルルの機嫌がいいのでよしとする。

　前輪部分は多少機構が違うが、作業としては同じである。ネジやボルトの代わりにピンなどで部品を組み付け、調整をする。

　前輪は左右が独立しているので、耐久性が必要なところは鋼にしてある。これでも若干の不安がなくはない。なので特注モデル並みに魔力を入れた鋼にしてある。かなりの力技だ。

　最終調整は装具との連結部分の改造をしてからになる。取り外した連結部分の形状から、新しく連結部分の部品を作る。ここは木製と既存の部品の流用だ。チャチャッと新規の部品を作ったら、クルルに装具を着けて（慣れてないので時間がかかった）、連結部分と荷車との調整をする。

　少し動いては調整、少し動いては調整を繰り返して、やっとクルルがスムーズに牽ける状態になる。次に補修やらをしたときはもっとスムーズにできるようにしたいものだな……。

　これで全体の最終調整が行えるようになったので、再びクルルに荷車を牽いてもらう。前輪後輪ともにサスペンションが働いているようだ。だがやはり少し不具合もあるようなので、止めては調整を繰り返す。納得のいく状態になった頃にはもう日が沈みかけていた。

　鍛冶のみの作業であれば、ここまで時間もかからないのだろうが生産一般のチートは鍛冶ほどの能力はない。こうして試行錯誤を繰り返すよりないのだ。

　ともあれ、これで乗り心地は格段に良くなったはずだし、その分速度も若干出せる。街へ行くのに時間がかからないようになれば、その分の時間で他にできることも増えるだろう。

　その時間で何ができるだろうか、という幸せな想像をしながら、俺は後片付けを始めるのだった。

## 新たな日常

2019年2月11日

　荷車は昨日で完成していた。リケとリディでナイフの一般モデルの作成と魔力周りの練習をして、サーミャとディアナは狩りに出ていた。つまり、今日は獲物を回収する日だ。

　５人で回収に行ったことはあるが、今日はそれにクルルが加わる。大物の時は５人でもなかなか大変だったが、クルルが入るとかなり楽になるのではと思っている。

　今回、荷車とミニ荷車は使わない。あそこで作る運搬台を家でバラして乾燥させたものが、そのまま材木になるからだ。

　湖に沈める場所は獲物を捕らえた場所の近くになるので、毎回少しずつ違う。なので多少の伐採は問題にならない……はずだ。週１でどこかしら伐っているから、そのうち考える必要が出てくる可能性はあるが。

　皆で沈めた場所まで向かって引き上げ、運搬台を作ってそこに載せるところまでは変わらない。今日からはこれを引っ張るのがクルルになる、というわけだ。

　引き上げもクルルに手伝ってもらうことを考えたが、それくらいは自分たちでやったほうが良かろうと言う話になった。過保護にも思えるが、冷徹に考えても安くはない走竜を使い潰すのもうまい方法とは言えまい。

　偽悪的なことを言ってはみたものの、実際のところは、クルルは楽しそうに運搬台を牽いている。これなら今後も連れてきて良さそうだ。

　クルルのおかげもあって、いつもより早く家まで戻ってくることが出来た。

「ありがとう、クルル。」

　ディアナがクルルに感謝の言葉をかけながら、首筋を撫でる。他の皆も同じようにしていた。もちろん、俺も。

「クルルルゥ。」

　クルルは目を細めて嬉しそうにするのだった。

　引き上げてきた獲物――今日は猪――の解体をする。今日から一部はクルルのご飯になるので、その分は取り分けておく。

　ほとんど食べないと言っていいほどの量しか食べないので、今日食べる分と、下処理せずに干すことだけを行う分は別にしておいた。これでクルルの向こう２週間ほどのご飯は確保できた。

　草はその辺のを気が向いた時に食べている。毒草がないかはリディに確認したが、見たところ変異でもしてない限りはない、とのことだったので特に止めたり用意などはしていない。

　主食は森の魔力だし、栄養素云々とかは考えないことにした。前の世界での知識で太刀打ちできる生物ではなさそうだしな。可愛ければ良いのだ。

　獲物を引き上げてきた日であるので、今日の昼飯はその肉を使った料理になる。ポークステーキでも良かったのだが、今日は焼き肉風にする。いずれ発酵種を使ったパンでカツレツと言うかシュニッツェルと言うか、完全に揚げるのではない料理にも挑戦したいところだ。

　昼飯が終わったら、俺は高級モデルの製作をする。今日から２週間分の在庫を急いで作っていく必要があるからな。他の皆は休みではあるが、リケは俺の作業の見学と練習、サーミャとディアナはリディを手伝って中庭の畑の整備をするらしいので、半分は仕事のようなものだ。

　俺が今日作るのはショートソードとロングソードだ。型から出しただけのものをいくらか残しておいてくれたので、それらをガンガン仕上げていく。これが無くなったらナイフだな。

　ショートソードとロングソードの作業中、作業場に家の方からディアナが入ってきた。すこし血相が変わっているような感じである。確か畑の作業をしていたと思ったが。

「クルルがずっと小さい荷車の前にいるんだけど……」

　ああ、そう言うことか。

「ついてる縄を肩の辺りにかかるようにしてやれば、喜んでひっぱるぞ。」

「そうなのね。わかったわ。」

　ディアナは「すっ飛んでいく」という言葉が似合う速度で飛び出していった。やっぱりあれクルルとしては遊んでもらっている認識だったのだろうか。

　朝の水汲みは毎日のお仕事、小さい荷車や狩りの時の運搬台は遊んでもらっていると言う認識っぽい。大きい荷車はどうだろうな。装具をつけるし、長い距離を移動するから大事なお仕事、と思ってくれたらいいが。

　黒の森の魔力が豊富なせいで元気が有り余っているのか、程なく外からは「クルル」と鳴く声と、ガラゴロ荷車を牽く音がしはじめた。

　俺はその音を聞きながら、”いつも”にまた１つ項目が増えたことを嬉しく思うのだった。

## 伝説の鍛冶屋の話

2019年2月12日

　その日の製作数はいつも通りで、特に多いことも少ないこともなかった。これをブランクがあったからだととるか、ブランクがあったにも関わらずととるか。いずれ予定より少なくなかったのなら良しとするか。

　翌日、俺とリケが鍛冶場仕事、他の３人とクルルは採集に向かった。リディもついていったのは畑に植えるものを探すらしい。クルルはミニ荷車を牽いていったようだ。

　とは言え、あのミニ荷車が大活躍するような量は流石に採りすぎだと思うので、単に散歩を兼ねているのだろう。

　今日はロングソードを久しぶりに型から自分で作ってみる。感覚がもはや懐かしい。出来た型に融けた鉄を流し込む。チートも使ってゆっくりと慎重に流しこんだ。それが固まるまでの間に次の型を作る。

　最初はリケがやると言っていたのだが、リケはリケで作業があるのだからと断ったのだ。弟子とは言うものの、何かを教えるようなことは特にしてないしなぁ。

　板金を多く作るのは頼んだりしたが、何も教えてないのに弟子だからやれというのは平たくいえば俺の美学に反するのだ。

　そんなわけで粘土をこねて雄型に貼り付け、型を作る作業をしたりしているのである。実は雄型はもう２代目だ。デザインは前と変わりないので、何か違いがあるわけではないが。

　型に流した鉄が冷えた頃合いで取り出す。うーん、やっぱり俺が流すとそもそもの質がいいな。魔力の量もサーミャとディアナが流したときとは段違いだ。これもチートのおかげか。

　このロングソード（とショートソード）単体で言えば、俺が自分で流したものを加工するのが製作スピード自体は１番早そうだ。

　だが、もちろん俺は１人しかいない。俺が加工している間に型を作ったり、融けた鉄を流し込んだりと言った作業はできないので、その分の効率で言えばサーミャたちに手伝って貰ったほうが結果としては早い。俺１人だけが凄くても意味のない部分ということになる、

　逆に言えば、それこそオーダーメイドの特注モデルを作る時に関しては、俺が自分で一からやるのが、今のところは１番早いわけだ。俺１人が凄ければそれで良い分野だからな。

　リケにも見せたが、

「この出来から仕上げてないと言われても、どこを触っていいか分からないですね。」

　と言われてしまった。まだ高級モデルの端緒に触れたばかりのリケだとそういうものかも知れない。それでも人間の一般的な鍛冶屋の大半を上回る出来なのだが。

　そう言えば、ドワーフの一般的なレベルってどの辺りなのだろう。人間の鍛冶屋の場合、俺の高級モデルでも「都なら同レベルが数人いる」と言うあたりだった。つまりは俺の思う一般モデル辺りが並かその上ということになる。

「そうですねぇ。ドワーフの鍛冶屋で武具を扱っているものですと、都よりも親方の作るレベルに達しているものが１０倍は増える感じですかね。」

　俺が聞いてみると、リケはそう答えた。割といるな。

「ドワーフの場合、魔力とかよりも素材の力を引き出す方に注力するんですよね。なのでミスリルなんかの加工はちょっと苦手で、銀や金の細工が得意だったりします。」

　ミスリルは魔力を入れた量で特性が変わるが、その辺りの扱いが上手くいかないと、ただの軽めの鋼みたいなことになってしまう。十分凄くはあるんだが。

「それでも全体的に人間よりは得意です。その得意を探すのに人間のところも含めて弟子入りの旅をするわけですけどね。」

「なるほどねぇ。」

「ただ……。」

「ただ？」

「同じ性能のものでも、親方のように繊細さを兼ね備えたものを作れる職人はドワーフでも数えるほどしかいないでしょう。特注モデルの場合でしたら、伝説のドン・ドルゴでも敵うかどうか。」

「凄い鍛冶屋なのか。」

「６００年前の大戦の時に神から力を授かって、勇者に剣を打った、って伝説がある人です。」

　６００年前に魔族と人間やその他種族との戦争があったことはインストールされた知識にあった。

　その時は勇者が魔王を倒したはいいものの、押し込まれていた人間とその他種族側が押し返したところで勇者が斃れ、双方共に疲弊しきってもいたので休戦になった、と言うなんともしまらないというか、現実的なラインの話だったようだ。

　リケの話によれば、その魔王を倒したときの剣を打ったのが、そのドン・ドルゴなるドワーフらしい。

「そんな伝説と比肩するほど俺は凄いもんかな。」

「そりゃそうですよ。ナイフがあれだけ切れるんですよ。」

「ああ……。」

　そこは納得せざるを得ない。あれで凄くないと言ってしまったら、なにが凄いのだという話になってしまう。

「ただ、ドン・ドルゴが打った勇者の剣、って長さ２メートル、幅６０センチはあろうかという代物だったらしいですからね。オリハルコンだかの神性鉱物だったそうですけど。」

「そりゃ何でも斬れそうだ。そもそも作れたのが凄いのはわかるが。」

　俺は苦笑した。その大きさじゃ、鉄骨（オリハルコン骨か？）を振り回しているのと変わらない。ミスリルの感じから言えば、オリハルコンを加工するのも骨が折れただろうし、そもそもその量を確保できたのも恐らくは国家単位での後ろ盾があっただろうとは言え、凄いことではある。

　武器自体もオリハルコン製でそれをやられたら、いろいろひとたまりもないのは確かだ。その勇者というのはえらくマッチョなやつだったか、伝説だし多少盛ってるかのどちらかだな。

「ええ。ですが、親方なら同じ切れ味をより小さい武器で、なおかつ繊細さをもって作れるでしょう？」

「やってみないことには分からんがな。」

　６００年も前の話なので確認は不可能だが、ドン・ドルゴの魔力の扱いのレベルによっては、魔力の扱いに長ける分、俺の方が同じものでも性能は上にはなるはずだ。

　ただ、神様から力を授かったと言うことは、魔力の扱いもそれなりに向上していたと考えるべきだし、俺が比肩するほどの実力かどうか。

　せっかく鍛冶屋としての２回目の人生を貰ったわけで、それなりに名の残るような製品と言うか作品と言うか、とにかくそう言ったものを残したい、という欲がないわけではないが、それと相反してひっそりのんびりと暮らしていきたい、と思う気持ちもかなりある。

　となると歳がいった時に「これが俺の作品だ！」と物凄いものを世に出して、その後はひたすら隠遁生活を送るとかがいいのだろうか。世を捨てる前の最後の一振りが最高傑作とか、４０を過ぎても

「伝説ねぇ。」

　俺はかなり小声で言ったつもりだったが、耳ざとく聞きつけたリケに

「はい。多分親方はそれになるんだと私は思ってますよ。」

　と言われ、俺は照れ隠しに作業に戻るのだった。

## 緩やかに過ぎていく日

2019年2月13日

　割と調子よくロングソードとショートソードを作ることができた。カミロに聞いた売れ行きから言えば、相変わらず高級モデルの量としてはこっちのほうが必要なので、もう幾日か作れればこっちの方は問題なさそうだ。ナイフの方の量は程々でも大丈夫だろう。

　なんとかリディの部屋の扉とベッドを作る時間は確保できそうだな。

　日が落ちるより少し前、ガラゴロと外から音が聞こえてきた。クルルが戻ってきたのだろう。と言うことは他の３人も戻ってきたはずである。

　ややあって、思ったとおりサーミャ、ディアナ、リディの３人が作業場に戻ってきた。

「おかえり。」

　俺が声をかけると、三者三様の「ただいま」が返ってきた。

「今日は何が採れたんだ？」

「主に果実だな。あとは畑に植えられそうなのもいくつか。見繕ったのはリディだけど。」

「早めに収穫できそうなものを中心にしています。」

　サーミャが答えて、リディがフォローした。早めに収穫できると言うことは、ハーブとか葉物野菜みたいなもんかな。果実の方は一部を酒に漬けて、残りは早めに消費してしまうことにしよう。食卓が賑わうのは良いことだ。

　その日の作業を終わらせて、晩飯の準備をする。今日はハーブも使って猪肉の香草焼きみたいなものを作ってみた。あとはリンゴに似た果物をそのまま出す。

　リンゴに似た果物は結構な数を採ってきてくれたので、いくつかを切って、小さな壺にたっぷりの水と一緒に入れてみた。壺は煮沸消毒して、水は一度沸かしてある。せめてもと思って蓋をして作業場に置いてきた。上手くいけば良いのだが。

　晩飯は好評だった。調理法自体はそうそう凝るのも難しいが、味付けはなるべく色々変えたいところではある。バターとかチーズなんかも手に入らないか、カミロに聞いてみるか……。

　翌日、サーミャとディアナとリディの３人は今日は畑の方をやるらしい。昨日持ち帰った苗は早めに植え替えしないともたないからだ。

　ただし、持ち帰った苗も畑を埋めるほどの量はない。エルフの里から種が届いた時のスペースが必要なので、その分は空けておくというわけである。

　５人プラス１頭の家族なので、一人頭にすると最大限収穫できても量は知れているが、それでも自給できるかどうかは、こういう生活では重要だと思う。

　何がきっかけで長期間ここに籠もらざるを得なくなるかも分からないし、隠居みたいな生活を始めるなら必須だろうし。今のうちにこう言うノウハウを貯めておくのがよろしかろう。

　しかし、今日の俺は鍛冶屋をせねばならない。あと１週間ほど後の納品までにそれなりの量の在庫を作る必要もあるし。……合間に見に行くくらいはいいよな？

　明日からサーミャ達が鍛冶仕事の手伝いをしてくれるようなので、今日はナイフ作りに切り替えた。剣は製造スピードで言えば手伝ってもらったほうが早いからな。

　リケも今日はナイフを作るようだ。カミロに聞いた話では売れ行き的にはリケの作る一般モデルのナイフが一番売れているってことなので、数を揃えたほうがいいのは一般モデルのナイフ、と言うことになる。

　逆に言うと高級モデルのナイフは実はそんなに数は出ない。そんな切れ味をナイフに求めている人の数が、他の商品と比べて圧倒的に少ないからだ。

　カミロからも「少なくても問題ない」とは言われているので、今日は一般モデルと半々にしてリケの負担を減らし、その分は好きなものを作る時間に当ててもらうか。

　俺がその話をすると、最初はリケも「そんな畏れ多い」と言っていたが、「エイゾウ工房の弟子として何か自分で作れるようにならないと」と説得して、やや

　ちょっと弟子を振り回している感じもあるが、たまのわがままだと思って許して欲しい。

　一般モデルだとそんなに気合を入れることもないので、ホイホイとこなせる。しばらく俺とリケの鎚の音がリズミカルに作業場に響いていたが、やがて外からガラゴロという音も聞こえてきた。

　クルルがディアナにおねだりして、ミニ荷車を牽かせて貰っているのだろう。クルルに牽かせる鋤を作れば畑の拡大も楽だとは思うが、そこまで大規模の農業をするつもりがないからなぁ。

　金属同士のぶつかる澄んだリズムに、ガラゴロと言うベース音が加わって、俺とリケはナイフを量産するのだった。

## 最後の部屋

2019年2月14日

　ナイフ製作の合間に畑の方を見てみる。畝が出来ていて、そこにきれいに並んだ苗の芽が可愛く整列している。苗と苗の間隔は広めにしているようだ。野生種だから根を広く張るのだろうか。

　まだ全部は植えられてないようだが、作業は結構進んでいた。

「おお、出来てるじゃないか。」

「まぁ、後ちょっとってところね。」

　ディアナが胸を張って言う。手には鍬を持っていて、伯爵家令嬢と言っても誰も信用しないような風体である。すっかりここの生活に馴染んでいるな。

「この辺りは土も魔力が多いので、よく育つと思います。」

　そう言ってくるのは、同じく鍬を持ったリディだ。エルフに鍬、と言うのも元異世界の人間である俺から見ると若干の違和感があるな。

　ぽくない、と言うか。リケの斧姿が異様に似合いすぎてるから、余計にそう思っているだけかも知れない。

　この作業を始める前にリディに聞いてみたところでは、里でも畑仕事は普通にあったらしいので、本人的にはそんなでもないのだろう。

「こう言う仕事はしたことなかったけど、結構大変なんだな。」

　サーミャも鍬を持って言った。黒の森の獣人は基本的に農耕をしないって言ってたからな。

「獣人の方は力もありますし、すぐ慣れると思いますよ。」

「剣の練習にもなりそうだしね。」

　リディとディアナが言った。この数日ですっかり仲が良くなっていて、いい傾向だ。誰かとは合わない、みたいなことがあると色々と大変だし。

「じゃあ、俺は作業場に戻るわ。」

「おう、頑張ってな。」

「またね。」

　サーミャとディアナからは声援を、リディからはお辞儀を受けて、俺は作業場に戻る。

　……戻ろうとして、その前に俺が家の外に出ていることに気がついたクルルが寄ってきたので、首筋を撫でてやり、庭を回るところを少し眺めた。なんだか牽く時のバランスが上手になっている気がするな。

　一昨日くらいまではもう少しミニ荷車の揺れが大きかったと思うが、今日はそれが心持ち減っているように見える。もしかすると遊んでいるだけじゃなくて、練習もしていたのかも知れない。

「よしよし、お前はえらいな。」

「クルルルル。」

　ゴリゴリと頭を擦り付けてくるクルルを撫でてやり、俺は今度こそ作業場に戻った。かなり後ろ髪を引かれる思いをしながら。

　その後、この日の鍛冶作業もつつがなく終えることができた。

　翌日からの作業もこれまでと同じように進んでいく。俺は２日ほど剣を作り、その後の２日でナイフを作る。

　リケは基本俺と同じものを作りながら、リディの手ほどきを受けて魔力のこめ方の練習をする。サーミャとディアナ、リディは狩りに出たり採取したり、畑の様子を見たりだ。

　クルルはと言えば、獲物の引き上げや採集についていったり、庭を回って遊んだりに忙しかった。

　それらの合間に水につけたリンゴの様子を見る。今の所上手くいっているな。明後日、カミロの店から戻ってくる頃にはちょうどいい具合っぽい。

　カミロの店に卸しに行く前の日、リディの部屋のものになる扉とベッドを作る。もうこれでそれぞれ４つ目だからブランクがあるとは言え作業も慣れているし、大半は俺のチートで時間を短縮出来るので、あっさりと片付いてしまった。

「これで今日からここがリディの部屋だ。ちゃんとした家具は入ってないが、欲しいものがあったら作るから言ってくれ。」

「ありがとうございます。」

　リディがペコリと頭をさげた。これで客間から自室へ移動して、本格的にエイゾウ工房の一員である。

「しかし、見事に部屋が埋まったなぁ。」

「だから言ったろ。」

　サーミャが呆れたように言う。どうせ増えるから作っておけと言ったのは彼女だし、実際にそうなってしまったので、これには返す言葉もない。

「これは新しく部屋を作ったほうがいいかしらね。」

「物置なら別に外に作ったほうがいいんじゃないか？」

　ディアナの言葉に俺が返す。

「いや、また家族が増えるんじゃないかってことですよ、親方。」

　今度はリケだ。

「いや、そんなことはない……と思うぞ。」

　俺は反論するが、サーミャもディアナもリケも、そしてなぜかリディも明らかに信用していない顔だ。

「例えばヘレンさんなんか来そうよね。」

「あー、そうだな。確かに。」

「あの人も親方気に入ってますからね。」

　ディアナ、サーミャ、リケが口々にヘレンが来る可能性について論じている。リディがちょこちょこそれに加わっていて、なかなか俺の面目がない。

　”女三人寄れば

「いや、あいつは来ないだろ。」

　なんとか俺は会話に割って入る。俺の思う限りでは、ヘレンは多分あちこちを回って戦い歩く今の生活を気に入っていると思う。俺がそう言うと、

「でもたまには戻ってくるわけでしょ。その時の家としてなら来るかもよ。」

　ディアナに反論されてしまった。うーん、これは分が悪いな。

「おっと、そろそろ晩飯の用意をしなきゃいけないな。今日はリディの部屋が出来た記念日だ！」

　見え見えの逃げに、４人は「逃げた！」とぶーたれていたが、すぐにヘレンが来る可能性と、部屋の増設をすべきかについての議論に戻っていった。

## 初運転

2019年2月15日

　結局、部屋の増築は見送りということになったようだ。部屋が完成した記念のちょっと豪華な夕食をとりながら皆に聞いたところ、今後人が増えそうな場合はまず客間を使ってもらい、その間に部屋を増築すればいいという話だ。

　家の人間が多いし、クルルの手伝いも考えたら以前より遥かにスムーズに作業ができるだろう、ということらしい。今後増えることもないだろうから、という話ではなかった。実に不本意である。

　翌日、カミロの店に品物を卸しに行く日だ。水汲みを含めた朝の日課を終えたら、リケとディアナがクルルに装具を取り付ける。俺を含む他の３人は荷車に荷物を積み込んだ。

　今回の改修で簡単な御者台というか御者が座れる椅子と、数人が座れるベンチも造り付けている。クルルの装具に荷車を繋いで、リケが御者台に座る。他のメンツはベンチに座った。乗り込む時にバネの沈み込む感じが伝わってくる。荷物と俺達を合わせてもバネが底についた感じではない。

　帰りには鉄石に木炭、塩なんかを積み込むのだから、今の時点で底についていたら完全に失敗だ。そうはならなかったので、俺はホッとする。チートで作ったからある程度大丈夫とは言え、こうやって乗ってみるまでは不安が晴れない。

「クルルルル！」

　クルルが一声大きく鳴いて歩き出す。ゴムタイヤでもないし、流石に前の世界での自動車のような乗り心地とはいかないが、それでも何もないよりは随分とマシな感じがする。

　ガツンと突き上げる揺れはほとんどない。その代りにユサユサというか、そんな感じの揺れはある。揺れを減衰させるのも板バネ同士の摩擦のみなのでやや続いている感じがあるが、酔うほどかどうかは人によるだろう。

　クルルは久しぶりの荷車をご機嫌で牽いていく。森の中なので速度は抑えめだが、それでも人間のジョギングくらいの速度は余裕で出ている。

　先日は帰りだけクルルに牽いてもらったし、サスペンションも未搭載だったからもっと速度を抑えていたが、これくらいの速度で森の中を走れるとしたら、かなり早く街につける気がする。

　速度が違うのだから当たり前だが、思ったとおり森を出るのはいつもよりも相当早かった。ここからは街道だ。

　街道に入ると更に速度が上がる。人間が走るくらい、他だと自転車を漕ぐくらいの速度が出ている。その分揺れも大きくなるが、キツい感じの揺れではない。積んだ荷物もゆらゆら揺れているが、ガタンと跳ねたりはしないし、もちろん荷崩れを起こしたりはしていない。

　色んな馬車がこれくらいのスピードで走るようになれば、街と都は今は片道で１日かかっているところが、日帰りができるようになる。そうすれば物資の流通速度の向上はもちろん、それに伴って情報の拡散速度も上がるだろう。

　それが様々な影響を及ぼすのは間違いない。”

　人間が走るくらいの速度で進んでいるから、警戒と言っても限度がある。なにより野盗たちはこの荷竜車に追いつこうとするなら、馬でもない限りは走って追いつく必要があるわけだ。

　弓でクルルの足を止めようとしても、それなりの速度で移動する目標に初弾を命中させるのは困難だろう。それを当てられるやつは野盗なんかしなくても、この世界ではそれなりに食っていく道があるので野盗にはならないようだし。

　それでも全くの無警戒というわけにもいかないので、周囲に視線を走らせて警戒することは怠らない。店についたらカミロに賊がどうなったかは聞いておかないといけないな。

　街の入口にはいつもの衛兵さんが立っていた。武器を見るとハルバードに変わっていた。とうとう街の衛兵隊でも制式になったんだな。衛兵さんは竜車を見て少し驚いたようだったが、俺たちを見ると

「ああ、あんたらか。」

　と納得した様子である。どうも変わった連中だと思われているらしい。まぁ４種族５人が一緒だから今更ではあるか。

「どうも。」

　俺は荷台から挨拶した。

「もうあんた達にどうこう言おうとは思わないが、人を撥ねたりしないようにだけ気をつけてくれよ。」

「もちろんですよ。」

　クルルは賢いから大丈夫だと思う。俺もだいぶ親ばかになってきたな……。

　実際のところ、クルルは街中ではおとなしくゆっくりと歩いていた。走竜は珍しいからだろう、エルフのリディ以上に注目を浴びているような気がする。

　何人かの視線に注意してみると、車輪のあたり――つまりサスペンション部分を見ている者もいた。そうそう、そうやって真似していってくれ。

　エイゾウ工房、デブ猫印のサスペンション！なんてことをやる気はない。特許制度も実用新案制度もない世界の話だし、これで儲ける気は俺にはまったくないからな。

　その代りと言ってはなんだが、聞かれればカミロには教えてやろうと考えている。

　ゆっくりと言っても、人の早足程度の速度で街を進んでいった竜車は、そのカミロの店にたどり着いた。改良型荷車での初運転はこれで終わりだ。

　割と悪くない乗り心地だったな。俺がそんなことを思っている間に、カミロの店の倉庫に竜車は入っていった。

## 遭遇

2019年2月16日

　クルルはカミロの店の倉庫でおとなしく止まってくれた。皆で手分けして、装具と荷車の連結を外す。クルルは水から上がった犬のように、体をブルッと震わせると、

「クー。」

　と小さく鳴いた。

　店員さんに言って、水と飼い葉を用意してもらう間に、店の裏手――俺達とクルルが初めて会った場所に連れていく。

「ここでおとなしく待っててね。」

　ディアナがクルルに声をかけて、首筋をポンポンとやさしく叩く。

「クルル。」

　分かった、とでも言うように鳴いたクルルはその場に座り込んだ。よしよし、お利口さんだ。

　俺達５人が商談室に入ってすぐ、カミロと番頭さんがやって来た。

　挨拶もそこそこに、俺は懐から袋を出す。マリウスからもらった金貨の詰まった袋だ。

「ここから走竜の代金を持っていってくれ。」

　その袋をテーブルの上に置くと、カミロが中身をあらためた。

「こりゃ随分入ってるな。」

「伯爵閣下からの贈り物だよ。」

「ははぁ、前のあれでもまだ不足してるって思ってたんだな。義理堅いことで。」

　カミロは事情を察したらしい。言葉では皮肉を言っているが、表情は優しいものになっている。根は優しいやつだからな。損得勘定となると冷徹な計算もすると言うだけで。

「じゃ、もろもろでこれくらい貰っとこうかね。」

　カミロが袋から金貨を何枚か取り出す。俺の思っていた金額より少ないな。

「それだけでいいのか？」

「ああ。帝国のとある貴族が没落してな。処分に困ってるのを安値で横から掻っ攫ってやったのよ。だからこれでも儲けは十分出てるさ。」

　帝国とは俺達のいる王国の隣の国だ。戦争には至ってないが、時折国境で小競り合いがあると聞く。聞いた相手はカミロだが。

「そうか。それならいいんだ。」

　金はカミロが遠慮した可能性も頭をよぎったが、そこは彼の商人としての矜持を信用することにするか。それにしても隣国にも手を広げていたのか。

　特にお咎めはないのだろうが、仲の良くない国で商売するのもリスクが結構ありそうだな。そのあたりをなんとかするのが、カミロの商人としての才覚か。

「どうだ、走竜の調子は。」

「ああ。賢いし、助かってるよ。そう言えば、あの子は男と女とどっちなんだ？」

「ん？聞いた話ではメスだってことらしいが。」

　クルルは女の子なのか。うーん、これでエイゾウ工房の男は俺１人のままだな……。ちょっとした物悲しさを覚えていると、

「それでだな……」

　突然カミロが声を少し落とした。なので俺達は自然と身を乗り出す感じになる。

「お前たちの乗ってきた荷車の仕組みなんだが。」

「ああ。板バネのサスペンションか。」

「あれはどういうものなんだ？」

　耳が早いと言うか、来てからいくらも経たないのにもう知っているのが凄いな。

　俺は特に何を隠すこともなく、簡単な仕組みと効果について話した。

「道から受ける衝撃を抑えられたり、凸凹を吸収できれば、速いスピードで走らせても大丈夫ってことか。」

「限界はあるだろうが、そうなるな。上手くやれば１日で街と都を往復できると思うぞ。」

「なるほどなぁ……。」

　カミロが考え込む。隣国まで取引しに行くような商人だと、１台あたりの速度の向上は決して馬鹿にできないだろうし、俺の言っていることが本当なら喉から手が出るほど欲しい技術であろうことは容易に想像できる。

「欲しいなら真似してもいいぞ。別にそれで文句を言ったりはしないし、金なんかも別にいらない。」

「本当か！」

　カミロが珍しく立ち上がりながら大声を出した。俺達がビックリしているのを見て、慌てて座り直す。番頭さんも意外だったようでビックリしているな……。

「コホン。ありがたいが、それ相応の礼はさせてもらうよ。」

　口調こそ落ち着きを取り戻したが、ワクワクが顔から消えていない。よほど気になってたんだな。

　カミロが番頭さんに指示を出す。いつもの買い取り分の査定と、サスペンションの構造をメモしておくことだ。メモを手伝おうかと言ったが、一旦自分達でやってみるそうだ。上手くいかなければまた２週間後来た時に相談に乗ることになった。

　その後、なんだかんだ世間話と言うか、世の中の動きについての情報交換をする。マリウスは魔物討伐での功績で地位が安定しているらしい。俺が手伝ったかいもあるな。後は魔族の国の国境付近での小競り合いがまだ時々起こっているそうだ。

　大規模な戦闘は起きていないし、どちらも大きく手出しをする雰囲気ではないらしい。国境あたりに鉱山があってそこの領有権の問題、と言うかそもそもそこの取り合いをして暫定的に引かれた国境線だそうな。であれば、これは別に相手が魔族の国だからと言う話でもないな。

「そう言えば、賊はどうなったんだ？」

「まだ捕まったという話は聞いてないな。」

「そうか。」

　捕まってくれていれば帰りの憂慮が１つ減ったのだが、そう上手い話はないらしい。

「被害はないってことだが、十分気をつけて帰れよ。」

「ああ。もちろんだとも。」

　軽く握手を交わして、商談室を出る。クルルは言われたとおりにおとなしく店の裏手で待っていた。ディアナが感激してやたらクルルの頭を撫でている。あんまりやると嫌がられるかも知れんぞ。

　飼い葉と水を持ってきてくれていた店員さんに１枚だけだが銀貨を渡して、クルルを荷車に繋いで倉庫を後にする。

　今日の荷物にはいつもの品々に型取り用の粘土もあるから結構重いはずだが、クルルはものともしない。サスペンションもまだ持ちこたえているようなので、ホッとした。帰りがキツいほうがまずいからな。

　街中を進むと、行きと同じようにやはり注目を浴びる。クルルは仕方ないとして、サスペンションの方はカミロが頑張って見慣れたものにして欲しい。そうして街の風景になれたら、それはそれで嬉しいものだ。

　衛兵さんに会釈をして通り過ぎ、街を後にする。街道は相変わらずのんびりした風景が広がっていて、つい警戒を緩めてしまいそうになる。

　だが、俺達は忘れていたのだ。走っても弓でも止められない荷車を止めるにはどうすればいいか。

　街からいくらか進んだ街道のど真ん中に、人が１人立っている。その人影は手に抜き身の剣を持ち言った。

「そこのお前たち！止まれ！止まらねば斬るぞ！」

　そう、道を塞いでしまえばいいのだ。俺はリケに止めるよう指示して、その人影の様子をうかがうのだった。

## 一つの解決

2019年2月17日

　クルルがゆっくりと歩みを止める。俺はチラッと後方を確認したが、気配はない。

「親方、どうします？」

「とりあえずはこのまま言うことを聞こう。」

「わかりました。」

　リケはクルルの手綱を持ったまま、じっとしている。

「よし、動くなよ！」

　剣を持った人影はそうこちらに命令してくる。全身をマントやフードで覆っていて、姿はよく見えない。声の感じからすればどうも女性のようなのだが、確信が持てないな。

　向こうがこちらに近づく間に弓を射掛けられたら面倒なので、それを警戒するようにディアナとサーミャに言う。もちろん、俺もだ。

　普通の野盗ならここでお仲間が登場して人なり金品なり、あるいはクルルや命を持っていくんだろうが、その気配がない。と言うことは普通の野盗ではない。

「ひょっとして、こいつが噂の？」

「おそらくな。」

　サーミャがこそりと俺に囁いた。そう、普通の野盗でないとしたら、前に話に聞いていた賊以外ない。

　さっき確認した時に後方にも気配がなかった。野盗ならUターンされないように後ろにも人を配置するだろう。

　そもそも走る馬車（うちの場合は竜車だけど）の前に賊でございますと言わんばかりに体一つで出てくるのが、どだい間違っている。もう少し頭の回るやつなら、丸太を道において障害にするなり、あるいは体調が悪いようなふりといった一芝居打ったりするだろう。

　全くそれらをしなかったのだから、まぁ普通の野盗ではないな。となると残った可能性は未だ捕まってないという賊だ。

　なので、目的を知りたかったのもあってわざと停止した。そうでなければ弓で撃つなり引き返すなりしている。

「それにしても

　向こうも当然警戒はしているが、今突然クルルが本気を出して走り出せば、ひとたまりも無いんじゃないのかコイツ。もしかして馬車を止めるのは初めてか。そんな経験そうそうあるものでもないだろうが。

「こんなのでよく今まで捕まらなかったわね。」

「同感だな。」

　ディアナの囁きに俺は同意するしかない。

　そこへ、やや緊張を伴ったリディの囁き声が聞こえる。

「あれは魔族ですね。」

「あれがか。」

「澱んだ魔力を纏っています。」

　俺は目を凝らして人影を見てみたが、よく分からなかった。この辺りはそのうち俺もリディに習うか……。

　人影はクルルの方に剣の切っ先を向けた。

「よし、そこのお前！持っている武器を出せ！」

　魔族がリケに命令する。リケがこっちを振り返るが、俺は頷いた。

　リケが手綱から手を離し、護身用のナイフを取り出して鞘ごと放り投げる。魔族は無防備にそれを拾い上げた。

　今、この荷台から斬りかかったら余裕で斬れた気がするが、とりあえず「何かを探しているらしい賊」が何を探しているのかを知るきっかけでもないかと、一挙手一投足を監視することにする。

　もちろん、うちの誰かに危害が及びそうになった瞬間に襲いかかる体勢を整えつつだ。

「あっ！」

　拾ったナイフを見ていた魔族が声を上げた。俺達は思わず柄に手をかける。一気に空気が殺気に染まった。いよいよ斬りかからねばならないかと思ったとき、

「おいお前たち、これをどこで手に入れた！」

　魔族にナイフを掲げながらそう問われて、俺達は顔を見合わせる。次の瞬間、俺達は思わず笑っていた。

「な、なにがおかしい！入手先を教えろ！」

　魔族は狼狽半分だが、相当憤慨しているらしい。気持ちは分かるがこちらの事情も知ってほしいところだ。

「どこで手に入れたもなにも、それを作ったのは俺だよ。」

　俺は毒気を抜かれて、笑いながら言う。

「へっ？」

　間抜けな声が響いた。

「今はそれを納品先に卸して帰るところだったんだよ。お前の目的がうちの製品なら剣を納めろ。話はそれからだ。」

　そろそろ、それとなくママを抑えとくのも限界に来てるんだから。夕方の稽古（ちゃんとまだ続けている）の時はそんなに実感していなかったが、確実に力が強くなっている。母は強し、とはちょっと違うか。

　このまま剣を納めないときは力づくで制圧して話を聞き出すまでだが、多少の被害を覚悟しなければいけない。なるべくなら避けたいところだ。

　魔族は逡巡していたが、やがて剣を納めた。

「よし。このままだと面倒なことになるから、こっちに乗れ。」

　なんだか魔族と俺達の立場が逆になっている気もするが、実際こんな場面を衛兵に見られたら、そのまま突きだす以外の選択肢はないのだ。

　魔族はゆっくりと乗り込んだ。多分こちらを警戒しているのだろう。こっちも警戒はするが、チートで感じるところではディアナより少し強いくらいでヘレンほどではない。それならなんとか抑えられるな。

「私はこの刻印の武器を探していた。入手するためだ。」

　荷台に座り込んだ魔族はナイフの柄頭――太った猫の刻印を見せながらそう言った。なるほど、探していたのはうちの製品か。ここいらでもそれなりの数が出回っていると思っていたが、そうでもないのだろうか。

　カミロは帝国でも売っているようなので、もしかすると刻印の入った高級モデルは利益のためにそっちをメインにしているかも知れない。

「さっきも言ったが、それを作ったのは俺だ。」

　俺は懐から自分のナイフを出して柄頭を見せた。もちろん同じ刻印が施してある。目配せをすると、他の３人も同じようにして見せる。

　単に俺達が全員エイゾウ工房の製品を購入しただけ、と言う話の可能性がなくはないが、エイゾウ工房の武器を探していた側からすれば、入手できるなら

「もし本当なら、１つ武器を作って欲しい。」

　魔族は俺に頭を下げた。根は悪いやつではないんだろうな。俺もちょっと簡単にコイツを信用し過ぎだなとは思う。こう言うところは前の世界での認識がなかなか抜けない。

「いいぞ……と言いたいところだが、うちはオーダーメイドの時は条件がある。１人でうちまで来ることだ。場所は教えてやるから、明日また来い。」

「わかった。そうしよう。」

　俺がそう言うと、魔族はあっさりと頷いた。

　うちへ帰る森の入口に差し掛かる前に魔族と別れる。色々気になることはあるが、それはうちに来たら聞くことにしよう。

　すでに面倒を抱え込んではいるが、これ以上面倒事にならないといいのだが。そう思う俺を乗せて、クルルの牽く荷車は森へ入っていった。

## 作る覚悟

2019年2月18日

　魔族と別れ、家に着いた。ゴタゴタは起きたものの、クルルのおかげで人力で牽いていた時と帰宅時間はさほど変わりない。クルルの装具を外したり、街に行った埃を落としたりした後、通常はそれぞれ好きなことをする時間に、俺達は居間に集まった。

「奴は明日来ると思うか？」

「来ると思いますよ。」

　魔族に対してどう対応すべきかの相談だ。俺の第一声にはリディが答えた。

「魔族もエルフと同じく魔力の扱いには長けています。なので、この家の”人除け”も恐らくは回避するかと。」

「森を越えられない可能性は……なさそうだったな。」

　俺がのんびり見ていられたのは、何かあったら即座に切り捨てられることがチートで分かったからに過ぎない。実力的にはその程度とはいっても、この森をうちまで来られないほどではなかった。

「あとは……魔族に武器を作ってやっても問題ないのかだな。」

　インストールの知識では６００年も前に大きな戦争があったとはいうものの、近年では小競り合いくらいしか起きていないという。それなら王国から見た帝国も変わりない。

　であれば、北方からやって来て勝手に住み着いた鍛冶屋である俺からすれば、帝国に武器が流れるのも、魔族に流れるのも変わりはないのだが、果たして実際にそうなのかどうかだ。

「アタシは別に。初めて見てビックリしてる、ってくらいだ。」

「私もです。」

　サーミャとリケは特に気にしないようだ。魔族と言われてもなぁ、てとこか。

「兄さんが匿ったり、利益を供与したりすれば間者だのと言われかねないけど、エイゾウはただの鍛冶屋なんでしょ？なら別に気にする必要はないんじゃない？」

　そう答えたのはディアナである。敵国の人間を厚遇していたら色々勘ぐられるのはそうだろうなぁ。

「仮にだが、魔族の国と戦になったら、君の兄さんを傷つけるのが俺の特注モデルの武器と言うことになるかも知れないが、いいのか？」

「それこそ今更でしょ。ヘレンがあなたの武器を持ってる時点で、あらゆる戦地でその可能性はもうあるのよ。」

「それは……そうだな。」

　傭兵であるヘレンが常に王国側として戦争に参加する保証はどこにもないのだ。帝国側として参戦して、そこにマリウスが派遣されるといったことがあり得ない話かと言えばそうではない。

　ディアナにはもうその覚悟があったのか。俺は今言われるまで意識していなかった。自分が作るのが何なのかを悩むことはもうしていないが、常に頭に置いておくことは必要だな……。

「感情として複雑であることは否めません。彼らは澱んだ魔力を身につけて生まれます。私達エルフとは１番相容れない存在でしょう。ですが、大戦からは６００年経ってますし、安定して供給するという話ならともかく、１つ２つ武器を作ってやったところで気にするものもそんなにはいないかと。」

　最後にリディが答える。そうか、綺麗な魔力で生きるエルフと、澱んだ魔力の魔族では相性が悪いのか。澱んだ魔力からは魔物が生まれると言うし、言われてみれば相性が悪いのも当然という気はする。

　総じて「気にならなくはないけど、別にいいんじゃない？」と言ったところか。まぁ、どこにも属さない勢力がどこに何を提供しようと関係ないっちゃ関係ないか。

　王国の伯爵家とは仲良くしているが、仲良くしている以上のことはない。

「あとは賊である事実をどうするかだな。」

「賊を匿うのも普通は罪になるわね。」

「だよな。」

　正直、今日見逃したのもそこそこヤバい行為なのだろうとは思う。しかしだ。

「実質の被害は一切無いってんじゃなぁ。」

「とは言っても、警戒に人を割いたりはしてますからね。エスカレートしない保証も無かったですし。」

　リケが言う。そうなんだよなぁ。

「これで俺が武器を作って本国に帰ってくれたら賊としては出なくなるし、大丈夫な気もしなくはないんだが、楽観的過ぎるだろうかね。」

「賊がどこかよそへ襲撃場所を移したと考えるとは思うわね。」

　俺の疑問にはディアナが答える。そうだよな。でもなぁ、それまで無為に巡回やらに人を割かせるのは結果として街道の治安が良くなるとは言え、事実を知っていると心苦しいな。

「仕方ない、カミロとマリウスの力を借りるか。」

　早速伯爵家に借りを作ることになってしまった、お互い持ちつ持たれつの関係ではあるから良しとしよう……。

「どうするの？」

「次にカミロの店に卸しに行ったときに、まだ警戒が解かれていなかったら、事実を

「兄さんとは言え、あまりエイゾウには借りを作ってほしくはないけど、仕方ないわね……。」

「そうだな。」

　借りと言ってもそんなに大きいものではないと思うし、これくらいの借りならいくらでも返す準備はある。見知らぬ魔族のために身を切るのも随分とお人好しだと自分でも思うが、これが俺のやり方だ。

　しばらく話し合ったが、「来たら作る」「特に邪険に扱ったりはしない」「武器を入手したら本国に帰るよう約束させる」で決着した。

　まだ若干自分の友人達と明確に敵になる人物に武器を作ってやることについてはためらいがあるが、ここが俺の鍛冶屋としての覚悟の決めどころなんだろう。結局は俺が作るかどうかでしかない。

　あまり魔族について詳しくない３人が、色々リディに質問するのを見ながら、夕食の準備をするべく俺は席を立った。

## 次のオーダー

2019年2月19日

　一夜明けて次の日、クルルと水汲みに行ってきた俺は、家の前に全身をマントやらなんやらで覆った怪しい人影を見つけた。このタイミングでここに現れる全身を覆った人影と言ったら、俺には１人しか心当たりがない。

　とは言え、別人で単なる賊の可能性もゼロではないので、俺はそっと水瓶を下ろしてナイフをいつでも抜けるようにして近づいた。

「誰だ。」

　俺は誰何の声をかける。返ってきた声は予想通りの声だった。

「来いと言うから来たのに、やたらと警戒するのだな。」

　やや不満げな声であるが、昨日聞いた声で間違いない。フードで顔が見えなくて、表情が分からないのがちょっと困るな。

「そりゃ本当にお前なのかどうか分からなかったからな。」

「それもそうか。」

　そう言うと、魔族はフードを取った。切れ長の目に短い銀髪、長い耳、そして褐色の肌には前の世界で言うトライバルタトゥーのような入れ墨が施されている。

　タトゥーに紛れてはいるが、左目の辺りに刀傷がある。それでも顔全体は普通に美人と言えるだろう。前の世界の知識丸出して言えばダークエルフだ。

　声と顔のつくりが一致すると、間違いなく女性だと確信できた。俺の知り合いで男性と言えばカミロとマリウス、あとはおやっさんたちくらいで、後は女性と縁が深いのは何かあるんだろうかね……。

「これで今度から分かるだろう？」

　自慢げに魔族の女が言う。

「今度もちゃんと顔を見せてくれたらな。」

「うむ。ちゃんとそうするとも。」

「とりあえずそこで待ってろ。水を運び込まなきゃいけないんだ。」

　俺は水瓶を下ろしたところまで戻って、担ぎ直した。ことがあったらこの水瓶が割れるの覚悟で応戦しなきゃならんな。クルルの水瓶は家の側に置いておいて、クルルには小屋に戻っておいてもらった。

　水瓶を家に運び込みながら、俺は尋ねる。

「ここへはすんなり来れたのか。」

「いや、”人除け”がちょっと厄介だった。私は魔法はあまり得意ではないのだ。」

「そうか……。」

　それは割とすんなり来れたほうなのだが、黙っていよう。

「こんな朝早くに来たってことは飯はまだ食ってないのか？」

「ああ。」

「じゃあ、食わせてやるから、客間で旅の埃を落としてこい。体を清潔にしてからだ。」

「いいのか？」

「客は客だからな……。」

　犯罪者は犯罪者なんだろうが、もっと重い罪を犯したやつならともかく、客は客として扱う。これは昨日決めたとおりでもある。運び込んだ水瓶から、客用に小さめの水桶を用意してそこに水を入れる。

　魔族の女性……

「そう言えば、名前はなんて言うんだ？」

「ニルダ。」

「じゃあニルダ、ここが客間だ。水と布はこれを使え。飯が出来たら呼ぶから、体をきれいにした後は、くつろいでいてくれていい。」

「わかった。」

　ニルダは素直に頷くと、客間に入っていった。

「来たの？」

　ちょうどそこへディアナや皆が起きてきた。

「ああ。今荷物を下ろして、体をきれいにするよう言ったところだよ。」

「そう。じゃあ私達も準備しないと。」

「そうだな。」

　うちはうちの皆で朝の日課をこなしていく。サーミャが普通に客間に入って洗濯物なんかを回収していた。男では出来ないから助かる。

　朝の一仕事が終わって朝食も出来たので、サーミャにニルダを呼びに行かせる。

　ニルダを含む全員が食卓に揃った。俺達がいつものいただきますをしようと手を合わせると、ニルダも見よう見まねで手を合わせて、小声でいただきますと言っていた。

「改めてだが、みんなに名前を教えてくれるか？いつまでも魔族さんとかは呼べないからな。」

　飯を食いながらだが、俺はニルダに自己紹介するよう促す。ニルダは一瞬不満げな顔をしたが、

「ニルダだ。」

　とぶっきらぼうに一言だけの自己紹介をする。視線はエルフであるリディに注がれていて、リディの方はいつもどおり……に見えるのだが、目に力があるというか、背景にゴゴゴゴという書き文字とオーラがみえるというか、そんな感じである。

　お互いに相容れない生態ではあるからな……。竜虎相打つと言った空気感になってきた。実際に虎なのは気にせずモリモリ朝飯を食べているサーミャだが。

「それで、うちの製品はどうやって知ったんだ？」

　俺は空気を変えられないかと、ニルダに質問をする。

「魔界と人間界の境を哨戒していたら、人間側の偵察部隊と出くわして、そこにいたヘレンとか言う赤毛の女に聞いた。」

　ニルダは魔界と人間界とは言うが、世界や時空が違うわけではない。単に魔族の住む領域を魔界、人間の住む領域を人間界と言っているだけである。６００年前の戦争の名残の１つだ。

「ヘレンで赤毛って、”雷剣”か？」

「私が聞いた時は”迅雷”と呼ばれていた。」

　しばらくここらを離れるとは言っていたが、魔界の方まで行っていたのか。そして気がつけば二つ名が変わっている。迅雷か。確かに速いからな。

「”迅雷”の部隊と出くわして、戦闘になった。だが、こっちは手も足も出なかったよ。殺されはしなかったが、私のもの以外すべての武器を”迅雷”があっという間に破壊した。」

　俺の特注モデルだから、普通の鋼くらいならあっさりと壊していけるだろう。とは言え、そんな使い方を続けていたら特注モデルと言えども限界はある。戻ってきたらしっかり直してやらないといけないだろう。

「私はそれを見ていたから、彼女に武器を破壊されぬように立ち回ったが、いくらもしないうちに壊されてしまった。その時に言ったんだ『アンタやるねぇ！アタイと同じ武器ならもっとやれたかもね！』と。」

「で、聞いたと？」

　ニルダは頷いた。

「うむ。『ではその武器を手に入れたかったものだ』と。『これはアタイが特別に作ってもらった逸品だからね。そう簡単には手に入らないよ。』そのあたりで音を聞きつけた他の魔族側の部隊がやってきたのだ。”迅雷”はそっちも片付けられただろうが、何故か退却していった。柄頭の刻印を見せながら、『どうしても欲しけりゃこの刻印の武器を作ってる職人を探しな！』と言い残して。」

「なるほどね。」

「それで暇をもらい、探しに来たのだ。どうもこの辺りにそれを作った職人がいる、と言うところまででそれ以上分からず、ああやって探していたわけだ。ここらでそれを持っているということは、直接職人か、職人から卸してもらった商人から買っているだろうからな。」

　時間がなかったのもあるだろうが、ヘレンはここの場所を直接教えるようなことはしなかったんだな。

　まぁ、それでこうやってデブ猫印の武器を探す賊の出現と相成ったわけだが、まさかこんなことに及ぶとはヘレンも思ってはいなかっただろうな。

「襲われた人が顔を覚えていなかったのは？」

「そもそも大して見せてないし、その状態でなら”物忘れ”の魔法がよく効く。」

　俺がチラッとリディを見ると、リディが頷いた。そう言う魔法があるのか。苦手だと言っていたが、条件さえ整えばそれなりには使えるらしい。

「ふむ……。」

「質問は終わりか？」

「ああ。今の所はな。」

「そうか。しかし美味いな、お前のところの食事は。」

「そう言ってもらえるなら作ったかいがあるな。」

　このあとは大した話もなく朝食を終えた。魔界のこと聞いていいのか分からんしなぁ。

　朝食と後片付けを終えて、作業場に移る。神棚に拝礼だ。ニルダはここでも見よう見まねで拝礼していた。

「魔族的に人間の神様にお祈りするのはいけないとかあるなら、別にしなくていいんだぞ。」

「別にそういうのはない。面白い風習だなと思って真似ているだけだ。」

「ならいいんだが。」

　魔族って無宗教なのかね。もしくは１番上が魔王様で、その辺アバウトだったりするんだろうか。

　拝礼が終わると、リケ達は板金を作る準備にかかる。炉の点火なんかは俺が魔法でやるのが１番手っ取り早いので俺が着けた。ニルダの視線が突き刺さるが、お前には今から聞かねばならないことがあるんだ。

　ニルダと俺は作業場の商談スペース（テーブルと椅子があるだけだが）に移動して、向き合って座る。

「で、どんな武器が欲しいんだ？」

「そうだな。人間達には馴染みがないかも知れんが、剣のように幅広で両刃ではなく、薄く長い片刃のものがいい。」

「切り裂く武器か。緩やかに湾曲したりしていたほうがいいか？」

「そうだな。」

「ふむ。」

　俺は作業場に転がっていた木材をナイフでササッと削る。出来上がったのはニスも何も塗っていないが、前の世界では修学旅行で男子が必ず１人は買うというアレである。

「こう言う形状ってことでいいか？」

「まさにそう言うものだ。」

「なるほど……」

　ニルダが欲しがっている武器、それは刀だった。

## 作刀準備

2019年2月20日

　しかし、刀か。元日本人としてはちょっとテンションの上がる依頼内容ではある。

　ただ、刀とは言っても、ちゃんとした日本刀は作れなさそうな気がする。

　製作にはチートを使ってだが可能として、この世界で俺がチートを使うと材質が玉鋼と同じものにはならない。わざわざ高級モデル品質の鋼を特注モデル品質の鋼で覆う、ってのは意味がないしな……。

　ただし、リケの修行もあるので、これも意味はほぼないが特注モデルの鋼を特注モデルの鋼で覆う形式をとる予定にする。

「よし、それじゃあちょっと庭に出るか。お前さんの得物を持ってきてくれ。」

　俺はニルダに声をかけた。

「どうしてだ？」

「得物の扱いやらを見て、長さとか重さなんかを決めるんだよ。」

「なるほどな。」

　ニルダは作業場を出たかと思うと、すぐに戻ってきた。手にはちゃんと剣が握られている。

　俺は作業場側の扉を開けて外に出た。後からニルダがついてくる。ここや庭で俺に切りかかるメリットはニルダにはないが、念の為に変な動きをしたら対応できるように、ナイフの位置を変えておいた。

「きゃっ！」

　庭に出た瞬間に、ニルダが短い悲鳴をあげた。クルルが扉のすぐそばにいたからだ。

「なんだ、出てきてたのか。」

「クルルゥ。」

「よしよし。危ないからちょっと離れててな。」

　俺が頭を擦り付けてくるクルルの首筋を撫でながら言うと、クルルは素直に少し離れた場所に座り込み、ついでと言わんばかりにその辺の草をついばみはじめた。おりこうさんだ。

「そ、そう言えばお前の家には走竜がいるんだったな。」

「会った時に荷車牽いてただろ。」

「あ、ああ。しかし、随分と懐いているな。」

「普通の走竜もこうじゃないのか？他の走竜を知らないから分からんが。」

「魔界にも走竜はいるが、もっと気が荒い。全く言うことを聞かぬ程ではないが、よくヘソを曲げるから扱いづらいのだ。」

「へえ。走竜によってそんなに違うのかね。」

「分からぬ。少なくともお前の家の走竜と違うことは確かだ。」

「ふぅん。」

　俺は余り興味のないような声を出す。だが、なんとなくの察しはついた。走竜は今クルルが草を食べているように、普通に餌と認識されるようなものも口にするが、本当の食料は魔力だ。

　魔族は澱んだ魔力を身に受けて生まれると言うし、おそらく魔界の土地は澱んだ魔力が多いのだろう。その魔力を食料として摂取しつづけると、気性が魔物よりになってしまうのではなかろうか。

　これらはすべて推測に過ぎないが、クルルと魔界の走竜との気性の差がかなり大きいのだとすると、魔力の質の差が違いにつながっている可能性は高いように思う。

　しかし、そうなると魔界は魔物とかバンバン生まれているんだろうか。ニルダがもう少し俺たちに慣れたら（そして俺たちがニルダに慣れたら）聞いてみるのも良いかも知れないな。

「ここで振るえばよいのか？」

「ああ。演舞でも訓練でもいい。なるべく実戦に近い動き方のほうが参考にはなるが。」

「あいわかった。」

　ニルダ頷くと、剣を抜いて振りはじめた。やはりヘレンには及ばないが、ディアナと比較すれば少し上くらいの実力だな。

　ただ、刀のようなものを欲しがっているのに、今振るっているのは普通の剣である。刀を作るのに支障はないが、なぜだろう。聞いてみるか。

「さっき欲しがっていたのと、今振るっているのとは形が違うようだが？」

「同じ形のは”迅雷”に壊されたからだよ。これはそれなりに使えるが、間に合わせだ。」

　剣を振るいながら、ニルダが不機嫌そうな声で答える。そりゃそうか。

「変なことを聞いてしまってすまない。」

「いや、いい。そもそもが私の未熟ゆえだ。」

　そうして四半時程の間、剣を振るうニルダを観察した。

「じゃあ、長さはこれくらいか。」

　俺は両手で長さをニルダに示す。脇差と呼ぶには少し長いくらいの長さだ。小太刀と言えばいいだろうか。

「少し短くないか？」

「お前もヘレンと同じで速い動きだろう？短めで動きやすいほうが良さそうだと思うが。」

「ふむ。」

「なので重さも軽めのものを作る。この辺は出来てから調整もするが。」

「わかった。任せよう。」

　これで最終的な形は見えた。あとは作るだけだ。

　俺はクルルにまた後でなと声をかけ、鳴き声を背にニルダと作業場に戻った。

## 作刀１日目

2019年2月21日

　俺とニルダが作業場に戻ってくると、中では板金をバンバン生産していた。

　基本的には砂型に流し込んで、ちょっと加工するだけなので４人中３人が手慣れていれば、生産速度の向上も当たり前ではあるのだが。

「さて、じゃあ取り掛かるか。」

　よし、とばかりに俺が腕まくりをすると

「私も見ていてかまわんか？」

　とニルダが言ってくる。

「別にかまわないが、今日は見てて面白いものでもないと思うぞ。森の中を散歩するなり、庭で稽古するなりしてくれていてもいいんだが。」

　今日はいけても素延べ――思った長さに延ばすところまでだろうから、ひたすら叩いているだけだ。花形である（と俺が思っている）ところの焼入れなんかはまだ先の工程になる。

「よい。かねてより興味があったのだ。

「まぁ、それなら別にいいが。」

　答えながら、俺は前に作ってあった板金のうちいくつかを選び取っていく。そのうちの１つをヤットコで掴んで、火床にいれる。

　まずは板金自体の鍛錬をするのだ。本来はここで材質の不均質な部分を落としたりしていく。しかし、俺のチートの場合はそれをしなくても均質かつ品質の良いものが出来るので、似たような工程として存在するが、やる内容が全然違ってきている。

　火床で板金を熱して不均質なところを直し、魔力を篭める。高級モデルではなく、特注モデルなのでチートは全力だ。高級モデルまでならある程度の不均質は許容するが、特注モデルでは一切の不均質を残さない。

　チートを使えばそのうち高張力鋼も作れるようになるんじゃないかという気はするが、作ったところでこの世界では使いみちがなぁ。

　ともあれ、そうして出来た高品質な板金を積んで、火床で熱し鍛接して２つの塊を作っていく。この時、酸化鉄が周囲に出来てしまうので、それをなるべく防ぐために周囲に藁灰をまぶしたりしておくのだ。

　熱して叩いてタガネを入れて折り返す。これも本来はこのときに

　このあたりは今後の大きな課題だ。チート品質を保ちつつ、均質でないような風合いを活かすことが出来るようになれればいいのだが。

　特注モデルなので、いつもの作業のときよりも時間がかかっている。昼食を終えてすこし後くらいに２つの塊がようやっと出来上がった。

「リケ、ちょっといいか。」

「はい。なんでしょう？」

「今から北方のカタナと言う剣の製作で大事な部分の１つをやるから、ちょっと見ててくれな。」

「わかりました。ありがとうございます、親方。」

　片方の塊を細長く延ばし、もう片方は平たく延ばす。細長い方が冷えてきたら、平たい方を加熱する。

「普通はこっちの平たい方は硬い鋼、細長い方は柔らかい鋼を使う。硬いだけでは折れる。柔らかいだけでは曲がる。」

　今回はチート製高品質鋼みたいなものなのであまり違いがないが。組織としては柔らかくても魔力のおかげで硬い、みたいなことになっているからなぁ。一般モデルみたいに魔力をあまり篭めない製品の場合は別だけど。

　平たいほうが加工可能な温度まで上がったので、U字に曲げてそこに細長いほうを置いてくるんでいく。日本刀では

「こうして２つの異なった性質を持つ鋼を１本にまとめるわけだ。こうすれば硬い鋼の斬れ味と曲がりにくさ、柔らかい鋼の折れにくさを併せ持つことが出来る。」

「なるほど。これが北方の技術ですか……。」

「そうだな。」

　インストールで同じような武器があるのは分かっているので、おそらくは作り方も同じであろうとの推測だが、そう違いはないだろう。最悪秘伝と言うことにしてしまおう。

　この後、出来上がりの寸法くらいまで延ばしていく素延べの工程に入る。金床を水で濡らして、熱した鋼の塊を置いて叩く。水が蒸発してもうもうとした蒸気があがり、時折叩いたときに「パン！」と火薬の破裂するような音もする。

　一番はじめにこの音をさせたときは、その場の全員を驚かせてしまった。

「す、すまん。」

「何をしたんです？」

　リケが聞いてくる。

「こうすることで表面が滑らかになるんだ。」

「なるほど、そんな効果が。」

　そうやって説明していると、今度は外から

「クルルルルルル。」

　と声がする。ああ、クルルも驚かせちゃったか。

　俺は慌てて外に出て、作業場のすぐそばまで来ていたクルルの頭を撫でながら、なんでもないことを説明した。クルルは少し心配そうにも見えたが、おとなしく小屋の方へ戻っていってくれたので一安心だ。

　その後も熱して延ばす作業を続けながら幅、長さ、厚みの調整をしていき、概ね思ったとおりの寸法になったところで止める。

　そして気がつけばもう日が暮れかけていて、残りの作業は明日となってしまった。

　俺は少し後ろ髪を引かれる思いをしながら、残業はよくないと自分に言い聞かせ、作業場の片付けを始めるのだった。

## 作刀２日目

2019年2月22日

　翌日、今日は素延べの次の工程からになる。いよいよ刀の形を作っていく工程、火造りだ。今日の作業からはリケも見学をする。サーミャとディアナ、リディは剣の型作りだ。

　ドワーフ製の刀とかなかなかロマンのある話でいいな。頑張って作れるようになって欲しいところだ。

　火造りはまだ全体的には四角形でしかない素延べの状態から、熱して叩き、断面を細長い五角形にする作業である。当たり前だが、五角形の１つの頂点が刃先となる。

　刃先の逆の辺が棟（峰）で、その両脇の辺が

　そのあと、柄の中に収まる部分である茎の形もつくり、切先も峰側の先端を三角に落として叩いて形作っていく。刀の切先も長かったり短かったり、丸かったりやや直線に近かったりといろいろあるのだが、今回は丸くて短めの

　前の世界だと、このあたりの形状で概ねどの時代のどこの刀工のものか、みたいなことが分かるのだそうだが、この世界ではそう言うことも関係ないし、基本的には俺の感覚ベースのチート任せである。

　この時に反りについても、後で焼入れをしたときのどれくらい反りが出るかを考えてある程度作っていかねばならない。俺はチートで随分と楽をさせてもらっているが、前の世界での刀鍛冶の方々がどれだけ凄いことをしているか、こうやって自分で作るとよく分かるな。

　そうして作業をしていくと、俺のよく見知った刀の形ができあがった。だが当然ながらまだまだ完成ではない。

　一旦全体が冷えるのを待ってから、再び加熱をする。今度は赤熱するほどには加熱せずに低めの温度で全体を熱してから冷ます。

　表面には酸化鉄の被膜があるので砥石で落とした後、鎬地と平地（鎬から刃先にかけての平らな部分）を鎚で叩いていく。これで締まって斬れ味が増す……ようだ。チートでやってるから本当なのかどうかはちょっと分かっていない。

　その作業も終わったらいよいよ焼入れ……ではなく、いくらチートを使っての作業とは言え、鎚で金属を叩いているので、大小はあれど刀の表面には凹凸がある。

　これをヤスリや専用のカンナ（ないので特注モデルナイフで代用）で削って平らに整えるのだ。微妙な歪みもここで整える。茎と刀身の境もこの段階で作った。

　これで刀の形をつくる、と言う作業はようやっと終わる。

　型に使っている粘土、砥石の粉、木炭の粉を混ぜて

　刀身の全体に薄く焼刃土を塗っていく。全体に焼刃土を塗って、刀は黒く化粧された常態になる。さて、ここからがある意味一番の悩みどころだ。

　刀には焼入れしたときに急冷されるところとそうでないところの境目に、違う組織が混じったものが刃文として現れる。この刃文の形はこの段階で土を塗って決めていくわけだが、この形状が色々ある。

　詳しい分類は省くとして、基本的に俺の好みは刃文が波打っていない

「よし。」

　俺は焼刃土を塗るための細い棒（その辺の木材を割って作った）を手にとって焼刃土を塗っていく。本当は筆なんかを使って刃文の下書きをしたりするのだが、この辺もチートに任せてしまう。

　本来ここで筆を使ったりすることはリケには伝えておいた。いきなり土を置こうとして上手くいかない、って悩んでもいけないからな。

　こうして焼刃土を塗り終わる。棟側が分厚く、刃側が薄い。こうすることで刃の側は硬め、棟の側は柔らかめになることで更なる斬れ味と耐久性を得るのだ。

　今日このまま焼入れまで済ませてしまおうかと思ったが、もう日が暮れかかっている。焼入れ自体は明日のお楽しみだな。

　俺たちは作業場を片付けると、夕食の準備の前にかまってやれなかったクルルをかまうべく、一旦外に出た。クルルはすこし拗ねていたが、俺やディアナが撫でたりしてやると、機嫌よくそこらを走り始めるのだった。

## 作刀３日目

2019年2月23日

　昨日は焼刃土を塗るところまでを行った。今日は焼入れ以降の仕上げの作業に取り掛かる。

　焼入れは刀を作る上で一番だ……と俺は勝手に思っている。ここで失敗したらここまでの２日間が全くの無意味になってしまうからな。

　今日もリケとニルダが見学である。他の３人は畑と採集に出るらしい。半分はクルルの散歩を兼ねてと言ったところか。

　朝の拝礼を終えて、サーミャとディアナ、リディの３人を見送ったら魔法で火床に火を入れる。俺は木炭を追加して全部に火が回るよう、やはり魔法で風を送る。

　やがてゴウゴウと音がして全体に火が回り、明るさを増してくたので、一旦送風を止めて、焼刃土が乾いた刀身全体を火床に深く入れる。

　刀身全体が満遍なく加熱されるように木炭の位置を調整しつつ、温度が安定するように木炭を追加したり、送る風を調節したりする。これらの塩梅はすべてチートで掴んでいる。

　やがて刀身が焼入れに適した温度まで上昇した。

「この温度だ。」

「はい。」

　俺がリケに声を掛けると、力強い返事が返ってきた。

　本来はこの温度を見極めるために夜間に

　副次的にニルダに多少の鍛冶の心得があっても正確な温度がわかりにくいという効果が出たが、魔族に赤外線を探知するような能力があれば意味がないので、気休めではある。見る感じ鍛冶については疎いみたいだから取り越し苦労でもあるだろうが。

　適切な温度になったので、全体を一気に水槽に沈める。この水槽に満たした水の温度も焼入れでは重要だ。

　前の世界では師匠が焼入れに使う水の温度を知ろうと水槽に手を入れた弟子が、その手を切り落とされたと言う話が残っているくらいなのだ。

　そんな大事なものではあるが、俺の場合はチートで確認済みで、リケには教えてある。俺はこの世界の鍛冶屋だし、感覚もチートだよりだからな……。

　水に沈んで急冷された刀身は、ジュウと言う音を立てたあと、何度かコン、コンと音をさせた。俺の手にも感触が伝わっている。焼刃土によって冷却される速さが違うため、その違いで収縮が起こり今まさに刀身が反っているのだ。

　前の世界ではこれらを産声に例える方がいらしたが、なるほど、これはそう思えるのも納得だ。

　水槽から引き上げた刀身は思ったとおりの反りをしている。反りの中心は刀身の真ん中くらいの鳥居反りにして、反り自体は深くなく浅めである。

　まだ火のついている火床の炎に刀身全体を晒してほんの少し温度を上げ、わずかに出た歪みを丸太を切った台に乗せて直す。この工程で焼きの入った部分の焼戻しもできる。

　歪みが取れて冷えてきたら、今度は荒目の砥石で全体を研いで刃文を確認する。ちゃんと思ったとおりの

　全体に問題無いようなので、このまま全体を研ぐ。とは言ってもはまだまだ仕上げではなく、この後の工程に進むためのもので、模型作りで言えばサーフェイサーを噴くくらい、化粧で言えばファンデーション下地の辺りだ。

　研ぎを進めていくと、鈍く光る刀身になってきた。前の世界で何度か有名な刀を見たが、それから見てもなかなか悪くない感じに見える。専門家じゃないし自作だから贔屓目があるのは否定しない。

「おお。完成か！？」

　ニルダが俺が掲げた刀身を見て言う。

「いやいや、まだまだだよ。これから仕上げていかなくちゃならん。」

「そうなのか？」

「北方の刀は芸術品にも例えられるくらいだからなぁ。今作っているのはそれでも相当実戦よりにしているつもりだが。」

「ふうむ。」

　ニルダが何か考え込みはじめたので、俺は作業の続きを進める。

　研いで全体の姿が決まったので、チートを使って鎬地の棟よりに１本のU字の筋――

　樋彫りも終わったので、刀身側を全体に更に綺麗にしていく。これでも模型で言えば塗装完了、化粧で言えばファンデーションだ。樋のところもムラがないように綺麗にヤスリや砥石で磨いた。

　これで刀身側はもうあとは仕上げをするだけ、と言うところまで来た。次は

　前の世界だとこの鑢目の残し方が人や工房などで様々違っていたりするらしいのだが、この世界でそれを気にする必要があるのかは疑問なので、特に気にはせずにおいた。

　そしていよいよ、形を変える最後の作業である。俺はタガネを手にとって、まずは目釘孔の刃側に太った猫が座った姿の刻印を掘る。

　そこでカランコロンと作業場の鳴子が鳴る。もうそんな時間か。この次の作業で今日は終わりだな。そう思っていると、作業場にサーミャたちが入ってきた。

「お、なんだ、まだやってたのか。」

「ああ。まぁこれで終わりだよ。」

　俺はサーミャにそう答えると、再びタガネを手にとって、猫の刻印の反対側に銘を切った。”但箭 英造”、と。

## 作刀４日目

2019年2月24日

「よし、これで明日磨いて刃を研いだら刀身は完成だな。」

「エイゾウ。」

　俺がそっと刀身を掲げると、ニルダが声をかけた。

「そこに彫ったのはなんだ？」

　ニルダは

「これか。こっちはうちの工房の製品であることを示す刻印で、こっちは俺が作ったことを示すもの――俺の名前だな。」

「こっちの紋様の方だな。」

「ああ。」

　銘は”日本語の漢字”で切った。この世界の北方の文字とも微妙に違う（とインストールが教えてくれた）ので、俺と同じ境遇で漢字を知っている人間がいない限りは分からないはずだ。

「うちの秘伝の文字、ってことになるな。」

　俺は暗に意味なんかを教えてやれないことを告げる。職人にとって秘伝とは命と同義であることはニルダも分かっているだろう。なんか目がキラキラしてるけど、分かってるよな？

　リケやその他の面々も「ほほう」とか言って感心している。そのうち名前を漢字で書いたらどうなるのかは考えないといけないかも知れない。リケやリディはともかく、ディアナとかサーミャとかはキラキラネームになる未来しか見えないのがつらい。

「これはあやつのには入ってないのか？」

　キラキラしたままの目で聞いてくる。あやつとはヘレンのことか。

「ああ言う剣に入れる風習は俺のところにはないから、刻印はともかく、銘は入れてないな。今回は北方の刀だから入れただけで。」

「そうか……。そうかそうか。うむ。良い。良いぞ。」

　ニルダのテンションが上がる。ヘレンのにはない、と聞いて嬉しいようだ。ライバルとして見ているんだろうと思う。これが武器でなければ微笑ましいんだがな。

　採取に行っていたサーミャ、ディアナ、リディが今日取ってきたのはスモモっぽい果実と、ハーブがいくつかだ。ハーブはまた明日植えるらしい。

　そのハーブを失敬して、猪の香草焼きみたいなものを作ってみることにした。ハーブも結構数が揃ってきたなぁ。

　猪はなんというか野生の豚って味なのだが、その癖の強さが抑えられていてあっさりしているように思う。皆にも好評のようだし、これも時々はやるか。

　スモモっぽい果実も若干癖はあるがなかなか美味かった。砂糖が大量に手に入るようなら火酒と漬け込んでも美味いんだが、砂糖って高いんだよな。

　翌朝、朝の食事の準備を終えた後、俺は小さな壺の様子を見た。中にはシュワシュワと泡を出す液体が入っている。これは結構上手くいったんじゃなかろうか。今日このまま仕込むか。

　その液体――リンゴの酵母が培養された酵母液と小麦粉と水を合わせて捏ねる。後は酵母ちゃんたちの頑張りに任せよう。

　朝の拝礼をして、昨日形の出来上がった刀身を磨いていく。リケたちは今日は剣を作っていくらしい。慌ただしく、そして大きな音を立てる横で、俺は静かに研ぎの作業を始めた。

　研ぎの作業は本来は研ぎ師と呼ばれる専門家の作業で、ちゃんとやれば通常で２週間前後、時には半年以上もかかる作業なのだが、俺の場合はチートがあるし、すべての道具があるわけでもないので実戦で困らないレベルまで、と言うアレンジにはなる。

　大雑把に言ってしまえば、やる作業そのものは他の刃物と大きく変わるわけではない。荒目の砥石から初めて、細目の砥石で砥石目を消していく。

　その時に

　灰を混ぜた水を使いながら、ゆっくりと刀身を研いでいく。短めではあるが、十分に長い刀身を綺麗に研いでいくのはなかなかに難しい。だが、チートのおかげでなんとかなっている。

　せっかく刀として作っているので、出来ないなりにも可能な限り美しい刀身に仕上げたい。そんな事を思いながら刀身を磨き上げ、刃を整えていく。

　やがて全体が白っぽく研ぎ上げられたので、鍛造した時の鉄の粉と油を混ぜたもので拭って鎬地側を黒っぽくしたり、鉄の棒で擦って磨き上げたりと言った作業を地道に行った。

　作業はかなり端折って行ったし、チートも併用したのでかなりのスピードで行えたはずなのだが、今日ももうすでに日が落ちかけている。しかし、これで刀身としては完成を見た。

「よし、できたぞ。」

「おお、ついにか。」

「この後、鍔や鞘なんかも必要だが、刀身自体はこれで完成だ。」

　鎬地の黒さと、刃の白さのコントラストが美しい。落ちかけている陽の光で透かせば刃文もちゃんと分かるし、いかにも刀と言った風体に仕上がった。

「早く扱ってみたいものだが。」

「まぁそれはまた明日だな。」

　俺はニルダをなだめながら、夕食の準備をすべく、作業場の片付けを始めるのだった。

## 鐔と柄

2019年2月25日

　片付けのとき、完成した刀身は一旦神棚の下に安置した。神棚と刀って雰囲気あるな……。特注モデルじゃないやつを一振り作って飾っておくのはありかも知れない。

　いつもならディアナと稽古をしてから夕食の準備なのだが、今日は先にやることがある。キレイに手を洗って、朝に仕込んでおいたパンの様子を見ると、かなり膨らんでいた。

　膨らんでいる生地のガス抜きをして６つにまとめてから、湯を張った鍋に水を加え、その上に板を渡してまとめた生地を並べる。これで上手くいくといいんだが。

　俺はその状態でディアナとの稽古に向かった。

　戻ってくるとパンは再び膨らんでいる。これなら焼いても大丈夫そうだな。オーブンはないので、鍋を利用して似たような感じで熱が回るようにする。ダッチオーブンと言えばカッコいいが、そこまで良いものでもない。

　１つの鍋とかまどでスープを作り、もう１つでパンを焼く。どちらからもいい匂いが立ち昇ってくる。これはなかなか期待が持てそうだ。

　やがてどちらも完成して、食卓に並べていく。

「今日のパンはいつもと違うな。」

　サーミャが鼻をヒクヒクさせている。

「いつものパンは発酵させてないが、今日のは発酵させてるから柔らかいぞ。」

「へー。」

　サーミャは突付こうとして、リケに手をペシッと叩かれている。

　俺達は笑いながらいただきますを言って食べ始めた、

　スープはいつも通りの味だが、パンがふわふわでほんのりリンゴの匂いがしてうまい。こう言うことにもチートが鍛冶ほどではないにせよ有効なのは助かる。

「おー、ホントにふわふわしてる。」

　サーミャがパンを千切りながら言う。口でその柔らかさを確認するかのように頬張った。

「柔らかいパンってのも美味いもんだな。」

「だろ。」

「家で食べてたのと比べても遜色ないわね……。」

　こちらはディアナだ。伯爵家なら毎日のように柔らかいパンを食べていただろうし、そのディアナの評価なら信頼できる。リケも美味そうに食べているし、リディはなにやらうんうん頷きながら食べている。

「エイゾウ……。」

　パンを口にしたニルダが妙な迫力をもって言ってくる。

「な、なんだよ。」

　妙な迫力に俺は思わずのけぞる。

「お主は何者なのだ。」

「俺はただの鍛冶屋だよ。」

「ただの鍛冶屋がこんなところに住んで、柔らかいパンを焼く技術を持っているわけがなかろう。」

　ニルダの言葉に、俺以外の全員が頷く。

「じゃあ、色々できる鍛冶屋。」

「だから何なのだそれは……。」

　明らかにニルダが呆れている。だが、詳細に「実はチートを持っていて」なんて言ったところで信じてもらえるはずもないからなぁ。

「今のところはそれで納得してくれ。」

「むう……。」

　もちろんそれで納得できようはずもないが、俺に説明する気がないと分かるとニルダはそのまま食事に戻った。

　翌日、今日からは刀身以外の部分の作成に取り掛かっていく。具体的には

　これらも本来であればそれぞれに専門の職人がいる。俺の場合はチートでまかなって実用には耐えられるものにできるのだが、北方ではどうしているのだろうか。一度北方に行ってみる必要があるかも知れない。

　まずは鐔と柄と刀身と鞘の全てを結びつける大事な部品、

　小さめの板金を割って刀身に合わせた形に加工していく。これも銅なんかを使ったりロウ付けしたりと言った工程が存在はするが、俺の場合はチートを使って鋼で合わせてしまうのだ。

　この部分が鐔や鞘と組み合わさるので、チートを使っているとは言ってもかなり気を使う部分である。形が出来たら冷えた状態で鎚で叩いて締めながら刃の根元まで押し上げていく。最終的な位置を決めてヤスリで磨いて仕上げた。

　鎺も装飾のために彫刻を施したり、金を巻いたりすることもあるのだが、今回はこれで良いことにする。

　次は鐔だ。これも様々な形状があり、

　となれば、比較的作りやすい部類には入る。俺の場合はチートと言う強力なアドバンテージがあるからではあるが、基本的には板金を丸くして鎺が入る穴を空ければ完成だ。ただこのままではあまりにあまりなので、薄めで縁取りが入るようにはしておいた。これで必要とあれば国許で彫刻してもらえば装飾も楽だろう。

　そして柄である。木で

　この工程、本来は鮫皮で包んだり、組紐を巻いたりするのだが、どっちもこのあたりでは手に入りにくいので、俺なりのアレンジということになる。

　北方の職人がもしそれらを入手していたら、この仕事は噴飯ものかも知れないが、南の職人が頑張った成果として笑って許して欲しいところである。

　最後に鞘を作らねばならないのだが、ここらで日が暮れてきた。鎺と鐔はともかく、柄はチートが使えても専門外なので思いの外時間がかかったためだ。

　それでも一旦は姿が見たいので、鎺と鐔と柄を組み合わせてみた。鎺に鐔をはめ込み、茎を柄の中に収めたら、木で作った目釘をいれて固定する。

　こうして組み上がってみると、当たり前だが抜き放った刀そのものの形になった。

「おお……。」

　ニルダが思わず声を上げる。この反応なら完成時にも満足して貰えるだろう。俺はそう思いながら刀を神棚の下に安置して、作業場の片付けを始めた。

## 鞘

2019年2月26日

　片付けが終わったら夕食だが、今日はいつも通りに無発酵パンである。発酵パンはストレート法にせよ中種法にせよ、やはり手間がかかる。

　アレはたまに作る感じになるな。俺がそう言うと、予想に反して不満は出なかった。

「いや……普通の鍛冶屋で柔らかいパンが毎日出てくるとか、どこの貴族だって感じであろう。」

　ニルダが呆れた声で言い、周りの皆が頷く。言われてみれば確かにそうだ。いくらこの世界で柔らかいパンが普通にあったとしても、貴族でない平民が常食できるかどうかは別だもんな。

「なるほど。じゃあ、客で食べられたニルダは運が良かったってことで。」

「うむ。」

　ニルダが大きく頷いて、パンの話は切り上げとなった。

　４、５日も滞在していると少しはニルダも慣れてきたようで、食事の時の口数が多くなっている。昨日と今日は魔界について、ニルダが話せそうな範囲で話してくれた。

　魔族は魔力の補給が殆どいらないこと、国境（界境？）はこの森からはかなり離れていること、魔界のほうがこの森よりも更に魔力が濃いことなどである。ただし具体的な地理は教えてくれなかった。まあ、どの世界のどの時代でも正確な地理は軍事情報だしな……。

　更に話してくれた内容から言えば、基本的に生活様態はこっちとさほど変わらないらしい。大きく違う点と言えば、魔力が濃いと言うことは魔物が発生しやすいということだが、魔物が発生しても魔族は魔物には基本襲われない。

　魔族は魔物に襲われないとは言っても、魔族の命令に従うわけでもないようだ。俺達で言う野良犬のような扱いか。俺が戦ったホブゴブリンを考えると野良犬にしては恐ろしく物騒だが。

　人間界からも商人の行き来は多少あるらしい。濃すぎる魔力のせいで普通の人間ではあまり奥に行けないらしく、魔界の端の方での取引しか無いようだ。もしかするとカミロも取引がある可能性はあるな。わざわざ聞こうとは思わないが。

　次の日、いよいよ刀の最終工程、

　鞘の外形自体はチートでやれば難しい話ではない。これまでにもナイフや剣の鞘を作ってきたが、基本的には同じである。

　ただ、刀には反りがあるので、鞘も反りを合わせなくてはいけない。ここが合っていないと抜き差しに影響が出る。北方で同じことを言うかは知らないが、”反りが合わない”の語源だ。

　作業場に置いてある木材をナイフで削って大体の形を合わせる。その後刀身が納まる部分を実物を当てながら削って作る。棟と

　鞘の

　これを左右で１枚ずつ作って貼り合わせるわけだが、本来は米で作った糊で貼り合わせるところを、それがないので

　左右張り合わせた後、外形をきれいに整えていく。漆もないので今回は白木のままだ。もし綺麗なものが欲しければ国許で作って貰うしかない。

　左右を張り合わせたら、板金を加工して部品を作る。鯉口の周りに留める

　鞘を留める輪を鎚で叩いて締めながら、鞘の左右が外れないように固定する。その輪に栗形を取り付ける。そこまでやったら、今度は鯉口のところに口金物を嵌める。

　最後に鐺（これもシンプルに覆うだけのデザインにしてある）を嵌め込んで、ようやっと鞘が完成した。

　ようやっととは言うものの、本来であれば２～３週間ほどかかる（もちろん漆塗りなどの工程もあっての話だが）ところ、１日と言うのはチート恐るべしと言うよりない。全体でも１週間しかかかっていない。

　普通の作業なら必要な細かい修正なんかがほとんどないし、長さを測ったりと言う手間もほとんどかけていない。刀身を当てて合わせたのがほぼ唯一と言っていいくらいだ。ただ、ほぼ１週間はかかっているわけで、楽に量産できるという話でもないな。

「よし、これで完成だな……。」

　出来上がった鞘に刀を抜き差ししてみる。収めるときにも、鯉口を切るときにも固すぎることも緩すぎることもない。

　刀でもなんでもそうだが、武器は使おうと思った時に適切に使える、と言うことが一番大事だと俺は思っている。使おうと思っていない時に危害を加えてしまったり、使おうと思った時に使えないのではダメだ。

　それで言えば今回作った鞘は俺の中ではかなり上出来の部類に入ると言っていいだろう。

「出来たのか！？」

　ニルダが待ちきれないと言ったふうに聞いてくる。彼女は律儀に全工程を見学していた。面白かったのか、何か変なものを仕込まないか監視していたのかは分からない。

「ああ。外で試してみてくれ。」

「わかった！」

　ニルダは

## 刀、打ち仕舞い

2019年2月27日

　刀を引っ掴んで外に飛び出したニルダは、太陽が最後の一仕事をする中、鯉口を切って、すらりと鞘から抜き放った。鞘は近くの地面に放り投げている。

「ニルダ、破れたり。」

　俺は思わずボソリと呟いた。そんなに大きな声でもなかったと思うのだが、ニルダには聞こえていたようで、

「エイゾウ、なぜそのようなことを言うのだ。」

　とちょっとしょんぼりした顔で言われた。

「すまんすまん。俺の故郷の逸話でな、決闘の時に鞘を放り投げた剣士が、相手の剣士に言われた言葉なんだよ。」

　小次郎、破れたり。宮本武蔵と佐々木小次郎が巌流島で決闘した時に、鞘を投げた小次郎に武蔵が言った言葉だとされているアレだ。

「”勝つ気があるのなら、勝った後刀を納める鞘を捨てるはずがない”とかでな。」

「なるほど。確かにそうだ。気をつけねば。」

　ニルダは感心したように言う。

「まぁ、今の格好だと腰から提げるのもおかしいし、気にせず試しに振るってみてくれ。」

「あいわかった。」

　ニルダがスッと刀を上段に構え、振り下ろす。その空間ごと叩き切るような一閃。有り体に言って美しいと形容するのが一番正しいだろう。肌の色や

　同時に俺は冷や汗をかいていた。今の一閃を見て、俺がやりあって勝てるか疑問になってきたからだ。ヘレンはアレをあっさりと打ち倒したのか。

　俺たちの荷馬車を襲ったときは武器の性能や使い慣れていないのもあるのだろうが、そもそも剣があっていなかったのだろう。どおりで動きがぎこちないと思った。戦闘スキル（のようなもの）もそこまでは見抜いてくれないらしい。

　俺は内心の動揺を悟られないよう、努めて冷静にニルダに声をかける。

「どうだ？」

　しかし、ニルダは答えずに横薙ぎ、切り上げ、突きなど様々な剣筋を描いている。さながら金色の光のヴェールを纏って舞を舞っているかのようで、俺は焦りを忘れてしばし見入ってしまう。

　やがてニルダは舞を止めた。俺はハッと再び声をかける。

「刀の具合はどうだ？違和感があるなら明日一番に修正しておくが。」

　やはりニルダは答えない。刀を片手に、ふるふると震えている。そしてゆうらりと俺の方へ顔を向ける。

　しまったな、鞘を作ったときにナイフを使ったから、今手元にない。俺はチラリと作業場の入り口の位置を確認した。いざとなったら駆け込んで応戦するよりない。その前に斬られなければの話だが。

「素晴らしいな！！！」

　俺が内心ヒヤヒヤしっぱなしでいると、バカでかい声でニルダが叫んだ。何事かとサーミャ達が飛び出してきて、クルルも小屋の方から様子を伺いにやってきた。

「あ、いや。」

　それに気がついたニルダは赤面して居住まいを正す。

「うむ。これは大変素晴らしいものだ。」

「そ、そうか。なら良かった。」

　俺はホッと胸をなでおろした。サーミャがそれを見てニヤニヤしている。大きな感情の動きは察知できるからな。もしかするとさっきまで焦っていたのも、ずっと気がついていたかも知れない。

　ちょっとニルダをなめてかかっていたのは確かなので、無言でも抗議などはしないで反省しておこう。

　クルルが何事もなさそうだと分かったようで、のそのそと小屋の方へ戻っていく。

　俺たちもそれを見て家に戻るのだった。

　刀が完成した以上、うちに居る理由もないから翌日早々に帰るとニルダが言い出したので、その日の夕食はいつもより少し豪華めにしておいた。

　パンが発酵パンでないのは今では片手落ちな気はするが、肉はいいところを使っているのでそれで勘弁してもらおう。

　夕食の間は特に大事な話も出なかった。取り留めもない話を誰かがして、皆が笑う。そんな時間が続いた。夕食も終わり、後は片付けて寝るだけと言ったところで、ニルダが言う。

「お前たちには本当に世話になったな。」

「お客なんだから、気にするなよ。」

「ふむ。なるほど。」

　ニルダはそう言って立ち上がると客間に入り、すぐに戻ってくる。手には革袋を持っていた。

「客であれば然るべき報酬を支払わねばならんな。いくらだ？金貨３０枚か？」

「うん？ああ、そうか。」

　この辺り無頓着なのがなかなか抜けない。

「うちでは特注品は客の言い値を貰うことになっているから、好きな額でいいぞ。」

　ニルダが凄い金額を口にした気がするが、そこは気にしないようにして答えた。

「ふむ、そうなのか。鍛冶屋なのに剛毅だな。エイゾウはもうちょっと儲けることを考えたほうが良いのではないか？」

　ニルダの言葉にリケとディアナがうんうんと頷く。サーミャとリディはあまりピンときていないのか、若干首をひねっていた。

「ヘレンがお前にうちの製品の優秀さを見せつけて、今回お前が来ただろ？そうやってうちの評判がよくなれば客が増えるし、特注品は俺にとっても勉強になってるんだからそれでいいんだよ。」

「なるほどなぁ……。」

　ニルダはあまり納得はしてないようだが、とりあえずは受け入れてくれたようだ。

「では、これくらいであろうか。」

　ニルダが革袋をごそごそと探り、中身を机の上に並べた。

## ニルダとの別れ

2019年2月28日

　ニルダがテーブルの上に並べたのは、金貨が１０枚と１つの小さな宝石だった。

「私が正当な報酬だと思うのはこのあたりだ。受け取るが良い。」

　言われて俺は確認する。金貨は意外なことにここらでも流通しているものだった。人間界とも取引があると言うし、そこで手に入れたものだろうか。

　宝石の方は真っ赤に透き通っている。

　ランプの光に透かしてみると、中で何かがゆらゆらと揺らめいている。

「魔宝石ですね、それ。」

　俺が宝石を

「魔宝石？」

「澱んだ魔力が更に固まったもの、です。」

　繰り返した俺の言葉にはリディが答える。

「通常澱んだ魔力は魔物などに変質してしまうのですが、稀にそうならずに固まることがあるのです。その時、中に魔力が閉じ込められて、光に透かしたときにゆらゆらと揺らめくんです。」

「それって大丈夫なのか？」

「こうなってしまうと流れ出したりはしないので、平気ですよ。取り出せもしないのが残念なところですが。」

　平気なことを示すかのように、リディは魔宝石を手にとった。

「綺麗ですね。魔力の純度が高いです。」

「そうであろう。魔界でもたまにしか出ない逸品だ。」

　ニルダが胸を張っていった。魔界は魔力が濃いと言うからそれなりに産出するのだろう。人間と取引しているのもこれらの輸出かもな。

「なるほどねぇ。」

　リディから魔宝石を引き取って眺める。

「まぁ金貨で４０枚は下らぬだろうな。」

「えっ。」

　宝石だから高いとは思うが、こいつがそんなにするものなのか。

「こっちでは貴重ですから、もしかするともっと値があがる可能性もあります。」

　リケが後を引き取った。となると、ニルダはあの刀に金貨で５０枚かそれ以上の値を付けたことになる。

「いいのか？」

　俺はニルダに聞いた。

「良いも悪いも、エイゾウが値をつけろと言ったのであろう？私にとってはこの値が正当だ。」

　笑いながらのニルダの言葉に俺はぐうの音も出ない。

「じゃ、遠慮なく貰っておこう。」

「そうしろ。」

　俺とニルダは２人でニッと笑うと、握手の代わりにまだほんの少しだけ中身が残っていたカップを打ち合わせ、中身をあおった。

　翌朝、旅支度を整えたニルダをクルルも含めた家の全員で見送る。俺はニルダに言った。

「まっすぐ魔界に戻れよ。戻るまではなるべくそいつを使わないでいてくれるとありがたい。」

　その可能性もあることを覚悟はしたが、少しでもその機会が訪れないでいてくれるに越したことはない。戦場でも使うなと言うのは無理だろうが。

「”物忘れ”を使ったとは言え、ここいらに長い間いても捕縛されなかったのだぞ？そこらの人間ごときに今更遅れをとることもあるまいよ。」

「だと良いんだが。くれぐれも寄り道せずにまっすぐ戻るんだぞ。」

「わかったわかった。姉上のような事を言うな。」

　苦虫を噛み潰したような顔でニルダが返す。姉上殿はなかなか厳しいお方のようだ。姉上のお言いつけを守って無事に帰って欲しいと思うのが正直なところだが、戻れば無事が確約されるわけではないのが複雑な感情を俺に呼び起こす。

　俺はその感情を押し殺して、ニヤッと笑うに留めておいた。

「ではな。」

「ああ。」

　俺とニルダは握手はしなかった。お互いにそうするのは何か違うように感じたからだ。サーミャ達もそれを察したのか、何も言わない。

　ニルダはフードを被ると、森へと消えていく。俺達はしばらくその後姿を眺めているのだった。

# 第６章 帝国革命編

## 森暮らしということ

2019年3月1日

　ニルダを見送った俺達は誰からともなく家の中に入っていった。ウチの受注スタイルだとこう言うときに寂しさを覚えてしまうのは致し方ないのだろう。

　慣れれば良いのだろうが、こういうのは慣れてしまうのも良くないようには思っている。寂しいときは寂しいでいいのだ。

　今日はサーミャとディアナ、リディはクルルと一緒に狩りに出るらしい。メインはサーミャとディアナで、リディとクルルは散歩も兼ねた補佐ってところか。

　ニルダが居る間狩りに行かなかったのは、ニルダがそっちについていった場合、採取と違って狩りはより広範囲を動くし目も届きにくいので、なるべく黒の森の情報を渡さないようにとの配慮だったそうだ。

　どおりで狩りを気に入りそうなニルダがいる間に行ってないと思った。俺はそんなこと微塵も意識していなかったので、少し申し訳ない気分になる。

　気を取り直し、俺とリケは２人で鍛冶作業である。俺はちょっと急ぎ目に作っていかないとな。

　まずはナイフからだ。いつもどおり、板金を熱して鎚で叩いていく。その時、刀を作ったおかげなのか、ナイフを鍛造する速度が若干早くなったような気がする。

　元々チートで早いはずなのだが、そこからの成長もあり得るということなのか、チートに体が追いついてきているだけなのか。

　そのどちらなのかは俺にも分からないが、少しでも伸びる余地があるのであれば伸ばすだけだ。

　その後も一心不乱に板金を叩いてナイフを作り続け、サーミャ達が帰ってくる頃には結構な数が出来ていた。やはり前より多い気がする。

「親方、また早くなってません？」

「そうなんだよな。」

　リケから見ても早いということは、早くなっていることは間違いなさそうだ。

「刀とでは鎚の使いかたは違うが、ナイフにも応用できるような使い方を体が覚えたってことかも知れない。」

「なるほど。じゃあ、色んな武器を作ればどんどん早くなるかも知れないですね。親方は凄いなぁ……。」

　リケが何の気なしにそう言う。だが、俺は閃いていた。

　なるほど、種類の違う武器を作れば作るほど、チートでも性能が上がると言う可能性はあるな。今週は納品物に集中するとしても、次の2週間で試してみる価値はありそうだ。

　そんな気付きのあと、作業場の片付けをしていると、サーミャたちが戻ってきた。やや遅めだから、奥まで行ってきたか大物を捕らえたのだろう。

「おかえり。」

「おう、ただいま。」

「デカいのがかかったのか？」

「うん？ああ。イノシシの方だな。」

　いつもデカいのを捕らえた時にはテンションが高いサーミャが妙におとなしい。

「どうした？なんかあったか？」

「いや……。」

「大黒熊の痕跡があったんですよ。」

　歯切れの悪いサーミャに変わって、リディが答えた。

「熊かぁ。水汲みの時には気をつけないと。熊がすんなり入れないように、クルルの小屋にも柵をつけたほうが良いかも知れないな。」

　俺がそう言うと、今度はディアナが返してくる。

「帰りにサーミャとリディと話したところだと、ここに来るにはしばらくかかりそうってことだったけどね。」

「まぁ、急ぎでないなら一安心か。」

「そうね。前の時にはあなたが熊を倒したんですって？」

「ん？ああ、そうだな。」

　言うほど昔ではないはずだが、もう随分と昔のように感じる。

「サーミャはその時のことを思い出したのよ。それで……。」

「ああ。なるほど。」

　あれは今の所俺が一番ひどい傷を負った事件だったからな。単体の強さで言えば確実にホブゴブリンのほうが上だが、あれは支援もあったし、熊のときのほうが命の危険で言えば上だ。

　それに熊のときは傷ついた俺を直接見てるからな。ちょっとしたトラウマっぽくなっているんだろう。この辺はその後無事な俺を見てゆっくりと解決していって欲しい。

「ずっと森暮らしするんだし、危険な動物との接触は織り込んで考えていかないといけないな。」

「そうね。リディによれば、滅多なことでは近づかないってことだけど、普通なら畑を猪に荒らされたり、なんてことも考えられるわね。」

　ディアナの言葉を引き取るように、リディが頷く。

「ひとまずは俺も皆も気をつけよう。めったに魔物化しないとは言え、起こらないわけではないし、気が緩んだときが一番危ないからな。」

　俺の言葉に全員が頷く。森で暮らすと言うこと。自然と隣り合わせとはどういうことなのか、それを考えずにはいられなかった。

## いつもの暮らし

2019年3月2日

　その後夕食のときにも話したが、クルルの小屋に柵はつけないことにした。万が一にも熊が侵入した際、熊は入れたがクルルが出られないと言う状況を避けるためだ。

　そうなるくらいならクルルが逃げられる可能性が高いほうがいい。そうしたほうがクルルの生存率があがると思うし、いざと言う時は知らせに来るだろう。なんせクルルは賢いからな。

　翌朝、５人＋クルルで獲物の回収をする。いつになくデカい猪だったが、クルルのおかげで引き上げも運搬もスムーズに進めることができた。

　もちろん、熊の話を忘れたわけではない。道中はいつもより警戒して進んだ。サーミャが何も言わないので恐らくは痕跡もなかったのだろう。行き帰りは特に何事もなかった。

　こう言うときに長柄の武器や投射武器がもう少しあると良いんだが。万一の場合、熊の間合いの外から攻撃できるのがベストだからな。長らく棚上げになっていたし、弓と短槍を増やすか……。

　家に着いてしまえば後はいつもどおりだ。パパっと皮を剥ぎ、肉と骨を分けていく。結構な大きさだった猪も食べ物に変わっていった。

　せっかく大きな猪肉が手に入ったので、本当ならトンテキならぬイノテキを作りたいところだが、醤油やニンニクがないので諦めて、香草とブランデーで焼くだけにしておいた。これでも十分美味いからな。

　醤油、北方にはあったりするんだろうか。これもカミロに聞いておかないといけないな。ついでに鰹節や昆布、米なんかも入手できるならしたいところだが、そもそもあるのかどうかからになる。カミロは骨が折れるだろうが、頑張ってもらうとするか。

　なんなら多少金を積んだって良い。洋風の料理も嫌いではないし、大きな不満があるわけではないが、頑張れば和食も食べられる可能性があるのと、そもそもそんなことは無理というのとでは希望の大きさが変わってくるからな。

　午後からは俺は鍛冶仕事、リケとリディが魔力の勉強（と畑の手入れ）で、サーミャとディアナは繕い物をする。

　サーミャもディアナも最近は繕い物がかなり上達していて、ちょっとしたほころびは綺麗に直せている。

　でも限界が来ているようなものは買い替えが必要だろうな。そう言えば服の縫製にも生産のチートは適用されるのだろうか。普通に考えれば適用されないはずがないのだが、万が一もあるから一度自分の服でも作ってみるか。

　こうやって必要なものや、やりたいことを考えていくと、やることが……やることが多い……！ってなるな。

　スローライフと言えば聞こえは良いが、つまりは他人に頼るべきところを自分でやるということに他ならない。誰かが作ってくれる野菜を自分で作る。誰かがさばいてくれる肉を自分でさばく。

　無論そのぶん自分の時間は減っていくのだから、良し悪しと言うのはどうしても出てくる。当然、前の世界並の便利な生活は望むべくもないが、こっちの世界でものんびり暮らすのが目標とは言え、他人に頼れるところは頼っていきたいところだ。

　この日のナイフもなかなかの数を量産できた。卸す量で言えば１週間ちょっとくらいの数だから効率は良い。

　ナイフについては高級モデルの売れ行きはあんまり良くないらしいので、ナイフだけをガンガン量産すれば儲けられる、というわけでもないのがちょっと残念ではある。もしこっちの売れ行きが良いなら、こっちだけを作って空いた時間をなにかに当てるとかもできるんだけどな。

　そんな現実的でないプランは早々に捨て、なにを作ることを優先するのか考えながら、俺は作業場の片付けをした。

## 何度めかの納品

2019年3月3日

　そうして幾日か納品用に製作を続け（その間にサーミャ達はそれぞれ自分の作業をしていた）て、納品の日になった。数としては十分確保できているから、納品には問題はない。

　納品物を荷車に積み込みながら、クルルと荷車を繋ぐ。クルルは久しぶりに荷車を牽けるのが嬉しいのか、目に見えて機嫌がいい。今もあまり大きくはない声でクルクルはしゃいでいる。

　ディアナがそれをなだめている間に、荷物の積み込みを終える。御者台にリケが座り、手綱を操るとクルルは一声鳴いてゆっくりと歩き出した。

　道中気をつけるべきは熊と野盗か。賊はもう国許へ帰っただろうしな。その辺の経緯は製作の合間に手紙にしたためておいた。カミロ経由でマリウスにこいつを届けて貰う必要がある。

　あとは畑がどうなるか分からなかったから棚上げになっていた芋と、北方の調味料の入手についてカミロに聞かねばいかんな。

　そこそこの速度で森を抜けていく。鳴き声が甲高い鳥や時折遠くから狼達の声が聞こえる以外には、竜車の走るガラゴロという音だけが森に響いている。その音のせいもあってか、熊に出くわすことなく森から出ることができた。

　街道に出ると速度は更に上がる。ニルダがいなくなった（彼女が約束を守っていればだが）とは言え、野盗の危険は依然としてあるので、警戒は怠らない。

　こう言う場合にも射程の長い武器のほうが有利な点は多いし、新しい武器としてはまずはそのあたりを作るか。

　街道でも結局何事も起こることはなく、無事街に辿り着くことが出来た。入り口に立っている衛兵さんに車上から会釈して通り過ぎる。

　こうやって来るのはまだ２回めなので街中ではまだ馴染みが無いらしく、遠慮のない視線を向けられることが多い。

　向けられる視線の２割くらいが車の足回り、７割がクルルで、１割はリディだ。それぞれ珍しいのは間違いないので、仕方ない部分はある。リディへの視線が減っているのは何度か来ているので、その分見慣れたということだろう。

　街中をゆっくり進んで、カミロの店の倉庫に到着する。倉庫に竜車を入れたら、クルルを切り離して店の裏手につなぎとめる。前と同じように店員さんに水と飼い葉を頼んで、勝手知ったる店内を進んで商談室に入った。

　しばらく身内で雑談していると、いつものようにカミロと番頭さんが商談室に入ってくる。

「よう。」

「おう。」

　挨拶は最小限にしてさっさと本題に入る。

「今日は持ってきたのはいつものか？」

「ああ。数もいつもと同じくらいだ。」

「分かった。」

　今回はカミロからは特に何もないのだろう、すぐに番頭さんに目配せをする。番頭さんは頷くと部屋を出ていった。

「それで２つほど頼みがあるんだが。」

「エイゾウが？珍しいな。」

「まぁ、ちょっとな。」

「いいぜ、なんだ？」

　俺は懐に入れた手紙を取り出してカミロに出した。

「まずはこいつをマリウスに届けて欲しい。」

「内容は？」

「街道に出ていた賊についてだな。」

　俺はニルダのことをかいつまんでカミロに話す。カミロは驚きながらも、「まぁエイゾウのやることだからな……」と納得はしていた。

「それで、問題はなかったのか？」

「ああ。俺の言いつけを守っていてくれたなら、もうとっくに国に帰っているはずだ。」

「つくづくお前はトラブルに巻き込まれるな。」

「大半はお前とマリウス絡みだっただろ。」

　俺は苦笑してカミロに返す。カミロも「違いない」と笑いながら言っていた。

「こっちはわかったよ。責任を持って必ず届ける。」

「頼んだ。」

「で、もう１つは？」

「種芋の入手と、北方の調味料の入手を頼みたい。」

「なるほどねぇ……。」

　俺の要望を聞いてカミロは思案顔になる。

「何かまずいことがあるか？それなら……」

「いや、そう言うわけじゃない。」

　俺が遠慮しようとすると、カミロは片手を振ってそれを遮った。

「種芋は幾らでも調達できるが、北方とのやり取りは俺は強くないから、少し時間がかかりそうだ。」

「いいぜ。調味料の方は気長に待つよ。」

「そうしてくれると助かる。北方の調味料はなんでも良いのか？」

「ああ。入手できて保存の効くものはなんでもだ。」

「わかった。俺の名前にかけても必ず確保しよう。」

「すまんな。」

「良いってことよ。これが俺の仕事だからな。」

　カミロが笑いながら言い、俺とカミロは今一度の握手を交わすのだった。

## 次の予定を決める

2019年3月4日

　話がまとまったので、他愛のない話をして次回はまた２週間後に来ることを告げる。

「そう言えば、サスペンションの開発はどうだ？」

「ああ。今の所お前の助けを借りなけりゃならないような事は起きてないよ。もうそろ試作品が上がってくるはずだ。」

「それなら良いんだ。俺が来るのは２週間に１回だが、何かあったら遠慮なく言ってくれ。」

「わかった。すまんな。」

「いいってことよ。」

　そう言って俺達は商談室を後にし、クルルの元へ戻った。

　クルルを見てくれていた丁稚さんにチップを渡して、荷車にクルルを繋ぎ直して出発する。街中をゆっくり進んで、衛兵さんに会釈をして街を出た。

　クルルが来る前は時折衛兵さんの交代時間を過ぎていることもあったが、クルルが来てからは到着が早まっている分、帰りも早い。まだ２回こっきりだが、衛兵さんが交代する時間よりはだいぶ早く街を出られている。

　このあたりはクルルさまさまというより無い。おかげで家に帰っても十分な時間が取れそうだ。

　やや重い空模様のなか、続いていく街道をクルルの竜車が進んでいく。いつも通りののんびりした街道の風景だ。

「前はここでニルダが出てきたんだよなぁ。」

「そうでしたね。」

　俺の言葉に御者台のリケが答える。

「今日は何も出ないといいんだが。」

「気は抜けないですね。」

　今もサーミャとディアナは周囲に目を走らせて警戒している。俺も気を抜いているわけではなく、周辺におかしい動きがないかや、気配を感じないかに注意を払っている。リディは武術的な警戒はしていないが、魔力的な警戒は行っている。

　この世界ではある程度の魔力を持っていて、なおかつ手ほどきを受けている者が魔法を使えるようなので、魔法を使える人間の絶対数が少ないのだが、それでも野盗が使ってこないという保証は何一つないからな。なんせ魔法を使える鍛冶屋がいるんだし。

　しかし、この日は結局街道では何も起こらなかった。おそらくはまだ賊の捜索や警備で衛兵隊の巡回が増えていたりするせいだろう。その結果として治安が良くなっているのはやっぱり皮肉ではあるな。

　周囲を伺って森に入る。竜車はそこそこ派手な音をたてるから、好奇心旺盛な動物以外は近寄ってこないので、普段はここからの方が安心なくらいなのだが、今は熊が比較的近所をうろついているから、気は抜けない。

　クルルとサーミャの感覚が頼りではあるが、どちらも鋭敏さにかけては信頼できるので彼女たちの警戒をメインに、俺とディアナの目視、リディの魔力警戒で体制としては万全を期しての警戒を続ける。

　森でも時々タヌキみたいなのが顔を出した以外は何かが起きることもなく、無事に家にたどり着くことが出来た。

　この生活を始めてからそこそこになるが、毎度過剰な警戒をしているのでは、と言う感覚が拭えない。前の世界では世界的にはかなり治安がいい国にいたから、その感覚でものを考える癖がついたままになっている。

　なんせ４０と数年はその感覚のままで過ごしてきたのだから、数ヶ月かそこらで抜けるわけもない。このあたりは今後この第２の人生を送るなかで、変わっていければ良いのだが。

　家に着いて諸々を片付けていく。クルルは荷車を牽けてかなりご機嫌なようだ。装具を外してもあたりを走り回っていた。

　家に帰った後は本来は思い思いの時間を過ごす事になっているが、今日は今後の予定についての会議……と言うと少し大げさだが、話し合いの時間だ。

「そろそろ倉庫が必要だと思う。今はまだ平気だが、必要になってから建てたんじゃ遅いし。」

　開口一番、俺はそう切り出した。

「そうねぇ。今後、農作物の収穫とかするようになれば必要よね。」

「炭や鉄石もなるべく貯蔵したいですしね。」

　ディアナとリケは賛成のようだ。

「革とか肉を置いとくスペースは、家とは別にあったほうが良いとアタシも思う。」

「私も異論はありません。畑の規模的には大収穫はないでしょうけど、すべてをこちらで貯蔵するのは不可能だと思いますし。」

　サーミャとリディも異論はないらしい。

「じゃあ、明日からは倉庫２棟を作るか。」

　俺がそう言うと、

「部屋の追加は良いのかよ？」

　サーミャが混ぜっ返してきたので、俺は渋面を作ってそれに答える。

「これ以上家族が増える予定はないから、いらないんじゃないか？」

「ホントに？」

　ディアナが完全に信用してない目線を向けてくる。それはサーミャは言うに及ばず、リケもリディもだ。

「ホントだよ！」

　俺はそう叫んだが、女性陣は

「まぁ、余裕ができたら作りましょう。」

「そうね、それが良いわね。」

「異議なし！」

「そうですね。」

　と俺の言葉に耳を貸さないのだった。

## 倉庫建設開始

2019年3月5日

　翌日、倉庫の建設を始める。クルルの小屋の近くに建設予定地として縄張りをし、柱を建てる位置を決める。

　位置を決めたら穴掘りは俺の仕事だ。ここらの土は硬い。鋤のような農具を使って穴を掘り、土を掻き出す。その間に、クルルも含めた他の皆に材木を運んできてもらう。

　材木を運べてクルルがご機嫌なので、それと一緒にディアナの機嫌もどんどん良くなっていく。良いことだ。

　穴を掘り終わって土を細めの材木を使って固めたら、柱にする材木を立てていく。ここもクルルが張り切ってくれたおかげで割とあっさりと終わった。持ってきてもらった残りの材木を俺とサーミャで、木挽き鋸を使って板にしていく。

　倉庫なので、床は地面からの湿気を受けないように地面から離した高さに作りたい。そのための根太を板を作っていないディアナ達に張っていって貰う。ディアナとリケは慣れてきていて、割とスムーズだ。

　リディはエルフの里でも多少の補修なんかは自分たちでしていた（里は基本僻地にならざるをえないので毎度職人を呼ぶわけにもいかない）そうなので、まだ多少おぼつかないところがあっても心配をせねばならないほどではない。

　リケは半分本職みたいなもんだし、ディアナの適応の早さがちょっとおかしいだけだ。お転婆だとそうなるのか、武勲こそ家の誉れと言う家風だとそうなるのか。

　根太を張り終わったら、今度は梁を渡していく。鍛冶仕事の合間にちょいちょい釘（と矢じり）を作っていたが、なるべく消費しないで済むように

　現場合わせだが、ここらは生産チートの適用範囲内だからチョイチョイと作れるのが助かる。梁を渡し終えて、棟木を上げたあたりで１日が終わってしまった。

　それでも２棟でこの早さは異様に早いはずだ。チートのおかげもあるが、クルルのお手伝いもかなり功を奏している。

「だいぶ助かったよ。ありがとうな。」

　俺がクルルの頭を撫でながら言うと、

「クルルルル。」

　クルルは嬉しそうに一声鳴くのだった。

　翌日、今日は屋根の垂木を張っていく。今日もクルルのおかげで結構捗っている。チートで加工した垂木を２棟に張り終えて、いよいよ釘を使っての床貼りだ。

　全員で床板を運んで根太に釘で固定していく。単純ではあるが、一箇所ズレるとドンドン合わなくなっていくので、床板はズレないようにピッタリと合わせて張っていく必要がある。

　そこそこの広さを持たせたし、釘で留めるのにもチートは有効ではあるが皆とさほど違いはないので、綺麗に張っていくとどうしても時間がかかる。

　この日は２棟の床を張り終えたところで作業を終わりにしておいた。床だけでも出来ると割と建物感はあるな。

　更に翌日は壁を張り始めていく。もちろん扉のところは開口しておかないと出入りができないので、扉の枠は先に作っておく。倉庫なので片開きの１枚扉ではなく、観音開きの２枚扉のサイズだ。

　皆黙々と槌を片手に、釘を打ち込んで壁板を柱に留めていく。下の方から留めていって、板の上端が少し被るようにしておいた。こうしておけば雨の侵入を防ぎやすく、湿気の調整もできるかと思ったのだ。

　それに当たっての加工はもちろんチートだよりで行っている。チートで行ったぶん正確性が多少求められるが、昨日の床板張りで慣れてきているぶん、今日の作業も戸惑うことなく進められている。

　とは言え、それなりの大きさの建物の壁板である。床板以上に面積が広いこともあって、この日は結局壁ができたところで終わった。

　屋根と扉がないので、一見すると暴風で屋根が飛ばされた家のようにも見える。

「明日屋根張ったら完成かな。」

「そうですね。その後扉をつけたら完璧です。」

「だな。」

　俺とリケ、そしてサーミャはお互いにそんな言葉を交わして、今日の作業の後片付けを始めた。

## 倉庫建設途中経過

2019年3月6日

　更に翌日。今日は倉庫の屋根と扉の製作である。皆に屋根板を張ってもらっている間に、俺は扉の作成である。

　今回は観音開きの扉が２セット必要だ。それに倉庫の扉なのである程度大きく作る必要がある。実際、今ポッカリと空いているだけの開口部は結構デカい。それに合わせた扉だ。

　材木を切り出して木枠を４つ作る。そこに横向きに板を張っていき、愛用のナイフで細工した木製の取っ手を釘で取り付けた。不用意に開かないように、

　閂は取っ手と兼用させることも不可能ではないのだが、扉が大きいので止めておいた。城門のように閂や固定部品を金属で補強することもしない。基本的に人も獣も来ない土地のただの倉庫だしな……。

　木製の部品作成でも生産のチートが有効なのが助かる。これがなかったら多分扉だけで２日以上かかりそうだ。そのチートのおかげもあって、皆が屋根板を張り終わるよりも早くに扉自体は完成した。

　この後は完成した扉を開口部に取り付けるわけだが、大きいぶん重い扉なので部屋に使った蝶番では耐えきれなさそうだ。俺は皆に声をかけて、作業場に入った。

　残っている板金をいくつか熱して、大きな蝶番とその左右（枠側と扉側）をつなぐ鉄の棒、そして蝶番を固定するための大きな釘を叩いて作る。大きさなんかはチートで合わせていくので、不安はない。作成速度もかなり早いと言えるだろう。

　蝶番は扉に取り付ける方を扉の幅の半分くらいまでぐっと細く延ばしている。これで扉の重さを分散させるのと、より強固に取り付けられるようになる。つければ日本の城の城門のように見えるかも知れない。

　硬さは必要ないので、焼入れはせずに置いておく。さすがにチートでも自然に冷えるまでの時間をコントロールすることは出来ないので、俺も屋根板を張るのを手伝いに作業場を出た。

　倉庫の屋根もクルルの小屋と同じく

　リケとリディのほうが実家や里で経験があるためか、１段か２段かではあるが少しだけ作業が早い。なので、俺はもう一方を手伝うことにした。

　サーミャとディアナが作業していない方に回って、軒先に当たる部分から板を張る。先に張った板の上半分に、次に張る板の下半分が重なるようにして１段上の板を張るとしていけば、雨もそんなに漏れては来ないだろう……多分。

「そう言えば、ここいらは長雨とかあるのか？」

　俺は反対側で作業しているサーミャとディアナに大声で話しかけた。このあたりに住んでいたのはこの２人だから、聞くには都合がいい。

「うーん。雨が多めの時期はあるけど、２週間とかずっと降り続けるのは経験がないな。」

「そうね。どんなに長くても１週間もないわ。」

　サーミャとディアナが答える。なるほど、梅雨みたいなものはあるということか。地下水があるとは言ってもそんなに深くまで森の木々が根を張っているかは怪しいし、そうでもなければ広大な森林を維持できるだけの水量は確保できなさそうだ。

「その時期は近いのか？」

「いや、少なくともあと１ヶ月は先だと思う。」

　場所が少し違うとは言え、この森に住んでいたサーミャの言うことだから正しいのだろう。とすると、今は前の世界で言うところの５月くらいか。

　梅雨というか雨季のようなものがあるのに、植生や気候が亜熱帯や熱帯っぽくないが、ここらは前の世界での気候帯とかの知識を投げ捨てるほうがいいのだろうか。地形がそもそも違うだろうから当たり前といえば当たり前か。丸いかどうかすら怪しいのだ。

　俺は２人には質問に答えてくれた礼を言って、思考を作業に戻した。

## 倉庫、完成する

2019年3月7日

　屋根板を半分ほど張り終えたので、そろそろ良かろうと作業場に戻ると作った扉の部品はしっかり冷えていた。それらを持って倉庫の開口部へ向かう。

　まずは開口部の枠に外開きになるように蝶番の片方を取り付けていく。これ自体はただ留めるだけではあるので何ということもない。

　扉を持ってきて、蝶番のもう片方の取り付けを行う。城門や土蔵の扉に使うのなら釘なんかも、もう少し凝ったデザインにするところだが今回は細長い板状のままだ。

　枠と扉の両方に蝶番の部品を付け終えたので、組み合わせてピン（と言うには若干太いが）で接続する。ゆらゆらと動かしてみると若干軋む音はするものの、スムーズに開閉出来た。

　後はこれを３箇所で行うだけである。テキパキと設置を進めて、倉庫には扉がついた。閂には材木を四角く切ったもので、その残りでくさび形のドアストッパーも作っておいた。

　屋根の方を見てみると屋根板はほとんど張り終わっていたので、クルルを呼んでミニ荷車をくくりつける。

「クルルル。」

　クルルは遊んでもらえる！とばかりに喜んでいる。実際は仕事なのだが、楽しんでやってもらえるならいいか。

　作業場の入り口にクルルを待たせて、作業場の中に積まれた木炭を運び出しミニ荷車に載せる。ある程度積み終わったら、今度は倉庫まで持っていってもらう。クルルの足の運びが機嫌良さそうで何よりである。

　倉庫の床とミニ荷車の荷台の高さはほとんど同じだ。閂を外し、扉を開いてドアストッパーで閉じないように固定して、ミニ荷車の荷台から直接倉庫内へ運び込んでいく。

　これを２～３回ほど繰り返して、倉庫の中に作業場の半分ほどの木炭が積み上がった。今後、木炭と鉄石はまずこっちに運び込めばいいか。今日鉄石の方は運び込まない。明日から作業で使うからだ。

　続いて、木炭を入れなかった方の倉庫に同じようにして干した肉を運び込む。女性が４人とは言え、５人家族＋走竜だとそれなりに消費もするが結構な備蓄量にはなっているから、倉庫に分離して保管できるのは助かるな。

　肉を運び込んでも、倉庫にはかなり余裕がある。これなら瓶を増やして長期保存の塩漬けを増やすことが可能そうだ。

　家の中に置くにはどうしても限界があるし、梅雨の時期が来れば生肉が痛みやすく、乾かしにくくなることは容易に想像できる。そうなる前に干す以外の貯蔵量を増やすのは大事なように思えるので、計画しておこう。

　それらを置いてもまだスペースはかなりありそうだが、そちらは買ってきた小麦や畑で収穫した作物を貯蔵すればいい。

　つまり、こっちの肉を置いた方は食料庫、向こうの木炭を置いた方は資材庫ということだ。ちらっと屋根を見上げると、屋根はほとんど張り終わっている。あと１段か２段か張れば完成だろう。

　であれば手伝うまでもないか、と俺は材木から板を切り出した後の

　資材庫のほうに、乾いてもう使える材木をクルルに手伝ってもらって追加で運び込む。材木をいくつか運び込んだ頃、

「こっち終わりました！」

「こっちもよ！」

　リケとディアナが屋根の完成を知らせてきた。

「わかった！気をつけて降りてこいよ！」

　俺が声を掛けると、４人から返事が返ってきた。

　クルルの小屋、食料庫、資材庫。３つの施設がこの家に加わっている。

「こうして見るとなかなか立派な家になってきたわね。」

　ディアナが感慨深げに言う。

「そうだなぁ。これでかなりの貯蔵ができるし、カミロには調達を頑張ってもらわないといけないなぁ。」

「親方、あんまり無茶な量を言っちゃダメですよ。」

「時々容赦ないからな、エイゾウは。」

「いやまぁ、気をつけるよ……」

　俺の言葉にリケとサーミャがツッコミを入れ、全員が笑うのだった。

## 新しい武器

2019年3月8日

　倉庫の建設には４日程かかった。納品物は２週間分が必要とは言え、１週間ほど集中して作れば十分な量が確保できることが分かっているので、つまりは３日は別のことが出来るというわけだ。

　と、なればアレをやるしかない。そう、

　その上で、アポイタカラで何を作るべきかをじっくり考えるのだ。

　だが、ここで１つ問題がある。俺の持つチートで一番レベルが高いのはあくまでも「鍛冶屋（鍛冶職人）」だ。「武器職人」ではない。包括的な「生産」に関係するものもチートは貰っているが、鍛冶屋よりも何段も落ちる。

　落ちるとは言っても、普通の職人よりは良いものが作れる。それは確実なのだが、果たしてどこまでの物が作れるのかだ。その実験も兼ねておきたい。

　そんなことを倉庫が出来た日の夕食時に、みんなに相談した。

「いいんじゃねぇの？」

「弓が増えれば、私も使えて狩りの時助かるわね。」

「私ももう少しお手伝いができます。」

　サーミャ、ディアナ、リディの狩りに出ていく組（リディは残るときも多いが）に異論はないようだ。

「親方が木製の武器作るのは初めてですね。」

「そうだな。なので変なものが出来るかも知れない。」

　リケも特に意見はないみたいなので、翌日からは俺は弓を作り、他の皆はいつもの作業ということになった。狩りは「せっかくだから」と俺の弓づくりが終わるまで延期するらしい。責任重大だな。

　翌日、朝の日課を終えたら、新しく出来た倉庫に材木を取りに行く。適当な大きさの材木を持って、作業場に戻った。

　いくらかの資材と他に場所がなくて作業場に干していた肉を倉庫に運んで、それらが無くなった作業場はなんだか俺がここに来た時よりもスッキリして見える。悪く言えば生活感が消えているが、作業場に生活感があってもなとは思うので、これでいいんだろう。

　他の皆が板金を作っている横で、材木を割って比較的しなやかな部分を板として切り出す。それを３つの細長い板に分割して後はひたすら削り出していくだけ、ではある。前の世界で実際にそれで弓を作る動画を見たりしたな。

　この時、Cのような形にするわけだが、逆反りになるようにするか、それとも順反りにするかだ。例えば、前の世界の和弓などは作ったときの全体の反りとは逆に反り返らせて弦を張る（正確にはもっとあちこちに反りがあって、それぞれ名前がついていたりするが）。

　基本的には森の中で使うので、丸木弓の短弓で良いかと思った（実際サーミャの持っているのはそれだ）が、せっかくなので少し工夫もしたい。

　そこで、最も得意なのは鍛冶屋であるわけだし、薄い鉄板を貼り付けた

　まずはじめに木を削って薄い板を作る。どちらかと言えばこれはただの土台だ。ある程度の厚さを持って、ヘニャヘニャでもなく、さりとて引いたり放ったりした時に折れないしなやかさが保てればいい。

　この辺はチートとナイフの性能のおかげでちょうどいい塩梅をなんとか見つけることが出来た。今時点ではただの板だしな……。次はこれに貼り付ける鉄板だ。

　鉄板の厚さはサスペンションほど分厚いと到底人間で引き切る事ができないし、薄すぎると今度はさほど意味がない、と言うことになりかねない。出来上がりの姿を想定しつつ、サーミャ、ディアナ、そしてリディの３人の力に合わせた厚さが必要になってくる。

　そこらはチート任せにするしかないか、と俺は板金を取って火床に入れた。ここからは鍛冶屋のチートが効いてくれるといいんだが、と思いながら。

## 弓を作る

2019年3月9日

　火床に板金を入れて適切な温度まで熱していく。熱された板金を金床に乗せて鎚で叩き、魔力を籠めて形を作っていく。あまり分厚くなりすぎないよう伸ばしつつ、弧を描いた形だ。

　やがて細長く曲がった台形の板ができる。それを再び熱して焼入れをする。サスペンションほどではないが、仕組み的には板バネそのものではあるので、硬さと柔らかさを両立させるのだ。

　水に入れた鉄板がジュウと音を立てる。下がった温度がいい頃合いになったら、水から引き上げて火床の火にかざし、再び少し温度を上げて焼き戻しをした。

　この作業を鉄板の厚さを変えて総計で３回行った。厚さの調整は完全にチートにお任せであるが、その基準になっているのは日々の生活でそれぞれが出せる力を観察したものだ。

　そうでなかったら適当な荷物なりを持たせて測らねばならないところだった。

　３つの鉄板を持って木の板のところへ戻る。鉄板の形に合うように木の板を加工していく。鍛冶屋のチートが効いている鉄板のほうが多分形をしてはより正解に近いだろう、と言う判断だ。

　木の板を鉄板の曲がりに合わせつつ、２つを固定していく。木と鉄、お互いを補強するような形だ。鉄もしなやかにはできるが、薄い木ほどではない。木はしなやかだが硬さにかけては鉄と比べるまでもない。

　同じ作業をもう２回行って、弓の本体が３つ完成した。だが、慣れない作業だったのもあってか、この頃にはすっかり日が暮れかけている。

「こいつの弦を張るのは明日になるな。」

　俺がそう言うと、リケが後片付けをするのを手伝っていたサーミャが答える。

「お、じゃあアタシたちにやらせてくれよ。」

「いいぞ。お前たちの弓だし、俺はその辺慣れてないからな。」

　弓の弦はなんとなく張りっぱなしのようなイメージがあるが、実際には使わないときには外していて、必要になる前に都度張っている。サーミャも狩りに出る前に弦を張って、帰ってきたら外しているのだ。

　今まで弓と言えば、サーミャの使っていた１つきりだったので、俺もその作業はしたことがない。仕上げを任せるなら専門家だ。

「やった。じゃあ、明日は弦を張って試してから狩りだな。」

　サーミャがウキウキして言う。

「そうだな。頼んだぞ。」

「おう！」

　サーミャがとんでもなくいい笑顔で答え、他の皆も何となしに笑顔になった。

　翌朝、朝の拝礼までを済ませて、狩りに出て行く３人にそれぞれの弓を渡す。

「一応それぞれの力に合わせたつもりだが、おかしいとこがあったら言ってくれよ。」

　受け取った３人はそれぞれ自分の弓に弦を張っていく。弦は鹿の腱を加工した紐だ。

　紐の端を弓の端にくくりつけ、そちら側を下にし、弓の反りが逆になるようにしてもう片方の端にもくくりつける。

　サーミャは普段使っている弦をそのまま使っているので両端に固定すれば終わりだが、他の２人は余った弦をナイフで切っていた。

　しかし、リディは里が森の中にあるから経験があるとは思っていたが、弓で射る練習をしていたとはいえ、ディアナまでいとも簡単に弦を張っているのには少し驚いた。

　聞けば実家でやったことが結構あるらしい。エイムール家の教育ってどうなってるんだろうな……。マリウスは結婚していずれ子供が生まれるのだろうが、男子はともかく女子もこのレベルまで鍛えられるのか、それともディアナが特別こうなのか。

　もし全員が同じだけ鍛えられるとしたら、前の世界の巴御前や板額御前並の逸話を残す人も出そうである。

　庭の隅に立ててある木の的(普段から練習に使っているものだ)に向かって、サーミャがスっと弓を構え、矢を

　弓道のように作法があるわけではない。生きる糧を得るために磨かれてきた、彼女なりの１番いい方法だ。それでもその姿には美しさが確かに存在した。

　引き絞った弓から矢が放たれる。放たれた矢は風を纏ったかのように空中を奔り、瞬きもせぬ間に的の中心に突き刺さっていた。

「いいなこれ！」

　サーミャが叫んだ。どうやら気に入ってもらえたらしい。

「大丈夫そうか。」

「大丈夫もなにも、こんな思った通りに矢が飛んだのは初めてだよ！ありがとうな！」

　弓を持ったままサーミャは俺を力いっぱい抱きしめ、俺は喜ぶべきか痛がるべきか、悩むことになるのだった。

## もう一つ新しい武器

2019年3月10日

　俺は一旦サーミャを引き剥がして、ディアナとリディにも試し打ちをしてもらう。

　ディアナが矢を番え、弓を引き絞る。こちらの一般的な女性がどれくらいの膂力があるのかは知らないがヘレンほどじゃないにせよ中々に強いので、それに合わせた強さにしている。

　ディアナが矢を放つと、サーミャのときより若干速さはないが十分な速度で的に到達して突き刺さる。

「どうだ？」

「ちょうどいいわね。軽過ぎることも、重すぎることもないわ。」

「そうか、よかった。」

　ディアナのも特に調整は必要ではなさそうだ。

　最後にリディが同じように弓を構えた。彼女のが１番少ない力で引くことができる。

　矢を放つと、ディアなのよりもさらに遅いが、狙ったであろうところに突き刺さる。

「私のもちょうどいいですね。」

「ふむ。」

　結局の所、特に不具合は出なかったようである。彼女たち３人は準備を整えて、クルルを連れて狩りに出ていった。

　残った俺とリケは今日は好きなものを作る日になった。

「街への往復でも弓は使えるし、長距離を攻撃できる武器はもう少し増やしたほうがいいかもなぁ。」

「それはそうですね。」

　ニルダのときも相手がどういうやつか分かっているから良かったが、そうでなければなるべく遠距離から攻撃して打ち倒すなり、攻撃にひるんでいる間に逃げるなりするのが当たり前だし、そう言うときに使える武器を備えておくのは悪いことではない。

　そんなわけで、俺は新しく２つの道具を作ることにした。１つは投槍器、もう１つはそれで投げる投げ槍である。普通はどちらも木で作るが、チートとして有効なのは鍛冶屋の方なので、どちらも鋼で作ることにする。

　弓を作ったので、それでどれくらいチートが向上しているか確認する意味もある。

　いつもどおり火床で板金を熱して形を作っていく。先端が鉤型でその反対側は緩やかにカーブを描いた持ち手だ。鍛冶屋のチートを活かして作るが、多少効率が上がっているような気がする。

　やはり新しいものを作るほどにチートのレベルのようなものが上がるのだろうか。であれば、今日新しく作ることで明日の効率がまた上がるはずだ。もしそうなったなら、次からは売れる売れない、必要不要によらず新しいものを作ることも考えても良いかも知れない。

　投槍器はあまり長く太く作ると重くなりすぎるので、程々に留めておく。こいつを使うのはうちの人間だけだろうから、耐久性なんかは魔力を籠めて代用することにした。

　次は投げ槍本体だ。こっちは多少重くてもそれ自体が威力などに繋がるので、気にしないことにする。板金を細く薄く伸ばしてから丸め、余り厚みのない１mほどの細い鋼の筒を作る。

　その先に別の板金を熱して穂先を作って接続する。投げ槍なので刃はつけず、突き刺さるように四角錐の形に作った。投げ槍は硬さがいるので魔力を籠めるのはもちろん、焼入れと焼戻しもしておく。

　見た目には細い鉄パイプに槍の穂先がくっついているだけ、みたいな感じである。

　いずれの作業も本職である鍛冶屋のチートが有効であることもあるし、今回は簡単な作りのものなので、サーミャ達が狩りから戻ってくるより早くに完成してしまう。

「早速試すか……。」

　俺は魔力を籠める練習をしているリケを作業場に残して、試し打ち（試し投げ？）をするために、投槍器と投げ槍を持って外に出た。

## 出来たものの確認

2019年3月11日

　作ったばかりの投槍器と投げ槍を持って庭に出る。まずは投げ槍をそのまま投げてみる。戦闘のチートもそこそこ貰っている（そこらの人間よりはかなり強いようだ）のでその分は差し引いて考える必要があるが、指標としては十分だろう。

　庭……というか家の周辺は結構広い。１００m～２００mが確保できるくらいあるのだ。でないと弓の練習が出来ないし、畑や増築するスペースも確保できないしな。

　実際に飛んだ距離は目測でいいだろう。実際に使うときがもし来たときもレーザー測距計で距離を測って投げるなんてことはないわけだし。

　担ぎ上げるような格好で槍を持ち、少しだけ助走をつけて投げる。前の世界のやり投げの記録はおおよそ１００m前後だが、当然俺がそこまで投げられるわけもなく、目測でおおよそ５０mほど飛んだ。威嚇するだけならこれでも十分過ぎるな。

　次は投槍器に槍をセットして投げる。テコの原理で大きな力を得た槍は俺の思ったよりも遥かに飛んでいき、おおよそ１４０mほど飛んで地面に深々と突き刺さる。

　確か前の世界でも芸人さんが投槍器で槍を投げて１００m先の風船を割ったそうだし、投槍器はそこそこは使えるのかも知れない。

　ただ、狙撃では弓矢に劣るし、近距離は投石機（トレビュシェットのような大型のものではなく、スリングと呼ばれる個人で使うもの）のほうが弾丸の調達もしやすい。携帯できる弾数も槍と矢では文字通りケタが変わってくる。前の世界でかなり古代から使われていたらしいのに、後世まで残っていた地域が少ないのはその辺りに理由がありそうだ。

　とはいえ、総鉄製の槍が遠くから自分を目がけて飛んでくるのはインパクトがあるし、こちらの兵科に投槍兵がいるかはわからないが、慣れていても投槍器なしに投げ返したところでこちらには届かない。そして届く頃にはとっくに弓の射程に入っている。そうすると作ったのも無意味ではないか。

　作った投槍器と槍の具合を確認したが、まだ少し時間があるので、もう２本ほど予備の槍を作っておいた。基本的には投射武器だし、弾がないと意味が薄れるからな。

　俺の方は早めに片付いたので、リケの作った魔力込みのナイフを見てみる。俺の作る高級モデルと比べるとギリギリもう一歩と言った感じではあるが、一般モデルと言うにはやたら出来が良い。普通の工房ならこれで家に帰っても良いくらいじゃなかろうか。俺がそう言うと、

「親方が特注で作っているものに手がかかったら、が目標ですから。」

「けっこう長いと思うぞ、それ。」

「もちろんです！でないと弟子入りの意味がありません！」

　フンスと鼻息も荒くリケは返してくる。最初来た頃は魔力のことは俺も知らなかったので、ドワーフとして鉄の組成を活かせば高級モデルまでならいけると踏んだのだが、今は魔力の存在も分かっているから、本当に俺の特注に手が届くかも知れない。

　俺のはチートなので具体的に教えたりできないのが心苦しいが、見取りでも頑張ってほしいところである。

「それはそうだな。」

　リケが家に帰ると言い出したときには、とんでもなく寂しさを感じるんだろうな、そう思ったが、それは顔に出さずに俺は微笑んだ。

　そのあと、リケと俺で後片付けをしているとカランコロンと作業場の鳴子が鳴った。狩りに出ていた組が帰ってきたようだ。

「ただいま。」

　サーミャが勢いよく作業場に入ってくる。随分と機嫌がいい。

「おう、おかえり。」

「あの弓のおかげで今までで一番デカい猪を捕れたぜ！」

　ああ、それで機嫌がいいのか。

「おお、それは良かった。作った甲斐がある。」

「３人共弓が使えると言うのも大きかったわね。」

「気取られる前に射掛けられるのはいいですね。」

　ディアナとリディが続いて言う。今まではずっと勢子だけしてたみたいだしなぁ。その辺り臨機応変に対応できると色々楽になる、というのはわかる気がする。

「じゃあ、明日の昼は少し豪華にしないとな。」

「ヒャッホウ！」

　俺の言葉にサーミャが喜び、リケがたしなめ、皆で笑ういつもの光景がそこにあるのだった。

## 山と月

2019年3月12日

　翌朝、いつも通り５人＋クルルで連れ立って湖へ向かう。毎度のことではあるが、念の為の護身用に俺はショートソードでリケは斧（主目的は木を伐るだが）を持っている。他の３人は弓だ。

　魔法による奇襲があったりすれば別だが、魔法の使い手がそんなにいないこの世界では「そんなことはそうそうない」（リディ談）という事もあって、遠距離武器が増えたのは安心感がある。今１番森で脅威になるのは熊だろうし。

　クルルも、今日も皆でお出かけなので機嫌が良さそうだ。

　半分ピクニック気分で森の中を進んでいくと、遠くに見慣れない獣の姿を見かけた。いや、ある意味では見慣れている。見かけ的には完全に虎だ。サーミャ――虎の獣人がいるんだから、そりゃ元になったであろう虎そのものもいるよなぁ。

　わかりきってはいるが、この森をほんの一部とは言えウロウロしていて見たのは初めてなので、サーミャに聞いてみる。

「ありゃあ虎か。」

「そうだな。こっちまで来るのは珍しいけどな。」

　サーミャは何でも無いかのように答える。

「アタシがいたもっと北とか西の方では、もうちょっと見かけるんだけど、ここらは狼達が大きく縄張りを張ってるからあんまり来ないんだよな。」

「熊に追われたかな？」

「熊に追われたんだったら、更に北か湖の反対側に出ると思う。単に他の獲物を追っかけてきたんだろ。珍しいけどたまにはあるってことだ。」

「親戚ってことはないよな？」

「ない。」

　最後は食い気味に回答された。獣人としては元の獣と同じ扱いは嫌なようだ。万が一にも「その声は、我が友、李徴子ではないか？」と言うことでもあればまずいと思ったがそう言うことも無いようだ。

「すまん。」

「いや、いい。ちなみに言っておくと言葉も通じないからな。」

「分かってるよ。」

　通じたらそれこそ李徴子があり得ちゃうでしょ。

　虎はほんの少しの間こちらを見ているようだったが、すぐに踵を返して森の中へ消えていった。獲物を追ってきたという話だが、そんなに腹は空かせていなかったようだ。この辺りにも獲物になるような動物はそれなりにいるからなぁ。

　珍しい出会いはあったものの、他には何か起きることもなく猪を沈めたところに辿り着いた。岸辺から見てもデカいことがよく分かる。前にもかなりデカいのを仕留めたことがあったが、あの時よりも更にデカいのではなかろうか。

　水の中に沈んでいる猪にロープをくくりつける。デカすぎて引っ張り上げるのも一苦労しそうなので、クルルに手伝ってもらうためだ。

　くくりつけたロープを俺とサーミャ、ディアナ、そしてクルルで引っ張る。クルルに手伝ってもらっていても、なお重さを感じる。

　やがて水の中から猪がその姿を現した。内蔵を抜かれていてもなお３００kg近くはありそうな気がする。この大きさの猪の内臓なら相当な量であっただろう。この周辺の狼達にはさぞかしよい御馳走であったに違いない。

　引き上げている間にリケとリディで木を伐って運搬台を作ってくれていた。そこにみんなで猪を引っ張り上げる。チート持ちとドワーフ、獣人に走竜の力を集めてもなお重いというのは初めての経験だ。クルルがいなかったら持ち帰れなかった可能性すらありえる。

　運搬台からはみ出さんばかりに大きな猪の体を縄で固定する。脚のところで固定すればいいのだろうが、そこも太いので一苦労する。

　苦労して猪を固定した運搬台を、クルルを含めた全員で引きずっていく。やはり重さが半端ないが、クルルのおかげでそれなりの速度では進む事ができている。いつもよりはかなり遅いが、なんとか昼過ぎには戻ってくることが出来た。

　持って帰ってきた猪の体を、またもや苦労して木に吊るす。もちろんクルルのお手伝いつきだ。でなければ巨体を吊るすことなど出来ない。

　その後の解体作業は体が大きい分の苦労はあったが、作業自体はいつもどおり進む。特注モデルのナイフでなかったら、こうはいかなかったんだろうな。毎度思うことではあるがチート様様だ。

　５人で解体して、小一時間ほどで肉と不要部位に分けることが出来た。すぐ食べるぶんを除いて、塩漬けをしたものと干すぶんを倉庫に運び込む。

　この倉庫を作っておいてよかった。作ってなければ今頃３００kg弱の肉が作業場に干されるところだった。

　それらの作業を終えたのが昼をかなり過ぎるが、夕方と言うにはまだ相当早いくらいの時間である。俺も含めた全員の腹はもうすっからかんで、食べものを催促する音の大合唱が始まっている。

　俺は約束した御馳走を作るべく、取り分けておいた肉を持って家に戻った。

## 挽肉を焼いたアレ

2019年3月13日

　腹が減りっぱなしで早めに食べたいのは山々なのだが、折角なので美味いものも食べたい。なので、ここは俺も含めて我慢してもらって準備を進める。

　まな板を準備してその上でナイフを使って猪肉を刻んでいく。どう頑張ってもちゃんとしたミンサーを使うほど綺麗には出来ないが、なるべく細かく刻んで挽肉にする。

　できた挽肉を木製のボウルに入れて

　かまどに火を入れて中火くらいに調整する。ガスコンロだとつまみで調整できるし、IH調理器ならボタンだが、このかまどでは基本的には木炭での調整なので微調整が難しい。ある程度の焦げやなんかは許容してもらうか。

　温まった鍋の底に猪の脂をひいて、その上に挽肉の塊を並べる。

　３分ほど焼いたらひっくり返して火酒を少し入れて蓋をしてまた３分待つ。前の世界だと中がレアのやつが流行ってたが、流石に野生の猪の生焼け肉を食べる勇気はない。

　かまどに炭を足して蓋を開けると、フワッといい匂いが漂ってきた。もう少しだけ焼いて仕上げだ。

「おおー。」

　出した料理――イノシシ肉のハンバーグ（正確にはハンバーグのようなもの、だが）を見て、サーミャが目を輝かせる。かかっているソースはいつもステーキのときに作るやつだ。個人的には目玉焼きかチーズが乗っていれば完璧だったが、ないものは仕方がない。

　皆で「いただきます」をして食べ始める。

「似たようなのは前に食べたけど、こういうのもいいわね。」

　ディアナが感想を言った。伯爵家ともなるとそれなりに色々なものを食べてきたらしく、料理についてはなかなかに詳しい。

「やっぱりあるのか。」

　まぁ、屑肉や硬い肉を柔らかくするために刻み、生だと怖いので中に火が通るまで焼くってのは発想として凄いかと言うと、当たり前なようにも思えるしなぁ。

「なんかもっと雑だったけどね。」

　刻んだ肉を丸めただけとかだろうか。と言っても、作り方だけ言えばさほど違いはない。だからこそ前の世界ではもうちょっと先の時代のものであろうハンバーグを作ったんだけどな。

「私の実家の方ではこう言うのはなかったですね。元々肉と言えばほとんど干し肉だったと言うのもありますけど。」

　そう言ったのはリケである。生肉が手に入りにくいと工夫するにも限界はあるよな。前の世界の金華ハムだと専門のレシピ本があるほどだとは聞くので、干し肉用のレシピもこの世界にはいっぱいある……と思う。

　ただ、前の世界のイメージに引っ張られて、ドワーフが繊細な料理をしているイメージがない。以前、似たような話になったときにはドワーフが多く住む街にはドワーフの料理人もいるということだったので、実際には繊細な料理もこなすのだろうが。

「里でも肉はあまり出なかったので、私もこういうのは初めてですね。」

　今度はエルフのリディだ。こちらも菜食主義のイメージがあるので、そういうことかと思っていたが別にそんなことはなく、食事は畑からとれるもので

　実際にうちだと生か塩蔵かはともかく毎日肉が出るが、リディは普通に食べるし調子が悪いということもない。

「今日はみんなだいぶ腹が減ってたから、それでうまいのもあるだろうけどな。」

「いや、これはうまいと思う！」

　サーミャが声高に主張する。よっぽど気に入ったらしい。

「わかったわかった。今度はもう少し時間のあるときにな。」

　柔らかくてしっかり猪の肉の味がするハンバーグはうまいのだが、どうしても下ごしらえに時間がかかるのが難点ではある。

　鍛冶屋だからミンサーも作れるんだろうけど、少し先取りしすぎな気もするので今のところは見送りである。

　そのあとは皆でどういう料理を食べてみたいかについて話しながら楽しく食事をした。

## 再びの依頼

2019年3月14日

　それから幾日かはいつもどおりの作業をした。ナイフと剣の製作である。リケが通常モデル、俺が高級モデルなのもいつもどおり。

　だが、少し違っているのは俺が作る速度が上がっていることだ。これはチートが体に馴染んでいるのか、それともチートそのもののレベルが上がっているのか、そのどちらなのかはわからないが、やはり新しいものを作るたびに速くなっていくのは間違いなさそうである。

　であれば、今後１日程度ずつでも新しいなにかを作る時間をもうけたほうが良さそうだ。それで新たに売れそうなものがあればエイゾウ工房のラインナップに加えてもいい。カミロのところで売れ筋のものを聞いておいたほうがいいかな。

　そして納品の日がやってきた。荷車に荷物と自衛用の武器を積み込んで、お出かけと分かって上機嫌なクルルを繋いだら出発である。

　ガラゴロと森の中を行く。リケが操縦に慣れてきたこともあってか、なかなかのスピードだ。あの虎はもう元の住処へ帰っただろうか。

　なるべくなら熊と出くわしてお互いが怪我などしないに越したことはないんだが。時折、車輪の音に混じって鳥の声がかすかに聞こえ風景が流れていく中、俺はそんな事を考えていた。

　リケの操る竜車はすぐ街道に出る。ここからは更に速度が上がっていく。今回の一番大きな違いは投射武器が３つ増えていることだろう。森の側はともかく反対側は平原だし、見つけ次第撃ち方はじめでいいのは心強い。

　それが分かっていたわけでもないだろうが、速度はともかく心情的にはのんびりと街道を進み、街についた。ハルバードを持った衛兵さんに会釈して街に入る。前に来たときよりは多少マシな顔になっているように見えるから、おそらくはマリウスがちゃんと通達を出してくれたんだろう。

　街の中をゆっくりと進む。前に来た時よりもジロジロと見られることが減っている。来る回数自体はそんなにはないが、そう言うものだと知られてきたということだろうか。街は活気があるが、それよりも慌ただしさのようなものを感じる。

　賑わいと言うよりはバタバタの方が近いと言えばいいだろうか。俺たちはやや不穏な空気を感じながら、カミロの店に到着した。

　倉庫に荷車を入れて、クルルを裏手に連れて行き、商談室へ向かう。少し待つとカミロと番頭さんがやはり少し慌ただしく入ってきた。

「忙しそうだな。」

「まぁ、ちょっとな。」

　カミロがこう言う言葉の濁し方をするときはあまり良くないときだが、一旦スルーしておく。まずは商売の話が優先だ。それはカミロも承知しているだろう。

「持ってきたのはいつもどおりだ。荷車に投げ槍と弓を載せているが、そっちは売り物じゃないから気をつけてくれよ。」

「分かった。」

　カミロが番頭さんのほうに視線を向けると、番頭さんは頷いた。

「こっちは種芋は手に入った。」

「おお、そうか。ありがたい。」

　これで芋が手に入れば、以前よりも森に引きこもりやすくなる。勿論芋だけに頼るわけにはいかないので、多少ではあるが。

「北方の調味料の方は手配中なんだが……。」

「だが？」

「帝国の方で問題が起きていてな。そっちの都合で今は王国まで運び込むのが難しい。」

「問題か……。気長に待つと言ったんだ、気にしないでくれ。」

「すまん、助かる。それでその問題について、１つ協力して欲しいんだが。」

「俺には後ろ盾も何もないぞ？」

「そっちは期待してないよ。」

　俺の言葉にカミロは苦笑する。エイムール伯爵家の力は借りられるかも知れないが、そっちならカミロは俺を介する必要ないしな。

「その問題解消の一環として、お前にはまた武器の大量生産を頼みたい。」

　カミロは単刀直入にそう言った。

## 隣国

2019年3月15日

「大量生産か。」

　今の俺だと更に生産スピードが上がっているのでより多く作れるし、ものによるが問題はないだろう。

「かまわないが、そのかわり……。」

「そのかわり？」

「何が起きているかの説明くらいはしてくれ。」

　俺はそうカミロに言った。流石に何も分からずに注文主の言うことだけ聞いて作るのもなにか違うような気がするのだ。

　カミロは俺に説明する前、いつも考え込む。俺に教えて巻き込むことを避けたいと言うのもあるのだろうが、このところはどうもそれ以外の意図があるように思えてならない。

　そこを聞くのは野暮になりそうなので聞いてないが、いつか話してくれるだろうか。

「これは余所に話すなよ？」

「話す相手がいないよ。」

「それもそうか。」

　俺の言葉を聞いて、カミロは苦笑する。彼は数少ない俺の家の場所を知っている人間だ。ほぼ誰も来ない森の中の一軒家住まいで、ここにいない誰かと話す機会なんてまずない。ごくごく偶に客が来るがそれ以外で話す相手はいないので、漏洩のしようがないのだ。

　一応俺は皆を見回したが、一様に頷いている。彼女たちも話す相手がいるわけではないからな。

　それを見たカミロは一息ついて言った。

「ここでは詳しい話は省くが、帝国で近く革命がおこる。皇帝を打倒して民衆で

「それは穏やかじゃないな。」

「ああ。この情報を掴んだ王国は、その混乱に乗じてほんの少しばかり国境を広げるつもりらしい。」

「で、伯爵の出番か？」

「いや、侯爵閣下だ。伯爵経由だけどな。」

「ああ、あの……。」

　メンツェル侯爵。マリウス――つまりはエイムール伯爵家の後見人のような立場の人物だ。あの御仁にはある程度バレてると思うんだよな。

「マリウスに続けて手柄を立てさせるわけにもいかない？」

「そうだな。それをしてしまうと贔屓と言われるだろうし、なにより伯爵が力をつけすぎてしまう。」

「後を継いでいきなり２回も任務を成功裏に納めるとは、さすがは武でならしたエイムール伯爵家だ、ってなるのは誰にとっても嬉しくないってことか。」

「そういうこと。かと言って

「マリウス経由で？」

「マリウス経由で。」

　じゃあ、もうほとんどバレているな。そりゃ北方のそれなりの立場の友人のはずが、魔物討伐の遠征隊で補給隊と一緒にいたんじゃバレるか。家宝を作ったのが俺というところまでバレているかはわからないが。

「あの御仁の名指しじゃあ、そもそも断れないな。で、何を作ればいいんだ？」

「槍を２０と長剣を３０だ。」

「思ったよりは少ないな。」

「おおっぴらに動くと帝国にバレるからな。最低限の手勢で行くらしいや。」

「なるほど。」

「で、すまないが来週には持ってきて欲しい。」

「来週ね……。」

「無理か？」

　俺は少し考える。前回は剣を５０作ったが、大丈夫だった。槍の２０を俺が作って、剣はリケ達に任せればギリギリいけるようには思う。俺の作業効率も上がってるしな。

「いや、大丈夫だ。じゃあ、また来週納品に来るよ。」

「頼んだぞ。」

　俺とカミロはがっしりと握手をした。お互い、変なことに巻き込まれないといいな。

## 帰り道

2019年3月16日

　大量生産分の資材も必要になったので、その分は余分に持って帰ることになった。今ごろ番頭さんが指揮して荷車に積み込んでいるはずだ。

　俺たちとカミロは残って他の話をする。

「そう言えば、手紙は届けてくれたのか？」

「ああ、届けておいたよ。あれ以上続くと流通に影響が出かねないところだったし、巡回させる衛兵の経費も馬鹿にならないしで、伯爵にとっても都合は良かったみたいだ。追い払ったことにしておくし、特に見返りは求めない、とよ。」

「そりゃありがたい。」

　この怪しい賊が出たにも関わらず、特に大きな被害が出ずに領地を無事に治めているという加点も、今回マリウスを担ぎ出すわけにいかなかった理由の一つなんだろうな。

　にしてもそういうことも気にしないといけない、ってのが貴族の世界は伏魔殿だなぁと実感するところだ。うっかり貴族になんかに転生させて貰ってたら、そんなやり取りをしなければいけなかったかと思うと、想像だけでも十分胸焼けがする。

　サスペンションの開発は試作品を都と街の往復便に搭載して試験しているところだそうだ。仕組みそのものはそんなに難しいものではないし、量産まではそう遠くはないだろう。ショックアブソーバの存在は教えてないので、もしカミロが独自に開発したら教えてもらうか、売ってもらうことにしよう。

　他にはほとんど雑談のようなものだった。どこそこの麦の生育が少し悪いようだとか、この辺りの野盗が少し減ってるだとかだ。大事っちゃ大事だが、すぐに俺の生活に大きく影響しそうな話ではない。

　そうこうしていると、番頭さんが銀貨の入った袋を持って俺達を呼びに来る。さて、帰るか。

　商談室を出て、荷物満載の荷車にクルルを繋ぐ。俺はクルルの首を撫でながら言った。

「今日は一段と重いが、頑張ってくれよ。」

「クルルルル。」

　走竜の性質なのか、はたまたクルルの個性なのか。クルルは重いと聞いてなお一層張り切った様子で一声鳴く。

　動き出しこそゆっくりだったが、あとはいつも通りの速度で動き出す。まだ街中なので大した速さではない。今の所大丈夫そうだが、問題は街道に出てからだな。

　入り口の衛兵さんに会釈して街を出る。リケが手綱を操って意図を汲み取ったクルルは速度を上げた。やがていつもと同じ速度になる。まだ大丈夫そうだが、実際に操っているリケに確認をする。

「どうだ？」

「クルルちゃん、平気そうですよ。」

「いざとなったら俺達は降りて歩くから、クルルが疲れてたりしたら言ってくれよ。」

「わかりました。」

　一段と重い、とは言っても今までが結構余裕だったから、上限がどこまでなのか分からない。ある程度の家財道具を積んでも大丈夫なら、いざと言うときにも安心なんだが、試す気にはならないな。

　そんな時には道具はともかく、金を持ってあとは人だけ乗せたら十分だろう。サーミャとリディは少し扱いを考える必要があるだろうが、それで全員郷里に戻せばなんとかなる……と言うのは甘いだろうか。

　周囲を警戒する。サーミャとディアナの話ではもうすぐ雨期（のようなもの）が始まるそうだが、草花もその恩恵に

　まだ人をすべて覆い隠して見えなくなるほどの高さではないので、荷車に乗っている俺たちが警戒という観点から言えばかなり有利だが、雨期が終わって草原が緑の大海になった頃、人の身長ほどの草花が増えると若干厄介ではある。目が届きにくくなるし、弓矢もその威力を減らすことだろう。

　ある程度重い矢も作っておいたほうが良いだろうか、そんな事を考えている間に、森の入口に差し掛かった。

「まだ大丈夫か？」

　俺はリケに聞いたのだが、

「クルー！」

　クルルがその上機嫌さを全く隠すことなく大きく一声鳴いた。その元気さを少し羨みながら俺は言った。

「そうか。じゃあ頼んだぞ。」

「クルルル。」

　森なので速度を落としながらも、クルルはしっかりとした足取りで進んでいく。

「熊は平気かね。」

「クルルが怯えてないし、アタシの鼻にもかかってないよ。」

　どこからどんな奴が出てくるか分からない街道よりも、気をつける相手と言ったら精々が熊か虎くらいである森のほうが気は楽だ。

　こうしてサーミャと言う森のベテランもいるし。逆にいざ向かってこられると危険なのは熊や虎のほうなのだが、そう言うことも滅多にない。

　果たして、鳥の鳴き声を聞きながら、ガラゴロと荷車は無事に家に着いたのだった。

## ２回目の大量生産

2019年3月17日

　家に着いたのでクルルを荷車から外し、皆で労をねぎらう。クルルはフンスと鼻息を一発吐いて喜びを表した。この後は荷物の運び込みだ。クルルにも手伝って貰って、木炭、鉄石と粘土に調味料や酒、それと種芋をそれぞれの倉庫に入れる。

　運び込みが終わったら本来は思い思いの時間なのだが、今回も大量生産が控えてることもあって、型と板金の生産を優先させてもらった。半日分でもあるのと無いのとでは違ってくる。

　型はサーミャとディアナ、リディで、板金は俺とリケの担当だ。皆黙々と日が落ちるまで作り続けていた。

　翌日からはいよいよ大量生産だ。前と違って違うものを２種類なので、これも分担をする。俺が槍を作って、他のみんなで剣だ。リディが型を作り、サーミャとディアナが鋳造をして、リケが仕上げをする。

　まず今日はどれくらいの数を作ることができるかだ。６日間で間に合うかどうかで、その後の割当を決める。

　だが恐らくはこの体制で行けるはずである。リケたちは１日５本、俺は１日４本が目標だが、これくらいなら多分行けるだろう。最終的には俺の方をリケに手伝ってもらう可能性はあるが。

　板金を火床に入れて加熱する。加工できる温度になったら取り出して金床において鎚で叩き、形を作っていく。

　断面は菱形で見た目は斜辺がめちゃくちゃ長い二等辺三角形を作っていく。基本的には刺突のみを考えた形状だ。斜辺のところは鋭くして、刃物ほどの切れ味はないが一応切れないこともないくらいにする。根本に柄を差し込むためのソケットを穂先は焼入れも焼戻しもする。

　槍の特徴はその穂先や長さもだが、石突があることだ。石突の方もソケットを作り、地面に接する側を分厚くして突起を作った。

　今回は高級モデルではなく、一般モデルの品質で作っていく。万が一何かで時間が足りなくなってきたときにもリカバリーができるからな。

　分厚い板になっている木材を細く割ったあと、ナイフで削って棒にしていく。これが柄だ。本当であれば油なりを塗り込んで行くのだろうが、今回はそのままにしておいた。納入先で合った油を塗ってメンテナンスして欲しい。

　柄を作ったら穂先側のソケットに差し込んで鎚で叩きカシメていく。同じことを石突側でも行って槍の完成である。

　同じ作業を何度も繰り返して、１日が終わった。

　この日に完成した槍は５本。このスピードなら余裕で間に合いそうだな。

　リケ達、剣チームも目標をこえて６本を達成しているし、このペースで行けば大丈夫そうだ。

　翌日も同じように作業をする。そう言えば、この槍を作るときの効率も上がっているように思う。以前までなら４本が精々だった可能性が結構あるからな。

　しかし、今更ながら同じ作業を繰り返すということが苦にならない性格でよかった。同じことを繰り返すのが苦痛だったら昨日どころか、そもそも日々の生産に支障が出ている。まぁ、そんなことがないから鍛冶屋を選んだのだが。

　そんな事を考えながら、何本目かの槍を作るべく、俺は赤くなった板金に鎚を振り下ろした。

## 大量納品も２回め

2019年3月18日

　６日の間、お互いに作るべきものを一心不乱に作り続け、目標の数を揃えることが出来た。ほんの少しだけ時間が余ったので、全員で畑に種芋を植えておいた。

　作ったものを荷車に積んで、クルルを繋ぐ。剣の方はともかく、槍は数があるというのもあるが、長いのもあって流石にかさばる。少し苦労して積み込んだ。

　出発の準備が整ったらさっさと出発してしまうことにする。もうすぐ雨期になるらしいが、今の所はそんな気配もなく森の中は爽やかな空気だ。

　虎の心配はほとんどなくなったようなのだが、熊はわりとこの辺りもうろついていることがあるらしいので一応警戒はしておく。鼻が利くのがいるので、過剰に警戒する必要はないとも思うけどな。

　無事に森から出ると街道になる。こちらももうすぐ雨期であることを感じさせない青い空と、こちらは雨を楽しみにしているのだろうか、背を伸ばした草原が広がっている。異世界でなかったら普通にのんびりとしてしまいそうな景色だ。

　だが勿論、治安の良さは前の世界の日本とは段違いである。警戒を怠るわけにいかないことには変わりない。弓と投げ槍があるにせよ、そもそも使わないに越したことはないのだ。

　時折ガサゴソと草原の一部が動いたりしていて、その度に警戒している全員が反応するが、ほぼ「多分うさぎか何かの野生動物」である。今のところこっちまで狩りに来る必要はない（森の生き物で事足りるし）ので、お目にかかることはまずないだろう。

　そうして緊張と弛緩を繰り返し、街にたどり着く。ハルバードを持った衛兵さんに会釈をする。いつか使い心地を聞いてみたいところだ。マリウス経由で聞いてみようかな。

　今まで結構な割合で視線を俺たちに向けていた街の人たちは、もうほとんど気にしなくなってきている。時折、他所から来たと

　カミロの店に到着して、いつもの通りに商談室へ向かう。今日はかなり早く到着した。今日に関してはこの時間に来る可能性はかなり高かったし、予測はしてたんだろう。

「よう、どうだ商売の方は。」

「まだなんとかなってるよ。」

　俺とカミロは軽口で挨拶を交わす。それもそこそこに本題だ。

「それで、言ってた数は用意できたのか？」

「もちろん。」

「流石だな。助かるよ。」

「仕事だからな。」

　俺はニヤッと笑って言った。カミロもニヤリと笑う。カミロはそのまま番頭さんに目を向けると、番頭さんは頷いて部屋を出る。

「革命の話なんだが。」

　番頭さんが出ていったことを確認して、カミロが話を始める。

「革命自体には影響がないらしいんだが、困ったことを聞いてな。」

「困った話？」

「ああ。」

　カミロは頷く。

「今のところは大丈夫だと思うが、どうも帝国軍の動きがおかしいらしいんだよな。」

「どこかから情報が漏れてる？」

　俺が聞くとカミロは再び頷いた。

「帝国もバカじゃない。諜報員もいるだろうし、動こうとすればある程度気取られるのは仕方ない。」

「ふむ……。」

「さっきも言ったが、革命には影響がない。問題なのは……。」

　カミロは一瞬ためらったあと、言葉を続けた。

「どうもヘレンが帝国側に捕まったらしい。」

## 侯爵の依頼

2019年3月19日

「ヘレンが！？」

　俺は驚きを隠さない声で言った。なんせ俺よりも遥かに強いし、持っているのは俺の特注モデルのショートソードなのだ。その辺の連中に遅れを取るようには思えない。

「どういう状況だったのかは分かってないんだがな。」

「普通に戦闘に負けて、ではないよなぁきっと。」

「少人数同士ならな。大人数相手なら分からんぞ。」

「ああ……。」

　一騎当千の英雄とて、単騎で万軍に勝つことは難しい。そんな状況だったんだろうか。だがそうは言ってもだ。

「ただ、あいつを捕まえるほどの軍勢が動けば目立つはずなんだが、そんな情報もないんだよな。」

　そうなのだ。そんな状況ならカミロの耳に入らないはずがない。今回の革命も把握していたくらいなのに。

「隠蔽された？」

「かもな。もしくは何か別の要因があったのか、だ。」

「ふうむ。」

　俺は唸って腕を組んだ。ただの客と言えばそれまでだが、数少ないこっちの世界での知り合いでもある。なんとかしてやりたいところだが、立場的にはあくまで鍛冶屋だからな。

「こんな話をしたのはだ。」

　そう言いながら、カミロは身を乗り出した。

「侯爵閣下のご依頼でな。”帝国に行っても怪しまれない人間を派遣して彼女を救出して欲しい”だそうだ。で、俺が思い当たる人間でそれができそうなのは１人しかいない。」

「……俺か。」

　カミロは頷く。

「鍛冶屋にそう言ったことを頼む、てのが随分と

「なるほどねぇ。」

　あとは俺が受けるかどうかか。ちらっとうちの皆の方を見てみると、「やるんでしょ」みたいな顔をして俺を見ていた。失敬だな君たち。

「わかったよ。」

　ため息をつきつつ、俺はカミロに返事をする。

「いつもすまんな。」

「いいよ。いつもの仕事……ではないけど、ヘレンは知らないやつでもないし。」

　それに、侯爵閣下のご依頼となれば、カミロも「ダメでした」とは言いにくいだろう。これで侯爵には鍛冶の腕前の上限はともかく、普通でないことは完全に筒抜けになると思っていいだろうな。

　そうなったらそうなったで、それを前提として出来る限り利が出るように振る舞うだけだ。

　その後、帝国に向かうための打ち合わせをカミロと続けた。当然だが早いほうがいいので、明日早々にも向かうことになった。「行商にくっついて、色んな修理をしている鍛冶屋」というのがカバーストーリーだ。

　これに沿うなら簡易の炉などが必要だが、それらはカミロが用意する。向かうときの馬車もカミロのところの馬車で、以前に都に乗り込んだ時と同じ方法で落ち合うことになった。

　細かいところはその道行きでする。ヘレンが捕まっているおおよその場所の見当もついているらしいが、そこを探ることもしなければいけないし、救出作戦の詳細は見つけてから立てるよりないからな。

　そこまでを話して、俺達はバタバタとカミロの店を後にした。さて、本業じゃないが忙しくなるな。

## 出発準備

2019年3月20日

　カミロの店を出たあとは、そのまますぐに街を出た。街道も警戒はするが、最低限に留めて家に帰る速度を優先する。森の中でも同じだ。

　森の中も全速力……だと荷物が跳ねたり、俺達も厳しいのでそれなりの速度で走り、過去最高速で帰り着いた。

　荷物を片付けて、クルルの労をねぎらう。かなり急がせたにも関わらず、クルルは平気な顔をして「クルルル」とご機嫌に鳴いている。

　魔力もエネルギー源になっている、とリディが言っていたが、もしかしてそれも影響しているんだろうか。

　興味は尽きないが、今それを試している時間はない。明日の朝くらいにはもう出発しないといけないのだ。その準備が必要なので、慌ただしく家に引っ込む。

　猪の干し肉を多めに切り分ける。食うものは大事だ。後は前の遠征のときに持っていった包帯代わりの布切れやらを、

「他に必要なものは何かな。」

「親方は鍛冶屋として行くんですから、その道具がいるのでは？」

「そりゃそうだ。」

　愛用の鎚と、残っている板金をいくつか見繕って空いていている箱に入れる。これで出かける準備自体は良いかな。

「で、詳細は説明するまでもないが、またお出かけします。」

　夕食の時に皆を見渡して俺は言った。

「今回は期間がわからない。１週間後には帰ってるかも知れないし、１ヶ月位帰ってこないかも知れない。流石に１ヶ月を越えることはないと思うがな。」

　そんなに時間をかけていたら、その間に革命が起きてしまうし、そうなったらヘレンの命があるかはかなり怪しいものだ。リミットとしてはそれくらいが最長だろう。

「その間、なにか心配なことはあるか？もし必要なものが出そうならカミロに言って、森の入口に配達させるが。」

　俺の言葉に皆が考え込む。最初にサーミャが口を開いた。

「肉は平気だろ。」

「森の中で食べられる植物は私が分かりますし、畑もありますから。」

　リディがその後を引き取る。

「強いて言えば鉄石や炭ですけど、倉庫にもある量を考えたら１ヶ月くらいはなんとかなりそうに思います。」

　お次はリケだ。毎回消費量以上を仕入れていたかいはあったと言うことか。倉庫も建ててからそんなには経ってないが、建てておいてよかった。

「家の補修とかになっても、私たちでできるしねえ。大丈夫なんじゃない？」

　最後にディアナがそう締めくくった。

「じゃあ、特に心配することはないか。」

「逆にあなたが心配だけどね。」

　俺が言うと、ディアナがそう返す。

「いっつも本業とは違う依頼をホイホイ受けちゃうんだから。前も怪我して帰ってきたでしょう？」

　それを言われると申し開きのしようもない。俺が少し身を縮こませると、要因の１つではあったリディも同じようにしている。

「あ、別にリディが悪いってわけじゃないのよ？エイゾウはもう少し自分を大事にしたら、ってこと。」

　ディアナの言葉にサーミャとリケがうんうんと頷く。

「あなたの選択だから引き止めはしないけど、無事に帰ってきて欲しいと言うのが家族の総意なのは忘れないでね。」

「わかってるよ。」

　彼女たちの心配そうな顔を見て心配させないようにしようとしたが、俺は少しウルっときそうになったのをグッと抑え込んで、笑ってそう言うのが精一杯だった。

## 帝国へ出発

2019年3月21日

　翌朝、拝礼の後で女神像を懐に入れて荷物を持ち、クルルの牽く荷車に皆で乗って森の入口まで行く。少しとは言え板金もあるし、皆とはしばらく離れることになるしな。

　森の入口についたら、少し奥まったところで街道の様子を伺う。雨期の到来を告げるものだろうか、遠くに重たそうな雲が見えている。

　時折、行商人のものらしき馬車や隊列、徒歩で移動する旅人が通り過ぎる。本格的な雨期の前になるべく遠くまで移動しておきたい、と言うのは分からないではないな。道が

　やがてそれらよりも早い速度の馬車がやってきて、森の側に停まった。普通、修理なんかをする場合は多少でも安全な草原側に停めるのだが、こちら側に停めたということは……。

「カミロ。」

　荷物を持ってそろりとその馬車に近づき、俺は声をかけた。

「おう、いたか。」

　見慣れた顔が馬車の上から顔を出す。

「ああ。手伝ってくれ。」

　板金を収めた箱をカミロに手渡して引き上げてもらう。そのまま俺は馬車に乗り込んだ。

　今ならまだ他に通行するものもいない。その間に出発してしまうことにした。荷台に立って森に向かい手を振る。うちの家族が手を振ってそれに応えてくれたのを確認すると、俺は荷台に座り込んだ。

　馬車が走り出す。いくらか進んだところで、俺は違和感に気がついた。

「こいつは……サスペンションを搭載してるのか。」

　さっき乗り込んだときにはよく見ていなかった。いや、もしかするとパッと見にはわからないように擬装していたのかも知れない。

「ああ。ようやくそれなりに使える目処がついたんでな。まだ量産の目途はついてないから、真似をされないように隠してるが。」

　俺のほとんど独り言のようなつぶやきに、カミロが答える。ゆらゆらと揺れるが、以前のようなガツンとくる突き上げは来ない。

「これが魔物討伐隊の馬車にあれば、腰の痛みももう少しマシだったんだろうがな。」

「そのうち売り込むつもりだから、もし次があれば搭載車に乗れるかもな。」

「次がないように祈りたいところだがね。」

「それはそうか。」

　カミロが笑い、俺も笑った。なるべくならああ言うことはあんまりやりたくないものだ。俺はただの鍛冶屋だからな。

　街道を馬車が走る。普通の馬車なら荷物を積んでいないかのような速度だ。

「この速さなら帝国へは思ったより早く着くだろうが、それでも数日はかかる。」

　カミロがそう言う。

「だから、これからの道行きで細かいところの話を進めていこう。」

「わかった。そもそも侯爵が依頼をした理由も知りたいしな。」

「ああ。それは簡単だよ。帝国への派遣の依頼人が侯爵だからな。」

「それだけで使い捨てのはずの傭兵を救出する依頼とは、随分と義理堅いな。」

「……まぁな。」

　この口ぶりではそれだけではないってことか。言わないと言うことは俺が今知ることは避けたほうが良いんだろう。

　俺は馬車の座席に深く座り直して、他の話題を始めるのだった。

## 道すがら

2019年3月22日

「帝国ってどんなところなんだ？」

「王様の代わりに皇帝がいるって以外には、生活や建物なんかはほとんど王国と変わらないよ。」

「そうなのか。」

　帝国なのでなんかものすごい軍事要塞があるとか、そう言うものを期待してしまっていたのだが、そりゃ王国と帝国の違いって何だと言われると、国家元首が国王か皇帝かの違いくらいだよな。権能としても本来そんなに違いはない。

「ああ。国としては王国以上に貴族たち関係なしの、ほとんど独裁だが。」

　王国は貴族たちの議会のようなものがあって、そこの合議でいろいろ決まっているらしい。ただし、最終的な裁可は国王（王家）がするということだから、絶対君主であることには変わりない。

　とは言え、あれもこれも蹴っていては貴族達の不満も溜まるし、そうなれば離反する者も出てくるだろう。国王と言えども、とどのつまりは騎士の頭領でしかない。

　なので、王家にとんでもなく不利だとか、そんなものでも無い限りは採用される。

　皇帝が最初から意見を聞く気がない場合は、諮問機関もかけずにそのまま発布される。そしてそのパターンは結構多い、らしい。

　国家元首がすごく有能であれば、帝国のほうが急速に発展する可能性が高い。決めてから実行までのスピードが段違いだからな。

　しかし、革命が取り沙汰されているということは、今の皇帝が有能かどうかは言うまでもないってことなんだろう。

「革命まで言い出すということは、民に不満が溜まっている？」

「まぁなぁ。ここ数年ほどで税が重くなっててな。もちろん、それ１つだけで革命ということにはならんのだろうが、直接的な原因はそれとその税を帝国の貴族連中が懐に入れていた、と言う話が出たことだよ。」

　自分が稼いだ税が誰かの贅沢のためだけに使われている、てのは不満が溜まりやすそうだ。前の世界のフランス革命も、つまるところはそれが原因だった記憶がある。

「それでどうしようも無くなったとき、王国なりに逃げられるうちは良かったが、移動に制限がかかるようになってそれもできなくなったのが最後のひと押し、ってわけだな。」

「なるほどねぇ。」

　追い詰められたら自分たちのために変えよう、とする連中は多かれ少なかれ出てくるのは世の常だ。俺は前の世界でもこっちの世界でも、幸いにしてそこまでに至ったことがないが想像は容易だ。

「移動が制限されているってことは、俺達はどういう名目で入るんだ？」

「それは住民たちだけで、巡礼者を含む旅の連中や行商人なんかは対象外だよ。だから俺達は行商人として正々堂々乗り込める。まぁ、許可状を取るにもそれなりの金がかかったけどな。」

　カミロは懐から木片を取り出して俺に見せた。確かにそれらしきことが書き付けてある。これがあれば通過自体は問題ないということだろう。

「あとは

「そう言うこと。」

　何度見ても似合わないウィンクをしながら、カミロが言う。

　情報収集も必要だし、今までとは違う働きが必要になってくるな。俺はそんなこと思いながら、広がる景色に目をやるのだった。

## 情報収集

2019年3月25日

　情報収集が必要だとは言っても、もちろんヘレンが連れて行かれた先のおおよその見当はついているらしい。

「どうも商業が栄えてるところに連れて行かれたようなんだよな。」

「軍事都市でなくてか？」

「ああ。」

　傭兵を監禁しておくなら、それこそ駐屯地のようなところのほうが良さそうに思うのだが、そうではないのか。

「きっと人の出入りが多いからだろう。傭兵の１人や２人くらいは隠して入れることができる。倉庫もいっぱいあるから隠して監禁する場所にも事欠かない。」

「つまり、ヘレンが捕まったことを隠したままにしておきたい事情が帝国側にもあるってことか。」

「おそらくな。そうだとすると奪還自体は楽かも知れない。なんせ捕まってないことになっているわけだし、牢もちゃんとしたものじゃないだろう。闇から闇に葬り去ると言う決定があるまでは、酷い扱いにもならん。」

「その期限が差し迫ってるということだな。」

「そうなるな。」

　カミロがいつオファーを受けたのかは分からないが、俺が言われて翌日には出立ということはそれなり以上に急いでいることは確かだ。

　移動の間にどんどん細部を詰める。馬車だから乗っている人間以外に聞かれる心配は基本的にはない。

「で、見つかったら俺はどうするんだ？」

「すまんが戦闘要員だな。後は逃げるときの偽装をしてもらうかもしれん。」

　見かけは普通のオッさんが剣の使い手とは思わんだろうから、紛れるには良いか。そっちは良いとしてだ。

「偽装？」

「ああ。逃げるときに俺達と一緒だと怪しまれる可能性があるからな。どっからどう見ても普通のおっさんのお前と、夫婦か何かってことにして抜け出す手がある。」

「夫婦は無理があるだろ。」

「そうでもないぞ？鍛冶屋って仕事柄嫁さんとなかなか出会えないからな。ヘレンは顔に傷があるし、貰い手とか考えるとおかしくはない。」

「ふうむ。」

「まぁ、あの短い赤毛で顔に傷じゃあバレバレだから、そこにカツラも用意はしてある。秘密裏に捕縛したんなら、衛兵には外見も含めて細かいところは通達されてないだろうし、それでなんとかなるはずだ。」

「なるほどねぇ。」

　人と多く触れ合うってことはそれだけ情報が漏れやすい箇所ということだ。例えば店のおかみさん達の口が総じて軽いと思われているのは、何も悪気があってのことではない。情報の秘匿という概念が薄いのと、接触する人数の多さが起因する。

　衛兵たちには情報の秘匿の概念はあるものの、どれがそれに該当するのかという判断については甘い部分も多い。彼らも何だかんだと教えてくれたりするからな。親切心からなので、あまり悪しざまには捉えていないが。

　そんな話をしながら、帝国へ向かって街道を進む。ここはまだ王国領だからか、野盗に出くわすことは無かった。

　１日目は国境近くの街に宿泊する。国境からほど近いと言うことは、つまり人の行き来が多く、正規の軍隊の駐留もあると言うことだ。

　泊まる宿はそれなりの行商人が泊まるのに問題ないようなところで、部屋も１人１部屋だが、御者の人は宿に寝具を借りて馬車で寝る。荷物番も兼任と言うわけだ。この辺りがこういった場合の標準らしい。

　部屋については可もなく不可もなくというか、特にうちの寝室ともさほど差はなかった。こういうのってめっちゃ高級か、あるいはその逆でめっちゃ粗末なところでないと特色出にくいよね……。

「よし、じゃあちょっと出るか！」

「どこにだよ。」

　夕食の後、カミロが張り切りだした。もう外は完全に日が落ちている。何をするにももう遅いんじゃないのか。

「情報収集だよ。」

「だからどこに。」

　どんな情報を、はともかくとして農夫なんかはとっくのとうに家に帰っている。普通の店はとっくに閉まっているし、収集するべき対象がいない……ああ。

「娼館か。」

「ご明察。お前も行くだろ？」

　こんな時間で開いてる店と言ったら酒場か娼館くらいしかない。

　本当なら何日かかけて酒場をハシゴするんだろうが、俺たちは今日来て明日には発つ。ふらっと来て１日で街の酒場を周り、どの酒場でもある一定の話題を必ず１回は出していた、となったら聞きたいことがバレバレだ。

　であれば色んな人から話を聞くよりも色んな人と接している人で、かつ口の固い職業の人に聞いたほうがいい。１人に１回聞いただけなら違和感もない。

　情報を持ってないというハズレを引くリスクは当然有るし、どこかに通じていない保証もないが、今日はまだ確信の情報を得る段階ではなく、その前の匂いのようなものを探る段階だ。

「行かないよ。」

「なんでだ。奥さんたちに悪いからか？」

「いや、あれは家族でだな……」

　この世界は別に一夫一婦制というわけではない。なので全員を娶っても文化上は問題ないのだが、結婚しない理由はそれではない。

「まぁ、ハズレを引く確率を下げるには何人かで行くのが良いんだよ。」

「２人で行って２人とも同じこと聞いたら怪しくないか？」

「そ、それは……」

　行きたくない理由の１番はこの世界からみたら”お客さん”である、俺の血を残す可能性を作りたくないってことだ。おそらくは避妊技術もほとんどないだろうこの世界だと万が一ということもあるしな。

　俺が家族の誰とも結婚したり子をもうけたりするつもりがない理由でもある。こっちは彼女たちにもその気がなさそうなので、今のところ気をもむ必要もなくて助かっているが。

　だがこの理由は話すわけにはいかないので、他の理由でごまかすしかない。今回は上手くいったように思うが、いろいろと考えておかないとな。

「それに俺は口下手なんだ。情報収集は得意なお前に任せるよ。」

「わかったよ……」

　トボトボ半分、ウキウキ半分で宿屋の食堂を出ていくカミロを俺は見送った。

## 関所を通る

2019年3月27日

　今日も朝イチから移動なので、俺も御者さんも起きて一緒に朝飯を食っていた。周りにも状況が同じであろう人たちが朝食をとったり、それもそこそこに出立していったりしている。

　そこへカミロが戻ってきた。スッキリしたようなそうでないような微妙な顔をしている。

「で、どうだった？」

　俺はカミロに聞いてみる。無論、娼館のレベルの話ではない。

「ああ。いくつかの情報の裏付けはとれたな。どの街にいるのかは確定だ。」

「普通に良い情報じゃないか。」

「ただ……」

「ただ？」

　カミロは俺に顔を寄せ、声を潜めて言った。

「ちょっと思ったより決起が早くなっていそうだ。」

「それはそれは……」

「後は道すがら話そう。」

「ああ。」

　カミロが宿の食事をかきこむように食べたあと、三人一緒に外に出る。昨日はもう殆ど日が暮れていたのではっきり見えなかったが、山がその姿を見せている。国境はその山の方にあるはずだ。

　俺たちは馬車に乗り込んで国境を目指し、街を出た。

　この辺りでは唯一らしい街道を馬車で行く。途中で分岐するようなところもなくなり、どんどん山が近づいていくる。この様子だと、昨日宿泊した街はほとんど前線基地ってことだな。

　やがて馬車は山の麓辺りに到着する。国境と思しきところには木の柵が張られていて、逆茂木が据え付けられている。そのすぐそばには石造りの砦があり、そこから周囲を見通せるようだ。物見台と思しきところには弓を背負った兵士が立っている。

　砦の外周には馬が繋いであった。非常時にはあれで追いかけたり、伝令を飛ばしたりするのだろう。

　柵が途切れたところには簡易の門があって、前の世界の時代劇に出てくる関所のようにも見える。いやまぁ、実際に機能としては関所なわけだが。

　違うのは立っている衛兵が重武装なことと、砦と門のあたりに帝国のものだろう紋章が描かれた旗が風をはらんではためいていることだ。

　そこに通過チェック待ちの列ができていた。通常なら帝国側から王国側に抜ける方もそれなりの行列ができていても良さそうなものだが、そちらはほとんどいない。出国禁止と言うのは本当のようだな。

　ただ、そちらは荷物に帝国の住民が隠れたりしていないかのチェックなんかでやたら時間がかかっているみたいだ。

　通常なら帰りはここを通る必要があるわけだが、俺やカミロは勿論、御者さんもヘレンも帝国民ではないから、多分大丈夫だろう。行きも帰りもよいよいといきたいところだ。

　俺たちは帝国へ入国する方の列に並ぶ。ジリジリと列が進み、俺達の順番になった。衛兵が俺たちに声を掛ける。

「入国する目的を述べよ。」

「私は行商人で、これから街を巡って商売をします。こちらが証になります。」

　カミロは懐から木札を取り出すと、衛兵に渡す。衛兵は内容を確認すると、頷いてカミロに返し、今度は俺に声をかけてきた。

「お前は？」

「へい、ヨシミツという北から流れてきた鍛冶屋で、この方にくっついて鎌や鍬なんかを直したり打ったりするんでさあ。」

「それも私の商売になっています。」

　俺の説明をカミロが引き取る。これで大丈夫だとカミロは言っていたが、こんな経験はしたことがない。前の世界でも海外旅行なんかしてないからな。

　俺の名前が偽名なのは念の為である。とは言ってもちゃんとした戸籍謄本なんかがあるわけではないし、あったとしても俺にそんなものは存在しないから、本当に念の為でしかないが。

「……」

　衛兵が俺の顔をじっと見るので、俺はあまり得意とは言えない愛想笑いをする。

「よし、通っていいぞ。」

　内心ホッとしながら衛兵に頭を下げると、馬車は進みだした。

「ああ、ヒヤッとした。」

「ここは綺麗な道がここだけだし、山も近いからあんな設備があるが、普通はないからなぁ。」

「そうなのか？」

「何のために街に外壁や門があると思ってるんだ？」

「なるほど確かに。」

　柵もあるが、関所の機能はつまりはもののついでなんだろう。本当の機能はここで王国からの侵攻を発見、足止めして時間稼ぎしつつ早馬を飛ばして援軍を呼びその間持ちこたえることのようだ。

　ただ、この砦を大きく迂回できなくはない。山を越えるというリスクをとれば関所を通ることなく帝国から王国、あるいはその逆も可能だ。実際そうしようとした人もいるのだろう。どうなったのかは知る由もないが。

「それで、どうなんだ？」

　街道に誰もいなくなったところで俺はカミロに聞いてみた。

「娼館の娘が言うには、この数日で”俺と同じような行商人”がたくさん通ったってよ。」

「それで決起が早まりそうって話をしてたのか。」

「そうだ。」

「しかし、急に武器が入りだしたら帝国側に怪しまれないか？」

「それもあるからだよ。帝国の調査が終わる前に決起してしまえば、不意も打てるし。」

「なるほど。」

　俺はこういった

「それで、お前には悪いがいる街も分かったし、今日は街へ宿泊せずになるべくその街を目指す。休憩は必要だから野宿だな。」

「わかった。」

「すまんな。おい。」

　声をかけられた御者さんは頷くと、馬に鞭を入れる。サスペンションのおかげで多少速度を上げても平気ということもあって、俺たちの載った馬車はなかなかの速度で街道を駆けていった。

## 野営

2019年3月29日

　普通の馬車にしては速いスピードで街道を飛ばしていく。周囲の景色もそれにつれて変わっていく。

　時折は他の馬車や旅人とすれ違ったり追い越したりする時だけ、サスペンション搭載がバレないように少し速度を落とす。

　速度を落とすと言っても、「かなり飛ばしている」とは感じるだろう。それくらいの速度だ。

　全力で走らせ続ければ当然馬は潰れてしまう。魔力を吸収しておけばかなり無尽蔵に動けるらしい走竜とはわけが違うのだ。

　なので、時折は休憩を挟む。水と塩と飼葉を馬にやり、俺達は携行食と水だ。休憩を挟んでもペースとしては十分に早く進めているらしく、「やはりあれを教えてもらって良かったよ」とカミロが言っていた。

　その間を通ってきた山はとっくに背後に遠ざかって見えなくなっていて、周りには草原と言うにはほんの少し寂しい景色が広がっている。

　うちの近くよりも草の量が少なく、その代わりであるかのように岩がゴロゴロと転がっていた。馬車を降りるわけにもいかないので詳しく見ることは出来ないが、植生が違っているようだ。

　もし色々落ち着いたら、この辺りをのんびり訪れてみるのも良いかも知れないな。……次来たときにも快く入国させてくれたらだが。

　やがて日が落ちてきそうになったので、野営の準備を始める。水は途中で空樽に汲んであるので、火を

　飯は携行食の干し肉と豆を煮ただけの簡単なスープだが、休憩時みたいにそのまま

　夜半、ユサユサと揺られて目を覚ます。

「交代です。」

「わかりました。」

　御者さんだ。彼は明日も馬車を操作しないといけないため、最初の見張りに立ってもらって、その後は朝までゆっくり寝てもらうのだ。

「お茶をいれておきました。」

「ああ、すみません、ありがとうございます。それではおやすみなさい。」

「ありがとうございます。おやすみなさい。」

　毛布をひっかぶったまま、短槍を持って辺りを見回す。焚き火のせいで夜目は利きにくいが真円を描く満月が出ていて辺りを静かに照らしている。

　月は森の中だと見えにくいし、遠征中は夜になったらさっさと天幕に戻っていたので、こうやってハッキリと見るのはこちらに来てからははじめてだ。

　クレーターもなく青く輝いているのが、違う世界ということを否応なく認識させられはするが綺麗なことには変わりない。

　インストールの知識によれば、こっちの月は太陽の光を反射して輝いているの

　太陽も太陽神の祝福であるそうなので、前の世界の知識では通用しない部分ということになる。

　この世界の”常識”では太陽も月も神様が祝福の気持ちをぶん投げてる、と言う豪快な神話に基づいての太陽と月の出入りになっている。

　四季があるのは、のんびり屋の太陽神は春から夏にかけて祝福の気持ちが高まり、そこから冬に向けて流石に疲れて祝福の気持ちをためるフェーズと言うわけだ。

　月の満ち欠けも理由としては同じになる。短気な月の女神はおおよそ一月で祝福の気持ちがサイクルする、ということらしい。

　そんな短気な月の女神の祝福の光を浴びながら、時折焚き火に薪を追加して静かな平野を眺める。時折、何かの獣の声が聞こえて肝が冷えるが、その声がこちらに近づいてくる気配はない。

　そうやって見張りにしてはのんびりと夜を過ごしていった。

## 街に到着

2019年4月1日

　適当な時間になったので、焚き火で湯を沸かして茶をいれてカミロを起こす。

「交代だぞ。」

「おう。」

　カミロは寝入っているところを起こされた割にはスパッと目を覚ます。

「寝起きが良いな。」

「長いこと行商やってると、サッと寝付いてサッと起きるのが身につくからな。」

「なるほど。」

　こうやって見張りしたりなんかも１回や２回ではないのだろう。経験がものを言うとはこのことだ。

「茶だ。」

　いれておいた茶をカミロに差し出す。

「おう、すまんな。おやすみ。」

「ありがとう、おやすみ。」

　カミロに挨拶をして僅かな眠りをもらうべく、毛布に包まって横になった。

　翌朝、起こされる前に目を覚ます。御者さんもカミロも、もう起きていた。カミロの方は見張りに立ってそのままなだけだが。

「おう、起きたか。おはよう。」

「おはようございます。」

　２人から挨拶されたので、俺も「おはよう」と返した。

「お前に教えてもらった板バネの仕組み、アレのおかげで今日には街につけそうだ。」

「そのための仕組みだからな。」

　出発の準備を進めながらカミロと会話を交わす。御者さんも「速度の割には辛さが少ない」と言っていた。

　やはり文明の針を若干進めてしまった感じは否めないところだな。これで色々な

　機構的には複雑でもないので、前の世界のダ・ヴィンチのような、文明にブレイクスルーを与える人間がどの段階で出るかという話なだけではある。

　出発の準備が整ったので、全員で乗り込んで街道を行く。前日と同じく、他に人（や馬車）がいない間は飛ばして、そうでないところではやや速度を落とす。

　少し遠くには時折大きな岩山が見える。カミロに聞いてみると帝国は王国よりも鉱山が多いらしい。もしかしたらリケは帝国から来たのかも知れないな。

　全体としてはやや荒涼とした景色が続く。草が延びている部分もあるから、耕作に適さないということではないのだろうが、ここらには人が住んでいないように見える。

　王国もだだっ広い草原が広がっているが街や都の近くの耕作地で事足りるようで、あまり遠くまでは広がってないし、似たような状況と考えればおかしくもないのだが。

　途中で馬を休ませるために休憩をとる。汲んだ水で顔を洗いながらカミロが言う。

「速いのは良いが、それだけ馬が疲れやすいと言うことはあるな。」

「馬も限界はあるからな。」

「飯だけ食わせてたら疲れ知らずで走る馬とかいれば良いんだが。」

「そんなのいたら行商人が使いまくるだろ。」

「当たり前だ。」

　この世界だと走竜が比較的それに近いのだが、魔力の供給という側面は一般には知られていない。

　知っているのはエルフ達くらいで、後はおそらくは王宮の一部の人間たちだけ、とかのようである。少なくとも伯爵家令嬢まで降りてくる話でないことは確かだ。どのみち知ったところで魔力の安定供給を可能にしないと意味がない。

　魔力の供給が安定してできるような道具か、あるいは蒸気機関から始まる内燃機関の発達があればカミロの思い描く理想はやってくるのだが、少なくとも俺はそれに自分から関わる気はまったくない。

　前の世界の歴史から言えば、その端緒くらいは俺が生きている間に見られるかも知れないが、発展までを見ることは不可能だろうな。

　休憩を終えて、街道をひた走る。もう後２時間ほどで日が沈むかも知れないといった頃、にわかに道に荷馬車が増えてきた。

「そろそろか。」

　俺はカミロに声を掛ける。

「そうだな。あそこに見えるのがそうだ。」

　カミロの指差す方を見てみると、壁に囲まれた街が見えた。

　あそこにヘレンが囚われているのか。俺は思わず荷台の縁をギュッと握りしめていた。

## 潜入

2019年4月3日

　並ぶ荷馬車の列の最後尾に俺たちも並ぶ。少しずつ前に進んでいるが、その分後ろにも次々と荷馬車がやってきて、列全体の長さは一向に縮まらない。待っている荷馬車の間を物売りの少年少女が食べ物や花を持ってウロウロしている。

「坊や、そいつをくれないか。」

　俺はその中の帽子を被った１人に声をかけた。銅貨５枚を渡して、ミカンみたいな見た目の果物を３つ受け取る。

　カミロに聞いたところでは、こういう子達が売っているものの相場は銅貨１枚だ。つまり２枚は余分に渡したことになる。

「毎度あり。」

　子供は頭を下げ、俺は手をひらひら振った。

「でも、あたい女の子だからね。」

　ギョッとして見てみると、その子は帽子を脱いだ。確かに髪が短いだけでクリクリした目の可愛らしい女の子だ。

「悪かったよ。」

　俺は苦笑しながら懐からもう１枚銅貨を取り出すと、女の子に放り投げてやった。

「ありがとう、旦那。」

　それを帽子で受け取ると、女の子は帽子を被り直して他の荷馬車のところへ行った。

　買ったミカンみたいな果物を御者さんとカミロに渡す。果物はオレンジに味が近くて酸味が多かったが、そう言うものと思えば十分に美味かった。

　チラッとカミロの方を見ると、カミロは一瞬呆れた顔をしたがそっと頷く。これで見つけたら仕入れておいてくれるだろう。

　やがて街の門のところに辿り着く。短槍を持って鎧を着込んだ門衛が近づくと、カミロは行商の許可証を取り出して門衛に提示する。

「お前は？」

「この旦那についてきた鍛冶屋でさあ。この方の売り物も作るんで。」

　聞いてきたので答えると、ジロリと俺の風貌を見やる。まぁ、どう見たところで３０歳（中身は４０過ぎだが）のオッさんの風貌である。

「通れ。」

　何秒か俺の顔を伺っていたが、門衛は手で通過を促す。俺たち３人は会釈をして通り過ぎた。

「まずは第１関門突破ってところか。」

　あまり大きくない声でカミロに話しかける。

「入っちまえば、もうほとんどこっちのもんだけどな。」

　言われて外壁と門を見やる。街の中でも衛兵はいるのだろうが、確かにこの大きさの街では人が１人や２人こっそり動いていたところで見咎められて窮地に陥ることはまずあるまい。ましてや行商人とそれについてきただけの人間である。

　さっきの衛兵にしろ、ヘレンと関係がある（と推測できる）王国の行商人がやってきたにも関わらず、大したチェックもなしに通したということは想定通り何の通達も来てないのだろう。

　もちろん警戒していることを悟られないための演技である可能性も捨てることは出来ないが、それが出来るようなのに当たってしまったとしたら俺が不運なだけだ。

「情報収集には早めに取り掛かりたいところだな。」

　俺は今後の話を軽くカミロに振ってみる。

「一番いいのは今日なんだよな。商売するのにあれこれ聞いてる、って言い訳をしやすい。」

「明日以降は？」

「その裏付けをして終わったら実行だな。今日で目星はつくと思うぞ。向こうさんも急だっただろうし、隠蔽も完全ではないだろ。ま、とりあえず宿に落ち着こう。」

「わかった。」

　俺は街の様子を荷馬車の上から眺める。あらゆる種族がウロウロしていて活気に満ちている。

　ここは商業都市だから色々な土地から様々な人が集まっていてこの活気なのだろうが、普通の街や村の様子はどうなんだろうな。もっと空気が沈んでいたりするものだろうか。

　ひとまず集中すべきはヘレンの救出なのは間違いない。俺が役に立つのは最後のほうになるだろうが、そこまででも気を抜くわけにいかないからな。気を引き締めよう。

　そんな小さな決意を秘めた俺を乗せて、荷馬車は街の中心部へと向かっていった。

## 潜入１日目

2019年4月5日

　街の喧騒の中をゆっくりと進んでいって、やがて目的地である宿屋に辿り着いた。

　そこそこの大きさでなかなか立派な店構えのところだ。

　カミロは宿の人間に１週間ほどの逗留であることを告げ、３人分の部屋を確保した。今回は御者さんも一緒に泊まる。

　この御者さん、もちろんただの御者なだけではなく、情報収集もするらしい。馬車の荷物は宿の人間に別途料金を払って見張って貰う形だ。

　逗留するのに必要な荷物を部屋に運び込み、一旦カミロの部屋に全員で集まった。

　俺はカミロに話しかける。

「結構立派なところにしたんだな。」

「ある程度しっかりしたところでないと、ナメられて大した情報が集まらないからな。」

「なるほど。」

「それに今後の情報収集にも関わってくる。」

「と言うと？」

「倉庫の情報を探すんだから、儲かってるふうを装わないといけない。で、俺とエイゾウは自由市に出て商売をする。本当の目的が何かは言うまでもないよな？」

　俺は頷いた。

「”ここに店を出そうと思っているんだが、倉庫を知らないか？”ってことだろ。」

「そう言うこと。」

　この街の何処かに今もヘレンが囚われていると思うと、一刻も早く助けてやりたいと気が逸るが、こればっかりはどうしようもない。

　御者さん――フランツさんと言うらしい――が口を開く。

「私は？」

「君は我々が自由市に出ている間の情報収集だな。大きい割に荷物の出入りが少ないところを探って欲しい。」

　カミロが返すとフランツさんは「分かりました」と頷く。

「とりあえずは明日様子を探るとしよう。」

　カミロの言葉に俺とフランツさんはもう一度頷いて、この日を終えた。

　翌朝、馬車を自由市まで持っていく。勿論フランツさんの操作である。商業都市だけあって、ここの自由市はかなり大きい。

　中にはほとんどここで固定した商店を構えている商人もいるらしいことを考えれば、大きさの程もわかろうというものだ。

　ルール的なものはほとんど俺が行っているあの街の自由市と変わらない。広さに応じた場所代を払って、売り場の台がないやつは借りて空いてるところで商売だ。

　今回俺たちはそこそこの広さのところに陣取る。本気で商売をするつもりでもないので端の方の位置だ。俺が簡易の炉を使うしな。

　カミロが前に立ってナイフやらを並べて商売開始だ。時々切れ味を客にアピールしたりしている。

　その後ろで俺が炉に火を入れて使えるように準備していると、１人の男がやってきて、腰の剣をカミロに差し出す。

「こいつは直せるか？」

　言われたカミロは俺の方を振り返った。俺は立ち上がって差し出された剣を抜く。

　綺麗だが辛うじて鞘に収まっている感じで、歪みも出ているし、刃こぼれもひどい。材質は……チートの感覚によれば鋼だ。なら余裕だな。

「直せますよ。」

「どれくらいかかる？」

「１時間ほどですかね。刀身は研ぎますけど、いいですね？」

「ああ、もちろんだ。」

「じゃあ、お預かりします。」

「頼んだ。」

　男はひらりと身を翻すと、立ち去っていく。

「まさか、ちゃんと鍛冶屋の仕事をすることになるとはね。」

「これで評判が上がったらこっちに引っ越すか？」

「馬鹿言うなよ。」

　俺とカミロは笑い合い、俺は剣を金床に置いた。さて、一仕事しますかね。

## 剣の修理

2019年4月8日

　預かり物の剣の修理をする。歪みも刃こぼれも加熱まではいらなさそうだ。

　完全に鞘に収まらないほどの歪みだと一旦加熱して焼入れやらをしないといけないところだったが、そこまでではない。

　よほど大事な剣でもない限りはそうなる前に買い換えるなりするだろうから、当たり前と言われたらそうなのだが。

　刀身を鎚で叩いて歪みを取る。辺りに大きめの音が響くが、遠くでも何かものを作っているのだろう、結構大きな音がしているので俺も遠慮なく全力を出している。

　この時に集中していて気がついたが、やはりこう言う場所にはあまり魔力がないらしい。歪みは直せるが魔力が籠もっていかない。

　もとの剣の性能を大幅に上回らせる気もないので、高級モデルを作る感覚で修理していけば並程度には直せるとは思うが。

　刀身を叩き続けていると、やがて真っ直ぐに戻すことが出来た。あとは研いで終いだな。

　少しだけ集中して、刃こぼれがなくなるようにだけ研いでいく。やがて、新品と見間違えることは流石にないものの、そこそこ使い込んだくらいまでに戻った剣がそこにあった。

「よし、こんなもんか。」

「お、できたか。」

「ああ。」

　俺は綺麗に刀身を拭った剣をカミロに見せる。

「修理もお手のものか。流石だな。」

「そりゃ直せなきゃ鍛冶屋とは言えないだろ？」

「それはそうか。」

「そういや値段の話をしてなかったな。」

　俺はふと思い出した。パッと受けはしたものの、いくらもらうかは決めていない。そもそもあの男もいくらになるのかは聞かなかった。

「こう言うのはだいたい相場が決まってるからな。」

「そうなのか？」

「ああ。この街の規模だと銅貨5枚から銀貨1枚てとこだな。」

　最高値で銀貨1枚と言うとウチの商品だと通常モデルの卸値くらいか。

　もちろん卸値なのでカミロが売るときはそれに経費と儲けが乗っかってくる。であれば新品を買うよりは安くつくから修理にと言うのはおかしい話でもない。

「じゃあ、これは？」

　俺は今直したばかりの剣を指さした。

　銅貨5枚だとほとんど俺の人件費だが、１時間で修理を回していけば場所代も稼げる。１人が食っていくにはなんとかなる値段だ。

「銀貨１枚だろ、そりゃ。」

　カミロはこともなげに言った。

「そうなのか。」

「そりゃ新品同様とは言わないまでも、ほとんどそれに近いところまで直してるんだ。文句あるならここにある新しいのを１本渡して俺が引き取るよ。」

　当然だろう、と言わんばかりのカミロの口調に俺は一度頷くだけにしておいた。

　そのあといくらもしないうちに、俺に修理を依頼した男が戻って来た。

「どうだ？」

「ああ、終わってますよ。」

　俺は修理を終えた剣を鞘ごと渡す。男は剣を抜き放つと、修理の具合を見ている。

「どうです？」

　男に声を掛ける。文句が言えない程度には直したが、こいつが厄介な”お客様”なら何らかのケチをつけてくる可能性はある。

　俺は少し身構えた。しかし、その準備は無駄になった。男はあっさりと

「良いじゃないか。銀貨１枚でいいか？」

　と返してきたのだ。

「へい。大丈夫です。」

　俺は驚きを表に出さないように努めて冷静に返事を返した。男は懐から銀貨を１枚取り出し、俺に渡すと軽い足取りで立ち去っていった。

　その後、俺は手持ち無沙汰になってしまう。魔力が篭められないとなると新しいものを作る意欲も余り沸かない。

　一応はうちから持ってきた板金がそれなりにあって、そっちには魔力が籠もっているのでそれを使えば多少は融通がきくのだが、あれはここぞという時に残しておかないと八方塞がりになりかねない。

　ここの売り物も俺の製品だからそっちを流用する手もなくはないのだが、それも避けたいからな。

　かと言って性能的に頭打ちが分かっているものを量産するのもなぁ……と言ったあたりで結局の所、俺が出来ることといったらさしあたっては修理くらいなものなのだった。

　一方のカミロと言えば、売上もそれなりに立てており、情報収集も欠かしていない。商品をまとめて買っていこうとしている、おそらくは同じ行商人であろう男に

「今度こっちで店を開こうと思っているんだが、いいところを知らないか？あまり荷物の出入りがなくて広い所が良いんだが。」

　などと声をかけている。相手も根無し草の行商人なので、大抵は知らなかったが、時折どこそこの倉庫が空いてるらしいと言ったことを教えてくれる者もいた。

　その何処かにヘレンが囚えられている可能性があるというわけだ。

　そしてこのままこの日の営業を終える。さあ、今度は裏取りの時間だ。

## 夜の情報収集

2019年4月10日

　その日の晩飯は宿でなく酒場でとる。情報収集とその裏取りのためだ。

　情報収集をするためなら派手な方がいいが、目立ちすぎると今度はその目的の裏を探られかねない。

　一応カバーとしてこの街で商売を始めたいとはしているが、実際にはそうしないので、どうしてもどこかには綻びがでる。

　だからそれがバレない間にカタをつけておさらばする。可能なら何かの混乱に乗じて逃げられるのがベストなのだが、そこまで狙う時間があるかどうかは微妙なところだな。

　なので情報収集も「この街は商売するには良さそうだ」だとか「そのためには倉庫が必要だが新しく建てるのは無理だから借りなければ」とかそんなことを匂わせるだけだ。

　それで集まる情報は大したものではない。だがそれを精査すれば必要な情報からまた１つ消すことができる。

　そんな風に情報を集めながら飯を食って(酒はほどほどにした)、俺たちは宿へ戻った。

「さて、今日集めた情報だが。」

「どうだった？」

　カミロの部屋に男３人で集まって話を始める。

　俺はそっちには疎いから、基本的に精査するのはカミロとフランツさんの仕事にはなる。

「６つほど該当するところがありましたが、３つはシロですね。１つ確度が高そうなところはありましたが、決め手になるものはないですね。他の２つは疑いありではありますが、さっきの１つほど確度が高そうというわけでもありません。」

　フランツさんの報告を聞いて、俺は口を挟んだ。

「じゃあ、その１つを当たってみるのか？」

「それはちょっと時期尚早だな。」

　俺の言葉にカミロが返す。

「もう少し確認が取れないと、忍び込んでも普通の賊と変わらん事になりかねない。」

「ふむ……」

　それも確かにそうか。乗り込んでもヘレンがいなければ、普通に盗みに入った盗人でしかない。

　それだけならいいが、わざわざ荷物の少ないところに忍び込んだ賊をヘレンを囚えている連中がどう思うかわかったものではない。

　ここは慎重に行くべき、と言うカミロのほうが正しそうだ。

「わかった。なら俺はもう少しただの鍛冶屋をしておこう。」

「頼んだぞ。まぁ、革命の準備次第ではそうも言ってられんがな。」

「そうなのか？」

「もし始まったら、可能性の高そうな方から押し入る。どうせ混乱してるんだ、誰が入ったかなんてわかりゃしないし、何よりなにが起こるかわかったもんじゃないからな。」

「なるほどね。」

「とりあえず明日は絞り込みつつ、確度の高いところへのアプローチを考えることになります。」

　フランツさんが話を引き取ってこの日は解散となった。

　翌日、この街に来て２日目も似たようなものである。昨日修理を依頼してきた男が宣伝でもしてくれたのか、剣の修理の持ち込みがちょいちょいあったくらいだ。

　いずれも銀貨１枚での修理なのでそれなりの売上になっている。好評なのはありがたいのだが、今回の目的はこれじゃないので複雑な気分だ。

　この日も酒場で夕食をとって宿屋で確認をする。

「やっぱり確度の高い１件がクサいですね。人の出入りも殆どないのはそこだけです。他２件は荷物の出入りはともかく人の出入りは割とありましたし。」

「ふむ……」

　フランツさんの報告にカミロが頭をひねる。いつ誰が（無論契約した人ではあるのだが）来るかわからないようなところに秘密を隠しておけるはずもない。

　しばらく考え込んだカミロが口を開いた。

「よし、それじゃあ明日は可能なら中の様子を探ろう。確定したらいよいよ救出を開始だ。」

　いよいよか。その時が来たら全力を出してやる。そう思いながら俺はヘレンの今しばらくの無事を祈るのだった。

## 作戦開始

2019年4月12日

　翌日、俺たちは自由市での出店をやめて街へ出た。

　カミロが言うには「２日商売して１日他のことをするのは別に怪しむようなことでもない」らしいので、その辺りは大丈夫だろう。

　今日はいよいよ怪しい一箇所に探りを入れる日である。今の時間は朝を少し回ったくらいだ。

　馬車も宿屋に預け、３人で街路を行く。初日に来たときにも思ったが、王国と変わらずここも様々な人種がいる。

　獣人もいれば、マリートもドワーフもいる。エルフは生活に必須な魔力が足りないのでここでも見かけない。

　王国の街と少し様相が違うのは巨人族が目立つところだろうか。

「”向こう”と違って巨人族が多いな。」

　俺はカミロに聞いてみた。

「ああ、巨人族は元々帝国に住んでた種族だからな。長距離を移動するには不都合も多いし、大半が帝国にいるのさ。」

「なるほど。」

　巨人族のところに人間が来たのかそれともその逆かは分からないが、例の４００年前の大戦争の時に手を組んでからは仲良く（？）暮らしていると言うことなのだろう。

　よくよく屋台の様子を見れば、人間達の値段の他に巨人族向けの値段が書いてある。

　体の大きさに見合って補給物資がより多く必要なのだとしたら、遠征には不向きと言うのは分からないではないな。

「彼らが”あれ”に参加する可能性は？」

「そりゃ大いにあるさ。彼らも帝国の一員だ。扱いは人間たちとそう変わらないんだし。」

「そうなったら大混乱だな。」

「戦力としては大きいからなあ……」

　巨人族の体に見合った大きさの武器なら、それが振るわれただけでも十分脅威であることは言うまでもない。

　もし彼らが革命に参加すれば、ほとんど攻城兵器と変わらない脅威だろう。その時の防御側の恐怖たるや察して余りある。

　逆に言えばその場合の混乱も大きいだろうから、救助のときに発生していたら乗じれば脱出が楽そうだ。

「例の場所はこの先ですね。」

　フランツさんが足を止めた。街の少し外れだが、外周と言う程でもないような場所である。

「思ったより中心に近いな。」

　俺が言うとカミロが答える。

「そりゃ外周だと運んで行くのに目立つからな。そのうち移送したりするなら少しだけ外れの、さっと人混みに紛れられるような場所がいいんだよ。」

「俺たちにも都合はいいな。」

「だな。」

　少し奥まっていて入り口はよく見えない。だが余り覗き込んだりすると完全に怪しいし、顔を覚えられるのも不都合がある。

　俺たちは裏手に当たるところに向かって歩いていった。

　目的の場所の真裏には別の倉庫が建っている。間は空いているようだが、直接目的の場所の裏には侵入できそうにない。

　道の両端には石造りの倉庫が立ち並んでいて、あたかももう１つの防壁をなしているかのようだ。

　俺たちの他にも数人が道を行き交っているので、俺たちはそれに紛れて前を通り過ぎた。

「中が見えないのは当たり前としても厳しいな。」

　かなり行き過ぎてから、カミロがそうこぼす。

「倉庫だからなぁ。どこかから様子だけでも伺えればいいんだが。下水とかはないのか？」

「あるにはあるんですが、倉庫の下を通す理由がないですからねえ……」

　俺の疑問にはフランツさんが答えた。となると、もし居たとして下水道から逃げる手段は使えないということになる。

　人を囚えておくのに逃走経路を用意する必要もないしな。

「どうしたものかな。」

　カミロが歩きながら考え込む。

「１つ俺に考えがある。」

　その様子を見て、俺はカミロに声をかけた。

## 決行前夜

2019年4月15日

「隣の倉庫から忍びこむのはどうだ。」

「どうやって？」

「こいつでさ。」

　俺は懐のナイフをカミロに見せた。

「んん？」

「隣の倉庫から倉庫の壁をこいつで切り抜いて、そこから侵入する。」

　壁の厚さにもよるとは思うが、１０cmほどの刃渡りであれば余程の厚さの壁でもなければ切り抜けはすると思う。

「なるほどな……」

「問題は勿論、元には戻せないことだ。」

「そうなると逃げるときにちょっと厄介だな。」

　ヘレンがいなくなったことはすぐにでも気がつくだろう。そこに穴が空いていたらどこから逃げたかは一目瞭然だ。

　音が全くしないわけでもないから、ある程度はバレることを想定する必要もある。

　そのときに誰が周囲の倉庫を借りたのかはちょっと調べればすぐ分かる話だ。

　カミロが考え込んだあと口を開く。

「混乱時には正面から押し通るとして、他所から忍び込むのは何かで時間が稼げそうでなければ厳しいかもしれない。」

「かと言って他に方法も無いですしね。」

　それにはフランツさんが答える。

　俺はカミロに聞いた。

「ヘレンが囚われているのが秘密ってとこは、俺たちにとって有利か。」

「そうだな。連れ出してしまえばそれで片がつく可能性もある。あんまりおおっぴらに人を出せないのは、こう言う場合には不利だ。ただ……」

「ただ？」

「少数精鋭で来られる可能性も高いってことだ。」

「そうなると面倒だな。」

「ああ。でもそのためのお前だろ？」

「それはまぁそうだが。」

　カミロの言葉に俺は肩をすくめた。

「で、いつやるんだ？」

「例のあれを待ちたいところだが、余り時間が遅いと移送なりされかねない。遅くとも明後日までだな。」

「そこまでは？」

「俺たちはいつもどおりに過ごす……フリをしつつ、あの倉庫の様子見だ。そこはフランツに任せるが。」

　カミロの言葉にフランツが力強く頷いた。動きがあればフランツさんがすっ飛んで来ることになっている。

　そのときに請けている修理やらをどうするかは、その場で考えるしかないな。

　仮の仕事とは言え、あまり適当で切り上げたくもないが出来ない場合はしかたがない。そこまでで切り上げてお代は不要と言うことも考えなくてはいけないな。

　その後は３人で市場を回って仕入れをする事になった。色んな店を回って、街で見ないようなものを買っていく。

　カモフラージュと言うこともあるが、帝国内で身動きがしにくくなる可能性は結構あるし、今のうちに帝国でないと値が高いものなんかを仕入れておこうと言う腹だ。ちゃっかりしてるな。

「ああ、そうだ。」

　カミロが思い出したかのように俺に声をかけてくる。

「こいつを今のうちに渡して置こう。」

　懐から取り出したのは１枚の木札だ。俺は受け取ってその表面を眺めた。

「通行証？」

　木札には通行証の文字と、ジミーなる人物が王国出身で戻る権利があることが書かれている。

「ああ。万が一の場合はそいつでお前だけでも逃げろ。いいな。」

「しかし……」

　俺はここにヘレンを奪い返しに来たのだ。それに帰るときはカミロとフランツさんも合わせて４人一緒だと思っていた。

　最悪の場合もあるのだろうが、それでもなんとかこのメンツで帰還を果たしたい。俺はそう言おうとした。

「いいな？」

　しかし、珍しく有無を言わせないカミロの気迫に、俺は素直に頷くしかなかった。

## 始まる

2019年4月17日

翌日、仮の荷物置き場という名目で目標の裏側にある倉庫を１週間で借りることにした。

手続きはフランツさんが行う。勿論偽名だ。

フランツさんはそのまま倉庫で作業をすると言う体で目標を見張る。

俺たちは一昨日までの通り、自由市で出店している。営業も通常のままだ。

先だっての２日間でそこそこの評価を得たのか、修理の持ち込みがそこそこある。

「昨日は居なかったから、どうしようかと思ったよ。今日は居てくれてよかった。」

そんな事を言ってくれるお客さんもいる。鍛冶屋としては嬉しいが、今とその後の状況を考えると複雑ではある。

カミロもなかなかの売れ行きのようだが、少し浮かない顔なのは俺と同じ心境なのだろうか。

「それにしても修理が多いな。」

俺は預かった剣を金床において叩きながらカミロに声をかける。

「そうだな。これだけ修理された剣が必要ってことは、もしかすると……」

カミロは返事を途中で濁す。武器が大量に必要で、あんまりおおっぴらに話せないことと言ったら、１つしか思いあたることはない。

「あれか。」

「ああ。」

革命の決行が近いと考えれば武器が大量に必要なのも納得はできる。

この街は商業都市ではあるが、逆に言えばカネや物が大量に集積されているところでもある。

そこをおさえれば補給が有利になるだろうし、逆に言えば帝国側の補給を厳しくしやすいということでもある。

おさえるのも帝国の補給を止めるだけなら、何も完全に制圧する必要もない。混乱を起こして機能不全に陥らせればいいのだ。

ただし、そうは言ってもなかなか広い街だから、一定の人数はいるだろう。

修理を依頼してくる人間に共通点はないようだが、それもいろんな立場の人間が必要としているとすると納得ができる。

いろんな立場の人間が一斉に必要になるということは、今の状態の俺では原因は１つしか考えられない。

「ちょっと気をつけたほうが良さそうだな。」

「そうだな。」

そう言葉を交わし、俺とカミロは自分の仕事に戻った。

結局営業時間中にフランツさんが駆け込んでくるようなことはなかった。

その日の夜、翌日の夜には押し入ってでも決行すると言う話を３人でして俺は自分の部屋に戻った。

そうして眠りこけていると、部屋の扉がドンドンドン！と強く叩かれ、俺は飛び起きる。

「誰だ！」

「俺だよ！」

誰何の声に答えたのはカミロだ。俺は慌てて扉を開ける。

「どうした？」

「聞こえないか？始まったんだよ！」

寝ぼけていたのと動転していて気が付かなかったが、耳を澄ませればカンカンと鐘の音が鳴り響いている。

そうか、始まったのか。俺は急いで外に出る準備を済ませ、３人で宿の外へと飛び出した。

## 決起

2019年4月19日

　外に出てみると、辺り一面が騒々しくなっている。

　夜だが当然街灯なんてものはなく、あちこちを人魂のように松明が行き来しているのが見えるだけだ。その周囲が明るい。

　俺はカミロに声をかけた。

「どうする？」

「正面から押し込むが、そこまで行けるかだな。」

　カミロが答える。あちこちに革命軍（？）がいてそこそこの明るさがあるし、晴れてもいるのでなんとか見えなくもない。

　しかし、昼間行ったようにスムーズにとはいかないだろう。一刻を争うときにそれはいかにも痛いようには思う。

「売り物の松明を持って、火をつけずに行けるところまで行こう。途中で革命の連中と出くわしたら、連中に加わるふりをして火を貰おう。」

　カミロがそう提案し、俺とフランツさんは頷いた。フランツさんは暗闇の中を素早く走っていく。

　真っ暗に近いのに随分と身のこなしが素早い。

「なあ、フランツさんって普通の御者さんじゃないだろ？」

　フランツさんが見えなくなって、俺はカミロに聞いてみた。

　ただの御者にしては色々と出来ることが多すぎる。色々出来る鍛冶屋が言うことではないかも知れないが。

「ああ……。まぁ、そう言うことだ。」

　カミロは詳細は濁したが、いずれ本職が御者でないことは違いない。

　色々出来る鍛冶屋と色々出来る御者、そしてあちこちに繋がりのある行商人。

　素性を知ればこれほど怪しい３人もなかなかいない。今この街の衛兵達はそれどころではないだろうが。

　フランツさんが戻ってきた。手には３本の松明を持っている。あの暗闇の中的確に物を探して持ってくるのは並大抵の腕前ではなさそうだ。

「よし、急ごう。」

　誰ともなくそう口にして、可能な限りの速度で宿屋から駆け出した。

　先導はフランツさんが行う。全く迷いのない歩みについていくだけで精一杯だ。

　やはり昼間に走るような速度は出せない。せいぜいが早歩きくらいまでだ。一刻も早く灯りを貰いたい。

「あと半分くらいです！」

　フランツさんがそう言ったとき、通りの角に灯りが差した。革命軍ならいいが、衛兵だと少し厄介ではある。

　俺が腰に提げておいたショートソードを抜くと、フランツさんは少し離れたところに位置する。

　はたして、角から出てきたのは革鎧を着て、抜身のロングソードを携えた２人の男であった。

　革鎧に紋章はない。衛兵なら前の世界の警官のバッジのように、自分を雇っている家なりこの街なりの紋章が入っている。

　それがないということは……。

「革命の同志か。」

　カミロが男たちに声を掛ける。その言葉で仲間であることはアピールしたが、男たちはまだ警戒を解かない。

「大丈夫だ、俺たちはさっき加わって、倉庫街の方に行く。済まないがその火を分けてくれ。」

　カミロが男たちの持っている松明を指差す。俺も敵対の意思がないことをアピールするためにショートソードを鞘に収める。

　すると、男たちは松明を傾けてこちらに向けてくれた。フランツさんがそこに松明を近づけて火を移す。

　男たちはまだ警戒をしながらもそこを去っていった。革命軍だったのか火事場泥棒だったのかはわからない。

　だが今はどうでもいいことだ。これで移動速度があがる、それだけが重要だ。

　灯りを得た俺たちの移動速度は上がる。先程までの早足くらいから、駆け足くらいだ。

　この速度の差のおかげか、昼間に行ったよりもやや遅いくらいの速度で倉庫に辿り着いた。

　倉庫の周りでは男たちが慌ただしく動いている。もうヘレンは移送されてしまっただろうか。

　それらを確認するためにも、俺は倉庫に踏み込まねばならない。

「押し通る！」

　松明が近づいて警戒する男たちに、俺は大声で叫んだ。

## 救出

2019年4月22日

　叫んだあと、俺は松明をすばやく持ち替えて鞘から剣を抜き放つ。それを見て逃げ出すやつもいるが、何割かは立ち向かってきた。

　俺は上段に振りかぶった剣を振り下ろす……と見せかけて松明を放り投げた。火の着いた松明が飛んでくるのだ、当然のごとく一瞬怯む。

　俺はそこを見逃さずに斬りかかる。元々腕前の差は相当あるようだったが、スキを作ったことで幾人かを容易に斬り伏せることが出来た。

　生き残りも手に持った武器で襲いかかっては来るが、俺はその全てを剣で払い、斬り捨てる。

　５人ほど倒したところでフランツさんが「あとは私にまかせてください」と加勢してくれたので、投げつけた松明を拾いつつ、開いた部分をめがけて走り込む。

　周りの混乱とすぐ前の戦闘の音で内部の人間は出払ったらしく、中はひっそりと静まり返っていた。

　戦闘のチートの感覚でも、俺に敵意を持つやつは誰も居なさそうではあるのだが、もし誰かが潜んでいたらマズい。

　もどかしい気持ちもあるが、そろりそろりと奥へ歩みを進める。

　本来は引火の危険を考えれば、松明などは持ち込めない場所である。炎が荷物に移ってしまわないようにするのにも苦労した。

　倉庫の一番奥に辿り着いたが、人らしき姿は見えない。だが、誰かがいる気配はする。

　俺は松明を振りかざして辺りをうかがった。辺りには荷物が入っているであろう箱がうず高く積み重ねられている。

　注意深く見てみると、その一角に隙間があるのが分かる。ちょうど人が通れるくらいだろうか。

　火が移らないよう、松明を下げてその隙間を通る。熱をモロに感じるが、そんなことは気にしていられない。

　隙間を抜けると、そこはちょっとした空間になっていた。屎尿の臭いはしないが、人の体臭のようなものは少しある。気配もそこにあるので、誰かがいることは間違いない。

　上には荷物がないので、松明をかざして様子をうかがうと、身じろぎする人影が見えた。俺は慌ててそこに駆け寄る。

　倒れ伏しているが、少し伸びた赤毛の髪に見覚えがある。脚には足かせがつけられていて、逃げられないようになっているようだ。

　身じろぎしたから生きてはいるのだろうが、積極的に何かをするような気持ちでは無いように見える。

「ヘレン。」

　俺は倒れている人影に声をかけた。人影はビクリとすると、ゆっくりと顔をこちらに向ける。

「エイゾウ……？」

　刀傷のある顔はすっかりやつれているが、それでもまだ愛嬌は残っていた。俺の知っている顔だ。

「ああ。俺だ。助けに来た。待ってろ、今足かせを壊してやるからな。」

「エイゾウ！」

　ヘレンは体を起こす。しかし、いつもの力強さがない。いつから囚われていたんだろう。囚えた連中に怒りが湧くが、まずはここから連れ出さないと。

　松明を床に置き、ヘレンに近づく。すると、ヘレンはがっしりと俺の体を掴んで離さない。

「お、おいヘレン。」

「エイゾウ、エイゾウ……」

　声を掛けるが、ヘレンはぎゅうっと腕を掴んでくる。

　ヘレンのここまでを考えると、俺はそれを無碍に振り払うこともできずにいた。

## 脱出

2019年4月24日

「もう大丈夫だ。安心しろ。」

　俺は落ち着かせるためにヘレンに話しかけ、そっと握った腕を外す。

　ゆっくりと屈み込んで、足かせを見る。流石に足かせそのものは壊せそうにないが、ついている鍵は簡単なものなので、俺のナイフでも壊せそうである。

「じっとしてるんだぞ。」

　再びヘレンに声をかけて、鍵にナイフを当てて力を込める。流石にスパッと切れるとまでは行かなかったが、細い部分を切ることが出来た。

　足かせは両足につけられている。もう片方も同じようにして切り落とした。

　ナイフを見ると少し刃こぼれが出来ている。ナイフで同じ鉄を切っても刃こぼれ程度で済むってことか……。我がことながら少しそら恐ろしいものがある。

　しかし、逆に考えれば細い鉄を２本切って刃こぼれが起きるということは、例えば俺の特注モデルを隠し持ってもおそらく鉄格子を切って抜け出すなどということは難しいだろう。

　ヘレンに打ってやったショートソードだとどうかは分からんが。

　そのショートソードも当たり前だが見当たらない。

　外ではまだフランツさんとカミロが俺たちの脱出を待っているし、探している時間はないな。あれがおそらくは帝国の手のものに流出するのは少し痛いが仕方ない。

　鍵の外れた足かせをヘレンから外し、松明を拾って俺はヘレンを肩で支えた。ヘレンは大人しく腕を俺の首に回してしがみついている。

「どうしても持っていかないとってものはあるか？」

　ヘレンに聞いてみると、か細い声で

「剣……」

　と答える。

「あれはまた打ってやるから今は諦めろ。」

　俺がそう言うと、ヘレンはコクリと頷く。そのままゆっくりと俺とヘレンは倉庫の外へと歩んでいった。

　倉庫の入口を入ったあたりに松明を持った人影が見える。カミロとフランツさんだ。

「２人とも無事か？」

　俺が声を掛けると、２人は頷いた。

「そっちも上手くいったようだな。」

「ああ。ここじゃなかったらどうしようかと思ったが、予想が当たっていて良かったよ。」

「よし、それじゃ行くか。」

　俺は松明を床に捨てると、ヘレンをいわゆるお姫様抱っこの方法で抱きかかえた。流石にファイヤーマンズキャリーは出来ないが、肩で支える方法だと時間がかかりすぎる。

　抗議してくるかと思ったが、意外にも俺にしがみついて大人しくしている。

「姫様を救った騎士様ってところだな。」

　カミロが軽口を叩く。

「騎士になるなら無事に連れて帰らなきゃいけないな。」

　俺も軽口で返した。緊張しっぱなしだった場が少しだけ弛緩する。

　だが、次の瞬間にはみんな気を引き締めて、外の闇へと走り出した。

　ここに来たときは比較的平穏だったこの辺りも騒々しさを増していて、怒号や悲鳴が聞こえてくる。人影もかなり増えていた。

　見れば遠くの方では火の手も上がっていて、かなりド派手にやっているようだ。

「どけどけ！」

　俺たちはその中を走り抜けていく。ヘレンを抱きかかえて走っているのが功を奏しているのか、俺たちに絡んで来る輩はいない。

　おそらくは怪我人を運搬していると思われているのだろう。あまり外れてもいないが。

　ヘレンは俺よりも体が大きい。その分体重もしっかりあるのだが、チートの恩恵で筋力が増している俺にはめちゃくちゃ重く感じると言うわけでもない。

　走っている間、様子をうかがったりしていたがずっと俯いたまま大人しくしている。

　流石に囚われていた間のことが

## 街から逃げ出す

2019年4月26日

　大通りに近づくと、そこは大混乱だった。

　何人かの人が松明を手に持ち、その明かりを頼りに一緒に移動してこの街を抜け出そうとしている流れと、それとは別にこの街を掌握すべく動き回る流れ、そしてそれに対抗しようとする流れが入り混じっている。

　ここでもカミロが「怪我人だ！どけどけ！」と大声を上げると、この混乱でも多少の理性は残っているようで、幾分通りやすくなった。

　人々の理性が空けてくれた僅かな間隙を縫って、俺たちは街路を走り抜ける。

　おそらくこの街の掌握は上手くいくだろう。初手で失敗するような計画はしていないだろう……と思いたい。

　であれば、落ち着いてしまう前に、この混乱に紛れて抜け出すのが一番だ。

　あと数時間は混乱が続くだろうが、それが過ぎ去ってしまえばこの街から出るのは難しくなる。

「俺たちの宿屋が燃えてないと良いが。」

　火の手がいくつか上がっているのを見て、走りながらも俺は２人に話しかける。

「多分大丈夫だろ。」

「ええ。この街を掌握して、街の人達の住居を差し押さえて駐留するのは体面的にも良くないですからね。一時的な駐留なら兵舎か宿屋になるはずです。」

　２人は答える。

「なるほど。使うはずのものを焼いてしまっては意味がない、ってことか。」

「そうなります。」

　フランツさんが引き取った。この街を掌握することにも大きな意味はあるが、それだけでは革命は終わらない。

　少なくとも皇帝を玉座から引きずり下ろすまでは続くのだ。それが３日で終わるのか１年かかるのかはともかく、そこまではこの街を保持し続けないといけない。

　場合によっては籠城戦に近いことにもなるだろう。

　だとしたらあれは帝国貴族の館なのか。１棟か２棟くらいは見せしめも含めて焼いて自分たちの大義を示すとか？

　貴族の館が広いと言っても１棟２棟に収容できる人数は知れているだろうし、比較的小さめのところなら大勢に影響はないと判断するならわからないことでもない。

　大混乱を逆流するようにして、俺たちはなんとか宿屋に辿り着いた。宿屋は無事そこに立っていて、こう言うときにありがちな略奪もまだ始まってはいない。

　馬車を置いているところに向かうと、来るときに見かけたデカい見張り番の人がデカい棍棒を手に律儀に立っていた。

「すまんがもう出るぞ！」

　カミロがそう大声で言うと、見張り番の人も

「分かってまさぁ！もう何人もお発ちになってやす！」

　と負けず劣らずの大声で返してきた。

　普通の馬車なら置いてサッサと流れに乗って街を出る選択肢もあったが、カミロの馬車は”特別製”だからな。

　ここに置いておくと後々の商売にも影響しかねない。

　来たときよりもかなり馬車の数が減っている中、俺たちの馬車を見つけてまず荷台にヘレンを載せる。

　荷台におろそうとしたとき、一瞬キュッと腕を掴んできたがすぐにその力は緩み、俺はそっと荷台におろした。

　その間にフランツさんが馬を連れてきて繋ぐと、俺とカミロも荷台に乗り込む。

　俺はヘレンを抱えて荷台の奥の目立たないところに横たえて毛布を被せてやった。

　心細そうにしているヘレンの手をそっと握ってやると、ギュッと力強い手応えが返ってくる。それを感じながら馬車が進み出した。

　まだまだ街路には混乱が続いているが、俺たち以外にも馬車が常歩くらいの速度で進んでいて、俺たちはその後ろにつく。

　俺とカミロは周囲を警戒をする。ほとんど片付けたが、顔は普通に見られているので追っ手がかかっていた場合のケアだ。

　この混乱ではろくなことは出来ないだろうが、それでも用心に越したことはない。

　警戒をしながら、徒歩で街を出ようとしている人たちの姿を見ると、全員が旅装している。

　つまり町の住民はほぼ家に籠もっていて、これだけの避難民はほぼ行商や旅行をしている流れ者というわけだ。

　一応、子連れなどが居たら乗せてやろうかとも思っていたが、水を吐き出す水道口のように人を吐き出し続けている――つまりはもう門番が仕事を出来ていない――門のところを俺たちが出るまで、見かけることはなかった。

## 逃走

2019年5月8日

　夜間に街から逃げ出したのは俺達だけではない。他にも大勢が街から出ていっている。

　出たあとは基本的には街道に沿って移動しているが、道幅がそんなにあるわけではない。片側を徒歩の人たちが、反対側を馬車が早足で街から遠ざかる。

　どちらも松明を灯していて、それが連なって光の道を作っている。前の世界の高速道路のようでもある。ゆらゆらと揺らめいているのが、不気味さよりも綺麗だなと思わせる。

　俺たちの馬車も隊列に紛れて光の街道を早足で進む。

　揺れが周りの馬車より少しだけ少ないが、そこまでの速度が出ているわけでもないので目立っている様子はない。

　もっとも、そんな細かいことを気にしている余裕のあるやつが、この街道上にいるのかはかなり怪しいが。

　ヘレンはずっと俺の手を握ったまま黙りこくっている。カミロが馬車に積んでいたカツラを取り出して俺に手渡した。

「ヘレン。」

「ん？なんだ、エイゾウ。」

　俺が声をかけると、少しやつれた顔をこちらに向けて返事をした。助けた直後よりは幾分顔色がマシになっている。

「こいつを頭に被せるぞ。あの様子だと知らせようにも時間がかかるだろうが、何事も用心だ。」

「うん。ありがとう。」

　ヘレンがか細い声で答える。俺はそっとヘレンから手を離して、カツラをヘレンに被せた。少し長めのブロンドだ。

　ヘレンの髪は短いから、もとの髪を押さえなくても綺麗に被せる事ができた。ちょいちょいと毛先を触って、顔の傷が隠れるようにする。顔の傷を気にして伸ばしていることにするのだ。

「これでよし。くすぐったいだろうが、我慢してくれな。」

「うん。」

　ヘレンは素直に頷いた。辺りはまだ暗いので早々バレるとも思えないが、明るくなる前に被っておけば、明るくなって顔を出したときに問題が起きない。

　片方の手で俺の手を掴み、もう片方で毛先をいじるヘレンと俺達を乗せて、馬車は街道をひた走っていった。

　やがて街道から徒歩の人々がいなくなった頃、空が白みを帯びてくる。結構な距離を進んだので、徒歩では馬車に追いつけていないのだ。

　あの人達もそれぞれ無事に逃げられていると良いんだが。

「一旦ここまでくれば、そうそう追いかけても来ないだろ。」

　カミロがそう言うと、フランツさんが馬車の速度を落とす。

「じゃあここらで休みましょう。馬にも良くないですし。」

　フランツさんの言葉に俺たちは頷いて、フランツさんは馬車を止めた。

　徐々に空が明るさを取り戻してきているが、男衆で野営の準備をする。しっかり寝るのは難しくても、少しでも体を休める必要はあるからな。

　もちろんヘレンには通しで休んでもらうことにする。毛布を敷く用と被る用の２枚使ってもらって、地面に横になってもらった。

「腹ごしらえの準備もしなくちゃだな。」

　焚き火に木で組んだトライポッドを設置して、鍋を吊るして湯を沸かし、適当に切った干し肉と豆を煮込む。

　いつ逃げるか分からなかったのもあって、馬車に水は常に積んでおいたのが功を奏したな。まだまだ潤沢にある。

　明るくなってくると炎自体は目立たないが、より高く登る煙が目立つようになるので、その意味ではあまり良くはない。

　しかし、煮込んで柔らかくしないとヘレンの体が受け付けるか怪しいからな。

　鍋の様子を見るついでに最初の見張りは俺が引き受けることにした。カミロとフランツさんも毛布を引っ被ってゴロリと横になる。やがてスヤスヤと寝息が聞こえてきた。

　明るいと遠くまで見通せるので獣の襲撃などには遭いにくいが、追手からはこっちも見やすいと言うことではある。

　馬車の荷台に立って見回した感じでは他に休憩している馬車はない。片っ端から当たるならここにも来る可能性はあるので用心はしておくべきか。

　荷台から降りて焚き火にかけた鍋の様子を見ながら、ヘレンを見ると穏やかな顔で寝入っていた。このところは満足に寝ることも出来なかったに違いない。

　これから先もしばらくどうなるかはわからない。今のうちにしっかり休んでくれよ、と思いながら、俺は鍋の中身をぐるりとかき混ぜた。

## 逃走中の休憩

2019年5月10日

　１時間ほどうつらうつらもしながら、時折鍋をかき回したり水を足したりしつつ、周囲に目を配る。

　朝日が上る中、街道は急ぎ足の馬車が街から離れる方だけに向かっている。街に向かう馬車は途中行き違う馬車から情報を仕入れたのだろうか、１台も見ない。

　逃げられる人々は一刻も早く帝国から脱出しようとするだろう。俺が男の子と間違ってしまったあの少女はどうしているだろうか。彼女たちがあの街から逃げる意味はあまりないかも知れないが、戦闘に巻き込まれたりだけはしていて欲しくないな。

　煮込んでいた肉と豆が柔らかくなってきたので、３人を起こして朝飯にする。

「飯はちゃんともらってたのか？」

「一応。ほとんど麦粥みたいなのだけだったけど。」

　俺がヘレンに聞いてみると、そんな答えが返ってきた。なので、ヘレンだけは一応肉の量を少なめ、豆を多めによそった。柔らかいから胃が受け付けないということは無いと思うが、びっくりさせるのも良くなさそうだし。

　味つけは干し肉の塩と出汁のみ、具も肉と豆なので（動物性と植物性の違いはあるにせよ）タンパク質オンリーと言う「栄養価？なにそれ？」と言うメニューではあるが、何かを腹に入れているのとそうでないのとでは気持ちもだいぶ違ってくるからな。

　俺も含めてみんな黙々と腹におさめていく。

　様子をうかがってみるとあの街から出て時間も経っているし、かなり元気を取り戻してきたようではあるが、ヘレンから事情を聞くのはまだ早いように思われた。せめて帝国を出てからのほうが良さそうだ。

　腹もくちくなったし、日もすっかり上ってきているので、鍋は片付けて火も落としてしまう。俺はフランツさんと見張りを交代して、カミロやヘレンと一緒に横になった。

　どれくらい寝ていただろうか、俺はふと目を覚ました。日の傾き加減で言えばまだ昼にはなっていなさそうだが、それなりには時間が経っているようだ。

「お、起きたか。」

「おう。」

　カミロが声をかけてきたので俺はそれに応える。と言うことは、少なくともフランツさんとカミロが見張りを交代するくらいの時間は経ったと言うことか。

　俺はうーんと伸びをした。かぶっていた毛布を馬車に放り込む。

「そろそろ出発するか。途中の町にはどのみち立ち寄れないだろうから、帝国を出るまでは野営になるし、途中も小休憩だけになるが。」

「最悪、街道から外れることも考える必要があるな。カミロはこの周辺の地理には詳しいのか？」

「街道の近くならなんとかな。地図も持ってはいる。」

「それならどうにかなるか。」

　地図があるのか。とは言っても国土地理院発行、みたいな精細なものではないだろう。この世界だとそんなものは完全に軍事機密だ。

　それでも今大体どのあたりにいて、どっちの方に行けばいいのかおおよそでも分かればいい。目的は帝国から出ることだからな。

　カミロはフランツさんを、俺はヘレンを起こして馬車に乗せる。俺とカミロで辺りを片付けて馬車に乗り込んだ。

　日も昇ってきて、街道には徒歩の避難民も増えてきた。その中を俺たちの馬車は比較的ゆっくりと街から離れる方向に進んでいくのだった。

## 帰り道

2019年5月13日

　岩山が遠くに見える、荒涼とした平原に引かれたクレヨンの線のような街道を馬車が行く。遠くには少しだけ雲が見えるが、今日もまだ天気は悪くない。

　街道はまだ避難民で埋め尽くされるという程ではないが、徒歩で避難する人々の数が目立つようになってきた。

　ヘレンはと言うと、何も言わずにぼうっと道行く人々を眺めていて、その片手は俺の服の裾を掴んだままである。

　いくらか落ち着いてきて顔色も良くなったとは言え、まだ救出されてから１日も経っていない。

　ヘレンに前もって救出を知らせることができたわけでもないから、感情が事態の急変に追いついていないんだろうと思うのでそのままにしてある。

「この先にもう１つ街があるんだったか。」

　今のこの状況では追手もそうそう派手なことはできないと思うが、周囲に目をやりながら俺はカミロに話しかける。

「そうだな。来るときに通り過ぎた街だ。」

「そっちからの馬車が見当たらないってことは……」

「俺たちが出てきた方は帝国の都に向かう方になるからな。当然その逆に向かうってわけだ。」

「元々する予定もないけど、その街での補給は無理か。」

「だな。そもそも入れなさそうだ。街道から少し離れてはいるから、混雑も多少はマシだと思いたいがな。」

「避難する人でごった返していると厄介だな。」

　身動きがとれない間に追手に接近されたりすると面倒だ。街周辺の状況次第では道を外れる事も考えたほうが良いか。

　カミロにその辺りを聞いてみると「そうしたほうが良いだろうな。」という答えが返ってきた。やっぱりそうか。

　太陽が中天を過ぎた頃、遠くの街道で人がごった返しているのが見え始めた。Ｔ字路の交差点のあたりに人が溜まっていて、時間が時間なのもあってか休憩している人々も見受けられる。

「どうする？」

「迂回しよう。ここで止まるのはあまり良くない。」

　俺が尋ねるとカミロはフランツさんに大きく回り込むよう声をかけた。

　整備された道から外れると揺れはひどくなる。だが、簡易とは言えサスペンションのおかげだろう、思ったよりはゴツゴツとした揺れはない。

「揺れ方で目立つかな。」

「多少はな。でもこの程度なら違和感程度で、ちゃんとした仕組みに気がつくやつはいないだろ。なるべく目撃されないようにはしたいが仕方ない。」

　カミロはそう言う。サスペンションは隠されているし、余程近づいて覗き込みでもしない限りはバレないとは思うが、揺れ方で目立ちすぎると追手にすれば特定が楽になる。

　しかしここで時間を取られるわけにもいかない。あの街の蜂起が最終的に成功したのかどうかは分からないのだ。

　出るときの街の様子だと成功したとは思うが、鎮圧されていたら早晩ヘレンが脱出したことには気がつくだろう。その時、混乱は逆に追手側にも利点を与えてしまう。

　馬を飛ばしていてもこの状況では誰も不審には思わないだろうしな。

　そうして街道と街を繋ぐ道の交差点を大きく迂回した。警戒はしたがこちらに注目している人は殆どいない。ほぼ全員が自分のことでいっぱいのようだ。

　こちらに目を向ける人々も殆どは単に馬車が通っているから目を向けたと言う感じで、鋭い視線や警戒しているような様子は伺えない。

　とは言え俺もプロの衛兵などではないので、それが正しいかはわからない。この分野でチートをもらっているかも不明だしな……。

　ひとまずその場をやり過ごせたことにホッとしながら、馬車は更に王国へと向かっていった。

## 関所へ

2019年5月15日

　ごった返す街道を避けてしばらく進むと、やがて人も馬車も減ってきた。

　ほぼすべての人が帝国から抜け出す方向に向かっている。極稀に逆方向へと――つまり帝国中央へと――向かう人や馬車も見かけるようになった。

　家族や大事な人をそちらに残してきたのだろうか。俺には理由を知る由も無いが、無事に目的を遂げて欲しいものである。

　他人のことはともかく、俺たちもまだ目的は完遂していない。

　フランツさんが交通量の減った街道に馬車を戻して、速度を上げた。これで今日行けるところまで行って野営をしたら、文字通り最後の関門が待っている。

　日が沈みかけてきたところで、再び街道から外れて野営の準備をする。ヘレンはもうかなり調子を取り戻してきていて、野営の準備もスイスイと手伝うまでになった。

　昨日の今日でこれなら大丈夫そうだが、何がきっかけで急に調子を悪くするかはわからない。本人の希望には任せるが様子は伺っておこう。

　夕食は積荷の材料を適当に放り込んでのスープと堅パンである。

　行商人らしくいくらか香辛料も積んでいたので、カミロに断って使わせてもらう。問題があれば今度の支払いのときにその分差し引いてくれ、とも言っておいた。カミロはゆっくりと首を横に振っていたが。

「誰も取らないんだから、ゆっくり食えよ。」

　がっつくように食べ始めたヘレンに、俺は苦笑しつつ声を掛ける。

「しっかりと、でも素早く食べるのが戦場の常だろ？」

　ヘレンはうちに居たときのような、朗らかな声で答えた。調子が戻ってきていることにグッと来たが堪えて言う。

「いや、ここは戦場じゃ……あるか。」

　まだ乗り越えるべきものがあるし、追手が俺たちに向かっていないとも限らないのだ。そう言う意味では気を抜いていい状態でもない。

　王国に戻っても、家に帰るまでは安心できないだろうし。俺もヘレンに

「明日の関所通過は俺たちとお前たちはバラバラにいくぞ。」

　みんなの腹が満たされてきたところで、カミロが俺に言ってきた。

「ん？なんでだ？」

「こう言う状況だと余計な人間が乗っているより、バラバラでそれぞれが身分証明したほうが早いからだよ。」

「避難民の疑いをもたれるからか。」

「そうだ。」

　どのみち俺の身分証は偽造のようなもんではあるが、この混乱で用意できるものではないから、怪しさは幾分少ないに違いない。

　それでも用意できそうな人間の馬車に乗っていて出してきた、よりは徒歩で来て自分で出したほうが更に安全だ、という事だろう。

「わかったよ。ヘレンもいいな？」

「うん。」

　腹がくちくなったら今度は眠気が来たらしい。ややぼやっとした感じでヘレンが答えた。

「今日はヘレンはずっと寝てな。見張りは俺たちがするから。」

「わかった。」

　ヘレンを寝かしつけると、俺たちは３人で見張りの分担を決めて、見張り以外は引っ被った毛布で眠りについた。

　その夜は特に何事も起きなかった。俺が見張っている間に、時折街道の方を松明が進んでいくのが見えたが、こちらに近づいてくる人影などは１つもなかった。こっちに構っている暇のある人は普通はいないということか。

　みんな起き出して馬車に乗り込み出発する。移動速度の差もあるのだろう、街道の人通りは昨日よりも更にまばらになっている。

　そこを俺たちの馬車が進んでいく。歩いている人を見ると一様に疲れた顔をしている。歩き通しだった人もいるのだろう。

　乗せてやりたいところではあるが、全員は乗せられないし、こちらも急ぎなのだ。すまないな、と心の中でだけ謝って、彼らの道中の加護を懐の女神像に祈っておく。

　人通りがまばらなので馬車はやや速度を上げ、昼前頃には関所の近くまでたどり着いた、とフランツさんが声を上げた。見てみようとしたが、まだ目には入ってこない。

「そろそろ降りたほうがいいな。」

　カミロが言って、俺は自分の荷物を、ヘレンは持ち出せたものがないので適当に食べ物なんかを詰めた

「じゃあ、また後でな。」

「ああ。」

　俺たちはカミロに手を振って別れた。

「それじゃ、行くか。」

「うん。」

　ヘレンに声を掛けると、少し後ろをついてくる。

　こう言う道を歩く、という感覚が少し懐かしい。街に行くにはクルルの竜車だし、討伐遠征やここに来るのは馬車だった。荷車を引いていたのが随分と前のような気になってくる。

「大丈夫か？」

「大丈夫だよ。もう平気。」

　それなりの期間、幽閉されていたのだろうし、もっと足が

「それを被ってるから平気だとは思うが、周囲には気をつけてくれ。」

「ああ、もちろん。」

　ヘレンはカツラを被った、いつもとは少し違う顔で笑って言った。俺たちの行く手に人々でごった返す関所が見えてくる。いよいよだ。

　関所を目にしたヘレンがそっと俺の服の裾を掴んで、俺はギュッと心の中で帯を締め直すのだった。

## 帰りはこわい

2019年5月17日

　関所に並ぶ人々の後ろに、俺とヘレンも並んだ。馬車も人も一緒くたにごちゃっと並ばされている。

　こう言うときには出国を完全に止めて全員追い返されてしまうものかと思っていたが、わずかずつだが列が進んでいるのでそうではないようだ。

　事態を把握していないのか、それとも何か別の目的があって止めていないのか、それは俺たちには分からない。

　だが、問答無用で追い返されないのなら都合がいいのも確かだ。追い返されるのであれば山越えも覚悟しないといけなかったが、そうでないなら助かる。

　俺たちの後ろにも次々と人がやってきて列をなしていく。前の世界の夏冬２回のお祭りと違って整然と並んでいるわけではなく、無秩序に４～６人くらいずつの横列で延びていっているだけだ。

　前の方を伺うと、少し先にカミロの馬車が見えた。フランツさんがじわじわと馬車を動かしている。向こうはこっちに目もくれない。

　関係があるのがバレると困るのもそうだが、単純にこの辺は徒歩の人がたまっていてどこにいるかよく分からんのもあるだろう。

　ヘレンはと言うとぴったり俺に張り付いている。ここまで来てヘレンに何かあったら苦労が水の泡だし、守るためにもそうしろと俺が言ったのだ。

　ここに来るまでの間、つまりまだ周りに人がほとんどいない間に俺とヘレンの”設定”について話をしておいた。

　王国に住んでいるジミーと言う職人のオッさんが帝国出身の嫁さんと知り合い結婚、今回帝国には嫁さんの実家の用事で戻ってきたが、済ませたので王国に戻るところである。

　実家は小さな村なので俺たちは何があったのかは具体的には知らないが、何かあったらしいことだけはこの状況を見て知った。

　一旦は王国に戻らないといけないので、早く戻りたいと言うシナリオである。

　その辺りを一通り話すと、ヘレンが驚いた顔で言った。

「アタイとエイゾウが夫婦？」

「こんなオッさんとじゃあ不満だろうが、まぁちょっと辛抱してくれ。ここを抜けるまでの話だ。」

「いや、それはいいんだけど……」

　じゃあ何なのだろう。

「エイゾウは……嫌じゃないのか……？」

「そんなわけあるか。」

「アタイ、体はデカいし、顔にも傷があるし。」

「別に良いんじゃないのか。嫌がるやつもいるんだろうけど、俺はそうじゃないってだけだ。」

　単に傷が目立つだけで、かわいい顔をしていると思う。身長が高いのもスラッとして純粋に綺麗な体つきしてるなぁと思うし。

　そこまで言うとヘレンの本気の拳を味わう可能性もあるから言わないでおくが。

「そっか……」

　俺の言葉を聞いて、ヘレンは俯いた。だから、俺はヘレンの顔が真っ赤なのも、その顔が少し嬉しそうなのも見ることはなかった。

　俺たちが列に並んでから、かなりの時間が過ぎた。少なくとも腹が減って荷物に入れていた干し肉を二人でガジガジ囓るくらいには過ぎている。

　その分、前にも進んではいるので気が紛れているが、これで進まなかったら暴動になりかねないな。

　後ろを振り返るとごった返す人々でいっぱいになっている。王国の都の大通りみたいだ。

　前を見ると関所の門が見え始めている。そこを見ると、王国側から帝国に入ろうとやってくる人々もいるにはいるのだが、この状況を見て大多数が引き返しているようだ。

　俺たちが来たときも出る方が混んではいたが、これほどではなかった。

　それでも帝国側に入る人がいる。多分もともと帝国に住んでいた人だろうな。

　更に時間がたち、カミロたちの馬車が手続きを受けている。

　彼の通行証は偉い人のお墨付きなので、荷物のチェックも通り一遍で済んでいるようだ。比較的速やかに門を抜けていく。フランツさんもカミロも振り返ることはなかった。

　俺たちが通り抜けられないかも、なんてことは微塵も考えていないだろう。その信頼が少しくすぐったい。

「次のもの！」

　そして俺たちの番がやってきた。ヘレンは俺の手をギュッと握る。完全に疲れ切った顔をした衛兵が俺とヘレンをじろりと見る。

　ヘレンの顔を注視していたら要注意ではあるが、今の所その様子もない。

　俺は懐から通行証を取り出して衛兵に渡した。受け取った衛兵が通行証を

「王国から来たんだな？」

「へい。左様でして。」

「そっちの女は？」

「あっしの

「随分と年が離れているようだな。」

　訝しげに眉をひそめる衛兵。俺はそっとヘレンの髪――カツラだが――を持ち上げて、傷を見せた。

「この顔じゃ貰い手がないってんで。あっしは可愛いと思ったんで嫁に貰ったんです。」

　俺がそう言うと、ヘレンが真っ赤な顔でバシンと俺の肩を叩いた。演技なのかどうかはわからないが、その様子を見てわずかに衛兵の顔が緩む。

「そうか。通行証もおかしいところはないし、行って良い。」

　衛兵が手振りで示す。俺は内心の興奮を押し殺し、

「ありがとうごぜぇやす。」

　と言ってヘレンの手を引き、門を抜けた。

## 王国への帰還

2019年5月20日

　あくまでも「後ろに迷惑をかけたくないだけですよ」と言う意思表示以上の速度を出さないように気を配りつつ、ヘレンの手を引いて関所を離れる。

　心情的には今すぐダッシュしてカミロの馬車に乗り込み、馬車を飛ばして王国領に潜り込みたいところなのだが、そんなことをしたらどうなるのかは目に見えている。

　逸る心を抑えむのが大変だが、努めて冷静に、速さを咎められることなくその場を離れた。

　体感にして１５分か２０分くらいだろうか。つまりは１～２キロほど離れると、そこの平地に人の「溜まり」が出来ていた。

　俺たちはそこに立ち寄ってみることにした。長いこと並んで疲れているのも確かだったし、王国もそこそこの日数離れていたので、もしかするとなにか話が漏れ聞こえてくるかも知れないと思ったのだ。

　ざわざわと種族も年齢も性別もまちまちな人々が、思い思いの場所に腰を下ろして休憩したりしている。俺とヘレンは空いたところを見つけてそこに座り込む。

　ヘレンはいつもの「ドカッ」と豪快にあぐらをかいた座り方ではなく、しなっと横座りに座った。一応状況を意識してくれてはいるらしい。

　荷物からカップを取り出してヘレンに渡す。

「ほれ。」

「ありがと。」

　ヘレンがそっと受け取ったカップに水袋から水を移すと、少しずつ飲み始めた。俺も水袋から直接飲む。夫婦なのにヘレンが目を白黒させないか若干心配していたが、普通にしている。

　傭兵であちこちの戦場に行っていたなら、男女関係なく水袋の回し飲みくらいは普通にするだろうから今更か。俺はグイッと水を飲み込んだ。

　水を飲んだり、乾燥させた果物（イチジクみたいなやつだ）を少し齧ったりすると人心地着いてきて、さっきよりも周りの状況に目をやる余裕が出てきた。

　大半は疲れた顔をしているから帝国から出てきた人だろう。総合すると「突然でビックリした」と言うようなことを口にしている。

　戸惑いの表情が伺えるのは引き返してきた人だろうか。何人かが帝国から出てきたと思しき人に話を聞いて驚いたあと、ガッカリしたりしている。

　基本的には商売で入ろうとしている人たちだろうし、商売ができないとなると困ったことにはなるだろう。

　しばらく聞き耳を立ててみたが、とりあえずは王国で何かあって帝国に逃げようとしている人はいないようだ。

　つまりは俺の家族もおそらくは平気だろう。まぁ、うちにいる限りは多少のことでは何もないとは思うが。

　俺は思わず安堵のため息をつく。

「どうしたの？」

　それを見たらしいヘレンが心配そうにこちらを伺っている。口調もちゃんと変えてくれていて助かる。

「いや、あんなのに巻き込まれたあとだから、家がどうなってるかと思ってな。」

　俺は慎重に言葉を選んで答えた。この言い方なら普通の人は

「ああ。大丈夫でしょ。家族の家だもん。」

　一方ちゃんとその言葉の意味を理解しているヘレンは、そう言って手をキュッと握ってくる。俺はその手をそっと握り返した。

「あのぅ。」

　そこへ１人の女性の声がした。俺とヘレンはビクッとして思わず手を離す。

「ああ、驚かせてしまってごめんなさい。少しお話を伺いたかったのです。」

「いえ、こちらこそすみません、失礼な真似を。」

　被っていたフードを取り、言葉通り申し訳なさそうにする女性に、俺は頭を下げて返す。ヘレンはそっと俺の後ろに動いた。

　俺は女性になにか違和感をおぼえたが、あまり訝しげにして変に思われるのも困るので、何事もないかのように聞き返す。

「それで、聞きたい話とは何でしょう？」

「帝国でなにかあったんでしょうか？周りの方もそれらしいことを仰ってるんですが。」

「ああ……」

　女性の疑問に俺は答えた。何か暴動のようなものが起きたらしいのを道中で耳にしたこと、しかし自分と妻は妻の実家に行っていて詳しくは知らないことなどだ。

　話しながらも違和感の正体を探ろうとするが、なかなか思い当たらない。

　だが、その正体は意外にも向こうから教えてくれた。

　俺が一通り話し終えると、女性はそっと俺に顔を寄せてくる。ヘレンが俺の前に出ようとしたが、俺はそれを手で抑えた。

「ご安心ください、エイゾウ様。エイムールの者です。」

　ニッコリと微笑んだその顔は、言われてみれば遠征帰りに俺を案内してくれた人だった。

## 家路を急ぐ

2019年5月22日

　おそらくは俺たちを迎えに来たのであろう、マリウスの家の使用人さんとしばらく話し込む。

　とは言ってもお互いの素性を詳しく語ることはない。王国領内の比較的当たり障りのない話をするだけだ。

　さっきまで盗み聞きしていた話と同じく、王国領内は今の所見かけ上は天下泰平らしい。

　そういえば、もしかすると王国中枢に最速で帝国の革命騒ぎを伝えられるのが俺たちの可能性もあるのか。なんだかスパイのような感じだな。

　まぁ依頼そのものが敵国に潜入して人質を救出せよと言う半分スパイのような、ダンボールを被りたいような雰囲気であったし、今更ではあるか。

　休憩がてら話し込んでいたが、十分に体力も回復してきたことだし、見かけに反してあまりのんびりしていられる状態ではないのもあって、その場を立ち去ることにする。

　マリウスの家の使用人さんは俺たちと「互いの安全のために途中まで一緒に行く」と言う話をややわざとらしくして（建前と実際が一致してしまっているが）一緒に出発した。

　ガヤガヤとしているところから離れる。同じように出立している人は少なくはないが、さりとてさほど多いとも言えない。少し距離を取れば聞かれずに話をすることはできそうだ。

　パラパラと人が見える平野の街道を歩いていく。カミロたちはどれくらい先行しているのだろう。なるべくなら早めに家に戻りたいところなのだが。

　少しして周りに人も居なくなったところで使用人の人は名前を名乗った。カテリナさんと言うらしい。

　俺の名前は知っているとして、ヘレンも紹介しておいた。ヘレンは「よろしく」と言ってペコリと頭を下げる。

「よろしくお見知りおきを。まさか、あの"迅雷"にお会いできるとは思ってませんでした。」

　カテリナさんはややテンション高く挨拶を返した。そういやこの人、武闘派だったな……。武で名を馳せた人物と会えて嬉しいのだろう。ディアナもそうだったし。

「その名前も地に落ちたさ。」

　暗い声でヘレンが言う。俺はヘレンの手を握って言った。

「ちゃんと新しいのも作ってやるし、まだまだやり直しはきくだろ。ただ、今は休憩してたらいいんじゃないか？」

「エイゾウ……」

「こうして見ていると、お二人は本当のご夫婦みたいですね。」

　俺の言葉をカテリナさんが混ぜっ返す。俺は思わず赤面してヘレンから目を離す。

　高校生でもあるまいし、中身が４０を過ぎているオッさんが随分と初々しいことだとは思うが、こう言う経験は残念ながら前の世界と合わせてもあまりないのでどう対処していいやらわからない。

　ヘレンも同じようにしているようだが、握った手が振り払われることはなかった。

　それから更に少し行ったところで、道端に止まっている馬車を見かけた。ヘレンの体がこわばるのが伝わってくる。捕まる前のことでもフラッシュバックしたのだろうか。

「大丈夫だよ、あれはカミロのだ。」

　俺はできる限り優しい声でヘレンに話しかける。少しだけヘレンの力が抜けた。

　ゆっくりとその馬車に近づくと、知った顔が荷台から覗かせてニヤッと笑う。カミロだ。

「遅かったな。」

「関所を出たところに人がたまってるところがあっただろ？あそこでちょっと休憩してたんだよ。」

「ああ、なるほど。お前たちは徒歩で並ばされてたしな……」

　説明をするとカミロはあっさりと納得した。

「よし、じゃあ乗れよ。」

　促されて俺たちは馬車に乗り込んだ。

「あれ、そう言えばカテリナさんのこと聞かないんだな。」

　人が増えているのに何も聞かずにあっさり乗せたことを疑問に思って俺はカミロに尋ねる。

「ああ。１週間くらいで様子を見に来てくれ、って伯爵に俺が頼んどいたんだよ。万が一ってこともあるからな。」

「あと２～３日出てこなければ、私が帝国に入ってエイゾウ様達の行方を追っていましたね。」

　事もなさげにカテリナさんが言う。万が一のバックアップを頼んだのが依頼者の侯爵閣下ではなく、マリウスのところだと言うのが引っかかるが、カミロにもなにか目論見があったのだろう。

　今は無事家に帰り着く確率が格段に上がったことだけを意識しよう、俺はそう思って曖昧な返事を二人に返し、馬車に揺られるのだった。

## 王国はこともなし

2019年5月24日

　ガタゴトと馬車が街道を行く。関所を出てからいくらか行けば、街があったはずだ。来るときはそこで１泊して関所に向かったんだったか。

　割と人もいるので、帝国で飛ばしたときのようなスピードは出していない。人目を気にせずあのスピードを出すには、量産を待つしかない。

　今回で実用に耐えうることは分かったのだし、その日は遠くないだろう。

　俺がそうやって楽しみにしていると、カミロとカテリナさんが話を始めた。

「そう言えば、もう動いてるのか？」

「そうですね。あまり大規模ではなかったのですが、都にも気がついた者がいるようです」

「本当にギリギリだったな」

「ええ」

「なんの話だ？」

　俺はカミロに聞いた。

「例の侯爵閣下の話しさ」

「ああ……」

　混乱に乗じてちょっとばかり帝国の領土をいただく話か。さっきの口ぶりからすると、もう既に部隊は動いたのだろう。

　さっきの関所はどうなるんだろうな。どちらにも被害は出てほしくないものだが。

　ヘレンのことも考えてそれ以上詳しいことは聞かないでおいた。

　関所のあった山が遥か遠くに過ぎていく。少しずつ安全が増してはいくが、完全に安全かと言うとそうではない。

「なあ、ヘレン」

　このところの都と街の様子をカテリナさんに聞いているカミロを横目に、馬車に乗ってからすっかりおとなしいヘレンに声を掛けると、ヘレンはこちらを向いた。

「このまま戻ったあと、どうするんだ？」

「うーん……どうしようかな……」

　特に何かあるわけではなかったらしい。ヘレンは俯いて考え込み始めた。

「あー……それなんだがな、エイゾウ」

　代わりに返事をしたのはカミロだ。

「お前んとこで預かってくれないか？」

「うちで？」

「王国を見渡して一番安全な家ってどこだと思う？」

「……恐らくはうちだろうな」

　都に行くときに見える山の天辺に家があるとかでもない限りは、危険な森の中にあるうえ、人よけの魔法まであるうちが王国どころか下手するとこの世界でも有数の安全な家の可能性はある。木造だが。

「迷惑だったら良いよ」

　そう答えるのはヘレン。だが俺は首を横に振った。

「迷惑ってことはないさ。ヘレンがいいなら構わない」

「他のみんなは？」

「気にしないと思うぞ」

　サーミャ、リケ、ディアナ、リディ、あとはクルル。うちには４人＋１頭の家族がいるが、全員そろって人懐っこい。顔を知ってて泊まったこともあるヘレンが、うちの（一時的にかどうかはともかく）家族になることを反対するところは想像できない。

「うちはアレからまた家族が増えてるからな。賑やかだぞ」

「そうなのか。じゃあ、行く」

「決まりだな！」

　大きな声でカミロが締め、馬車の上は少し朗らかな雰囲気に包まれた。

　その後は俺も加わって街の話を聞いたりする。随分と長く離れていたように思うが、８日かそこらではあるので何か大変なことが発生していたりはしないらしい。

　帝国の革命騒ぎも昨日の今日では伝わってくる様子もなく、ただ侯爵がごく小規模な軍をこっそりと動かし、耳聡いものたちがそれに気がついて何事だろうかと色めき立っているだけだ。

「それでもこれからはちょっとした騒ぎにはなるだろうな」

　俺がそう言うと、カミロが

「だろうな。王国で革命だのと言った話にはならないだろうが、帝国から逃げてくるやつもいるだろうし、素早く鎮圧できたとしてもそれから落ち着くまで帝国は国内にかかりきりだ。

　そうなれば王国と同じことを考える国が他にあってもおかしくはない」

　と返してくる。対岸の火事、と言うには少し近いところで起きているアレが成功するにせよ、失敗するにせよ、王国に影響が出ないということはない。

　カミロなんかはそれに乗じて大いに儲けるのだろうし、既に用意自体は整っているのだろうが、俺はただの鍛冶屋のオッさんである。平和に暮らせるに越したことはない。

「飛び火だけは勘弁してくれよ……」

「それはさせんさ。俺も、多分マリウスもな」

　妙にハッキリとした口調でカミロが宣言し、カテリナさんが力強く頷くのだった。

## 野営の夜に

2019年5月27日

「今日は町に泊まるのか？」

　俺はカミロに聞いた。今日中に街まで戻るのは難しそうだ。

　関所を抜けた時点でもうとっくに昼を回っていたから、それまでに日が暮れてしまうのは確実に思える。

　さりとて、町に入るのも難しいところではある。まだ到着していないとは言っても、関所から一番近い王国の町だ。追手がいれば、捜しに来ることは間違いない。

　その時にのんびりと町にいれば見つかってしまい、ここまで見つからないようにしてきたのが水の泡である。

「いや、なるべく進んで野宿にする。お嬢さん方には悪いが、関所からは距離を離しておきたい」

　カミロはそう答えた。今のうちにいるかも知れない追手からは距離を離しておいて、行方を分かりにくくする方を選んだか。

「わかった」

　俺はカミロに頷くと、ヘレンとカテリナさんのほうを見た。２人とも頷いている。

　ヘレンはともかく、カテリナさんも平気なのを意外に思ったが、そう言えばこの人はここまで１人で来ているのだった。

　もしかすると、マリウスの家に務めるまではヘレンと同じ仕事をしていたのかも知れないな。

　まぁ、女性の過去は探らないに限る。俺は２人が納得しているのなら、とそれ以上は触れないことを決めた。

　カミロの言った予定の通り、俺達は途中の町を通り過ぎる。

　訪れたのは一度きりだが、商売柄顔を覚えている人がいないとも限らないし、スルー以外の選択肢はそもそも難しかったかも知れんな。

　町をかなり通り過ぎて、太陽が街道と平野を同じ橙色に染め上げようとしているころ、俺達は馬車を止めて野営の準備を始めた。

　俺が鍋の準備をしている間に、他の４人に薪を集めてきてもらう。

　自然と飯を作るのは俺って事になっているが、今回はカテリナさんもいるんだから、そっちに任せても良かったんじゃ？

　そう思って、準備をしながらカテリナさんの方を見るとサッと目を逸らした。

　まぁ、使用人と言ってもそれぞれの専門はある。遠征についていったことや今回のことなんかを考えても、料理の方は専門ではないんだろう。

　飯を作ると言っても、今の状況だと結局は保存がきく食材をまとめて煮込んだだけ、みたいなものしかない。

　それでも生産のチートは適用されるので、そこらの旅人が適当に作るよりはうまい……はずである。

　すっかり日が沈んでしまって、唯一の光源である焚き火と、そこにかけた鍋を全員で囲む。

　俺の隣にはヘレンとカテリナさんが座っているので、それぞれに鍋の中身をよそってやる。

　干し肉と乾燥野菜と豆のスープだが、カミロに許可をもらって胡椒もきかせてるので、少しだけだが豪華にはなっている。

「ほい」

「ありがと」

「カテリナさんも」

「ありがとうございます」

　ヘレンとカテリナさんが器を受け取って、中身を口に運ぶ。

「やっぱりエイゾウのはなんかうまいんだよなぁ」

「私ははじめて食べましたけど、野営でこれだけの味なら大したものだと思います」

「だよなぁ。アタイも色んなとこ回ったけど、このレベルのはなかなかないぜ」

　二人がしみじみと感想を漏らす。嬉しいには嬉しいのだが気恥ずかしい。

「ただ煮込んだだけだぞ」

「それでこの味が出せるから言ってるんですよ。エイゾウ様はなんかズルいですね」

「だろ。アタイもずっと思ってた」

　照れを誤魔化そうとすると、カテリナさんとヘレンにピシャリと返された。それをニヤニヤとカミロとフランツさんが眺めている。

　カテリナさんはともかく、王国内に戻ってきた実感があるのか、ヘレンの調子が戻ってきているようなので、カミロとフランツさんは内心で不問にすることにした。

　夜間は女性陣には眠っていてもらい、男衆３人で見張りに立つことにした。最初がフランツさんで次に俺、カミロの順だ。

　寝ているところをフランツさんに起こされる。

「すみません」

「いえいえ、お気になさらず。回り持ちなんですから」

　起き出して、一応武器を手に周囲を見張る。帝国領内にいたときは夜間でも松明の灯りを頼りにして、街道を行く人がそこそこいたが、王国領内に入ったからか今のところはいない。

　あの革命騒ぎから離れてしまえば、見かけはまるっきりいつも通りという事に頭が少しついていけていない。

　俺が介入する余地は全く無いので気を揉んでも仕方ないのだが、なにか出来ることがあったんじゃないか、と言う思いはなかなか消えてはくれない。

　俺は空を仰ぎ見る。せっかちな月の女神様の祝福と、きらめく星々の輝きが俺たちをそっと見守っていた。

## 帰宅

2019年5月29日

　見張りとして起きて星空を眺めていると、背後からゴソゴソと起きてくる音がした。ヘレンだ。

　何があるかわからないので、一応寝るときも例のカツラはつけたままになっているが、それが少しズレていた。

「なんだ、眠れないのか？」

「いや、なんかふと目が覚めちまっただけだ」

　ストレスで眠れなくなったり、深夜に起きたりと言うのは俺も前の世界で経験があったのだが、それではないといいのだが。

　ヘレンはあぐらをかいた俺の隣に、三角座りで座り込んだ。身長はヘレンのほうがずっと高いが、座ると頭の高さはあまり変わらない。

　ちらっと横目で見ると、じっと焚き火を見つめている。

「すまんな、迷惑かけちまって」

　ボソリ、とヘレンが言う。

「気にすんな、と言いたいが、それじゃ納得できないんだろう？何より自分で自分が許せない」

　俺も前の世界では４０年生きてきたのだ、他人に迷惑をかけてしまったことは一度や二度ではない。

　ヘレンは膝に顔を埋めた。

「まぁ、自分を許せないなら今は許さなくていい。ゆっくり自分で納得できる落とし所を探すことだな」

「……うん」

「それに何年かかっても、気の済むまでうちで探していけばいい。それは別に迷惑じゃない。しばらくうちに住むって決めた時点で家族なんだから」

「……ありがとう」

　顔を伏せたまま、ヘレンは言った。俺は焚き火に新たな薪をくべる。しばらくどちらも黙ったまま、パチンと枝が爆ぜる音だけが響く。

　あと１時間ほどでカミロと見張りを交代するかな、と思ったとき、ヘレンが声をかけてきた。

「なあ」

「なんだ？」

「ここで横になっていいか？」

　ヘレンがモジモジと膝をすり合わせながら言ってくる。なんだか娘ができたみたいに感じながら答える。

「かまわんが、カミロと交代するまでだぞ」

「いいよ」

　そう言うとヘレンは俺の真横で体を横たえた。俺はそっとズレたカツラを直してやる。

　程なく安らかな寝息が聞こえてきて、俺は街道の方に目を戻すのだった。

　小一時間後、ヘレンを起こしてカテリナさんのところにやり、カミロと見張りを交代する。

　俺は横になって目をつぶる。家族か。こうやって増えること自体は全然かまわない。しかし、女性ばかり増える状況なのはなんでだろうな。

　ただの偶然と言ってしまえばそれまでだが、こうも女性ばかり続くものだろうか。それも色んな種族でほぼ満遍なく、だ。

　”ウォッチドッグ”が俺に話していない何かが介在しているのか、それとも他の何かか……。

　目を閉じたまま考えていたが、３０歳の肉体に４０歳の精神には疲労が溜まっていたようで、すぐに俺の意識は眠りの世界に誘われていった。

　翌朝、全員で起き出して出発の準備をする。朝食は昨日の残りを温め直したものだが、腹に入れるには十分だ。

　カテリナさんも含めて全員手慣れているからか、スムーズに出発することができた。カテリナさんが野営に手慣れているのが少々気にはなるが、まぁ言わぬが花だろうな。

　ゆっくりと馬車が動き出す。やっと家に帰ることが出来ると思うと気が逸るが、ここで飛ばしてもらって不審がられては意味がない。努めて冷静になろうと頑張る。

　これ多分サーミャがいたらバレてるやつだな。

　ジリジリとしながら昼を回った頃、風景が見慣れたものになってきた。

　もうすぐ街のはずだ。街に向かう道からは街道を歩いても暗くなる前にうちには帰れる。俺はいよいよソワソワとし始める。

　それを察したのかどうかは分からないが、カミロがありがたい申し出をしてくれた。

「俺たちはこのまま都まで行くから、森の入口まで送るよ」

「悪いな。助かる」

　カミロに礼を言うと、手をひらひらと振ってウィンクした。相変わらず似合ってないな。

　街を通り過ぎる。このあたりはもう完全に庭と言っていいほど知ったあたりだ。帰ってこれた実感が増す。

　家族のみんなの顔が頭をよぎる。この世界に来てそれほど経っていないはずだが、俺の中でもあそこが帰るところなんだな。

　森の入口にたどり着いた。俺とヘレンは馬車を降りる。

「世話になったな」

「そりゃあ、こっちのセリフだよ」

　俺とカミロはお互いに手を伸ばして握手を交わす。しばらくはお別れだ。

　また１週間もすれば会うのだが、少しばかりの寂しさもある。

　俺とヘレンは２人で馬車に手を振って見送った。

　勝手知ったる森の中を行く。ヘレンも数回は来ているので足取りがおぼつかないということもない。

　いくぶん日が傾いてきてはいるが、何度も通ったところだ。迷うこともなく、むしろ軽い足取りでズンズンと進んで行って、ヘレンを置いてけぼりにしないのに苦労する程である。

　もう少しで家だな、と思ったとき、大きな影が俺たちを覆った。

## 帰ってきた実感

2019年5月31日

　ぬっと大きな影が俺とヘレンを覆う。ヘレンが俺の前に出ようとしたが、俺はそれを手で止めた。

　影は俺に近寄りぺろりと俺の顔を舐めると、自分の頭を俺の顔に擦り付ける。

「クルルルルル」

「ただいま、クルル」

「クルー」

　影はクルルだった。どこかに繋いだりはしていないので、匂いか何かで帰ってきたのを察知してお迎えに来てくれたのだろう。

　俺が首を撫でてやっている間に、クルルはヘレンの匂いをクンクンと嗅いでいる。

「その人は今日からうちの家族になるから、大丈夫だぞ」

　俺がそうクルルに声をかけると、やはりぺろりとヘレンの顔を舐めた。

「ひゃっ！？」

　くすぐったかったのか、ヘレンが小さく悲鳴をあげる。

「ようこそって言ってるぞ」

「そうなのか？」

　俺も流石にはっきり言葉がわかるわけではないが、あれで気に入らなかったということはあるまい。

「撫でてみろよ」

「お、おう……」

　ヘレンは恐る恐る手を伸ばす。クルルが撫でやすいように頭を下げたので、ヘレンはそこにそっと手を触れて撫でた。

「クルルルル」

　クルルは機嫌良さそうにしているが、ヘレンがビクッと撫でるのを止めた。

「こ、これ大丈夫なのか？」

「ああ、機嫌良さそうにしてるから平気平気」

　猫の”ゴロゴロ”なんかもはじめて聞いた人はビビることが結構ある。

　そう言うものがあると言うのは知っていても、具体的に知らないとどれがそれなのかはなかなか実感できないものだ。

　今回はめったに見ない生物だろうから、ヘレンがどういう認識だったのかは分からんが。

「この子はクルル。うちの走竜だ。こっちはヘレン」

「よろしくな、クルル」

「クル」

　クルルが頭をヘレンの顔にこすり付ける。これでご挨拶は終わりだ。

　俺とヘレンにクルルを加えた一行で家を目指す――とは言っても、もう大した距離ではなくて、すぐに家が見えてきたが。

　家の前にはうちの家族全員が出てきていた。サーミャかディアナが気がついたのだろうか。

　俺は手を振って大きな声で言った。

「ただいま！」

「おかえり（なさい）！」

　みんなでお帰りを言ってくれて、俺ははじめてちゃんと家に帰ってこれたんだな、と実感した。

「あー、それでだな。帰ってきて早速なんだが……」

「分かってるよ。見えてるし」

　俺がヘレンのことを切り出そうとすると、サーミャが遮る。なんか色々察しはついてしまっているようだ。

　他のみんなを見てもうんうんと頷いている。

「それで、なんでヘレンはあんなの被ってるんだ？」

「ああ……」

　森に入った時点でカツラを外させても良かったのだが、万が一を考えて家につくまでは被らせたままにしておいたのだ。

　サーミャは鼻が利くし、顔見知りだからすぐにわかったのだろう。

「とりあえず中で話そう」

「あ、ああ、そうだな」

　もう平気だとは思うが、一応最後までは気を抜かないことにした。あれを外すのは家に入ってからだ。

　家に入ると、懐かしい匂いが鼻をくすぐる。旅の埃を落とすのとどっちを優先しようか迷ったが、先に話をしてしまうことにする。

　みんなで食卓に座る。この光景もなんだか少し懐かしい。が、感慨にふけるより先にやることがある。

「ヘレン、もう外していいぞ」

「うん」

　俺が言うと、ヘレンはカツラを外した。短い赤毛が出てきて、いつものヘレンに戻る。

　リディが少し驚いている。そう言えばリディは面識がないんだったか。

「リディははじめてかな。ヘレンだ」

　俺が言うとヘレンが座ったままペコリと頭を下げた。

「私はリディです。故あってこちらのエイゾウ工房にお世話になっております。よろしくおねがいしますね」

「こっちこそ、よろしく」

　リディとヘレンが挨拶を交わす。リディもさっき以上に気にした様子はないし、ヘレンもリディがエルフであるのを気にしている様子はない。

　これなら大丈夫かな。

「それで、まぁ、その、なんだ」

「ヘレンも家族になるんだろ？」

「うん、まぁ、そう言うことだ」

　俺がしどろもどろになっていると、サーミャが助け舟を出してくれた。

　そしてそのまま胸を張って言う。

「ほらな！」

「まぁ、予想はできたわよね」

「親方ならこうなると言うのは難しいことではないですね」

　ディアナとリケがそこに乗っかった。

　心配もあまりしてはいなかったが、みんな異存は無いようでよかった。

　俺がホッと胸をなでおろしていると

「だからな」

「ん？」

　サーミャが話を続けた。なんだなんだ？

「私達で部屋を増設しておきました」

「ベッドも入れてあるわよ」

「まだ寝具がないですけどね」

　リケ、ディアナ、リディが続いた。どういうことかはわかったが、理解が微妙に追いついていない。

「それも２部屋だ！」

　ドーンとエフェクトが掛かりそうな勢いでサーミャがVサインする。

「お前たち……」

　これも信頼と言えば信頼ではある。そうか、自分たちでも部屋を作るくらいのことは出来るようになってきたのか。

　俺は色んな思いでグッとくる感情を抑えながら、今後について話を進めることにした。

## ようこそ

2019年6月3日

「帝国の方でちょっと騒ぎが起きててな。ヘレンはそれに巻き込まれて厄介なことになってるんで、王国内で安全なところと言うと……」

「うちでしょうね」

　俺の言葉をディアナが引き取る。ディアナとしてもそう言う認識なのか。

「狼がうろついて天然の衛兵の役目を果たしている上に、森なので迷宮のように入り組んでますし」

「それにこの家には人避けの魔法がかかっています。並の人間では辿り着けません」

　リケもリディもうんうんと頷きながら安全性をアピールする。

　サーミャはピンと来ていないようだ。ほとんど森の中で暮らしてきたから、「黒の森自体がそもそも危険な地域とみなされている」と聞いても実感が無いのだろう。

「まぁそんなわけで、しばらくうちで暮らすことになった。」

「街に行くときはどうするんだ？」

　サーミャが疑問を呈する。連れて行くかどうかだよな。残していくのも手ではあるんだが……。

　なるべくならそれはしたくない。万が一のときに手の打ちようが無かった、と言うのは避けたいからだ。

「一緒に行くが、様子を見ながらだな。最初の往復時はカツラを被ってもらって、帝国の情勢が落ち着いて来たら外してみよう」

「大丈夫なの？」

　連れて行くことで、追手に発見されるリスクはもちろん高くなる。カツラを被った状態ではあちこちで目撃されているわけだし。

「大丈夫だろ。一番知ってる人間で帝国の関所の衛兵になるが、あいつらの中では俺とヘレンは夫婦って事になってるし、一緒にいたほうが都合が良いかも知れない」

　俺の一言で、ディアナとサーミャがガタっと席を立った。リケとリディもそわそわしている。

　なんだなんだ。

「……もちろん、そう言ってるだけで何か手続きはしたわけじゃないぞ。だから詳細に調べられるとバレるのも確かだ」

　みんなの様子を無視して俺が話を続けると、みんな着席した。ホッとした様子なのが気になるが、大丈夫そうなので気にしないことにする。

「さっきも言ったけど、予想はしてたから私達はいつまでいてくれてもかまわないわよ」

　ディアナが落ち着いた声音でヘレンに話しかける。

「と言うか、もう家族だろ」

　サーミャも気楽な声だ。椅子をガタガタするとコケるぞ。

「部屋もありますしね」

「もうお客様じゃないですよ」

　最後はリケとリディだ。

　ヘレンは彼女たちの言葉を聞いて、下を向き

「ありがとう……ありがとう……」

　とつぶやく。俺はその肩をそっとさすってやった。

　そうと決まれば、何はともあれ飯だ。飯の準備を始める前にまずは旅の埃を落とそう。

　荷物をおろして体を濡らした布で拭き、家の服に着替える。荷物の整理はまた明日以降だ。

　チャチャッと着替え終わったら、自室から出てかまどの前に立つ。

　スープの用意は済んでいたので、最近獲ってきたらしい猪の肉で焼き肉風の何かを作ることにしよう。

　久々に台所に立ったが、１週間と少しではまだ体が感覚を覚えてくれていて、チートの恩恵にもあずかりながら調理を進めることができた。

　肉を薄く切って、火酒と香辛料で味付けするだけと言うシンプルなものではあるが、うちでは結構人気の一品だ。

　俺が夕食の準備を終えると、ヘレンが客間の方から出てきた。部屋はあるが寝具がないから、まだ客間を使うほかない。

　ヘレンの服はうちの女性陣で１番体の大きいディアナの服である。

　それでも俺より背が高いヘレンだ、少し丈が短くて見える部分が多い。ヘレンも自分で分かっているらしく、モジモジとしていた。

「へ、変じゃないか？」

　ディアナは伯爵令嬢なので持っている服も普段着と言っても、そこそこ装飾のあるものだ。

　ヘレンがそれ着ていて丈があってないのはこの世界だと奇妙なのかも知れないが、俺には前の世界の感覚があるので個人的には全く変とは思わない。

　なのでそれを素直に言ってみる。

「いや別に？似合ってるとは思うけど」

　俺の言葉を聞いたヘレンは顔を真赤にすると、食卓の椅子にとすん、と座り込んだ。

　それと同じくらいに食卓に全員が揃う。俺がみんなのカップにワインを注いで回る。みんなに行き渡ったところで、全員でカップを掲げて言った。

「エイゾウ工房へようこそ！ヘレン！」

## 報告会

2019年6月5日

　そのままワイワイとみんなで食事をする。話題はもちろん、俺がここを離れている間のことだ。

　思っていたとおりではあるが、こっちは特に何事も無かったらしい。

　街に行かないのと、俺がいないのでクルルが少しへそを曲げたくらいだそうだ。

　あとはほぼ普段どおりだが、全員で「これは確実に連れ帰ってくるに違いない」と話し合って、新たに部屋を作ることにしたことが普段と大きく違うところだろう。

　俺がいないので部品の生産には多少時間がかかったものの、そこはリケがちゃんと生産できたし、部屋を立てる事自体は経験済みなのでさほどの苦労はなかった、とはサーミャの言である。

「クルルがいてくれて助かったのもあるけどね」

　そうディアナが補足する。材木を運んだり、持ち上げたり、要は重機に近い作業をクルルが受け持ってくれたおかげで、想像以上に早く完成できたのだそうだ。

「何かご褒美をあげたいところだなぁ」

「何が嬉しいんだろうな？」

　俺が言うとサーミャが返す。普通の動物ならなにか特別なエサなりあげるのだろうが、彼女の場合は魔力で腹を満たしているので、食事がほとんど必要ない。

　遊ぶ、と言っても普段は簡易荷車を引っ張って遊んでいるし、俺たちが介入できて喜んで貰えることってほぼ無いような……。

「また街に連れて行ってあげるくらいしかないですね」

「そうだなぁ」

　リケが言って俺は考え込む。

　先程、俺がいなかった間に一般モデルの製品は十分な数が出来た、とリケが言っていた。

　だったら早速明日納品、はちょっと気が早いので明後日にでもカミロのところに持ち込もう。それでクルルを街に連れて行ってあげればかなり喜んでくれるはずだ。

　俺の作る分はなしでもいいんじゃなかろうか。懐には十分な余裕がある。

　カミロは売り物のバリエーションが減るが、１週間くらいならどうとでも出来るだろう。そもそもここのところは納品も無ければ本人もいなかったのだし。

　彼もそこそこの

　まぁ、俺もそこを信頼してうちの製品を任せてるんだけどな。

　そうして家の方の話を聞いているうちに夕飯を食べ終わったが、みんなが話を聞きたがったので片付けた後に話すことになった。

　俺の方はほとんど行って帰ってきた、と言う話しかない。ものすごく嫌な予感がしたので、途中でカミロに娼館へ誘われたことは伏せておいたくらいだ。

　それでもヘレン救出や、革命が起きて街が大混乱のところでは全員固唾をのんで話に聞き入っていた。

「ヘレン、苦労したのね。いつまでもうちにいていいからね」

　ディアナはすっかり涙声でヘレンに話しかけている。

　涙もろいオカンか何かのようだ。気持ちは十分にわかるが。ヘレンの方は「お、おう……」と言った風情で返事をしている。

「ドワーフは帝国のほうが多いと聞いたが、リケのところは平気なのか？」

「うちの工房は王国にあるから平気だと思いますよ。端っこですけど共和国よりですし。」

「そうなのか。じゃあとりあえずはよし、だな」

　リディのとこのエルフたちもあちこちに散ったとは言え、王国内なのは確かだし、サーミャは言わずもがなだ。

　うちの家族で帝国で起きていることに巻き込まれそうなのは、もう既に巻き込まれた俺とヘレンを除いてはいないらしい。

「そう言えば、そもそもヘレンはなんで捕まったんだ？」

　サーミャが何の気なしに話題を振った。一瞬、場が固まる。

　確かに気になることではあるが、まだ救出して間もないところで振っていい話題かどうかは、サーミャ以外の全員が掴みかねているところだったのだ。

「お、おい……」

　俺がたしなめようとすると、当のヘレンがそれを遮った。

「いや、いいんだ。みんなには聞いておいてもらいたい」

　そうして、今回の事の顛末をヘレンは話し始めた。

## ヘレンの話

2019年6月7日

　ぽつりぽつりとヘレンは話し始める。

「アタイは魔界との境界付近の仕事を終えた後、帝国との国境付近の哨戒と賊の討伐を依頼されたんだ」

　魔界の境界付近の仕事てのは、ニルダがうちに来る原因になったやつだな。

「それを受けたアタイ達は、国境付近の村に世話になることになった。そこも賊に悩まされてたから、歓迎してくれたよ」

「いつも部隊で仕事してるのか？」

「そりゃ１人２人じゃ無理だからな。まぁ、アタイは特定の傭兵団に所属してるわけじゃなくて、毎回寄せ集めのところで仕事してたんだけど」

　救出対象はヘレンのみだったが、部隊で行動しているなら他にも捕まったやつがいたんではなかろうか。

「で、その村の住民に賊のいるらしい辺りを教えてもらって、アタイが１人で偵察に出たときだ。妙な連中を見かけた」

「妙な連中？」

「ああ。身なりが良くて、武器も立派だった。辺境の賊にしてはやたら金を持ってそうな連中だったから、これは賊じゃないなと思ったんだ。数も結構いたし」

　ヘレンはそこで一息つく。俺も、みんなも黙ってヘレンの話に聞き入っていた。

「１つ仕事を終えたあとだったし、賊の討伐なんて何回もやってるから、気が緩んでたんだろうな。背後から忍び寄られて、取り押さえられた。

　正面からやりあって負けたわけではないのか。まぁ、ヘレンと正面からで勝てるやつがたくさんいても困るが。

　取り押さえられた、と言うヘレンの言葉を聞いてディアナが息を呑んだ。ヘレンはチラッとそっちを見て話を続ける。

「アタイの武器を取り上げたあと、『今の話を聞いたか？』そいつらの親玉らしいのがアタイにそう聞いてきた。見かけてすぐだったから、アタイは首を横に振ったけど、まぁ信用はされないよな」

「聞いてても聞いてないって言うだろうからな」

　俺の言葉にヘレンは大きく頷いた。

「そんなのアタイだって信用しない。そもそも、あいつらがいるのを見ちまったんだから。それであそこに連れて行かれた」

「何もされなかった？」

「なんでいたのかは

　ディアナが心配そうに聞いて、ヘレンがサラリと答えた。

　実際、目立った外傷はほとんどないのだ。助けたときに憔悴していたから、客人として扱われたわけでもないだろうが。

「まぁ、今回は一旦終わったんだ。ゆっくり休め」

「ありがとう。そうする」

　俺の言葉でヘレンが破顔し、報告会はお開きになった。

　みんなが三々五々自室に（ヘレンは客間だが）戻っていく。俺も自分の部屋に戻った。

　数日ぶりのベッドの寝心地は気持ち良かった。家のみんなが手入れをしてくれていたおかげだろうと思う。

　その一方で、俺には気がかりがあった。なぜヘレンは捕縛されただけだったのか。ヘレンが出くわした連中とは何者だったのか。

　どうにも腑に落ちない。分かる日がくればいいのだが。そう考えているうち、俺は睡魔との格闘にあっさりと敗北した。

　そして、その答えは意外にも向こうからやって来た。

　翌日、いつもしていた日課の水汲み（もちろんクルルも一緒である）と食事の準備の他、クルルと遊ぶ以外は何もせずのんびりと過ごして、更にその翌日である。

　朝の日課を終えたら、荷物を荷車に積み込んで街へ向かう。実際のところは１ヶ月も空いていないのに、この感覚も随分と久しぶりなような気がする。

　ヘレンはクルルの牽く竜車に乗るのは初めてで、例のカツラを被ったまま、結構はしゃいでいた。早いし、揺れがガツガツと来ないからな。

「走竜ってのはすごいな！」

「でしょう？」

　ヘレンの言葉に、ディアナが胸を張る。愛娘が褒められて喜ぶ母親のようである。実情として余り違いはないが。

「この荷車もカミロのところみたいに揺れがゆっくりなんだな」

「あれの元になったやつがこの荷車にもついてるからな」

「そうなのか。エイゾウは色々出来るんだな」

「俺で出来る範囲のことはな」

　救出までこなす鍛冶屋ってなんだよ、とは自分でも思うが出来ないことは出来ないのだ。例えば戦場で指揮を執るなんてことは無理だろう。

　俺が出来るのはあくまで俺個人の手が届く範囲のことでしかない。

　のんびりとした風景の街道を竜車が進んでいき、やがて街にたどり着く。見慣れた衛兵さんに挨拶を交わして、カミロの店に到着した。

　ちなみに、衛兵さんがヘレンを知っていると面倒なので隠しておいたが、特に見咎められることはなかった。

　いつもの通りにクルルを預けて、商談室に入る。こっちの人数が増えているが、十分に広いのでまだ手狭だなと感じることはない。

　なんだか少し見透かされているようにも感じるが、これは流石に被害妄想というものだろうか。

　少し待つと、いつもの通りにカミロと番頭さんがやってきた。ただ、いつもと違うことが１つある。

　俺がこの世界でよく知っている顔が続いて入ってきたからだ。

「やあ、エイゾウ、直接会うのは久しぶりだな」

　見まごうことのないその顔は、エイムール伯、マリウスであった。

## マリウスの話

2019年6月10日

「マリウス……！」

　俺は思わず立ち上がる。仮に暇であろうと、この街の支配者であろうと、ホイホイと長いこと逗留していい立場でもない彼が、ここにいるのは素直に驚きだった。

「どうしたんだ一体」

　俺はその驚きを隠さずに口に出す。マリウスはいつものニヤリとした笑いを浮かべる。

「こっちで知ってることを教えてやろうと思ってな」

「それはそれは……」

「今後を考えれば、エイゾウの不興を買いたくない。何よりエイゾウは友人だ」

　マリウスは臆面もなく言ってのける。多少なり自分にも利益があることを知らせたのは、俺を安心させるためだろうな。

　純粋な行為を信じられないやつと言うのは多い。マリウスが今身を置く貴族の世界では尚更だろう。

「気持ちはありがたく受け取っておくよ」

「そうしてくれると嬉しい」

　俺はマリウスの好意に素直に感謝した。そして、マリウスに促されて再び着席する。

「まぁ、私も自分で情報を集めて分かった範囲での話なんだが」

　マリウスも俺たちの向かい側に腰を下ろして、話を始めた。

「要は帝国――つまり皇帝は知ってたんだよ、革命を」

「知ってた？てことは起こることが分かっていた？」

「ああ。起こると分かってて利用したんだよ。見せしめみたいなもんだ。もう既に鎮圧されている可能性もある」

「じゃあ、なぜヘレンを捕まえたままにしておいたんだ？」

「知ってることを知られたくなかったからさ。バレていると分かったら起こさなくなってしまうだろ？捕まえた事自体を漏らさないようにしたのも、理由は同じだよ」

　ヘレンは詳細を聞いていなかったそうだが、出くわした連中が革命の情報を持っていた帝国側の人間だったと言うことか。

　彼女が自分でも言っていたように、どれだけの情報が漏れたかは分からない。

　かと言って、迂闊に死体を出すとそこから勘付かれる可能性もあるから、しばらく生かしておいたのだろうか。いや、待てよ、それだと……

「じゃあ、俺たちが助け出さなくてもヘレンはどのみち助かったのか？」

「いや、それはないだろうな」

　俺の言葉にマリウスは首を横に振った。

「確かに革命が起きてしまった時点で、ヘレンがどうなっていようと関係はなくなってしまった。だが、生きていてもいいということは死んでてもいいってことだ」

　俺を含んだエイゾウ工房の人間は息を呑んだ。マリウスは出されていた茶で少し口を湿らせると、再び口を開く。

「帝国としては後々を考えて、知っていたことをバレないようにしたいだろう。そうなれば革命が起きた時点で殺されていてもおかしくはない。なにで死んだのかなんて、ドサクサに紛れてしまえばさっぱりわからなくなるしな」

「むしろ俺たちの救出はギリギリだったのか」

「そうだな」

「とすると、もう平気とも言えないわけか」

「そうなるな。しばらくは今日みたいにしておいたほうがいいだろう」

　マリウスが今度は大きく首を縦に振る。

　今のこの世界だと司法解剖なんてものもないだろうし、殺されてしまえば死人に口なしだ。魔法があるにせよ、それが使えるのは基本的には貴族連中である。結果が正しいかは

　加えて、皇帝たちが革命を知っていたのを知っている存在がまだ生きているというのは、皇帝たちにとっては喉に刺さった骨のようなものだろう。なるべくなら解決したいと思うに違いない。

　悩みを解決させてやる理由も必要性もこちらにはないのだが。

　ヘレンを見やると俯いている。別に気にする必要ないのにな。そう思っていると、ディアナがヘレンの肩に手をおいて、何かを小声で話し始めた。

　俺はそちらをディアナに任せて、マリウスに聞く。

「革命があると知っていた、ということは侯爵が危ないんじゃないのか？確か領地を切り取りに行っているんだろ？伏兵を置くには絶好じゃないか」

「それがなぁ……」

　マリウスがやたらとどでかいため息をつく。あのオッさん、またなんかやらかしてるのか。

「そっちも裏で話は付いてるんだよ」

「は？」

　マリウスの言葉に、俺はここに来てから何度目になるかわからない驚きを隠せなかった。

## 暗雲は晴れず、話は終わる

2019年6月12日

「つまりだ。侯爵が攻め取るとしている土地は帝国側と話がついていて、本来黙っていても割譲される土地なんだよ」

「じゃあ、なんでわざわざ……」

「何かと引き換えにしたとしても、土地を明け渡すと言うのは大きな失点になる。今回も切り取られはするが、『革命の鎮圧でそちらに手を回せなかった。革命さえなければ……』と、皇帝は革命の首謀者に全てをなすりつける気らしい」

「にしても土地が奪われるのだろう？」

「元々帝国の中央からは離れすぎていて監視も届いてないようなところだし、持っていてもうまみのない土地だと判断されたようだ。だから抗戦もおざなり、出撃も態度だけだな」

　逆に言えば王国にとって、何らかのうまみがある土地だと言うことだろうが、それが何なのかを言わなかったのは俺に知らせないほうがいいと言う判断だろうな。

　それに交換条件として王国から帝国に利益供与があったとは思うが、それが何なのか。

「皇帝は革命を鎮圧して反乱分子を一網打尽、王国に土地を切り取られた不始末は軍備増強でまかない、革命が起きたことを反省して

「反省ってのは嘘だろ？」

「まあね。ま、言われてるほど帝国も独裁じゃなかったってことだ」

　俺の言葉にマリウスはあっさり頷いた。あの革命騒ぎは何もかもが茶番だったわけか。ヘレンの存在だけが唯一のイレギュラーだ。

　確かにすべてが茶番であることの裏付けになりかねないヘレンの存在は、

　うん？待てよ？そもそもから考えると……

「もしかして、その辺の絵を描いたのは……」

「おっと、そこまでだぞエイゾウ。」

　俺が口に出そうとした推測を途中でマリウスが止める。

　俺の思っているとおりなら利益供与のうちの１つが何だったのかも、水も漏らさぬ体制で情報を規制していたはずなのに、ヘレンが捕まっていることを

　彼が知っていたと言うことは、皇帝自身の本意はヘレン殺害にはなさそうだ。

　が、状況を考えれば帝国としては追わないわけにもいかないだろうから、実際には安全だとも言えないか……。

　そして、俺の納めた武器が革命の鎮圧に使われたかも知れないと考えると、思うところがないではない。それもほとんど茶番のような話でだ。

　俺が悪いわけではないと言われても、割り切れないところがあるな。

　そんな俺の心中を察したのか、マリウスが頭を下げ、彼が話している間黙っていたカミロも併せて頭を下げた

「今回はすまなかった。俺がもう少し早く気がついていれば、どこかで止める手立てもあったんだが」

「俺からも謝らせてくれ。ここまで関わってるとは思ってなかったんだよ」

「お前たち２人で無理なら仕方ない。気にすんな。頭を上げてくれよ」

　これは俺の偽らざる心境である。マリウスとカミロの２人で無理なら俺にも無理だ。

　彼が

　世界を敵に回しての大戦争をおっぱじめる、とか言うことなら俺も持てる力をすべて使ってでも止めるが、そうでないなら止める理由もない。

「それにヘレンを救出できたのは確かだし」

　ヘレンの方を見やると、もうだいぶ落ち着きを取り戻したようで、ディアナやサーミャと何かをボソボソと話している。立ち直ったんなら良かった。

　俺は見た目は３０歳だし、中身ももう４０を越えているから、若い女の子に対してどうするのがベストなのか分からんからな……。

「そう言ってもらえると助かる」

　マリウスの言葉に、俺はいつもの手をヒラヒラと振るあれで返した。

　これで革命の話は一旦終わりだ。ここからはまた別のいつもが始まる。

　今回カミロから引き取りたいものをあれこれ伝えると、いつものとおり番頭さんが頷いて出ていった。

　その後はとりとめもない話だが、マリウスとディアナは久しぶりに兄妹で会話をしている。使用人達の近況なんかのようだ。

　俺達は俺達でカミロと街の話題だが、カミロも一昨日戻ったばかりで大した情報はない。国境から距離もあるし、ここまで混乱が伝わっては来てないようだ。

　そうして諸々の準備が終わり、金を受け取ると俺たちは帰路に着く。

　商談室から出る間際、「エイゾウ、ちょっと」とカミロに呼ばれた。みんなを先に行かせて俺とカミロだけ、部屋に残る。

「どうした？なんかあったか？」

「いやまぁ……お前にだけは伝えておこうと思ってな……」

　カミロはやたらと歯切れの悪い様子で言葉とは裏腹にまだ迷っている様子だ。

「別に伝えたくないならいいんだぞ。聞かないほうがいいことも世の中には多い」

「いや、これは聞いておいてくれ。厄介に巻き込まれる可能性もあるが、知っておいて貰ったほうがいい」

　さっきとは違った様子でカミロが俺に向き直る。その目はどこか決意が満ちているようにも見えた。

「ヘレンはな、侯爵の庶子なんだ」

## そして彼らはいつもに戻る

2019年6月14日

　その言葉は、多少そうかなと思う部分があったにしても十分に衝撃だった。

「救出を依頼した理由はそれか」

「そうだな」

　ヘレンが捕まったことを知ったとして、エースとは言っても騎士などではない、ただの傭兵が１人捕まっただけで救出作戦を行うのは不自然だったが、これで最後の説明がついたな。

「前に本人が『父親は馬具職人だ』と言ってたが、預けてたってことか？」

「生まれてすぐにな。流石にそばに残しておけなかったらしい」

「母親は？」

「ヘレンを産んですぐに亡くなっている。彼女の親は２人共血の繋がりはない」

「じゃあ、ヘレンはそのことを……」

「知らない。言うなよ？」

「言わないよ」

　俺は肩をすくめて言った。いずれ真実を知る必要が出てくるかも知れないが、今はまだその時ではないというのは俺にでもわかる。

　豪放磊落を絵に描いたようなオッさんの娘なら、あの性格も納得だ。わざわざ助けさせたりするあたり、ヘレンと同じで繊細なところもあるのがますます親娘らしい。

　とすると剣の才能も親譲りなのだろうか。侯爵は自分の娘の活躍を喜ばしく見ていたことだろう。貴族なのにそう言うところが甘いのは憎めなくはある。

「で、これを知ったことで都で侯爵にゴタゴタが起きれば、それに巻き込まれる可能性がある、と」

「すまんな」

　カミロは心底すまなさそうに言う。このあたりに巻き込むまいとしてくれていたから、巻き込むようなことを伝えるのには葛藤があったに違いない。

　俺としては家族のことを教えてくれてありがたいと感じはしても、それで巻き込まれるから恨みに思ったりということはない。

「気にすんな。なんかあって困ったときはお互い様だ」

「ありがとう、エイゾウ」

　カミロの態度にも気になるところがあるが、根掘り葉掘り聞くのもなんとなく憚られ、俺はカミロの肩を軽く叩いて部屋を後にした。

「クルルル」

　外に出ると、もう出発準備を終えたクルルが「まだか」と急かしてくる。本当に引っ張るのが好きな子だな。

「すぐ行くよ」

　荷台に乗り込むと、必要な物資と家族のみんなが乗っていた。

「それじゃ、出しますよ」

「おう」

　リケが軽く手綱を操作すると、「クルゥ」と一声鳴いてクルルが走り出す。

　街の中は来たときと同じで、変わらず賑わっている。ヘレンがそれをボーッと眺めている。

「別に傭兵に戻りたかったら、好きなときに戻ってもいいんだぞ」

　俺はヘレンにそう声をかけた。だが、ヘレンは大きく

「今はまだ、その気にはなれない」

「そうか。じゃあ好きなだけうちにいると良い。遠慮はいらない」

「うん」

　俺がそう言うと、ヘレンは素直に頷いた。俺は座席にもたれかかって目を閉じて思考を巡らす。

　今後何をどう作っていけばいいだろうか。まずはヘレンのショートソードだ。その後はヘレンも狩りに出るだろうから弓か。

　合間合間にカミロのところに卸す分も忘れないようにしないといけないし、やることはいっぱいある。

　だがその全てを急ぐ必要はない。ゆっくりのんびりとやっていけばいい。

　今は時間があるし、このところ働きすぎた。俺の目標はスローライフなのだ。

　目を開けると、みんなが思い思いに話をしている。ヘレンもすっかりディアナと馴染んで会話を交わしていた。

　サーミャはリディと話している。弓をひくような動作をしているから、エルフ式の弓の撃ち方の話でもしているのだろうか。

　リケもクルルを操っていて、さながら手綱越しに会話しているようにも見える。

　のんびりとした時間が俺たちを包み込んでいた。

　こうして、俺達はようやっと”いつも”に戻ることが出来たのだった。

# 第７章 アポイタカラ編

## 街から帰って

2019年6月17日

　家に帰ると、いつものとおりに荷物を運び入れる。クルルは久しぶりに荷車を長い距離牽くことが出来てフンスと鼻息も荒くご機嫌だ。

　今日からは人手が１人分増えているので、手分けするとあっという間に終わってしまった。

　寝具も調達したので、新しく増えた部屋の一方に運び込んでヘレンの部屋はそこになる。

　ヘレン個人の荷物は基本的な身の回り品については今日新しく調達しておいたので、それで賄うことになった。足りないものは追々だな。

　服については「兄さんが家のをたくさん持ってきた」ディアナのを最初はそのまま着てもらって、そのうち手直しすると言うことで決まった。

「街へ行った日は帰ってきたら自由時間って事になってる。ヘレンも好きにしてていいぞ」

「そうなのか？」

「ああ」

　俺は頷いた。とは言え、まだ何もないから出来ることも少ないとは思うが。

「じゃあ、ちょっと走竜の様子を見てくる」

　そわそわと言う擬音が聞こえてきそうな態度でヘレンが言った。ずっと気にはなっていたらしい。

「私も一緒に行くわ」

　それを聞いたディアナが手を挙げた。ママが一緒なら大丈夫だろう。

「何もないとは思うが、気をつけてな」

「うん」

「わかったわ」

　２人頷くと外に出ていく。俺はその背中に声をかけた。

「ああ、そうだ、ディアナ、今度から夕方の稽古はヘレンにつけてもらえ」

「いいの？」

　振り返ったディアナの目がまん丸になっていた。捕まったって言っても、別にヘレンの腕が悪かったわけじゃない。少なくとも１対１では俺より強いのだ。

　これはヘレンの自信を取り戻す練習にもなるかなと思っているし。

「うん。ヘレンにもその話はしてある」

　帝国から帰還する途上でヘレンにその話をしたのだ。最初は少し渋っていたが、俺が頼み込むと意外なほどあっさりと頷いてくれた。

　カテリナさんがその話を聞いて「お嬢様はずるい」とひどく羨ましそうにしていたが。

「じゃあ、あとで頼むわね」

「手加減はしねーかんな」

「望むところよ」

「大怪我はしないようにな」

　キャッキャとはしゃぎながら出ていく二人を追いかけるように俺は声をかけた。だが、あの様子だとどれくらい届いたかは分からんな……。

　これから先を考えれば、うちの戦力が向上するのは歓迎こそすれ否定することはない。

　女性しかいないので、その全てを女性に任せなくてはいけないところに、元地球人で古臭いオッさんの観念が疑問を投げてくる。

「女だけ、か」

　ちょっとした作業をやろうと思い、鍛冶場に入りながら俺はふとひとりごちた。

　前にも気にはなったことだが、うちには俺を除けば男は誰ひとりとしていない。クルルもメスらしいし。特に選ばずにそこそこの期間を過ごしてきて、こんなに女性ばかりと知り合うものだろうか。

　いや、マリウスやカミロ、サンドロのおやっさん達男性とも知り合ってはいるのだが、うちに来るような男性が今のところいない。

　この世界に住むそこそこの年齢の男性なら基本的には定職を持っているので、うちに来られるような条件にはならないのも確かではある。

　それを考えればうちに来るのが女性ばかり、と言うのもおかしい話ではないのだが……。それにしても多すぎやしないだろうか。

　俺はちらりと神棚を見やった。祀ってある女神像の微笑みが、自分で彫ったものなのに意味ありげに見えて仕方なかった。

## もう一度

2019年6月19日

　帰ってきたのは昼過ぎだったので、夕方頃まで軽く鍛冶仕事をした。まだチートに頼っているのと帝国で剣の修理はしていたのもあってか、大きな衰えは感じなかった。これなら明日からまた仕事しても大丈夫そうだな。

　一仕事終えてゆっくり片付けをしていると、カランコロンと鍛冶場の鳴子が鳴る。こっちが鳴ったと言うことは、多分ディアナとヘレンが外から戻ってきたのだろう。

　住居のほうがにわかに騒がしくなって、やがて繋がる扉がバーンと勢いよく開いた。

「ありゃ、もう終わってたのか」

　扉を開けたのはヘレンである。

「ああ。もう日が沈むし、そもそも

「ううん、リケ達に聞いたらこっちにいるって言うから、ちょっと見ようかと思っただけ」

　少し残念そうな口調でヘレンが言う。俺は明るめの声で返した。

「明日はお前に手伝ってもらうことがあるから、思う存分見られるぞ」

「え、そうなのか？」

「うむ。あの時約束しただろ？」

　ヘレンを助け出すときに俺が言った言葉。もしかすると覚えていないかもしれないな、と思ったが、

「あ、うん。ありがとう」

　ちゃんと覚えていたようで、ヘレンは少し俯きながら御礼の言葉を述べる。

「それは完成してからでいい」

　俺はそんなヘレンの肩を軽く叩くと（彼女のほうが身長が高いのでやや不格好にはなったが）、住居の方に戻った。

　翌朝、日課の水汲みをクルルと一緒にする。久しぶりに一緒に水汲みが出来て嬉しそう……なんだと思う。走竜の表情がわかるわけじゃないから、希望的観測も込みではあるが。

「俺がいない間はディアナがやってくれてたのか？」

「クルー」

　水汲みのついでに体を洗ってやりながら、クルルに聞いてみる。返事が返ってきても詳細は理解できないのだが、なんとなく「そうだ」と言っているように思えて、朝から心が和む。

「それじゃ帰るか」

「クルルルル」

　”いつも”のとおり、俺は肩に、クルルは首から水瓶を下げて家に戻るのだった。

　その後、朝食やら洗濯やらをすませて、朝の打ち合わせである。

「俺は今日はヘレンの剣を作るよ」

「私たちはいつもどおりで良いですか？」

「うん。今日は俺の作業を見学しつつ、合間で板金を作っておいてくれ」

　俺がそう言うと、5人の返事が返ってきた。さあ、今日の仕事の始まりだ。

　火床と炉に魔法で火を入れる。魔法を使うための原理は俺はよく分かってはいないが、特に長い詠唱などが必要なわけではない。

　なんとなく力の塊のようなものを引っ掴んでギュッとすると温度が上がって火が点く、みたいなイメージである。断熱圧縮にイメージが近い。シリンダーに綿を入れてピストンで一気に圧縮するとポンといって燃えるアレである。

　これがなければ炭の

　魔法をライターぐらいにしか思ってない魔法使いが、この世界で何人いるのかは疑問だが。

　火床に火が回ってきたら、板金を火床に入れて加熱していく。やがて加工するのに適した温度になったところを見計らって、金床に置いて鎚で叩く。

　最初にヘレンの剣を打ったときは魔力についてよく分かっていなかったが、今はその辺りを理解している。

　なので、キッチリと魔力が篭もるようにと、丁寧に板金を叩いていった。

## １本め

2019年6月21日

　板金を熱して叩いて剣の形にしていく。普通のショートソードなら鋳造した本体を整えるのだが、今回は特注なので最初から鍛造だ。

　鍛造の方が鋳造よりも質が良い……とは限らない。それぞれに特性が違うだけの話だ。

　俺が鍛造を選んだのは、単にそっちのほうが魔力をより多くこめられるからに過ぎない。

　鎚で叩けば叩くほど板金は形を変え、魔力が籠もっていく。熱された鉄の赤と魔力のキラキラでなかなか幻想的な雰囲気を醸し出している。

「１週間とちょっとぶりですが、やっぱり親方は鮮やかですね」

　リケがほうっと息を吐いてうっとりしながら言う。そう言うリケも、魔力をこめるという点についてはなかなかのものになっている。

　ドワーフの鍛冶の能力とエルフの魔力の扱いの両方を学んでいるから、将来はとんでもない鍛冶師になってしまいそうに思う。

　実際、前回納入した剣はショートソードもロングソードもかなりの質だった。うちの高級モデルを名乗っていいくらいだ。

「リケもちょっと見ない間に腕を上げてたじゃないか。俺もうかうかしてられんな」

「いえ、そんな。まだまだです」

　俺は笑って返したが、俺の場合はチートでまかなってしまっている。腕を上げるには新しいことをして習熟を深めていく他ない。

　その意味で言えば、リケのほうが伸びしろも限界も上なのではなかろうか。

　まぁでも、伝説の鍛冶師の師匠、と言うのも悪くないな。俺は思わずフフッと笑い、鎚を板金に振り下ろした。

　いつものショートソードなら鍔や握りも鋳造一体成型なので手間なしだが、鍛造でそれをしようとすると当然やたらと手間になる。

　握りと刀身は一体にしておいたが、鍔は別の板金を割って、別部品として作る。当然こちらも魔力マシマシの特別な一品だ。

　組み合わせたときにちょうどいい塩梅になるよう、チートの感覚で長さを決める。

　握り側から刀身の付け根辺りへと鍔を差し込んで、叩いてカシメれば、形は完成だ。

　俺はそばでずっと見学していたヘレンに出来かけのショートソードを渡した。

「まだ握りに革巻きもしてないが、ちょっと振ってみてくれ」

「おう」

　商談スペースあたりのちょっと広くなっているところで、ヘレンがショートソードを最初はおずおずと、やがてビュンビュンと音がするほど振る。

　その様子はさながら舞っているかのようだ。世界が世界なら、ダンサーとしても活躍できたんじゃないだろうか。スラッとしてて背も高いし。

　俺以外のみんなも手を止めてその様子を見ている。ディアナの表情はかなり真剣だ。あそこから学び取れるものが無いかを見ているのだろう。

　今日の稽古はいつもより真剣にやりそうだな。

「どうだ？」

　いつまでも見ているわけにもいかないので、俺は声をかけた。ピタリとヘレンが動きを止める。ちょうどショートソードを突き出した格好だ。

「すげぇよ！！」

　空気がビリビリと振動しているかのように思えるほどの大音量でヘレンが叫んだ。ヘレン以外のみんながびっくりして

　外からガサゴソと音が聞こえた。多分クルルもビックリしたんだな。気がついたディアナが鍛冶場の扉から外に出ていった。

「振った感じ前のと変わらないじゃん！！」

「そりゃそう作ったからな」

　飛びついて来そうな勢いで俺に迫ってくる。決して俺に剣先が向かないようにしているのは、無意識なんだろうがさすがプロと言うべきか。

「耐久性は前より少し上がっているはずだが、今は試せないな」

　と言うより、うちにいる限りはそうそう試す機会はないだろう。

「じゃあ、本当に前と同じなのか。すごいな」

「ああ」

　ヘレンの言葉に俺は頷いた。だが、同じだと言うのが引っかかる。そう作ったのだから当たり前は当たり前なのだが、俺のチート向上のためにも何か……。

「そうだ！」

　俺は思わず叫んでしまう。さっきのヘレンのときと負けず劣らず、みんながビックリしている。

「ヘレン、すまんがそいつは打ち直しだ」

「え、こんなに良いものなのに？」

「ああ」

　俺はニヤッと笑った、そうだ、俺にはアレがあったじゃないか。

「アポイタカラと鋼を合わせて作り直す」

## アポイタカラと合わせ技

2019年6月24日

「アポイタカラ……？聞いたことないな。ミスリルなんかとは違うのか？」

　ピンときていないヘレンが首をかしげる。

「ああ。

　歴戦の傭兵であればある程度の鉱物……というか素材についての知識も持っているようだが、アポイタカラは知らないのか。

　まぁ、北方の鉱物と言えば、ヒヒイロカネだろうからな。

「軽くて強い。オリハルコンやアダマンタイトと比べるとどうかな。使うのは一部分だし、驚くほどは変わらないかも知れない」

「それでも変わるんだろ？」

「そうだな。振った感じは同じかも知れないが、一番違うところは……」

「一番違うのは？」

「光る」

「は？」

「アポイタカラは青く光るんだよ」

「そ、そうなのか？」

「あんまり意味はないみたいだけどな」

　どうもゴースト系の魔物に有効ではあるらしい（とインストールに該当があった）のだが、出くわす機会はほとんどないだろうし、飾り以上の意味が発揮できることは稀だろうな。

「と言うことで、作り直すからもうちょっと待ってくれな」

「アタイはそれでいいけど……」

「けど、どうした？」

「いいのか？高いんだろ？」

「家族に渡すものだし、半分は俺の趣味みたいなもんだしな。気にしなくていい」

「なら、いいけどよ」

　聞いたこともない鉱物が高い、と言うことくらいは推測できるか。うちにある分で金貨２枚（払ったのは１枚だが）もすると思ってるかどうかはわからないが。

「ああ、家族と言えばだ」

　俺は昨日作って鍛冶場においてあったナイフをヘレンに差し出す。

「こいつもやるよ」

「いいのか？」

「うちの家族はクルルを除いてみんな持ってる」

　俺がそう言うと、みんな懐からナイフを取り出して見せた。４人が一斉にナイフを取り出す絵面は、普通の人が見ればちょっと怖いかも知れない。

　でも、うちの家族であることの証明の品にはなっている。

　すると、ヘレンは俺の前に跪いた。さながら叙勲される騎士のようだ。

「ありがたく頂戴いたします」

「お、おう……」

　俺は呆然とするよりなかった。ヘレンはニヤッと笑って俺が差し出したナイフを恭しく受け取った。

「アタイもお偉いさんに謁見するときはあったからな。驚いたろ？」

「驚いたどころじゃないよ」

　俺は驚いたままの顔でヘレンに返事をした。俺が驚いたのは純粋に驚いたのもあるが、もしかして出生に気がついているんじゃないかと思ったのもある。

　様子を窺ってみるとそれはなさそうだが、こっちの理由を口にするわけにもいかないので苦笑してごまかすことにする。

「あんまり驚かすなよ。俺の寿命が縮んでしまう」

「それは世界の損失ですよ親方！ 親方には１つでも多く作っていただかないと！」

　リケが大声でそう言って、あたりが笑顔に包まれた。この家族なら、何があっても大丈夫そうな気がする。

　根拠はないが、俺はなんとなしにそう思った。

　２回柏手を打って、神棚のところに置いてあるアポイタカラをそっと持ち上げる。

　やはり、大きさの割にはずいぶんと軽い。全部使うのなら炉に放り込むところだが、割るので一旦火床の方に入れて熱する。

　やがて温度が上がってきて、なんとか加工ができるところまでいったので、タガネを使って切れ目を入れる。

　そうしたら金床に置いて、切れ目のところで折れ曲がるように鎚で叩いていく。かなり力を入れて叩くがなかなか曲がらない。

　結構な時間をかけてなんとか曲げたあと、その逆側にも曲げる、というのを繰り返し、苦労しつつ適量を割って切り出した。このあたりの感覚はチートに任せている。

　しかし、タガネで切り出すだけでもなかなか骨が折れる。鉄の切りやすさを１とするならアポイタカラは１０くらいあるような気がする。普通の鍛冶屋では手も足も出ないのではなかろうか。

　産出量が少ないこともあるだろうが、加工のしにくさもあまり世間に出回らない理由なんだろうな。

　結局、この日は切り出しまでで終わってしまった。

　なお、その日の寝る直前になって

「炉で溶かして必要な量だけ分けて固めればよかったんじゃないか？」

　と気がついたが、それはまた別の話である。

## 迅雷の剣－初手

2019年6月26日

　翌日、水汲み、身だしなみ、朝食、神棚に拝礼と一通りの日課を終えて、昨日切り出したアポイタカラにとりかかる。

　今回は混ぜ込むのではなく、鋼でアポイタカラをサンドイッチする形で作る。この状態で端を削る、と言うか刃をつければ、ちょうどアポイタカラの部分が刃となって露出する……はずと言う目論見である。

　今のところはチートが無理だと言ってこないので、目論見通りことが運ぶだろうと思う。

　運ばなかったらやり直しだが、そのときにサンドイッチされたアポイタカラをどうするか、考えるだけでも頭が痛いので、そうならないことを祈りたい。

　はじめに、切り出したアポイタカラを火を入れた火床で熱していき、加工可能な温度をチートで見極める。

　熱された金属は普通赤白く光るものだ。それはミスリルでもそうだった。だが、アポイタカラは青く光る。

　普通、鍛冶屋はどれくらいの温度なのかを、その色で見極める。火も、金属もだ。

　それが通用しないのはかなり厄介だろう。もしかするとこの世界でも扱えるのはごくわずかだけの可能性もある。

　加工可能な温度の見極めを一から体得しないといけないからな。

「しかし、綺麗だ」

　俺は思わず呟いた。ぽわっと青く輝いていて、そこだけ切り取ったかのように色が違う。

「ミスリルとも違うんですね」

　リケが俺の呟きに返してきた。熱されて青く光るアポイタカラをじっと見つめている。

「そうだな。この色を覚えるのは厄介そうだ」

　俺はチートで分かるからいいが、リケはそうではない。それでも彼女はドワーフなので人間よりはまだマシだろう。

「頑張って覚えます。めったにない機会ですし」

「おう、頑張れ」

　流石に金貨２枚もするようなものを、ホイホイ買えることはあるまい。

　これは俺の手持ちの金の問題ではなく流通の問題だ。べらぼうに高いと言うことは、それだけ出回らないってことだからな。

　手持ちの金の話なら、なんだかんだで十分に持ってるし。

　加工できる温度に達したら、火床から出して金床に置いて鎚で叩く。

　魔力を吸い込んで固くなったりされると面倒だと思っていたが、そんなことはなかった。この辺りもミスリルとは勝手が違う。一応魔力はどんどん吸収しているようには見える。叩くたびに少しずつ燐光を放ちはじめているからだ。

　ただ、叩くたびにどんどん固くならないのはいいとしても、そもそもがやたらに固い。魔力をたっぷり含んだときのミスリルよりも固いのではと思うほどだ。

　そして、温度が下がるのも早い。すぐに加工できない温度になってしまう。

　ということはつまり、ちょっと延ばすだけでも大変な手間がかかるということだ。ほんの少し延ばしただけで、俺はまたアポイタカラを火床に戻す。

「こいつだけで作るなら、ナイフ程度でも金貨で１０枚は下らないかもなぁ」

　火床でアポイタカラを熱しながら、俺はひとりごちる。

　すると、リケに負けず劣らずじっと作業を見ていたヘレンが言った。

「２０枚取れるだろ」

「そうか？」

「ああ。そもそも変わった素材の武器は高値で取引されるからな。そこにエイゾウの品質が加わったら天井知らずだと思うぜ？ アタイの報酬でも買えない値になってるけど、それでも欲しいってヤツはごまんといるはずだ」

「なるほど。今後の値付けの参考にするよ」

　このところ、作ったものはほとんど全てカミロのところに卸して、アイツの言い値で買い取って貰っている。

　それはもちろん変な値付けをしないだろうという信頼ではあるのだが、こういう変わったものはこっちから値段を言ったほうが買い取りはしやすいかも知れないし、特注品も基本的には相手の思った金額を貰っているが、それでは困る場合には自分で適正な価格を付ける必要もある。

　傭兵でこう言うものの値段をよく知っているヘレンに手伝ってもらって、ちょっとずつでも覚えていかないといけないな。

　火床から取り出して叩くと言うことを何度も繰り返し、夕方にやっと思った長さにできた。

　そいつを２つに割る。これもやはり苦労したが、延ばすほどの労力でなかったのは幸いだろう。

　こうして、ヘレンの新しい剣作りは初日を終えたのだった。

## 迅雷の剣―二手目

2019年6月28日

　翌日、朝の日課を終えた俺はまず鋼に取りかかった。今日はこいつでアポイタカラを挟み込むのだ。

　ミスリルを触ったときも思ったが、今回はあのとき以上に苦労したからか、鋼がやたら素直でいい素材のように思えてくる。

　実際のところ、打てば響くと言うか、思ったように延びてくれるのはありがたい。

　今のところは普通の鋼を延ばしているだけなので、リケも見学していない。

　俺が振るう鎚の音がリズミカルに鍛冶場に響く。ヘレンはディアナと一緒にショートソードの鋳型を作っている。

　少し様子を見てみると、なかなかに器用だ。ディアナも割とすぐに覚えたが、やはり自分のよく知るもの（実際はその関連品みたいなものだが）だと、感覚を掴みやすいのだろうか。

「なあ」

「ん？」

　そんなヘレンを見ていたら、彼女の方から声をかけてきた。

「アタイの前のもこの型に入れて作ってたのか？」

「いや、お前のを作るときは俺が叩いて延ばして作った」

「なんか違うのか？」

「あー……そうだな。叩いた方が魔力を篭めやすいんだ」

　俺は少し迷ったが、正直に話すことにした。

「へぇ、エイゾウはそんなこともできるのか」

「ああ。リケもちょっと出来るぞ」

　俺がそう言うと、リケがフンっと力こぶを作った。彼女は見た目の幼さとは裏腹に結構いいガタイをしているので、そこそこの迫力がある。

　比率で言えば可愛いのほうが遙かに高いが。７：３ってとこか。もちろん可愛いほうが７だ。

「でも、良かったのかよ」

「何がだ？」

「アタイに教えちまって」

「家族だから良いんだよ」

　そう、ヘレンはもう家族だ。まだ家族になって１週間くらいしか経ってはいないが、それでも家族には違いない。

　俺がニヤッと笑うと、ヘレンは真っ赤になって俯いた。ヘレンくらい美人なら言い寄ってくる男の１人や２人いただろうに、男の仕草一つ一つが珍しいのか反応が過敏だ。

「私が来た当初を思い出すわね」

　その様子を見たディアナが混ぜっ返す。男兄弟が多かったからか、そんなにウブでも無かったように記憶しているが、それを言うとめちゃくちゃ拗ねそうなので黙っておこう。

「ほれほれ、仕事だ仕事だ」

　俺が促して、各々自分の仕事に戻っていった。俺ももう一度鋼に取り掛かる。

　そうして、アポイタカラよりも少しだけ分厚くて小さい鋼の板が４枚出来た。

　そのうちの２枚を取って、アポイタカラを挟み込み、まとめてヤットコで掴んで火床に入れた。鋼どうしをくっつけるならホウ砂なんかを用意しないといけないのだが、今回はなしで頑張ってみるのだ。

　アポイタカラの加工温度はレンジが狭いだけで、鋼の加工温度と重なるところがある。そのギリギリのところを見極める。

　１回叩くごとに延びる量が鉄とアポイタカラでは違うので、その差分も織り込んで加工していかなくてはいけない。腕の見せどころだな。チートを使って、なのが忸怩たる思いではあるが。

　火床から取り出して鎚で叩く。間にアポイタカラが挟まっているからだろう、鋼単体とも違う手応えが返ってくる。

　鋼の温度が若干下がりにくいのが功を奏してか、アポイタカラの温度も下がりにくいので、思ったよりは加工できる時間が長く取れる。

　長い、とは言っても短いその間に出来る限り加工を施していく。鋼の方にも十分に魔力が行き渡るようにだ。

　間に異素材が挟まっていることの不利は大きくは感じない。チートさまさまだ。

　間に昼飯を挟んで、夕方になる頃にようやっと思った長さにまで加工できた。出来たのは２本。もちろん両方とも同じ長さで同じ重さだ。

　２つを軽く手で叩いてみる。鋼を叩いた時とは若干違う音……のように感じるがどうだろう。気のせいかも知れない。

　これで形を整えて研ぎ出せば、一旦は完了になるだろう。そいつは翌日のお楽しみと言うことにして、この日は作業を終えた。

## 迅雷の剣―完成

2019年7月1日

　アポイタカラが鋼でサンドイッチされた板、と言った様相のものを火床に入れる。

　それはゆっくりと加熱されていき、やがて加工が出来る温度にまで高まった。

　取り出して金床に置き、鎚で叩く。長さはもう十分なので、ここからは形を整える作業になる。

　叩いて刀身の断面は菱形に、刀身の３／４くらいから先を尖った形にする。菱形の頂点で刃にならないところは叩いて平らにしておく。

　逆の側、持ち手になる方は細く延ばしておくだけだ。実際の持ち手と鍔は鋼で別に作り、あとで固定する。

　鎚で叩く音が鍛冶場に響く。この作業自体は普通のものと大して変わらないし、温度なんかはこれまでに見せているから、リケたちは自分の作業をしていて、リケがショートソードを打つ音と、俺の音が混じっている。

　以前にも何度かあったことではあるが、今回はどちらも鋼の音では無くほんの少しだけ、涼しげなアポイタカラの音も混じっていて音楽っぽさを増している。

「鋼が混じってますけど、ミスリルとも違った音がしますね」

　リケがそう言うと、リディがうんうんと首を振る。リケは見学してたし、リディはそもそもミスリルの剣を修理した時の依頼主だ。

「そうなのか？」

　最初に反応したのはヘレンである。彼女はミスリルを打った時の音を知らない。

「澄んだ綺麗な音だったな」

「そうねぇ」

　サーミャとディアナも応える。彼女たちも見学はしてないが、隣で作業をしていたので音を知っている。

「えー、聞いてみたかったな」

　ヘレンが口をとがらせた。単にタイミングの問題でしかないが、自分１人だけ知らないというのがつまらないのは分かる。

「まぁ、そのうち機会はあるだろ」

　俺は剣を鎚で叩きながら言う。この辺りでミスリルを加工できる職人はそう多くはない。

　都へ行けば加工だけならできる者がいるのだろうが、魔力までとなるとこの近辺では俺以外にいないのは

　なぜなら、そもそも都や街では魔力が少なくてミスリルに込めることが出来ないからだ。それが分かってて魔力の多いところに住んでいる鍛冶屋となると、王国中を探してもそう多くはないだろう。

　俺も別にそれが分かっててここに住んでいるわけではないが。

　ともあれ、であればミスリルがこの辺りに流れてきた時に、俺のところまでやってくる可能性はそこそこに高いだろうし、そうなれば音を聞く機会は十分にある。

　その時にヘレンがうちにいるかはともかく、いる間に聞かせてはやりたいものだ。

　俺がそう言うと、ヘレンはコクリと頷いて、自分の作業に戻った。

　やはり鋼のみとは違い、アポイタカラをサンドした材料では時間がかかった。それでも昼を回って少しした頃になんとか形が出来あがってくれて、俺は胸をなで下ろす。

　その後、鍔と柄の部分を鋼で作る。こっちは鋼だけということもあって、素早く作ることが出来た。持ち手には例のデブ猫印の刻印も入れておいた。

　やはりクオリティも速度も上がっているように思う。自分ではいまいち分からないので、リケに見せてみる。

「どうだろう？あの時間ではいい出来だと思うが」

「いえ、普通に最高級の品と言っていいと思いますよ」

　間髪入れずにリケが答えた。実感のない俺は質問を重ねる。

「そこまでか？」

「ええ。この時間でこれを作られたら、心が折れる鍛冶屋もいるでしょうね」

　真剣な顔でリケが言うものだから、それを茶化そうと言う気が全く無くなってしまう。

「お前がそうじゃないなら良いよ」

「私は親方の最上級を知ってますからね。あそこまでは無理でも、自分が達することのできる限界までは頑張りますよ」

「ほどほどにな」

　あんまり根を詰めて倒れたりされても、それはそれで困るし、まだ若い（ドワーフの年齢は良くわからない）のだろうから、先々を見据えて欲しいものだ。

　その後、刀身の平にしたところの両面をタガネで彫刻する。前に作ってやったやつに似た感じの、稲妻の彫刻だ。彫刻は鋼の部分を全て削り取って、アポイタカラが露出するようにした。

　こうすることで、稲妻が青く刀身に浮き上がることになる。刃と刀身の稲妻が青く光る剣。それの担い手は”迅雷”と呼ばれる傭兵である。持ち主の異名にみあったものになったなら良いのだが。

　出来た部品と刀身を組み合わせて、柄に革を巻く。一通り、全体の形はこれで整ったな。日が沈むギリギリくらいにはなってしまって、リケ達は片付けをしている。

　俺は手が空いてきたヘレンに出来た剣を２本とも差し出す。

「出来たぞ。ちょっと日が暮れかけてるが、試してみてくれ。刃は後で付ける」

「お……おおーー！」

　出来上がった剣に感動したヘレンの声が、作業場に響き渡った。

## ”迅雷”

2019年7月3日

　完成したショートソード２本を持って、ヘレンは叫んだ。鍛冶場の扉がゴンゴンと叩かれる。多分びっくりしたクルルだろう。

「クルルを宥めるついでに外で試すか？」

「良いのか！？」

「もちろん」

　今後は装飾用の刀剣を打ってくれと頼まれる可能性もなくはないが、少なくとも今回のこの剣についてはガチガチの実用のつもりで打ったものだ。

　……わざわざアポイタカラを使ったのには装飾的意味が無いとも言わないが。

　ともかく、特定の個人に使ってもらうための剣なのだ、その使用者が試すことに何の問題があろうか。

　俺は立ち上がって、扉のかんぬきを外して、ゆっくりと扉をあける。意に違わず、そこにはクルルが心配そうに佇んでいた。

「よしよし、ヘレンおねえちゃんがちょっと喜んだだけだから、大丈夫だぞ」

　みんなが通れるだけの幅を空けて、クルルの首筋を撫でてやる。

「クルルルルル」

　クルルは一声鳴くと、落ち着きをやや取り戻した。”やや”止まりなのは俺に続いてみんな家から出てきたからである。遊んでもらえると思っているのかも知れない。

　その役目をリケとリディに任せて（クルルのお気に入りは

「まだ刃をつけてないから、斬れないのだけ気をつけてくれよ」

　俺がそう言うと、ヘレンはひらひらと手を振って応え、そのまま庭の中央まで進んでいく。

　俺たちから十分距離をとったことを確認すると、ヘレンが剣を最初は軽く、やがてヒュンヒュンと音がするほど早く手元で回転させ始めた。さながら新体操競技のようでもある。

　身長が高くてスラッとしたヘレンがやると、なおさらそんな感じを受ける。素早く２本の剣を振り回していると、時折１本の武器のようにも見えてくる。さっき持ったばかりの剣なのに、何年も扱ってきたかのようだ。

　しばらく手元での具合を確認した後、今度は全身を使って剣を振り始めた。一振り一振りの動作がとんでもなく素早い。俺もきっかけの動作はなんとか追えるが、次の瞬間には動作をほとんど終えている。

「いつ来るか分かるか？」

　俺はディアナとサーミャのどちらともなく尋ねていた。

「いいえ、あれから毎日稽古で見てるけど、全然分からないわ」

　俺の問いに答えたのはディアナだ。彼女は数日とは言っても、夕方の稽古でヘレンとやりあっているにも関わらず、全く追いつけないらしい。ヘレンの動きの速さがよく分かる話だな。

　全身を使った動きを見ていると、今度は踊りのようだ。少しずつ動く範囲を増やしていき、時には流れる水のように、時には荒れ狂う嵐のように動く。

　その軌跡をアポイタカラの青い光が追いかけて、雷を纏った積乱雲かのようだ。前の世界の定番ネタで言えば「竜の巣だ……」ってところか。

　動く範囲、動く速度、その両方が頂点に達した瞬間

「ハァッ！！」

　ほの青い光が二条空中を数メートルも

　あれだと刃がついているとかいないとか関係無しに、岩を綺麗に真っ二つにできそうに見える。

　ヘレンは剣を振り切った格好で、息を切らせていた。気温が気温なら身体から湯気でも上がっていそうだ。

「どうだ？」

　ヘレンがやや落ち着いたところで声をかけた。さっきまでの様子を見ていれば、少なくとも標準より下ということはあるまいが、念の為だ。

　彼女はもう少しだけ息を整えたあと、こっちにぐるっと向き直る。なんだか気迫が凄い。俺もサーミャも、そしてディアナも身体を少し仰け反らせた。

　そしてそのままこちらに向けて足を踏み出……そうとして、一旦剣を両方共そっと地面に置く。自分の両脇に１本ずつだ。

　置いた次の瞬間、ものすごい勢いでこちらに駆け出した。剣を置いた格好がちょうどクラウチングスタートみたいだったから、走り出しやすかったに違いない。

　ビックリした俺が動けないでいると、ヘレンはそのまま押し倒さんばかりの勢いで俺を抱きすくめた。身長差もあってちょうど胸のあたりがギュウと締め付けられている。

「最高だよ！やっぱすげぇなエイゾウ！！」

「いててて！ちょっとは加減しろ！！」

　全く身動き出来ないまま、俺は抗議の声をあげた。あ、マジで呼吸がしにくいぞコレ。

「ヘレンが迅雷って呼ばれる理由、よく分かった気がするぜ」

　そんな様子をよそに、サーミャがしみじみと感想を述べ、ディアナが慌てて引き剥がしにかかるのだった。

## のんびりした１日

2019年7月5日

　俺からヘレンを引き剥がすのには、ディアナだけではもちろん無理で、サーミャにリケが加わってようやっとだった。

　リディは力の方はそうでもないので加わっていない。もしかしたら”眠り”の魔法でも使ってくれたかも知れないが、前に聞いた話では元々ある眠気を大幅に増大させるだけらしいので、興奮状態では効き目が全くないかも知れない。

　もちろん、クルルは加わってない。馬１～２頭分の力があるクルルが必要なくらいだと、ヘレンが人間の限界を超えているとかそう言う以前に、俺の肋骨と脊椎が危ないだろう。

　さっきのでも結構ヤバかったが。ミシって音がした気がする。

「あ、ありがとな」

　解放された俺はディアナ達にお礼を言った。前にも似たことがあったな。最初に剣を打ったときだったか、手入れしたときだったか。

　俺がこっちに来て１年も経ってないのだから、確実にそれよりは最近のはずだが、なんだか随分昔のようにも思えてくる。

「す、すまん、エイゾウ……」

　対するヘレンはしょんぼりしてしまった。色々あってからの嬉しいことだから、その感情を爆発させるのは悪いことではない。

「俺はなんとも無かったんだから気にすんな。嬉しかったんだったらそれでいい」

　俺がそう言うと、

「うん」

　ヘレンは頷いて、少し機嫌を取り戻した。

　翌朝、朝食後の打ち合わせの時に、俺は切り出した。

「今日はいつもどおりとして、明日は休みにして、森へいかないか？肉も十分余裕があるんだろ？」

「お、いいな」

　最初に乗ってきたのはサーミャだ。

「そうねぇ。たまには狩りは抜きで森を散策するのも良いかも知れないわね」

　次にはディアナが相槌を打ってくれた。リディはコクコクと頷いている。リケも異論はないらしい。

「アタイも行っていいのか？」

「もちろん」

　ヘレンがおずおずと聞いてきたので、俺は即答した。

　長いこと傭兵で

「じゃあ、そう言うことで。もちろんクルルも連れて行くから、薬草や果実は見つけたら採取するか」

「賛成です。狩りや採取のときは、果実はともかく、薬草までなかなか手が回らないので」

「それじゃ、明日はリディが目星をつけた薬草のところを中心に、森の散策にしよう。あくまでも休みだから、ガッツリ採ろうと思わなくていいからな」

　リディが力強く頷き、他のみんなも返事をして、朝を終えた。

　この日は俺は鋳造までは終わっているショートソードの仕上げと、ナイフを数本だけ作るにとどめることにした。

　明日休んだら、明後日は街へ行く日だが、リケの作る一般モデル（もうそろそろ高級モデルに近づいてきている）の品は十分に生産できていて、今日の分があれば俺の高級モデルは数本でもカミロは文句を言うまい。

　前の世界とは違い、かなり好き勝手に仕事をしているから仕事でストレスが溜まることは基本ないが、それでも翌日が休みだと思うとウキウキしてしまうのは、まだブラック時代の精神が肌身に染み付いてしまっているせいだろうか。

　そんな俺の心を反映しているのか、鎚の動きもなんだか軽い。剣の仕上げもナイフを作るのもスイスイと進む。

「親方ノッてますね」

　そんな風にリケに少し茶化されたりもする。そんなことも全く気にならない。リケに悪意がないことが分かっていることもあるが。

「そうか？まぁ、明日が楽しみだからな」

「なるほど。なんかそれ以外にもありそうですけどね」

「それ以外？」

「作る早さ、純粋に早くなってません？」

「え、そうか？」

　俺は全くそんな感じは受けていないが、リケから見てそうなら、そうなのかも知れない。今日は気分の高揚もあって正確なところが把握できないので、後日また改めて検証が必要だな。

　今日はリケはナイフのみを作って、他のみんなはワイワイと板金を生産している。

　休みではないが、これはこれでゆっくりした日々ではあるな、そんなことを思いながら、１日の作業を終えた。

## ピクニック

2019年7月8日

　翌日、日課だけは済ませておいて、出かける準備をしていく。弁当にするのはいつもの甘辛く煮ておいた猪肉を、無発酵パンで挟んだ角煮バーガーみたいなアレである。

　鶏卵みたいなものがあればもう少しバリエーションが出来るのかも知れないが、この世界の鶏卵の安全性ってどれくらいのものなんだろうな。

　半熟でも不安は残るが、この世界の細菌類が前の世界のサルモネラ菌と同じく７０℃以上で加熱すれば平気なのであれば、いつか入手出来るように取り計らってはみたいところだ。

　無いものねだりをしても仕方がないので、いつもの弁当をこさえたあとはミント茶を用意して水袋に入れ、雑嚢にまとめておいた。

　森に入るので、みんなも思い思いに動きやすい服装に着替えた。

　念の為ではあるが、俺とヘレンはショートソード、リケは短槍、他の３人は弓を持っている。この体制なら少々厄介なのに出くわしても平気だろう。武力的にも随分と充実してきたな……。

「それじゃ出発するか」

　俺の言葉に家族みんながめいめいの言葉で返事を返してくる。全員が出たことを確かめると、家の扉を締めて鍵をかけておいた。

　外ではクルルがソワソワしながら待っている。昨日話してはおいたが、理解したのかそれともみんなの様子から察したのかはわからない。

　いずれにしてもやっぱりこの子は賢いよなと思う。親バカと思わば思え。

　そのクルルに雑嚢を預ける。簡易荷車は音が大きいし、どこまで耐えられるかわからない上に、クルルがこう言うときは首から下げたがるので、縄を使って雑嚢を首から下げるようにした。

　６人分の食料＋水（茶だが）なのでそこそこの重さがあると思うが、クルルは意に介した様子もない。

「荷物頼んだわね、クルル」

　ディアナがそう言うと、クルルは機嫌よく「クルー」と一声鳴いて、俺達６人と１頭は森の奥へと歩き始めた。

　空からの陽光がところどころをスポットライトのように照らす中を歩いていく。今日は晴れてよかったな。

　そうそう、天気といえばだ

「もうすぐ雨期が来るんだったか？」

「そうだな。アタシの勘だと来週か遅くても１ヶ月以内には来る。そこそこ続くと思う」

　俺の発した疑問にはサーミャが答えてくれた。恐らくは生まれたときからここに住んでいる彼女の言葉だ、間違いあるまい。

「じゃあ、そのあたりは納品を休みにするかなぁ」

　荷車の方は明日の納品で布地を手に入れて、幌を急造すればいいとしても、クルルに布をかけて合羽にしたところでほとんど雨ざらしなのは変わらない。

　あくせく働く必要もないくらいには貯金もあるわけだし、カミロの側が困るのでなければ、街までとは言っても長距離の移動は避けたいところだ。

「その方が良いわね」

「材料も食料も備蓄は十分にありますし」

「じゃあ、そうしよう」

　俺もその方が嬉しいので、翌週の納品はしないことにした。実際にはカミロが困るかどうかだが、まぁなんとかするだろう。

　家を出てから１時間ほどゆっくりと森の中を進んだ頃、リディが突然「あっ」と声を上げて走り出した。

　俺たちも慌てて後を追う。追いついてみると、少しだけ先に行ったところでリディがしゃがみこんでいた。何かを採っているらしい。

「なんか見つけたのか？」

　リディはコクリと頷いて、今採ったらしきものを俺達に差し出した。

「このキノコは貴重な品です」

　そのキノコは昼間にも関わらず淡い燐光を放っている。前の世界でもツキヨタケなんかは光るらしいが、夜間でないと分からないはずだ。

　昼間にも関わらず、光って見えるということは夜間に見たらかなり明るいはずである。

「煎じて飲むと、いろいろな病気に効きます。乾燥させる必要がありますが」

「へえ、便利だな」

　俺が答えると、リディは再びコクリと頷いた。そんな便利なものなら慌てて採取するのも分からないではない。

　素人がキノコを採ると色々事故の元になるが、リディは森に暮らしていたエルフだ。見間違いはしないだろう。……しないよな？

「アタシはこのキノコ知らなかったなぁ」

　サーミャが口をとがらせてぼやく。黒の森の獣人として知らないことがあるのが気に入らないのだろう。

「あの蔦にしか寄生しないうえに、雨期の前のこの時期にしか生えないんです。水に濡れると溶けてしまいます」

　キノコのいわゆるキノコの部分は子実体と言って、植物で言うところの花や実を兼ねたものであり、茎や根にあたる部分は菌として土の中に広がったりしているらしいが、このキノコは蔦の中に菌糸を伸ばしてそこから栄養を得ているのだろう。

　この世界のこのキノコが前の世界のものと同じようなものであれば、の話だが。

「やっぱりエルフは物知りなんだな！」

　ヘレンが遠慮なくそう感心して、リディは気を悪くすることもなく、照れて身を縮こまらせるのだった。

## 薬草

2019年7月10日

　リディが貴重なキノコと言うだけあって、周辺にある似たような蔦を探したが、結局見つかったのはその１本だけだった。

　１本だけでもいろんな病気に効くなら、いざと言うときにも心配が少ない。うちは森の奥だし、何かあっても緊急時には手遅れになることが多いだろうからな……。

　この世界の今の医療レベルは当然前の世界と比べるべくもないが、それでも適した薬品があるかどうかの違いは大きいだろう。

　病気といえばだ、俺は疑問を口にした。

「病気を治す魔法ってあるのか？」

　魔法の詳しい知識についてはインストールにもない。実際、リディがホブゴブリンとの戦いで見せた魔法も具体的にどんなものなのか、俺は理解していないのだ。

「ありますよ。簡単なものなら使えるものは多いはずです」

　疑問にはリディが答えた。うちで魔法の専門家と言えば彼女だ。

「簡単、と言うと熱っぽいのを治すとか？」

「そうですね。頭痛と微熱くらいなら私も治せます」

「そうなの！？」

　リディがコクリと頷く。前の世界でしょっちゅう緊張性頭痛になっていた（肩こりと並ぶ、デスクワークの職業病みたいなものだ）俺としては、羨ましいったらない。

「それでも万能ではないので……」

　リディだけでは腹痛や微熱以上の熱が出るような病気は治せない。その時はキノコや薬草……つまりは薬の出番と言うわけだ。

「都の医者でも頭痛やら腹痛を治す魔法を使えるのがいるけど、やたら高いのよね」

　今度はディアナが答えた。都くらいになるとそう言うのもいるんだな。

「どれくらいするんだ？」

「頭痛で金貨１枚かな」

「そりゃ高い」

　値段を聞いて俺は苦笑した。うちが一回納品して得られる金額を考えたら、それを超えているはずだ。

　よほど酷い頭痛ならともかく、日常的に呼びつけるとか専属としてお屋敷に、と言うわけにはいかない額だな。

「だから普通は薬草やなんかで済ませるわ」

「だろうな」

　こちらに来てすぐの頃、解熱の薬草を見つけたが、あんな感じで頭痛に効く薬草があるならそっちの方が遙かに安いはずだ。

　もしくは薬草同士を組み合わせて、頭痛に効くように処方するのかも知れないが。

　こっちの世界の医者は魔法使いと

「あ、ありました」

　リディが再び小走りに駆け寄る。今度は蔦に生えるキノコなどではなく、そこに生えている草そのもののようだ。

「これは腹痛に効く薬草ですね」

　リディはそっとその薬草を摘み取って俺に見せた。ほんのり赤い色をした草だ。

　うちの周囲では見たことがない。ちょっと脚を伸ばした甲斐はあっただろうか。

「うちの畑に植えられるかな？」

「大丈夫だと思います」

「じゃあ、２株ほど貰っていくか」

「はい」

　リディが小さく頷いた。雑嚢からボロ布と縄を取り出す。なるべく元気なままで運ばないと、草とはいってもかわいそうだからな。

　俺とリケ、サーミャとヘレンでナイフを使って草の周りの土ごと掘り起こし、それを布でくるんで、解けないように縄でくくっておく。

　くくった草はクルルの首に結わえておいた。

「戦利品だな」

「クー」

　クルルが嬉しそうに身体を揺らす。落ちないかと少し心配したが、どうやら杞憂だったようだ。

　ブラブラと揺れはするが、外れたり土が振り落とされたりと言うことはない。この様子ならクルルが歩いても気がついたら落ちてたりはしないだろう。

　ぽっかりと空いた２つの穴は一応塞いでおいた。天然の罠みたいになって、走っている動物（獣人や人間を含む）が引っかかっても寝覚めが悪いからな。

　その後ものんびりと森の中を歩いていく。鳥の鳴き声が響き、風のそよぐ音が辺りを包む。そんな中を他愛もない話をしながら進んでいくのは、ピクニックというか冒険というか、ともかくそんな感じで男心も十分に刺激されるのである。

　無論、本来であれば結構危険な場所ではある。

　ただ、今はサーミャと言うこの森に慣れている狩人に、植物全般の知識があるリディ、武力としては最大のヘレンと及ばずながら俺もいるから、勢い安心の方が勝ってしまう。

　そんな弛緩した空気を悟ったのかどうなのか、それとも気が抜けたのはフラグであったのか、唐突にサーミャが立ち止まった。明らかに警戒している顔である。

　同様にクルルも立ち止まって首を巡らせている。この２人が同時に止まって警戒しているということは、何か危険なものが近くにいるに違いないのだ。

　俺たちもそれを察して、それぞれの武器を構えた。

## 戦い

2019年7月12日

　サーミャのアンバーの虹彩にある丸い瞳孔がキュッと縮まって、その緊張を表していた。

「エイゾウすまない、こっちは風上だったから気がつくのが遅れた。大黒熊だ」

　弓の準備をしながらサーミャが謝る。サーミャで気が付かないなら、相手が人間じゃなきゃ誰も気が付かないだろう。

　だからこそ謝っているのだということも理解はしているが。

　俺は短く「気にすんな」とだけ言っておく。

　辺りに首を巡らしていたクルルと、サーミャが注視する方向が一致した。

「クルルも分かるか」

「キューゥ」

　クルルがいつになく緊張している。最悪の場合は彼女だけでも逃げて貰おう。

　基本的には魔力を摂取して生きる走竜なら、この森であれば余裕で生きていけるだろうし。

「こっちから仕掛けるか？」

「いや、茂みの方にいるからそれは止めたほうがいい」

　俺たちが今いるのは下生えがやや少なくなっているようなところだ。サーミャとクルルが警戒している対象は低木が生えているところで、よく見えない。

　そちらに向けて俺とヘレンが前衛として前に出る。その後ろには槍を持ったリケ、更に後ろにディアナ、リディ、サーミャが構える。

「俺とお前で片付くと思うか？」

「アタイも熊とはやったことないからなぁ」

「俺はあるぞ」

「あるのかよ……」

　ヘレンが呆れた声を出す。あのときは槍だったが、今回はショートソードだ。ロングソードを持ってきた方が良かったかな。

　リケと得物を変える事も考えたが、リケのリーチを補うために槍を持たせているのに、それをしては意味がなくなるな、と考え直した。

　茂みからガサガサと音がする。俺の鼻にも獣の匂いと、こびり付くような特徴的な匂いが薄っすらと届いてきた。血の匂いだ。

　俺でうっすら分かるということは、サーミャは色濃く感じているのだろう。後ろにいるから表情を見たりは出来ないが。

　全員の緊張が辺りを支配した。一瞬、シンと静まり返る。鳥も虫も全てが息を潜めていて、全ての時が止まったかのような錯覚に陥る。

　次の瞬間、茂みから巨体が飛び出した。一気に襲い掛かってくるかと思ったが、俺たちを見て立ち上がった。威嚇行動だろうか。

　なんにせよ、そこを見逃す俺やヘレンではない。事前の打ち合わせはなかったが、分散して駆け寄る。

　熊は一瞬戸惑いを見せたが、利き腕が右だったりするのだろうか、そちら側から近寄っていた俺目掛けて腕を振り下ろす。

　以前に別の熊とやりあった時のことが頭をよぎったが、すぐに追い出して、倒れ込むようにしてその腕をなんとか避ける。

「フッ」

　その隙に一気に間合いを詰めたヘレンが短く息を吐いて、二刀流のショートソードを振るった。試しの時にも見た青い迅雷が空間を奔る。

　その迅雷が通り過ぎたあと、熊の左腕はスッパリと切り落とされていた。鮮やかと言うよりない。

「グオオオオオオ！」

　熊が呻く。これで恐れをなして逃げてくれればいいのだが、その目は怒りに燃えているように見えた。

　その巨体に似合わぬ素早さでヘレンに向き直る。だが、そこへ３本の弓が突き刺さった。

　どれも俺特製の矢じりだ。恐らくは金属製の鎧も貫通するだろうそれらは、熊の毛皮を易易と貫いている。

　熊は再び吠えると今度はそちらに頭を巡らせようとする。

　だが、そこに二条の青い光が奔る。ヘレンのショートソードが再び雷となって熊の首を襲ったのだ。

　頭を失った熊の体は、しばらくゆらゆらと動いていたが、やがてどう、と地面に倒れ込んだ。

## ８人目

2019年7月15日

　倒れ込んだ熊を俺とヘレン、少し離れてリケで取り囲む。

　さすがに首と身体が泣き別れになった状態では、魔物だろうと助かりはしないが、念には念だ。

　他の三人は周囲の様子をうかがっている。この隙を狙っている別の獣なりがいないとも限らないからな。

　しばらく様子を見ていたが、やはり動き出す様子は全くない。みんなゆっくりと武器をおろす。

「みんな、怪我はないか？」

　俺はそう声をかけたが、返ってきたのは異口同音に無事を知らせる声だ。

　まぁ、あっという間にヘレンが片付けてしまったからな。俺が攻撃を避けるために転がった以外に怪我する要素もない。

　みんなを見た感じ、返り血などもほとんど浴びてないようだ。それを見て俺の意識も完全警戒から通常に切り替わった。

　一瞬のことだったが、気を張っていたぶんの疲れがどっと襲いかかってくる。

　俺はたまらずその場に座り込んだ。

「この熊は魔物化しかけてたのかな？」

　俺は疑問を口にした。

「余り澱んだ魔力は感じませんでしたけどね」

　と、リディが言う。じゃあ、魔物にはなっていなかったのか。

「大黒熊で腹をすかせたやつは、獲物を見つけると次々襲う習性はあるけどな」

　そう続けたのはサーミャだ。蜘蛛でそんな習性をもったやつはいるが、哺乳類ではちょっと思い当たらない。

　この黒の森は比較的獲物の数が多くて余裕があるからこその習性である気はするが。

「放棄した獲物はどうなるんだ？」

「そのままか、運が良いか悪いかはともかく、戻ってきたときに腹が減ってたら腹ん中だな」

　とにかく獲物を多く狩って腹を満たしていく方法か。

　食い切れなくても狼なり他の動物なりが始末するし、そうならなくても土にかえっていく肉体は森の養分にはなるだろう。

　そう考えるとうまく出来ているような、そうでないような、自然の仕組みを感じてしまうな。

「エイゾウ」

　そんなことを考えていたら、サーミャがやや緊張を維持した声で話しかけてくる。

「どうした？」

「こいつが倒したはずの獲物がどうなってるか確認した方が良い」

　こいつの血の臭いで俺にはもう感じとれないが、こいつが現れた時点で血の臭いはしていた。そのときのがこいつのものでないとすれば、それはこいつが倒したものであるのは間違いない。

　それが鹿なのかウサギなのかは分からないが、サーミャが確認した方が良いというならした方がいいか。

　熊の始末については、食材に出来なくはないが森に任せることで一致した。

　前の時はこっちから探しにいって倒したから食ってやるのが供養かと思ったのでそうしたが、今回は遭遇戦と言う違いがある。

　つまり、今回の倒し倒されは、人数の差こそあれ完全にお互い様だ、と言う判断である。

　俺は根が生えてきそうな尻を「よっこいしょ」と掘り起こして立ち上がると、みんなでサーミャの指し示す方へゆっくりと進んでいった。

　ゆっくりでも体感的にはさほど歩いていないところでサーミャが足を止めた。

「この辺か？」

　俺が聞くとサーミャは無言で頷く。

　俺はみんなに合図をして、あたりの捜索に移っていくが、サーミャとクルルはともかく、他のみんなは鼻が利くわけではない。森の知識が豊富なリディが多少変化に気がつきやすい程度の話である。

　多分俺たちよりもサーミャが見つける方が早いだろうな。

　その意に反して、声が聞こえた。

　俺たちは慌てて駆け寄る。そこにあった……いや、いたのは狼であった。それも２頭である。片方は大きな体躯をもった立派な大人だったが、身体の中心辺りが切り裂かれている。

　既に事切れているのだろうか、ピクリとも動かない。チラッとサーミャを見たが、首を横に振った。こっちは駄目か。

　もう１頭はさっき聞いた声の主だ。かなり身体の小さな、子狼と言って良い大きさの狼だ。

　彼か彼女か分からないが、とにかく今もキャンキャンとこちらに向けて威嚇をしている。事切れている狼はこの子狼をかばったのだろうか。

「お前が言ってたのはこの子のことか」

　サーミャに聞くとコクリと頷く。親を失った子狼か。血の臭いで寄ってきた別の獣が仮に狼であっても、別の群れの子供を保護してくれるかどうかは分からない。

　それ以外の獣がよってきた場合は言わずもがなだ。

　気がついてしまった小さな命をこのまま見殺しにするのも忍びない、と言われれば俺も無視できるかは怪しいものだ。

　チラリとみんなを見ると、一様に期待したような目をしている。俺はため息をついて言った。

「分かった、助けよう」

　俺はこの子狼をどうすれば無事にここから連れて帰られるか、それを考えることに集中した。

## 子狼

2019年7月17日

　子狼は子犬のような声で俺たちに向かって吠え続ける。この声で他の獣なりが寄ってくるとまずい。

　俺たちはともかく、この子も危険に晒すことになる。なんとか早く黙らせるなりしないとな。

「ご飯あげたらついてくるかな……」

　俺はボソリとつぶやいた。そんな簡単な話なら良いんだが、多分それはないな。

「……来ると思うぞ」

　つぶやきに同じくらいの声量で返してきたのはサーミャだ。

　てか、来るのかよ。さっきの熊の肉を切り取っておけば良かったな。

　この子の体には良くないが、仕方ない。クルルの首から下げている雑嚢から弁当を取り出し、角煮サンドの肉だけを抜き取って、見せながら少しずつ近寄る。

　子狼はほんの少しだけ後ずさりをしながら、今も俺に向かって吠えている。

　ある程度近づいたところで、子狼が吠えるのをやめて鼻をヒクヒクさせ始めた。とりあえずは鳴き止んでくれたので一安心ではある。

　俺はゆっくりと地面に肉をおいて、手の届かないところまで離れてそっとしゃがんだ。子狼が鼻をヒクヒクさせながらジリジリ、ヨタヨタとと置いた肉に近づいてくる。

　そして肉に辿り着くと、慎重に肉の臭いを嗅いでいる。その後、すぐにハグハグとがっつきはじめた。動物の子供がハグハグ食べてるところは可愛いな。

　それは俺の肩のＨＰがガリガリ減っていることからも分かる。可愛いのは十分よく分かるから、そろそろ止めようなディアナ……。

　やがて食べ終わった子狼は、じっとこちらを見つめはじめた。俺たちは手出しをせずに見守っていると、やはりヨタヨタとこちらに近づいてきた。

　手の届く範囲まで寄ってきたところで、子狼はおすわりをする。そこから更に近づいてくる気配はない。

　ええい、ままよ。俺は思い切って、しかしゆっくりと手を差し出した。

　もしこれで噛まれて狂犬病のような病気を持っていたら、その時点でアウトだから結構なギャンブルである。チップは俺の命だ。

　ゆっくりと差し出した手を子狼はクンクンと嗅いだ。とりあえず第１段階はクリアか。

　しばらく嗅がせていると、尻尾をパタパタ振りはじめたので、手をゆっくりと動かして頭をそっと撫でた。特にビックリして逃げると言うこともなく、気持ちよさそうにはしている。

　「よしよし、いい子だ。俺たちについてくるか？」

　俺は子狼の目を覗き込みながら言った。子狼は俺を見返し、尻尾を振りながら

　「ワン！」

　と元気よく一声鳴いた。そっと抱き上げるが、抵抗もされない。この隙に俺たちはここから離れることにした。

　恐らくは親であろう狼の亡骸をどうするかは迷ったが、そのままにしておいて土に還っていくのも森のサイクルではある。心苦しいがそのままにしておくことにした。

　やや早足で家に帰る方向へと森を進む。今日のピクニックはもちろん中止である。

　抱っこした子狼は強い強い希望でディアナに預けた。子狼は視点が高くなったからか、興味深そうにキョロキョロとあたりを見回したり、匂いを嗅いだりしている。

　逃げ出そうとかする気配はない。むしろ、楽ちんと思っているかのようだ。

　手が空いた俺とヘレン、そしてサーミャの３人とクルルで警戒しながら進む。

「ずいぶん早く懐くもんだな」

　ディアナの方をチラッと見て、俺は言った。隣でさっきの子狼のように鼻を動かして、臭いを警戒しているサーミャが答える。

「こいつも親が死んだのはなんとなく理解してるんだよ。あそこに留まってたのは、どうしたらいいか分からなかっただけだろ」

「そこでご飯くれたから、この人達は大丈夫、ってことか」

　サーミャが小さく頷く。俺は話を続ける。

「森狼も群れでいると思ってたが、親と子供だけだったな。はぐれたのかね」

　以前に見たときも親と子供だけを見たが、あれも近くに他の兄弟姉妹なり群れなりがいたはずだ。少しの間はぐれてしまうことはあっても、完全に群れから離れて行動していると言うのは考えにくそうに思える。

　俺の言葉にサーミャは首を横に振る。はぐれたわけではないのか。

「あいつはこの時期の子供にしちゃ体が小さい。何か問題があったんだろうけど、普通そう言うときは母親は子供をほったらかしちまうもんだ」

「それをしなかった？」

　サーミャが今度は大きく頷いた。

「理由まではわかんないけどな。それで群れを追われたかしたんだろ。足手まといがいると群れ全体が危険になるから、それ自体はおかしい話じゃない。それで森を

「俺たちが見なかっただけで、熊の獲物を横取りしようとしてた可能性もあるか」

「そうだな」

　うちで足手まといになるってことはないし、強いお姉さんたちもいる。新しく命を迎えることには必ず責任が発生するが、この子に関して言えば、少なくとも成長するまではその責任を全うできるだろう。

　ディアナのほっぺたをペロリとやって喜ばれている子狼を見て、俺はそう思った。

## きみのなまえ

2019年7月19日

　帰りは家族全員の警戒もあってか、特に危険なものに出くわすことなく家まで辿り着くことが出来た。

　ディアナが俺に促されて子狼をおろすと、興味深そうに辺りを駆け回る。

「見えないところには行くなよ」

　まるでネズミ花火のようにウロチョロと走り回る子狼に俺が声をかけると、ピタッと止まってこっちを振り返り

「ワン！」

　と返事をしたあと、再び走り始めた。お利口さんだ。

　クルルから荷物を外すと、クルルが子狼の方へ歩き始めた。あの子の面倒を見ようと言うことだろうか。

　うちで言えばお姉ちゃんだもんな。うちに来た順番で言えば間にヘレンが挟まってなくもないが、年齢上はおそらくはヘレンの方が上だ。

　クルルとサーミャで言うと、ギリギリでサーミャだろうな。彼女は獣人年齢で５歳だ。クルルは多分それよりは幼いような気がする。

　竜の年齢なんて分からないので、ただの勘だが。もしかすると１８０歳とかの可能性もある……のか？

　子狼が一番年下なのは確実だし、それよりは間違いなく上なのだからクルルお姉ちゃんでいいだろう。

「じゃあ頼んだぞ、クルルお姉ちゃん」

　そう声をかけると、クルルは「クー」と一声鳴いて、子狼が走り回っている辺りへゆっくりと向かっていく。

　ディアナが一緒にふらふらと向かっていきそうだったが、咳払いをして食い止めた。良かった、まだ理性が残っていたか。

　クルルから下ろした荷物を倉庫に運び込んだ。例のキノコと薬草を乾燥させるために入れてある。

　ついでに干しただけの肉をいくらか切っておいた。あの子狼の分である。

　結局食わなかった弁当はみんなで話して、庭で食うことにした。

　家まで戻ってきたので、茶は少し温め直して、その間に干し肉も茹でて柔らかくしておく。狼が何ヶ月で固いフードでも大丈夫なのかは知らないが、恐らくはまだ控えた方が良い年齢だと思う。

　なので柔らかい肉を用意するというわけだ。今後は獲物を獲ったときに生肉を多めに残しておかなきゃな。

　庭にレジャーシート代わりの布を敷いて、その上に弁当やお茶、子狼のぶんの肉を準備する。

　匂いを嗅ぎつけたのか、あるいは準備する様子から察したのか、少し離れたところでクルルと遊んでいた子狼がこちらへ向かってきた。呼ぶ手間が省けて助かる。

　めいめいにシートの上に座ると、子狼はディアナの隣にお座りした。そこに味付けも何もしていない、茹でて柔らかくした干し肉を置いておくと、早速食べ始めた。

　まぁ、待てを覚えさせるのもまだ早いだろうし、とりあえずは何も言わずにおく。

　我々人間組はいただきますをし、クルルはシートのすぐ脇に寝そべった。彼女はあまり食わないからな。

「さて、この子の名前を考えないとな」

　ハグハグと肉をがっつく子狼を見ながら俺は言った。

「エイゾウは良い案ないの？」

　ディアナが聞いてくる。俺はおずおずと口を開いた。

「いや、俺は……」

「エイゾウは名付けのセンスが全然ないんだよ」

　サーミャがあっさりとネタばらしをした。俺は両手で顔を覆う。

「親方が……」

「そうなんですね……」

　リケとリディが優しい声音で話しかけてくるのが聞こえる。俺はますます縮こまった。

「まぁ、そんなわけでアタシたちで決めるのが良さそうだ」

　サーミャがそう言って、話を前に進める。俺は顔から手を離した。

「この子は雄雌どっちなのかしら？」

　そう言いながら、ディアナは早くも肉を食べ終わった子狼を抱き上げて、股間の辺りを確認する。横からはサーミャが覗き込んでいる。

「

「女の子ね」

　サーミャが確認して、ディアナが後を引き取る。また女の子が増えたのか。そろそろ、俺以外の男が増えて欲しいところなんだが……。

　一応、俺も頭をひねる。下手の考え休むに似たりではあるが。

「ルーシー」

　みんながうんうん唸って名前を考えていると、ボソリとリディがつぶやいた。

　なるほど、ルーシーね。

「可愛らしくて良いんじゃないか？」

　俺は素直な感想を口にする。サーミャやディアナ、リケにヘレンも異論はないようだ。

　ディアナは子狼を下ろすと言った。

「じゃあ、あなたの名前はルーシーね」

「ワン！」

　こうして、子狼改め、ルーシーがうちの家族に加わった。

## ２本目

2019年7月22日

　ルーシーがいち早く食べ終わって辺りを走りたそうにしていたので、例によって「見える範囲でな」と言うと、元気よく返事して走り始める。

　うたた寝をしていたクルルもそれを察したらしく、のそりと起きてゆっくりと後を追い始めた。

　ルーシーもちゃんと言いつけを守って、俺たちの視界からは離れないようにしている。本人（本狼？）も俺たちの見えないところに行ったら危ないのはなんとなく理解してるんだろうな。

　そうやって走り回る姿を見ながらの飯はなかなか楽しいものになった。

　そうやってのんびりした昼食を終えて、俺とサーミャが横になる。他のみんなは座ったままで、なんだか外国の公園でのんびりしている家族みたいだ。

「ルーシーの小屋どうするかなぁ」

　俺はつぶやいた。別に家かクルルの小屋でも十分な気はするんだが、専用の犬小屋ならぬ狼小屋があっても良いかも知れないな。DIYの基本って感じもある。

　いや、もう部屋の増築とか走竜の小屋まで建てておいて、DIYの基本もなにもないのも確かではあるが。

「いらないんじゃない？」

　そう言ったのはディアナである。

　あれは多分、家に居させれば良いとか思ってるな。

「貴族が狩猟犬を飼うときは、家に入れるのか？」

「いいえ？うちでは飼ってなかったけど、飼ってる家は１頭や２頭じゃきかないから、専用の建物と管理人を置いてるわよ」

「そりゃそうか」

　貴族様の狩りともなれば、広大な野山なんかでやるんだろうしなあ。１頭や２頭じゃカバーできないだろう。

　そんな数になったら専門家でもいなければ管理しきれないのは自明だ。その分の管理費もかさむだろうし、貴族様と言うのも大変だ。

「獣人は……飼うとしてもねぐらに一緒か」

「アタシたちはねぐらを時々変えるからな」

「だな」

　サーミャ……と言うか獣人たちはねぐらを変える。時々変えるなら、そのたびに小屋を作ったりはしていられないだろう。

　であれば、飼うなら基本的にねぐらで一緒に生活することになるはずだ。

「ドワーフは？」

「犬を飼ってる工房はありましたけど、基本番犬なので、小屋を作って外ですね」

「ドワーフだとちゃちゃっと作りそうだ」

「それもあります」

　リケたちドワーフはドワーフで思った感じの答えだ。家の増築なんかもやるってくらいであれば、チャッチャと犬小屋くらいは作ってしまうのは分かる。

「エルフは……」

「私たちは村の共有財産みたいになりますね。森に集落があるので。なので、小屋のようなものもなく、犬や狼の気の向いたところにいるというか、共存しているというか……」

「なるほど」

　リディはやや食い気味に答えた。エルフの場合は単に犬や狼が村に居着くみたいな感じになるのか。前の世界から引きずっていたエルフ感に合致する感じの情報が久々に来たな。

「傭兵生活してると、犬飼う手間はかけられないか」

「飼ってるやつはほとんどいなかったなぁ。たまにいたけど、宿に入れないから、ずっと野宿で平気なやつでないと無理だ」

　逆に言えば、犬のために野宿で我慢しているやつがどこかにいるかも知れないと言うことである。人間のペットに対する愛情は底が知れないな。

　その後も色々話したが、結局、小屋は作らないことと特にどこかにつないだりはしないことに決まった。

　まだ子狼なのだから、つなぐだけはしておいた方が良いのではないか、とディアナが言ったし俺もそう思ったが、今走り回っている様子を見ていてもクルルが誘導したりするまでもなく、俺たちの視界の外に出ないように……つまり、ルーシーからも俺たちが見える範囲でしか走り回ってないので、平気だろうと言う判断である。

　あとはクルルと同じく、万が一の場合はここを放棄して逃げてくれるようにだ。

　それに、もしルーシーが野性に戻りたくなったなら、ディアナは反対するかも知れないが、俺はそれでもいいと思っている。その時に自由に帰っていってくれてかまわない。

　なんとなくではあるが、そうはしないだろうと言う予感はある。しかし、どうするのかは成長した彼女に任せたい。狼だけど。

　「俺の武器を作る必要があるかもなぁ……」

　のんびりとした空気が流れ、ルーシーが電池が切れたように突然クルルに寄りかかって寝た（俺の肩のＨＰが減った）ところで、その様子を見ながら俺は言う。

　ヘレン救出作戦のときは潜入だったから目立つ武器を持っていこうとは思ってなかったが、カミロに頼んで持ち込もうと思えば持ち込めた。

　それに今回のような場合にも役に立つような武器が１つあったほうが良いようには思うのだ。

　「リーチ重視ですかね」

　リケがワクワクした声で聞いてくる。武器の話だしな。

　「あんまり長いと持って行きにくいだろうから、長柄武器は無しだな」

　「とするとロングソードですか？」

　「うーん……」

　俺は首をひねった。長さや使い勝手で言えばそれぐらいなのかも知れないが、なにかピンとこない。

　「あの魔族に作ってあげてたのは？」

　俺とリケでうんうん唸っていると、ディアナが何気なく言った。

　「それだ！」「それです！」

　俺とリケは揃って賛同した。その手があったな。

　こうして、俺は二振目の刀を打つことに決めたのだった。

## おやすみなさい

2019年7月24日

　俺の刀を作る。その響きだけでもワクワクはするが今日はお休みだ。

　休めるときにはしっかり休んでおく。良い仕事の鉄則である。

　思えばこっちに来た当初は生活がかかっているのもあったが、随分とあくせく働いていたような気がする。

　今は食っていくだけなら週に３日も剣を打てば困らない。

　リケが手伝ってくれるなら、俺の分担は高級モデルをいくらかだけだから、１日打てば事足りてしまう。

　まぁ、それも安定して買い取ってくれるカミロがいてくれるおかげではあるのだが。

　そこそこの長旅から帰ってきたところだし、ルーシーも来たばっかりなので、もう少し先の話にはなってくるが、今回みたいなピクニックではなく、どこかでちょっとした旅行にでも行こうかな。

　もちろん、みんなの同意が得られたらだが。

　長らくそうしてのんびりしていたら、日が傾いてきた。家に帰ってきたのも昼を少し回っていたから当たり前ではあるんだが。

　みんなでぱっぱと片付けて、家に入る。クルルも小屋に戻っていく。ルーシーはというと、今のところは俺たちと一緒に家に入るらしい。

　それでも、一番最初にサーミャが入っていったのを見てからだったから、警戒心がないわけではないようだ。

　おずおず、といった感じで家に入ったかと思うと、しきりに周囲の匂いを嗅いで、あちこちをうろつき始めた。

　今のところ火が入っているものもないし、危ない刃物は片づけてあるので、とりあえずは好きにさせておく。

　居間と台所を１周したら慣れてきたのか、俺の部屋の扉を前足でカリカリしはじめたので、開けて入れてやる。

　やはり匂いを嗅ぎながら部屋の中を一周して出てきた。同じことを客間とみんなの部屋で繰り返したあと、居間の隅でぺたりと寝そべった。どうやら家の匂いは覚えたので、居心地のいいところで過ごす、ということらしい。

　しかし、それもすぐに終わりを告げる。ディアナとヘレンが自分の部屋から木剣をもって稽古に出たからだ。ルーシーは慌てて２人の後を追っていく。

　家に残った俺を含むみんなは体を拭いて清めた。稽古に出た二人はまた後だ。

　俺は夕食の準備をする。だが今日は昼飯が遅めだったので、その分の量は減らしてある。

　抜くことも考えないではなかったが、ディアナとヘレンの２人は稽古するから腹が減るだろうし、それで２人だけのために用意するとなると遠慮しそうだからな。

　先に鍋で茹でて干しただけの肉を戻しておく。このうちのいくらかはルーシーの分だ。人間が食べる分は根菜と塩漬け肉、調味料なども加えて煮込む。

　ただし、無発酵パンはディアナとヘレンの分だけにしておいた。あれ、以外と腹にくるんだよな。

　やがて外からディアナ、ヘレンとルーシーが戻ってくる。ルーシー以外の２人は自分の部屋へ汚れを落としに行った。

　ルーシーはさっき見つけたお気に入りのところで横になっている。そのうち毛布かなにか敷いてやるか……。

　テーブルに料理を並べたあと、ルーシーの肉を皿に入れてテーブルのそばに置いてやると、キョロキョロとみんなを見回して皿の前にちょこんと座る。

　そして、座ったまま食べ始めない。昼飯のときにすぐ食べたのはよほど腹が減っていたのか。ちょっと悪いことしたかも知れないな。

　ひとまずお利口さんは褒めてやらないと。

「お、待っててくれるのか。お利口さんだな」

　俺がルーシーの頭から首の辺りを撫でてやると、ルーシーはパタパタと尻尾を振る。

　皆が座っていただきますをするとルーシーも食べ始めた。ディアナの目がキラキラしている。今は離れて座っているので俺の肩は無事だ。

「前にサーミャに教えてもらったが、森狼って頭いいんだなぁ」

「だろ？」

　ルーシーは何かで親と一緒に群れを追われたか見捨てられたあと、クマに出くわして親を失ったと言う経緯があって、うちに馴染もうとしているがこれは例外なんだろうか。

　飼って飼えないことはないんだろうが、簡単に飼えるならそれこそ犬と同じ立ち位置になってるだろうし、そこそこ珍しい例ではあるんだろうな。

　夕食が終わって片付けをはじめると、ルーシーが外への扉をカリカリしはじめた。

「どした？なんかあるのか？」

　片付けの手を止めて扉を開けてやると、外に出て鼻をヒクヒクさせたあと、トテトテと歩きはじめる。

　気になってついていってみると、向かう先はクルルのいる小屋の方だ。

「ああ、クルルお姉ちゃんと寝たいのか」

　俺がそう言うと、ルーシーは立ち止まって尻尾をパタパタ振った。ディアナのところに行けば多分ベッドに入れてくれるとは思うが、本人の意向だし別に止めないといけないことでもない。

「よしよし、それじゃあ、おやすみな」

　しゃがみこんで頭を軽く撫でてやると、ルーシーは尻尾をふりふり、再び小屋に向かっていった。

## 青い輝き

2019年7月26日

　翌朝、起き出した俺はいつもの通りに水瓶を肩に担ぐ。外に出ると、待っていたのはクルルとルーシーだ。

「お前も起きてきたのか」

　俺が声をかけると、ルーシーは尻尾を勢いよく振りながら、一声吠える。

　あまり大きくない声だ。他のみんながまだ寝ているのを察しているんだろうか。

「よしよし、じゃあクルルお姉ちゃんと一緒に行こうな」

　俺はクルルの首に水瓶をかけてやると、１人と２頭の水汲みの旅（徒歩３０分くらい）が始まった。

　朝の森は空気が少し澄んでいるように感じる。昼よりも気温が低いせいだろうか。

　思い切り息を吸い込むと、その爽やかな空気が肺を満たして、まだ半分夢うつつだった脳が暖機運転を始める。

　それにしても、日が昇りきらない中を人間と竜と狼の変わった一行が進んでいく光景は、他所から見ると奇異に見えるだろうな。でも、これがうちの家族なのだ。

　湖に着いたら先に水を汲んでしまってから、水浴びをする。クルルも身体を拭いてやり、ルーシーも……と思ったら彼女は自らバシャンと湖に飛び込んでいた。

　せっかくなのでそのままワシャワシャと毛を引っかき回して洗ってやる。気持ちよさそうにはしていたので、時々は洗ってやるか。

　俺の身体も拭いたやつだが、持ってきているタオルを固く絞りながらルーシーの濡れた身体を拭いてやった。

　当然、完全には拭ききれないだろうが、濡れっぱなしよりはマシだろう。

　明日からはルーシー用に別のタオルも用意してやらないと。洗う洗わないによらず、湖に飛び込んだときには拭いてやらないといかんからな。

　飛び込まなかったら、そのまま持って帰ればいいだけだ。

　その後は普通に家に戻ってきた。クルルから水瓶を回収し、俺の分と併せて家の中に運びこむ。

　それを見たクルルはいつも通り小屋の方へ戻っていったが、ルーシーは俺と一緒に中に入る。

「ああ、飯か」

　今日から朝飯を作るときにはルーシーの分先に用意してやる必要がある。

　と言っても、単に干し肉を先に何も入れない湯で茹でて戻してやるだけだ。昼は昼でまた茹でてやればいい。

　昼は狩りの次の日――つまり生肉が手に入る日はそっちになるだろうが。

　鍋を２つ用意して俺たちの飯の分と、ルーシーのを茹でる分にわける。ルーシーの分は水を少なめにすれば沸くのも早いし、無発酵パンの準備をしていればちょうど

　くらいには準備ができるだろう。

　もったいないのでルーシーの飯を茹でたお湯はそのまま俺たちの方に足しておく。多少は出汁が出てるだろうし。

　ルーシーが早く早くと急かしてくるのを宥めつつ、茹で上がった肉を細かく切って冷ましている間に、朝飯の準備は終わりだ。

　ルーシーも含めた全員で（ルーシーは待っているだけだが）いただきますをしたら、いつもの朝食の風景である。

　いつもと変わらぬ、しかしほんの少しだけ賑やかになった風景がそこにはあった。

　朝食を終えたら、日課の拝礼をして作業開始だが、危ないのでルーシーは外にいてもらうようにした。

　鍛冶場の扉を開けると、外にクルルがいたので彼女に任せることにする。

「なんかあったら扉を叩くんだぞ」

「クルル」

「ワン」

　俺の言葉を理解しているのかいないのか、俺がそう言うと２人共元気よく返事をした。さあ、仕事だ。

　神棚の近くに鎮座させてあったアポイタカラを、柏手を打って拝んだあと手に取る。

　ヘレンの剣にも使ったが、まだ俺の刀を一振り打つくらいの量はあるだろう。

　……少し心配になってチートでも確認したが、なんとかいけそうだ。

　塊を丸ごと火を入れた火床に突っ込んで加熱する。まるでそこだけが温度が低いかのように、アポイタカラは青く輝いている。

　だがしっかりと温度が上がっていることをチートでつかみ、加工出来る温度になったら取り出して叩く。

　キィンとガラスのような、氷のような音が鍛冶場に響き渡った。

　その音を聞いて、滅多にないアポイタカラの加工を見学しているリケが言う。

「やっぱりきれいな音がしますね」

「ミスリルともまた少し違うな」

　俺はそう返した。ミスリルの場合はもうちょっと澄んでいて高めの音がするのだ。

　この辺りの聞き分けができるのは鍛冶屋としては滅多に無い機会ではあるだろうな。

　他の皆は板金を作っている。サーミャとディアナは板金くらいなら鎚を持たせても平気になっているし、リディとヘレンが手伝えば心配はない。

　そちらの方は聞き慣れた音だ。あれはあれで好きな音ではある。

　その音とセッションするかのように、俺は青い輝きに鎚を振り下ろした。

## アポイタカラ刀火造り

2019年7月29日

　１日かけて、アポイタカラから不純物が取り除かれた細長い板が出来た。日本刀の行程で言えば素延べまでが終わったことになる。

　ミスリルよりも加工の難易度は高いはずで実際難しくはあるのだが、想定していたよりはスムーズに作業が進んだ。

　チート頼みとは言っても俺の腕前も上がっているのではなかろうか、と言う予想はあったが、その通りになっていると少し嬉しいものがあるな。

　それまでちょくちょく新しい武器を作ってきていたこと（最近はご無沙汰だが）、ミスリルとアポイタカラという２つの特殊な素材を扱ったことが影響していそうだ。

　いくらチートが扱えると言っても、その通りに身体が動くかは少し別、みたいな感覚だ。

　これからの工程は基本的には以前に魔族のニルダに刀を打ってやったときと変わらない。

　”基本的には”というのは、いくつかの工程や作業を飛ばすからだ。

　例えば、もうすでに

　鋼と違って総アポイタカラ製の場合はそうする必要がまったくない（ニルダのときも実際の意味はなかったけれども）ので、やらなかったのだ。

　同じ理由で焼入れもしない。となると、反りは焼入れの時の具合ではなく、火造りが終わった段階で決まっていることになる。

　それを刀と言っていいのかは議論の余地があるかも知れないが、「折れず、曲がらず」を満たしているし、今回はそれで刀と呼ぶことにしている。

　この日もルーシーは夕飯を一緒に俺たちと食べて、寝るときはクルルのところへ行った。

　もしかしたら、本人的には小さいなりに番犬代わりをしようとしてくれているのかも知れない。

　問題はこの家に近づけるものは人も動物もそうそういないということだが。

　まぁ、番犬よりも単にクルルお姉ちゃんと一緒がいいってだけの可能性が高いな。多分まだ子供なのでその辺は無理しないで欲しいものである。

　翌朝、クルルとルーシーと水を汲みに行く。ルーシーは俺の少し先を歩いている。クルルの近くには寄らないので俺もクルルも歩きにくいということはない。

　気を使ってそうしているようにも伺える。昨日の今日でここまで学習しているとしたら、ルーシーは相当頭がいいことになるな。

　今日はルーシーは湖に飛び込まなかった。なので、固く絞ったタオルでクルルのように軽く体を拭いてやるだけにしておく。

　戻ってきて朝の準備を済ませたら、今日もクルルとルーシーは外、俺達は鍛冶仕事だ。

　俺は刀の火造り、リケたちは剣を作っていくことになっている。アポイタカラの加工自体は昨日散々見せたからなぁ。

　今日も見せたほうが良いのかはかなり迷ったし、見せるに越したことはないとは思うのだが、本人も

「これ以上はちゃんと自分で出来るようになったほうがいいと思います」

　とのことなので、俺が１人刀に取り掛かることになったのだ。

　前のときと同じように細長い、断面が長方形の板の状態からアポイタカラを熱し叩いて、断面を五角形にしていく。

　昨日の時点で魔力は入れきったと思っていたのだが、五角形にしていく段階でドンドン入っていくのがわかる。

　つまりはその分ドンドン叩きづらくなっていくということだ。

　少し緩みかけていた意識を引き締めて、俺はアポイタカラに鎚を振り下ろした。

　結局この日は切っ先や反りなどを造るところまでは進めなかった。薄い断面が五角形のアポイタカラの板、までだ。

「こいつは厄介だな……」

　ヘレンの時は板までで良かったからまだマシだったのか、それとも他の理由なのか、この先、

　リケたちはいつもより少し速いペースで剣を作っていた。

　リケやサーミャ、ディアナにリディ、そしてヘレンがああやって手伝ってくれているからこそ、俺がこうやって好きに物を作ることが出来ている。

　俺としては稼いだ金も共有物だと思っているが、生活用品以外では彼女たちが何かが欲しいと言うことはない。

　今のところそれに甘えてしまっているのが実情だ。

　ここらでなにか一つ恩返しでもするか。後片付けをしながら、俺はぐるぐると思考を巡らせるのだった。

## 欲求

2019年7月31日

　翌日、なんとか五角形に出来た刀身を整えていく。今日も工程自体は変わらないので、リケ達には普段の作業をして貰っている。

　この火造りの工程で刀身としては完成する（この後、

　まず最初に切先を作った。刃の側に先端を斜めに断ち切ったらそこを叩いて丸く、そして尖ったようにする。

　今回の切先は大

　たっぷり午前中の時間をフルに使って切っ先の形を作った。なかなかハッタリの効いた感じに仕上がっている。

　武器を世の中に出すことに躊躇いはないし、これは護身用が主眼であるというのは自分でも分かっている。

　しかし、であるならば使わないに越したことはない、と言うのも未だ偽らざる気持ちではあるのだ。

　大鋒くらいでビビる獣や人がどれくらいいるのかは疑問ではあるが、突きつけた相手が少しでも戦意を喪失して立ち去ってくれるなら、それで十分なのだ。

　俺はきりの良いところまで終わったので、まだもう少しだけ作業をするらしい女性陣（若干悲しいことに、つまりは俺以外の全員なのだが……）を鍛冶場に残し、昼食の準備をしに家の方へ戻った。

「うーん、やっぱりこっちに戻ってくると涼しいな」

　単純に鍛冶場と家の温度差と言うか、向こうは常に火をガンガンに使っている。

　それも、鉄を加工できる温度で。だから鍛冶場の室温はサウナどころの話ではない。扉１枚隔てただけで涼しいと思える程度には温度の差があるわけだ。

　ヘレンは来て間もないから完全には慣れていないようだが、他のみんなはすっかり慣れっこではある。

　ただ、慣れっことは言ってもあくまで慣れていると言うだけで、汗をかかないわけではない。皆それなり以上に汗をかく。

　だから鍛冶場には常に水分補給できるように水瓶を置いて、そばにそれぞれのカップ（木製で名前を彫ってある）もあって、皆適宜水分を摂っている。

　その水分を摂っただけ、汗もかくわけだ。だから、仕事が終わったら俺もみんなも体を濡らして絞った布で拭いたりしている。

　そもそも炭やらで汚れるのもあるが、拭いた後の布は結構な汚れがついている。つまりはそれだけ体の汚れはあるということだ。

　この世界の今時点での衛生観念でもこの辺がスタンダードなので、俺はそれに合わせているし、皆からも特に不満が出ているわけではない。

　貴族のご令嬢だったディアナですら特に不満を漏らさないところを見ると、貴族レベルでも似たようなものなのだろう。そう言えば、エイムール伯爵の家でも基本的には湯で体を拭くくらいだった。

　しかし、不満が出ていないのとローマ帝国人並にお風呂が大好きな（元）日本人として、こう言うときにひとっ風呂浴びてさっぱりしたい欲求があるのは別の話だ。

　”キンキンに冷えたビール”までは望まないが、少なくとも温かい湯に浸かりたい。

　風呂の問題は水量と燃料だ。どちらも豊富に使う。このどちらも解決できるような方策を考えついたら、皆に話して

　俺は軽く体を拭いたあと、昼食の準備を進めながら今後の計画に思いを馳せるのであった。

　昼食が完成するころには、皆も家の方に戻ってくる。軽く体の汚れを落としたディアナが家の扉を開けると、間髪入れずにルーシーが飛び込んできた。

　ディアナが開けた扉から外を見ると、少し離れたところでクルルが草を

　彼女は何でも食うのだが、肉よりも植物の方が好みらしく時々ああしている姿を見る。流石に家には入れないが、この間みたいに外で飯を食う機会は増やしても良いかも知れないな。

　昼食を終えたら、作業の続きに戻る。ここからは反りを作っていく作業になるのだが、ここで１つ

　アポイタカラは魔力をこめると、そこの色が少し変わる。これはその部分の光り方が変わったりするからのようなのだが、今回はそれを利用して刃文を入れられるのでは？と言うことだ。

　焼入れをしないので刃文の無い刀になることを覚悟していたが、これが上手く行けば思った感じの刀に出来るかも知れない。

　俺は内心ワクワクしながら、だいぶ形になってきた刀身に鎚を入れていった。

## 水を打つ如く

2019年8月2日

　刃文を頭にイメージしながら刀身の反りを整えていく。刃になる方を叩くとそちら側が伸びて反りができ、その分輝くため、叩いていない部分との差で刃文のようになる。

　そうやって刃文（みたいなもの、にはなってしまうのだが）を作るので、当然焼きが刀身全体に入り乱れた

　地道にコツコツと叩いていき、反りの中心が真ん中あたりに来るようにした。叩き方をチートで調整して入れた刃文は

　この辺りがニルダと同じなのはあれが羨ましかったから、と言うのが素直なところではある。

　護身用という用途に目が行って自分用の刀を打てば良いじゃない、と言うことに気がつかなかったのだが、ディアナがそこに気がついてくれて良かった。おかげで自分の好きなように刀が打てている。

　もしそうしなければ、今頃渋々柄を短くしたコルセスカ（根本から三股に分かれていて、左右が刃になっている槍）でも作っていたかも知れない。

　こうして刀身側をほぼ仕上げたら、あとは

　普通はこんなタイミングで整えるものではないのだが、そもそもあらゆる制作工程が普通ではないからな。

　全体が薄青く輝いていて、なかなかに見応えのある姿になったな。

　この日はここまでで日が暮れて来てしまったので、残りの作業についてはまた明日である。

　いや、別に徹夜なりすれば今日中に完成するのだろうが、それはしないことに決めているからな。特に今やっているのは仕事ではないのだし。

　鍛冶場の火に灰を被せて、今日の仕事の後始末だ。日中は赤々と燃えていた炎に文字通りの灰色が覆いかぶさっていく。

　火床なんかは仕事の間、常に火を入れているが、使ってない間の熱がもったいないと言えばもったいない。なにかに使えないものかな……。

　ほぼ完成した刀身を神棚の下にお祀り（掛台はニルダの時に使ったものを再利用した）して、この日を終えた。

　翌日、刀身を神棚の下から下げてから作業に取り掛かる。下げるときはもちろん両手で恭しくである。

「ここ最近見てると、北方の流儀は随分と畏まってるんだな」

　それを見ていたヘレンが感心したように言う。この世界の宗教観は一神教でないせいなのかは分からないが、割とゆるい。

　商売の神様や武の神様や美の神様なんかがたくさんいて、そう言うのを祀った施設もあるにはあるし神官もいるのだが、反目しあっているわけでもなく、互いに信奉する神様が違うだけでしょという感覚のようだ。

　これも６００年前の戦争の時に魔族側の神様と人間（とその他種族達）側の神様に分かれた頃の名残らしい。共通の敵がいるとまとまりやすいのはあるよな。

　で、よほど熱心な信者はともかく、そうでない普通の人は毎日祈ったりするわけでもなく、なんとなくそういう存在がいることを心の片隅においている程度であるらしい。

　なので、都であってもあまり大きな神殿というものはない。この辺はそれが気になってディアナに聞いてみた時の回答（リケやヘレンも答えてくれたが）だ。

　なお、森に暮らすサーミャとリディは森そのものが神様みたいなもの（例の”心臓は土に埋める”とか）であるようだ。

「半分くらいはうちの流儀だけどな」

　実際に北方でこの流儀が通用するのかは分からないので、俺はそう答える。多分似たような流儀はあるんだろうが、細かいところが違ってたりするだろうからな。

「ふーん」

　ヘレンは興味深そうにしていたが、この場ではそれ以上突っ込んで来ることはなかった。さて、作業に入るか。

　それまで慎重に作業してはいたが、それでもどうしても出てしまう刀身の凸凹を軽く鎚で叩いたり、

　魔力を帯びたアポイタカラが鑢で削れるのかは心配だったが、魔力で強化した甲斐があってか加工できた。まぁ、これが出来ないと鎚だけで仕上げるのは不可能と言ってもいいくらいだからな……。

　刃先を研ぐのも家にある砥石で出来た。少しでもズレるとあっという間に鈍ってしまいそうな感覚をチートでなんとか抑え込んで仕上げた。

　最後に茎にタガネをあてて、銘を切っていく。”但箭英造”。これで俺の銘が入った刀はこの世界に二振めとなる。

　後は鍔と柄と鞘だが、全部作るには時間が足りない。だがしかし、せっかく完成したので具合も見ておきたいのが正直なところなのである。

　そこで、白木の柄というか、簡単に握れるだけにした柄だけを一旦作成することにした。

　茎を当てた二枚の板の内側を茎の形に削って、

　茎と柄を木で作った目釘で留める。

　俺はそれを持って、外に出た。

## 流水のごとく

2019年8月5日

　扉を開けると、そこにはルーシーが尻尾をフリフリ待っていた。

「危ないから、ちょっと離れててな」

　俺がそう言うと分かっているのかどうなのか、「ワン」と一声鳴いて距離を置く。ただし、尻尾は振ったままである。

　犬を飼ったことがないので、この子がどれくらい賢いのかはよく分かってはいないが、言っていることをかなり理解しているように見える。

　もしかすると、群れから追い出された原因はその辺りにあるのかも知れないが、これはしてもしょうがない想像ではあるな。

　クルルは少し離れたところでのんびりと寝転がっている。魔力でも吸収しているのかも知れない。

　俺の後ろからはゾロゾロと全員が出てきた。

　ディアナとヘレンは木剣（ヘレンのはショートソード二刀流）を持っているから、剣の稽古をするのだろうと思うが、他のみんなは……？

「親方がここまで気合いを入れて作ったものの出来は皆気になりますよ」

　リケがクスリと笑って言う。

「とんでもねぇモンが出来たんだろうなぁ」

　のんびりした感じなのはサーミャだ。ここまで俺が作ってきたものを色々見ているから、今度は何を作ったのか気になったんだろう。

　リディは出てきてからも一言も発していないが、目がキラキラしているので興味はあるらしい。

「危ないからあんまり近づかないようにな」

　俺がそう苦笑しながら言うと、異口同音に了承の声が返ってきた。

　外に放置してある材木の残りに、ちょうど人の大きさくらいのものがあったので、そいつを庭の端に立てる。

　俺は戦闘の方のチートに任せてそいつを横一文字に切りつけた。

　今までのどの武器よりも身体になじむ感覚がして、

　振り抜いた軌道に青い光が

　今の感じから言って、ヘレンはともかく他の皆は気がついたら刀が振り抜かれていたように見えたかも知れない。

　ディアナ、サーミャはギリギリ見えた可能性があるが、リケとリディは無理だっただろうな。

　一方、斬られた側の材木はと言うと、全く何事もなかったかのように佇んでいる。

　俺が近づいてトンと刀の柄で小突くと、ズルリと上下二つに分かれた。

「スゲぇ！！」

　黒の森全体に響き渡るがごとき大声でヘレンが叫ぶ。クルルが飛び起き、ルーシーの尻尾が猫みたいに一瞬バフっと膨らんだが、声の主がヘレンだと分かるとすぐに元に戻った。

「音もなく斬れるなんてスゲぇな！！」

　それに気がついているのかいないのか、高いテンションのままヘレンが話す。

　ニルダに打ってやったやつも出来は良かったが、素材の違いもあってか斬れ味が段違いだな。

　刀の性能自体はそれこそ今まで作ってきたものと、前に作った刀の感じでなんとなく予想は出来ていたが、うぬぼれ半分で言えばそもそも斬ったときの感じが違った。

　そう言えば俺の戦闘の方のチートは武器による違いをあまり試していない。せいぜいがショートソードと槍くらいで、他の武器は扱ってないのだ。

　もしかすると、適正みたいなものがあって俺の場合は刀が一番向いているとかだろうか。

　出来ればその威力を発揮するような事態は来ないで欲しいとは思うが、せっかく護身用に作った刀だ、それに適性があるというならそれに越したことはないな。

「思ったより出来が良いな」

　その辺の事情を他の皆に話すわけにもいかないので、俺はそう言ってごまかした。

　そのまま再び構えると、今度は残り半分を突いた。空中に一条の青い光が奔り、やはり手応えも音もなく刀身の半分ほどまでが飲み込まれるように材木に突き刺さる。

　そのままそっと手を離して裏を見てみると、切っ先がほんの少しだけ頭をのぞかせている。

　それを確認して、俺はそっと刀を引き抜いた。

「こりゃあ盾を構えていても、それごと貫くかも知れんな」

「多分そうなると思う」

　俺の半分独り言のようなつぶやきに反応したのはやはりヘレンだ。傭兵だからこう言うことには他の家族よりも詳しい。

「細いし大丈夫だと思ってたら、そのまま貫かれるだろうな。エイゾウと敵になるような立場でなくて良かったぜ」

　わざとらしくプルプルと震えてみせるヘレン。その口調と仕草はおどけているが、口にした内容は本心だろう。目があまり笑っていない。

「護身用にしては過剰かも知れんが、備えあれば憂いなしと言うし、斬れ味は良いに越したことはないだろ」

　俺がそう言うと、ヘレンは力強く頷く。迅雷の二つ名をもつ傭兵のお墨付きなら安心だ。俺は心底ほっとする。それを察したらしいサーミャも微笑んでいた。

　すると、今度はリケがウキウキを隠さずに俺に問うた。

「名前は何にするんです？」

「名前？」

　俺は一瞬意味を分かりかねて逆にリケに聞いた。

「ええ、名前です。それほどの立派なものなら何か名前があってしかるべきかと。今までのは納品したりで親方が勝手に名前をつけるわけにはいかなかったですけど、それは親方のものなのでしょう？でしたら名前をつける権利は親方にありますよ」

　なるほど、そんな慣習があるのか。そう言えば前の世界でも、神話に出てくるような武器は名前がついているものも少なくなかった。グングニルしかり、天叢雲剣しかりだ。刀なら八丁念仏やら歌仙兼定やら髭切と言った具合か。

　それらと同格のように扱われるのもなんとなく気恥ずかしいものがあるが、折角作った珍しい素材で出来の良い刀だし、切った俺の銘以外の名前、いわゆる

「そうだなぁ……」

　俺は少し考え込む。水が流れるように青い軌跡が動くので流水と言うのも良いが、それではそのまま過ぎる。もう少しだけ捻りたい。

　しばしかかって俺が考えた号はこれだった。

「

## 薄氷

2019年8月7日

　そして刃が西洋剣と比して遥かに薄いので”薄氷”、読み方は源義経の刀である”

　だから読み方は「はくひょう」ではなく「うすごおり」なのである。

「氷かぁ」

「見たことあるのか」

　サーミャの呟きに俺が反応すると、彼女はコクリと頷いた。

「ここらも雪なんかは滅多に降らないけど、寒い年はあったからな。そのときに汲んであった水が凍っててビックリした」

「なるほどねぇ」

　一応、母親から短い子育て期間中に水が凍ることは聞いていたので、そういうことがあるのは知っていたが、やはり聞いているだけと実際に見るのとでは大きく違うらしい。

　そこへディアナが加わってくる。

「３年前かしら？」

「あー、それくらいだったかな？」

「確かにあの年は特に寒かったわね」

　この森と都は比較的近い。であれば概ね同じような気候だろう。

　ここは森の中なので、風の勢いが違うとかの違いはあるだろうが、天候的な面でサーミャとディアナの経験はこの５年で言えば似たりよったりのはずだ。

「私の工房はあんまり寒くならないので、楽しみといえば楽しみですね」

「風の流れのせいなのか、私の森も比較的温暖でした」

　リケとリディの住んでいたところはそう言う感じらしい。

　流石にこれだけ人の行き来がある時代なので、氷がどういうものなのかとか、そもそも言葉を知らないとかそんなことはないが、見たことがない人は割といるみたいだな。

　前の世界で、海なし県に住んでてほとんど海を見ない人みたいな感じか。あっちの方は流石に人生で何度も海自体は見たことがある、って感じだろうが。

「アタイはアチコチ行ってたから、デカい氷も見たことあるぞ」

　ヘレンは傭兵稼業だから、仕事で寒い地域にも行ったことが何回もあるらしい。一番寒いところで雪が１メートルほどつもるところだそうだ。

　本来はそんなことなく普通に仕事できるはずだったのが、突然の寒波でそうなったらしい。寒すぎて仕事にならなかったみたいだが、そりゃそうだろうなぁ……。

　この世界でも北のほうが寒い……と、インストールにはあるので、この世界では北方の出身ということになっている俺が、氷を見たことがあるのは不思議でもなんでもない。

　いずれここでない地方への旅行に行って見聞を広めたいところではある。

　それぞれの住んでいたところの気候を話しながら鍛冶場に戻る。ディアナとヘレンはこのまま稽古だ。クルルとルーシーはそれの見学をするらしい。

　鍛冶場に戻って、神棚の下に薄氷と号されるようになった刀を戻す。その後片付けて、この日は終いになった。

　翌日、一通り朝の日課を済ませたら、鍛冶場に火を入れる。鍔と

　外から持ってきた材木に薄氷を当てて型をとる。この形に鞘を作るのだが、刀身が浮くように作らねばならないのが難しいところだ。

　と言っても、ほぼ全てチートで賄うのだが。

　刃の形に鞘の内側を彫ったり、膠で張り合わせたりと言った工程は前と変わらない。

　鞘には西洋剣の鞘にも使っている油を塗ったが、そのうち漆塗りにしたいところだなぁ。北方から入ってきていないか、またカミロに聞いてみよう。

　鞘を乾かしている間に、鍔や栗形なんかの部品を作っていく。納品するものでもないし、護身用だからシンプルにしておいた。

　気になったら休みにしたときにでもコツコツ作ればいい。

　小物の方は鋼で作るのでスイスイとできた。それらを組み合わせて一振りの刀にしていく。

　そして、ほぼ白木の鞘に、柄巻きは革の日本刀が出来上がった。早速、布をサラシ代わりに腰に巻いてそこに刀を差す。

　軽く抜き差ししてみるが、特に問題はない。これでいつでも持ち運べるな。

　持ち運べはする……のだが、俺の今の服装はいわゆるＲＰＧの村人スタイルである。

　鍛冶仕事のときは革製のエプロンをつけたりしているが、基本的な格好は上は麻の服に革ベスト、下も似たりよったりな感じで、そこに簡素とは言え刀を下げているのである。

　俺の個人的な美意識では違和感がものすごい。

「なあ、変じゃないか？」

　俺は思わず皆に聞いてみたが、特におかしいとは言われなかった。そもそも和服を見ることがほぼ無いからだろうな、これ。

　そのうち、和服も手に入れたほうが良いのかも知れない。もしくは剣吊りのようなものを作るかだな。

　色々と問題は残ったままだが、ひとまずは強力な護身用の武器は完成したのだ。これで外へ出る時の安心が増えてくれるといいのだが。

　俺はそう思いながら、一揃いを神棚の下に安置した。

## 豊かなる生活へ向けて

2019年8月9日

　翌朝、水汲みの時に薄氷を佩いて出た。いつも通りなら完全に過剰な武器だ。

　例えて言うなら、ＲＰＧで最初の村の時点で剣だけ最終装備みたいなものである。

　しかし、備えあれば憂いなしという言葉もある。思ったよりは邪魔にもならないし、万が一を考えれば良いものを持っているに越したことはないだろう。

　決して、決して昨日完成したのが嬉しいからではない……と言うことにしておきたい。

　水汲みは何事もなく終わった。いつもどおり俺もクルルもルーシーも綺麗になってるし、水は十分汲むことができた。

　しかし、風呂の水を確保しようと思うとこの方式では無理だな。なんらかの形で大量の水を得る方法が必要になる。

　あの湖の水には湧水もあるようなので、つまりはこの辺りには被圧帯水層――不透水層と不透水層に挟まれて圧力のかかった地下水が流れているはずだ。

　となれば、その地層まで井戸を掘るのも不可能ではない。

　幸い、俺は送風の魔法が使える。人を吹き飛ばすほどの風量はないが、外から穴に向かって風を送りこんで換気するくらいのことはできると思う。

　問題は俺が魔法を維持しないといけないので、掘るのは家族の誰かになってしまうことか。

　あるいは、前の世界でアイドルグループが無人島で作っていたように、水路を作るかだ。今回条件はあれよりはまだマシなはずなので早く出来上がる。

　……とは言っても５００mで他の事をやりつつ、２年半くらいかかっていた。

　もう少し集中して作業し、途中の難関などもないとしても１kmほど離れている湖と家に水路を通すとなると同じくらいかかる可能性はある。

　メリットは（やりようにはよるが）水車が使えるようになることだ。

　そうすれば普通の鍛冶屋みたく重く大きいハンマーを動かして、板金くらいならそっちで楽に打てるようになる。

　向こう何十年とここで暮らすつもりなら今時間がかかったとしても、早いうちにそういった設備を整えていくのは悪い話ではない。

　この辺りはゆっくり考えても間に合うが、目前に雨期が迫っている。それに備えた施設、というほど大げさでもないが次の納品後の２週間ではベランダを作らねばな。

　この日、俺は高級モデルの品をできる限りの早さで作り上げた。アポイタカラで剣と刀を打った経験が活きているのか、かなりの速度で出来たな……。

　こう、勘所が以前よりよく分かるというか。適切な叩くべき箇所や、力加減を外さない感じだ。この分なら、カミロのところへ納品に行く分はなんとか足りるかな。

　彼なら一般モデルだけでも文句は言わないだろうとは思うが、ほんの少しでも高級モデルも納品しないと、義理を欠くことになると言う俺個人の仁義の問題だ。

　翌日、納品物を荷車に積み込んでいると、クルルがのそのそと所定の位置に着いた。もう何度も荷車を牽いているし、俺達が荷物を積んだら街へ行くことを分かってるんだな。

　俺はよしよしとクルルを撫でて、装具をつけていく。全ての準備が終わったら、俺は先にルーシーを抱えて荷車に乗せた。

　流石にまだ飛び上がって乗り込むのは難しそうだからな。視点が高いのが嬉しいのか、ルーシーはちぎれんばかりに尻尾を振って荷台の中をウロウロしている。

　皆乗り込んで出発だ。クルルが一声鳴いて荷車を進ませはじめると、ルーシーは手綱を持つリケの隣にいって前を見ている。尻尾はずっと振られたままだ。

　森の中、街道と景色が変わっていく。大丈夫なのかとこっちが心配になるくらい、ルーシーはずっと尻尾を振っている。

「こんな経験できる森狼はそうそういないよなぁ」

「そりゃそもそも飼われることが少ないしな」

　俺の感慨にサーミャが答える。

「走竜が牽く荷車に乗ったことある人間自体も希少ですし」

「そうねぇ。大臣でも乗ったこと無いんじゃないかしら」

「アタイも聞いたこともない」

　リケとディアナ、そしてカツラを被ったヘレンも口々にクルルの希少性を言う。リディもコクコクと頷いて同意している。

　前の世界で電車の窓から外を見る小さい子を見ているような気分で、アチコチの縁から景色を眺めるルーシー（落ちないように各人がサポートしていた）の様子を見ながら、俺達は街に到着した。

## 調達

2019年8月12日

　街の入り口にいたのは顔見知りの衛兵さんだ。俺たちに気がつくと軽く手を振ってきたので、俺達も振り返す。

　その目線が一瞬ルーシーを捉えたが、特に何か言われることはなかった。

　何かが増えるのはいつものことだと思っているのか、単に犬（ルーシーは狼だけど）は気にされないのかは分からないが、前の世界のように首輪やリードが必要と言うこともなさそうなので一安心ではある。

　でも、首輪代わりに色のついた紐か布で似たようなものは作ろうかな。この辺りで走竜や森狼を飼っているような家はそうそうないと思うが、所属を示す何かはあった方が良いとは思うしなぁ。

　街の中をゆっくりとクルルが荷車を牽く。時折、奇異の視線をクルルやリディに向けてくる人もいるが、大半は気に留めた風もない。

　それなりに見かけている人たち――つまりこの街に根ざして暮らしている人たち

　の間では、そういうものになってきているなら、嬉しい話だな。

　街の中で特に何が起きるでもなく、普通にカミロの店に着いた。荷車を倉庫に入れたら、いつもの丁稚さんにクルルと今回はルーシーを預ける。

「ここでクルルお姉ちゃんとお利口さんに待っててな」

　ルーシーを撫でながら言うと、「ワン」と一声吠えて尻尾を振る。お利口さんだ。

　木陰にうずくまるクルルとその周りを駆け回るルーシーを見ながら、俺たちはいつもの商談室へ向かった。

　商談室に入って、しばらくカミロを待つ。

「そう言えば、みんなは欲しいものとかないのか？」

　適当な話の最中、俺は切りだした。うちの収入は基本的に俺のものというわけではない。工房の共有のものだ。

　そのことは後から家族になったヘレンを含め、家族の皆に話してあるし、全員が納得している。

　にも関わらず、今のところ積極的に使っているのは俺だけである。少しばかりばつが悪いと言うか、罪悪感のようなものがある。

　以前に欲しいものを聞くと、繕い物するときの糸や、継ぐときの布切れなどは欲しがったのでカミロから貰う物品に含めたが、消耗品だし何かを欲しがったわけではない。

　欲しいものがそもそも自分でよく分かっていないサーミャや、大家族での生活で共有が基本だったリケ、森でほぼ自給自足の生活をしていたリディが欲しがらないのはある程度想像できる。

　ヘレンは何も持たずに来たので身の回り品は必要にはなったが、あちこちを渡り歩いていたから私物は持っていないに等しく、だから欲しがるものもない。

　しかし、貴族のお嬢様であるディアナはもう少し自分のものを欲しがるかと思っていたが全くそんな素振りを見せない。

「別にないわねぇ」

　そのディアナが事もなげに言う。

「うちは余裕あるから良いんだぞ。誂えた服とか」

「森の生活だといらないし、いざという時のはまだ持ってるわよ。家にもまだあるし」

「ううむ」

　確かに森で暮らしている分には都で着るような服はあまり必要ない。都で着るような服を動きやすいように直していたりする。

　しかし、どんな用事でマリウスに呼び戻されるか分からないのだから、豪奢な服も持っておいた方が良いのでは、と思うのだが、それも１着あれば事足りるのは確かだ。

　言われてみれば実家のエイムール家にもあるだろうし、服で困ることはないのか。

「強いて言えば」

「うん？」

　考え込んでいると、ディアナが続けた。

「家族共通のアクセサリーみたいなものは欲しいわね」

「なるほど」

「……アタイも欲しいな」

　ディアナの言葉に俺が相づちを打つと、ヘレンがボソリとつぶやいた。

　帰属意識、みたいなものは俺にもある。家族のためなら何でもできそうには思うし、家族の誰かが危難に遭えば、いかなる手段をもってでも排除するだろう。

　今回のヘレンが家族になるきっかけになった話もある。捕らえられれば取り上げられることもあるだろう（そう言う状況のほうが多そうではある）が、そうならなかった場合に家族の証みたいなものがあった方が、心強かったりするのは納得できるな。

「分かった。じゃあ、元になる何かを今度探しに行こう」

　俺は皆に向けて話す。ちょうど良い機会だし、この後カミロに話をしとけば大丈夫だろう。

　それを聞いたサーミャが怪訝そうな顔をして俺に聞いた。

「探しに行くって、作らないのか？」

「作ってもいいけど、少なくともアクセサリーのデザインについては俺は無知だからな。追加で加工するにせよ、参考にだけするにせよ、元になる何かがないと始まらないからな」

　生産のチートが効く範囲なのは間違いないが、そもそものデザインについては色々学んでみたいところでもあるのだ。

「それで、どうするんですか？」

　今度はリディが話しかけてきた。彼女は物静かに聞いているだけのことが多いのだが、珍しいな。

　俺はそんなリディを見て言った。

「都へ行く」

## 豊かな食生活の第一歩

2019年8月14日

「都ですか」

　俺に言われたリケがそう反応した。

「何か問題がありそうか？」

「いえ、単に行ったことがないので」

　聞いてみると、俺のところに弟子入りするまでにあまり大きな都市は通ってこなかったらしい。

「都って言ってもただ大きいだけよ」

　リケをなだめるかのように、優しい声音でディアナが言った。住んでる人間からすれば、どんな大都市でも地元には違いない。

　でも、ディアナが住んでいたのは伯爵の家――つまりは階級としては上流だから、当てになるかと言われるとちょっと微妙な気はする。

　それが言わぬが花であることははっきりしているので、俺は何も言わないでおく。

「まぁ、日帰りになるとは思うが、あんまり気負わずにちょっとした旅行くらいに思ってくれたら良い。みんなもな」

　俺もディアナの言葉に乗っかるようにして、そう皆に言った。

　そうしていると、カミロが番頭さんを連れて部屋に入ってきた。番頭さんはカートのようなものを押している。

　カートには布がかかっていて、何が載っているのかは分からない。

「よう、待ったか？」

「いや。だけど、今日は妙に遅かったな」

「ああ。こいつの準備をしてたんでな」

　カミロがカートに目線をやる。俺が来たのであれの準備をしていて遅れたのか。

「そこまで念入りに準備するってことは、さぞかし良いものなんだろうな？」

「もちろんだとも」

　俺とカミロは笑い合う。カミロが合図をすると、番頭さんは頷いてカートの布切れを取り去った。

　そこに合ったのはやや大きめの壺が２つである。壺には釉薬がかかっていて、つるりとした表面をしていて、同じく釉薬のかかった蓋がついている。

　蒸発しやすいものでも入っているのだろうか。

「こっちに来てみろ」

　カミロが手招きをした。この状況なので、変なものが入っているわけではないと思うが、俺たちは恐る恐る近づいた。

「まずはこっちからだな」

　カミロが片方の壺の蓋を取った。俺以外の家族の皆は怪訝な顔をしている。彼女達は恐らくは嗅いだことがないであろう匂い。

　だが俺の鼻はその臭いを馴染み深いものとして捉えていた。おおよそ１ヶ月かもうちょっとぶりに嗅いだ匂い。

「醤油か！」

　俺は思わずそう叫んでしまい、皆を驚かせた。

「す、すまん」

　俺は縮こまり、それを見たカミロが大笑いしている。

「さすがエイゾウだな。そう、北方のショウユだよ」

「じゃあ、こっちは……」

　俺はもう一つの壺を指さした。カミロはニヤニヤ笑いながら

「そっちはミソとか言ったかな」

「味噌だって！？」

　俺は飛び上がらんばかりの喜びを隠しもせずに再び叫んだ。冷静になれば醤油があるのだから、味噌も存在するのは当たり前なのだが。

　蓋を開けてみてみると、そちらにも俺にはなじみの深い茶色いペースト状のものが収まっていた。間違いなく味噌だ。

　まず醤油の方を少しだけ指につけてなめてみる。減塩なんて言葉がないので、しっかりした

　味噌の方も少し味見したが、こちらも少し甘めであっさりした麦味噌の味だった。久しぶりの懐かしい味わいに、俺の舌と胃袋がもう少し寄越せと叫んでいるが、涙を呑んでそれは堪えた。

　あとで家族の皆に「やっぱりエイゾウは北方出身なんだなと思った」と言われたが。

「よく見つけてきたな」

「折良く北方とつながりのある行商人と知り合えてな。ちょっと金を積むことにはなったが、入手できた」

　なんてことのないかのようにカミロは言うが、その態度からそれなり以上に大変であっただろうことは容易に窺える。

　そして、入手が大変なものは高い、と言うのが世の常だ。俺もなかなかないものを生み出して客から大枚を頂いている身である。その辺はきっちり弁えたい。

「これ２つでいくらなんだ？」

「ええっとな……」

　カミロが俺に伝えた値段は、俺が思っているよりも大分安かった。

「良いのか？そんな値段で」

「ああ。ある程度定期的に仕入れられる目処は立ってるし、美食家の貴族様に売る当てがある。お前達には恩を売っておいて、以後もよろしくして貰おうって寸法だよ」

「俺としてはありがたいが……」

「それに、だ」

「ん？」

「今ので確信したが、余ったらお前が残り全部買ってくれそうだからな」

　そう言ってカミロは破顔する。俺はわざとらしく憮然とした顔を作るが、もちろん本気ではない。すぐに噴き出してしまい、部屋は笑いに包まれた。

「で、みんな」

　そう言って俺は皆に向き直る。

「今更だけど、醤油と味噌、買ってもいいか？」

「本当に今更ね」

　ディアナが呆れたように言う。

「あんな姿見せられて駄目って言える人はそうそういませんよ」

　リケがそう言うと、全員が力強く頷く。俺はしょんぼりと肩を落とした。

　その様子を見ながらカミロは笑って「まいどあり」と番頭さんに積み込みの指示を始めるのだった。

## 今回の商談

2019年8月16日

　醤油と味噌が調達出来たのは喜ばしいが、それ以外にも調達しないといけないものはある。

　いつも通りの品物ではあるが、食べ物関連で言えば塩や胡椒なども大事な品には違いない。

　女性がほとんど……と言うか男はクルルやルーシーを入れても俺１人だが、６人（プラス２頭）の家族だからそれなりに消費量は多いし、特に塩は保存にも使うからな。

　何より忘れちゃいけないのは、生活するのに直接は必要ではないが、間接的には生命線の炭や鉄石だ。これがないと収入源である武器を作れないから、いつかは干上がってしまう。

　その辺の話も済ませると、部屋の外から戻ってきた番頭さんにカミロが指示を出す。

「戻ってきたばかりで追い出すようなマネをしてすまないな」

　俺がそう言うと、番頭さんはニッコリと笑って

「それが仕事ですから、お気になさらず」

　そう言って出て行った。マリウスもそうだが、イケメンがああいう笑い方をすると似合うな。俺やカミロではああはいかない。

「それでな」

　出て行った番頭さんが扉を閉めるかどうかくらいで、カミロが切り出した。

　うちの家族に聞かせてもいいと言うことは、別段内密の話でもないんだろうが、このタイミングなのは何かあるのだろうか。

　俺は少し身構えて、先を促す。

「ちょっと作ってほしいものがあるんだが」

「なんだ？　ややこしいものでなければお安いご用だが」

「なに、そんな難しいものじゃない」

「じゃあ、量が多いってことか」

　俺の言葉にカミロが肩をすくめた。

「武器じゃなくてすまないんだが、鍬を大量に作って欲しいんだ」

「鍬か」

　鍬くらいなら難しいものでもない。作ったこともある。最初にこの街に来たときに売り物にしたやつだ。

　あのときは売れなかったが、こうして売り物として頼まれる日が来るとはな。

　若干の感慨深さを感じながら、それをなるべく顔には出さないようにして、リケの方を見た。

　俺と視線が合ったリケは頷いている。数にもよるとは思うが、それなりに量産は可能と言うことか。人手も増えてるしな……。

「わかった。やるよ」

「そうか。助かる」

「それで、いくついるんだ？」

　大量に、と言われても５０本程度なら剣を作れたし余裕だと思うが、１００本となると難しいかも知れない。

　いや、今ならいけるか？ どこかのタイミングでうちの生産能力の限界は知っておきたいところかも知れない。

「あまりに少なくても困るが、あればあるだけいい」

「随分曖昧だな」

「今回はあっただけ売れるからな」

「そうなのか？」

　俺の言葉にカミロが頷いた。

「前に話しただろ、帝国から切り取った領土の件だよ。帝国の領土だったとはいっても、実際には放棄されたような土地だからな。まずは開墾をしないとはじまらない。広さとしてはかなりあるし、それなりの人数が向かうことになってる。そいつらの鍬がいるのさ」

「なるほどね。じゃあ、放棄地に向いた形の方がいいな」

「そうだな」

　向かわせるなら小作農がメインだとは思うが、ここいらの小作農は地主から農具を借りていることが多い。つまりは自分たちの農具は持っていない。

　今回はその土地に行けば小作農から自作農になれるという触れ込みなんだろう。墾田永年私財法みたいだな。考えることは世界が違ってもそう変わらないと言うことか。

　そして、自作農であれば農具も自前になる。国が支給するにせよ、農民の自弁にするにせよ、その分の農具が必要だというわけだ。

　俺の工房には鍬だけの発注だが、鎌なども必要になるはずだ。その辺はまた別の鍛冶屋にでも依頼しているのだろう。

　土地が放棄されてて土が硬いなら、うちの鍬が労力も減ってよさそうではある。

　それに農具全てをうちで引き受けたら独禁法にひっかかりそうだしな。まぁそんな法律があるかどうかはさておき、やっかみは受けたくない。

「じゃあ、５０本以上を目処に頑張ってみるよ。来週でいいか？」

「……ああ、頼んだぞ」

　俺の言葉にカミロが一瞬目を丸くしたが、すぐに元の顔に戻ってそう言った。

「それで今度はこっちの話なんだが、マリウスに伝言をお願いしたい」

「いいぞ、どうした？」

　俺は明後日に日帰りで都に行くこと、その時にエイムール家でクルルとルーシーを預かって欲しいことを伝えてくれと話した。

　さすがに都の中をクルルをつれてうろうろするわけにはいかないし、その時にクルルだけ仲間はずれもかわいそうだから、苦渋の決断としてルーシーも残すことにしたのだ。

　一方的にこっちの都合だから駄目な場合もある。その時は金を出してそれなりの宿にでも預けるしかないな。

「わかった。伝えておこう」

　俺とカミロは今回の話を終えて、握手をするとみんなで帰り支度を始めるのだった。

## 旅行の準備

2019年8月19日

　商談室を出て、まず裏手のクルルとルーシーを引き取りに行く。クルルはいつも通りのんびりとしていたが、ルーシーは丁稚さんにじゃれついて、丁稚さんもまんざらではなさそうに相手をしてやっている。

　そこへ俺たちが戻ってきたのを見て、丁稚さんが慌てて頭を下げた。

「す、すみません！」

「いえいえ、うちの子の面倒を見てくれてたんだから、気にしなくていいですよ」

　俺はそう言いながら、恐縮しきりの丁稚さんにチップを渡す。今回はルーシーの面倒も見てくれていたから、その分を今回から少し増額だ。

「いつもありがとうございます」

「これからもうちの子達をよろしく頼みますね」

　俺はそう言って丁稚さんに笑いかける。問題は俺もマリウスや番頭さんとは違い、カミロと同じくイケメンでないオッさんなのでぎこちないことだが、こういうのは心が大事だ。

　……そう思おう。

　荷物を満載にした荷車にクルルを繋いで皆で乗り込む。体の大きさ的にまだ飛び上がれないので、ルーシーはディアナが抱えて乗り込んだ。

　そのうちルーシーも自分で飛び乗るようになるんだろうか。その時が楽しみなような、今のままでいて欲しいような複雑な気分だな……。

　クルルが牽き、リケが操る竜車が街をゆっくりと進んでいく。街の喧騒が流れていくのをルーシーが尻尾をふりふり、荷車の縁に手をかけて眺めている。

　観察していると、ルーシーがそうやって見ているのに気がついた通行人も何人かいるが、特に驚いた様子はなく微笑んだりしていたので、時々はある光景なのかも知れない。

　今のところ見た目は可愛い子犬と大差ないし無用の混乱はないようだが、大きくなって狼になった時に大丈夫なのかはぼちぼち考えていかないとな。

　定期的に街には来るし、俺としては町の人達が見慣れてくれるのが一番いいんだが。

　町の入口で衛兵さんに手を上げて挨拶すると、衛兵さんも手を上げて返してきた。ここからは街道だ。

　白い雲が散らばる青空を背景に、草原が広がって道が伸びている。俺たちの竜車はそこを進んでいく。クルルの調子は今日も絶好調らしく、なかなかのスピードが出ていた。

　野盗が見たとして、ビビって襲うのを止めるのではないかと思うくらいのスピードだ。

　それに負けず劣らずのスピードでルーシーの尻尾が振られている。ルーシーはもう少し怖がるかと思ったが、全然平気そうだな。もしかすると俺達が平気な顔をしているから、大丈夫だと理解しているのかも知れないが。

　何事もなく街道を行き過ぎると、今度は森の中だ。

　最近熊を仕留めはしたが、いろいろな生き物がいるのはこの森の中だし、速度も落ちるから勝手知ったるとは言っても警戒は怠れない。

　そうして無事に家にたどり着いた。

　家に着いたら荷物を降ろして運び込みだ。家族で分担して次々と運んでいく。クルルも少し手伝ってくれるが、ルーシーはまぁ、賑やかに応援してくれればそれでいい。うん。

　一通り終わったら自由時間だ。俺とリケは自由時間といいつつ、鍬の生産についての打ち合わせなんかだが、サーミャとリディは畑、ディアナとヘレンはルーシーとクルルを構うために外へ出ていった。

　その日の夕食時、俺は皆に話した。

「とりあえず明日と明後日だが、明日は鍬の生産を進める。で、明後日は都へ行くわけだが、何か準備しておくことはあるか？」

「都へ行くって言っても、日帰りでちょっと寄るだけよね？」

「そうだな」

「じゃあ、別に着るものとかは意識しなくても大丈夫だと思うわよ。パーティーに出る話でもあれば別だけど」

「それはないし、君の兄さんからパーティーのお誘いをされても断るぞ……」

「兄さんが残念がるわね」

　俺の質問にはディアナが最後は笑いながら教えてくれた。都住まいだったディアナの言葉なら間違いないだろう。

「どうせだから都で他に買いたいものとかあれば、今のうちから考えておいてくれ」

「欲しいものはだいたいエイゾウに頼めば作ってくれるからなぁ」

　俺の言葉をサーミャが混ぜっ返し、他の全員がうんうんと頷く。

「俺でも作れないものは……そう言えばそんなにないな」

「でしょう？」

　何故かリケがドヤ顔をする。俺の場合鍛冶屋がメインではあるが、生産でもチートを貰っているから、該当すればそこらの職人くらいのものは作れてしまうのだ。

　アクセサリーなんかも作ろうと思えば作れるが、元になるデザインがピンとこないだけでデザイナーがいればデザインした通りのものが出来上がるに違いない。

「まぁ、偶には俺が作ったやつ以外のものに触れるのも良いんじゃないか？」

「それはそうかも知れませんね。見聞が広がります」

「だろう？ じゃ、みんな考えておいてくれ」

　俺の言葉にリケが乗っかってくれて、俺はほっと胸をなでおろすのだった。

## 備中鍬

2019年8月21日

　翌日、俺たちはカミロの依頼をこなすべく、３チームに分かれる。

　リディとヘレンは材木を切って鍬の柄を作る。

　サーミャとディアナは板金を、そして、俺とリケが鍬の刃部を作る。クオリティはもちろん”一般モデル”だ。

　放棄地だと言うし、形は平鍬ではなく備中鍬――先が４つくらいに分かれている鍬にする。

　前の世界の日本だと江戸時代くらいの発明らしいが、原型は弥生時代に、鉄製のものも古墳時代にはあったと言うから、この世界にあってもおかしくはないだろうし、万が一先取りしてしまっても大きく文明を進ませてしまうようなこともあるまい。

「最初の１つは作り方を見せておこうか」

「お願いします」

　火を入れておいた火床で作りおきの板金を熱する。なんだか随分と懐かしいような気もするな。

　板金に熱がまわったらタガネで２／３くらいまで３つの筋を入れて、枝分かれさせながら、ざっと形を整える。

　この辺りで温度が下がってきているので、もう一度火床に入れて加熱するが、その前にリケに形を見せておく。

「形的には大体こんな感じだ」

「なるほど」

　そして火床で加工できる温度まで熱する。火床の炎がジリジリと俺の顔を灼き、目を細めて俺は額から落ちる汗を拭う。それでも火床からは目を離さない。

　ちょうどいい温度になったら火床から取り出して、金床に置いて仕上げていく。鍬にも刃があるので、刃先の方ほど薄くなるように仕上げる。

　”一般モデル”だしチートを使っての加工なので、微修正も発生しなかった。

　刃ができたら、もう１度火床に入れて、今度は刃と反対側の加工だ。タガネと鎚を上手く使って四角い、柄を取り付ける部分を加工していく。

　そこが出来上がったら完成……ではない。

「これで形は出来たな」

「まだあるんですか？」

「この後、焼入れと焼戻しがある」

　焼入れと焼戻しの作業は他の刃物と変わらないので、勝手知ったる感じで作業できた。もう耳慣れたジュウと言う音と、冷えていく感覚を手に感じながら、丁度いいところで引き上げる。

　その後、火床の火で炙るようにして少し温度をあげたら完成だ。リディとヘレンが切ってくれた角棒を差し込んで、クサビで固定し、「ちょっと試してくる」と言いのこして俺は外に出た。

　中庭にある畑のそばに立って、鍬を振り上げ、腰を入れて勢いよく土に突き刺す。畑の外の土だから、まだ耕されて無くて硬い。手にはその感触が伝わってくる。

　だが、鍬は土に深々と突き刺さっている。

「よっ……と」

　ぐいっと鍬で土を掘り起こした。結構深い位置まで掘り起こすことが出来ている。この時に平鍬だと、硬かったり粘土質の場合刃に土がくっついて作業しにくいのだそうだが、備中鍬なら土がつきにくく作業がしやすい。

　しかし中腰で作業するのは３０代の体でもなかなか腰に来るな。前の世界だと大正時代くらいに踏み台のついた備中鍬が発明されていて、それなら立ったまま作業できるらしいが。

「これなら十分か」

　俺はトントンと腰を叩きながら、鍬を担いで作業場に戻った。

## 家族旅行へ行こう

2019年8月23日

　鍛冶場に戻った俺は、次の備中鍬に取りかかる。リケも自分で備中鍬を作りはじめた。

　ここからはタイムアタックみたいなもんか。明日は都へ家族旅行だから、今日は２人併せて１０本も出来れば御の字と言うことになる。

　俺とリケが鍬を打つ間も柄と板金がドンドン出来ていく。作業難易度が段違いと言うのはあるが、サーミャ達の腕が上がっているのも大きい。

　以前までと比べると１．２倍くらいは早いように見える。

　数字にすると大したことがないようにも思えるが、以前までなら１０個作る間に１２個、５０個作る間に６０個と考えるとなかなか大きな差になってくる。

　今回のように”数打ち”が必要な場合は特にそうだ。

「みんな腕が上がったなぁ」

「そうか！？」

　しみじみと俺が言うと、サーミャが耳をピコピコと動かしながら嬉しそうにしている。

「ああ。なぁ、リケ」

「そうですね。間違いなく上達してるかと」

「やった！」

　目立って喜んでいるのはサーミャだが、ディアナもリディもそれぞれ控えめにだが喜んでいる。

　ヘレンは……まぁ、まだ来たばかりだからな。焦らずゆっくり上達すれば良い。

　俺がそんなようなことをヘレンに伝えると、ヘレンは力のこもった目で頷いて、お互いに自分の作業に戻った。

　この日は目標の１０本を超えて１１本製作することが出来た。俺が７本、リケが４本である。

「やっぱり親方にはかないませんね」

「そりゃまぁ、親方だからなぁ。弟子に簡単に超えられるようじゃ困る」

　俺は笑いながら言う。チートの生産速度にこれだけ追いつけている時点で、リケの腕も相当なものだと思うのだが、それは言わずにおいた。

　翌日。今日は都に行く日だ。とは言ってもなにか特別な用意をするわけでなく、街へ行く日とそう変わらない。

　服装もディアナがちょっとおめかし気味なくらいで、いつもとそう変わらない。都のほうが多種多様な人々がいるぶん、他人の格好を気にする人が少ないように思う。

　無論、身分や場面に相応しい服装というのはあるが、単に街を見物するくらいならそういったことを気にする必要もないだろう。

　身を守るための武器の類も荷車には積んでいくが、都に着いたら体に帯びる武器はナイフくらいの必要最低限のみに抑えるつもりである。無用な争いを起こしたくもないし。

　まだ日が昇りきらない、薄明の間に、いつもの納品物を載せていない荷車をクルルに繋ぐ。

　皆で荷車に乗り込んだ（ルーシーはディアナが乗せてやった）ら、いつもより早いが出発だ。

　リケがいつものように手綱を操るが、クルルはこちらを振り返って動かない。荷物を積んでないからだろうか。

「今日は荷物は積まないよ。その代わり遠くまで行くから」

　俺が振り返ったクルルに声をかけると、クルルは「クル」と小さく頷いて、歩きだした。

「荷物を積み忘れてると思ったのかな」

「クルルちゃんは賢いですね」

　リケが手綱を操りながら感心している。それには俺も同意しか無いので「そうだな」と頷いた。

　森の中の道を行くときは、基本サーミャが鼻と耳を使って警戒し、森狼の群れなんかにぶつかりそうならそこを避けて通る。これは街へ行くときと変わらない。

　一度、鹿がいるらしいところ（俺には姿も見えなかった）を迂回した以外は特に何事もなく森を出た。

　森を出たら街道だ。いつもなら街へ向かう方へ行くが、今日はその反対方向だ。俺が指示を出して、リケが手綱を操る。クルルは一瞬躊躇したが、すぐに手綱の指示に従った。

　しばらく街道を進む。草原と森と道。風景自体は街へ行くときと変わらない。ただ、その位置が逆だ。

　サーミャが言う。

「いつも帰り道に見る風景を行きに、それも日が昇る中を見るって、不思議な感覚だな」

「そうだねぇ」

　俺は何回か都に行ったことがあるから違和感もないが、サーミャはこっち側へ来るのはおそらく始めてだ。

　完全に未知の風景ならゼロからだから純粋に楽しめるだろうが、なまじ見たことある風景なので違和感が出てしまうのだろう。

　リケも同じだったようで、サーミャの言葉に同意の声をあげた。他の皆はピンと来ていないようだ。リディやヘレンはまだこの辺にも慣れてないからだろう。

　ディアナは元々都住まいだし、街はエイムール家の所領なので、慣れているのかも知れない。

　俺たちが街道を行く中を、朝日が昇って茜色に染まった世界が、色を取り戻したかのように緑と青、そして引かれた茶色の線になっていく。

　なかなかに美しい景色だ。絵心があれば、絵にでもしたいと思うほどには。

　この分だと都についてもいい天気だろう。この幸先の良さで、今日一日、皆と楽しく過ごせると良いのだが。

　そう思う俺を乗せて、クルルの牽く竜車が街道を進んでいった。

## 都へ

2019年8月26日

　都に向かう街道をクルルが牽く竜車が進んでいく。サスペンションの恩恵もあって、スピードを速めにしても極端に乗り心地が悪くなるといったことはない。

　普通の馬車でこのスピードだと乗り心地は悪いし、かといってサスペンション搭載車だと荷台の動きが比較的少なくなるので怪しまれる。

　しかし、竜車はスピードが速くても、周りが「走竜が牽いてるし」と思ってくれる。

　これは少しずつ走るスピードを上げて、すれ違う馬車や旅人の反応を見て確認したことである。

　驚くか、怪訝な顔をしていた人々も、牽いているのが走竜だと分かると、なんとなし納得したような表情になるのだ。

　まぁ、そもそも走竜が珍しいので、クルルが二度見されたことも度々ではあるのだが。俺としては荷車のほうに目が行かなければとりあえずは問題ない。

　街道を進んでいくと、俺にとっては何度目かの都を守るようにそびえる山脈が見えてきた。

「おおー」

　サーミャは見るのが初めてだからだろう、大きな声で感動をあらわしている。”黒の森”の近くにも山はあるけど、木々が邪魔で見えにくいからな。湖に行ったときに遠くに頭が見えるかな……？程度だ。

「あれが見えたらもうすぐ都だぞ」

「そうなのか！？」

「そうね。期間にしたらそんなに離れていないのに、なんだか懐かしいわ」

　俺の言葉にサーミャがはしゃぎつつ、ディアナはちょっとした感傷が湧き出ているようだ。日帰りとは言え里帰りには違いないからな。別にエイムール邸に残っていてくれてもいいんだが。

　俺がそう言うと、ディアナはため息をついて口をとがらせた。

「私だけ仲間はずれ？」

「いや、そう言うわけじゃ……」

「フフ、分かってるわよ」

　慌てる俺に、ディアナがいたずらっぽく笑いかけた。それなりに一緒に暮らしているが、貴族の娘さんらしく美人なので、ふとしたときの表情にドキッとさせられることがある。今がそうだ。

「でも、仲間はずれがいやなのは本当よ」

「分かったよ。街へは一緒に行こう」

「もちろん」

　ディアナは再び微笑んだ。やっぱりドキッとするような綺麗な笑顔で、俺は見惚れないように、リケの座る御者席の近くへ移動して、前を見る。

　見覚えのある外壁が遠くに見えた。都へはあとほんの少しだ。

　クルルのおかげで街の入り口へはなかなか早くに着いた。元々昼前には到着している予定ではあったが、それよりも１時間ほどは早い。

　今からだと都へ入るのに時間がかかっても、エイムール邸には相当早く着いてしまうな……。最悪どこかで時間を潰す必要があるかも知れない。

　チェック待ちの列に並びながら（並ばせたのはリケだが）、そんなことを考えていると聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「エイゾウ様！」

　この近辺で俺を「様」付けして呼ぶ人物の素性は１つしか無い。エイムール家の使用人さんたちだ。

　声の方を見ると、思ったとおり知った顔の使用人さんがいた。

「ああ、カテリナさん」

　声の主はカテリナさんだった。帝国から戻るときも思ったけど、この人だいぶアクティブだよな。

　彼女は深々とお辞儀をして言った。

「お迎えに上がりました」

「それはありがたいんですが、こんな早くから来てて大丈夫だったんですか？」

　カテリナさんがいつからいるのかは知らないが、俺たちはかなり早くに到着しているから、普通の馬車の速度でも後１時間はここで待ちぼうけすることになっていたはずだ。

　正確な時計が一般的には普及していないので、行く時間を正確には伝えようがないのはそうだが、これがもし昼過ぎに到着の予定だったら相当な時間カテリナさんに無駄足を踏ませるところだった。

　マリウスにはあまり気を使わないように言っておかないといけないかも知れないな。逆にこっちが気を使う。

「ええ、お屋敷の方は皆いるので平気です」

「そりゃ良かった。乗ってください」

「ありがとうございます」

　カテリナさんを荷台に引き上げた。ルーシーが早速駆け寄って、尻尾をふりふりしている。カテリナさんの表情が綻んだ。

「かわいいですね」

「そうでしょう！」

　ディアナママが胸をはって言った。かわいいのは確かだが、ディアナの親バカっぷりにどんどん磨きがかかっているような……。今更か。

　サーミャがやれやれといった感じでため息をつく。その気持ちも分かってしまう。

「あ、このままあっちへ進んでください」

　一しきりルーシーをモフり倒したカテリナさんが、指を指してリケに行き先を指示する。

「大丈夫なんですか？」

　リケが恐る恐る、指示された方へ竜車を動かした。

「ええ、都に住んでいる人……特に貴族は別扱いなので」

　カテリナさんが事も無げに言った。貴族が別扱いなのはそりゃそうか、という感じである。そこに俺たちが乗っかってしまうのはちょっと他の人に悪い気もするが、ありがたくコネの力を行使させてもらおう。

　門のところではカテリナさんが懐から何かを取り出し、衛兵に見せる。多分エイムール家の通行証みたいなもんだろう。衛兵はそれをちらっと確認すると、敬礼をして俺たちを通してくれた。

　門をくぐると、大通りが広がり様々な人達がいる。何度か見たが、この光景には心躍るものがあるな。

　俺はそう考えながら、今日の予定に思いを馳せるのだった。

## さあ繰り出そう

2019年8月28日

「おおー！」

　大きな街路を見て、サーミャが声を上げた。これだけの幅の道と人は街でも見ることはない。

　老若男女、種族さえも様々な人が通りを行き交ったり、露店を広げたり、立ち話をしている。

　その向こうには大きな城（前の世界のノイシュバンシュタイン城みたいなものとは違い、イメージ的には要塞に近い）がその威容をもって都の主の権勢を示している。

　ディアナは地元だし、ヘレンは時々来ていたみたいなので別として、初めて来た面々は目を輝かせている。リディもだ。

「いろんな人がいますね」

　目を輝かせたまま、リディが言った。今現在、都で１番珍しいのはエルフのリディだと思うが、それを面に出さないようにして、俺はつとめてのんびりと返す。

「リザードマン達は街ではほとんど見ないからなぁ」

「巨人族の人、大きいですねえ」

　リケが感心した声で言う。見た目には人間の少女に見えるが、ドワーフなので立派に成人している（らしい）彼女から見たら、俺たちよりもさらに大きく見えることだろう。

　完全「おのぼりさん」状態になってあちこちを見回す皆。それに負けず劣らずキョロキョロしているのがルーシーだ。

　尻尾をパタパタ振りながら、荷台の上を縦横無尽に動き回って、荷台から動く景色を見ている。

　ヒョコッと荷台から顔を覗かせると、近くに居た通行人は一瞬ギョッとするが、すぐに和やかな顔になる。

　大人の犬（狼）だったら怖さの方が勝つかも知れないが、ルーシーはまだ子狼で、愛嬌がある。

　もちろん犬が苦手な人はこの世界にも多くいるとは思うが、大抵は可愛さに軍配が上がるだろう。

　そうやって通行人や露天の人々を和ませつつ、その様子に車内の俺たちも和みながら、竜車はエイムール邸へ進んでいった。

　エイムール邸に着くと、カテリナさんの指示で客用の馬車止めに竜車を止める。

　クルルを車から外したり、ルーシーを荷台から下ろそうとしていると、屋敷から使用人の人達が出てきた。

「皆様、ようこそお越しくださいました」

「ボーマンさん。それに皆さんもわざわざ出てこなくても結構でしたのに」

「いえいえ、お客様がいらしてるのにそんな無礼な真似をいたしますと、エイムール家の名に関わりますので。生憎当主は出かけておりますが、自分の家と思ってお使いください。そう仰せつかっておりますので、ご遠慮なく」

「ありがとうございます」

　声をかけてきたのはボーマンさんだった。相変わらず雰囲気が柔らかい。恰幅の良さが拍車をかけているようにも思える。使用人の人達もニコニコと俺たちを出迎えてくれた。

　マリウスはいないらしい。まぁ、普通の日に伯爵が暇、ってのは王国大丈夫かとはなるもんな。

「お嬢様もお元気そうで何よりです」

「ええ。皆も変わりないみたいで安心したわ」

　ボーマンさんはディアナにも声をかける。ディアナもそれに応える。

　すぐに女性の使用人の人達とキャッキャし始める。前に帰ってきたときもそうだったけど、仲良いんだよな。

　ディアナはそのままうちの女性陣――俺以外全員だが――の紹介を始めた。

「大事なものは屋敷の中でお預かりいたしましょう」

「すみません、助かります」

　それを横目にボーマンさんと俺は荷物を屋敷に入れる。と言っても俺の刀といくつかの武器くらいで、それもすぐに済んだ。

「そろそろお食事かと思いますが、どうされるので？」

「ああ、行こうと思ってるところがあるんですよ。用意してくださってたらすみません」

「いえいえ、旦那様が”おやっさん”のところに行くだろう、と仰っていたので、失礼ながらご用意はいたしておりません。お気になさらず」

「それを聞いてほっとしましたよ」

　俺は偽らざる自分の心境をボーマンさんに伝えた。あらかじめちゃんと連絡しておくべきだったな。危うく食事を無駄にするところだ。マリウスのおかげで助かったとは言っても、今後は気をつけるとしよう。

「おーい、行くぞー」

　俺はまだ話している皆に声をかける。名残惜しいだろうが、用事が早く済めばまた戻ってきて、お言葉に甘えてゆっくりさせて貰えばいい。

　皆から返事が返ってきて、エイムール邸を出る。振り返ると、カテリナさんがルーシーを抱っこして手を振っていた。

　さて、繰り出しますか。

## おやっさんの店

2019年8月30日

　まずは腹ごしらえだ。ある場所を目指して、俺たちは内街を歩いて行く。この辺りの貴族が住んでるところは、まだ人通りもそんなに多くはない。

　ディアナによれば「外街も大体知ってる」とのことで、サンドロのおやっさんの店の場所を聞いてみると、心当たりがあるようなので案内をお願いしている。

　外街を知っている理由については秘密のようなのだが、バーマンさんが苦笑していたから、多分兄弟と抜け出して行ってたとかだろうな。

　迷いなく進んでいくディアナについて行くと、やがて門が見えてくる。外街とこの内街を区切る門だが、いざ事が起こればここも封鎖して（当然、外壁の門も閉じられる）障害にするのである。

　なので、門のそばの建物は他の建物に比して高く作られていて、衛兵の詰め所になっている。

　見上げると、警戒をしているらしき兵士が建物の上にもいるのが見えた。

　衛兵にディアナが札を見せて、軽く敬礼をする彼の横を通り過ぎる。戻るときは再びこれを見せると言うわけだ。

　万が一盗まれた場合だが、帰りがあんまり遅いときはエイムール家の誰かがここまで迎えに来てくれることになっている。だが、なるべくならその手間はかけさせたくないな。

　外街へ出ると、一気に喧噪が増してくる。街には度々行っているし、さっきも通ってきたから喧噪そのものに違和感はない。

　ただ、街では見ないような種族がいたり、人の数も段違いに多い。これは人混みが苦手な人だと人酔いしてしまうかも知れない。

　ディアナが先を行く。しかし、人でごった返す中をスイスイと行ってしまうと、慣れているディアナやヘレン、俺（前の世界での話だが）はともかく、他の３人がはぐれてしまうかも知れない。

　俺が声をかけようかと思ったとき、ディアナはスッと歩く速度を落とした。どうやら同じ事を考えたらしい。

「はぐれないようにな」

　俺はサーミャとリケ、リディに声をかけた。全員で距離を詰めて歩く。

　女性の中に男、それもオッさんが１人だけ紛れていて、人間が３人、他の種族が３人でしかも１人はエルフ、と言う状況だ。

　しかし、エルフがあまりに物珍しすぎるのか、はたまたヘレンが周囲に目を走らせてくれているおかげか、変なちょっかいをかけてくるヤツは今のところいない。

　もしいれば、うちのナイフの切れ味を示さないといけなくなるので、なるべくなら勘弁して欲しいところだ。

　ヒヤヒヤしつつ、周囲に気を配りつつ、なんとか何事もなくおやっさんの店に辿り着いた。

　”金色牙の猪亭”と文字が書かれた看板には、そのまま牙の部分が金かあるいは真鍮で象嵌された猪のレリーフが彫られている。

　黒の森にいる猪とは少し違うように見えるから、別の種類かも知れない。

　俺たちは採光も兼ねているのだろう、開け放たれた入り口から中に入る。

　まだ昼飯には少し早めの時間だが、なかなかの客入りだ。人気店だというおやっさんの自称は嘘ではなかったらしい。

「いらっしゃ～い」

　入ってきた俺たちを若い女性の店員さんが出迎えてくれた。

「あっちのテーブルが空いてるわよ」

「ああ、ありがとう」

　派手でない上着とスカートに、エプロン姿のその店員さんに示されたテーブルへ俺たちは着いた。

「さーて、何を食べようかな。都の名物って何なんだ？」

「うーん、下町でおいしいのと言ったら、羊の煮込みかしらね」

「ほほう。それはうまそうだ」

　固くても良いからそこにパンをつけたり、野菜系の何かを頼めば良さそうだな。

　その辺は適当に任せるか。そう思って注文しようとすると、覚えのある声が聞こえてきた。

「あれ？エイゾウの旦那じゃねぇですかい？」

「おお、ボリスじゃないか。元気してたか？」

「ええまぁ。おやっさんに怒鳴られる以外には何もねぇです」

　そう言ってボリスと俺は大笑いする。

「ああ、ここに座ってるのがうちの家族だ」

　座っている家族の皆を俺が紹介すると、ボリスは口笛を鳴らした。

「これはまた……旦那、モテるんですねぇ」

「言っておくが、嫁さんではないからな」

「へいへい。あ、おやっさん呼んできやす。おやっさーん！」

　全然信用してない口調でボリスはそう言って奥に引っ込む。かと思ったら、すぐに馬鹿デカい声が飛んできた。

「なにぃ!?エイゾウが!?」

　相変わらずだな、おやっさん。俺は思わず笑みを漏らす。

　ドスドスと床が揺れている錯覚すら覚えさせるような足音で、背は低いがガッチリとした身体の中年の男性がやってきた。

　この店の主、サンドロのおやっさんである。

「ドワーフ？」

　リケが思わずそう言ってしまうのも無理はないが、おやっさんは頭のてっぺんから爪先まで人間だ。……そのはずだが、遠い先祖にドワーフの血が混じっていて隔世遺伝で特徴が現れている可能性は否定できない。

「よう、おやっさん。都に来るついでに寄ってみたよ」

「なんでぇ、うちはついでかよ！」

　俺の言葉におやっさんがぶんむくれた。

「冗談冗談、都に来るんだから、ここも目的の１つだよ。言っただろ、来るって」

「おう、ありがとよ！」

　主目的ではないにせよ、ここへ来るのも楽しみの１つだったのは間違いない。

「で、こっちがお前さんのカカァ達かい？」

「家族なのはそうだけど、嫁さんではないよ。前も言ったろ」

「そうだったか？別嬪さん揃いだなぁ！エイゾウがこうも隅に置けないたぁ思わなかったぜ！」

　そう言って呵々大笑するおやっさん。うちの家族の視線が冷たくなっていくのを感じて、俺は話題を変える。

「ま、まぁ、そんなわけでせっかく来たし、なんかオススメあったら作ってくれよ」

「おう！任せとけ！」

　おやっさんは力こぶを作って――料理人であるということが信じられないくらい盛り上がっていた――厨房に引っ込んだ。

## おやっさんの料理

2019年9月2日

　その後のおやっさんの食事攻勢はもの凄いものがあった。

　俺たちがストップをかけないといつまでも料理を持って来かねない勢いでドンドン料理が出てきたのである。

　おやっさんが出してくれたのは羊の煮込みに始まり、甘辛い感じの味付けがされた牛の肉を焼いたもの、茹でた野菜に少し酸っぱいソースをかけた温野菜サラダみたいなもの、カレーっぽい味の豚肉を焼いたもの、鶏肉の香草焼きみたいなものなどなどで、そこに固めのライ麦パンと野菜のスープみたいなものがついた。

　”町の食堂”にしては豪華なラインナップである。どれも美味い。これはおやっさん相当に張り切ったな。

　しかし、量がやたらと多い。リケとヘレンがいてくれて助かった。彼女たちは食べる量が普通の女性より多いからな。２人ともどこに食べたものが消えているのかと思うくらいに細いが。

「猪とか鹿も美味いが、牛や羊、鶏も美味いな」

「飼います？」

「いやぁ、家の場所が場所だからな……」

　あの森の中で牛やら羊を飼う、と言うのはちょっと想像できない。餌になる草はそこそこ豊富だが、牛や羊を放牧出来るような広大な敷地はない。毎日街道の方まで移動させれば大丈夫だろうが、その手間をかけてると鍛冶屋の仕事は諦めざるを得ない。それは本末転倒だ。

　鶏のほうは鶏舎を整えれば飼えるかも知れないし、そのときは雌雄両方を飼うから鶏卵を入手出来るわけで、魅力的ではある。

　ただ、やっぱり管理も一筋縄ではないし、フラッと家の周囲から外に出ていけば狼達の御馳走になるだけだろうから、あんまり現実的ではなさそうだ。

「外街にこんな腕の料理人がいたのねぇ。エイゾウは色々知ってるわね」

　感心したようにディアナが言った。貴族のお嬢さんの口にあったなら、相当な腕前なのだろう。繁盛店なのも頷ける。

　実際、近所の店の人や旅人もひっきりなしに来店していて、料理に舌鼓を打っている。しかし、である。

「俺はマリウスの遠征に従軍したときに知り合ったから、知ってたのは俺じゃなくてマリウスだぞ？」

「え？」

　驚いた顔で返してくるディアナ。そうだぞ、知ってたのは君の兄さんだ。俺じゃない。そもそも従軍するまで、都での知り合いと言えばエイムール家の人々と侯爵くらいなもんだった。

「家を抜け出してここに来て気に入った、とかじゃないのか？」

「兄さんならありえるわね……」

　ありえちゃうのか。それでいいのかエイムール家。まぁ、つい最近までは三男坊だったんだし、立場的には多少自由だったんだろうし、この店の場所に心当たりがあるお嬢様もいるんだから問題はない……のだろうか。

　やがて店がごった返してきた。もりもりと料理を平らげて一息ついていた俺達は席を空けるべく、会計をしようと店員さんを呼ぶ。

「親父が代金はいらないって言ってたよ」

　最初に俺たちを出迎えてくれた女性の店員さんがそう言った。この子、おやっさんの娘さんだったのか。

「え？いや、でも」

　流石にあれだけ食って無料はまずかろう。こういうので負担をかけるのは心苦しいし。

「”包丁の手入れの礼”だからって。何が何でも払おうとしたらボリスと協力して金をもらわずに追い出せって」

　完全に先読みされている。娘さんの後ろにはいつの間にかボリスが出てきていて、おやっさんに負けず劣らずな力こぶを見せていた。

　服装のせいでよくわからないが、もしかしたら娘さんも腕っぷしに覚えがあるのかも知れない。

　とは言っても、チート持ちと地域最強クラスの傭兵、元々才能があった上、その２人に鍛え上げられた剣士に獣人までいるのだ。

　戦闘になれば俺たちが勝つのは明らかだが、お互いに怪我は免れまい。そもそも別に喧嘩してまでおやっさんの好意を固辞したいわけでもない。

「……わかりました。それじゃあ御馳走になります。おやっさん！ありがとう！」

　厨房の方に大声でそう言うと、落雷のような大音量で

「おう！また来いよ！来ねえとぶっ飛ばすぞ！」

　と返ってきた。来なけりゃぶっ飛ばしようもないと思うんだが、あまりにおやっさんらしい言葉に、俺は思わず苦笑ではない笑みを浮かべた。

## 厄介事

2019年9月4日

　おやっさんの店を出て、６人で街路を行く。

　時間帯によるのか、来たときにはもう少し空いていた道が混んでいる。俺たちは固まってスリなどを警戒することにした。

　俺とヘレンとディアナの３人で警戒すれば滅多なことはないだろう。ヘレンなんかは同時に目立たないよう武器に手をかけつつ、わずかだが殺気を放っている。

　この様子なら生半可なやつは近寄れもしないだろう。実際に俺たち集団の周りには少しだけ空間が空いていた。さすが凄腕の傭兵と言うべきか。

「気がついてるか？」

　ヘレンがかろうじて俺に聞こえるくらいの声で言う。

「ああ。３人か」

　俺がそう答えると、ヘレンはやはり小さく口笛を鳴らした。

「さすがだな。２人までは分かると思ってたけど、３人全員か」

　ヘレンが言っているのは俺たちを狙っている輩の数だ。いや、俺たち、と言うのは正確ではない。恐らくはリディを攫おうとしている。虎の獣人はそれなりにいるし、ドワーフもとても、と言うほど珍しくはない。ディアナも美人だが、手練れぽい人間に接近する危険を冒すだけの価値があるような格好を今はしていない。

　だがエルフのリディについては、もし上手くいけば一攫千金のチャンスに見えるだろう。

　家族だから連れて行かないのもなんだなと思って連れてきたが、今後は変装をさせて来なきゃいけないな。そもそも今回もそうすべきだった。街で平気だったから大丈夫かと思って油断した、俺の失態だ。

　そしてそれが３人。２人は目立っているが、１人は人混みに上手く紛れている。そこそこの手練れだ。”そこそこ”と言ったのは、リスクを冒してまで決行しないといけない連中の腕が良いとは思えないことと、そもそも俺たちに気付かれているところだ。

　足がつきやすいだろうエルフを金に換える当てはあるんだろうから、ただのチンピラでもないんだろうが。

「エイゾウ、どうする？」

「追っ手をまけるか？」

「……難しいな。こっちは人数が多い」

　まけるならそれが一番良かったんだが、仕方ない。

「このまま行けば人通りが少ないところに出るんだよな？」

　俺はディアナに聞いた。ディアナは黙って頷く。

「そこで仕掛けるか」

　そう言うと、今度はヘレンが頷いた。

　警戒を続けつつ、元々目的だった店へ向かう。

　目的の店は外街の中では高級だが、内街と比べると劣る……といったくらいの店である。

　内街の店にしなかったのは貴族向けだからで、貴族向けの豪奢なデザインは作るのが面倒だと言うのもあるが、そんな高いものを常に身につけているのもどうかと思ったからだ。

　手に入れやすい感じのものよりは、もう少しだけいいやつ、くらいの絶妙なところを抑えたいのだ。出来るかどうかはともかく。

　そういった外街の人々の大勢がおいそれとは買えない、かといって内街の貴族も足繁くは通ったりはしない感じの店が多いところなので人通りは比較的少ない。比較的、なので人にまぎれて接近するのがなんとか出来るくらいにはまだ人通りがあるが。

　そこへ進んでいくと、３人も徐々に距離を詰めてくる。動きから言って、２人に目を向けて１人がその間に……みたいなつもりなんだろうな。

　俺とヘレン、そしてディアナは目配せをして頷くと、スッと角を曲がって更に人通りの少ない路地へ移動した。

　３人が慌てて着いてきたので、俺達は立ち止まって声をかけた。

「さて、もう気がついてるのはわかったと思うがどうする？逃げるなら何もしないことを保証しよう」

　これで立ち去るなら、とりあえずは見逃してやる（余罪は山程あるとは思うがそれはそれとして）が、そうでないならこちらも対応するだけだ。

　バレた時点で失敗しているようなものだし、出来れば逃げて欲しいんだがな……。

　場に緊張が走る。３人は逡巡しているようだ。こう言うときにサッと決断できないのは減点だな。俺は懐のナイフに手を伸ばしつつ、相手の対応を伺った。

## お買い物開始

2019年9月6日

「こっちは手練れの剣士が３人。ドワーフも獣人もいるし、エルフは魔法も使うぞ」

　俺はそうハッタリをかましてみた。リケは自衛が出来る程度だし、サーミャは身体能力は高いが、白兵戦はあまり得意ではない。

　リディに至っては魔法が使えるのは確かではあるのだが、都のように魔力が薄いと十全に使えるかどうか。

　とは言え、カツラを被ってそれとはわかりにくいが”迅雷”ことヘレンと、それに渡り合った剣士（俺のこと）がいるのだ。

　それだけでも十分なのに、ディアナもそこらの人間には負けないくらいに強い。なんせここ最近はヘレンにみっちり稽古をつけて貰っているのである。滅多な相手には負ける気がしない。

　つまり、連中は俺たちに気付かれた時点で負けているのだ。問題は連中がそれを理解出来るかどうかだ。

　ジリジリと後退していく３人。失敗を悟ったなら立ち去るのが正解なのは間違いない。

　やがて３人は脱兎のごとく駆け出していく。

「次見かけたら容赦しないからな！」

　その背中に俺は大声で声をかけた。とりあえずは一段落か。だが、この瞬間を狙っている輩が他にもいないとは限らないので、警戒は解かずに本来の目的地へ移動する。

「びっくりしました」

「私もです」

　その道すがら、リケとリディがそう言った。サーミャは臭いである程度は分かっていたが、人が多いとその臭いも紛れてしまうので特定が難しかったらしい。

「あいつらにも言ったが、手練れと獣人で４人も優秀な護衛がいるんだ。貴族様でもこれ以上はなかなか望めないし、安心してくれていいぞ」

　俺は少しおどけて言った。少しでも２人の緊張がほぐれるといいんだが。

「あの森を思い出しますね」

　その様子にクスリと笑いながらリディが言った。俺がリディの護衛として洞窟に突っ込んで行ったときか。

「あの森って？」

　それを聞いたヘレンが不思議そうな顔をする。

「ああ、実はリディが俺の家に来るキッカケはな……」

　移動しながら、その時の話をする。店につくまで、ヘレンは目をキラキラさせながら俺の話を聞いていた。こう言う話好きなんだなぁ。今度熊退治の話もしてやるか。

「ここよ」

　ディアナが示した店はなかなか立派な構えの店だった。流石にショーウィンドウはないが、前の世界の雑貨屋のような雰囲気である。

　取り扱い品を考えれば似たような雰囲気になるのは当然か。

　中に入ると、平台にいくつかのアクセサリーが並んでいる。金色や銀色に輝いていて、なかなかに凝ったデザインをしている。

　金色で安いのは真鍮なんかの金でない金属、中間は金メッキ、高いのは純度が低い金のようだ。純金製のものはこう言うところに並べないのか、見当たらなかった。

　こう言うところで純金のを売っても買っていく客が極端に少ないだろうし、そもそも売ってないのかも知れないが。

　銀の方も値段は様々だが、こちらは純度とデザイン、つまりは加工に要した時間の違いみたいだな。地味にチートがその辺を教えてくれている。生産と少し鍛冶が関わるからだろう。

　こう言う店に来たことのないメンツ――まぁ、ディアナと俺（前の世界込みだけど）以外の全員があっけにとられている。

　なんかすごいものが並んでる！って感じなんだろうな。

「どういうのが良いか、探せよ」

「って、言われても分かんねぇなぁ」

　俺の言葉にサーミャが返す。まぁそりゃそうか、サーミャは髪飾りをつけているけど、それ以外はシンプルだ。ネックレスを下げまくったりしてると引っかかりそうだもんな。

「私が見繕ってあげるわよ」

　ディアナがどーんと胸を張って言った。

　貴族のお嬢様の見立てなら間違いあるまい。俺は外見もそうだが、中身はそれ以上にオッさんなのだ。

　そのへんのセンスはないのでお任せするが、休日に買い物に付き合うお父さん状態になるのは避けたい。

　なるべく参加はしなきゃなと、さっきまでの警戒以上に気を引き締めるのだった。

## アクセサリー選び

2019年9月9日

　パパッとディアナに一通り見てもらって、最初はサーミャだ。

「ど、どうかな」

　木の枝が絡んだようなデザインの、金色のネックレスをつけて貰って照れくさそうにしている。

　もっとワイルドな、牙をモチーフにしたようなものを選ぶかと思ったら、かなり落ち着いたものだったので少し驚いた。

　しかし、もちろん似合ってないなんてこともなく、サーミャの可愛らしさ（本人はワイルド系のつもりなんだろうとは思うが）をしっかり引き立てているように思う。

　普段つけている緑の髪飾りにも合っている。金色ではあるが、サーミャは髪や毛が黄色……と言うか虎柄なので、派手すぎに見えない。

「似合ってると思うぞ。」

　俺は素直にそう言った。サーミャはいよいよ顔を赤くしてモジモジしはじめた。こう言うの慣れてないからな。

　次にリケである。リケのは銀色のゴツっとしたペンダントトップに小さな赤い宝石が嵌っていて、かなりシンプルだ。

「これは鍛冶屋の火ってことか」

「そうね」

　俺の言葉に答えたのはディアナだった。かなり小さいが赤い宝石が光を反射して、さながら火が揺らめいているようでもある。良い見立てだ。

　今日のリケは普段よりも露出を抑えめにした（普段は暑いからか割と露出が高い）地味な服を着ているのだが、丁度いいワンポイントにもなっている。

「リケもよく似合ってるなぁ」

「えへへ、ありがとうございます」

　リケは満面の笑みで言った。少しだけ照れているようだが、まぁ、うちの家族で１番褒められ慣れていると言うか、鍛冶のほうでよく褒めてるからな。

　皆が皆俺の言葉に照れまくっていたら、俺の気恥ずかしさのほうが限界に達して、俺のほうが店から飛び出しかねない。

「リディにはこれよ」

「おお」

　そして、エルフのリディである。サーミャのにも似た感じの、ただしこちらは銀のネックレスだ。リディは銀髪なので、それと合わせたのだろうか。

　リケのと同じような大きさの、こちらは緑の宝石が光を反射していた。これは森のイメージかな。

　サーミャのとリケのを合わせて２で割ってリディ向けに味付けした感じになっていていい。

　そして何より

「森の妖精、って感じがするなぁ」

　感じたままに俺がそう言うと、リディは黙ってぽすぽすと俺の胸を殴ってくる。だが他の家族と違って痛くない。手加減しているのか、他の家族との筋力の違いか。

　なんとなく後者のような気はするが、我が家の言わぬが花の１つである。

「ア、アタイはいいよ……」

「何言ってるの、家族全員分やるって言ったでしょ」

　蚊の鳴くような声で抵抗したヘレンをディアナがねじ伏せて選んだのは、赤い宝石の耳飾りだった。宝石はリケのペンダントのものよりも一回り大きい。

　今はカツラをかぶっているので髪色が違うが、それでも似合っている。赤毛のときだともっとマッチするだろう。

　ディアナの審美眼もなかなかだ。今の髪色に合わせつつも、本来の髪色でもちゃんと似合うようにしているのだから。

「おー、いいじゃないか」

　俺が褒めると、ヘレンも照れて正拳突きを繰り出した。風切り音がしそうな速度である。

　俺はなんとか手のひらで受け止めた。パンと音が響き、俺の手に衝撃としびれが走る。どんだけ本気で繰り出してきたんだ。

　手を振ってしびれを払いながら、俺は続けた。

「光って目立つから”仕事”のときはつけられないだろうが、かわいいんだから普段はつけてればいいのに」

　率直な感想を述べたつもりだったが、ヘレンはもう一度俺に正拳突きを繰り出そうとして、止めた。

　その代わりなのか、最初に抵抗したときのような小さい声で

「あ、ありがとう……」

　と、ぼそっと言い、俺は心のなかでだけ「そっちのほうが破壊力高いんだがな」と抗議しておくのだった。

## お買い上げ

2019年9月11日

「それで、ディアナはどれにするんだ？」

「わたし？」

　ディアナはキョトンとした顔をして言った。俺は頷く。

「そりゃあそうだろう。みんなも楽しみにしてると思うぞ」

　俺の言葉に今度はディアナ以外の全員がウンウンと頷いた。

「俺たちじゃディアナみたいにセンス良く選べないからな。すまんが自分で選んで貰わないといけないが」

「ええー、じゃあエイゾウ付き合ってよ」

「俺？」

　次はディアナが頷く番だった。

「自分で選んで、それを見せるだけなんてつまらないもの」

「そう言うもんかね」

「そう言うもんなの」

　ディアナは綺麗な顔でクスッと笑う。俺は頭を掻き掻き、並べられている装飾品に近づいた。

　ううむ、綺麗だということと、ある程度のデザインの良し悪しは分かるが、どれがディアナに一番いいかまでは分からんぞ。

　あと分かるのは工芸品としての出来――つまり、鍛冶屋としてみたときにどれくらいの出来か、だ。

　でも、これはわかったところであまり意味はない。仮に神の手と言われる職人の手になる装飾品であったとしても、ディアナに似合わなければ一銭の価値もないのだ。

「それじゃあ、これはどう？」

　ディアナはシンプルなデザインのネックレスを手にとって胸元に当てた。今着ている服は普段着よりは派手めであるが、”貴族のお嬢様”といった感じはしない。

　その服とディアナの髪とマッチしてよく映える。

「いいんじゃないか」

　一方の俺は完全に”買い物に付き合っているお父さん”のようなコメントを吐き出してしまう。

「ちゃんと見てる？」

「もちろん。見た上で似合ってると思ったから言ったんだ」

　ディアナが少しだけ頬を膨らませ、俺は内心少し慌てつつ釈明すると、膨らんだ頬が元に戻った。

「なぁ」

「なに？」

「完全に夫婦みたいだな」

「そうねぇ」

　小声でサーミャとリケが会話しているのが聞こえるが無視だ無視。

「じゃあ、エイゾウはどれがいいと思う？」

「また無茶なことを……」

　俺は顎に手を当てて考え込む。さっきディアナが手に取ったようなシンプルなネックレスもいいと思うが、この少し大きめの青い宝石が嵌ったデザインのペンダントも似合う気がする。

「これなんかどうだ？」

「あら、いいわね」

　俺が示したペンダントを手にとって、胸元に当てるディアナ。

「うん、似合ってると思う」

「じゃ、つけて」

「ええ……」

　ディアナはくるっと後ろを向いた。ヒキワやカニカンみたいなものではなく、フックを引っ掛ける方式だ。

　俺はそっと近づいて、ディアナのうなじあたりに手をやる。「失礼します」と言わないのはせめてもの抵抗だ。

　一瞬ディアナがピクリとしたが、手元が狂うこともなく引っ掛けることが出来た。

「どう？」

「おおー、いいな！」

「親方が選んだってのがまたいいですね」

「（コクコク）」

「ちょっと羨ましい……」

　ディアナが俺以外の皆に見せる。とりあえずディアナにも皆にも好評なようで良かった。これで「センス皆無」と言われたら、向こう３日は立ち直れない。

「よし、じゃあ買うか。すみません、これ全部ください」

「「「「「えっ！？」」」」」

　俺の言葉に全員が驚いた声を出す。店の人も驚いているように見えるが、買っていくとは思ってなかったのだろう。我ながら金持ってるようには見えんしなぁ……。

「いや、このまま買わずに出るのも失礼だろ。誰か１人にだけ買うとかもなしだ。気になるなら普段仕事の手伝いしてくれてる報酬だと思えばいい」

　これとは別に共通のものは作るが、それはそれ、これはこれだ。

「そう言うことで、お願いします。いくらです？」

　これ以上揉めない間にさっさと買ってしまうべく、店の人に言うとほくほく顔で会計をはじめた。

　そこそこの値段ではあるが、今までの稼ぎを考えればどうということはない。ないはずだ。持ってくるときにまだかなり残ってたし。

「ありがとうございました！」

　店の人達が揃って頭を下げてくれる。ちょっとめかしこんではいるが、あくまで普通の格好なので若干の違和感がある。

　でもまぁ、他人の感謝をこう言う形で受け取るのも悪くはない。

　こうして、俺達は宝飾品店を後にした。

## 露店めぐり

2019年9月13日

　再び人でごった返す街路を6人で行く。

　さっきみたいな事がまたあるといけないので警戒はしているが、ディアナに聞いても「ああいうことはあまり聞かない」らしい（街中の犯罪行為が貴族の娘の耳にどれくらい届くかはともかくとして）し、さっきの連中が失敗したことが分かれば、他の連中も手控えるだろう。その分は若干気楽ではある。

　思ったよりも早く用事が済んでしまった。まだ家に帰るには早い時間なのだが、早くエイムール邸に戻るべきか、それとも少し街の様子を見ていくべきか。

　エイムール邸に戻るように動いてはいるが、せっかく都に来たのだし、他の店を覗いてみるのもいいだろう。

「考え事？」

　どうしようか迷っていると、ディアナが声をかけてきた。彼女は都に来てからテンションが高めだ。１月に１回とか来るのも良いかもなぁ。そのたびにエイムール邸に世話になるのか、と言う問題はあるが。

「考え事ってほどのもんでもないよ。せっかくだから、他の店を覗いていこうかどうしようか迷ってただけだ」

「なるほどねぇ。いいんじゃない？」

　エイムール邸にはクルルとルーシーを預けっぱなしだし、戻る選択肢もありだと思う。都は魔力が薄いから、クルルの腹具合も気になる。彼女は食事の代わりに魔力を摂取する。

　逆に言えば魔力が薄いところではその分を食事で補う必要があるわけだ。あまり長いこと魔力の薄いところにいると、腹がどんどん減っていくはずなのである。

　だが、とりあえず

「そう言えばリディは平気か？頭痛とかはないか？」

「ええ。これくらいの時間ならなんともないです」

　リディは微笑んだ。エルフである彼女も魔力の定期的な供給が必要だが、数日くらいなら無くても耐えられるらしい。クルルのように腹が減るのかどうかは怖いので聞いてない。

　魔力が必要な理由は「そういうものだから」ではあるが、エルフが長命である理由は魔力の摂取が大きな要因らしい。細胞の老化を魔力で抑えてるとか、そんな感じなんだろうな。

　数日平気とは言っても、頭痛がするとか体調に影響があるならさっさと帰るところだが、そうでも無いらしい。

　じゃあ、他の皆に異存がなければちょっと露店でも冷やかしていくか。

「他の皆も大丈夫か？もう目的は果たしてるから、人に酔ったとかあるなら帰ろう」

「大丈夫だよ」

「私も大丈夫ですよ」

「アタイもへーき」

　みんな大丈夫なようである。じゃあ、せっかくだから回るか。

「じゃ、ちょっと露天を見ていこう。欲しいものがあれば買うから言ってくれよ」

　俺の言葉にそれぞれ了解の声が返ってきて、俺達は足を露店の多い方へ向けた。

　露店が多い、ということは当然ながら人が多い。その分警戒も強めないといけないわけだが、今のところ怪しいやつはいない。

　巨人族やリザードマンなどの珍しい種族も数多くいる。とは言え、一等珍しいのはエルフのリディなのだが。

　そんなわけでやはりそれなりの注目を集めつつ、いろんな露店を見て回る。

　思ったよりも食べ物の露店は少ない。甘い感じのパンみたいなやつを売ってる店でそれを買いつつ聞いてみたところ、

「都の露店で温かい食べ物を売るのは、かまどの準備やらが大変なので少ない」

　ということだった。そう言えばこの店も、もう焼いたものを並べているだけである。朝イチでパン屋のかまどが空いたら、そこを借りて焼いて持ってきているのだそうだ。

　情報料ということでお釣りを遠慮すると、にこやかに色々教えてくれた。こう言う情報はディアナも知らないので、直接集めるに限る。

　人々の間をすり抜けつつ、時折俺に突き刺さる視線に「もしかして、女を侍らしている男に見えてるのでは」と若干の冷や汗を流しながらまわっていると、珍しく紙を扱っている露店を見つけた。

　そこの店主と、背の低い女性が話し込んでいる。

「もう少し安くならないのです？」

「お上に納められないやつを持ってきてるから、安くはしてるんだけどこれがギリギリだねぇ」

　女性は紙が欲しいが、少し高いようだ。見てみると、なるほど品質はなかなか良さそうに見える。それだとまぁ、値切るのは難しいだろうな。

「じゃ、私が出しますよ」

　俺は後ろから口を挟んだ。女性はびっくりしてこちらを振り返り、さらにびっくりした顔になる。

「エイゾウさん！」

「どうも、お久しぶりです。フレデリカさん」

## 誤解

2019年9月16日

「エイゾウさんがなぜここにいるのです？」

「ちょっと家族と買い物に。作りたいものがあって、それの参考になればと思いましてね」

　驚いた顔のままのフレデリカさん。相変わらずリスっぽい感じで微笑ましい。

「エイゾウがまた女ひっかけてる……」

　心底呆れた声を出すサーミャ。大きな誤解があるな。

「この人は遠征のときにお世話になったフレデリカさんだよ。リディは知ってるよな？」

　俺の言葉にリディがコクリと静かに頷く。証人がいて助かった。

「頭なでたりしてましたよね？」

　リディの言葉に場の温度が下がった。さてはこれ助かってないな？リケとサーミャはともかく、ディアナと何故かヘレンの視線が俺の頬あたりに突き刺さって今にも穴が空きそうだ。

「いや、あれは頑張っててえらいなぁと……」

　しどろもどろではあるが、正直に話す。でも本当に他意はないんだよ。

　俺が慌てていると、リディがクスリと笑った。

「知ってますよ。ちょっとからかっただけです」

「お、おう……」

　俺はホッと胸をなでおろす。俺への突き刺さるような視線も一旦はなくなった。

　とりあえず誤解は解けたようなので（そう信じることにした）、フレデリカさんはどこかぽわんとしていた。

「どうしました？」

「いえ、エイムール伯爵が言うみたいに、キレイな奥様方だなぁと思っていましたです」

　カミロに続いてマリウスもか。自分の妹も預けてんのにそんな話にしちゃっていいのか。まぁ、あいつのことだから、問題にならないようにはしてるんだろうが。

「結婚はしてませんよ。家族ではありますが」

「そうなのです？」

「ええ。私は誰かを娶る気はありませんので」

　さっきはフレデリカさんに対する家族の誤解を解いたが、今度は家族に対するフレデリカさんの誤解を解く番だった。

　だったのだが、俺の言葉で家族の何人かがむくれている。

　俺はため息をついて、一言付け足した。我ながら卑怯だなとは思うが。

「……今のところは」

　それで場の空気が弛緩した。さっきまでの剣豪の間合いに入ってしまったかのような、寒々とした感じはなくなっている。

「なるほどです」

「ああ、すみませんご主人、その紙いただきます」

　目の前で起きていた出来事に目を白黒させていた露店の主人に謝りつつ、懐から銀貨を取り出して手渡した。こう言うのはさっさと支払ってしまうに限る。

　案の定、フレデリカさんが「そんな、悪いです」とか色々言っているが、俺も店主も気にせずにやり取りを終えた。値切らないのは店の前を占拠してしまった迷惑料も込みのつもりだ。

「はいどうぞ。うちでは基本紙は使いませんので」

「……ありがとうございますです」

　やや不承不承ではあるが、うちでは使わないし、買ってしまったものなのでフレデリカさんは紙を受け取った。背負っていた背嚢にそっとしまい込んでいる。

「リスだ……」

　俺たちに聞こえるかどうかくらいの声でサーミャがボソリとつぶやいた。

　だよな。俺は心の中でだけ大きく頷く。どう見てもリスが巣穴に木の実をしまっているような感じなのだ。

　そして、うちのかわいいもの好き達がその様子を見て目を輝かせる。これはそのうち家に呼べって言うかもな

「フレデリカさんは今日は仕事お休みなんですか？」

「いえ、ちょっと休憩なのです。今日はそんなに忙しくないので長めに休憩してるです」

　そのあたりは割と自由が効くらしい。ノルマみたいなもんがあって達成したら文句言われない、とかかな。

　せっかくなので、俺たち６人にフレデリカさんを加えた７人で露店をブラつく。時々工芸品のようなものを扱っているところもあるが、さっき行った店のものよりはかなりデザインがシンプルだ。

　刃物を取り扱っている店もあった。まぁ品質は推して知るべしである。

　しかし、その分値段も安く抑えられていた。こう言うのと棲み分けが出来ていければな、と思う。俺の腕前がいいのはチートによるものなんだし。

　しばらく露店街の店先を冷やかして、仕事に戻るというフレデリカさんと別れる。彼女とはまたどこかで会う気がする。

「紙、ありがとうございましたです」

「いえいえ。また何かの機会にお会いできたらよろしくお願いします」

　ペコリと頭を下げたフレデリカさんに、家族皆で手を振って見送った。さて、うちもそろそろ帰り支度にするか。

## 屋敷へ戻ろう

2019年9月18日

　意外なところで意外な人に出会ったが、露店もざっと見て回ったところで、俺たちは内街、つまりはエイムール邸へ向かうことにする。

　歩きながら、俺は心配事を口にした。

「クルルとルーシーのご機嫌がななめでないといいんだが」

「あの子達は聞き分けが良いから大丈夫だと思うけどね」

　俺の言葉にはディアナがそう言った。ママがそう言うんだったら平気かな。

「お腹空かせてないですかね」

「それなんだよな……」

　続くリケの言葉に、俺は頭を抱える。ルーシーはともかく、クルルは”食糧事情”的にちょっと心配だ。

「まぁ、ジタバタしてもどうしようもないし、なるべく早く戻るようにしよう」

　俺が言うと、皆から同意の声が聞こえてきて、ディアナの先導で内街へと歩みを進めた。

　内街の門番に、出るときに見せた札を再び見せる。門番は既に交代していたが、出たときと同じように軽く敬礼してくれる横を、頭を下げて通りすぎた。

　門を通り過ぎた後、俺はヘレンにそっと近づいて、小声で言った。

「見ててくれて、ありがとな」

　ここに来るまでの間、ヘレンはずっと周囲（主に後ろ）を警戒してくれていた。

　ここから先は主に貴族の住むところである。外街と比べれば、全くと言って良いほど警戒をしなくて済むはずだ。

　つまり、ここからはヘレンも気楽に出来る。そこで俺はヘレンに礼を言ったわけだ。

　家族といえども、した仕事に対しては労わねば。今回の日帰り旅行には特にそう言う趣旨もあって来ているわけだし。

　俺の感謝の言葉を聞いたヘレンはというと、

「お、おう……」

　顔を真っ赤にして、そう言うのが精一杯だった。

　閑静と言うには少し騒々しい街を歩いていく。エルフであるリディはやはり注目されているが、外街ほど視線が不躾ではないのが流石と言うべきか。

　内街に戻ってからはディアナの勝手知ったる領域でもあるからか、歩みが早くなる。

　……クルルとルーシーのところへ一刻も早く戻りたいのも十分にあるだろうが。

　エイムール邸に到着すると、警護の兵士が敬礼をした。そう言えば、２人いる彼らはハルバードを装備している。うちから買い上げたやつだろう。

　彼らの来ている金属鎧ともなかなかマッチしている。貴族以外で来る人間はそうそういないと思うが、ハッタリも効いてて良さそうに見える。

　俺たちは（ディアナ以外）ペコリとお辞儀をして、屋敷の門をくぐった。

「ワン！」

　クルルとルーシーを預けていた裏庭の方に回ると、ルーシーが勢いよく駆けてくる。一緒に遊んでいたのだろう、カテリナさんがちょっと残念そうだ。

　ものすごいスピードで駆け寄ってきたルーシーがそのまま、しゃがんだディアナに飛びついた。尻尾がパタパタとものすごい勢いで振られている。この様子だとルーシーは平気かな。

　クルルも「クー」と鳴くと、のそりと近寄ってきた。ヘレンとリケが撫でてやっている。

「うちの子たち、迷惑おかけしませんでした？」

　俺はカテリナさんに聞いてみた。カテリナさんは首と手を同時に横に振る。

「いいえ、ちっとも。とっても良い子たちでしたよ」

　そう聞いて俺はホッとする。

「ただ……」

　カテリナさんは言葉を継いだ。

「クルルちゃんも、ルーシーちゃんもよく食べるんですねぇ」

「ルーシーもですか？」

「ええ。人間の男の人くらい食べましたよ」

「ああ。そうなんですよ。あんなちっこいのにねぇ」

　俺はなるべく平静を装ってそう答えた。クルルがよく食べるかも知れないのは分かっていたが、ルーシーも？

　ルーシーの方を見ると、ディアナとリディが構ってやっていた。俺はリディにそっと近づき、小声で言った。

「ルーシーがやたら飯を食ったらしいんだが。家じゃそんな事なかったよな？」

　リディはコクリと頷いたあと、一瞬ボウっとしたような表情で、俺の言ったことの意味を考えた。そして、目が見開かれ、ルーシーの方を見る。

「な、何？」

　その勢いにディアナがびっくりしているが、リディは気にせずルーシーを注視し、抱きかかえるようにして目を覗き込んだ。

　ルーシーはリディお姉ちゃんに抱っこされたくらいにしか思ってないらしく、相変わらず尻尾をパタパタさせている。

　しばらく目を覗き込んだリディは、俺とディアナがかろうじて聞き取れるくらいの声で言った。

「ルーシーは、魔物化しています」

## うちへ帰ろう

2019年9月20日

「やっぱりか」

　ため息をつきながらの俺の言葉にリディが頷く。

　ルーシーは仮に育ち盛りだとしても急に食べる量が増えすぎている。これはクルルと同じように、魔物化して魔力も取り込む必要が出てきたのが、それが出来なくて食事で補っているんだろう。

「そんな……」

　ディアナはかなりショックを受けているようだ。

「まぁまぁ、魔物化とは言っても、必ず凶暴になるわけじゃないんだろ？」

「ええ」

　再びリディが頷く。

「純粋に淀んだ魔力から生まれた魔物はともかく、大抵は元の生物の気質を受け継ぎます。大黒熊が凶暴になるのは、そもそも凶暴なのでそれが強化されたに過ぎません」

「じゃあ……！」

「森狼はおとなしくて賢いので、おそらくルーシーはそんなに今と変わらないかと。より賢くなってしまうでしょうが、それで困ることは無いと思います」

　今度はディアナが安堵のため息をついた。今にもへたり込みそうなので、さり気なく腕を回して支えておく。

「とりあえず家に帰ろう。続きは車でな」

　ディアナが少し力なく頷いて、俺達は帰り支度をはじめた。ルーシーはカテリナさんにすっかり懐いたらしく。駆け寄って撫でてもらっている。

　そのまま抱っこしたカテリナさんがじっとこっちを見てくるが、魔物化してるかどうかには関係なくうちの子はやらんぞ。

　預けていた荷物を受け取って荷車に積み、クルルを繋いでルーシーを乗せ、俺たちも乗り込む。大した荷物もないので出発まではすぐだ。

「それじゃあ、ボーマンさん、カテリナさん。それにみなさんもお世話になりました。伯爵には宜しくお伝えください」

「主人もお会いできずに残念がっておりました。また是非お越しください」

「またいらしてくださいねー」

　より身分の高いマリウスには呼び捨て、かつタメ口なのに、その家の使用人の人たちにはさん付けの丁寧語と言う矛盾が我ながら面白く、それも手伝って笑顔で手を振ることができた。

　ディアナも頑張って笑顔で手を振っている。竜車を操っているリケ以外の家族も手を振り、別れを惜しみながらエイムール邸を離れた。

　そのままやはり人でごった返す外街を抜け（ルーシーが愛嬌を振りまき、通ったところのストレスを下げていた）、外門を抜けて街道に出る。

「それでルーシーだが」

　俺がそう言うと、自分が呼ばれたと思ったのか、景色を見るのに飽きたのかルーシーが膝の上に乗って丸まった。俺は撫でながら言葉を続ける。

「この子は魔物になっているそうだ」

　俺の言葉に、リディとディアナ以外の皆も息を呑む。

「とは言っても、今のところ危険はない。普通の狼よりも賢くなる可能性はあるそうだが」

　それを聞いて、皆がホッとする。

「それで……どうするんだ？」

　おずおずとヘレンが聞いてくる。

「そりゃあ、うちで面倒見るさ」

「良いの？」

　今度はディアナだ。俺は努めて表情を変えないようにしながら言った。

「一度助けると決めて助けたんだ。魔物だったからポイ、ってわけにもいかんし、もし他所様に迷惑をかけるような魔物に育つなら、その時はちゃんと処分しないといけない。そこまでやってはじめて責任を持ったと言える……と俺は思う」

　そりゃあ、俺だって出来れば処分するようなことはしたくない。勝手に助けて勝手に処分、と言うのも傲慢すぎる。

　だが、もしそうなったときは俺一人の手で始末をつけないといかんな。

　気がつくと、俺の内心の決意を嗅ぎ取ったのか、サーミャが心配そうに俺の方を見ている。

「そんなことにはならないよう、しっかり育てていかないとな」

　俺は明るくそう言って、言葉を続けた。

「しかし、これでこの子と母親が群れを追われた理由がわかったな」

「魔物化したから……か」

　サーミャがそう言う。彼女でも最初に分からなかったのは、そうそうあることじゃないからだろう。

「うん。親も魔物になっていたのか、ルーシーがなってしまったのを見捨てられずに一緒に群れを離れたのかまでは分からんが」

　ただのひ弱な子で、他にも多数子供が生まれていれば見捨てられた可能性もあるが、そうではないのだ。

　あの母親にとって今回生まれたのがルーシーだけなら、その子がどんな子であろうと守ろうとはするかも知れない。

　森狼は賢い動物だ。賢さは優しさにもつながる、と俺は思っている。そんな生き物ならあるいは……。

　いや、俺の願望を押し付けるのはそれもまた傲慢か。俺は頭を振って、しょうもない考えを振り払った。

「ま、とにかくこの子はずっとうちの子ってことには変わりない」

「それだけわかればアタイはいいや」

　ヘレンが場を和ませようとしたのか、明るい声で言うと、「アタシも」「私も」と皆賛同の声を上げてくれる。

　こうして、俺達の初めての日帰り家族旅行は波乱が起きながらも、無事に終わることが出来たのである。

　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　近況ノートでもご報告しておりますが、9/22(日)の12：00ごろに、連載一周年記念の書き下ろしをちょこっと掲載しますので、どうぞお楽しみに

（この文章は後ほど消します）

# 連載一周年特別編

## あちしのたのしみ

2019年9月22日

今回の話は語り手の都合上、読みにくくなっております。あらかじめご了承ください

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　”あちし”はエルフのみんなと森に住んでたの。でも、大きくなってきたからよそのおうちに行こうねって言われて、カミロおじちゃんのとこへ行ったの。おなかがすいて大変だったんだあ。

　カミロおじちゃんちはみんなやさしくしてくれたけど、ずっとつながれてて、これからどうなるのかなって思ったの。もしかしたら、ずっとこのままなのかな、いやだなって思ってた。

　そしたら、新しいパパとママが来てくれたんだよ。パパはね、エイゾウって言うの。ママのなまえはディアナ。パパとママはにんげんだけど、あちしにとーってもやさしくしてくれるんだよ。だからだいすきなんだあ。

　あとはね、じゅう……じん？　のサーミャおねえちゃんとドワーフのリケおねえちゃん、エルフのリディおねえちゃん。みんなもやさしいからだいすき。

　あちしのとくいはガラゴロをひっぱることだよ。ときどき、みんなでカミロおじちゃんちへ行くのがたのしみなの。

　カミロおじちゃんちへいくと、パパが「クルルがんばったな」ってほめてくれるから、とてもうれしいの。ママもいっぱいなでてくれるの。

　みんなであちしのおうちつくってくれたりもしたよ。

　ヘレンおねえちゃんもあちしのあとから来たよ。ヘレンおねえちゃんはみんながいないときにいっぱいなでてくれるの。

　すごくつよいおねえちゃんってパパは言ってたけど、ほんとかなあ？ヘレンおねえちゃんはあちしをなでるとき、やさしいお顔でうふふって笑うよ？

　それからたいへんたいへん！！あちしにも妹ができたの！ちっちゃいおおかみさんで、ルーシーって言うの。

　ルーシーはちっちゃいから、外にいるときはあちしがみはってるんだよ。でもルーシーもおりこうさんだから、だめだよって言ったらすぐに言うこときいてくれるの。

　夜はいっしょにねるの。パパたちはお家だから、いっしょにねていいんだよ、って言っても、おねえちゃんとねる！って言ってくれるから、いっしょにねてるの。えへへ。

　でもね、いちばんのたのしみは、あさにパパとおみずをくみにいくことなの。あちしとパパでいれものをもってみず……うみ？　へいくの。パパがそこでからだをきれいにしてくれるから、とっても気もちいいし、パパといっしょのにもつを運べるの。

　だからいちばんだーいすき！

# 第８章 帝国の皇女編

## 次の日からはいつもの通り

2019年9月23日

　都へ日帰り旅行に行き、ルーシーが魔物になっていると判明した日、帰ってきた俺たちはすっかり疲れてしまっており、夕食を適当に済ませるとクルルとルーシーを含めて、皆さっさと寝た。

　翌日はいつも通りだ。朝起きて湖へ向かい、クルル、ルーシーと自分自身を綺麗にする。

　クルルは昨日長距離を進んで土埃なんかが多かったので、洗い流してやるといつもよりも気持ちよさそうだった。

　ルーシーがプルプルと体を振って辺りに水をまき散らすのはいつも通りだ。

　クルルと俺とで水瓶に水を汲んで家に戻ったら、俺は朝飯の用意をしながら、皆は朝の準備をはじめる。

　全員女性なので、今日は外に出ないと言っても俺より時間がかかる。その間にスープを作ったり、無発酵パンを焼いたりだ。

　そう言えば、おやっさんは次々と料理を繰り出してきた。他にも結構な数のお客さんがいるにも関わらずである。

　そこがプロとの違いであるのもそうなのだろうが、圧倒的な力の差があるな。このあたりがいくらチートとは言っても、そこらよりも少し上ってレベルまでしかない俺の生産チートの限界だ。

　とは言っても、逆に言えばそこらの連中には負けない程度の腕前はあるわけで、それが日々の生活に潤いをもたらしているのも確かだ。

　それで家族６人が仲良く出来るなら、それが一番である。このチートで金を稼ごうという気はないのだし。

　準備と朝飯を終えたら、鍛冶仕事の始まりだ。火床に火を入れ、炉を用意したらそれぞれに分かれて作業を開始する。

　今回のノルマは鍬が５０本、１日の目標は１０本で、前回は１１本を製作することが出来たから、今日も大丈夫だろうという目算である。そこから残り約３０本にしても、３日間あれば平気だろう。納品までには十分に間に合う。問題はその後だ。

　いや、ノルマが達成できないとかではない。雨季が来るのだ。雨季が来て外に出られないとなると、卸にもいけない。

　カミロのところに武器の類いは多く卸しているから、カミロのところの在庫次第では、次の納品を２～３週間後にして貰って、その間は雨季に備えたり、家族共通のアクセサリを作ったりして過ごしたい。

　それもまずは今回の納品を無事に済ませてからである。鍛冶場に家族が振るう鎚の音が響いた。

　それから４日間、時々リケやヘレンの歌う仕事歌（ヘレンは歌がうまかった）に助けられながらも、毎日ルーティーンのように仕事をこなした。

　作りあげたのは５６本の鍬。予定を上回る数ができあがった。これならカミロも文句は言うまい。

　鍬の製作最終日の晩、ノルマ達成を祝ってささやかな祝杯をあげた。

　その席でそのまま今後の予定について相談する。

「アタシは出ない方が良いと思う。獣人もこの時期はねぐらから出ないし」

「そうねぇ」

　サーミャとディアナも外に出ないことについて異議はないらしい。

「そうなると、

「あとは、狩りをして肉の確保でしょうか」

　リケとリディにも異議はなく、ヘレンは「この森に来たばかりでよく分からないから皆に任す」との事だった。

「じゃあ、基本家から出ない、早めに狩りは済ませておく、家の中で出来ることで過ごす、ってことで」

　多分最大の問題はクルルだと思うが、まぁ、水汲みに連れて行けば事情は察してくれるだろう。あの子は賢い子だし。

「それじゃあ、明日もよろしくな」

　俺の言葉でその日はお開きになった。翌日はカミロのところへ納品だ。もう一つのいつもに備えて、俺はゆっくりと体を休めるのだった。

## 納品へ

2019年9月25日

　翌朝、朝一番の日課を終えた俺達は、手分けして大量に作った鍬を荷車に運び込んでいた。

　心なしか、それを見ていたクルルのテンションが若干上がっているような気もする。

　クルルは重いか遠いかだとテンション高く荷車を牽いてくれる。頑張ってくれたぶんは到着時にしっかりと褒めてやるのがいつものやり方だ。

　50本超の鍬を荷車に積み込み終えたら、クルルを繋いで皆で乗り込む。

　ディアナがルーシーを抱っこして乗せようとした時、ルーシーがグッと屈み込んだ。頭はじっと荷台を見つめている。

　頑張って自分で乗ろうとしているのかな。ちょっと猫っぽくも見える。

　屈み込んだルーシーが全身をバネにしてピョンと伸び上がる。おっ、これは。

　と、思ったが、もう後１０センチかもう少しくらい届かなかった。ルーシーがそのまま地面にスタッと降り立ち、何事もなかったかのように「ママ抱っこ」とばかりにディアナに駆け寄った。

　まぁ、遅かれ早かれ上がれるようにはなるだろう。

　目をキラッキラさせたディアナに抱えられ、ルーシーも荷台に乗り込んだ。抱っこしているので俺の肩は無事だ。

　雨季が近づいている、と言うことを実感させるためであるかのように、ジメッとして暗い空気が黒の森に満たされている。

　この時期にここに飛ばされてきていたら、もっとこの森に対する印象が変わっていただろうな。皆が「恐ろしい」と言っていることに、多少は実感をもてていたかも知れない。

　サーミャが鼻をヒクヒクさせている。聞いてみると「ジメジメしてる日は鼻が利きにくい」のだそうだ。湿気で匂いの成分が広がりにくいとか、木からフィトンチッドが出て邪魔してるとかかね。

　サーミャがこうなると、若干ではあるが監視の効率が落ちる。とは言っても、ヘレンもいるので、そうそう滅多なことにはならないとは思うが。

　警戒をしながらも進んでいくと、遠くの木立の隙間からチラチラと樹鹿の姿が見える。この距離で見えるということは、かなりデカいやつだ。

　見えているのか感づいたのか、ルーシーがそっちのほうを見て尻尾をパタパタさせている。

　尻尾を振るだけで、吠えないのは本能的に吠えても意味がないことを理解しているからだろうか。もしそうなら相当なおりこうさんなので、頭を撫でてやると、尻尾のスピードがあがった。

「食いだめしてるなぁ……」

　少しだけ見えた樹鹿の様子を見て、サーミャがつぶやいた。

「そうなのか？」

「うん。あの様子だと今週中には１頭くらい仕留めておかないといけないな。みんな引きこもっちまって出てこなくなるんだ」

　雨だと鹿も引きこもるのか。毛皮があるとは言っても、体力が奪われるだろうからな。となると熊や狼もその間はウロウロしないに違いない。

　逆に言えば、今の時期は出くわす可能性が高いということだ。

「必要なものだから、狩りの方は任せておくが、熊には気をつけろよ」

「もちろん」

　サーミャが胸を張って答える。熊はこの森で暮らす以上、出くわす可能性の高い中でも最大の脅威だからなぁ。サーミャは一度それで危ない目にあったわけだし。

　チラッとディアナやリディ、ヘレンの方を見ると頷いてくれた。うちの家族なら平気そうだな。

　道中危なっかしいものには出くわすことなく森を抜け、街道を進んだ。もう間もなく街にたどり着くが、俺達の上にはずっと雲がかかっている。

　今にも降ってきそうというわけではないが、日が差しているわけでもない。悪いことが起きるなら今！と言わんばかりの風景が広がっている。

「この天気じゃあ、絵物語みたいに街全体が陰謀に巻き込まれているかのように見えるな」

　街が見えてきた頃、俺は笑いながらそう口にした。これで雷がゴロゴロと鳴ればサスペンスの演出も真っ青である。

「すっきりしない天気だものねぇ」

　貴族の出身でガチのそういう場面も見てきたに違いないディアナが言う。リケとリディはクスリと笑ったが、サーミャとヘレンはキョトンとしている。

　あまり、そういうものは読んでこなかったのかな。今度こっそりカミロに頼んでおくか……。

　いつも通りに街路を行く。都では目立ってしまったエルフのリディも、この街では対して目立っていない。

　むしろ今は荷台から顔を出して外を眺めているルーシーの方が注目の的だ。

　今日はいつも仏頂面で睨みつけるように店番をしている露天商のイカツいオッさんが、周りに気付かれないようにこっそりルーシーに手を振っているのを見てしまった。可愛いは正義だし、可愛いものが好きなことに罪はない。

　こうしてルーシーが１人（１頭）で愛嬌を街路に振りまきながら、カミロの店に向かっていった。

## 帝国の状況

2019年9月27日

　カミロの店に到着して荷車を倉庫に入れたら、皆降りてクルルを荷車から外す。その時、ルーシーはピョンと自分で飛び降りた。

　そこそこの高さがある（自分で飛び乗れないくらいの高さなのは間違いないわけだし）が、特に大きな問題もなく降りられたようだ。

　抱っこして降ろそうとしていたディアナが、寂しいやら嬉しいやらで微妙な表情をしている。魔物だし成長が早いのかも知れないなぁ。

　クルルとルーシーはいつもどおり裏庭でお留守番だ。丁稚さんにお願いして面倒を見てもらう。ルーシーは今日もパタパタと尻尾を振って、遊んでもらえるのを心待ちにしているようだ。

　一方のクルルは木陰に寝そべって、ルーシーの様子を見守り始めた。なんだかすっかりお姉ちゃんが板についてきている。

　そんな様子にほのぼのしながら、俺たちは商談室へ向かった。

　商談室に入ると、ほとんどすぐにカミロが現れた。忙しいはずなのにマメだな。

「どうだい、調子は」

「順調だよ。ようやく共和国にも販路が出来たし」

「へぇ、そいつはおめでとう」

「ありがとよ」

　カミロは照れているのか、口ひげをさすった。どんどん事業を拡大出来ているのは純粋に凄いな。

「だから、これからもお前には頑張ってもらわなくちゃいけないんだが、いけるか？」

　先ほどとは打って変わって、ややしおらしい感じに俺の表情を伺いつつカミロが聞いてくる。

「今まで通りの納品量でいいならいくらでも。むしろありがたいくらいだよ」

　いくらウチの製品が良いものだと言っても、売れ行きには限度がある。極端な話だが、王国のすべての家庭に必ず１本うちのナイフがあるなら、それ以上王国内では売れない。

　実際にそうなってしまうことはまずないが、それでも売れ行きはどんどん落ちるのだ。消耗品ではあるが、１ヶ月やそこらでダメになるような品でもないし。

　その場合、新たな売り先を確保しておく必要がある。帝国……はしばらくバタバタしているだろうから、販路を拡げるなら王国に国境を接している中だと共和国になるのは、まぁ必然とは言えるだろう。

　俺が笑って返すと、カミロも

「そうか、それを聞いて安心した」

　と笑うのだった。

「今日は鍬だけだったな？」

「ああ。５０本と少し持ってきてる」

「流石だな」

　これは今日の納品の話だ。俺の言葉を聞くと、カミロが番頭さんの方を見る。番頭さんは頷くと部屋を出ていく。数と品質のチェックをしにいったのだ。

　俺たちは数にも品質にも自信がある――チートを使って作ったものなので、そこらの鍬より品質は良いはずである――ので、特に心配はしていない。

「そう言えば、帝国だがな」

　カミロがついでであるかのように話を始めた。今日は俺の隣に座っていたヘレンの体が少し強ばるのが分かった。俺は机の下でそっとヘレンの手に自分の手を重ねる。

「状況は概ね伯爵閣下の説明した通りに推移しているらしい」

「反乱は鎮圧され、皇帝は政治を改め、平穏が戻りつつある？」

「だな。とは言ってもまだゴタゴタはしてるようだ」

　俺の言葉にカミロが頷いた。隣国だし、任務で潜入したとは言え、全く知らぬ土地ではない。そこに比較的速やかに平穏が訪れたのならいいことだ。無論、その影には少なくない犠牲もあるんだろうが……。

「ついこの間の話だからなぁ……」

　あれからそんなには時間が経っていない。そんなに早く話が片付いてしまったら、反乱が帝国側からは茶番でしかなかったことがあちこちにバレてしまうだろう。被害を最小限に抑えつつ、立て直しには不自然でない程度の時間をかける必要がある。

　俺からすれば天上人も同じような人だが、それをこなさなくてはいけない帝国の皇帝に内心でうっすらと同情の念を覚えた。

「それで、一度平穏が戻ってしまえば、ヘレンについては大丈夫になると思う。せっかく平穏になったあとでわざわざ火種を抱え込むこともないし、ヘレンが証言したところで荒れた状態に戻りたいやつはそうそういない。そうしたいやつはあらかた居なくなったわけだし」

「元々、皇帝の臣下に対するポーズなんだろう？」

「まあな。見逃したままなのも不自然、ってだけだからなぁ。機を見て命令は取り消されるはずだ」

　ヘレンがホッとした表情を見せた。ディアナやリケが「良かったわね」と声をかけている。

　命令が取り消されたら、ヘレンはまた傭兵に戻るのだろうか。それならそれでも良い。彼女の帰る家はもうあるんだし。

「そういや、そろそろ雨季だろ？　多分２～３週ほどは納品に来ないと思うんだが、大丈夫か？　困るなら１回くらいは来るが」

「ああ、そうか。もうそんな時期か……。いや、大丈夫だよ。売るものは他にもいっぱいあるし。」

　しばらくの引きこもり宣言については、特に問題ないようだ。まぁうちの商品だけを扱ってるわけでもないしな。

　そこへ、チェックしに行っていた番頭さんが戻ってきた。カミロを見ると頷いている。大丈夫だろうと分かっていてもつい安堵してしまうな。

「いいとこへ戻ってきたな。今日エイゾウのところに渡すやつはいつもより多めにしてやってくれ。その分はキッチリもらうんだぞ」

　カミロが笑いながらそう言うと、番頭さんは察したのか、こちらも笑いながら「分かりました」と再び部屋を出ていった。

　うちとしても備蓄があるとは言え、３週間引きこもる分の補給物資は必要だし助かる。

　その後は再び帝国の話を少しした。帝国から抜け出してきた人が帝国へ戻りつつある（事態が事態だったのでお咎めはないらしい）ことや、逆に普通に商売をしに帝国からやってくる人もいることなんかだ。

　今日は見かけなかったが、帝国に多いと言う巨人族をちょくちょく見かけるらしい。帝国から王国へやってくる中には、ヘレンを狙っているのもいるだろうから、警戒は必要だろうが。

　やがて番頭さんが戻ってきて、俺達は金を受け取り、帰り支度を始めるのだった。

## 雨が降る前に

2019年9月30日

「特に注文はないってことでいいよな？」

「ああ。いつも通りに納めてくれたらいい」

　部屋から出るときに一応確認をしておく。カミロは頷いて俺の認識に相違ないことを請け負ってくれた。

「それじゃ、また３週間後に」

「ああ」

　俺とカミロは握手をして別れた。

　裏庭に行くと、丁稚さんがルーシーと遊んでくれていた。前に許可（と偉そうに言うほどのことでもないが）したので、俺たちに見られても焦ったりはしない。

　ルーシーが大きくなってからも、こうやって遊んでくれると良いんだが、魔物かどうか以前に狼だからなぁ……かなりデカくなるよな……。

「いつもウチの子の面倒見てくれて、ありがとうな」

「いえいえ」

　丁稚さんにルーシーとクルルの面倒を見てくれた駄賃を渡す。

　このやりとりも定例化してきている。そのうち彼が偉くなったら、後続の人間に引き継がれたりするのだろうか。そうなる時まで、ずっと良い取引相手でいたいものだ。

　クルルを荷車に繋いで、カミロの店を後にする。街の上には重苦しい雲が覆いかぶさっていて、いつもは賑やかな雰囲気の大通りも、今日は少しばかり陰鬱なように見える。

「一雨くるかな」

　俺が空を見上げながら言うと、サーミャが俺と同じように空を見上げて、クンクンと鼻を動かした。それを見たルーシーが真似をして、俺の肩のＨＰが若干減っている。

「ザーッとは降らないけど、ちょっと降るかも」

「じゃあ、街を出たら急ぎましょうか」

　サーミャの見立てでは小雨である。それを聞いたリケがほんの少しクルルの歩みを早める。

　俺達は雨の用意をしていないので、降られるとちょっと厄介かも知れないな。雨季が近いのにうっかりしていた。

　街を急ぎ足で出ると、街道をいつもよりもスピードを出して進む。クルルはと言うと、「クルルー」と嬉しそうに鳴いて駆け出したから、問題なければ今後このスピードでも良いかも知れない。

　途中で俺達と同じように急いでいる馬車とすれ違った。こちらのスピードに驚いてはいたが、やはり他の人たちと同じく、牽いているのが走竜だと分かるとなんとなしに納得した顔になるのが見ていて少し面白い。

　うちのクルルが優秀なのは確かなのだが。

「そう言えば、なんで雨季があるんだろうな」

「ああ、それはですね」

　俺の疑問にはリディが答えてくれた。

　この世界では、太陽の神と月の女神以外にも、こちらもやはり実在するかどうかは分からないが、大地の女神と雲の女神もいるらしい。太陽の神のご家庭は一夫多妻らしく、太陽の神と大地の女神は夫婦である。

　太陽は太陽神の祝福の気持ちの塊だが、”人の子ら”だけでなく、大地の女神にも祝福の気持ちは降り注ぐ。喜んだ大地の女神の力で作物や植物が育つと言うわけだ。

　四季で育つ作物が違ったり、冬に育ちにくいものが多いのは祝福の量に左右されるから、と言うことのようだ。

　そして、雲の女神は時折、いつも祝福を受けている大地の女神の邪魔をするべく天を覆い尽くしてしまうのだと言う。こちらも太陽の神とはご夫婦でいらっしゃる。

　そして、何故私には祝福をくれないのかと流す涙が雨である。普段は清らかな心の女神なので雲は白いが、どんどんと感情が淀んでくると雲は黒くなっていくのだそうだ。

　普段は時々そうしているだけなのだが、年に１度、高ぶった感情を一気に放出する時期がある。そして、そこの感情の放出が雨季と言うわけだ。泣いてスッキリすることがあるのは男女で違いはないが、世界が違えどそれは同じらしい。「雷が落ちる」には実際の現象と慣用句の両方があって、どっちの世界でも意味が同じであるように。

　で、泣いてスッキリした雲の女神は雲を除けて人の子を祝福する気持ちになる。そうすればその力も相まってより作物は育つ、ということである。

　実際のところ、雨が降ってくれなければ作物が育たないわけで、感謝すべき現象なのだが、そう聞いてしまうと雨雲がより一層陰鬱なもののように見えてくるな。

　にしても、この世界の神様たちは感情的で人間臭いところが多いような気がするが、前の世界のギリシャ神話でも妙に人間臭いところがある神様もいた印象なのでそんなものなのかね。

　この辺を口にしてバチが当たってもつまらないので心の中にだけ秘めておくことにした。

　森に入るところで、ポツポツと水滴が顔に当たった。いよいよ降り始めたらしい。

　とは言っても、本当に小雨と言った感じなので、そのまま森に入ると木々が天然のアーケードを構成してくれているせいか、あまり当たらなくなった。

「少しはマシだけど、そのうち溜まったのがザーッときたりするから、さっさと帰っちまおう」

　サーミャの言葉にリケが頷いて、クルルは一声鳴き、家路の最後を急ぐのだった。

## 梅雨籠もりの準備

2019年10月2日

　天然のアーケードをくぐって家まで辿り着いた。家の周りには木が生えていないので、霧雨が舞うように降っている。

　荷物がなるべく濡れないよう、クルルを荷車から離したら急いで運び込みを済ませた。

　それでもそれなりに湿ってしまっている（調味料、香辛料のたぐいは瓶に入れて蓋をしていたので平気だった）が、使う頃には乾いているだろう。

　俺たちの体も濡れているが、先にクルルとルーシーを小屋に入れる。その間にディアナが家からタオルを持ってきてくれて、皆で２人（匹？）の体を拭いてやった。

「雨が止むまで、あんまり外に出ちゃダメだぞ」

「クルル」

「わん！」

　俺が声をかけると、分かったのか元気よく返事をしたので、いいこいいこと撫でてやる。クルルは俺の顔を舐め、ルーシーは尻尾をパタパタと振った。

”子どもたち”の世話が終わったら自分たちだ。家に戻って自分の部屋に戻ったら、服を脱いで体を拭いた。

　こう言うときに風呂があれば体を温められていいのだろうが、家にはまだないので、薄めのミント茶を淹れることにした。

「せっかくだから、どーんと雨水を溜める設備も作ったほうがいいのかな」

　ミント茶を飲みながら俺は言った。飲用水にはできない（湖の水も沸かしてから飲んでいる）だろうが、生活用水にはできるだろうし、大層な設備でもないから今回のついでで作るのはありなように思う。

「色々使えそうですけど、長く溜めたままだと腐りませんか？」

　答えたのはリディだ。農作業に関連しそうだからだろう。

「飲み水にはしないつもりだが、腐ってしまうと良くないか」

　俺が言うと、リディはコクリと頷いた。

「そこから病の風が出たりしますから」

　なるほど、病原菌がその水槽で増えたりして、うっかり何かの拍子に体内に入るとマズいのは確かだな。殺菌もなにもしない雨水だしなぁ……。

「じゃあ、２～３日で使える程度の大きさにして、なおかつ排水が出来るようにしておくのがいい、と」

「そうですね」

　再びリディが頷いた。持て余すほどの水を貯めても仕方ないし、水を汲んでくる回数を減らせる、くらいの規模で留めておくのが吉か。

「あとは屋根付きのテラスを作らないとな」

「いよいよ森の中にあるのが不思議な家になってくるわね」

　次はディアナが混ぜっ返す。元々森の中にあるにしては変な家だが、テラスまであるとなるとそこに拍車がかかるな。

「洗濯物を考えたら、作らないのも不便だろう？」

「鍛冶場で干してたら乾かないですかね」

　今度はリケだ。鍛冶場は火を扱うから室温が高い上に乾燥している。そのおかげなのか、肉なんかは乾燥するのが早い……気がする。

「まぁ、乾くには乾くが……肉なんかと違ってなんかの拍子に一気に引火しかねないのがちょっと怖いな」

　肉も脂に引火することはあるだろうが、その前にジュウジュウと焼けるから気がつくだろう。服の生地もいきなりボッと火がつくわけでもないとは思うが、火のつきやすさは生肉とは段違いだと思う。

　それに、肉はまた取ってくればいいが、服はなかなかの貴重品だ。布生地自体が前の世界と違って豊富に用意できるものでもないし。

「最悪の場合、１ヶ月以上換えも下着もなしは厳しくないか？」

　そう言うことに無頓着な俺でも流石にそれはキツい。そう言うと、

「まぁ、そうねぇ……」

「換えはともかく、下着はなぁ……」

　ディアナとヘレンが同意した。ヘレンは傭兵稼業で服の換えができないときはあるので、多少の期間は耐えられるようだが、長期となるとさすがのヘレンでも厳しいらしい。

「うーん、アタイもちょっとやだな」

　サーミャも生活スタイルからあまり気にしない方ではあったようなのだが、この数ヶ月、特にリケやディアナと一緒に暮らすようになってからは快適さに目覚めてしまったらしい。

　シャワー付きトイレの快適さが分かったら戻れないみたいなもんか。

「じゃ、最優先はテラス、ついで雨水を貯める水槽だな」

　夕食を前に、明日からの予定を決めてしまう。忙しくなるが、また家が充実するかと思うと、俺はワクワクした気持ちを感じずにはいられなかった。

　明日からが楽しみだな。

## テラス建築開始

2019年10月4日

　翌日、朝の日課と身支度を済ませた俺達は、材木置き場に集まった。クルルとルーシーも何をするかはよく分かってないだろうが、なんとなしな感じで集まっている。

「まずは柱にするやつを選ぶとこからか」

「昨日雨が降りましたからねえ」

　リケの言葉に俺は頷く。濡れたやつを柱として立てるわけにもいかない。昨日の降り方だと多分そんなに濡れてはいないと思うが、念の為だ。

　幸いこの森の木は基本真っ直ぐに育っている。だが、テラスの柱だし、多少曲がっていてもそれはそれで味があっていいだろうし、乾いていてある程度の長さがあればどれでも良い。

「これが良さそうだな」

「こっちは？」

「ああ、それもいいと思う」

　そんな感じで皆で手分けして柱になる材木を探し、８本を確保した。

「こんだけあればいいだろ」

「テラスはどこに作るんだ？」

「そうだな……」

　サーミャの問に俺は考え込んだ。中庭には畑がある。リディのおかげでなかなか立派なものになっているし、そっちの方には作りたくない。

「今の廊下の先に作るか。あっちの方もまだ土地はあるだろ」

「あるにはあるけど……」

　言ったディアナが途中で口ごもる。俺は先を促した。

「けど、どうした？」

「部屋を増やさないといけなくなったときは？」

「それはないだろ」

　俺がそう返すと、ディアナを含めた全員がジト目で俺の方を見てくる。何を言いたいのか言わずともわかった。

「……万が一その時がきたら、直角に廊下を作ればいい。畑は最悪違うところを開墾しよう」

　皆はため息をつきながらだが、納得はしてくれたようで、作業に取り掛かってくれた。

　作業はまず俺とリケ、ディアナとヘレンで柱を建てる穴を掘る。他の２人は柱にする木の皮を剥ぐ作業だ。

　穴掘り組はショベルを、皮剥ぎ組は鎌をもってそれぞれ作業する。ヘレン以外は何度か経験している作業と言う事もあってか、午前中にはほぼ作業が終わってしまった。

　午後には穴に柱を建てる作業だ。ここはクルルが大活躍する場面でもある。

「よし、それじゃクルル頼むぞ」

「クルー！」

　柱に括り付けたロープの端をクルルにも結ぶと、クルルは力を込めて引っ張り始めた。ルーシーは「お姉ちゃんがんばれ」とでも言うかのように、あたりを走り回ってワンワンと言っている。

　車輪付きとはいっても、俺たち全員＋大量の荷物を牽いて平気なクルルの力はさすがなもので、一度動きはじめた柱はスムーズに設置場所まで動いていく。

「よーし、ストップ」

　俺の声のとおりにクルルが止まった。ここからは人力で穴の縁まで柱を移動させる。俺とリケだけでも十分力はあるのだが、今回ヘレンも加わったことでよりスムーズに動かすことが出来た。

　そこから穴に落とし込むのは再びクルルの仕事である。ゆっくりゆっくりと移動させて、端が落ちたら今度は立てていく。

　前はここも人力のみで行っていたが、クルルが来てからはだいぶ楽になった。あっと言う間に柱が立ち、周りを埋める。埋める作業はルーシーも後ろ足で手伝ってくれた。

　かける土の量としては特に手伝いにはなっていないのだが、なに、こう言うのは心意気である。「ありがとうな」とクルルとルーシーの両方を撫でておいた。

　柱は８本あるので、同じ作業を８回繰り返す。

「柱が立っただけでも、なんとなく形が見えてくるもんだなぁ……」

　何度かみた光景（一回は見逃している）だが、こう言うところは毎度感心する。

　今日の作業はここまでで、後は明日柱を埋めた土の具合を確認し、緩んでいれば再度固め、床や屋根の作業はそれからである。

　なので、今のうちにそのあたりをどうするかを話しておいた。

　あたりを太陽が橙色に染めていく。その中に建てられた８本の柱に俺はテラスでくつろぐ家族の姿を見たような、そんな気がした。

## テラス完成

2019年10月7日

　翌日は立てた柱に筋交い、根太や棟木や垂木を張っていく作業だ。

　柱の具合を見てみると、結構固まっていてグラグラはしない。元々硬い土だし、穴に柱を入れるときに突固めたのもあるだろう。

　一応、もう一度上から適当な丸太で柱の周りを叩いて固めておいた。なるべく空気を抜いて腐食が進みにくいようにする意味もある。ハンバーグのタネみたいには行かないだろうが、まぁ気休めだ。

　テラスだし、壁板は貼らないので筋交いは柱の根元だけにする。地震の時には脆いだろうが、テラスだからと言うことで、その辺は目をつぶることにした。

　そもそも、そんなに大きな地震もここ数百年はないと聞く。そう聞いていたら何度か大きな地震があったのが、前の世界で俺が経験したことではあるのだが。起きたらその時はその時だ。

　根太や板を作るのはサーミャとヘレンに任せることにした。俺たちはそれらを組み付けていく係だ。

「エイゾウが本気で作った特性の大鋸だからな、メチャクチャ切れるぞ」

「へぇ……うわ、ホントだ。ワハハ、なんだこれ」

「だろ、切れすぎて笑っちゃうよな。アタシも最初そうなった」

　俺の製品に対する評価がいささかおかしいようだが、楽しく作業できるならそれで良いか。

　残っていた板などから使えそうなものを見繕ったりもしながらみんなで作業していく。

　意外と身軽なリケとディアナ（木登りは得意、らしい。貴族のお嬢様がなぜ得意なのかは聞かない方が良いだろう）が屋根の仕事、俺とリディで床の仕事だ。材木を引き上げるのは普通は大変なのだが、クルルがいるおかげで随分とスムーズだ。

「落ちないように気をつけろよ」

「はーい」

　足場もあるにはあるが簡単なものしか作ってない。それでも身体能力によるものか、リケとディアナは危なっかしいこともなく作業をこなしていく。

　クルルが棟木や垂木を上げ、リケとディアナが設置していく。その間に床の方の作業もこなす。

　作り置きしておいた和釘で柱と柱の間に筋交いを張る。ホゾ穴を切って凝った作りにしても良かったのだが、今回はそれもなしである。その筋交いの上に根太を渡していった。

　この日は屋根板が貼られてない屋根と、床板が貼られていない床が完成したところで終わった。家の方とマッチしているが、足場がなかったら建築途中ではなく、崩壊した離れみたいに見えなくもない。

　後からテラスを作りつける家ってのもそうそうないだろうしなぁ。それでも思ったより早く作業が進んでいる。これなら明日には出来るかな……。

　そして翌日。サーミャとヘレンが前日のうちに板の切り出しも終えていたので、２人にも加わってもらって屋根板と床板を打ち付ける。

　小気味よいリズムで音があたりに響いている。いつもの鍛冶仕事とはまた違う音で、これはこれで面白いな。

「いてて」

　小気味よい音の代わりに、床板を打ち付けていたヘレンが顰めっ面をした。どうやら自分の指を打ち付けてしまったらしい。

「大丈夫か？」

「うん、そんなに強くは打ってないから平気だよ」

「見せてみろ」

　俺はヘレンの手をとって見てみた。申告の通り、特に赤くなっていたりもしない。これなら平気そうだ。

「痛みだしたら言えよ」

「わ、分かった……」

　小さい声でそう返すヘレン。俺は本当は痛かったのかなと思いながら、自分の作業に戻った。

「よーし、これで終わりだ！」

　俺は床板を止める最後の釘を打ち終わって、大声で言う。

　他の皆がパチパチと拍手をして、クルルが外から首を入れて「クー」と鳴き、ルーシーはあたりを走り回っている。

　テラスの完成である。壁なんかを作る必要がなかった分、楽といえば楽だった。それでもうちの家族総出で３日かかっているわけだから、おいそれと作れるものでもないな。

　こう言う施設はそうそう増やすものでもないが……。

「これで雨が続いてもちょっとは外の空気が吸えるな」

「洗濯物も出来るね」

「そのうちベンチでも置こうかしら」

「雨に弱い子もここで育てていいですか？」

「おー、風が気持ちいいな」

「わんわん！」

　家族の皆がワイワイと出来上がったばかりのテラスについて話し合っている。

　俺は「よしよし。お前も頑張ったな」とクルルを撫でながら、ここでのんびりと過ごすことも、家族の「いつも」に加わると嬉しいんだが、とそう思った。

## 貯水槽作り

2019年10月9日

　テラスは完成した。後は水槽だが、これは総出でやるまでもあるまい。

　今週中に一度狩りに出ておきたいってことだったし、サーミャ、ディアナ、リディ、そしてヘレンのハンティングチームは狩りに出てもらうことにする。

　ヘレン以外の３人は前に俺が作った複合弓で、ヘレンはサーミャが使っていた弓である。元の仕事柄、弓も使えないことはないらしいが、サーミャとリディに教わりつつ参加している。

　そのうちヘレン用の複合弓も作ってやらないといけないな。その時は彼女の力に合わせてちょっと強めに調整するか。

　それと、ルーシーもついていった。狩りに慣れてくれたらハンティングチームの大きな力になるだろうし、無茶をしそうになっても言えば聞いてくれるだろう。……尻尾をブンブン振り回してるけど、聞くよな？

　俺がふと心配を口にすると、

「猟犬も子犬から躾けるって言うから平気じゃない？　この子賢いし」

　ディアナがそう言った。ママのお墨付きならいいか。弓を携えて、側に狼が控えている姿はさながら神話の女神のようでもある。

　今のところ、狼が子狼なのが絵面としては締まらないし、狩りなので服装が野暮ったいが。

「まぁ、気をつけてな」

「おう、いってきます」

　ブンブン手を振るサーミャを含めた４人を見送って、俺とリケで水槽を組み立てる。まず底板を敷くが、前の世界のフローリングみたいに

　凸側をほんの少しだけ太めにして、木槌で叩いて嵌め込む。十分に乾いた木の板であれば、この後水を含んで膨張するとよりしっかりと噛み合って、本格的な防水は無理でも、これで多少は漏れ防止が出来るはずだ。

　あんまり太くしすぎると割れたりするので、そこは調整が必要なのだが、この水槽の場合は鍛冶場設備に類するものということで鍛冶屋のチートのほうが働いてくれた。鍛冶場にあるのは石をくり抜いた水槽だが、焼入れを始めとした作業で何かと水を使うし、鍛冶場に欠かせないからなぁ。

　こうして底を作ったら、それにハマるように四隅の柱と壁板を作って組み付けていく。

　本来は縦長の板で円柱状に組み上げていって、金属製のバンドで締め上げたりする（前の世界ではアメリカのビルの屋上にある貯水槽がそうである）のだが、今回は簡易ということで四角い貯水

　一番低いところにあたる横板の一部だけ、田んぼに水を入れる水門（というほど大げさなものでもないが）みたいに、木の板をスライドさせることで水を抜けるようにしておいた。

　たった２人での作業だが、俺とリケの鍛冶師組の作業な上にそんなに大きくもないので、若干複雑ではあったが夕方頃には完成してしまう。

「こんなもんかね」

「これくらいなら、十分溜まりそうですね」

　出来上がった水槽を２人で眺める。飲料水用にするのなら落ち葉が入らないようにする蓋なんかが必要なのだろうが、生活用水なのでガランとしたままだ。

　屋根から樋を延ばすかどうか迷ったが、雨季の雨は結構降るらしいので、一旦見送ることにする。雨季が終わっても雨自体は時々降るのだし、その時でも間に合うだろうと言う判断である。

「こうして見てると風呂桶みたいだな」

「北方のお風呂ってこういうのなんですか？」

「ああ。こんな感じのに湯を貯めて、そこに浸かる」

「へえ、温泉が家にあるみたいですね」

「実家ではどうだったんだ？」

「うちは今と変わらないですよ。あ、でも偶に山の温泉には行ってました。怪我によく効くので」

　リケの実家は鉱山が近いところにあるんだったか。であれば温泉が湧いてることもあるだろうな。

「この辺で温泉があるってのは聞いたこと無いな」

「ですね。前にサーミャに聞いてみたんですが、温かい湯の出る泉は知らない、と言ってました」

「そうか……」

　前の世界ではシャワー派だったせいもあってか、こっちの世界で湯船に浸かれないことにあまり不満がない俺ではあるが、元日本人としては偶にそれをしたくなることがある。

　ましてや今の活計を立てる手段は日々汗だくになる鍛冶仕事である。湯に浸かることができれば、どれほどサッパリするか。

　リケともしかしたらディアナはその気持ちよさを知っているだろうが、他のメンツにも教えたいところだな。これは家風呂計画を前倒しにするべきかも知れない。

　そこまで考えたところで、クルルがのそりと小屋から出てきた。多分ハンティングチームが帰ってきたんだろう。

　俺とリケは皆を出迎えるべく、作業の後始末を始めるのだった。

## 味噌の味

2019年10月11日

「おかえり」

「おかえりなさい」

　手早く辺りを片付けた俺とリケ、そして小屋から出てきたクルルで皆を出迎えた。ヘレン以外は平気そうな顔だが、ヘレンは少し疲れているように見える。

「その様子だと、獲物をかなり長い距離追い回したみたいだな」

　俺は笑いながらヘレンに声をかけた。ルーシーが俺に駆け寄ってきたので、そのまま頭を撫でてやる。子狼だが今日一日狩りに付き合っていただろうに、体力あるな。

「疲れたぁ……。みんなはなんで平気なんだよ」

　一方、体力を使い果たして、たまらず地面に座り込んだヘレンが口をとがらせた。

「サーミャはこの森に住んでたし、リディはエルフで元々森に詳しいし、ここで暮らしてからちょっと経ってるからな。それに、見かけによらずおてんばで体力もある」

　俺が言うと、いつの間にかそばに来ていたリディがポフ、と俺の背中を軽く殴りつける。肩のHPを削り取っていくディアナのに比べたら、どうと言うことはない。

「ディアナは……よく知ってるだろ？」

　ディアナもリディに輪をかけておてんばだし、日々の生活やらで体力がついている。弓を持つ前は勢子をしてたからな。

「そうだった……」

　ヘレンはそう言いながら、そのままゴロリと仰向きに寝転がった。

「適応した、と言って欲しいわね」

　ディアナも拗ねた風に口を尖らせるが、すぐに噴き出す。そして家族の笑い声と、クルルとルーシーの鳴き声に辺りが包まれる。

「さあ、埃を落として晩飯にしよう」

　俺の言葉に賛成の声が上がって、俺たちは家に戻っていった。

　翌朝、全員で湖に向かう。全員で向かっても作業では人手が余るくらいだとは思うが、まぁ、軽いピクニックのようなものだ。

　道中でサーミャが鼻をヒクヒクさせている。気になったのか、ルーシーもまねっこしている。

「うーん、やっぱり近くなってるな」

「雨か」

「うん。明日辺りからだな」

　サーミャの答えに合わせて、ルーシーがワンと鳴いた。ディアナが抱っこして頭を撫でくりまわし、ルーシーの尻尾がブンブン振り回される。

　明日あたりから雨季が始まるわけか。備えはギリギリで間に合ったと言うべきだろうが、もし何か足りないとしても、今年の雨季についてはなんとか耐え忍ぶしかない。

「北方は雨季がないんだっけ？」

「いや、あるよ。こっちの雨季と様子が違うだろうけど。こっちのはシトシトしたのが長く続く」

　多湿は（元の世界で言うところの）アジアの特徴の１つである。こっちでも”北方”と呼ばれる地域は多湿傾向にあるらしい。気候は文化に強く影響を及ぼすから、日本風の地域の気候が似通うのは当たり前なことだけども。

「アタイも北方は行ったことないんだよなぁ」

　頭の後ろで手を組んだヘレンがそう言った。うちの中で１番あちこちに行くであろう元傭兵のヘレンで行ったことがないなら、うちの家族で行ったことがあるのはいないだろうな。

「昔に北方からうちを訪ねてきた貴族の人はいたわね」

　そう言ったのはディアナである。伯爵家であれば諸外国からの来訪者も多いだろう。その中に北方からの来客がいても不思議はない。

「変わった服着てただろ？」

「ええ、そうね。小さい頃の話だけど、変わった服だったからよく覚えてるわ」

　流石に長距離を移動するのに

　訪ね先に甲冑を着ていったりはしなかっただろうし。

「エイゾウもそう言うの着たのか？」

　サーミャとしては何の気なしに聞いたんだろうが、現代日本生まれの俺が自分から和服を着る機会はそんなになかった。成人式もスーツだったし。

　ただ、爺さんが和服派だったので、爺さんの家に行ったときは浴衣（だと思っているが、もしかすると子供向けの着物だったのかも知れない）を着せられたりはしたものである。

「うーん、爺さんに着せられたことはあるけど、うちの家は南方風の服を好んでいたからな……」

　俺はそう答えることにした。まるっきりの嘘ではない。サーミャは一瞬怪訝な顔をしたが、すぐに納得したようだった。

「行けるなら１度行ってみたいかも。貴方の故郷に」

　誰が言ったのか判然としないそんな声が、急に吹いた風に溶けて流れていった。

「うわ、でっかいな！」

　湖に沈んだ鹿を見て、俺は思わず大声を出した。前に２メートル位の鹿を引き上げた事があるが、こいつはアレよりもさらにデカい。

　前の世界でヘラジカが３メートル位になるらしいが、ゆうに４メートルはありそうに見える。

「だろ？ 苦労したぜ」

　サーミャが誇らしげに胸を張ってフンスと鼻息も荒く言った。

「この大きさだから、仕留めるまでに時間がかかったのよね」

　ディアナがそう言って、ヘレンが状況を思い出したのか、顔を青くしてげんなりしている。

「森の主とかじゃないよな？」

「まさか。鹿はそうじゃないよ」

　サーミャの言葉からすれば、鹿以外でなら森の主がいる、というように聞こえるが、とりあえずはおいておこう。

　大きな鹿にロープを括り付けて、クルルにも結わえる。クルルはやる気を見せるように大きく鼻息を出した後、力強く一歩を踏み出した。

　さすがの彼女でも少し苦労しているようで、いつものようにスイスイとは行かないが、しかし引っかかることもなく引き上げた。

　クルルが引き上げをしている間でリケ達が木を伐って作っておいてくれた運搬台へと、俺たちも手伝って乗せる。

　家族全員の力があるのに、鹿はズシリと重い。肉そのものもあるとは思うが、体が大きい分毛皮、つまりは毛の量も多いわけで、そこに染み込んだ水の量も当然増えるし、その分が重量にひびいているのもありそうだ。

　うんせと鹿を乗せた運搬台を、「クルー」と一声鳴いたクルルが意気揚々と引っ張っていく。この子はホントに引っ張るのが好きだな。

　家に着いたら、木に吊るして皮を剥ぐ。吊るし上げるのにも重量が邪魔をしたし、デカいので２人ではなくて４人で手分けしたが、作業自体はスムーズに終えることが出来た。

　クルルを撫でて褒めてやると満足した様子だったが、流石に疲れたのか、のそのそと小屋に戻っていく。

「これだけあったらホントにしばらくは困らないな」

　大きかった鹿はその大きさに見合って、肉だけになってもかなりの量がある。度々こう言うのが獲れるなら、本格的に燻製小屋の作成を考えたほうが良いのかも知れないなぁ。

　昼は普通に焼いて食うだけにする。ルーシーには味をつけずに焼いて冷ましたものだ。昨日頑張った（基本走り回っているだけだが、いるだけでも十分だ）らしいので、ご褒美に分厚くて大きめの肉をあげた。

　彼女は食べている最中、ずっと尻尾を振り続けていた。

　そして夜。実は昼の間に薄めに切った鹿肉を醤油と味噌、そして酒（日本酒でないのが難点だが）を合わせた調味料に漬け込んでおいたのだ。

　熱したフライパンにそいつを投入すると、ジュウと言う音がして、香ばしい匂いがあたりに広がる。うむ、嗅ぎ慣れた匂いだ。

「変わった匂いですね」

　いつの間にか後ろに近づいていたリディが覗き込みながら言った。

「味噌と醤油だ。どっちも大豆と麦から出来てる」

「そうなんですね。私には美味しそうに思えます」

　エルフだからと言って菜食主義ではないが、どちらかと言われれば、やや野菜の方が好きと言う彼女には向いている調味料なのかも知れない。

　そろそろ出来上がるかなと言う時間、皆がテーブルについた。今日のメニューは鹿の味噌焼きと、無発酵パンと野菜のスープである。

　唐突に和風メニューが紛れ込んでいる。野菜のスープは味噌汁に仕立てようか迷ったが、皆の口に合うか分からないので取りやめておいた。いずれカミロが昆布や鰹節を手に入れたときにはチャレンジしたい。

　皆の様子を伺うが、とりあえず匂いは平気なようだ。発酵食品には違いないのでダメな人には耐え難いと思うのだが、幸いうちの家族に該当者はいない。

　俺以外の全員が味噌焼きを口に運び、もぐもぐと咀嚼する。

「ど、どうだ？」

　俺は恐る恐る聞いてみた。こんな心境になったのは資格試験の合格発表以来で、実に何十年ぶりかのことである。

「うまい！」

　大声を出したのはサーミャだった。他の皆もウンウンと頷いている。

「塩気がちょっと強めだけど、美味しいわよ」

　続いたのはディアナで、他の皆からも概ね好評なようである。俺はホッと胸をなでおろした。

　俺も一枚口に入れてみる。色々と足りない調味料の分は物足りない面もあるが、十分に味噌と醤油を感じられた。俺にとってはもうそれだけでも十分に御馳走なのである。

　ああ、米がないのが恨めしい。北方にはあるはずなのだが、ここまで輸送してくるとなると、どれくらいの値段になってしまうのだろうか。これもそのうちカミロに聞いてみなくてはいけないな。

　その後、夕飯を食べながら、北方の食材や調味料の話で盛り上がり、この日の夜は更けていった。

## 雨が来た

2019年10月14日

　味噌を皆に振舞った翌朝、いつもとは違う気配で目を覚ました。聞こえてくる音が普段とは違う。

　普段の風の渡る音とは違う、水の音。雨が降っているのだ。体を起こし、ベッドから無理矢理引きずり出す。

　俺はいつもの服に着替えて、部屋から出るといつもよりも辺りが暗い。

　時計はないので正確な時間は分からないが、概ね同じような時間には起きられている……はずである。職人というと毎朝規則正しく起きられる、みたいな偏見（？）が俺にはあるし、実際に親父がそうだった。

　窓から見えているので、改めて確認するまでもないと言われればそうなのだが、閂を外して、家の扉を開けた。

　しとしとと降る雨が地面を濡らしている。不思議とジメッとしているというよりは、ひんやりとした空気だ。

　普段は緑なす木々の葉や草花も雨に濡れて、まるで気分をあらわしているかのように垂れ下がっている。

　木々の幹も雨に濡れたことで、その黒さをより増して、陰鬱にも見える森の雰囲気をより一層暗くしていた。

「しまったな」

　俺はひとりごちた。昨日のうちに水を汲んでおけば良かった。そうすれば今日は行く必要がなかったのだ。水槽も出来てるのだから、そっちに溜める分もあれば２～３日くらいはもったかも知れない。

　しかし、後悔先に立たずである。仕方ない、今日は雨の中を汲みに行こう。

　水瓶を抱えて外に出ると、いつもなら外に出てきているクルルの姿も、いつも一緒にいるルーシーの姿も見えない。

　まぁ、クルルが運ぶ分の水はなくても困りはしないので、そのまま行こうとしていると、クルルが慌てて小屋から飛び出してきた。

「今日は雨も降ってるから別に良いんだぞ」

「クルルルルルル」

　俺が言うと、イヤイヤをするように頭を俺に擦りつけて、クルルは鳴いた。

　俺はため息をついて、いつもの通りに水瓶を用意して、クルルに持たせる。すると、クルルは機嫌良く「クルルー」と鳴いた。

「よしよし、じゃあ行くか」

　ルーシーはと言うと、小屋の入口で寝っ転がってこっちを見ている。彼女は雨の中出かける気はないらしい。

「お留守番しててくれな」

　俺がそう言うと、フンスと鼻息を出した。雨が降っていて、いつもと様子が違うので、クルルと作業を分担しようということかも知れない。

　気圧がこの世界にもあるのなら、気圧が低くて少ししんどいのかも知れないが。

　雨の降る中を進んでいく。足下が少し緩んでいて若干歩きにくいが、足取りは決して重くない。クルルも足を滑らせたりということはない。

　雨が直接には当たってこないが、木から落ちてくる雨だれがパラパラと当たる。

　最初はくすぐったそうにしていたクルルも、やがて慣れてきたのか、平然と歩くようになった。

　湖に着いて、水瓶に１つ１つ水を満たしていく。湖の水面は雨で細かく波立っている。この湖は広いからこれくらいの雨でも、降り続ければそれなりの水量になるはずである。しばらくは川の方へは行かない方が良さそうだな。

「今日は体を洗うのはなしな」

「クル」

　俺が言うとクルルは頷くように頭を下げた。雨に打たれてるからさすがに理解してるか。俺たちは水瓶４つに水を汲み終えると、そそくさと撤収する。

　帰り道も雨だれに打たれながら、早足で戻る。状況的には前の世界で傘を忘れたときと同じなのだが、不思議とあの時のような惨めな気持ちではない。

「クルルがいっしょだからかな」

　俺がそうつぶやくと、クルルは聞こえていたのか、そっと頭を俺に擦り付けた。

## 雨の生活

2019年10月16日

　家にたどり着いて、水瓶を慌てて家の中に入れる。サーミャとリケがすでに起きていて、タオル（リネンの柔らかく織った布だ）を渡してくれた。

　そのタオルを持って、俺はクルルの待つ小屋へ急いだ。

　小屋にいたクルルは、ちゃんと立ったままで待ってくれていた。体を拭いて貰えることと、濡れたまま座ってしまうとひどく汚れることを理解しているのかも知れない。

「よしよし、お利口さんだ」

「クルルル」

　機嫌よく鳴き声を上げるクルルをタオルで拭いてやる。爬虫類のような体で毛皮ではないので、思ったよりは濡れていない。すぐに拭き終わった。

「今日は小屋で大人しくしていてくれな」

　俺の言葉にクルルは一声鳴いて、（たぶん）了解を示す。小屋の床をチェックする。床と言っても地面を少し盛り上げただけだが、その盛り上げたのが有効だったのか、今のところ水が侵入してくる気配もない。

「よーし、じゃあ行くぞ」

「わん」

　クルルはこの森にいる間はほとんど食べなくても平気だが、ルーシーは育ち盛りもあってか、好みもあるのか俺達と一緒に飯を食うので、連れて行く必要がある。

　クルルを拭き終わったタオルではあるが、ルーシーの上から被せてダッシュする。小屋はちょっと離して建ててしまったが、もっとくっつけて建て直すか、屋根付きの通路を作っても良いかも知れない。通路の場合は屋根の高さをクルルがぶつからない程度まで上げなきゃいけないけれども。

　家に飛び込んだ俺はルーシーをサーミャに預ける。抱っこされたルーシーはパタパタと尻尾を振ってご機嫌だ。あんまり愛想よくしすぎると

　俺はリケが別に用意してくれたタオルをもって自室に引っ込み、服を脱いで体を拭いた。この服は今日は着れないな……。

　あまり多いとは言えない着替え服を出して、そっちに着替えるとさっぱりした気分になった。

　その後はいつもどおりに朝の準備を済ませる。いつもなら飯が出来るころにルーシーを家に入れるのだが、今日はそれよりもだいぶ早いので、皆がしている朝の準備やら洗濯やらを興味深そうに眺めている。

　ディアナとヘレンがいつもより少し気合を入れて洗濯をしていた。可愛い応援があると気合も入ろうものではある。

　少し早く朝飯の準備が終わったので、自分の洗濯物を干すのを手伝う。家族の分までは何かと差し障りがあるので出来ないが、自分のものは問題ない。

　先日完成したばかりのテラスに洗濯物を干していく。

「さっそく役に立って良かったなぁ」

「そうですねぇ」

　洗濯……と言うか基本的な家事の陣頭指揮はリケである。実家の生活から言っても１番経験が多いからな。

　実はヘレンも器用に家事をこなす。聞いてみると、「家にいた時やってたし、前線でもちょっとした洗濯とかは合間を見てこまめにしてたからな」だそうである。

　サーミャも器用ではないが基本的な事はできるし、リディも同様だ。ディアナはと言うと……よく目をそらしていたので、多くは語るまい。

　それでも最初の頃はもたついたりもしていたが、今はそんなに時間がかかったりもしていない。元々覚えが早いのだ彼女は。

　飯の後、普段ならルーシーを家の外に出すのだが、今日は雨だ。もうしばらくは家の方にいさせることにした。

「さて、それじゃあ今日の作業だが」

「もういつもどおりで良いんですかね」

「今回は特に依頼は受けてないからなぁ……」

　いつもどおりに作業をすればいいだけの話ではあるが、３週間も納品へは行かないのだ。それなりに時間はある。

「何か新しいのを作るか」

　俺がそう言うと、リケの表情がパァッと明るくなる。俺はそれを見て苦笑しつつ、鍛冶場への扉を開けた。

## 次の製作物

2019年10月18日

「それで、何を作るんですか？」

　リケがワクワクを隠さず俺に聞いてくる。サーミャはやれやれといった顔でそれを眺めていた。

　作るものの方向性としては３種類ある。１つは今まで作った武器の発展型、１つはジャンルの違う武器、そして最後は武器以外のものだ。

　防具は恐ろしく手間がかかる（と、インストールが教えてくれている）ので、今日のところは止めにしておきたい。この３週間で長く時間が取れるようならディアナかヘレンの胸甲くらいは出来るかも知れないが。

　道具の

　だが、今回は武器を作っていきたい。以前に少し聞いたところでは、ヘレンはショートソードを１番得意にしていると言うだけで、一通りの武器を扱えるらしい。

　であれば、なにか新しい武器を作って試してもらいたいところだ。

　剣、刀、投槍に短槍、ハルバードに弓と、普通の武器、長柄武器、投射武器と作ってきた。

「次はメイスかな」

　鈍器は今まで作ったことがない。フランジつきのメイスなら相手が重装甲でも太刀打ちできる。……俺のチート全開のものであればメイスでなくてもいけそうな気はするがそれはさておき。

　それにかさばってはしまうが、メイスならヘレンが本業に戻るときもショートソードの予備武器として使えるだろう。フランジが多少傷んでも衝撃を与えることはできるし、それで助かる確率がちょっとでも上がるならそれに越したことはない。

　実際どうなのかはヘレンに聞いてみないとだが。なので、そのあたりを聞いてみると、

「んー、そうだな。あんまり重いと動きが

　と言う回答である。まぁ、アポイタカラを使ってるから向こう数十年レベルで大丈夫な可能性もあるが、完全に保証できるものでもない。

「じゃ、メイスで決定だな」

「おお……」

　リケの目のキラキラが一層輝きを増していく。言ってもメイスだぞ？構造自体はめちゃくちゃ単純だぞ？

　それでも見学すると言うので、そこは好きにさせておく。他の皆は板金を作ってくれるらしい。

　最初はフランジから取り掛かる。放射状に飛び出している部分で、ここの形状も様々であるのだが、今回はシンプルにカーブを描いた山形にしておく。

　板金を火床で熱して、目的よりも分厚いくらいの厚みに整える。すると、目的の大きさよりもかなり大きい板金になった。

　その板金を再び熱した後、タガネを使って分割していく。１枚の板金からできたのは３つなので、同じ作業をもう２回繰り返し、９つの小片が出来上がる。

　小片の１つを熱し、金床で叩いて、先端がやや尖った富士山のような形にしていく。山の裾野の長さは握りこぶし２つ分くらいだ。

　鈍器なので、成形するときには硬さが増すように魔力を込めていく。形ができたらそのままでも良いのだが、せっかくなのでヘレンが希望する、ちょっとした装飾を入れることにした。

　装飾と言ってもうちの工房のマークである、"太った猫の刻印"だ。それを強度が落ちない程度の深さで浮き彫りにしていく。ちょっと時間がかかったが、可愛く仕上げることが出来た。

　出来上がったものをリケが手にとってまじまじと見る。

「これはかなり硬いですね」

「メイスだからな。硬さのほうを優先した」

　魔力による硬さの増強なので、鉄自体を硬くしたときのように割れやすくなる、といったことも起きにくい。鉄自体をただ硬くしたらパキッといきかねないからな……。

「うーん、これくらいならなんとか？いやいや……」

　フランジの１片を見ながらブツブツと独り言をはじめたリケに苦笑しながら、俺は次の１片を作るべく、小片を火床に入れた。

## メイス

2019年10月21日

　フランジを合計で９つ作った。できあがったフランジは９つとも寸分の狂いもなく同じものだ。

「う～ん、この精度こそ、親方の本領のように思えます」

「そうか？他の鍛冶屋でも出来る人はいるんじゃないのか」

　熟練の鍛冶屋なら、かなりのところまで精度が出せると思うけどな。そうでないと甲冑みたいに複雑な形状を組み合わせつつ、スムーズに可動させるのは不可能だろう。

「”ほぼ同じ”までなら実家の父親も出来ますけどね。この短時間で合わせることもなしに、作り慣れているわけでもないものを合わせてピッタリに作るのは無理ですよ」

　９つのフランジを重ねながらリケが言う。

「親方なら戦場の簡易な鍛冶場でも、ちゃんとしたものを作れちゃうんじゃないですか？」

「かもな」

　限界はあるだろうし、戦場の場所にもよるが魔力が少ない土地だと魔力を込められないので、その分性能はどうしても落ちる。ギリギリ高級モデルってとこだろうな。

　リケがフランジをためつすがめつしている間に、持ち手とフランジをつける柄を作ることにする。

　板金を火床に入れて熱する。加工できるところまで温度を上げたら、叩いて棒にしていく。柄になる部分はある程度長くないといけないが、あまり長すぎても扱いにくくなりそうなので、そこそこの長さに留めておく。ショートソードの扱いに慣れているヘレンなら短めのほうが良さそうだし。

　ある程度の長さになったら、別の板金を熱して、今度は細めの棒を作る。針金ほどには細くないが、曲げるには加工を要する程度の太さだ。

　こいつを柄の一端に巻きつけて持ち手とするわけである。

「リケ、すまんがちょっと手伝ってくれ」

「お安い御用です」

　ガラスみたいに熱いうちにくっつけて引っ張ればいいなら、もう少しなんとかなるのだが、鋼でそれをするのは流石に難しい。炉の方で加熱することも考えたが、魔力まわりの話もあるしな……。

　細めの棒を、リケがヤットコで掴んで固定している棒へ巻きつける。何周かはできるが、ある程度巻いたら冷めてくるので再度加熱してまた巻きつけを繰り返していく。

　自分の拳の幅より少し長いくらい巻きつけたら、一旦そこで止めて、滑った時にすっぽ抜けないよう、持ち手の両端にぐるっと巻くように輪っかをつけたら、持ち手自体は完成だ。

　あとはフランジの取り付けである。フランジと柄の両方を熱したら細い鎚で叩いて溶接みたいにしていく。これもフランジと柄の両方を支えつつ、鎚を振るわなければいけないので、リケに柄を支えてもらった。もしも量産するとしたら冶具を作って１人でもなんとか出来るようにしないといけないな。今のところその予定はないが。

　金床の端の方を上手く使ってフランジ９枚を取り付けた。

「よし、これで完成かな」

「おお！」

　リケが目を輝かせる。俺は出来上がったメイスを軽く振ってみた。そう作ったのだから当たり前ながら、頭のほうが少々重たい。もう少し持ち手側を重くしてバランスを取っても良かったかも知れない。

　リケに見せると「ほほう……なるほど……」とかなんとか言いながら、あちこちの細工を見始めた。俺と同じように軽く振ったりしている。ドワーフにメイスは微妙にイメージが合わないな。斧や鎚が似合いすぎるのだとは思う。

　それを横から見ていても、とりあえずは衝撃に耐えうるだけの強度を持っている……ように見える。実際には試して貰わないことには分からんが。

　なので、ギリギリ日が沈む前だし鞘の加工なんかで残った木の端材と、板金を１枚用意してテラスに出て試すことにした。俺とリケ以外も今日の仕事は終いにして一緒に出てきている。

　出来上がったメイスをヘレンに渡すと、ブンブンと音がしそうな勢いで振りはじめた。あまり筋肉とかはないように見えるのだが、随分と軽々振るもんだなぁ。これが経験の差ってやつか。

「丁度いい重さだな。ちょっと頭の方が重いけど、これなら全然いける」

「そうか」

　俺は平静を装って返したが、内心ではホッと胸をなでおろす。サーミャにはバレたようでニヤニヤしていた。

　俺とディアナで端材を持つ。

「くれぐれも俺たちには当てるなよ」

「当たり前だろ」

　俺がニヤッと笑って言うとヘレンは口を尖らせる。そして、スッとメイスを構えて、思い切り横に振り抜いた。バキッと派手な音がして、木材が木っ端微塵に弾け飛ぶ。硬くて重い頭にヘレンの技量と力が合わさると、ここまで威力が出るものなのか……。

　もう１つ驚いたのは、ほとんど俺には衝撃が伝わってこなかった。ディアナの方を見ると驚いた顔をしているので、彼女も衝撃を感じなかったらしい。

「ば、板金も試してみるか」

「そ、そうね」

　俺とディアナはおっかなびっくりのまま、板金を手で支えた。流石にこれは手に衝撃が伝わってくるだろうから、それなりの覚悟をして構えた。

「いくぞー」

　気楽な感じでヘレンが宣言して、再びメイスが振り抜かれる。

　ガキン！！とド派手な音がして、火花が散り、俺の手にはメイスそのもので殴られたかのような衝撃が伝わってきて、思わず手を離してしまう。

　それはディアナも同じだったようで、つまり、俺とディアナはほぼ同時に手を離したことになる。それなりの重さの板金が決して狭くはないテラスの端まで飛んでいく。

　俺は板金に駆け寄る。そこには、自己鍛造弾の途中みたいに真ん中がボコリと凹んだ板金があった。

## 来客

2019年10月23日

「こりゃ凄いな」

　真ん中が凹んで変形している板金を持ち上げた。加工前の板金でかなり柔らかいし、俺とディアナが持ってただけで固定も緩いので打ち抜かれる前に変形したみたいだが、板金を硬く作ってガッチリ固定していたら、フランジの形に打ち抜かれていたかも知れない。

「これが兜を被った頭とか、胸甲をつけた体に当たるわけですか？全力で？」

　リケが目をぐるぐるさせながら、半ば振り絞るように声を出す。他の皆も目をまん丸くしている。

「そうなるな」

　俺もかなり驚いてはいるが、自分で作ったものとヘレンの実力に対する信頼の分は若干冷静に受け答えできる。

　とは言っても、作っておいて何だが人の体に当たった時、実際にどうなるかはあまり想像したくはない。飯がうまくなる情景でないのは間違いないだろう。

「聞くまでもないかも知れないが、どうだった？」

　俺はヘレンに仕上がりを聞いてみた。返事は声ではなく、勢いよく作られた力こぶであった。

「欲を言えば、丈夫な革紐の輪っかが持ち手の端についてると良いかな。ちょっと長めのやつ」

「振り回すのに都合がいい？」

「おっ、わかってるじゃん。後は手首に通して落とさないようにだな」

「ああ、そりゃそうか」

　前の世界で見た映画で手持ちのハンマーを振り回してるのがいたな。扱いは難しいだろうが、フレイルみたいに扱う方法もある……と言うことだろう。多分。

「またつけておくよ」

「あっ、急がなくていいぞ！！」

　なぜか慌てたように付け足すヘレン。俺は苦笑しながら「分かったよ」と返しておく。雨の音を背後に、俺達は家に戻った。

　自分たちの夕食の準備をする前にルーシーにご飯をあげて、小屋に戻す。すごい勢いで走っていったので、今日のところはそのままにしておいた。

　雨の中を走っていったが、あのスピードだと「多少濡れた」程度で済んだのではなかろうか。

　翌朝、相変わらず雨は降り続いているが、今日は昨日と比べて随分と小降りになっている。水は昨日汲んで来た分でギリギリ賄えなくはないが、小降りの間に補給しておこう。

　明日が土砂降りだった時に汲みに行かなくても良くなる。

　家を出ると、クルルが小屋から駆け寄ってきた。今日はクルルの水瓶も最初から出してある。それをクルルにくくりつけると、彼女は機嫌よく歩きだした。

　水を汲み終わって、家に戻ってくる。あとは昨日の繰り返しではあるが、昨日よりもほんの僅かだけ濡れていないので、その分は楽……かと思ったらあんまりそんなこともなかった。

　ただ、雨の量が少なかった分、多少気分はマシだ。土砂降りの中だともう歩くのも嫌になるからな。今日行っておいて正解、ということにしておこう。これで明日晴れたりしたらショックだが。

「今日からしばらくは納品するぶんを作るか」

「そうですね」

　俺とリケで軽い打ち合わせをする。外に出られないから、気晴らしのピクニックなんかもしばらくはお預けだろうし、今のうちにカミロのところに納品するのを量産しておけば、納品する回数も減らせるし休みも増える。

　ヘレンにもちょっと手伝ってもらえば、かなりの量産速度になる可能性もあるし。ならなくても最低限はできるだろう。この辺はのんびりいきたい。

　そうして、炉だの火床だのに火を入れて準備をしていると、鍛冶場の扉が叩かれた。

## 依頼主かそれとも

2019年10月25日

　今日は昨日と比べてマシだとはいえ、雨の日に”黒の森”へ来ようと思う客がいる事実に少し面食らう。

　俺は鍛冶場にある扉の閂を外し、万が一良からぬことを考えた輩だった場合に備えて用心しながら、そっと扉を開けた。

「はい、なんでしょう？」

　お定まりのようなセリフを言ってしまう。こんな日に（こんな日でなくてもだが）こんなところへ来る目的なんて、良からぬことを考えていなければ１つしかないのにな。

「あ、あの、すみません、こ、こちらで武器を作っていただけると聞いて……」

　警戒したのは徒労に終わった。蚊の鳴くような声で、開けた扉の前にいたのは外套を羽織った１人の女性だ。かなりおどおどしている。

　ただ、かなり身長が高い。ヘレンが俺と同じかもう少し高いくらいで、この世界の人間だと結構な高身長であるらしいが、それよりも更に高い。２メートル近くあるんじゃなかろうか。鍛冶場の扉はそこそこ大きいが、頭の先が収まってない。

「雨ですし、とりあえず中へどうぞ。頭、当てないように気をつけてください」

　そう促しつつ、後ろを振り返ると、近くにヘレンが来ていた。いつの間に。この人がおどおどしていたのはヘレンがいたのもあるのかな。

　俺はヘレンの肩をポンと叩くと、リケにタオルを持ってきてくれと頼んだ。

　女性は外套を脱ぎ、その下で背負っていた

　そこへリケがタオルを持って戻ってきた。体が大きいことを勘案してか、２枚だ。

「ありがとうございます」

　タオルを受け取って女性は頭を下げる。座っていてもリケよりもほんの少し低いくらいなので、なんだか娘が母親にタオルを渡しているかのようにも見える。それを口に出すと後が怖そうなので口には出さない。

　女性にとって幸いだったのは、火を入れたから鍛冶場の中の気温は上がりつつあるし、空気も乾きつつあることか。いずれ「暑い」になっていくのだが。

　リディがワインをお湯で割ったものを持ってきてくれた。ミント茶だと清涼感があるから、体を温めるならこっちのほうが良いか。

　一通り体を拭き終えた女性からは俺が話を聞きつつ、話の真贋判定にはサーミャ、念の為の護衛としてヘレンが同席することにした。他の皆は予定通りの作業だ。

「ちょっとうるさくなるかも知れませんが、ご容赦を」

「い、いえ、急に押しかけたのは私なので……」

　やたらと恐縮する女性。うちに注文に来る場合、事前の連絡ってほとんど不可能だから、急に来る以外ないんだけどな。カミロのところと伝書鳩か伝書烏、あるいは伝書竜みたいなものでも整備するなら別だろうが。

「こんなところですので、そこはお気になさらず。で、１つだけ確認ですが、ここへはお一人でいらしたんですね？」

「ええ」

　女性は力強く頷いた。サーミャも軽く頷いているから、１人で来たのは間違いないらしい。

「では、大丈夫です。ようこそ、工房へ。私はエイゾウと申します。それで、ご依頼は？」

　俺は努めて朗らかに微笑んだ。……そうしたつもりだ。サーミャが明らかに笑いをこらえ、ヘレンの顔が珍妙に歪んでいるが、気にしない。

「あ、私はアンネと申します。」

　出したワインのお湯割りをちょっと飲んで、タレ目な瞳をぱちぱちとしばたたかせながら、アンネは名乗った。ふう、と一息ついて、ごそごそと脇に置いた背嚢から、さっき俺がみた長いものを取り出す。

　それを卓に置いた時、俺の目は見開かれた。ヘレンがものすごい勢いで懐のナイフを抜き放って、アンネに斬りかかろうとする。

「待てヘレン！」

　俺はなんとか叫ぶことができた。ナイフの刃はアンネのギリギリで止まっている。”迅雷”の二つ名は伊達じゃないな。

「ま、ままま待ってください！違うんです！私は……

　立っていたら確実に腰を抜かしていたであろうアンネが、両手を上に上げて必死に主張する。

　卓の上に置かれていたのは、ヘレンが帝国で失った、俺が打ったショートソードだったのだ。

## 帝国の意図

2019年10月28日

　一気に鍛冶場の中が殺気に満たされる。ヘレンも俺の言葉でギリギリ踏みとどまったが、もしも俺が指でも鳴らそうものなら、即座にアンネの命を奪うだろう。

　家族を守るためであれば、最悪そうすることも致し方ないと俺は思っているが、なるべくここでヘレンにそうして欲しくはなかった。

　必要だと判断したなら、彼女の帰り道にでも俺がやる。

「それで、事情は説明してもらえるということで良いんですかね」

「え、ええ、勿論！」

　アンネが体ごと揺らすかのように首を縦にブンブンと振る。横にしたらルーシーが尻尾振ってるときみたいだ。

　他の皆も作業の手を止めて集まってきた。

「先程も言いましたが、私たちとしては貴方がたとことを構えるつもりはありません」

　真剣そのものの顔でアンネが話し始めた。見た目は

「貴方がたは立ち位置としては王国よりだと判断しています。これは単純に居住地やご友人の繋がりからですね」

　アンネはこくりとワインのお湯割りを一口飲んだ。ヘレンは相変わらずピリピリしている。ちょっとでも怪しい動きを見せたら、ナイフ１本でもあっという間に頭と首と切り離してみせるだろう。

　俺としては元々この世界の人間ですらないこともあってか、王国の人間だという意識はあまりない。住んでいる場所の都合上カミロやマリウス達、王国の人間と知り合うのが先になっただけだ。この森が、あるいはこの工房が帝国よりにあったのなら、帝国の誰かとそうなっていたかも知れない。

　”IFは存在しない”のだから、この世界にとってその選択肢は存在しなかったのだろうけれども。

　お湯割りを飲んだ彼女はほうっと１つ息を吐いて続ける。

「そして、そちらに過剰に肩入れされると困る、と皇帝陛下は仰せです。貴方の作ったらしいものを試す機会は十分にありましたしね」

　アンネが言ってるのはたくさん作った剣の事だな。侯爵が帝国の領地……と言ってもほぼ放棄されていて領民もほぼゼロのような土地と引き換えにしたやつだ。

　それに、この目の前に置かれた前のヘレンの剣を試す時間もあっただろう。革命自体はあっと言う間に鎮圧されたというし。

「とは言え、何者かも一切分からずに野放しにしておくわけにもいかないですから、どういう人物なのかを確認してこいと」

「それなら警戒されるような真似をしたのは間違いだったのでは？」

　俺は疑問を口にした。黙って仕事を依頼して確認して帰ればノーリスクだ。例え疑われても証拠がない。

　命がなくなるかも知れないところまでは想定外だったにしても、その選択が正しいようには思えない。

　アンネは頷いた。

「私もそう思います」

「じゃあ……」

「陛下が”胸襟を開いて話をしてこい”と。それで私が帰ってこないような事になれば、それはそれで想定済みなんでしょう」

　随分とあっさりものを言う人だな。にしても、命のやりとりになる可能性も織り込み済みか。

　ここでもし彼女を”片付けて”しまったら、それはそれで帝国には利益になるんだろうな。

　しかし、だとすると彼女はそんじょそこらの人物ではないと言うことか。

　仮に俺が今殺されたところで、王国の友人・知人達は怒り狂うかも知れないが（そうあってくれるといいなと言う願望も込みだが）、王国と帝国の関係的には大したインパクトはない。変なところに住んでいる、流れ着いた鍛冶屋のオッさんが１人死んだだけだからな。

　つまり、彼女は少なくとも殺されるか監禁状態にあること自体が、王国と帝国の間に何らかの事態をもたらす程度の身分であることにはなる。さっき名乗った名前とは大きく乖離しているように思う。

　俺はそこを突っ込んでみることにした。

「だとしたら、話してないことがあるのでは？」

「ああ、確かに」

　俺の言葉に一瞬雰囲気ごとぽわんとしたあと、アンネは立ち上がる。スッとヘレンとサーミャ、ディアナが前に出た。

　アンネはそれを見て少し眉根を寄せたが、すぐに微笑んで貴族流の優雅なお辞儀をしながら言った。

「

## 打つべきか打たざるべきか

2019年10月30日

　アンネ――アンネマリーは帝国の第七皇女であると名乗り、その後再び着席した。俺を守るように前に出ていた３人も同じように再び座る。思ったより驚いていないように見えるが、驚きすぎて実感がないのかもな。

　しかし、第七皇女となると皇位継承順位は相当に低いだろう。皇女だけでも上に６人いるのだ。皇子を加えれば更に増えるだろう。まさか皇女しかいないわけではあるまい。

　厄介なのは、たとえどれだけ皇位継承順位が低かろうとも、帝国皇帝の直系であることには違いないわけである。変な扱いをすれば何かしらの問題になる可能性は非常に高い。こっちはただの鍛冶屋だ。無礼討ちの場合はする方でなく、される方である。

　一方で、帝国としてはかなりの高待遇をしているとも言える。間者か、身分が必要でも傍系の誰かを送れば済む場面で、わざわざ直系を送ってきた。と言うことはつまり、

「人質だろうなぁ……」

　俺はため息をつきながら呟いた。第七皇女という、直系といえども万が一いなくなったところでめちゃくちゃ困るわけではない人物となれば、人質として派遣するのは悪い手ではない。

　向こうから人質を送ってくるというのも一見おかしな話には思えるが、前の世界、日本の戦国時代にもあった話ではある。その場合は通常、同盟やら臣従やらの証としてだが。今回この場合は前者のつもりなんだろうなぁ。

　アンネは俺の言葉を聞いて、ニコニコしている。おっとりしているように見えて、冷静に自分の立場を理解しているらしい。一番厄介なタイプだな。

　ただ、これらは全てアンネの言っていることが真実であればではある。俺はちらっとサーミャの方を見たが、彼女は小さく首を縦に振った。彼女は嘘を感知できなかったということだ。全く動揺することなしに嘘をつかれていたら分からないが。

　俺はもう一度、今度はさっきよりも更に深いため息をついた。

「まぁ、貴女と帝国が我々に危害を加える気がない、と言うのは理解しました」

「ありがとうございます」

　アンネはペコリとお辞儀をする。

「ああ、１つだけ確認をさせてください」

「なんでしょう？」

「”我々”にはもちろんヘレンも含まれますね？」

　アンネのタレ目がスウっと細められた。笑っているようにも見えなくもないが、笑っているとしても獲物を見つけた獣のそれだ。

　ヘレンはというと、俺の顔をじっと見ている。少しの間、口をパクパクさせていたが、そこから言葉が出てくることはなかった。

　場に沈黙が訪れた。魔法が火床や炉に風を送って炎が舞い上がり、炭が爆ぜる音が鍛冶場に響く。誰かがゴクリと唾を飲み込む音が聞こえたような気がした。

「……ええ、もちろん。彼女を害した場合、貴方は帝国に大きな敵愾心を持つでしょう？それは避けなければいけないと判断しています。積極的に王国側と言うわけでもないようですし、わざわざ敵に回すような真似をするべきではありません」

　ややあってからのアンネの言葉に、俺とヘレンは同時にため息をついた。これでヘレンの懸念材料が無くなったな。街へ出るたびにカツラを被る必要もない。

「さて、じゃあ面倒くさい話は一旦ここまでにしておいて、私は貴女の武器を作る、でいいんですかね」

　アンネが面食らった顔をしている。実際、やらねばならない話は終わったんだろうから、さっさと追い返しても良いのだが、今は雨が降ってるし、一応客は客だ。作るものを作り上げて、帰ってもらおう。

「いえ、できれば陛下のものを……」

「うーん、うちのルールとして武器を作ってもらう本人がここに１人で来ること、ってなってるんですがね。つまり、この場合は皇帝陛下自らお出ましいただかないことには」

　俺は頭をかきかき言った。こう言うルールに特例はあまり作りたくない。カミロから依頼されたミスリルのレイピアは特例ではあったが、あれは新しい素材を扱わせてくれるメリットもあったし、他ならぬカミロの頼みだったからだしなぁ。

「わかりました」

　アンネはスッと立ち上がった。用事は済ませたから帰るのかな？と思い、俺も立ち上がると、

「それでは、私の剣をお願いします。両手剣を」

　とアンネは頭を下げた。

## 両手剣

2019年11月1日

「両手剣……ですか」

「ええ」

　俺の言葉にアンネは頷いた。確かに彼女の身長から振り下ろされる両手剣の威力は想像するだに恐ろしい。唐竹割りは無理でも、普通に頭蓋の１つや２つはスイカ割りのごとく割ってしまうのではなかろうか。

　振り回すこと自体が出来るのか、ということも一瞬頭をよぎったが、高身長なので分かりにくいだけで彼女の身体は全体にがっしりしている。リケを縦に伸ばしたような感じというか。

「扱いには慣れてらっしゃる、と思ってよろしいですか？」

「そうですね。頭の方は兄様や姉様達に敵わないですし、小さな武器もハリエット姉様の方が上手なので。私は種族もあってこんな体ですし……」

　アンネも決して馬鹿ではないと思うのだがな。ん？種族？デカいなとは思っていたが、もしや。

「失礼ですが、巨人族でいらっしゃる？」

「ええ。王国の皆さんはあまり御存知でないかも知れませんね。帝国では隠してないので特に気にする人もいませんが、陛下は人間族で母は巨人族ですよ」

「ほほう」

　なるほど。前に見た巨人族の男は３メートルと言われても納得できる大きさだったが、人間族と巨人族の子ならそこまでは大きくならないということか。

「ハリエット姉様はリザードマンですし、エレノア姉さまはドワーフ、レオポルト兄様は獣人族です。陛下はそのあたり”

　そこでアンネは意味ありげに俺の方を見た。「貴方もでしょう？」と言いたいのだろうが、差別をしないよう努めているだけで、そう言うこととは違うぞ。……違うよな？

「わかりました。それじゃあ両手剣を作りましょう」

「ありがとうございます」

　座ったままアンネは深々と頭を下げた。

「それで、お代の方は？」

「ああ、それは出来栄えを見て、納得する額を支払って頂ければ」

「えっ」

　アンネに聞かれたことに答えると、困惑している。それを見たリケがため息をつきながら言った。

「うちの親方、こう言う人なんです」

「なるほど、一流の職人の作品を求めるなら、その値段を見極められる使い手でなくてはいけないということですね」

　リケの言葉を聞いたアンネは何を勘違いしたのか、そんなことを言い始めた。なので、俺が「単に納得できる値段貰えばいいだけだ」と言おうとしたが、それは後ろから伸びて来た手に塞がれてしまう。

　この力の強さはディアナだな。このまま勘違いさせておけ、ということか。俺はその手をポンポンと叩いて了承を伝える。スッと手が俺の口元から離れていった。

「それじゃ、どういう感じにするか見極めるんで、そうですね……この棒をそっちのスペースで振って頂いていいですか？」

「わかりました」

　鞘などに加工するため、鍛冶場に運び込んでいた木材のうち１つをアンネに渡す。剣にしては柄部分がやたらに太いが、長さはいいし、この森の木はつまっていて軽すぎないので具合を見るには不都合がない。

　鍛冶場の天井はかなり高いので、アンネでも振り回すことが出来る。

「ハッ！」

　アンネの気迫とともに、ブゥンと音を立てて木材が空を切る。もう少し遅いかと思ったが、全くそんなことはなく、今あの木材に当たれば骨の１本や２本は普通に折れるだろう。頭に当たったらどうなるかと言えば、ご想像の通りというやつである。

　しばらく相手がいるかのように木材を振り回したあと、肩で息をしながらアンネが言った。

「ハァ……ハァ……どう……でしたか……？」

「ありがとうございます。大体の方向性は決まりましたよ」

　両手剣なので重さが優先をするのは当然としても、振る速度とのバランスをどうするか。そこが特注モデルとしてのカギになってくるだろう。

「……今日は雨が降ってるからダメだぞ」

「わ、分かってるよ！」

　アンネを見て目をキラキラ輝かせていたヘレンに釘を刺してから、俺は準備に取りかかった。

## 両手剣製作開始

2019年11月4日

　うちの工房の板金は大体のサイズになっている。あくまで目安量だが、１枚でナイフ、２枚でショートソード、３枚でロングソードが出来るような感じだ。

　あくまでも目安なので増えたり減ったりも日常茶飯事ではあるが。上記３つに該当しないようなものの場合は適当だし。

　さて、そこでツーハンデッドソードを作ったら、板金が何枚いるかという話である。板金の製作についてはおおよそ手順が確立できているので、それ自体は問題ないのだが、大量消費するためだけに板金を大量に作るというのも、あまり意味はない。

「板金は使わずに、炉から作業始めるか」

　俺はリケにそう話しかけた。リケが頷いて言う。

「板金からだと量を確保するのに二度手間になりそうですからね」

「そうだな」

　リケの言葉に今度は俺が頷く番だった。こうやって意図を汲みとってくれるのは非常に助かる。

　リケはサーミャ達に声をかけて、炉に鉄石を投入し始めた。温度が十分に上がって鉄が出てくるまでは少し時間がある。

「アンネさんは休まれます？」

「いえ、可能ならこちらで作業を見せていただければと」

「わかりました」

　アンネは少し驚いた顔をした。普通の鍛冶屋なら、弟子でもない人間にこう言う仕事場はあまり見せないのだろうが、うちは普通じゃないからな。

　とりあえず見学している、と言うことなので、客間の心配とアンネの存在を頭の中から追いやって、仕事に集中することにする。

　炉に入るギリギリまで鉄石を沸かして、取り出せるようになったら流していく。

　いつもなら板金１枚分で止めるところを、そのまま流し続けていって、大きな板にする。

　その１回で足りれば良いのだが、足りなかったのでもう一度鉄石を沸かす。

　炉もマジックアイテムの一種（らしい）ので、鍛冶場の気温上昇も抑えられているようなのだが、１０００度を超える物体がそこにあるという物理的なところまではどうしようもない。

　そう時間もたたないうちに汗がだらだらと流れてくる。うちの家族はそれぞれに用意してある木製のカップで水瓶から水分補給をしているが、アンネはそうしない。

「早めに着ているものを脱いで、水を飲んだ方が良いですよ。暑くて気分が悪くなるとまずい」

「わ、わかりました」

　リディが客用のカップをアンネに渡した。熱中症で倒れても、点滴なんかはないし、対応には限界があるから、自分で防止して貰うほかない。

　２回目に鉄を流し終える頃には、雨に濡れたはずのアンネと負けず劣らずの様相を呈していた。

　鉄が少し冷えるのを待つのと、俺たちの体も冷やす時間が必要であること、そしてなによりちょうど良い時間なので昼飯にしようと言うことになり、俺たちは鍛冶場を後にした。

　ディアナにアンネを客間へ案内しておいて貰う事も忘れない。

　しかし、ウチの客間もそのうち増やした方が良いのかも知れないな。今別の客が来たら空いてる部屋を案内する以外に方法がない。

　アンネの仕事が片付いたら、その辺りどうするかを皆で決めよう。そう思いながら、俺は人のいなくなった鍛冶場の扉を閉めた。

## 両手剣製作中

2019年11月6日

　雨に濡れたアンネの服と外套は、俺達の服と一緒にテラスに干しておくことにした。

　客間に案内されたアンネはそこに荷物をおいて、服を着替えた。今彼女が着ているのはディアナのワンピースなのだが、普通の服っぽく見える。下もズボンタイプのものをはいていて動きやすそうだ。

「すみません、色々と」

「いえいえ」

　アンネが頭を下げて、ディアナが応対している。お姫様とお嬢様のハイソな会話のはずなのだが、内容が浮世離れしていないせいか、逆に違和感すらあるな。

　テラスに服を干しに出ていたリケとリディがルーシーを連れて戻ってきた。テラスで寝ていたらしい。ちょっとでもクルルが分かるところにいたいのだろうか。

「いただきます」

　いつもどおりの昼飯を並べた食卓に全員が着席（ルーシーは床で待っている）したところで、いただきますをする。アンネもおっかなびっくりな感じだが、俺たちを真似していた。

「うちはこう言うものしかなくて、すみませんね」

「いえ、お邪魔してる立場ですし、どうぞお気になさらず」

　口に合うかどうか心配だったが、どうも杞憂だったようだ。普通に……婉曲的に言えば体の大きさに合わせた量を食べているので、この先２～３日程度だとは思うが心配はないな。

　メシが口に合わない状態で過ごす２～３日って意外と辛いからなぁ……。

　昼飯が終わったら、鍛冶場に戻って作業の続きだ。両手剣の分の鉄は確保したので、リケを除く皆には板金づくりに戻ってもらう。

「リケはこっち手伝ってくれな」

「もちろんです」

　意外とたくましい力こぶを見せながら、リケはにっこりと微笑んだ。

　流石に両手剣を１人で製作するのは厳しいので手伝いが必要だ。こう言う作業のときは見学させるのだし、リケに手伝ってもらえば手間が少ない。

　火床いっぱいいっぱいの鉄の塊を全力で熱する。温度を上げたら、金床で叩いていくのは他の剣と変わらない。だが、

「重いし熱いな……」

　火床に持っていく時点で重かったが、今はそれに熱も加わっている。ヤットコで掴むしか無いし、より重く感じるというのもあるだろう。

　全力で金床まで持っていくと、リケと呼吸を合わせて叩いていく。俺も叩くが、叩いて欲しいところは鎚で合図する。親とも鍛冶仕事をしていたからだろう、俺の合図をすぐ理解して、思ったとおりに叩いてくれた。

　少しして温度が下がると、再び火床に持っていって熱するが、やはり重い。

「そのうち腰をいわしそうだ」

「うちの父親も時々腰を痛めてましたから、気をつけてくださいね」

「そうだな……」

　トントンと腰を叩きながら、火の具合を見る。魔法の火床は紅い胃袋に鉄をおさめ、消化するかのように炎と同じ色に鉄を熱していく。

　再び取り出したら、金床で叩いて延ばす。まだ目的の長さにも達してないので、魔力周りは二の次だ。とにかく今は長さ最優先で作業を進める。

　傍らでは、作業を見学するアンネの膝でルーシーが丸まっていて、ディアナが少し恨めしそうにしていた。ルーシーは人懐っこいからな……。

「あ、できればその子にも水をあげてやってください。このお皿に入れたら自分で飲みますから」

　ルーシーには毛皮がある分、鍛冶場では暑くなりやすい。専用の皿を用意して、そこで水分補給してもらおう。時折は様子を見て危なそうならすぐに家に引っ込んでもらうか。

　そんなことを考えながら、俺はずいぶん長くなった鉄の塊に鎚を振り下ろした。

## 製作の続きと夕食と

2019年11月8日

　鉄の塊をなんとか目的とする１７０センチくらいまで伸ばすことが出来た。

　長い片方は当然剣身になるわけだが、もう片方はさらに加工して柄になる。このあたりはショートソードやロングソードとそう違いはない。

　ただ、仕上がりの長さが１８０センチほどと、アンネの身長に近いサイズになるだけである。とはいっても、長い分作業の時間は余計にかかる。１人で完結できないし、勝手が色々と違ってくるからだ。

「そう言えば、最初の頃はリケとロングソード打ってたな」

「ああ、そうでしたね」

　いつ頃からだろうか、１人で作業するようになったのは。それだけリケの成長が早いということではある。俺がこっちに来てから、１年も過ぎていない。

　それなのに２人での作業になんとなく懐かしさすら感じる。それはリケも同じようで、感慨深そうな顔をしていた。

「今日はここまでだが、明日もよろしく頼むな」

「もちろんです！」

　俺の言葉に、リケは満面の笑みで応えた。

　その日の夕食も、家族＋アンネで賑やかにとる。ルーシーはと言うと、いくつか与えた肉を食べるとすぐに出せと騒いで、大きめの肉を一切れ咥えてクルルのいる小屋へ走っていった。お姉ちゃんに分けるつもりだろうか。

「あのワンちゃん、賢いですね」

　外に出たがったルーシーのために俺が開けた扉から、彼女が走っていった方向を見ながらアンネが言った。今日の午後の大半を一緒に過ごして、すっかり情が移ったらしい。

　実際には犬ではなく、この森に棲む狼の子供なのだが、そこは説明しなくてもいいだろう。

「そうでしょう！」

　いつの間にか横にきていたディアナが胸を張って自慢気にしている。ママとしては子供が褒められたら嬉しいよな。実のところ、俺も嬉しい。その賢さが魔物になっているところから来たとしても、嬉しいものは嬉しいのだ。

　扉を締めながら、俺はディアナに言った。

「明日雨が強かったら、２人とも小屋にいてもらうしかないかな」

「そうねぇ」

　ディアナは少し寂しそうにしているが、そこそこ広く作った小屋だ、２人でいれば退屈はしないだろう。飯はこっちから持っていってやればいい。

　俺たちは中断した夕食の続きをするべく、食卓に戻った。

「じゃあ、帝国――と言うか皇帝陛下はあまりヘレンの件を問題視はしてないと？」

「そうですね」

　この機会なので、帝国側の事情を少し深めに聞いてみることにした。はぐらかされたら当たり障りのない話だけで終わらせるつもりだったが、意外にもアンネはあっさり応じてくれた。

「革命については”後始末”も含めて片付いてますし、今更あれは茶番だったと１人が騒いだところで何ができるわけでもないですから。陛下もポーズとして追っ手を出しましたけど、この場所が分からずとも長くて１ヶ月もしたら打ち切ったはずですよ」

「何もしないと今度はそれも茶番だったのかと疑われますからね。実際ほとんど茶番になってしまったわけですが」

「ええ」

　アンネは頷いて、スープを口に運んだ。ちなみに３杯目である。口に合って何よりだ。

　口の中のスープをごくりと飲み込んで、アンネは続ける。

「どちらかと言うと、ヘレンさんに見つかった部隊長のほうにご立腹でした」

「ああ、でしょうね」

　言っちゃなんだが、単にヘマしただけだからな。その尻拭いで別の茶番を演じなければならなかった皇帝の心中を、若干だがお察しするところである。

「特に処分を下してはいませんが、出世は難しくなったでしょうね」

　ごく冷ややかにアンネは言った。

　もしかすると、アンネもいくらかは関わっていたのかも知れない。そう思い、背中を少し涼しくしながらこの日の夕食を終えた。

## 強い雨の降る朝に

2019年11月11日

　翌朝、この日の雨は一昨日よりも更に強かった。これでは水を汲みに行くのも一苦労だろう。

　なので、水汲みは諦めることにした。

「昨日のうちに行っておいて正解だったな」

　居間の椅子に座って俺はひとりごちた。この様子だと貯水枡にも結構な量溜まるのではないだろうか。そうなれば飲用はともかく、作業につかう水はそちらで賄える。

　廊下の方からゴトリと閂の外れる音がする。誰かが起きてきたんだろう。

「あれ、親方、おはようございます」

「リケか。おはよう」

「親方がこの時間に家にいるなんて珍しいですね」

「今日は水汲みに行かないからな。それでだ」

「ああ、なるほど」

　リケは窓の外をチラリと見て頷いた。雨音でおおよその察しはついただろうが、こうやって見てみるまでは実感しにくいものだ。

　俺も窓の外を見てみる。前の世界で「豪雨」と呼ぶほどではないが、「今日は雨が強いな」と思う程度には降っている。

「じゃ、ちょっと小屋の方行ってくるな」

「お気をつけて」

　リケにそう言うと、俺はルーシー達用にとってある干し肉の塊から今日食べさせる分を切り取って、背嚢に突っ込んだ。タオルもいくつかと、水を満たした水袋、木の板に深めの木皿２枚も入れておく。

　最後に頭から厚めの布を被る。ポンチョの代わりとしてはいささか頼りないが、無いよりはマシだろう。

　雨の中を小屋に向かって歩く。降り続いた雨のせいで足元がぬかるんで来ていて若干不安定だ。この状態から乾くからこの森の土は硬いんだろうか。そのあたりはまた調べないとな。

　コケてしまわないようにソロリソロリと歩いて、普段の倍近い時間（と言ってもすぐそこなので大した時間ではないが）をかけて、小屋にたどり着いた。

「クルルルル」

　小屋にたどり着いた俺をクルルが出迎えてくれる。ベロベロと派手に顔を舐め回された。

「よしよし、先に体を拭いてやるからな」

　持ってきた布の１枚を水袋の水で軽く湿らせて、クルルの体を拭いていく。小屋の床は高さをつけていたおかげで水が直接侵入はしてきていないが、降り続いた雨でじっとりとしていた。来年の雨季が始まるまでに小屋への渡り廊下と一緒に考えないといけないな。

　どのみち汚れてはしまうだろうが、それでも１日１回綺麗にしてやるのとそうでないのとではクルルの気持ちも違うだろう。

　クルルを綺麗にしたあと、さてルーシーに取り掛かるかと見てみる。

「うわぁ……」

「わんわん！」

　嬉しそうに尻尾を振っているルーシーだが、その体は泥だらけだった。クルルが呆れたように鼻から息を吐く。もしかすると本当に呆れているのかも知れないが。

　昨日、雨の中をそのまま走り回ったか、小屋に戻ってからゴロゴロしまくったのだろう。クルルも止めたかも知れないが、これくらいの子狼が言うことを聞くかどうか。

　俺はため息をついて、ルーシーを手招きした。パタパタと尻尾を振ったまま近づいてくる。

「ちょっと我慢しろよ」

　俺はそう言って、水袋の水をルーシーにかけて泥を洗い流した。布で拭くよりこっちのが手っ取り早い。水をかけられたルーシーは体をプルプルと震わせて水を払う。俺は乾いた布でその体を拭いてやった。

「まだ小さいけど、大きくなったら手狭かな？」

　ルーシーを拭いてやりながら、俺は小屋を見回した。まだルーシーが走り回るスペースと、クルルが横になるスペースは十分にある。

　だが、ルーシーが成長した時、どこまで大きくなるかは分からない。母親らしき狼は大型犬と言っていい大きさだったが、魔物化したルーシーが更に大きく、それこそ馬サイズのクルル並に大きくなる可能性だって無くはない。

　そこまで大きくなったら街へ連れて行くのも一苦労だろうなぁ。

　そんな俺の未来への心配をよそに、ルーシーは綺麗になった体で小屋の中を走り回る。それを見ながら、干し肉の塊を切り分けて木の板に置き、木皿に残っていた水袋の水を入れた。

「すまんが、今日はここでおとなしくしていてくれな。外がこんな様子だから、出ないように」

「クルルル」

「わん！」

　俺の言葉に、クルルとルーシーが返事をしてくれた。俺は２人の頭を撫でると、走って家の方に戻るのだった。

## お寝坊さん

2019年11月13日

　家に戻ると、ほとんど皆起きてきていた。普段どおりなら俺は水を汲みに行っている時間だ。帰ってきたら皆が顔を洗ったりしていて、いつ頃起きてきているのかはよく知らなかったが、結構早くには起きているらしい。

　”ほとんど”と言ったのは、１人起きてきていないからである。アンネだ。

「扉に閂をかけられるとは言え、ある意味敵地のど真ん中で寝ているのにこの余裕は、お姫様なのにと言うべきか、それともお姫様だからと言うべきか、どっちだろうな」

「アンネさん個人の性格だと思うわよ。お姫様なのは第七皇女だとそこまでは意識しないんじゃないかしら。兄さんが三男で街の衛兵隊に回されたみたいに」

「そう言えばなんで下っ端の衛兵になってたんだ？　隊長とかでなく」

「お父様曰くは”ゆくゆくは代官として街に赴任し、兄の執政を助けよ。そのために街の様子を隅々まで知るのだ。隊長では表に出ないことも多かろう。一介の兵として赴け”だそうよ」

「なるほどね」

　マリウスが街の入口で立ち番をしている姿が思い起こされるが、実際には街中や街道の巡視も行っている。用事がないので立ち寄ったことはないが、少々危ない地域も回ったりしていたことだろう。

　そう言うところを知った方がいいのかどうかは、前の世界も含めて執政に関わったことのない俺にはなんとも判断しにくいところではあるが、少なくともマリウスの親父さん（つまりはディアナの親父さんでもあるが）は有効だと考えたのだ。

「もし親父さんの思い通りにことが進んだとして、代官の人はどうするつもりだったんだ？」

「お父様と一緒に引退だと思うわよ。隠居先も見繕ってたみたい。でも、あんな事になって後任が見つかるまでは今のままじゃないかしらね」

　あんな事、と言うのはマリウスが今の立場になり、ディアナがうちに来るきっかけになった事件のことだ。サーミャとリケはともかく、他の２人はよく知らない話だし詳しくはおいておくが。

　とりあえずアンネは寝かせておいて、朝の準備を始めることにしようと決め、各々自分の準備に取り掛かった。

　アンネが起きてきたのは、朝飯の準備も半ばになり、そろそろ起こさねばならんかと思い始めた頃である。

「みなひゃん……おふぁよぅござひましゅ……」

　フラフラと客室からアンネが出てきた。元々ボサボサとした感じの髪の毛だが、寝癖でより一層ボサボサしている。タレ目も眠気なのかタレ目なのかよく分からない状況になっていた。

「おはようございます。そこのたらいに水を貯めてありますので、洗顔などはそこでお願いしますね。洗濯物があったら出しておいてください」

「ふぁい……ありがとうございまひゅ……」

　アンネはたらいの側にひざまずくと、土下座するような勢いで顔を突っ込んだ。それを見て全員がぎょっとする。数秒経って、アンネは顔を起こした。

「ぷぁっ！ひゃーっ！目が覚めますね！」

　ついさっきとは打って変わってハッキリした声と目つきになるアンネ。再び全員が驚いた顔になった。俺は前の世界で若干の覚えがあるタイプの人間ではあるが、こっちの世界だと相当珍しいだろう。これも王室育ちの影響だろうかね。

　俺はリケにタオルを渡してやるように言うと、朝食の準備の続きに取り掛かった。

## 両手剣製作、２日目

2019年11月15日

「それじゃあ、両手剣は今日できそうなんですね？」

「ええ」

　朝食に用意したスープを口に運びながらのアンネの言葉に、俺は頷いた。

「ここからの作業はそう多くないですからね。ただ、今日一日かかりますんで、今日のご帰還は無理かと思います。なにより、この雨ですし」

「そうですねぇ」

　のんびりとアンネは答える。「目が覚めた」とは言っていたが、本調子までには時間がかかるタイプと見た。

「晴れていれば、森の中をご案内差し上げるところですが、この様子なのでそれもなしです」

「それは全然構いませんよ。私、体を動かすのは苦手なんです」

　思わず「嘘だ！」と叫びそうになるが、そこはグッとこらえた。えらいぞ、俺。サーミャが鼻をヒクヒクさせているのは同じことを思ったからだろう。

　まぁ、実際戦闘能力よりは頭の回転の早さを期待して、ここに送り込まれたんだろうしな。

「それでは、アンネさんには今日も見学していただくということで」

「ええ。よろしくお願いします」

　俺とリケで両手剣、他のメンツには今日も板金を作ってもらう。アンネは見学で、クルルとルーシーは小屋でお留守番だ。

　鍛冶場にある神棚に皆で拝礼する。アンネには「別にやってもやらなくても平気ですよ」と言っておいたが、見様見真似で俺たちと一緒にやっていた。

「こういうの、心が引き締まりますね」

　と言っていたが、腹がくちくなっているからだろう、特徴的なタレ目がややとろんとしている。この後は見学だけだし、ルーシーもこっちにはいないので別に部屋で寝ててくれてもいいんだが。

　俺は軽くため息をついて、作業の準備に取り掛かった。

　前日までで目的の長さまでは延ばすことが出来た両手剣だが、形状的にはまだ普通の鉄板だ。ここから叩いて剣の形を作っていかねばならない。

　一度に全体は加熱できないし、したとしてもあまり意味がない。部分ごとに加熱したときの問題は熱の入り方にバラツキがでないかだが、そこは俺なので問題は起きないだろう。

　部分ごとに加熱して、俺とリケで息を合わせて叩いていく。最初は剣身になる側からで、断面が六角形に近い形状を目指す。

　両手剣が全てそうではないが、こいつに関しては”重さ”の武器にするため、刃の部分は多く取らずに、左右合わせて1/4程度の幅だけにしておいた。

　逆の柄になる方はストレートな円柱状に加工していく。反対側が重いので取り回しがしにくいが、なんとか加熱と加工を行うことが出来た。

「ちょっと失礼」

　アンネに両手で握りこぶしを作ってもらい、その長さで日本刀で言う柄頭を接合する。ピン留めにしないのは、負荷が大きそうだからだ。

　負荷が大きいとそれだけ痛むのも早くなる。ちょっとそれは避けたいところだ。

　熱した部品と、柄の端を小さめの鎚で丁寧に叩いていく。このときはつなぐことを優先して、魔力云々は気にしない。

　こうして、鍔のない両手剣の姿が出来上がった。時間的には昼をちょっと回ったあたりだ。

「姿はこんなもんか。それじゃあメシにして、続きで仕上げちまおう」

「はい！」

　俺がリケにそう声をかけると、彼女は昼食の時間であることを皆に告げて回った。

## 両手剣の完成

2019年11月18日

　昼飯は特に当たり障りのない話だけして終えた。下手に地雷を踏んでヤバい空気のまま午後の作業をしたくないからな。寝て起きれば忘れられるかもしれない晩飯とは事情が違う。前の世界で身につけた処世術的なやつでもある。

　昼飯前まででおおよその形は完成した。後は仕上げていくわけだが、うちの製品で大事なのは魔力がどれくらいこもっているかだ。

　アンネは家名持ち……というか王室の人間なので、大なり小なり魔法の心得がある可能性が非常に高い。となれば製品にこもっている魔力を感知できる可能性もあるわけだ。

　そうでないなら、適当なところで切り上げて「はいコレ」と引き渡すことも選択肢に入っただろうが、ヘレンのショートソードを鑑定でもされていたらバレるだろうし、危ない橋を渡る必要もないので、ここから魔力を込める作業に入る。

　この作業はリケでもある程度は可能だが、それ以上は俺がやるしかない。なので、「細かい修正を入れる」として、昼飯の間に冷えた剣身を鎚で叩いていく。

　切れ味よりも耐久性を重視するように鎚で魔力を剣身にこめていく。長い剣身に魔力をこめるのには時間がかかったが、鋼にこめられる限界までこめることが出来た。

　その後はひたすらヤスリで凹凸をなくしていく。魔力のこもった剣身を削る作業なので、これも俺が担当である。砥石で刃をつけることはしない。こいつなら重さと硬さでたいていのものはぶち割れるだろうし。

　リケにはその間、鍔になる部品を作ってもらうことにした。コイツは後からピン留めだ。遠心力の関係で柄頭には負荷がかかりそうだが、こちらはそうでもなかろうと言う判断である。後は目につくところなので変えるなら自分で変えてね、と言う意味もある。

　ヤスリで一通り綺麗にしたら、焼入れをするのだが、長いので通常の水槽に沈める方式ではなく、大量に水をかけ続けると言う方式にした。

　両手剣を熱している間に、皆で水槽の水をたらいやらに汲んでおき、その水を必死でかけ続けるという方式である。「はじめ」と「やめ」の号令のタイミングや加熱する範囲の見極めが重要であるが、そこも俺ならなんとかなる。

「よーし、じゃあいくぞ」

「はーい！」

　俺は熱した両手剣を空にした水槽の上に持ってきた。皆は手に手に水をかけるための何かを持って待ち構えている。

「……はじめ！」

　俺の号令で皆が水をかける。ジュウという音と、もうもうと立ち昇る水蒸気が鍛冶場を包む。一気に暑さが襲いかかってくるが、これに負けるわけにはいかない。

　頃合いをみて、俺は次の号令をかけた。

「やめ！」

　皆がピタリと手を止める。俺はじっと目を凝らして剣身の様子を見た。どうやら大丈夫そうだ。

「よし、大丈夫だな」

　俺の言葉に皆がはーっと息を吐く。ここまで集中しての作業は気疲れもするだろう。今日の晩飯はアンネのお別れ会も兼ねて豪華にするか。

「まだまだ作業はあるぞー」

　俺の言葉に肩を落としながらも、皆その目にはやる気が漲っていた。

　その作業を繰り返し、体内時計ではあと１時間かそこらで日が沈む頃、焼入れの作業が完了した。

　その後、皆が見守る中、リケが作った鍔を俺が取り付け、最後に「太った猫の姿」の刻印を入れて、ものとしては完成である。

「よし、これで完成だ！」

　わぁっと皆が歓声をあげた。こうやって完全に力を合わせての作業は初めてだったから、新鮮な感じだな。

「皆さん仲良しなんですねぇ」

　やはりどこかのんびりと、しかし少し寂しそうに言うアンネの言葉に、俺はこう返す。

「ええ、家族ですから」

## 両手剣の試し斬り

2019年11月20日

　皆に鍛冶場の後始末をしてもらっている間に、柄に皮を巻きつけて滑り止めにした。これで真の完成である。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

　俺はアンネに両手剣を渡した。それを受け取った彼女は、商談スペースの方へ移動していく。あっちの方がちょっと広いからな。

　アンネは両手剣をぐっと持ち上げ上段に構えた後、振り下ろした。ブゥンと空気ごと割れるかのような音がする。

　次は横薙ぎだ。やはり重い音がする。あれを剣で受け止めようとしたら、そのまま剣ごと叩き切られそうにしか思えない。

　あれを縦横に振り回せるだけでも、筋力が十二分にあることがわかる。種族の特性なのだろうか。

「昔のディアナみたいだ」

　いつの間にか俺のすぐ隣に来ていたヘレンがボソリと言った。

「綺麗だけど、実戦向きでないってことか？」

　小声で言った俺の言葉にヘレンが頷く。稽古はしてても実戦経験は積んでないってことか。

「それなら俺で対処できるな」

「舐めてると痛い目に遭うぞ」

「分かってるよ」

　筋力に任せてあの両手剣を振り回されたら危ないのには違いないからな。心配してくれているのはよく分かったので、ヘレンの背中をポンポンと叩いて感謝を示す。

　感謝が伝わったのか、ヘレンは少しだけ後ろに下がった。

「こいつを使ってみてください」

　俺は適当な丸太に一般モデルのロングソードを突き刺した的を用意して、アンネに声をかける。

「いいんですか？」

「ええ。壊れたら打ち直します」

　うちの自慢の品の一つではあるが、こういう役の立ち方もしてもらっても良いだろう。備品にしても良いし。

「それでは」

　アンネは両手剣をグッと横薙ぎ出来るように構えた。そのまま力を溜めるようにじっとしていたかと思うと、

「ハッ！」

　気合い一閃、真一文字に鈍い銀色の光が走る。キィンと甲高い音がして、両手剣はそのまま真横に振り抜かれた。まるで何にも当たらなかったかのように。

　だが、実際にはちゃんと的に中った事は明白である。丸太に突き刺したロングソードは、ちょうどその真ん中から上が姿を消していたからだ。

　一瞬だけ間を空けて、カランと音がする。少し離れたところに、ロングソードの残り半分が転がっていた。

「お見事」

　俺は拍手してアンネの剣の腕を褒めた。ヘレンの言うとおり、舐めていたら俺の上半身もああなりかねないな……。

「いえいえ、これが凄いんですよ。私の腕前はとても……」

　両手剣を手に謙遜するアンネ。

「それにしても、本当に凄いですね」

「それが仕事ですから」

「いえ……まぁ、そういうことにしておきましょう」

　彼女はそう言って含みのある笑みを浮かべた。やはり、ただの事情説明と注文だけじゃないんだろうな……。

　とりあえずそこには触れないでおく。出来ればこのまま触れずに帰って欲しいところだが、はてさて、俺の希望するとおりになるだろうか。

　そんな不安も抱えながら、俺は夕食の準備をするべく、鍛冶場を後にした。

## 小さな宴

2019年11月22日

「それじゃ依頼品の完成を祝して」

『乾杯！』

　ワイン（リケだけ火酒）を満たした木のカップを掲げる。料理の方は取ってあった鹿と猪の塩漬け肉の”いいとこ”を、それぞれ香草焼きと醤油ベースのタレを作って焼いたものである。

　パンは時間があれば発酵種を使いたかったが、無発酵パンにしておいた。スープはいつものやつ……というか昼の残りにちょっと肉を追加したものである。庶民の食事ならこれでも十分豪華だ。

「こちらの茶色いソースの方はちょっと癖があるので、口に合わないようでしたら無理なさらずにこっちの香草焼きをどうぞ」

「はい。ありがとうございます」

　うちの家族は平気だったが、醤油は発酵食品なので独特の匂いはあるだろう。それが口に合わない人はいても仕方ない。

　俺の言葉に頷いたあと、アンネは猪肉を口に運んだ。思わずその様子をじっと見つめてしまう。肉はもぐもぐと咀嚼され、コクリと飲み込まれていった。

　俺は若干緊張して聞いた。

「どうです？」

「美味しいです！！」

　アンネはほぼ叫ばんばかりの勢いで言う。びっくりはしたが、とりあえず口に合ったのならよかった。

「あ、すみません……」

「いえいえ、そう言っていただけて嬉しいです」

　俺は出来る限りの笑顔で言ったが、サーミャとヘレンは今にも吹き出しそうだし、リケとディアナはなんだか神妙な顔だ。リディも「ええ……」と言う声が聞こえてきそうな顔をしている。

　いや、俺だって愛想笑いくらいはできるんだぞ？前の世界でもほとんどやらなかったから、やたらとぎこちないだけで。

「使っているのはなんです？」

「”醤油”と言って、大豆と麦を発酵させた北方の調味料です。それに色々合わせてあるんですよ」

「へぇ、北方の」

　スッとアンネの目が細められた。名前から北方出身であろうことは予想はしていて、これで確定したと思っているのだろう。

　そもそもがこの世界の人間ではない、ってことは予想できようはずもないしな。

「懇意にしている商人が入手してくれましてね」

　そこには気づかなかったふりをしながら、俺は朗らかに答える。この辺は腹の探りあいもある。

「帝国側にも回していただけるなら、お願いしたいくらいですね」

「それとなく話はしておきますよ」

　その後はあまり当たり障りのない話で盛り上がった。ディアナとアンネで王国と帝国の宮廷の様子を語り合っていたのが一番印象的である。

　伯爵令嬢ともなるとそれなりに宮廷にいく機会も多かったようだし、皇女となれば言わずもがなだ。俺たちもその話に聞き入っていた。

　ささやかながら楽しい宴もやがて終わり、皆で後片付けをしたら後は寝るだけだ。

「それじゃ、明日雨がマシになっていたら、森の入口までお送りします」

「ええ。お願いしますね」

　俺とアンネ、家族の皆は互いに「おやすみなさい」を言ってそれぞれの部屋に戻る。

　――そしてその夜半、俺の部屋のドアがノックされた。

## アンネの話

2019年11月25日

　ノックされたドア。今までうちの家族がこんな時間に俺の部屋を訪れたことはない。

　可能性として今日初めて来たということも考えられなくはないが、その可能性は低いだろう。

　つまり、来たのはうちの家族以外、ということになる。となれば答えは一つだ。

「ちょっと待ってください」

　俺はそう言うと、寝間着をパッと着替えて、念のため腰の後ろにナイフを差して閂を外す。正面からではなく、扉の脇からそっとだ。

　とりあえず向こうからバンと扉が開けられることは無かったので、自分で扉を開けると予想に違わずアンネが立っていた。

　大きな体が暗闇の中に佇んでいる。夜間にトイレに行きたくなることもあるだろうと、居間でつけっぱなしにしている魔法のランタンが背後から体を照らしているので、逆光になって表情はよく分からない。

「どうしました？」

　俺は他の家族が起きないよう、小声で応対する。すると、やはり小声で答えが返ってきた。

「少しお話しがしたくて……」

　家族なら自室に入れるところだが、客を自室に入れるのは憚られる。……色んな意味のあらぬ疑いを後からかけられても至極面倒だし。

「それじゃ、あちらで」

　俺は居間の方へ促した。殺気などは感じないが、アンネを先に立たせることは忘れない。結局何事もなく、食卓の椅子にアンネを座らせると、俺はかまどに火を入れる。

　こう言うとき魔法のかまどだとすぐに火を入れられるのはありがたい。小鍋に水を張って湯が沸くのを待つ間、話を促す。

「それで、話とは？」

　アンネは俺の顔を見たり、よそを向いたりして逡巡していたが、やがて口を開いた。

「……帝国に来ませんか？」

　沸き始めた湯の静かな音だけが響く。

「それはできません」

　俺は静かにそう答えた。これは別に王国派だから、とかではない。この森の魔力がなければ、俺の鍛冶屋生活はたちいかない。ある程度はカバーできるかも知れないが、そもそもこめる魔力が無ければ特注モデルの生産は無理だ。

　俺の返事に、アンネはふぅとため息をつく。

「まぁ、そうだろうとは思ってました」

　再び沈黙が場を支配して、沸いた湯がコポコポと音を立てている。俺はかまどの火を落として２つのカップに湯を注ぎ、ほんの少しだけ火酒を入れる。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

　俺も食卓の椅子に座った。カップのごくごく薄いお湯割りを口に含む。アンネも同じようにして、飲み込む音が聞こえたかと思うくらいの静寂。

　突然、クスリとアンネが笑った。

「どうかしました？」

「いえ、エイゾウさんのことではないです」

　アンネは再びカップに口をつけた。

「ついさっきまで、来てくれたら良いな、と思ってたんです。でも、断られると、どこかそれに安心している自分がいました」

　俺はそれに返事はしない。

「実はですね。陛下……父上からは『力づくでも体で籠絡してでもいいから連れてこい』って言われていたんです」

「ゲホッ！？」

　むせた。いやいや、皇位継承順位が低いとは言え皇女だぞ！？そう言う思惑がなけりゃ女性を遣わせたりはしないってことなんだろうが、それにしてもである。

「い、いやそれは」

「でも、できませんでした。部屋に行く前に怖くなっちゃって」

「そりゃそうです。そういうことは大事にしないと……」

　アンネが何歳なのかは知らないが、何歳だろうとそういうものを無碍にしてはいけない、と俺は思っている。たとえこの世界、この時代の貴族の婦女子が”そういうもの”であったとしてもだ。

「優しいんですね、エイゾウさんは」

「いえ、そんなことはないですよ」

　基本的に家族以外にはそれなりの対応しかしていない。カミロやマリウスは家族ではないが、身内同然くらいの認識にはなりつつあるし、サンドロのおやっさんやフレデリカ嬢もそこに近い状態ではあるが、どこかに打算はある。

　それでも、多少の損は覚悟で助けるかも知れない。しかし、侯爵がピンチになっても俺は余裕で見捨てるだろうな。

　しかし、力づくか。そっちを期待しての人選だとしたら、納得できないこともないな。世間的には美貌と武力の双方を兼ねる人間はそうそういないだろうが、不思議とうちには複数名該当者がいるからな……。

「とは言え、このまま帰ったんじゃお立場がマズいでしょう？」

「ええ、まぁ」

　俺の言葉にアンネは素直に頷く。

「それじゃ一筆したためますかね」

「エイゾウさんは字も書けるんですか？……って、魔法が使えて字が書けないってことはないですね」

　少し驚いたようにアンネは言ったが、すぐに自分で納得してしまう。まぁ、魔法が使えると言うことはそれなりの教育を受けてきた証だし、その立場の人間が読み書きできないはずがないのだ。少なくともこの世界では。

　俺は自室に紙と筆記具を取りに席を立った。

## 皇帝陛下への手紙

2019年11月27日

　自室から筆記用具を持って居間に戻ってきた俺は紙を広げた。薄い植物繊維の紙だが、詳しい材質は知らない。端が断ち切られておらず、どこか荒々しい感じがした。

「さて、どう書きますかね」

「我々からの要求は『必要以上に王国に肩入れしないこと』が最低ですね」

「肩入れしていると思われるのは私としても不本意ですので、それ自体には異論ないですが、友人たちに累が及ぶようであればその限りではないですよ」

「それで構わないと思います」

　帝国としては「王国に特注モデルと同じ品質のものをバンバン供給してやるぞ」ってならなければ、当面の脅威は回避できている、ということなんだろう。

　同意が得られたので、その旨を紙に書き付けていく。

「字、お上手なんですね」

「そうですか？」

「ええ」

　この世界で文書なんてものは、ほとんど目にしてないからなぁ。看板なんかはよく見るが、文字が入っていないものも多い。なのでどれくらい綺麗な字を書けているのかはよくわからないのだ。

「魔法が使えて、綺麗な字が書ける。これだけの教育を受けていて、素性が何一つ分からないのは不思議ですね」

　アンネのタレ目がスッと細められる。タレ目なのに獲物を狙う猛禽類がその獲物の位置を確認しているかのようにも思えた。

「そこは色々と事情がありましてね。そんなのがほぼ隠遁生活で鍛冶屋なんてしている時点である程度ご想像はなさってるでしょうが」

「ええ、それはまぁそうですけど」

　相当に高度な教育を受けている、と言うことはそれなりの家格の出であることが想定できる。それならば普通は隠そうとしても隠しきれないものだ。たとえ１０人兄弟の末っ子であったとしても。

　ヘレンのように生まれてすぐどこか庶民の家にでも出されたなら分からなくなるかもしれないが、魔法が使えるほどの教育を受けている時点で、ある程度の年齢までは貴族の家の子として育っているはずなのである。

　貴族の家から貴族の家に出されたとて、出された先の家がどこかはわかる。そもそもこの世界の生まれでない、なんて想定は神様でもなければできはすまい。

　その辺を探られて真実を告げても全く意味がないので、

「とにかく続きを仕上げちゃいましょう。えーと、招聘のお断りですけど、皇帝陛下は先にお礼なんかを書いておいたほうが良いタイプの方ですかね」

「いえ、父上はあんまり気にしないと思いますよ。美辞麗句のたぐいを好まない方なので」

「なるほど」

　じゃあ、シンプルに「腕を買ってくれるのは良いけど、友人もこっちにいるし、行くのは無理っす」ってのを、失礼にならない程度に修辞して書くか。

「あとは……」

　ペンの尻を顎につけて考える。外交文書などではなく、あくまで個人の私信ではあるのだが、これで言質にはなるからな。

「ああ、そうだ」

　俺は最後に「もしうちに直接お一人でお越しになるなら、その時は条件に合致するのでご注文の品を作りますよ」と（無論、失礼にあたらないような言葉でだが）書いておいた。

「ふう、内容はこれくらいですかね」

　俺はペンを食卓に置いて手紙を見返した。書き漏らしや余計なことを書いてしまっていないかのチェックだ。

　その最中、ふとあることに気がついた。

「よくよく考えたら、一介の鍛冶屋が帝国の皇帝陛下に手紙を皇女に託して送りつけるって相当ヤバいのでは……？」

「大丈夫ですよ。あなたを籠絡できていたら別でしたが、これも目的の１つですからね。今回、私は基本的には伝令です」

「それでは」

　俺はインクが乾燥するのを待ってから、くるくると紙を巻いてアンネさんに渡した。手紙なので宛名と自分の名前は書いたが、その他の証明するようなものは一切入れていない。

　もしこの手紙で何かとんでもない問題があった時に、お互いにしらばっくれる事ができるからだ。そこは互いに信用するしかない。

「ありがとうございます」

　アンネはあの目をスッと細めるのとは違い、普通にニッコリと笑って、俺の手紙を受け取った。

## 皇女様のお帰り

2019年11月29日

　俺から手紙を受け取ったアンネは客間へ引っ込んでいった。

「俺も寝るか……」

　それなりに時間は取ってしまったので、今から寝ても大して眠れないかも知れない。

　しかし、「寝られる時には１時間でも寝ておけ」というのが、前の世界で俺の得た教訓の１つである。俺は自室の扉を開けようとした。

　扉に手をかけた俺は、気配を感じて一旦手を止める。家族たちの部屋に続く廊下。そこに人影がある。

「すまん、起こしちゃったか？」

「いえ」

　小さな声でそう答えると、彼女はそっとこちらに近づいてきた。

「もしかして聞いてたか？」

「はい」

　彼女は言葉少なに答える。彼女はどう思っただろう。聞くべきか迷っていると、答えは彼女の方から出てきた。

「エイゾウさんは、ここを離れる気がないのですね」

「そうだな。せっかく流れ着いた家だしなぁ」

　か細い声。彼女の特徴ではある。あまり賑やかに話す方ではないのも相まって、普段はあまり表に出てくることはないが、実のところ彼女も大人しいわけではない。

「もし私が、一緒にエルフの森で暮らしましょうと言っても？」

「……そうだな。それはとても魅力的な提案だけどな」

「本当に？」

「それもいいかもなと考えるくらいにはな」

　俺が少し困った顔でそう言うと、彼女――リディは俺の胸に手を当てた。そこだけ手の形に切り取ったかのように温かい。

「ふふ、少し意地悪をしました。私にとってもここは家ですし、皆さんは家族なので。おやすみなさい」

　ふんわりと微笑むと、彼女は自分の部屋へ戻っていった。俺はガシガシと頭をかいて、自室の扉に手をかける。そして、ふと気づく。

「もしかして、なんかあったときのために控えててくれたのか？」

　俺はひとりごちたが、もちろん答えはない。雨のせいか、森の匂いが鼻をくすぐったような気がした。

　翌朝、雨の様子を伺うと今日はかなりマシになっている。前の世界で言えば「傘をさすべきかどうか少し迷うくらい」だ。

　これならアンネを帰すのにも不都合はないだろう。水汲みも行けそうだ。

　クルルとルーシーのいる小屋へ行くと、２人とも大はしゃぎだった。昨日はかまってやれなかったからなぁ。雨の中にはなるけど、アンネのお見送りには２人共連れて行くか。

　一緒に湖へ行って水を汲んで戻ってくる。雨が降ってないわけではないので、多少は濡れたが、一昨日と比べれば全然マシだ。軽く拭いて「また後でな」と言うと、

「クルルルルルル」

「わんわん！」

　とやたらご機嫌だった。うちの娘さんたちは元気だな……。

　朝食のとき、アンネに見送る話をする。

「それじゃ、朝食を終えたら森の入口まで案内しますので」

「はい。お願いします」

「みんなも行くか？」

　聞いてみると、全員着いてくるという話である。じゃ、工房一家総出だな。

　朝食を終えて、全員雨のときの旅装――といっても街に行くときの格好に外套を余分に着込むくらいだが――をして、表に出る。

　アンネは背中にあのデカい両手剣を背負っていた。俺たちもそれぞれに武器は携えている。雨だと狼たちなんかは引っ込んでいるはずだが、こっちに来てすぐくらいの頃の大黒熊みたいに、うろつくやつがいないわけでもないからな。

　表にはクルルとルーシーが待っていて、はしゃぎまわるルーシーをディアナがなだめながら、全員で一緒に連れ立って歩きはじめた。

## 森を抜ける

2019年12月2日

　今日の雨は弱く、森の中に入るとかなりが遮られているようで、思ったほどは当たってこない。

　ただ、風に吹かれたり、重みに耐えかねて落ちてくる雨粒もある。それらが時外套に当たって、ボツボツと重い音を立てていた。

「クルルル」

　それらは俺たちと比べて遥かに体の大きなクルルにも当たって、それがくすぐったいのか、当たるたびに声を上げていた。前の世界のアニメ映画で似た感じのがあったな。

　ルーシーはと言うと、相当にグズったのか、ディアナが諦めて走り回るに任せている。地面のぬかるみもお構いなしだから、元の毛色がどうだったのか分からないくらい泥まみれになっていた。帰ったらしっかり洗ってやらないとな……。

「そう言えば、ここへはどうやって来たんです？　場所を知っている人間はごくごく限られるはずですが」

　歩きながら、俺はアンネにそう聞いてみた。調査したのか、カミロに交換条件でも持ちかけてみたのか。

「それは……秘密です」

　アンネの答えは想像通りと言えば想像通りのものだった。まぁ、教えて貰えるとも思ってはいなかったが。

　帝国の調査能力にせよ、交渉能力にせよ、それらをわざわざこちらに教える必要がアンネには無いし。

　俺は小さく鼻を鳴らして、ちょっとばかりの不快感と納得を示した。

　時々雨だれが落ちてくる緑の屋根（屋根にしては雨漏りが随分とひどいが）を見上げながら、

「今日はマシだとは言っても、こう雨が続くと狼達もうんざりしてそうだ」

　と俺が言うと、サーミャが答えた。

「かもな。狼だけじゃなくて、鹿もうんざりしてんのかも。長雨の後の晴れた日はよくボーッと突っ立ってる」

「注意力が散漫になってるから狩りやすい？」

「そうだな。普段だと気づかれるところでも気づかれない。だからアタシらはこの時期に狩りを学ぶんだよ」

「なるほど」

　鹿は警戒心が強い上に嗅覚に優れる。聴覚や視力は人並みくらいらしいのだが、逆に言えば人並みに警戒は出来るということでもある。３日追って１頭仕留められれば、十分に熟達した猟師と言えるそうだ。１日のうちに１頭仕留められるのは、５年ずっとこの森で暮らしてきたサーミャの知識と経験によるところがかなり大きい。

　ただ、俺達にとって狩りやすいということは、狼や熊たちにとっても同じ話だろう。この時期に狼が子を産むのと関連はありそうだ。

　こうして「雨季の後の動物たち」の話をしながら、森の中をのんびり歩いていった。

　もうすぐで森の入口だな、と思ったとき、アンネが切り出した。

「あの……この背中のものの代金なのですが……」

「……ああ」

　すっかり忘れてた。家族のみんなも言ってくれていいのに。

「言い値で良い、ということでしたね？」

「はい。うちはそういうふうになってます」

「それでは」

　アンネはゴソゴソと自分の服の内側を探って、革袋を取り出した。そこそこの大きさがあって重そうだから、金だとしたら結構な額が入っているはずだ。もしかすると、金での買収も視野に入れていたのかも知れない。

　俺が「金は後払い。お代は言い値で結構」とか言ったもんだから、「こいつは金に興味がない」と判断したんだろう。結果的にその判断”も”正しいのだが。

「それでは、これで」

　アンネが革袋から何枚かの金貨を取り出して渡してきた。さすがに革袋まるまるではないらしい。俺はその金貨を受け取る。何度か受け取ったことがある金貨とは何かと違う面が多い。

　俺が思わずしげしげと眺めていると、

「帝国大金貨です。それ１枚で王国金貨５枚分くらいにはなるかと」

　アンネが言う通り大きさが大きいし、金の純度も違うのか重い。それが１０枚ほどあるということは、金貨５０枚前後になる。大きいだけで作りは単純だし、これだけ貰えれば十分に過ぎる。

「なるほど。まいどあり」

　俺はお定まりの台詞を吐いて、金貨を懐にしまい込んだ。王国金貨への両替は……そのうちカミロに頼むとしよう。と言うか、やつ以外に任せたら怪しいことこの上ないしな。

「そろそろですね」

　小さな雨音にかき消されるかどうか、と言う大きさのリディの声を聞いて、俺は森の外を見やった。

## 刺客

2019年12月4日

　ゆっくりと森の入口に近づく。ずっと”入口”と呼んではいるが、単に周囲と比べてそこがちょっと開けた感じになっているだけである。

「ここまで戻れば迎えが……」

　アンネがそう言ったとき、サーミャがサッと前に出た。

「血の臭いがする」

　あまり大きくはないが、しかしハッキリとした声でサーミャは言った。

　俺の鼻には何も感じない。雨も降っているし、あったとしてかなり流れているはずだが、サーミャの鼻には届いたらしい。

　俺が戸惑っていると、ヘレンがショートソードを抜いた。背中と腰の両方だ。

「いるな」

「ああ」

　サーミャとヘレンがそう言い合って頷く。ヘレンも何かを感じたということは、サーミャの勘違いではないらしい。サーミャは弓を準備する。

　俺もそろりと”薄氷”を抜いた。３振の剣と刀が、薄暗い空間を青く照らしている。今更だが夜戦だと不利かも知れんなこれ。

　俺たちの動きを見て、ディアナも剣を抜き、リディも弓を準備した。リケはクルルとルーシーを少し後ろに下げている。あまり離れすぎるとそこを狙われかねないので、大きくは離れない。

「いるんだろ！？出てこい！出てこなきゃコイツの弓でぶち抜くぞ！！！」

　耳鳴りがしそうなほどの大声でヘレンが叫んだ。脅すようにサーミャが弓を引き絞る。いつの間にか阿吽の呼吸で動けるようになっていて、緊迫した状況をよそに、俺はちょっとした感動を覚えていた。

　出ていくかどうかの逡巡があったのだろう、少しの間があいた。

　その後、全身を薄緑色の装束に包んだ人影が５つほど現れた。覆面に覆われていて顔はよく見えない。全身を見た感じ、忍者のようでもある。これですんなり全員出てきたとも思えないので、恐らくあと２～３人程度は伏せてあると思ったほうがいいだろう。

「一応聞いておきますが、アレはお迎えの方ですか？」

　お迎えだったとしても１００％あの世へのお迎えだろうな、とは思いつつ俺はアンネに聞いた。返事はブンブンと横に振られた首である。

「おとなしく引き渡せば、お前たちに手は出さない」

　緑の１人が言った。男の声だ。王国と帝国、どっち側の人間かは分からないが、用があるのはアンネにだけらしい。

「そう言われて、大事なお客さんを俺たちが素直に渡すと思うか？」

　常識的に考えればアンネは客なだけで、俺たちがかばいだてして厄介事を抱え込む必要はまったくない。

　だが、それでもだ。いかに面倒くさかろうとも、一度知り合った相手を怪しいおっさん達にそうですか、と引き渡すほど薄情でもないつもりである。

　俺の回答を聞いて、男たちは身構えた。手には刃渡りがショートソードとナイフの中間くらいの刃物が握られている。刃からしたたり落ちている液体が毒なのか雨なのかは分からない。

　喧嘩を売ったまでは良かったが、これからどうするべきか。俺は職人であって商人ではないから、売ったものをどうするかまでは専門外だ。物品販売のチートも貰っておけばよかったかな。

　とは言え、「やっぱやーめた」というわけにもいくまい。

「ディアナとリディとリケはアンネさんとクルルたちを連れて急いで家に戻れ。ここは俺とサーミャ、ヘレンでなんとかする。もし誰か１人しか戻らない時は……すぐに家を出て都へ行くんだ」

　俺はそう指示を出した。家族たちに逡巡が見える。しかし、「急げ！今すぐだ！」と言うと、意を決したように頷いて、移動を始めた。

　緑の男（もしかすると女もいるかも知れないが）たちが５人、後を追おうとするが俺たちは動かない。彼らは再び武器を構えた。

　さて、なんとか切り抜けますかね……。

## 戦い

2019年12月6日

　シトシトだった雨がほんの少しだが勢いを増した。アンネはどのみち今日中に帝国へ帰るのは難しかったかも知れないな。

「５対３か。まぁ５とも限らんが」

「余裕だろ？」

　俺の言葉にヘレンが軽口を叩く。相手に動揺はない。カマをかけて本当の人数の手がかりでもつかめればと思ったが、そこまでマヌケではないらしい。

「お前はそうかも知れんが、俺は素人だぞ」

「よく言うぜ」

　ヘレンは苦笑するが、実際に戦闘そのものについては素人だからなぁ……。

　男たちはジリジリと間合いを詰めてきた。サーミャはそれに合わせて少し下がる。得物の特性もあるが、逃げたみんなの方を追うやつがいたら、そっちの対応をして欲しいしな。

　包囲が俺の刀が届くか届かないかくらいのところで止まる。

「最後の警告だ。そこを通せ」

「失礼だな。そう言われて、はい分かりましたと通すほどのバカに見えたのか？」

　男はそれ以上の言葉を発しなかった。その代わり、俺の質問に対する答えだと言わんばかりに斬り込んできた。

「おっと」

　斬り込んできたその手を、俺は構えていた刀で斬りつけようとする。相手は手にしていた短剣（一般的なやつよりも少し短いが）で受けようとするが、”薄氷”はいともたやすくそれを斬り飛ばした。

　文字通りの返す刀で今度は胴体を狙ったが、一瞬早く男が飛び退って空振る。

「チッ。北方の武器は厄介だな」

　男は今のを刀の特性だと思ったようだ。薄氷の刀身が薄青く光っているので、ある程度特殊なことには気がついているだろうが、まさか性能がケタ違いとは思うまい。

　男が剣身の途中からがなくなった短剣を投げ捨て、予備であろう短剣を抜き放った。

「逆に言っておくが、帰るなら今だぞ？」

　男に一瞬の逡巡が見えた。数で押せそうか判断しているのだろう。後々面倒にはなるが、対策を練ることができるので去ってくれたほうがありがたい。

　しかし、彼は構えを解かなかった。それならこっちも容赦はすまい。横目でサーミャに視線を送ると、彼女はごく小さく頷いた。

　男の横にもう１人加わってくる。２対１。残りの３人はと言うと、ヘレンの猛攻を必死に凌いでいるが、あれは牽制が主でまだ仕留める気はないようだ。彼女も逃さないつもりらしい。しかし、３人相手にしてアレか。”迅雷”の二つ名は伊達じゃないな……。

　今度はこっちの番だと横薙ぎに斬りつける。思ったとおり、２人共飛び退ってくれた。俺は刀を振るった勢いそのまま、横に回転する。

　回転する俺の後頭部スレスレを通り過ぎるものがあった。サーミャが放った矢だ。その矢は俺の攻撃を回避し、スキが出来たと突っ込んできた２人のうち、最初に対峙した男の頭に飛び込んでいく。

　男は避けない。頭にそれなりの防護を施しているのだろう。それが普通の

「ギャッ！？」

　矢が頭に刺さり、男が苦悶の声をあげる。サーミャが放ったのは普通の矢ではない。俺特製の矢だ。相当に硬いらしい、この森の猪の頭蓋骨をも容易く貫いてしまう鏃である。多少の防護をしたところで防げるものではない。

　おれはそのまま回転を続けながらしゃがみ込み、振り向きざまにもう１人の脚に刃を走らせる。

　一条の青い光がその脚を切り裂いた。

## 欲しいのは情報源

2019年12月9日

「グゥッ」

　脚を切り裂かれたやつは呻くような声を上げた。俺は回転を止め、再び返す刀で斬りつける。脚を切り裂いたやつでは無く、この集団のリーダーであるらしい頭に矢が刺さった男のほうだ。

　矢は深々と刺さっているので、既に事切れているか、放っておいても遠からず命の灯火が消えることは間違い無いが、その首元に一陣の青い風を吹かせる。

　首と身体が泣き別れになって、どう、と倒れた。

「こっちはいいぞ！」

　俺は叫んだ。勿論、ヘレンにである。その声を聞いて、ヘレンの目がギラリと光る。サーミャ以上に猛獣のようだ。

　瞬間、青い稲光が相手の３人の間を走り回ったかと思うと、その３人もぬかるんだ地面に倒れ、派手に水しぶきを跳ね上げた。

「どうだ？」

「仕留めたよ。とどめもいらない」

「わかった」

　俺もヘレンもあまり多くを語らない。必要ないからだ。俺と彼女で、脚を切りつけた奴のところへ向かう。そいつは倒れたままで動いていない。

　大動脈を斬ってはいないと思うが、そこそこ深く斬りつけたし、動くのは難しいだろう。肩口を踏みつけて動けないようにした後、手にしていた剣を蹴飛ばす。

「さて、俺たちの言いたいことは分かるな？」

「……」

　雨で多少流れていたが、俺は抜身の刀身についた血を振り払って聞いた。さっきの声を聞く限りは男だが、性別はこの際どうでもいい。

　暫定男は黙ったまま何も言わない。これで喋ってくれれば、楽なことこの上なかったのだが、そうもいかないか。

「誰に言われてここに来た？」

「そう聞かれて言うと思うか？」

「だよな……」

　そりゃ絶体絶命だからとペラペラ喋るやつが、こういうミッションに駆り出されるわけがないよな。

　スッとヘレンが近づいて、手にした剣をグサリと男の太ももに突き刺す。

「グッ……」

　男は呻くが、覆面の下から反抗的な目線を送ってくることを止めない。それを見てグリッとヘレンが剣をひねった。見てるこっちが痛くなってきそうだ。

　それでも男は何も言わない。ヘレンはもう片方の剣を首に当てた。次はない、と言うことだ。少し皮膚が裂けたようで、首に滲んだ血が雨で流れ落ちる。

　男の目が歪む。笑ったのだ。こいつもしや……！

「くそっ！」

　止めようと手を伸ばした次の瞬間、その目がぐるんと裏返った。ヘレンも状態に気がついたらしく、剣を引っ込める。

　首筋に手を当ててみても、もう脈は触れなくなっていた。

「毒か」

「だろうな」

　やたらと効き目が早い毒だ。詳しくはちゃんと調べれば分かるだろうが、ともかくはこれで情報源がなくなった。簡単に手に入るとも思っていなかったが、雨期が終わって街に行く時にでもカミロに厄介事を持ち込まないといけないな……。

「とりあえずここらを”片付ける”ぞ」

「おう」

「わかった」

　俺とヘレン、サーミャで５人の死体を森の奥へ引きずり込む。地面には戦闘や引きずった跡が残ってしまうので、そこらの葉のついた木の枝を切って箒代わりに隠滅しておく。

　これから待ち受けるであろう厄介事で気が重くなった俺を慰めるかのように、強くなりそうだった雨脚はその勢いを弱めていた。

## 推測

2019年12月11日

「どっちだと思う？」

　片付けを終えた俺はヘレンに聞いた。刺客の素性についてだ。ヘレンを狙っていれば帝国の手のものと考えるだろう。

　しかし、狙ったのはアンネだった。第七皇女の王国入りをいかなる方法かで知ったかはともかく、普通に考えれば王国の誰かの手先だとは思うが、帝国の可能性も小さくはない。

　ヘレンは肩をすくめながら答える。

「分からないな。どっちもあると思う。帝国も王国も。帝国だとしても、リスクを考えれば両方かもな」

「共和国は？」

「なくはない。でもバレたら帝国と王国の両方を敵に回すことになる」

「２対１の状況は避ける？」

「アタイならね」

「さっき３対１であっさり片付けといてか」

「あれはそれをしなきゃいけなかったからだよ」

「そりゃそうか」

　ヘレンも出自――侯爵の隠し子ではなく、馬具職人の娘のほうだ――から、ちゃんとした教育を受けていないというだけで、別にバカではない。文字も読める。

　いかに自身が”迅雷”と呼ばれている凄腕で、相手が段違いに格下だろうとも、わざわざ不利な状況を選ぶ必要はない。

「両方かもって？」

　サーミャが不思議そうな顔をしている。獣人の社会ではあまり必要のないところだろう。彼女から聞いているところによれば、せいぜい集まりの長くらいで、要は小さな街の商店会会長がいるくらいなもんらしいので、貴族のあれやこれやには耳馴染みがないのだろう。

「つまりな、帝国の革命派残党、貴族……あるいは帝国王室の誰かかも知れんが、そいつが直接王国内で手を出して、それがバレれば王国と帝国の間の問題になっちまう。それなら、王国の誰かに頼んでやってもらうのがいいってことだ」

「帝国の王室って、アンネの兄弟姉妹ってことか？」

「そうなるな」

「お姫様って大変なんだなぁ」

「俺もそう思うよ」

「それじゃあディアナは？」

「ディアナはそれこそ、うちに来るきっかけの事件があっただろ？」

「あ、そうか」

「あれが外国も巻き込んだ大きなものになった、って思えば概ね間違いないよ」

「なるほどなぁ……」

　サーミャは腕を組んで、納得を示しているのかコクコクと頷いた。

「待てよ、王国と帝国の間に問題を起こしたいなら共和国もありえるのか？」

「それはないな」

　俺の思いつきの言葉を、ヘレンが否定した。

「それをするなら手っ取り早くアンネを暗殺すればいい。その後で、暗殺したいなら、不意討ちで仕留めてそのまま逃げるだけだ。５人もいたら誰か１人は逃げ延びるだろ。それをしなかったってことはアンネを生きたまま確保したい、ってことだからな」

「なるほど」

　今度は俺が頷く番だった。とは言え今のところ材料が少なすぎる。この先カミロやマリウス、もしかすると侯爵も巻き込むとしても、先にある程度の方針は定めておきたい。

「さて、となると今後の話を。ひとまずみんなに追いつこう」

　俺がそう言うと、サーミャもヘレンも大きく頷き、雨の森の中を足早に進んでいった。

## 家に帰り着く

2019年12月13日

　ガサゴソと音を立てながら移動する。この森の動物なら大体はこれで逃げるし、今追いかけている家族たちにもこの音は聞こえているだろう。むしろ「何者かの接近」を知らせておきたい。

　あっちにはサーミャがいないし、匂いで誰が来ているのかを判断するのは難しそうだからだ。今回、追いかけているのは俺たちだが、これがさっきの追っ手だった場合を考えると、警戒されたほうがむしろ安心できる。

　そろそろ追いつくかもしれないと思ったとき、茂みをかき分けて小さな影が飛び出した。殺気も何もないから俺もサーミャも、そしてヘレンも反応が遅れる。

　しかし、その影はと言うと、

「わん！」

　と可愛い声で鳴いた。そうだった。ルーシーがいればある程度は誰が近づいたのかは分かるか。サーミャよりも鼻が利くはずの彼女なら、覚えのある匂いかどうかは判断できるだろう。

　俺は雨の中パタパタと尻尾を振るルーシーを抱き上げた。尻尾の動きが一層激しくなる。

「よーし、それじゃあ一緒に帰るか」

「わんわん！」

　その様子を見て、ヘレンが思わずクスリと笑う。ルーシーが迎えに来たということは、すぐ近くにみんながいるのだろう。俺たちは更に足を早めた。

　程なくして、みんなの姿が見えるようになる。ここから家まではもう少しだ。

「おーい！」

　俺は大声でみんなを呼ぶ。全員がこっちを振り返った。一番背が高いのは言うまでもなくクルルなのだが、アンネもかなり背が高いので目立つ。追っ手からするとかなり楽だろう。

「みんな大丈夫か？」

　俺が聞くと、ディアナが答えた。

「ええ、こっちはなんともないわ。そっちは？」

「こっちも無傷だよ。”片付け”も済ませといた」

「そう。良かった。急にルーシーが走り出したから……」

「多分、俺の匂いがしたんだな」

　こっちには追っ手を回さなかったのだろうか。１人２人伏せてあると思ったが。もしくは――

「早く帰りたいところだが、一度周囲を捜索して、跡を消しておこう。おそらく後をつけられてはないと思うが、念の為だ。ヘレン、サーミャ、ディアナは来てくれ。ルーシーもおいで。後のみんなはここでもうしばらくの辛抱だ」

　家に帰ってから寝込みなんかを襲われてもつまらない。ルーシーがなんの反応もしないから大丈夫そうだが、命に関わることだ、念を入れるに越したことはない。

　ゆっくりと周囲を巡回しつつ気配を探る。前に女性陣（ルーシーを含む）で、俺が

「どうだ？」

「いや、いないな」

「アタイも何も感じない」

「そうね」

「わん！」

　ぐるりと１周したが、何の気配も感じなかった。遠くに残してきたみんなの姿が見えている。俺たちは再びそこに戻っていく。もちろん、跡は消しながらだ。

　アンネはともかく、リディとリケは戦闘はそこそこ止まりだ。つまり、主力は全部こちらに集めている。起死回生を狙うならこのタイミングかと思ったが、動きがないということは刺客はあの５人だけだったようだな。

「よし、じゃあ今度こそ家に帰ろう」

　みんなから賛成の声が上がり、俺たちは再び家に向かって歩きだした。

　家に帰り着くと、まずクルルとルーシーを小屋に入れて、貯水槽の水（思ったより水が貯まっていた）をかけて体に着いた泥を落としてやる。ルーシーがプルプルと体を振って、俺たちにかかるが元々雨に濡れているので気にならない。

　その後でクルルとルーシーの体をタオルで拭いてやった。ここ何日か大活躍だな、タオル。また買い足しておこう……。

　こうして、短い見送りと逃避行は終わった。これからは反撃の方法を考えなくちゃな。

　俺はそんなちょっと薄暗い炎を胸のうちに抱え、家の扉をバタン、と閉めた。

## これから

2019年12月16日

　家に戻った家族とアンネは身体を拭いて、服を乾いたものに取り替える。そのあと全員で居間に集まった。

　俺はコンロに火を入れると、湯を沸かして、少しだけ火酒を入れたものを皆に配る。その間、誰も言葉を発しなかった。

「さて、これからだが」

　俺は話の口火を切った。俺に視線が集まる。

「一度撃退したらもう来ないと思うか？」

「それはないな」

　俺の言葉をヘレンがピシャリと否定した。

「今日で決めるつもりなら、アタイやエイゾウの力を知ってるかどうかによらず、もっと刺客を寄越していたと思う。それをしなかったのは……」

「少しずつしか送ることが出来ないからか」

　ヘレンは俺の言葉に今度は頷いた。”戦力の逐次投入は愚策”ではある。

　かなり端折った話になるが、例えば９対１までは倒せなくても１０対１なら倒せる相手のところに５人ずつ２回送ったところで、５対１が２回繰り返されるだけで倒せない。最初から１０人送り込んで仕留めるより他ない、と言う話だ。

　流石にそれがわからない相手でもない、はずだ。となると、何らかの事情でギリギリのラインで人を送るしかない、ということか。

「それが帝国の人間だからなのか、王国でも都の目と鼻の先のここで大人数を動かすと目立ちすぎるからなのか、は分からないけどな」

「ふむ……」

　俺は腕を組んでアンネを見やった。

「アンネさんに心当たりは……いっぱいありそうですね」

「ええ、まぁ。立場が立場ですから。心当たり、と言うだけで名前をあげていたら日が暮れるくらいには」

　事態に慣れているのか、あまり実感がわいていないのか、アンネはへにゃりとした風情で答えた。

　上に皇位継承者が何人もいる第７皇女といえども、王室の人間である。邪魔になることもあれば、利用価値があると思われることも多いだろう。

　帝国にだって貴族はいるし、考えたくはないだろうが同じ王室の人間に心当たりがあったりもするだろう。

「考えられる中で一番厄介なのは？」

「心当たりの中で、となるとウラジミール兄様ですかね」

「身内かぁ」

「ええ」

　アンネはしっかりした目つきで頷く。

「あの方は我々のような人族以外をあまり快く思っていません。普段は表に出すことはないですし、第１皇子のレオポルト兄様が抑えているので、普通に帝国の政にも関わっています。第２皇子が全く関わらないのもそれはそれで沽券に関わりますので」

「なるほど、厄介ですね」

「でしょう？」

　アンネと俺は顔を見合わせてくすりと笑った。事態の解決にはならないが、心に余裕がなくなったら終わりだ。

「しかし、こんな分かりやすい方法に出るものですかね」

「そこがウラジミール兄様

　首をかしげるアンネ。

「もしかしたら、ウラジミールさんが王国の誰かに依頼したとか？」

「誰か、とは？」

「知っているかもしれませんが、うちはエイムール伯爵とは懇意にしてましてね。あとはメンツェル侯爵にも面識があります」

「王国の主流派ですね」

　えっ、そうなの？その辺はあまり意識しなかったな。必要ないし。だが、俺はそれを顔に出さず頷いた。サーミャとディアナは気づいたようで、変な顔をしていたが。

「そうなると、主流派を追い落としたい貴族の誰かに頼んだ可能性はありますね」

「ですね。とは言っても、ここまでは完全に推測でしかありません。知り合いの商人のところに商品を卸しに行けるようになり次第、行って事情を話してきます。確たる情報を集めないと」

「外に出ると危険ではありませんか？」

「まぁ、それはそうなんですが。そのときにアンネさんがいなければ、かなり平気かと。向こうの目標が見当たらないわけですからね」

「なるほど……」

　無論、襲われる可能性は十二分にあるが、こちらには俺とディアナ、それにヘレンもいるわけだし、そんじょそこらの相手なら追い返せるだろう。

「とりあえず、アンネさんには申し訳ないですが、もうしばらくの間ご逗留いただくということで……」

「ええ、かまいませんよ」

　アンネはニッコリと微笑んでそう言った。だが、俺は最後の可能性、「この状況を作るための茶番」がずっと頭を離れなかった。

## 戻ろう

2019年12月18日

　ふと気がつくと、外の雨は再び本降りになっていた。降り方は昨日の雨と大差ない。それを反映しているがごとく、居間の空気は陰鬱だ。

「さて」

　そんな空気を振り払うように、俺はつとめて明るく言った。

「仕事するか」

「こんなときに？」

　俺が言うと、サーミャが疑問を挟んだ。

「今はまだ情報が少なすぎる。それでよく分からんものをいつまでも恐れてたってしょうがないからな。こう言うときはいっそ仕事に集中して、無理矢理にでも気持ちを切り替えてしまうに限る」

　前の世界でブラック社畜でウン十年過ごしてきたコツでもある。それを良いように扱われてきたのも否定はできないが。

　ため息をひとつついて、俺は鍛冶場の扉を開けた。

　俺はバタバタと火床や炉に火を入れていき、家族は作業の準備を始める。その様子をアンネがじっと見ていた。

「……手伝います？」

「いいんですか？」

「まぁ、今日のところは簡単なやつをってことでいいなら」

「わかりました！」

　ぽやんとした雰囲気を吹き飛ばす、ハッキリとした顔でアンネは答えた。

　俺はリケに指示を出す。

「それじゃあ、アンネさんにエプロンを」

「わかりました、親方」

　エプロンは普通の人間サイズのものしかないので、「つんつるてん」になっているが、最低限はカバーできているのでいいだろう。

「それじゃあ型を作ってもらいます。リディ、教えてやってくれ」

「はい」

　リディの細い手が粘土を持って雄型に押し付ける。ふわりとした動きが、まるで楽器を弾いているかのようである。

　一方、見様見真似でアンネも同じ作業をはじめた。こちらの手はやや大きい。リディの倍とまでは言わなくても、大人と子供のごとく違う。

　見た目はどう見ても普通の女性のものだが、大きさだけがはるかに違う手が、豪快に粘土を型に押し付ける。

　俺とリケはそれを見て、自分の作業に取り掛かった。今日の作業予定は、最初に板金でナイフ、後は型を使って剣だな。

　俺が一本目のナイフの仕上げにかかるころ、アンネの声が作業場に響く。

「どうです？」

「鉄を流すまでは分からないですが、いいんじゃないでしょうか。特に問題あるようには見えないですよ」

　リディがチェックをして答えている。リディのチェックで大丈夫なら、大きく問題になることはあるまい。

　俺はナイフの仕上げを続けていった。

　言葉少なめの昼飯を挟んで午後。アンネの作った型で剣を作る段になった。型から抜いた後の作業は俺がやる。

　リケにやってもらってもいいのだが、最初の１本の出来は自分で見ておきたいし、それなら仕上げまできっちりやるのがよかろうという判断である。

「それじゃあ、流すぞ―」

　サーミャが溶けた鉄を掬った長柄の柄杓を持って言った。アンネに教える意味もあるし、普通に１０００度を超えるような温度のものだから危ない、という話でもある。

　そっとサーミャが柄杓の中身を型へ注いでいく。もうもうと煙を立ち上らせながら、真っ赤な鉄が型の中に飲み込まれていった。

　少し冷めるまで置いた後、型を取り出して鎚で軽めに叩いた。溶けた鉄の熱によってカチコチに固まった粘土は、それによってポロポロと崩れていく。

　剣の芯は完全に冷めたわけでなく、まだ手で持てない程には熱いため、ヤットコで掴んで持ち上げた。

「……ど、どうですか？」

　アンネが恐る恐る、上目遣い（身長のせいであまり上目になってないが）で聞いてきた。

「いいんじゃないですかねぇ。これなら仕上げも苦労しなくて済みそうです」

　俺がニッコリと笑いながらそう言うと、アンネは「やった！」とリディとハイタッチをしている。

　大事なのは、こう言う「いつも」なのだ。これから先、厄介ごとが待ち受けているだろうが、この「いつも」は守らなきゃな。

　そう思いながら、どうしても発生してしまうバリを取るため、俺は剣に鎚を振り下ろした。

## 守りたいもの

2019年12月20日

　俺はそのまま剣を仕上げていく。最初だからショートソードだ。量産と高級のどちらのモデルにしようか少し迷ったが、せっかくなので高級のほうで仕上げていく。

　鎚を振るって魔力がこもるたび、火花とともにキラキラとしたなにかが飛び散る。リディ曰くは「剣に入りそこねた魔力の残滓のようなもの」で、魔力の扱いに慣れてないと見えないらしい。

　リケが「最近は親方のが少し見えるようになってきました」と言っていた。そう遠くないうちにハッキリ見えるようになるかも知れないな。

　鉄を流す腕が良いのか（鋳造では注型の腕前も出来上がりに影響する）、型の素性が良いのかはともかく、割とすんなりと仕上げを進めることが出来た。焼入れや柄に皮を巻きつけたりといった工程を経て、最後に刃をつければ完成である。

　普段なら刃付けとかはまとめてやるのだが、ここも今回は特別に１本だけを仕上げていく。

　結果として高級モデルの中でも”いいほう”になってしまったが、特注品レベルのものではないので問題なかろう。

　しかし、自分でみてもなかなかの出来になった、と自負できるくらいだ。これ単体で卸すとしたら、普段の１．５倍くらいの料金は取るかも知れない。

　俺は完成したばかりの剣をかざした。剣は火床や炉の炎を照り返して、オレンジ色にキラリと輝く。

「これで完成です。ああ、鞘はまだですが」

　出来たものをアンネに見せると、型を作っていた手を止めて、特徴的なタレ目をキラキラと輝かせながら剣を注視した。

「これの型を私が……？」

「ええ。あなたの作った型に鉄を流して、そこから仕上げた剣です」

「手にしても？」

　おずおずと俺に尋ねるアンネ。俺はちらっと

「構いませんよ」

　俺がそう言うと、アンネは布切れで手を拭って、そろそろと剣に手を伸ばした。両手剣を手にしたときを考えれば、剣を手にするのは初めてではないはずだが、まるで生まれてはじめて剣を手にするかのように慎重だ。

「ふわぁ」

　剣を持ち上げたアンネはなんとも可愛らしい声を上げた。目の輝きが一層強くなっている。

　欲しかったおもちゃを貰った子供のようだな、そんな風に俺は思った。今こうやって引きこもっている間だけ、彼女が「第７皇女」という立場をすっかり忘れることができているのかも知れない。

　それはディアナもほとんど同じで、ここにいる間だけは「エイムール伯爵家令嬢」としてではなく、「エイゾウ工房の家族の１人」として振る舞える。だが外に出れば、本人の希望によらず、その立場を無視することは出来ない。

　だから、遅かれ早かれ、そしてどんな形でなのかは分からないが、いずれアンネがここから出ていくときには、やはりその肩書が再びついてまわることになる。

　ほんの少しの”いつも”がこの状況から彼女の心を救ってくれると助かるんだが。剣についてヘレンと話し合う彼女を見て、俺はそう思わずにいられなかった。

## 憂鬱なれどもいつもどおりの日

2019年12月23日

「皆さんはずっとこれを？」

「ええ、まぁ」

　俺は言葉を濁した。まさか「いえ、作り始めたのは、ほんの数ヶ月前です」とバカ正直に言うわけにもいかないしな。

「なるほど……。これは父上が欲しがるわけです」

　アンネは俺の剣をためつすがめつしている。その間作業が止まってしまっているが、長雨が終わらないことには納品にもいけないわけだし、のんびりやればいいか。

　俺たちはそれを横目に、作業に戻った。

　そして夜。太陽の神様はとっくに仕事を終え、その日の分としては十分な量のナイフと剣を製作し終わっていた。

「外に出られないと、やはり料理は単調になってくるな」

「こんなもんだろ。ってか、むしろ十分なくらいだ」

　俺の言葉にサーミャが応え、リケとリディ、そしてヘレンが頷く。ディアナとアンネはピンときていないようだ。

「アタシたちのとこで、この時期に出回る食材なんて、たかが知れてるからなぁ」

　サーミャがそう言って、スープの塩漬け肉を口に運ぶ。

「やっぱり貴族は違うんですか？」

　今度は肉を飲み込み終えたリケだ。好奇心を隠そうともしていない。いや、そのほうが好奇心からなのか悩まなくて済むか。

「そうねぇ……。うちだからなのかは知らないけど、割といつもどおりだったわね。あ、でも野菜系は減ってたかしらね」

「私のところも似たようなものですよ」

　ディアナとアンネがあっさり答える。別に隠すようなもんでもないか。

「食通の貴族の家なんかは、自分のところに燻製小屋だのなんだのを構えてるらしいけど、あれは特別ね」

「うちはありました。いざというときに自分たちで保存までできるようにせねばならぬ、とかで」

　へーっと家族のみんなが感心した声をあげた。アンネは少し得意げである。

　さらっと言ってるが、アンネの家は城だ。つまるところ帝都と言う文字通り”最後の砦”の中枢としても機能せねばならない。

　外壁に近いところ（こういうものはたいてい外壁に近いところにある。薪や出来上がったものの運搬に便利だからだ）では壊されるかも知れない、と考えれば、中枢にも持っておいたほうが確実とは言えるのかも知れない。

　でも、俺はそれが実際には皇帝陛下の単なるご趣味であろうなと推測していた。重要な燃料たる炭焼小屋までならまだしも、燻製小屋をわざわざ城に持つ必要性はあんまりない。

　積極的に仲良くする気は今のところ皆無だが、理屈をつけて趣味に邁進するところには親近感を覚えた。

「なんだかものすごい豪華な燻製ができそうだな」

「できるのは普通の燻製ですよ？」

　アンネがキョトンとした顔で言う。ただの世間知らずなら、その「普通」が一般の目から見て大きくレベルが違うものである可能性が高いと思うが、アンネの言である。

　ある程度は差し引いて考える必要があるだろうが、概ね俺たちとも「普通」の基準が違うわけでもないだろう。

「そうなのか」

「良いところはすぐ調理して兄様や姉様のおなかに収まりますので。まぁ私もなんですが……」

　俺はリケの方を見るのをこらえた。このタイミングで見るのはレディにはいささか失礼というものだろう。

　その日か、あるいはちょっと前に使わなかった肉を燻製に加工するなら、一般的な、庶民が頑張ればなんとか手に入るくらいの肉になるのは不思議ではない。

　その後、話題の中心は「今まで食べた燻製肉の味」にスライドしていき、この日の夕食の時間は過ぎていった。

## 弟子の弟子

2019年12月25日

　結局の所、雨は３日ほど降り続いた。多少弱まったりもしたが、街まで行くならなるべく降ってないときがいい。特に今は状況が状況だからな。

　その間、雨が弱まったときに水を汲みに行ったり（クルルとルーシーの散歩も兼ねている）はしたが、狩りのできる状況でもないので、主に納品物の生産を粛々と進めていただけである。

　アンネはと言うと、型作りよりも適正な作業が見つかったのでそっちをメインに行なっていた。

　板金は型に炉から出た鋼を流して固める、という方法で大体同じような重さになるようにしてあるわけだが、保管は箱というか柵というかそんな感じのものに積み重ねて入れてある。子犬や子猫用のケージが近いかもしれない。

　なので、多少の歪みやなんかは許容範囲である。しかし、それでもなるべくは平らな方が収納には困らないし、加工するときに積むのも楽だ。

　そんなわけで、流して冷え切らない間に叩いてなるべく平らにする、という作業もしている。前の世界の製鋼所だとローラーでやってるような作業だが。

　一度その作業をアンネにやらせてみたところ、彼女の性格によるものであろうか、なかなか良いものが仕上がってきたのである。

　力の強さで言えばヘレンはもちろん、ディアナも負けてはいない。だが、出来上がりの精度となるとその２人よりもアンネのほうが少しだけよいし、精度はサーミャが上でも力の差でアンネのほうが少し作業が早いと言うわけだ。

「これはいいな」

「そうなんですか？」

「ええ」

　俺は板金の出来上がりをチェックして素直な感想を述べた。アンネはこころなし嬉しそうである。

「ほら、こうやって積み重ねると分かるでしょ？」

「本当ですね」

　アンネの板金のみと、他の板金のみを分けて何枚か積み重ねていく。アンネのものは同じ枚数を積み重ねても、もう一方よりも高さが低いし、板金の”塔”が歪んでいない。

　ほんの僅かの差ではあるが、これが何十枚ともなってくると顕著になる。

「それじゃ、折角だから板金のほうはアンネさんにお願いしますね」

「お任せください！」

　アンネはそう言ってムンと力こぶを作る。鍛冶場に炎の音と笑い声が響いた。

　多分、この瞬間はみんな彼女が第７皇女であることを心底忘れていたと思う。恐らくは本人でさえも。

　しかし、そうなると、板金の仕上げをしていたサーミャかディアナか、どちらかを別の作業に回すことになる。いい機会だから、そろそろ試してみるか。

「サーミャ、リケに教わってナイフやってみるか？」

「いいのか？」

　目をまんまるに開いてサーミャが言った。

「ずっと板金叩いてて、それなりに鉄を鍛えるコツは掴んだろ？　まぁもちろん、リケが良ければだが」

　そう言いながら、俺はリケの方を見た。リケは意を決したように頷いた。まだリケが自分の目的も完全に達成してないうちに、というのは心苦しいものがあるが、俺では体系的なものがないから見取り稽古にせざるを得ない。

　流石に初心者に見取り稽古をやれというのは無理がある。リケは早速イロハからサーミャに教えはじめる。

「へへ、これでアタシはリケの弟子だな」

「弟子をとれるほど、私はまだ偉くないわよ」

　こうして、３日間は機嫌の良さそうな鎚の音と、たどたどしいが楽しげな槌の音が、鍛冶場に新たに加わったのだった。

## 弔いへ

2019年12月27日

　４日目、この日もゆるく雨が降っていた。サーミャ曰くは、「そろそろ長雨は終わる」とのことなので、このまま止んでいくらしい。

　それにしても、１週間と少し降り続けるとは。ずっと豪雨だったわけではないが、もしずっと土砂降りが続いていたら、方舟の製作も視野に入れていたかもしれない。

　朝、水汲みやらの一通りを終えて、今日の作業を進める。

「雨が止むと、森の生き物がうろつきだすかな？　狼とか」

「そりゃあなぁ」

　作業の手を止めずに俺がサーミャに聞くと、彼女はヤスリで形を整える作業を一時中止して答えた。

「１週間もこもってたんだ、食い物もそうだけど、身体を動かさなきゃな」

「なるほど。となると、動くなら今日か」

「なんかあんのか？」

　俺は頷いた。

「もう遅いかも知れんが、アンネさんを迎えに来ていた人たちが見つかればちゃんとしてやりたい」

「ああ……」

　あの日あたりに帰るであろうことが想定されていたとは言え、俺たちを待ち伏せするのに死体が転がってたんじゃ怪しいことこの上ない。恐らく入念に隠蔽はされているだろう。

　あの時はまずは安全の確保を最優先し、死体を探している間の増援なんかを避けるために帰ったし、その後も警戒して外に出る方へは行かなかった。

　なので、もういくらか日にちが経ってしまってはいるが、今からでも遅いということはないはずだ。少なくとも何もしないよりはマシだろう。

「雨もだいぶマシになってるし、昼から行こう。森の生き物が手を出してしまう前に」

　俺がそう言うと、みんな頷いた。俺はアンネのほうに向き直って言った。

「アンネさんも、すみませんが確認が必要なので、一緒にいらしてくださいますか。危険が伴うかも知れませんが……」

　時間が経ったとは言っても、向こうが諦めた保証は何もない。時間が経っている以上、増援と言うか救出部隊のようなものと鉢合わせる可能性も十分にある

「彼らも覚悟して来ていたはずです」

　俺の言葉に、アンネは俺から目線を外し、あまり大きくはない声でそう言った。このところの経験で、うちに馴染んできていた表情が再び第７皇女のそれに戻ったのを俺は感じた。

「でも」

　アンネは顔を俺に向けた。そこには再びうちに馴染んだアンネの顔がある。

「ありがとうございます」

　深々と頭を下げるアンネ。そこにいるのは部下を失った帝国第７皇女アンネマリー・クリスティーン・ヴィースナーではなく、知人をなくしたアンネという名前の１人の女性であるように、俺には思えた。

　その後、言葉少なな昼食を終えて、準備を整える。思わずため息が出るが、やると決めたのだ。意を決して外套を着込んだ。

　クルルとルーシーを連れて行くかは迷った。ヒトではない、とは言えども子供に見せていい状態とは思えないし、今朝水汲みで一旦は外に出たからだ。

　しかし、結局の所連れて行くことにした。何か不測の事態に陥ったとき、２人ともをアンネにつけて家に戻し、後は俺たちで対応するという事ができる。

「クルルルル」

「よーしよし、今日はアンネおねえちゃんのお友達のところへ行くからな」

「クルル」

　今日２回めのお出かけが嬉しいのか、クルルが首を俺にこすりつけてきた。ルーシーも足元を走り回っている。

　俺はクルルの首と、ルーシーの頭を撫でると、準備の整った家族みんなと一緒に出発した。

## 捜索

2020年1月6日

　しとしとと降り続く雨のほとんどは樹々が精一杯に伸ばしたその枝葉で遮られ、俺たちのところまではあまり落ちてこない。

　時々クルルがプルプルと首を振って雨を払っている。ルーシーも派手に水を撒き散らして、ディアナやアンネが喜びなのか悲鳴なのかよく分からない声をあげていた。

「そう言えば、

「出るよ。目の前が見えなくなるくらいになるときもある」

　今まさに雨が降っている最中では出ないだろうが、雨の止んだ後は出やすかろうと思ってサーミャに聞いてみたが、やはり出るのか。

「そう言うときは……動物たちもこもってるか」

「アタシたちは見通しが利かなくて狩りができないからそうするけど、声が聞こえるし臭いもするからから狼や鹿は多少うろついてるんじゃないかな」

「へえ、鼻が利くとある程度は動けるもんか」

「そうみたいだな」

　サーミャたち獣人が人間よりもはるかに感覚が鋭敏とは言っても、森の獣ほどではない。視覚情報に頼るところも多いだろうから、そんなときに霧が出ていたら大変そうだ。

「まいったな。明日か明後日には街へ行かなきゃならんのだが」

「あいつらもウロウロはしてるけど、いきなり襲いかかってきたりはしないよ。霧が出てないときのほうがいいのはあいつらも一緒だ」

「なるほど」

　チート持ちではあるが基本的にはただの人の領域におさまる俺の場合、霧で視界が奪われると襲われたときに対処が難しい。そんなところで例えば狼の群れに襲われたらどうしようもない気がする。

　しかし、嗅覚だけで襲うよりも、視覚も併用して襲いかかるほうが有利なのは彼らも同じ話ではある。そこはむしろ賢さに救われたと言うべきか。

「じゃあ、気にせずゆっくり進めば問題ないか」

「だな。道を見失いやすいからおすすめはしないけど」

「そりゃそうだ」

　俺はそう言いながら、うへえと肩をすくめた。いくら勝手知ったる”黒の森”でも、霧で様相が違ってしまえばあっさり迷うことは十分にありえる。

　そうならないように、霧が深ければ延期も考えないといけないか。

　そうして、森の入口が近づいてきた。樹の数が減っていき、俺達に直接届く雨粒の数はそれにつれて増えていく。ルーシーが身体を震わせる回数も増えた。

「このあたりか」

　なんだかもう遠い昔のように思えるが、実際にはあれから１週間も経っていない。

「何人かずつに別れて探すか？」

「いや……臭いがする」

　サーミャが心底げんなりした顔で言った。血の臭いは降り続いた雨でもうしなくなっていると思う。だとすると……。

「わかった。そっちへ行こう」

　俺は臭いのもとが何なのかは聞かずに言った。ディアナとリケはあまりピンと来ていないようだ。ヘレンはすぐに思い当たったようで、顔を少し歪めている。アンネが思い当たっている感じなのはゾッとしないな。

　臭いのもとにはすぐにたどり着いた。隠蔽はされているが、あまり丁寧ではない。俺たちがいつやってくるか分からないし、しっかりとした隠蔽はできなかったのだろう。

　それでも何も知らずに通りすがったら、異臭に気がつく可能性は少しあるが、そのまま通り過ぎてしまうだろう、と言う程度には隠されている。

　俺はディアナとリケ、リディと

## 葬送

2020年1月8日

　埋められていなくて良かった、と言うべきか。その辺りの葉がついたままの木の枝などで覆い隠され、一見すると下生えのようにしか見えないそれは３つあった。

　俺とサーミャは覆いかぶさっていた物を慎重に取り除ける。すると３体の遺体が現れた。

　長いこと雨ざらしだったことを差し引いてもあまり身なりが良いようには見えないが、これは偽装だろう。品質自体は結構良さそうだからだ。

「辛いとは思いますが、この姿に見覚えありますか？」

「……はい」

　ぐっと下唇を噛んでアンネは答えた。俺はそれを見て３人の遺体に手を合わせてから、そっと目を閉じた。

「申し訳ないですが、遺体はここに埋葬します。獣に掘り起こされないようなるべく深く。身元がわかるようなものがもしあれば、今のうちに外しておいてください」

「わかりました」

　ヘレンが周囲を警戒する中、アンネはゆるゆるとした動きで遺体が身につけていたものを外す。それはネックレスだったり、ナイフだったりだ。

　殺された人たちもアンネもある程度の覚悟はあっただろうが、だからといってそれが現実になったときにショックを受けない道理はない。手が小刻みに震えているのが分かる。

　こういうときに何か気の利いたことの一つも言えればいいのだが、うまい言葉が見つからない俺は黙ってそれを見つめているしかなかった。

　やがてアンネが遺体のそばを離れる。

「終わりましたか？」

　コクリとアンネが頷いた。大丈夫でないのは分かりきっているので、「大丈夫か」とは聞かない。この後、遺体を埋葬する穴を掘るが、それはアンネにやらせなくてもいいだろう。

　ディアナにアンネを引き取ってもらい、俺とサーミャ、ヘレンで穴を堀り始めた。

　穴を掘るのには随分と時間がかかった。人間３人分となれば当たり前ではあるのだが、それ以上に人死と言う事実が重くのしかかっていたからだ。比較的こういった状況に慣れているヘレンがいなければ夕方を過ぎて夜中までかかっていたかも知れない。

　一応念の為にと松明を持ってきてはいるが、今以上に暗くなったら作業が困難になることは間違いない。そうなる前で助かった。

　アンネを遺体のところに呼び戻す。辛いだろうが、お別れはさせておいてやりたい。これが最後になるだろうし。

「一緒に入れましょう。私がこちらを持ちます。アンネさんはそちらを」

　足元の方はサーミャとヘレンに頼み、頭に近い方を俺とアンネで持って穴の中にそっと横たえる。

　この事態に全く無関係でない以上、この重みのいくらかは俺も引き受ける義務があるな。そんな事を考えながら。

　３人が穴の底に並ぶと、アンネはそれぞれの手をギュッと握る。彼女なりの別れの挨拶だろう。ゆっくりと、地面に染み込んでいく雨のように別れを惜しむアンネ。俺たちはそれをじっと見つめた。

　アンネが別れを終えたら、土をかぶせる番だ。シャベルの１つはアンネに任せた。彼女うつむきながらそっと土をかぶせていく。

　姿が見えなくなっていくにつれてその動きがゆっくりになっていくが、俺とヘレンがその分の土をかぶせ、完全に姿が見えなくなったところで、再びアンネをディアナに任せた。

　俺とサーミャとヘレンで完全に土と被せきると、そこにその辺りの枝で墓標を３つ作って、小さな築山に刺し、全員を呼ぶ。

「願わくば、あちらでの安寧が得られますよう」

　俺は手を合わせて頭を下げ、そうつぶやいた。他のみんなもそうしているのか、それを知ろうとするだけの心の余裕は今の俺には存在しなかった。

## 狼煙の準備

2020年1月10日

　雨の中、長いような短いような時間が過ぎた。みんなすっかり雨に濡れて、泣いているのかそうでないのかもよく分からないが、アンネにとってはそっちのほうが良かったかも知れない。

　俺は俺で、怒りなのか悲しみなのか、よく分からない感情を内に抱えている。直接の反撃はできそうにないが、出来る限りのことはやらねばならんな。

　巻き込まれただけとは言え、俺と家族との生活が脅かされているのだし。

　俺たちが切り捨てた連中も浅めに穴に埋葬しておいた。”死んでしまえば皆仏”とはよく言ったものだ。なにか身元がわかるものを持っていないか確認したが、何もないので死体剥ぎのような真似はせずにおいた。

　皆、言葉少なに家に帰る。クルルとルーシーは雨の中とはいえ、お散歩できて嬉しいはずなのに俺達の空気を察したのか、あまりはしゃぎまわったりはしなかった。

「ありがとう、エイゾウさん」

「いや、ちゃんとしないと私も気持ち悪かったですし」

　家に帰って、湯を沸かす準備をしていた俺にアンネが声をかけてきた。彼女のためというよりは、俺のケジメもあったのだが、俺は悪い大人なので恩に着なくても良いとは言わずにおく。

　沸いた湯をアンネも含めてめいめいが自室に（アンネは客室だが）持っていき、体を拭いた。雨で冷えた身体に湯の温かさが心地よい。

　体を拭いてさっぱりすると、良い時間になったので、そのまま夕食の準備を進める。女性陣は居間に集まってあれこれ話し込んでいるようである。いずれお別れの日が来るといえど、仲良くなるのはいいことだろう。

　夕食はいつもどおりのメニューだが、今日は酒も出した。人数分以外に、３つ別のカップを用意してそこにも注いである。気がついたアンネがペコリと頭を下げ、俺は手をひらひらと振った。

　翌朝、水を汲みに外へ出るとすっかり雨は上がりきって、樹々の隙間から久しぶりの青空が背景として樹の葉を引き立たせていた。

「やあ、台風一過って感じだな」

　こっちの世界にも台風というものがあるかは知らないが、嵐は起こるだろう。その時の備えもやっておかなくちゃいけないな。

　だが、とりあえずは気象現象ではない方の嵐をなんとかする必要がある。今日からはその１歩目だ。

　迎えに来ていたクルルとルーシーを引き連れて、俺は水汲みへと向かった。

　一連の朝の仕事を終えたら、街へ向かう準備をする。いつものとおりに荷物を積み込んで出発するわけだが、街へはいつもと違って俺、リケ、ディアナ、ヘレンそしてクルルとルーシーでいく。

　サーミャはこの森を知っていることと戦闘能力があること、リディはこの森には詳しくないが、ある程度森そのものへの知識があることと、魔法が使えることから、いざと言うときのために残ってもらうことにした。

　嗅覚と気配の両方で敵を探知できるサーミャを置いていくのはなかなかに痛いが、そこは俺とヘレンで頑張るしか無いだろう。

　言わずもがな、アンネも居残りである。とりあえずある程度情勢がつかめないことにはどうしようもない。

「それじゃ、後は頼んだ。いざとなったら火をかけてでも逃げるんだぞ」

「……わかった」

　いざ、にはアンネが獅子身中の虫だった場合も含まれているが、サーミャは理解しただろうか。不満そうな顔で返事をするサーミャの頭をくしゃりと撫でて、クルルが繋がれた荷車の荷台へと俺は飛び乗った。

## 街へ向かう

2020年1月13日

　クルルが牽く荷車は森の入口へと進んでいく。昨日までとは打って変わって光がそこかしこに差している。

　時折、下生えがガサリと揺れるのは長雨にウンザリしていた小動物たちだろう。道中も念のため警戒を怠らずにいたが、遠くに鹿の姿が見えたりもした。

　しばらくすれば、狼たちも空いた腹を満たすためにウロウロしはじめるに違いない。そうすれば、いつもの森が戻ってくるだろう。

　それとは真逆な自分たちの状況に、俺は思わず苦笑を漏らす。

「どうかした？」

　俺の様子を見て、ディアナが声をかけてくる。俺は頭を振った。

「いや、大したことじゃない。俺たちがこんなにも切羽詰まってるって言うのに、森はすっかり元通りになろうとしてる。なんだか取り残された気分だなって」

　厳密には地面はまだぬかるんではいる。だが、それを除けば森は”いつも”がもうすぐだ。

「こればっかりは仕方ないんじゃない？　別にあなたのせいでもないんでしょ？」

「それはそうだが……」

　確かに直接の原因は俺にはない。こうなった原因の1つであるうちの製品が帝国側に流出した件にしたって、ヘレンが捕まったのところからだが、それだってそもそも帝国の連中がヘマをしなけりゃ、そんなことも起きなかったのだ。そう考えるとほとんどマッチポンプに近い。

　とは言っても、やはり自分の製品がもとでこうなっていることも確かだし、その辺が割り切れないところでもある。

　しかし、そこはもう起こってしまったこととして割り切らないといけないかもしれないな。防ぐ方法もなかったのだし。

　唯一あるとすれば「全ての製品を門外不出とする」ことだけだが、これは現実的ではない。もう出回ってしまったし。

　俺はそんなようなことを二言三言ディアナと話して、意識を周囲の警戒に引き戻した。

　ぬかるんだ道は心配していたよりもクルルと荷車の足をとることもなく、いつもよりほんの少し遅いくらいのペースで森の入口に近づいてきた。

　恐らくではあるが、この辺りが怪しいことは襲撃を指揮しているやつには伝わっていることだろう。見張るなら図体の大きな俺たちはさぞかし目立つに違いない。馬じゃなくて走竜を連れていることだし。

「どうします？」

　リケが御者台から振り返って言った。俺たちには４つ選択肢がある。

　いつも通りの速度で進むか、いつもより速度を落として警戒をするか、それとも逆に速度を上げて走り抜けるか。最後の１つはここで一旦止めて斥候を出す、である。

　いずれも一長一短ではあるが、「黒の森から出てきた」以上に目立つことはあまりしたくない。

「いつも通りの速度で進もう。ディアナとヘレンは警戒頼むな」

「ええ、わかったわ」

「勿論」

　俺の言葉を聞いてリケはうなずくと、手綱を操った。クルルはそれに従って、いつも通りに歩みを進めていく。

　俺とディアナとヘレンは周囲に目を走らせた。ルーシーも荷台から顔を出して鼻をくんくんさせているから、手伝ってくれているのかも知れない。

　俺たちの用心をよそに、森から出ても何もなかった。いつも通りの平原が日の光を浴びているだけである。

　そのまま街道へと出る。俺たちは一瞬ほっとしたが、そこを狙われるとそれはそれで危ない。気を引き締めて、街道をいつもどおり速めの速度で進んでいく。

　いつ平原から襲いかかられるかと気が気でなかったが、やがて街の外壁が見えてきた。またもや気が抜けそうになるが、入口に辿り着くまでは安心できない。

「ヘレン」

　俺が声をかけると、ヘレンが顔を近づけてきた。恐らく聞かれないとは思うが、馬鹿デカい声でチェックしてる状況を馬鹿正直に教えてやる義理もない。

「後ろは？」

「いない」

「即答だな」

「こういうところはアタイが得意なところだからな。見るべきところは分かる」

「なるほど」

　プロの傭兵のお墨付きなら大丈夫か。あとは衛兵さんが見えてくるまでの辛抱だ。

　俺は気を引き締めなおすと、再び周囲に目をこらすのだった。

## 街中

2020年1月15日

　街の入口へ近づくと、見慣れた姿があった。顔見知りの衛兵さんだ。いつも通り過ぎてしまうので名前までは知らない。マリウスかカミロに特徴を言えば知ってるだろうが、わざわざ聞いて知ろうとまでは思わないな。

「どうも」

　少し速度を落とした荷車から顔を出して挨拶する。ディアナとヘレンは周りに目を配っている。

「あんたらか。長いこと見なかったからどうしたかと」

「雨でしたからね」

「そう言えば随分な長雨だったな」

「ええ」

　二言三言交わしながら、そのまま街の入口を通り過ぎる。近くで重大犯罪の犯人が逃走中とかいう話でもあれば別だが、そうでもなければこんなものだ。

　街の様子はいつもどおり賑わっている。昨日まで雨が降っていた影響か、少しだけ人通りが多いようにも見える。荷車からルーシーが顔を出してキョロキョロ辺りを見回し、通りすがりの人々を笑顔にしているのはいつもどおりだ。

　失敗したときのリスクを考えれば街中で仕掛けることはあまりないだろう、とは思うものの、一か八かでやってくる可能性もなくはないので、ルーシーに構っているふりをしつつ、周囲を警戒した。

　結局、カミロの店まで特に怪しい人影や襲いかかってくるヤツはいなかった。結果としては完全に徒労に終わったわけだが、事が起きてからでは遅いからな……。

　いつものとおりに荷車を倉庫に入れると、丁稚さんにクルルとルーシーを預けた。

　クルルもルーシーもこの丁稚さんに懐いてきたらしく、首を擦り付けたり、足元を走り回ったりしている。

「こら、クルルもルーシーもあんまり邪魔するなよ」

「いえいえ、いいんですよ」

　丁稚さんはそう言って微笑んだ。クルルとルーシーが狙われるとしたら、このあと商談なんかをしている間だろうが、この丁稚さんに任せるなら平気かな。

　俺はいつもどおりに商談室へ向かった。

「疲れた……」

　カミロが来るのを待つ間、俺はテーブルに突っ伏した。ここに入るまで一時も心の休まる瞬間がなかった。しばらくはこれが続くのかぁ。

　その様子を見ながら、ディアナが笑う。

「てっきりエイゾウはこういうことには慣れてるんだと思ってた」

「事情があって北方から流れてきたとは言っても、基本的にはただの鍛冶屋のおっさんだぞ。慣れてるわけがない」

　当たり前ながら、前の世界でも命を狙われているかも、なんて思いながら客先に行く経験なんかしたことはない。一般人でそういう経験の可能性もなくはないだろうが、幸いなのかどうかはともかく俺には一切無縁だったからな。

「しかし、アンネを狙ってるにしちゃ、動きが鈍い気はするな」

　ヘレンが少し真剣な表情で言う。彼女も気を張り詰めていただろうに、微塵も疲れた様子がない。これがプロとアマの差だろうか。

　俺は突っ伏したまま、顔だけをヘレンに向ける。

「と言うと？」

「アンネを狙ってるんなら、道中で仕掛けるべきだった。あれから日にちも経ってる。荷物に紛れ込ませて、ここに運び込んでカミロに引き継いで脱出させようとする、と考えたらこの道中で仕掛てくるのは普通だろ？」

「なるほどねぇ」

　今回はアンネを狙ってるのかどうか分からんうちに帝国に逃してもなと俺が思ったので、まずは状況を知るために置いてきたが、そんなことに関係なくとにかく帝国に逃してしまうプランを考えれば、一番手薄なはずのこのタイミングがベストだし、もしかしたらラストチャンスになる。

　であれば、ここで仕掛けなかったのは何らかの意図があると見るべきか。

「用心も必要だけど、ずっと気を張り詰めてると潰れるぞ」

「そうだな、帰りはヘレンに任せるわ」

「おう、本業に任せとけ」

　今度はヘレンもニコリと笑う。そこへノックの音が響き、俺は体を起こして、カミロに何を聞くべきか、頭の中で整理を始めた。

## 情報収集

2020年1月17日

「よぅ……どうした、疲れたみたいな顔をして」

　部屋に入ってくるなり、カミロは眉を上げてそう言った。

「疲れてるんだよ」

「珍しいな」

　言われてみれば、ここへ来るときに移動自体の疲労以上に疲れていたことはあまりない。半分は気晴らしみたいなものだったしなぁ。

　俺は苦笑しながらカミロに言った。

「まぁ、疲れてる理由は後で話すとして、まずは商売の話をしようや」

「わかった」

　俺とカミロはいつもどおりの商談を行う。コツコツと作ったいつもの品物をいつものとおりに引き取ってもらう。

　カミロが目配せすると、番頭さんが頷いて部屋を出ていこうとしたので、慌てて俺は付け足した。

「ああ、塩とかは１人分多めに頼む。その分は払うから」

　番頭さんはピクリと片眉を上げたが、「かしこまりました」と言ってそのまま出ていった。

「その”１人分”ってのが疲れてる理由か？」

「まぁね」

　俺は肩をすくめた。カミロの表情を伺うと興味津々な様子を隠しもしていなかった。俺とこいつとの間で隠し事してても意味はないか。

「今日は連れてきていないが、お前に隠していても話が進まないだろうから、うちに来た客について話しておこう」

　こうして、俺はアンネについて話をした。帝国の第７皇女であることも、襲撃の件も事細かにだ。俺が話している間、カミロは茶化すこともなく真剣に聞いていた。

　驚きの表情が少なかったのは、少なくとも第７皇女であることくらいは知ってるってことだろうか。

「なるほどね……」

　俺が話し終えると、カミロは椅子に深く座り直し、天井を仰ぎ見た。しきりに口髭をいじっているのは、ある程度の情報を持っているが話すべきか迷っているときのヤツの癖だ。

　俺たちは固唾を呑んでいつ話し始めるかと待ち構えている。ヘレンが今にも飛びかかりそうだが、それは俺が抑えておいた。

　やがて、カミロは大きな溜め息を一つついて、俺達に向き直る。

「まず１つ、彼女はここに来たし、場所を教えたのは俺だ」

　ヘレンがいよいよ飛びかかりそうだが、俺とディアナで抑える。俺１人じゃちょっと厳しくなってきた。

「何を依頼するかはなんとなく分かっていたが、エイゾウなら断るだろうと思ったからな。それに何らかの危害を加えようものなら侯爵の耳に入るぞ、と脅しておいたし」

「それは信頼と受け取って良いのか？」

「もちろん」

　俺は苦笑しながら言ったが、カミロは涼しい顔をして受け流した。確かに誘われて「それじゃあ」とホイホイ行くと思っているなら、居場所を教えたりはしないか。少なくともそれでカミロも困ることになる程度には貢献しているつもりだしな。

「で、１番気にしているだろう、襲撃者たちの正体だが……」

　カミロは一度そこで言葉を切る。静寂が部屋を支配した。ゴクリ、と俺達の誰かがツバを飲み込む音が聞こえたような気がする。もしかすると自分自身かもしれない。

　一瞬のような、永遠のような時間。続くカミロの言葉は、

「今のところは確定はできんな」

　だった。俺たちは一斉にジト目でカミロを見やる。

「そりゃそんな事があった、ってのは今知ったんだぞ。分かるもんかい」

　カミロは口を尖らせて言う。言われてみればそれはそうなのだが、カミロはやり手の商人だ。話の切れっ端だけでも知っているものかと思ってしまっても文句は言えないと思う。

「とは言っても、それだけでお前達を帰したんじゃあ、お前達もスッキリしないし、俺にもメンツってもんがある。ちゃんと調べとくよ」

「あ、ああ、頼むぞ」

「心当たりがなくはないからな、すぐに分かると思う」

「それじゃあ、また来週来ることにするよ」

「そうしてくれるか。すまんな」

「いや、早いこと解決するならそれに越したことはないからな」

　その後は番頭さんが戻ってくるまで普通の話をする。マリウスは都で頑張っていて伯爵としての地歩を固めたらしい。それを聞いてディアナが嬉しそうにしていたが、貴族の世界も大変だな……。

　やがて番頭さんが戻ってきて、俺達は部屋を出た。珍しくカミロがそのまま番頭さんを呼びつけていたが、早速行動に移してくれているのだろうか。そうだとしたらありがたいことだ。

　バタンと扉を閉めた後、ヘレンがボソリとつぶやく。

「アイツ、怒ってたな」

「そうなのか？」

「大事な知人が危ない目にあったんで、相手にもだろうけど、自分にもキレてんだなありゃ」

　俺にはいつもより多少真剣なだけで、飄々としたいつものカミロに見えたが、付き合いがそこそこ長いらしいヘレンから見るとそうではないようだ。

　もう閉じてしまって何も聞こえてはこない扉に、俺は少しだけ頭を下げた。

## 子は育つ

2020年1月20日

　下に降りて裏手に回ると、ルーシーがパタパタとしっぽを振りながら突進してきた。俺はそれをしゃがんで受け止める。以前よりも衝撃が増していて、彼女の成長っぷりを如実にあらわしていた。

　そのうち避けないといけなくなるだろうか。いや、吹っ飛ばされながらも受け止めようとしている自分（もしくはディアナだ）の姿が見える気もするな。

「いつもすまないね」

「いえいえ、とんでもない」

　丁稚の子にチップを渡しながら言うと、はにかみながら彼は答えた。見た感じでは１０代になるかならないかくらいの歳に見えるが、彼もいずれは立派な青年になって行くのだろうな。

　案外、カミロや番頭さんは一緒に酒を飲む日でも待ちわびているのかも知れない。

「そう言えば、カミロに奥さんや子供はいないのか？」

「私は聞いたことないですね」

「アタイも。昔にいたってのも聞いたことない」

　俺の疑問に丁稚さんとヘレンが答える。人のことは言えないが、いい歳して成功までしているカミロに結婚経験がないってのは、この世界ではレアなのでは。

「とすると、”悪ガキ３人組”の中だと兄様の結婚が一番早いのかしらね」

「その”悪ガキ３人組”ってのはなんだ」

「あなたと、カミロさんと兄様の３人。いつもつるんで遊んでるでしょう？」

「いや……うん……」

　俺達の関係を改めて言われると、たしかに悪ガキがつるんでるだけのような気もする。なので、それ以上の反論はしないでおいた。

　俺はクルルの首をさすってやりながら、荷車の方へと連れて行く。クルルも機嫌は良さそうだ。

「マリウスの結婚が早いってのは、やっぱり家同士の関係とかか？」

「そうね。特に侯爵の親類筋から嫁いでくる、って話になったら断れないでしょうね」

「あー」

　侯爵が伯爵を自分の派閥に留めておこうと思うなら、自分の親類筋から誰かを嫁がせて縁戚になってしまうのが手っ取り早い。借りがあるからマリウスも断れないだろう。そもそもメリットのほうが大きい可能性すらある。

　マリウスは伯爵としての地歩を固めたと言う話だし、もうとっくにこういう話が進んでいてもおかしくない。ただ、披露宴はアンネの件が終わってからにして欲しいところである。

　俺がそこに呼ばれるかどうかはおいといて、今の状況のままでディアナを１人都に送るのはちょっとゾッとしない。ヘレンを護衛につけるしかないが、それでも万が一ということはあるからなぁ。

　荷車にはいつも通りに買った品物が積まれている。よくよく考えれば、それなりの量を安定して調達できると言うのは、かなり凄いことだ。

　聞いてないから知らないが、遠征の補給物資もちょくちょく頼まれていたりする可能性は高い。そんな”便利”な人間をあの侯爵が自由にさせておくだろうか？　それこそ親類縁者の若い娘でも１人嫁がせるんじゃないかと思う。

　まぁ、その辺は貴族なりのなんらかの事情があるんだろう。言われても断りそうだしな、カミロ。

「よし、じゃあ帰るか」

　荷車にクルルを繋いで、全員乗り込んだことを確認した俺は皆にそう宣言する。

　答えはクルルの「クルーー」という一鳴きで、荷車はゆっくりとカミロの店を出ていった。

## 帰路

2020年1月22日

　カミロの店を出て帰り道、警戒は怠れないがのんびりとした時間が荷台を流れる。昨日まで雨を降らせていた雲もすっかり晴れて、太陽がさんさんと照りつけ、あまねく人々に祝福を与えていた。

　そんな街の道には、このところ外に出られなかった鬱憤を晴らすかのように様々な人々が行き交っている。

　出来ることなら何の憂いもなく、この時間を楽しみたかったところだが今は仕方あるまい。まだ交代の時間ではなかったのか、来るときに見かけた衛兵さんがまだ街の入り口に立っていて、俺たちは会釈をしながらそこを通り過ぎた。

　街道に出て速度を上げる。クルルの調子はいつもと変わらない。馬と同じくらいか少し速いくらいだ。うちの荷車は簡単な仕組みではあるが俺特製のサスペンションがついているので、他の馬車よりも速度を上げることが出来る。

　しかし、周りからはクルル……つまり、走竜が牽いているから速いように見えるだろう。一種のカモフラージュと言うわけである。

　そう言えば、以前にカミロがこのサスペンションの量産も近いと言っていたが、今はどれくらいまで進んでいるんだろうか。次来たときにでも聞いてみるか。

　青と緑と茶色の３色の中を竜車は進んでいく。今日襲いかかってくるなら、ここが最後のチャンスだろう。俺たちは周囲の警戒を強める。

　あたりに目を走らせながら、ヘレンが俺に言った。

「前から気になってたんだけどさ」

「おう」

「街から出てすぐに森に入らないのか？　街から見えなくなるくらいのところから入ってしまえばいいだろ？」

「ああ」

　今のような状況だと、狙われやすい街道を行く時間は少ないほうがいい。であれば、森に出入りしてます！　と誇示せんばかりにならない程度のところで、さっさと森に入って行方をくらませたほうがメリットはあるだろう。

　普段でもわざわざ目立つ街道を長い時間行く必要はない、と言われたら否定はしにくい。だがしかし、である。

「家に到着する時間が段違いなんだよ」

　前の世界のようにアスファルト舗装の道ではないとは言えども、そこは整備された道である。全く誇張なしに人の手が一切入っていない森の中を、荷車が通れる範囲を探りつつ行くよりも格段に速度が出せる。

　結果、時間にして相当な差が出てくると言うわけだ。午後にも仕事以外の作業なんかをするにしても、その時間は長いほうがいいしな。

　今回の場合は家に人を残してあるし、一刻も早く安否を確認できるという意味でもメリットがある。そのため、街道を急いでいるということだ。それにこっちを行ったほうが”いつも通り”だし、もし見張っているやつがいたときに異常を察知されにくい。

　アスファルト舗装の話はともかく、俺はそんなような説明をヘレンにする。

「なるほどねぇ」

「まあ、もっと切羽詰まっていたら、さっさと森に逃げ込んだほうがいいかも知れんが、まだそこまでではないと俺は思ってる。……甘いかな？」

「いや、大丈夫だろ。向こうさんが何に手間取ってんのかは知らないけど、モタモタしてるってことはまだ事態がヤバいことにはなってない、ってことだからな。向こうが本気なら、森から出た時点でとっくになんかされてるだろ。ま、今も気は抜けないけど」

　あまり頭は動かさずに、目だけ――に見えるけどきっと気配も探ってはいるんだろう――で周囲を警戒しながら、ヘレンはそう続けた。

「無事に帰れるよう、周囲の警戒はキッチリしなきゃな」

　俺がそう言ってヘレンが頷いたとき、街道に近い草むらがガサリと揺れ、荷車の上には緊張が走った。

## ほんのわずかの進展

2020年1月24日

　素早い動きでヘレンが剣を２本とも抜き放った。ただの獣であればいいが、そうでないときは……。

　一瞬、ヘレンが怪訝そうな顔をしたように見えた次の瞬間、飛び出してきたのは可愛いウサギなどではなかった。だが、かと言って俺たちに仇なす輩でもない。

　俺たちには見覚えがある顔。

「カテリナさんじゃないですか」

「えへへ、どうもー」

　それはエイムール家使用人の１人、カテリナさんだった。俺が言って、リケに竜車を止めてもらった。

　カテリナさんは茂みからガサゴソと出てきて、パタパタと叩いてひっついた木の葉を払い落としている。

　服装は勿論、エイムール邸にいるときのものではなく、俺とヘレンが帝国から戻ってきたあと合流した際の格好で、一見するとただの旅装のようだが、見えている護身用の短剣以外にも、いくつか暗器が忍ばせてあるらしい。

「今日は何のご用で？」

「まぁまぁ、その話は道すがら」

　俺たちは馬上……ならぬ、竜車上から応対していたのだが、カテリナさんはお構いなしに乗り込んできた。それをルーシーが尻尾を振って出迎える。

「わん！！」

「ルーシーちゃぁぁぁん」

　胸元に飛び込んだルーシーを抱きすくめるカテリナさん。それを見ているディアナが少し悔しそうである。俺は身の安全のために、少しディアナから距離を取ろうとしたが、一瞬の差で腕をがっしりと掴まれてしまった。

「それで？話ってのは？」

　リケが手綱を操り、再びゆっくりと動き出した竜車の上で、俺が水を向ける。ルーシーのモフモフを堪能しながら、カテリナさんが答えた。

「ある程度の想像は付いてると思いますが、話はエイゾウ様の”お客人”のことです」

　表情は緩んでいるのに、その声音は真剣そのものだ。まだ掴まれていた俺の腕がギュッと締まる。ダメージは多少来ているが、それは言わずにおく。

「どこからそれを、とは聞かないでおこう」

「ええ、そうなさった方がよろしいかと」

　カテリナさんはニヤリと笑う。きっと侯爵辺りからの情報だな。こういうの好きそうだし。

　それにしても、彼女はずっとこんな隠密みたいな仕事をしているのだろうか。そっちの方が気になる。

「で、本題ですが、少なくとも１名の王国の貴族の関与が確認されています。その背後関係までは掴みきれてませんが」

　帝国の誰かが単独で無茶をしたわけではないと言うことか。むしろ、王国内での動きだからこそ侯爵が察知できたのだろう。

「今回お客人を連れ出さなかったのは正解でした。そろそろしびれを切らす頃合いだったので。そっちはとあるお方がそれとなく牽制はしています。ただ、動けば尻尾をつかまれますけど、目を掻い潜れるかどうかの博打に出る可能性もありますからね。目的を達成してしまえば、後はどうとでも出来るかもしれませんし」

　牽制しているのは侯爵かマリウスのどっちだろう。あんまり危ない橋は渡らないで欲しいところだが、俺たちに危害が及ばないようにしてくれているのは間違いない。心の中でだけ、俺はどちらにともなく頭を下げておいた。

「で、それを伝えに来たってことは」

「ええ。ちょっと片が付くまではお客人をかくまっていて欲しいそうです。エイゾウ様たちにはご迷惑になるかと思いますが……」

　心底申し訳なさそうにカテリナさんは言った。

「その辺は覚悟していたのでお気になさらず」

　俺はなんでもない風に答えた。実際、俺たち側で困ることはほとんど無いのだ。それよりもアンネ本人と、長らくいないことによる影響の方が心配だ。

　そんな話をしている間に、森の入口に到着した。俺はてっきりカテリナさんもうちまで来るのかと思っていたが、カテリナさんは、

「それではここで。皆様によろしくお願いします。お嬢様、失礼します。またね、ルーシーちゃん。クルルちゃんも」

「わんわん！！」

「クルルルルルル」

　と、挨拶をしたが早いか、華麗に飛び降りる。森に入るのでスピードを落としていたとは言うものの、普通に降りれば危ない程度には出ていたのに、そんなことを感じさせなかった。俺が同じことをしたら、確実に足をくじくだろうな。

「ありがとうございましたー！」

　カテリナさんは大きく手を振って俺たちから離れていく。なるほど、旅人がちょっと乗せてもらったという

　それならばと、俺たちもそれっぽく手を振った。森の中に入れば、もう心配はいらないだろう。ホッと胸をなで下ろしながら、俺はどう説明をしたものか考えていた。

## 新製品の練習

2020年1月27日

　リケの操る竜車が森に入った。ホッとする感じを覚えて、俺は苦笑する。こっちの世界に来てから１年もしないが、ここから先はすっかり「勝手知ったる」領域になってきたな。

　他の人々からすると、ホッとするどころかゾッとするところらしいが、「住めば都」とでも言おうか、ここが生活拠点の俺には逆にピンとこない感覚である。

　そんな勝手知ったる森の中である。街や街道と比べると警戒の度合いは下がる。サーミャの話も合わせれば、天然の衛兵たる狼達が雨期のあとの腹減り状態で巡回しているようなので、潜伏しようにも難しかろうことは明白だしな。

　ただ、気を抜きすぎてワンチャン狙いされた場合や、熊に出くわしたりすると厄介なので最低限度の警戒は怠らない。

　警戒をしていると、魔力が濃いからだろうか、街にいるときよりも感覚が鋭いような気もする。また今度リディに聞いてみようかな。

「ただいま」

　結局、道中は何事もなく家にたどり着いた。音を聞きつけたのか、匂いか、はたまた気配なのかは分からないが、俺たちが戻ってきたのを察知したらしく、サーミャたちが表に出ていた。気晴らしに狩りにでも出ているかと思ったが、家にいたらしい。

「おかえり。何事もなかったか？」

「ああ。皆何事もない。いたって平穏無事に帰ってきたよ」

　俺がそう言うと、サーミャとリディ、そしてアンネがホッとした顔をする。俺たちが心配で狩りに行く気分でもなかったってことだろうか。なんとなく気恥ずかしいような、嬉しいような。

　リケがクルルを止めると、まずルーシーが荷台からぴょーんと飛び降りて、サーミャたちの前でおすわりをした。まるで彼女もただいまの挨拶をしているようだ。リディがしゃがんで「おかえり」と言いながら頭を撫でてやった。

　その後、クルルを荷車から外してやったり荷物を倉庫や家に運び入れたりといった、いつもの作業をする。アンネも少し手伝ってくれた。

「すみませんね、手伝っていただいて」

「いえいえ、体を動かすのは好きなので。それに、ご厄介になっている身分ですし」

　アンネは体躯に違わぬ力を発揮した。うちの家族はリディを除いて全員見た目より力持ちだったりするので、見かけそのままと言うのも新鮮と言えば新鮮である。うら若い女性に対する褒め言葉にならないのは重々承知なので、うっかり口に出したりはしないが。

　いつもより少し早くに片付けが終わったので、めいめいのことをする時間も少しだけ長い。

「よし、それじゃあ始めるか」

　鍛冶場に火を入れて、作業できる態勢を整えたら、板金を取って火床で加熱する。加熱した板金が薄くなるまで叩いて伸ばしたら、適当なところで切り分けた。

「親方、何してるんです？」

　いつものように鍛冶場に火を入れるなら、と自分の練習をしていたリケが覗き込んできた。

「そろそろ、籠手の一つも作ってみようかなと思ってな」

「おお、防具も作るんですか！」

　俺は頷いた。防具は俺の”力”でも手間がかかる割に作れる数が多くはないこともあって、これまではやってこなかったが、ヘレンが家族になって今回のアンネの件もあったりと、身を守る方法も考えたほうがいいのかなと思い始めたのだ。

　ただし、である。

「今日はまだ練習だ」

「親方に練習なんて必要なんですか？」

「もちろん」

　俺は苦笑しながら言った。いくらチート能力を貰ったといえども、元々は全くの未経験である。防具のようにとんでもなく複雑なものを作るなら、予めある程度の感覚を掴んでおきたい。

　ひとまず、指あたりの可動部の試作品を作るべく、俺は細かく鎚を動かした。

## 練習品完成

2020年1月29日

　薄くした板金をコツコツと叩いてＵの字に湾曲した形に整える。同じように計３つ加工したが、長さがそれぞれ違う。ちょっと長いのと、中くらいのと、短めの奴だ。

　それぞれの端に向き合うように小さな穴を開ける。こいつは実際の製品にはしないので、釘で適当に開けてバリも取らない。

　反対側の端は少し尖らせる。この出っ張りを穴にはめて、そこを関節にするのだ。

　その作業で使うのは、いつも使っている鎚ではなく、この工房に置いてはあったが、なかなか使う機会に恵まれなかった小さな鎚である。

「ううーん」

　俺は唸った。

「どうしました？　上手くいかないんですか？」

「いや、上手くいかないということはないんだが」

　都合上、作業そのものに不安はないし、上手くいっている。実際加工したものを見ても、どこにも不具合はない。

　ただ……

「今まで結構豪快に叩いてたから、勝手が違うなぁと」

「ああ。親方は細工もしてましたけど、鎚は同じでしたもんね」

　そうなのだ。ちょっとした彫金を施したりもしたが、そのときに使った鎚はいつものと同じやつである。

　今回はそれとは鎚が違うので、違和感が少しある。出来には全く影響していないのがありがたい。

「まだ老眼でなくてよかった……」

「ろうがん？」

「なんでもない。こっちの話」

　前の世界のままだったら、きっとこの作業は老眼に悩まされながらになっていたに違いない。３０歳とはいっても、若返らせてもらっておいて助かったな……。

　３つを組み合わせて、カタカタと動かす。なかなかスムーズだ。これは籠手の指先部分……のようなものである。

　指先はすぼまってないし、誰の身体に合わせたわけでも無いからやたらデカい。いかにアンネの身体が大きいと言っても、この大きさではブカブカで全く役に立つまい。

　いや、「全く」というのは若干嘘かも知れない。なぜなら、

「よっ」

　俺は軽く気合いを入れてナイフをそいつに振り下ろした。大抵のものなら、いとも簡単に切り裂いてしまうその刃は、籠手のようなものの上でピタリと止まった。

　お互いに傷も付いていないので、この状況を見るとあたかも俺が単にナイフの刃をあてがっているだけにしか見えなさそうだ。

　俺のナイフが止まるなら、大抵の武器では傷も付くまい。リディの里にあるはずのミスリルの剣でも持ってこないことには。

　つまり、現状でもこのわずかな範囲を守るだけなら役には立つ。どんなシチュエーションならそうなるのかはさっぱり分からないが。

　肉を見たときのルーシーもかくやというほど目を輝かせてリケが言った。

「はー。親方は防具を作っても凄いんですね」

「いや、うん。どうだろうな」

　弟子の賞賛に対して、この世界でただ１人真実を知っている俺は言葉を濁す。リケはそれを謙遜と受け取ったようで、興味は練習品のほうに移していた。

「この出来なら全体を作っても凄いものが出来ると思いますよ」

「そうかな？」

「ええ。不肖ながらもわたくしが保証します」

「リケが保証してくれるんなら安心だな」

　俺とリケは笑い合った。これでリケに防具についても教えられるなら、モリッツ工房の将来も安泰だろう。

　その日の夕食時、アンネにカミロやカテリナさんから今日聞いたことのあらましを伝えておいた。王国内の動きについては今のところ伏せてある。「まだ正確な情報は掴めていないので、もうしばらくは滞在してもらう」という話までである。

「すみません、ご迷惑をおかけします」

「いえ、お気になさらず」

　幸い、うちには鍛冶屋に似つかわしくない蓄えがある。一生食べていけるかと言うと少々怪しいが、しばらく食い扶持が１人増えるくらいなら、どうということもない。

　夕食の席上では、サーミャが翌日狩りに出ると宣言した。ディアナ、ヘレンはもちろん、リディも同行を申し出る。なんだかんだ体を動かす方が好きみたいなんだよな、リディ。

　折角なので、アンネも連れて行ってもらうように俺からお願いする。”黒の森”の詳細を帝国の人間に知られることのリスクは勿論あるが、皇女殿下１人が覚えていたところでなぁ、と言ったところである。

　こうして、状況の行き先はともかく、この日の夕食を楽しく終えられた俺たちは、早々に床についたのだった。

## いつもとちょっとだけ違う朝

2020年1月31日

　雨が上がってから更に１日が過ぎ、多少残っていたジメジメした空気もかなり薄れてきていた。

　俺は今日も水を汲みにクルル、ルーシーと湖へ向かう。

「ここらの保水ってどうなってるんだろうなぁ」

　森になっている以上、それらの樹々を賄えるだけの水がここいらの地面と地下にはあるはずだが、あまりそれを感じさせる湿度ではない。もしかすると魔力も併用しているとか？

「ありそうな話だな」

　俺はクルルとルーシーを見ながらひとりごちた。クルルは走竜だが、立派な竜の一種である。馬程度には大きい身体とその生命を維持するのに、大半を魔力で賄っているらしい。

　ルーシーも見た目にはまだ子狼だが、立派な魔物である。これからどんどん大きくなっていき、最大サイズだとクルルくらいになる可能性もある、とリディが言っていた。その身体と生命の維持も魔力で賄われる。

　それらを考えれば、ここいらの樹が魔力を使ってその立派な幹を維持していることも十分あり得るだろう。樹が魔物化するのか、したときに俺の知っている単語で言うところのトレントになるのかまではわからないが。

「おお……」

　湖についた俺は思わず感嘆の声をあげてしまった。湖に靄が出ていて、暁光とともに幻想的な世界を見せていたからだ。暁光にキラキラと光る湖面と赤橙に染まる靄、引き締めるように黒々と聳える森の樹々が美しい。前の世界で買ったちょっと良いカメラが手元にあれば、迷わずシャッターを切っていただろうな。

　こちらに来てこんな風景は初めて見たように思う。ちょっと大変な状況が続いているから、こういうサプライズは大歓迎だ。

「うひょっ」

　水を汲むために湖に手を付けると、いつにも増して冷たく身が引き締まる。水の冷たさを感じながら、俺とクルルで持ってきた瓶に水を入れていく。

　少し離れたところでは水温なんて関係ない、とばかりにクルルとルーシーは湖にざばんと飛び込んではしゃぎまわっていた。

　水を汲み終えたら、いつものとおりに湖に浸かりながらクルルとルーシーの身体を綺麗に拭いてやる。上がるとルーシーがブルブルと体を震わせ、俺とクルルに派手に水をかけるのもいつもどおりだ。

　何度言っても止めないので、多分分かってやってるんだろうな……。大した被害でもないからキツく言うつもりもないが。

　家に戻るといつもどおりの朝が始まっていた。いや、アンネが加わっているから、いつもではないか。アンネは基本朝が弱いようなのだが、今日は起きているな。

　その後、俺が朝食を作り終えて食べ始める直前、ルーシーがアンネにトコトコと近寄り、前足でたしたしと彼女の脚を叩いた。

「え？　え？」

　突然のことに狼狽するアンネ。それを見たディアナが目尻を地面につくかと思うほど下げながら言った。

「あら～～アンネお姉ちゃんからご飯欲しいのね～～」

「え？　そうなんです？」

　狼狽したままのアンネは俺の方を見ながら言った。俺は肉を置いた皿をアンネに差し出して頷く。ルーシーが「わん！」と鳴くと、アンネは意を決したように皿を受け取り、ルーシーのそばに置く。

　ルーシーはもう一度「わん！」と鳴いて、アンネのスネあたりにスリスリと身体をこすりつけた後、皿の肉をがっつき始めた。

　その後のアンネの様子はもう今更言うまでもないことだろう。一つ申し添えておくなら、俺の肩のHPは朝から順調に減った、と言うことだ。

　朝食を終えて、サーミャたちが狩りの準備を始める。アンネには勢子をやらせるのかと思ったが、サーミャが前に使っていた弓を貸すらしい。威力は俺が作って家族に渡しているものには劣るだろうが、それでもサーミャの愛用品だ、実用に支障はあるまい。

「いってらっしゃい」

「いってきます」

　俺とリケは他の皆を家の入口で送り出す。出発を今か今かと待っていたクルルとルーシーもそれぞれに「いってきます」の挨拶をして、出立していった。

## 納品物を増やそう

2020年2月3日

　皆を見送った後、鍛冶場に火を入れる。防具の続きもあるが、さしあたっては来週（今週か？）の納品物からだ。

「よーし、じゃあ始めるか」

「はい」

　森のしきたりから言って、明日は狩りは休みだろう（引き上げと解体はあるとしてもだ）から、剣は明日みんなに手伝ってもらうとして、今日はナイフなんかの鍛造品を作ることにする。

「剣もナイフも売れ行きは問題ないらしいが、そろそろ正式に槍を納品してもいい頃合いかも知れないなぁ」

「あれ？　前に作ってませんでした？」

「あれはカミロの依頼で一時的に量産して納品したやつだし」

　そしてその後、おそらくは侯爵から帝国側に流れたやつだ。その見返りに帝国がほぼ放棄していた領地のいくらかをを得たようなのである。きちんとした詳細は怖くて確認してないが。

　しかし、それが本当なら俺の手になる槍は王国よりも帝国の方に多くあることになる。王国内に流通させるべく量産してもいいかなと思うのは、それが面白くない、というのも正直なところだ。

「剣に槍ですか。親方なら”高級モデル”の数を少し減らしてでも槍をいくつか作ったほうが良いかも知れないですね」

　顎に手を当てて考え込むようにリケが言った。彼女のお墨付きなら平気だろう。俺みたいなチートと違って、ちゃんとものを作ってきている人間（ドワーフだが）だからだ。

　だが、今後のためにも一応理由は聞いておきたい。

「そうか？」

「ええ」

　リケは顎から手を離して頷く。

「売れ行きが問題ないのは事実でしょうし、カミロさんがやりての商人なのは間違いないので、しばらくは安泰だと思いますが、極端な話、この世の人間が１人１本ずつ親方のナイフを持つようになれば、それ以上ナイフは売れないわけですよ」

「そりゃそうだ」

「まあ、それは極端ですけど、どこかで売れ行きが鈍ることは十分考えられます。そのときにスムーズに別の品物に切り替えられたほうが良いでしょうし、それまでに品質を十分に広めておいたほうが何かと良いかと」

「ふむ」

　最初はお試しみたいな感じでカミロに広めてもらい、剣やナイフの売れ行きが落ちたタイミングで満を持して量産、とやるわけか。

　鍛冶屋に似つかわしくない手持ちがあるとは言っても、家族と一生のんびり暮らすにはまだ程遠い。それまでは何らかの食い扶持が必要なわけで、目標を目の前にして稼げなくなるのも怖いな。

「あとはカミロが売っ」

「親方の品質なら売らない商人はいないと思いますよ」

　俺としてはカミロが売ってくれるかどうかが心配だったので、それを言おうとしたが、リケは食い気味に心配を否定した。あまりに勢い込んで言ってくるので、ちょっと引いている。

「リ、リケがそう言うなら間違いないな……。先にナイフでも打つか」

　俺はギリギリ威厳を保てる程度には持ち直すと、板金を取って火床に突っ込んだ。温度を見て、叩き、思う形に仕上げる、いつもの通りの作業が始まる。

　だが、新しいことを始めることが決まった俺の鎚は、こころなしかいつもより軽く板金の上を跳ね回るのだった。

## はじめての狩り

2020年2月5日

　どさり、と音を立てて、アンネが床に倒れ込む。それを見下ろすうちの家族。サーミャにディアナ、リディにヘレン、そしてリケも起こそうとはしない。

　アンネの呼吸はひどく荒い。やがて、それが少しずつ小さくなっていき、大きく息を吸い込んだかと思うと……

「疲れたーーーっ！」

　アンネは叫んだ。隣人はいないのだが、ここがアパートで壁が薄ければ隣室からの壁ドンが１００％確定の声量である。

　俺たちが今日の仕事を終え、少しして帰ってきた狩りチームのために玄関の扉を開けてすぐの出来事だ。

「だろうな」

　俺は苦笑しながら言った。俺が着いていったことはないが、そこらのお嬢様とは比べ物にならない体力の持ち主であるディアナでも、最初の頃はへばっていた。

　前の世界でも野生生物はかなりのスピードで走ることもあるらしいので、それを追ったりするのは相当に骨が折れる事だろう。

「でも、いい動きしてたよ」

「森の中じゃなかったですけど、狩りには何回か行ったことがありますからね」

　サーミャの言葉に横たえた体を起こしつつ、アンネが応えた。なるほど。ディアナほどではないかもしれないが、それなりにお転婆だったのは間違いないようだ。でなければ両手剣なんて欲しがるわけもないか。

「それにしてもあの猪は大きかったですねぇ！」

「今日のは特にね。普通は流石にあんなに大きいことはないぜ」

「私も生まれてはじめてあんな大きいのを見ました」

　今日の獲物は猪だったらしく、狩りの様子を話しながらアンネ、サーミャ、リディがキャッキャとはしゃいでいる。

　特にアンネは息が整ってからは興奮し通しである。よほど森の中での狩りが肌にあったのだろう。今も「こーんなに」とかなんとか、大きな体をぐっと伸ばして獲物の大きさを表現したりしていて、その身体の大きさに反比例するかのように、童心に帰っているように見える。

「そんなにデカかったのか」

「クルルがいなかったらちょっと困ってたかも。クルルがいるし、人手も多いからいけるだろってサーミャが」

「へえ」

　俺とディアナがサーミャの方を見る。視線に気づいたサーミャは肩をすくめながら言った。

「見つけたのはルーシーだけどな」

「そうなのか？」

「わん！！」

　ルーシーがパタパタと尻尾を振って答える。俺はその頭をなでてやった。立派な猟犬、いや、猟狼に育ちつつあるな。そのうちウサギくらいなら自分で獲ってきそうだな。そのときになっても、うちにいようと思ってくれるかどうかは彼女次第だ。

　獲物の引き上げは翌日なので、とりあえず今日のところは普通の飯にしたが、その最中にも関わらずアンネはこっくりこっくりと船を漕いでいた。今日はさぞかしぐっすり眠れることだろう。……明日ちゃんと起きてくるよな？

　翌朝、俺の心配を他所にアンネは起きていた。あれだけ疲れていたら筋肉痛やらなんやらで、なかなか起きてこれないものと思っていたが。目はぱっちりと開いていて、動きも機敏である。

　疑問に思いつつ、朝飯を並べていると、アンネは今までで一番いい笑顔で言った。

「引き上げ楽しみですね！」

　なるほどね。俺は微笑みを浮かべながら朝食を並べるのだった。

## 大成果

2020年2月7日

　そんな和やかな朝食を終え、出かける準備をする。勝手知ったる森の中、猪の引き上げに行くだけではあるが、何があるか分からないので、各々武器を携えていく。

　刺客がうろついていなかったとしても、もっと怖い熊なんかがうろついている可能性は十分にあるからな。出くわしたときに最も被害無く切り抜けるためには、素早く倒してしまうしかない。攻撃は最大の防御、というわけである。

　ただし、アンネは昨日打った売り物のナイフ（一般モデル）だ。短槍ならまだしも、さすがに両手剣はなかろう、ということでそうなったわけだが、本人はいたって不満そうである。

「エイゾウさんもそんな長い武器持ってるのに」

「いや、さすがにあの両手剣よりはかなり短いですからね」

　ふくれっ面で指摘してくるアンネを軽くいなす。もちろん、”万が一”も考えてこうしているのだが。両手剣に元々の体躯の大きさを考えると、槍でも多少苦労しそうなリーチになる。

　９割がた大丈夫とは思っているが、残りの１０％は家族の誰かが死なないまでも大ケガをすることはありうるのだ。１００％安全だと判断できるまでは用心するに越したことはない。

　高級モデルではなく、一般モデルにしたのも同じ理由だ。何かあったときになるべく被害は少ないほうがいい。

　そんな俺の考えを他所に、その一点以外はクルルとルーシーに負けず劣らずご機嫌な様子でアンネは森の中を歩く。彼女の様子を反映するかのように、今日は陽の光がそこかしこに差していてかなり森の中が明るい。

　遠くにリスっぽい生き物や、いつも狩っているのとは違う種類の鹿の姿を見かけ、そのたびにアンネがあれは何かと尋ねて、サーミャが答えている。

　昨日は見なかったのかと俺がアンネに聞くと、

「昨日はそれどころじゃなかったので」

　という答えが返ってきた。ああ、なるほどな。万が一を視野に入れたとしても、この森を気に入ってくれるに越したことはない。楽しかった思い出の場所になってくれれば変な気を起こす確率も減るだろう。……減るよな？

　のんびりと、いつもよりも時間をかけて沈めた場所にたどり着いた。

「デカいな」

「そう言っただろ？」

　俺の言葉にサーミャが胸を張った。まだ湖にも入ってないが、その威容が見て取れる。体長ではなく、体高で俺の身長くらいありそうだ。重さで言えば５００キロ近いのではないだろうか。前の世界でヨーロッパの方ではデカいとそれくらいのがいるとは聞いたが、ほとんど怪物だな。

　リケとリディにはいつもより余分に木を切っておいてもらう。その間に引き上げだ。手分けして脚を持ち、引っ張る。多少の浮力ではなんともならないくらいの重さを感じた。

「この重さだったら、ここまで引きずるのも大変だったろ」

「アンネさんが疲れ果ててたのもそれなのよ」

　今度はディアナがそう答えた。走り回った挙げ句の力仕事はそりゃ疲れるわな。

　引き上げた猪はやはりとんでもなく大きかった。人が２人くらい隠れられそうだ。前の世界のアニメ映画で猪の毛皮をかぶって匂いを誤魔化しているという猟師集団がいたが、これなら出来そうだなと思える。

　内臓は抜いてあったが、それでもこの重さということは内臓も相当な量があったに違いない。ここらの狼たちにとっては良いごちそうになったことだろう。

　皆で力を合わせて、なんとか湖から引きずりあげ、リケとリディが組み立ててくれた運搬台に乗せる。いつもよりも大きく作ってくれたのだが、それでも少しはみ出しそうなくらいにデカい。

「よし、それじゃあ頼んだぞ。無理だったら止まれよ」

「クルルルルルルル」

　そう言ってクルルの首筋をさすると、彼女は任せとけとでも言うように一声鳴く。

　直後、ズシリと言う音が聞こえそうな一歩を踏み出し、ゆっくりと森の中を進んでいった。

## 持ち帰る

2020年2月10日

　地面のぬかるみは殆どないが、さすがのクルルでも今回の獲物の運搬には少しだけ苦労しているようだ。いつもよりも歩みが遅い。

　無理なようなら俺たちで手伝ってやろうかと思ったが、ゆっくりながらもペースが落ちているようなことはないので、そのまま見守る。俺の負い目からくる幻想かも知れないが、なんだか少し嬉しそうにも見えるし。

　ルーシーはと言うと、そんなクルルの周りを駆け回りながら、お姉ちゃん頑張れとでも言うように「わんわん！」と吠えていて、俺たちをほっこりさせた。

　とは言え、俺たちはほっこりだけしてもいられない。帰り道はアンネの追っ手も勿論だが、肉を運んでいるのだ。こいつを狙う獣がいないとも限らない。熊や猪は勿論のこと、狼でも群れれば脅威になりえる。それらの兆候を見落とさないようにするのが俺たちの役割だ。

　適度に散って周囲を警戒する。俺たちは慣れているから、ほとんど言葉をかわさなくても良いが、アンネはよく分からないだろうから、俺のそばにつけておいた。俺たちの後方にはヘレンがいる。もし何かあれば”迅雷”の二つ名を思い知ることになるだろう。

　いつもより時間はかかったが、無事に戻ってくることができた。これから解体に取り掛かるわけだが、木に吊るすにも重さが半端ではない。そこそこ程度の太さの枝ならあっさり折れてしまうだろう。

　大きさ的にも吊るしてしまうと手が届かない箇所が出そうなので、寝かせた状態で解体することにした。解体はアンネにも手伝ってもらうことにする。彼女のナイフは一般モデルではあるが、切れ味は保証できる。サーミャが教えながら皮を剥いでいくと、最初はぎこちなかった手付きも少しずつ慣れてきた。猪は元がデカいから、多少脂が減ったところで問題はないしな。

　一仕事終えたクルルは美味そうに水を飲んだあと、のんびりとルーシーと一緒に俺たちの作業を見守っている。そんな中、解体を進めていき、昼を少し回ったくらいにようやっと猪は肉になった。

「こうなるとお肉ですね」

　初めての解体作業を終えたアンネは感心したように言った。バラやヒレといった目にしたことのある肉の姿になる。貴族なんかだとこの状態で見たことがある、というのも珍しい部類に入るのではなかろうか。

「命をもらう、と言うことはこの森では特に意識されてます。こういった作業が身近だからでしょうね。かと言って町や都で行われていないわけではなく、単に目にしないだけです」

　そんなアンネに俺はなんとなく諭すように話す。こういう説教くさいことはおっさんの意識が色濃く出てしまっているように思えて、少し気恥ずかしいようなそんな気分になるが、皇女殿下に教える機会なんてそうそう無いだろうからな。

「なるほど……」

　思うところがあるのか、アンネは考えこむように言った。別に帝国で概念を広げてほしいわけでもないが、誰かがそういう意識を持っているのは良いことにつながる、そんなような気がする。

　この後は猪肉を塩につけたり、干したりと保存作業を行う。無論、お楽しみの分は別にとってある。今日は確保できた肉が多いこともあるが、よく食べるのが１人増えているので、お楽しみも多くとっておいた。

「腹減ったー！」

　一通りの作業が終わって、そう叫んだのはサーミャだ。そんな彼女を「行儀が悪い」とリケがたしなめている。とは言え、腹具合は皆似たりよったりだろう。口に出すかどうかだけだ。その証拠に、

「今日は腕によりをかけてやるから、もう少し待ってな」

　俺がそう言うと、サーミャは勿論、リディも喜色満面で喝采を叫んだ。

## 猪肉パ

2020年2月12日

「おまたせしました、お嬢様がた」

　俺はそう言ってさっき解体したばかりの猪肉で作った料理をテーブルに並べていく。せっかくなので、テーブルはテラスに出してクルルも一緒にお昼出来るようにした。

　作ったのはシンプルに塩コショウのみで焼いたものと、醤油と果実で焼肉風にしたもの、あとは果実ソースで洋風（要は当地風だが）に仕上げたものだ。

　それぞれヒレ、バラ、ロースを使って食べ比べ出来るようにしてある。そこに無発酵パンである。

　飲み物はミント茶もあるが、今日の仕事は時間的にも無理だろうと判断して酒も許可した。なので、早速リケがいそいそと火酒をカップに注いでいたのも問題ないのである。

　クルルとルーシーには火を通しただけで味付けは一切していないものを冷ましてから与える。

「いただきます」

　皆で手を合わせてそう言ってから、食事が始まった。

「好みもあるでしょうから、アンネさんも好きなやつだけ食べてください」

　醤油の”臭い”は発酵由来のものも含まれるし、ここらにはないものだから、慣れてない人には辛かろう。前の世界で慣れないとパクチーがダメなのと似た理屈である。慣れてもダメな人はダメだろうが。

「いえ、大丈夫です」

　アンネは焼肉風にしたものをフォークで刺すと、口に運んだ。すると、その目が少し見開かれる。

「ど、どうです……？」

　全然ダメだったらどうしようかと不安になったが、アンネは、

「美味しいです！」

　と大きな声で言った。気に入ったんなら良かった。

「これはエールとかが合いそうですねぇ」

「そういう人もいますね」

　焼肉には白米派とビール派がいるそうだが、アンネはビール派らしい。あいにくうちにビール、じゃなくてエールはないが。まぁ、白米もないので痛み分けである。

「雨季の後なのにちゃんと脂のってるんだなぁ」

「硬くもないわね」

　塩コショウのやつを１切れつまんでみた俺の感嘆に、ディアナが乗っかる。

　図体がでかいと、それを支えるために筋肉が必要になり、重い筋肉を支えるために筋肉が……と、硬くなりがちだと聞いたことがあるし、この雨季で食わない分脂肪も減っているかと思ったが、それも無いようである。この森の猪の食性はどうなってるんだろうな……。

「このショウユ？　と言う調味料はなかなかいいですね」

「北方の特産品です。知人に骨を折ってもらいました。独特の風味ですが、北方では欠かせないものです」

「なるほど」

「生産量も多いと思いますし、やりようによっては帝国に安定供給も可能だと思いますよ？」

「ほほう」

　ヒョイパクと１人で全て平らげそうな勢いで食べていたアンネの目がキラリと光る。これはちょっと考えてそうだ。

　帝国へ安定供給されるか、生産を開始してくれれば多少は値段が下がるだろうか。一介の鍛冶屋が広めると言うのは本意ではないので、アンネが広めてくれると大本は誰かという話はあるにせよ、助かるのだが。

　その後、アンネに限らず家族の皆に北方の調味料や食品についてあれこれ聞かれる。

　インストールの知識によれば納豆や梅干しもあるみたいなので、その辺の話をしたのだが、

「ナットウは変な臭いがして糸が引いてる、って腐ってるの？」

「いや、腐ってはない」

「でも傷んで変な臭いがしてるんですよね？　昔に実家で豆が腐ったときそんな感じでしたよ」

「そうだが、食べて腹を壊す腐り方ではなく、良い腐り方と言うか……」

「腐ってるんじゃん」

「腐ってはない。チーズと同じだ」

「帝国だとうちの食卓にも並ぶことありますけど、チーズはそんなに臭くないですよ？」

　チーズも乳酸菌による乳酸発酵と酵素による凝固で出来るわけだが、いわゆるウオッシュタイプでもないとそんなにひどい臭いのするものは出回らないだろう。チョイスをミスった気はする。

　かと言って、この世界だとまだ発見されていない”菌”と言う概念をおいそれと使って解説するのもはばかられる。結果、発酵と腐敗の違いを説明するのに四苦八苦するのだった。

　どっちも現象としては全く同じものだからな。これはうちで納豆食べるのは無理そうだ……。

## 試合（？）開始

2020年2月14日

　そうして昼飯を終えると、仕事をするには短いがダラダラするには時間が長い、みたいな中途半端な時間になってしまった。

　防具作製の練習をするにも、今から火床に火を入れてとなると大したことはできまい。

「たまには身体を動かすか」

　単に身体を動かすということだけであるならば、鍛冶仕事や家事仕事なんかでそれなりに動かしてはいる。しかし、俺は狩りには出ないし、このところ剣の稽古もヘレンに任せっぱなしで俺はしていない。

　流石に太り始めたりはしていないが、健康のためには作業以外で運動したほうがいいのではないだろうかと思い立ったわけである。前の世界でも健康診断で「運動しろ」ってのはずっと言われてたしな……。デスクワーカーはそう言われがちだが。

「あれ、エイゾウもやるのか？」

　俺が稽古用の木刀を手に外に出ると、気がついたヘレンが声をかけてきた。

「ああ、たまにはやらないと鈍りそうでな」

　とりあえず俺はそう返すが、滅多なことでは腕前が落ちることはないと思う。ほぼ貰った能力で賄っているからな。

　それでも、動かしているのとそうでないのとでは差があるだろうし、それを実感するのはいざというときなのだ。確認のためにも身体を動かしておいて損はあるまい。

「じゃあ、アタイとやろうぜ！」

「おお、いいぞ」

「やった！」

　うちにきてから一番喜んでるんじゃないか、と思うほど喜ぶヘレン。もしかするとヘレンと稽古と言うか試合と言うか、まぁそういうことをするのは初めてうちに注文しに来たとき以来か？

　俺は念入りに準備体操をする。あんまり前の世界の概念を持ち込みたくはないのだが、こればっかりは俺の身体に関わるからな。準備運動を怠って筋を痛めたら仕事に差し障るし。

「気合入ってるわね」

　俺の準備運動を見たディアナがやや茶化すように言う。

「こうしておくと怪我しにくくなるんだよ」

「そうなの？」

「……と、うちの爺さんに習った」

「北方の風習って面白いわね。儀礼と実益があいまってる感じで」

「そうだな」

　いい感じにディアナが解釈してくれたので、準備運動をしながら、それに乗っかることにした。

　最後にグッグッと身体のあちこちを伸ばしたら、木刀を手にヘレンと向き合う。ヘレンも木剣（二刀流である）を手に俺に向き直る。

　俺は頭を下げる礼、ヘレンは剣を胸元に引き寄せる形の礼を互いに交わす。

　俺は木刀を正眼に構え、ヘレンは両方の剣を前に出して構える。

　こうして対峙してみると、ヘレンのテンションが上がったことにつれて、その気迫もドンドン増していることがよく分かる。さながら大きな一頭の狼に対峙しているかのような気迫。そこらの雑兵やら、前に戦ったゴブリンくらいならこの気迫だけで戦意を喪失しているかも知れない。

　ジリジリと２人で間合いを測る。俺のほうが武器のリーチは長いが、ヘレンはリーチを補ってあまりあるスピードを持っている。

　次の瞬間、ヘレンの姿がかき消えた。

「速い！」

　流石に迅雷の二つ名は伊達ではない。なんとかどこから攻撃が来るのかを察知できた俺は、そっちに向かって刀を振る。とりあえず防げればいい、という以上でも以下でもない。

　ガツッと鈍い音が響き、衝撃が俺の手を襲った。グッと手の内を締めて木刀を取り落とさないようにするのが精一杯だ。反撃なんか考えようもない。

「流石に一撃じゃ無理か」

　間合いを開けたヘレンがニヤッと笑って言った。

「今の見えました？」

「エイゾウが辛うじて凌ぐ瞬間だけは、ですね。そこまでは全然です」

「ですよね」

　稽古を止めて観戦していたアンネとディアナの声が聞こえる。ヘレンはと言うと、更に気迫を増していた。いかんな、火がついたか。

　俺は全神経をこの一戦に集中させるべく、軽く肩を回した。

## 四面楚歌？

2020年2月17日

　俺は再び木刀を構える。動きの速さと手数では、俺はヘレンに及ぶべくもない。となると、対抗するには重さと鋭さしかないだろう。

　ヘレンの速度がリーチを補ってあまりあるとは言っても、物理的なリーチは俺のほうが長い。ヘレンのほうが背が高い分腕も長いが、得物の長さがぜんぜん違うからな。

「フッ」

　息を吐きながら鋭く突きを繰り出す。そこいらの野盗くらいなら、この一突きで行動不能に出来ただろう。稽古用の木刀とは言っても重い木の棒に変わりはないのだ。

　だが残念なことに、ヘレンはそこいらの野盗ではない。あっさりと片手の木剣で打ち払われ、そのままもう片方で打ちかかってくる。

　俺は突きを放った木刀を引き戻しながら、そのまま切りかかってきた木剣を打ち払う。脇腹が空くのは覚悟の上だ。

　案の定、空いた脇腹にものすごい速さで木剣が襲いかかってくる。木剣でも当たればアバラの一本も覚悟しないといけないだろう一撃。

　手を返してそちらもなんとか防いだ。一呼吸の間に行われる攻防。しかし、俺の攻撃１回につきヘレンは２回攻撃出来ている。このままだと分が悪いな。

　物理的なリーチでは俺のほうが勝ってるから、もう少しなんとかなるかと思っていたが、そこは”迅雷”、ものともしない速度でデメリットを完全に打ち消している。

「今、本気で狙っただろ」

　スキを伺いながら、俺はヘレンに話しかける。ちょっとでも気が緩むかと思ったが、ヘレンは微塵もスキを見せずに、

「先にヤバい突きを放ってきたのはエイゾウだろ」

　とニヤッと笑った。火をつけたのは俺だったか。じゃあ、仕方ない。

「そろそろ続けてやるか」

「おっ、いいね！」

　俺とヘレンは少し間合いを広げて、お互い同時に深呼吸を１つする。そして同時に深く息を吸い込み、次の瞬間全力でぶつかった。

「竜巻が２つ、互いにぶつかり合っているようだった」と、ディアナはその日の夕食で語った。

　結局あの後３０分ばかり打ち合いを続け、先に疲れた俺が木刀を下ろしたところで終わりになったのだ。

　ディアナは普段からヘレンの剣を受けているだけあって、そこそこ俺とヘレンの動きを追えていたようだ。だが、

「すごい、ヤバかった」

「目で追うのが精一杯でした」

「辛うじて追えましたけど、何が起きてるのかは全然分からなかったですね」

「私はそもそもよく見えてません」

　それぞれサーミャ、アンネ、リディ、リケの評である。語彙力はともかく、狩人のサーミャ、おそらくは武術の心得があるのだろうアンネはそれなりに見えていて、こことは違うが森で暮らしていて目が鍛えられているリディは辛うじて見えていたようだが、リケは全くである。少し悔しそうだが、ドワーフといえども鍛冶師だからな……。そこはこうもっと別のところを頑張ってくれればいいんだよ？

「うーん、私ももっと頑張らなきゃ」

　肉を頬張りながら、ディアナが言った。あんまり強くなりすぎても、俺がマリウスに合わせる顔がなくなっていくだけなので程々にして欲しいものであるが、本人はものすごくやる気だし引き止めるのも気が咎める。

　俺が困り顔で同じくガツガツと肉を食べていたヘレンのほうを見ると、ニンマリと笑った。こいつ徹底的に鍛えるつもりだ……。

「私も少しやってみようかなぁ……」

「ナイフの扱い方から覚えますか？」

「そうですね……いざと言うとき、親方の手を煩わせなくても済みますし」

　ボソリとつぶやいたリケにリディが乗っかった。ああ見えてナイフ捌きはなかなか大したものなのである。確かに武力的な意味合いで強くなってくれれば、俺に万が一があってもなんとなるだろう。そんな意味でも非常に止めにくい。

　こうして周囲の女性がどんどん強くなっていく重圧に、俺の胃は少しだけキリリと抗議の声を上げるのだった。

## 見かけ上は平和な日々

2020年2月19日

　翌日からは俺とリケ以外には板金や型を作ったり、作った型に鉄を流し込んだりしてもらい、その間に俺とリケで剣やナイフを作っていく。”いつも”通りの生活だ。

　アンネはお客さんではあるので、毎回「やらなくてもいい」と言っているのだが、「やることもないので」と積極的に手伝ってくれている。そんなアンネも最初こそ型作りの粘土や、板金を打つのにも一喜一憂していたが、やがて自分で色々とサーミャ達にコツやなんかを聞いていた。

「ヘレンさん、型のここの部分がうまくいかなくて……」

「もっとグッと押し付ける感じで平気だぞ」

「こ、こうですか？」

「そうそう。隙間があるとエイゾウたちの手間が増えるからな」

「リディさんみたいにきれいな板にならなくて……」

「そうですね……あまり流れる速度が変わらないように注いでみてください」

「結構難しいですね」

「水とはちょっと違うでしょう？　私も最初は難しかったです」

　とまぁ、こんな感じで、家族と一緒にワイワイとやってくれている。仕事ではあるのだが、仕事にも楽しみがなくては。一応スローライフが目標なのだから。

「一通り落ち着いたら、ちょっと出かけたいな」

　ある日の作業中、そんなことを呟いた。このところ、こうして家で作業したりしている間が一番落ち着ける時間になっている。

　日々の休憩やら食事時間やらで、特段ストレスが大きく溜まっているというわけでもないが、それとは別のリフレッシュタイムがあってもバチは当たらんのではなかろうか。

「すみません……」

　それを聞きつけたアンネがシュンとしてしまう。しまった、ちょっと迂闊な発言だったか。俺は慌ててフォローする。

「いえいえ、アンネさんが悪いわけじゃないんですし。片付いたあと、少しでも時間が取れたらアンネさんも一緒に行きましょう」

「いいんですか！？」

「もちろん」

　一瞬前とは打って変わって花が咲くような笑顔になるアンネ。ゴタゴタのきっかけではあるし、これらの黒幕がアンネだったという可能性も完全に捨ててはいないが、それはほぼなかろう。

　なぜなら、もし俺たちを害しようとか、強制的に連れ出そうとするなら、今までにチャンスはいくらでもあったからだ。

　可能性としてはもっと適したチャンスを待っている、とかはあるかも知れない。しかし、それだとあまりに時間がかかりすぎている。

　いくらいい製品を作る鍛冶屋だと言っても、そこまでのコストを掛けるほどだろうか、と我が事ながら思うのである。

　なので、最後に一緒に釣りなりピクニックなりに行くのは問題なかろう。……最後の警戒ポイントではあるけども、と言う判断である。

「最後くらい、いい思い出を残して帰りましょう」

「……そうですね」

　アンネは少し寂しそうに言った。少しはこの生活を気に入ってくれているのだろうか。そのまま「あの森ではこんな生活をしているのだから、帝国としては手を出すのはよそう」と思ってくれると良いのだが。

　王国の方は今のところマリウス（と、侯爵閣下）が食い止めてくれるだろうから、あんまり心配はしていない。

　そのマリウス達も今頃はこの問題の解決のために東奔西走してくれているのだろうか。もしそうなら、有り難いことである。心の中でそっと感謝を述べながら、剣を打つ鎚に力を込めた。

## いざ納品へ

2020年2月21日

　日々の作業で今回は納品物に槍を少し追加しておいた。と言ってもまとまった数ではなく、８本程度である。

　グレードは３本が高級、５本が普通で、以前に大量に収めたのと同じ形にしてある。言われないだろうが、もしもいらないと言われても、万が一に備えてうちに置いといても困らない本数である。今は倉庫もあるしな。

　生産能力としては俺の腕前が上がっているのか、剣もナイフも高級モデルの数を減らさずに済んだ。そうできる範囲がどこか、と言う話でもあるわけだが、この程度なら問題ないということだろう。

「親方は相変わらず凄い速度で作りますね」

「そうは言っても限界はあるぞ」

「それはそうなんですけどね。でも親方１人で３人……いや、それ以上の鍛冶師の仕事してますよ」

「そうか……うーん、それで仕事辞めてしまうのが出てくるのは本意ではないな」

「そのあたりは少し考えに入れても良いかも知れません。実際、量だけで言えばナイフや剣はこのあたり一帯に広まるほど納品してますし。親方がおっしゃったように、生産にも限界はありますし、カミロさんが手広くやっておられるので近々そうなると言うことはないと思いますが、こう言うのも積み重ねですからね」

　カミロが買ってくれるもんだから遠慮せずにバンバン作ってきたが、総数はそのままに槍以外にもバリエーションを増やすことを考えたほうが良いのかもな。

　それも武器や防具といったものだけでなく、鋏（このあたりにはＵ字型のもＸ字型のもある）や鋸、鍋釜といった生活に近いものを作るのも楽しそうだし。そう言えば、以前は街の人達は買わないからと農具の生産を諦めたが、カミロに卸すなら鎌などの農具もありか。

　ただ、それらはそれらでガンガン流通させるとまた問題になるかも知れない。また納品のときにでも聞いておくか。俺としては一家全員が一生食うに困らなければそれでいいのだ。

　そんなことを考えながらも、日々を過ごせば納品日がやってくる。今回もアンネを残すかどうか迷ったのだが事態の進展があるかも知れないし、そのときにアンネがいたほうが都合がいい場合もあるだろうと言うことで、布をひっかぶって荷物のフリをしてもらう必要はあるが、一緒に来てもらうことにした。

「いいんですか？」

「それはこっちのセリフですよ。だいぶ窮屈な思いをさせることになると思いますので」

「いや、それは全然平気なのですが」

「護衛は腕っこきが何人もいますし、安全は保証しますよ」

「それはもうこの目で嫌というほど見ましたので心配はしてないのですが……それじゃあ、お願いします」

　こうして、翌朝、お出かけする面々にアンネも加わった。心なしかウキウキしている。狩りのときもテンションが上っていたが、今回も負けず劣らずだ。

　そんな姿を見てか、ルーシーのテンションも上がっていて、準備をする俺たちの周りをグルグルと回って、皆を和ませていた。

　荷台に荷物を積み終えたら、リケが乗り込んで御者台へ。次に俺、アンネと乗って、アンネは荷物の影で目立たないところで布をかぶって座ってもらう。

　ディアナ以外の家族が乗り込んだらルーシーとディアナの番だが、ルーシーが荷台から少し離れた。

　どうしたのかと疑問に思っていると、ルーシーはそこから勢いよく駆け、まさに矢のように荷台の手前まで来たかと思うと、大きく跳躍する。

「おお」

　俺はその光景を見て思わず声を上げた。ルーシーがジャンプして荷台に載ったのだ。俺にはその光景がキラキラとエフェクトをまとったかのように見えた。

「えらいぞ」

　そのままパタパタと近寄ってきたルーシーを撫でると、

「わん！！」

　と誇らしげに胸を張るのだった。

　なお、その後ディアナが少し寂しそうに荷台に上がってきたことも付け加えておく。

## 雨はあがる、晴天は曇る

2020年2月24日

　クルルが一声鳴いて、竜車は動き出す。ゆっくりと緑と黒の中を進んでいく竜車。

　小鳥の声が聞こえ、俺たちの緊張をよそにのどかな空気が漂う。

「こうしてる限りは森の中の方が平和というのも、なかなかに皮肉だな」

「そう思えるのはエイゾウだからだと思うけど」

　俺の言葉にディアナがジト目で返してくる。世の中の人々から恐れられている（らしい）黒の森だが、こうしている分には平和そのもので、何をそんなに恐れるのかとしか思えない。

　だが、家族やアンネの話を総合するに、ここは相当に広いし、棲む動物たちは強いので、そこそこ強いくらいの人間が入り込むと即座とは言わないまでも、早々にやられることが多いそうだ。

　なので、ねぐらを樹上に構える獣人も多いらしい。持ち物が少なかったり、しょっちゅうねぐらを変えたりするのはその辺もあるようだ。

　しかし、今の俺にとっては外のゴタゴタを考えなくても良い森の中の方がよほど平和だ。襲いかかってこられることもないしな。

　とは言え、のんびり暮らすにも人と関わらないわけにもいかない。食料は調達できても、塩を含む調味料なんかを安定して入手するのは浮世と離れた生活では難しいからな……。

　のんびりとした雰囲気の中、竜車は進み、森を出て行った。

　街道に出る前にはアンネに布を被って横になってもらう。若干怪しいが荷物に見えないこともない。

　街の衛兵さんは我が家の面々を知っているから、特に何事も無く通してくれるだろう。騙すようで気が引けるが、仕方ない。

　街道は十分警戒をしていく。侯爵とマリウスが動いていれば滅多なことはできないだろう。ここらはマリウス――つまりはエイムール家の所領だからな。

　しかし、それで気を抜いていて何かあってからでは遅いので、念のためだ。

　今日も街道は世はなべて事もなし、と言うように見える。この裏で何かが進んでいる、と言うことを覆い隠すかのように柔らかく降り注ぐ陽光が照らし、緑と青のコントラストを演出している。この風景をアンネに見せられないのが残念だ。

　街の入口に辿り着く。俺の緊張は最高潮に達しているが、頑張って平静を装いつつ、

「どうも」

　と声をかけた。衛兵の人（既に大体の人が顔見知りだが、この人もご多分に漏れない）は一瞬怪訝そうな顔をする。さすがにプロは誤魔化しきれないか。いざとなれば正直に話すことも考えなければいけないな、と考えていると、

「……おお、あんたらか。ご苦労さん」

　と無愛想にそれだけ言って目線を街道に戻した。バレていないのか、見逃してくれたのかは分からない。

　一瞬振り返ったリケに目線で合図を送ると、頷いて落とした速度を再び上げた。ひとまずは最初の関門をクリアだ。

　街に入ると人通りも増える。となれば当然、目を配るところも増えるのだが、ここではルーシーが良い働きをしてくれた。

　いつもの通りに彼女が荷台から顔を出すと、人々の目はそちらに集まった。つまり、この状況で俺たちを見ているが、ルーシーを少しも見ていない人物が要注意と言うことである。

　こうして注意するポイントを絞りつつ、俺たちはカミロの店に辿り着いた。いつもの通りに丁稚さんが出迎えてくれる……と、そこにはいつもと違って、番頭さんも待っていた。

「そろそろ、いらっしゃると思ってお待ちしておりました。後はこちらでしておきますので、どうぞ上へ」

　番頭さんはそう急かす。俺はここでアンネもいることを伝えると、番頭さんは少し驚いたようだったが、こう言った。

「それはそれは……ですが、

　そう言う番頭さんに、逆に俺たちは怪訝な顔をしながら、荷車を降りてすぐに２階へ向かった。

## 曇のち雨

2020年2月26日

　バタバタとカミロの店の２階へ全員で上がっていく。

「身体は平気ですか？」

　俺はアンネに聞いた。決して短くはない時間、荷台にうずくまって布を引っ被っていたのである。少なからずキツかっただろう。

「ええ。動かないのは慣れてますから」

　俺の想像に反して、アンネは笑顔で返してきた。言われてみれば、第七皇女ともなると数時間もの間じっとしてないといけないこともありそうではある。それも微笑みを顔に貼り付けたままで。

　実際慣れっこなのだろうが、それが慣れっこであることに若干の違和感を覚えて、俺は「それは何より」と返すのが精一杯だった。

　カミロの店はデカいが、それでも裏から２階の商談室（と俺が勝手に呼んでいる部屋）まで５分もかからない。程なくたどり着いて扉を開ける。

「おお、来たか」

　部屋に入ると、いつもの快活な髭面が俺を待っていた。そして、他にも２人。

「伯爵閣下、お久しぶりです」

　まず目に入ったのはかなり簡素な服を着たマリウスである。他に誰もいなければ「マリウス」と呼び捨てにしているところだろう。そうしなかったのはアンネがいることもあるが、

「侯爵閣下も長らくお目にかかっておりませんで」

　マリウスと一緒にいたもう１人がマリウスに負けず劣らず簡素な服装の侯爵だからだ。流石に侯爵の前でマリウスを呼び捨てるわけにもいくまい。頭を下げて挨拶をした俺に、２人とも頷きで返礼する。

　さて、アンネのことはどうしたものかと思っていると、

「お初にお目にかかります。帝国第七皇女アンネマリー・クリスティーン・ヴィースナーにございます。以後お見知りおきを、エイムール伯爵、メンツェル侯爵」

　と優雅なお辞儀で自己紹介をする。俺は隣で目を白黒させるしかない。

「これは皇女殿下自らとは畏れ多くございます。王国侯爵、グレゴール・ヴィルヘルム・メンツェルでございます」

「同じく王国伯爵、マリウス・アルバート・エイムールにございます」

　２人はそのまま膝をついて頭を垂れ、挨拶をした。

「ご丁寧にありがとうございます」

　アンネのその言葉で２人は立ち上がった。俺たちは全員席につく。

「さて、皆”よそ行き”はここまでにしよう。皇女殿下も」

　ドカリ、と椅子に座った侯爵が低いハッキリとした声で言う。ここからは立場不問かつ他言無用というわけだ。アンネもその言葉に頷いた。

「今回の問題の発端はエイゾウ……と言いたいが、元を正せばワシの頼み事が原因だからな。すまん」

　そう言ってあっさりと頭を下げる侯爵。他言無用とはいっても、こうあっさり頭を下げられる人間はそうはいない。この国の大臣で侯爵なのだ。

「いえ、頭を上げてください。こうなる可能性も考えておくべきでしたし」

　俺は手を振りながら言った。極端な話、王国中にうちの製品が出回るまでには帝国にも流れて接触を図られる可能性は十分にあったわけだ。見られたのが俺の本気の製品だと言うイレギュラーもあるにはあるが、それが遅いか早いかだけである。

　侯爵は「ふむ」と言いながら頭を上げた。今度はマリウスが話を続ける。

「王国の人間が関わっているという話は聞いてるな？」

「ああ」

　前の納品の帰りにカテリナさんから聞いた話だ。王国の人間が関わっているが、それ以上はまだ分かってないとかなんとか。

「あの後うちで調べたが、奴さん思いの外早くに尻尾を出したよ。失敗したのが分かったんで、泡食ったんだろうな。帝国に人をやっていた」

「てことは、俺たちが撃退したのは」

「ああ。そいつの手引で帝国の人間が入ってた、ってことだ。誰が狙ってたのかはエイゾウたちにはどうでもいいことだろうし、伏せさせてもらうが」

　俺はチラッとアンネの方を伺った。見た目には表情の変化はいられない。兄貴だかの可能性はあると言ってたしなぁ……。

「そんなわけで、ワシのところで幕引きを図っておる」

「我々は基本的には帝国のゴタゴタに巻き込まれただけ、というスタンスだ。侯爵閣下はちゃっかりと美味しいところに乗っかられたようだが」

「おいおい、ワシも今回は結構なとばっちりを受けておるんだぞ」

「存じております」

　まるで見えない剣で稽古でもしているかのようにマリウスと侯爵がやりあう。これはまだマシというか、気心が知れた間だからじゃれ合いみたいなもので、王宮の中だともっと陰惨なやり取りになるんだろうな……。

「それで？どうするんだ？」

「帝国のゴタゴタだから、基本的には帝国内部で片付けてもらうのがスジだ。だが、こちらも手引した者がいる以上、一切知りませんとも言えんだろうな」

　マリウスはそこで一旦言葉を切る。続きを話すか話すまいか逡巡しているのだ。俺はとっくのとうに巻き込まれていることは承知だろうが、それでも更に巻き込むことに抵抗を覚えてくれているのだろう。

　俺は言葉には出さずに、頷くことで続きを促した。

「エイゾウ、君に頼みたいことがある。武器を、それも一級品を作ってくれ」

## 受注

2020年2月28日

「おいおい、”条件”は知ってるだろ？」

　俺はそう言いながら、カミロの方をチラッと見た。彼は俺の視線に気がつくと、頷いている。説明済みと言うことだ。

　欲しい人がうちへ一人でやって来ること。帝国の皇帝にまで守らせたルールである。

　いや、実際には一度緩めたことはあったか。カミロに頼まれてミスリルの細剣を打ったときだ。恐らくはそれを知って頼んでいるのだとは思うが、一応通さねばならない筋目ってのがあるからな。

「勿論、知ってはいる。家の場所までは聞いておらん……と言うよりも奴が話さなかったのだが」

　ムスッとした顔を取り繕うこともせず、侯爵が言った。おそらくではあるが、侯爵が”資格”に足りない、と言うことはなさそうなので、多分厄介事に巻き込まれないようにカミロがそうしてくれたんだろう。

「今回はそれを曲げて頼みたい。事態を収拾するのに一番いい方法がそれなんだ。この通り」

　マリウスが頭を下げる。話をするだけなら侯爵だけでも良い（なんなら俺を呼びつけるのがベストだろう）のに、わざわざマリウスを伴って出向いたのはこれが目的だろうな。

　少なくとも俺が友人だと思っている人物に頭を下げられると弱いのは事実である。

「うーむ」

　俺は腕を組んで考え込んだ。正直なところ、俺はともかく家族に累が及ぶことがなければ何でもいいのだ。後はできればアンネも。知らぬ人ならまだしも、そうでない人が何かに巻き込まれるのは夢見が悪い。

　そこだけ確認しようかと思ったその時、ディアナが机に手をついて口を開いた。

「お兄様」

　その眼差しは強く、兄であるマリウスを見つめている。

「ん？　どうした？　ディアナ」

「それでエイゾウが厄介なことに巻き込まれたりはしないのね？」

「そうだな。そうなるように取り計らうつもりだ」

「分かった」

　そう言うと彼女は再び席についた。他の皆も今のマリウスの言を聞いてうんうんと頷いている。後は俺の判断次第、と言うことか。

「俺からも一つ確認がある」

「なんだ？」

「家族も厄介なことにはならないよな？」

「ああ。そっちは保証しよう」

　マリウスは真正面から俺の目を見つめて言った。サーミャが口を挟んでこないということは、真実なのだろう。

「わかった。引き受けよう」

「すまんな、助かる」

「それで、何を作れば良いんだ？」

「槍だな。それを４本だ」

「４本か」

　数的には余裕だが、なぜ４本もいるのかが少し引っかかる。でも、理由を聞いてしまうと巻き込まれてしまう予感がヒシヒシと伝わってくる。

「わかった。形はこっちで決めていいな？」

「ああ。ただし、その４本の形は同じものにして欲しい」

「全く同じものを４本、ということか？」

「そうだ」

　大量生産でもないのに同じものを４つ欲しい、ってのはますます怪しいが、やはり聞かぬが花というやつなんだろうな……。

「まぁ、悪いようにはせんよ」

　侯爵がニッコリとそう言い添えたが、俺には少し不気味に思えて仕方なかった。

## 注文内容

2020年3月2日

「その代わり、こういうのは１回きりですよ」

　俺は渋面を作りながらそう言った。そもそも面倒事と言うなら、アンネが来た時点でとっくに巻き込まれてるしな……。

　本当は書面なり残したいくらいなのだが、作ったところで内容を保証してくれる人がいない（カミロにさせたところで彼はただの商人だし）ので意味はなかろう。

「すまんな、助かるよ」

　マリウスが困ったような顔をして言った。中間管理職が大変なのは前の世界でもこっちでも変わらないと言うことか。俺は心の中でそっと慮っておく。

「うむ。あまり無茶を言ってへそを曲げられても困るからな」

　俺に負けず劣らずの渋面を作る侯爵。どこかの職人に何かを頼んでへそを曲げられた経験があるのだろう。渋面は俺に向けたものと言うよりは、それを思い出してのもののようだ。前の世界でもこっちでも変わらないのは、職人の頑固さも同じらしい。

　実のところ俺は”黒の森”から移住するのはほぼ無理と言って良い状態なのだが、それを知らない侯爵にしてみれば、無茶を言い過ぎてそれこそ帝国にでも逃げ出されたら損という計算なのだろう。

　今のところはその計算に乗っかるほうが得だ。カミロみたいな人間にこの先出会えるかどうかも分からんしな。

「では、納期とお代金ですが」

「そうだな……」

　俺の言葉に考え込んだのは侯爵だ。一連の計画は侯爵がしてるんだろう。このオッさんも政治やらが絡まなきゃいい人なんだけどな……。

「なるべく早くがいいが、いつなら出来るのだ？」

「そうですね……３日もあれば」

　４本も頼むのであれば、装飾については不問であろう。全く同じものをオーダーしてくるなら、余計な装飾は無いほうが区別しにくいからそっちのほうがいいまである。

　それなら多少作業時間がかかることを考えても、それだけに取りかかれば３日あれば十分だ。前の世界で

「そんなに早く？」

「ええ、まぁ」

　俺の言葉に侯爵が驚きを隠しきれず、片眉をあげた。

　しまった、「２週間くらいかかるっすねぇ～」とか言っておけば良かったか。いや、前に一般モデルとは言え１週間で５０本とか納品してるし無駄だったかも知れない。そう思っておこう。

「ふむ……それなら１本あたり金貨１５枚支払おう」

「えっ！？いや、フガフガ」

　俺としては特注品クラスと言えども、大したことのない槍で金貨１５枚は多すぎると思い、１０枚くらいでいいですよと言うつもりだったのだが、左右から手が伸びてきて俺の口を塞いだ。

　結果、しめて金貨６０枚である。口止め料も含めてと考えるとまぁまぁな金額……なのだろうか。

「それでは４日後、都に品を持って来てくれるか？」

「都にですか？」

「ああ」

　都で何が行われるのだろう。厄介事には巻き込まないと言う話だから、納品だけで終わってくれると思いたいが。

「うちが馬車を出すよ。それにお前と皇女殿下を乗せて都へ行く」

「アンネさんも？」

　カミロは頷く。既にほぼ全てが決まっていて、俺の槍が出来上がれば進むって感じだな。

「分かった。うちの家族を連れて……は行かないほうが良さそうだな」

　マリウスの顔色を見て取って、俺はそう発言する。ほぼ納品だけにせよ、あまり見せたくないことは少なからずあるという事か。

　ディアナは俺の言葉に不満そうだったが、身振りでなだめる。

　とにかく、とりあえずはこれで受注完了だ。俺は立ち上がって侯爵とマリウスと握手をしておく。さて、ちょいと頑張りますかね。

## いつもの商談

2020年3月4日

　一通りの話が終わると、マリウスと侯爵は部屋を出ていった。あんまり都を離れてもいられないのだろう。伯爵と侯爵が２人共都にいないって時点で色々勘ぐったりされるだろうしなぁ……。

「さて、じゃあ今度はうちの方の商談だ」

「おう」

　カミロは気軽に言い、俺も気軽に応える。俺は少し自分の心が落ち着くのを感じた。末端も良いところなのだろうが、政治の話には関わりたくないものだ。

　俺は入れてくれていたのに、すっかり冷めてしまった茶を口にする。茶があることすら今更気がついた。どれだけ緊張したかってことだな……。

「今日もいつものやつか？」

「いや、それがだな……」

　俺はそろそろ納品物を増やそうかと、今回は槍を新たに持ってきたことをカミロに伝えた。品質についても一番良いやつで高級モデルくらい、と言ってある。

「そいつが特注品と同じ品質なら、わざわざ今から作らなくても済んだのにな！」

　そう言ってガハハと豪快にカミロが笑う。いや、全くだ。知ってたらそっちも作って来たのに。知ろうにも向こうから連絡する手段がほぼないんだけどな。

「それで、勝手に作ってきておいて何だが、引き取ってもらってもいいか？」

「もちろん。お前の作るもんなら、売りようはいくらでもある」

　即答だ。リケが俺の視界の端でドヤ顔をしている。とりあえずはこれで一安心か。

「それじゃ、諸々を用意してこよう」

「すまんな」

「なぁに、これが仕事だ」

　カミロがニヒルに笑うが若干似合っていない。だがそれは胸のうちに秘めておく。今は番頭さんがいないので、カミロは自分で指示を出しに行くのだろう。部屋を出ていった。

「なんだか色々動いてるわねぇ」

　ディアナがフンと鼻を鳴らし、やれやれと言った感じで呟いた。

「ディアナはこう言うの慣れてると思っていたが」

　すっかり森の暮らしに慣れきった感のあるディアナではあるが、マリウスの妹、つまりは伯爵家令嬢なのである。悪役でなくてよかったな。

　ともかく、貴族であるならば、こうした話の一つや二つは聞いたり、実際に巻き込まれたりしてるもんだと思っていた。

「伯爵家と言っても武で鳴らしてる我が家に、まどろっこしい謀略を持ち込んでくる人なんてそうはいないわよ」

「ああ……」

　脳筋とまではいかないだろうが、あの家の雰囲気なら「ド正面からぶん殴れば良いのでは？」と言われそうだよな。むしろあれこれ出来るマリウスが特異点と言う気すらしてくるし。

「アンネさんのほうが慣れてるんじゃない？」

「え？ ええ、まぁ、多少は……」

　急に水を向けられたアンネは一瞬面食らったようだったが、すぐに立て直した。うちに来てからのアレコレを考えれば、そう言う経験は一度や二度ではあるまい。

「とりあえずはやるべき仕事をやって、平穏無事に過ごせるようにしよう」

　俺の言葉に皆――なぜかアンネもだった――が頷いた。早いとこ”いつも”に戻りたいものだ。

## 連絡手段

2020年3月6日

　一通り話が終わった頃、カミロが部屋に戻ってくる。

「いやぁ、ありゃなかなか良いもんだ」

「槍か？」

「ああ」

　新しいものを作るたびに、少しずつではあるが色々なものの出来が良くなっているのは確かだ。前の世界の小説で見た”ステータス”のようにハッキリとした数字で表されるわけではないが、それは分かる。

　海千山千であろうカミロから見ても良いものだと太鼓判を押してくれたのなら、品質については心配いらないな。

「とりあえず今回はこれだけ渡しておく」

「いつもすまんな」

「なに、これが仕事だろ？ お互いにな」

　そう言って俺に革袋を渡しながら、いつもの似合わないウィンクをするカミロ。仕事をして対価をもらう。のんびり好きなようにやってることでそう出来ているのはありがたいことだ。

「そう言えばだ」

　カミロがふと思い出したように言った。

「今回みたいに”予め知ってたら用意したのに”って場合もあるだろ？」

「そうだな」

　特に今回は何らかの連絡方法で事前に言っておいてくれれば確実に用意が出来た。ここに来る以外の方法で連絡手段と言えば、エイムール家騒動のときに緊急に用意したあの手段くらいである。

　しかし、あの方法はカミロ側は行き帰りの途上だから良いとしても、俺の方は森の入口まで確認しに行く必要がある。郵便受けが２キロ先にあって毎日確認が必要、となると正直に言えば面倒くさい。

　かと言って家族の誰かを向かわせるのも、その間は作業が止まってしまうから、できれば避けたいところだし。狼煙なんかで合図する方法は目立ちすぎる上、森の中にあるうちからは森の入口付近で合図されてもほぼ見えないだろう。

　となると今のところは１～２週間ごとのやり取りになる。やたらと時間がかかってしまうのも事実だった。

「何らかの手段を考えたいんだよな。今後エイゾウに緊急で発注したいものも出るかも知れないし」

「ふむ」

　カミロの言うことはもっともだ。しかし、あまり気楽に連絡されても嫌だなと思う。最終目標はスローライフなのだし、できればゆっくりのんびりしたい。

　だが、そうは言っても腹は減るのだ。「遊んで暮らせる」まではそれなりにこなしていくことも必要ではあるだろう。

「逆にエイゾウたちからも何か連絡したいこととかできるかも知れないだろ？　今週は納品を見合わせたい、とか」

「それも確かにそうだな」

　今のところは”ウォッチドッグ”がそうしてくれたからか、病気らしい病気もなく、大怪我もない。しかし、こっちの世界に来て間もないわけで、今後もずっとそうであるとは限らない。

　そんなときに何らかの連絡手段があれば便利なのは間違いない。

「手紙の遣り取りが出来る魔法の道具みたいなのはないのか？」

「うーん、あるにはあるんだがな……」

　なんとはなしで聞いてみたのだが、あるらしい。それならもっと普及していても良さそうなものだが。

「やたらと高いし、流通には制限がかかってるんだよな」

　なるほど。簡便な連絡手段なんてもの、軍事でも重要な品であるのは間違いないし、おいそれと隣国と連絡などされても国としては困ることもあるだろうから、そうそう普及はさせないか……。

「まぁ、こっちで考えておく。エイゾウの方で連絡手段を整備するのに異論がなけりゃだが」

「うちは大丈夫だよ」

「分かった」

　当面はあって困るものでもなさそうだしな。ここはカミロの好意に甘えておくか。

「それじゃ、また４日後に」

「ああ」

　俺とカミロは握手をした。そこへ番頭さんが来たので、軽く挨拶をして入れ違いにぞろぞろと部屋を出る。

「さーて、帰ったら頑張らなきゃな」

　俺の言葉に、家族の皆とアンネも一緒に手伝いを申し出てくれる。俺はそれにちょっとホッコリしながら、「ありがとう」と礼を言っておいた。

## 帰宅と意図

2020年3月9日

　今日は店につくなり２階の部屋に上がったのだが、裏庭に行ってみるとそこでクルルとルーシーがいつものように丁稚さんに構ってもらっていた。

「いつも済まないね」

「いえいえ。ルーシーちゃん大きくなりましたねぇ」

「そうだなぁ」

　丁稚さんがルーシーの頭をなでながら言った。まだまだ子犬（子狼）と言っていいサイズではあるが、この短い期間に関わらず大きくなっている。自分で荷台に上がれるようにもなったし。

　これが狼の魔物だからなのか、それとも森の狼はこう言うものなのかまではわからないが。成長があんまり早いようなら、色々と考えないといけないかもなぁ……。

　丁稚さんにチップを渡したらすぐに出発だ。街中ではアンネに布を被っておいてもらう。行きと荷物の量は変わらないか、むしろ多いくらい（主に炭と土と鉄石のせいだ）なので、帰りもアンネが目立ってしまうということもないだろう。

　来たときとは別だが顔見知りではある衛兵さんが街の入口に立っていたので、少し緊張しつつも会釈をしたが、特に何かを言われることもなく通り過ぎた。止める理由がないわな。

　街道に出ると来たときのように気持ちのいい風が草原を渡り、神様か何かが緑の絨毯をその手でそっと撫でているようにも見える。空は太陽の光を受けて青く輝いている。つくづくアンネに見せられないのが残念だ。

　途中で「少しくらいは良いのではないか」と言う話も出たのだが、万が一を考えると森に入るまでは止めたほうが良いだろうという事になった。

　事がうまく運べば、帰りにでも楽しんでもらいたいものである。

「ぷはぁ～」

　森に入って少ししてから、アンネに被せていた布を取り払う。大きな体躯がグッと伸びをして、より一層大きく見える。

「お疲れだったでしょう」

「いえ、思ったよりは揺れがひどくなかったので平気ですよ」

「それは良かった」

　うちの荷車には少しだけ時代を先取りした技術のサスペンションを搭載してあるから、普通の荷車よりも乗り心地はいいはずである。わざわざそれをこっちから言うことはないが。

　森の中も街道や草原ほどではないが、晴れた日の気持ちよさを感じることが出来る。ずっと森の中にいるとわかりにくいが、木々の匂いをゆっくり感じられるのはある種の特権かも知れない。

　時折、鹿やリスなどにルーシーが反応して尻尾をパタパタと振り、俺の肩のHPが微減（最近は少し手加減を覚えたらしい）した他には何事もなく家にたどり着いた。

　荷物を皆で手分けして運び入れ、全員で居間に集まり茶をすする。

「アンネさんを連れてこいと言うことは、そのまま帰す気だろうな」

「そうね」

　ディアナが頷いた。まぁ、それ以外で俺と一緒にアンネを連れて行くメリットがないからな。最後の危険というわけだ。

「今の状況で何事もなく帰るのに一番いい方法は、非公式でも外交特使として扱うことだから。そうすれば護衛もつけられる」

「来るときに隠密だったのは問題にならないか？」

「そこはなんとでも理由はつけられるわよ。周辺諸国を無用に刺激しないためだったとかね。どのみち帰りも派手にはできないんだから」

「じゃ、侯爵の家で会談の予定があったことにする？」

「もしかすると”白銀宮”まで行かなきゃならないかもだけど」

「第七とはいえ、私は皇女ですからねぇ」

　のほほんとした声で、ディアナの言葉をアンネが引き取った。白銀宮は王族が諸外国の要人と会談するための屋敷らしい。ちなみに別に白銀で装飾されているとか言ったことはないそうだ。

　名前だけでも立派にしておくことで、来た人間に扱いが良いことを知らしめる手法の１つだとかなんとか。俺にはそういう気の回しかたは無理だな……。

「大臣で侯爵のところならそんなに格落ちってわけでもないけど、体面を考えれば王族が対応するのが良いでしょうね」

　あの２人のことだ。その辺りは考慮済みだろうな。いずれ４日後には終わるのだ。そこまでは誠心誠意、槍づくりとアンネの対応に腐心するとしよう。

## 槍

2020年3月11日

　翌日。朝の日課や準備を終えて、皆揃って鍛冶場にいた。俺が炉や火床に火を入れている間、他の皆は体を動かしたり、おしゃべりをしたりしている。

　前の世界でバイト先の開店作業中みたいに思える。実際似たようなもんだが。一応ここには誰でも来て良いことになってるし、店として機能しているからな。

　客が来るのは１ヶ月に１人も来ればいいところというのが、普通の店と異なるところではある。カミロの店に品物を卸していなかったら、この客の入りではすぐに干上がっていただろう。

　かと言って気軽に客が来られる場所へ引っ越すわけにはいかない事情もあるしな……。

「よーし、それじゃはじめるか」

　俺の言葉に全員が返事をして、ぞろぞろと位置について、作業を始めた。

　今日からは槍を作る。同じものを４本、さらにその性能は特注品と同等のものだ。となれば、気合を入れて作らねばなるまい。

　積み上げられた板金の中から、程度の良さそうなものをいくつか見繕って脇に除けておく。これから先で程度の良いものを皆が作ってくれる可能性はあると思うが、それを当てにするのもよろしくないからなぁ。

　まず最初に作るのは槍の穂になる。ここさえ性能を満たしていればとりあえずは問題なかろう。

　もちろん、槍全体としての性能は柄の部分も関わってはくる。それが狙いの場合はともかく、刺さったあと簡単に柄が折れてしまっては意味がないからな。

　だが、兎にも角にも穂の性能さえ良ければ、武器として最低限の性能が良いことになるので、そこに一点集中すると言うわけだ。

　選別したうち、１つの板金を火床に入れて加熱する。赤から黄、時折白になろうかという炎の中で板金が加熱され、その身を赤くしていく。

　ここだ、と言うところで取り出して金床にうつし、魔力を乗せた鎚で叩いて形を作っていく。板金を作るために叩いているのとは違うリズムが鍛冶場に加わった。

　ただ突くだけの槍であれば、三角錐や四角錐の形にするのだが、今回はある程度斬撃もできるよう、笹の葉型の穂にする。つまりは両刃の短剣を作るときの要領だ。

　断面形状は大まかには菱型だが、柄を入れる中央部分と、刃の部分以外は若干凹んでいる形にする。長柄の武器で片端が重いと、もう片方の端を持ったときに力が必要になるからな。物干し竿の端に何でも良いから吊ってみて、もう片方を持って上げてみるとよく分かる。

　斬撃を行うには槍を多少とは言えども振り回す必要がある。そのときに穂が重いと取り回しがしにくくなるので、少しでも軽くしたいのだ。

　その分材料も多少節約できなくもないのだが、それはまぁ副次的と言うか、うちではあまり気にしない部分である。

　温度や箇所を見極め、適切な力を鎚に込め、「これしかない」と言う状態で叩く。これが出来るのは貰った力のおかげだが、最近は以前よりも自分のものでないような感覚が薄くなって来ているような気がする。

　以前はもっとチートの力に手取り足取りされている感じだった。力が身体に馴染んできたのだろうか。それならそれでありがたい話である。

　ただ、言語化しろと言われると大変に難しいところなのは変わりない。完全に感覚でやってるからな……。うまく言語化できればリケに教えることも出来るのだろうが……。すまんな、リケ。

　そのリケは俺の作業を横で見学している。時折「ほほう」「なるほど」などと呟いているから、何かを吸収してはくれているようだ。

「うーん」

　そのリケが唸った。

「どうした？ 気になることがあれば言ってくれ」

「今回の槍は斬撃もできるようにするんですよね？」

「そうだな」

「前に親方が作ったカタナみたいに、柔らかい鉄を硬い鉄で覆ったりはしないんですか？」

「ああ……」

　日本の槍には日本刀と同じ方法で穂が作られているものもある。前の世界で著名なものを見たが、刃紋が非常に美しいものも多々あった。

　頼まれたのは同じものを４本、だ。そこらで出回っているようなものにしてくれとは言われていない。それは特注品レベルのものになれば、見る人が見れば良いものだとは分かってしまうからだろうと思っていたが、なるほどそれなら穂を変わった作りかた（このあたりの基準で言えばだが）をしても問題あるまい。

「よし、リケの案を採用だ。ちょっと時間はかかるが、なぁに３日あれば問題ない」

「すみません、親方」

「いや、いいんだ。言ってくれて助かった」

　俺は感謝の意と言うには少し似つかわしくないかも知れないが、リケの頭をガシガシと撫でて感謝を示した。

## 四方詰め

2020年3月13日

　早速、リケの提案をいれての作り直しにかかる。魔族のニルダの刀を鍛ったときには「甲伏せ」と言う、柔らかい心鉄をＵ字にした硬い皮鉄に挟み込むような方法を取った。

　今回は笹の葉形の穂なので、「四方詰め」と言う、柔らかい心鉄の周り四方に硬い皮鉄を貼り付けるような手法を取る。

　本来、鋼の硬軟は炭素の含有量や分子構造など、色々なものに影響されるのだが、俺がやると魔力を帯びて「とにかく硬い」ものが出来上がってしまう。

「折れず、曲がらず」は達成できるのは確かだが、それもなんと言うかつまらない。なので、魔力の込め具合で硬軟を変えることにする。皮鉄になる部分はとんでもなく硬くなるはずなので、ほとんど気分の問題ではあるだろうが。

　さっきまで形を作ろうとしていたものを再度加熱し、ただの板になるように整えていく。こいつは一度魔力をこめてしまったから、更に魔力を入れて皮鉄にするのだ。

　同じように、もう２枚ほど魔力をこめた最上級のものを用意する。うち１枚は縦半分に割るのだ。これで四方を囲む板はできた。

　次に作るのは心鉄になる四角柱である。こちらは柔らかいままでいいので、適当な温度まで熱したら手早く叩いて形を整えるだけで済んだ。

「あとはこれを組み合わせるだけだが……」

　既に日は傾きかけていて、いち早く今日の仕事を終えた板金製作組は稽古（とクルルやルーシーをかまってやる）のために外に出ている。リズミカルに木剣同士がぶつかり合う音や、クルルとルーシーがはしゃぐ声が鍛冶場の中まで聞こえていた。

「固めるところまではやっちまうか」

「良いんですか？」

　この場に残っているのは俺とリケだけである。

「この調子なら明日に回しても間に合うだろうけどな。ここで止めてしまうのもキリが悪い」

「ですね」

　前の世界でもこんな調子で「サービス残業」をしてしまっていた記憶がうすぼんやりと思い起こされる。好きな仕事だからってあまり良くはないと思うが、明日ここから続きというのもな。

　というわけで、俺は皮鉄と心鉄を一緒に火床に入れて熱しはじめた。ゴウゴウと風が炎に力を与える音がする。炉の方は火を落としておいたから、一層その音が大きく聞こえた。

　この工程では折り返し鍛錬のときのような接合剤は使えない。皮鉄と心鉄の間に残ってしまうからだ。そんなわけで、同じ温度になったところで取り出して叩いて接ぐ、という工程になる。

「よっ」

　赤熱した鋼を金床に移した。この工程では本来はある程度、接目のようなものがどうしても出来るらしいのだが、そこはそれ、貰った能力が十全に発揮されれば、そんなものも出来ずに接ぐことができる。……こう言うのが後世に残ると「オーパーツ」と言われたりするんだろうなぁ。１０００年後のこの世界の人々の解釈が気になるが、当然俺がそれを聞くことはない。

　少しさびしいような、ワクワクするようなそんな気持ちで、俺は鎚に力を込める。

　リズミカルに鎚を動かし、加熱し、再び金床で叩く。その工程を繰り返して、やがて１本のやや平べったい鋼の角棒が出来上がった。

「よし、こんなものか」

「相変わらず親方の仕事は早いですね」

「まぁ、どこを叩けばいいかはなんとなく分かるからな……」

　本当の話である。”なんとなく”わかるのだ。逆に言えばなんとなく以上にはわからないということだが。

　しかし、リケにとってはそれこそが目標であるらしく、

「私も早く親方の足元にはたどり着かないとですね」

　と奮起しているのだった。

## 試作の完成

2020年3月16日

「よーし、始めるか」

　朝の諸々を終えて、炉と火床に火を入れた俺は、顔を張って気合を入れた。まだ４面に硬い板金の張り付いた棒でしかないものを今日は槍の穂に仕上げる必要がある。

　今日明日で４本、石突と柄を考えれば今日中に３つは穂先を作りたいものである。

　火床に昨日固めただけの鉄の棒を入れて熱していく。周りに貼り付けたぶんも含めるとその分加熱に時間がかかる。外側だけ柔らかくなっても、内側は硬いままだと流石に俺でも加工が出来ないからな……。

　中まで熱が行き渡ったところで形を整えていく。穂先になる部分は形を整える前には硬い鋼で覆われていない。ここは形を整えていくことで、他の４面の硬い鋼が延びてちょうど埋まるようになる。当然その分も含めての４面には少し厚みをつけてある。

　何度か加熱と加工を繰り返す。加工するときは勿論全力で、周囲の魔力をふんだんに織り込んでいく。きちんと穂の周囲は薄く、中央へ向かうに従って厚く、その途中には樋のような凹みもつけた。これで硬さと軽さが両立出来ているはずである。

　根元の部分は柄を差し込む形ではなく、柄に挟み込んで固定するような方式になるよう、刀の茎と同じような茎を作っておいた。

　こうして見た目には反りのない刀を背中合わせにくっつけたような形のものが出来上がった。これに焼刃土を置いて焼入れすると刃紋もつけられるはずだが、全く同じものが出来るわけではない。

　と、言いたいところだが多分俺なら出来てしまうのだろう。しかし、完全に同じかどうかまでは怪しいかも知れないので、焼入れ自体は剣やナイフを作る時と同様に行う。刃紋はなしだ。

　焼入れに適した温度まで熱した穂を水を湛えた水槽に入れると、ある意味耳に馴染んだジュウという音が鍛冶場に響いた。

　しばらく待って、これまた適切な温度まで下がったところで引き上げる。火床の炎で炙って焼戻しをしながら状態を確認する。

　色はまだくすんでいるが、穂としての出来は良いようだ。

　軽く磨き上げると、穂はキラリと銀色の姿を現した。砥石で穂に刃をつける。主に穂先での刺突を使うだろうから、そこを優先しての作業だ。

　板金を作る音に、今度はシュリシュリという音が混じっていく。金床で叩いていたときとはまた違う音楽のようでもある。

「はー、こうやって出来るんですねぇ」

　俺の作業をちょいちょい横目で眺めていたらしいアンネがそう言った。そうしつつも自分の作業はきっちりこなしているらしい。器用だな。

「そうですねぇ。今回は親方はこうしてますが、他にも色々やり方はあって……」

　リケが早口で説明をはじめた。こう言うところのテンションの上がり方は生粋の鍛冶師というべきだな、うん。そう思おう。

　その合間に転がっていた適当な木材を自分のナイフでササッと加工して、仮の柄をつくる。先端は二又に分かれた形にしておいて、そこに穂の茎を差し込む。

　茎には目釘穴と同じような穴を作ってあるので、そこに通るように釘を打ち、周りを革紐でグルグルと巻けば、試作品の完成だ。

「おーい、ヘレン」

　俺はヘレンを呼んだ。彼女は口元にしていた布を下ろしながら返事をする。

「なんだ？」

「今ちょっと手を借りれるか？」

　ヘレンがサーミャに視線を送るとサーミャは頷いた。

「いいぜ」

「ちょっとこいつを試してみてくれ」

「ここで？　外で？」

「勿論、外だ。作業中にすまんな」

「エイゾウの新作とあらばお安い御用だぜっと」

　俺がポイと投げた槍をうまくキャッチしながら、ヘレンは言った。グルグルと槍を持ってない方の肩を回しながら外に出ていく。

　俺は出来栄えを確認できることもそうだが、ヘレンがどれくらい槍の使い手なのかを見るチャンスに恵まれたことにもワクワクしながら、その後をついていった。

## 性能試験

2020年3月18日

　ヘレンがグルグルと肩を回したり、槍の柄を腰に当て腰を捻ったりして準備運動をしている。

　その間に俺は庭に転がしてある丸太（元は狩りの獲物を運んだ運搬台）の中から、適当なものを立てておいた。簡易の的だ。

　気がつけば、みんな外に出てきていて、それに気がついたクルルとルーシーも集まっていた。

「よっし」

　衆目を集めるのは慣れっこなのか、全く意に介さず準備が出来たらしいヘレンが槍を構える。とりあえずは穂先を的に向ける形だ。引き締まった表情をしていて、周囲の空気の温度が下がったように感じた。

「フッ！」

　ヘレンは相変わらずの速さで槍で的を突いた。瞬きよりも速く動作が終わっている。的に当たったときの音がほとんどしないのも動作の速度を速く見せているのもあるだろう。

　槍の穂は的に深々と刺さっている。

「どうだ？」

「うーん、ものはいいんだけど、やっぱり気持ち悪い！」

　ヘレンは笑いながらそう言った。

「ほとんど手応えがないんだよな。今の感じは普通の槍ならせいぜい穂先が少し刺さったくらいだけど、見ての通り深々と刺さってるわけでさ」

「なるほどなぁ」

「慣れりゃ平気なんだろうけどな」

　慣れるまでは手応えの違いに戸惑いがあって上手く扱えないかも知れないってことか。その辺は今後改善の余地ありだな。

　職人らしく「武器に合わせろ」と開き直るのも手段ではあろうが、今回はともかく本来は個々人に合わせたものを製作するわけで、その人の感覚にも合わせて違和感なく、しかし性能は大幅に向上というのが理想形だろうし。

「じゃ、次は斬り払いだな」

「おう」

　スッと槍を的から抜いたヘレンは今度は振りかぶるように槍を構えた。危ないので俺たちは距離をとる。クルルとルーシーもなんとなく察したようで俺たちと同じくらい離れていた。

「せりゃっ！」

　ブン、と風切り音が聞こえたと思ったら振り抜かれていた。何を言っているか……は置いといて、超スピードなのは確かである。迅雷の二つ名は伊達ではない。

　その後、ゆっくりと丸太が斜めにずり落ちていく。そこで断ち切られたのだ。

　サーミャやリケが「おおー」と拍手している。ルーシーも分かっているのかいないのか「わんわん」とヘレンを讃えているようだった。

「斬れ味は問題なしか」

「そりゃコレだけ斬れて文句あるやつはいねぇだろ」

　俺の言葉に呆れたようにヘレンが言う。他の家族も、そしてアンネもうんうんと頷いていた。こころなしかクルルとルーシーもそうしているように思えるが、気のせいだな、うん。

「斬ったときの感触に違和感はあるだろうが、他に気がついたことはあるか？」

　俺が聞くと、ヘレンは少し距離をとったまま槍を振り回す。仮想の敵に向かって突いたり薙いだり、一つ一つの動作が様になっていてカッコいいな。

　少しの間そうやって槍の具合を確認したあと、ヘレンは言った。

「うーん。いや、ないな。急造の柄にしちゃバランスも悪くないし。こいつは石突をつけるんだろ？」

「そうだな。そのつもりだ」

「じゃあ、これで平気だと思う」

　つまり今はほんの少しバランスが前によっていて、石突をつければベストになるわけか。

　とりあえず穂の性能試験としては問題なかったということだ。ほぼ間違いなく大丈夫とわかっていても、プロからそう聞くとホッとするな。

「それじゃコイツをあと３本仕上げちまうか。みんなは休憩してていいぞ」

　俺はそう言って鍛冶場に戻る。その後をクルルやルーシーと一緒にはしゃぐみんなの声が追いかけてきた。

## 作業に戻ろう

2020年3月20日

　言い方は悪いかも知れないが、心鉄は通常より手を抜いたものである。皮鉄に力を入れて作ってあるから問題無い確信も持ってはいるが、それでも確認するまでは多少なりとも心配だった。

　しかし、ヘレンの力量で問題なかったのなら、大きな問題はあるまい。

　１つが出来れば残りはその１つを作るよりは簡単だ。自分の作ったものをそのままお手本に出来るし、何より１つは作ったノウハウがある。

　ほとんどチートの力とは言っても、経験の有無は時間などに大きく作用している……ように思う。

　見た目が同じということは、観賞用のイミテーションを作るのでもなければ、構造的には同じものになるはずである。

　であるならば、同じ部品を作ればいいわけで、まとめて同じ工程を行える方が（俺の場合は）効率が良い。

　その分を見込んでの３日という”工数見積もり”であったが、概ね外してはいなかったようで、俺はホッとした。納期遅れはこう、俺要因だったかどうかによらず、前の世界のトラウマが蘇るからな……。ふふ、３５連勤したっけ……。

　俺は頬を手で張って、遠い目をしていた焦点を目の前の問題に戻す。

　まずは先に心鉄になる部分を３つ量産する。気を遣うのは、ここで力を入れてしまうと普通に硬いものができあがってしまうことだから、そうならないようにしなければいけない。

「性能を若干落とすのに気を遣う」というのもおかしな話だが、そうしないといけないならそうするよりない。

　板金を取ってきて火床で熱する。やがて炎に負けず劣らず赤くなったそれを取り出すと、金床に置いて叩き形を整える。最終的にきっちりと形を整えるのはもっと後の工程になるから、ここではある程度整っていれば良い。

　うっかり魔力を込めないように気をつけて角柱形に整えたらそれで一旦終わりだ。２本目に取りかかろうかと言うところで、みんなが戻ってきた。

「あれ、もういいのか？」

「２人とも満足したみたい。お水を飲んだ後、自分たちで小屋に戻っていったわ」

「そうなのか」

「結構遊んでましたからね」

　ディアナママとリケお姉ちゃん（とクルルとルーシーは思っているだろう）２人によれば、皆と一通り遊んだら満足したのかすぐに戻ったようだ。

「にしても、ルーシーは成長が早いなぁ。力だけで言うともうすぐ小さい鹿くらいは狩れるんじゃないのか？　アタイたちに強く噛みつかないのはクルルがちゃんと教えてるんだろうけど」

　何の気なしに言ったのであろうヘレンの言葉に、俺とリディは顔を見合わせた。アンネは知らないが、ルーシーはただの狼ではない。魔物になってしまって群れを追われた子なのだ。

　いまいち本人（本狼？）にその自覚がないためか、今のところ「可愛い子犬」で通っているが。

「やっぱりアレかね」

「アレでしょうね」

　アンネには分からないようにその話をリディとする。誤魔化しがきかなくなってきたら森狼の中でも特殊なやつなのでは、で押し通すつもりではある。

　そもそも、人に慣れている魔物の取り扱いとかどうなってるんだろう。当たり前だが法治が徹底されているわけではないこの世界の場合、魔物討伐も根拠法があっての遠征、討伐ではないだろうが「かくまったら死罪」なんて法があったら、ちょいと困ったことになるしな。

　都に行ったときにマリウスにでも聞いてみるか……。

　俺は頭をかきかき、行く先に頭を悩ませながら自分の作業に戻った。

## 完成

2020年3月23日

　心鉄の部分の残り２つを作る。ここはもう手慣れてきて、すぐに終わった。

　今日は皮鉄を打ったら終わりだな。３つの四方ということは計１２枚の板を整形する必要があるので、それなりに時間はかかったが、なんとか日が暮れるまでには終えられた。

　翌日、サーミャ達はアンネを連れて狩りに出ていった。アンネは都に行ったあとそのまま帝国に帰る流れになるんだろうし、都へは俺とアンネだけ行くことになっているから、サーミャたちが一緒にどこかに行くのは今日以外にはない。

　俺は槍を作らなきゃいけないが、みんなでピクニックにすればいいのにとは思うし、実際そう言ったのだが「働いている人がいるときに行くのは憚られる」とかなんとかで、あくまで作業として狩りに出ていった。

　獲物は獲れても獲れなくてもかまわないから、のんびりやってくれれば良いんだが。

「いってらっしゃい」

「いってきまーす」

　俺とリケでみんなを見送る。クルルとルーシーもお散歩代わりに着いていった。アンネが嬉しそうに「行ってきます！」と手を振っているのもこれが見納めかと思うと、ほんの少し印象的なように思えた。

　角柱状の心鉄に鍛えた皮鉄をくっつけていく。４面一度には出来ないが、俺の作業速度であれば１面を処理している間に、温度が上がりすぎない範囲で別の１面を加熱しておくことも無理ではない。

　これも魔力で動くフイゴのおかげではあるが。

　２本分の皮鉄を貼り終えたあたりで昼食くらいの時間になったので、朝食のスープに具材を足して温め直したものを昼飯として食べながらリケと話をする。

「親方、いつになく仕事が早いですね」

「手慣れてきてるからなぁ」

「同じようなのをたくさん作れたりはしないですかね」

「手間そのものはかかるから、なるべくやりたくない感じではあるな……。作りは同じにしておいて、今回みたいに心鉄と皮鉄で素材をかえるようなことをしなければ、手間はあまりかからないかも知れないが」

「なるほど。でもそれだと今まで作ってきたのとあまり変わりませんね」

「そうなんだよなぁ」

　今作ってるのと変わらないのなら、そっちのほうでいいという事になる。北方風の槍よりも、ここいらで一般的な形式の方が売れそうだし。

「特注というわけではなくても、北方風の槍が欲しいって言われたら考えるくらいかな」

「そうですね。あまりうまみはなさそうです」

　俺がそのあたりに無頓着なせいか、ドワーフであるせいか、リケのほうがこの辺の判断はシビアだ。

「真っ当な品物には真っ当な報酬をもらうべき。それが品物と職人に対する礼儀である」と言うのが彼女の主張だし、俺もそれに異論はないのだが、どうもチートに頼っている感覚が強くて「いくらでもいいや」となりがちである。この辺は改善していかないといけないだろうな。

　パパっと昼食の後片付けをしたら、作業の続きである。日が沈む頃には仕上げてしまわないとな。

　加熱して叩いて整える。叩く間に次叩くものを火床に突っ込んでおいて少しずつ加熱したりと時間の短縮も図っていく。

「よーし、穂は出来た」

　そう言いながら窓の外を見る。今から石突を作って、柄を作るまでの時間がありそうだ。組み上げは最悪移動中でも出来るし。

　石突はとにかく硬く作り、形状はキャップ状にする。凝った装飾をつけてもあまり意味はなさそうなので、シンプルなものにしておいた。このあたりは能力に頼って同じものを４つ作った。

　柄になるものは最初に作った柄を参考に、庭に転がしてあった材木からよく目の詰まったものを選んで４本作成する。

　とりあえず１本組むか。

　試作品と同様に柄に挟み込んで、目釘を打ち、上から革紐をぎゅっと巻きつける。石突の方は釘で留めてしまうことにした。そうそう補修したりするものでもないしな。

　こうして１本が槍として完成した。

「ちょっと試しがいるかな」

「念の為ですか？」

「うん」

　俺がやっても良いんだが、やはりここはヘレンに頼みたいな。そう思っていると、ちょうど鍛冶場の鳴子がカランコロンと音を立てた。こっちが鳴ったと言うことは、家の戸が開いたのだ。

「ちょうどいい、ヘレンに頼もう」

「そうですね」

　俺は完成した槍を手に、みんなを出迎えに行った。

## ちょっと早めの祝杯

2020年3月25日

「おかえり」

　俺がそう言って出迎えると、７つの「ただいま」が返ってきた。明日を過ぎれば、これが６つに減るわけだ。アンネの本来の身分を考えれば、これから先で気安く接する機会はもうあるまい。

　そこに寂しさを感じはするが、一期一会もまた人生か。

「ヘレン、帰って早速で悪いがちょっと手伝ってくれ」

「お、できたんだ？」

「ああ」

「いいぜ。楽しみだな」

　槍を手にして声をかけたからだろう、すぐに察したヘレンがノリノリで応えてくれた。

「じゃあ、外で」

「おう」

　最初に試してもらったときと同様、外に出てそこらの丸太を立てる。リケが気を利かせて板金を持ってきてくれたので、丸太へ簡単に固定しておいた。

「すまんな、ありがとう」

「いえ」

　表面上は平静を装い、「親方の手伝いをしただけ」というように見せてはいるが、目の輝きを見ればすぐにわかる。これは単にどうなるか見てみたかったんだな。

　まぁそこを咎めはすまい。そういった好奇心があることは向上に必要な素養だ。……と俺は思っている。

　ヘレンは渡した槍をブンブン振り回す。軽々と扱っているが、さっき俺が持った限りではそれなりの重量があったはずだ。中空の物干し竿でも扱ってるみたいに振り回せるのは、筋力と技術のどっちのほうが寄与しているんだろうか。

「よっ」

　そのままの軽い感じで、ヘレンは丸太に固定した板金に切りつけた。板金が上下に分かたれ、落ちて小さな音をたてる。それ以外には音がしない。

「お見事」

　俺たちは風の渡る音だけがする静かな庭に、拍手の音を加えた。

　よく見れば板金だけが切れていて、丸太には傷一つついていない。ヘレンの技量とその精緻な操作に対応できる得物の為せる技だ。ヘレンの技量は疑うまでもないが、出来が悪い得物なら追随出来ずに板金が切れないか、丸太にも傷が入るかのどちらかだっただろう。

「やっぱりバランスが取れるとぜんぜん違うな！」

「そんなに違うものか」

「そりゃそうだよ」

　まだバランスを確認しているのか、真ん中あたりを持ってグルグルと回しながらヘレンは言った。

「良いものができてるならよかった」

「もらえるならアタイが欲しいくらいだよ」

「お値段は金貨１５枚となります。いつでもどうぞ」

「チェッ」

　それで７人全員が笑った。

「よし、じゃあ晩飯にしよう。みんなはちゃんと身を綺麗にしておいてくれよ」

　俺がそう言って、６人の返事が返ってくる。あと、クルルとルーシーからも。そうしてみんなバラバラと戻っていった。

　アンネにとってはこの食事がこのエイゾウ工房でとる最後の食事となる。明日は朝イチで出るから、俺とアンネは家では食べずに携行食料と言うか弁当みたいなものになるだろうし。

　なので、うんと豪勢なものにしておいた。肉は猪も鹿も出したし、それに添えるソースも種類を変えてある。そこに根菜類で作ったグラッセに似た付け合せもある。

「うちの基準ではかなり豪勢な食事です。アンネさんにとっては取るに足らないものかも知れないですが……」

　俺がそう言うと、アンネは手を顔の前でブンブンと振り、

「いえいえ、滅相もない！こんなのは王宮でも滅多に食べないですよ！」

　と否定した。たとえ、これがお世辞でも楽しんでもらえるならそれでいいや。

　みんなにはワインも注いである（リケは”いつもどおり”火酒だが）ので、めいめいそのカップを持って立ち上がる。

　コホン、と咳払いをしてから俺は言った。

「槍の完成のお祝いと、アンネさんの無事のご帰宅を願って！」

　その後は７人全員だ。

「乾杯！」

## 都へ

2020年3月27日

「じゃあ、帝国に戻ったら政務に？」

「そうなると思いますね。とは言っても、ご存じでしょうけど我が国は体制的にアレなので、私がやることは思っていらっしゃるよりは少ないですが」

　ワインのあとにリケの火酒を分けてもらったら気に入ったらしく、今

　既に顔は真っ赤だが、受け答えはしっかりしている。４～５杯呑んでもケロッとしているリケには及ぶべくもないが、酒に弱いほうではないらしい。

　あんまり深酒すると明日に響くぞとは思ったが、この先こんな機会がほぼ無いとなれば、その気持ちもよく分かる。なので、酒に弱い俺はまだ１杯目のワインをちびちびやりながら話に耳を傾けるにとどめておいた。

　その後、テーブルで寝入ってしまい、サーミャとヘレンに運ばれていたのはご愛敬と言うものだろう。

「頭痛とかはしませんか」

「はい。寝入ってしまいましたが、二日酔いはしないので」

「それなら良かった」

　今日これから馬車に揺られるからな。二日酔いのまま乗ると今度は乗り物酔いまっしぐらだ。都に着けば何らかの場には引っ張り出されるんだろうし、そこでグロッキー状態でいるわけにもいくまい。

　パパッと皆の朝飯の準備を済ませたあと、塩漬け肉を加熱したものを無発酵パンで挟んだものを俺とアンネの朝飯として用意しておく。

　俺の準備……と言っても、今回は鍛冶仕事はないつもりなので、俺が用意するのは薄氷と納品用の槍４本くらいなものだ。

　その間にアンネは荷物をまとめていた。本来なら帰れるはずだったあの日と同じで、荷物と両手剣を背にしているが、あの日よりもほんの少し迫力が増しているような気もする。うちでの狩りで鍛えられたとかじゃなかろうな……。

「それじゃ、いってきます」

「いってらっしゃい」

　俺と皆は普通のいってきますをする。

「みなさん、重ね重ねお世話になりました。ここでの日々は一生忘れることは無いでしょう。ありがとうございました。」

　アンネが頭を下げた。帝国第七皇女としてではない。帝国第七皇女の立場であれば、うちの家族に頭は下げられない。それは一般庶民（１人伯爵家令嬢がいるが）に借りを作るということで、許されることでは無いだろう。

　皆もアンネにハグしたり握手したりしながら、別れを惜しんでいた。

　森の入口へは俺とアンネだけで行く。これまでずっと万が一を考えてきたが、このタイミングで俺を誅するメリットは皆無だ。それが分からないアンネではない。

　俺が単に情に絆されているだけというのも否定はしないが。

　森は俺たちの状況などお構いなしに、気持ちの良い木漏れ日と風で辺りを満たしていた。

「こういう日にピクニックに行けたら良かったんですけどね」

「私も楽しみにしていたので、それだけは心残りです」

　心底がっかりしたように、小声でアンネは言った。事態がもう少し動かないでいてくれれば良かったのに、と思わなくもない。

　だが、それはアンネが帰る日が延びることも意味する。それはよろしくなかろう。単に日の巡りが良くなかったと思うしかない。

「ピクニックには行けませんでしたが、それっぽい食事はあるので、それでご辛抱ください」

「ええ、楽しみです」

　どこか遠くでさえずる鳥の声を聞きながら、俺たちは森の中を進んでいった。

　森の入口に辿り着く。近くの街道からは見えにくい茂みに荷物を下ろして、アンネを座らせた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

　荷物の中から朝食を取り出してアンネに渡す。

「エイゾウさんはこう言うの慣れてらっしゃるんですか？」

「まさか」

　俺は苦笑した。前の世界でもこんな経験をしたことはない。

「ただ、前に一度似たようなことをしましてね。その時は木の上で食事しましたが」

「凄い！

「いえ、そんな良いものでは……」

　実際のところ失脚工作に携わった訳だから、スパイかレンジャーかと言った感じではあったが。もちろんその辺はアンネには内緒だ。

　しかし、帝国にはレンジャーがいるのか。それとなく聞いてみると、「王国にもいますでしょう？」と婉曲的にだが認めていた。帝国の革命騒ぎは実際には茶番であったわけだが、あれが本当に起きていたことであったら、帝国のレンジャーやスパイ達が大活躍していたことだろう。

「もっと景色のいいところで食事に出来たら良かったんですが」

「いえいえ、ここでも十分ですよ。おいしいですねぇ」

　アンネは満面の笑みで応えた。その表情には全く装いというものを感じない。ほんの少しでも、気を楽にして過ごせる時間が増えたのなら良かった。

「来ましたね」

　そうして簡単な朝飯を終えて、茂みの影から街道の様子をうかがっていると、しばらくして見知った顔が操る馬車が見えてきた。

「行きましょう」

「はい」

　俺とアンネは荷物をまとめ、馬車に近づいた。我が家とアンネの運命を乗せて、都に運ぶ馬車に。

## 侯爵別邸にて

2020年3月30日

「よお、おはようさん」

「エイゾウさん、おはようございます」

「おう、おはよう、エイゾウ」

　馬車に声をかけると、荷台からカミロが顔を出した。御者の番頭さんも挨拶をしてくれた。

　カミロにも手伝ってもらって荷物を積み込む。槍が長くて多少嵩張るのと、アンネの両手剣が純粋にデカい以外には荷物の量は大したことはないので積み込み作業はすぐに終わった。

　カミロが番頭さんに声をかけると馬車が動き出す。こいつも例のサスペンション付きなので、速度の割には揺れはひどくない。

　アンネの方をチラッと見ると、彼女も気がついたようで意味深な目線を送り返してきた。慌てて目をそらしたが、まあバレてるだろうな。

　この技術は当然ながら軍事にも利用可能なものだ。多少の道の悪さを気にせずに速度を維持できるなら、それは行軍速度にも影響があるはずで、その速さとはニアリーイコールではあるが強さだ。

　うちのでの生活や会話から察するに、内政というよりは軍略の方に重きをおいているらしいアンネがそこに気が付かないはずもない。

　今後何らかの交渉事で求めてくる可能性は高いだろう。それにカミロや侯爵、マリウスが思い至らないこともないので、ある程度は見込んでのことだろう。……俺が買いかぶっているのでなければ、だが。

　街道上は何事もなく、俺たちも言葉少なだった。他国の重要人物が同席しているので、世間話程度でも王国内の事情を話すこともできない。

　だがそれはアンネも同じで、帝国内の事情を（例の革命騒ぎがあったとは言え）おいそれと話すわけにはいかない。

　なので自然と「いい天気ですねぇ」なんかの当たり障りのない話か、もしくは無言かになるのである。いっそ野盗でも現れてくれたほうが話題になっただろう。

　馬車は速度を落さずに、比較的早く都にたどり着いた。人でごった返す都の門前で、番頭さんが門番に札を見せると優先して通された。羨むような、やっかむような視線が俺たちに刺さって、俺は思わず荷台で縮こまる。

「こんなにあからさまに優先してもらって良いのか？」

「あまり目立ちたくないのは確かだが、いつ入れるか分からんようでは困るからな。俺たちを待ってる中には帝国の要人もいるわけだし」

「ああ、そうか」

　そうだった、これは帝国と王国とのゴタゴタを内密に、かつ穏便に済ませようという話なのだ。であれば王国の要人――今回は侯爵とマリウス――以外にも帝国側から要人は来ているだろう。

　アンネも連れていくということは、アンネが信頼できるか少なくとも知っている人物のはずで、だとすると皇族の誰かだろう。そりゃ無為に待たせるわけにはいかんな。

　他国の要人を待たせる空白の時間の分、今回の件に関する疑念は雪のように静かに、だがしっかりと積もっていくのだから。

　門の中に入っても、外とそう大差なく人でごった返している。人種も性別も年齢も様々な人がワイワイと溢れかえり、それぞれの目的を果たさんとしている様を見て、アンネが呟いた。

「王国の都も人が多いですねぇ」

「帝国の都もですか？」

「ええ。まあ今は一時的に人が減ってますが、皇帝陛下がああなので人間族以外も安心して暮らせるみたいで、この数倍はいますよ」

　以前に皇帝の妃も様々な種族がいると言っていた。つまり、その子たちもアンネを含めて種族が多彩というわけだ。どこまで狙ってやってるのかは知らないが、意図してのことならそこは評価できるかも知れない。

　そんな人の波を大洋を船が進むがごとく馬車は進んでいった。

　若干の懐かしさすら感じる、人の減った道を馬車はドンドンと進み、内壁を越えてやがて立派な屋敷にたどり着く。ここが侯爵の別邸である。そういえば、ここへ来るのはエイム―ル家の騒動以来か。

「着きましたよ」

　番頭さんの声で全員が下車した。俺とアンネは荷物を下ろすことも忘れない。その作業を見計らっていたのだろう、終わった瞬間に見たことのある使用人の人が「ようこそお越しくださいました」と挨拶もそこそこに先導をはじめ、俺たちは慌ててついていく。

　あまり馴染みのない絨毯の感触を足に感じながら、陽光の差し込む廊下を進んでいく。この後に待っているのが気楽な会合だけであれば、もう少しこの感触や景色を楽しめるのだろうが、今はそれが少し恐ろしげにさえ見える。

　別邸とは言え広い邸宅を進んでいき、やがて１つの部屋に通される。中には大きなテーブルがあって、既に数人が着席していた。

　そのうちの２人は知っている顔である。侯爵とマリウスだ。あまりいい顔色とは言えない感じで、１人の応対をしている。

　その応対されている人物はと言うと、身なりで言えばそこらのおっさんのようにも見えるが、生地の質が段違いに良い。そのアンバランスさに思わず笑いそうになるが、グッと堪えてはて誰だろうかと思いながら、まずは自己紹介かと思った瞬間、答えが思ってもなかった方向から飛んできた。

「お父様！」

　そう叫んだのはアンネである。つまり、この人物は帝国皇帝陛下、その人なのであった。

## 非公式和平会議開会

2020年4月1日

　その普通のデザインに反して高級な布地だなとは思った。大げさに前の世界の例で言えば、UNIQLOのTシャツが天然絹でできているような感じと言えばいいだろうか。分かる人は分かるが、そうでない人には見てもわからない違和感。

　それを着た男が皇帝であることを知って、俺は慌てて膝をつこうとしたが皇帝は手振りでそれを遮った。

「この場では楽にしてよい。お前は余の臣下ではないし、なによりこの服で偉ぶっても格好がつかんからな」

　そう言って呵々大笑する。俺は伸ばした背筋にツツーっと冷や汗が伝うのを感じた。前の世界のときから、おエラいさんは苦手だ。

「”黒の森”に住んでいる鍛冶屋だと言うから、どんなむくつけき男がやってくるのかと思ったが、目つきが悪いだけで心穏やかそうな男ではないか」

　”目付きが悪い”は余計だが、一応褒めてくれてるんだよな？

「もったいないお言葉、恐れ入ります。しがない鍛冶屋のエイゾウにございます」

「うん。余が帝国皇帝アレクセイ・サフィン・アンドレエフ・ヴィースナーである」

　膝はつかないが、深々と頭は下げた。北方式のお辞儀である。特に怪訝にしているふうもないから、それなりに北方に知己がいるのだろう。家名を名乗らなくてよかった。

　彫りの深い顔の眼窩から、緑色の眼が俺を射抜く。下手なことを言うとバレそうだな。なるべく正直に話すか……。

「私がカミロでございます」

「うん。今回は世話になった。あの話は余に任せておけ」

「ありがとうございます」

　皇帝の王国入りにはカミロも関わっているのか。ああ、侯爵やマリウスが自分の手駒でも動かせば目立つもんな。代金は帝国内で商売をしやすくすること、かな。

　カミロはもうちょい王国の中枢に食い込みたいのかと思っていたが、そうでもないらしい。あるいは二重スパイのような役割を果たすつもりなのかも知れない。

「で、アンネマリー」

　皇帝は顔の向きをアンネに向けた。即座にアンネは首を横に振る。皇帝はそれを見て再び笑った。

「まぁ、そうであろうな。本人を見て分かったわ。こやつにはそう言った欲がない。余が用意した

「申し開きのしようもございません」

「よい。これは余が甘かった。すまんな」

　手でアンネをねぎらう皇帝。親子の会話と言うよりは皇帝と臣下という感じである。普段からこうなのだろうか。そうだとしたら少し寂しい気もする。

　だが他国の上層部（それも最上層）のことだし、他人の家庭の話でもあるので特に口を差し挟むことはしない。

　着席を促されたので、席に座る。長い卓の片辺に王国の、それと向き合う側に帝国の人間が座る形だ。もちろん、アンネは帝国の方に座った。

「それでは、はじめましょう」

　マリウスの一言で場が一気に引き締まった。今ならこの部屋の絨毯に針を落としてもその音を捉えられそうな気がする。

「まずは、例の計画の話から」

　こうして、今回の件の後始末が始まった。

## あまり踊らない会議

2020年4月3日

「確認ですが、皇女殿下への襲撃は王国の男爵と、帝国の伯爵が結託したと言うことで間違いないですね？」

「王国側ではその認識だ」

「帝国側もです」

　マリウスの言葉に、王国側は侯爵が、帝国側は皇帝の隣に座っている細面の男が発言した。こういう場にいる以上、高い身分の人なんだろうな。単に俺とカミロの身分が本来同席するには低すぎるだけではあるが。

「それでは、こちらを」

　マリウスが合図をすると、扉が開いて使用人が入ってきた。手には槍を２本持っている。皇帝側から強い殺気を感じた。細面の男ではない。皇帝を挟んでその反対側に座っている女からだ。おそらくは護衛だろう。ここまでの情報を総合すると、大勢いるであろうアンネの「お母様」の１人か、あるいはその候補かも知れんが。

　その殺気を気にした風もなく使用人は槍を卓に置いて出ていった。なかなかの胆力だな。フレデリカ嬢なら気絶までありえるレベルの殺気を受け流せる使用人か……。

　使用人が出ていった瞬間に殺気が消える。カミロがこっそりとため息をつくのが聞こえた。

　皇帝が顎で槍を指すと、隣に座っていた女が１本を手にとった。そのまま、ためつすがめつしている。まさかこちらに向けることはないと思うが、万が一の場合は隣りに座っているマリウスを蹴飛ばせるようにこっそりと腰の位置を変えた。

　すると、女はこっちをチラッと見た。バレたか。これくらいなら、いくらでもしらばっくれることは可能だ。しかし、面倒の種にはなりかねない。

　俺は内心ヒヤヒヤしていたが、女は軽く鼻を鳴らすと、槍の品定めに戻った。

「確かに」

　やがて女は低い声で静かにそう言って、槍を２本まとめて自分の後ろに置く。取引完了、と言うことだろうか。

「事後はお好きにしていただいて結構です」

「わかった」

　マリウスの言葉に皇帝は頷いた。それを見て細面が口を開いた。

「さて、これで計画に必要なものは揃いましたね」

「私はこんなに念を入れなくていいと思うけどね。どさくさに紛れて人を２人始末するくらいで、いくら出来が良いと言ってもわざわざ出向いてまで受け取るようなもんかねぇ」

　細面に女がちゃちゃを入れる。ここまでずっと涼しい顔をしていた細面の顔が歪んだ。計画のキモは俺やカミロには言わないつもりだったんだろう。それはマリウスや侯爵も同じだったに違いない。

　それを裏付けるかのように、侯爵が大きなため息をついた。

「まぁ、そう言うことだ。ワシが得ることになった土地があるだろう？　そこに帝国の伯爵が奪還のために出撃する。その情報を間諜から得た我々は男爵を差し向ける。どちらにも国から兵を出す」

「で、どさくさ？」

　侯爵は大きく頷いた。

「連中もバカじゃない。私兵は連れて行くだろうし、良い防具を身に着けていくだろう。そこで鋼も貫くお前の槍の出番と言うわけだ」

「なるほど」

　俺の武器の質はこの場にいる人間は知っているということだ。マリウスと侯爵は目にしているし、皇帝もヘレンの武器を知ってアンネをうちに寄越したのだ、知らないはずがない。

　で、そんなことしなくても普通の槍で仕留められるだろ？　と言うのが女の主張らしい。それはそれで理解は出来るな。

　しかし、これだけなら俺をわざわざこの場に同席させる意味が分からない。少なくとも立場上は一介の鍛冶屋でしかないのだ、締め出しておいて話が終わったら金貨を寄越してハイさよならでいいんじゃないのか。

　それに皇帝がわざわざ出向いてくるような用事でもない。実際に話を進めているのは細面と女だし、この２人が来るだけで良かったはずだ。少なくとも今日１日は皇帝が不在という事になる。

　そんな空隙を作ってまでやってくるほどの話があるんだろうか。

　俺がぐるぐると思考を巡らせていると、何でもないことであるかのように、皇帝が隣に座るアンネに言った。

「あ、そうそう、アンネマリー。お前は王国に残れ」

## 人質

2020年4月6日

「私が……ですか？」

　アンネは困惑を隠せないでいる。当たり前だ。ようやく帰れると思ったら、残れと言われたのだから。俺もかろうじて自分の表情を動かさないようにするので精一杯だ。

　しかし、皇帝直々の命令を覆すことが出来る帝国の人間はいない。それは例え皇女でもだ。つまり、わざわざ皇帝陛下御自身がお出ましになったのは、それが目的とみてよさそうだ。

　もう少し相手の身分が低ければ手紙か何かでその旨を書いておいても構わなかったのではと思うが、皇女相手にそれでは具合が悪いという事か。あるいは単に娘には直接言いたいだけだったのか。

　皇帝は厳かな声で言った。

「うむ。それも此度の講和の条件に含まれておるゆえな」

　要はアンネは王国の人質のままと言うわけだ。アンネはそれで一応の納得はしたようだった。心の奥底ではどうなのかわからないが。

「よろしいでしょうか」

　俺は助け舟を出すべく、口を開いた。細面が俺をたしなめようとしたのか、少し腰を浮かせたが、皇帝がそれを手で遮った。

「よい。申せ」

「ではおそれながら。そも、なにゆえ条件として合意なされたのでしょうか。アンネマリー様を王国に置いておかねばならぬ理由が、浅学非才のこの身では分かりませぬ」

「ふむ」

　俺の言葉に皇帝の目がスッと細められる。こういうとこはアンネと親子で似てるんだな……。アンネは俯いていて、表情はよく分からない。

「簡潔に言えば、此度起きた一連の話は

　皇帝はそこで一旦言葉を区切った。少し時間を置いたのは反駁がないかの確認と、俺が理解しているかの見極めだろう。誰も何も言わないと見てとって、皇帝は続けた。

「だが、こちらが裏切った場合はそちらは移住者がいる土地を失うことになる。無論だが、積極的に裏切らずとも結果的にそうなってしまうこともあろうな。いずれかが生き延びてしまえばそうなるのだから。しかし、それは避けたい」

「なるほど。分かりました」

　そのための人質としては少し身分が高すぎるような気もするが、ごく内密に差し出すなら他にいないのも確かだろう。誰か臣下から出させるなら、事情を話さないわけにもいかんだろうし。

「それでだな、エイゾウ」

　今度は侯爵が口を開いた。この後の展開が見えてきて、俺がこの場に同席させられている理由も察しつつはある。抵抗しても無駄だろうな……。なによりも理由に俺が納得してしまう。

「皇女殿下を預かるにあたって、王国で一番安全なところはどこかと考えたのだ」

「うちでしょうね」

　俺は即答した。それだけは間違いなくそうだと言える。狼や熊、猪がウロウロしていて家には人避けの魔法もかかっている。

　なんだかホイホイ到達されているようにも感じるが、そもそも場所を知っているのは限られた人間だし、知るにはある程度の実力があると思われていないと無理だから、そもそも来る時点でそれなりの条件はクリアしてしまっているだけ、と言う話だ。

「うむ。頼めるか」

　ここで俺が断ったとして、アンネが腫れ物に触るようにあちこちをたらい回しにされるのは目に見えている。敵に近いような関係性だったのに、自分でも甘いとは思うが、ここまでで俺の答えは決まっていた。

「分かりました。お引き受けいたします」

「そうか。ある程度の援助はできるから、困ったことがあれば申すがよい」

「いえ、お守りするのであれば、

　侯爵の申し出は固辞しておいた。援助の名目で紐がつくのは避けたい。帝国にとってはアンネを紐にするつもりなら、それもどこかで断ち切ってやろう。

　ニヤリ、と笑う皇帝の目線をどうにか受け流しつつ、俺は内心でそう決意した。

## 引き受ける

2020年4月8日

「では、援助ではなく対価を支払おう」

　侯爵がそう言うと、さっき槍を持ってきた使用人さんが今度は革袋を持ってきた。

「金貨である。受け取ってくれ」

「対価であれば遠慮なく頂戴します」

　ずっしりとした革袋を使用人さんから受け取って懐におさめる。金貨の枚数はあらためない。こんなところでケチなことをする御仁ではなかろう、と言う信頼でもあるし、ここで不義理を働けばどうなるかわかっているだろうと言う自負でもある。

「では、私への用事はこれで済んだかと思いますので、これにて失礼させていただければと思いますが」

「うむ、そうだな」

　俺の言葉に侯爵と皇帝が鷹揚に頷いた。こう言う場に長居は無用だ。残っていたら何を聞かされるかわかったものではない。

「それでは」

　中座しようと俺が立ち上がると、同時にアンネも立ち上がった。

「アンネマリー様はもうしばらくこちらにいらしては」

　うちに来るとなると、基本的に森と街を往復する生活になる。都に行くこともそんなにないわけで、ましてや帝国となるとほぼ皆無だろう。慰安旅行みたいなもので行くかも知れないが、逆に言えばそれくらいしか機会はない。

　旅行に出たとしても、王族と面会なんてことが一介の鍛冶屋とその家族においそれと叶えられるものでもない。

　となれば、これは肉親と顔を合わせる残り少ない時間なのだ。少しでも長いこと一緒にいればいいのに。

「いえ、私もここに残る理由がありませんので」

　しかし、アンネはそれを断った。少しの決意を秘めた瞳が、俺を見据えた。本人に覚悟があるのなら、それ以上何かを言うのは野暮か。

「左様ですか。それでは、皆様失礼いたします」

　そう言って俺は深々と北方式のお辞儀をする。アンネも真似をする。部屋を出る前にカミロに「おやっさんとこ行ってくる。終わったら伯爵閣下の屋敷で落ち合おう」と耳打ちすると、頷いて札を出してきた。通行証だ。

　俺はお礼の代わりにカミロの肩を軽く叩いておいた。

　扉を出る瞬間、皇帝に声をかけられる。

「おい」

「なんでございましょう？」

「頼んだぞ」

「お任せくださいませ」

　それは親としてのものなのか、皇帝としてのものなのか。”きちんとした”発言であれば、このタイミングで声をかけることはないだろうから、前者だと思いたいが、いずれにしてもアンネを無碍に扱うつもりは毛頭ない。俺は皇帝の目を見ながら頷き、皇帝も頷き返して俺とアンネは部屋を後にした。

「さて、それではメシにしましょうか」

　扉を締めて、俺は努めて明るくいった。グルグル考え込んでしまいそうなときは、メシをかっ喰らってしまえば大抵のことはどうでも良くなる。俺だけかも知れないが。

「”おやっさんとこ”とおっしゃってましたよね」

「ええ。知人が食堂をしてましてね、そこのメシが美味いんですよ」

「それは楽しみですね」

　部屋の外にいた使用人さんの１人に案内されて、廊下を歩きながらそんな会話をする。こうしてるときは年頃の娘さんと言う感じがあるな。……背中の両手剣に目を瞑ればだが。

「それは持っていくんですか？」

「ええ。護身用にはいささか大げさですが、これくらいハッタリが効いていたほうが余計なちょっかいもかけられないかと思いまして」

「なるほど」

「エイゾウさんもそれを持ったままで行くんでしょう？」

「ええ、まあ」

　俺も今は”薄氷”を腰に佩いたままでいる。もちろんこのままおやっさんのとこまで行くつもりであった。都は治安が良いとは言っても、女連れが無手でブラブラしてても平気の平左というほどではない。ある程度のトラブルが起こる可能性は十分にある。

　アンネとしてもできるだけ自分の身は自分でということだろうか。本人が良いなら良いか。

　こうして、傍目にはやたら物騒な２人は侯爵の別邸を後にした。

## おやっさん

2020年4月10日

　俺とアンネはブラブラと内街――内壁の内側の街を歩く。着ているものは完全に場違い感のある男女が２人。

　それも男の方は北方人で革帯に刀を吊り下げ、女の方は巨人族で背が高く、背丈に負けず劣らずな大きさの両手剣を背負っているのだから目立つことこの上ない。

　見た目も釣り合ってはないだろう。アンネはお姫様である。ディアナも伯爵令嬢だからなのか、やたら美人で釣り合ってないなぁと思うのだが、それに負けず劣らずだ。

　だからだろう、時折興味を隠さずに見てくる人がいる。刀と両手剣の効果なのか場違いすぎるからなのか、声をかけてくることはないが。

　道中、俺もアンネも特に言葉をかわさなかった。黙々と目的地に向かって歩いていく。やがて見覚えのある門にたどり着いた、内街と外街を隔てる内壁の門だ。

　門番も遠慮なく視線を送ってくるが、これは職務上致し方あるまい。俺は懐から通行証を取り出して、門番に提示した。門番は通行証をあらためて、身振りで通っていいと示す。

　俺とアンネはペコリと会釈をしながら通り過ぎた。

「わ」

　門を出て少し歩き、大通りに出たところでアンネが目と口を丸くあけた。今日も都は人でごった返している。

「馬車から見たときはもうちょっと普通に見えましたけど、降りて見るとたくさんいるんだなってなりますね」

「そうですね。あれから時間も経ってますし、人出が増えてくるころですからね」

「なるほど」

　視点が下がると密集しているように見えたりもするが、この場合は実際に人が増えているのとの相乗効果だろう。アンネは納得した後、行き交う人や露店を見回している。

　大通りに出たことで服装については場違い感が薄れたが、男女で武器を帯び、北方人と巨人族という取り合わせはどうしても衆目を集めがちにはなる。

　救いなのは内街よりも色んな人がいるここでは、不躾な目線を送って来る人の数がそう多くはないことだ。

「こっちです」

　まだ事態は完全に解決していないこともあるし、あまり注目されるのも良くないので、俺は少しだけアンネを急かした。アンネは「わかりました」とだけ言って、俺のあとをついてくる。

　その様子がなんだかルーシーが後をついてくるときのようだったので、思わず笑みが零れそうになるが、必死でそれを抑え込んだ。

　大通りからおやっさんの店はそんなに遠くない。程なくたどり着いて、「ここです」とアンネを案内しながら入り口から入る。

　ピーク前に間に合ったのか、客の姿はまばらだ。入ってきた俺達を見て、おやっさんの娘さんが席を示し、俺たちは武器を外して着席する。

「親父ー！　またあの鍛冶屋が来たよ―！　新しい嫁さん連れてるー！」

　おやっさんの娘さんが厨房があるんだろう奥に向かって、ものすごく誤解のある内容を大声で叫ぶ。その答えはすぐにすっ飛んできた。「なにぃ！！」と言う大声とほぼ同時に思えるぐらいすぐにだ。

「エイゾウ！　てめぇ他のかかぁはどうした！」

「彼女たちはかかぁじゃないよ。ついでにこの人も家族だけどかかぁじゃないからな。今日は伯爵閣下の用事で俺とこの人だけだよ。用事が済んで腹減ったから飯食いに来たんだ」

「じゃあ他のかかぁを見捨てたんじゃないんだな？」

「そんなこと、俺ができると思うか？」

「考えてみりゃおめぇにゃ無理だな！」

　そう言っておやっさんはガハハハと大声で笑う。なんだ、嫁を乗り換えたとでも思ったのか。

「おし、そうと決まりゃあいつらにも手伝わせて腹いっぱい食わせてやっからな」

「今日は金払わせてくれよ」

「腕がなるぜぇ！」

　俺の言葉を無視して、おやっさんは厨房に引っ込んでいく。俺は苦笑しつつそれを眺めながら、アンネに今のことと、これからのことをどう説明したものかと、少し頭を悩ませるのだった。

## 家族がもうひとり

2020年4月13日

「以前に魔物討伐に従軍したことがあるんですが、この店の主とはそこで知り合いましてね」

「従軍ですか」

「ええ。壊れた武器や防具を修理するためにです」

「なるほど」

　アンネはあまり兵站には興味ないのだろうか。大規模な補給を必要とする戦争はこのあたりではもう長らく行われていないようなので、そのあたりの意識が薄いのかも知れない。

「口は悪いですが、腕は確かですよ。うちの食事を気に入ったのなら、ここの料理も気にいるかと思います」

「あの」

　話の途中でアンネを口を挟んだ。なんだか少しもじもじしている。何を言うつもりなのかと思っていると、意を決したように口を開いた。

「エイゾウさんの家にいる人は家族なんですよね？」

「……ええ、そうですね」

「じゃあ、私もですか？」

　そう言って、少し眉間にシワを寄せ、上目遣いでこっちを見てくる。ううむ。

　彼女は明確に人質としてうちに預けられるわけである。そう言った意味では明確に家族かと言うと違うだろう。

　だが、その点で言えば建前上はディアナもリディもヘレンも同じことである。ディアナは預けられているだけ、リディも都にほど近い森がうちだからだし、ヘレンもほとぼりが冷めるまで身を隠している。

　でも俺は彼女たちを家族として扱っている。それに、いつまでになるか分からない期間を他人行儀で過ごし続けるのも俺たちにもアンネにも負担になるだろう。

　そんな事を考えている、ちょっとの沈黙のあと、俺は答えた。

「そうですね」

「そうですか」

　アンネはホッとしたように言った。その後、おやっさんの娘さんが「ハイお待ち―」と料理とエールを持ってきたので、アンネが小声で「良かった」と言ったのは俺の耳には届かなかった。

「で、家族であるならばですよ」

「ええ」

　うまい料理に舌鼓をうちながら、少しだけ酒が入って気が大きくなったのか、アンネが少し絡み口調で言った。家で呑んだときもその兆候はあったが、あんまり酒癖は良くないらしい。

「話が堅苦しいのはどうかなと思うわけです」

「なるほど」

　この意見には完全に同意である。弟子であるリケや、普段から口調が丁寧なだけのリディはともかく、他の家族はざっくばらんに俺に話すし、俺は全員にいわゆるタメ口で接している。

「それじゃ、これからは普通に過ごそう。お互いにね」

　俺は他の家族に接するようにアンネに話す。このカレーっぽい煮込み料理うまいな。

　俺の言葉を聞いたアンネは、酒の影響なのかは分からないが、顔を赤くして、

「うん、わかった」

　とだけ言って、ぐいっとエールのジョッキをあおった。

「うちに関して言えば、腕前はともかく仕事自体は見てもらったとおり普通の鍛冶屋だよ」

「それを手伝えばいいの？」

「そうだなぁ……。力仕事は嫌いか？」

「いえ、全然」

「じゃあ、色々やってもらうことはある。うちは１人を除いて結構力持ちだけど、鎚を振るったりは結構な重労働だからなぁ」

「１人ってエルフのリディさん？」

「うん」

　リディも人並みには力はある。少なくとも狩りについていく程度には。それでも鍛えに鍛えているディアナや、ここらではほぼ最強と言っていいヘレンたち人間と比べてはともかく、獣人のサーミャやドワーフのリケと比べてしまうとその差は如何ともし難い。

「越えられない壁」と言う単語が頭を過ぎった。

「リディは頭を使うような仕事をメインにしてもらえたらなと思うんだが、そんな作業は滅多にない」

「鍛冶屋ですもんね」

「うん。あんまり手を広げる気もないしな」

　リディがうちにいる理由は、魔法のコンサルタント的なことをするためである。だが、この世界では依頼は滅多にない。リディも「前のところでも滅多に来なかったですよ」と言っていたし、そうそうあることではないんだろう。少なくともそれで飯を食える程ではないはずだ。

　なので、彼女は本来の頭脳労働よりも、うちの力仕事を手伝ってくれている。そっちの作業も気に入ってくれてるみたいなのが救いだが。

「慣れてきたら、みんなでなにか作ってもらおうかな。アンネが来るなら人は十分いるわけだし」

「……っ。そうね。まずは仕事を覚えないと」

「まぁ、気楽にやってくれたらいい。注文がなけりゃ、品物はあの商人に卸す分しか作らないから」

　のんべんだらりと好きなときに好きなものを作って暮らしていくのが俺の目標なのだ。今はまだ目標への途中ではあるが、そこであくせくする気もあまりない。

　……なんだか結構働かされているように感じるのは気のせいだということにしておこう。うん。

「ちょっと楽しみ」

「なら良かった」

　フフっと微笑んだアンネに答えながら、俺も自分のエールをぐいっとあおった。

## マーティンとボリス

2020年4月15日

　おやっさんの食事攻勢は適当なところで止めておいた。こっちから言わないといつまでも出てきそうだったし。娘さんに伝えると苦笑していたから、多分知人が来るとこうなのだろう。

　俺もアンネも腹がはち切れんばかりになっているので、少し休ませて貰うことにした。まだギリギリでピークにはなってないので、おやっさんに言われたんだろう、厨房からマーティンとボリスも出てきて少し話す。

　基本的には遠征隊のときの話だ。アンネも興味深そうに話を聞いている。

「じゃ、あれから従軍はしてないのかい？」

「そうッスね。まぁ、正直従軍しても実入りは良くねぇんですよ。エイムールの坊っちゃ……伯爵閣下のときは、おチビさんの頃からおやっさんが知ってる人間だから断りきれねぇってんで」

「なるほど」

　マリウスはたびたび内街を抜けて、このあたりに遊びに来てたっぽいからな。そんな昔からの付き合いなのか。

「でも、あん時ゃちゃんと色つけてくれてましたからね。あの人はスジってもんがわかってなさる」

「ほほう。俺も今度同じことあったらボッてみるか」

「おすすめしときやす」

　そう言って俺とマーティン、ボリスは笑った。

「そういや、エイゾウの旦那は都には来ねぇんですかい？」

　ボリスが割と真剣な感じで言った。俺は肩をすくめながら、

「俺は”わけあり”で北方から流れてきてるからな。あんまり人の多いところにゃ居たくないのさ」

　と返した。実際は”黒の森”でないと魔力が足りずに十分な生産が出来ないからなのだが、それをボリスたちに言う必要はなかろう。後はどうも基本的に都イコール厄介事のイメージがついてしまって、どうにも足が向きにくいのもある。

　そんな俺の言葉にガクーンと肩を落とすボリス。

「そうですか……」

「なんかあったのか？」

「いえね、旦那に研いで貰ったナイフの切れ味が良いもんで、時々出せりゃなぁと」

「なるほど」

　腕のいい研ぎ屋に任せたい、と言うのは理解できる。職人として道具は良いものを使いたいし、良い状態を保ちたいのは当たり前の欲求だろう。

　俺の場合は元々用意してくれていた道具が良いものだったので特に不便を感じてないが、ちょこちょこ手入れはしている。

　今研いでやってもいいのだが、そろそろピークだ。それに備えた準備も必要だろうし、邪魔になるのも良くない。それに今やったところで、俺は定期的に都に来るわけでもないから、それこそ付け焼き刃というか……。そうだ。

「カミロって商人の店がこの都にもあるはずだ。そこにエイゾウに言われて持ってきた、って預けてくれれば研いで返すぞ」

「本当ですかい！？」

「ああ。時間は貰うけどな。街にあるカミロの店に行くのが大体１～２週に１回だから、行ったときに預かって研いで次行ったときに返す、となると……まぁ

「十分でさぁ！！」

　ボリスは飛び上がらんばかりに喜んでいる。マーティンもボリスの隣でウンウンとしきりに頷いているから、喜んでるんだろう。

　その頃合いでワラワラと集団が店に入ってきたので、俺たちはお暇することにした。

「それじゃ、おやっさんにもよろしくな。代金は……」

　そう俺が聞いて要求された金額は「ニヤリと笑ったボリスの笑顔と力こぶを作ったマーティン」だった。……「このまま黙って帰れ」ってことね。

「わかったわかった。また来るけど、必要なときはちゃんと要求してくれよ」

「わかってまさぁ」

「ありがとうな。ご馳走様」

　俺は北方式の挨拶で感謝を伝える。アンネも「ありがとうございました」と会釈をする。

　厨房に戻りつつ手をふるボリスとマーティンに手を振り返しながら店を出ると、俺たちの後を「また来いよ！　来ねえと承知しねぇぞ！」というおやっさんの怒鳴り声が追っかけてくるのだった。

## 探索者

2020年4月17日

「さて、あっちはそろそろ終わったかな」

「結構時間経ってるよね」

「ああ、でも今度は向こうが昼飯食ってる頃か。ちょっとぶらついてから戻ろう」

「わかったわ」

　ぶらぶらと人でごった返す通りを歩く。今はちょうど昼頃で、露店で食べ物を売る店なんかも盛況だ。今日は随分使い込まれた様子の武器を帯びた人々があちこちにたむろしているので、俺とアンネも目立たない。

「あれは”探索者”かしら」

「そうだな。数が多いから大きな”遺跡”でも見つかったかな」

「王国は”遺跡”が多いから、まだ見つかってないのもあるんでしょうね」

　この世界では昔に魔族とその他の種族の間で大きな戦争があった（そして痛み分けになった）が、それより更に前にも幾度か大きな戦争が行われていた、という言い伝えがある。

　そのうちの何回かは魔族が勝ち、何回かはその他の種族が勝っている。そしてその時に、地上も地下も含めて少なくない数の建造物、特に軍事目的のものが放棄されている……らしい。今はそれらは「遺跡」と呼ばれ、時折当時の軍資金の一部やなんかが眠っていることもあるのだとか。

　管理されていないそれらの宝物は、最初に見つけた者に所有権がある。まぁ、幾ばくかはその土地を治める領主に渡しておいたほうが無難らしいが。一攫千金を夢見てそれらの遺跡を捜索するのが「探索者」たちというわけだ。

　とは言え、無限に遺跡があるわけでもない。そこで、遺跡が見つかってないときは便利使いや傭兵みたいなことをしているそうだ。

「情報を流すのには便利なのよねぇ」

　あんまり良くない顔でアンネが笑う。この世界にいわゆる「冒険者ギルド」のような世界的に組織化されたものはない。

　が、野盗スレスレの扱いしかされない彼らが、自衛のために情報交換を密にしていないわけがない。そこに乗っかって色々な情報を流せば、行商人以上にあちこちに出歩く特性上、それなりの広まりを見せる。

　帝国ではそれを利用していた、ということだろう。いやまぁ、王国も共和国もしてるだろうし、それこそ侯爵もしてるんだろうけど。

「エイゾウは探索者になろうとは思わなかったの？　剣の腕もたつのに」

「ないね。俺はゆっくりのんびり暮らしたいんだ」

「帝国に来ればできたのに」

「あれもこれもとこき使われる未来しか見えないな」

「バレた？」

「そりゃあね」

　そう言って俺とアンネは笑った。心底からは諦めていないのだろうが、今はもう積極的に帝国へという気はないようだな。

　あんまり腹に一物も二物も抱え込んで、体調不良になられても困るから、いい傾向だと思う。

「でも」

「うん？」

「どうしても欲しい鉱石とかがあれば、少しは探索に出ることを考えるかも知れないな」

「なるほど。その時は……」

「俺１人では寂しいから、出来れば”家族”全員で行きたいな」

「そう」

　俺の言葉を聞いて、アンネの顔がほころぶ。「家族」という言葉に含まれていることは察してくれたらしい。他の家族ともうまいことやってくれると良いのだが。

　露店を冷やかしたりしながら、俺はこれから先のことをぼんやりと考えるのだった。

## 都から帰ろう

2020年4月20日

　外街で様々な露店を冷やかす。参考になればと思って探してはみたが、武器や防具を扱う露店は見当たらなかった。探索者達がいるとは言っても、普段はそんなに売れていくものでもないのだろう。

　その代わりと言っては何だが、日用品を扱う露店は見つかった。そこの店番をしていた、年の頃は１５そこそこくらいに見える若いのに話しかける。

「ああ、じゃあ工房は別のところに？」

「そうそう、都から少し離れたところにあるもんで、ここに持ってきてるんですよ」

「都の工房から怒られたりしないんですか？」」

「ここにある工房は大抵貴族から注文を受けてやってますからね。こう言うのは別になにも言われませんよ。ここの軒先を貸して貰ってるんで、念のため一番近い工房に話は通してあるらしいですが」

「ここ」と言いながら若者は自分の背後を顎で指し示した。看板も何も出ていないが、何かの工房ではあるらしい。今も木槌で何かを叩く音が聞こえている。

　この工房で作っているものは露店のものとは商品が競合しないし、露店を出して売るようなものでもないのだろう。それが何なのかまでは分からないが。

　一方で念のためレベルとは言え、近い工房には話を通しておく程度の義理を切っておく必要はあるわけだ。場所を借りてる都合上、万が一にも貸主に迷惑がかかるような事があってはいけないからな。

　逆に言えば、都でもこの程度のことを押さえておけば自由らしい。街の自由市のように完全に自由（あちらはそのために毎回出店料を払ってるわけだし）とまではいかないとは言え、厳しくもないようだ。

　こうして時間を潰したあと、のんびりと内街へ戻る。一応警戒はしたが、以前に家族旅行（みたいなもの）で来たときのように、よからぬ事を考える輩はいないようだ。

　まあ、刀と両手剣を持った男女に襲いかかろうと思うやつはそうそういない。

　いるとすれば、よほどの理由を持ったやつだろう。それに心当たりがないわけでもないが、今この時点で仕掛けることはあるまい。リスクが高すぎるからな。

　内壁の門番に通行証を見せて通り過ぎる。それなりの人通りがあるとは言っても、外の喧噪とは切り離された領域。こちらの落ち着きも嫌いでは無いのだが、どちらかと言えば外の方が好きではある。

　そして俺たちは再び場違いな２人組となり、伯爵の屋敷――つまりはエイムール邸を目指すのだった。

　エイムール邸に着くと、顔見知りな衛兵の人が頷いて通してくれたので、俺たちも会釈をして門をくぐる。その門の内側ではボーマンさんが待っていた。

「すみません、待ちぼうけさせてしまいましたか」

　俺が焦って言うと、ボーマンさんはニッコリ微笑んで、

「いえいえ、お客様の前で失礼ですが、いい休憩になりましたし、待つのも仕事でございますので」

　と返してくれたので、俺は胸をなでおろす。多分に謙遜と言うか、客に恐縮させてはいけないという職業意識もあるんだろうが、気にしていないならとりあえずはいいや……。

　ボーマンさんが案内して通してくれた部屋では、カミロとマリウスが談笑している。

「皇帝陛下は？」

「お帰りになられたよ。あの件は一刻も早く取りかからないといけないし、この会談で時間を費やしている間にも仕事はどんどんたまっていくらしいからな。娘をよろしくと言付かっている」

「そうか」

　侯爵はともかく、皇帝の方は帰る前に娘に会っていくのかと思ったが、それも出来ないくらい忙しいようだ。

「ごめんな」

「大丈夫よ。そうだろうなと思ってたもの」

　そう言ってアンネは微笑んだ。我慢しているふうはない。もしかすると、そもそも時々しか話なんかは出来ていなかったのかも知れない。

　彼女の新しい家族としては、話をする時間を増やせたらいいなと思う。

「よし、それじゃエイゾウたちも戻ってきたし、俺たちもおいとまするか」

　少ししんみりしかけた空気を入れ替えるようにカミロがそう言って立ち上がった。

　俺もつとめて明るく返す。

「そうだな。長居は無用だ」

「エイゾウ、時々はこっちに来いよ？」

「いやぁ、お前も忙しいだろうからなぁ」

　マリウスの言葉にも笑いながら返し、俺たちは部屋を後にした。

　さあ、新しい家族と帰るとするか。

## 皇女様の”おかえり”

2020年4月22日

　マリウスは結局扉のところまで見送りに出てきた。カミロの馬車に乗った俺たちは手を振った。

「気鋭の伯爵閣下のお見送りか」

「こっちには帝国の皇女殿下もいるんだ。格で言えば遥かに上だぞ。それこそ侯爵よりも上だ」

「確かに。それなら当然の対応か」

「まあ、俺とエイゾウは商人と鍛冶屋で下も良いところだが」

「違いない」

　エイムール邸を離れて、俺とカミロは軽口を叩き合って笑った。

「”聞いていた”以上に伯爵とは気安いのね」

「まあね。アンネにも多くは言えないけど、少なくとも俺は友達だと思ってるよ」

「俺は？」

「どうだろうな」

「ちぇっ」

　わざとらしく舌打ちをするカミロ。今度はアンネも一緒になって笑う。こうして、静かな内街を馬車は進んでいった。

　門のところにはついさっきもいた門番さんが立っている。通り過ぎる時に俺たちと目が合うと、納得したというような顔をしていた。

　武装している貴族には見えない男女２人の素性について、今の状態を見れば馬車の護衛だったのだと考える方が普通だろうし、多分その辺のことを思ったのだろう。

　またしばらく見ることもないのかと思い、俺は少ししみじみとしながら、小さくなる門を眺めた。

　人でごった返す大通りを行き、外壁の大門を抜けた。

「そう言えば、あの門が大きい理由って巨人族が通れるようにだっけ」

「そうなの？」

「俺はそう聞いた」

　カミロからだったかな。口を挟んでこないので、ヤツから聞いたんじゃ無いにせよそう言う話があるのは確かだ。

「祖先は今よりも大きかったとは私も聞いてるけどね」

「ほほう」

「でも、さすがにあれを用意しないといけないほど大きかったかは疑問ね」

「だろうなぁ」

　俺は大門を見ながら言った。アンネでも４～５人は縦に並べそうなほどデカい。

　もしかすると特異的に大きい巨人族もいたのかも知れないが、そのためにだけに用意するほどデカかったかと言うと、そこは怪しいだろうなぁ。

「私は人間との子だから小さいけど、巨人族は色々とサイズが大きくて困る話には事欠かないからね」

「例えば？」

「食器なんかも人間の大きさだと少し小さくて使いにくいとか」

「あとは服とか？」

「そうね。仕立てるのに布がたくさん必要になるから、時間もお金もかかるみたいだし……」

「なるほどな。あ、うちの食器も大きめにしたほうがいいか？」

「ううん。私は別に普通の大きさでも平気。母様がもし来るなら用意して貰った方がいいかも知れないけど、その予定もないはずだし」

「ふむ」

　アンネにはいらないとは言っても、アンネの母親――つまりは帝国皇帝の后だ――以外にも巨人族のお客がいつ来ないとも限らない。狩りの獲物を回収した午後とかにでも作っておくか。

　そうして街道を馬車は行く。今日も空は晴れ、白い雲が青い街道をゆっくりと進んでいた。渡る風が草原を撫でて、草がくすぐったそうに揺れている。

「こんなに平和そうに見えても、世界のどこかでは何かが動いてるんだなぁ」

　俺は風景を眺めながら、ポツリと口に出した。それを聞きとがめたアンネが答える。

「それが世の中ってものでしょ。立場の違いはあるだろうけど、基本的には自分たちのために動いてるんだから、どこかで衝突はしちゃうし」

「そうだなぁ」

　出来ればそういうことからは身を離しておきたいものだが、世間と関わりを持つ以上、そういうわけにもいかないんだろうなぁ。実際、アンネ……と言うか帝国は俺が王国よりだと思っていたわけだし。

　しかし、だがそれでもだ。

「そういうこととは関わり合いになりたくないな」

　そう言っておかないと、すぐに引きずり込まれてしまうような気がして、俺は口に出し、アンネはそれ以上なにも言わなかった。

　馬車は普通よりも早く進み、日が暮れない間に森の入口に辿り着いた。それでももうしばらくすれば、太陽は付近を赤く染め上げていくだろう。

「すまんが念のために松明を貰って良いか？」

「ああ。好きなだけ持ってけ。今回は無料でいい。次は貰うけどな」

「がめついな」

「商人だからな」

　カミロと俺は笑いながら握手を交わして、今回の別れを告げる。家まではもう少しだ。

　森に入って少しすると、思った通りに森の中が橙色に沈んだ。その中を俺とアンネの長くなった影がゆっくりと進んでいく。

　ここまで２人の間に会話は無い。黙々と木々の間を進んでいくだけだ。

　ギリギリで家にたどり着けるかと思ったが、どうもそうはいかないようで、森を満たしていた橙色に黒が混じりはじめる。

「念のために今のうちに松明をつけておくか」

「そうね」

　俺は持ち物から必要な道具を取り出して、松明に火をつけた。周囲にまた橙色が戻ってくる。

　俺とアンネは再び歩き出した。

「あのね」

　歩き出して少し、アンネが口を開いた。

「なんだ？」

「わたし今、ちょっと喜んでる」

　俺は答えないことで先を促す。

「皇女としての日々もそれはそれで良かったけどね。それが私というものだったし」

　下生えを踏む音が辺りに響く。

「でも、エイゾウの家に来て、初めて心の底からゆっくり出来た気がするの」

「そうか」

「だから、またあの生活が出来るんだって、喜んでる」

「それでいい。まあ、仕事も手伝っては貰うけど、基本的には皆のんびりだ」

「楽しみだわ」

　周囲の暗さに相反してウキウキとした声でアンネは言った。これから森の奥暮らしなんて！　と思っていたら辛かろうと思っていたが、少なくとも言葉の上ではそうではないようなので少し安心する。

　そうして辺りが暗くなった頃、松明の光とは違う明かりを見つけた。家だ。

　扉の前には皆が出てきている。クルルとルーシーも、家の前でお座りをしていた。

「ちょっと持っててくれ」

「うん」

　何がなんだか、と言う顔でアンネは松明を受け取った。俺は少しだけアンネから家寄りに離れ、アンネに向かい合う。

　それと同時に、風の音しかしなかった森に、俺を含めた皆の声が響いた。

「おかえりなさい、アンネ」

　それを聞いて最初はキョトンとしたアンネは、やがて笑っているのだか、泣いているのだか分からない顔をして返した。

「ただいま、みんな」

# 間話

## わたしの夢

2020年4月24日

　わたしは夢を見た。

　普通の娘として、父様と母様に祝福されながら、立派に嫁いでいく夢だった。とても幸せな夢で、起きたときに夢だったことにがっかりさえしたものである。

　父様と母様の娘になってもう何年にもなる。わたしには本当の母様もいたと言うのだが、理解はすれども記憶にはない。

　なんでも私が生まれてから、そう経たないときに亡くなってしまったのだそうだが、少なくとも物心が付いたとき、わたしの父様と母様であったのはあの方々だ。

　だから、わたしはずっと父様と母様と呼んでいる。常日頃から自分たちの事を父親、母親だと言っているのだし、問題はあるまい。

　わたしは都合で普通に嫁ぐことは出来ない。少なくとも、とんでもなく低い確率で相手が見つかるまでは無理だ。

　そこに忸怩たるものを感じずにはおれないが、このまま嫁ぐことなく生涯を終えるのも、もしくは娘として父様と母様を看取るのも悪くない、そう思うのだ。

　わたしには姉様もいる。姉様もわたしも、父様たちとは

　呼んでいるのもわたしがそう呼んではいるが、父様や母様には一度だって同じ言葉で聞こえたことはないはずだ。

　だから、毎朝父様がわたしと姉様に、

「クルル、ルーシー、おはよう。水を汲みに行こうか」

　と微笑みながら挨拶をされたとき、わたしたちは、

「はい、父様」

　と答えるのだが、それは通じていまい。だが、わたしたちはそれでいいと思っている。

　姉様は人の間では走竜と呼ばれているドラゴン、わたしはこの森で生まれた狼だが……この森の魔力のゆえか、わたしは狼の魔物と化しているそうだ。いつだったかリディ母様がそう言っていた。

　そのため、わたしの知能は普通の狼よりも遙かに優れている（らしい）し、姉様も普通の走竜と比べてより上位のドラゴンに近くなっている。

　父様と姉様が水瓶を２つずつ携え、わたしは１つを持つ。５つもあればわたしたちを含めて家族１日分は十分にまかなえる。

　わたしたちはゆっくりと森の中を進んでいく。私の鼻が気配を捉えた。

「姉様」

「分かってる」

　遠くに狼の群れがいる。元はわたしと同族であるらしいが、今のわたしには知ったことではない。かかってくるなら、父様の安全のために追い払うまでだ。

　わたしたちの短い会話の内容を知ってか知らずか、父様は優しく微笑みながら言った。

「何かいたのか？　大丈夫。父さんが守るからな」

　力強い言葉。恐らくはそうされなくとも大丈夫であることは理解なさっているはずなのだが、それでも自然と出たのであろうその言葉に、わたしと姉様は喜んだ。

　２人とも父様の顔を舐める、という形にはなったが。

　３人のうちの誰かの気配を感じ取ったのか、わたしたちが湖に到着しても、狼の群れはこちらには近づいてこなかった。わたしと姉様は顔を見合わせて微笑む。余計なことはしないで済むなら、それに越したことはない。

　父様が水瓶をおろすと、バシャンと姉様が湖に飛び込んだ。わたしもそれに続く。水に浸かって体に付いている汚れを落としたら、水から出て父様に拭ってもらう。

　それが毎日の日課。父様がいるときは欠かしたことがない。

　それが終わると、水の入った水瓶を提げて家に戻る。戻ったらみんなで朝食だ。今日はテラスで食べるから、姉様も近くで食べるらしい。

　さらになんと今日はヘレン母様があとで一緒に遊んでくださるそうだ。ヘレン母様は母様たちの中でも運動能力が高くていらっしゃるので、こちらも腹を据えてかからなければいけない。

　こうして父様が言うところの「いつもの日」が始まっていく。本当ならばこんなに平和な日常を送ることはかなわないのだろう。そう考えれば、今が夢の中のようだとすら感じる。

　ああ、願わくば……こんな幸せな日がいつまでも続きますように。

　それが、今のわたしの夢だ。

# 第９章 伯爵閣下の結婚指輪編

## ”いつも”の朝

2020年4月27日

　俺とアンネが帰ってきたその日は皆が用意してくれた夕飯を食べて（腕が上がっていた）、早々に寝た。疲労感が凄かったからだ。

　帝国の皇帝に相対していた時間はほんの一瞬だったと言ってもいい時間だったと思うが、それでも精神的にはくるものがあったのだろう。ほとんど倒れ込むようにベッドに横たわると、意識は速やかに闇に落ちていった。

　翌朝、ぐっすりと眠った俺の体はすっかり調子を取り戻していた。まぁ、元々疲れていたのは精神の方で、肉体的にはさほどだったしな。

　グッと伸びをして肩をぐるぐると動かす。そのまま外へ出ると、クルルとルーシーがパパとのお出かけを待っていた。

「よしよし、水を汲みに行こうな」

　２人を撫でてやってから水瓶を用意する。今はクルルにだけ持たせているが、そのうちルーシーにも持たせる日が来るんだろうか。その日が来るときまで、皆無事に暮らせると良いのだが。

　４つの水瓶を携えて、ブラブラと森の中を行く。今朝は良い天気で、暁光が森を満たして、気持ちも心なしか晴れやかになる。

　それに合わせてくれているのか、クルルもルーシーも機嫌が良いようで、クルルは跳ねるように歩いているし、ルーシーは俺とクルルの周りをわんわんとテンション高く吠えながら走り回っている。

　俺はそれにほっこりしながら、朝の森の空気を胸いっぱいに吸い込んだ。まだ気温が上がりきらない間の、ひんやりとした爽やかな空気が肺を満たす。

　それでほんの少し残っていた眠気もすっかり頭から追い出された。追い出された眠気のスペースを埋めるがごとく、頭の中を今日の予定が駆け回るが、水汲みを終えるまではこの時間を最優先にしたい。俺はそっと頭を振って予定を追い出し、頭の中を空っぽにした。

　やがて湖に辿りつき、頭の中に負けず劣らず空っぽの水瓶を満たす。その間にクルルが先導してルーシーと湖につかっていた。彼女達には風呂のようなものだ。

　この湖はあちこちで水が湧いているからなのか、結構水が冷たい。まだこの世界に来て１年経っていないから全ての季節を体験してはいないが、どの季節でもこれくらいの温度なら暑くなる時期には重宝するだろう。一方で寒い時期は考える必要があるかも知れないが……。

　俺が水を汲み終えるまでバシャバシャとはしゃぎ回っていた２人の体が冷え切らないうちに、持ってきていたタオルで水を拭いさる。

　遠出でもしていなければ、体につく汚れはほとんど土埃で、油脂性のものはあまりない。全くつかないわけでもないから、頃合いをみてぬるま湯で拭いてやるなり、女性陣が髪の手入れに使っているものを使ってやるなりしないといかんかもなぁ。

　一方の俺も素っ裸にはならないものの、顔を洗ったり体を水で拭ったりはここで済ませていく。量で言えば大したことはないのだろうが、家で使う水の量は少しでも節約しておきたい。

　人数的にはここ最近と変わらないが、家族としては１人増えているのだし、急場しのぎの対応では駄目だからな。

　一通り終わったら、水をたっぷり抱えて重くなった水瓶をクルルと手分けして担ぎ、家に戻る。

　１人手持ち無沙汰なルーシーが持たせろとでも言うように辺りを走り回っているが、いかに彼女が魔物になっていると言っても、自分の体より大きいものは持ち運べまい。

「わんわん！」

「クルルルルル」

　騒ぐルーシーをなだめているのだろう、クルルが優しい声で鳴いている。クルルもルーシーが来てからこっち、すっかりお姉ちゃんが板についてきた。

　こうして散歩やなんやかやを兼ねた、朝一番の日課はのんびりと終わった。

　水汲みが終わるころには大体みんな起きてきている。行って戻ってくるまでに、それなりに時間もかかっているし。

　”大体”と言うのは起きてきてないのもいるからだが、それがアンネであるのは言うまでもない。

「朝弱いって言ってたわね」

　ディアナは特に気にしたふうもない。いや、あんまり気にしたふうでないのは他の家族もだが。

「昨日の今日じゃ起きれないだろ。エイゾウじゃあるまいし」

　そう言うのはサーミャだ。

「いやいや、俺も十分疲れてたんだぞ」

「元の体力が違いすぎるんだよ。アタイにひけをとらないくらいだぞ」

　反論した俺にかぶせてきたのはヘレンだった。うちに来て――つまり前線に出なくなって少し経つが、それでも名うての傭兵である彼女に言われたら、ぐうの音も出ない。

「そのうち遅くなりすぎない時間に起きられるようになりますよ、きっと」

　これは俺を除いてはうちで一番早く起きるリケだ。元から職人の彼女は起きるのが早い。次は森暮らしだったリディ（今は俺たちのやりとりを見てクスクス笑っている）で、サーミャとヘレンが同じくらい、最後がディアナだった。

　今後は最後がアンネになるのかな。まぁ、正確な時計を持って生活をしているわけではない。多少朝の時間が延びたところで、それが”いつも通り”になるのであれば、それはそれでうちの家ではそうなのだ、ということだろう。

　めいめい朝の準備を始めるのを横に、俺は朝食の準備をしにかまどへ向かった。

## ベッドと部屋

2020年4月29日

　はたしてアンネは朝食の準備中に起きてきた。寝ぼけ眼のまま、みんなに手伝われて朝の準備をしている。

　体はヘレンよりも大きいのだが、なんとなしに末の娘のようにも見える。

　俺は大きな娘たちに提供する朝食の準備を続けた。

「じゃあ、先にそっちを済ませるんですね？」

「ああ」

　朝食を取った後の時間に、俺は今後の予定をみんなに伝えた。

「アンネの分のベッドと、部屋の増築をやっつける」

「あんだけ新しい部屋はいらないって言ってたのに」

「いやぁ……」

　サーミャの言葉に俺は頭を掻いた。

　そう、これ以上家族は増えないから増築はいらないのではと言っていたのは俺である。しかし、実際のところアンネが増えたわけで、今後さらに増えない保証はないし、なにより、

「雨季とまでは言わずとも、長雨なんかのときに家に物置があった方が良さそうだからな。で、どうせ作るんなら、万が一、万が一だぞ？　住人が増えることも考えて部屋に転用できるほうがいいだろ？」

「それはそうね」

　俺の言葉にディアナは納得してくれたようだ。

「これ以上住人が増えないという想定は無茶があると思いますけどね」

　静かな声で言ったのはリディである。心なしかやや冷たいものを含んでいるようにも思える。

　それにみんなは大きく頷き、その増えた家族で一番最後に来たアンネは苦笑している。

「ま、まぁ、ともかく家族に客間を使わせ続けるのもなんだし、片付けていこう」

　俺がそう言うと、てんでばらばらではあるが了解の声が返ってきて、作業の準備を始めた。

　部屋の増築だが、今ある廊下の先はテラスになっている。なので新しい部屋はそちらには伸ばせない。畑を囲むように伸ばして、コの字型の建物にするわけだ。

　畑の日照についてはリディの意見も聞いて、開いてる方が南側でもあるし問題なかろうと言うことになった。

　これでさらに増やして行く場合に、ロの字にするか、テラス経由で別方向に伸ばすかは考慮の余地があるが、囲んでしまうとさすがに日照がヤバいだろうから、多分別棟を建てる方針にはなるとは思う……いや、増やす予定はないが。ないったらない。

　それと、人数が多くなってきたこともあって、ベッドを作るのと部屋を作るのは同時進行で行うことにした。

　ベッドは俺とリディ、アンネ、部屋は他の皆――サーミャ、リケ、ディアナ、ヘレン、そしてクルルとルーシーになる。ルーシーの役目はチアガール（チアウルフ？）だが。

「部屋を建てることに関しては俺よりも皆のほうが上手だからなぁ」

「そりゃねえ」

　ディアナがまだ抱っこできるルーシーを抱きかかえ、モフモフ分を補充しながらため息をついた。

　俺がいないときもヘレンの部屋と今度アンネの部屋になるところを建ててたし、それ以前にもサーミャとリケには自分たちの部屋を建ててもらったから、経験で言えば俺よりも遥かに上だ。

「とにかく頼んだ」

「おう、任せとけ」

　そう言って力こぶを作るのはサーミャである。俺はその頭をガシガシと撫でて、自分たちの仕事にとりかかった。

　今度アンネの部屋になるところには既にベッドが入っている。にも関わらず新たに作るのは、既存のベッドに収まれなくはないのだが、やはりやや小さいからである。

　ベッドのための木材を切り出しながら俺が、

「あれ、そう言えば客間のベッドは少し大きく作ってあるが、どうだったんだ？」

　と聞くと、アンネは恥ずかしそうに、

「ギリギリって感じで……」

　と答えた。いつも起きてくるのが遅かったのは、それでよく眠れなかったのもあるのかも知れない。悪いことをしたな。

　短期の逗留なら我慢できても、この先いつまでになるか分からないとなれば厳しいだろう。

　どうせ作り直すのだし、体に合ったものにした方が良いのは明々白々というものである。

「じゃあ、メチャクチャ豪華なの作るか。宮付き天蓋付きの立派なのにして」

「宮や脚にはエルフの技巧を凝らした彫刻も入れましょう」

「それはやめてー。エルフの彫刻は興味あるし、エイゾウの作る宮付き天蓋付きに興味はあるけどやめてー」

　そんなやりとりをして３人ともで笑いながら、鋸を進めていく。

「しかし、やはり稀代の鍛冶屋の鋸はよく切れるわね」

　材を切り出す大鋸をまじまじと見ながらアンネが言った。例の「切れすぎて気持ち悪い（サーミャ談）」のやつである。

「稀代って……」

「これだけでも普通に世界中の木挽きが欲しがると思うけど？」

「この品質のものを外に出す気はないぞ」

　”高級モデル”ならまだしも、たとえ鋸であろうと”特注”をおいそれと外に出す気はない。

　もしも誰かが欲するなら、自分でここまで来ることだ。帝国皇帝にまで要求している条件なのだから、それを曲げる気は俺にはない。

「分かってるわよ」

　アンネは苦笑と共に鋸をひき、

「サーミャが言ってたみたいに確かに気持ち悪いわね」

　今度は笑いながらそう言った。

## ベッドの続きと歓迎会

2020年5月1日

「サイズは……これくらいか」

　俺は板を目見当で切りそろえた。勿論この作業には鍛冶ほどではなくてもチートが効いているから、それを使ってだ。

　数枚を並べて大きさを確認してみると、身長が身長なのでなかなかに大きい。

「大きさはどうだ？」

「ええと、よいしょ。うん、大丈夫」

　俺が聞いてみると、アンネはためらいもなく板の上に横になった。体はすっぽり収まっていて、左右にも上下にも余裕がある。ベッドと言うならこれくらいでないとダメだろうな。

　しかし、その様子を見ていて俺はふと疑問に思った。

「この大きさでこのままベッドを作ると少し部屋が狭くないか？」

「試してみます？」

「そうだな……」

　リディに言われて一度家に板を運び、今あるベッド（寝具はない）の上に置いてみた。どうしても元の部屋よりは狭いようには見える。

「どうだ？」

「十分広いし、持ってきた荷物もそんなにないから平気じゃない？」

「家の部屋はもっと広いんじゃないのか？」

「まあ、宮殿だと見栄も必要だから普段人を通すことなんかない私室でも広かったし、調度は豪華だったけど、その全てを有効活用してたかと言うとね」

「そういうもんかね」

「空き部屋も作って、置いときたいものはそこに置くんでしょ？」

「そうだな。人が入るまでは少なくとも１部屋はベッドも入れずに物置だ」

　もう１部屋は今いるこの部屋のベッドを移しておく。アンネの寝具を揃えるときに、ついでに寝具を用意しておけば、今後もし客が２人来た場合に使えるだろう。

　こんなところに短期間で２人も客が来るかは甚だ疑問だが。

「それなら、私ももし必要なものがあって入りきらなかったらそこに置くわ。そんなことにはまずならないと思うし、皆で使えそうなものを優先的に入れるけどね」

「わかった。部屋の主が言うならそれでいい」

「そう言えば」

　話は一段落したかと思ったが、アンネには気になることがあるらしい。

「リディはエルフなのよね？」

「ええ。ご覧の通り」

「父様もエルフは娶らなかったから、家族として一緒に暮らすのは初めてなのだけれど、エルフはもっと物を持たないのかと思ったら、意外と普通の物は持ってるのね」

「そうですね。人間や巨人族の皆さんと余り変わらないですよ。失礼ですがアンネは他の種族の方とは暮らした経験があるとか」

「言葉を選ばずに言えば”一通り”あるわね」

　前に聞いた話では巨人族に獣人、ドワーフにマリートは無論のこと、リザードマンも王室にいるとのことだったし、本当に一通りはいることになるな。いないのはエルフと魔族、魚人族くらいか。

　エルフと魔族は魔力を糧の一部とする種族で、魔力の薄いところでは暮らしていけないし、魚人族は水のある領域からは出てこないので、あの皇帝といえどもさすがに娶るわけにはいかなかったようだ。

「逆に言うと、エルフの人と暮らすのは初めてだからちょっと不安があったの。でも、皆と変わらないなら平気かなって」

「少なくとも俺の生活に愛想を尽かして出て行くほどの違いはないな」

　俺が混ぜっ返すと、リディはポカリと俺の肩を叩いた。それを見てアンネが微笑む。

「よーし、じゃあこれで作っちまおう」

「はい」

「わかったわ」

　俺たちは再び板を抱えて表に戻った。足やら何やらを作って組み立ててやらねばならない。今日中にできるかは怪しいが、時間がないわけでもないからのんびりやろう。

　間に昼食を挟んでの作業は、ベッドの部品を切り出していくことのみでこの日は終わった。作業すること自体に慣れてもらう意味も込めて、基本的にはアンネに作業をやって貰ったからだが、進捗としては悪い方ではない。

　しかし、アンネとしてはあまり納得できないらしく、ボヤいていた。

「うーん、なかなか上手くいかないわね」

「そりゃ今まで道具持ったことがない皇女殿下が、いきなり上手く出来たら家具職人は立つ瀬がないだろ。ガタガタに切ってないだけでも上出来だ」

「それはあなたの道具のおかげもあると思うけどね」

「道具は扱う人間によって良くも悪くも振る舞う……って俺の親父も言ってたし、胸を張っていいと思うぞ」

「そうなの？」

「ああ」

　俺の言葉でアンネは少し機嫌をなおした。何があってうちから戻ることになるかも分からんが、時間はたっぷりあるはずなのだから、少しずつ慣れてくれればいい。

　ベッドの部品もほぞだのはまだ切ってないので、明日は組み立てだけと言うわけでもない。明後日に完成すればいいかな、と言ったところか。

「それじゃあアンネの来訪を祝して」

「「乾杯！」」

「クルルルルル」

「わんわん！」

　夜。保存してあった肉を多めに持ち出し、干した野菜もふんだんに使っていつもより豪華な夕食にした。アンネの歓迎会だ。

　せっかくなのでテラスに明かりと卓に椅子を持ち出し、クルルとルーシーにも参加してもらっている（彼女たちの分はもちろん味付けなしで別に分けてある）。

「エイゾウのことだから絶対こうなると思ってたんだよな」

　そう言いながらワインを飲んで、鹿肉のジャーキーを頬張っているのはサーミャだ。

　俺はどうもこの分野では信頼がない。みんなウンウンと頷いている。

「でも、アンネが来たのは本当に歓迎してるからね」

　こっちはワインとイノシシ肉のワイン煮のディアナである。これにもみんな頷いていた。

「ありがとう、みんな。自分でも言うのもなんだけど、今までいた場所が場所だから、おかしいところがあったら言ってね」

「大丈夫じゃないですかねぇ」

　すでにもう３杯目の火酒を自分で注いでいるリケが言った。こういうときには遠慮せずに呑めと言ってあるし、実際遠慮せずに何杯も呑むのでデキャンタみたいな陶製の容器に移し替えて持ってきてある。

「もう随分お世話になってますけど、これだけ種族も立場も違う人たちがいても、大きな問題なく暮らせてますし」

「私もあんまり不安はないですね」

　こっちはワインに根菜のスープのリディである。

「まあ、私の場合は元々森暮らしと言うのもありますが」

「アタイはあっちこっち行ってたけど、ここの暮らしもなんつーか、性に合ってるんだよなぁ」

　火酒でイノシシの味噌焼きを豪快に流し込みながらヘレンが言う。サッとリケが空いた杯に火酒を注いだ。

　いつか傭兵に戻るんだろうなと思っていたが、少なくともしばらくはうちにいるつもりっぽいな。別にうちは構わんが。

　こうして歓迎会は時々クルルやルーシーも混ざって、うちでの暮らしの話で盛り上がった。

　そして、お開きになったとき、かなり眠そうなアンネが垂れ目をさらにトロンとさせながら言った。

「これから、よろしくお願いします」

　それに対する俺たちの答えは一つだった。

「エイゾウ工房へようこそ、アンネ」

## できあがりとお礼

2020年5月11日

　翌朝、二日酔いでダウンするものもなく、全員が元気に起きてきた。リケのペースに付き合うのがいたら、完全に潰れるのがいただろうが、その辺みんな弁えている。

「部屋の方はどうなんだ？」

「クルルの手伝いもあるし、順調よ」

「早けりゃ明明後日には終わるだろ」

　俺の疑問にはディアナとサーミャが答えた。明明後日か。それなら俺たちも手伝いに入れそうだな。

　朝飯が終わった後、今日も鍛冶仕事はしないが作業場の神棚に拝礼はする。

　アンネも最初の頃こそ、若干の違和感もあったようだが、今では普通に一緒にやっている。

　宗教的な意味合いはともかく、気持ちの切り替えとしても有効だしな。

「じゃあ、俺が部品を仕上げていくから、２人は組み立てていってくれ。アンネはリディに聞いたらいいから」

「わかりました」

「わかったわ」

　木材の切り分けは終わっている。ノミでパパッとほぞを切ったら２人に渡す。受け取った２人はリディが部品を支えつつ、アンネが木槌で打ってはめ込むことにしたようだ。ちょくちょくリディが打つ箇所を指示し、ガツンと音を立ててアンネの木槌が部品を叩く。すると、部品はスムーズに組み合わさっていく。

　次々と仕上げてすぐに渡して組み立ててもらう。程なくベッドの姿が見えてきた。今回のものには宮を作っていない。

「後は板を張るだけか」

「そうですね」

　最後の仕上げは俺がやっても良かったのだが、折角だし使う本人に任せることにした。

「こう？」

「そうそう」

　釘を板にあてがい、こっちに聞いてくるアンネに俺は頷いた。ちょくちょく鍛冶の仕事を手伝っていたからか、鎚を振るさまに危なっかしさがあまりない。

　コンコンと音がして、板とその下の梁に釘が刺さっていく。そして、全ての板が収まるべきところに収まった。完成だ。

「うん、大丈夫だろ」

　俺ができあがったベッドのあちこちを触って、できあがりを確認した。がっちりと組み上がっていて、この様子なら上で多少跳ねたりしたとしても、すぐに壊れると言うことはあるまい。

　アンネがそれをするかは疑問だが。寝具もふかふかなものを用意はする（実際に用意するのはカミロである）とはいっても、スプリング入りとはいかないから多分ないだろう。……ないよな？

　俺の言葉にリディとアンネは２人で喜んでいた。物ができた時って嬉しいよな。俺もそれを味わいたくて鍛冶屋なんて稼業を選んだようなものだし。

　できあがったベッドは外からテラスを経由して部屋に運び込む。以前なら外で作った物は居間を経由する必要があったが、テラスを作ったことでそちら経由になったのだ。

　衛生的にも若干気にはなっていたし、こっちの方が運ぶ距離も短くて済むので、テラスを作ったのは結果的には正解だったと言っていいだろう。

「この辺か？」

「もうちょっとそっちかな」

「こっちか」

「そうそう、そこ」

「よし」

　こうしてベッドの据え付けも終わった。もう既に昼飯を食って結構経っている。今から部屋の方を手伝うにしても中途半端にしか手伝えないか。

　それでも一応人手がいるか聞いてみたが、「明日からお願い」とディアナに言われてしまったので、俺たちの今日の仕事は終わりになった。あっちはこのベッド以上に急がなくてもいいからなぁ。

　なので、客間の寝具とアンネの荷物を私室のほうに移す作業にした。俺が寝具で細々したものはアンネとリディに任せる。下着とかもあるからな……。

　時間が空いてしまったので、その日の夕食は少しだけ手の込んだ物を用意した。皆喜んでくれていたので、用意した甲斐があったな。

　その夕食の席で、俺は言った。

「そう言えば、ベッドが出来たし、部屋が出来たら皆には何かお礼と言うか、報酬を用意しなきゃな。なにか欲しいものはあるか？　別に金銭とかでもかまわんぞ」

「家族のものだし、別に報酬とかいいと思うけどね」

「うーん。そう言われると弱いんだが、それでもなぁ」

　俺自身、家族だからとか友達だからとかで採算度外視の事を散々やってきているから、余り強くは言えないような気もしてくる。

　だが、半分くらい自給自足みたいなこの森での暮らしを考えると、欲しいものが大してないと言うのも事実だろう。急に欲しいものをと言われても困るのも確かだ。

　ちょっと思いつきが過ぎたかな。

「あ！」

　俺が反省しつつ皆がうんうん唸っていると、サーミャが肉をくわえたままポンと手を打つ。

　皆の目がそこに集まる。サーミャは照れたように肉を飲み込んでから言った。

「皆１人１人とエイゾウが２人で１日ずつ過ごすのはどうだ？」

「は？」

　サーミャの言葉にキョトンとする俺をよそに、他の皆は「それは名案だ！」とばかりにワッと盛り上がった。

## 増築

2020年5月13日

「いや、そんなのでいいのか？」

　ワイワイと盛り上がる皆を制するように俺は言った。皆の視線が俺に集まる。

「なんかもっと高いものとかでもいいんだぞ。新しいアクセサリーとか」

「いや、そう言うので欲しいものは今ないし」

　サーミャが言った。皆はうんうんと頷いている。アクセサリーは前に買ったし、あれがあるからいらないと言われればそうか。

「それに、優れた職人の時間は高いですし」

　今度はリケだ。特注品の剣が金貨２枚を下らないとすると、俺の１日の時間を金銭に換算するならそれくらいということになる。

　つまり、純粋に金銭的に考えたとしても、下手にアクセサリーみたいなものよりも、こっちの方が高い可能性は結構あるな。

「何かを買って渡して終わり、とかよりも時間のほうがいいのは確かね」

　ディアナがリケの後を引き取るように続けた。

「まぁ、みんながそっちでいいと言うなら、俺はそれでかまわんぞ」

　俺がそう言うと、皆は何をしようかという話に戻っていった。当然ながら、俺がその話に割り込むことは出来ない。

　あまりに無茶な要望が出そうなら止めようと思ったが、そういうことも無いようなので、俺は黙々と食事を進めるのだった。

　翌朝、一通りのルーチンを終えて、部屋を増築している辺りに来た。とっくに柱や根太、垂木はかけられていて、廊下に当たる部分には床板が張られていて、壁の部分にも一部板が張ってあった。

　元はアンネの部屋に置かれていた普通サイズのベッドが立てかけるように置いてある。

「１部屋はしばらくの間、納戸代わりに使う」と聞いていたからだろう、廊下の幅は若干広めになっていて、資材なんかを運び入れるときも余裕を持って入れられそうだ。

　なので廊下の一部を占拠してはいるが、作業の邪魔になるほどではない。

「こりゃ早ければ今日にでも終わるんじゃないのか」

「エイゾウ達が手伝うならそうかもな」

　俺の言葉にヘレンが答えた。３人も人手が増えてるからなぁ。

　人を３つに分けて、板を作るチーム、床板を張るチーム、壁板を張るチームに分かれる。

　板を作るチームは床と壁の板の後は屋根板を切り出し、それも終われば屋根張りに移る。チームメンバーは力の強いヘレンとアンネの２人組（正確には切り出した板をクルルが運ぶ３人組）である。

　ヘレンとアンネの間には因縁がないわけでもないので少し心配だが、ディアナに相談したところ、「大丈夫でしょ」と即答が返ってきたので、ならいいかとこの組み合わせにしておいた。

　あとは俺とリケが床板、残りのみんなは壁板だ。ルーシーには全員のところに出向いて応援する係を命じておいた。いずれ身体が大きくなれば、手伝えたりするのだろうか。

　置いてある板を床の根太に打ち付けていく。俺はチートで、リケは経験でスムーズに作業が進む。先に床板を張って作業スペースと資材の置き場を確保するのだ。

「親方の作業は速いですね」

「そうか？　経験ではリケに全然かなわないが」

「親方は迷いが全くないですからね。何年もやってる職人みたいです」

「リケにそう言ってもらえるなら、俺も安心して作業できるよ」

　俺の方は”なんとなく分かる”でやってるだけなので、ほんの少しの申し訳無さも覚えながら、板にあてがった釘に鎚を振り下ろした。

　朝からトントンと鎚の音を響かせて昼。全員テラスで昼食にする。もちろんルーシーとクルルも一緒だ。メニュー自体は”いつも通り”のものだが、晴れてそよぐ風が気持ちいい中とる食事は普段と違っていいものだな。

　食べ終わってからの食休み、サーミャにヘレンとディアナが走り回るクルルとルーシーに付き合って遊んでやっている。

「元気だなぁ……」

「ほんとね」

　俺のつぶやきにアンネが同意の声を洩らす。５人の動きを目で追ってはいるが、自分も混じろうと思うほどの体力はないらしい。

　獣人族のサーミャ、その狩りに付き合ってさんざん鍛えられたディアナに、無尽蔵かと思うほどの体力を持つヘレンと比べるのが間違いだと言われたら全く反論はできないのだが。

「そろそろ作業に戻ろうか」

　食器の後片付けをリケやリディとしながら、俺は声をかけた。さて、もう少し頑張らねばな。

## 空き部屋と物置

2020年5月15日

　昼からは作業の続きだが、いくら作業が早いと言っても、２部屋分の床板と壁板となるとそうすぐに終わるものでもなく、日が暮れる頃に出来たのは「ここでも寝れなくはないかな」くらいの建造物だった。

　屋根板はまだ全く張られていない。家のある周辺は木がないので、茜色に染まった空がまるまる見えていて、景色としては悪くない。透明な素材があれば、一部屋くらい展望室と言うか、サンルームのようなものを作るのもありかも知れない。

　テラスをガラス張りにするのも一瞬頭をよぎったが、クルルが（物理的に）首を突っ込めなくなるので、そのまま脳内で却下した。

　翌日、昼前に床板と壁板チームはその作業を終えた。屋根のかかっていない、何にもないガランとした部屋に陽が差し込んでいる。

「雨が全く降らないのなら、こっちのほうが気持ちいいかも知れないがなぁ」

「そうなると私達を含めて、すべての生き物が乾いて死んでしまいますね」

「砂漠にも生き物はいるが、霧やら雨やらでそいつらが生きていける水分はあると言うから、全くないとダメだろうな」

「”さばく”ってなんだ？」

　俺とリディの会話に、板の切り出しを終えたらしいサーミャが加わってきた。

　ずっとこの森に住んでいる獣人だとそうそう聞くこともないか。旅人もよっぽどでなければ、わざわざ危険な砂漠を通っては来ないだろうし、危険な黒の森に立ち寄ったりもしないだろう。

「大地の神の怒りでものすごく暑いのに、恵みがなくて雨がほとんど降らなくて、石や砂しかないようなところがあるんだよ。それを”砂漠”って言うんだ」

「へー、そんなとこでも生きてるのがいるのか」

「地面の下から水を得ていたり、ほんの少しの水でも生きることができたりするのがいるらしいな。さすがに行ったことはないから分からんが」

　”インストール”された知識によれば、この世界の砂漠はどうもこの辺りからはかなり離れた国－－前の世界で言えばUAEのような多種族間、部族間による連邦らしい－－にあるようなので、この２回めの人生の間でも訪れる機会がくるのかどうかは怪しいところだな。

「エイゾウは色々知ってんなぁ」

「まぁ、いろんな知識に触れる機会だけはあったからな」

　基本的なところは前世の書物やらから得た知識だが。そこのところはもちろん言わず、かと言って嘘にもならないようにサーミャに返事をする。

「またなんか教えてくれよ」

「サーミャが聞きたいことが出てきたらな」

　俺はそう答えて、昼飯の準備をすべく、台所へと向かった。

　昼飯をテラスでみんなで食べて午後、一家総出で屋根に取り掛かる。作業の役に立つかはともかく、ルーシーも頑張れと言わんばかりに走り回ってわんわんと吠えている。

　屋根には作業が速い俺とリケ、木登りなどで高所作業ができるサーミャとリディが上がり、他の身長が高いメンツ＋クルルは下から屋根板を渡す係である。

　重なる部分を作りながら、少しずつ上へ上へと屋根を葺くと栩葺きのような屋根ができていく。

　重ならせる部分が大きいので本当に少しずつしか進まなかったが、この作業にすっかり慣れつつあるみんなのお陰で、まだかろうじて日がある間に屋根までを終えた。

　俺は思わず出来上がった屋根の上で両腕を上げ、

「完成だー！」

　と叫んだ。同じくまだ屋根に登っている３人も手を上げ、クルルとルーシーを含めた下にいるみんなもやんやと拍手喝采している。

　しかし、デカいものができたときってのは嬉しいものだな。前にちょっと考えていた、クルルとルーシーの小屋へ行くための渡り廊下も早めに作るか……。

　ずっと廊下に放置してあったベッドを新しくできた部屋の片方に放り込み、これで完全に完成だ。

　新しく突き当たりになる部分の部屋を、しばらくは物置として使うことになる。

　そこで俺は気がついた。

「今気がついたが、部屋と廊下で壁板つながってないんだな」

「そうよ」

　ディアナが答える。俺はそのまま「なんで」と聞こうとしたが、

「ここから廊下を延ばす可能性もあるから。その時にこうしておいたほうが楽でしょ」

　と先回りされ、俺は何も言い返せずに、そのままポリポリと頭をかいて台所へと引っ込んだ。

## 守られた約束

2020年5月18日

　部屋の増築完了記念、と言うことでこの日の夕食は少しだけ豪華にしておいた。酒も解禁である。

　いや、実のところ普段も特に飲酒を禁止しているわけではない。翌日に作業がある場合は作業に影響しないように、との制限くらいはあるが、呑みたい人がいれば普通に出す。

　だが、俺が普段は呑まないのに遠慮してか、みんなは普段呑みたいと言わない。リケでさえもだ。俺が呑まないのは単に弱いからなのだが。

　アンネにも呑んでいいことは説明してあるが、状況を読むことに長けているからなのか、彼女も言い出してこない。

　なので、自然とこういったちょっとしたお祝い事のときに呑む感じになる。

「それじゃ、かんぱーい」

「かんぱーい」

　各々にカップを合わせる。リケは早速杯を干して２杯目にとりかかっている。好きなんだったら普段も呑めばいいのに。

「そう言えば、寝具を２セット揃えれば客間が２つになるわけか。片方は予備だけど」

　増築した部屋の話の途中で俺は何気なくそう言った。反応したのはヘレンだ。

「もう片方は物置だっけ？」

「そうだな。しょっちゅうは使わないが、時々使うもので家にあると便利なものをそこに置いたらいいかなって」

　そういったもの以外はクルル達の小屋の隣にある倉庫に入れる。その倉庫も家からそんなに離れているわけではないから、たまにしか使わないようなものはそっちでいい。

「じゃあ、酒とか肉か」

「そうだなぁ」

　酒も肉も今は倉庫に入れてある。仕事終わりに取りに行くのが苦痛というわけではないが、家にあって取りに行けるなら、そっちの方が便利だろう。

　……つまみ食いに注意しなければいけなくなったときには、鍵をつけなきゃならないと思うが。

「慌てて入れなきゃいけないこともないし、まぁ追々だな。入れたいものがある人は入れてくれていいけど、その時は声をかけてくれな。後から入れるものと調整がいるかも知れないから」

　了解の声が食卓に響く。その後は例の「２人の時間を作る」話だ。

「まぁ、俺に出来ることならなんでもいいが、納品物を作る日はダメだぞ」

「分かってるよ」

　そう言われて鼻の頭に皺を寄せて渋面を作っているのはサーミャだ。

　言い出しっぺの彼女は他のメンツと違って、そのお願いが基準となりかねない。その分、何をして貰うかには慎重なのだろう。

「他の皆も決まったら教えてくれ」

　再び了解の声が響いて、この日の夕食の時間は賑やかに終わった。

　翌日からは納品物を作っていく。今日からはアンネも加わっての作業になるが、前にも手伝ってもらったので、作業の進みにあまり影響はない。

「手伝って貰ったことがあると言っても、まだまだ慣れてない事も多いだろうし、そこは周りの皆に聞いてくれていいからな」

「うん」

「一番最後にうちに来たヘレンでも１ヶ月や２ヶ月はやってるから、アンネも同じようにしようとしなくていい」

「わかった」

　賑やかな日々は過ぎさり、１人を加えて新しい”いつもの１日”がはじまる。鉄と鉄のぶつかり合う音と、ゴウゴウと炎が舞う音が鍛冶場に響いた。

　そんな”いつも”が数日続くと、納品に必要な量に達する。そうすれば今度は街へと納品に行くわけだが、今回からはヘレンはカツラを被っていないし、アンネを隠すこともしない。

　どちらも、もう今の俺たちには必要ないからだ。アンネがうちにいることは一応内緒ではあるのだが、”ただの鍛冶屋”に皇女殿下がおわすとは誰も思うまい。

　アンネも公の場に顔を出したことがなくもないが、よほど親密な知己でもなければ「他人のそら似」で押し通すつもりである。

　はたして、カミロの店に着くまで別段何事も起きなかった。無論、道中の警戒は一切怠っていない。

　街に入るとき、顔見知りの衛兵さんはアンネを見て一瞬呆れたような顔を見せたが、特に何も言ってこなかった。

　もうそう言うものとして認知されてしまっているような気がする。若干不本意ではあるのだけれど、メリットの方が大きいし、わざわざ言い訳などを始めてアンネに注目される理由もない。

　なので、こちらも何も言わず全員で会釈だけして通り過ぎた。アンネも含めてだ。

「皇女が一介の衛兵に会釈、と思うと少し面白いな」

　俺の言葉にアンネが腰を浮かせて反論しようとしたが、俺はそれを遮るように続けた。

「まぁ、今はただのエイゾウ工房に身を寄せている巨人族のアンネだ。衛兵に会釈して悪いことは何もない」

　アンネはそれで納得したような顔をして再び腰を下ろした。エイゾウ工房の”いつも”にはなるべく彼女も参加させてやりたいところだ。

　いつものように丁稚さんにクルルとルーシーを預けたら、商談室に入る。しばらくするとカミロがやってきた。

「なんだか久しぶりのような気がするな」

「前は都でのアレだったか」

「ああ」

「アレはなんというか、激動だったからな……。それで、帝国での商売は？」

「上手くいってるよ。皇帝陛下直々のお口添えがあって上手くいかなきゃ、俺がよっぽどのヘボってことになるから、上手くいかせる他はないんだがね」

「なるほど」

　その後、いつも通りに納品量の話をしたあと、カミロが番頭さんに目線をやると、頷いた番頭さんが部屋の外に声をかけた。

　すると、他の店員さんが籠に革袋を満載して入ってきた。中身が何かは分からないが、何であったとしてもかなりの量がある。

「これは……？」

「これの依頼主からはこう言付かっている。”お待たせしてすみません”とな。こうも言われたぞ。”リディをよろしくお願いします”と」

「エルフの種！」

　カミロは頷いた。いつかエルフの宝剣を修理したときの約束、金貨１枚で買える種を送ってくれというアレを律儀に守ってくれたのだ。

　テーブルに置かれた種の詰まった革袋、俺にはそれらがなんだか光り輝きだしたかのように感じた。

## 種

2020年5月20日

　いつも購入している物資に寝具を２セット（さすがは大店、余裕で在庫があった）、それにエルフたちがカミロに託した植物の種を積み込んで、竜車はカミロの店を出て、街を去る。

　街道をのんびりと走る荷車の上で俺は言った。

「まだ種の中身は確認してないが、リディは見当がついてたりするのか？」

「ええまぁ、おおよそのところは」

　まぁ、そりゃ出身地由来のものだし、見当はつくか。

「楽しみだな」

「そうですね。畑で薬草などは育てていましたが、他のものは全然でしたからね」

　今、家では消毒に解熱や止血の薬草類や香草類を中庭部分にあたる畑で育てている。ミント（正確には似たようなハーブだが）だけは気を抜くと他の植物のところまで繁茂してしまうので、納品物の合間に作った木製のプランターに隔離しての栽培だ。

　水やりは雨季の時に作った貯水槽の水を利用している。そこの水は降雨で貯まるもののほかに、日々の水汲みで使わなかった水も僅かながら入れるようにしているから、常にある程度の水が確保されている。

　されてはいるが、生活用水に灌漑用水、いままであまり意識してこなかった防火用水なども考えると心許ない事になってきそうだな。大きめの水瓶３つでは確保できる水の量もたかが知れているのだし。

「そろそろ家の近くに井戸でも掘るか……」

「そうすると水汲みがいらなくなるわね」

　ディアナがそう言うと、ルーシーが俺の方を向いて「キュゥン」と鳴いた。散歩代わりの日課だから、なくなるかもしれないことを察したのだろうか。

「いや、あれはクルルとルーシーの散歩も兼ねてるし、俺の朝の運動でもあるから続けるよ。ただの散歩でもいいんだけど、目的があった方が出かける気になるしな」

　俺の言葉にルーシーがホッとしたように息を吐いてディアナの膝で丸まる。ディアナが微笑みながらそっとルーシーを撫でた。

　家に帰り着いたら、荷物の運びこみをはじめた。家の裏手に荷車を止めて、クルルを離したら、倉庫に木炭などを入れる。

「今日から酒の樽は家の物置に入れようか？」

「あ、そうだな。頼む」

「わかった」

　そう言ってヘレンはヒョイと酒の樽を担いで家へ引っ込んでいった。ヘレンなら苦にならなさそうだが、こういうときもテラス側から入れるから少しは楽だろう。

　同じように寝具と種も家の方に運び込む。昼飯を食べた後、寝具をセットして正予備両方の客間も使えるようになった。

　それも終われば普段は好きなことをする時間とするのが納品日の常ではあるが、今日は少し毛色が違っていた。

「これがニンジンの？」

「あ、芋もありますよ、親方！」

「こっちはカブかな」

「うちにない香草のもあるみたいね」

「これは？　……あんまり好きじゃないやつだ」

「これは豆ね」

　袋から種を出して、みんなでワイワイとリディに確認する。畑にどれから植えはじめるのかを決めるためだ。

　種は蒔き時があるんじゃないのか、とリディに聞いたところ、

「この環境なら、いつ蒔いても育ちますよ」

　とのことだった。なんでもエルフの森の種には、”黒の森”みたいに魔力が多い環境だと、それを吸収して育つ特性があるんだとか。

　そうでない環境では、植物の特性としては普通のものとして育つ。種を欲しがる人が少なくないのは、それでも味や収量がいい場合が多いからだそうだ。

　本来収穫できる時期が違うはずの、リンゴとベリー系の果実が同時に収穫出来る時点で疑問に思うべきだっただろうか。

　そのあたりをサーミャに聞いてみたが、

「いや、アタシ達はそれが当たり前だったし……」

　という答えが返ってきた。

「そりゃそうか。普通にそうやって収穫できてたのなら疑問には思わないよな」

「私たちエルフも外に種を渡すようになってから知りましたからね……」

　きっと、「いつでも育つと聞いたのに育たないじゃないか」みたいなクレームを受けて調べて、「なるほどな」となったのだろう。

　エルフ達が森から出ない理由の最大のものは自身が魔力を必要とすることだが、作物の問題もあると言うことだろう。

「よし、それじゃ早速いくつか植えるか」

　ワイワイと小一時間話し合いをしたあと、俺はそう言って皆で畑へ向かった。

　これでまた一歩自給自足に近づけるといいのだが。

## 畑

2020年5月22日

　畑はうちの裏庭……から部屋の増設で中庭になったところにある。今は森で採集してきた薬草や香草なんかをリディが育てていて、小さな花を咲かせていたり、いい匂いをさせている。

　俺が夕食の準備をしたり、ヘレンたちが稽古している時間にリディが手入れしていただけあって、土も荒れたりしていない。

　ただ、そうやって薬草や香草が、その青々とした姿を見せているのは畑の一角だけで、他は茶色い土を見せていた。

　いつかここに育てるものが来るからと、手入れだけは続けてくれていたのだろう。

「じゃあ、今回はニンジンとカブ、ニンニクに香草と芋を植えるのか」

「はい。少し畑を広くする必要がありますが……」

「うちは力自慢が多いから平気だろ」

「そうですね」

　リディはクスリと笑った。これで野菜たちが育ってくれれば、料理の幅も広がる。大期待なのはニンニクだ。効能もさることながら、肉を焼くにせよスープにするにせよ、これがあるとないのとでは食べたときに違ってくる。

　ただ、当然ながら食べすぎると妙齢のお嬢様方には気になる事態が発生するだろう。まぁ家族以外に顔を合わせる人もいないが、客がいつ来ないとも限らないし気をつけるに越したことはなかろう。

　耕すための

「よっ」

　勢いよく鍬を振り上げ、腰を入れて振り下ろす。ざくり、とまだ固い土に鍬の刃がしっかりと刺さる感触が手に伝わってきた。

　降雨量のせいなのか、それとも魔力に由来するものなのか、この辺りの土はやたらと固い。それをものともしないのが、俺が特注品レベルで作ったこの鍬だが、これがなければ、家庭菜園程度の広さを耕すのにも難儀したことだろう。

　牛に牽かせるタイプの

　あればクルルに牽かせて楽ができたし、彼女もさぞ喜んだことだろうと思うが、そこまで耕作地を大きくするつもりが今のところはないからなぁ。

　完全な自給自足を目論むなら必要になってくるだろうから、時間の問題かも知れない。

　俺たちは３人並んでいたが、やはり俺とヘレンの作業が早く、アンネは少し遅れが出ている。別段急ぐようなこともないのだが、アンネはそれが気になるらしい。

「エイゾウは家名持ちのはずなのに、なんでそんなに農作業に慣れてるのよ」

「鍛冶仕事と同じでね。

　実際には野良仕事をしたのは中学生の頃、爺さん家で「手伝え」と言われて手伝ったのが最後である。今の手際はチートとインストールによるもので、俺の実力かと言われると甚だ怪しい。

「なるほどねぇ。ヘレン、なにかコツってあるの？」

「そうだなぁ……。こう、ぐっと腰を入れてザッと刺さったらグイッと引いてだな」

「教え方が雑！」

「人に教えるのは苦手なんだよ！」

　ヘレンがぶんむくれて、アンネがごめんごめんと謝っている。そして２人ともすぐに笑顔を取り戻した。

　ほとんど己の才覚だけで生きてきたようなところもあるからな、ヘレンは。俺とはまた違った感じで人に教えにくいに違いない。見えているものが違うと言うか。

　そうして鍬を振るいながら、俺は少しだけ気になっていたことを聞いてみた。

「そう言えば、ヘレンはフルプレートメイルを着たことはあるのか？」

「へ？　ああ、一応はあるよ。戦場では着たことないけど」

「へぇ」

「なんだったかな……なんかの式典だかに連れ出された時に”儀仗用”だか言うのを着せられた」

「なんの式典かは興味なかったわけだな」

　俺の言葉に、ヘレンは見えない相手に文句を言うかのように下唇を前に出した。

　きっとその対応にあたったやつに「傭兵風情」とかなんとか言われでもして、それを思い出したんだろう。

「アタイはああいう堅っ苦しいのはどうも苦手だ。そんなに時間も経たないうちに脱がせて貰ったよ」

「動く分には支障はなかったのか？」

「そうでないと戦場じゃ死ぬだけだし、儀仗用と言っても動きが無様だと無礼になりかねないから」

「そりゃそうか」

　俺は目線をまだ耕されていない土に戻して、鍬を振り下ろした。

「なんだ、作ってくれるのか？」

「いやぁ……」

　俺は再び顔をあげる。フルプレートメイルも当たり前ながら鍛冶のチートが効く範囲だ。速度も品質も最高級－－後年に銃火器が出現した場合、その射撃にも耐えうるレベルのものができるだろう。

　では、なぜ作らないのか。

「やたらとパーツが多くて面倒なんだよな……」

　さすがのチートでも部品数を減らすことは不可能に近い。

　となれば膨大な数のパーツを作る必要がある。１つ１つにかかる時間は少なくとも、チリも積もればなんとやらだ。

　だがしかしである。

「そうは言っても、こないだみたいなこともあるからなぁ……。みんなに胸甲とか脛当てみたいなのは作ってもいいかもな」

「おっ」

「ほほう」

　俺の言葉に、ヘレンとアンネが同時に反応した。ヘレンは満面の笑み、アンネは目をキラーンと光らせている。

「そのうちな、そのうち」

　俺はそう言うと、目を再び固い土に戻した。

## 証

2020年5月25日

　畑を耕す作業は程なく終えることができた。１人慣れていないのがいるとは言っても力自慢の３人の作業だし、面積もそう大きいものではないしな。

　なので、俺たちも順次種蒔きに加わることにした。厳密には今俺たちが耕したところに種芋を植える作業である。

　芋は芽の出ている部分で切り分け、切り口に鍛冶場から持ってきた灰（作業でも使うやつだ）を付けてから植える、とやる内容で言えば難しいことではないのだが、それなりの数をこなさなければいけない。

　麻袋からゴロゴロと放り出した芋を１つ１つ切りながら植えていく。その途中で、芋を１つ手にとったアンネが何気なく言った。

「この芋ってこのまま食べられないの？」

「芽が出てっからなぁ……。芽を取って、皮が緑になっているとこがあったら、そこも取っちまえば食えるとは思うが。毒があるんだよ」

「えっ」

「念の為にやめとけ」

「そうする」

　俺が知ってるジャガイモと同じであるなら、毒性が高いのは主に芽や皮のはずだ。

　切った感じでも大丈夫そうには見えるが、実際には食用に適さない状態になっている可能性もあるし、止めといたほうが無難だろう。

　俺とアンネのやり取りを聞いていたヘレンも芋を植えながら言った。

「ああ、それで芋食って腹壊すやつがいたのか」

「毒のある状態で大量に食っちまうと下手すりゃ死ぬからな」

「そうなのか？」

「うん。ヘレンも傭兵稼業に戻ることがあったら気をつけろよ」

「わかった。そうする」

　気をつけろとは言ったが、ヘレンが傭兵稼業に戻るとしたら、そこは戦場である。常に十分な補給があるとは限らない。

　時には「これを食べなければどのみち死ぬしかない」ということもあるだろう。そういうときに、ままよと食べるのまでは止められまい。

　だが、腹痛程度で済むとしても避けられるものは避けてほしいものだ。

　総勢７名＋応援隊２名（言わずもがなクルルとルーシーである）の活躍により、日が暮れるころには種蒔きは終わり、土は水を吸ってその明度を落としていた。

「獣も寄らないんだったら、柵はいらないかな」

「そうですね。村では作ってましたけど」

　その他に注意すべきは人間（獣人やドワーフ、エルフに巨人族なども含む）であるが、そこは対処したところであまり意味はないだろう。

　わざわざこんなド辺鄙なところまで、さして大きくもない畑の作物を狙ってくるようなやつがそうそういるとも思えないしな……。

　年中成長するとはいっても、流石に「植えてもう今晩にはできますよ」と言うほどの成長はしない。したらしたで口に入れるのは躊躇してしまうが。

　俺は今後のメニュー拡充に思いを馳せつつ、今日の夕飯の準備に取り掛かった。

　翌日、今日からは再び納品物を製作していく。今日はナイフだな。一通り朝のルーティーンをこなしたら、板金を火床に入れて熱していく。

「そう言えば、アンネの分がまだだったなぁ……」

　少しずつ熱を帯びて赤みを得ていく板金を見ながら、俺は呟いた。

「作ります？」

「家族の証だからな。お前には作らない、って話はないな」

「じゃあ、見学します」

「うん」

　リケがうちに来てから、思ったよりも時間は過ぎていない。それでもドンドンと様々な技術を吸収し、彼女の腕は結構なものになっていた。

　それでも彼女に言わせれば「私なんてまだまだですよ」らしい。俺の技術もまだまだチートに頼っているわけで、効率的な教え方ができないのが歯がゆいところだが、こうして見取り稽古でなんとかしてもらっているのだ。

　エイゾウ工房のナイフで特注品レベルのものは、うちの家族ならみんな持っている。

　切れ味が凄すぎるが、一応日常に使えるものであり、護身用であり、家族の証である。

　逆にナイフでこのレベルのものは市中には出していない。技術の漏洩がどうこうではなく、単純に危ないからだ。

　なので、特注品レベルのナイフを製作する機会はあまりない。その少ない機会を見逃すまいと、リケは俺と一緒に火床を覗きこむ。

　赤熱した板金を取り出して、金床に置いて鎚を振るう。この”黒の森”に満ちている魔力を叩き込むかのようにだ。金属と金属のぶつかり合う大きな音が響き、一度で入り切らなかった魔力が、キラキラと光の粒のようになって辺りに散らばる。

　そのすべてを見逃すまいと、隣ではリケがその様子をまばたきもせずに見ていた。

　叩き、熱し、叩き、熱し。これらを繰り返すこと幾度。魔力をふんだんにまとったナイフの形ができあがった。もちろん、このままでは「ナイフの形をした鉄の棒」でしかない。

　入れ込んだ魔力が抜けないように削り、”太った猫が座っている刻印”を入れたら、火床に入れて加熱する。

　いい温度になったら取り出して水槽につけて急冷だ。水の側からすれば急熱である。水槽の水は「ジュウ」と言う大きな音を立てて、湯気を立ち上らせた。

　これでナイフは硬さを得た。次は粘り強さだ。風を送り込んで少し温度が上がり、炎を巻き上げている火床の炎にナイフを晒す。ほんの少しだけ温度を上げたら、すぐに火から外した。

　この後は仕上げになるが、それは昼飯を食ってからだな。俺はみんなに声をかけて、昼の休憩に入った。

　昼飯を食い終わったあと、ナイフの全体を磨いていく。薄ぼんやりと曇っていたナイフの刃が輝きを得ていき、鍛冶場のあちこちにある炎を反射して煌めいた。

「残りは研ぎだな」

「はい」

「やってみるか？」

「いえ、これで私が研いでしまうと台無しにしそうなので……」

「大丈夫だと思うがなぁ。無理強いも良くないか」

　魔力を多量に含んだ鋼を研ぐこともいずれは出来るようになって欲しいし、俺が見たところでは出来そうには思うのだが、本人が無理だと言っているものを無理にやらせる趣味はない。自分でやるか。

　俺は砥石を水に浸すと、ナイフの刃を宛てがって擦り付けるように動かし、刃をつけていった。

　刃がつけば最後の作業だ。握りのところに鹿革を巻く。

「よーし、出来た」

「お見事です。拝見しても？」

「もちろん」

　リケにナイフを手渡す。彼女は新しいおもちゃを貰った子供のように目を輝かせ、矯めつ眇めつナイフを見回す。

「また少しいい出来になってません？」

「そうか？」

　自分では今までのものと手応えに大きな違いはなかったが、リケが言うのならそうなのかも知れない。

「鞘を作るから、その間見てていいぞ」

「ありがとうございます」

　俺が木材を割ったり貼ったり削ったりして鞘を作っている間、リケはずっと「ほほう」「なるほどなるほど」とか言いながらナイフを見ていた。

　鞘が完成すると、俺は炉に鉄石を入れる作業をしていたアンネに声をかける。アンネは口元を覆うようにつけていた布を下ろした。

「なあに？」

「こいつを渡しておこう。夕飯の時でも良かったんだが、こう言うのは早いほうがいいと思ってな」

　鞘に収めたナイフをアンネに渡す。

「これは……ナイフ？」

「ああ、俺が本気を出して作ったものだ。めちゃくちゃ切れるから、取り扱いには注意してくれ」

「わかった。でもなんで？」

「家族の証だからだよ。うちではみんな持ってる」

「そうなの？」

「ああ。家族になったから、アンネにも渡さなきゃな」

　俺の言葉で、みんなが懐からナイフを取り出して見せた。絵面の怖さはもう今さらだろう。アンネはそれを見て一度大きく頷く。

「そう。私もこれで本当に家族になったのね……ありがとう」

　そう言って、アンネは暫く渡したナイフを胸に抱くようにしていた。

## 最初の１人

2020年5月27日

　半日ちょいをかけて家族の証であるナイフを作ったら、納品物の製作に入る。

　今日の残り時間では大した数は作れまいが、納品できる量に達するのが早ければ、それだけ休みが近づくのだ。

　休みか。多分、近々の休みには誰かと過ごすことになるだろうな。

　俺が夕飯の準備をしている間に何やら皆で話しているようなので、恐らくは順番や内容なんかは決まりつつあるんだろうが、どこまで決まったのかは何となく憚られて俺からは聞いていない。

　どことなく怖さ半分、楽しみ半分の気持ちを抱えながら、ワクワクでうっかり魔力をこめすぎてしまわないよう、注意してやがてナイフになる板金に鎚を振り下ろした。

　そうして、納品の日が巡ってきた。それまでの２週間ほど、特に何を言われることもなく、いつも通りの時間が過ぎ去っている。

　間に１日ほど休みも入れたし、狩りで鹿を回収してその日の午後はまるまる空けたりしたが、そこでは特に何も言われなかった。皆思い思いに過ごしていただけだ。

　納品についてもいつも通りに終わった。いつからかカミロには世の中の情勢を教えて貰っている（”インストール”では現在のリアルタイムな情報はつかみようもない）のだが、

「特になにか起きてるとは聞いてないなぁ」

「帝国とも？」

「そうだな。ああ、公にはされてないが、ヘレンの捜索についてはこの間打ち切りが通達されたらしいぞ。数人それらしいのが帝国へ戻ったのを王国でも確認している」

「そうか」

　それを聞いて、俺だけでなく家族全員がホッと胸をなで下ろした。アンネも含めてだ。解決するとは聞いていたが、目下我が家で一番の懸念だった事柄が正式に解決したのは大変に喜ばしい。

「他は本当に何もない。まぁ、ずっとやってる小競り合いなんかはあるが、平和なもんだよ」

「魔界とかも？」

「今は大人しいな。哨戒部隊同士の遭遇戦なんかはあるんだろうが……」

「そこから大きな戦には繋がってない、か」

「そうだな。やたら強い魔族がいるという噂は聞いたが、そいつも適当に切り結んだらさっさとひきあげてしまうらしいし」

「へえ」

　ニルダかな。彼女には特注品の日本刀を打った。腕のほどは後でヘレンに聞いてみるか。

「魔物がわいたとも聞かないし、しばらくは何事も起きなさそうだ」

「じゃあ、武器を減らして他のものでも作ったほうがいいか？」

「いや、帝国にも販路は広がったし、共和国にも売ってるから、今まで通りでも問題ないぞ」

「そうか」

「もちろん、色々作ってくれるならありがたいが。お前の商品なら、売る道はいくらでもあるからな」

「善処するよ」

　笑いながら言ったカミロに、俺も笑いながら返す。こうして、この日の納品は終わり、丁稚さんにチップを渡しながら頭をガシガシと撫で、街道と森を戻って家に着く。

　家族みんなで手分けして荷物を運び込み、クルルとルーシーの汚れを軽く落としてやって（ちゃんと落とすのは明日の水汲みの時だ）、めいめい自分の汚れを落としたら自由時間となる。

　いつもであれば三々五々散って自分の好きなことをするのだが、今日はディアナから話があると言うことで、みんな居間に集まることになっていた。

　俺がパパッと汚れを落とし終わって居間に向かうと、同じく手早く済ませたのだろう、ヘレンとサーミャが先にいて、他のみんなはまだだった。

「前にも聞いたかも知れんが、魔界の近くで魔族とちょっとやりあったろ」

　みんなを待つ間、俺はそうヘレンに聞いてみた。

「ん？　ああ。哨戒任務中だったかな。何回かやってる」

「その中の１人がうちに来たぞ。武器を打ってくれと言うから、打ってやった。なんかお前に言われたと聞いたが」

「あー、そんな覚えがあるような、ないような……」

「強いのはいたのか？」

「それなら、うん。心当たりがある。……ああ、さっきの」

「うん」

　俺は頷いた。ヘレンはそれを見て、ため息をついた。

「あの腕でエイゾウの武器を持ってんなら、そりゃ強敵にもなるよ」

「そういうもんかね」

「そういうもんだよ。アタイだってそれで救われてんだし」

　そう言ってヘレンはフッと笑う。そこへ俺たち以外のみんながゾロゾロと部屋の方から居間へやってきた。

　皆が席について、リケとリディがハーブ茶を用意してくれると、ディアナが言った。

「さて、それじゃあ始めましょうか」

「話があるってことだったな」

　俺の言葉にディアナは頷いた。

「前に言ってたわよね、”休日に２人きりで過ごす”話」

「ああ、覚えてるぞ」

「それの順番が決まったから、それをエイゾウに伝えておこうと思って」

　それだけのためにしちゃ仰々しいなと思ったが、口にはしないでおいた。彼女たちには大事なことなのだろうし。

　そして、ディアナから告げられた最初の１人は――

## 最初の休日

2020年5月29日

　部屋の増築も、特注品レベルのナイフ作りもなかったので、すぐに納品物は納入予定数に達した。しかし、納品日はまだ先だ。となれば、当然のことながら休日と言うことになる。

　その休日の前の日、仕事を終えて夕食も済ませたあと、俺はディアナに頼んで弓を借りていた。

　弦を軽く引いてみると、思ったよりもガチッとした手応えが返ってくる。

「結構強めに弦を張ってあるんだな」

「遠くにいるときに狙わないといけないこともあるし、弱いと弾かれるからね」

「なるほど」

　下生えも多いような状況では少しの移動で位置がバレることもあるだろうから、遠くから狙わないといけないし、獲物に突き刺すには十分な速度を保った状態で到達させる必要がある。

　ベストは獲物には匂いと音が届かない風下で、かつ開けた場所にいる獲物からは見えにくい場所、それも１００メートル以内に接近し矢を放つことだが、この森ではその状態を望むことは難しいだろう。

　自然、待ち伏せするなり、あるいは待ち構えているところに追い立てるなりといった手段をとることが多くなる。

　実際にサーミャたちは勢子をつかって追い立てる方法をよく使うようだ。先日も狩りに行っていたが、アンネが疲れて戻ってきていた。

「じゃ、ちょっと借りるな」

「ええ。壊さないでね……とは言っても、すぐに直せちゃうか」

「他人の物を好き好んで壊す趣味はないから、心配するな」

「そうね」

　俺とディアナは顔を見合わせて笑った。

　翌朝、朝食までを終えた俺はいつもの服装に弓と矢筒を身につけて準備をしていた。

　習慣で腰に佩いている薄氷を手に取り、自分の部屋を出てから、はたと気づく。

「そうか、今日は薄氷は邪魔になるよなぁ……」

「アタシなら置いてくね」

「だよな。置いていこう」

　休日トップバッターのサーミャ－－つまりはこの森のプロだ－－に言われて、家で留守番をするディアナに薄氷を渡す。

「俺の部屋に片付けといてくれ」

「うん、わかった。いってらっしゃい」

『いってきます』

　俺とサーミャでみんなに「いってきます」をして家を出た。クルルとルーシーが「おでかけ！？おでかけ！？」と言う顔をして走り寄ってくる。

　このところ、狩りのときにはずっと一緒だから、今回も一緒だと思ったんだろう。俺がそんな２人を撫でながら、

「よしよし、今日はおうちでお留守番しててな。後でお姉ちゃん達が遊んでくれるから」

　と言うと、２人共「クルルルルルル」「わんわん！」と素直に小屋のほうへ戻っていく。俺はその後姿に「おりこうさん」と声をかけた。

　そう、今日はサーミャと２人だけで狩りに出かけるのだ。俺は慣れていないし、２人だけなのであまり大きな獲物は狙わないことになっている。

　肉の貯蔵量は十分だし、肉を得ることが目的ではなく、狩りに一緒に出かけて仕留めるところまでが目的なのだ（仕留められればもちろん肉として持ち帰るが）。

　そう言う意味ではスポーツハンティングに近いものがあるな。前の世界でスポーツハンティングのネット番組を見てから少し興味もあったし、ちょっとワクワクしている。

「そう言えば、２人だけで森を行くのは随分と久しぶりだな。お前がうちに来てからそんなに経たないうちにリケも来たし」

「あー、そういやそうか。もうみんながいるのが普通になってたよ」

　ガサガサと下生えをかき分けながらサーミャが言う。ここらはまだ狩りをする領域に辿り着いてないとかで、危ないのがいないかの警戒くらいで、慎重に獲物に近づくような動きはしていない。

　森の中はと言うと、今日は気持ちのいい晴れの空で、緑色に染まった光が辺りを満たし、ところどころに木漏れ日がスポットライトのように地面を照らしていた。

　そのスポットライトを浴びて、拍手喝采に応えるかのように緑のステージの上で咲き誇る花もあったりして、ここが危険な森だと言うことを一瞬忘れてしまいそうになる。

「植物だのなんだのの採集には出たことがあるけど、動物を狩るのは初めてだなぁ」

　俺は歩きながらそう言った。熊とやりあいはしたが、あれは狩りじゃなくて退治だったからなぁ。

「そんな難しいもんでもないよ。釣りみたいな……いや、エイゾウの釣りの腕を考えるとわかんないな」

　俺の言葉を聞いたサーミャはそう言ってニヤッと笑った。

　俺も笑いながら、彼女に「こいつめ」と言いつつ頭をガシガシしてやると、彼女は「キャー」と笑って身体を縮こませるが、逃げることはなかった。

　道すがらに幾つかの薬草を摘んだりしつつ、２～３時間ほど歩いただろうか。家からは結構離れているはずのその辺りで、サーミャの動きが変わった。

　少し腰を落とし、お得意の足音を殺す歩き方になっている。鼻をひくひくさせているのはここら辺りの匂いを探っているんだろう。

　そして、彼女は少し後ろについていた俺を振り返りながら、小さな声で言った。

「ここからはゆっくり行くぞ」

「ここらのを狙うんだな？」

　俺はサーミャに聞こえるか聞こえないかくらいの声で返す。彼女からの答えは頷きである。俺も了解の意を示すべく頷き返すと、そろりそろりとなるべく足音が立たないように歩を進めた。

## 狩り

2020年6月1日

　さすがは森で暮らす獣人だというべきだろうか、サーミャはほとんど音をさせずに歩いていく。その音も、俺は発生源が何かを知っているから感知できるが、そうでなければ風か何かに紛れてほとんど聞こえないかも知れないくらいのものだ。

　俺はその邪魔にならないように必死についていこうとするものの、どうしても大きめの音を立ててしまう。鹿の毛皮を靴裏に貼ったブーツでも作ってくるべきだったかな。普段履きしてると盗賊にでもなった気分になることうけあいだろうが。

　今も落ちている枝を踏んで音を立ててしまい、思わずサーミャの様子を窺ったが、特に気にしている様子はない。まだその音を気にしないといけないほど近くにはいないと言うことだろう。

　まぁ、だからと言って、耳のいい獣たちにこちらの音を聞かせて回る必要もない。遭遇する確率は少しでもあげたいものだ。

　サーミャの後をなるべく音を立てないように、かつ、引き離されないよう、そしてコケたりしないように必死についていってしばらく、獲物に出会うことはなかったが、泉に出た。

　この森には湖がある。近くの山からの伏流水が湧いているようなのだが、そのポイントが少しズレてここで湧き、泉になったのだろう。

　泉からそう離れていないところで、サーミャが身を低くした。俺も慌てて同じように屈む。

　しばらくじっとあたりの様子を窺っていたサーミャは、次に這いつくばるようにして地面をチェックしている。

「足跡がある。古いのとそうでないのが混じってるから、またここに来ると思う。ここで待とうぜ」

「ああ」

　小声で言うサーミャに、俺も小声で返した。獲物が水を飲みに来たところを仕留めるつもりのようだ。

　確か虎も同じような行動するんじゃなかったかな、といったようなことが頭をよぎったが、口にはしないでおいた。

　しばらく鼻をヒクヒクさせていたサーミャがぽつりと呟く。

「……それにしても」

「うん？」

「増えたよなぁ」

「ああ……」

　サーミャが呟いたのは家族の話だ。最初はサーミャだけだった。ほどなくしてリケが、そしてディアナ、リディとトントン拍子に増え、ヘレンとアンネも加わった。さらに言うなら、クルルとルーシーもだ。

　さすがに小家族とも言えない人数になってきている。そこが面白くないのかも知れない。

　俺はなんとなくで泉に向けていた視線をサーミャに向けた。

「嫌か？」

「ううん、別に。みんなと話したりするの、楽しいし」

「そうか」

　サーミャは泉のほとりへと視線を移した。俺も再び視線を戻す。

「アタシさぁ、もうちょっとのんびり暮らすのかと思ってたよ」

「それは俺が一番思ってるよ」

「本当に？」

「ああ」

　2人とも視線を泉に貼り付けたまま、ごく小さな声で話す。

「俺も少なくとも数年は３人で……まぁ、１年か２年でリケが出てっちゃったら、その後しばらくは２人で過ごすんだろうなと思ってたさ」

　いざ蓋を開ければ、全くそんなことはなかったわけだが。この辺り”ウォッチドッグ”の関与があるのかないのか、あるのならどういうつもりなのか問い質したいところだが、その機会はきっとあるまい。

「さっき言ったけどさ」

「うん」

「アタシも別に不満があるわけじゃないんだ」

「うん」

「ただ……」

　そこで、そっと俺の肩のあたりに暖かい何かが触れるのを感じた。見るとサーミャの頭があった。顔を伏せていて表情は分からない。

　次にどんな言葉が続くのだろうか、ドキドキして俺は生唾を飲み込む。サーミャが顔を上げ、俺と目が合った。心なしか瞳が潤んでいるようにも見える。

　俺の心臓はいよいよ早鐘を打ち始めた。ええい、落ち着け。

　その時、サーミャの頭が横を向いた。泉の方だ。鼻をヒクヒクさせている。

　慌てて同じ方を見ると、なかなかに大きな樹鹿が泉の水を飲んでいた。周囲にはもう３頭ほど、水を飲んでいるのよりも小さいのがいる。

　水を飲んでいるのがオスだとしたら、小さいのはメスだろうか。

　俺とサーミャは再び目線を合わせると、互いにそっと頷き、置いてあった弓を手に取った。

## 獲物

2020年6月3日

　俺とサーミャは置いてあった弓をゆっくりと手に取った。

　樹鹿は泉の向こう岸にいて、こちらはずっと低木の陰から様子を窺っている状態なので、向こうからはっきりと見えてはいまい。

　まぁ、そう言う状態だからこそ、泉のほとりまで出てきたのだろうが。俺たちが完全に見えているなら、警戒して近寄らなかったはずだ。

　そろりそろりと矢筒から矢を取り出して、弓につがえる。弦はまだ引かない。

　ややあって、樹鹿が水を飲み終わるかも、というタイミングでサーミャが俺の肩を軽く叩いた。狙えってことか。

　俺はゆっくりと左腕をピンと正面に伸ばし、右の親指の付け根が頬骨に当たるようにして弓を引き絞った。この距離でこの弓、そして俺の力なら放物線ではなく、ほぼ直線で標的まで到達させられるはずだ。

　なので、矢の角度はつけずにまっすぐ狙う。

「頭か？」

「ああ」

　ごくごく小さな声で、とても短い会話を交わす。すると、水を飲んでいた樹鹿の頭が持ち上がり、ふとこちらに向く。気付かれたか？

　樹鹿は見定めるようにこちらをじっと見ている。逆に言えば、微動だにしていないと言うことだ。

　俺は引き絞った弓に蓄えられた力を解き放つ。カン！ と鋭い音が響き、速度を得た矢がまっすぐに樹鹿へと向かっていく。

　狙い

　あれは致命傷だろうが、逃げられる可能性が高い。これならいっそ肩か腿の辺りに命中してくれたほうが脚が使えなくなっていたのに。

「しまっ」

　た、と俺が言うが早いか、すぐそばでカン！ と音がした。俺の放ったものよりもさらに速い矢が、首に矢が当たり少し下がった樹鹿の頭に鈍い音を立てて突き刺さる。

　暴れかけていた樹鹿はそのままどうと地面に倒れた。仕留めた以外の樹鹿は脱兎のごとく逃げていく。

「仕留めたか？」

「うん」

　俺の質問に何事もなかったかのように答えるサーミャ。さすが森のプロと言うべき貫禄である。

　俺たちは再び弓を肩にかけると、獲物を回収すべく泉のほとりを歩き始めた。

　少しして、不意にサーミャが小さく笑う。

「フフッ」

「どうした？」

「いや、エイゾウでも苦手なことはあるんだなって」

「そりゃそうさ。剣や槍はともかく、弓には慣れてないからな」

「そういうもんかな」

「そういうもんなの」

　そう言って俺とサーミャは2人で笑った。

　獲物のところに辿り着くと、首と頭に矢が突き刺さり、そこから血を流していた。結構な巨躯だが、ピクリとも動かない。

「ちょっと移動させるぞ。泉のそばで血の臭いをさせすぎるのはよくない」

「わかった」

　俺はまず倒れ伏している樹鹿に手を合わせた。

「それ、飯食うときにもやってるやつか」

　俺の仕草に気がついたサーミャが聞いてきた。

「そうだな。奪った命に対する謝罪と感謝と、魂の救済を願ってだ」

「ふうん」

　サーミャの返事は素っ気ない感じだったが、彼女もそっと手を合わせる。

　ほんの数秒ではあったが、そうして仕留めた樹鹿の冥福を祈る。もしかすると、彼（見たところオスだった）も異世界に転生してるかも知れんな。

　その後、サーミャが手早く縄を脚にくくりつける。２人で縄を引っ張って引きずっていった。

　泉から大きな樹鹿を急いで引きずり、離れたところまで持ってきた。そのまま縄を使って樹につるすと、サーミャが首のあたりにナイフを入れる。既に心臓は止まってしまっているらしく、派手に噴き出すようなことは無いが、まだ固まっている訳でもないらしく、じわりと垂れてくる。

　サーミャがナイフを器用に扱い、腹をさばいて内臓を取り出した。最初は腸や膀胱のあたり、次に肝臓や胃や肺、そして心臓だ。

「さすがに手慣れたもんだな」

「そりゃそうさ。それにここでもたつくと肉がまずくなるからな……」

「なるほど」

　どういう理屈でそうなるのかは分からないが、少しでも美味いに越したことはない。ここはプロであるサーミャに任せて正解だったと言うべきだろうな。

　他の臓物はそばに捨ておいてある（そのうち狼だのが食べに来る）が、心臓だけは

　ナイフで土を掘って埋める。こうすることで、森に命を返し、森が新たな命にしてくれるのだ。

　手早く内臓を抜いたら、後は湖まで引っ張っていけば、今日やらねばならないことは終わりである。

　吊り下げた樹鹿を降ろすと、俺とサーミャは再び引っ張りはじめた。

## 昼食

2020年6月5日

　必死に樹鹿を引っ張ってしばらく、毎朝俺が見ている湖へと辿り着いた。なかなかに力と根性のいる作業で、狩りに出ている皆は人数が多いとは言え、毎回こんなことをしているのか。

　湖が見えると、どちらともなく足を速めて、ドボンと湖に樹鹿を沈める。

　沈む樹鹿を眺め、俺は肩で息をしながらサーミャに聞いた。

「毎回こんな距離移動してんのか？」

「うん」

「みんなが来る前はどうしてたんだ？」

「そりゃあ、湖に近いところで仕留めるんだよ。ポイントはいくつかあるし」

「ああ、そりゃそうか」

「今日は見つけやすいところに行っただけ。エイゾウがいるから曳くにも問題ないと思ったし」

　ちゃっかりしてると言うか、何と言うか。この森で暮らすなら、これくらいでないといけないのだろうが。

「後は……」

　サーミャがそのまま流れで何かを言いかけるが、途中で止めてしまった。明らかに口を滑らせかけたのだ。

　俺はほんのちょっぴりのいたずら心を発揮して聞いてみる。

「後は？　なんだ？」

「なんでもねぇよ！ いいから飯にしようぜ！」

「うっ」

　はたして、それに対する回答は脇腹へいい感じに入ったパンチ。

　俺は痛む脇腹をさすりながら、湖のほとりを歩くサーミャの後をついて行った。

　樹鹿を仕留めるまでは緊張のし通しだったし、仕留めた後はそれどころではなかったので気がつかなかったが、見ればもう日が中天を少し過ぎている。

　その辺りを認識しはじめた途端、俺の胃袋がその中身のなさを嘆きだした。

「あー、確かにすげぇ腹減ってきたな」

「だろ？ さすがにあの辺で食う気はしないから、あっちの方で食おう」

「分かった」

　スタスタと歩くサーミャ。俺は必死にその後をついて行く。そして沈めた樹鹿が見えるかどうかと言ったあたりで、俺たち２人は腰を落ち着けることにした。

　このところ、激しい運動をしていなかった俺の体を気遣ってか、薪拾いはサーミャが買って出てくれた。

　彼女が薪を集めてくれている間に、俺は付近の石を集めて小さなかまどを作る。

　と言っても、石を３つ４つ並べただけのシンプルなものだ。それでも持ってきた小さなポットを火にかけるくらいの役には立つ。

　かまどが出来たら、湖の水をポットに汲んでおく。昼飯（甘辛く煮付けた肉を挟んだ無発酵パン）の出番はもう少し先だな。

　そうして準備を進めていると、薪拾いからサーミャが戻ってきた。

「これくらいでいいよな？」

「ああ、この大きさのポットの湯を沸かすなら十分だろ」

　かまどに細い薪を入れて、俺の着火の魔法で火を点ける。チロチロと炎が顔を覗かせると、そこに残りの薪をくべて火を大きくした。

　火が安定して来たところで、かまどにポットを置く。そんなに長いことは使ってないが、このポットも周囲が煤けて歴戦の如き表情を見せている。

　時折、炎の舌がポットの側面を舐めていき、古強者への成長を促しつつ、中の水の温度を上げていた。

　炎を眺めながら、俺はふと思い出したことを口にする。

「そう言えば、街へ行くのも今はクルルのおかげですぐに行けるが、最初に２人で行きはじめたときは、徒歩で商品も背負って持って行ってたなぁ」

「ああ、そうだったそうだった。途中でちょっと休み入れたりしてたよな」

「そうそう。ああ、そう言えば……」

　そんなに昔の話でもないのに、思い出話というものにはついつい花が咲いてしまうもので、うっかりポットの湯を大幅に失うところだった。

　慌ててポットを火からおろして、そこに持ってきたハーブ（目をキラキラさせて「私が調合しますね！」と張り切ってリディがチョイスしたもの）を入れる。雑だがこれでも立派なハーブティーになってくれる……らしい。リディが言ってた。

「いただきます」

「いただきます」

　荷物から昼飯を取り出し、ハーブティーをそれぞれのカップに注ぐと、２人で手を合わせた。

　最初にハーブティーを飲んでみると、ほのかな草の匂いと甘やかな香り、そして少しの酸味らしき味がして、飲み込んだ後からスゥッと若干の清涼感がやってきた。

「これはいいな」

　俺が思わずそう感想を口にすると、サーミャもコクリと茶を飲んで、

「これは美味い」

　と言って、昼飯をガブリと豪快に頬張り、

「こっちも美味い」

　と笑う。行儀作法としてはダメなのだろうが、この状況でそれを咎めるようなやつは誰もいない。

「そりゃあ良かった。あんまり慌てて食うなよ？」

「分かってるよ」

　昼飯の量はそんなに多くはない。ましてや腹ペコの２人ではあっという間に食べ終えてしまった。

「さて……後は帰るだけだな」

　火の後始末まで終えた俺はそう言った。それを聞いたサーミャの眉が下がる。

　やれやれ、仕方ない。

「でも今すぐに帰っても暇するだけだし、道々で果実でも採りながら帰ろうぜ」

　俺の言葉に、サーミャは、

「うん！」

　と、見た中でもとびっきりの笑顔で答えた。

## ２人目

2020年6月8日

　運が良かったからなのか、はたまたサーミャが張り切っていたからなのか、思ったより多くの果実を採ってくることが出来た。

　今回は新顔がある。ザクロのような果実が実っていたのだ。サーミャに聞いてみると食えるということなので、２粒ほどちぎって口に放り込んでみる。

「すこし渋さが多いかな」

「でも美味いだろ？」

「うん」

　キュッとくる渋みの中に酸味と甘みがあって美味い。前の世界でも実家の近くに自生しているものがあったので、幼いころに失敬したことがあるが、それともあまり味が変わらない。

　こっちに来てから食べた野菜や果物は原生種に近いものが多く、苦みや酸味が前の世界で食べていたものよりも強かったりする。

　１年と経っていないとは言っても、それなりの期間食べていたから慣れないわけではないが、前の世界のものに近い味のものを食べるとホッとするのも事実だ。

　その辺りが顔か匂いに出ていたのだろう。サーミャがニヤニヤしながら聞いてきた。

「エイゾウ、なんだか嬉しそうだな」

「そうか？」

　まぁ、実際に嬉しいの確かだ。俺がわしわしとサーミャの頭を撫でると、彼女は一瞬むずがるようにしていたが、すぐに目を細めていた。ちょっと猫っぽいな。

　そうして、俺とサーミャは家に戻った。

「ただいま」

「ただいまー」

『おかえりなさい』

　家の扉を開けると、居間にはリケとリディがいた。サーミャはパタパタと自分の部屋に戻っていく。結構あちこち動いたから、早いとこ汚れを落としたいのかな。

「他の３人は？」

「裏で稽古しながら、クルルとルーシーの面倒を見てます」

　リケが答える。俺は微笑んで言った。

「元気だな。２人はなにしてたんだ？」

「魔力の練習です。結構見えるようになってきました」

　珍しくリケが胸を張って言った。ほほう。そのうち追い抜かれるかも知れんな。

「リケさんはドワーフだからかわかりませんが、筋がいいですね。このまま行けば、簡単な魔法くらいは使えるようになるかも知れません」

「え、そうなのか？」

「ええ」

　リディは大きく頷いた。そのリディの隣でリケが俺よりも驚いているので、そのことを言ったのは初めてなのか。

「ひとまず着火の魔法だけでも使えると何かと便利だぞ」

　実際に俺はあちこちで着火の魔法を使って助かっている。着火は意外と面倒な作業だからな。ライターくらいの気軽さで着火できる、この魔法があるのと無いのとでは大違いだ。

「覚えたら炉に火を入れられますかね」

「そうだな」

　うちの炉や火床、そしてコンロは着火の魔法を使って火を入れると、その火を維持してくれる。普通に使えなくもないが、魔法を使った場合と比べると性能が違ってくるのだ。

「親方がいない間にも同じように出来るならいいですねぇ」

「俺としてもちゃんと仕事できてるか気を揉まないで済むしな」

　俺は再び笑って言う。正直なところ、俺がいないと作業が止まってしまうような状況は避けたいのだ。

　チートを貰っているとは言え、俺だっていつ何が原因で二度目の人生に幕を下ろしてしまうか分かったものではない。

　そうなったときに、彼女達がこの工房を使い続けてくれるかは分からないが、少なくとも使えるような状況にまでは持っていっておきたい。

「が、頑張ります」

　そんな俺の心を知ってか知らずか、リケは表情を引き締めると、ムンと再び胸を張って決意をあらわにした。

　その日の夕食のとき、早くも次の人選の話が来た。発表はディアナからである。

「次はリケね」

「おう。そうすると、うちに来た順か？」

　俺はディアナに聞いてみた。別に誰でも問題は無いのだが、順番が分かっていた方が心構えが出来ていい。

「そうね」

　もしかすると教えては貰えないかもと思っていたが、あっさり教えてくれた。別段秘密でもなかったと言うことだろうか。

「じゃあ、その次はディアナか」

「はずれ」

「え、だって……ああ」

　うちに来たのはサーミャ、リケ、ディアナ、リディ、ヘレン、アンネの順（間にクルルやルーシーが入るが）だと思っていたので、リケの次はディアナと言ったが、さにあらず。

「ヘレンか」

　俺がそう言うとヘレンがちょっと肩をビクッとさせた。順番がもう決まっているならそう驚くこともなかろう。

「よく分かったわね」

「うちに来たのはヘレンの方が先だからな」

　そう、うちに

「そういうことだから、よろしくね」

　そう言ってウィンクしてみせるディアナ。さっきの話で言うと、ヘレンの次は彼女のはずなのだが、何を要求されるのだろうか。

　俺は怖さ半分、楽しみ半分な気持ちになりながら、スープのおかわりを皿によそった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　書籍版２巻の発売日が決定いたしました。来月、7月10日(金)となります。今回も書き下ろしなどを含め、Web版をご覧の皆様にもお楽しみいただけると思いますので、是非お求めください。

## 胸甲

2020年6月10日

　我がエイゾウ工房は不定休である。うちの場合の不定とは「手が空くか、疲れてきたら休み」と言うことである。

　なので、俺が言い出す以外にも誰かが「休みにしよう」と言えば、よほど納期に追われているとき以外は休みになるのだ。

　そして、基本的にはうちが納期に追われることはない。繁忙期なんかもないし、カミロは「お前が作った分だけ売るから、多かろうが少なかろうが関係ない」というスタンスでいてくれているので、仮に次の納品物がナイフ１本でも文句は言わないだろう。……散々愚痴りはすると思うが。

　つまり、基本的にはいつでも言われれば休みにできるはずなのだが、みんなから言ってきたことはほとんど無い。サーミャが１度か２度言ってきたくらいじゃなかろうか。

　そう、「次はリケの番」と言われてから２週間ほど、納品物に狩りの獲物の引き上げに畑の手入れに、小物の製作にと普通に過ごしてしまった。

　つまり、俺の方から「休みにするか」と言うのも何となく憚られているうちに、それくらいの時間が過ぎてしまったわけである。

　不甲斐ないと言われても仕方の無いことではあるが、さすがにリケとのデート（？）を急かすような真似もなぁ……。

　そんなわけで、また新しい１週間が始まったころ、作業を終えた俺に近づく姿があった。リケ……ではなく、ヘレンである。

「ちょっといいか？」

「おう」

「頼みたいことがあるんだ」

「なんだ？ 大体のことなら聞けるぞ」

　俺は汗の流れる顔をタオルで拭きながら言った。家族の頼み事である。俺や家族の誰かが危険になること以外はなんだって聞いてやれる……と思う。

「そのさ……アタイの鎧を作って欲しいんだ」

「鎧を？」

　そう言えば、ヘレンの鎧は帝国の革命騒ぎの時に無くなっている。アンネも剣は持ってきたが、鎧は持ってこなかった。

　後に聞いてみると知らないと言われた。鎧は普通のものだから、そのまま捨てられでもしたのだろう。

「傭兵に戻るのか？」

「……ううん」

「違うのか」

　コクリとヘレンは頷いた。少しの間が開く。

「いついなくなってもおかしくない仕事だけど、あれから結構経つし、何人かに無事を知らせておきたくて」

「なるほど」

　その道行き、鎧なしで剣だけというのも心許ない、と言うことなのだろう。それは理解出来る話ではある。

「張り切ってフルプレートにしてやろうか」

「それじゃろくに歩けねぇだろ。あ、クルルを貸してくれるならいいぞ」

「それは

　俺とヘレンはそう言って笑い合う。

「で、どういうのがいいんだ？　本当にフルプレートがいいならそれでもいいぞ」

　やたらと手間がかかってしまい数が作れないので、うちの製品として作る予定は今のところ無いが、家族が身につけるものなら採算度外視である。フルプレートに凝った細工のヘルムをつけることもやぶさかでは無い。

「そうだな……」

　ヘレンは真剣な顔でおとがいに手を当てて考え込む。傭兵稼業に戻る場合でも、どのみち長距離を移動することも多いのだろうから、あまり重いものは好まなさそうだ。

「胸甲と腕甲、あとは脛当てかな……」

「覆う範囲は？」

「胸と腕はガッチリめで、脛はほどほどでいいよ」

「ふむ。腹は？」

「腹なぁ……」

　再び考え込むヘレン。天を仰いだりしているから、どういう状況が想定されるのか考えているんだろう。

　前のは腹の辺りは鋼でカバーされていなかった。動きを重視して「当たらなければどうと言うことはない」ってことだったのだろうか。

「腹のところはいいや。ディアナのみたいに、胸のところだけで」

「わかった。両胸か？ それとも前のみたいに左だけ？」

「両胸で頼む。あれは元々両方あったんだけど、壊れて直すときに片方だけになったんだよ。それでも具合が良かったからそのままにしてただけで」

「そうなのか」

「うん」

　”迅雷”の隠された秘話……と言うほどでもないかも知れないが、そう言う由縁があったんだな。

　さて、となれば製作する上で最大の障壁が残っている。俺がやってもいいのだろうとは思うが、手段がないわけでもないのにやるのは憚られる。

「……測るのはリケに任せるわ」

　俺が最大の障壁の解決策を言うと、その答えは肩口への強いパンチで返ってくるのだった。

## 測定と形成

2020年6月12日

　チートの能力で魔力を込めると、鋼は普通よりも硬くなる。ナイフの切れ味やショートソードの耐久性はその硬さが貢献している面もある。

　そして硬さが重要なものと言えば防具だ。もちろん硬いだけでは脆いので、ある程度のしなやかさも必要なのだが。

　ヘレンから相談を受けた翌日。俺は早速防具の製作に取り掛かることにした。納品物はほとんどできているし、２～３日別の作業をしていても問題はない。

「リケはどうする？」

「見学します」

　リケも特に急ぎの作業はないらしい。じゃあ、休みを言い出せばいいのになとは思ったが、それは言わないでおく。

「あー、それじゃあ、ヘレンを測ってもらっていいか」

「わかりました」

　ヘレンとリケ、そして手招きされたアンネが家の方に引っ込んでいった。ここで測ってたら意味ないからな……。

　アンネは多分手伝いだろう。ヘレンは身長が高いから、同じく身長の高いアンネに手伝ってもらうのがいい。リケに頼んだのは、そのへんの測定の勝手を知っているのがリケだからである。

　その間に俺は胸甲に使う板金の準備をはじめた。板金はそれなりの大きさがあるが、胸甲にするには全く足りない。

　板金は長方形だ。それを２つ積み重ねて加熱し、金床で叩く。キッチリくっついている必要はないので、ホウ砂などはつけたりせずに叩いていく。

　倍くらいの幅になったらタガネで折り目を入れてから曲げていく。厚みが倍の板金が出来たので、更にそこにもう一枚板金を追加して同じように加熱して叩き、折り曲げる作業を繰り返す。

　折返しを数度繰り返した板金、と言うよりも既に鉄塊と呼ぶべき物体をいよいよ延ばす作業に入る頃、ヘレンたちが戻ってくる。測らないといけないところはそんなにないはずだが、結構時間かかったな。

　ウチではめったに使わないが、こう言うときのために少しだけ紙もあるし、筆記具も用意されている。チートを使えば目で見るだけでも正確な形状にできるのだろうが、測ったから出来たと言い張るために、測定したという事実を残しておいたのだ。

　リケに手渡された紙には幾つかの数字が書かれている。王国と帝国では少しだけ度量衡の単位が違うらしいが、うちにある尺は王国式なので、それで測った数値であろう。

　インストールとチートの合わせ技で確認しても合っているようだ。俺はチラッとだけ紙を確認すると、ちょうど温度の上がった鉄塊を火床から取り出した。

　ここから形をつくっていく。両胸が分かれているタイプと一緒になっているタイプがあるが、今回は一緒になっているタイプだ

　そして、鎧として機能させるために、中央部分は厚く、端へ向かうに従って薄くしていく必要がある。

　まずは普通の金床で伸ばし、全体に４センチほどの厚みになったら、真ん中が２～３センチほどで端はもう少し薄い鋼板にする。成形するときに薄くなってしまう分も考えての厚みだ。

　そしていよいよ胸の部分の形成……の前に昼飯の時間になった。作業を一時中断する。

「どうですか、親方」

「うーん、鋼は鋼だから今のところ大きな問題はないかなぁ。厚みを変えるのも思ったより大変ではなかったし。今後、胸のところの成形がネックになるかも知れないけどな」

　昼飯にするべく鍛冶場を出る時にリケに聞かれたので、俺は素直に答えた。

　実際、今のところは厚みを変える必要があったとはいっても、鋼板を作った以上でも以下でもない。さして困るような作業でもないのだ。

　俺の答えはリケにとっても想像通りだったようで、それ以上詳しくは聞いてこなかった。

　カーブを整形するには、普通の金床では少し難しい。俺は普段使わない小さくて丸い形状をした金床を鍛冶場の隅から持ってきて、いつもの金床の横に据えた。

　そこに曲げたい箇所を置いて、包み込ませるように鋼板を叩いていく。

　少しずつ位置をずらして叩かないと実際に包み込まれてしまうので、そうならないように欲しい形状を目指してずらしながらカンカンと甲高い音と、真っ赤な火花を飛び散らせながら、魔力もこもるようにと鎚を何度も振り下ろす。

　すると、鋼板はゆっくりゆっくりと俺の願いに応えるかのように、その形状を変えていくのだった。

## 色

2020年6月15日

　俺は板金を叩き続け、やがて蚕の繭のような形を作り出した。この後、武器のように焼き入れと焼き鈍しも行う。「硬さと粘り強さの両立」は防具でも変わらないのだ。

　だが、その前にやらなければいけないことがある。背甲の板金を用意している間に、胸甲の温度が下がってきたので、俺はヘレンを手招きした。

　呼ばれたヘレンは額からしたたる汗を拭きながら近寄ってくる。

「なんだ？」

「仕上げはまだまだだが、とりあえずサイズがおかしくないかだけ見てくれ」

「わかった」

　俺が胸甲を手渡すと、ヘレンは胸のところにあてがった。

「そこから内張りをしたり、革帯で締めたりするから、その分も考えて合わせてみてくれ」

「うん」

　胸のところに当てたまま、体を捻ったり、逸らしたりするヘレン。俺の感覚で言えばおかしいところはないはずだが、少しズレている方が「しっくりくる」場合も少なくはないだろう。

　その辺りは使う本人の感覚に委ねるほかない。完璧であることが必要条件ではない。使う本人が使いやすいのが唯一にして絶対の条件だ。

「どうだ？」

「うん、バッチリだ。動きにも違和感がない」

「じゃあ、それで仕上げちまうな」

「おう」

　俺は胸甲を脇に置いておくと、背甲の続きに取りかかった。

　この日は結局、背甲をある程度形にするところまでで終わってしまう。残りはまた明日だな。

　翌日。今日は胸甲を仕上げるところまでいきたい。胸甲を板金から打ち出す作業は終わったのだから、その分”慣れて”いるはずではあるのだが。

「ヘレン、すまんがちょっと背中触っていいか？」

「えっ」

　俺の言葉に全員が驚いた顔をした。言葉が足らなかったな。

「すまん、サイズは分かってるんだが、背甲の成形に知っときたくて……」

「ああ……」

　それで皆なるほどと言う顔をしてくれた。あくまで仕事というか、作業の一環でやるだけだし、胸の方は本人の許可があったとしても憚られたが、背中の方なら本人の許可があればギリギリ許して欲しい。

　すこし顔の赤いヘレンが俺におずおずとだが背中を向ける。OKということだと判断して触る。

「それじゃ失礼して……」

　そっと触るとかえって良くないと思ったので、思い切って触った。服の上からでもガッシリとした、だがしなやかな筋肉の感触が伝わってくる。ここに住むようになってからも、ディアナとほぼ毎日剣の稽古をしていたからなぁ。

「次は背中を丸めて貰えるか」

「こうか？」

「そうそう」

　ヘレンはグッと上体を前に倒した。さっきまでの背中を伸ばしていたのとは、違う形状と感触が伝わってくる。

「ありがとう、もういいよ」

「今ので良かったのか？」

「ああ。助かったよ、ありがとう」

　今の感じだと、背中側はやや余裕を持たせた方が良さそうだ。今の感覚を忘れないうちに背甲の形を整えるため、火床に入れておいた板金を取りだした。

　小さい金床で形を整えていく。もちろん魔力を込めていくことも忘れない。ただの板金だったものは少しずつ形状を変えていき、やがてヘレンの背中を覆う形状になった。

　ヘレンの背中に当ててみるにはまだまだ熱いので冷えるのを待つ間に、胸甲を火床で熱する。こっちの焼き入れを行うのだ。

　適温まで上昇するのを待って、上がってきたらすぐに水槽に入れて急冷する。大きな音と蒸気があがり、鍛冶場の暑さが一層高まった。

　俺も皆もすっかり汗だくである。こればっかりはチートでも防ぎようがないから仕方ない。

　エアコンみたいなものはないのかなぁ……。あっても焼け石に水かも知れんが、あるとないとで違うなら導入したいのが人情というものだろう。

　水槽から胸甲を引き上げると、胸甲はすっかり硬くなっていた。表面がガタガタなので、ヤスリやカンナのようなものを使って綺麗に整えていく。

　やがて銀色に光り輝く表面になった。これで後は焼き戻しをして粘り強さを出すわけだが……。

「ヘレン」

「ん？」

　俺は再びヘレンを呼んだ。今度はサイズの話ではない。

「青色は嫌いか？」

「いや？」

「そうか」

　俺はそれだけを確認すると、火床で胸甲を熱しはじめる。今度は赤熱するほどは加熱しない。その代わりと言ってはなんだがある程度の温度で止まるように調整する。

　酸素がある状況で鋼を加熱すると、表面は酸化されて錆ができる。錆と言っても赤錆のようなものではない。

　今、俺がやっているのは酸化皮膜を作ることだ。酸化皮膜を作れば、元々酸化しているので錆も出にくい。そして酸化皮膜を作ると、その厚みなどによって反射光に干渉が起こって色がつく。

　加熱の最後でリケを呼び、火床を見せて言う。

「いいか、この温度だ。よく見ておいてくれ」

「はい」

　そう言って俺が火床から取り出した胸甲、それには鮮やかな青い色がついていた。

## ”迅雷”の鎧

2020年6月17日

「おおー！」

　鮮やかな青に染まった胸甲を見て、リケが思わずだろう、声を上げた。

　何事か、とこっちを見た皆の顔も驚きに満ちている。

「わあ……！」

　その中でも、一番目を輝かせていたのはヘレンだ。自分のものだからというのもあるだろうが、純粋にこういうのが好きなんだろうな。

「他の部分もこの色にしようと思うが、いいか？」

「いいに決まってんじゃん！」

　鍛冶場の空気の全てが震えるかのような大声でヘレンは叫んだ。ここまで喜んでくれるとやった甲斐があるというものだ。

　可能なら金で模様なんかも入れたかったのだが、青で既に十分目立っているとは言え、これ以上目立ちすぎるのも考えものだし、どうも身分にも影響するみたいだしで止めてある。

「こうやって色をつけてるのねぇ」

　アンネが心底感心したと言うように呟く。

「見たことあるのか」

「色をつけるところを見るのは初めてだけどね。お姫様だし、王宮にいればもっとごちゃごちゃした飾りのもいたわよ」

「へえ。ちょっと見てみたいかも」

「あら、帝国はいつでも歓迎するわよ」

「そっちは遠慮しとくよ」

　帝国の王宮に馳せ参じる騎士であれば、身分の低かろうはずもない。俺は一介の鍛冶屋でしかないから全く知らないが、王国や共和国にも名の知れた騎士もいることだろう。

　そういった騎士の鎧なら、打ち出して磨いたままのものではあるまい。いずれ身分にふさわしい豪奢な装飾が、これでもかと奢られているはずだ。

　複雑な飾りがついているということは、それだけ手間がかかっており、その分金もかかっている。

　そして、その金を払えるのであれば、その分の収入源――つまりは領地――を持っている。つまり、身分が高いと言うことだ。

　王宮のような場所では自分がどういう身分なのかを示しておくのは必要なことなのだろうな。

　それに、魔物討伐のときにはいなかった（もしかしたらフレデリカ嬢が兼ねていたのかも知れない）が、戦功記録官から見て、「紋章がよく見えないが、あの大きな獅子頭の飾りはなんとか卿だな」と、その鎧を着ているのが誰なのかわかることも大事なことだ。

　戦場で大手柄を立てたはいいが、誰なのか分からなかったでは文字通りの骨折り損の可能性も出てくる。

　そう考えると金飾りはともかく、何らかの飾りはつけておいた方がいいのだろうか。戻る戻らないは置いておいて、傭兵なら戦場での功績も報酬に関係するだろうし。

　そう考えて、俺はおずおずとヘレンに聞いてみる。

「なあ」

「うん？」

「狼の飾りとかつけようか……？」

「いらないよ！」

　なかなかの勢いで否定されてしまった。ううむ、余計な気遣いだったか。俺がそう思っていると、

「エイゾウの考えてることは分かるし、ありがたいけど、アタイの本領は”速いこと”なんだから、余計な飾りで重くしたくない」

　と、フォローされた。

　確かに”迅雷”が鎧が重くて遅くなったんじゃあ、意味がないな。二つ名が泣いてしまう。背甲なんか、余分な重量をつけないようにギリギリを狙ったのに、飾りをつけて重くしたら本末転倒である。

「じゃ、色だけ他も合わせるよ」

「おう！」

　満面の笑みを顔に浮かべたヘレンと、他の皆は自分の作業に戻っていく。さて、俺も続きをしていかなきゃな。

　その後、背甲は胸甲と同じように出来た。腕甲、脛当ても成形、着色と素直に進んでいく。胸甲みたいに形状が複雑ではないし、背甲みたいに可動域もそんなにシビアではないからだ。

　こうして青い一揃いが出来たわけだが、これで完成ではない。それぞれの内側にニカワを塗って布を張る。

　その布に再びニカワを塗って鹿革を張り、縁のところはリベット（当然青くしてある）で止めておく。

　戦闘の際は鎧下のようなものを着るらしいのだが、移動中などに身につける際に服の上からでも大丈夫なようにとの配慮である。前に持っていたのもそんな感じになってたし。

　胸甲と背甲の連結は肩と腋のところでベルトで止めるようにした。ベルトの金具は胸甲と同じ要領で黒錆の酸化皮膜を作って黒くしておく。ベルトの金具から錆びてダメになったんじゃ意味ないからな……。

　腕甲や脛当ても最後の固定はベルトだ。

　こうしてかれこれ４日ほどかけて、一揃いが完成した。全身鎧なんか作ったらどれだけの時間がかかるのだろう。

　うちの場合だと作業時間と儲けが割に合わないような気がする。その時間で剣なりナイフなりがいくらでも作れてしまう。

　俺がそうリケに愚痴ると、

「その分貰ってしまえば良いんですよ」

　と、事もなげに返してきた。

「そういうもんかねぇ」

「職人がものを作るのに使った時間の分いただくのは、何もおかしいことではないと思いますよ。親方はなぜかその辺貰いたがらないですが」

「うっ……反省してます」

　何となく、出来たものの品質分くらいで考えてしまう。前の世界でやってた仕事ではちゃんと見積もりにも請求にも作業時間を入れてたのに、こっちでは好きなことをやっているから、と言うのもあってか、作業時間も入れて金を貰う思考がなかなか身につかない。

　ここらは徐々にでも改善していかないとなぁ。

　防具の一揃いが出来たので、早速ヘレンに試着して貰う。時間は日暮れ前、日は中天をとっくに回ったが、橙色になるにはまだまだ時間がある。

「とりあえず１人でつけられるか試してみてくれ」

「分かった」

　全てを装着するのは初めてなのに、ヘレンはテキパキと身につけていく。やがて、青い部分鎧を身につけた、”迅雷”の姿がそこに現れた。

「どうだ？」

「違和感はないよ。つけるのも特に手間取りそうなところもない」

「そうか」

　屈伸したり、体を前後左右に倒して具合を確かめるヘレン。あれだけ動いて違和感がないなら、まぁ大丈夫か。

　俺がホッとしたその時である。

「なぁ」

　ヘレンが真剣な目をしてこちらを見た。決意のこもった眼差しに、俺は少し気圧される。

　次にヘレンが口にしたのは、言われるかも知れないな、と思っていた言葉だった。

「試すのに、エイゾウが手合わせしてくれないか」

## ”迅雷”と鍛冶屋

2020年6月19日

「俺が？」

　俺は思わず自分を指差しながら聞いた。ヘレンは大きく頷いている。

　真剣な表情を様子を見るに、冗談ではないんだろうが。

「俺はただの鍛冶屋だぞ」

「冗談キツいぜ」

　ヘレンが口を尖らせて言った言葉に、俺以外の家族全員が頷く。いやいや。

　このあたりの認識の乖離は正しておきたいが、多数決で敗北しそうなので今は言い出さない。勝てないと分かっている戦争はやらない主義なのだ。

「まぁ、どうしてもと……。いや、言うまでもなかったな」

　俺の目を見つめ続けるヘレンを見て、俺はため息をついた。

「仕方ないな」

「やった！　そう来なくっちゃな！」

　バシン！と鍛冶場に響き渡るくらいの音で俺の背中を叩き、ヘレンは外に飛び出していく。

「あ、おい、木剣……」

　声をかける間もない。俺は再びため息をつくと、木剣を３本用意する。２本は勿論ヘレンのだが、１本はディアナのを借りた。

「馴染んでるんだから、壊さないでね」

「あの様子じゃ保証はできんな。なに、壊れたら作り直してやるよ」

「ん。ならよし」

　ディアナはポンと肩を軽く叩いて、俺を送り出してくれた。気は乗らんが、やる以上はしっかりやらんとな。

　外へ出ると、ヘレンがぐるぐると肩を回している。あれだけ肩が動かせるなら一通りの動きは平気そうだな。

　クルルとルーシーも小屋から出てきていて、俺の後からも結局みんな外に出てきたから、家族全員が家の前の広場にいることになる。

　他のみんなは離れているが、一番ちびっこのルーシーは「今から何するの？」とキラキラした目で俺を見上げて尻尾をパタパタ振っている。

「危ないから離れててな」

　俺がルーシーにそう言うと、いつもディアナたちの稽古を見ているからだろう、なんとなく察したらしい。「わん！！」と一声鳴いて、ちょっと離れたところにいるディアナのところへ走っていった。

　俺は思わず顔を緩めてそれを見る。そこへ、

「よーし、じゃあ始めるか」

　俺から木剣を受け取って、準備運動も終えたヘレンが声をかけてきた。その目は獲物を前にした狼のように鋭い。

「お手柔らかにな」

「それこそ冗談だろ」

　軽口を叩き、お互いに木剣を軽く打ち合わせて、間合いを取る。一気に場の空気に緊張が走った。

　空気の粒子さえも止まってしまったような感覚に陥る。足先を１ミリでも動かせば、この均衡は崩れるだろう予感すらしてくる。

　２人共止まったまま、時間が過ぎていく。１分が１時間のようにも感じる。

　フワッと少し風が吹いたような気がした、と思った瞬間、ヘレンの身体がすぐそこまで来ていた。俺は慌てて木剣を回すように振る。

　ガツッと音がして、俺の木剣は視界の外から迫っていたヘレンの木剣を弾いた。ギリギリで間に合ったが、一瞬でも反応が遅れていれば今の一撃であっさり終わっていただろう。

　もちろん、それでヘレンの攻勢が止まるはずもない。初撃を失敗したと見るや、素早くもう片方の剣を繰り出してきた。俺は次々と繰り出されるヘレンの攻撃を必死に捌いていく。

　両手に剣を持っているからだとは思うが、ヘレンの体の動きは小さくはない。まるで踊っているように動いている。傍から見れば美しくすらあるだろう。

　今は木剣だから多少打ちどころが悪くても骨折までで済むだろう（もちろん、骨折が頚椎や頭部で起これば命にも関わってくる）とは思うが、これがあのショートソードだったら剣で捌こうにもそれごと切り刻まれてお仕舞い、と思うとゾッとする。

　俺はいろんな冷や汗をかきながら、機会をうかがって攻撃を繰り出す。多分そこらの兵士なら仕留めているだろう一撃だが、ヘレンは難なく弾き、攻撃をしたことで起きた隙を突いてくる。

「くっ」

　俺は必死に間合いを離して立て直しをはかるが、”迅雷”のスピードたるや。

　一瞬で空けたはずの間合いを詰められ、再びの防戦一方となった。ガツッガツッと木剣同士が激しくぶつかる音をさせながら、ヘレンの猛攻を凌いでいく。

　さっき出したような攻撃はもう出せない。そもそも繰り出せるような隙がない。しかし、このままではジリ貧だ。

　時間もだいぶ経っている……ように感じる。１５分か３０分か、慣れていない俺では把握しきれていない。

　そろそろ体力も限界になりつつあった。若返っているとは言え、ピークには到達している３０歳である。２０代のときのような無尽蔵さはない。少なくとも俺の場合は。

　どのみちこのままではヘバって倒れて終わりである。それよりはまだマシか。

　俺はままよ、と渾身の一撃をヘレンの攻撃の間隙を縫って繰り出した。

　もちろんと言っていいのだろうか、その一撃はヘレンを仕留められず、逆に顎に衝撃を感じた俺の意識は暗転した。

## ただの鍛冶屋

2020年6月22日

　俺は横になっていた。頭になにか柔らかいものが当たっているような気がする。あれ、俺どうしたんだっけ……？

　ゆっくりと目を開けると、眼前には目を潤ませたヘレンの顔があった。

　ああ、そうか、ヘレンと鎧を試すのに模擬試合をして……。

「目を覚ました！」

　ヘレンが大声でそう言うと、みんながワッと集まってきた。

「大丈夫？」

　ディアナが心配そうに顔を覗き込んでくる。他の皆も同じような顔をして俺の顔を覗き込んだ。

「ああ。ちょっと顎が痛むが、他は特に異常ないようだ」

　俺の言葉に全員がほっとした顔をする。クルルとルーシーにはペロペロと顔を舐められたが。

　ここで俺は自分の状態に気がついた。目の前にはヘレンの顔、そして少し離れたところからみんなが覗き込んでいると言うことは……。

「わっ、す、すまん」

　ヘレンに膝枕をされていた俺は、慌てて体を起こそうとする。

　だが、その試みは虚しく、ヘレンとディアナの両方から抑えられた。物凄い力である。

　サーミャとアンネ、それにクルルが加わっていない状態でこの力なら、全員でかかったら

「大丈夫かも知れないけど、まだもうちょっと横になってた方がいいわ」

　そうディアナに諭されて、俺は素直に従うことにした。ものすごく恥ずかしいのは変わらないが。

「いやぁ、完敗だなぁ」

　横になったまま俺は呟いた。ヘレンの攻撃をほとんど捌いたとは言え、こちらからは一切手出しが出来なかった。

　倒されるのが遅いか早いかだけの違いになっただろうことは想像に難くない。

「お前は本当に強いな」

　俺は微笑んでそっとヘレンの顔に手を伸ばした。その手をヘレンがギュッと掴む。ヘレンはそのまま俺に向かって当たり前だと言わんばかりに微笑んだ。

「“迅雷”相手にあれだけ持ち堪える人間がいるとは思ってなかったけどね」

　そう言ったのはアンネだ。こっちは完全に呆れ返った顔をしている。

「そんなに長くやってたか？」

　長かったような、短かったような不思議な記憶しかない。ヘレンを見ても首を傾げているから、似たようなものなのだろう。

「ゆうに小半時はしてましたよ」

　答えたのはリケだった。こっちは今更と言うことなのか、あまり呆れてはいないようだ。いや、それもどうなんだとは思うが。

「そんなにか」

「ええ」

　それだけやってても勢いが落ちなかったし、２回しか手出しさせなかったヘレンの剣の腕たるや、と言うことだろう。

　それはまた別の事実も指し示している。

「じゃあ、鎧はバッチリだったんだな」

「え？　あ、ああ。もちろん。これ以上ないくらいに」

「そうか、良かった」

　ヘレンが３０分間全力で動き続けられるのであれば、性能試験としては大成功と言うよりない。耐久性については今更試すまでもないだろう。あの頑丈な剣と同じ技術で作ったのだから。

「青い光が煌めいて、さながら本当の雷のようでした」

　目を閉じ、そう言ったのはリディだ。目撃したことの全てを思い出しているのだろうか。

　アンネが苦笑しながらリディの言葉を引き取る。

「まぁ、なんか速すぎてほとんど見えなかったけどね」

「アタシはギリギリ見えてたけど、追いかけるので精一杯だった」

　サーミャが口を尖らせた。獣人の彼女の動体視力でギリギリだったのか。我が身のことながら、ウォッチドッグが与えてくれた戦闘能力には驚きしかないな。

　やや過剰なきらいはある。この森では凶暴な熊なんかを相手にする可能性がある（いや、実際相手をしたわけだが）と言っても、大怪我

　女性しかうちに来ないことと言い、何か意図があるのではないだろうかと勘繰ってしまう。

　まぁ、確かめようのないことを気に病んでも仕方ないな。俺は大きくため息をついて、頭の中に湧き出たモヤモヤをため息に乗せて全て吐き出した。

「これは聞いても仕方ないと思うんだけど、エイゾウに聞いていい？」

　おずおずとアンネが言ってくる。

「いいぞ。答えられることなら、だが」

　俺がそう言ったにも関わらず、アンネはまだ逡巡していた。そんなに聞きにくいことなのか？

「エイゾウは一体何者なの？」

　何者、か。その本当の答えを俺は持っていると言えるだろうか？　そのままでいいのなら、転生者でチート持ちと言うことになるが、それだけだろうか。

　今はアンネの問いに対する答えは１つしか思い当らなかった。

「俺はただの鍛冶屋だよ」

　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　書籍版２巻の発売日が決定いたしました。7月10日(金)となります。今回も書き下ろしなどを含め、Web版をご覧の皆様にもお楽しみいただけると思いますので、是非お求めください。

　6/26よりカクヨムのフォロワー様向けに3週に渡って毎週1回、2巻発売記念のSSをメールにてお送りする予定となっております。よろしければフォローいただけますと幸いです。

（※こちらの告知はカクヨム運営様に問題ないことを確認済みです）

　また、１巻の再重版も決定致しました。読者の皆様のおかげです。ありがとうございます。

## いってらっしゃい

2020年6月24日

「あれでただの鍛冶屋は無理がある」と言うディアナとアンネのお嬢様組のブーイングをかわし、俺は身を起こした。

「だ、大丈夫か？」

　ヘレンが心配そうに言ってくる。俺はおどけた感じに肩をすくめた。

「あれで大ごとになるような、ヤワな身体はしてないよ」

　実際、ウォッチドッグに貰った何かなのか、それともたまたま当たりどころが悪かっただけなのかは分からないが、顎がほんの少し痛むだけで、あとは大したことないのだ。

　多分脳が揺れるかなんかしたんだろう。前の世界なら念のために病院へ行って、CTなりMRIなり撮ってもらっていたかも知れんが、この世界だと己の感覚を頼るほかない。うっかり開頭手術とかされたらたまったものではないし。

「それならいいんだけど」

　多少納得していない様子でヘレンが言った。俺はその頭を撫でてやる。

「心配してくれてありがとうな」

「お、おう」

　ヘレンは顔を背けたが、照れ隠しだろう。俺は苦笑すると、皆の方を向く。

「皆も、心配かけてすまん。ありがとう」

　ペコリと頭を下げると、皆から「気にするな」という意味の言葉が返ってきた。

「それで、いつ出るんだ？」

　再びヘレンに向き直り、俺はヘレンに訊ねた。

「明日には出ようと思う」

「早いな！ ……いや、こう言うのは早い方がいいか」

「うん。アタイもそう思って」

　さっきまでの不安そうな瞳とは違い、力のこもった瞳でヘレンは頷いた。

　逆にディアナが不安そうにしてヘレンに聞いた。

「大丈夫なの？」

「まぁ、エイゾウの武器と防具が揃ってるんだ、滅多なことはないさ」

「それはそうね」

　あっさりと納得するディアナ。

「おいおい、俺が作ったからって、別にドラゴンの一撃を防げたりするようなもんじゃないんだから、無茶はするなよ」

「分かってるよ」

　ヘレンは肩をすくめた。無事に戻ってきてくれたら何よりだ。

　この日の夕食は少しだけ豪華にしたが、送別会や壮行会はしない。傭兵稼業に戻るならするが、今回は単に出かけて帰ってくるだけだからな。

　本人も「遅くても１週間くらいで帰ってくる」と言っていたし。……侯爵のところの間者を借りようかな。侯爵なら事情が事情だし貸してくれるとは思うのだが。

　ここは本人を信じよう。滅多なことにはなるまい。

「友達はたくさんいるの？」

「んー。どういうのを友達というかによるけど、少なくはないかも」

「そう言えば、どういうお仕事してたのか、聞いてなかったですね」

「大体は哨戒だよ。たまにちょっとした魔物の討伐とか、探索みたいなのもあるけど」

「魔物の討伐は大きくなると軍が出てくるものねぇ」

　ディアナ、リケがいい機会だと質問を浴びせかけ、ヘレンが答えて、アンネが引き取っている。

「だなぁ。そこに呼ばれることもなくはないけど、まずないな」

「なんでだ？」

「国にもメンツってものがあるからね。万が一傭兵が大手柄立てちゃうと後々面倒なのよ」

「へぇ」

　次にヘレンの言葉に乗っかったのはサーミャだ。その疑問にはアンネが答えた。アンネはそっち方面のプロみたいなもんだからな。別に皇女の地位を奪われたわけではないし。

「面白かったこととかあるの？」

「おう、とびっきりのがある。結構前の話なんだがな……」

　こうして、俺たちはいつもの通りにワイワイと夕食の時間を過ごした。

　翌朝、街道までヘレンを見送りに行くついでに、カミロのところへ納品に行くことにしたので、荷物を荷車に積んでいく。

「数は結構出来てたんだなぁ」

「でしょう？」

　俺が感心して言うと、ディアナが胸を張る。思っていたよりも数が多い。それだけ皆の腕が上がったということだろう。

　俺も誇らしい気分になって、ディアナの頭をガシガシと撫でた。

　荷物を積み終わり、ルーシーがぴょんと荷台に飛び乗る。その後で俺たちが乗り込み、リケが手綱を操ると、クルルが嬉しそうに一声鳴いて、荷車は進み始めた。

　森の中は木漏れ日があちこちに降り注いでいる。天気はいいし、風も気持ちいい。絶好のお出かけ日和ではある。

　俺たちにとっていい日和であるということは、この森の動物たちにとっても同じである。遠くの方で鹿が低木の葉を食んでいたり、近くへうっかり飛び出してきたウサギがいて、お互いにビックリしたりした。

　普通の人たちから見れば驚くほどのんびりした時間は過ぎてゆき、やがて見慣れた街道にたどり着いた。

「それじゃ、気をつけてな」

「ああ。ありがとう」

　ヘレンが荷車からポンと飛び降りる。俺たちは街へ、彼女は都へ頭を向ける。それぞれ向かう前に、俺たちは大声でヘレンに声をかけた。

「いってらっしゃい！」

　振り返ったヘレンは、俺たちに負けず劣らずの大声と、満面の笑み、そして手を振って言った。

「いってきます！」

## 依頼人

2020年6月26日

　ヘレンと別れ、クルルの牽く竜車は一路街へ向かう。

　今日も街道は平和そのものだ。それなりに野盗が出るらしいんだが、幸いにして出くわしたことはない。

「そう言えば、帝国の治安ってどうなんだ？」

　ふと気になったので、アンネに話を向けてみる。潜入したときの感じでは特に悪いといった感じでもなかったが。

「今はともかく」

　一瞬キョトンとした顔をしたアンネだったが、すぐにそう前置きをした。あの騒ぎがあって少ししか経っていないから、多少の乱れがあるのは当たり前か。

「わたしが聞いてる限りじゃ、普段は王国と変わんないわよ。衛兵隊長たちが嘘ついてたら分かんないけど、お父様の前でそんなつまらない嘘はつかないでしょうし。都の様子も前に見た限りでは似たりよったりだったしね」

「俺が行ったときも街道で襲われたりとかはしなかったしなぁ」

「でしょ？」

　少し誇らしげになるアンネ。良く言われて悪い気がしないのは当たり前か。

「でも、どうして？」

「ヘレンとクルルの様子にもよるが、そのうち帝国や共和国に短期間だけでも物見遊山に出られればいいなと思ってね」

　アンネの疑問に俺はそう答える。ほとんどが街と森の往復で、たまに都に行くのが俺たちの主だった行動範囲である。

　作業の都合やクルルの飯の問題であんまり遠出は出来ないし、そもそも森も隅々まで探索しきってないので、そっちを先にしていこうかなとは思っているが他国の文化というものにも、もう少し触れてみたいのも確かなのだ。

「共和国ねぇ……」

　アンネが少し思案顔になる。今この竜車に乗っている中で外国のことを知っているのは、ディアナかアンネだろう。ディアナは伯爵家令嬢として、アンネは皇女として接遇の機会もあったはずである。

「なんか共和国には問題があるのか」

「いえ、あそこの貴族を私が好きでないってだけ」

「そうなのか」

「なーんか態度が鼻につくのよねぇ……」

　皇女相手にそんな態度に出られるって、共和国の貴族の胆力は相当なもんだな。

「アンネがそう言うんだったら、まずは帝国からかな」

　俺がそう言うと、再び驚いたような顔をしたアンネは微笑んで、

「そうね」

　とだけ短く返してきた。

　街に着くと、顔見知りの衛兵さんがいつもの通りに立っていて、俺たちは揃って挨拶をした。

　ワイワイと人のあふれる街を行く。見た目には完全に平和そのものだ。この裏で犯罪も起きているのだろうが、少なくとも表立って影響が出るほどの治安状態ではない。

　俺は心のなかで衛兵さんたちの仕事に敬意を払った。

　そんな平和な街中を進んで、カミロの店に着く。いつもの通り竜車を倉庫に入れて、クルルとルーシーは裏手につれていく。

　丁稚さんに２人の面倒をよろしく頼んだら、商談室へと向かった。

　勝手知ったる店の内部ではあるが、なんだか少し慌ただしい。大型注文でも入ったのだろうか。これはちょっと来るタイミングを間違えたかな。

　それでも俺たちに気を使ってくれているらしい、カミロと番頭さんはすぐにやってきた。

「すまんな、なんか忙しそうなときに来ちゃって」

「ん？　ああ。大丈夫だよ、気にすんな」

　カミロはニヤッと笑いながら髭をさすった。これはなんか隠してんな。

「用件はいつものか？」

「ああ。確認をお願いしたい。足りないのは……」

　俺が欲しいものを言うと、番頭さんが頷いて出ていった。これで今日の用事は８割がた終わったことになる。

　ここからはいつもの世間話だが、

「さっきから気になってたんだが、ヘレンはどうした？」

　と、まずカミロが切り出した。いつも一緒だったのにいなかったら気になるわな。

「仲間たちに無事を知らせたいとかで、都に行ったよ」

「なるほど。そう言えば戻ってきてから、あの日までは安心できなかったしなぁ」

　あの日とは帝国皇帝が内密にヘレンの追跡をしないと宣言した日のことである。

　そして、アンネがいることに気がついて、カミロは慌てて付け足す。

「いえ、皇女殿下に思うところはないですが」

「大丈夫ですよ。お気になさらず」

　にっこりと微笑むアンネ。その胸中を知るすべは無いが、ちょっと怖いものを感じるのは俺だけだろうか。

「まぁ、それはいいとして、ちょっと聞きたいことがあるんだが」

　冷や汗を流しながら、話を変えようとするカミロ。今回は乗っかってやるか。

「なんだ？　また大量生産か？」

「いや、そっちの依頼は今のところないな」

「忙しそうにしてるから、またぞろそう言うのがあるのかと思ったよ。大抵のことなら聞くぞ」

「まぁ、アレとも関連はあるんだが、ちょっと待ってろ」

　そう言ってカミロも部屋を出ていった。残された俺達は「一体なんだろうな」と家族でワイワイ話をする。

　カミロはそんなに時間の経たないうちに戻ってきた。

「さて、今回はぜひお前に頼みたいと、依頼人たっての希望でな」

「そう言うときはいつもの条件で受けるが」

「まぁ、とりあえず話だけでも聞いてやってくれ。それで決めてくれたらいいから」

　ここでわがままを言っても仕方ないか。俺は黙って頷いた。

「よし、じゃあ依頼人に入ってもらおう。いいぞ！」

　カミロがそう言うと、金色の髪、青い目をした優男が部屋に入ってくる。

　俺は目を見開いた。ディアナもだ。

　そう、俺とディアナがよく知る人物。マリウス・エイムールが入ってきたのだった。

## 指輪

2020年6月29日

「やあ、久しぶりだな」

　部屋に入ってきたマリウスは何事もないかのようにそう言った。いやいや。

「依頼人ってお前が？」

「そうだ」

　俺の質問にマリウスは大きく頷いた。

「この店が忙しそうなのとも関係あるって？」

「そうだな」

　再び頷くマリウス。2つを結びつけるものが見えてこない。

　俺たちが混乱しているところへ、マリウスは言葉を続ける。

「これはもっと早くに知らせておくべきだったとは思うのだが」

　マリウスは一旦そこで言葉を切った。部屋を一瞬の静寂が支配する。ディアナの鼓動の音すら聞こえてきそうだ。

「近々結婚するんだよ、俺」

「は？」

　普通に考えれば俺の第一声は「おめでとう」で然るべきなのだろうが、俺もディアナも、他の皆もどう反応して良いやら分からず、完全に時間が止まっていた。

　マリウスはそれを気にせず、まくし立てるように話し続ける。

「前々から話だけはあったんだけど、もう少し先になりそうだったんで言ってなかったんだが、ここに来て急に動き出してなぁ。それで俺もカミロも準備やら何やらで、てんてこまいさ。今日は本当はサボ……調達してもらう品の確認に来たんだよ。そしたら丁度エイゾウが納品に来たってんで都合がいいやと」

「お、おう」

　普段ならツッコんでいただろうが、今の俺はそう反応するのが精一杯だ。

「それで、エイゾウに頼みたいことってのはだ、指輪を作って欲しい」

　この世界にも指輪をする習慣というものはある。結婚指輪の習慣もだ。ここらはインストールでの知識だが。

　その指輪を俺に頼みたい、と言うことらしい。聞きたいことは山ほどあるが、話の核心はそこだ。

　指輪かぁ。鍛冶のチートが及ぶ範囲なのだろうか。少なくとも生産のほうは適用されるだろうが。それに例の「１人で森の工房まで依頼に来ること」と言う条件の話もある。

　ただ、あれは「ホイホイとんでもない品質の武器を打ってやるわけにはいかない」ので、相手が帝国の皇帝だろうとそういう条件にしているだけだ。

　装飾品をとんでもない品質、例えば戦斧でぶっ叩いても壊れないようなものを作ったところで誰が困るもんでもないし、それで世の中の何かが変わってしまうこともないだろう。

　それに今回は依頼人が依頼人である。友人の結婚祝いに何かしてやれるのなら、できればしてやりたい。

「まぁ、例の条件は武器じゃないからってことで免除するとしてだ。どういう指輪をご所望なんだ？」

　まさか鋼で作るわけにもいくまい。なんらかの貴金属だろうが、それをうまく細工できるかどうかだ。

「先方の親族が張り切っててなぁ……。指輪２つ分というほんの少しだけだが、メギスチウムを頂いてしまった」

　メギスチウム。この世界に存在する金属の１つで、普段は指で捏ねることができるほどに柔らかいが、うまく加工すれば比類なき硬さを得られる金属、である。色は金色。

　この「うまく加工すれば」が曲者で、過去に数多の鍛冶師が挑戦してきたが、指輪１つ分でも成功できた者はほとんどいない、らしい。

　それでも産出量がかなり少なく希少性があるのと、「形を自由に変えられる金」というその特性自体に物珍しさもあって、かなり高価な代物だ。価格だけを見ればこれ以上の贈り物もあるまい。

　だがしかし、である。俺は疑問をそのまま口にした。

「その親族は結婚指輪には向かないと知ってて、メギスチウムを寄越したのか？」

　そう。そんなに加工が難しいものなら普通は柔らかいままにしておく。そしてそんなものは指輪には向かない。ましてや結婚指輪である。通常なら微塵も考えないことだろう。

「それがなぁ」

　マリウスは俺の言葉を聞いて、天を仰いだ。そこには俺は見慣れている天井があるだけだが、マリウスには誰かの顔が浮かんでいるらしい。

　マリウスは大きくため息をつく。

「親族ってのはお前も知ってる侯爵閣下なんだよな」

　今度は俺がため息をつく番だった。なるほど、自意識過剰かも知れんが、俺がいるのは織り込み済みってわけか。

「なるほど、しばらくはのらりくらりするもんだと思ってたお前が結婚を決めたのはそれか」

「まぁ、大きな要因ではあるな」

　侯爵、それもかなり恩のある相手が持ち込んできて進めようとしている話に、伯爵であるマリウスが抵抗できるはずがないな。今後を考えても断る理由がないし。

「で、いつまでにいるんだ？ まさか来週とは言わんだろうな？」

「散々エイゾウに無茶は言ってきたけど、さすがにそれはないよ」

　マリウスは肩をすくめた。前の納品の時には何事もなかったわけだから、決まったのはこの２週間ほどの間ということになる。

　それでもとんでもなく急な話ではあるのだが、さすがにそこから１週間、つまり全部で３週間かそこらで全ての準備を終えろとは言われていないらしい。

「式は来月の末に行われる」

「その間に、ってことか」

　頷くマリウス。それでも2ヶ月ほどで準備せよ、と言うことだ。恐らくは侯爵側に何か急がねばならない理由が出来たんだろうな。

　その辺は王宮なりの内部事情だと思うので、俺は積極的に知ろうとは思わないが。

　俺は再び大きくため息をつく。

「仕方ない。やってやるよ」

「すまんな、ありがとう」

　差し出された友人の手を、俺はガッチリと握った。

## 若奥様は子爵家

2020年7月1日

「ちょ、ちょーーーーっと待って！」

　話がまとまろうとしていたところで、完全に止まっていたディアナの時間が動き出した。

「兄さんに聞きたいことは山程あるんだけど、とりあえず相手は誰なの？ 侯爵閣下の親類ってことだけど」

「デランジェール子爵家のジュリーだよ」

「ああ、ジュリーかぁ……。なるほどね」

　サラッと答えたマリウスに、ディアナは納得のいった顔をしている。

「知ってるのか？」

「ええ」

　俺が聞くと、ディアナが頷き、マリウスが引き取る。

「デランジェール家は古くからエイムール家と付き合いのある家でね。ジュリーはそこの長女なんだ。確か１６歳だ」

「若いな」

「エイゾウから見たらだいたい若いでしょ」

「そりゃそうだが。あれ、マリウスはいくつなんだ？」

「２３歳だよ」

「若いな！」

　自分よりも若いとは思っていたが、落ち着きようからもう少し上だと思っていた。

　いや、この世界だと２３歳はそこそこの年齢なのだろうから、年相応のほうが近いのか？

　侯爵は見たかんじ４０代後半より上のようだし、もしかするとマリウスのことを自分の子みたいに思ってるのかもなぁ。

「幾つだと思ってたんだ」

「俺より少し下くらいかなと思ってた」

「そう変わらんじゃないか？」

「いやぁ……。俺から見ると違うんだよなぁ」

　なんとなく、２０代くらいまでは３歳位刻みで違ってくるように思う。俺の中身は４０歳なので余計にそう思えるのだろうが。

「それにしても、７つ下の嫁さんかぁ……」

「貴族同士だから歳の差はあんまり関係ないよ。ディーヴァルト子爵家のとこは幾つ差だったっけ？」

「２５歳差よ」

　それを聞いて俺は自分の片眉が上がるのを自覚した。なかなかの年齢差だ。

「そうだったそうだった。それまで結婚のケの字も出てなくて、”あそこの家はどうするつもりなんだろう”と言われてたのに、４５歳で２０歳と結婚するって言い出すわ、相手は男爵家だわで、”無理やり手篭めにしたのでは”と疑いがかかったんだった」

「それはそれは……」

　周囲の疑念も多少分からんではないが、本人たちの困惑を思うといたたまれない。

「結局、宴で知り合ってお互いに恋に落ちた、ってことだったわね」

　それを聞いて、アンネが少しうっとりとして言った。

「ロマンチックねぇ」

「そうねぇ。戯曲にもなるって聞いたわよ」

　ディアナとアンネのお嬢様組は、こう言ったロマンス的なやつに目が無いのか。そのうち都でそう言う書物みたいなのがあったら買ってきてやろうかな。

「で、ジュリーは昔から本が好きで、うちにある本をしょっちゅう読みに来てたわね。兄さんにも懐いてて可愛がってたし、いいんじゃない？」

「そうだね。ジュリーじゃなかったら断ってたかも知れない」

　ディアナがニヤニヤしながら言うが、マリウスはあっさりとそれを認めた。

「あら。え、いつから？」

「それは秘密だな。割と昔からだとは言っておくけど」

「ええー。教えてよ。あ、みんなで遠乗りに出かけたときかしら？ それともシュミーダー男爵家の宴の時？」

「家に帰って存分に悩んだらいいよ」

「ケチ！」

「伯爵だからな。領地のことも考えるとケチにならざるを得ないのさ」

　マリウスはそう言って大笑する。ディアナはぶんむくれているが、これがエイムール家の兄妹の日常だったのだろう。さぞ明るい家庭だったに違いない。

　つくづく事件が悔やまれるが、アレがなければ俺もこうしてはいないわけだし、どうなることが一番良かったのかはわからない。

　俺は２人のやり取りを見て言った。

「俺としては友人が平和な家庭を持ってくれたらいいよ」

「それは俺からも言えることだぞ、エイゾウ」

「いやぁ……」

　マリウスの言わんとする事は理解できているつもりだ。今は俺にその気がまったくない、と言うだけで。

　気がつくと、マリウスだけでなく、うちの家族全員の視線が俺に突き刺さっている。

「さ、さて、やるべきことは終わったし、帰るか！」

　俺が大げさにそう言うと、周りから特大級のため息が聞こえてくるのだった。

　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　書籍版２巻の発売日が決定いたしました。7月10日(金)となります。今回も書き下ろしなどを含め、Web版をご覧の皆様にもお楽しみいただけると思いますので、是非お求めください。

　6/26より本作のフォロワー様向けに3週に渡って毎週1回、2巻発売記念のSSをメールにてお送りする予定となっております。

　第１回は既に送信済みとなりますが、後２回ありますので、よろしければ本作をフォローいただけますと幸いです。

（※こちらの告知はカクヨム運営様に問題ないことを確認済みです）

　また、コミカライズ連載がWebデンプレコミック様にて開始されることが決定いたしました。連載は今週金曜日の７/３より開始となります。

　https://denplay-comic.com/

　担当してくださるのは日森よしの先生です。

　また少し違ったエイゾウたちの物語もどうぞお楽しみに！

## 大きさ

2020年7月3日

　俺が「帰ろうぜ」と宣言した直後、リケから言葉が飛んでくる。

「親方」

「な、なんだ？」

　リケにしては珍しく割と冷たい感じの声だったので、俺は背中に冷たいものを感じながら聞いた。

「大事なことを聞き忘れてないですか」

「大事な……？」

　はて、なんだろう。大体のことは聞き終わったつもりだったが。俺が首を捻っていると、リケがため息をついた。

「指の太さが分からないと作れないですよ。マリウスさんのは今測ればいいからともかく、奥様の分もあるんでしょう？」

「あっ」

　結婚の話が衝撃的すぎてすっかり忘れていた。メギスチウムがとんでもなく硬いなら、大きめに作っておいて、後から調整すると言うのも難しかろう。

　後から調整できるなら、継ぎ目なんかが全く分からないようにする自信があるのだが。

　俺はマリウスの方を見た。ニヤニヤ笑っている。

「いつ言い出すかと思っていたが、優秀な弟子がいて良かったな、エイゾウ」

「くっ」

　すっかり頭から抜け落ちていたのは事実なので、何も言い返せない。

　俺は色々と内心に抑えつつ、マリウスに尋ねる。

「で、大きさは？」

「安心しろ、ちゃんと持ってきてある」

　ゴソゴソと懐から取り出したのは２つの指輪。大きさが違うから、大きい方がマリウスのか。

　銀色でシンプルな形状をしている。純銀かな。青く光ってないからミスリルってことは無さそうだが。

　物凄く小さな赤い宝石が

「こんな短期間では、ほとんど形式上のものでしかないが、必要ではあるからな……。入れてある宝石は最低限格好のつくものだけど、正真正銘、俺とジュリーの指輪だよ」

「じゃあこれは婚約指輪か」

　マリウスは頷く。とりあえずこれで大きさは分かるな。

「今朝までは指にしていたんだ。エイゾウが来るときにカミロから一旦は頼んでおいてもらおうと思って、ジュリーから預かったときに一緒に外したんだよ」

「なるほどね。じゃあ、大きさを写すか」

　カミロ（彼もマリウスに負けず劣らずニヤニヤしていた）に頼んで、紙と筆記具を借りて２つの指輪の大きさを写しとった。

「これでとりあえずは大丈夫かな。良かったな、マリウス」

「何がだ？」

「今日中に帰るんだろ？ すぐにまたお揃いの指輪をはめられるじゃないか」

　俺はそう言ってニヤッと笑う。せめてもの逆襲のつもりだったのだが、マリウスは顔色一つ変えずに、

「そうだな。あまり長いこと預かられても困っていた。形式上のものではあるんだが、ジュリーが気に入っててなぁ」

　と返してきた。俺は両手を上に挙げた。口から砂糖が溢れ出ている気もする。

「分かった。降参だ」

　俺の言葉で部屋に笑い声が響く。これでもう忘れたものはない。帰るとしよう。

　他に仕事がある、と言うカミロとは商談室で別れ、マリウスを伴って裏へクルルとルーシーを迎えに行き、荷車のところへ向かう。

　荷車には炭や鉄石、食糧の他に、見慣れない大きめの、金属製の箱が積まれていた。鎖でがんじがらめにされている。錠前もついていて、これも金属製だった。

「これか？」

「ああ」

「えらく厳重だな」

「そりゃ中身は貴重かつ高価だからな」

「値段は聞かないほうが良さそうだ」

　俺は苦笑し、マリウスは「違いない」と笑いながら鍵を渡してくれた。

「それじゃ、出来ていようがいまいが、２週間後に納品に来るよ」

「分かった。俺もそのときに来させてもらう」

　荷車に乗り込んだ俺達は、見送ってくれるマリウスと丁稚さんに手を振って、カミロの店を離れた。

　さて、友人がその伴侶と人生を共にするための大事な品だ。これは気合を入れてかからないといけないな。

　そんな俺の決意が伝わったのか、ただの気のせいか、クルルの歩調がいつもよりも力強いように、俺には感じられるのだった。

## 粘土のような、そうでないような

2020年7月6日

　家に帰った俺たちがまず行うのはクルルと荷車を切り離すことだ。装具を外されたクルルは若干名残惜しそうに、体をぷるぷると振るわせる。

　その足下にルーシーが近寄っていき、「わん！」と一声鳴くと、クルルは頭をそっとルーシーに擦り付け、ルーシーはパタパタと尻尾を振っていた。

　それを見て、ほんわかした気分になりながら（同時にそろそろ肩アーマーを装備することも考えながら）、荷物を荷車から下ろしていく。

　いつもの通り、ほとんど全ての品をひとまず倉庫に運び入れる。香辛料や調味料は家の方の物置に入れる。

　こっちにあった方が、台所にあるのが無くなったときに補充するのも楽だしな。

　そして、もう１つの品物。鎖でがんじがらめにしてある箱は鍛冶場に運び込んだ。

　今日もクルルのおかげで、帰ってきて荷物を運び込んでからでも、まだ昼飯ごろの時間だった。

　テラスに敷物を敷いてその上に座り、クルルやルーシーと一緒に昼飯を食べることにする。

　ワイワイとみんなで食べる昼食は楽しいものだが、そこにヘレンがいないことに一抹の寂しさを覚えてしまうのは仕方のないことだろうか。

　彼女の場合、今回はともかく、いずれは傭兵稼業に戻ることも十分にあり得るのだから、こういうことには今のうちに慣れておいたほうがいいのだろうな。

　そんな俺を気遣ってくれたのか、今日は珍しくルーシーが俺の膝の上にちょこんと座り、肉を食わせろと催促してきた。

「よしよし、お前は優しいな」

　俺が味付けも何もしてない肉をやって頭を撫でると、ルーシーはご機嫌に尻尾を振った。俺に子供ができたら、こんな感じなのかね。

　……今のところ、その予定もつもりもないが。

　それを見たのか、クルルも外から頭を突っ込んできたので、撫でてやる。

「クルルル」

　喉を鳴らすように鳴いて、顔をペロリと舐められた。

「こら、くすぐったいぞ」

　本当にうちの娘たちはいい子だな。気がつくと、みんなが俺の方を優しい目で見ていたので、俺は照れ隠しに自分のスープを口に運んだ。

「さて、それじゃあ見てみますかね」

　昼食が終わり、俺たちは鍛冶場に集まっていた。いつもなら、この時間は各々好きなことをする時間だ。

　しかし、今日はいつもと違うものがある。鎖でがんじがらめにした箱だ。

　俺はマリウスから預かった鍵を錠前に差し込むと、そのまま捻る。

　ガチャリ、と音がして錠前が外れた。この錠前自体にも興味はあるが、それよりも今は箱の中身である。

　そっと箱を開けると、中には綿のようなものに包まれた小さな革袋が入っている。

　なんとなく恭しく手に取ると、なかなかにズッシリとした手応えを感じた。

　そして、中をあらためる……前に一度、神棚に置いて柏手を打っておいた。祈るのはもちろん、今後の作業の成功と無事である。

　みんなが見つめる中、革袋の物を取り出す。金色の塊が姿を現した。重さ的にも普通の金塊のように見える。

「どれ」

　金床にそっと置いて指で押してみると、若干の抵抗はあるものの、指の形にぐにっと凹む。確か純金だと爪で傷がつくくらい、だったか。それと比べれば相当に柔らかいようだ。

　だとすると金以上の展延性があるんじゃなかろうか。金は１グラムで３キロメートル近くまで伸ばせるらしいし。

　手に持ってギュッと握ってみると、手の内側の型が取れてしまった。使いみちはまったくないが。

　こうやってみると完全に粘土なのだが、感触はひんやり滑らかな金属のそれである。違和感が半端ない。

　今時点での硬さを把握したので、希望者に触らせる。まぁ、つまりは全員だ。

「こんな粘土みたいなのが、本当に硬くなんのか」

　手でこねくり回して形を変えながら、サーミャが言った。その疑問は当然だろう。

「硬く出来たことはあるって言うからなぁ……」

　普通の金でも加熱によって多少硬くすることは出来る……らしい。

　が、これはそんなレベルでなく硬くできるらしいので、単に加熱するだけではないのだろうな。

　そんな簡単なことなら、どこの鍛冶屋でもできる技術になっているはずだ。普通鍛冶屋が真っ先に試みるのは、加熱してみること、なのだから。

「魔力はこもってないんですね」

　こちらはあまりこねくり回さず、色んな方向から観察しているリケが呟く。

　その横からリディも眺めてフンフンと頷いているから、魔力がこもっていないのは確かなようだ。

「だとすると、硬くするための工程には魔力が関わってきそうだな」

「それが数少ない人？」

「かもな」

　ディアナの疑問に俺は頷いた。加工に携わったのが魔力をこめることのできる鍛冶屋だったとすると、何人かは成功していることともある程度は辻褄が合う。

　この世界で俺だけが魔力をこめることが出来るわけではない。実際にリケもリディに手ほどきを受けて多少なら出来るようになってきているし、使用目的上、エルフの宝剣にはその技術が必須なのだ。

「もしそれなら楽なんだけどなぁ……」

　魔力をこめれば硬くなってハイおしまい、なのであれば、俺なら楽勝である。ガンガンに魔力をこめてやるだけで終わりだ。

　やったことはないが、チートを使えば魔力を抜くことも可能なのではなかろうか。それならば、まさに自由自在に扱えることになる。

「でも、それならもう少し成功例が多くても良さそうなものよね」

「そうなんだよなぁ……」

　アンネの言葉に俺は首をひねった。魔力をこめることができる鍛冶屋の数は多くはなかろうが、それにしてはメギスチウムの加工に成功している数が少なすぎる。

　それなら当然、魔力以外のなにかが関わっていると考えるのが普通だろう。それが何かはさっぱり分からんが。

「今日のところは置いといて、明日から色々試してみるか」

　俺がそう言うと、リケからは期待の、他のみんなからは了解の声が上がって、俺はメギスチウムを神棚に安置し、みんなが出ていったことを確認すると、鍛冶場の扉を閉めた。

　閉める寸前、俺の目にはメギスチウムがほんのり輝いているように見えたのだった。

## メギスチウム

2020年7月8日

　朝食の後、朝の打ち合わせを終えて、俺たちは神棚の前に並んでいた。神棚には金色に輝く物体が鎮座している。

　俺たちはそれらに向かって二礼二拍手一礼をした。

　俺は今日からこのメギスチウムの加工に取り掛かる。

　他のみんなはと言うと、いつも通りにまず板金を作っておいてもらう。リケだけは見学……ではなく、メギスチウムを硬くする方法について、俺と一緒に考えてもらうことにした。

　今のところ、皆目見当がつかんからな。

　魔法を使って炉と火床に火を入れる。速やかに温度が上がっていき、それにつれて部屋の温度も上がってきた。

「そう言えば、そろそろ夏か」

　俺は開け放った窓から外を見ながらそう言った。心なしか風も若干熱気をはらんでいるように思える。

　元々この森の住人であるサーミャと、この森ではないが近くの都に住んでいたディアナが言う。

「そうだなぁ。雨季も終わったし、そろそろ暑くなってくるな」

「都の方はそこまで暑くはなかったけど、ここは暑いのかしら」

「アタシは都の方を知らないからな」

「それもそっか。ま、なるようになるでしょ」

　そう言ってディアナが肩をすくめた。涼感素材のシーツや、扇風機にエアコンと言った文明の利器をフル活用して凌いでいた俺には少し気が重いが、そこは仕方あるまい。

　……氷のブレスを吐くドラゴンとか飼えないかな。

　そんなしょうもない考えを頭を振って追い出し、俺はメギスチウムに集中することにした。

「まずは魔力を込めてみるか」

「そうですね。それでどこまで硬くなるのか見てみましょう」

　俺の言葉にリケが頷いた。粘土のような柔らかさのメギスチウムなので、指で引きちぎろうかとも思ったが、一応タガネで小片を切り分けた。

　まずはこの小片で実験である。いつも鋼にするように魔力をこめて鎚を振り下ろす。

　タガネで切ったときにはしなかった、グニッともガキンともつかない音と感触が鎚を通じて返ってきた。柔らかいのか硬いのかも曖昧だ。

　そう、一言で言うならば、

「気持ち悪い……」

　なんとも言えない感触過ぎて違和感しかない。柔らかいなら柔らかい、硬いなら硬いのどっちかの感触が返ってきて欲しい。

　この状態だと展延性が高いのか、ペラっとした金色の小さなシートができる。俺はそっと指で摘んで手のひらにのせた。

　手のメギスチウムを目を凝らして見つめてみる。これは……。

「魔力がこもってない……？」

　魔力は俺の目にはキラキラした光の粒というか、そんなような感じのものに見えている。

　このメギスチウムのシートにはそれがない。

「リケは見えるか？」

「私にも見えないですね……」

　リケも手のひらのメギスチウムを見て首を横に振る。ふーむ。だとすると俺の見間違いとかではなさそうだ。

　一応、その道の専門家にも聞いてみるか。

「リディ、ちょっといいか」

　俺が呼ぶと、すぐに手を止めてリディが小走りで駆け寄ってくる。

「作業してるところにすまんな」

「いえ、大丈夫です。何かありましたか？」

「これなんだがな」

　俺はメギスチウムの乗った手を差し出した。リディの目がスッと細められる。

「これは魔力がこもってないですね」

「やっぱりそうかぁ」

「エイゾウさんに限ってとは思いますが、こめ忘れたとかは？」

「まさか」

「ですよね」

　俺は一旦メギスチウムをリケに預けると、適当な板金を魔力がこもるように鎚で叩いた。

　叩いた辺りにキラキラしたものが少しだけきらめいているように見える。少しなのは加熱してないからだろう。しかし、確認にはこれで十分だ。

　叩いた板金をリディに見せる。

「どうだ？」

「こもってますね」

「だよなぁ……」

　そして、リディは作業に戻り、俺は首をひねる。ミスリルでもアポイタカラでも、”こもりにくさ”のようなものはあったが、普通に魔力をこめること自体は不可能ではなかった。

　メギスチウムは違う。全く魔力がこもっていないのだ。

　しかし、である。俺は預けたメギスチウムをためつすがめつしているリケに話しかける。

「魔力がこもらなくて柔らかいままなんだとしたら、こいつに魔力をこめることさえできれば、硬くなるんじゃないだろうか」

「なるほど」

「まぁ、その方法が今は分からんのだが」

「ですね……」

　２人して顔を見合わせ、ため息をついた。だが、考えようによっては、

「歯ごたえのある作業になりそうだな」

　そう言えなくもない。思わず顔が緩んでいたのだろう、リケが呆れたような、感心したような様子で言う。

「親方、楽しそうですね」

「こう言うのを乗り越えてなんぼだからな」

「確かに」

　今度はため息はつかなかった。その代わりに笑みを浮かべる。

　絶対にこのメギスチウムをものにしてやる。そんな決意を秘めながら。

## 成功の端緒

2020年7月10日

「さてさて、まずはどうするかな」

　詰まったときに思わずでる独り言は、前の世界からの癖だ。なんとなくこうした方がうまく物事が解決するように思うのだ。

　ゴム製のアヒルちゃんに説明することで、問題点を把握するラバーダック・デバッグに近いかもしれない。

「加熱してみます？」

「そうだなぁ。試してみる価値はありそうだ」

　俺はひとまず、リケの提案に乗ってみることにした。溶け落ちたりすると困るので、小さな”るつぼ”に入れてから、るつぼをやっとこで掴んで火床にかざす。

　火床の熱が十分にるつぼ、そしてメギスチウムに伝わった事を確認したら、金床の上でるつぼをひっくり返した。

　もしかすると、どろりとメギスチウムが垂れてくるかもと思ったが、その予想とは異なり、熱する前と全く変わらない硬さで、メギスチウムはコロリと金床の上に転がり出てきた。

「柔らかくもなりたくないのか、こいつは……」

　硬くも柔らかくもなりたくないとは、随分とわがままなやつだな。

　ともかく、温度が下がらないうちにやってみよう。鎚を振り下ろすと、変わらず中途半端な感触が返ってくる。

「この調子だと変わらんかもなぁ」

　メギスチウムは叩くたびに形を変える。数度叩いたが感触が変わる様子は全くない。

　念のために温度が下がるまで叩き続けてみたが、その間、返ってくる感触は全く同じだった。触ってみると、グニグニと形を変える。やっぱり駄目か。

「うーん。熱して駄目なら、冷やすか？」

「冷やす……ですか？」

「流水にしばらく晒すとか、濡れた布に包んで振り回すとか……」

「流水はわかりますが、濡れた布で冷えるんですか？」

「うん」

　濡れた布を固く絞って勢いよく振り回すと、気化熱で温度が多少は下がる。キンキンに冷えるとまではいかなくても、試す程度なら十分だろう。

　その状態でほんのわずかでも魔力が入ってくれるなら、改めて温度を下げる方法を考えるか、あるいはほんの少しずつ魔力を込めていくかだ。

　適当な布を水で濡らして固く絞り、それでメギスチウムを包んだものを振り回す。万が一包んだメギスチウムがすっ飛んでいったら危ないので、もちろん外で行う。

　ブンブンと音がするくらいに振り回していると、飛ばしてみたい衝動に駆られるが我慢だ。

「弓以外の投射武器があってもいいかもなぁ……」

　弓もいいのだが矢がないと駄目だし、何よりある程度の技術が必要だ。うちの家族はリケを除いて弓の扱いができるので忘れがちだが。

　逆に言えば、うちに限って言えば弓以外を作っても使うのはリケくらいなもの、という話でもある。

　とはいえ、あって困るもんでもないのも確かだし、この辺が片付いたら考えてみるか……。

　そんなことを考えながら、俺は布を振り回し続けた。

「ちょっと冷たい……か？」

「ひんやりしている気もしますね」

　突っついてみると、柔らかい感触とともに若干の冷たさを感じる。

「温度が上がらないうちにやっちまおう」

「はい！」

　慌てて鍛冶場に戻り、メギスチウムを金床に置いて鎚で叩く。相変わらずの感触。

　今度は温度が上がってくるまで叩き続けた。

「……ダメか……」

「なにがきっかけなんでしょうねぇ……」

　俺は手の中の柔らかいものをこねくり回しながら、リケと一緒に首を捻った。

　とりあえず今ここで出来そうなことは、これくらいのように思える。

　となると、何か特殊な手順を踏む必要がある、と言うことだろうか。急冷、もしくは急熱とか。

「とりあえず、昼飯にするか……」

「そうですね」

　こうして、昼飯の準備をして食事を始めたが、俺の頭の中はいかにしてメギスチウムに魔力をこめるのか、ということだけが占めている。

　飯を口に運びながらも、うんうんと考え込んでいると、呆れたような……いや、実際呆れ返っているのだろう、ディアナの声が飛んでくる。

「エイゾウってば、こう言うことになると本当に職人ねぇ」

「ん？　ああ、すまん、なんか話してたか？」

「いいえ。でも心ここにあらずなのは誰が見てもわかるしね」

　ディアナの言葉に、家族の全員がうんうんと頷く。

「まぁ、友達の結婚に関わるものだしなぁ。きっちりやってやりたいじゃないか」

　俺がそう言うと、なぜかディアナの顔が赤くなる。実の兄の結婚のことだし、気になっているのだろう。

　飯を口に入れたまま、サーミャが言う。

「で、なんか分かったのか？」

「分かった、と言うかなんと言うか……。普通のやり方では無理だと言うのが分かった、ってあたりだな」

「サーミャ、お行儀が悪いわよ」

　アンネがサーミャに注意をする。この辺りの指導はリケからディアナ、そしてアンネに役割を移しているらしい。指導する側の位が一般人から貴族令嬢、そして皇女と上がっている。

　そのうち王宮の舞踏会に出られるレベルになってしまうのだろうか。

「要は、分からないということが分かった、ってことだな」

「……そっか」

　アンネの指導を容れて、口の中のものを飲み込んでからサーミャは頷いた。

「なんかきっかけでもあればなぁ……」

　俺は木製のスプーンをくわえていった。

「エイゾウも行儀が悪いわよ」

「おっと」

　俺もアンネに注意されてスプーンを口から取り出す。代わりに、ではないが俺は腕を組んだ。

「そう言えば」

　思わずだろう、口に出た言葉にみんなが注目する。口に出したのはディアナだ。注目されて赤面している。

「どうした？」

「魔力って、何かから移せないのかな？ 今はこの森に漂っているのを、エイゾウがこめてるんでしょ？ だったら、エイゾウが鋼か何かにこめた魔力を移すことってできないの？」

「ふむ……」

　魔力を移す、と言うことはこれまで一度も試したことはなかった。そんな発想がなかったからだ。今まで魔力をこめようと思って作業したら、こもっていたからな。

　もしそれが出来れば、普通の武器でも魔力を移して強化することができるかも知れない。

「試してみる価値はありそうだ」

　俺がそう言うと、ディアナは嬉しそうな顔をする。

　善は急げとばかりに、俺たちはサッサと昼飯を切り上げて、再び鍛冶場に戻った。

「よし、じゃあやってみるぞ」

　俺は魔力をこめた板金を金床の上に置いたメギスチウムに重ねる。そして、その上から鎚を振り下ろす。板金から弾き出された魔力が移るイメージをしながらだ。

　ガキンと音がして、硬い感触が返ってくるが、これは板金のものだ。メギスチウムのものではない。

　数回鎚を振り下ろして、板金を取り除ける。平らになった金色の物体がそこにはある。

　じっと金色に目を凝らす。俺は思わずリディの方を見た。

　リディも同じだったのだろう、ちょうど俺の方を見ていて、そして頷いた。

「わずかだが、入ってる」

　俺は呟いた。おずおずとディアナが声をかけてきた。

「ということは……」

「ああ」

　俺は大きく頷いて言った。

「成功だ」

　その瞬間、わっと炉や火床の熱以上の熱気が鍛冶場を包んだ。

## 円環

2020年7月13日

　魔力をこめる方法は判明した。あともう１つをクリアすればそれに沿って進めるだけである。

　そう、「本当に魔力がこもればメギスチウムは硬くなるのか？」という一番大事なことがまだ解決していない。

　さっき入った魔力の量は微々たるものだ。シート状になってしまったメギスチウムを捏ねてみると、すんなりと小さな塊に姿を変えてしまった。

　この程度の魔力では硬さが変わったのか、分かるほどではないということだ。

　だが、魔力で硬くなることが分かれば、あとは時間がかかっても、それを実直にこなしていくだけである。

　これで端緒は掴めた。俺はきっかけになったディアナに礼を言う。

「ありがとうな、ディアナ。よく気がついてくれた」

「これくらいならお安い御用よ」

　ディアナはパチリとウィンクをした。マリウスもそうだったが、美男美女のウィンクって様になるんだなぁ。

「さてさて、この量でどれくらい必要になってくるかね」

「大量だと困りますね」

　リケの言葉に俺は頷く。例えば一度の作業で１ずつしか入っていかないが、硬くするには１００必要、とか言われたら大変に辛いものがある。

　まぁ、それでもやるしかないのだ。丸めたメギスチウムを金床に置くと、上から魔力をこめた板金を置いて、鎚を振り下ろした。

　メギスチウムに魔力を移している間、リケには魔力をこめた板金を用意してもらうことにした。

　板金に魔力をこめつつ、魔力を板金からメギスチウムに移すことができないかと、何度か試してみたのだが、チートをもってしてもどちらかしかできないようなのだ。

　そこで電池に充電するがごとく、魔力のこもった板金をリケに用意してもらうというわけである。

「すまんな」

「前にも言いましたけど弟子の役割の１つは、こうやって親方が使うものを準備することですからね。親方はなんでもかんでも自分でやりすぎなんですよ。ご自分でしかできないことも多いから、そのあたりはしょうがないですけど」

　リケがやや芝居がかった怒り方でそう言うと、聞いていたらしい皆がウンウンと頷く。

　俺としては、この実力の殆どがチートであると自覚しているから、自分でできることは自分でやんなきゃなと意識しているだけであるのだが、どうも家族にはそれが不満であるらしい。

　朝の日課である水汲みは、クルルとルーシーとの触れ合いの時間でもあるから譲れないが、その他の作業で任せても問題なさそうなところは、俺ができなくなってしまわない範囲で任せていこうかなぁ……。

　そんな事を考えつつ、ひたすらメギスチウムに魔力を移していく。リケが板金にこめられる魔力は俺とは比べるべくもないが、加熱などの手順を踏まない分、数をこなせばいいだけなのだ。

　俺が魔力をこめた板金との違いは板金を取り替える回数くらいでしかない。

　自分の板金を使いおわり、リケが作ってくれた魔力入りの板金で魔力を移しはじめてしばらくしてのことだ。

　鎚を振り下ろすと、それまでずっと聞こえていた「キン」という音の他に、小さく「コン」という音が交じった。鎚を振り下ろしたときの手応えもほんのわずか違っている。

　俺は試しに板金の下のメギスチウムを指でこねてみた。ほんの僅かだが、硬くなっているように感じる。

　でも、まだ気の所為のレベルを大きく逸脱はしていない。俺でもチートがあるからわかっているだけの気もするので、まとめたメギスチウムを再び板金の下に追いやり、叩いていく。

　そうすると、先程聞こえた「コン」という音は、少しずつその存在感を増していく。もはや聞き違いではないし、「コン」というよりも「フォン」と、グラス・ハープのような音に変わっていっている。

　更に叩いて、板金を叩いたときの反動が鋼だけのものではないと、完全に確信できるようになったので、平らになったメギスチウムを指先で捏ねてみる。

　グッと確実な手応えが返ってくる。魔力のこもっていないメギスチウムの硬さが捏ねて柔らかくした紙粘土だとすると、これは練る前の土粘土だ。

　それなりに硬さはあるものの、容易に傷がついてしまうし、手で簡単に形を変えられる。

　俺は気がつけばすっかり橙色に染まっている陽の光に、硬くなったメギスチウムをかざし、目を凝らした。

　これで限界量まで魔力が入っているとしたら、俺が加工できるメギスチウムの硬度の上限はここということになる。

　そうなると、今度はここから硬くする手法を探さねばならない。ちょっとそれは面倒が過ぎるというものだが、それくらいの覚悟もまぁ必要ではあろう。

　西日によって橙色をまとった金色の塊には、キラキラとしたものがまとわりついている。これならまだまだ入るはずだ。

「リケ、リディ」

　俺は２人を呼んだ。俺の見ているものが正しいのかを確認するためだ。

「リディ、魔力をみてくれ」

　俺の横からかざしているメギスチウムをリディが見つめ、やがて頷いた。

「なかなかの量が入ってると思います。でも、限界じゃないですね」

「わかった。ありがとう。リケはちょっと硬さをみてくれ」

「はい」

　俺から恭しくメギスチウムの小さな塊を受け取ったリケは、その小さくもしっかりした指先でメギスチウムを捏ねている。

　グッグッとドワーフの力と繊細さで、リケはメギスチウムの小さな八面体を作り上げた。

「確かにこれは硬くなってますね。このまま指輪にするのははばかられますが、形を作るならこれくらいからでもいいんじゃないでしょうか」

「そうか。ありがとう」

　これなら、後は魔力をひたすらこめる作業をすればいい。最後の問題は……。

「円環を作りつつ、魔力をこめる方法だな」

　俺が言うと、リケとリディが大きく頷く。でも、俺達の間には悲観的なものはもう何一つ残ってはいなかった。

## お祝い

2020年7月15日

　１日目の滑り出しとしては順調なのではなかろうか。少なくともこの先、どう作業していけばいいかの目処はついたのだから、上々と言えるだろう。

　１週間近くウンウン唸って、ああでもないこうでもないと試行錯誤するのも悪くはないが、それはあくまで自分のための作業の時だけに限った話だ。

　今回のように頼まれものの場合は、早くに解決策を見つけるに越したことはない。

　最後の最後でよく分からないことが起こって、それで間に合わないなんてことになったら目も当てられないからな。

　ましてや今回は友人の結婚指輪なのだ。万が一にも遅れるようなことがあってはならない。

　結婚式に結婚指輪が間に合わない、なんてどう考えてもマズい。いや、マリウス自身は笑って許してくれるかも知れないが、貴族連中の集まる場でそんな事態になれば、マリウスの今後の立場が全くなくなってしまう。

　そのあたりが分かっていないマリウスではないし、そこは俺に対する信頼のあらわれなんだろうな、きっと。

　もし違っていても、俺がそう思っていればいいのだ。

　その日の夕食はいつも通りに焼いた肉とスープと無発酵パンという構成にした。

　祝杯にはまだちょっと早いからな。肉の味付けをベリーとワインでちょっと凝ったものにしたのが若干のお祝いみたいなものである。

「そう言えば」

　俺はふと思いついたことがあったので口に出した。みんなの目が俺に集まる。

「俺たちからお祝いの品とかって用意しなくていいものなのか？」

「そうねぇ……。普通は用意するわね」

「だよな」

　なんでもないことのようにディアナが答えて、俺は頷いた。式に招かれるかどうかはさておいたとしても、友人が結婚するんだから贈り物を用意するのはおかしくなかろう。

　一応、今回は指輪を作るのも祝いのうちではあるのだが、材料は依頼主の持ち出しだからなぁ。

　手間賃がご祝儀と言うのもアリかも知れないが、なんとなし寂しさがある。

　なるべくなら何か形のあるものを贈りたいものだ。

「兄さんがどう言う立場で貴方を式に招くか、あるいは招かないかねぇ」

「招かれない可能性は普通にあるよな」

「そうね。少なくとも身分の上では、ただの鍛冶屋ですもの。兄さんもジュリーもそんなことは全く気にしないでしょうけど、貴族社会がそれを許すかは別だから」

「まぁ、招かれなくても、お嫁さんに呪いをかけにいく気はないけどな」

「なぁに、それ？」

「そういう物語があるのさ」

　あれは姫様の誕生のお祝いだったか。俺はその話をかいつまんでした。一番穏当なグリム兄弟のバージョンをだ。

　この世界では実際に魔法が使える人間が存在するのもあってか、若干のリアリティを持って受け止められたようである。

「呼ばれなかった側の気持ちが少し分かっちゃうのが悔しいわ。流石に呪おうとまでは思わないけど」

　俺が話し終わった後、ややげっそりした感じでアンネが言った。この世界で魔法扱えるということは、いっぱしの教養を持つ貴族階級であることが多い。

　で、そういった階級の人々にとって、祝い事に呼ばれないというのはメンツに関わってくる話なのだ。

　本来呼ぶべき場面で、帝室の人間をハブろうという肝の据わった貴族がそうそういるとは思えないが、そんな人間がいたとしたら帝室の権威が失墜したとみなす者が出てくるだろう。

　そうなれば統治にも影響が出る。なので、アンネのような立場としては呼ばれなかったことを問題視しないわけにはいかないのだ。

　今回のように他国の伯爵の結婚式、なんて場合はともかく。

「アンネが本当に呪おうとしたら止めてやるから、安心しろ」

　俺は茶化すように笑いながらアンネに言った。こういうのは笑い飛ばして深刻にならない方に流してしまおう。アンネは小さいながらもしっかりと頷いた。

「しかし、祝いの品か……この森でお祝い事に持っていくものって何なんだ？」

　今度はサーミャに聞いてみる。肉を頬張っていたサーミャは、ちゃんとそれを飲み込んでから答えた。

「大体は肉かな。酒造りがうまいやつは”とっておき”を持ってきたりするけど。皆でそう言うのを持ち寄って、一夜のうちに全部食っちまう」

「へぇ。楽しそうだな」

「爺さんが付き合いがあるとこについてった事があるけど、まぁまぁ楽しかった」

　盛大に焚き火を焚いてそこで肉を焼いたり、あるいは焚き火の周りで騒いだりするんだろうな。それはそれで楽しそうだ。

「うちっぽくはあるんだが、肉を持っていくわけにはいかんだろうな」

「遊びに行くときはともかくね」

　ディアナが頷きながら言う。

「手土産としては問題ないのか」

「うちにもどこぞの森で捕らえたとか言う、なんとかって鹿の肉を持ってくるのはいたわよ」

「ほほう」

　俺の質問にはアンネが答えてくれた。皇帝のところに持っていっていいなら、手土産になら大丈夫なんだな。

　今のところ、うちで消費していってるが、余りそうなら多少はカミロやマリウスのところに持っていってやるか。

「肉はともかく、うちらしいもの……うちで、となると……」

「うちでしか作れないものでしょうね」

「ああ、じゃあ決まりだな」

　リケの言葉で俺はひらめいた。うちから贈るものと言えば、もう決まりじゃないか。

　首をひねる皆に「出来るまで秘密」とだけ言い残し、俺は夕食の残りを片付けにかかった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　書籍版２巻が好評発売中です。店頭などでは売り切れているところも増えていると仄聞しておりますので、見かけられましたらお早めにご購入いただけると嬉しいです。

　一部店舗様では特典もあります。詳しくはカドカワBOOKS様のサイトにてご確認ください。

## 形作るもの

2020年7月17日

　翌朝、クルルとルーシーと朝の散歩を兼ねた水汲みに行った後、みんなが朝の準備をするのを横目に、朝飯の準備をしながら考える。それは、

　”なぜ、あの方法がチートでは分からなかったのか？”

　ということだ。板金に鎚を振るうとき、どこをどう叩けばいいかは“わかる”。

　それはチートによるものであるが、メギスチウムに魔力をどう込めればいいか、については分からなかったのだ。

　もしかするとチートが消えてしまったのかとも考えたが、朝飯を準備する前にそれを思いついたので、少しだけ鍛冶場に入ってみたが、やはり板金を見てどう加工すれば良さそうかはひらめくことができた。

　つまり、チートが消えてしまったのではない、ということだ。

　だとすると他の要因、例えば直接加工するものでないと全てのチートが働かないか、もしくは生産のチートのほうになってしまうか。

　生産の方はそこらの職人には負けない、といったレベルでしかない。料理でサンドロのおやっさんと勝負したら、きっと俺はボロ負けするだろう。

　勝負の後、「一から叩き込んでやる！」と怒鳴るおやっさんの姿が思い浮かぶようである。

　ともあれ、そっちになってしまうのであれば、メギスチウムのような場合に思いつかないのも仕方ないのかも知れない。

　一度何かで適用条件を調べる時間を取ったほうがいいかも知れないな。チートの話は家族にも内緒なので、他の作業と並行してにはなるが。

　朝飯を終えて、神棚への拝礼を済ませたら、炉と火床に火を入れてエイゾウ工房の操業を開始した。

　今日はリケにはナイフとロングソードの生産を頼んである。他の皆はロングソードの”素”づくりだ。型を作る組と、鉄を流す組に分かれての作業になる。

　俺はもちろんメギスチウムの加工だ。まず最初に板金を取ってきて、金床の上で魔力をこめていく。

　キラキラした何かがドンドンと板金にこめられていく。こうするためにはどうしたらいいのかが”分かる”。ちゃんとチートが働いている証拠だ。やはり根本からチートが失われたわけではないらしい。

　こうしてハッキリと確認できると安心できるな。俺は一旦不安と疑問を頭の中から追いやって、板金に魔力を込める作業に没頭した。

　５枚ほどの板金に魔力をこめた。心なしこもっている量が少し多いような気がするが、多くて困ることもなかろう。

　なので、今のところは気にしないことにして、昨日までにさんざんいじりたおした、ちょっとだけ硬いメギスチウムを、３分の２弱くらいに切り分けたまだ柔らかいのと

　混ぜ合わせる。

　魔力がこもっているとは言え同じ素材だし、叩くことで魔力を板金から移すことが出来るのであれば、メギスチウム同士でもできるだろうと、鎚で叩いて薄くなったら折り返すことを繰り返すと、やがて全体に少しだけ魔力の入ったメギスチウムの塊ができた。

　このとき、どこを叩けばいいのかが何となく分かったので、やはり直接素材を加工する場合にしか有効でない可能性が高い。

　そうでない素材がどれくらいあるのかは疑問だが、異世界だからなぁ……。

　例えばオリハルコンやアダマンタイト、あるいはヒヒイロカネの加工も、メギスチウムと同じように何かを介してでないとダメだった場合は、それだけでも相当に骨が折れる作業になる。

　メギスチウムの場合は鋼の板金でも良かったが、オリハルコンはミスリルでないといけない、とかだったらまず魔力を移せる素材の選定からになってしまうし。

　今はそうではないことを祈るのみだが、どこかでカミロに入手を依頼しておくのがいいんだろうな……。幸いにして金はあるし。

　とりあえず今はメギスチウムだ。

「さーて、ここからが本番だぞ」

　俺は軽く頬を張って気持ちを切り替えると、メギスチウムの上に板金を置いて鎚を振り下ろす。

　ガキンと言う音と手応え、そして鋼から魔力が抜けていくのが視える。これを幾度も繰り返し、まずは加工するのに困らない程度の硬さを目指す。

　シート状にまで広がってしまったメギスチウムをまとめて再び叩いていると、リケがナイフを打っているのだろう、リズミカルな鎚の音が俺の鎚の音に交じる。

　俺とリケの無骨な音の合奏は、昼飯になるまで、ずっと続くのだった。

## 文様

2020年7月20日

　昼食を終えて再び作業にとりかかるが、俺はまだメギスチウムに魔力を移していく作業だ。

　元々叩く作業にはチートが効いていたが、コツが掴めてきたのか、ちょっとだけスムーズになってきているように思える。

　魔力が抜けきった鋼の板金にはキラキラしたもの――魔力が全く含まれておらず、なんだか物悲しい。色がくすんでいるようにすら感じる。

　まぁ、そんなことはまったくないんだが。

　時間をかけて２枚分ほどの魔力をメギスチウムに移し終わった。実験のときの感じで言えば、結構硬くなっているはずである。

　シート状に平べったくなったメギスチウムを手に取り、指で捏ねてみると重い手応えが返ってきた。硬くなっていて練りづらい。

　少しだけ苦労して１つの塊にしてやる。グッと力を入れて少し形が変わるかなといった具合だ。ミルクキャラメルと同じくらいだろうか。この世界にミルクキャラメルはまだないので確かめようがないが。

　これ以上硬くしてしまうと加工に苦労してしまうな。これくらいの間に形だけは作ってしまうか。

　指輪の大きさを写し取った紙を家の方から取ってくる。これに形を合わせるわけだが……。

「もう少し、柔らかいうちにしとけば良かったな」

　思ったより硬くなっていて、丸めてから円柱状にし、真ん中に穴を作るまででも結構な時間がかかってしまった。

　スムーズに行くので、調子に乗って魔力をこめすぎた。奥さんのを作るときは板金１枚ちょいくらいで抑えよう……。

　前の世界で、焼くと銀になる銀粘土というものでちょっとした指輪を作ったことがあるが、ちょうどそれの焼く前のような感じのものが出来上がった。この状態ではまだ未完成と言うのも同じだな。

　そうしてできた未完成の指輪を眺めていて、ふと気がつく。

「あー、そう言えば……。ディアナ！ アンネ！」

　俺は直ぐ側でロングソードのバリを取る作業をしていたディアナとアンネを呼んだ。２人とも鎚を持つ姿が少し様になってきている。

「なぁに？」

　ディアナとアンネが鎚を置いて俺のところまでやってきた。

「すまんな、作業中に。いやな、結婚指輪の装飾ってなにか決まり事があるのかを知りたくて。特に貴族のものだろう？ しきたりを守ってなくて普段つけられないなんてことになったら、目も当てられないからな」

　銀粘土も焼く前に大まかなデザインは作ってしまう。焼いて銀になったあとにするよりも加工しやすいからだ。

　メギスチウムもそれと同じで、とんでもない硬度を発揮してしまう前に加工はしてしまわないと面倒だ。

「うーん、私は聞いたことないわね。アンネはどう？」

　おとがいに手を当ててディアナが答えた。王国の伯爵家あたりでは特にない……と思いたいが、ディアナなので単にそのあたりのことは聞いてなかったと言う可能性もある。自分からアンネにも聞いてくれて内心ホッとした。

　ここらを指摘すると肩ではなく最悪腹に良いパンチが飛び込んで来そうなので、おくびにも出さないが。

「帝国でも聞いたことないわね。あんまり派手すぎるとよろしくない、みたいなのはあるけど、あれもそんな豪奢にしてしまうと普段着けづらいってだけだしね」

『なるほど』

　ほほう、と俺とディアナの２人で頷く。特にデザインに制約はないのか。

　とは言っても、死を連想させるような不吉なモチーフとかは流石に駄目なんだろうが。

　普段着けづらいデザインもダメ、となるとこうアーマーリング的なものはダメだろうな。

　メギスチウムの硬度を活かすにはある意味ベストな選択ではあるんだろうし、ファッションとしてはダメではないんだろうが、婚約指輪に向いてるかと言うと真逆すぎる。

　俺はイケメンと美少女の夫婦が普段からアーマーリングを左手薬指にしている様を思い浮かべてしまい、思わず苦笑が漏れる。

　想像の中では服装もあって若干似合ってなくはないが、元地球人の俺から見ると、ちょっと中二がすぎる気がするなぁ。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。俺の下らん妄想があんまり酷かったもんでな」

「ええー、どんなのよ？」

　ディアナの追求に俺は正直に答えた。

「篭手の指部分だけの指輪だと、メギスチウムの硬度を活かせるなって」

「それは流石に……」

「だろ？」

　当然という顔をしながらも、俺は内心でホッと胸をなでおろす。「いいわね、それ！ やってみましょうよ！」とか言われたら、どうしようかと思った。

　アンネも首を横に振っているし、俺の下らない妄想はそのまま下らないものとして幕を下ろした。

「んー、じゃあ無地か、悪いことから守ってくれるような文様がいいのか」

「そうねぇ」

「ふむ。ああ、そうそう、北方の文様でも大丈夫だよな？」

「勿論」

「わかった。２人ともありがとう」

『どういたしまして』

　少しおどけた感じで、お嬢様組は優雅に礼をして作業に戻った。さっきの仕草とやろうとしている作業のギャップが少し面白い。

　北方の文様でも問題ない、と聞いた俺の脳裏に幾つかの吉祥文様が思い浮かぶ。

　そのうちのどれか、あるいは複数を組み合わせて、おかしくない程度に仕上げよう。そう決めた俺は、紋様を刻むための小さなタガネを取りに、腰を上げた。

## １つ目

2020年7月22日

　うちにある中で一番小さなタガネを使い、文様を彫っていく。まだ柔らかいので、鎚を使わずとも手の力だけで彫ることができるだろう。

　多分ナイフでも彫ることはできるんだと思うが、単純にすごく小さいので適した道具を使う必要がある。

　彫る文様は紗綾型。卍を菱形に連ねてつなげたような模様であり、家の繁栄や長寿を願う意味合いがある。

　不断長久と言うのだが、意味合いは異なっても“不断“というのは結婚指輪に適しているように思ったのでこれに決めたのだ。

　……多分大丈夫だとは思うが、作業前に一応確認だけしておくか。

　皆に紗綾型の文様を紙の余ったスペースに描いて見せたところ、卍で引っかかるようなことはなかった。

　前の世界でも第二次世界大戦があっての話だし、問題になるのは卍ではないので大丈夫だという確信はあったが、この世界ではその文様は死を象徴していますとか言われたら変更が必要だからな。

　問題なしと分かったので、いよいよ作業に取り掛かる。余り力を入れると環形が崩れてしまうので、そうならないようにだ。

　金属に対して直接の加工である、と言うことなのだろう、チートでどれくらいの力をこめれば良いのかが理解できている。

　俺はそっとタガネを当てて、ゆっくりと形を彫っていく。何回か彫刻をやってきたときは剣に施していたので、今ほど慎重でなくてもよかったのだが、今回は震えそうな指先を必死に制御しつつの作業だ。

　どこをどう掘ればいいのかわかるのと、それをスムーズに実行できるかは別の話である。

　逆に言えばこの辺りは俺自身のレベルアップ（レベルという概念そのものはこの世界にもない……はずだが）を図って改善が可能なところ、ということだな。

　何でもかんでもホイっと作って終わり、だけでは面白みがないのも確かだし、たまには難しいと思える作業もいいものだ。

　あんまり続くとウンザリするんだろう、ってのも分かってるのだが。

　チリチリと、芋虫が木の葉を喰むが如きスピードでタガネを進めていく。とても貴重な素材であるので、タガネで彫った屑も都度指で摘んで、小さめの容器に放り込んでいく。

　本来は新しく買った調味料を小分けにしておくために買っておいたものだが、今は前の世界の胡椒のごとく、値千金のものを収める宝の壺になっている。

　集めたメギスチウムの屑は嫁さんの分を作るときにこめた魔力ごと再利用できるし、最終的にはそれなりの量にはなりそうなので、それだけでも結構な価格になるはずだ。

　今摘んで容器に入れた耳かき１杯もない程度でも、街の外周側でなら、向こう１～２週間は余裕で暮らせるくらいの価値がある。

　流石にそんなものをただの屑として捨てたり、ましてやチョロまかしたりする気にはなれない。キッチリと返せるようにしておこう。

　なんせ俺は「めんどくさい職人」なのだから。

　夕方くらいまでかかって、ようやく文様を彫り終えた。完全に目が疲れていて、やや腰に来ている。これもチートでもどうしようもない範囲だな。

　俺は立ち上がりながら、うーんと延びをした。腰のあたりから不穏な音がしないのは、３０歳とは言え若返った恩恵か。

　左手で目頭を抑え、右手でトントンと腰を叩いていると、

「なんだか年寄り臭いなぁ」

　と近くにいたらしいサーミャにツッコまれる。

　作業に集中していて気が付かなかったが、皆ももう片付けを終えていて、ちょうどディアナとアンネが木剣を手に外に出ていくところだった。

「まぁ、オヤジではあるからなぁ……。あちこちガタが来そうだわ」

　苦笑しつつ肩をグルグル回しながら、素直に俺は返す。身体は３０歳でも中身は４０歳だ。身に染み付いた動きというのはなかなか抜けないらしい。

　集中して作業をしていた分の反動だろうか、音こそしないがギシギシときしむような感じがする。

　もう少し反論されるかと思っていたのだろう、サーミャは少し驚いた顔をした。

　しかし、すぐに憤慨した顔になると、

「なーに気弱なこと言ってるんだよ！ まだまだ先はあるんだぞ！」

　バシーンと背中を叩かれた。正直痛いのだが、それでなんとなく気合が入ったような気がする。

「そうだな、明日も頑張んなきゃだ」

「おう」

　俺がサーミャの頭をガシガシ撫でると、彼女は満面の笑みを浮かべるのだった。

## 魔力と魔物

2020年7月24日

「うーん、しまったな」

　翌日。一通り朝の日課を終えて鍛冶場に火を入れた俺は、指輪を前に唸っていた。

　そこにリケが近づいてくる。

「どうしたんです？」

「いやぁ、ちょっとうっかりしてた。ここからどう硬くしようかな」

「ああ……」

　今までのように直接魔力のこもった板金を置いて叩いたのでは、せっかく出来た指輪がまたペタンコのシート状になってしまう。

　その状態でめちゃくちゃ硬くなってしまったら取り返しがつかないだろう。恐らく世界で１番硬い金属シートの出来上がりだ。

　それはそれで前の世界でいう防弾プレートのようなものとして利用できるかも知れないが、依頼されたのはそういうものではないからなぁ。

　もうちょっと硬くしてから刻印したほうが良かっただろうか？

　いや、形を作る上ではこの硬さが限界だろう。これより硬いと継ぎ目を消せる自信がない。

　もしかするとチートでなんとかなってしまうのかも知れないが、それに賭けて失敗したら目も当てられない事態になる。

「……囲んでみるか」

「板金でですか？」

「魔力をこめようと叩いたとき入る感触自体はあったんだ。それなのに入ってない、ということは恐らく……」

「入ってそのまま抜けている？」

　リケの言葉に俺は頷いた。

「板金から移すと大丈夫なのは？」

「魔力がこもっているのが板金だけじゃないとしたら？」

「あっ」

　そう、メギスチウムを挟んで板金の下には金床がある。あれにも魔力は入っているはずなのだ。今まで意識したことはなかったが。

　シート状になれば横方向への“逃げ“は少なくなる。となれば上下方向へ逃げようとするだろうが、そちらへは魔力のこもった鋼が逃げられず、メギスチウムに魔力が残留しているのだとすれば。

　周りを魔力で囲み、高濃度の魔力の中におくことで魔力をこめられるのではないか。そう思ったのだ。

　この方法にも気になることが１つある。

「それをやって魔物が発生しないかだな」

　魔物は魔力が澱むと発生する……ことがある。実際に俺はその発生した魔物とも戦ったことがある。

　その澱んだ魔力が普通の生物を魔物化してしまうこともある。うちにいる子狼（そろそろ子が外れそうだが）のルーシーがそうだ。

　今のところ、特注品で限界まで魔力をこめても、それが澱んだ状態になったことはない。

　だが、空間を高濃度の魔力で満たした場合はどうだろうか。ここは今日も専門家の知恵を借りることにしよう。

「魔物……ですか」

「うん。こうやって魔力をいっぱいまでこめた板金で六方全部を囲んで、内側に魔力を叩き出すと、その空間の魔力は相当な濃さになるよな？」

「ああ、それはそうですね」

「で、その状態にしたときに、そこから魔物が発生してしまったりしないか？ ってのが気になるところなんだが」

「そうですね……」

　リディは細いおとがいに手を当てる。

　こっちには討伐隊への従軍経験がある人間とエルフがそれぞれ１人ずついるし、残った皆もヘレンがまだ帰って来てないとは言え、十分に戦闘能力は高い。

　ゴブリンの１体くらいなら余裕でぶっ倒せるだろう。この指輪サイズの空間に凝集した魔力程度ではそれ以上強い魔物が発生しそうにない。

　なので、発生したところで大したことにはならないだろうと思うが、起きるかと知ってて準備しておくのと、そうでなく発生してから慌てるのでは大きく違う。

　少し考え込んだリディが口を開いた。

「恐らくこれで魔物が発生することはないと思います。量が少なすぎるので」

　その言葉に俺はホッと胸を撫で下ろす。対処できるとは言っても、ゴブリンのような魔物は発生しないに越したことはない。

　うちのルーシーにせよ、魔物にならなければ群れの中で森狼として過ごしていくことができたはずなのだ。

　引き取った以上はうちで幸せに過ごしてもらうつもりだが、群れにいるよりも幸せであるかどうかは知る由もない。

「ただ……」

　リディが言葉を続けた。若干不穏な空気になっている。

「ものすごく魔力が濃いと、妖精が現れる可能性はあります」

「妖精……？」

　リディはコクリと頷いた。

「魔力を糧とする者達なので、純粋な魔力や濃い魔力に寄ってくるんですよ。ここは“黒の森“の中でも魔力が強いのですが、これくらいだと妖精は現れません。ですが……」

「そこにとんでもない濃度の魔力が更にあるなら別か」

「そうですね」

　俺の言葉にリディは再び頷く。「妖精」というワードに反応したのか、他の皆も少し手を止めてリディの話に注目しているようだった。

「会話はできるのか？」

「言い伝えではできる者もいたと聞いてますが、大半は何もせずに集まった魔力だけ吸い取ると、そのまま何処かへ去っていくようです」

「悪さはしない？」

「ええ。会話ができるくらいの妖精だと、悪戯程度のことをする可能性はありますけどね」

「へえ」

　前の世界の童話に出てくる妖精に近いのかな。あれも色々といるようだったから、一概にこうとは言えないんだろうが。

「まぁ、妖精が来たら珍しいものが見れたと思うのがいいか。加工中は板金で囲んでるから手出しできないだろうし」

「そうですね」

　微笑むリディ。俺はその顔を見ながら、ほんの少しだけ妖精の出現に期待をしてしまうのだった。

## 手順の確立

2020年7月27日

　妖精が来るかどうかはともかく、作業をしなけりゃならないのは変わらないので、ひとまず魔力フル充填の板金を用意することにした。

　用意するのは３つだ。下に敷くもの、上に被せるもの、そして指輪と同じくらいの大きさの穴を空けたものである。

　もっと大きなものなら囲むために６枚を用意するのだろうが、今回は小さいものなのでこれで問題ない……はずである。試してみないことには分からんが。

　２枚はそのまま加熱もせずに叩いて魔力をこめていく。もうかなり手慣れたもので、素早く限界まで魔力をこめることができた。鋼だし、上限が低いというのもあるが。

　３枚目のものは加熱したあと、金床の角みたいになっているところを利用して小さめに穴を開け、その後、鎚を駆使して指輪とほぼ同じ大きさの穴に調整する。

　板金の厚みは指輪の幅よりも大きめに取ってある。冷えた状態で叩くから平気だとは思うのだが、厚みがギリギリだと被せた板金を叩いたときに、指輪に当たって歪んでしまうかも知れないからだ。

　こうして魔力フル充填の鋼が３枚揃った。キラキラしたものが板金にまとわりついている。

「これをリケに打ってもらう、って実験もそのうちやらないとなぁ……」

　俺はそうひとりごちた。自分だけが聞こえるくらいの音量のつもりだったのだが、リケは耳ざとく聞きつけたようである。

「いいんですか！？」

「いや、うん、まぁ今回のが終わったらやってみるか」

「はい！」

「俺から言っておいてなんだが、自分でこめたやつでなくても良いのか？」

「勿論そっちのほうが良いに決まってますけど、その前に魔力が最大量までこもった板金を試してみたいのも本心なので。自分ではまだそこまでできませんし」

「なるほどね」

　良いものがあればそれでやってみたい、と思うのは当たり前か。俺だって「魔力フル充填したオリハルコンを持ってきたけど打ってみない？」って言われたら、加工できるかどうかはともかく、二つ返事で頷くだろうし。

　リケに俺が魔力をこめた板金を打ってもらうことの意味は量産性にある。

　俺が板金に魔力を込めるだけなら加熱しなくてもいい。その魔力を完全に維持できずとも、大半を残したままリケが加工できるなら、俺は魔力をこめることにだけ集中し、リケにはどんどん加工だけしてもらう、と言ったことが可能になる。

　そうすれば、予定数の板金を俺が準備したあと、俺が追っかけて加工することで単純計算すると２倍近い速度で生産することが可能、というわけだ。

　これを放置する手はないし、なにより何かで俺がいなくなった場合も、板金さえ残していればしばらくは安泰だろうと思う。

　うまくいった場合は、暇を見つけて魔力をこめた板金をせっせと作り、倉庫に収めるようにしよう。

　それも指輪を無事作り終えたらの話だ。俺は金床の上に板金と指輪を置き、板金に鎚を振り下ろす。

　何回か叩いていくと、上に置いた板金の魔力が少し減っているように見えるので、今のところうまくいっているようだ。

　それから更に作業を続け、もう少しで昼飯かなという頃合いで、一度確認してみることにした。

　ここでうまくいってなければ、今日の午前中の作業は水泡に帰すわけだが、それでもまだ傷はそんなには深くない。

　俺は鎚を傍らに置くと、そっと板金を持ち上げてみる。キラキラした何かが、その隙間から少し溢れ出してくる。

　イメージ的にはドライアイスを入れた箱を開けるときのような感じだ。

　指輪が置かれていた空間に魔力が充満していたのは間違いないらしい。俺はそのまま板金を取り去った。

　そこにはキラキラと輝く指輪がある。指の爪で突いてみると、コツコツと硬い感触が返ってきた。昨日と比べて硬くなっているのはほぼ間違いない、とチートが教えてくれる。

　俺は深くため息をつく。良かった、これで完成までの手順を確立することができた。もう１つを作るときにはこの手順に従えばいいから、かなり早く出来るはずだ。

　しかし、安堵したのも束の間、指輪と同時に懸念が生まれていた。

　指輪の内側、つまり完全になにもない空間だったところに、ごくごく小さな青い透き通る宝石のようなものが生まれていたのである。

## 魔宝石

2020年7月29日

　熱も何もないところへ突如現れた小さなそれを、俺はそっと指でつまみ上げた。

　火床の光を透かして、ほんのり紫色にも見えるそれの内部は、ほんのわずか揺らめいているようにも見える。

「これは……」

　俺はこの感じに見覚えがあった。魔族のニルダが報酬を支払ってくれた時のことだ。

　あの時は赤い色をしていたが、あれも確か内部が揺らめいていた。今回のは青い色なのが違うが、それ以外はほとんど同じと言っていい。

　と言うことはつまりだ。

「魔力の結晶……か？」

　ニルダがくれたのは”澱んだ”魔力が凝固したものだった。これはおそらく純粋な魔力の結晶ということになるのだろう。多分。

　素人が考えていても埒が明かないので、俺はリディを手招きした。このところ専門家として頼りっぱなしだな。

　パタパタとリディとリケがやってきた。

「なんでしょう？」

「これなんだが」

　摘んでいた魔力の結晶を手のひらの上に載せ、リディに見せる。リディの目が見開かれた。

「もしかして、これができたんですか？」

「ああ。前にニルダから貰ったのと似てるんだが、本当にそうなのかと思ってな」

「失礼します」

　リディは俺の手のひらから魔力の結晶をつまみ上げると、光にかざした。

　下からはリケが「ほわぁ」とか言いながら見上げていて、見た目には完全に子供が宝石を見せてもらっているかのようだ。

　その様子を横から見ていても、やはり光が結晶の中で揺らいでいるように見えるのだが、小さすぎてそれが魔宝石と同じ現象なのか、火床の炎が揺らめいているからなのかは判別が難しい。

　あれば虫眼鏡のようなもので拡大すればいいんだろうが、うちにはない。

　この世界にも凸レンズ自体はあるのだ。水晶などの宝石や、ガラスを手間をかけて磨いたものが。

　凹レンズはこの世界ではまだ出回ってはいないようだ。なので近視用の眼鏡はない（実に残念なことである）し、望遠鏡もまだない。

　何かの拍子に凹レンズに気がついたものはいるだろうとは思うが、それを実用化に持っていくところまでは、まだできていないみたいである。

「紛れもなく魔力が固まったものですね。分類的にはこれも魔宝石と言っていいと思います」

「やっぱりか」

「ええ。ただ……」

　リディが眉をひそめた。魔宝石に何かが起きかけているのだろうか。

　手にした魔宝石をリディが俺の手のひらに戻す。すると、魔宝石はサラサラと崩れて消えてしまった。

「あっ」

「赤い魔宝石と違って、こちらはしばらくすると魔力に戻ってしまうようですね」

「金槌一本で丸儲け、とはいかないか。ままならんなぁ」

「そうですね」

「ダメですよ親方、そんな楽しちゃあ」

　リディとリケがクスリと笑う。俺もこれで儲けようとは微塵も思っていないので、笑い返した。

「でも、何かしらの条件が整えば、あるいは赤い魔宝石のように固定されるかも知れないですね」

「その条件を探すのも難しそうだな」

「少なくとも私はこんな方法で青い魔宝石が出来る、という話は聞いたことがないので……」

「ドワーフにもそんな言い伝えはないですねぇ」

「うーむ……」

　おそらく今までに同じものを生成したことがある人間――かドワーフか、あるいは他の種族かも知れないが――はいたことだろう。

　それでも、できてそんなに経たないうちに消えてしまうのでは記録のしようがないから、全く残ってないんだろうな。

　すぐに消えてしまうものでは、持ち運ぶこともできないわけだし。

「まぁ、条件は追々、手が空いたときにでも探すとしよう」

「そうですね」

　リディが若干名残惜しそうに頷いた。俺はそれを見て、元の作業に戻ろうとする。

　いや待てよ。その時、俺には閃くものがあった。

「赤いほうの魔宝石は魔力が取り出せないんだっけか」

「はい。あれは完全に固まってしまってますから」

　再びリディが頷いた。あれは淀んだ魔力が固まってしまったものなので、漏れ出したりしない代わりに、取り出すこともできない。崩れることもないので、その希少性とも合わせて、綺麗な宝石としての価値がある。

「じゃあ、青いほうで、崩れてしまうやつだとできる……？」

「……可能性はありますね」

　すぐに崩れてしまうものとは言っても、それが出来るのであれば、最初は家の中限定で魔力をより多く使った作業を、崩れる速度などを調整できれば家の外でも、魔力を取り出しての作業や魔法の行使が可能になるのではなかろうか。

「試してみる価値は……」

「ありますよ！」

　ガッシと俺の手を掴み、リディは食い気味に答えた。ここまでテンションが高いのはエルフの里の宝剣を修理したとき以来かも知れない。

「あ、す、すみません」

「いやいや。もしこれがうまく行けば色々と捗るかも知れないんだから、興奮するのもわかるよ。と、その前に……」

　俺は、放置されたままになっていたメギスチウムの指輪を手に取った。

　左手で摘みながら、右手の指先で弾くと綺麗な金属音が響いて、もうタガネでもおいそれと加工できない硬さであることを示した。

　俺はほうっとため息をつく。上手くいってよかった。確信はあれど、試してみるまではわからんからな……。

「こっちも成功だな」

　流石親方、と拍手をするリケ。その拍手はリディから皆へと伝わり、俺は気恥ずかしさと小さな誇りを感じながら、ペコリと頭を下げた。

## 魔力炉と実験

2020年7月31日

　指輪が硬くなっていることを確認できたので、昼飯の時間にする。まだ全員作業をしているので手早く済ませるが、やはり青い魔宝石の話は出る。

　驚きに目を大きく開けながら、ディアナが言った。

「そんなものができるの！？」

「できると言うか、できてしまったと言うか……。生成されるのは確かだな」

「なんか騒いでるなと思ったら、それだったのか」

「ああ」

　サーミャの言葉に俺は頷いた。アンネの目がキラリと光っているように見えるのがちょっと怖い。

「まぁ、どうやら不安定みたいで、すぐに消えて無くなってしまったけどな。魔力が結晶になっていたのが戻ったんだから、”空気に溶けた”のほうが正しいかもしれないけど」

　俺の言葉でアンネがわかりやすいくらい肩を落とす。無からカネになるものを生み出せるなら、国家的にも助かることは多いだろう。まさに錬金術なのだし。

　これ以上、話が深みにハマらないように、俺たちはそこらで話と昼飯を終え、後片付けをした。

　火事場に戻った俺は硬くなっている指輪を、板金の囲いに戻す。魔宝石（今のところはまだ“らしきもの”の範疇を出ていないが）を生成できるのだから、“魔力炉”とでも名付けようかな。簡単なものだから“簡易魔力炉”だ。

　その簡易魔力炉に、魔力のこもった板金で蓋をする。この状態で蓋にした板金を叩き続ければ、魔力が指輪にもこもっていくはずだ。

　直接こめる時は感触で「これ以上無理だな」と言うポイントが掴めるが、今回は間接的も良いところなので、時々簡易魔力炉から取り出して確認する必要がある。

　手に持った感触や、メギスチウムそのものの輝きは入れる前とさほど変わらない。だが、確実に魔力がこもっていて、キラキラしたそれが増えているのがわかる。

「うーん……」

　ここまで硬いなら平気だろうか。俺は試すなら今か、と指輪を軽く鎚で叩いてみる。

　柔らかいままなら軽くであっても、この一撃でなんらかの不具合が出てしまったことだろうが、指輪は「チリーン」と涼やかな風鈴のような音を立てたのみで、特に傷は入っていない。

　よし、これならいけそうだな。俺は板金に魔力をこめるときの要領で、指輪を叩いてみた。

　チリン、と指輪が答える。もう２～３度叩いてみて、鎚を置いて指輪の様子を確認する。

「ダメか……」

　叩いたときの感触でなんとなく分かってはいたが、硬くなった状態で魔力をこめようとしても、抜けていってしまうようである。

　硬くなったならもしかするかもと思っていたのだが、そんなうまい話はないってことだな。地道に作業をしていくしかない。

　直接魔力をこめることができれば、魔宝石や妖精のリスクもないはずだから、いいと思ったんだけどなぁ。

　俺はため息をつきながら、魔力が抜けてきていた板金に再び魔力をこめるために鎚を振るった。

　やがて、その身に魔力を湛えた板金ができあがった。そいつを魔力炉の蓋にすると鎚を振るって魔力が指輪にうつるようにと板金を叩いていく。

　まだまだ実験しておきたいことは多い。普通に考えれば魔力が高濃度の状態を維持し続けたほうがよさそうだ。

　つまり、途中で蓋にしている板金を除けたりせずに、そのまま魔力がなくなるまで作業を続けたほうが効率はいいのだろう。冷蔵庫の扉をしょっちゅう開け閉めすると、冷えるものも冷えなくなってしまうのに感覚としては近い。

　だが、それが本当にそうなのかは試してみないとわからない。

　俺はまず板金を５回叩き、一度蓋を開けて放置してから、再度蓋をして板金を５回叩いた。

　確認すると、指輪には更に魔力がこもっている。まだまだ上限は先っぽいな。なお、５回程度では魔宝石もできないし、妖精が訪れることもないようだ。

　魔宝石のほうはもしかするとごくごく微小な物ができていたかも知れないが。

　続いて、蓋をしたまま連続して板金を１０回叩く。これでさっきよりも魔力がこもっている量が多ければ、蓋をしたまま作業を続行したほうが効率が良いことになる。

　俺はそっと蓋を開け、中の指輪を取り出す。１０回くらいでも目に見える大きさの魔宝石は生成されていなかった。

　指輪をためめつすがめつ眺めて、魔力の量を確認する。

「思ったとおりか」

　ほんの僅かではあるが、確実にこちらのほうが魔力が増えている。と、なればだ。

「ギリギリいっぱいまで蓋を開けずにやるか」

　魔宝石と妖精は避けられるなら避けたいところだったが、仕方ない。どちらも害にはならなさそうではあるし、目をつぶって作業に集中するとしよう。

　俺は指輪と蓋を戻すと、鎚を手に取り作業に戻った。

## 最大限の魔力

2020年8月3日

　俺は魔力炉の蓋を鎚で叩く。事情を知らない人から見ると、「なんか嫌なことでもあったのかしら」となることうけあいの光景だ。

　普段の作業なら、たとえミスリルやアポイタカラでも、しばらく叩けば形状の変化が少しはあるので、わずかでも達成感を満たせる。

　しかし、今回の作業では形状的には一切変化がない。板金から少しずつ魔力が抜けていくのだが、その抜けた魔力は簡易魔力炉の中に入ってしまうし、その中の指輪の状態は確認できない。

　魔力満載の透明アクリル板で簡易魔力炉を作れば確認できるかも知れないのだが、そんなものはないしな……。

　そうして叩き続け、やがて１枚の板金からほとんど魔力が無くなったので、俺はそっと蓋を開ける。

　濃度の高い魔力が、水を入れた洗面器に突っ込んだドライアイスの霧のごとく、モワッと出てきたらどうしようかと思ったが、そんなこともなく。

　あるいは魔力を蓄えまくった指輪が、発光するかの如き光を放っているかもとも思ったが、それもなく普通にご鎮座ましましていた。

　同時に、今朝見たよりも大きな魔宝石ができている。それだけ魔力がここに集中していたということだ。

　青い魔宝石を除けた蓋の上に置いて、指輪を簡易魔力炉から取り出した。当たり前だが温度が上がっているとかそういったこともない。

　発光こそしていないが、魔力がこもっていることは分かる。ここまで来たら普通の人間でも感知できるかも知れない。

　そう思い、ディアナを呼んで見てもらうことにする。サーミャだと獣人の感覚のほうと見分けがつかないし、アンネは魔力のこもった品を見たことがあるだろうから、ヘレンがいない今は普通に一番近いのがディアナというわけだ。

「なるほどねぇ」

　そう言ってディアナは俺が手渡した指輪をためつすがめつする。その傍らでは大きさの故か、まだ空気に溶けてしまっていない魔宝石をアンネが手にとって見ている。目が＄になっている気もするが、気のせいだろう。当たり前だがドルはこの世界にはない。

「なんか普通とはちょっと違うかも、って感じはするわね」

「ふむ。なんか温かいとかそういうのは？」

「そのへんはあんまり。キラキラしてるのもメギスチウムがそうだからなのか、これが魔力なのかはわからないわ」

「ああ、それはそうか」

　俺が魔力をこめたのは純金ではなく、メギスチウムという特殊な金属（かどうかも若干怪しいが）である。輝きが物質の特性によるものかは単体で見てもわかりにくいか。

　なので、残っていた魔力がまだこもっていないメギスチウムを持ってくる。アンネの「ああっ」という悲しそうな声が聞こえたので、魔宝石のほうは崩れたのだと分かった。崩れるまでの時間は大きさ、つまり結晶になった魔力の量に依存するらしい。

「これが加工前のものだ」

　アンネは一旦置いておいて、ふにゃふにゃとしているメギスチウムをディアナの手の上に置く。

「どうだ？」

「あ、これなら分かるわね。指輪のほうがちょっとキラキラしてる」

「おお、そうか」

　ディアナが指輪に負けず劣らず目をキラキラさせながら言った。特に魔法の手ほどきを受けてなくても、この量がこもっていたら流石にわかるということだ。

「あとは夜に確認するか……」

「夜？」

「もしこれが光を放つようだと、寝るときに困るだろう？」

「……それはそうね」

　この世界でも結婚指輪はあまり外さないことになっている。であれば就寝時にも身に着けていると思うが、そのときに光っていたら眠りにくいだろう。

　もし光るようなら、指輪として十分な強度を保ちつつ、光らないくらいの魔力の量を探るという作業が必要になってくる。

　なるべくなら、そんな作業は避けたいところだが、必要であれば仕方ない。

　窓の外を見ると、既に空にオレンジ色がまじる頃になってきたので、俺は作業の片付けを始めようとする。

　そこへ、すごく小さなノックの音が聞こえてきたように感じた。ほんの僅かな、作業をしていたら聞き落としていただろうと思うくらいの微かな音。

「今ノックの音が聞こえたか？」

「いいえ？」

「サーミャはどうだ？」

「アタシもちょっとだけ聞こえたような気はしたけど、気のせいかと思った。エイゾウも聞こえてたのか」

　サーミャが虎耳をぴこぴことさせながら言った。なら、気のせいではないってことか。いつに来ようが客は客だ。俺は鍛冶場の扉を開ける。

「はいはい、どちらさ……ま」

　すると、そこには羽の生えた、小さなエルフのような女性がニッコリと浮かんでいたのだ。

## 妖精

2020年8月5日

　羽の生えた小さな女性は空中に浮かんでいる。羽ばたきと上下動が一致してないから、羽が空気を押してどうこうと言う飛び方ではないようだ。

　女性は浮かんだまま、ペコリとお辞儀した。

「お初にお目にかかります。ジゼルと申します」

「はぁ」

　目の前で俺はなんとも間抜けな返事を返してしまう。後ろでディアナだろうかリディだろうか、咳払いをする声が聞こえて、俺は少し姿勢を正した。

「失礼、立ち話もなんですし、お入りください」

　ジゼルさんにとって浮かんでいるのがどれくらいの負担になるのかは分からないが、多少なりと負担ではありそうだし、座ってもらおう。

「まぁ、ありがとうございます」

　花のほころぶような、という形容詞そのままの笑顔でジゼルさんは微笑み、ふよふよと中に入ってきた。

「こちらへどうぞ」

「どうも」

　椅子に座ってもらうわけにもいかないので、テーブルの上に座ってもらうことにする。

　うちでサイズが違って困る客は初めてかも知れない。アンネはジゼルさんとは逆に体が大きい巨人族だが、母親が巨人族で、父親が人間族と言うこともあってか、困るほどに大きくはない。ベッドの大きさを多少調整したくらいだ。

　その時に大きい方の用意はしようかなと思ったものの、小さい方の用意は頭になかった。

　でも普通に考えたら、めちゃくちゃ大きい人がいるなら、小さい人もいるに決まってるよな……。

　今後、何かを揃えるときは気をつけておこう。

　リケにミントのお茶を用意してもらうが、ジゼルさんサイズのカップは当然ながらない。

　仕方がないので、うちにある一番小さな容器に入れてきてもらった。それでもジゼルさんの半分くらいの大きさがある。

「ご不便とは思いますが、こちらどうぞ」

「まぁ、ありがとうございます。いい香りですね」

　最近は気温も高くなってきたし、ミントの清涼感ある香りがより良く感じることだろう。とりあえず、もてなしのつかみは大丈夫そうかな。

　ジゼルさんはカップにそっと口を近づけ、一口啜った。俺たちで言えばデカいポリバケツから飲んでるようなものではある。

「ぷはっ。美味しいですね！私達はあまりこう言うことはしないので、楽しいです」

　妖精っぽいし、花の蜜とか飲んだりするんだろうか。リディに頼んで花も育てるべきか？

「それは良かったです」

「あの、それでですね」

　ジゼルさんは居住まいを正した。俺たちも皆、姿勢を正す。

「こちらでエーテル……皆さんの間では魔力、って言うんでしたか。そちらの精製を行ってらっしゃいます？」

「いえ、意図して精製を行っているわけでは……」

　俺は首を横に振った。魔宝石ができるのはメギスチウムを硬化させる作業の副産物であって、狙ってやってるわけではないからだ。

　できたものも不安定で直ぐに消えてしまうし。

「以前からたびたび魔力の高まりがあるな、と思っていたのですが、今日のはより一層強かったので、そうした作業をしているのかと……」

「いえ、こちらの指輪を硬くするのに魔力が必要だったもので、その副産物として、魔力が固まったものができてしまいました。それも直ぐに消えてしまいましたが」

「そうですか……」

　俺がメギスチウムの指輪を見せると、ジゼルさんはガクーンと小さな肩を落とす。動作が大げさなのは俺たちにわかりやすいようにだろうか。

「あれがご入用だったのですか？」

「ええ、なんと言うか……」

　ジゼルさんは一瞬迷ったような顔をした。目鼻立ちも可愛らしい感じなので、人形が動いているようにも感じる。

「この森が強い魔力で満たされていることはご存知ですね？」

　俺たちは全員が頷いた。アンネには俺から話したっけな。まぁ、俺が言ってなくても誰かが話すか。

「それで私達妖精族もこの森に住んでいるのですが、時折、病にかかるものがおりまして」

「病？ 熱病のような？」

「はい。皆さんがかかるようなものとは少し違うのですが、魔力が体から抜けていってしまうのです」

「それは……」

「ええ、死に至る病です」

　誰かが息を呑む音が聞こえ、場に沈黙が訪れた。ジゼルさんは続ける。

「それで、治すには強い魔力を浴びる必要があるのですが、この森でもそれに都合の良い場所はなかなかなくて……」

「この場所でもダメなんですか？」

「ええ」

　俺が床を指差しながら聞くと、ジゼルさんは頷いた。そのあと、失礼、と言ってお茶を２口ほど口にする。

　この家のすぐ周りに獣が立ち寄らないのは魔力が強いせいである。この森の木々もこの場所は避けて生えているほどだ。

「ここも強い魔力があるんですが、これでもまだ足りません」

「なるほど。それで結晶化した魔力の塊を常備できれば、ということですね？」

「そうです！」

　思わず立ち上がるジゼルさん。ほぼ不治といっていい病に光明が見えたら、そりゃあ、そこを頼るわな。

「ですが、すぐ消えてしまうのではダメですね」

「合間を見て結晶化を維持できる方法がないかを探ってみるつもりでしたが、急いでもいつになるかはわからないですね……」

「そうですよね……」

　折角見えた光明に影を落とすような真似はしたくはないのだが、事実は曲げようがない。ジゼルさんは再び座り込んだ。

　うーん、俺でなんとかできるならしてあげたいんだが。あ、そうか。

「強い魔力があればいいんですよね？」

「ええ、そうです」

「じゃあ、その病にかかった人がいたら、ここへ連れてきてください。その場で結晶を作りますんで、それで治るのなら。結晶が崩れないようにできるようになるまではそれでどうでしょう？」

　医者というほど立派なものではないが、それで妖精たちの命が救えるのならお安い御用だ。

「いいんですか！？」

「ええ」

　再び立ち上がるジゼルさん。その顔には喜びの花が咲いている。

「よろしくお願いします！」

　ジゼルさんはペコリと頭を下げた。このあたりの所作が全種族で共通なのは昔の戦争の名残なのかな。

　俺が指を差し出すと握手をするように、ジゼルさんはその指をギュッと握った。

## 祝福

2020年8月7日

　話が一段落したところで、俺は少し気になっていたことを聞いた。

「そういえば、突然ふわっと現れたりしないのですね」

　俺が言うと、他の皆も小さく頷いた。リディまでもが頷いているということは、この世界一般でもそう思われているのだろう。

　フッと現れ、悪戯をしてフッと消える。そして、小さな子供のように憎めない、そんなイメージだ。

　いや、前の世界の神話や物語だと結構えげつないのもいたっけか。

　俺の言葉を聞いて、ジゼルさんはプクっとふくれっ面になった。

「それをするのは精霊たちです。私達は妖精族なのでそんなはしたない真似はしません！」

　可愛らしくて、謝る前に思わず微笑んでしまいそうになる。

　でも、「はしたない真似はしない」ということは、やろうと思えばできるってことだよな。

　そして、妖精族とは別に精霊がいる、という情報も得ることができた。今日はなんだか盛り沢山だなぁ……。

「すみません、どうも我々の間ではそういった印象がありまして」

「それは遺憾なので、早めに改善をお願いしたいですね」

「善処します」

　妖精達はめったに姿を表さないので、精霊と混同されてしまっているのかも知れない。

　あまり「妖精と会った」と言うのもあれだし、改善しなければならないほど、普通の人間が妖精族に会うかというとなぁ……。徐々に改善することを考えよう。

　棚上げにする、ともいう。棚卸しがいつされるのかはわからんが。

「で、ここでその魔力が抜ける病を診ますってのは、ジゼルさんから妖精族のみなさんに伝えるという事であってます？」

「はい。この森の妖精族の長は私ですので、言うことは聞いてくれるはずです」

　俺は自分の片眉が上がるのを自覚した。

　イメージと違ってちゃんと玄関から来たり、言葉遣いが丁寧だったりするのは、「妖精族が実はそうだった」というより、「妖精族の長としてのジゼルさんの素養」が強いのではなかろうか……。

　わざわざそれを指摘して話をこじらせる必要もないので、そこについては黙っておく。

　知りたいことが色々出てくるが、そこはまた機会があればということにしておこう。知らなくても影響はなさそうだし。

「それでは、私は失礼しますね」

「あ、ご注意があります」

　立ち上がって優雅に礼をしたジゼルさんを引き止めた。大事なことを忘れていた。

「私達はたいてい日が昇ってから、沈むまでここにいますが、１週か２週に一度、街に出向きます。その日は、日が中天に差し掛かるくらいまでは家を空けています。それと、あまりないようにはしたいんですが、私が最長で１月程度、この家を空けることもありますので、その時はご容赦ください」

　俺の言葉に、ジゼルさんは微笑んで言った。

「ええ、もちろん。死に至る病、とは申しましたが、実のところすぐに死んでしまうようなものではないのですよ。少しずつ弱ってはいきますし、苦しむのも確かではあります。最終的には確実に死をもたらします」

　そこまで言うと、ジゼルさんは小さくため息をついた。そうなった者を看取った経験があるのだろうか。

「ですので、いらっしゃらない場合は日を改めることができますので、そこはご心配には及びません」

「それは助かります。いらっしゃった場合はなるべく早く、魔力の結晶をお渡しできるようにしますので」

「よろしくお願いしますね」

　再びペコリとお辞儀をするジゼルさん。

「ああ、そうそう、人間族は報酬が必要なのでしたね」

「え？ ああ、そうですね」

　完全に副産物だから、それで報酬を貰う意識がなかったな。俺は最初「いらない」と言おうと思ったが、後ろから突き刺さる視線で思い直した。

「では”まえきん”として、その指輪に妖精族の祝福を授けましょう」

「あ、これもう１つ作るんです。まだ素材ですが」

「あら。では、そちらも持ってきてください。その後どうやっても祝福は消えませんので、ご安心を」

　それ、実は

　その上をジゼルさんがふわふわと飛びながら回る。

「これらに我ら”黒の森”の妖精たちの祝福を授けます。身に着けたものに幸多からんことを」

　ジゼルさんが歌うように言うと、指輪とメギスチウムは一瞬ほの青く発光した。

「おお……」

　俺も含めたエイゾウ工房の全員が感嘆の声を上げると、ジゼルさんは少しだけ誇らしげに胸を張った。

「それでは、長いことお邪魔いたしました。失礼しますね」

　開けた扉の前で浮かんで、ジゼルさんはお辞儀をする。

「ええ。また何か相談事があればお越しください」

「はい。ありがとうございます」

　外はもうすっかり暗くなってしまっているが、その中をふよふよとジゼルさんは飛んでいき、やがて見えなくなった。

「行っちゃったわねぇ」

「行っちゃいましたねぇ」

　扉を閉めようとすると、うちの娘２人がそばまで来ているのに気がついた。クルルもルーシーも尻尾を振っている。

　今までじっと我慢していたのだろうか、そう言えばジゼルさんが来たときにも騒がなかったな。

「よしよし、２人ともえらいぞ」

　俺は２人の頭を撫でてやりながら、今日の夕食は夕方の埋め合わせにテラスで一緒に食べるか、などと考えるのだった。

## 内容と“ただいま”

2020年8月10日

　ジゼルさん……“黒の森”の妖精族長が来た翌日。出来上がった１つ目の指輪を前に、俺は少し唸っていた。

　祝福された事はいい。付加価値がついた事そのものは問題にならないだろう。

　そもそもがメギスチウム製の指輪などと言う貴重品なのだし、そこに希少価値が加わったところで、という話である。

　まぁ、その内容が内容ではあるのだがマリウスが公言しなければ、そうそうわかるものでもないだろう。妖精に祝福された物品を見たことがある人間なんて、そうはいまい。

　俺が気になっているのは、

「祝福の内容ってなんだろうな……」

　ということだ。昨日の様子から考えて、祝福ではなく呪いである可能性はとても低いと思っている。

　昨日の会話の途中でサーミャが割り込んでこなかったという事は、おそらくだが嘘はついていないはずだ。人間でないし、とても小さいから匂いが分かりにくい、という事はあるかもしれないけれど。

　翻って昨日の祝福の言葉を考える。“身につけたものに幸多からんことを”だった。

　前の世界でのRPG風に言えばLUKのパラメータが増加、って感じだろうか。

「うーん」

　指輪は光にかざすと、メギスチウム本来の金色の他に、ほのかに薄青い色が混じるようになっている。

　その青も金色の反射に紛れて、分かっていて見ているぶんには結構ハッキリとわかるが、言われなければ気がつくか微妙な色合いだ。

　俺が指輪を前にウンウン唸っていると、今日の準備を終えたリケが隣から指輪を覗き込みながら言った。

「どうしたんです？」

「昨日の“祝福”のことなんだがな……」

　俺はつらつらとさっきまで考えていたことをリケに説明した。

「なるほど」

「変なことにはなっていないだろうという確信はあるんだが、それを証明するものが何もないからな」

　うーん、と師弟そろって腕を組んで唸る。そこへ、

「１回エイゾウが嵌めてみるしかないんじゃないの」

　と、声がかかった。ディアナだ。

「いいのかな」

　これがナイフならノータイムで試すところだが、ものが結婚指輪だから色々躊躇する。

「ジュリーのはダメだろうけど、兄さんのでしょ」

「ああ」

　こっちが少し大きめなのはマリウスのだからである。製作のための試験もあったから、奥さんのよりはまだ知っているマリウスのものの方が何かあったときに心のダメージがわずかばかりでも少ない。

「じゃ、１回試してみるくらいはいいんじゃない？ なんかあったら家族の私が良いって言ったって言っても良いわよ」

「ありがたいが、それを言うつもりはないなぁ」

　やるなら自分だけの責任でやる。そうでないと頼んでくれた友達にも悪い。だからディアナのはあくまでもアドバイスだ。

「まぁ、でもここで唸ってても何も解決しないのは変わらないか」

「でしょ？」

　俺は頷いた。そこはディアナの言う通りである。

「よし、じゃあちょっと嵌めてみるぞ」

　流石に薬指に嵌めるのは憚られるので、サイズはあっていないが右の小指にそろそろと嵌めていく。

　やがて、ブカブカだが小指に指輪が嵌まった。

「どう？」

「とりあえず頭痛がするとかはないな」

　指輪を持って上下させてみると、普通に動く。１度嵌めると抜けなくなるなんてこともないようだ。

　最悪の場合、指を切断する可能性も考えて小指にしたのだが、取り越し苦労で済んでよかった。

　小指に指輪が嵌まった状態でしばらくじっとしてみたが、やはり体に変化はない。

　恐る恐る指輪を右の人差し指に変えてみたが、やはり同じようだ。軽く屈伸運動してみたり、鎚を虚空に振るってみたりしても、特に体が重かったり、何故か鎚がすっぽ抜けたりといったことは起きなかった。

「“祝福”が有効になる条件がわからんが、害はなさそうだな」

「それが分かれば十分でしょ」

「そうだな」

　俺は頷いた。面倒くさい鍛冶屋のオヤジとしては疑り深いくらいでも良いのかも知れないが、ある程度は人（妖精だけど）を信じてもよかろう。裏切られてたら容赦はしないけどな。

「大丈夫みたいだし、あとはジュリーさんのを作るだけだな」

「頑張ってね」

「ああ」

　俺が残りのメギスチウムを加工しやすい硬さにしようと簡易魔力炉に放り込んだところで、カランコロンと鳴子が鳴った。

　これは家の側の扉が開いたんだな。この時間に向こうを開けてしまう客はあんまりいない。

　賊か、さもなくば……

「ただいま！」

　鳴子がなって間も無く、バーンと家と鍛冶場の間の扉が開かれて、赤毛の女性が入ってきた。青い胸甲を身につけている。

「おかえり、ヘレン。早かったな」

「思ったより早くみんなに会えたからな」

　入ってきたのは友人達に会うため、しばらく都に行っていたヘレンだ。何が入っているのか、背嚢がパンパンに膨らんでいる。

「とりあえず荷物下ろして休んでこいよ。昼飯には呼ぶから」

「おう。ありがとう」

　ヘレンは部屋に戻る前に、他の家族にも「おかえり」と「ただいま」のやりとりをしていた。

　滅多なことはあるまいと思っていたが、実際こうして無事に帰ってきて、みんなと帰宅を喜んでいる情景を見ると、家族なんだなぁという実感が湧く。

　さてさて、昼飯はちょいと豪勢にしてやらねばと思うが、その前に大事な指輪の仕事も片付けていかないとな。

　俺は再び魔力炉の前に腰を下ろすと、鎚を振るうのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

日森よしの先生によるコミカライズ版第2話が金曜日から公開中です。可愛いサーミャが見られますし、初の鍛冶仕事のシーンも見所ですので、是非ご覧ください。

https://comic-walker.com/contents/detail/KDCW\_AM19201711010000\_68/

## 都の噂

2020年8月12日

　鎚を振るい、メギスチウムに魔力をこめていく。今の目的は「加工しやすい硬さにすること」なので、時折硬さを確かめるために魔力炉の蓋を開ける。

　昼前くらいに確認すると、ちょうどほどよい硬さになっていたので、大きさを写してあった指輪のうち、小さい方に合わせて輪っかを作る。

　形ができたところで表面を綺麗に整え、午後の作業に備える。こいつも最初からこれくらいの硬さだといいのにな。

　金色と青の混じった色を照り返す指輪を置いて、俺は昼飯の準備に取りかかった。

　昼飯は大抵スープと無発酵パン、用意しても肉も焼いただけのやつとかなのだが、今日は醤油ベースのタレで焼いたものを用意して、少しだけ豪華だ。

　なお、酒についてはまた夜にと言うことになった。今日はまだ仕事があるから、俺だけ遠慮するつもりだったのだが、みんながそれに合わせてくれた形だ。

　俺はあまり酒には強くないからな……。

　なので、水ではあるが乾杯をする。

『ヘレン、おかえり！』

「た、ただいま！」

　こうして少しだけいつもと違う、けれどいつも通り賑やかな昼食が始まった。

「都はどうだった？」

「特には何も。平和なもんだったよ」

　俺が聞くと、スープを啜りながらヘレンが答える。しかし、すぐに何かを思いついた顔になると言った。

「いや、1つあったな」

「なんだ？」

　ヘレンは一度スプーンを置いて、ディアナの方を向いた。

「ディアナの兄ちゃん結婚するんだってな。おめでとう」

「ありがとう」

　ディアナも持っていたフォークを置くと、お辞儀をする。

「マリウスの結婚って、傭兵のとこまで流れるくらいの噂になってるのか」

「“最近とみに活躍めざましい伯爵様のご結婚”だぞ。それも“幼なじみとの恋愛の末に”と来て、都の人間が放っておくわけないだろ」

「それはそうか」

　前の世界で言えば、人気俳優の結婚みたいなもんだ。そりゃ、ニュースとして流れるか。俺があんまり興味なかっただけで。

　そう言えば、こっちに来る前にも会社近くの食堂のテレビで見たな。

「なんだかちょっと恥ずかしいわね」

「都の噂になってるのが？」

「ええ。それと面倒なことにならなければいいけど」

　そう言って鼻の頭に皺を寄せるディアナ。俺は面倒の中身が分からないが、アンネは察したようで思わずだろう、

「ああ……」

　とこぼした。みんなの目がアンネに集まる。それに気がついたアンネは肩をすくめながら、

「どう考えても、ディアナのお兄さんが結婚したら、ディアナはいつですかって話になるでしょ」

　と続けた。なるほど、それはそうだ。時々忘れそうになるが、ディアナはれっきとした伯爵家令嬢なのである。本来なら……

「本来なら、とっくにどこかに嫁いでいてもおかしくないからね、私」

　ディアナは自分でそう切り出した。

「でも、そういうのも面倒なのよね。ここの生活が性に合ってるみたい」

「いや……」

　俺が口を開こうとすると、ディアナにじっと見つめられ、そこで俺は口を閉じた。アンネも俺を見て首を横に振っている。

　今、何かを口に出すのは得策ではなさそうだ。

「そう言えば、妖精が来たんだって？」

　若干重くなりそうだった空気を吹き飛ばすかのように、明るい声でヘレンが言った。

「妖精族の長な。ジゼルさんて言うらしい」

「へー、アタイも見てみたかったなぁ」

「ジゼルさんが来るかは分からんが、病気にかかった妖精の面倒を見るってことになったから、妖精は見られると思うぞ」

「マジで！？」

「ああ」

　俺が頷くと、ヘレンは喜色満面の笑みを浮かべる。そうだった、彼女は可愛いものが好きなんだった。

　本人は隠しているつもりらしいが、時折ルーシーを撫でるときにディアナ以上の笑顔になっているし。

「エイゾウって妖精の医者もするんだなぁ」

「俺が診られるのは、“体から魔力が抜けていく病”だけだぞ。他になんかあったら、俺じゃどうしようもない」

　いわば単一の病気の専門医……いや、診断するわけではないから治療士とでもいったほうが近い。薬剤師だとしても、同じ薬しか出さないしなぁ、俺。

「そういや、エルフって病の時はどうしてるんだ？ あ、答えにくいことなら、答えなくていいんだが」

　俺は思ったことを口にした。エルフは魔力を取り込んで暮らしている。

　妖精族も体から魔力が抜けて、抜けきったら死んでしまうという事は、魔力を取り込んで暮らしているのだろう。

　それならば、ある程度は近い状態ではないかと考えたのだ。

　リディは「いえ、別に答えるのに支障はありません」と前置きした上で続けた。

「まず病になることがそんなにないですからね。基本的には街や都の医者と変わりませんよ。薬草を煎じて飲んだり。そういうのも育ててますから」

「そういう知識はだいたいみんな持ってるのか」

「そうですね。街の医者の方がもう少し詳しいとは思います。実際、酷い時は街の医者に連れていくこともありますので」

　魔力を吸収してると、病気にはなりにくいのかな。ニルダがいれば、魔族はどうなのかを聞けたのだが。もしまた来たら聞いてみよう。

　であれば、より魔力を吸収して暮らしている（と思われる）妖精族の場合は、普通の病にはかからないのかも知れんな。

　その代わり、といってはなんだが不治の病にかかることがある、と。それに治療の光明がさしたのなら、相手が誰だろうと頼りたくなるのは当たり前か。

　俺は自分の肩にかかったものが何であるかに気がついて、少し背筋を寒くする。

　それでも、助けを求める相手のためになら頑張れると思う。

　内心の決意を隠すかのように、俺はスープを口に運んだ。

## 2つ目

2020年8月14日

　短くも賑やかな昼飯を終えて、午後の作業をはじめる。

　ヘレンには今日一日休んでも良いと伝えたのだが、今日は移動しかしていないし、午前中に十分休んだからと、早速サーミャやディアナたちの作業に加わっている。

　しばらくこっちの作業はしていなかったし、リハビリのようなものだと思えばいいか。

　俺は小さい方の指輪に紗綾形を彫りこんでいく。小さい分、若干の繊細さが要求される。つくづく老眼が始まっていなくてよかった。

　それでも目への負担は前の時もそうだったが、今回もそれなりには来る。

　時折、目をギュッと押さえると、ジワッと来る感じがある。前の世界ではしょっちゅう味わっていた感覚。懐かしんでいいのかどうかは悩ましいところだが。

　文様を彫り終えたら、どうしても毛羽立ったりしてしまう部分を整えていく。既に一度はこなしたことのある作業なので、スムーズに進めることができた。

　こうして、見た目にはほとんど完成品と変わらない見た目の指輪が出来上がった。

　金色に輝く中に、薄青い光が混じっている。メギスチウムであることを知らなければ、これが握れば潰れてしまうほどに柔らかいとは信じられなかっただろう。

　俺はそっと魔力炉の中に指輪を置いた。蓋にするのはもちろん魔力をこめておいた板金だ。

　その板金を鎚で叩き、炉の中の魔力濃度を上げていく……という感覚だ。

　炉に透明な材料を使ったり、超音波を使ったりして中を見ることができれば、何が起きているのかわかるのだが、そういうわけにもいかないので、どうしても感覚だけになってしまう。

　魔力濃度を上げるのは、メギスチウム以外にも応用できそうだし、何より「妖精のお医者さん」のためにも効率よく、かつ魔力の結晶が崩壊しないような方法を今後探っていくことが必要になりそうだ。

　見た目にはただの鉄の箱のそれを鎚で延々と叩く。叩くたびにガキン、と大きな音が鍛冶場に響き、リケやサーミャたちが作業している音と混じり合う。

　俺のほうはずっと同じリズム、リケやサーミャたちは少しだけテンポが変わったりして、もしこれを録音できていたら、結構面白い曲になっているんじゃないだろうか、などと思ったりした。

　夕方頃までずっと同じ作業、それも見た目にはあまり変わらない作業なので、蓋を開けずに時々休憩を挟む。

　休憩といってもちょっと外に出て、同じく小屋の外に出ていたクルルやルーシーをちょっとかまってやる程度だ。

　それでも、というよりはそれだからこそ、いい気晴らしにはなった。

　そして、夕方。すっかり魔力の抜けた蓋をそっと外す。いつの間にか他のみんなもそばに近づいていた。

　そっと蓋を開けると、見た目にはほとんど変わらない指輪と、俺たちが見るのは何度目かの魔力の結晶、青い魔宝石だ。

「おぉ」

　小さい声を漏らしたのはヘレンである。彼女がこの魔法石を見るのは初めてだからな。

　結構な大きさになっている魔宝石を取り出し、ヘレンに手渡した。

「綺麗だな」

「だろ？ まぁ、今はその状態を保つことができないんだけどな」

　こうして話している間にも、徐々に小さくなっているように感じる。横からアンネとリディが覗きこんでいるのはご愛嬌だろう。

「あぁ……」

　やがて魔宝石は音もなくサラサラと崩れさり、ヘレンは悲しい顔をした。元日本人的にはその儚さも美しさにつながっているのではないかと思うが、みんなはどうだろうな。

「さてさて、本題はこっちだ」

　炉の中に残っている指輪を取り出して、まだ残っている日の光にかざす。

　指輪は少し橙色になった日の光を受けつつ、しっかりと黄金色と、朝より強くなったほのかな青を反射していた。

　ジゼルさんの言うとおりであれば、ここには妖精族の祝福もこめられている。

　俺は軽く鎚で指輪を小突いた。澄んだ音がする。少しずつ強くして、やがて純金であれば確実に潰れるだろうという力で叩く。

　しかし、指輪は音はさせたものの、傷一つなくそこで輝きを放っている。

「これで両方とも完成だな」

　俺は呟き、小さめの歓声が鍛冶場を包み込んだ。

## 土産物

2020年8月17日

　マリウスのとこの結婚指輪が夫婦一揃い分完成したのと、昼のヘレンのおかえりなさい会は午後の作業があったこともあって簡素なものだったので、両方を合わせて我が家としては少しだけ豪華なお祝いの会を開催することにした。

　肉はシンプルな塩コショウと醤油ベースのタレで焼いたもの、ワインとベリーのソースのものの３種類を用意し、もちろん酒も出す。スープとパンがいつも通りなのが若干残念な感じではあるが、森の中の一軒家で急遽用意したことを考えれば十分だろう。

　テラスにテーブルと椅子を運びだし、テーブルに料理や酒を並べた。ここで食べる機会も増えたし、雨が降っていない日の夕食はここでとることにして、新しくテーブルを用意しても良いかも知れないなぁ。

「それじゃ、結婚指輪の完成と、ヘレンのおかえりなさいを祝って乾杯！」

『乾杯！』

　乾杯の声に、クルルとルーシーの声も加わった。ルーシーはヘレンの膝に乗って、味をつけずに加熱だけした肉を貰っている。膝に乗っているほうと乗せているほう、両方ともご機嫌である。

　クルルはというと、首だけを突っ込んでディアナにひとしきり頭を撫でてもらったあと、近くに座り込んでのんびりとしている。飲み食いはあまりしないが、皆と一緒にいるのが楽しいのだろう。

　皆はヘレンに昼に聞いてなかった都での土産話を聞いている。主に同じ傭兵隊の友達のことだ。

「じゃあ、何人か辞めちゃってたの？」

「ああ。でも、別の仕事を見つけてたり、結婚したりだからなぁ」

「残念ではあるけど、安心ね」

「そうだな」

　ディアナが聞いたことにヘレンが答える。彼女も今回は無事を伝えに行ったので、友人が無事だと嬉しいのだろう、他の話の間も顔がほころんでいた。

「あー、そうだ。忘れるとこだった」

　話の途中、ヘレンが唐突に席を立つ。膝にいたルーシーは既に居所をディアナのところに変えていた。気遣いもできるいい子である。

　一度家に引っ込んだヘレンは、少しして背嚢を手に戻ってきた。帰ってきたときパンパンになっていたアレだ。

「土産は話だけじゃないぜ。ちゃんとモノも買ってきた……というより大半はここの皆の話をしたら、あれもこれもと押し付けられたんだけどな」

　料理も減っていくらか片付けられたテーブルの上に、ヘレンは背嚢の中身を取り出す。

　ズラッと並ぶ、日用品やそうでないものの数々。

　俺は目についたものについてヘレンに尋ねる。

「櫛に……こっちの壺は？」

　中身がもれないようにだろう、皮と蝋で封がされていてそこそこ大きい。背嚢がパンパンだった理由の大半は、これの大きさによるもののようだ。

「香油だって。いっとう身だしなみにうるさいのがくれた。”どこにいても自分のために綺麗にしておくのよ”ってさ」

「なるほど」

　傭兵であっても女性であることは変わりないし、男性に対してどうこうをさておいても、戦場だろうとどこだろうとなるべく身ぎれいにしておきたいのは理解できる。

　悲しいかな中身が４０歳のオッさんでは全く気が回らなかったところだ。櫛はディアナが自分で持ってきたのがあるが。リケは「私の髪硬いんで、櫛が負けちゃうんですよね」と言っていたので持ってなさそうだ。

「次からこの辺もカミロに頼んどくかぁ」

「誰に見せるでもないのに？」

　俺の言葉にアンネが反応した。皇女様なんだから遠慮しなくていいのに。

「まぁ、こう言うのは自分の気の持ちようだからな。気分がいいほうがいいだろ？ 別に毎日つけなきゃダメってわけでもないんだし、自分の気が向いたときだけでいいんだよ」

　俺がそう言うと、「ふーん」と一見興味なさそうにアンネは答えた。でも、これは乗り気になりつつあるときの反応だ。使ってるうちに気にいるに違いない。

「この量だとそこそこ値も張っただろうに」

「そこは”内緒の方法で安く手に入れられるから”つってた」

「へぇ」

　詳細について聞きたいような、聞きたくないような答えが返ってきた。うちだと聞かないほうが良いんだろな、となんとなく思う。

　その後、クルルとルーシーにと生き物好きな友達がくれたという首輪を２人につけたりして（２人とも喜んでいた）、最後に残った小箱をリケが手にとった。

「わ、重い。これには何が？」

　リケの言葉に、ヘレンはニヤッと笑う。

「エイゾウが欲しがるものさ」

「俺が？」

　突然話が飛んできたので、びっくりしながら言うと、ヘレンは頷く。

「１粒くらいしか手に入らなかったけどな」

　リケが小箱の蓋を開ける。そこには、ほの赤く輝くとても小さな鉱石らしき物体があった。

「ヒヒイロカネって聞いてる」

　ヘレンの言葉に、俺は両目が驚きで目一杯開くのを自覚した。

## ヒヒイロカネ

2020年8月19日

「これがか……」

　俺は大体２センチ角ほどの大きさのヒヒイロカネをつまみ上げた。この大きさでもズシリとした重さを感じる。

　前の世界の言い伝えだと金より若干比重が軽いはずだが、この手応えだと金よりはるかに重そうだ。

　つまんだ指先にグッと力を入れたがビクともしない。メギスチウムを加工した直後だからちょっとドキドキしたが、さすがにこいつまで柔らかいと言うことはないみたいだ。

「こいつはどうしたんだ？ 高かっただろ」

　ニコニコしながら俺がためつすがめつする様子を見ていたヘレンに聞いてみる。

　ヒヒイロカネはアポイタカラ以上に稀少な鉱物のはずだ。この大きさでも金貨１枚、いや、２枚を超える可能性もある。

「貸しがあったからね」

　ヘレンは今度はニヤリと笑った。ヒヒイロカネを分捕れる貸しって結構デカいと思うんだが、それを土産に使って良かったんだろうか。

　そこそこの期間都に行ってたし、貸し借りの精算もしてきたのかも知れない。

　その辺を追求することは出来るが、本人が語らないのに聞くのもなんなので、

「ありがとうな」

　とだけ言っておく。その返事は、少し照れた顔と、

「お、おう」

　という少ない言葉だった。

　ヒヒイロカネはこの量だと何かの製品にするのはちょいと難しそうだ。何かとの合金にするのもアリかも知れないが、この量を混ぜて製品に仕立てるよりは加工の練習台にしたほうが良さそうに思える。

　メギスチウムがああだったし、もし何か特殊な手順を踏む必要があるのなら早めに知っておきたいしな。

「こいつってこの状態で魔力はこもってるのかな」

「見ましょうか」

　俺の漏らした言葉にリディが反応した。専門家の出番である。

「うーん、赤い魔宝石みたいに若干揺らめいていてわかりにくいですが、余りこもってないようですね」

「だとすると、加工するならその方法を探るところからか」

　今度はリケが瞳を輝かせながら言う。

「メギスチウムみたいにですね！」

「そうだな」

　俺が返事をすると、リケは満足そうに頷いた。今は無理でも、このままうちで修練を積めば、そのうちどんな鉱物でも加工できるドワーフの職人が誕生してしまうのではなかろうか。

　そこまで世界に影響を及ぼすような人間（ドワーフだけど）を輩出してしまっていいものだろうか。かと言ってリケに「これ以上は教えることはないから、今すぐ出ていけ」ってわけにもいかんしな。

　今後アダマンタイトなり、オリハルコンなりが入手できるくらいまでにはどうすべきか、俺なりの答えを考えとくか。

　その後、ヒヒイロカネはみんなの手から手へと回っていく。見る機会なんてほとんどなかっただろう品だ。いや、アンネは別か。彼女は見ようと思えば見られる可能性はかなり高い。

　それでも全員が興味深そうに見ている。宝石というには少し劣るが、鑑賞するのにも耐える感じだ。前の世界でビスマス結晶を見ている感覚に近い。

　そして話はこれをどうしようかという話にうつっていく。なにかに加工する派としばらくはしまっておく派に分かれるかなと思っていたが、満場一致でしばらく神棚に供えておくことになった。

「なんとなくそうするのが自然なように思った」と口を揃えて言っていた。毎朝の拝礼で感化されてしまっただろうか。嬉しさ半分、思いがけず文化侵略のようなことになって焦り半分である。

　加工の練習をするときだけ神棚からおろすことになる。まぁ、赤く輝く鉱石ってなんとなくありがたい感じもするから、みんなの言うこともわからんではない。

　こうして、翌朝からは女神像とヒヒイロカネが神棚に並ぶことになった。……ここの間での喧嘩とかないよな？

　昼には聞きそびれた、都の情勢の話も少しした。今は特に大きな戦や討伐なんかはないらしい。だから余計にマリウスの結婚話が広まりやすかったのだろう。

　侯爵は何らかの理由で結婚話を広めたくて、このタイミングを狙っていたのかも知れない。それを確認する機会はないだろうが。あってもちょっと困る。俺はなるべく一介の鍛冶屋でいたい。

　他のきな臭い話も特にはないようだった。例の帝国との手打ちの件も粛々と進み、貴族であるとはいってもそんなに身分が高いわけでもないので、そう大きな話にはならなかったようだ。

「平和なんだなぁ」

「だから昼にそう言ったろ。まぁ、そのおかげで暇してたのが多かったから、思ったより早く戻ってこれたんだけど」

　俺がのんびりと漏らした感想に、ヘレンが口を尖らせた。平穏だと傭兵の仕事は減ることが避けられない。それこそ仕事を変えられれば別だが、そうでなければ困ったことになるのもいるだろう。そんな状況は、ヘレンにとっては喜んでいいやら悪いやら複雑だっただろうな。

　しかし、商人たちほどではないにせよ、それなりにあちこちに潜り込むことが多い傭兵達でもきな臭い話を聞かない、のは本当に平和なのか、あるいは……

「アタイ達でもわからないような何かが起こってないことを祈ってるよ」

　ヘレンの言葉に、俺たち全員――ディアナは特に大きく――頷いた。

## プレゼント

2020年8月21日

　朝の日課を終えた俺たちは“御神体”の増えた神棚に向かって拝礼をする。木彫の女神像がヒヒイロカネのほのかな赤い光に照らされて、顔に赤みがさしているかのように見えた。

　その後、リケを除くみんなはサーミャを先頭に狩りへ出て行く。ヘレンは昨日の今日だったので大丈夫なのかと声をかけたが、返ってきたのはニヤッと笑った笑顔とグッと力をこめた力こぶで、俺はやれやれと首を振った。

　火床に火を入れて、温度が上がってくるまでの間、リケと作業の打ち合わせをする。

　リケは今日も量産品を作るらしい。俺はと言うと、

「指輪は完成したが、あれはあくまで仕事で頼まれた品だからな。うちからちょっとしたプレゼントを作って送ろうと思う」

「プレゼント、ですか」

　俺は頷いた。うちらしいものはもう決めてあるのだ。

「親方が作るとなると、やはり北方のなにかですか」

「そうだな。作るもの自体はそんな凄いものでもないんだが」

「親方の“凄くない”ですからねぇ……」

　リケの目に不審の色が浮かぶ。うちの特注モデルの性能を考えたら、凄くないものなんてないのは確かだが。俺は苦笑しながら続ける。

「作るのは普通の短刀だよ」

「タントー？」

「前にニルダに刀を打ってやっただろう？」

「ありましたね」

「あれのナイフくらいの大きさのやつだ」

「うちらしくていいですね、それ」

「だろ？」

　合口とも呼ばれる鍔のついていない短い刀を作り、それを“守り刀”としてマリウスの奥さんにプレゼントするのだ。

　刃物は「切れる」につながるので縁起が悪い、という話もあるみたいなのだが、守り刀の場合は「悪縁を断ち切る」とかにつながるとかで前の世界の日本では嫁入り道具にもあったとか聞いたし、良かろうと言う判断である。……「ことあらばこの刀で自害せよ」説は言わんほうがいいだろうな。

　まぁ、リケが言ったように、これなら「北方出身の鍛冶屋」らしい贈り物と言えよう。

　今回は硬度の違う鋼を挟み込む造り込みはせずに、１つの鋼だけで打つことにする。そもそも魔力こめちゃうと２つ鋼を作っても硬度はさほど変わらないしな。

　板金を１つ火床に突っ込んで温度を上げる。最近は指輪にかかりきりだったので、この作業も随分久しぶりのように感じる。

　適切なところまで温度が上がったら、金床に置いて鎚を振るい、形を作っていく。この量でナイフ１本ぶんだし、積み沸かしのようなことはしなくてもいいだろう。

　刀でいう素延べの工程まではすぐに終わった。２０センチと少しくらいの長く薄い板に

　このあと先端を切り落として切っ先を整形したら、断面が五角形になるように叩き、一旦やすりや砥石で表面を整えていく。

「ふむ」

　作業が終わって掲げてみると、そこにはちょうど今持っているナイフと同じくらいの長さの刀の姿がある。

　この後の工程はまだあるので一旦は形だけであるが、最終的にどんな形になるかはもう既に決まっていると言っていいだろう。

「キレイな形ですね」

「“反り”は入れないつもりだが、十分いい形してるよな」

「ええ」

　リケが頷く。こうやって北方様式の刃物が広まるのだろうか。革鎧に大太刀、なんてことにはならないとは思うが、うちを出たあとも、ある程度忖度というか配慮はしていただきたいところである。

「キリもいいし、飯にするか」

「そうですね」

「そう言えば、魔力はどれくらい見えるようになったんだ？」

「それがですね……」

　俺はパタリと鍛冶場のドアを閉める。それを女神像とヒヒイロカネが見守るように見ていた。

## 守り刀

2020年8月24日

　昼飯を食い終わった俺達は再び鍛冶場に戻ってきた。リケはナイフの量産を、俺は守り刀の仕上げをすることにした。

　守り刀を仕上げる前、俺はリケに聞いてみる。

「これをもう１つ作って、そっちの刃なんかにヒヒイロカネ使うのは無しだよなぁ」

「……そこまでやっちゃうと、家宝が変わってしまいません？」

「だよな」

　ただでさえ指輪がメギスチウム製＋妖精の祝福という天井知らずの貴重品になっているのに、そこへ追加で「ヒヒイロカネを使った短刀をあげるね！」なんてのは流石にマズいよな。

　リケが言うように、エイムール家の家宝が例の剣からそっちに変わりかねない。国王陛下から下賜されたものと言う由来があるので、おいそれとは変わらないだろうが。

　今の家宝は俺が打ったもので下賜されたものではなくなっているとしても、建前上はそのまま続いてるからな。

　それとは別にヒヒイロカネの加工方法については確立していかなければならないのだが。それは追々じっくりと取り掛かるつもりである。

「とりあえずこっちの仕上げをするか……」

「そうですね。私もこっちをやっつけます」

　俺は守り刀を、リケは板金をそれぞれ持ち、自分の作業に戻った。

　守り刀の形と表面を整えるところまでは昼までにできている。なので、焼刃土を刀身に置いていく。これで焼入れをすれば、刀と同じように鋼の組織に違いができて刃文が出る。

　土を置き終えたら、俺は一旦湯を沸かしに台所へ向かった。普段焼入れには水を使っている。焼入れで冷却するとき、土を置いたところとそうでないところは冷却速度が違うので反りが入るわけだ。

　逆に言えば、冷却速度が違わないようにすれば反りはあまり入らない。なので焼入れには鉱物油などを使い、全体にゆっくり冷却されるようにしたりするのだが、あいにくうちにはそういったものがない。

　なので、湯で冷却することで油冷と同じ効果を狙うわけである。湯温は沸騰するほどではないが、手を入れれば確実に火傷するくらいの温度に調整が必要で、これから刀身の加熱をしている間に下がる分も計算に入れる必要がある。

　まぁ、その辺は俺の場合チートがあるので随分と楽させてもらっている。

　ジリジリと土を置いた刀身を火床で加熱していく。焼入れに適した温度になる直前に、沸かした湯を入れておいた瓶をチラッと確認すると、丁度いい温度になっているようだ。

　火床から取り出した刀身を、俺はその瓶に縦に突き刺すように入れる。ジュウと言う音が響き、刀身からヤットコを伝って俺の手に冷えていく感覚が伝わってくる。

　それはチートによって、今の状態はどうなっているのか、どのタイミングで取り出すべきかを俺に伝えている。

　その伝えられたタイミングで瓶から取り出すと、ほんのわずかだけ反っている短刀の刀身が現れた。どうやら上手くいったようだ。

　その後、火床の火で軽く炙るようにして再び加熱し焼戻しをしたら、金床に刀身を置いてわずかな反りやどうしても出てしまう歪みを鎚で直していく。キンキンと鍛冶場に響くリズミカルな音を止めたときには、短刀は真っ直ぐになっていた。

　砥石の番手を荒いものから細いものへと変えていきながら、刀身を磨き、刃を研いでいく。前の世界では包丁であってもそれ専門の職人さんがいるほどの工程なのだが、ここも恩恵にあずかって自分で仕上げていく。

　最後に鉄の棒で表面を磨き、刃文を少し目立たせたら、刀身は完成だ。今回も切っ先は余り出ていない

　余り意識はしていなかったが、前にニルダに作ったものの縮小版のような雰囲気になっている。「特徴で誰の手になるものか分かる」とはよく聞くが、その理由がわかったような気がするな。

　落ちていく日の光に短刀の刀身をかざし、橙の光がキラリと反射したところで、カランコロンと鍛冶場の鳴子が鳴った。狩りに出ていた皆が戻ってきたのだろう。

「残りは明日だな」

　俺はその音を聞いて腰を伸ばしつつ、リケに声をかけて鍛冶場の片付けをはじめるのだった。

## いたずらっ子

2020年8月26日

　家の鳴子が鳴ったあと、バターンと家と鍛冶場をつなぐ扉が開いて、ディアナが飛び込んできた。

　こういうとき飛び込んでくるのはサーミャであることが多いので、なかなかに珍しいものを見たなと思いつつ、声をかける。

「おかえり。どした？」

「ただいま。お水って使ってもいい？ 飲まないほう」

「ん？ もちろん。今日はもうこっちも終いだし」

「わかった。ありがとう」

「なんかあったのか？」

　元々、内外どちらにいたかによらず、毎日の仕事終わりには湯か水で体を清めることになっている。鍛冶場での作業では汗をかくし、狩りの場合はそれに土などの汚れも加わるからだ。

　それはディアナも分かっているので、わざわざ聞きに来たということは、予定外に使う事情があるということだ。

「今日は大きな猪を仕留めたんだけど、それを湖に沈めるときにルーシーが飛び込んじゃって」

「ああ……。最近ちょっと暑くなってきたからな……」

　湖はあちこちで水が湧いている。なので冷たい場所が多い。暑いときに飛び込んだら気持ちが良さそうだ。俺も今時点でそうしたいくらいだし、ルーシーの気持ちはよく分かる。

　俺の言葉にディアナが頷き、続けた。

「飛び込むだけなら良かったんだけど、そのあとそこらを転げ回ったもんだから、もうドロドロ。もう１回湖に入れようかって皆で話したけど、また同じことしたら意味ないし、大きいタオルは持って行ってなかったから止めたのよ」

「なるほど。ルーシーを洗うくらいの水は残ってるはずだから、全部使っちゃっていいぞ」

「うん、わかった」

　ディアナは頷くと、バッと飛び出していく。扉を開けたときにルーシーがワンワン言っているのが少しだけ聞こえた。

　てんやわんやになっただろう、と思ってテラスでの夕飯のときに聞いてみると、予想に違わず大騒ぎになったらしい。

「いきなりだったからな」

「本人としては皆についてくくらいのつもりだったんだろうけどね」

　サーミャとアンネが少し苦笑がまじった笑顔で言う。アンネもなんだかんだルーシーのことを気に入ってるみたいなんだよな。基本的には言うことをよく聞くいい子だからな。クルルもだが。

「もう“迅雷”でも追いつかないか」

「あの速さは無理。“黒の森”で鍛えられてる猟犬に追いつく人間なんて、どこ探してもいやしないよ」

　俺が笑いながら聞くとヘレンが首を横に振りながら言った。ルーシーの運動能力は向上目覚ましいようだ。

　それが魔物になっているからかどうかまでは分からんが、元々この森で暮らす生き物なのだ。人の身で追いつくことが出来るのなんて、ほんの僅かな期間だけだろう。

　実際、今日もまだ子狼ながら探索と追い出し役の両方を立派に手伝ったらしい。そのご本人は今日の「仕事」の疲れか、はたまた体を洗われた疲れか、ガツガツと肉を食べた後にすぐ俺の足元で丸くなって安らかに寝息をたてている。

「クルルちゃんも走るの速くなりましたね」

　リディがこちらはテラスの外で丸くなっているクルルを見て言った。それを聞いてディアナが頷く。

「あの大きさの猪だったのに、今日は苦もなく牽いてたし、帰りにルーシーと追いかけっこしてたわね」

「クルルも成長してるのかな」

「たぶん。走竜なんて飼ったことないからわからないけど」

「体が大きくなったら小屋を建て替えてやらんとだな」

「そうねぇ」

　俺とディアナもクルルの方を見る。クルルの能力向上がこの森の魔力によるものなのか、それとも肉体的な成長なのかはわからないが、育つのならそれに合わせた環境を用意してやらないといけない。

　かわいい我が子達のためだ、大体のことはしてやるつもりである。

　夕飯が終わって後片付けをし始めると、クルルが起き出しそっとルーシーの首根っこを咥えて持ち上げた。ルーシーは眠いのか、そういう習性なのかされるがままになっている。

　そろりそろりと咥えたルーシーを気遣うように小屋へ戻るクルルを見送りつつ、俺達は今日一日を終えた。

## 夏が来る

2020年8月28日

　翌朝、水を汲みに行こうと家を出ると、元気なクルルとルーシーに出迎えられた。

　どんなに疲れていても一晩寝れば回復できるのは若さゆえだろうか。大変に羨ましい。歳を取るとどんどん回復量が減っていくからな……。上限値そのものも減っているような感覚があるが。

　それはともかく、俺とクルルはいつも通りに水瓶を２つずつ持つ。ルーシーには小さい壺に短めの紐を結んで口にくわえられるようにものを用意して渡すと、紐をくわえてご機嫌さんである。

　ワンと吠えると落ちるので、一生懸命に尻尾をパタパタと振っていた。

「それじゃあ行こうか」

　俺はクルルとルーシーの頭をなでて、一緒に水汲みへと向かう。今日はまた後で沈めた獲物を取りに湖へ来るのだが、大物の獲物と一緒に水もとなると流石にクルルがかわいそうだし、彼女たちも朝のこれを待っているみたいなので多少二度手間ではあるが汲みにいくのだ。

　湖に着いてから水を瓶と壺に汲み、俺とクルルとルーシーの身体を綺麗にする。ルーシーは昨日ドロドロになりすぎたので洗われているのだが、自ら率先して湖に飛び込んだ。

　もしや「湖＝身体を綺麗にするところ」という認識なのだろうか。いや、水汲みのときは綺麗にした後でゴロゴロはしないしなぁ……。

　やっぱり暑いのと皆が入っていったからついてった、というのが大きそうだ。

　ひととおり終わったらすぐに帰ることにする。朝の日課を終えたらまたお出かけだしな。

「帰りは分かります！」とばかりに俺たちを先導して、なかなか派手に壺から水を撒き散らかしながら、ご機嫌に歩いていくルーシーの後を俺とクルルはついていった。

　朝の日課をすべて終えると、準備をして一家総出で湖へ獲物の回収に向かった。今はクルルもいるし、人数も増えたので本来はこれだけの人数で向かう必要はない。

　ないのだが、半分はピクニックのようなものなので、息抜きがてらである。

　陽の光が少し強くなった森の中を進む。樹々が遮ってくれているので直射日光はほとんど浴びなくて済むし、駆け抜ける風も涼やかなので感じにくいが、気温が上がっているような気がする。

「暑くなってきたなとは思ってたが、こうやって外に出ると実感するな」

　俺はそうボヤいた。以前よりも少し汗が出るのが早いように思う。

「鍛冶場に篭もってると、どのみち暑いですからねぇ」

　斧を持ったリケがウンウンと頷いている。熱した鉄や燃える炭という高熱源がほぼ１日中存在する鍛冶場はかなり暑い。

　ある意味強制的に暑熱順化させられているようなものなので、暑さには強くなってきているが、それなら暑さを感じないかというと、それはまた別の話だからな。

「もう少ししたらもっと暑くなるぞ」

　そう言ったのはサーミャだ。この森のことなら彼女の言うことに間違いはない。

「鍛冶場から出ても暑いのはちょっと勘弁して欲しいなぁ」

　慣れてきても暑いものは暑い。合間合間に外に出たりして涼をとっているが、それが無くなると作業効率的にもよろしくないような気がする。

　ミストシャワーみたいなものを作るべきだろうか。そこまで行かなくても、ただのシャワーのようなものでも作ったほうが良いのかも。

　いずれ火床や炉の廃熱で湯を沸かすような仕組みも作りたいしなぁ……。

　それも作ったところで、今度は「そんな大量の水をどこから確保してくるのか」が問題になる。耕作地もあることだし、いよいよ井戸を掘ることも視野に入れないとダメっぽいな。井戸を掘る道具は俺が作れるとして、思ったあたりに水が出てくれるかは別だ。

　もし水が出なければ、湖から引いてくる必要がある。前の世界で無人島に水路を通しているＴＶ番組を見たが、あれと同じようなことをここでもやるわけだ。

　アレでも随分と時間がかかってたので、こちらでもそれなりの時間が必要になるだろう。できれば井戸で済ませたいところだ。

「あそこ以上に暑いとこなんて、そうそうないでしょ。あんな暑さが外でもあったら、木や草花が全部枯れちゃうわよ」

　暑さ対策と水資源についてアレコレ考えていると、やや呆れた感じでアンネが言った。彼女はうちに来てそんなに経ってないから、暑さには一番慣れていない。

「そうだなぁ。あまりに暑すぎてほとんど砂や岩しかないところもあるくらいだからな」

「そうなのか？」

　俺が砂漠のことをチラッと言うと、意外にもヘレンがのってきた。傭兵であちこち行ってたはずだが、砂漠には行かなかったのかな。

　俺は頷いて、ヘレンに砂漠の説明を始める。その話に皆が（多分理解してないであろうクルルとルーシーも）聞いている。

　こうして、俺たち家族は湖までのんびりと、息抜き目的を十分に果たしながら向かっていった。

## 獲物の回収

2020年8月31日

　皆が獲物を沈めたらしい湖のほとりへとたどり着いた。

　ルーシーが波打ち際でソワソワしているので、

「湖に飛び込んだら、またジャブジャブされるぞ」

　と声をかけると、後ずさりしていた。自分で飛び込むのはいいが、洗われるのは好きでないらしい。

　ディアナがしゃがんでおいでをすると、素直に抱っこされている。基本的には賢い子なのだ。親バカかも知れないが。

　クルル、俺、サーミャ、それにヘレンとアンネの力がある５人で沈んでいる獲物を引っ張りあげる。

　湖から姿をあらわしたのは肉だけでも２００ｋｇを超えそうなバカでかい猪だった。

「こりゃあデカいな」

「だろ？」

　サーミャがエヘンと胸を張った。内臓なんかはここに持ってくるまでに仕留めたその場で抜いてある（それがこの“黒の森”の作法でもある）が、それでもこの重さということは元の重さはとんでもなかっただろうな。

「よく仕留められたな」

　前の世界の知識だが、大きな猪は多少怪我を負っても平気で動いて逃げると聞く。脊髄に損傷を受けても暫くは動いていることがあるらしい。損傷箇所にもよるのだとは思うが。

　引き上げる間にリケとリディが木を伐り倒して運搬台を作ってくれていたので、そこに皆で引き上げながらサーミャが言った。

「丈夫で深くまでぶっ刺さるエイゾウ工房の矢じりのおかげだよ。この大きさだと皮膚も硬いからな」

「それにしたってきちんと狙ったところに当てないと厳しいだろう？」

「まぁ、そこはアタシも含めた皆の腕だよ」

　ワン！ とルーシーが吠えた。彼女も立派に仕事を果たしたようだ。きっと森の中をサーミャの指示に従って走り回ったに違いない。それで暑くなって飛び込んだのだろう。

　獲物を引き上げた人間で運搬台も引っ張る。クルルのおかげでだいぶ楽ではあるが、それでも十分な重さを感じる。

「森の中用の荷車とかも考えたほうがいいのかも知れん」

　運搬台にくくりつけた縄を引きながら、ぽつりと俺は言った。板バネ式のサスペンションでも、十分なストローク……上下する幅を取れば森の中でも使えるはずである。

　問題はこの運搬台に使っている伐り倒した木は、このまましばらく乾燥させて材木として再利用しているということだ。荷車を利用するようになれば、それが得られなくなるので、他の方法で材木を調達してくる必要がある。

　今のところ予定としては母屋からクルル達の小屋へいく渡り廊下と、もしかしたら風呂場を増設するかもってとこなので、もし足りなくなりそうなら、乾燥時間も考えて早めに伐り出してくればいい。

「今でも湖まで結構大変だかんなぁ」

　俺の独り言にヘレンが反応した。仕留めた場所から湖まで引きずってくる時は運搬台もないし、うちでは力がある組に入る俺もいない。

　ヘレンも力がある方なのだが、それでも大変だと言うことは、何かしらの対策を打っておいたほうが良さそうだ。これは今回１回限りなどではなく、今後も続いていくのだから。

　えっちらおっちらと森の中を途中小休憩も挟みながら引きずり、昼前に家に戻ってこれた。朝一番で家を出たから、結構な時間が経過していることになる。これを考えても、やはり森の中用の荷車は必要だろうな。

　引きずって来た組が木に猪を吊るすと出番はそこまでで、サーミャ、リケとリディ、そしてディアナによって猪は肉へと姿を変える。もう皆手慣れたもので随分と素早い。

「あっという間だったな」

「そりゃ回数をこなしてれば慣れるわよ」

「それはそうか」

　ナイフを布で拭いながらディアナが言い、俺は笑いながら納得をする。傍らでルーシーがソワソワしているので、ディアナが肉を１片切り分けて「待て」の練習をしている。

「まだよ」

「わん」

「まだよー」

　ルーシーがお利口さんにおすわりをしてジーッとディアナを見つめる。あ、ルーシーが少しヨダレ垂らした。

　同時にディアナの眉尻が下がる。これ、どっちかと言うとディアナがルーシーをかわいそうに思ってよしを言うまでの耐久になってないか？

「よし！」

　そんな俺の変な心配が聞こえたわけでもないだろうが、ディアナの号令でルーシーがハグハグと肉に食らいつく。生肉をやるのはあまり良くないと前の世界で聞いたが、この森の狼で魔物なのだ。多少は目をつぶるべきか。

　肉を食べ終わってクルルとはしゃぎ回るルーシーを家族皆が笑顔で見守っている。俺はそんな光景に小さな幸せを感じながら、自分たちの昼食を用意すべく家に引っ込んだ。

## 鞘

2020年9月2日

　昼飯は保存に回さなかった肉をシンプルに焼いて出した。獲物を持って帰ってきた日のお楽しみでもある。

　ちょっとしたお祝いの時のは大抵保存してある肉なので、新鮮な生肉を焼いて食うのはこの時くらいだからな。

　いずれとても大きなお祝い事がうちであれば、その時は前日に獲物を持って帰って当日に調理するのだろうが、今のところそんな予定はない。

　まさかマリウスの結婚式に猪担いで行くわけにもいかないしなぁ……。

　昼飯が終わった後は、めいめいの自由時間と言うことになっている。リディ達は畑を見に行った。そろそろ香草の一部は収穫出来るかもと張り切っている。

　リケはナイフを練習するそうなので、鍛冶場の炉と火床に火を入れた。俺もついでに守り刀の仕上げをしてしまうことにする。

　刀身の方は出来上がっているから、後は鞘と柄を作れば良い。今回は結納、と言うか結婚の記念品としてのものなので、白木で鐔もなしにする。一応実用も出来なくはない。

　いや、実用出来なくはないというと語弊があるか。仕上がり自体は特注モデルだから、切ろうと思えばなんだって切れる。

　とは言え、ディアナから聞いている限りではジュリーさんは特に剣が達者でもないみたいなので、基本どこかにしまうか、飾っておいてもらってもいい。

　特注モデルが切れすぎて危ないことはマリウスもよく知っている（何せ使ったことがある）から、滅多なことにはならんだろう。

　確保しておいた鞘用の木材に守り刀の刀身をあてて、大体の大きさを測り、外形をチートを使ってナイフで整える。

　全く同じものを2枚用意したら、刀身が収まるようにそれぞれ刀身の半分の厚さ分をナイフを使って削っておく。もちろん形は刀身と同じだ。

　２枚にニカワを塗って貼り合わせ、塗ったあたりに火を入れた火床の火で軽くあぶると、ゴツゴツとした鞘が出来上がる。こっちはニカワがもう少し乾くまで、革紐でギュッと縛っておく。

　今度は

　１時間と少しの時間を空けて、鞘の方の革紐を外す。接着剤を完全に硬化させるには丸一日置いておく必要があるが、外形を加工するくらいならもう問題ない。

　ナイフで鞘の外形を整える。１回ナイフを鞘の外を滑らせるたびに、シュッと音がして、剥がれるように木屑が落ちていく。

　しばらくその作業に没頭していると、やがて鞘は断面が楕円に近い綺麗な姿に変わった。前の世界だと一番見たことがあるのはヤクザ映画ではあるのだが。

「ふーむ」

　俺はその鞘を前に唸る。このままでもいいのだが、もう少し何か装飾のようなものを施したほうがいいだろうか。

　ここら辺の作法は前の世界に従う必要もないし、こちらの作法と多少ズレていたところで「この辺りに合わせました」で通る類のもののような気もする。

「よし」

　俺は改めて腕まくりをして、ナイフを手に取るとチートで鞘に穴があかないよう、表面に薔薇の花のレリーフを彫刻していく。

　チートを使えばどこをどう彫ればいいのか全てわかるので、作業時間も短くて済むしミスもないが、それでも凝ったレリーフとなればそれなりの時間はかかってしまう。

　作業を始めたのが午後だったこともあり、片側のレリーフが完成した頃には、もう日が沈みかけていた。

　オレンジ色の光に鞘をかざすと、満開の薔薇がオレンジに輝いていた。これはこれで和洋折衷という感じで悪くない。

「ふむ」

「あ、出来たんですか？」

　自分の作業を終えたリケが俺が鞘をかざしているのに気がついた。

「ああ。一旦はこれで完成でもいいとは思うんだが……」

　手にした鞘をリケに差し出す。リケは恭しく受け取ると、鞘の

「やっぱり親方のは凄いですねぇ。元々こういう木だったのではとすら思えます」

「そんなにか」

「ええ」

　俺としてはチートの手助けでできることをやっているだけ、という感覚なので少し気恥ずかしい。

「でもなぁ」

「この出来で何か不満が？」

　怪訝そうにするリケに俺は頷いた。

「やっぱり、着色が出来ればなって」

「ああ……」

　うちにはこういった時に着色できる顔料や漆が今のところ存在しない。あまりド派手なものを作る気がなかったからだが、こんな時はせめて薔薇を赤くするとかはしたいように思う。

　派手にはなるが、鞘と柄自体も白木ではなく、白にしたいし。平たく言えばドスっぽさを限りなく排除したいのだ。

「うーん、今からだとカミロさんに頼むのは厳しいですかね」

「あいつのところなら扱ってるかも知れないけど、間に合うかな」

「指輪の方はもう納品できるんですし、結婚式まではまだギリギリ時間がありますから、もし店にあればそれを使うというのでは？」

「それしかないか」

「なかったらまた何か考えましょう。着色できる植物をリディさんが知ってるかも知れません」

「それもそうだな」

　森の中の鍛冶屋の製品としてなら、森の植物を使って彩色したものもなかなか気が利いているように思える。

　俺とリケは着色について、あれはどうだこれはどうだと話し合いながら、鍛冶場の後片付けを進めていった。

## 材料の確保

2020年9月4日

「なるほど。うちで育てているものにはないですが、森を探せばあると思いますよ」

　テラスでの夕食の時に、リディに相談してみると、そんな答えが返ってきた。

　前の世界でもインディゴは藍なんかの植物から抽出されて染料として用いられていたから、似たようなものもあるだろう。そう言えば、夏休みの自由研究で草木染めとかやったなぁ……。

「どういう色が必要なんですか？」

「赤と緑、あとできれば白かなぁ……」

「白ですか……」

　リディは考え込んでいる。白の塗料はなかなか手に入りにくい。この森で調達するなら湖にいる貝の殻を焼いて作る、いわゆる

「白はこの森のものでは難しいでしょうね。原料がなかなか見つからないと思います」

　もう一つ、石灰岩を使う方法もあるが、この森に石灰岩があるかどうかはバクチになるだろうな。遠くに見える山に行けばワンチャンかも知れないが、あそこまで行って空振りでしたはちょっと避けたい。

「白の方はカミロのところで聞いてみるよ」

「赤の方は根っこを材料にする植物を何回か見かけた記憶がありますから、それを使うのもいいかと。緑はいくらでもありますから、心配はいりません」

「そうだなぁ……」

　今度は俺が考え込む番だった。うちから贈る品ということを考えると、なるべくこの森で調達したもので揃えたい。

　赤と緑ならほぼ確実に手に入るということであれば、そこだけでもこの森のものにするのはアリか。

「納品はもう出来るんだっけか？」

「大丈夫ですよ。“普通の”の数は足りてますし、“高級なの”は無くてもいいって話はされてますしね」

　俺がリケに確認をすると、そう答えが返ってきた。うちでほぼ唯一「仕事」と言っていいカミロの店への納品は安定して回せている。

　そろそろ拡充を図るべきか、それとも事足れりと休日を増やしていくかもそろそろ思案のしどころかも知れない。

　それはともかく、これで明日の予定は決まったな。

「じゃあ、早速明日にでも探しがてらお出かけするか」

　俺がそう言うと、サーミャとアンネがソワソワしはじめた。サーミャはお出かけが好きだし、アンネは家族になってから初めての経験になる。期待の高さが伺えるというものだ。

　お出かけというワードに反応したのだろう、クルルとルーシーも走り回っている。遠足前日テンションで寝られないということがないといいのだが。

「そうと決まれば明日に備えて早めに寝るか」

　そう言って、俺は夕飯の残りを始末しにかかった。

　翌朝、毎日の日課を一通り終えて、家族全員が家の庭に集まった。一番ウキウキしているのはクルルとルーシーだが、見たところ、アンネも負けず劣らずである。

　以前には熊に出くわした（ルーシーがうちに来るきっかけになったアレだ）ので、皆護身用にと自分の武器を持ってきたが、アンネも両手剣を持って出ようとして止められていた。

　俺の

　アンネは両手剣の代わりに柄をかなり短くした槍を持たされることになった。アンネは元々のリーチが長いから、多少短くしても大丈夫だろう。

　採集したものはクルルに任せることにした。紐をつけた籠を体の両脇にぶら下げてご機嫌である。ルーシーがそれをみて羨ましそうにグルグルとクルルの周りを回っているが、お前はもっと体が大きくなってからな。

「それじゃ出発するか」

『おー！』

　こうしてテンション高く、我が家一行は森へと進んでいった。

## 赤

2020年9月7日

　森の樹々が最近ますます強くなってきた陽の光を遮っている。そして今日はいつもより風が強く、涼しさを森に届けようとしているかのようだった。

「うちのあたりは木がないけど、これだけ風が吹いてくれたら多少は涼しいな」

「この時期は大抵、風が強いんだよ」

　俺の言葉にサーミャがそう返した。草原と森とで日照の違いがあって、この時期は日差しが強いから気圧差を生んでいるとかかな。

「それだと矢が当たりにくくないか？」

「そりゃ勿論」

　サーミャは肩をすくめたが、すぐに自分の腕をポンポンと叩いて言った。

「まぁ、そのへんを見極めるのもアタシらの腕の見せどころだな」

「流石だな」

「まぁな！」

　今度は胸をはるサーミャ。褒められたときには謙遜しないのが彼女のいいところだ。家族皆の顔に笑みがこぼれる。

　今日は狩りとは違うし、採集する植物のほうは最悪見つからなかったら見つからなかったでいいや、くらいのつもりなので皆のんびりと森の風景を楽しんでいるようだ。

　しかし、危険な動物も多くいるこの森である。警戒するに越したことはないだろう。

　そこまで思ってから、俺は家族皆を見回した。全員が揃ってたら、小規模な部隊くらい余裕で追い返せそうな気がしてくる。弓の達人に、一騎当千の傭兵、都では知られた剣技の達人、両手剣を扱える

　そして弓と魔法が使えるエルフに、魔物化した狼（まだ子どもだけど）である。クルルもその走力を活かして体当たりとかすれば、かなりのダメージを与えることは間違いないだろう。間違ってもかわいい娘にそんなことはさせないが。

　戦力的にカウントしにくいのはリケだけだ。と言っても、他が強すぎるだけなような……。

　俺は頭に浮かんだちょっと怖い想像を、プルプルと頭を振って追い出すのだった。

　うちの中では一番鼻が利くルーシーが、毛の色が緑のリス（食うところがあまりないらしい）や木葉鳥なんかを見つけて駆け寄っては、そっちに向かってワンワンと吠え、ピャッと逃げられてキューンと悲しそうな顔をしている。

　まぁ、あれ本人的には遊ぼうくらいのつもりなんだろうな。あのまま野生にいたら、もっと狩りの本能が身についていたのだろうか。もしくはこれから成長の過程で覚醒するのかも知れないが。

　途中で魔物としての本能が目覚めた場合、覚悟ができるんだろうか。引き取った時は始末もやむなしと決意したが、これだけ長く家族として暮らしていると、その決意が鈍っていっているのを実感する。

　今も順調に高速で俺の肩のＨＰを減らしているディアナはどうなんだろうな。もし、その時がきたら、俺１人だけが躊躇するようなことがないようにはしたいが……。

　いや、今は幸せなこの時間を目一杯楽しむことにしよう。

「あ、あれですね」

　しばらく森の中を進んでいくと、リディが指を指した。指の先には小さな花をつけた低木のようなものが見える。みんなで近づいていくと、低木と言うよりは茎がとても太い草のような植物だった。

　草だと判断したのは表面が樹皮のようではないからだが、ここは“黒の森”だ、どんな植物が生えていてもおかしくはない。

「これの根っこを煮出して、その液を乾燥させるんです」

「へえ」

「その大きなやつを掘ってみましょうか」

　リディに言われた、株の大きなものを掘り出してみる。木の根のようだが、あまり太くはない根がごっそりと姿を表した。一見すると根自体はそんなに赤くないようだ。確か日本茜の根は黄色から赤みの強いオレンジっぽいのが多いんだっけか。

「根っこを切ってみてください」

「こうか」

　生えている根っこのうちの１本をナイフで切ってみると、鮮やかな赤い断面が姿をあらわした。誰かが思わず漏らした「うお」という声が聞こえる。それも仕方ないなと思える赤さだ。日本茜の根の断面を見たことはないが、流石に血が滴ってきそうなほど真っ赤ではないだろう。

　しかし、これは完全に赤というか緋色というか、とにかく「こりゃ真っ赤だな」と言って問題ないくらいに赤い。動物も色々と違いがあるし、やっぱり前の世界とはなんか違うんだろうな。

「これくらい赤いなら大丈夫ですね。これを持っていきましょう」

「株によって赤さが違うのか」

「ええ」

　リディは静かに頷いた。

「余り育ってないものは赤さが薄いのですが、生長するに従って根っこの赤さが増していきます。これくらいだとそうですね、３年位生長したものに見えますね」

「そんなにか」

　再び頷くリディ。そんなものをあっさり掘り返して良かったものだろうか、と元日本人的には考えてしまうが、これはこれで自然の一部ではあるか。

「これだと木材でも十分に色がつくと思いますよ」

　言われて今度は俺が頷く。根っこについた土を払って、クルルの背負った籠に入れると、彼女は「クルルルルル」と機嫌よく鳴いた。

「よしよし、今日はたくさんお手伝い頼むな」

　クルルの首筋を軽く叩いてやりながら言うと、クルルは任せとけと言わんばかりに一層大きな声で「クルー！」と鳴き、家族に笑いが広がった。

## 別の収穫

2020年9月9日

「もったいないから、色のやつ以外でも美味そうな果実とか、見つけたら持って帰るか。畑に植えたいものでもいいぞ」

　風が渡る森の中を進みながら俺が言うと、皆が色めき立った。特にリディは目をキラキラさせている。目当てのものがなにかあるのだろう。

　ルーシーは多分よく分かっていないと思うが、皆が嬉しそうにしているのを見てか、尻尾をブンブン振り回した。

「あんまり積むとクルルが大変だろうから、ほどほどにな」

　そんな俺の言葉にクルルは任せろと言わんばかりに、フンスと鼻息を荒げた。俺はそのクルルの首筋を優しく叩いてやる。うーん。

「クルル、ちょっとだけ体が大きくなったか？」

「クル？」

　以前よりも首にやる手を若干持ち上げているような気がする。気がする、というレベルの話なので俺の勘違いの可能性は十分にある。クルルは可愛らしく首を傾げている。

　さすがに走竜の年齢まではよく分からないのだが、かなり若いのだとするとまだ身体が大きくなる可能性は十分にある。

　猫は１年で成猫になると言われているが、もうしばらくの間は身体が大きくなっていく子がいるしなぁ。人間でもいわゆる成長期を超えてからでも、身体が大きくなる（腹回りにつく憎きあいつの話ではない）人はたくさんいる。

　あとは他所で暮らすときとウチで暮らすときの大きな違いがある。魔力の濃さだ。“黒の森”自体が魔力の濃い地域である上に、その中でも特に魔力の濃い箇所に我がエイゾウ工房は立地している。

　魔力を摂取しているクルルにその影響があると考えるのは、そう突飛な話でもあるまい。ルーシーもすくすくと大きくなっているが、まだどう見ても子狼なので、成長期だからなのかの判別はつきにくい。

　この森の狼は見る限りでは体長で１００センチかもう少し大きいくらいなので、そこよりずっと大きくなれば魔力の影響が疑われる。

　うちの娘の成長色んな意味でしっかり見守ったほうが良さそうだな……。

「あっ、あれを根っこごと持って帰りましょう」

　リディが指差した先には、肉厚の葉を持った植物が生えていた。

「

　前の世界で言えばアロエに似ているだろうか。火傷に効くと言われているのも似ていると言えば似ている。まぁ、前の世界のアロエの方は成分の関係やらなんやらで、やらないほうがいいらしかったのだが。

　インストールの知識でも効くとなっているので、こっちの世界のこれはちゃんと効くのだろう。

「確かにうちだとあったほうがいいな」

「ええ」

　うちでは高温の物体を日常的に扱っているにも関わらず、幸いなことにこれまで前の世界で言うところの熱傷深度II度以上の事故は発生していない。

　だが、軽い火傷は日常茶飯事だ。ほとんど跡も残らないくらいの軽いものだが、今後うちで処置できるレベルの火傷であれば早く治るにこしたことはない。

　全員が嫁入り前のお嬢さんばかりなのだ、肌については気を使って使いすぎることはあるまい。

　俺とヘレン、アンネの３人で火傷に効く薬草の株を掘り起こす。うちの畑に植える想定なので、かなり深めに掘ってみたが、それでも根っこの先は切れてしまっていたくらいに長かった。

「よっと」

　植え替えなので土は落とさず、茜のような植物の入っていた方とは逆の籠に入れておく。本当はちゃんと根の保護もしたほうがいいんだろうけどな。

　リディから特に指示もないので、このまま家に帰って直ぐに植え替えるなら大丈夫なのだろうと俺は判断した。

「動くとさすがに汗がどっと出るわね」

　パタパタと顔を手で仰ぎながらアンネが言った。風が通って気持ちいいとは言っても気温は上がってきているようだからなぁ。鍛冶のときみたいに温度が細かく分かればありがたいのだが。

　……といっても、あれもデジタル表示みたいに分かっているわけではなく、「ベストな温度はここ！」みたいなのが俺には認識できるってだけだから、気温が分かっても「今気持ちいいくらいの気温ですよ！」が認識できて「いや分かってるし」となるだけかも知れない。

「着替えとタオルを持ってくればよかったな。そうすれば湖で水浴びできたのに」

　ちゃんとした水着はない。のだが、俺は皆で水着を着て水浴びをする情景を知っているような気がした。

「もしそれをしても、エイゾウだけ仲間外れだろ」

「もちろん」

　ヘレンの言葉に俺は頷いた。中身は４０、外見でも３０の男がそこに混じるのは相当にはばかられる。

「じゃ、なしだな」

　続くヘレンの言葉に頷いたのは俺以外の全員である。なぜかクルルとルーシーも鳴いて同意を示しているように見える。

「それじゃあ、そのうち濡れても透けないような服がもしあれば、それを着たままでやるか」

「へぇ、北方には水浴び用の服があんのか」

「いや、ないぞ。もしあれば、の話だ」

「なんだよ」

　呆れ返ったようにヘレンは言って、俺の背中をバシンと叩いた。俺は「痛っ」と言いながら、そんな機会が来るのも悪くはないかも知れない、とそう思うのだった。

## 外でのお昼ごはん

2020年9月11日

「先にここらで昼飯にするか」

　何度か釣りに来たことがある川にたどり着いた。ここまであちこちへうろついていたので、結構な時間が経っているはずである。

　天を仰ぎ見ると、太陽はその恵みを最も強く与える位置に差し掛かろうとしていた。

　ここの川原なら昼食をとるのに問題はあるまい。俺が言うと、クルルとルーシーも含めた全員から同意の声が返ってきたので、早速準備を始めることにした。

「あっちにいた時は、こういう機会ってあんまり無かったわね」

　昼食の準備を進めながら、しみじみとアンネが言う。

「国の偉い人は管理してる森や山で狩りとか、野原でお茶会とかしてそうだなと思ってたけどな。貴族同士の付き合いって大事だって聞くし」

「ええ……」

　俺が言った言葉にアンネは少し引いている。あれ、違うのか。

「そういうことに重きを置く人もいることは否定しないけど、そもそも家族でのんびりこういうことするのと、事実上戦場と同義の貴族同士の社交とは違うでしょ」

「なるほど。そりゃそうだ」

　俺は素直に頷いた。まぁ、あの皇帝陛下がしょっちゅう「予は今日暇だからお前の母上と一緒にピクニックに行くぞアンネ！ おお、ハリエットも一緒にどうだ？」と言っているところは想像できな……いや、できるな。むしろ言いそう。

　だからこそ、そういうことをあまりしたことがないってのに違和感があったのかも知れない。

　でも、どう考えても忙しくないわけがないのだから、機会が少ないのも当たり前なんだよな。それなりに周囲に人はいたのだろうけど。

　俺が「すまん」と一言言うと、アンネは手をひらひらと振った。

「なんだそれ」

「エイゾウがよくやってるでしょ。あれの真似」

「ああ……」

　つまりは問題ないとか、気にするなってことだが、こう客観視すると少し気恥ずかしいかも知れない。でも癖みたいなもんだからなあれ。心の片隅にでもとどめておこう。

　準備が終わって、全員車座に座って手を合わせる。

「いただきます」

『いただきます』

「クルルルル」「わんわん！」

　今日の弁当はサンドイッチ……のようなものだ。前も作った角煮バーガーに近いが、畑で育てた生食が可能な香草と、根菜を戻したものも挟んである。

「うまい！！」

　一際大きな声を上げたのはサーミャだった。彼女はこういう食べ物が大のお気に入りみたいなのだ。以前にディアナからこっそり、彼女が狩りのときの弁当を楽しみにしていると聞いたことがある。

　それ以来、以前にもまして俺が腕によりをかけているのは言うまでもない。肉を確保してくれていることもあるしな。

　飲み物は家で淹れてから、そのまま持ってきたミント茶だ。すっかり冷めているが、じんわりと暑い今日みたいな日にはぬるくてもいいし、ミントの清涼感がありがたい。

「しまった、金属の容れ物にして、川で冷やせば良かったな」

　グッと１杯目を飲み干した俺はそうつぶやいた。そうすればアイスティーに近いものが楽しめたかも知れない。冷えるまでに相応に時間はかかるだろうが、冷たいのとぬるいのではまた違っていただろう。

「まぁまぁ、今日はこれでいいと思いますよ」

　同じく１杯目を飲み干して、ほうっと息を吐いたリケがそう言った。ドワーフだからなのか個人の好みなのかは分からないが、彼女はどうも冷たいものは苦手らしい。

「もう少し暑くなってくる前に、井戸を掘ってみるか……」

　井戸の底は地上よりはかなり温度が低い。冷やしたい、というか温度が低いままにしておきたいものを、そこに沈めておけば冷たい果物なり水なりを飲食できるわけだ。

　今年は間に合わなくても、来年以降使わなくなるわけでもないし、風呂計画も一歩前進するわけだし、そろそろやっても良いタイミングではあるな。

「水の確保もできますしね」

「畑の水にも困りにくくなるしな」

　俺がそう言うと、聞きつけたリディがこっちを見てウンウンと首を縦に振っている。どうも彼女の今一番の関心事は畑らしい。エルフの種も蒔いてあるからだろうけど。俺が笑いながら、

「わかった、なるべく優先するよ」

　と言うとリディは、

「お願いします」

　あまり大きくない声で返してきた。井戸掘りも頑張るか……。

　俺はのんびりと川原を眺める。昼飯を食べ終わったサーミャとヘレンが、クルルとルーシーの鬼ごっこだか追いかけっこだかの相手をしてやっている。

　川原なので足元が良いとは言い難いのだが、４人ともなかなかのスピードで走り回っていて、バターになってしまうのではとすら思えてくる。なんせ１人は虎だし。

「はしゃぎすぎてコケたり、川に落ちたりすんなよ！」

　俺が大きな声でそう言うと、４人から「わかった」の声が返ってきて、俺は小さくため息をつきながら、２杯目の茶をカップに注いだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

本日9/11にコミカライズ版３話が更新になりました。こちらも合わせてご覧いただけると大変嬉しく思います。

https://denplay-comic.com/

## 緑

2020年9月14日

　相当に賑やかな昼飯を終えて、俺たちは再び森の中を歩き始めた。川原は流水が近くにあったからか、ずいぶんと涼しかったので森の中の暑さをより感じる。

「まだ暑くなるのかな」

「そうだなぁ。もうちょい暑くなるな」

　俺が漏らした言葉に、サーミャが返事をした。

「そうかぁ……」

　普段の昼間は猛暑の鍛冶場に籠もっていても、暑いのがあまり得意でない俺はげんなりとする。このあたりは雨が少ないのもあってか、さほど湿度が高くなさそうなのだけが救いだ。

　とはいえ森には違いないので、ある程度は土地自体の保水力がある。全く乾燥したような気候とはいくまい。

　文明の利器に頼れる前の世界でならともかく、そういったものがまだないこちらで暑さに加えてジメジメにまで対応しろって言われたら大変に辛いものがある。

「まぁ、一番暑いのは１週間かそこらで、その後はまた涼しくなってくるよ」

「じゃあ、１週間我慢すればいいのか」

「そうなるな」

「そう思ったら耐える気にはなるな」

　２週間も３週間もやたら暑いのが続かれると気も萎えるが、１週間くらいならまだなんとか、ってところだ。

「北方は違うのか？」

「うーん、こことは違うな。ジメッとして暑いのが続く感じだから」

「へぇ」

　実際には、ここの北方と前の世界の日本でも微妙に違っているんだろうが……。その意味では、４０年間経験してこなかった暑さをはじめて経験することになる。怖いような、楽しみなような。

　森の中をウロウロしながら、化膿止めや熱冷ましの薬草なども採集していく。乾燥させても十分に効果があるものは貯蔵しておいても困ることはあるまい。

　畑にも植えているとは聞いたが、使えるようになるまでにはまだもう少しの時間が必要だし。

　そうして森の中をうろついていると、リディがバッと茂みに駆け寄った。

　俺たちは慌ててその後をついていく。

「ありました！」

　俺たちが追いつくと、リディが１つの草を指さしていた。見た目にはヨモギに近い形状をしている。

「これを使うときれいに緑になるんですよ」

「へぇ」

　そのヨモギに似た草にヘレンが手を出そうとすると、リディが制止した。

「うかつに葉に触って汁がつくと、しばらく色が落ちないですよ」

　その言葉でヘレンは慌てて手を引っ込める。

「ナイフでそっと刈り取って、この革袋に入れてください」

「お、おう」

　キラリと光が煌めいたかと思うと、スッとヨモギに似た草は根元のあたりから刈り取られていた。

　刃物の扱いに一番慣れているヘレンだからできる技、と言っていいだろう。

　ヘレンは刈り取った草を爆発物かのようにそっとつまみあげると、リディが口を広げている革袋の中にそっと落とした。

「はい。ありがとうございます」

　リディはその革袋の口を紐で縛ると、クルルの籠の脇にくくりつける。何かで圧迫されて汁がでるとよくないのだろう。

「これで必要なものは揃いましたね」

「え、たったあれだけでいいのか？」

　俺は驚きを隠さずに言った。今見たのはせいぜい１株あるかないかくらいで、前の世界で言えばほうれん草の１把くらいだろうか。

　こんな程度で十分な染料が取れるとは俺には思えなかった。だが、俺の疑問に返ってきたのはリディの力強い頷きである。

「ええ。布などには薄めて使うほどですので」

「そんなに濃いのかぁ……」

　前の世界では緑色に着色するというのは意外に難しい話で、木材などに染みこんで定着するような植物性のものはほぼないと言っていい。

　めちゃくちゃ濃いなら木材に染みこむことも期待していい……のだろう、多分。

　もしかすると、この森に棲む体が緑のリスはこの草を食べて体毛を緑にしているのかもしれないな。

「よーし、これで目的は達したな」

　俺が言うと、家族みんなが頷いた。それを確認して、俺は宣言する。

「このまま帰るのもなんだし、日が暮れるまで適当に好きなものを採って回るか」

　その言葉に、クルルやルーシーが走り回って喜んだ。

## 花

2020年9月16日

「花かぁ」

「ダメでしょうか」

　畑で育てたりするためのものを好きに採集していい、という話になってから、しばらくの間あれやこれやを採集した後、リディ、アンネ、そしてヘレンから「花はどうか」と提案があった。

　美味いだとか栄養があるだとか、あるいは病や傷に効く、といった直接のメリットがあるわけではないが、心の潤いみたいなものはあっても良かろう。オッさん１人で住んでる家でもないし。

「いや、良いんじゃないか。鍛冶場は流石に暑すぎて活けるにしてもかわいそうだけど、家の方がいつまでも殺風景なのもなんだし」

　摘んで活けることの是非は一旦脇に置いて俺はそう返事した。リディは嬉しそうに弾んだ声で言う。

「じゃあ、丈夫なのを選びますね」

「うん。流石に俺じゃよく分からないから、頼んだ」

　インストールでも「こんな感じの花がある」ことはわかるのだが、薬草などでない限り、それの細かい植生だのといったことはわからない。図鑑の絵だけを知っているような感じだ。

　あれはどうだ、これはどうだと見かける花について女性陣（つまりは俺以外だが）を見ながら、俺はぽつりと疑問を口にした。

「そう言えば、西方の植物ってこっちに入ってこないのかな」

　この世界では西方のほうが暖かい。砂漠もそちらのほうに多くある……とインストールが教えてくれていた。

　前の世界に近いのなら原種に近いものではあるだろうが、バナナなんかの果物も多くあるのではと思ったのだ。

　もしそう言うものが入手できる状態になり、かつ鍛冶場の熱で湯を沸かすシステムが出来たら、温室のようなものを作れば栽培もできるかも知れないと言う期待もある。

　まぁ、もしできたとしても、夜間には気温が下がってしまうし、日照の問題をどうするかという問題が残るが。

　高価な透明ガラスを全面におごる、「水晶宮」なようなものを作れば解決はするのだろうが……。しばらくは入手できても食べたり鑑賞したりするだけだろうな。

　それでも、入手の可否は今後の我が家の行く末にも関連するのだ。多分。

「王国ではあんまり聞いたことないわね」

「帝国でも同じね。入ってこないことはないんでしょうけど」

「そうかぁ」

　俺の疑問に答えてくれたのはディアナとアンネだった。王国伯爵家令嬢と帝国第７皇女の言とあらば確かなのだろう。

　カミロに頼んでも北方の醤油や味噌とどっこいの入手難度に違いない。それならば北方のものを優先してもらうべきだろうな……。

　やがて太陽がその日最後の仕事として、世界を橙色に染めようとする頃、クルルの背には薬草の株や染料になる草の根、花や果実といった森の恵みが満載されていた。

「重くないか？」

「クルルルルルル」

　俺がクルルの首筋をさすりながら聞いてみると、大丈夫だと言わんばかりに足を踏み鳴らして鳴いた。

　俺は苦笑してポンポンと首筋を軽く叩く。

「にしても、きれいな花だなぁ」

「薔薇ですね」

　クルルの籠に根っこごと突っ込まれている花は薔薇だった。薔薇とはいっても普通に想像するような八重に咲くあれではなく、もっと原種に近い一重の可憐な花だ。

　花として鑑賞するのも勿論、果実も利用できるらしい。なんでも甘酸っぱいのだとか。

　別に観賞するだけの花でも良かったと思うのだが、リディ達曰くはせっかくなので花以外にも利用が出来て、畑でも育てられる丈夫なものをということらしい。

　せっかくの好意を無駄にするほど野暮でもないので、俺は素直に納得しておいた。

　さて、帰るとしますかね。畑の拡張についてはまた明日考えよう。

　俺たち家族は、ワイワイとその日に採集したものの話をしながら、赤みを増す日差しの中を家路についた。

## 深夜の来訪者

2020年9月18日

　家に戻る頃には、すっかり日が落ちてしまっていた。ちょっとのんびりしすぎたかも知れない。

　幸いにしてうちには魔法の灯りがいくつかあるので、それらを総動員してクルルから荷物を下ろしたり、ルーシーの体を綺麗にしてやったりする。

　下ろした荷物のうち、根っこごと持ってきた数株は、一度畑の脇に浅く移植して水を与えておいた。

　そのままでも水をかけておけば一晩くらいは大丈夫だとは思うのだが、念のためだ。

　薬草なんかもとりあえず倉庫に放り込んでおいて、分類は明日だな。

　薄暗い中、バタバタと色々な作業をこなしていく。俺だけ早めに作業を切り上げて夕食の準備をはじめることにした。

　家に入るときにちらっと振り返ると、みんながバタバタしているのが楽しいのか、あるいは手伝っているつもりなのか、クルルとルーシーもみんなの周りとバタバタと走り回っていた。

　いかに鍛えられている面々であるとは言っても、ほぼ１日中森を歩いていたので、夕食を終えるとみんな早々に床についた。俺もベッドに入るなり、意識が闇に溶けていく。

　そうして夢も見ずにどれくらいの時間が経ったのだろうか、時計がないから正確な時間は不明だがおそらくは夜明けまではまだかなり時間がある頃、俺は気配で目を覚ます。

　目だけ開けてぼんやりとしていると、うっすらと、しかしハッキリと音が聞こえた。最初は寝ぼけてなにかの音を聞き違えたかと思ったが、どうやら違うようだ。

　俺は慌てて飛び起きると、明かりを手に家の玄関へ向かう。玄関に近づくにつれ、さっきから聞こえているドアをノックする音は大きくなっていく。

「今開けます！」

　俺は返事をし、扉の閂を外して開けた。そこには小さな女性――“黒の森”の妖精族の長、ジゼルさんがいた。

「ジゼルさん。どうしました？ まさか……」

　俺の言葉に、ジゼルさんは小さく頷いた。後ろに向かって手で合図をすると、ぐったりとした妖精を他の妖精が抱きかかえてやってくる。

「とりあえず鍛冶場に移しましょう。さ、こちらへ」

　俺はぐったりした妖精を片手に引き取ると、家の中を小走りで鍛冶場へと移動する。鍛冶場への扉を開けると、中はしんと静まり返っていた。普段は絶対に見ることのない光景。道具たちも眠っているかのようである。

「すまんが、緊急の深夜作業だ」

　俺は小さく独り言を言うと、明かりを置いてからまだ綺麗な布をテーブルに敷いて、その上にそっと妖精を横たえた。ぐったりとしてはいるが息が荒かったりということはない。逆に弱々しいくらいだ。それがスーッとこのまま消えていってしまいそうな危うさすら感じる。

　前に聞いた話だと実際にそれが起こり得てしまうのだろうが。そうさせてたまるか。

　念の為にフルに魔力をこめた板金を取っておいて良かった。それらを組み合わせて箱のような形状を組み上げる。指輪のときと違って、中には何も入れない。

　加熱が必要ないのが幸いした。必要であれば火床に火を入れて温度が上がるのを待って……とか悠長なことをしないといけなかっただろう。

　組み上げた鋼の箱の蓋に鎚を素早く振り下ろす。何回も何回も。チートを使って魔力をガンガンにこめていく。

　蓋を開けられないので分からないが、今この箱の中では魔力が凝縮していっているはずだ。

　普通の加工のときと違って形状を意識する必要はない。とにかく素早く、たくさん魔力をこめることに集中する。

　それから少しして、鎚で叩くたびにガキン、と音がしていた箱の音がカキンというような音に少し変わった。俺は一旦鎚を脇に置くと、ジゼルさんを呼び寄せる。

　集中していたので気が付かなかったが、家族も全員起きてきていた。手伝って貰うこともないから、特に起こしにはいかなかったのだが、流石にこれだけの音をさせていたら起きるか。半鐘を高速の全力で叩いてたのと変わらんし。

「あー、ディアナとリディはうちの娘さんたちが起きてたら相手してやってくれ」

　彼女たちはおりこうさんなので、今のところ騒いではいないが起きてはいるだろう。２人は頷くと、鍛冶場の方の入り口から飛び出していった。

「よし、それじゃ開けますよ」

　今度はジゼルさんのほうに向かって言った。ジゼルさんが頷いたことを確認したので、そっと蓋を開ける。薄暗い鍛冶場に青い光が漏れ出してきた。

　昼間の明るさでも十分に見えるくらいの光なのだ、暗い中ではまばゆいくらいに見える。中を確認すると、ぶどうの粒くらいの大きさで青く光を放つ魔宝石が転がっている。

「よし、それじゃこれを」

「分かりました」

　ジゼルさんはそれを抱えると、テーブルに寝かせてある妖精の元へと文字通りに飛んでいく。もう１人の妖精と２人で、寝ている妖精の腹の上辺りで魔宝石を固定する。

　しばらく俺たちがジッと見守っていると、やがて寝ている妖精の弱々しかった息が穏やかなものへと変わっていった。これで大丈夫なのかなと思った刹那、サラリと溶けるように魔宝石は崩れ去る。

「……どうでした？」

　俺は追加の魔宝石がいるならすぐにでも作れる体勢になりながら、ジゼルさんに聞いた。ジゼルさんは脈をとったり、呼吸を聞いたり、額に手を当てたりして状態を確認している。

　しばらくして、ジゼルさんはぺたりと座り込んだ。なにかマズいことでも起きたのだろうか。俺はいよいよ鎚を構えたが、ジゼルさんから返ってきた答えは違っていた。

「これで大丈夫です」

　安堵と歓喜のまじった声が鍛冶場を満たす。俺も鎚を持った手をだらりと垂らし、「良かった……」と小さな声でひとりごちた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

次回、9/21(月)は更新をお休みします。その代わり、9/22(火)に連載２周年記念特別編を投稿しますので、どうぞお楽しみに。

## 連載２周年記念特別編　森の家族

2020年9月22日

「パパ！ 早く！」

「おとうさん！」

　緑の髪に緑の服の少女と、灰色の髪に黒い服の少女が俺の手を引いている。いつもの森の中、俺は２人に抵抗することなく、引かれるままに足を進めた。

　俺の後ろからは複数の笑い声と、

「そんなに引っ張ったらお父さんも危ないわよ」

　という誰かの声。俺はそれを聞いてなぜか「ああ、いつもの風景だ」と思った。

「ようし、それじゃあ」

　俺は引かれる手を逆に引っ張ると、２人の少女を１人ずつ右手と左手に抱きかかえた。

　２人の少女は「きゃーっ」っとはしゃいでいる。

「おとうさん力もち！」

「力持ちー！」

「はっはー！」

　俺はそのまま川へと向かって走り出す。

　背後からは呆れるような声と、笑い声。楽しい休日の始まりだ。

　川原に到着して、敷物を広げる。少女２人もキャッキャとはしゃぎながら手伝っていた。昼食を詰めたバスケットや、茶を入れた水筒をそこに広げたら準備完了。

　移動中は森の中を進んでいたので被せていなかった麦わら帽子も、日差しの強いこの川原では必要なので２人に被せる。それが嬉しいのか、２人で顔を見合わせて喜んでいた。

「よし、それでは２人に道具を与える！」

　俺は釣り竿を手に娘たちの前に立って宣言した。２人とも手をパチパチ叩いている。

「お父さんのお手製だから安心して使うように！」

「お父さん、作るとき気合い入ってたものねぇ」

　俺の言葉にディアナが茶々を入れる。つい興が乗って過去一番の出来映えになってしまった。いるならリヴァイアサンも釣れるかも知れん。さすがにこんな湖からほど近い渓流にはいないだろうが。

「使い方と注意点はサーミャお母さんとリディお母さんに聞くように」

「なんでー？」

　緑の方の少女が無垢な瞳で尋ねてくる。俺の顔を一筋の汗がつたった。

「お父さんは釣りがあまり上手じゃないからね」

　クスクスと笑いながら、アンネが言った。大物狙いなのだろうか、大きめの針を器用に結びつけている。

　それを聞いて、頷きながらヘレンが続ける。彼女は既にエサもつけて、軽く竿を振っているところだった。

「お父さんは殺気を隠すのが下手すぎる」

「ヘレンお母さんから見れば、世界の大半は下手じゃないか？」

　俺は口を尖らせて言ったが、お母さん’Ｓの意見は変わらないようで、「はいはい」と軽く受け流されてしまった。

　各人それなりに距離をとって釣り糸を垂らす。サーミャとリディの隣だけは別だ。それぞれに娘が張り付いている。

「おりゃー！」

「おー、うまいうまい」

　緑の娘が振るった竿は上手く目的のあたりに針を運べたらしい。サーミャはああ見えて教えるのが上手だからな。

「よいしょ」

「そうそう、そっとですよ。お魚さん逃げちゃいますからね」

　一方、黒の娘とリディは静かに事を運んでいる。サーミャの方とは対照的だ。

　やがて、どちらからも歓声が上がった。

「釣れたよサーミャママ！！」

「おー、いいのが釣れたな！」

「えへへ」

　緑の娘はサーミャに頭を撫でられて、モジモジしている。

「リディお母さん、釣れた！」

「はい。上手ですね」

「うふふ」

　黒の娘もリディに褒められて嬉しそうにしている。

　しばらくするとそこかしこから水の跳ねる音が聞こえはじめるが、俺の竿はピクリとも動かなかった。

　朝一番から釣りを始めて昼過ぎ。川の一部を堰き止めて作った生け簀には十数匹の川魚が泳いでいた。数的には大漁と言っていいだろう。

　そう、あくまで数的には、だ。少なくとも家族全員の腹を満たすのに十分な数が釣れているし、何匹かは昼食に彩りを添えるべく、焚き火の炎で炙られている。

　ただし、そこには俺の釣った魚は含まれていない。この時点まで、ただの１匹も釣れていないのだ。

　まぁ、この狭い範囲でこれだけ釣れていれば、俺が釣る分がいなくなることも考えられるか。うんうん、そうだ、そうに違いない。

「パパー」

「お父さん」

　２人の娘から差し出された焼き魚を頬張りながら、俺はそんな風に現実逃避した。

　午後も俺は釣りを続けた。リディやヘレンは近くの果物や野草を摘みに出かけていった。娘２人は飽きたらしく、サーミャ、ヘレンと追いかけっこをしている。

　この森で恐らく最速と言っていいだろう組み合わせに対応できているあたり、我が娘ながら末恐ろしいものがある……はずなのだが、なぜか今の俺はそれも普通の出来事として捉えている。あの２人なら当たり前か、というような。

　そんな違和感を抱えながら、何投目になるか分からない竿を振った。

　ボウズが続き、しばらく休もうかと敷物の上にゴロリと仰向けになる。空は抜けるように青く、白い雲が自分の存在を忘れさせないためであるかのように、まばらに横切っていく。

　俺の体の上を風がそっと撫でていく。魚が釣れなくてのぼせていた頭を冷やすにはそれで十分だった。

　落ち着いてくると眠くなってきた。ウトウトとしていると、

「あー！ パパお昼寝！」

「私もー」

「あちしもー！」

　２人の娘が両脇にペタッとひっついてくる。２人はすぐに、俺よりも早く寝息を立てはじめ、俺もそれにつられて意識が遠のいていった。

　最後に、うちの家族ではなく、どこかで聞いた少女の笑い声が聞こえたような気がした。

　ふと目覚めると、そこは自分の部屋だった。さっきまでいたはずの川原はどこにもない。

「ああ、クソ」

　起き抜けの胡乱な頭で窓から外を眺めると、日が昇るほんの少し前だった。空が暁を迎える頃、つまりはいつもの起きる時間だ。

　ずいぶんと変な夢を見た。昨晩はいつもよりほんの少し酒を飲み過ぎたが、それのせいだろうか。

　俺は着替えを済ませると、水を１杯飲んでから、娘たちが待っている外に向かった。

## 森の診療所

2020年9月23日

「ありがとうございます」

　小さなカップに注いだハーブティーを小さな口でコクリと飲むと、ジゼルさんはほうとため息をついた。

　病人を運んできた妖精さんも同じようにしている。

　しみじみとジゼルさんが言う。

「助かって良かったです」

「ええ、本当に」

　俺もディアナが淹れてくれたハーブティーを一口啜った。いつもよりも味が濃いように感じるが、夜半の起き抜けに一気に作業した体には心地よい。

「しかし、もうちょっとのんびりした療養なのかと思っていましたが、結構急でしたね」

「それが……」

　ジゼルさんが言うにはいつもであればゆっくりと魔力が抜けていくはずらしいのだが、今回に限っては急速に抜けたそうである。

　抜ける速度はある程度で弱まったのだが、瀕死の状態になってしまったので、慌てて連れてきたと言うことらしい。

「慢性症状の場合だけでなく、劇症型もあるってことか」

「げき……？」

「いえ、こちらの話です」

　俺が思わず口に出した言葉に、ジゼルさんが反応した。そりゃ耳慣れない言葉だよな。

「……念のため、病にかかった方と、運んできた方はしばらくうちにいた方がいいかも知れません」

「どれくらいですか？」

「短くても２～３日。できれば１週間くらいですかね」

「結構長いですね」

「ええ。滞在して問題なければ、ですが」

　おそらく他者に感染していかないものだとは思うが、念のためだ。万が一劇症型が感染していくようであれば、早い内に対処できたほうがいい。

　それで言えば、ジゼルさんもうちにいた方がいいのだが、彼女には妖精族の長という役目がある。うちで感染が確認できれば、すぐにでもうちにいる妖精さんを向かわせれば、対応が早くできるかも知れない。

　病にかかった妖精さんは、症状がぶり返したときの用心だ。前の世界の医者が言うところの「このまま２～３日様子見て、大丈夫そうなら退院ですねー」である。

　俺はそんなようなことをジゼルさんに説明した。この辺はまんま医者みたいだな。

「なるほど……」

　小さな小さなおとがいに手を当ててジゼルさんは考え込む。妖精族を人間（獣人もドワーフもエルフも巨人族もいるが）の家に滞在させて問題ないか考えているのだろう。

　もしかするとジゼルさんも他者への感染の可能性を考えているのかも知れない。この病気に感染して、うちで問題になるとしたら、エルフのリディ、走竜のクルル、魔物のルーシーだな。３人とも魔力を摂取して生きている。

　他の家族は体内の魔力量が大したことないはずなので、仮にかかったところで問題にはなるまい。

「ディーピカ」

　ジゼルさんは病人を運んできた妖精さんに話しかけた。ディーピカさんと言うらしい。

「１週間の間、リージャを頼めますか？」

「もちろんですとも」

　ディーピカさんは胸を叩いて請け負った。リージャさんと言うのが今安らかな寝息をたてて寝ている妖精さんの名前のようだ。

「では、すみませんが２人をお願いします」

　ジゼルさんは俺に向き直って頭を下げる。俺は大きく頷いて言った。

「分かりました。お互いに何かあれば使いを出すということで」

「ええ」

　今度はジゼルさんが頷く番だった。さて、これで森の妖精診療所としての稼働がはじまってしまったな。しかし、とりあえずは休息だ。

「とりあえず、今日のところはみんな寝ましょうか。妖精のみなさんサイズの寝具はないですが、客間が空いてますのでどうぞご利用ください。あ、２部屋あるので、ジゼルさんとディーピカさん、リージャさんの部屋は分けましょう。ディーピカさん、リージャさんに何かあれば遠慮なく誰かを起こしてください」

　俺の指示にディーピカさんがコクリと頷く。ジゼルさんが

「ありがとうございます。すみません、何から何まで……」

「いえいえ、同じ森に暮らしてるんです。これくらいなら全然お安い御用ですよ。前金も貰ってますしね」

　俺が似合わないウィンクをジゼルさんにすると、クスリと微笑んだ。

　リージャさんはヘレンが運ぶことになった。彼女はそっと手にリージャさんを載せると「ふわぁ」と小さな声で言いながら、目をキラキラさせていた。

　サイズ的にも見た目にもお人形さんだもんなぁ……。今日のところは見逃しておいてやろう。武士の情けだ。

　こうして深夜の診療を終了し、三々五々それぞれの部屋へと戻っていった。

## 守り人達

2020年9月25日

　翌朝、深夜に起きた影響はあまりなく、いつもどおりの時間に目が覚めた。正確にはいつもと同じ日の上り具合に、だが。

　前の世界では連続徹夜も午前様も当たり前のようにやっていたので、１日睡眠時間が削れたくらいではどうということはないのだろう。身体的には若返ってもいるし。

　妖精さん達も含めて、皆はまだ起きていなかった。いつもどおりと言えばそうなる。大抵の場合、俺が水を汲みに行っている間に皆起きて支度を始めているからだ。

　今日はいつもより起きてくるのが遅い可能性もあるなと、俺はいつもより静かに準備を進めていった。

　準備を終えて外に出ると、うちのかわいいおチビさん２人はいつもどおりに待っている。

「今日は皆まだ寝てるかも知れないから、静かにな」

　俺は口に指を当てて２人に言った。クルルは静かに「クルゥ」と返事をし、ルーシーも小さな声で「わふ」とだけ鳴いた。

「よしよし、お利口さんだ」

　２人の頭をなでてから水瓶を渡す。俺とクルルは２つ、ルーシーには小さいのを１つだ。３人で湖へと向かった。

「あれ、皆起きてたのか」

　帰ってくると、皆普通に起きていた。妖精さん達３人もだ。

「いつもよりはちょっと遅かったけどね。でも、そんなに遅くはなってないわよ」

　ディアナが答える。見た感じいつもと同じで眠そうには見えない。一晩だけだし若いからだろうか。他の皆も特に眠そうにしている感じはない。

　ただし、アンネは別だ。彼女が眠そうなのはいつものことなので見分けがつきにくい。

　大丈夫か聞いてみたが、手をひらひらと振りながら、

「いつも通りだからおかまいなく～」

　とのことだった。よし、問題ないな。

　その後、朝食を皆でとった。想像していたとおり、身体のほとんどを魔力で構成している妖精さん達は、食事は極々少量で済むらしい。

　食べようと思えば食べられるが、必要な量は俺たちの小指の爪程度であるらしい。１日でその量なので、丸一日なにも食べないことも多いと言っていた。「花の蜜で生きている」みたいな話もこの世界ではあながち間違いとも言えないってことか。

　後は肉の類は余り好きではないとのことである。なので、乾燥した野菜を煮込んだ後、肉を入れる前に妖精さん用にほんの少し取り分けたものを用意しておいた。味付け自体は塩と胡椒が基本である。

　肉が入っていない分、俺個人としてはひと味足りない感じがするが、ジゼルさんに味見（さじから飲んでもらった）してもらうと、

「美味しいです！」

　とのことだったので、妖精さん達にはそちらを出すことにした。彼女たち用の食器はないので、小さなカップへ取り分けになる。彼女たちサイズのさじもないので、それを詫びると、

「いえいえ、お気になさらず」

　と、カップから直接飲んでいた。うーん、やはり一通り片付いたら妖精さんサイズの食器を用意するか……。

　朝食時の話題はジゼルさん達妖精の普段の生活についてである。知性があり、社会性もある以上、何らかの役割分担がなされているのかと思いきや、自分たちのことはローテーションで行っているらしい。

　食料の調達や、被服、住処の手入れなどは全員の持ち回りなのだと言っていた。唯一それらとは違う役割なのが長たるジゼルさんで、それらの統括調整をしているそうな。

　あとは森の樹々の“調整”をしているらしい。具体的なことは教えてくれなかったので分からないが、人の手の入っていない森にしては歩きやすかったりするのは、彼女たちのおかげっぽい。

「魔力が澱みやすいこの森で、魔物ができるだけ発生しないようにするための大事な仕事なのです」

　とジゼルさんが言い、リージャさんとディーピカさんも胸を張っていたので、妖精族の誇りなのだろう。

「じゃあ、守り人のようなものなのですね」

　俺がそう言うと、３人揃って目をキラキラさせ、「それです！！」と言っていたので、そのうち自称しだすかも知れない。

　うちが家を拡張したり、その他生活のために木を伐り倒したりしていることについては、

「この森に暮らすなら、そういうことも必要でしょう？」

　で、あっさり流された。守り人が問題ないと言っているなら、当面は平気か。流石にこの森を開墾して都に負けない街を作ろう！　とか言い出したら止められるだろうが。

「魔物といえば、うちのあの子は魔物なのですが……」

　最初は黙っていようか迷ったが、ここで伏せて後々の信頼を失うのもよろしくあるまい。意を決して俺が言うと、朝ごはんの肉を平らげて横になっていたルーシーが、なあに？　と俺を見て尻尾を振った。そこへスッとジゼルさんが近づいていく。

　ルーシーがガブリとやってしまわないか、逆にジゼルさんがルーシーに何かをしやしないかと、家族皆はハラハラしながら見守る。何かあれば家族であるルーシーの味方をするつもりで、俺も２人に近づいた。

　ジッとジゼルさんがルーシーの目を覗き込む。俺が引き離すべきか逡巡していると、ジゼルさんはフッと微笑んで言った。

「お利口さんね、あなた」

「わん」

　ジゼルさんはルーシーの頭を撫でた。ルーシーはブンブンと尻尾を振っている。困ったような顔をしてジゼルさんは俺の方に向き直る。

「どうしても魔物は発生してしまいます。私達の手の行き届かないところでもうしわけないのですが……」

「いえ、そりゃ自然相手ですから仕方ないですよ」

「育ての親が良いのでしょうか、この子は大丈夫ですよ。あっ、こら、くすぐったい」

　ルーシーはぺろりとジゼルさんの頬、というよりは大きさ的に頭全体を舐めた。俺はホッと胸をなでおろす。俺以上にディアナとヘレンが特に安心しているようだが。

　２人の場合はルーシーは魔物だから始末するって話になったら、妖精さんたちと戦になってでも守ると言い出すだろう。そうならずに済んで本当に良かった。

　俺はなんとなく「あなた達はこの森に住んでいていい」と言われているような気もして、朝食をいつもより余分に食べたのだった。

## 社会科見学

2020年9月28日

　朝食後、ジゼルさんは戻っていった。

「リージャとディーピカをよろしくお願いします」

　そう頭を下げて。ふよふよと飛び去っていった。全員で並んで見送る。その姿は溶けるように森の中へと消えていった。

「さて、それじゃあ我が工房の仕事を始めようかね」

　俺は軽く肩を回しながらそう言って、鍛冶場へと向かった。

　今日の予定はリディ以外の皆はいつも通りに板金やロングソードの作業をする。

　俺とリディは守り刀の鞘を彩色だ。その軽い打ち合わせの時に、リージャさんとディーピカさんに伝える。

「お２人はどうぞ体を休めてください。……と言っても、部屋でじっとしてるのも退屈ですし、大変かと思いますので、この家の周りなら自由に移動して貰ってもいいですよ」

　２人の妖精さんはコクリと頷いた。長であるジゼルさんは立場上からか、ある程度“人慣れ”していたが、この２人はそうでもないらしい。

　まぁ、普通彼女らが人間のところへ厄介になることなんてないだろうからなぁ……。１週間の間に仲良くなれればいいのだが。

「あ、“うちの子”たちは繋いでませんので、自由にそこらをうろついてます。お利口さんなので何もしないとは思いますが、もし苦手でしたらお気をつけて」

　２人は再びコクリと頷く。そのあと、ディーピカさんの方がおずおずと手を上げた。

「どうしました？」

「ここでみなさんを見ていてもいいですか？」

　俺は思わず自分の片眉を上げた。

「もちろん構いませんが……。かなり暑いですよ？」

　皆は炉と火床を使うし、俺もリディに教わりながら色を抽出するための湯を沸かしすのに火を使う。

　温度も湿度も上がるわけで、相当に暑くなるはずである。俺たちは慣れてきたが、２人にとっては未知の暑さだろう。

「ええ。ちょっと人間たちの作るものに興味があるので、見てみたいんです」

「わかりました。いいですよ」

　見える範囲にいてくれた方がいいこともあるか。そう思って俺が頷くと、２人はホッとした顔をした。

「ただし、私たちが水を飲むタイミングでお２人も水を飲んでください。恐らく平気だとは思いますが、念のためです」

　魔力で身体を構成しているらしい彼女たちなので、身体の冷却機能である汗をかくかは疑問だし、汗をかいたところで脱水症状になるかも分からんが、言ったとおりの念のためだ。

　病は落ち着いたのに、その後脱水症状でダウンしちゃ意味ないからな。

「はい。わかりました」

　２人はコクリと頷く。こうして妖精さんの社会科見学付きの作業が始まった。

「まずはこの根を煮出していきましょう」

「わかった」

　作業用の鍋に湯を沸かしている間に、根っこを持ってきた。かなり赤いので生き物の血管のようにも見える。少し土が残っていたので、水で洗い流すとより赤みを増した。

　鍋に湯が沸いたら、そこにそのまま赤い根っこを投入する。サァッと湯の色が赤くなる。

「うおっ」

　鍋の湯があまりに鮮やかに赤くなったので、俺は思わず声を上げた。リディがクスクスと笑っている。

「これ、ビックリしますよね。私も小さいときに驚きました。今も時々ギョッとすることがあります」

「いやぁ、これは凄いな」

　鍋の中はドンドン赤くなっていく。それと引き換えであるかのように、根っこが少しずつ赤みを失っていき、黄色くなってくる。

　黄色みがかなり増してきたところで、リディが根っこを引き上げた。湯の中には真っ赤に濁った湯が残っている。やはりワインというよりは血のように見える。

「これで少し煮詰めれば染料ができます」

「なるほど」

　俺が鍋を見つめていると、後ろから「わー」と言う声が聞こえた。振り返ると、２人の妖精さんが興味深そうに鍋の中身を覗いている。

　俺の視線に気がついたリージャさんが肩をすくめた。

「あ、ごめんなさい」

「いえいえ、気にせずに見ていていいんですよ」

　俺は精一杯微笑んで言ってみたが、家族には違和感があったらしい、リディが俺から顔を背けて肩を震わせている。

「ありがとうございます。これは何に使うんですか？」

「それはですね……」

　俺はまだ仕上げてない白木の鞘を持ってきた。そこには薔薇の彫刻がされている。

「この花を赤くするんですよ」

　俺の言葉に、２人の妖精さんは「わあ」と目を輝かせた。

　さて、これはいっちょ気合いを入れないといけないな。

## 二輪の花

2020年9月30日

　妖精さん２人に見守られながら、真っ赤な染料を鍋から小瓶に移した。ガラス瓶なら赤が綺麗だったかも知れないが、残念ながら素焼きの小瓶である。

　水分が抜けて粘度が増したりしてないかは、時々確認の必要がありそうだな。

　筆はこの工房に元々あったものを使う。そのうち狩った猪の毛で筆や刷毛を作ったほうが良いかも知れない。

「材料があれば、黒漆に金

　筆に染料を含ませながら、俺はひとりごちた。結婚の祝として黒はどうなんだという話はあるにせよ、その後もし護身用に持ち歩くなら黒地に螺鈿や金象嵌もなかなかのものだと思うのだ。流石にメギスチウムを象嵌するのはやりすぎだろうが。

　だが、今ないものは仕方ない。いずれ俺の

　そろりと染料を含ませた筆を鞘に当てる。染料は吸い込まれるようにして筆から鞘に色を移した。顔料を使った塗料とは違い名の通り染めていくため、本来は着色範囲を決めるのはシビアなはずだが、俺には力強いチートのサポートがある。

　それでも適当にやってて大丈夫とはいかないので、慎重に色をおいていく。やがて薔薇全体がほんのり赤くなったら、しばし乾燥が必要だ。この後、乾燥と塗装（染色）を繰り返し、色を強めていくわけである。

　湯を沸かすものがなくなったので、湿度が下がっているとは言っても乾燥にはそれなりの時間がかかる。その間に緑の染料を用意することにした。

　水につけてあったヨモギみたいな草を持ってくる。もちろん汁がついてしまわないようにそっとだ。

「これも煮出し？」

「いえ、これはそのまま布にくるんで絞るんです」

「なるほど」

　いらない布を用意し、水に濡らして固く絞る。本来こういうものを絞る時は乾いた物を使うほうがいいのだろうが、この草は相当に

　柔らかくした鹿革の端切れで布を掴んでギュッと絞っていく。布の下には小瓶。最初の２～３回は布が染まるだけだったが、次に絞るとポタリポタリと

「これはなかなか辛いな」

　筋力がマシマシになっているとは言え、何度も何度も全力で絞っているとどんどん疲れてくる。これは圧搾機を作ることも考えねば……畑の作物いかんでは油もとれるかもだし。

　俺が渾身の力をこめていると、リディと妖精さんたちが一緒にクスリと笑った。ディーピカさんが笑いながら言う。

「大変そうですね」

「やってみます？」

「いいんですか？」

「ええ。汁がついちゃうと落ちないらしいので革ごしにやってください」

「わあ！ ありがとうございます！」

　俺が布を支え、キラキラと目を輝かせたディーピカさんがうんしょと布を絞る。だが、俺の全力で少しずつ絞れるような代物だ、妖精さんたちが魔力か何かでとんでもない力を出せるのでなければ俺より大変だろう。

「リージャ、手伝って！」

「わかった！」

　リージャさんが加わって２人でよいしょと布を絞ると、再び緑色の汁がポタリポタリと小瓶へと落ちていく。しばらくして、そのポタリポタリも止まった。

　小瓶にはそこそこの量の染料が溜まっている。たった１

「よし、これくらいかな」

　俺がそう言うと、ディーピカさんはぐるぐると肩を回した。疲れただろうが、その顔は満足感で輝いている。

「はー、これは大変ですね」

「お２人は余計に大変だったでしょう？」

「ええ、でも楽しかったです」

「わたしも！」

　リージャさんも両手を上げてはしゃいでいる。ねー、とディーピカさんに絡んでいて、お人形さんがキャッキャしているような感じでもある。あるいは小さい花が並んでそよ風に揺れているような。

「よし、じゃあ今度はこの薔薇を仕上げていきましょうかね……」

　俺は新しい筆を手に取ると、再び鞘に向かい合った。

## 鞘の色

2020年10月2日

　筆を緑の染料につける。スッと筆の先が緑色に染まった。その緑を鞘に彫った薔薇の葉に移していく。染料というものは名前の通り浸透させ、染めて着色する。浸透した分だけ色がつくわけだ。

　赤の染料も一発で綺麗な赤がのったわけではない。今のところはまだ薄い赤にしかなってない。

　だと言うのに、この緑はほぼ一発で緑になっている。流石に木目が消える程ではないが、これ以上は着色の必要がなかろうというくらいの色味だ。

　染料はいくら塗り重ねても木目が消えることはまずないので、これは塗り終わったら緑の方は一発で終わりだな……。

「確かにこれは濃いな」

「でしょう？」

　得意げにリディが胸を張った。でもそれも分かるくらいの濃さだ。

　ペタペタと塗料を塗っていき、やがて緑の葉が鮮やかな薄い赤の薔薇が姿をあらわす。

「ふむ」

　薔薇の赤もあまり濃すぎないほうが、このあと白い顔料を塗らない場合でも綺麗な気もするな。染料自体は他の用途にも使えるわけだし、使い切る必要もない。

　このままだと水に濡れた時に染料が流れてしまうので、テレピン油のようなもので保護をしたほうが良さそうだ。

　顔料がカミロのところにあれば、あるとは思うのだが、これも次行った時に聞いてみないといけないな。

「きれい！」

　思わずだろう、一旦塗装を終えた鞘を後ろから覗き込んでいたリージャさんが声を上げた。シーッとディーピカさんが嗜める。

「あっ、ごめんなさい……」

　リージャさんはシュンとしてしまう。俺は思わず笑顔になりながら言った。

「いえいえ、気にすることはないですよ。妖精さんのお墨付きなら、これで仕上がりとしましょうかね」

　今度は喜色満面の笑みを浮かべるリージャさん。なんだか社会科見学から、「お父さんの職場訪問」みたいになってきたな。

　妖精さんのお墨付きで思い出したが、ジゼルさんが指輪にかけてくれた祝福ってなんなんだろう。ざっくりと「祝福を与えた」としか聞いてないな。

　２人が知ってるかは分からないけど、聞いてみるか。

「そう言えば、ジゼルさんが祝福をくれたんですけど、具体的にどんなものとかあるんですか？」

「どんなもの？」

　ディーピカさんが小首をかしげる。もしかして種類がないとかだろうか。

「病魔退散とか、恋愛成就とか……」

「ああ」

　ディーピカさんは手をぽんと合わせた。まぁ、結婚指輪だというのはジゼルさんも知っているから、祝福の種類があったとして後者はないだろうが。

「長がどんな祝福をしたのかは、祝福を授けたものを見てみないとわからないですねぇ」

「ああ、それなら」

　俺は神棚のところに置いてあった指輪を持ってくる。手のひらに載せて、ディーピカさんたちに差し出した。

「これなんですが」

「どれどれ」

　指輪を覗き込むディーピカさん。リージャさんも一緒になって覗いている。

「これは災厄除けですね。良くないことから身を守ってくれます」

「へえ」

　俺は指輪をつまみ上げた。いつもの変わらずキラキラと輝いている。

「長が授ける祝福としては一二を争うくらいのものなので、それを受け取る人は幸せ者だと思います」

「それはそれは」

　治療の前払いとしては破格の報酬を払ってくれたらしい。そもそも値付け不能なレベルだろうが、友人夫妻の安全が買えたと思えば、今後ずっと無償で治療してもいいくらいだな。

「ちなみに防いだ災厄が他に降り注ぐなんてことは……」

「ないです」

　ピシャリとディーピカさんに否定されてしまった。前の世界の感覚だと、悪意なくえげつないことをする印象があるからな……。

「どうも人間たちには何か大きな誤解があるようですね」

「ああいえ、多分私だけですよ」

　前の世界の感覚を持っていると、この世界との誤差に戸惑うこともある。多分この世界では妖精は違った存在なのだろう。と、思っていたのだが。

「いいえ、長曰く、『妖精は人を惑わしてさらっていく』という人もいるそうです！」

「ああ……」

　こっちの世界でも妖精さんの扱いはあまり変わらないらしい。

　俺は苦笑しながら、すっかり憤慨しているディーピカさんをなだめるのだった。

## もう１本

2020年10月5日

　ディーピカさんをなだめたあと、守り刀の鞘を塗り終わった俺は、次の作業をこなしていた。

　奥さんの守り刀はこのまま仕上げても問題ないとして、マリウスには何もないというのも寂しいなと思ったのである。

「ナイフかなぁ……」

　恐らくあまり人前に出ないか、専属の護衛がちゃんとつくであろう奥さんは良いとして、マリウスも同じ守り刀というわけにはいくまい。

　いちいちそれが何かを説明させるのが忍びない、というのもあるが、「俺のも頼んどいて」などと言われたときに、マリウスが断れる相手ならまだしも、そうでない相手の場合に俺が困る。

　俺は別に栄達を望んでいるわけではない。むしろ飯を食うに困らない程度に好きにものを作っていられればそれでいいのだ。

　ただの贈り物なので、普段はしまっておいて貰うというのも手ではある。しかし、自分で言うのもなんだが、彼は身につけたがるだろう。

　マリウスは見た目が完全に優男だが、武官だし敵がいないわけでもない。

　俺も関わった彼の兄の件、あれがそもそも彼（もしくは後ろ盾の侯爵）を快く思わない誰かの差し金だった可能性が高い以上、護身も常に考えておきたいだろうからな。

　なので、少なくとも鞘に収めた時の見た目だけは普通の長剣やナイフと変わらないようにして、目を引かなくする必要がある。

　鞘と鍔と柄を西洋剣のものに、刀身は日本刀で片刃の直刀にするのも面白いかも知れないが、今更身につけた剣術を捨てて、そちらに合わせろというのもなぁ……。

　やはり、ここはナイフ――品質は特注品レベル――が良いか。ミスリルかアポイタカラ、あるいはヒヒイロカネも考えたが、何かの折に見せた場合に出所を探られたくないので、普通の鋼でこしらえることにしよう。

「ちょっと１回代わってくれ」

　俺は板金を作るのに炉の前で待っていたアンネに声をかけた。

「うん、わかった」

　アンネは素直に頷いて場所を譲ってくれる。炉の中には流れ出す時を待っている溶けた鋼がその温度を上げている。

　型に直接流してもいいのだが、今回は“特別”なので今のうちに、いくつかの型を少し離れたところに置いてくる。

　俺は革の手袋をはめると、ヤットコを手に持つ。やがて、十分に熱が上がった鋼が炉から流れてきた。

　付近の気温が一気に上昇する。気温の上がり下がりはまるで鍛冶場が脈動しているかのようだ。

　流れ出た鋼はいったん器に流れ込む。俺は急いでその器をヤットコで掴んだ。

　炉から少し離れたところに置いた型に、器の中身をそっと注ぐ。なるべくムラのようなものが出ないようにだ。

　炉から出せる１回の量は型に注ぐと数個分ある。なので、１つ注ぎ終えたら次、１つ終えたら次と注いでいく。

　１つあればナイフには十分だが、他の型もさっきと同じようにムラのようなものが出ないように注いだ。

「ふぅ、これでいいかな」

　型に注ぎ終えると、鋼が熱を失っていき、綺麗な板金が姿を現していく。魔力も今の時点で結構な量が含まれているようだ。

　よしよしと満足していると、リージャさんが俺に声をかけた。

「あなたは魔力が見えるんですか？」

「え？　ええ……」

「すごい！ 鋼なのに綺麗！」

　簡単なものしか使えないとはいえ魔法を使っているのだから、魔力が見えるのは半ばあたりまえのように思うのだが、妖精さんの間では「人間は魔力が見えない」と言うのが常識なんだろうか。

　満面の笑みを浮かべるリージャさんに、ディーピカさんがため息をつく。

「あのねぇ、リージャ。この人はあなたを助けるために魔力の結晶を作り上げたのよ。そりゃあ見えるに決まっているでしょう」

「あー、なるほど」

　リージャさんがうんうんと頷く。間違っているわけではないし、チートの話は出来ないのでツッコミは入れないが。

　ウットリとした声でリージャさんが言う。

「いいなぁ、人間たちはこんなのを使ってるのね」

「まぁ、全てがこれというわけではないですが。私のは自分で言うのもなんですが、特製です」

　俺が苦笑しながら訂正すると、脇で作業していたリケがうんうんと頷いた。君は作業に集中しなさい。

　ディーピカさんが感心したように言う。

「そうなんですねぇ。私たちも少しだけ鋼を使うことがありますが、こんな魔力のこもった鋼は初めて見ました。特別というのも納得です」

「少しだけ使う、というと武器ですか？」

「ええ」

　ディーピカさんは頷いた。

「なにせここは“黒の森”ですからね」

　お茶目っぽくウィンクしながらそう言うディーピカさん。俺はそれに「確かに」と笑いながら返すのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

今週末10/10（土）に書籍版第3巻が発売となります。

https://kadokawabooks.jp/product/kajiyadehajimeruisekai/322006000298.html

こちら、Web版にはない書き下ろしも収録されておりますので、是非お求めください。

また、Web版をフォローいただけますと、発売前にメールにて特別書き下ろしのご案内が届きます（まだ間に合うかと思います）ので、よろしければフォローもお願いいたします。

書籍版１巻も読み放題キャンペーンで今ならこのまま読めます

https://kakuyomu.jp/works/1177354054921918876

## 夫婦剣

2020年10月7日

「妖精さん達は鋼をどこから調達してるんです？」

　まさか無から生み出しているわけでもあるまい。自ら生み出せないのなら、どこかから調達しているはずである。

　その取引が円滑にいっているなら、わざわざ手出ししようとは思わないが、適正でないならうちから持っていってもらってもいいと思っている。同じ森に住むよしみでもあるし、妖精さんたちも移動が少ない分楽だろう。

「大体は獣人の長に持ってきてもらえるよう、頼んでます。ちょっとした祝福と引き換えに、ですが」

「なるほど」

　じゃあ、どのみち“黒の森”の中で循環はしているわけだ。そりゃそうか、俺がここに来る前から営みはあったのだから。

「まぁ、我々が武器を使うことはめったに無いので、それも数年に１度と言った頻度ですが」

「じゃあ、そもそもそんなに必要ではない、ってことですか」

　ディーピカさんは頷いた。

「ええ。修理するくらいの分があればいいので。新しく造ることはまずないですからね」

　それじゃ、うちが手出しすることは何もないな。妖精さんサイズとなると、それこそお人形さん向けの大きさになってしまう。作れなくはないだろうけど、ドワーフでも作るのは難しいだろうなぁ。

「ああでも、ここの鋼なら機会があれば分けていただきたいかも知れません。今は長がいないので勝手に決められないですが」

「それはいつでも歓迎しますよ」

　その言葉に「ありがとうございます」と返すディーピカさんの言葉を聞きながら、俺は冷えた板金をヤットコで掴んだ。

「やっぱり違うんだなぁ……」

　俺がヤットコで掴んだ板金を見てサーミャがそう漏らした。彼女はこのメンバーの中だとリケを入れても１番長く板金を作っていることになる。流石に良し悪しがわかるようになってきたか。

「わかるか？」

「どこがどう、とかはわかんないけど、アタシらが作ったのとは全然違うのはわかるぜ」

「本職でもないんだし、この期間でそこまでわかるようになれば十分だと思うけどね」

「そういうもんかな」

「そういうもんだ」

　別にこのレベルを全員に課すつもりはないしなぁ。チート持ちとそれ以外の差もさることながら、最初からこのレベルである必要性はそこまでない。

　その後の作業はと言うと、いつもどおりと言えばいつもどおりだ。成形し、整え、焼入れ（と焼戻し）して、研ぐ。

　いつもと違うのは今回は特注品なので魔力を限界まで込めることと、整える前の工程だ。

　熱して形を整える。もう何度も繰り返してきたことなので、目を閉じていてもできそうなくらいだが、集中して行う。

　やがて、ほとんど修正もいらなさそうな両刃ナイフが姿を見せた。一体にしてあるのですでに鍔と柄も形ができている。

　普通ならこの後ヤスリなんかで僅かな凹凸を均したりするのだが、今回はその前に少しだけ手を加える。

　俺はナイフを固定すると、タガネで彫刻を入れていく。入れるのは小さめの薔薇の花。守り刀とおそろいのものである。

　守り刀とおなじように鞘に入れることも考えたが、あまり目立たせたくないのもあって、めったに見せることはないであろう箇所に入れることにしたのだ。よりによって薔薇にしてしまったので、少し苦労はしたが無事に１輪の薔薇がナイフに咲いた。

「よし、これでいいかな」

　その身に薔薇を宿したナイフを守り刀の横に置いてみる。二振りのそれらは、まるで夫婦のように寄り添っている。

「はー、見事なものですねー」

　リージャさんが心底感心した様子で言ってくれる。

「ありがとうございます。まぁ、これが仕事ですからね」

　そう、俺の仕事は鍛冶屋なのだ。このところ若干切った張ったが増えていて、見失いそうになることもあるが。せっかくもらったものを無為にはしたくないものである。

「それじゃあ、仕上げていきますね」

「はい！ 見てます！」

　元気なリージャさんの言葉にやる気を回復させながら、俺はヤスリを手にとった。

## 街へ行こう

2020年10月9日

　ヤスリで剣の表面を整えていく。とはいっても、チートを使っていてもついてしまう鎚跡や、彫刻のカエリを取る位のものだが。

　少しずつ目の細かいヤスリに変えて、表面を綺麗にする。最後は砥石でヤスリをかけた痕を消したら、火床に入れる。温度が上がってきたら、ナイフを水槽へ入れるまでの動きを確認する。

　今のところは途中に障害はない。普段なら俺が何をしようとしているのかを周囲が理解しているので気にはならないが、今回は見学者が２人もいる。万が一熱したナイフが当たりでもしたら大変なことになる。

「今からこれを水槽に入れます。熱くて危ないのでそこから動かないでくださいね」

　俺はリージャさんとディーピカさんに声をかけた。２人はブンブンと首を縦に勢いよく振っている。

　それを確認して、目を火床に戻すと、丁度いい温度に達している。それを火床から取り出すと、素早く水槽へと入れた。ジュウという音を立てて、蒸気が上がる。

『わー』

　妖精さん達２人はそれを見て歓声を上げた。ナイフを作る作業の中で、派手さは一番だからな。ナイフの温度が思ったところまで下がるのを待ち、再び火床の火にかざす。

　少しばかり温度を上げたら、脇へ避けて自然に冷めるのを待つ。

　ふと気がつくと、妖精さん達は身じろぎもせずにそこに立っていた。決して安全ではないが、一番危険なところはもう終わっている。

「もう動いても平気ですよ。これはまだ熱いので触らないでくださいね。すみません、気がつきませんで」

「いえいえ」

　ディーピカさんのほうが手を振った。

「人間の鍛冶屋ってこう言うことをしているんですねぇ……」

「ええ。妖精さん達は違うんですか？」

「みたいです。作業を見たことがないので詳しくは知らないんですけどね」

　ちょっと困った顔をしてディーピカさんが答えた。もしかすると妖精族の秘伝とかあるんだろうか。逆にそのあたりの技術が発達してないだけかも知れないが。いずれにせよ興味はある。

「もし機会があれば、ぜひ拝見したいところですね」

「ええ、是非。でもあの娘、気難しいからなぁ……」

　俺は思わず苦笑した。職人が偏屈なのは人間も妖精も変わらないらしい。さて、冷えたら柄に革を巻いて仕上げよう。鞘は目立たないよう有りもの――つまり、普段納品してるのと同じもの――を使うから、新しく作る必要はない。

　これで結婚式の祝いの品は完成だな。ひとまず明日に指輪とまとめて納品しよう。

「ああ、そうか。どうしようかな」

　夕食時、サーミャから「明日街へ行く間、２人はどうするんだ？」と聞かれて、俺は頭を抱えた。万が一を考えると、ここに２人だけ置いておくわけにはいかない。

　しかし、誰かを残すなら俺しかいないわけだ。他を残しても万が一の時にはどうしようもないからな。でも納品であることを考えると俺がいないのも具合が悪い。

　かと言って、２人を街へ連れて行くのもなぁ……。

　俺がウンウン唸っていると、リージャさんがおずおずと手を上げた。

「あ、あの……私達も行っていいですか？」

「行っても大丈夫なんです？」

　一緒に来てもらえるなら、それに越したことはないが、エルフ以上に希少な存在だ。流石に何が起こるか分かったものではない。

　リージャさんは頷いた。

「はい。私達は暫くの間なら姿を消せるので」

　そう言うと、リージャさんの姿が徐々に薄れていく。最終的に、ほのかにキラキラしている、ぼやけたリージャさんの姿だけが残った。

　俺はリージャさんを知っているから、これが妖精でリージャさんだと分かるが、そうでない人には「なんか空間が少しキラキラしてるような……」くらいにしかわからないだろう。

　俺がそれを言うと、リージャさんは驚いた。

「見えるんですか！？」

「薄っすらとですけど。ほとんど見えてないのも変わらないですよ」

「それでも見えてるのは凄いです！」

　そうなのか。俺とリージャさんが困惑していると、リディが言った。

「エイゾウさんは魔力が完全に見えてますからね」

「ははあ、なるほど」

　鍛冶のチートに付随して、この世界で常識外のものを作るのに（たぶん）不可欠な、魔力を知覚する能力が俺には備わっている。妖精さん達は魔力が強いから、それで見えているのだろう。

　そっちまでは消せない、ということらしい。

「これなら普通の人には完全に誰もいないようにしか見えないと思うので、心配はいらなさそうですね」

「アタイには見えないなぁ……。どこにいるかはわかるけど」

　リディの言葉にヘレンが茶々を入れる。ディーピカさんが怪訝そうな顔をしたのが分かった。

「お前のは気配でだろ」

「バレたか」

「そりゃそうだよ」

　俺がツッコむと、食卓には笑いが溢れた。よくよく考えれば、気配で分かるのも相当に凄いことなのだが。

　こうして、妖精さん達２人は街へ行くことになる。大丈夫だとは思いつつ、俺は問題が起きませんようにと内心祈らざるを得ないのだった。

## 妖精さん、街へ行く

2020年10月12日

　翌朝、水汲みから戻ってくると、リディと妖精さん２人が表に出ている。

「おはよう」

『おはようございます』

　俺が声をかけると、３人が振り返った。

「３人が表ってことは、魔力かな？」

「ええ」

　俺の問いかけにはリディが答えた。妖精さん達がなんと言っていいか、まごついている間にリディが答えてしまった形だ。妖精さん達がリディをじっと見つめている。

「エイゾウさんは知ってるから大丈夫ですよ」

「そっかぁ」

　リージャさんがホッと胸をなで下ろす。いや、あの治療法で身体の維持に魔力が関係してることが分からないってのはないと思うのだが……。

　いや、でもなんかよく分からんが治るとだけ知っている可能性はあるか。

　医療という点では、薬も効果のある、あるいはそう言われている薬草の投与で、それの何の成分がどう効いているのかは分かってないようだし、病気に効く魔法もあるにはあるようなのだが、何がどうなって治るのかは分かっていない。

　前の世界でも風邪薬の何がどうなって風邪が治っていく（直接は効果が無いにせよ）のかは俺もよくは知らなかったしな。

「今日は街へ行くもんなぁ」

「ええ、それでお

「なるほど」

　この“黒の森”とは違い、街は魔力がほとんど無い。身体の維持のうち、食事でまかなっている部分も多いリディやクルル、そしてルーシーはともかく、その逆で身体の維持がほとんど魔力だよりの妖精さん達には辛いかも知れない。

　その辺を２人に聞いてみると、

「１週間も２週間もとなると厳しいですが、１日くらいなら平気ですよ。人間族だって１日くらいご飯を食べなくても死なないでしょう？」

　とのことだった。そりゃそうか。

　それでも１日メシを抜いたら腹が減るのは人間でも変わりないし、体調を崩すことだってある。

　そんな状態は少なくすべきではあるな。用事を済ませたらさっさと帰ることにしよう。

　朝食を終えて、納品物を荷車に載せていく。指輪２つは袋に入れた上で、小箱にしまい込み、贈り物の２振も納品物とは分けておいた。

　荷物を積み終えたら、今度は人間達の番だ。ルーシーも含めて家族が全員乗り込んだあと、妖精さん達がふよふよと飛んで乗り込んだ。

　ルーシーが妖精さん達をじっと見つめている。尻尾をパタパタ振っているから、警戒しているわけではなく物珍しいだけだろう。

「妖精さんを脅かしたらダメだぞ」

「わふ」

　俺が声をかけると、分かっているとばかりに返事をした。お利口さんなのは助かる。

　このやりとりを見て、妖精さん達がそっとルーシーに手を振ると、ルーシーはより一層尻尾のパタパタを速めた。

　森の中では姿を隠す必要はない。初めての荷車からの光景に、妖精さん達ははしゃいでいる。

「走竜って速いのね！」

「荷車も聞いていたよりは揺れないわ！」

　クルルが速いのも、荷車が揺れないのも通常とはちょっぴり事情が違うのだが、このタイミングでそれを言って興を削ぐ必要もあるまい。

　なぜか一緒になってはしゃいでいるルーシーも含めて、俺たちは微笑ましくその光景を見守る。

　うちに“娘”は２人いるが、人間かあるいはそれに近しい種族の子供がいればこんな感じなんだろうか。

　そんな思いとはしゃぐ妖精さんを乗せて、クルルの牽く荷車は森を抜けていった。

　やがて街道に出ると、

『うわぁーーー！！』

　と２人の声が聞こえた。

　そうか、森の中に草原はないからな。あるのは大きな湖で、その周囲に木が生えていない箇所もあるが草原と言うほど広大ではない。

　２人は生まれて始めて見るのであろう草原に、キラキラと目を輝かせている。俺たちにとっては見慣れた光景。

　それも立場が違えば新鮮な感動をもたらすものなのだ、ということをすっかり忘れていたように思う。俺はなんとなく気恥ずかしさを覚えながら、２人に言った。

「時折は人とすれ違うので、そのときは姿を隠してくださいね」

『わかりました！』

　草原に目を釘付けにしながら２人は返事をする。途中２度ほど馬車とすれ違った時に隠れて貰った以外は、２人はずっと草原を眺めていた。

## 妖精さん、街を見る

2020年10月14日

「そろそろ着くので、いったん隠れておいてください」

『はーい』

　俺が声をかけると、２人はスッとその姿を消した。しかし、俺からは相変わらず薄っすらと魔力が見えている。

　ルーシーは２人のいる辺りをクンクンしたあと、ディアナの足下で丸まった。消え去ったわけではなく、見えなくなっただけでその場にいることを理解したのだろう。彼女は魔物ではあるが、魔力の感知はあまり得意ではないらしい。

　それでも、「見えなくなっただけだ」というのが分かるだけでも十分に賢いと言えよう。親バカかも知れんが。

　街の入口の衛兵さんに軽く手を上げて挨拶をすると、鷹揚に手を上げて返してくれた。もうここはほぼ顔パスだな。

　街に入るとディアナの足下にいたルーシーがスッと起き上がって外を眺めはじめる。薄っすらと見えている妖精２人もルーシーの左右に移動したのが分かった。

「わー。人がいっぱいだ」

「凄いね」

「はじめて見た」

「ねー」

　小さな声でコショコショと話をしている。ルーシーは顔が見えないが、尻尾をパタパタとご機嫌だ。露天の強面のオッさんが見えると、

「わん！」

　と鳴いた。それに驚いたのか、一瞬だけ妖精さん達の“姿隠し”が弱まる。とは言え、いると思って見ていないと分からないほどの間だったし、姿もほんの少ししか見えていないので、ほとんどの人にとっては見間違いか何かに見えたことだろう。

　視界の端でルーシーの鳴き声で気がついたオッさんがルーシーに手を振るのが見えたが、驚いた顔でもないので妖精さん達は見えてないらしい。

　後はバリバリに魔法が使えるような人間（とかドワーフとかエルフとか）がいれば別だろうが、こういうところに来る可能性は限りなく低い。

「はー、びっくりした」

　ディーピカさんの声が小さく聞こえると、ルーシーが尻尾を下げて「キューン」と鳴く。

「ごめんごめん、大丈夫だよ」

　再びディーピカさんの声が聞こえて、ルーシーの頭の毛がもふもふと動いた。どうやら頭をなでているらしい。それでルーシーはすっかり機嫌を直し、尻尾のパタパタがはじまった。

「丁稚さんには見せないほうが良いかなぁ」

「驚くから止めといたほうが良いんじゃない？」

「だよなぁ」

　俺の言葉にはディアナが答えた。あの純朴そうな少年を驚かせて楽しむような趣味はない。彼がいずれ成長したら別だが、今のところは内緒でもいいだろう。

「カミロには会わせるつもりだが」

「何かあったときの援助を頼むなら、そのほうが良いでしょうね」

「基本的にはうちで賄えるとは思うけど、うちにない物資が必要になった場合には頼らざるを得ないからな」

　俺が言うとディアナが頷く。最終的には生活のほとんどを自給自足できればいいと思っているが、そうはいかないものもある。例えば塩だ。岩塩でも見つかれば別だが、今のところは購入するより他にない。

　そういったもので、妖精さん関連のものが必要になるとすれば急を要するだろう。その時になってはじめて説明するのも時間が惜しい。

　今日みたいに余裕があって、且つ本人たちもいるときのほうが話も通しておきやすい。もちろん、本人たちさえ良ければ、の話だ

　なので、カミロの店に到着する直前、俺は２人に聞いてみた。

「良いですよ！」

　薄っすらとだけ見えるリージャさんからあっさりと元気な返事が返ってきた。いいのか。

「いることを知られてはいけない、とかそういうのは……」

「ないです！」

「さいですか……」

　俺の心配は全て杞憂だったらしい。

「とは言っても、あまり知られすぎるのはよくありません。我々がどうやら珍しい種族であると言うのは自覚してますからね」

「なるほど」

　釘を差すようにディーピカさんが付け足した。姿を消せるのに草原に行ったことがないのは自衛のためのようだ。そもそも人前に姿をあらわすのも相当な珍事であるらしいことを忘れていた。

　２人が気安いので勘違いしそうになるが、保守的な妖精さんならついて来なかったりするのだろう。

「お２人に会わせるやつの口の硬さは保証しますよ。おいそれと漏らすようなやつじゃありません」

　ホイホイ秘密を漏らすようなやつが商人として大成できるはずもないしな。

「わかりました」

　ほんの少し緊張を残した声でディーピカさんが答える。竜車はカミロの店に到着した。

　さて、丁稚さんにはいつもどおりとして、カミロにはどう紹介しようか。そう考えながら、俺はいつもどおりの風景を眺めた。

　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　書籍版第3巻が好評発売中です。

　https://kadokawabooks.jp/product/kajiyadehajimeruisekai/322006000298.html

　こちら、Web版にはない書き下ろしも収録されておりますので、是非お求めください。

　サイトには特典情報も掲載されておりますので、ご確認いただけますと幸いです。

　書籍版１巻も読み放題キャンペーンで今ならこのまま読めます。

　カドカワBOOKS様の５周年記念にSSも掲載していただいてますので、よろしければこちらもどうぞ。

　https://kadokawabooks.jp/special/5th-anniversary.html

## 妖精と商人

2020年10月16日

「荷車から降りたら、姿を消したままついてきてくださいね」

　俺が小声でそう言うと、同じく小声で「わかりました」と答えが返ってきた。頷かれても分からんしな。

　いつもの通りに倉庫に荷車を入れると、「ふわぁ」と声が出てしまっていたのはご愛嬌と言うものだろう。

　倉庫にいた店員さん（俺が“丁稚さん”と呼んでいるのとは違う人だ）が一瞬怪訝そうな顔をしたが、理解しているのかどうなのか、タイミングよくルーシーがあくびをしたので、それだと思ったらしい。微笑んで仕事に戻っていった。

　荷車から降りるときには指輪と夫婦剣を忘れない。クルルとルーシーは自由になると、進んで裏庭に向かっていった。

　裏庭には丁稚さんが待っていて、うちの娘２人の姿を認めると破顔した。

「それじゃ、よろしく頼むよ」

「はい！ お任せください！」

　クルルとルーシーもすっかり彼には懐いていて、顔やスネに頭を擦り付けたりしている。なんとなく微笑ましい気持ちになって、俺達はいつもの商談室へ向かった。

　商談室へ向かう際も、小声で「うわー」という声が聞こえてくる。森の中の一軒家――と呼ぶには少々デカいが――と、街の店舗、それも商談室などまで備えたやり手の商人の店と比べたら、内装は雲泥の差と言わざるを得ないだろう。

　こうやって見聞を広めて、文化として取り入れたりしてくれると良いのだが。

　商談室へ入っても、感嘆の声は止まらなかった。他人を入れるためにタペストリーやら絨毯やら、一際豪華な内装になってるからな。俺たち向けには意味がないが、こういったハッタリが必要な場面も少なくはあるまい。

「こういうのは妖精族にはないですか？」

「そうですねぇ。長の家でもここまででは」

　口ぶりからすると、妖精族にもそれぞれに家のようなものはあるらしい。一瞬ファンシーなキノコの家が頭をよぎるが、人形サイズのちゃんとした家があるのだろう。

「妖精さんサイズの何かが作れたらジゼルさんに贈りましょうかねぇ。いつになるかも分からないですが」

　小さいサイズのものを作るのは、それはそれでいい経験になりそうだ。だが、それより先に作らねばならないもの、作りたいものもたくさんあるし、本当にいつになるかは不明としか言えないのだが。

　家具類は作ったとしても、まずうちに設置して妖精さんたちが逗留できるようにしないとだしな。

「いいですね、長も喜ぶと思います」

　ディーピカさんの声が聞こえる。まだ姿を消したままなので表情は伺い知れないが、声からすると喜んでいるようだ。

「おっと、お出ましだ」

　その時、ドアがノックされて、すぐにカミロと番頭さんが入ってきた。俺は気軽に手を挙げる。

「よう」

「おう。調子はどうだい？」

「良くもなく悪くもなくってところだな」

「いつもどおりか」

「いつもどおりだ」

　そういって俺とカミロはニヤリと笑いあう。

「いつもの品はいつもどおりでいいのか？」

「ああ」

「それで、例の品は？」

「もちろん完成してる」

　俺は小箱を取り出し、カミロに渡した。彼は箱を開け、ほのかに光る指輪を手に取ってあらためる。

「見事なもんだ。メギスチウムに細工までしてある。これを売れと言われたらさぞかし値付けに困っただろうな」

　笑いながらカミロが言う。俺は自分が困った顔になったのを自覚した。

「どうした？ なんか問題でもあったか？」

「いや、問題ではないと思うんだが……」

　いざとなるとどう話したものか困るな。しかし、正直にありのままの状態を言うのが一番早いか。

「それには妖精族の長の祝福を授かっている。災厄よけだったかな。妖精族の中でもかなりいい方の祝福だそうだ」

　カミロが芝居がかってない驚きの顔を見せた。普段は多少なにかあっても眉一つ動かさない番頭さんも表情が崩れていた。

「黙ってても良かったのかも知れんが、そういうものなのは言っておかないと、何かあった時に問題だろう？」

「いや、それはそうだが……」

　カミロが珍しく言いよどむ。

「で、だ。番頭さんならいいかな」

「私ですか？」

　俺は頷いた。番頭さんも珍しく怪訝そうな顔をしていた。この状態でこの上なにがあるのか、と思うのは当たり前だろう。

　俺だって事情を知らなかったらそう思う。

「お２人とも、いいですよ」

　俺がそう言うと、妖精さん２人が姿をあらわした。流石に緊張しているのか、俺に隠れるようにしている。

「妖精族のディーピカさんとリージャさん。事情があって今２人ともうちにいる」

　２人は無言でペコリと頭を下げた。一方のカミロと番頭さんはと言うと。

　２人とも、口と目を大きく開けているのだった。

## お誘い

2020年10月19日

「まぁ、そんなわけだ。だから妖精の祝福というのは保証するよ」

　口と目を見開いて動けないでいるカミロと番頭さんに俺は言った。２人はしばらくそのままだったが、やがて番頭さんが咳払いをすると、カミロも咳払いをする。

「ゴホン、失礼。つくづく常識外れなやつだと思っていたが、これほど常識外れとはな」

「何を今更、と言ったほうが良いか？」

「いや……そうだな。帝国の皇女がいる時点で非常識にもほどがあった」

　カミロはそう言って取り落とした指輪を、さっきよりも慎重に持ち上げる。

「メギスチウムにシンプルだが模様の細工、それに妖精の祝福……」

　指輪は光を反射して輝く。それがまぶしかったのだろうか、カミロは目を細めた。

「値段がつけられないな、こいつは。わざわざ言わなくても、エイムール家が未来永劫家宝として保護する話になってもおかしくない」

「そんなにか」

「当たり前だろ」

　心底呆れたようにカミロが言った。そんじょそこらの品ではなくなったとは思っていたが、そこまでとは。

「これの報酬については、すまんがまた後日でいいか？ ちょっと伯爵閣下にも増やすお伺いをたてなきゃならん」

「いや……」

　俺は「報酬は元のままでいい」と言おうとして、口をつぐんだ。殺気にも似た何かを隣に座っているディアナから感じ取ったからだ。妖精さん２人もそちらとは逆側にそろりと移動した。

「た、頼んだ」

　俺は冷や汗をかきながら、そう返すのが精一杯だった。

「しかし、妖精ねぇ……。また何か厄介事か」

　カミロがチラリと妖精さん達を見やると、２人は少しだけ体をすくませた。それでもさっきみたいに隠れないところを見ると、多少は慣れたらしい。

「長くなるから掻い摘まんで話すが、別にそう厄介でもないよ。ちょっとした事情で知り合っただけだ。きっかけはその指輪だが」

　そう言って俺はカミロの手にある指輪を指さす。カミロは再び指輪に目をやった。

「こいつがねぇ……。とんでもない事態に巻き込まれてるとかではないんだな？」

「そこは保証するよ」

　俺は頷く。カミロは小さくため息をついた。

「それで？ わざわざ２人を見せたってことは何かあるんだろ？」

「すぐに何かして欲しいってことは無いが、彼女たちに何かあった場合に調達して貰うものが出るかも知れないからな。そのときに話が早いだろ？」

「確かに実物を見てしまったからには、本当か嘘かを疑う余地はないからな……」

　カミロは指輪を置いて腕を組んだ。そこだけ分かってくれたら今はいい。実際に彼女たちにして欲しいことはないのだし。

「そういうことだ。ああ、それと結婚する２人にこれを渡しておいてくれ。こっちがマリウスので、こっちがジュリーさんのだ」

　夫婦剣をカミロに差し出す。しかし、カミロは首を横に振った。

「悪いが、こいつは受け取れないな」

「え？」

　俺がキョトンとしていると、カミロはニヤリと笑った。彼は懐から手紙を取り出すと、それを差し出した。

「とりあえず一本取り返せたか。まぁこれを見ろ」

　言われて俺は手紙を見る。封蝋にはエイムール家の紋章、つまりはマリウスからの手紙だ。

　懐のナイフで封蝋を切って、中身を取り出すと綺麗な字で次のようなことが書かれていた。

『自分の結婚式に、エイゾウとその家族全員を招待したい。装束はこちらで用意する』

　時候の挨拶やらを除けば、つまりはそういうことだった。驚きと困惑が俺の頭を満たす。

「お誘いは嬉しいが、大丈夫なのか？」

　俺は困惑を隠さないまま、カミロに尋ねた。彼に尋ねても意味が無いかも知れないが。

　エイムール家騒動の時は侯爵の手前、北方の貴族と言うことにしたが、その後に俺の本来の身分はバレていると思って良いだろう。

　本質的には貴族たち上流社会へのアピールの場である結婚式に、俺みたいな身分が参加してもいいのだろうか。

　うちで身分が高いと言えばディアナとアンネだが、ディアナは妹だから参加するしないとかではないとして、アンネは帝国皇女である。余計な勘ぐりを受けたくはあるまい。

「大丈夫だろ。それなりの格好はつけるさ。それに……」

　カミロはそこでいったん言葉をくぎった。彼は再びニヤリと笑って言った。

「友達を結婚式に呼ぶのに、理由もなにもあるもんかい」

## 欲しい物

2020年10月21日

「そうか」

　俺はやっとのことでそれだけを絞り出すのが精一杯だった。

「そうか……」

　ぐっと何かが出てこないように押し止める。

「わかった。是非伺わせてもらうよ。みんなもいいかな」

　俺がなんとか微笑みを作って家族のみんなに言うと、家族の皆は戸惑いながらも頷いてくれた。

「それじゃ、これは預かっておくよ」

　招待状を懐に収める。それはほのかに温かみがあるような気がした。

「ああ、それと欲しい物があるんだった」

　俺は思い出したかのように言った。いや、実際さっきので半分忘れそうになっていたのだが。

「なんだ？ 手に入りにくいものか？」

「いや、お前んとこならすぐに入手できると思う。顔料とそれに使う油、それとなるべく色がついてないニスが欲しい」

「顔料と油と色がついてないニス？ ああ」

　カミロは俺が差し出したままの守り刀を見て頷いた。何に使うのかは察してくれたらしい。

「顔料は何色のが欲しいんだ？」

「色は問わないよ。とりあえず何がいるかも分からんが、必要になった時にないと困るからある程度揃えておきたい。そっちの商売に影響しないくらいの量をもらえればいいよ」

「待ってろ、確かどれも在庫があったはずだ」

　カミロが番頭さんのほうを見ると、彼は頷いて出ていった。

「あと、これはもし手に入ればだが、漆だな」

「ウルシ？」

「北方のニスだよ。黒と朱があるが、手に入るならどっちでもいい」

“北方のニス”というのは細かく言えば違うんだろうが、説明としては大きく間違ってはなかろう。

「北方のか。ショウユやミソでツテはあるから、聞いてみるよ」

「すまんな。刀の鞘を塗ったりするのに漆を使いたくて」

「北方のものなら北方のもので、か。分かった」

　カミロは大きく頷いた。これでそう遠くないうちに漆が入手できればいいのだが。

「欲しいものはそれで終わりか？」

「とりあえずは。また出てきたら言うよ」

「俺としてはもっと言ってくれていいんだがな」

「儲かるし？」

「そうだな」

　そう言ってカミロと俺は笑う。そうしていると、番頭さんが戻ってきた。頷いているので、あったのだろう。

「まとめて積み込んでおきましたが、よろしいですか？」

「ええ、ありがとうございます」

「それではこちらを」

「確かに」

　いつもの通り、革袋を渡してくる。今回はいつもよりも少し軽い……ように感じる。互いに商売なのだ、俺の買うぶんはキッチリ領収していただきたいので、これでいい。

「それじゃ、次に会うのはエイムール邸でかな？」

「そうだな」

　そう言えば、エイムール家への納品は終わったのだろうか。のんびりしているところを見るとほぼ終わったのだろうが。

　式はもう目前に迫ってきているのだし、不慮の事態以外でバタバタしてるはずもないか。

「ああ、そうそう、この２人のことは……」

「わかってるよ、みなまで言うな」

　そう言ってカミロは口に指を当てた。勝手に連れてきて勝手に披露したのだ、言いふらすと言い出しても俺は文句を言えない。そうは言わないだろうと思っての事でもあるが、カミロは秘密にしてくれるつもりらしい。

　まぁ、「俺の店に妖精が来たんだ」と言って、信用してもらえるのかは相当に怪しいが。

「それじゃ、お２人」

『わかりました』

　そう言って、２人はスッと姿を消す。分かってはいても理解が追いつかないらしい。カミロと番頭さんは目を白黒させる。

「見事なもんだなぁ。どこにいるか全く分からん」

「フフッ」

　感心するカミロの言葉に、ディーピカさんが少し笑う。

「じゃあ、また」

「ああ」

　カミロと握手を交わしてから、俺は部屋を出る。出際にリージャさんが、

「ありがとう、商人さん」

　とカミロに声をかけて、カミロが今日何度目になるか分からないびっくりした顔になったのを、どうマリウスに伝えようか、そう思いながら。

## 草原にて

2020年10月23日

　カミロの店の裏庭に戻ると、丁稚さんとうちの娘２人は追いかけっこをしていた。微笑ましいので少しの間見守る。

「あっ、すみません！」

　それに気がついた丁稚さんが、慌てて駆け寄ってくる。クルルはアンネに、ルーシーはディアナに駆け寄って撫でてもらっている。

「いや、良いんだよ。遊んでくれて助かる。いつもありがとう」

　むしろ、うちの娘たちが怪我をさせてしまっていないかが心配なくらいだし。うちにはいない年齢の人間と触れ合う時間も大事……だと思う。

　見た目はお人形さんのようではあるが、妖精さんたちも子供というわけではなさそうだからなぁ。

　俺はガシガシと丁稚さんの頭を撫でて、いつもの通りお駄賃を渡した。俺の手の位置が、以前よりも少し高くなっているように思うのは気のせいだろうか。

　撫でた手を見つめながら、俺は倉庫の方へと向かった。

「出しますよ―」

　クルルを繋いで乗り込むと、リケが荷台に向かって声をかけた。とは言っても、すっかり慣れている俺たちにではない。見えない妖精さんたちにだ。

　ゆっくりと荷車が動き出すと、ちいさな「うわわー」という声が聞こえてきた。焦った感じではないので、落ちたのではなく動き出す荷車に再び感動しただけだろう。

　目を向けると、妖精さんたちがいるあたりにはルーシーがスックと立っている。もしかすると、何かありそうなら守ってあげるつもりなのかも知れない。うちに来た順だとルーシーはお姉さんだもんな。

　妖精さんたちは別に家族ではなくお客さんではあるが、このところ食事時にはルーシーと顔を合わせているし、家の方で寝泊まりしているのもあるだろう。

　いずれお客さんようの離れでも用意したほうがいいのだろうか。そうなると部屋どころでない手間がかかるが。

　荷車から外を眺める３人を見ながら、俺はそんなふうに今後についてあてもなく考えた。

　衛兵さんに挨拶をしながら街を出る。広がる草原に雲が流れる風景をみて、「ふわー」と今度は大きめの声が聞こえてきた。

　やはり俺たちにとっては見慣れた風景。それでも、妖精さんたちにはまだまだ新鮮にうつるのだろう。

「もう少し進んだら、姿を見せてもいいですからね」

『はい！』

　荷車に元気良い返事が響く。それ聞いた俺たち家族の微笑みも荷車に満ちていった。

「このあたりには森にいるのと違う鳥がいるんですねぇ」

　姿を見せたディーピカさんが、上空を旋回する猛禽の姿を見ていった。悠々と空を舞う猛禽は首をせわしなく動かしているようだ。獲物を探しているのだろう。

“黒の森”にいる猛禽というと、フクロウのようなのがいるらしい。

「見たことないなぁ」

「昼の間はジッと木の幹に張り付くようにしてて、アタシでもほとんど見つけられないからな」

「そりゃ凄い」

「夜になると動くけど、夜は外に出ないし」

　虎の獣人で獲物の気配には敏感なサーミャでも簡単には見つけられないとなると、相当だろう。そもそも“黒の森”の生き物は、木葉鳥や樹鹿、緑のリスのように何らかのカモフラージュをしている種が大半だ。猪ですら一見すると茂みに見えるようになっている。

　その中でも特に擬態が上手いとなると、これはもうそれを探すつもりでいないと無理だろう。

「あの鳥はああやって上からウサギや小鳥を探して、見つけたらサッと地面に降りて捕まえるんですよ。うちで飼ってました」

　アンネが身振りで説明をする。皇帝陛下のお家ともなれば、猛禽で狩りをするのか。うちのように生活のためではなく、趣味としてのものだろうが。

　妖精さんたちが「おぉー」と感嘆の声をあげると、タイミングよく猛禽は急速に高度を落としながら草原へと突っ込んでいく。

「あんな速さで大丈夫なんですか……？」

　どこか心配そうにリージャさんが言った。俺から見ても相当な速度が出ている。

「ええ。まぁ、成功するかは別ですけど」

　アンネが頷いた。荷車の皆は猛禽を固唾を呑んで見守る。少し伸びた草に姿が見えなくなったと思った次の瞬間、猛禽は大きく羽ばたいた。ガッチリした脚にはネズミだろうかウサギだろうか、獲物が捉えられているのが見える。

「すごい！」

　そんなディーピカさんの声をのせて、竜車は家へと向かっていった。

## 森の家

2020年10月26日

　森に入ると、そこは俺たちにとっても妖精さんたちにとっても勝手知ったるところである。

　言い換えれば、妖精さんたちにはあまり面白くないところではあるわけだ。

「帰ってきた、って感じしますね」

「ここのほうが馴染み深いですからね」

　ディーピカさんの言葉に、リディが応える。リディも出身はこの森ではないのだが、森の住人として何か共感するところも多いのだろう。

　リディの生まれ育った森にはもう彼女の暮らしていた里はない。ここに来るきっかけとなったホブゴブリン発生事件のあと放棄されてしまったからだ。

　そんな彼女が「馴染み深い」と言ってくれたことが、俺は純粋に嬉しかった。

　家に戻ったら購入したものを家や倉庫に運び込む。妖精さんたちにここを手伝わせるわけにいかないので、クルルとルーシーの相手をしてもらうことにする。

　お客さんだから、というよりは荷車の荷物を運ぶのが物理的に厳しそうだからだ。

　そういう魔法でもあれば手伝ってもらえるのかもしれないが、そこまでしてもらうのもなぁ、といったところである。

　荷物を運び終えて、昼食にする前に、リージャさんとディーピカさんの体調を確認する。

「頭や身体のどこかが痛いとか、フラフラするとか熱っぽいとかあります？」

「いいえ」

「私もありません」

「朝と比べて、身体がだるいとかもないですか？」

「魔法を使ったぶん以上はないですね」

「わたしもです」

「ふむ。身体の異常を感じたらすぐに言ってくださいね」

　妖精さんたちは俺の言葉に頷いた。まだ予断は許さないが、彼女たちが帰るまでに森の外に出る予定はないし、あと数日様子を見て平気なら大丈夫だろう。そうなれば無事退院ということになる。

　とりあえずは昼飯だ。俺は準備をしようとして、ふと立ち止まった。

「しまった、折角だから街でなんか買ってきて、妖精さんたちに食べてもらっても良かったな」

　めったに口にすることはないであろう、街の普通の食べ物でも良かったのでは、ということに今更ながらに気がつく。

　ものを作ることに関してなら、鍛冶仕事ほどでないにせよチートが働くので、俺の作る料理はその辺の料理人に負けない出来になっている。

　まんまズルをしているので、喜んで良いかどうかは微妙だが、マズいメシで精神が削られていくよりは余程良かろう。

「それはどうかしらねぇ……」

　体を清める水を汲もうとついてきたアンネが、ボソリと呟いた。

「エイゾウの料理を食べた後で、街の普通のものを食べさせてもね」

「それはそれで風情がないか？」

「まぁ、分からないではないけどね。味よりも気持ちの問題もあると思うわよ。貴方が作ったものだから食べたい、というのは」

「そういうもんかね」

「そういうもんよ」

　俺はなんとなく気恥ずかしくなって、そのままピャッと台所に引っ込んだ。

「ええと、うちではこの後は何をしてもいい時間ということになってます」

　昼飯が終わったところで、妖精さんたちに説明をする。

「夕食の時間までは、好きなことをしてくださって結構ですので」

　大抵サーミャ、ディアナ、ヘレン、アンネは弓や剣の稽古、リディは畑の世話、リケと俺が鍛冶場で作業だったりする。

　最近はサーミャ達が畑の世話を手伝う機会も増えてきたそうだ。植物が成長していく様をみるのは楽しいもんな。

　ヘレンは稽古相手としてはちょっと強すぎる面もあるので、ディアナとアンネで稽古するときには、よく“娘達”の面倒を見ているらしい。

「あんまり疲れると体に良くないかも知れませんので、出来れば安静にしておいて欲しいところですが……」

　俺はそう言ったが、妖精さんたちは首をブンブンと横に勢いよく振った。

　まぁ、そうだよな。体調も悪くはなさそうだし、普段とは環境が違うのだ。今のうちに見ておきたい物事も多かろう。

「わかりました。好きにしていただいて大丈夫ですが、何かあったときのためにすぐに誰か呼べるところにいてくださいね」

『はい！』

　２人揃って良い返事をしてくれた。俺は小さくため息をついて、「それじゃ、夕方まで自由時間とします」と宣言する。

　その言葉で、家族たちは三々五々やりたいことをしに散らばっていった。

　さて、俺は俺で自分のやりたいことをしますかね。鍛冶場で何か作業をするのだろうリケを従えて、俺は鍛冶場への扉を開けた。

## 小さな贈り物

2020年10月28日

　持って返ってきた夫婦剣を一旦神棚に納める。拍手を打って拝んで置いてから、守り刀の方を手にとった。

　どうせ作業するならいちいち納めなくても良かったのでは、と思わなくもないが、一旦出したものが帰ってきたのだから、おかえりなさいをしておいたほうが良かろうと思ったのだ。

「さて、最後の化粧を施すか」

　守り刀の目釘を抜いて刀身を外し、鞘と柄だけにしておいたら、鍛冶場に運び込んでもらったニスを準備する。ニスの入った壺には乾燥を防ぐためか釉が施されているように見えるが、もしかすると北方から来たものかも知れない。

　刷毛をニスに浸して余分を落としてから、鞘の方にスッとニスを塗った。今は若干刷毛目が見えるような気がするが、木材に染み込めば刷毛目はほとんど見えなくなるだろう。

　ニスをどう加工したのかは分からないが、着彩した部分の色はほとんど変わらず、鞘の薔薇は色を保っている。

　それよりも、ニスが染み込んだ時に滲んでこないかのほうが気にかかる。感覚では失敗しなさそうなのでいきなりやったが、万が一失敗した場合にはやり直す。幸い２週間ほど時間をもらえたわけだし。

　鞘と柄の外側全面にニスを塗り終え、薄く割った木材を本来刀身が収まるべきところにはめてから、万力に立てておいた。

　これで乾燥まで待つわけだが、鍛冶場が乾燥していて気温が高く、早く乾くといっても流石に１０分で乾くほどではない。少なくとも３０分程度はかかるはずだ。

　その待ち時間の間に何をしようかと、鍛冶場を見渡して板金に目が止まった。次の瞬間、ある発想が閃く。そうか、それもいいな。

　リケが高級ナイフを作る練習の合間を見計らって、俺も板金を熱する。温度が上がって赤くなった板金にタガネを入れて、小さな板金を３つ作った。

　３つ作った板金の１つを再び熱する。加工可能な温度になったら、鎚で叩いて成形をする。板金が小さいので鎚はいつものやつではなく、細工のときに使う小さいやつだ。小さいが頑丈なので加工にも使える。

　いつものカンカンという派手な音はせずに、高い音が鍛冶場に響いた。熱して叩いてを繰り返し、やがて小さな板金は小さなナイフの形になる。

　小さい分、目の負担が少し大きい気がするな。４０のままだったらもっとキツかったかも知れん。

　危ないし家族というわけではないので、今回は特注モデルまでにはしない。高級モデルでちょっといい方、くらいにとどめておいた。

　１つの形を作り終えたところで、ニスの乾燥具合を確かめる。そっと目立たないところを触ってみると跡がつかない。どうやら乾いているようだ。薔薇の様子を見てみると、特に滲んでいる感じもない。俺はほっと胸をなでおろす。

　あまり厚塗りにするのもよろしくなさそうなので、１回重ね塗りしたら終わりかな。

　サッサッと刷毛を走らせて、２回目のニス塗りを終えた。あとは乾燥させて、必要であれば表面を磨けば完了だ。こっちは明日には終えられそうだ。

　その後、小さな板金の残り２つも最初のと同じように加工する。これってチートの経験値（のようなもの）には加算されるのだろうか。

　いつものとは勝手が違うけど、やってることは全く一緒だしなぁ……。

　小さいので３本をまとめて加熱し、一気に焼入れと焼戻しをしてしまう。その後研いだら本体は完成だ。小さいのでいつもの細かさとはいかないが、猫のレリーフも入れておいた。握りは鹿革だとオーバーサイズなので、糸を巻いて代わりにする。

　鞘はこのサイズで木製は厳しいので、ニカワで革を接着し、糸で縫い止めた簡単なものにした。実用上は問題あるまい。

「よし、こんなもんかな」

　作業台の上には、お人形さんサイズのナイフが３本並んでいた。前の世界でみた映画に、包丁やら持って襲ってくる、殺人鬼の霊が乗り移った人形のホラー映画があったことが頭をよぎってしまうが、妖精さんたちとそんなことにはなるまい。ならんように気をつけよう……。

「わぁ、可愛らしいですね」

　リケが並んだナイフを見て目を輝かせた。彼女も幼い頃は人形遊びとかしたのだろうか。なんとなくドワーフだと「鎚と板金がおもちゃでした」って言われるイメージがなくもないが。

「たまにはこういう小さいのを作って、細工の練習をするのもいいかと思ってな」

「なるほど……」

　今度は顎に手を当てて考え出すリケ。半分冗談だったのだが。

「まぁ、話半分に聞いてくれればいいよ」

　無言で頷くリケをおいて、夕食の準備に取り掛かるべく俺は鍛冶場を後にした。

## 小さなお別れ

2020年10月30日

　夕食の終わり際、いつもなら明日の予定を確認する時間に、俺は懐から小さなナイフを３本取り出してテーブルに置いた。

「リージャさん、ディーピカさん」

『はい？』

「この３本をプレゼントします」

　俺の言葉に２人は目を輝かせる。

「いいんですか！？」

「もちろん。これも何かの縁ですから。お２人と、もう１本はジゼルさんの分です」

　知ってる妖精さんのうち、１人（それも長だ）の分を忘れてしまって呪いを受けたくはない。しっかりとその分は用意させてもらった。

「触っても？」

「もちろん」

　おずおずと聞くディーピカさんに、俺は頷いた。恐る恐るディーピカさんは鞘からナイフを抜いた。

「わぁ」

　目を輝かせるディーピカさん。刃物なので武器としても使えるが、基本的には道具である。どちらにせよ、心を込めて作ったものだ。喜んでもらえてよかった、と思う気持ちのほうが強い。

　ディーピカさんに続いて、おずおずとナイフを受け取り、鞘から抜いたリージャさんも同じような顔をして、ためつすがめつしはじめた。

「喜んでもらえたようで何よりです」

　俺が言うと、２人はコクコクと首を縦に振っている。

「そちらの鍛冶屋さんの迷惑にならないと良いのですが」

　俺は今更ながら唯一の懸念を口にした。「うちのがあるのに！」となって怒られたりやしないだろうか。

「いや、あの子は面倒くさがりなので大丈夫だと思いますよ」

「むしろ、『自分の作らなきゃいけない分が減ってよかった』って言うんじゃないかな……」

「そうなんですか？」

「ええ」

　転生前の事もあって、俺がワーカホリック気味なのは自覚しているが、そこまでのんびりしている鍛冶屋と言うのもなかなか珍しいのではないだろうか。

　ああいや、違うな。

「そもそも道具を使う機会って、そんなにないですか？」

「そうですね」

　俺が口に出した疑問に、ディーピカさんが頷いた。考えれば当たり前なのだ。道具を使うのはなぜかと言えば、究極には生きる糧を得るためである。

　妖精さんたちは食べ物をほとんど必要としない。それこそ自然に収穫できるものがわずかでもあれば、それで大丈夫なのだ。

　ただ、それでも必要になるものはある。自衛のものだったり、最低限必要な道具だったりと様々だが、その中でもナイフは出番が多い方なのだろう。それもすぐに壊れたりということはないとして、めんどくさいなぁと思うのは分からない話でもない。

　ある意味で俺が目指すべきところのような気がする。その意味では師匠だな。

「その方のお役にも立てたようで何よりです」

　そう言ってニッコリ笑うと、２人とも笑顔を返してくれた。

　翌日から数日は妖精さん２人の見学付きではあるが、いつも通りの生活が続いた。納品するためのものを作り、畑の様子を見て、娘２人と遊ぶ日々。

　守り刀の鞘と柄は綺麗にコーティング出来たので、袋にしまって剣と一緒に神棚に納めてある。

　そして数日が過ぎ、その日が来た。

「特に熱なんかもなさそうですし、大丈夫でしょう。なんかあったらまた来てください。ただ……」

　俺は妖精さんたちの額に指を当て、簡単に熱をはかってから言った。今日は２人が里に帰る日である。

「わかってますよ。結婚式の日はいない、あとは時々納品にいくから、その間はいない、ですよね？」

　俺の言葉をディーピカさんが引き継いだ。話が早くて助かる。

「そうです。ご不便をおかけしてすみません」

　頭を下げると、リージャさんが頭を横にふる。

「とんでもない。あなたは命の恩人です。それに妖精族の良き隣人なのですから」

「助からないはずの命が助かっただけでも、我々としてはいくら感謝してもしたりないくらいなのです」

「そう言っていただけると、私も助かります」

　そうして、皆で家の外に並ぶ。

「それでは、ありがとうございました」

「正直に言えば、楽しかったです。また来たいくらいに」

「病気でなく、遊びに来てくださるぶんにはいつでもいいですよ。なぁ？」

　そう言って家族を見ると、皆微笑んで頷いている。クルルは「クルルルルルル！」で、ルーシーは「わんわん！」だが、嫌っているわけではないだろう。

「嬉しいです。それでは機会があればまた来ますね」

「ええ、お待ちしてます」

　何度も何度も振り返りながら手を振る妖精さん達が、森の奥へと少しずつ姿を消していく。俺たち家族全員も、その姿が完全に見えなくなるまで、ずっと手を振り続けていた。

## 作法は苦手

2020年11月2日

　妖精さん達を見送ったあと、俺たちは改めて今後の話をする。

「前日に納品を済ませて、その時にカミロといつ行くか話すか」

「そうね」

　ディアナが頷く。俺は続けて質問をした。

「先にディアナとアンネに確認しておきたいんだが、ここらの貴族の婚礼っていつくらいに行って、いつくらいに帰るのが良いんだ?」

　俺もインストールである程度の知識は入っている。少なくともいきなり貴族から無礼打ちにされない程度の礼儀作法は知っているが、ウォッチドッグの想定に「貴族の婚礼に出る」という想定がなかったのか、その作法的なところはないのだ。

「あら、知らないの？」

　いたずらっぽく笑ってアンネが言った。俺は口を尖らせる。

「北方でも身近でそういう話が出る前に出てきちまったもんでな。ある程度の作法は知ってるが、それは北方のものだし、ここらでやり方が違うとマズいだろ？」

「まぁ、それはそうね」

　納得した顔でアンネが頷く。

「私のは帝国流だし、言っちゃなんだけど皇女が呼ばれる場合だけどいい？」

　つまりは第七皇女とはいえ、帝室の人間を呼んで問題のない身分の結婚式である。相当に豪華であっただろうことは想像に難くないし、主賓格での招待だろうからどこまで参考になるかは怪しいが、まぁ事例として知っておくのも悪くはあるまい。

「もちろん。知っておけば偉い人を見て怪訝に思うこともないと思うし」

「なるほどね。でも、気をつけることなんてそんなに無いわよ。あまり早く行きすぎるのはダメ、かと言って遅すぎても皆を待たせちゃうからそれもダメね。いくら帝室の人間とはいっても、いくらでも待たせて良いわけはないもの」

「そりゃそうだ」

　帝室の人間なのだから待たせりゃ良いじゃんと思っているのも、アンネの兄弟姉妹の中にはいるのだろうが、少なくともアンネはそうではないらしい。

　そんなしょうもない……というと主催者や参列者に失礼かも知れないが、そんなことで皇帝に不快感をもたれてはな。

　そういうことの積み重ねが最終的には革命騒ぎにつながったりするわけだし。

「だから、日が中天にかかるころから、沈むまでの間で行くのが一般的かな。あとは貴賓席に座ってニコニコして、挨拶に来る人たちの応対をしてるだけよ」

「それはそれで大変そうだ」

「まあね」

　そのときのことを思い出したのか、アンネが鼻の頭にしわを寄せた。どうも偉い人は楽だと思いがちだが、偉い人は偉い人の苦労というものがあるわけだ。

「じゃあ、後から来て座ってニコニコしてる人に粗相をしなけりゃいいってことか」

「そうね。でも多分そこに座るのってメンツェル侯爵になるんじゃないかな。王家の人間が来ないとして、だけど」

「ああ……」

　新郎新婦のどっちにも関係していて、しかも偉い。たしか大臣だっけか。半分は合議制のような王国で、王家でない人間としては位人臣を極めたと言っても過言ではないだろう。

　その侯爵が主賓として来るのは、不思議なことでもなんでもない。呼ぶがわとしても呼ばれる側としても、つながりをアピールするのに格好の場でもあるしな。

「王国はどうなんだ？」

「エイゾウは前に兄さんの継承のお祝いに来たでしょ？ あれみたいなものよ。普通は昼過ぎに行くわね」

「あれかぁ」

　ものすごくざっくばらんな集まりだったような記憶がある。意味としてはあれも今回の婚礼も同じく状態を周囲に宣言する、ということには変わりないから似たようなものになるのは当たり前か。

「皆で集まって食事をして、ちょっと舞踏の時間もあって、その合間に新郎新婦にご挨拶するくらい」

「じゃあ、本当に前と変わらないな」

「でしょ。伯爵家だからある程度豪華にはせざるを得ないけど、エイムールが武名の家というのは皆知ってるからね。そんなに気を張る必要は無いと思う」

「固まってりゃ大丈夫か」

「だと思うわ。私とアンネもいるし、平気でしょ」

　ディアナがチラリと目をやったのは、貴族ではない４人だ。ヘレンは多少そういう場に出た経験があるかも知れないが、他の３人は全く経験が無いだろう。

　主催と主賓ともに事情は知っているはずだし、多少の粗相は見逃されると思う。

「別にここで待ってても良いけど」

　そう言ったのはサーミャである。まぁ、不安なのはわかる。

「家族が誘われてるし、それはナシだな」

　俺がそう返すと、サーミャは更に言いつのろうとしたが、俺は手振りでそれを遮った。

「粗相があったら俺に迷惑がかかるかも、と思ってくれてるのかも知れないけど、それで怒ってどうにかするようなやつじゃない。そんなにない機会だと思って楽しもうじゃないか」

「なんせ兄さんもちだしね」

　ディアナがそう混ぜっ返す。でも、それには俺も同意だ。俺たちの言葉に、サーミャとリケ、そしてリディにヘレンが顔を見合わせ、頷いた。

「それじゃあ、俺たちは昼過ぎに向こうに着くようにするか。カミロにもそう話すってことで」

　家族全員か了解の声が返ってくる。さてさて、どうなるかな。

　俺は楽しみの中にほんのわずかな不安を感じながら、皆に今日の作業開始を告げるのだった。

## 結婚式へ行こう

2020年11月4日

　家族会議を終えると、俺たちは“いつも”に戻る。とは言っても、どこかしらソワソワしているのは仕方のないことだろう。お祝いごとに関われるのは純粋に嬉しいものだし。

　そんなワクワクは鎚にも伝わるのか、心なしかいつもより仕上がるのが早い気がする。

　そんな順調なある日の夕食。

「そう言えば、飯って美味いのが出るのか？」

　という疑問がサーミャから出てきた。彼女も人間族の結婚式に出たことはない。同族のなら親に連れられて、とかで経験があるかも知れないが。

　まぁ、それはサーミャに限らずディアナとアンネを除くみんなも同じだ。ヘレンは身分上の問題（傭兵を結婚式に呼ぶ貴族はあまりいない）で、俺は前の世界ならいざ知らず、この世界では出たことはない。だからこそ作法について確認したわけだが。

「そりゃあ、基本的に身内のお祝いとは言っても貴族の宴だからねぇ。ここでケチって見くびられる方が厄介だから、それなりのものは出るはずよ」

　答えたのはディアナだった。隣でアンネがうんうんと頷いている。

　貴族の宴というのはそれを開催できるだけの資金力と人脈があるぞ、ということを披露する場でもある。

　そこでケチって「あの家の資金力や人脈は大したことがない」と思われてしまうと、さまざまに無茶な要求などをしてくる可能性も十分にある。

　ディアナの言葉を聞いてサーミャが再び口を開く。

「前に都で食べたみたいなのか？」

　サーミャが言っているのはおやっさんの店のことだろう。どうやら気に入っているらしい。他の店を知ってるかどうかはともかく、あの店になら通ってもいいと思えるのは確かだ。

「どうかしらねぇ。うちの料理人も腕は悪くないと思うけど、あそこのご主人と比べると落ちるのは仕方ないわね」

「もしかしたら呼んで来るかも知れないな」

「ああ……。それはあり得ると思うわ」

　俺の言葉にディアナは深く頷いた。

「マリウス側の思惑と言うよりは、呼ばないとおやっさんが『俺たちにやらせないたぁ水臭ぇな！！！』って怒鳴り込んできそうなんだよな」

「それも確かにそうね」

　今度は家族全員が深く頷いた。アンネだけ他の家族とは別の機会にだが一緒に行っているから、あの店とその従業員がどう言う連中かは他の家族同様知っている。

「おやっさんが作るのでないにせよ、滅多なものは出てこないだろ。そこは期待していいと思うぞ」

「分かった」

　サーミャはそれで納得したようだ。しかし、結婚式の料理か。前の世界でもどういうものにするか、新郎新婦の間で悶着が起きることがあると聞く。俺は幸か不幸かそれを経験することはなかったが。

　マリウスが家を継いだ時の祝いの席には、エイムール家の使用人さんたちが作ったものが並んでいた。まさか前の世界のお節料理みたいに験担ぎの料理が目白押しということもあるまいが、誰が作るにせよ、メニューは違っているだろう。

　真似出来そうなら、うちのお祝いの席で出してもいいかも知れないなぁ……。

　そうこうしている間に時間は過ぎ、納品の日が来た。いよいよ浮き足立ってはきたものの、基本的にはカミロの店に行く間も、納品作業もいつも通りである。

　違いと言えば、俺たちが昼過ぎくらいに着くとカミロに伝えたことと、それを聞いたカミロが「その頃には俺もいると思う」と返したことくらいだ。

　いよいよ明日でバタバタしてたら間に合ってないってことだからな。あっさりとしたものだ。

　帰りもいつも通り（俺が丁稚さんの頭を撫ででチップを渡すのもだ）にことが進み、あっという間に、その日の朝を迎えた。

「衣装はともかく、身体は綺麗にしておかないとな」

　水汲みの時にクルルとルーシーを綺麗にするが、俺も含めていつもより念入りに綺麗にしておいた。田舎の鍛冶屋なのは間違いないのだが、友人に恥をかかせない程度に身綺麗にはしておきたい。

　家に戻ってくると、みんなも念入りに身支度をしていた。リケがディアナの髪を梳っているが、それもいつもより入念だ。兄の結婚式だしなぁ。

「先に行っても良かったのに」

「あら、私だけ仲間外れ？」

「いや、そういうわけじゃ……」

「分かってるわよ」

　ニヤッとお嬢様らしくない笑い方をするディアナ。

「ありがとう。兄さんも大事だけど、今の私の家はこっちだからね」

「そうか」

　俺はそれ以上何も言わなかった。言う必要もないだろう。

「さて、それじゃあ準備ができたら、ゆっくりのんびり向かいますか」

　俺の言葉に、みんなから「おー」と言う了解の声が聞こえた。

## 到着

2020年11月6日

　森の中をゆっくりと竜車が進む。家族の気分が乗り移っているのか、クルルの足取りも心持ち軽いように感じる。

「クルルにもおすそ分け持ってきてやるからな」

「クルルルルル」

　俺が荷台から声をかけると、クルルは嬉しそうに一声鳴いた。

　そう言えば、「ちょっと良い飼い葉」ってあるんだろうか。うちのクルルが馬だったらそれにしたかも知れん。

「ルーシーと一緒に貰えるだろうから平気でしょ」

　呆れたようにディアナが言った。宴の間、ゲストの馬やその他連れてきた生き物の世話をするのも、ホストの役目ではあるか。

　ルーシーが尻尾を振って「わん」と鳴く。この子も随分と大きくなってきたなぁ。

　俺は猫派なので、猫がどれくらいの期間でどの程度成長するのか、前の世界にいる時に知ったが、狼の場合は全くわからない。

　ただ、前の世界のテレビ番組でシベリアンハスキーの子犬を見た記憶からすると、それで言っていた年齢よりはかなり大きいような気がする。

「この子はどれくらいまで大きくなるんだろうなぁ」

　荷台に座っている皆の膝を巡回しているルーシーが俺の膝に来たとき、彼女を撫でながら俺は言った。彼女の尻尾が更に速く振られる。

「アタシが見たことある子狼の中では一番デカいのは確かだなぁ」

　そのルーシーを見ながら、サーミャが言った。それなりの数見てきているであろうサーミャの話と考えると、やはり魔物化していることが成長にも影響しているということだろう。

　前の世界で人気だったアニメ映画の犬神クラスにデカくなったらどうしようかな。小屋を広くすればいいか。

「魔力の影響で大きくなってるのだと思います。アンネさんの身長より少し大きいくらいまでは大きくなるかと」

　リディがそう呟いた。となると、２メートルともう少しくらいか。

　もちろん体高ではなく体長だろう。狼の体高で２メートル越えたら体長は４メートルか５メートルくらいになってしまう。クルルと一緒に荷車を余裕で牽けるレベルだ。

　そこまで成長した場合に本人がそれを望む可能性は高いが、ひとまず常識はずれに大きくなることはなさそうで少し安心した。一緒に狩りに行くにも４メートルの体長は持て余しそうだし、街の人も流石に怖がるだろうからなぁ。

「逆に言えば、それ以上にはならないと思います。クルルちゃんも異常に成長しているということもないですし。ただ、なにぶん“黒の森”なので」

「それはそうだな……」

　魔物化した以上、ルーシーの身体の一部は魔力で構成されている。それが普通の森の魔力くらいであれば影響も分かるのだろうが、我が家があるのはこの地域、いや、もしかするとこの世界でも有数の魔力が濃い地域である“黒の森”である。それがルーシーにどんな影響を及ぼしていくのかは分からない。

「まぁ、どうあってもうちの子として育てると決めたんだ、最期まで面倒は見るよ」

　俺がそう言って再びルーシーの頭を撫でると、彼女は分かっているのかいないのか、俺に頭を擦り付けてから一際大きく「わん」と鳴いた。

　森を抜けて、街道を進んでいく。以前クルルは街へ向かわないことを不思議に思っていたようだったが、今日はすんなりと反対側へ進んでいく。

「昨日街へ行ったから、今日は違うって分かるのかね」

「クルルちゃん、お利口さんですからねぇ。分かってるかも知れません」

　御者を務めているリケに話しかけると、そう返事が返ってきた。

　街道は今日も緑の絨毯を敷いたように草原が広がり、太陽の恵みを受けてくすぐったがるように風になびいている。昨日に引き続いて平和な街道だ。

　少し街道を行くと、普段は見ない一団を見かけた。全員鎧を着て武装している。俺たちはそれを見ても警戒はしなかった。それでも念のためだろう、ヘレンが荷車の床に置いた剣の柄にそっと手をかけている。

「やあ、どうも！ 上から失礼します！」

　俺はこちらから声をかけた。武装した一団の前掛けにはエイムール家の紋章が入っていた。つまり、一団は街の衛兵隊だったのだ。中には何度か街の入口で見かけたことがある人もいる。

　街の領主の婚礼があることだし、参列の途上で客が襲われないように巡回を増やしたとかだろうか。

　見知った顔の衛兵さんが大きな声で返してくる。

「竜車がくるから珍しいと思ってたら、あんたらか。都へ行くのか？」

「ええ、用事がありまして」

「見回ってきたところだから大丈夫だと思うが、道中気をつけてな」

「はい、ありがとうございます！」

　荷台から顔をのぞかせたルーシーが「わんわん！」と挨拶をし、衛兵さんたちに手を振られて俺たちは都へと向かっていく。

　そして、衛兵さん達の巡回もあってか何事も起こらずに、俺たちの乗った竜車は都へとたどり着いたのだった。

## 屋敷まで

2020年11月9日

　都の入り口である門にたどり着く。そこは相変わらずの盛況で「やや早いかな」と思っていたが、検問を抜ける頃にはちょうどいい頃合いになっていそうだった。

　ガヤガヤと騒がしい中、少しずつ列が進んでいく。クルルが時折つまらなさそうにあくびをし、ルーシーは周りにいる人々が珍しいのか、「あれなに！？」と言わんばかりにしっぽを振って荷台のあちこちから外を眺めている。

　チラッと様子を見てみると、ルーシーと目があったらしいリザードマンがニッコリと笑顔を返していた。彼（俺にはリザードマンの性別が区別できないので彼女かも知れない）らの感覚でも「ちいさいわんこは可愛い」のは変わらないようだ。

　竜車と周囲の空気を和ませながら、列は全体の長さを延ばしていった。

　俺たちが門に到着するまであと半分くらいになり、思ってたよりは少し遅くなりそうだと思った頃、門の方からパタパタと俺達に駆け寄ってくる姿があった。ルーシーがそちらの方に向きなおって「わんわん！」と吠えている。

「カテリナさん」

　俺が声をかけると、カテリナさんはシュッと一跳躍で荷台に飛び乗った。ヘレンに負けるとも劣らない身体能力だ。ますますこの人の素性がわからなくなってくる。……周りから見れば謎だらけの俺が言えた義理ではないだろうが。

「すみません、お待たせしてしまって。リケさん、御者代わります」

　荷台を移動して、御者台にカテリナさんが座る。そして「クルルちゃんよろしくね」と言うと、手綱を操り竜車を列から離しはじめた。小さく鳴いてクルルが歩きだす。

　カテリナさんは御者台から俺のほうを振り返った。

「招待状持ってこなかったんですか？」

「いや、ありますよ」

　俺は懐を軽く叩いた。何かトラブルがあったときのためにそこに入れてあるのだ。

「それを見せれば優先して通れたんですよ」

「そうなんですか？ いやでも……」

　お祝い事なのだし、伯爵家の客人ではあるのだからそう言う特権があっても不思議はないが、一介の鍛冶屋という立場上それを使うのは憚られる。ディアナもアンネも何も言わなかったし。

　ちなみに後で聞いたところによると、アンネの場合は「だいたい主賓だし、皇女の顔を知らない家臣とかまずいでしょ」と顔パスだったし、ディアナは「そう言うのは都の内部での行き来だったから、門まで行ったことがない」らしかった。そりゃ分からんな。

「そんなことだろうと思ってお迎えに上がりました。このまま屋敷まで向かいますよ」

　さっさと門のところにたどりつくと、カテリナさんは懐から木札を出して衛兵に見せる。衛兵は頷いて一歩道を退いた。今回も荷物のチェックはなしだ。

　もし俺たちがご禁制の品を運んでいたらマズいことになりそうなのだが、その辺はなんとかしてるんだろうな。

　人でごった返す都の目抜き通りをクルルの牽く竜車がゆっくりと進む。相変わらず様々な種族性別年齢の人がそこかしこにいて、それぞれにやりたいこと、やるべきことをしている。

「この雰囲気自体は嫌いじゃないんだけどな」

　前の世界ではそれなりに便利なところに住んでいたし、勤務先は都会のど真ん中だったから、こういった雰囲気には馴染みがある。

「移住します？ ご主人様も喜ぶと思いますけど」

　俺がポツリと呟いたのを聞きとがめて、カテリナさんが笑いながら言った。

　俺は苦笑しながら返す。

「いやぁ、嫌いではないと言っても、性に合ってるのはあっちですからねぇ」

「でしょうね。お嬢様や皆さんを見てても分かります。あら、ルーシーちゃん！」

　カテリナさんの声には少しだけ羨望が混じっているように聞こえたが、それは膝にルーシーが飛び乗ったことでかき消えた。

「やっぱり可愛いですねぇ」

「うちの子だからね」

「わかってますよぉ」

　デレッデレの表情で言うカテリナさんに、ディアナが釘を差した。宴が終わる頃には「うちの子にします！」とか言い出しかねないのは分かる。

　ルーシーが親を失った、普通の子狼であれば一考する余地はあったかも知れないが、魔物化していることもあるし、あり得ない未来になってしまっているが。

　もし次に魔物化していない、普通の子狼を森で見つけたら……。いや、無理だな。その子もうちの子になる未来しか思い浮かばない。

　ルーシーを里子に出さない代わりに、というわけでもないのだろうが、カテリナさんがルーシーの森での話を聞きたがったので、狩りにも連れて行っているディアナやサーミャがあれこれと話をする。

　その話に百面相をしているカテリナさんをルーシーが面白がっているうちに、気がつけば竜車は見慣れた屋敷までたどり着くのだった。

## お着替え

2020年11月11日

「おお、あんたか」

「おっ。よう！」

　エイムール家の屋敷に着いて、プレゼントを抱えて荷車から降りると、1人の男が裏手からやってきた。馬車――うちの場合は竜車だが――を裏に回すためだろう。そして、俺はその男を知っていた。

「マティス、元気にしてたか？」

「もちろん。走竜か、珍しいな」

「まぁね」

　魔物討伐遠征のときに馬番をしていたマティスだ。見知らぬ貴族が相手ならマティスも畏まって接するのだろうが、俺は彼にとって知らぬ相手でもないし、ただの鍛冶屋相手だから挨拶も気さくなものである。

　相変わらずどこかのんびりした感じに、若干の懐かしさすら覚える。

「それじゃあ、うちの娘を頼んだ」

「……任せろ」

　俺の言葉に一瞬怪訝そうな表情を見せたが、マティスはドンと胸を叩いた。こいつなら大丈夫だろう。

「２人ともいい子にしてるんだぞ」

「クルルルル」

「わん！」

　俺は２人の頭を撫でる。サーミャや皆も同じように頭を撫でて、ほんの少し離れ離れになることを惜しんだ。クルルはマティスにそっと手綱を引かれ、ルーシーも大人しくマティスの後をついていく。

「それではこちらです」

　２人とマティスを見送る俺たちにカテリナさんが声をかける。俺たちは頷いてカテリナさんの後をついていった。

　玄関から入ると、やはり見知ったこの家の使用人がそこで待っていた。

「皆様、お召し物のお着替えをお願いいたしますので、カテリナに続いてこちらへ。エイゾウ様は私に続いてこちらへどうぞ」

「ああ、ボーマンさん。すみません、いつもお手間をおかけして」

「いえいえ、とんでもないことです」

　この愛想と恰幅のいい使用人はボーマンさんだ。なんでもこの屋敷の使用人では一番偉いとか聞いたことがある。そんな人を俺達の接遇に回して良いんだろうか。

　過剰ではと思うが、マリウスの気遣いだし祝の場であることも考えて、素直にボーマンさんに従う。さてさて、今回はどんな服を着せられるのだろう。

　ボーマンさんと俺は何度か来たことのある廊下を進み、やがてボーマンさんがとある部屋の扉を開けた。

「こちらでございます」

「ありがとうございます」

　会釈をして部屋に入ると、果たせるかな数名の使用人が待ち構えている。俺じゃ着方が分からんからな。

「すみません、毎度毎度」

「いいえ、どうぞお気になさらずに」

　持ってきたプレゼントを小さなテーブルの上に置くと、使用人さん達は俺の着替えに取り掛かった。抵抗すると時間がかかるだけであることは分かっているので、大人しくされるがままになっておく。

　着替えさせられながら、練習がてらこういう場にも着ていけるような服を１着くらいは持っておくべきだろうかなどと考える。

　いや、出番がどれだけあるか疑問だな。ただの鍛冶屋だし。それに侯爵あたりに変に知られてしまうと「そう言う場に出る覚悟ができたと聞いて男爵位を持ってきたぞ！」と「うちの畑でじゃがいも取れたんでお裾分けに」みたいな感覚で持ってこられかねない。

　毎度手数をかけさせるのは心苦しいが、そう滅多にあることでもないし、使用人の人たちには勘弁願おう。

　数人で着せ替えてくれたので、着替えは素早く終わった。俺が今着ているのは王国の貴族が着る様式のもので、北方のものではない。

　似合う似合わないは別として、紋付羽織袴を着せられても困るからありがたいが。着せられたのはちゃんとした礼装のようで、あちこちに刺繍が施してあるが、あまり華美でないあたりが武で身を立てた家と言う感じがする。

　おそらくはこの家の誰か、つまりはもう誰もいなくなってしまった男性の誰かが残した装束なのだろうと思う。それを着せてくれたマリウスに、俺は心の中でそっと感謝を述べておいた。

　着替えが終わったら、プレゼントを持って再びボーマンさんの先導で移動した。次に案内されたのはテーブルがなく、椅子のみ用意された部屋で、どうやら客の控室みたいである。

　隣の部屋には他の人がいるようで、会話しているらしき声が聞こえてきた。

「もしかして、私達のためにこの部屋を？」

「ええ。皆様、貴族の方々は苦手でいらっしゃいますでしょう？」

「何から何まですみません」

　俺は頭を下げる。ボーマンさんはニッコリと微笑んで、

「これもお客様へのおもてなしですから」

　と事も無げに言ってくれた。実際のところ、俺のことを根掘り葉掘り聞かれるのも面倒だし、アンネも同様だろう。

　この家の人達には感謝してもしきれない。今度またこの家の人達になにかプレゼントでも持ってこよう。

　恐らく他の家族の着替えも手伝ってくれる人が付いてるはずだが、それでも女性の着替えや準備に時間がかかるのは前の世界もこの世界も変わらない。ましてや今回は祝宴に出るのだ、相応に時間がかかる。

　せっかくなので、その時間を使ってボーマンさんとあれこれ話していると、やがてノックの音が聞こえた。恐らくうちの家族が着替え終わったのだろう。ボーマンさんが、

「どうぞ。エイゾウ様はいらしてますよ」

　と言うと、ガチャリと扉が開いたのだった。

## それは花が咲くような

2020年11月13日

　果たせるかな、扉を開けて入ってきたのはうちの家族の皆だった。それぞれ色の違うドレスを着ている。

　サーミャは橙、リケは紫、ディアナは藍色、リディは緑、ヘレンは赤、そしてアンネは黄色だ。

　前の世界の知識があると普通に見えてしまうが、この世界でだとこれだけ色違いのドレスを揃えるのは大変だったに違いない。

　どこから借りて（あるいは買って）きたものなのか、皆ある程度サイズが合っている。

　とはいえ、サイズを測っていない状態では、さすがに完全に合わせることができなかったようで、裾が足りないヘレンとアンネの長身組には裾にレースのような布が足され、逆にリケは袖を少し肩の方に上げてある。

　おそらくは今日１日保たせるだけの急拵えだろう。それでもしげしげと眺めでもしないと分からないようにしてあるのはさすがだ。結構時間がかかってるなとは思ったが、これに時間をかけていたんだな。

　ディアナのは当たり前だが自前のもののようで、これはピッタリ合っている。

　良かった。うちの暮らしで腹回りに肉がとか、逆に肩の筋肉がとかなってたら、今日はマリウスに詫び倒す日になるところだった。祝いの日にそれは避けたい。

　皆、髪も宴席にふさわしく整えられており、普段はあまりしない化粧もしていて、まさに百花繚乱と言うべきか。それぞれに色の違う花が咲いているかのような錯覚さえ覚える。

　そんな皆を見て、俺は思わず口にした。

「みんな似合ってるなぁ」

　そう言うと、サーミャにバシンと肩を叩かれた。上手いこと尻尾が出るようになっているドレスで、普段着ている服と比べて露出はかなり控えめだ。「レオポルト兄様の母上っぽい」とはアンネの評である。確かライオンの獣人だったか。

　サーミャは虎の獣人だが、帝国のお妃様レベルで高貴さを醸し出しているということだろう。あいにくお妃様の知り合いがいないので、俺にはよくわからないが、似合っているのは確かだ。

　照れたりせずにしっかりしているのはリケである。「固いんですよね、私の髪」と言っていた髪もすべて後ろに流してあり、それを金色の髪留めで留めてあった。普段の快活な感じは鳴りを潜め、お姉ちゃん然とした雰囲気が表に出ている。

　大人っぽい、と言えば良いのだろうか、見た目には着飾った子供のようにも見えるのだが雰囲気が明らかにしっかりした大人の女性のそれなのだ。

「こう言うのは着慣れませんね」

「“私はもっと質素なので！”って最後まで言ってたものね」

　リケの言葉にディアナが苦笑した。リケの気持ちはよーく分かる。俺も最初はかなり抵抗したからな。

「似合ってるんだから、堂々としてりゃいい」

「わかりました、親方！」

　満面の笑みのリケ。それはお淑やかさすら感じた雰囲気はどこへやら、いつものリケの顔だった。

　ディアナは伯爵家令嬢として着慣れているのか、アンネ以外の他の皆から多少なりとも感じるぎこちなさが全く無い。

「もしかして普段からそういうの着てたのか？」

「そんなわけないでしょ。普段のは家でも着てるようなやつよ」

　呆れた声でディアナが言う。ド派手ではないが、あちこちに刺繍が入っていて手間がかかっていることが分かる。普段はおろしてある髪も今は結い上げられていた。流石に天をつくほどではないが、貴族のお嬢様と聞いてイメージする姿ではある。

「いや、あまりに自然に着てて似合ってるからさ」

　俺が言うと、サーミャが腕を組んでウンウンと頷いた。そのドレスであんまりそういう格好しないほうがいいと思うぞ。一部分がムチッと盛り上がってしまっている。

　今度はディアナにバシンと肩を叩かれたが、直後に「ありがとう」と笑顔を向けられる。俺は、

「お、おう。どういたしまして」

　と少しドギマギしながら答えるのが精一杯だった。

　リディは髪はそのままである。顔に少し化粧しているが、それも極々薄いように見える感じのものだ。エルフだからなぁ……。ドレスも他の皆と比べて装飾が少なめのものだが、それがかえってプロポーションと顔の良さを際立たせている。

「森の妖精って感じだな」

　俺たちは実際にジゼルさんたち森の妖精を見たことがあるわけだが、「森の妖精」というテーマで絵を描けと言われたら、今のリディにモデルを頼むだろう。

　何度目になるか分からない衝撃が俺の肩を襲ったが、リディなのでサーミャやディアナほど痛くはない。

「絵物語から出てきたみたいよね」

「うん。俺もお世辞抜きにそう思う」

　アンネが言ったことに俺は同意する。遠征の時にも他のエルフを見かけて美男美女揃いだなぁとは思ったが、そこに更に磨きをかけられるもんなんだな。

　さて、大人しくしていたリディ以上に大人しいのがヘレンである。顔をドレスに負けないくらい真っ赤にしてプルプルしており、いつもの“迅雷”の迫力は微塵もない。

　ヘレンのドレスは割と派手な方で、アンネの次くらいに派手になっている。これは裾に布を足していることがあるが、ドレープが多めにあったりと元々かなり装飾が派手なことにもよる。

　それがスラリとした長身を飾っていて、「貴族の娘です」と言われれば普通に信じるだろう。まぁ、半分は事実なんだけどな。顔の傷が多少雰囲気を損ねているが、俺にとってはごく些細なことである。

「ヘレンも元がいいからなぁ」

　と俺が言ったところでヘレンの右腕が消えて、寒気を感じた。その瞬間、俺は体を一歩下げる。ヒュッと風切り音が聞こえて、俺の肩があったところをヘレンの腕が通り過ぎた。

　ヘレンの全力肩パンは流石に喰らいたくない。肩が外れかねん。

「まぁまぁ、エイゾウは褒めてるだけだし、実際似合ってるから大丈夫よ」

　ディアナがヘレンの肩を軽く叩いてたしなめる。ヘレンは小さくコクリと頷いた。その後ジッと俺の方を見るので、俺も頷く。

　顔は赤いままだが、ヘレンのプルプルはもう止まっていた。

「アンネはまぁ皇女殿下だしな……」

「えー」

　アンネが口を尖らせる。皇女殿下としての立場も考慮されているのか、装飾が一番多いのは彼女のドレスだ。「お姫様のドレス」と言われたら、１０人中９人は想像するだろうドレスである。

　ディアナと違って自前のドレスではないだろうに、なぜかバッチリと着こなしている感じがある。着る経験も多かっただろうしな。

「似合ってるのは他の皆と変わらんぞ。さすがだなぁと思ってるだけだ」

「それもなんかちょっとひっかかるけどね。でもありがとう」

　アンネは帝国第七皇女とは違う、１人のアンネとしての笑顔で返してくれた。

「さて、皆様ご準備はよろしいですか？」

「はい、すみませんお待たせして」

「いえいえ、とんでもない。それでは皆様こちらへどうぞ」

　ずっとニコニコと事態を見守ってくれていたボーマンさんに促され、俺たちはその後をついていくのだった。

## 友達として

2020年11月16日

　ぞろぞろとボーマンさんの後をついて邸内を進む。前来たときには見なかったタペストリーが廊下にも飾られている。

　こう言うときにだけ飾るのだろうか。飾ってあるとこまめな手入れも必要だろうからな、普段はしまっておくのも分かる話ではある。

　歩きながら眺めていることに気がついたのか、ボーマンさんが、

「当家はこれでそこそこの歴史がありますからね。それを綴ったものです」

　と言った。そう言えば戦闘シーンを

　似た感じの人物が片方にずっと描かれているので、これが歴代のエイムール家の当主なのだろう。相手側は人間だったり、魔物らしき何かだったり様々だ。

　サーミャとリケ、リディは「へー」といった感じで、流し見のように見ている。

　ディアナは全く興味がないようだった。自分ちのもんだし、家の中を探検してしまってあるタペストリーをしょっちゅう見てたりしてても不思議はない。

　逆にヘレンとアンネは興味深そうだ。前者は戦闘を描いたものとして、後者は他国の貴族が残した歴史の一部として見ているみたいだ。

　マリウスが当主の間に大きな戦がなければ、家督を譲る時にあの魔物討伐のことがタペストリーや絵画になるのだろうか。

「アンネの家にもこう言うのあるのか？」

「あるにはあるけど、

「へえ」

　皇家ならそれなりにたくさんありそうなもんだが。１代の皇帝というわけでもないらしいし、それはそれは荘厳なものが飾られていればハッタリも効きそうなものだが。

「お父様がこう言うの全く興味ないから」

「ああ……」

　１度だけ会った印象からいっても頷ける話だ。あの御仁ならハッタリの効果を知らないわけではないだろうが、そのメリットをぶん投げるくらい興味がないってことなんだろう。

　こうしてタペストリーの内容を軽くボーマンさんから聞いたりしながら、廊下を歩いていった。

「こちらでございます」

　ボーマンさんはある扉の前で止まった。あまり大きな扉ではない。確かこの家のホールの扉はそこそこ大きかったはずだ。そして客の控室はさっきまで俺たちがいたところである。控室でもホールでもないということは……。

「個別に会って大丈夫なんですか？」

　新郎新婦の控室、ということだろう。前の世界でも友達だったりが披露宴前に顔を出すこともないではなかったが、おいそれと顔を出してもいいものか。

「もちろんでございます。“ご友人”をお通しするようにと主人から仰せつかっておりますので、むしろ案内致しませんと私が怒られてしまいます」

　ボーマンさんはウィンクをしながら言った。こう言う場ではふさわしくない仕草なのであろうが、俺たちはそういうことを気にしない。

　俺が頷くと、ボーマンさんは扉をノックした。

「マリウス様、“ご友人”のエイゾウ様ご一家をお連れしました」

「入ってもらってくれ」

　聞いたことのある声が扉越しに響いた。ボーマンさんが扉を開ける。その中には、今までに見たことのない豪奢な服を着たマリウスと、それに負けないほどの豪華なドレスを来た綺麗な女性がいた。

　マリウスは立って俺たちを出迎えており、女性が立とうとするのを手振りで制した。

「ジュリー！ おめでとう！」

「ディアナ！ ありがとう！」

　ディアナは座ったままの女性、つまり、マリウスの奥さんであるジュリーさんに駆け寄ると、ギュッと抱きついた。

　こう言うときにキャッキャするのは古今東西――そもそも世界すら違うが――あまり変わらないらしい。あんまり抱きついて着崩れしないようにな。

　うちの女性陣も奥さんの方に向かって祝いの言葉を述べている。

　俺はマリウスに手を差し出した。

「おめでとう」

「ありがとう。実は来てくれるかどうかちょっとヒヤヒヤしてたんだよ」

「“友達”の式だぞ、来ないわけがないだろう」

「それを聞いて安心したよ」

　どこかしら緊張した面持ちで笑うマリウス。

「指輪、ありがとうな」

「ああ。ありゃあ難儀したぜ」

　俺は隠さずに苦笑した。あれほど扱いの難しい金属もない。金属かどうかも怪しいくらいだし。

「それに、なんだかおおっぴらに言えないことがあるんだって？」

「あれ、カミロから聞いてないのか？」

「ああ」

　マリウスは頷いた。

「なんでも『エイゾウ本人から聞いたほうがいいだろ』だとかで、教えてくれなかった」

「あいつ……後で覚えてろよ」

「で、なんなんだ？」

　聞かれて俺は一瞬迷った。知らせず隠しておいたほうが良いのではないだろうか？ いや、提供した品物に隠し事があるのはよろしくあるまい。俺は少し意を決して言った。

「あの指輪には妖精の加護がかかっているんだよ。どっちにもね」

　マリウスは笑おうとした。多分、俺が冗談を言ったのだと思ったのだろう。だが、俺がいつもの仏頂面を崩さずに言ったので、マリウスは怪訝な顔をした。

「……本当なのか？」

「俺がそんなしょうもない嘘を言うと思うか？ “黒の森”の妖精の長直々に“災厄除けの加護”を授かってるんだよ、あの指輪は。大概の厄介事からは身を守ってくれるってさ」

　俺の言葉に、マリウスの目が見開かれる。とんでもないものを手にしてしまって厄介だなと思っているのかと思っていると、マリウスはジュリーさんの方に駆け寄って抱き上げた。

「あははは！ 僕の友達はとんでもないやつだ！ 僕たちの指輪に妖精の加護までつけてくれたんだって！ すごいだろう、ジュリー！」

　抱き上げられたジュリーさんは、さっきのマリウスに負けないくらい大きく目を見開いてディアナの方を見た。ディアナが頷くと、ジュリーさんは満面の笑みになって、

「ええ、ええ！」

　とマリウスと２人で笑いあう。俺がタペストリーを作るならこの瞬間で作るかも知れない。それくらい幸せそうに見える。

　それにしても、まさかここまで喜んでもらえるとは。俺は目からほんの少しだけ溢れた感情の塊を、誰にも分からないよう、そっと手で拭い去るのだった。

## 贈り物には薔薇を

2020年11月18日

「ああ、そうそう」

　俺は今の動作をごまかすようにそう言った。実際、喜ぶ２人にはまだ渡すものがある。ナイフの方を一旦リケに預けて、ディアナの方をチラっと見ると頷いている。

　どうやら直接渡しても問題なさそうなので、俺の言葉で床に足を戻したジュリーさんに守り刀を差し出した。

「我々エイゾウ工房からのお祝いの品です。こちらがジュリーさんのです」

　ジュリーさんは差し出された守り刀をそっと手にとった。白木に彩色された薔薇の彫刻を見て、目を輝かせる。

「北方の風習ですが、悪いものを寄せ付けないようにとの意味がこめられています。もちろん、刃物としてちゃんと護身用にも使えますよ」

「ありがとうございます」

　鈴の鳴るような、という形容詞がよく似合う声でジュリーさんがお礼を言った。

「見慣れない様式の鞘だが、北方のカタナなのか？」

　興味を隠しきれない様子でマリウスが言う。俺はそれに頷いた。

「短くて鍔もないが、刀身はちゃんと刀になっているぞ」

「ほほう」

「そしてそんなお前にはこっちだ」

　リケに預けていたナイフをマリウスに差し出す。マリウスは手に取ってしげしげと眺めた。

「見た目は普通だな」

「ジュリーさんはともかく、お前が身につけたときに目立たないようにだよ」

「なるほど。抜いても？」

「式の前にそういうことをしても問題ないのなら」

　聞いてきたということはきっと大丈夫なのだろうとは思うが。前の世界だと「縁起が悪い」と目を剥く人がいそうだ。

　マリウスがそろりと鞘からナイフを抜くと、刀身に施した薔薇がその姿を表す。それを見たジュリーさんがわぁと感嘆の声を漏らした。

「ジュリーさんのと揃いになるようにしてある」

「ほほう」

　ジュリーさんとマリウスが寄り添って守り刀の鞘とナイフの刀身を並べると、今の２人を示すように２輪の薔薇がそこには咲いている。

「もしかして、これは両方とも」

「あー、そうだな。アレと同じだ」

　マリウスの言葉に俺は再び頷きながら言った。２つとも特注品と同じレベルのものになっている。つまりはこの家の家宝の剣と同じ品質ということだ。

　いや、腕が少し上がっていたり、魔力をふんだんに使える状況だったりしたので、こっちの夫婦剣のほうがもしかすると品質としては上になっているかも知れない。

「十分に気をつけて扱うよ」

「頼んだぞ。よく斬れるからな、それ」

「わかってるよ」

　そう言ってマリウスは苦笑した。彼は特注品の斬れ味をよく知っている。取り扱いにうっかりすることはあるまい。

「エイゾウ、本当にありがとう」

「私からもありがとうございます」

　マリウスとジュリーさんがそう言って頭を下げようとするのを、俺は手振りで止めた。

「それを言うのは式が終わってからにしろ。それに……」

「それに？」

　マリウスとジュリーさんが顔を見合わせる。

「友達が結婚するんだ、そんなに礼を言われるほどのことはしてない」

　マリウスの顔が一瞬歪んだが、すぐに元のイケメンに戻ると言った。

「そうか、分かった。じゃあ、また後でな」

「おう」

　そう言って、俺は扉の方に向かう。ディアナやうちの女性陣もジュリーさんに「また後でね」と言ってからついてきた。

　扉の外ではボーマンさんが待っていて、俺たちを先導し始めた。少し見慣れた景色だから、いよいよホールに向かうようである。

　ホールへ向かう途中、俺は隣に並んで歩いていたディアナに小声で言った。

「さっきの、カッコつけ過ぎだったかな」

「ちょっとね。でも、ありがとう」

　そう彼女に言われて、俺はなんとなし足元が軽くなったような、そんな気がした。

## 祝宴は賑やかに

2020年11月20日

　ボーマンさんについて廊下を進む。これから訪れるのであろう喧噪は影も形もない。歩きながら外を眺めると、２羽の小鳥がおしゃべりをするようにさえずり合っている。

　小鳥たちにもこの場の喜ばしい雰囲気が伝わっているのだろうか。そんな益体もないことを考えた。

　やがて大きな扉の前にたどり着いた。この扉は見覚えがある。ホールの扉だ。

　ボーマンさんが扉を開けて、中へ入るよう促す。俺たちはゾロゾロと中へ入った。

「わぁ」

　そんな声を上げたのは誰だろうか。もしかすると俺かも知れない。前の祝いのときにはもっと質素だったホールのあちこちに飾りがあり、そのホールを埋め尽くさんばかりの大きなテーブルも装飾されている。

　伯爵家の結婚式となるとやはり豪華なのだなぁ。家と家とのつながりの他にも経済力を見せつける場でもあるしな。

「皆様はこちらへ。間もなく他のお客様もいらっしゃいます」

　ボーマンさんがそう言うと、ホールの中で待機していた他の使用人さん達が椅子を引いてくれた。場所はテーブルの端で、言うなれば下座ではある。

　だが、これは俺たちを軽んじているというよりは面倒に巻き込まれないよう、なるべく他者との接触が少ないところを選んでくれたのだろうな。

　そもそも軽んじているなら、わざわざ控室を別に用意したり、式の前に個別に会ったりはするまい。

　俺たちは素直に椅子に座った。椅子のクッションがふかふかである。これは総出で整えたんだろうなぁ。

　俺の隣にはサーミャが座っていて、キョロキョロとあたりを見ている。落ち着かないらしい。たしなめようかと思ったが、ディアナもアンネも何も言わないのでするがままにしておいた。他の人が来たらじっとするだろう。

　サーミャが座っているのと逆の側には誰も座っていない椅子がある。つまりはここに誰かが来るのだ。はてさて、どんな人が来るのだろうか。

　そんなことを考えていると、ボーマンさんの言葉通りゾロゾロと他の人達がカテリナさんや他の使用人の人に連れられて入ってきた。サーミャのキョロキョロがピタリと止まる。

　皆身にまとっているものが豪華である。一見すると質素なものでもよく見ると刺繍が施されていたり、確実に手がこんだものだ。

　当然身分的には俺たち（ディアナとアンネを除く）よりも上な人たちなので、立ったほうが良かろうかとボーマンさんを見やると、彼はそっと首を横に振った。

　立つ必要はないということらしい。なので、お言葉に甘えて立たないが不躾に顔を見つめたりすることもしなかった。

　……のだが、俺の視線は１人を捉えてしまった。勲章のようなものを佩用した豪華な服を身にまとった、偉丈夫と言っていいだろう体躯。

　その男は俺の視線に気がつくと、ニヤリと笑って俺の隣に腰を下ろした。周りも着席をして話を始める中、俺は隣りに座った男に話しかけた。

「ここは下座も良いところですよ。貴方ならもっと上席じゃないんですか」

「なんだ？ 気に食わんか？」

「滅相もない」

「ハハハ、まぁそう嫌がるな」

　俺の隣に座ったのはメンツェル侯爵である。流石に新婦のご両親を差し置くわけにはいかないとしても、身分でも立場的にもこんなところに座らせるような御仁ではないはずなのだが。

　前の世界の飲み会で隣に部長が座った時を思い出す。たまたまそこが空いたからなのだが、突然ドカリと座ってくるもんだから相当に気を使ったものである。

「いえ、別に嫌がるとかでは……」

「なに、新郎新婦双方に繋がりがあって侯爵だとはいっても、所詮は新郎にとって“父親の友人”で、新婦にとっては“親戚のおじさん”でしかないからな」

　侯爵はそう言って笑った。「いや、それ普通に貴賓中の貴賓やないかい」と、心の中でそうツッコミを入れる。流石に声と身振りでツッコミを入れる勇気はない。

「ワシも堅苦しいのは好きではなくてな。お前の隣のほうが気安いというものだ。お前もそうだろう？」

　どうやら侯爵の中では、俺がここに座っているのは厄介事を避けるために、俺が希望したということになっているらしい。そう外しているわけでもないのが流石というか何というか。

「そうですね。隣が見知らぬ貴婦人だったら、もっと緊張していたことでしょう」

　俺がそう答えると、侯爵は一瞬目を丸くしたあと、

「ガハハ！ そうだろうそうだろう」

　と機嫌よく笑うのだった。

## 結婚式

2020年11月23日

　俺たち参加者はテーブルの長辺に着席している。となれば当然向かい側にも人が座るわけだ。

　参加者が少なければ、間に無人の席なんかを用意して俺たちを少し離す“配慮”があったかも知れないが、伯爵家という身分卑しからぬ立場の結婚式である。

　ましてや今回は侯爵も一枚噛んでいるとなれば、この場でどれくらいの人脈があるのかを見せつける必要もあるだろう。貴族社会は商人たち以上に足許を見られるわけにはいかないのである。

　そんなわけで、俺たちの向かいにはルロイ――魔物討伐遠征の時に副官をしていた彼だ――が座っている。長らく会っていなかったが、俺とは知り合いなのだ。

　マリウスは俺の周囲を徹底して俺が知っている人物で固めたらしい。そっちの方が気が楽なのは確かではあるが。

　テーブルがやたらでかいので、向かい側と話をしようと思うと、声量が少々下品なことになってしまう。それで注目を集めるのも俺とルロイにとって互いに都合がよろしくない。

　そのため、俺は軽く手を挙げて挨拶の代わりにした。向こうも気がついてそっと手を挙げる。それを見た侯爵が小さめの声で言った。

「なんだ、マクマホンとこの

「ええ、遠征の時に」

「ああ、そういえば副官だったな」

　俺の返答に侯爵が頷いた。こういうことに目聡いのも貴族としての素養なのだろう。ちょっと俺には真似できないところである。

　ついでとばかりに侯爵が遠征の話を聞きたがったのでかいつまんで話す。ちゃんとした報告はマリウスが書面にして提出済みで、それは当然読んでいるのだが、現場で末端である俺の立場からの話を聞きたかったらしい。

　当然、ホブゴブリンを倒したのが俺であることは伏せておいた（知らぬ間に倒されていて、誰が倒したのかは俺はよく知らないということにした）が、侯爵は満足したようだったので問題なかろう。

　やがていつの間にか姿を消していたボーマンさんがホールに戻ってきた。着ている服が微妙に豪華なものに変わっているような。

　今日の司会進行はおそらくボーマンさんだろうから、それに相応しい服にしたのだろうか。

　騒がしかった場が自然と静まりかえる。

　ボーマンさんがコホンと軽く咳払いをした。あの人でも緊張することなんかあるんだな。

「皆様、お待たせいたしました。新郎新婦が入場いたします」

　俺たちや他の客が入ってきたのとは違う扉が開け放たれた。その扉は窓を背にしているのか、部屋の外から光が差し込み、２人の姿を浮かび上がらせている。

　これはそうなるように設計したのだろうか。そうだとしたら、相当に腕のいい職人に頼んだはずだ。

　そして、節目節目の宴では太陽の光が今のように主役を彩っていたのだろう。

　その決して短くはない歴史の中で、一番新しい家族が生まれようとしていた。

　今から家族になる２人を俺たちは拍手で出迎える。さっき会った時に見せていた笑顔は完全に消え去っており、２人の緊張の度合いを表している。

　そう言えば、どういう流れで式をするんだろうか。神職らしき人の姿が見えないので、人前式的にみんなの前で宣言して終わりとかかな。

　２人が俺たちが着席しているテーブルの上座に位置するところに設られた別のテーブルの前に、俺たちに背を向けて並んだ。

「皆様、ご起立ください」

　ボーマンさんの声が響く。俺たちはぞろぞろと立ち上がった。みんなその場で新郎新婦の方を向いているので、俺もそれに従う。

　侯爵だけは席を離れて前に向かっていく。侯爵はテーブルを挟んで新郎新婦に向かい合った。

「それでは、宣誓を」

　侯爵の言葉に、新郎新婦は後ろから分かるほどしっかりと頷く。テーブルに置かれている書類に手を重ねて置くと、ハッキリした声で言った。

「私、マリウス・エイムールはジュリー・デランジェールを妻と認め、生涯を共にし、いかなることがあろうとも守り通すことを誓います」

「私、ジュリー・デランジェールはマリウス・エイムールを夫と認め、生涯を共にし、いかなる時もこれを支えることを誓います」

　侯爵は２人の言葉を聞くと、大きく頷いた。続いてほぼ怒鳴るような大声で言う。

「異議のあるものは申し出よ！」

　当然ながら申し出るような人物はおらず、シンと静まりかえっている。侯爵は再び満足そうに頷くと言った。

「列席者多数の賛成により、２人の婚姻をメンツェル侯爵グレゴールの名において承認する」

　そう言って、侯爵はボーマンさんが差し出した筆記具を使い、書類に何かを書き込んだ。おそらくは署名だろう。

　それに続いて、新郎新婦の２人が書類に署名をする。

　侯爵は内容を改めると、書類を丸め封をした。封緘に使ったのはメンツェル侯爵家の紋章が

　入っているものだろう。

「ジュリー・デランジェール」

「はい」

「お前は今日ただいまをもってジュリー・デランジェール・エイムールである」

「はい」

「おめでとう、ジュリー」

「……ありがとうございます！」

　涙声でそういうジュリーさんを包み込むかのように、万雷の拍手がホールに響き渡るのだった。

## 祝宴

2020年11月25日

「それではこれを」

　侯爵がそう告げると、そっとボーマンさんが侯爵に布にくるまれた何かを差し出した。侯爵がそれを開けると、黄金色の小さな輪が２つ寄り添っている。

　新郎新婦の２人はそれぞれ指輪を手にし、向かい合った。

　２人は手にした指輪をそっとお互いの指にはめ、見つめ合った。おっ、これはもしや。思わずオッさんらしい心が零れそうになるが、口に出すのは下品にも程があるのでこらえておいた。酔ってるわけでもないしな。

　そして２人は口づけあう。ごくごく軽いキスだ。再び万雷の拍手がホール内を満たす。

　これで名実ともに２人は夫婦になった。拍手をしながら、俺は自分の胸の内も温かいもので満たされていくのを感じていた。

「皆様、ありがとうございました。ご着席ください」

　参列者たちはボーマンさんの言葉で着席した。侯爵も自分の席、つまり俺の隣に戻ってくる。すぐにカップが置かれて、そこにワインらしき酒が注がれていく。カップは安全を考えてなのか割れてしまう陶器やガラスではなく、木製のものである。

　木製ではあるが、庶民の家にあるような若干作りが雑なものではなく、丁寧に表面が磨かれたきれいなやつだ。その辺は流石に伯爵家の祝宴といったところか。

　この後は食事会のようなもので、この時に立ち歩くのはあまりよろしくないらしい。

　前の世界だとご親族の方々にビールを注ぎに行ったり注がれたり、あるいは新郎新婦にちょっかいをかけに行ったりする時間だが、この世界ではそういうことはしないようだ。

　いやまぁ、伯爵家という家格の結婚式でやるこっちゃないと言われたら、それまでかも知れんが。

「皆様、本日はお集まりいただきありがとうございます」

　マリウスが朗々とした声で言う。最も大事なところは乗り越えたからか、先程までの緊張はやや鳴りを潜めていた。

「若輩者の私達であります。また、私は伯爵家を継いでそう間もありません。これからも皆様にお力添えをお願いすることも多々あるかとは思いますが、どうぞご寛恕いただければと」

　スッと手にしたカップを掲げるマリウス。

「本当にありがとうございます。乾杯！」

　掛け声で参列者全員カップを掲げ、「乾杯！」と唱和した。乾杯の音頭は侯爵が取るのかと思っていたが違うようだ。

　俺も皆と同じようにカップの中身を呑む。なかなか美味いと思うがそこそこのアルコール度があるように感じる。それでも侯爵はグビグビいっているが、俺は弱いから遠慮しとこう。

　前のときは適当に料理が配られる感じだったが、今日は一皿ずつ持ってくる形式らしい。所狭しと使用人さん達が歩き回って配膳をしていっている。

　それを待つ間、侯爵が俺に話しかけてきた。

「お前のところにはドワーフもおるのか」

「え？ ええ」

「弟子か？」

「ええ、そうですね」

　俺の答えを聞いて、納得したように侯爵は頷いた。

「ふむ。良い飲みっぷりだ」

「そこは否定できませんね」

　俺は苦笑した。侯爵に負けず劣らずグビグビいったのがリケである。最初の杯を乾したかと思ったら、既に三杯目を注いでもらっている。ディアナもアンネも止める様子がないから、任せておこう……。

　そして侯爵はドワーフの慣習を知っているらしい。侯爵くらいになるとそういうことにも知悉していないといけないのだろうか。やはり俺には貴族は向いてないな。

　そして運ばれてきた料理は、前の世界で言うところのフランス料理とイタリア料理の中間のような感じだった。

　高級レストランと言われて思い浮かべるあの感じだが、ソースがオシャレになっていたり、付け合せがよく知らない野菜だったりと言うことはなく、言葉を選ばずに言えばもっと素朴である。

　最初に出てきたのが煮るか蒸すかしたらしい根菜と芋にソースのかかっているものである。食べてみると素材の味とソースの柑橘系らしき味が口に広がってなかなかに美味い。

　こういう場では珍味や香辛料の類が好まれる、と聞いたことがある。美味いマズいは全く関係なく、それを入手できるだけのコネやツテ、そして経済力があることを示す絶好の機会だからだが、マリウスはそれを良しとしなかったらしい。

　それにしても、この感じはどこか舌に覚えがある。前の世界の結婚式か？ 最後に出たのは確か部下のだったような気がするが、それももう何年も前のことだしよく覚えてないな。

「これはうまいな」

「ええ。料理人は良い腕をしています」

　その（おそらくは）前菜が終わると、小さめの肉が出てきた。香辛料がかかっているようだが、肉の表面が見えないということは全く無い。ナイフで切り分けて口に運ぶ。

「！？」

　これを食べて俺は目を見開いた。かかっている香辛料のものだろう、ピリッとした辛味がいいアクセントになっていて美味いということもあるのだが、この味付けの感じからいうと俺の思った人物が作ったことになるからだ。

「なあ、これって」

　隣に座っているサーミャも一口食べて驚いた後、俺に小声で話しかけてきた。俺は頷く。

「ああ、こりゃ多分“おやっさん”のだ」

「だよな」

　納得を笑顔で示して、サーミャは次の一口を運ぶ。「んー」とか言いながら喜んでいるから、味は問題ないのだろう。

　俺達とは別のテーブルで食べているマリウスをチラッと見ると、目があった。俺は皿を指差す。すると、マリウスがいつものイタズラっぽい顔でニヤリと笑った。

　見間違いだったかと勘違いするほど、すぐにその笑顔は消え、俺はため息をつく。確定だ。これはサンドロのおやっさんの料理だ。おそらくはボリスとマーティンも来てるな。

　にしても、おやっさんも巻き込まれたか。ぶつくさ言いながらも嬉しそうに厨房を歩き回り、ボリスとマーティンに大声で指示を出しているであろうおやっさんを思って、俺はクスリと笑みが溢れるのだった。

## 舞踏会

2020年11月27日

　食事は粛々と進んでいく。その間に立ち歩いて挨拶周りをするような人はいない。

　俺が座っているのは端の方なので、視線も飛んできにくい。というか、俺たちを見ようとすれば自然と侯爵が視界に入るから、こっちをガン見するわけにもいかないのが実情だろうな。

　マリウスの配慮が功を奏した形になっていて、俺はおやっさんの料理に舌鼓を連打しながら、感心をした。

　状況が状況なので、侯爵も迂闊なことは言わない。例えば列席者の中に帝国の第七皇女がいることなんかだ。

　さっきから結構なペースで杯を重ねているが、ろれつが回らなくなるということもなく、ハッキリした受け答えを続けている。

　ただ、酒が進むにつれて、時折俺の方を見るフリをしてその後ろの方を見ていた。いちいちその視線の先を追いかけることはしないが、多分ヘレンを見ているのだろう。

　その彼女はさっきからすごい早さで料理を片付けているようだ。行儀は決して良いとは言えないが、他の人達が眉をひそめるほどではない。

　他のみんなはもう少しお淑やかにしている。促成ではあるが、ディアナとアンネの教育の賜物と言ったところか。伯爵家ご令嬢と皇女直々のテーブルマナー講習だもんなぁ。

　やがて食事も終わりに近づいてきた。デザートらしき果物が出てきたことでそれがわかる。グレープフルーツっぽい果物だが、苦味と酸味が少なく、甘みが強い。

　この世界だと野生種に近いらしい果物ばかり食べていたので意外だ。もしかするとこれは品種改良されたものかも知れない。

　その果物をぱくついていると、チラリと俺とその家族をみてから侯爵がぽそりと呟いた。

「すまんな」

　多分、うちの状況のことだろう。周囲に聞こえるような音量ではない。侯爵が一介の鍛冶屋に謝ったなんてことを知られるわけにはいかないからだ。

　ヘレンとアンネがうちに来たのは、半ば侯爵の思惑に巻き込まれた形である。いやまぁ、俺も巻き込まれてはいるのだが。謝罪の言葉は酒で少し開いた扉からチラリと顔をのぞかせたのだろう。

「何がです？」

　俺はすっとぼけることにした。特に迷惑だとは思ってないし。

　侯爵は小さく小さくため息をつくと、苦笑しながら、

「お前はもう少し人に甘えてもいいと思うがな」

　と言った。それはそうかも知れない。それぞれに得意な分野の違う人々が家族としてひとつ屋根の下暮らしているのである。それを活かさない手はないだろと言われれば首肯せざるを得ない。

　だが、ここで侯爵の言うことに素直にうなずくのもなんとなく癪に障る感じがするので、俺はしかつめらしい顔をして、

「考えておきます」

　と答え、侯爵は再び苦笑するのだった。

　食事が終われば舞踏会、という流れは以前の祝宴と変わらないらしい。ボーマンさんの案内で小ホールに新郎新婦を含む全員が移動した。

　お歴々の腹に食事と酒が詰まっているのも以前の祝宴と変わらないわけで、個別の立ち話なんかはこのタイミングで行うようだ。

　このときのためだけに雇われたらしい楽団が演奏を始めた。実質立ち話の会場になってはいるが、名目上は舞踏会なのだから無演奏はさすがにダメでしょってことなんだろうな。

　特に話をしたい相手も新郎新婦以外にはいないし、俺は「壁のシミ」になるつもりで、他の家族には好きにしてていいと言ったが、みんなどうにも動く気はないらしい。壁のシミを花で囲ってどうするんだ。

　せっかくだから、家族で固まってるだけじゃなくて少しは踊ったほうが良いのかなと考えていると、

「私と踊ってくださらない？」

　そう俺に声がかかった。

## 踊りましょう

2020年11月30日

　完全に壁のシミになるつもりであった俺に妙齢の女性が話しかけてきた。

　彼女は淡い黄色のドレスを纏い、ボブカットの銀髪。身長は俺よりも少し低いくらいだろうか。

　全体にあまり飾らない感じだが、銀細工のように輝く髪には小さなルビーだろうか、紅い宝石のついた金色の髪飾りをしていて、そこがやけに目立っているように感じる。

「私と……ですか？」

　俺は自分を指差した。俺のそばから妙な殺気を感じる（心なしか俺の方にも向いてるような気がする）が、この女性からは特に怪しい気配は感じない。サーミャとヘレンが動かないところをみても特に俺を害するつもりはなさそうだ。

　問題はこの女性を俺が全く知らないということである。この世界に来てからの記憶を全て掘り起こしてもこの人に会った記憶はない。

　向こうがどこかで俺も見かけて一方的に知っているパターンだろうか。

「ええ」

　女性はニッコリと微笑み、静かに頷いた。そっとディアナとアンネのほうを見ると、ディアナが近づいて耳打ちしてくる。

「女性から誘った場合にお断りするのは失礼になるから、受けときなさい」

「何らかの関係性の始まりを承諾するものではないよな？」

　俺が聞くと、背中をギュッとつねられた。なるほど肩パンははしたないな。俺は痛みを顔に出さないように女性に微笑みかけながら言った。

「このような場は慣れておりませんので、お見苦しいかと思いますが、それでよろしければ」

「もちろん。私に任せていただいて大丈夫ですよ」

　再び微笑む女性。俺は彼女の手を取って、少し空いているところへと進んだ。

　その時、先程まで楽団が演奏していた曲が、少し賑やかなもの――多分会話の内容が隠せるようにだろう――から、ゆったりとした曲に変わった。その代わりなのか、音が大きくなっている。

　これは俺が踊りやすいようにという配慮なのか、それともたまたまなのか……。考えていても仕方ないので、女性の両手を取ると曲に合わせてステップを踏む。

　前の世界で社交ダンスでもやっていれば別だったのだろうが、あいにく俺にその経験はない。当たり前だがウォッチドッグがくれたチートにも“ダンスの才能”なんてものは含まれていないので、見る人が見なくても酷いものではあるだろう。

　少し踊ればそれはすぐに露呈する。苦笑ともなんとも取れない声が曲の向こうから薄っすら聞こえる気がしてきた。それはこの女性も理解しているはずで、まとめて恥をかきたいわけでないとすれば、だ。

「で、お話はなんでしょう？」

「あら、素直に踊りたかっただけ……と言っても信じてはもらえなさそうですね」

　いたずらっぽく言った言葉に一瞬眉を顰めると、女性は諦めた顔になった。目つきが悪いだけなのだが、思いの外効果が出てしまったらしい。

「では手短に。私はアネットと申します」

　アネットさんはそれがダンスの振りの１つであるかのようにお辞儀をした。合わせて俺も頭を下げる。

「有り体に言えば王国王家の係累、ということになります」

　止まりかける俺の手を引っ張ってアネットさんは俺を動かし続ける。

「まぁ、この場にいるということは、あなた達に興味はあれど敵ではありません。立場的にはむしろ逆ですね」

「素直にはいそうですかと言えるような感じでもないですけどね」

　俺はなるべく表情を変えずにそう言った。包み隠さない心情である。

「そうですね」

　アネットさんは苦笑した。怪しまれて気分を良くする人はそう居るまい。

「で、その王家の係累さんがどういった御用で？ 特注品なら……」

「『“黒の森”の工房に打ってもらう本人が１人で来ること』ですよね」

「ええ」

　踊りながら話すと足元がとっちらかるな。つっかえつっかえ、ギリギリ見れなくもないステップを踏んでいく。

「今そっちは興味ないんですよね。もう１つの方を話しておくと、私の仕事は密偵のようなものでして」

　俺の中の警戒レベルが１つ上がる。デフコン４ってところだ。

「ま、今日のところは特に何もないですよ。顔つなぎに来ただけですので」

「へえ」

　俺は完全に感情をシャットアウトして返事をした。アネットさんが更に苦笑する。

「ちょっと困った事態が起きそうでしてね。最後の切り札か、それに近いところであなたにお願いすることが出るかも知れません。その時になってから慌てて顔をつなごうとしても遅いので今のうちにというわけです」

「幸い潜り込めるいい機会もあるし？」

「そうですね」

　アネットさんは今度はニッコリと笑った。

「そういうことなので、どうぞよろしくお願いします。あ、“ご家族”には如何様にもご説明くださって大丈夫ですよ。皇女殿下にも。そちらのご家族になにかあるのはこちらとしても本意ではないので」

「助かります」

　誤魔化さなければならない場合、どういうカバーストーリーを用意したものか頭を悩ませなければいけないところだったが、ありのままに説明していいとなれば気が楽だ。

　どこまで信用してくれるかは別だけどな……。

　俺とアネットさんは最後に一礼をして、元いた場所に戻っていく。交わした会話の剣呑さとは真逆の温かみのある拍手が俺たちを包んでいた。

## 謎の貴族

2020年12月2日

　ダンスを終えて、俺はみんなのところへ戻った。みんなからも温かいような、そうでないような目線と拍手が飛んでくる。

「いやぁ、大変だった」

「悪くはなかったけど、レッスンが必要かしらね」

「そうねぇ。王国式と帝国式、両方覚えておいたほうがいいかもね」

　俺の言葉を聞いて、ニヤニヤと笑いながらディアナとアンネが言った。礼儀作法と同じく、講師としてはトップクラスと言っていいだろう。王国の伯爵家令嬢や帝国の皇女様直々にご指導賜われると聞けば、挙手する貴族の若い女性はさぞ多かろうとは思う。

　だが、残念ながら俺は外見でも３０歳で、しがない鍛冶屋のオッさんなのだ。習ったところでなぁ……。

「やるとしてもお手柔らかにな」

　思わず苦笑が漏れる。それを見て家族のみんなが笑顔になった。いつもならドッと笑うところなのだが、周囲の様子をみてのことだろう。

「で、なんて？」

　ディアナが笑顔を引っ込める。艶っぽい話では全く無かったのはとっくに把握されているようだ。いや、艶っぽい話だったらそれはそれで真顔で詰められるのか？

「ただの挨拶だよ。密偵さんだって。どうも王家直属」

「事が深刻にならないうちに顔を繋いでおいたってこと？」

「さすが皇女殿下と言うべきかな。どうもそうらしい。今すぐどうこうって感じでもなかったし」

「まずい状況ならこんなところへ悠長に顔を出している暇ないでしょ」

　少しつまらなさそうにするアンネ。本来は鍛冶屋があちこちの厄介事に首を突っ込む状況がおかしいんだからな。

「にしても、新郎新婦や主賓を差し置いて俺に挨拶って良かったのかな」

「その主賓の差し金だと思うけどね」

　アンネはごくごく小さく鼻を鳴らした。可愛がっている身内の結婚式でも利用できる部分があれば、そうすることをためらわないのはあの御仁らしいと言えばらしいが。

「なるほどねぇ」

「厄介事だったら断っても良いんだからね」

　俺の相槌に、ディアナは真剣な目をして言った。王国の密偵から連絡が来た場合に断れば、エイムール家が侯爵、いや、王家に睨まれかねない。

　俺がそこを斟酌してどんな厄介事でも首を縦に振るのではと言う懸念は分かる。と言うか俺自身そう思うし。概ね友人の危機ということだからな。

　でも、俺の中の優先順位はもう決まっているのだ。

「俺の優先順位は家族と過ごすいつもが一番上だよ」

　それを聞いて、ディアナは喜ぶような、悲しむような複雑な表情を見せる。

「今日みたいなお祝い事は別だし……」

　俺はそこで一旦言葉を区切った。どう言えばいいかな。

「家族のいつもが崩れそうだと言うなら、俺は誰に何を言われても事態の解決に手を貸すつもりだ」

　流石に他の言葉は使えなかった。特に「ディアナが悲しまないためなら」とは。帝国やらリケの実家、あるいは黒の森にエルフ達の里でなにかあると言うなら、それはそれで解決に力を惜しまないだろうし。

　将来のんびり暮らしていくために必要なことなら、何だってやろうと思う。その割には色々と巻き込まれてしまっているのは確かだが。

　一瞬だけ苦笑し、すぐに引っ込めて、ディアナの目を見て俺は言う。

「心配してくれてありがとうな、ディアナ」

　ディアナからの返事は真っ赤な顔と肩へのほんの僅かな痛みだ。

「それにしても、思ったより話しかけてくる人がいないな」

　俺は舞踏会場内を見回した。皆それぞれに相手を見つけて会話したり、さっき俺たちが拙いながら踊ったのが口火となったのか、数組がゆったりと踊っていたりする。

　だが、俺たちに話しかけてきたのはアネットさんくらいなものだ。いや、この場ではただのオッさんに過ぎない俺はともかく、うちの女性陣の華やかさたるや、と言った感じなのでもう少し話に来る若いのがいるのかと思っていたのだが。

「食事会の時に侯爵と気安く話してたからでしょ」

　小さくため息をついてディアナが言った。

「侯爵と気安く話をしている見知らぬ貴族らしき男性、しかし、明らかにこの土地の人間ではない」

「それに、周りには女性を多数置いていて、その中にエイム―ル家の令嬢と“迅雷”がいるし、エルフやドワーフ、獣人に巨人族まで、なんて相手にどう接したらいいかなんて分かる人間、そういるとは思えないわね」

　ディアナの後をアンネが引き取った。

「そうかぁ、俺は周りから見ると謎の貴族なんだなぁ……」

「え、今？」

「薄々そうかなとは思ってたけど、言われるとそう実感するしかなくなった」

　そう言って俺が口を尖らせると、家族のみんなはいつもの通り笑うのだった。

## 宴の終わり

2020年12月4日

「ま、それはともかく、ディアナと皆は新郎新婦のところに行ってくるといい」

　どうやら空いた様子の２人を見て俺は言った。俺も一緒に行っても良いっちゃ良いのだが、今後の機会で言えば彼女たちは圧倒的に会うタイミングが少ないだろうと思ったのだ。

　特にディアナはそう多くもない兄と友人に会える機会なのだし。

　うちの家族は一瞬躊躇したようだったが、すぐに２人の元へと向かった。俺はその後姿に大きくなりすぎない程度の声をかける。

「“手加減”はしてやれよ」

　返事はサーミャのひらひらと振った手だった。俺の仕草がうつったかな。あまりお行儀が良いとは言えないが、この場ではそう咎める人もいないか。

　なんせ“謎の貴族”のそばにいる人間だ。頭ごなしに注意をしたら、実は他国のとても偉い貴族の係累だった……とかだと国際問題にもなりかねないし、そもそも呼んだマリウスの顔に泥を塗る行為だしな。

「やれやれ……」

　俺はため息をついて軽く肩を回した。食事が始まってから緊張し通しだったように思う。あのときは侯爵がすぐ横にいたし。

　そう言えば侯爵は今どこに居るのだろう。なるべくなら１人でいるところを彼に見つかりたくないのだが。またぞろ厄介なことを言われかねない。

　キョロキョロとしている俺に、低めの声がかけられた。

「どなたかをお探しですかな？」

　侯爵のどっしりとした声ではない。もう少しだけ軽薄そうな感じである。

「話しかけるわけではなく、その逆ですけどね」

　俺は何度も聞いたことのある声の方を見ずに言った。

「私でないと良いのですが」

「まさか。もしかすると来てないかもと思っていたくらいですよ」

　俺はこの茶番に苦笑し、声の方へ振り返った。

「今までどこにいたんだ、カミロ」

　体格だけで言えば侯爵に引けを取らないその体に、今日はかなり豪華な服を着た俺の取引先の姿がそこにあった。

　俺が手を差し出すと、カミロはグッとその手を握ってから俺の肩を軽く叩く。

「裏だよ。今日は色々とやることがあってな」

「それで食事会にはいなかったのか」

「ああ。ほとんど同じものは別の部屋で食べてきたけどな。食い終わったのがさっきだ」

「サンドロのおやっさんの料理は美味いからなぁ」

「だな」

　ニヤッとカミロが笑う。この様子だとボリスかマーティンか、独立したら街に呼ぶかもな。そうなったら納品のときの楽しみにできるから都合はいいのだが、そこは彼らの人生である。俺から言うような無粋な真似はすまい。

「挨拶回りはいいのか？」

「ここにいる連中で今から顔を繋がないといけないようなのはいないからな。新郎新婦には別に挨拶を済ませてあるし」

　カミロは肩をすくめた。商人にかかれば、この場も人脈を広げるものでしかないらしい。いや、そもそもこういう場はその目的も含んでいると思ったほうがいいか。

　前の世界でも、誰それの結婚式で友人として来た２人が知り合ってとかあったもんな。

「オッさんたちは２人寂しく壁のシミにでもなってようや」

「そうだな」

　そう言って俺とカミロは世間話をはじめた。周りの人間がチラッチラッと視線を送ってくる。侯爵と伯爵に直接コネがあり、その両方につながっている商人とも気軽に談笑している、この貴族の爵位がどのあたりなのかを見定めようとしているのだろう。

　貴族社会での俺の立場がどんどん謎になっていく気がするが、そこは気にすまい。

　今日は身内と知己だけの宴だが、マリウスは近々街へ行ってささやかながらパレードをするらしい。その時の取り仕切りもカミロだそうだ。

「また厄介な」

「だからこそ儲かるのさ」

「なるほどねぇ」

　パレードのときには少なくない額の金が動くのだろう。それをキッチリ拾って、俺の取引先として繁栄してくれれば俺としても嬉しい。友人として嬉しいと言う感情があるのも否定しないが。

「そう言えば代官を置いてるんだったなぁ。そのうちルロイが行くんだろ？」

「俺はそう聞いてる。キールステッド男爵が今の代官だが、早く引退したくて仕方ないらしいからな。ほら、あそこで侯爵と話してるのがそうだよ」

　カミロは小さく身振りで指し示す。俺が目線で追うと、侯爵と話をしているキリッとした雰囲気の老人がいた。

　老人は白髪を後ろになでつけ、白いひげを蓄えている。服装こそ貴族のものだが、雰囲気的には前の世界の映画で見た、指輪を捨てに行く話の魔法使いみたいだ。

「あれこれあってマリウスに引き留められてるらしい。引退しても半分親代わりなのは変わらんだろうな」

「ふぅん」

　俺はそんなふうに返事をしたが、親友の親代わりの人に心の中で深く頭を下げた。

「さて、皆様宴もたけなわではございますが、そろそろ本日はこれにてお開きと致したいと思います」

　ややあって、ボーマンさんが朗々たる声でそう告げる。もうそんなに時間が経ったか。ホールの中央にマリウスが進み出た。

「皆様、本日はお越しいただきましてありがとうございました。なにぶんまだ若い２人ですので色々あるとは思いますが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします」

　大きな声で礼を述べると、ホールに拍手が響き渡る。それは２人への祝福の大きさを示すように、長い間鳴り止まないのだった。

## お帰りは報酬のあとで

2020年12月7日

　この世界には引き出物、という文化はまだ存在しないらしい。配るのに適した品物というのがさほどないし、食べ物は消費期限的に色々問題が起こることもあるだろう。

　アレって前の世界の外国にはある文化だったのかな。他所の家の記念品を貰ってもな、とは日本人の俺も思ってはいたが。

　後日アンネに「食べ物のお裾分けってあるのか」と聞いたところ、

「庶民同士ならともかく、貴族同士の場合は毒殺の危険を考えるとちょっと」

「仲が良くてもか？」

「それでも例えば誰かが渡したパンを食べた直後に死んだら、毒がパン以外に仕込まれていても、そもそも毒なんかなくて単に急死しただけでも疑われるでしょう？」

「そりゃそうだ」

　陰謀として「誰かが食べ物を贈った」後に別のもの（例えば日常的に飲食しているようなものだ）に毒を仕込んで、贈り物を食べて中毒すれば当然贈った品が疑われるし、可能性としては低いだろうが食事中に脳梗塞や心筋梗塞で突然死なんてこともあり得るわけで、その時にたまたま自分の渡した何かを食べていたら前の世界でも一旦は疑われるだろう。ましてやこの世界では、ということだ。

　そんなわけで特に手土産のようなものはなく、客は呼ばれた順にホールから退出していった。前の世界なら扉に新郎新婦とそのご家族が立っていて延々挨拶している場面ではあるが、そう言うものもない。呼ばれる順は馬車が用意できた順のようだ。うちは最後に会場を後にすることになる。着替えなきゃならんし。

　侯爵は結構後の方だった。貴賓でもあるから最初の方なのかと思っていたが、偉い順とかそう言うのはないらしい。

　これも後日アンネに聞くと、「偉い順だと最初に出てきたのが一番偉い人と丸わかりで、襲撃したい人間にとっては好都合だからバラバラに帰す」のだそうだ。勉強になるなぁ……。

　出際に侯爵が俺の肩をガシッと掴んだ。ヘレンがスッと前に出ようとするが、俺は手でそれを制した。

「よろしく頼むぞ」

　それが新郎新婦のことなのか、王国のことなのか、はたまたヘレンのことなのかは分からない。だがそこを尋ねるのも無粋というものだろう。

　俺は言葉には出さずに頷いておいた。王国のことは知ったことではないのだが、他の２つについては改めて念を押されずともだし、なんとなく王国のことではないだろうなというオッさん同士の信頼のようなものでもある。

　侯爵は満足げに頷くと、ノシノシと出ていった。結構きこしめしていたはずなのだが、足取りはしっかりしている。それでもああ言う言葉がポロリと出てくるあたり、常の精神状態ではないんだろうな。

　その後、幾人かの来賓が出ていき、俺達と新郎新婦だけになった。ジュリーさんのご家族も他の部屋だかに移動しているし、カミロも気がつけば姿が見えなくなっている。

「今日は本当にありがとう」

「いや、こちらこそ。こういう場に呼んでくれて嬉しいよ。２人共末永くお幸せに」

　差し出されたマリウスの手を俺は掴んだ。これから先、彼にはいろいろと付きまとうのだろうが、ジュリーさんと２人で支え合って乗り切ってほしいものである。

　いや、彼らには“災厄避け”の加護がかかった指輪もあるのだ、滅多なことは起こるまい。少なくともジゼルさんの説明ではそういう事になっている。

　マリウスは握手しているのと逆の方の手を見せながら言った。

「この指輪の報酬は別室に用意してある。受け取ってくれ」

「分かった。でも、お前から渡してくれるんじゃないのか？」

「まぁね」

　マリウスはニヤリと笑う。何か事情があるんだろう。新婚さんだし、早いとこ２人きりにしてやるほうがいいってものあるか。俺はグダグダ言わないでおいた。

　ボーマンさんがタイミングを見計らって「こちらです」と案内してくれたので、皆で後をついていく。ホールを出る時に、俺は振り返った。

「あの２振りはプレゼントだからな！」

　大きめの声で俺がそう言うと、マリウスは笑いながら、

「分かってるよ！」

　と負けず劣らずの声で返してくるのだった。

　ボーマンさんに案内され、途中でうちの女性陣と分かれて違う部屋に入ると、使用人さんたちが待ち構えていた。まずは着替えだ。テキパキと着替えさせられていつもの格好になると人心地がついた。俺は肩を回しながらボヤく。

「やっぱり貴族の服は肩が重いなぁ」

「あら、よくお似合いでしたのに」

「そうですか？ でも、こっちのほうが気が楽でいいです」

「それは私もわかります」

　そう言って使用人さんと俺は一緒に笑った。この家の使用人さんたちとはどれくらいの付き合いになっていくんだろうか。できればあんまり緊張しない間柄でいたいものだが。

　着替えを済ませて外に出ると、再びボーマンさんが「こちらです」と案内してくれる。この人にも随分とお世話になっているし、そのうち何かで返せないものか。

　今度マリウスにそれとなく聞いてみるか。サプライズを仕掛けると言えば、きっとノリノリで手伝ってくれるだろう。

　そんな考えをおくびにも出さないように、廊下を進み、やがてあまり広くはない部屋に通される。女性陣は時間がかかっているのだろう、まだ到着していないようだ。あれだけのドレスと化粧である。

　着替えだのなんだのには時間がかかって当たり前なので、俺がゆっくり待とうと椅子に座ると、ボーマンさんが部屋の外にいた使用人さんから袋を受け取って持ってきた。

「こちらが主人より預かりました報酬でございます。どうぞ検めていただきたく」

「わかりました」

　ボーマンさんが差し出した袋を受け取ると、ズシリと重い。これが金貨だとすると結構な額のはずだ。

　うーん、今回はメギスチウム加工の勉強にもなったからこんなにいらないんだけどな。そう思いながら、袋の中身をテーブルの上に出していくと、思ったとおり十数枚の金貨が出てきた。

　しかし、この枚数でもまだ重さに合わない。俺が袋に手を入れると、こぶし大の何かに手が触れた。取り出すと、金色のような青いような金属の塊が現れる。

「これは……？」

　俺が思わずボーマンさんの方を見て言うと、彼は珍しくいたずらっぽい顔で笑った。どことなく何かを企んでいるときのマリウスに似ている。

「そちらはアダマンタイトです。今回の報酬の一部になります」

　微笑みながら、サラッと言われた言葉。その単語が何であるかを理解して、俺は少しの間身動きができないでいるのだった。

## アダマンタイト

2020年12月9日

「アダマンタイト……」

「ええ」

　ボーマンさんは微笑んだままである。それがあることが当然であるかのように。

　改めて手にとって見ると、重さの割にそんなに大きくはない。どれくらい精錬されているのかは分からないが、ほぼ減らなかったとしても刃物ならナイフを作って少し余るかも、くらいの量である。

　やたらと硬いのがアダマンタイトの特性だとしたら、細くても相当に折れにくい細剣が出来上がる可能性は高いが、普通の長剣は無理だろうな。

　しかし、そんな量でも金貨にすれば相当な額になるだろうことは予想できた。加工するのに相当に難儀したのは確かだが、材料はいわば持ち込みだったし手間賃としては破格もいいところだ。

「このアダマンタイトだけでも報酬としては十分なのでは」

「ええ、本来であればそうでしょうとも」

　つまり、金貨の分は多いのではなかろうか、ということを言いたかったのだが、サラリと流される。ん？ “本来であれば”？

「てことはこの金貨は」

「“災厄除け”のぶん、ということでございました。少なかったでしょうか？」

「いえ、その逆で……」

　確かに指輪には災厄除けまでついたが、あれは何というか成り行きのようなものだし、何より俺が手を入れたわけではない。

　それに対して金を貰っても良いものだろうか。タダでもいいと思っていたくらいなのだ。勝手に追加されたものでもあるし。

　しかし、ここで俺が固辞してもボーマンさんが困るだけである。マリウスは間違ってもそういうやつではないが、支払うと言った報酬を断られるのはメンツが立つまい。無理矢理にでも押し付けなかったことの責任はボーマンさんが負うことになる。

「なるほどそれでか……」

　まぁつまり、ここで俺が断れないようにボーマンさんだけを寄越し、マリウスはいないのだ。家の主人相手なら頑として押し切るが、使用人相手には出来ない客、という意味不明な人物に対応するなら、なるほど正しい選択であろう。

「わかりました、降参です。こちらは有り難く頂戴しておきますよ」

「そうしていただけますと、わたくしとしましても大変ありがたい限りでございます」

　ボーマンさんはそう言って深々と頭を下げた。俺もそれに合わせて頭を下げる。水飲み鳥のようにペコペコのしあいにはならなかったが、お互いにフフッと笑う。

　そこへ家族がゾロゾロと戻ってきた。先導してきたのはカテリナさんである。みんな見慣れた姿に戻っている。

　入ってきながらサーミャとディアナが会話をしていた。多分廊下を移動する間もずっと話をしていたのだろう。他の客が皆帰った今では誰に遠慮することもないが。ましてディアナは本来この家の人間である。

「言っておくけど、私やアンネでもこっちのほうが楽だからね」

「そうなのか？」

　サーミャはアンネの方を振り向く。そのアンネは返事の代わりに肩をすくめた。コルセットのようなものはまだないが、それでもドレスが窮屈であることには変わりないらしい。

「ずっと着てる人はいるけど、単に人と会う機会が多くて脱ぐ暇がないだけよ」

「前にお母様がボヤいてたわね……。私はそんなでもなかったし、なるべくなら着てない時間を長くしたいわ」

「はー、大変なんだなー」

　サーミャと同じようにリケとリディ、そしてヘレンも感心している。ヘレンはしょっちゅう着る側に回っていた可能性もあるんだが、それは言うまい。

「あっ！ これはもしかして！？」

　部屋に入ってきたリケが、テーブルの上に出しっぱなしにしてあったアダマンタイトに気がついて、跳ねるように飛びついた。

「アダマンタイトらしいぞ」

「おお……これが……」

　リケがいつもの服装で良かった。さっきのドレス姿だと違和感バリバリだったろう。

「触っていいぞ。報酬として貰ったもんだから、うちのだ」

「おお……」

　完全に語彙力が低下しているリケはそろりと塊を手にとった。

「親方、これを加工するんですか？」

「ん？ そうだな……」

　キラキラと目を輝かせてリケが言った。他の家族もワクワクを隠しきれない感じがする。俺の思いすごしでなければだが。

　俺は小さくため息をついてから言う。

「そうだなぁ。帰ってすぐじゃないが、そのうち何かにしたいとは思ってるよ。ヒヒイロカネもあるし、ちょいと先にはなると思うが」

　俺の返事にリケは「わあ！」と喜色満面の笑みを浮かべ、他のみんなは呆れ半分可愛さ半分でその様子を見ている。

「あ、すみません、ボーマンさん、そろそろお暇しますね」

「いえいえ、どうぞごゆっくり」

　うちの家族に負けず劣らず慈しむ目でリケを見ながらボーマンさんは言った。俺はテーブルの上にばらまいた報酬を袋に回収する。

「さて、じゃあ帰るとしようか」

　皆から同意の声が返ってきて、ボーマンさんは「ではこちらへ」と先導をはじめるのだった。

## みんなの“ただいま”

2020年12月11日

　ボーマンさんに先導されて、屋敷の玄関へとたどり着いた。サンドロのおやっさんに顔でも出せればと思っていたのだが、どうも難しそうだ。今回はカミロ以上に裏方だしなぁ。

　まぁ、今後機会が無いわけでもなし、また店へ顔を出せば良いだけだと思うことにしよう。

　ボーマンさんが玄関の扉を開けると、クルルとルーシーが待っていた。いつの間に先回りしたのやら、カテリナさんがルーシーをモフり倒している。ルーシーもしっぽをパタパタしているので、多分お姉ちゃんに遊んでもらってるくらいの感覚なんだろうな。

「ルーシー、帰るよ」

　俺がそう声をかけると、ルーシーは「わん」と一声上げて荷車にピョンと飛び乗った。飛び乗り方も様になっていて、もう危うい感じはない。すくすく育ってるんだなぁ。

　モフっていたカテリナさんが恨めしそうな顔をしてこっちを見た。

「そんな顔をされても……」

　俺はため息をついた。まさかルーシーをここに置いていくわけにもいかない。狼の魔物ということ以上にうちの家族だし。

「広いお屋敷ですし、番犬を飼うよう進言してはどうでしょう」

「子犬から？」

「成犬よりは環境に慣れてくれるでしょうし、子犬を入手できるならその方がいいのでは」

　前の世界ではペットを飼った経験がないので良くは知らないが、子供のうちに環境に慣れさせたほうがワンちゃんも違和感が少なかろう。

「なるほど……」

　おとがいに手を当ててカテリナさんは考え込んだ。あ、これ本当に言おうとしてるやつだな。今度来た時にはルーシーの遊び相手ができてるかも知れない。

「それじゃ、また。今日は色々とありがとうございました」

「ああ、すみません。どうぞ道中はお気をつけて」

　俺たちが荷車に乗り込んで声をかけると、カテリナさんは慌てて居住まいを正して言った。頭を下げる仕草は先程までの印象とは違って優雅だ。この人も奔放なだけで悪い人ではないし、能力はちゃんとあるのだ。……あるよな？

　俺たちは全員大きく手を振って屋敷に別れを告げる。ルーシーも負けないくらいにしっぽを振って、別れを惜しんでいる……ように見える。頭を上げたカテリナさんも、俺達に負けず劣らず手を振っていて、それはお互いが見えなくなるまで続いた。

「いやぁ、畏まった場はなかなかにキツいな」

「しょっちゅう出てれば慣れるけどね」

　俺の言葉にそう言って笑うのはディアナだ。アンネがその横でうんうんと頷いている。

「マリウスの配慮であまり関わらなくて済んだけど、下手すりゃ腹の探り合いと言葉の刺し合いになるんだろ？」

「そうねぇ……」

　今度はアンネが答えた。

「多くの人を集めるための大義名分ってそんなにないし、人が集まればそこには多かれ少なかれ、そういったことが発生するからね。それで自分たちの将来が左右されるかもと思えばなおさらよ」

「うへぇ」

　俺は自分の顔が苦虫を噛み潰したようになるのを自覚した。聞いてるだけでも胃に穴が開きそうだ。つくづく貴族社会には向いていない。

「やっぱり、俺は森で鍛冶屋をしながらのんびり暮らしているのがいいなぁ」

「その方がいいと思います」

　グッと力を入れて言ったのはリディだった。エルフだし、身体の都合があるから森での暮らしのほうが適していると言うのは大きいだろう。それにうちの畑も彼女のおかげでさまになってきたところだし。

「そう言えば、体調とかは平気か？」

「ええ。あれくらいの時間ならなんともないですよ」

　ニッコリと微笑むリディ。さっきまでのドレス姿も綺麗だったが、やはりいつもの笑顔があるとホッとする。

「エイゾウが森を出て暮らしてるところってあんまり想像できないんだよな」

「アタイも」

　そう言ったのはサーミャとヘレンだ。出会ったときには森にいたから余計にそう思えるのだろうが、俺自身も鍛冶場のことがなくとも、例えば街に住む気があるかと言われたら無いからな。

　２人の言葉に御者台のリケが困ったような声で続く。

「それに、親方に鍛冶屋を辞められてしまうと、私が困ります」

「それだけは絶対にないから安心しろ」

　俺がそう言うと、リケは大きくため息をついた。貰ったチートは鍛冶屋だから……とは言えっこないのだが、どのみち今の生活が性に合っていると実感することも増えてきたところだ。わざわざ放棄するつもりはない。

　そしてクルルの牽く竜車は都を抜け、街道に差し掛かる。話は今日の式の話から、少しずつ家の話に変わってきた。

　内容はと言えば畑の作物がどうとか、そろそろ暑くなってくるから干し肉よりも塩漬けにする方を増やしたほうが良さそうで、それならカミロに買う塩の量を増やすことを頼まないととか、そう言った日常のことだ。

　みんな少しずつ、ちょっと変わった一日から“いつも”に戻りつつある。

　森の入口に差し掛かる前、太陽が世界を茜色に染めはじめた。松明の準備だけして草原の向こうを見ると、太陽はその姿を半分ほど隠している。

　渡る風になびく草がキラリキラリとその光を反射し、太陽が草原をそっと撫でているようにも見えた。

「ずっとこうやって平和だといいんだけどな」

　ボソリと俺がいった言葉に皆頷いた。俺から見えている風景はこんなにも平和である。しかし、見えていないところでは今も何かが起こっているはずなのだ。

　その全てを止めることはできない。チートがあっても俺はただの鍛冶屋のオッさんでしかない。でも、それでも、

「見える範囲が平和であることなら、なんでもやっておきたいな」

　そしてそれが“いつも”になればいいなと、そう思った。

　そうして、日が落ち松明に火をつけて森に入る。もう既にここらは勝手知ったるところだ。この森の動物達も俺たちに慣れているのかなんなのか、サーミャの鼻にもヘレンの気配感知にも何も引っかからず、クルルはご機嫌で竜車を牽いていく。

　もしかすると森の入口から最短ではないかと思うくらいの時間で家にたどり着いた。

　今日はなかなかに波乱万丈だったな、そんなことを思いながらみんなでクルルから荷車を外すと、なんとなし全員で家の前に並んだ。クルルとルーシーも一緒に並んでいる。

　松明の明かりに家が照らされている。見ようによっては不気味と言う人もいるかも知れない。だが俺は安心感を覚えていた。

　しばらく誰も何も言わないでいたが、見かねたのか並んだ誰かが「せーの」と言った。この後に続く言葉は決まっている。

『ただいま』

　全員で言って、俺は家のドアを開ける。こうして、俺達は“いつも”に戻っていくのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

長かった９章もこれにて終了となります。

次回から１０章になりますが、その前に一度人物紹介を挟んで再開となりますので、その旨ご承知おきくださいますようよろしくお願い致します。

# 人物紹介

## 人物紹介

2020年12月14日

エイゾウ工房の人々

　エイゾウ……フルネームはエイゾウ・タンヤ。人間。男性。元日本人で猫を助けようとしてトラックに撥ねられたが、命を失うことがイレギュラーだったため転生してきた。そのため身体的には３０歳だが、精神的には４０歳と少し。

　その際に貰ったチートの能力で鍛冶屋を始める。とんでもない性能の製品が作れてしまうため、本人はあまり積極的に作りたくないらしい。

“黒の森”で暮らす都合上からか、生産系全てに通用するチートと、そこらの兵士相手なら余裕で勝てるくらいの戦闘能力も貰っている。

　なぜか自分のところに女性ばかり来ることについては不思議に思っている。

　サーミャ……フルネームなし。虎の獣人。女性。実年齢は５歳だが人間年齢に直すと２５歳ほど。大黒熊に襲われて気を失っているところをエイゾウに救われ、その後エイゾウから持ちかけられたこともあって一緒に暮らすようになった。

　もともと“黒の森”で暮らしていたこともあり、森の植物や生物、地理について詳しく、生活上必要な知識をエイゾウに教えたりしている。

　リケ……フルネームはリケ・モリッツ。ドワーフ。女性。年齢不明。ある程度の年齢になると自分の工房を出てよそに弟子入りするというドワーフに風習に従って、実家の工房から弟子入り先を探していたところ、エイゾウの作った製品を見て弟子入りをした。

　チートを貰ったエイゾウとは違い、“ちゃんとした”鍛冶屋であるため、エイゾウは申し訳ないと思いながら「見取り稽古」をさせ、普通の鍛冶屋がどうしているのかを聞いたりしている。

　魔力についてエルフのリディから学びメキメキと実力を伸ばしており、鍛冶屋としてのレベルは高いのだが、見ているものがエイゾウのものなのでまだまだだと考えている。

　ディアナ……フルネームはディアナ・レオナ・エイムール。人間。女性。年齢不明。王国のエイムール伯爵家のご令嬢だがお転婆。エイムール家騒動のときに巻き込まれないようエイムール家から逃げ出し、エイゾウ工房に匿われる。騒動解決後には「余計な厄介事を呼ばないため」として、そのまま一緒に暮らすことになった。

　かつて「剣技場の薔薇」とまで呼ばれた剣達者。剣の腕は母親譲りらしい。好きな作業は狩りや建築だが、王国の政治についてエイゾウに聞かれたときには王国伯爵家令嬢としての解説などもする。

　リディ……フルネームはリディ・ローズウォール。エルフ。女性。年齢不明。“黒の森”とは違う森のエルフの里で暮らしていた。最初は魔物が大量発生した時に壊れたエルフの宝剣の修理を依頼しにエイゾウ工房を訪れた。

　その後、短期間で再び魔物が大量発生した際、都からの討伐遠征隊に協力することになり、エイゾウと再会した。討伐に成功した後は、「都に一番近くて魔力が豊富なところ（エルフは生命維持に魔力を必要とするため）」としてエイゾウ工房に住むことになった。

　魔力、魔法についての知識があるため、リケに魔力を扱うための手ほどきをしたり、魔力や魔法、魔物の解説をエイゾウにしたりする。

　ヘレン……フルネームなし。人間。女性。年齢不明。高身長で顔に刀傷がある。傭兵をしており、“迅雷”（もとは“雷剣”）の二つ名がつくほどの腕っこきで二刀流の使い手。

　元々はいい武器を求めてエイゾウ工房を訪れた。その後もメンテナンスのために訪れたりしていたが、帝国の革命に巻き込まれて囚われの身になる。その後、エイゾウたちにより救出されたが、命を狙われているので工房に匿われることになった。今は狙われていないが工房の生活が気に入ったようで傭兵に戻らずにいる。

　剣の腕は近隣では最高と言って良く、エイゾウでも勝てない。その目線でエイゾウにアドバイスをすることもある。

　アンネ……フルネームはアンネマリー・クリスティーン・ヴィースナー。巨人族。女性。年齢不明。帝国の第七皇女。エイゾウを帝国へ引き抜くよう言われて工房を訪れたが、あっけなく断られる。

　任務の失敗はもとより想定済みだったため、自分の武器だけ作ってもらって帰還する予定だったが、とある策謀の人質としてエイゾウ工房に住むことになった。あくまで人質のため、立場上帝国第七皇女のままである。

　最近はこっちの暮らしのほうがいいなぁと思いはじめている。伯爵家よりも上の貴族の暮らしであったり、王国と帝国を含む外交などについてはエイゾウにアドバイスする。

　クルル……フルネームなし。走竜。メス。年齢不明。カミロが通常ルートで入手してエイゾウに譲り渡した。かなり血は薄まっているがドラゴンの末裔ではあるため、魔力を摂取することで身体の維持を行える。

　エイゾウのことはパパ、他の家族はママ、ルーシーのことは妹だと思っている。荷物を牽くのが好きなのはその後パパとママが褒めてくれるため。最近は牽くこと自体が楽しくなりつつある。

　ルーシー……フルネームなし。森狼の魔物。メス。年齢不明。“黒の森”の魔力で魔物化してしまった子狼で、そのため母子共々群れを追い出され、そこを大黒熊に襲われて母親を亡くす。

　今はエイゾウたちに保護されてすくすくと成長し、狩りにも連れて行ってもらえるようになった。クルルのことはお姉ちゃんだと思っている。将来賢くなるらしい。

黒の森の人々

　ジゼル……“黒の森”の妖精族の長。妖精族は身体の大半が魔力で構成されているが、妖精族特有の魔力が徐々に抜けていく病解決のため、エイゾウに協力を依頼した。

　リージャ……“黒の森”の妖精族。病にかかり死にかけているところをエイゾウに助けられた。

　ディーピカ……“黒の森”の妖精族。病にかかり死にかけているリージャをエイゾウ工房に運んできた。

街の人々

　カミロ……元行商で今は街の新市街に大きな店を構えるやり手の商人。最初はエイゾウの品物をちょこちょこ買っていくだけだったが、品質と価格を考え店を構えるにあたって正式に取引することになった。

　マリウスや侯爵などともつながっており、厄介事に巻き込まれやすいのはエイゾウとどっこいだが、最終的にエイゾウに持ち込まざるを得ないのは本人も気にしているらしく、街の鍛冶屋とトラブルになる前に品物を自分のところで引き取ったり、走竜を「没落貴族から譲り受けた」と安値にしたりと気を使っている。

　衛兵隊……町の入口で検問したり、街中や街道を巡回したりと何かと忙しい人たち。エイゾウのことは「嫁の多い変な鍛冶屋」だと思っているが、態度が丁寧なので一定の信頼をおいているらしい。

都の人々

　マリウス……マリウス・エイムール。エイムール伯爵家現当主。街の領主でもある。最近結婚した。元々は世間を見てこいとの父親の指示で街で衛兵をしていたが、父と長兄が死去した際に次兄と家督を巡ってエイムール家騒動が勃発。マリウスが勝利して当主になった。

　その騒動でエイゾウを頼ることになり、そのあと魔物討伐遠征隊に誘うなどお互い友人であると思っている。厄介事を持ち込むのが大体自分であることは気にしているらしい。友人知人にはあまり裏表を出さないようにしているが、やるべきところではちゃんと貴族としての策謀もできる“やり手の若者”。友人相手にはよくイタズラを仕掛けるのが玉に瑕。

　ジュリー……ジュリー・デランジェール・エイムール。マリウスの奥さん。ディアナは全く気がついていなかったが、結構幼いときからマリウスとは相思相愛であったらしい。侯爵にとって直系ではないが縁戚にあたるため、今回の結婚でマリウスも縁戚となった。

　ボーマン……エイムール家の使用人頭。何かと気が利く人で先代から仕えている。エイゾウのことは「お客様なのに我々にも大変心を配ってくださる方」として覚えている。

　カテリナ……エイムール家の使用人。あまり家事系の仕事は任されておらず、“特別な”仕事が多いらしい。その特別にエイゾウたちの出迎えやルーシーをモフることが含まれているかは不明。

　マティス……エイムール家の馬番。言葉の足りない喋り方をするが基本的には心配りもできるいい人。

　ルロイ……ルロイ・マクマホン。マリウスの友人で魔物討伐遠征隊の時の副官。マリウスが街で衛兵をしていたときは同僚だった。マリウスがエイムール家の家督を継ぐにあたって、街の代官候補として都に呼び寄せた。エイゾウとも何度も会っており、他に人のいないときはお互いにタメ口である。

　侯爵……グレゴール・メンツェル。王国の侯爵で大臣。マリウスの親（＝前当主）と友人関係だった。エイムール家騒動の時にエイゾウを知り、そのあとあちこちで見かけるため「なんだかんだであちこちに首を突っ込んでんなあの鍛冶屋」と思っている。

　エイゾウの鍛冶と戦闘の腕前を知る数少ない人物。豪放磊落を絵に描いたような人だが、それなりのやりとりはできるらしい。エイゾウ曰くは「政治が絡まなければ気のいいオッさん」。

　サンドロ……都で“金色牙の猪亭”という料理屋をしている。ドワーフと見間違えられるくらいの体躯をしている。エイゾウとは魔物討伐遠征隊のときに知り合った。腕前は確かで元貴族お抱えの料理人だったという噂もあるが、本人が否定している上に性格的に無理でしょということで信用はされていない。知り合いが来るとよく無料で料理を振る舞って、あとで妻にどやされているらしい。

　ボリス……サンドロのところで働いている見習い。背は高くないがガッチリしている。料理の腕前はそこそこ。

　マーティン……サンドロのところで働いている見習い。背が高めでガッチリしている。あまり喋らない。料理の腕はボリスとサンドロの間くらい。

　フレデリカ……フレデリカ・シュルター。あまり身分が高くない貴族の家の娘。普段は税関連の仕事をしている。エイゾウとは魔物討伐遠征隊に文官として従軍した時に知り合った。動作の小動物感が凄い。後に大変な人物に成長してしまう。

その他の人々

　ニルダ……魔族。ヘレンに武器を壊され、その時に言われた言葉を頼りにエイゾウ工房を訪れて自分の武器を作ってもらった。魔界辺縁地域の偵察部隊隊長で魔王とも直接の面識があり、エイゾウ工房の武器を魔王が知ることになったのはニルダがきっかけである。

　ウォッチドッグ……猫の姿を借りて地球を“観測”していたら、うっかりトラックに撥ねられそうになりエイゾウに助けられる。その見返りとしてエイゾウを転生させた張本人。

# 第１０章　　“黒の森”の主編

## いつも通りに

2020年12月16日

　マリウスの結婚式から戻ってきた俺たちは、翌日からいつも通りの生活に戻った。

　少しだけ違うのは神棚に奉ってあるヒヒイロカネの隣にアダマンタイトも鎮座していることだ。これは帰ってきて真っ先にここに置いた。

　なので、朝に神棚を拝んだときにもそこにあるわけである。

「あれはいつ加工するんだ？」

　二礼二拍手一礼の最後の礼を終えた後、サーミャが聞いてきた。

「どっちの話だ？」

「どっちもだよ」

「そうだなぁ……」

　俺は顎を手でさすりながら考え込む。

「とりあえず、しばらくはないな」

　その言葉でがっくりと肩を落としたのはサーミャではなくリケだ。

「適切な加工法を探る必要がありそうだからな。普通の鋼のように鍛えてもそれなりに加工は出来るんだろうとは思うけど」

　どっちもメギスチウムと違って柔らかいわけでもないから、性質は金属に近いものだと思う。それならば普通に加工はできる……はずだが、確証はない。

　チートを使えば一発で解決……とはいかない可能性があるのはメギスチウムの時に経験済みである。

　それに、俺にはもう一つ理由があった。

「あとは魔宝石を固定化する方法も探りたいしなぁ」

　妖精さん達の病気には魔宝石が欠かせない。だが、うちで製作できる魔宝石は安定していないのか、しばらく経つと文字通り雲散霧消してしまうのである。

　もしずっと維持できる魔宝石が製作出来れば、薬として妖精さん達に提供すれば、理由はともあれ俺がいなくなっても病気の治療ができる。なるべくなら妖精さん達にももっと気軽に暮らして欲しいものだし、それを考えれば優先したいのはこれだ。

　ただし、問題は魔宝石には宝石としての価値があり、それもそんなに安いものではないということだが。言うなれば無から宝石を生み出す技術である。

　方法を見つけてそれが他の皆にも出来るようになったとしても、製法は門外不出だなぁ。それだと１００年後くらいには失伝してそうだが、それも致し方あるまいと思う程度には危険だ。

　そんなようなことを言うと、アンネがうんうんと頷いた。

「私は喉から手が出るほど欲しいけど、もし私が手に入れて国に帰ったとしたら、私はその後一生日の光を浴びることはないでしょうね」

「だろうな」

　無から無限に金を生む機械を入手したら、誰だって大事に大事にしまっておくだろう。それはもう仕方のない話だ。俺だって自分が偉い人の立場だったらそうする。となれば門外不出も失伝も致し方あるまい。

　というか、おそらくこの世界でこれまでに魔宝石の生産に成功したものが皆無であるとは思いにくい。つまりはもう既に失伝しているのでなかろうかと俺は推測している。

　こうして生まれたり失くなったりしてる技術っていっぱいあるんだろうな。前の世界ではどうだったんだろうか。今更だが少し興味が出てきた。もう調べる術は全く無いけどな。

「そんなわけでしばらくはいつもどおりだ」

　俺がそう言うと、リケも含めて皆から了解の声が返ってきた。なんだかんだでいつもののんびりとした（とは言ってもキッチリ仕上げるが）仕事も嫌いではないのだろう。俺はのんびりと炉と火床に魔法で火を入れた。

　俺が魔法でやっているのはあくまで着火と送風だけなので、火を入れてもしばらくは温度が上がってこない。火床の様子はリケが、炉の様子はサーミャが見ていてそれぞれ適宜炭を投入している。“親方”はどっしりと後ろで見ていろということだろうか。

　特注品のときは火床を整えるのは俺の仕事だが、今日はさっき宣言したとおり普通のだから、こうしてその様子を眺めていても問題ないというわけである。

　いや、気持ちとしては何もしないのは落ち着かないのだが、２人に「これも勉強だから」と言われると引っ込まざるを得ないのが実際のところだ。

　徐々に温度を上げていく炎を見ながら、俺は手を握ったり開いたりして言った。

「俺が使える魔法はごくごく簡単なやつのみだけど、これって練習したら他のも使えるようになるのかね」

「どうでしょう……」

　それを聞いて答えたのはうちの魔力と魔法の専門家であるリディだ。口元に指先を当てて考え込んでいる。

「魔力の扱いは誰でも練習すればそれなりにできますが、魔法は向き不向きがありますからね」

「ほほう」

「例えばですけど、大病を治す魔法が使える人は炎を操るような魔法は不得手だったりします」

「特化すると他が苦手になる？」

「と、言われていますね。私はそこまで凄い魔法は使えないのですが、ある程度はなんでも出来ますし。ただ、それでも火と風は苦手ですね。使えなくはないんですけど」

「ちょうど俺が使えるやつか」

「ええ。なので教えるのも難しいかも知れません」

　リディはそう言ってシュンとする。俺は軽くその肩を叩いた。

「今使えるのでも十分だから気にしなくていい。ちょっと興味が出ただけだ。さーて、仕事にかかるか！」

　俺がそう言うと、リディは少し微笑んだ。と、そこへ、

「エイゾウがリディいじめてるぞ！」

　ヘレンの声が響き、皆が俺の方を見る。まさに突き刺さるかのような視線だ。

「いやいや……ちょっと待て……」

　俺は皆とワイワイやりとりしながら、今日の作業に取り掛かるのだった。

## 夏の井戸

2020年12月18日

　それから２週間が過ぎた。このところイレギュラー続きだったこともあって、特に変わったことはしていない。リハビリのようなものだ。

　納品の時にカミロに聞いてみたが「世は並べて事もなし」とのことだった。マリウスとジュリーさんも睦まじく新婚生活を送っているらしい。新婚旅行の概念はこの世界にはまだないというか、そもそも物見遊山での移動はあまりないと言っていいだろう。

　旅人とはつまりどこにとっても“よそ者”だからなぁ……。行商人や探索者たちにもそれなりの苦労があるに違いない。何か事が起これば真っ先に疑われるのは彼らだろうし。

　まぁ、あの新婚さんたちには指輪がついているから滅多なことは起こらないと思ってよかろう。そのあたりを心配しなくて済みそうなのは、本当にありがたいことである。

　そんなこんなでいつもどおりの２週間を過ごし、俺は気が付き始めた。

「最近またちょっと暑くなってないか？」

「あー」

　テラスで昼飯を皆で食べている時に俺が言うと、サーミャが空を仰ぎ見た。以前も随分と暑くなったとは思ったが、飯や休憩で鍛冶場から出た時に涼しさをあまり感じなくなってきているような……。まだ今のところはじっとしていると汗がダラダラと流れるというほどではないのだが、更に気温が上がっているような気がする。

「もう夏だな……」

　日が差し込みにくい“黒の森”の中で湖を除くと、ひらけているのはうちの周りだ。抜けるように青い空には太陽がさんさんと輝き、その恵みを地面に注いでいる。

「もうそんな季節なんだなぁ」

　俺がこの世界にやってきたのは多分春先くらいだ。それから雨季を経て夏。まだ１年は経過していないとはいえ、それなりの時間が経ったことになる。その間にいろいろなことが起こりすぎて、もっと時間が経っているような錯覚もあるが。

「これからまだまだ暑くなるのか？」

「そうだなぁ。夏も始まってそんなに経ってないし」

　鍛冶場の中ほどではない（そうなったらこのあたりは砂漠と化している）だろうが、まだ暑くなるのか。そうなると、いずれ何をしていても汗をかくようになりそうだな。

「井戸を掘るか……」

　汗をかくということは、つまり体内の水分が失われているということである。それに今のように身体を絞った布で拭くだけでは物足りなくなるのではなかろうか。主に俺がだが。となれば水浴びもしたくなるだろう。それはクルルもルーシーも同じである。

　そうなれば、今汲んでいる量では水の量が足りなくなってくることは鍛冶場の火を見るより明らかというもの。水分を補給するための飲料水や畑に撒くぶんもあるわけだし。

　足りなくなったら湖へ汲みに行ってもいいのだろうが、ほぼ毎日それもなぁ……。散歩も兼ねているので水汲み自体は続けるにしても、簡単に水を確保する手段もいずれ来たる風呂計画のためにも今のうちに整えておきたい。

「どうだろう？」

　俺は皆に井戸掘りを提案した。幸い納品はこの間したところなので時間はあるので、後は皆が井戸を必要と思うかどうかだ。

「アタシはあってもいいと思う。アタシやヘレンはともかく、他のみんなはここから湖に行くのも危ないかもだし」

　そう言ってサーミャは同意してくれた。

「そうねぇ……。無くて今すぐ困るものではないけど、あればとても便利なのは確かね」

「私もあっていいと思います。水を沢山必要とするものを植えるかも知れませんし」

　腕を組んで考え込んでいるのはディアナだ。リケとアンネも似たような感じみたいで、消極的賛成と言えるだろうか。畑を考えて積極的に賛同したのがリディである。自由に使える水が増えれば植えるもののレパートリーが増えるのは道理かも知れない。さすがにかけ流せないと思うので、ワサビのような植物までは無理だろうが。

　ヘレンはというとあまり興味がない感じであった。サーミャが言う通り彼女は自分で湖に汲みに行けるからどっちでも問題ない、ということらしい。

「問題は家の周りで水が出るか定かじゃないところだな」

「それなのよね」

　俺が言うと、ディアナが腕を組んだまま頷いた。あちこち掘り返しはしたが結局水は出ませんでしたとなれば、骨折り損のくたびれ儲けである。湖の様子から見て伏流水なり帯水層なりはありそうだが、ここらまでは通じていない可能性は普通にあるのだ。

　ディアナたちが積極的に賛成と言わないのも恐らくはそこだろう。そこまで考えて、俺はハタと気がついた。

「しまった、妖精さんたちにここらは水が出るのか聞いておけばよかったな」

　彼女たちなら水がどこまで来ているか、ある程度知っていたかも知れない。あるいは感知できるとか。前に家に来た時に聞いておけばよかった。

「妖精さんたちへ連絡する方法もわからないですし、とりあえずやってみるのはありなのでは？」

　そうリケが言うと、

「そうね。水が出なかったらその時考えましょう」

　ディアナが同意した。

　こうして、エイゾウ工房での井戸掘り開始が決定したのだった。

## 井戸掘り段取り

2020年12月21日

　井戸を掘る場合、この森でやるとしたら概ね２種類の方法が考えられる。

　まず露天掘り。乱暴に言えば単純にシャベルで掘っていく方式である。空気の循環なんかを考えたら広めに掘っていき、湧いたところを木の板や石で囲ってさらにその周りは埋め戻す。

　用意する道具が少なくて済むことと、広く掘って湧水するところを多少は探しやすいのがメリットだが、ロスの多い方法だし崩落の危険もある。無限に掘る場所を広げるわけにもいかないし。

　次に上総掘りと言われる掘り方だ。櫓と専用の道具を使ってボーリングしていく方法である。やるには当然櫓も道具もそんなに複雑でないにせよ作る必要がある。だが、露天で掘るよりは早いし安全だろう。

　さらに言えば掘った後だ。釣瓶で汲み上げる方式にしても跳ね釣瓶を作るのか、あるいは手押しポンプを作るのかなど考えることは多い。

　ただ、上総掘りと手押しポンプについては、このあたりにはない技術だし、水の確保というのは栽培と居住に大きく影響する。

　つまり、イコール領地運営に影響してくるわけだ。ろくな水資源もない、人が住むには適さない広いだけの不毛な土地だと思っていたら、不透水層より下には豊富な水があって豊かな生産力を誇るようになるかも知れない。

　そしてそれは国にとっては力なのだ。そういうものをこの場だけとはいえ設置するのもなぁ……。

　そんな事もあって、井戸掘りを持ちかけた日の夕食後、俺が露天掘りで釣瓶を設置することを提案すると、みんなからは特に異論は出なかった。

　崩落については心配だが、この辺りの土壌の硬さを考えるとそうそう崩れはしまい、

「いつからやるんだ？」

「そうだなぁ」

　サーミャに聞かれて、俺は腕を組み天井を仰いだ。魔法のランタンの明かりで黒さが幾分薄らいでいるが、思考を集中させるには十分な暗さだ。

「早めがいいから、明日からでもはじめたいくらいではあるんだが」

「別にそれでいいんじゃねぇの」

　サーミャが事も無げに言った。目線を下ろすと、皆も特に異議は無いらしい。とはいえ、ちゃんと納品はしていかないといけない。

　貯金というか使ってない金が沢山あるから、しばらくは仕事しなくても問題ないが、今後数十年お世話になるかも知れないのだ。ほぼ自給自足のスローライフに入ったら頻度は減らすと思うが、それまでは信頼も貯めていくに限る。

「カミロんとこへの納品って量足りてたっけ？」

「前が多かったんで今回は十分なはずですね」

　俺が聞くと即座にリケが答えてくれた。他の作業をしていても週あたりの納品ラインは守ってこれたのだから、他の作業がなければ余剰が出るのは当然か。

「じゃあ、そっちは問題なし、と。肉の貯蔵は……聞くまでもないか」

　そっちはサーミャが頷いた。よく食べるのがいる（最近増えた）おかげで「干したり塩漬けにしても食べきれない分を捨てる」という事態にはなってないが、保存している分も増減なしか微増くらいのペースなのだ。

　食料全部を家に運び込んで籠城すれば、食料の観点からは３ヶ月くらいは保つんじゃなかろうか。それも特に量を制限せずにだ。家の中で水を確保する手段がないので実際には籠城出来ないが。そもそも、そんな事できる構造になってない。

「それじゃ、お言葉に甘えて明日からやらせてもらうか。最初は場所の選定と掘るところからだな」

　頭の中でなんとなくの作業の割り振りを考える。なんだか前の世界でやってた仕事っぽくなってきたな。こっちは仕事と趣味と生活のハイブリッドみたいなもんだから、そのぶん気は楽だが。

　なんせこれには納期がない。ああ、素晴らしき哉ノー納期。その分ダラダラしてしまわないようには気をつけよう。

　その後、いくつか日常生活の話をして、俺は皆より一足先に自室に戻るのだった。

## 井戸掘りをはじめよう

2020年12月23日

　翌日、朝の日課を終えたら全員で外に出てきた。まずは掘る場所を決めるのだ。

　水脈がなければどうしようもないが、ある程度「ここに井戸があればいいな」と思う場所は決めておきたい。

「水脈を探る魔法、なんてのはないよな」

　俺はリディに聞いた。聞かれたリディはキョトンとしている。これは無いってことだな。そう思っていると、

「あるにはありますよ」

　と返された。あるのか。

「厳密には“水のある方向がわかる魔法”です。間に壁などの障害物があると探知しにくくなるので、地面の下にある水は探るのが難しいんですよね」

「なるほどなぁ」

　エコー的な何かだろうか。まぁ、魔法に原理を求めても仕方ないか。10m前後の深さに汲み上げられるほどの水があるかどうか判別するのは、前の世界でもなかなかに難しいことだったと記憶している。それが魔法で分かるなら十分すぎる。

「それでも得意な人なら精確に位置をつかめるんですが、私の場合はそこまで得意でもなく……」

「いや、それでも十分だよ。少なくともここら一帯を掘り返すのが無意味かどうか分かるだけでも全然違うし」

　俺がそう言うと、リケがウンウンと頷いた。リケの工房には山に近いが川から遠かったので井戸を掘るのに苦労したという話が残っているらしい。

　それならということでリディが魔法を使うことになった。俺が使うような簡単なもの以外で使うところを見るのは、ホブゴブリン討伐の時以来かな。

　リディはしゃがみ込むとスッと目を閉じて何かに神経を研ぎ澄ませて、手のひらを地面に向けている。そよそよと風が渡るが、その風に涼やかさが減っているのに俺は気がついた。こりゃ完全に夏だな。

「おお……」

　ヘレンが声を上げる。リディの手がほんの少しだが光っているのだ。その光は手のひらよりも大きな範囲の地面をちょっとだけ照らしているように見えた。僅かばかり手のひらと地面の間から光が漏れているようにも見える。

　そっとリディが目を開け、しゃがみこんだまま結果を説明してくれた。

「この感じですと、この辺りはどこを掘っても水が出そうですね」

「え、そうなの？」

「ええ」

　リディはしっかりと頷いた。その目には確信の色が見てとれる。魔法を使う前のちょっと自信なさげな感じは全く残っていない。

「この光は水のある方に向かいます。少し離れてますけど湖があるのでそちらの方へも行ってますが、もしこの一帯に水がなければ地面には行かないはずなんです」

「光の強さが水の量というか、魔法で分かる範囲ってことか」

「そうですね。この魔法が得意な人で集中して水があると、そこに強い光が向かいます。私は得意でないので光が弱いですが……」

「それでも拡散しているということは地下水がそれなりに集中してあるのではなく、ここいら一帯に分布してるってことか」

「おそらくは」

　つまり、うちの家（と工房）は恐らくは不圧地下水を含んだ地層の上に建っていることになる。流石に岩盤より下の帯圧層の水までは探知できなさそうだし。

　前の世界の工場みたいにバカスカ汲み上げる事はできないから、地盤沈下みたいなのを気にする必要はないと思うし平地なので地すべりも大丈夫だろうが、なんかちょっと怖い感じはするな。

　どこを掘っても水が出るなら、あとはここにあれば便利だと思うところに井戸を作ればいいわけである。これもウォッチドッグのはからいだろうか。それなら最初から井戸を用意してくれたら良かったのではと思わなくはないのだが。

　いや、そこまで望むのは贅沢というものか。最低限を用意してくれていたのだからそれで良しとしよう。

　井戸の場所については少し紛糾した。皆それぞれの主張がある。

「一番使うのは畑だと思うんですよね」

「クルルとルーシーの小屋に近いほうが洗ったりお水あげるのに便利でしょ」

「表に近いと獲物を解体する時に洗えて便利だ」

「貯水槽そばの方が良くないですか」

　それぞれめちゃくちゃ離れているわけではないので、どこに置いても大差はなさそうに見えるのだが、それでも使う頻度とかを考えると、少しでも自分の作業に便利なところがいいには違いない。

　しばらく話し合って、折衷案でテラスのすぐ側に掘ることになった。ここなら皆が希望するどの場所からも同じくらいのところにあるし、母屋や鍛冶場へと水を運び込むのにもテラスから入れるので便利なのだ。

「よーし、それじゃあ始めるか」

　作業は俺とヘレンとアンネが掘って、出た土を他の皆が運び、時々リディに水の存在を確認してもらうという手はずだ。

　俺は部屋を増築したりする時に使ったスコップを手にした。既にスコップを手にしているヘレンとアンネは俺の挙動を見ている。どうしたのだろうと思っていると、ヘレンが俺に言った。

「最初はエイゾウがやりなよ」

　鍬入れみたいなもんか。こういうのは気持ちが大事だしなぁ。

「それじゃ僭越ながら」

　俺は咳払いをして、水が出ますようにと祈りながら、最初のスコップを地面に突き立てるのだった。

## 掘り進める

2020年12月25日

　ざくりと硬い土に鋼が食い込む感触が、柄を通じて俺の手に伝わってきた。これが最初の作業ということになる。

　水が出てきたところで掘るのをやめるつもりだが、深ければ１０mほどにはなるはずだ。まだまだ先は長い。

　俺が最初にスコップを入れるのを待っていたのか、１すくいの土を脇によけた途端にルーシーが駆け寄ってきて地面を掘り掘りしはじめた。地面の硬さもあって大して掘れてはいないのだが、なに、子供が手伝ってくれるのは気持ちだからな。

「俺たちに近づくと危ないから、ちょっと離れたところを頼むな」

「わん！！」

　俺が言うとルーシーは一声上げて、言われたとおりにちょっと離れたところを掘り掘りする。クルルはルーシーが掘った土を足で器用に脇へよけていた。すっかりお姉ちゃんが板についてきたな。

　それを見て家族皆がほっこりした気分になる。それなりに急ぎはするが、今すぐ無いと困るものでもないし、ましてや仕事でもない。先を考えてげんなりするよりは、こうやってほっこりした気分で作業を進められるなら、そっちのほうが良いに決まっているのだ。

「よーし、それじゃあこの辺を広く掘っていこう。出た土はそうだな……あの辺にまとめておこう。あとである程度は埋め戻すから、近いところがいい」

　人数が少なかったり作業に使える場所が狭いなら、崩落の危険も考えつつ、できるだけ狭い範囲で掘るのが良いのだとは思うが、今回は人数もいるし作業に使える場所もそれなりに確保できるので、広めに掘り下げていく予定だ。

　万一を考えて掘り下げる箇所は一辺が斜面になるようにする。こうすれば崩落したときの安全マージンを取りながら、換気の問題も解決できる……はずである。狭い範囲で掘った場合の問題は換気で、想像より浅い段階でも換気されずに窒息してしまう。これなら換気できるだろうとの目論見だが、作業中に苦しくなった場合はすぐにリディが“送風”の魔法を使うことになっている。

　そう、彼女も“着火”と“送風”の魔法が使えるのだ。普段俺が使っているのは「親方が俺だから」というそれだけである。別にロックがかかっているものでもないからなぁ。

　掘り出した土砂の運び出しも、カゴか何かに縄をくくりつけて引き上げてもらうことも考えたが、直接出入りができるしこちらのほうが面倒が少なそうだ。

　作業の内容が決まれば後は進めていくだけである。途中で何らかのハプニングが起こることはあるだろうが、その時に解決方法を考えればいい。俺は再びスコップの先を地面に食い込ませた。

　掘り始めてしばらく。土は硬いが“特製”のスコップのおかげか、思ったよりも作業が進んでいる。今は田んぼを作るにはまだ浅いが、水が溜まればそれなりの量になりそうなくらいだ。

　掘削班以外のみんなが集めてくれた土も結構な量になっている。ちょっとした小山のようだ。頑張っていたルーシーも結構掘ったところで飽きたらしく、今はクルルと一緒にあたりを走り回っている。

　あれは多分皆が見えるところにいるから嬉しいのもあるんだろうな。鍛冶場をクルルも入れるようにして、自由に出入りさせるか？ いや、あそこは火を扱うからダメだな。

　空を見た俺は太陽が中天にさしかかろうとしているのに気がついた。もうそんな時間か。

「そろそろ昼飯にするか。準備するから皆手を洗ったりしといてくれ」

　俺がスコップを地面に突き刺してそう言うと、皆から声が返ってくる。今日は天気もいいし、クルルやルーシーも機嫌がいいのでテラスで食べることにしよう。

　昼からも作業をすることを考えたら、少しスープの具材を増やしたほうがいいかな、そんなことを考えつつ、落ちる汗を拭いながら俺は家に戻った。

## 水

2020年12月28日

　昼飯を終えて、再び井戸掘りの続きをする。ここらは開けているから日の光が直接差してくる分、他の場所よりも気温が高い気がする。

　それでも、他の場所との気温差でだろうか、気圧差が起きているのか風が吹いているのが救いだ。

　ルーシーは昼飯を食ったら“仕事”を思い出したのか、再び“お手伝い”をはじめた。クルルも土を脇に避ける作業を再開している。

　俺たちもそれに負けないようにと土を掘り始めた。

　掘り始めて夕方より前。特製のスコップはサクサクと土を掻き出し、それなりの深さになってきた。田んぼに出来る深さはとうに超えていて、俺の肩より少し下くらいである。ペースとしてはかなり良い方だろう。

　もう直接外に土を出すのは難しいな。斜面側に置いておき、それを運び出して貰うことにしよう。この作業はクルルが簡易荷車を使ってやることになった。

　本人がその荷車の紐を口でくわえて持ってきたので、これはやる気があると言う判断になったのだ。

　俺たちが土を荷車に載せると、クルルは「クルルルル」と一声上げて運びだし、小山の近くで止まる。

　その土をリケ達が鍬なんかを使って下ろすと、クルルは残りの土を運びに戻ってきた。働き者だなぁ。

　ここらの土はかなり硬いようで、縁を軽く叩いてもドサッと崩れてくるようなことはない。多分そうそう崩れてくることは無いだろう。それでも用心するに越したことはないか。

「木の板を立てるか……」

「木の板？」

　一緒に作業しているアンネに聞かれて俺は頷いた。

「斜面側は大丈夫だと思うが、壁になってる方は崩れ止めをしておこう。深いところで一気に崩れると逃げる時間もなさそうだし」

　斜面側は出入りもあって踏み固められているし、角度が急にならないように順次広くしていってるので、多少は平気だろう。

　壁側は一気に崩落すると危ないし、十分に離してはあるがテラス方向に崩れると巻き込まれそうなので、少なくともそちら側には土留めを作っておこう。

　一辺の最大の大きさはもう決まっているので、その大きさに板を切り出していく。この後、掘り進めていくともっと数が必要になってきそうなので、その分はサーミャやリケ達に頼むことにした。

　徐々に小さくなる分は都度切って調整する。余った木も焚きつけなりなんなりで活用できるから無駄にはならないだろう。

　切り出した板を１枚、底のところに壁に接して貼り付けるように置く。もちろん板が倒れてきたら意味がないので、長い杭を打っておく。杭と言えば聞こえは良いが、その辺りから適当な細い木を伐ってきたものだ。

　それを適当な間隔で打ち込んで、板留めにし、板を積み上げて塀にした。これで崩落は防げるはずだ。

　穴が深くなってきたらその分ドンドン継ぎ足していく必要はあるが。

　これで一通りの作業順は固まった。後は手順に従って掘っていくだけだ。しかし、この日はもう日が沈みかけていたので、続きは明日することになった。

　翌日、この日も晴れていて、抜けるように青い空が見えている。

　昨日は体を拭くと結構土がついていた。朝の水浴びの時にはクルルとルーシーにも念入りに水浴びさせたし、こういう作業が今後どれくらいあるか分からないが、あった場合にも井戸があるのとないのとでは、清潔度が違ってくるだろう。

　そう考えると、スコップを握る手にも力が入るというものである。

　この日は皆、一心不乱に掘り進めた。早ければ今日にも水が出るので、その意味でも皆に気合いが入っているようである。

　気がつけば深さは俺やヘレンの身長を超えて、アンネの頭も見えなくなってきていそうだ。

「心なしかひんやりしてきた気はするんだよなぁ」

「エイゾウも？」

　そう言ったのはヘレンだ。彼女の担当分はちょっとだけ早く進んでいる。“迅雷”の面目躍如……ということでもないのだろうが。

　俺はヘレンの言葉に頷いた。

「さっきまでと汗の出方が違う気もする」

「だなぁ」

　一般に水が出る帯水層まで来るとヒヤッとしているという。地面の下の水は外気の影響を受けにくいからで、地下水がいつも冷たいのはそれが理由らしい。

　それとは別に、深くまで来たから日の光が遮られているので、その分涼しく感じているのが理由な気がする。斜面のおかげか風も感じるし。

　ただ、２メートルかそこらで水が出てくることはあんまりなさそうだ。そこまで浅いところで出てくるとなると、家の基礎を打ったときにもっと湿り気のある土が出てきてもおかしくなかっただろう。さすがに表土とは色が違ったが。

　それがなかったということは、少なくとももう少し深いところまでいかないとダメなはずだ。

　俺たちは日が暮れるまで、黙々と穴を掘り続け、穴の深さは３メートルを超すほどになった。水はまだ出て来る気配がない。

　せいぜい５メートルくらいまでで出てくれると助かるんだが、そう思いながら、俺はその日の作業を終えた。

　更に翌日。もう１メートルほど掘り進んだあたりで、スコップを入れた感触が変わった。なんだかずっしりとくるような……。

　持ち上げてみると、スコップに乗っていたのは粘土だ。ということはもう少し掘れば水が出る可能性がある。

　俺がそれを告げると、ヘレンとアンネはスコップの動きを速めた。目的が達成できそうになれば頑張ってしまうのは仕方ない。

　ドサッドサッと重い土の音が続き、やがて砂のようなものが一緒に出てきた。

「堀り広げて様子を見よう」

　砂のようなところの露出を大きくとると、俺たちはいったん穴から出て様子を見守る。やっぱり穴の底の方が明らかに涼しかったような気がするんだよな……。

　そう言えば汗をほとんどかいていないようにも思うし。

　ちょうど昼飯でもあったので、穴のそばで家族みんなで様子を見守りながら（クルルやルーシーが落ちないようにとの見張りの意味もある）昼飯を食べていると、

「あっ！」

　サーミャが小さく叫んだ。どれどれと見てみると、まだ濁ってはいるが少し水が溜まりはじめている。それを見て、家族みんなが快哉を叫んだ。

　この後やらなければならないことはたくさんあるが、俺は一旦の目的が達成できたことに安堵の溜息を漏らさずにはいられなかった。

## 井戸計画

2021年1月6日

　水がじんわりと湧いてくるのをみんなで眺めながら昼飯を終えた。わずかだが、穴の底に水が溜まっている。バケツくらいの大きさの桶を用意したとして、その半分くらいだろうか。まだ水が濁っているのでやろうとは思わないが、今日ルーシーが飲むぶんくらいがあるかないか程度である。夏だから少し足りないかも知れないな。

「もうちょい掘ってから、周りを囲うか」

「そうですね」

　俺が言うと、リディが頷く。こんこんと湧いている必要は無いが、ある程度は水を

　もう少し掘り進めて、少なくともその日の生活で使う水が常に確保できるくらいにはしておきたいものだ。もちろん、風呂計画を考えればもっとあるに越したことはないのだが。

「リケたちは石を集めといてくれるか？ 一番下をそれで囲うようにする」

「わかりました」

「あとは周囲を埋め戻しながらの作業だな」

　ひとまずは井戸というよりは「濁っていない水の溜まった穴」を作る。落ち葉などのゴミがなるべく入らないようにするのと、安全のために普段は蓋をしておくとして、

　そうは言っても力が必要ならその分疲れるわけだし、それで普段の作業に影響が出過ぎるのもよろしくない。それに、リディのように力がない人でも汲み上げることができるようにしておかないと、あまりない事態だとは思うがリディが１人のときには井戸が使えないことになってしまう。なるべく早くに解消したほうがいいだろうな……。

　ともあれ、水量を増やすのが先決だ。俺とヘレン、アンネはスコップを持って穴へ下りていく。

「俺は“遺跡”に入ったことはないけど、こんな感じなのかね」

「アタイはあるぞ。短すぎるけど、感覚的には似てなくもないな」

　ヘレンが胸を張った。傭兵（まだ現役ではある）の彼女は依頼を受ければ“探索者”のようなことも請け負うのだろう。

「へぇ。ちょっと興味あるな」

「丁度いい遺跡があればいいんだけど、そういうのはさっさと探索者達が入っちまうからなぁ」

「そりゃそうか」

　この“黒の森”の中にさほど危険でない遺跡があればいいのだろうが、そんな状況はそうはないだろうな。獣人たちや妖精たちを除けば、今この森に住んでいるのは俺くらいなもので、つまりは普通の人が生活するのには適していない。となれば、遺跡を作るような人々がここに居住か駐留かはともかく、生活していたとは考えにくいわけで、つまりは遺跡が存在する可能性は限りなく低いわけである。逆に森の外となると、ヘレンが言うようにそれを仕事にしている探索者達が見逃しはすまい。

　まぁ、俺はちょっと変なところに住んでる鍛冶屋だからな。せっかくの異世界だし興味はあるが、機会があればくらいでいいや。

「そういえば、ちょっと前に王国でも新しい遺跡が見つかったみたいだったけど」

　俺たちの話を聞いて、アンネが言った。そう言えば都で探索者がウロウロしてたな。俺はここではたと気がついた。

「もしかして、ここ最近アダマンタイトだのメギスチウムだのが出回ってるのってそれもあるのか？」

「ああ。可能性はあるわね……。だとしたら“当たり”の遺跡が出てきたってことになるけど。全部王国行きよね」

「まぁ、王国の遺跡だろうからな」

「そんな遺跡がまだあるのねぇ」

　遺跡にも色々あって、大したものがなかったりする「外れ」もあれば、金銀財宝――元は軍資金やなんやらしい――がザクザクある「当たり」もあるらしい。当たりの遺跡は大抵大きく、魔力が澱みやすいので魔物が湧いていることもザラだとか。

　当たりの遺跡が出れば、その危険を冒そうと思うくらいの財宝で国が潤うこともあるわけだ。「だから探索者を規制しにくいのよね」とはアンネの言である。帝国も多かれ少なかれ恩恵に

　ただ勿論、それなりに時の経っている世界である。大きなものは見つかりやすい。そんなわけで近頃は当たりの大物遺跡はめったに見つからないと聞く。今度カミロにどこで見つかったのか聞いてみるか。彼なら知ってるだろう。

「よーし、じゃあ作業を再開するか」

『はーい』

　俺の声に２人の声が返事をする。俺は水が染み出す地面にスコップを突き刺した。

## 計画は進むもの

2021年1月8日

　俺とヘレン、アンネで砂っぽい地層を掘り進めると、水の染み出すスピードが上がったようだ。加圧はされていないのでこんこんと湧いてくるわけではないが、それなりの水量が得られそうだ。

「深さはこれくらいあれば良さそうだな。一旦これで枠を作って様子を見るか」

「そうだな」

　俺が言うとヘレンが頷いた。恐らくは期待しているくらい溜まってくれると思うが、もしそうでなかった場合に埋め戻してしまっているとまた作業が必要になるので、水槽のようにしておいて必要な量が溜まるかの確認を先にしておくのだ。

　土留に用意してあった板を組み合わせていく。石積みを作るのはまた後だ。やがて雨季に作った貯水槽のようなものが穴の底に出来上がる。

　あれはそれなりの長期間使うことを考えて、板同士の噛み合わせなどもきちんとしたが、これは試しにやっているだけなので、とりあえず板を積み上げて杭で固定しておくという簡単な作りだ。まぁほぼ土留だな……。

　これでどこまで溜まるか、大体のところが見られればいい。多少漏れようが崩壊しようが良いってのは気が楽ではあるが、どうも「これでいいのだろうか」てのが残ってしまうのがよろしくないな。

「あとは……埋め戻すまでは柵も作っておくか」

　俺は穴の底から上を見上げて言った。こうして見るとおおよそ５メートルと言うのはなかなかの高さだ。前の世界で言えばビルの２階くらいの高さに相当するから当たり前ではあるのだが。この高さをなんかの拍子に落っこちたら大変だ。大怪我は勿論、ひょっとしたら命を落とす可能性だってある。

　家族全員に声をかけて、柵を作り始めた。これまた土留用に準備してあった杭に板を釘で打ちつける。腰くらいと脛あたりの高さに１枚ずつ板がついているので、柵にぶつかった勢いそのままに落ちることはないだろうし、ルーシーも低い方の板で守られるはずだ。

　家族総出で作った柵はあっという間に出来上がった。急造にしてはしっかりしていて、俺が軽くぶつかったくらいではビクともしなかった。

「さすがに皆慣れてきたな」

「そりゃ、あれだけやってればそうもなるわよ」

　笑いながらアンネが答える。彼女も立場的には未だ帝国の第七皇女のはずなのだが、うちで“人質”として暮らしている間に、こういった作業にも慣れたようだ。いずれ帝国に戻ることになっているが、戻ってからやたら現場作業に手慣れている皇女、とか大丈夫なのだろうか。

　いや、あの御仁だと下々の作業を一定の水準で出来るのは、それはそれで良いとか言いそうだな。俺は脳裏にとある人物を思い浮かべてこっそりと苦笑した。

　苦笑をすぐにかき消した俺は、家族の皆に今日の作業終了を伝える。皆は口々に井戸ができた後の話を楽しそうにしながら、家に戻った。

　翌日、朝の日課を終えた俺達は、それぞれ道具を持って井戸（未完成）のところに集まる。

「さてさて、どうなってますかね」

　上から覗き込むと、かんたん貯水槽には水が溜まっていた。昨日は水全体が茶色く濁っていたが、今溜まっているのは澄んだ水のようだ。俺たちはゾロゾロと穴の底へと下りていく。

　ただの確認だし、この後石を持ってきて積まないといけないので、全員で降りる必要は全く無いのだが、どうなっているのか気になるのは全員同じ、ということだ。

　井戸は自噴してはいないので、大幅に溢れるようなことはなかったようだが、近寄ってみると結構な量が溜まっている。そっと手を入れてみると、かなり冷たい。

　試しに持ってきた桶に水を汲んでみた。やはり桶の底がちゃんと見えている。俺はその水をリディに見せてみた。リディはなにやらゴソゴソとしたあと、水をひとすくい飲んでみている。

　俺たちはその様子を固唾を飲んで見守った。ここまで来て「この水はダメだ」とか言われたらどうしよう、と言う不安が今更ながらに脳裏をよぎった。

　コクリ、と水を飲んだリディは、俺達の方を振り返った。ゴクリ、と誰かがツバを飲み込む音が聞こえたような気がする。

　そして、リディは静かに微笑んだ。

「水の量、質ともに大丈夫だと思います。このまま進めましょう」

　水が出たときのような快哉はなかったが、俺達は互いに手を打ち合わせる。次に大喜びするのは井戸がちゃんとできたときだ。

「よし、それじゃあ石を積もう。埋め戻しも頑張らなきゃな」

　俺がそう言うとサーミャは言った。

「エイゾウがめちゃくちゃやる気出してるな」

　その言葉に俺は力こぶを作ってやる気をアピールした。それを見て家族皆が笑う。

“黒の森”という物騒な土地にいながら和やかな俺達は、それぞれの作業にかかっていった。

## 井戸を使い始める

2021年1月11日

　石を積む前に水槽に溜まっている水を桶で汲み出した。もったいないので、汲み出した水は水瓶に入れておく。水瓶はクルルが喜び勇んで運んでくれた。

　水が十分に減ったところで水槽を分解する。勝手に壊れない程度にしか作ってなかったので、あっという間にバラバラになった。これはこれでまた再利用する。

　分解した水槽のところに石を積んでいく。家族全員でワイワイと「ここにこの石はどうだ」「いや、こっちの方が形が合う」などと言いながら、石を積み重ねていくと、小さな石垣で囲われたようになった。

　一番下を石積みにするのは多少は溜まった水が行き来出るようにしておいた方が良いかと思ったからだ。

　水の量と質自体には問題ないとはいえ、ずっと溜まったままなのが良いこととも思えないので、ある程度溜まってはいるが水は変わっている謂わば“かけ流し”のような状態にしておこうと思ったわけである。

　最悪でも木製の水槽を沈めて水の行き来を減らすことは出来そうだし。

　石垣の外側は掘り出した砂と土で埋めていく。石垣の高さまで埋め戻したら、次からは板塀を作って高くしていくのだ。上の方までは水が溜まらない想定なので、板で土が崩れるのを防ぐようにしておけば平気だろう。

　この日は結局石積み部分の埋め戻しまでで作業を終えた。これだけ進めば作業の進み具合としては十分だ。

　それに井戸というか水汲み場としてはもう使える状態と言えなくもない。毎回ここまで降りてくる必要があって多少面倒なだけで。前の世界でもこれに近いような場所をテレビ番組で見たような記憶がある。

　ただ、逆に言えば深さをつけていくと水面まで届かなくなるので、そうなったら早いとこ各種設備を備えていくのがいいだろうな。

　翌朝、水を汲みに行く前に様子を見てみると、狙ったとおり石積みにした部分に水が溜まっていた。結構な量なのでそちらの水を汲み出せば湖まで行く必要もなさそうだが、湖へいくのはクルルとルーシーの散歩も兼ねているし、体を洗ってやるのはここでは出来ない。

　俺にしても普段の仕事で体は動かしているが、歩くということもしておいた方が良さそうに思えるし。

　何よりも彼女たちがまだかまだかと心待ちにしている。クルルは縄で繋いだ水瓶を自分で首にかけて、ルーシーはその隣で小さな瓶を口にくわえて尻尾をブンブンと振り回している。

　この状況で「今日からは湖へは行かないよ」と言って彼女たちをガッカリさせられるだろうか。少なくとも俺には無理だ。

　そんなわけで、俺の中では今後ずっと水汲みは続けることにした。少なくともあそこまで歩けなくならないうちは続けようと思う。いや、もしかしたらクルルの牽く車に乗って行ってるかも知れないな。

　そんな少し幸せな将来の夢を考えながら、俺と娘達は湖へと向かっていった。

　今日の作業は木の板を板塀に組んでいく組と埋め戻しを進めていく組に分かれる。板塀は杭を打ってそこに板をピッチリと積み上げていく。土留めにしたよりも板に精度が必要だが、俺が板を切り出せば生産のチートが働いてくれて量産できた。

　板塀を作っていくのはヘレンとアンネに任せたが、力の強さというよりは身長の方である。梯子や脚立なしでそれなりの高さまで作業できるならそれに越したことはない。

　埋め戻しはそれ以外のみんな共同だ。ヘレンとアンネにとって「自分が掘った穴を自分で埋め戻す」ことにならなかったのはたまたまだが、結果としては良かったかも知れない。

　こうして作業を続けて、間に一度納品を挟みつつ（カミロ曰くは新婚さん達も含めて“世はなべてことも無し”だそうだ。まあ、そうそう問題が起きてても困る）、数日の後に埋め戻しが終わった。

　そのあと、井戸の穴を囲うように柵というか台というか、よく桶が置いてあったりするあの部分を作った。間違って落ちたりしないように今は木の板で作った蓋を被せてある。脇には縄でくくった桶。

　滑車や屋根はなくても、見た目にはもう立派な井戸である。完成したそれを見て、皆がパチパチと拍手をし、クルルとルーシーも拍手の代わりに鳴いている。

「なんとか間に合ったかな……」

　俺は額からしたたり落ちる汗を拭きながら言った。周りを見回せばいつもよりも木々の葉も青々しさを増しているようにも感じる。もうすっかり夏だな。

　多少間に合ってない感じはあるが、今日明日にでも気温が下がるわけでもないし、間に合ったと評しても良かろう。

「最初はエイゾウがやりなよ」

「それじゃ、僭越ながら」

　サーミャに言われたので、俺は蓋を除けて、桶を井戸に落とした。バシャンと音が響く。縄を揺らして桶に水を入れると、縄を引っ張って桶を引き上げていく。

　ずっしりとした重さを感じながら引き上げていくと、俺の前に桶が姿を現した。中には澄んだ水がなみなみと湛えられている。

「まだまだ作るものはあるけど、とりあえず完成だ」

　俺は足下に寄ってきたルーシーに桶の水をかけてやった。気持ちよさそうにしていたルーシーがブルルと体を振るうと、水があたりに飛び散り、悲鳴のような喜びのような、そんな声が森に響くのだった。

## 井戸屋形をつくる

2021年1月13日

　とりあえず、これで水不足を心配することはそうそう無くなった。かと言って無駄遣いしていいものでもないのは変わりないが、冷房機器が存在しない場所で冷たい水を手軽に入手できるのはありがたい。

　サーミャがやってみたいと言うので、桶を手渡す。よいしょよいしょと水を運び上げる彼女を見ながら、俺は言った。

「まずないだろうとは思ってたけど、湯が湧いてくるんでなくて良かったよ」

「そんなことあるのか？」

　縄を引っ張る手を止めずにサーミャが聞いてきた。という事は“黒の森”に温泉はないってことか。俺は頷く。

「王国にあるかは知らないが、北方だと結構熱いのが湧いてるところがあるぞ。そこで湯に浸かる」

「へぇ……」

　サーミャはあまり水が得意ではないらしい。それが虎の獣人だからなのか、それとも個人的ななにかなのかは知らない。

　前の世界で虎が泉に浸かっている映像を見たことがあるから、こっちの世界でも虎が水に浸かるのは普通なのではと思っているのだが、実際のところは見てみるまではわからない。

　少なくとも毎日身体を綺麗にしているのは確かだ……ディアナが前に言っていたので間違いなかろう。

「帝国にもあるわね。連れて行かれたことがあるわ。怪我や病気にいいとかで、悪いところがあったらお湯につけたり、お湯をかけたりするの」

　傍で興味深そうに水を汲み上げるところを見ていたアンネが言った。こっちの世界でも湯治場という概念はあるようだ。違うのは全身をドボンと浸けるようなことはしないあたりだろうか。

「俺は行ったら浸かりたくなりそうだな」

「帝室専用のところもあるから、そこでなら平気なんじゃない？」

　アンネがそう言った。帝室専用のところ、ってことは「そういうこと」を指しているのだろうなぁ。まぁ、彼女は笑っているので冗談か。……冗談だよな？　俺は苦笑しながら言う。

「家族みんなで行くってなったらお願いするよ」

　アンネは「わかった」とだけ言って再び微笑んだ。

　翌日、「早いに越したことはあるまい」となったので、納品物を作る前に井戸の設備を整える事になった。どうやら昨日の夕方、剣の稽古をした後に浴びた水が気持ちよかったのが決め手らしい。

　滑車と釣瓶にする桶は俺が作り、井戸屋形は家族の皆に任せることにした。俺が道具を作るときは鍛冶仕事ほどでなくてもチートがあるからな。

　滑車は全体を木で作ることにした。鋼で作らないのは重さだ。基本井戸の上に梁から吊るす形で設置するので、耐久性よりも軽さを優先させるわけである。

　前の世界でも補修はしつつだとは思うが木製滑車がそれなりに残っていることを考えれば、そうそう簡単に壊れるものでもなさそうだ。それに、木製なら修理も難しいものではないだろう。材料は周囲にいくらでもあるのだし。

　外に積んである木材からちょうど良さそうなものをピックアップする。作業は鍛冶場の外で行うことにした。鍛冶場の中、暑いんだよね。

　滑車は乱暴に言えば、ぶ厚めの板を井桁に組んで真ん中に索輪になる円盤（と円盤を回すための軸）を入れておくだけである。これならチートとナイフ、ノミを駆使すればそんなに時間をかけずに出来るだろう。

　ワイワイと柱を立てたり、屋根にする板を切り出している皆を眺めながら、俺は作業を始めるのだった。

## お呼び出し

2021年1月15日

　俺は木陰に移動して作業を始めた。暑いには暑いが、風が通る分屋内よりも若干マシである。

　皆の作業場所も結構テラスと家の陰にはなってるので不公平感もないし。

　索輪を入れる枠になる部分はすぐに出来た。チートが効いてるし、そんなに複雑な部分でもない。がっちり組み合って簡単に分解してしまったりしないようになっていれば良いのだ。

　井戸屋形へ取り外しができるように、上になる部分に穴を開けておいた。

「クルルル」

　クルルの声が聞こえてそちらの方を見ると、柱を立てているところだった。俺が言わずとも役割分担をしていて、柱を立てていないメンツは穴を掘ったり、梁を切り出したりしている。

　あれだけ増築をしていたら、そりゃ手慣れてくるか。今回は床も壁もいらないわけだし、みんな力も器用さも持っているから、あっさり片がつきそうだ。なぜ手慣れるほど増築をしたのかについては考えないでおく。

　索輪はある程度大きめの円盤を作ってから枠を貫通する形で軸を通し、回しながらチートも併用して削っていくことで綺麗な円盤になるようにした。

　円盤が出来たら、外周にＵ字型の溝も彫っておく。釣瓶の縄はここを伝うわけだ。クルクル回して動きを確認していると、ルーシーが近寄ってきて、滑車をフンフンと嗅ぎ始めた。

「気になるのか？」

「わん」

　俺が言うと、彼女は小さめに一声吠える。最近ルーシーは色んなものに興味が出てきたようで、皆が触っているものに近寄っては匂いを嗅いだり、前足で触れてみたりしている。

　お利口さんなので「危ないから近寄ってはいけない」と言われればあっさりと引き下がるし、目を離していても良いと言われるまでは口に入れるようなことはしない。

　特に鍛冶場は危ないもの（ルーシーにとっては“近寄ると怒られてしまうもの”だ）が多すぎる、ということを学んだのかあまり近寄らなくなった。単に暑いからかも知れないが。

　コレはそこまで危ないものでもないので、ルーシーの好きなようにさせる。そっと鼻先で滑車を回すと、回るのが面白かったのか前足で回し始めた。ルーシーは“ほりほり”をするようにひとしきり回すと、満足したのか井戸屋形の方へ走っていった。

　ああいうところはまだまだ子供だなと可愛い娘を見送り、俺は桶作りに取りかかった。

　桶の方は滑車以上にすぐに終わった。薪をもスパンと切るナイフの切れ味があれば、チートに合わせての加工もかなり楽にできるからな。桶は２つ作っておいた。今釣瓶にしている桶は元あったものの流用なので、なにかの時に桶が必要になれば１つ桶が足りないことになる。その時になってから作っても間に合うならいいが、そうでない場合にジタバタするのも何なので、釣瓶には専用の桶を作っておくことにしたのだ。

　その間にも井戸屋形は柱が立ち、梁と垂木がかけられ、屋根が葺かれていく。家や小屋、倉庫と違って防水を強く意識する必要はないので、屋根は板が貼られているだけといった風情ではあるが使う上で問題はないだろう。もし問題が見つかればその時に補修すればいい。

　井戸の真上にかかるようかけられた梁に縦に棒を通し、滑車を吊るす。今まで使っていた釣瓶桶から縄を外して滑車に通した後、両端をそれぞれ桶にくくりつけておいた。これで万が一片方が縄を全部引っ張っていってしまっても、滑車にもう一方が引っかかって全部が落ちてしまったりはしない。

　釣瓶は動滑車でなく定滑車なので直接の負担軽減にはならないが、純粋に腕の力だけで引き上げるのとは違い、体重をかけて引くことが出来るのでその分楽なはずだ。

「これで完成かな」

　滑車の釣瓶に井戸屋形。日が暮れつつある風景の中にあるそれは、立派な井戸だ。テラスの脇に井戸があり、その向こうには家と鍛冶場。ますます“黒の森”の中にあるのが不思議なくらい、ちゃんとした家になってきたような気がする。

「水が足りなくなることって今までなかったけど、これからはもしあっても大丈夫ね」

「そうだな」

　備えあればなんとやら。いざとなってもなんとか出来るというのは気を楽にする効果がある、と俺は思っている。“いつも”をできるだけストレスなく過ごしていくためにも、出来る準備は進めていこう。

　井戸が出来たことで水資源の余裕ができた。前にも皆であれやこれやと話したことが再燃するのは、まぁ致し方ないことだろう。

　そうして文字通りの“井戸端会議”をしていると、鈴の鳴るような声が響いた。

「こんにちは、と言うには少し遅かったですかね」

　声の主はまるで人形のような姿をしている。この森の妖精族の長、ジゼルさんだ。

「こんにちは。もうすぐ日が暮れますけど、まだこんにちはで良いんじゃないですかね」

　俺が言うと、ジゼルさんはニッコリと微笑んだ。そう言えば彼女たちに井戸を作っていいかは聞かなかったな。特に井戸を気にしている様子はないので大丈夫そうではあるが。

「今日はなにか御用で？ もしかして井戸はまずかったですか？」

　それでも、実は井戸がダメだったら埋めなきゃいけないなぁと思いつつ、俺は聞いた。

「いえ、井戸は問題ないですよ。用件はそれではなく、お願いにあがりました」

「お願い？」

「ええ」

　ジゼルさんは大きく頷いたあと、少し逡巡する様子を見せた。頼みにくいことなのだろうか。妖精族の長直々だというのに頼みにくいとなると、余程のことではなかろうか。できるだけ聞いてあげたいが、無理な場合は無理だと断るしかない。

「実は、あなた方にぜひ会いたいと仰っている方がおられまして」

「はあ。人に会うだけなら大丈夫だと思いますが……」

「いえ、それが会うのは人ではないのです」

「人ではない？」

　俺は思わず片方の眉が上がるのを自覚した。この物言いだと人間族ではないという話ではなさそうだ。獣人ですらないのだろうか。

　ジゼルさんは自分の気を落ち着かせるように、一度深く呼吸をしてから言った。

「はい。あなた方にはこの森の主に会っていただきたいのです」

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

書籍版4巻の発売が決定いたしました。発売日等はまだ未定ですが、分かり次第お知らせいたしますので、楽しみにお待ち下さい。

## 森の主

2021年1月18日

「森の主……ですか」

「はい」

　ジゼルさんは頷いた。この森の管理者と言っても過言ではない妖精族の長を使いに寄越すのだから、それなりに高位の存在であろうことはなんとなく予想していたが、この“黒の森”を統べる存在直々のお呼び出しとまでは思ってなかったな。

「詳しい内容は私も知りませんが、あまり心配することはないと思いますよ。不都合があればとっくに何らかの行動を起こされてると思いますし」

「それはそうなんですが……」

　彼女の言う通り、この森を統べるような存在であれば、うちが「現れた」ことも知っているだろうし、その後発展させたことも感知しているはずだ。

　その過程で問題があるのならば、どこかで掣肘を加えるなりしていたはずで、それをしていないということは概ね許されていると思っても楽観的と非難されるほどではあるまい。

　とは言え、である。「最近知ったけどお前ら出ていけな」とか、「井戸以上のものを作るなら容赦しないぞ」とか言った話である可能性もあるわけで、後者ならともかく前者だととても困ったことになる。

　まぁ、ひとまずは話を聞いてからだな。俺はジゼルさんに尋ねた。

「とりあえず、お話は承知しました。今からじゃないですよね？」

　どこに居るのかは知らないが、ここから近くということもなかろう。そんなに近いところに住んでいるのなら、森へ出かけたときにでも見つけているだろうし。

「いえ、大丈夫なら今からでもお願いしたいところなのです」

「えっ？ ここからそんなに近いんですか？」

　まさかの希望に俺は面食らった。もう日も落ちかけている、多少近い程度では帰る頃にはこの世界基準で深夜になっているだろう。

「ああ、そこはご心配なく。すぐですので」

「ええと、それではお願いします。みんなもいいよな？」

　家族皆は頷いた。念のため、とリケとリディが家のランタンを取りに行く。もしかして転送とかしてもらえるのだろうか。この世界に来て細々した魔法は使っているが、その手の大規模なものは見たことがない。リディがホブゴブリンに使った攻撃魔法が一番派手だったように思う。少しワクワクしてしまうのは仕方のないことだろう。

　リケとリディがランタンを持って戻ってくると、ジゼルさんは変わらず鈴の鳴るような声で、しかしさっきまでよりも大きく、そしてハッキリと言った。

「よろしいそうですよ、どうぞいらしてください」

“いらしてください”？ あれ、という事は……。俺はそこでジゼルさんとの食い違いに気がついた。そう言えば、ジゼルさんは「森の主が俺たちに会いたいと言っている」と言っただけで、「呼んでいる」とは言ってない。つまり――。

　そこまで思ったところで、突如目の前に大きな緑色の光の塊が現れ、その中からゆったりとした服を身にまとった女性が現れた。ゆるくウェーブの掛かった緑の髪に、真っ白な肌。目は閉じられている。

　彼女は光の塊を背にしているので、後光が差していた。前の世界なら西洋の女神を想像しろと言われたら、１０人のうち９人が思い浮かべるようなスタイルである。

　彼女が閉じていた目をそっと開き、その緑の虹彩が俺を捉え、そして彼女は口を開いた。

「……我が願いに答えてくれて感謝する、人の子よ」

　威厳、とでも言うのだろうか。威圧ではない、自ら進んで従いたくなるような、そんな雰囲気が漂っている。

　と、俺は思っていたのだが、ジゼルさんの反応は真反対だった。

「プッ」

　と、笑いをこらえきれなかったのか、噴き出したのだ。噴き出した後は再び黙り込んだが、肩を揺らしてフルフルと震えている。

　女神様（？）が怪訝な顔をしてジゼルさんに言った。

「どうした、妖精の長よ」

　ジゼルさんは、いよいよこらえきれずに、笑いながら言った。

「この方々にはいつもの調子で平気ですよ。気にしたり、言いふらしたりするような方々ではないです」

「あらそう？ じゃ、お言葉に甘えてそうするわね。あの話しかたって肩が凝るのよねー」

　女神様（？）はそう言って肩をぐるぐる回す。俺たちは目を白黒させてその様子を見ているしかない。

　俺たちの様子に気がついた女神様（？）はペコリと頭を下げてから言った。

「今回はどうもありがとう、私はリュイサ。この“黒の森”の主で、世間で言うところの

　さっきまでの威厳はどこへやら、随分と気安い様子のリュイサさんに、俺は「あ、ども」と返すのが精一杯なのだった。

## 世界最上位レベルの依頼人

2021年1月20日

　この世界には“黒の森”と呼ばれる深い森がある。樹齢を重ねた樹々は樹皮が黒いものが多く、それらが太く高く聳え昼なお暗い。熊や猪、狼をはじめとする危険な生物が徘徊しており、ときには魔物の出現もあるため、「並の人では迂闊に立ち入れば二度と出られぬ」ことから、そう呼ばれていた。

　そして、その森の長たる者が――このねーちゃんである。なんかこう“危険な森の支配者”と言うイメージからは、前の世界で言う日本とブラジルくらいの隔たりがある。まぁ、本人（精霊らしいが）もそこは分かっていて、最初に威厳のある話し方をしたのだろうけど。

　目を白黒させている俺達に気がついたリュイサさんが言った。

「ごめんなさいね、びっくりした？」

「え？　ええ、まぁ……」

　下手に否定するのもなんなので俺は素直に頷く。にしても、女性なんだなぁ。俺がそう思っていると、リュイサさんは笑いながら言う。

「うふふ、こう見えて“大地の竜”でもあるからね。私はその極僅かな一部だけど。私のように表出した“大地の竜”のうち森に住まうものが

　タイミング的には話の続きとも言えるが、まさか俺の思考が読めるのだろうか。サーミャも強い心の動きなら匂いで分かるらしいので、“大地の竜”ともなればそれが出来てもおかしいことはないが。

“大地の竜”とは、この世界において大地を構成していると言われるドラゴンだ。はるか大昔に眠りについた“大地の竜”の上でこの世界は成り立っている……と信じられている。この世界では常識レベルの話らしく、インストールされた知識の中もあった。実在するかはともかく、この世界において神々はその後やってきた移住者かつ管理人に近い。

　つまり、リュイサさんはこの世界の大地を構成する一部であるわけだ。この世界でも大地の神は女神だが、大地はその恵みなどから性別としては女性と見られることが前の世界でもあった。

　比喩表現でなく実際に女性であるというのは流石に前の世界で聞いたことはないが、この世界ではそうなのだろう。

　彼女は精霊とは呼ばれているが、極僅かとはいえ神に等しいかそれ以上の存在である……のだよな？　どうにも雰囲気からはそういった感じがまったくないから、どう反応して良いのか俺も家族も困っている。

　いや、困っていないのがいた。クルルとルーシーである。うちの娘達は気楽に近づいて、「近くで見ると２人ともやっぱりかわいいわね」とリュイサさんに撫でられ、ご機嫌になった。少なくとも何らかの危害を加えようということではないのかな。

　だが、まさかうちの娘達を撫でるのが今日の目的ではあるまい。俺は困惑したままではあるが、リュイサさんに声をかけた。

「あの……」

「あら、ごめんなさい。それじゃ本題に入るわね」

　リュイサさんは娘たちを撫でるのを止め、俺達に向き直った。

「単純にいうと、頼み事をしたいのよ」

「頼み事……ですか」

「ええ」

　ニッコリと微笑むリュイサさん。若干威厳とは違う怖さを感じる。

「この森の魔力の濃さが他に比べて高いのは知ってるわね？」

「はい。知ったのはそう昔でもないですが」

　少なくとも俺はリディから聞いてはじめて知った。サーミャとリケ、そしてディアナは魔力についてよく知らないので、この森の魔力濃度がどうなっているのかも知らずにいたのだ。

「それは私が“大地の竜”の一部なのが原因なのだけど、そこは一旦置いておくわ」

　魔力というものが何なのかは分からない。少なくともエネルギー保存則がきくようなものでないことは確かだ。ただそれは“大地の竜”のなにかも関係しているらしい。今はそれ以上の情報は必要あるまい。俺は頷いて先を促した。

「魔力が濃いと魔力が澱みやすくなって……ひいては魔物が発生しやすくなるのも、少なくともエイゾウくんとリディちゃんは知ってるわよね」

「ええ」

　俺は再び頷いた。俺とリディが知り合い、そしてうちに身を寄せるきっかけはまさにそれだ。くん付けについてはおそらく彼女のほうが遥かに年上だろうから気にしないでおく。

　もちろん、女性の年齢を聞くような無作法な真似はしない。というか、この場合聞いたらヤバいとしか思えないし。命の危険がないとも言い切れない。

「この森ではジゼルちゃんたちのおかげで、その数はかなり抑えられていたのだけど、ちょっと困ったことが起きちゃってね」

「困ったこと？」

　今度はリュイサさんが頷いた。

「そう。お願いごとから先に言うと、あなた達にはとある魔物を退治して欲しいのよ」

　その言葉に、リディが息を飲んだのが俺の耳にハッキリ聞こえたのだった。

## 魔物

2021年1月22日

　魔物退治と言われて、俺はホブゴブリンとの対決を思い出した。大黒熊と戦ったときもかなり危なかったが、周りに人がいたとは言うもののホブゴブリンの方が危なかった。辛うじて対応できただけで、下手すれば死んでいたかも知れないのは確かだ。リディが息を呑んでいたのも、あの時のことを思い出したのだろう。

「魔物ですか」

「ええ。とは言っても、ルーシーちゃんではありませんよ」

　ねー、と言ってリュイサさんはルーシーを見た。ルーシーもしっぽを振りながら、わんわんと返事をする。

　そりゃルーシーだと言われたら、相手が“大地の竜”だろうとなんだろうと抵抗するつもりだ。たとえ俺の薄氷でも傷をつけられない相手だったとしても。

　しかし、そんな相手なら森の主や管理人が対応すれば良いのでは。そう思った俺は聞いてみることにする。

「リュイサさんやジゼルさんが対応しないんですか？」

「私が対応しちゃうと、地形が変わっちゃうのよね。それもやむなしとなれば遠慮はしないけど。ジゼルちゃん達は戦いにはあまり向いてないのよ」

　ジゼルさんがすまなさそうに頭を下げた。いや、別にそれならそれで仕方ないと思う。向き不向きは何にでもある。

　リュイサさんの場合は多分持ってる力が大きすぎて、微調整がきかないのだろう。例えばデコピンのつもりで直径１０メートルものクレーターが出来てしまうとしたら、そうそう出張ることはしないだろう。それをしないと森の存続に係る場合は、本人も言っているように容赦しないのだろうけど。

「獣人族の人達に頼まなかったのは？」

「これはハッキリ言ってしまうけど、数を頼みにしない場合、この森の最強戦力があなた達だからよ」

　リュイサさんの視線が俺を捉える。基本的には戦闘できないリケを除外したとしても、“迅雷”の二つ名をもつ最強の傭兵ヘレン、その最強とある程度タメを張れる戦闘力の鍛冶屋こと俺、“剣技場の薔薇”と謳われた剣の使い手ディアナに、純粋に力で勝り大剣を振り回す巨人族アンネ。

　そこに優秀な斥候としての獣人族のサーミャと、弓と魔法の使い手であるエルフのリディがいる、となれば後いないのは回復する役目くらいなもので、ちょっとした軍の部隊くらいなら追い返せそうだ。

　とはいえ、数ですり潰されたらひとたまりもなかろうが、そうでない相手であれば、俺たちをあてるのは正しい判断と言っていいだろう。

「なるほど……とりあえずお話は伺います」

「ありがとう」

　リュイサさんは笑う。今のところは屈託のないと表現しても問題あるまい。本当に単なる適材としてスカウトしに来ただけ……と信じたいところだ。

「魔物には大きく分けて生き物に澱んだ魔力が宿ってなるものと、澱んだ魔力だけで発生するものの２種類あるというのは、これもエイゾウくんとリディちゃんは知ってるわよね」

「そうですね」

　俺が答えると、リュイサさんは満足そうに頷いた。前者は基本元になった生物の特性を受け継ぐが、後者は生命あるものに対しての恨みのようなものだけで動いている……と俺は聞いた。

　他のあまり知らなかったらしい面子……特にアンネは「そうなのねぇ」と言いながら興味深そうにしている。皇女として過ごす上で両者の違いは関係ないし、帝国では教えられなかったのかな。

「今回退治してほしいのは後者。居場所は洞窟の奥。強い魔物が発生してしまったのよ」

「今からでも行かなくて大丈夫なんですか？　強い魔物が発生してるということは、大量発生が起きてしまっているのでは？　そうなったら食い止めるのは厄介ですよ」

　これは遠征隊に従軍したときの印象だ。リディも強く頷いている。彼女たちが里を放棄しなくてはいけなかった理由がそれだからな。そしてここは“黒の森”である。討伐隊を編成したとて派遣するのが難しかろう。損耗率がとんでもないことになりかねない。まぁ、それで俺たちに頼みに来たんだろうけど。

「そうね。でも今回はなぜか魔物の大量発生はまだ起こってないのよ。感知した魔力の量の割に強いのが生まれているようなのは、大量発生の代わりなのかしらね。ともかく、のんびりしていて良いわけではないけれど、今日明日で対応しないと取り返しがつかなくなるということもなさそう」

「ふむ……」

　１週間のんびりと準備、ってのはダメでも、明日１日しっかりと準備してから向かうのは大丈夫そうだな。慌ただしく出ていって事故になるよりはその方がいいのは当たり前だ。

「それで、相手がどんなのかは分かってるんですか？」

　リュイサさんは一瞬間を開けた。俺たちでもヤバそうな相手なら、地形を変えてリュイサさんがやってくれるのがいいんだが。しかし、リュイサさんは俺たちに告げた。

「

## お許し

2021年1月25日

　こっちの世界でも厄介な存在であることは、「この森の最強戦力をあてる」と森の主であるリュイサさんが宣言する以上間違いない。

「なにか特徴ってあります？」

「そうねぇ……」

　リュイサさんはおとがいに手をあてる。“大地の竜”の一部で精霊に近いはずなのだが、仕草が妙に人間臭い。もしかすると俺たちに合わせてくれているのかも知れないが。

「身体が大きくて力が強い、太陽の光を浴びると弱体化する、あたりが特徴的かしらね」

「ほほう」

　前の世界の邪鬼は日の光で石化したりと、大ヒット漫画の鬼みたいな特徴があったと思うが、こちらの邪鬼は弱くなるだけらしい。

　鏡面仕上げにした盾を山ほど持っていって、太陽光を反射させて洞窟内を導いて邪鬼にヒットさせる手法は無駄ではないがコストに見合わない、ということになるな。

　仮に一部分でも石化させることが出来れば、大幅な能力減退が見込めたのだが、弱体化だけではなぁ。あるいは弱体化に賭けるのも手ではあるのか？

　いや、今ここで結論を出すべきことでもない。明日１日は貰えたものとして、対策はそこでじっくり考えよう。

　……なんとなく脳筋の結論が出そうなことからも、今は目を逸らしておく。

　今日はひとまずここまでだ。俺はリュイサさんに言った。

「では、明後日の朝にまたここへお願いします」

「ありがとう。それじゃ、また明後日ね」

　リュイサさんは現れた時と同様、光に包まれて消えた……と思ったらまた現れた。俺をちょいちょいと手招きしているので、近寄ると耳打ちをされた。

「エイゾウくん、あなたがなぜ、どこから来たのかは私、つまり、“大地の竜”は知ってるわ。それでもこれまでこの世界から排除されてこなかったのは、

　一瞬、俺はどう反応していいか分からなかった。今かなり大事なことを言われたような。

「あ、ありがとうございます」

　俺はとりあえず小さく会釈をする。こんなノリで聞いていい話だったのか疑問だが、とりあえず世界がうんたらなんかで弾き出される未来がなさそうでホッとした。

　リュイサさんは頷いて「じゃあね」と俺たち皆に手をふると、今度こそ光に包まれて消えていった。後には俺達とジゼルさんが残される。

「それでは、私達からもよろしくお願いします。こちらでなんとか出来ればよかったんですが」

　申し訳無さそうにジゼルさんは頭を下げた。

「いえいえ、適材適所、こういうことなら我々のほうが得手でしょう」

　本業はただの鍛冶屋だけどな。いかんせん副業（？）の攻撃力が高すぎる。

「ありがとうございます。それでは」

　ジゼルさんは再び頭を下げると、ふよふよと飛び去っていった。妖精さん的にはリュイサさんみたいに消えたり出たりってのは、はしたないんだっけか。

「よーし、それじゃあメシにするか！！」

　空元気ではあるが、俺が大声でそう言うと皆から賛同の声が返ってきて、ぞろぞろと家に入る。もうすっかり暗くなった森を背に、俺は家の扉を閉めた

　夕食の時に話題に上るのは、やはり邪鬼のことである。細かい戦術なんかの打ち合わせは明日に回すとして、ざっくばらんな話題として出てくるのは仕方のない話だろう。

「エイゾウとリディは魔物討伐したことがあるんだろ？」

「あるよ。お前を助けに行くちょっと前の話だ」

　ヘレンに聞かれて、俺は頷いた。なんだかもう随分昔のことのようにも思えるが、そんなには経っていない。

「その時はどうだったんだ？」

「あれは“大量発生”だったからなぁ。伯爵閣下の部隊が小物を抑えている間に、頭を俺たちが叩いたってとこだ。リディが魔法を使ったけど、起き上がってきたときには色々覚悟したなぁ」

「エイゾウでもか」

「おいおい、俺は鍛冶屋だぞ。まぁ、でもそうだな。かなりの激戦ではあったよ」

　あれはあれでかなりの接戦だったように思う。俺があまり怪我しなかったのは、「一撃でもまともにくらえば死ぬから」で、骨折になるような攻撃をくらえばその時点で第二の人生が幕を閉じていただろうから、必死に避けたというだけの話である。

「魔物自体には臭いがないのは皆には朗報かもな」

　澱んだ魔力から発生する魔物は生物ではない。声は出すが呼吸もしておらず、血液が体内を巡っているわけでもない。失血死や洞窟の入口で煙を焚いて燻り出す方法は取れない。

　だが、新陳代謝もないという事は臭いがないということだ。前の世界の作品によっては「くさい」という本人（？）が知ったら自決を考えるのではないかという特徴があったが、この世界ではそうではない。

　ただ全く臭いがしないかというとそうではない。魔物が倒した獲物から漂う臭い――大抵は腐臭になりつつあるもの――はある。今回どれくらいになっているかは分からないが、発生して間がないなら、まぁ耐えきれないほどではない……と思いたい。

　とりあえず、臭いに困ることはなさそうというのは思ったとおり、既に知っていたリディ以外の女性陣には慰めになったようで、少しだけテンションが上がった。

「どう動くのかとかは行ってみないことにはわからんな。これはリュイサさんも分からんだろうし」

　攻略W○kiやワ○ップみたいなものがあれば、それを見てから行きたいところだが当然ながらそんなものはない。ぶっつけ本番だ。騙されたら「あなたを詐欺罪と器物損壊罪で訴えます！」どころの話ではないので良し悪しだ。

「その辺の細かいところは明日また話そう。明るくなってから外でフォーメーションの確認とかもしなきゃだろうし」

「そうだな」

　俺が言って、ヘレンが頷き、夕食は粛々と片付けられていくのだった。

## 準備

2021年1月27日

　明けて翌朝。俺はいつものとおりに水瓶を用意した。井戸が出来ても水汲みは止めない。散歩代わりだし、井戸は汲んできた水が無くなったら使う運用にしておいて、いざというときに水がない事態を防ぐためでもある。

　井戸を覗き込んでみると結構な量の綺麗な水が溜まっていて、そうそう涸れることはなさそうだが、まぁ用心に越したことはあるまい。

　家の外に出ると、まず尻尾をブンブン振り回すルーシーに出迎えられる。彼女の首には小さめの水瓶を１つだけ。しかし、心なしか水瓶が小さく見える。

　ルーシーも大きくなってきたなぁ。顔つきから子犬らしさが薄れてきている。まぁ、そうは言っても俺から見て可愛いことには変わりない。ルーシーの頭を撫でると、彼女は更に尻尾を強く振った。

　クルルもなんとなく大きくなっているような気もする。まだ子供だったのだろうか。大きな水瓶２つを余裕で下げて、俺に頭を擦り付けてくる。

「よしよし、お前もいい子だ」

「クルルルルルルル」

　その頭を撫でてやり、俺と２人の娘は水を汲みに湖へと向かった。

　朝の日課を一通り終えてから、今日は全員装備を身につけてテラスに集合した。しかし、そこは森の中の一軒家、一番ゴツいのが軽量級のヘレンの装備で、ついで胸甲とすね当てなどを持っていたディアナである。その他の面子は装甲はなしなので、防御力的には心もとない。

　それでも“黒の森”の中でもトップレベルに武装されていることは間違いない。そうは言っても、だ。

「鎧作っときゃ良かったかなぁ」

　俺が言うと、ディアナが小さくため息をつく。

「大して着ないでしょ」

「そうなんだよなぁ」

　森の中で鎧が役に立つ機会は少ない。意味がないわけではないが、装甲よりも機動力のほうが優先されることは言うまでもないので、ヘレンでも狩りについていくときは鎧を着ては行かない。

　街へ行く道中であればまだもう少し意味が出てくると思うが、２週間に１回、ほんの数時間程度のために整備する必要があるかというと、ねぇ？

　そんなわけでこれまで特に家族向けの鎧は作ってこなかったのだが、

　そこは今言ってもはじまらないことなので、おいおい考えるとして、俺は目先の問題に話題を変える。

「洞窟内で邪鬼を倒す、ってことはそれなりに広いとこと思ったほうがいいよな」

「家族全員連れて行くの？」

　アンネの言葉に俺は腕を組む。

「うーん、クルルとルーシー、それにリケをここに置いてくのは俺も考えたんだけどな」

　リケの顔がこちらを向いた。

「誰かが大怪我を負ったときには即座に後送して処置してもらわにゃならん。そこに積極的に戦闘に参加できる人間を割り当てると戦力が下がっちまうから、悪いがクルルもリケも連れて行くことになる」

「となると……」

　俺は頷きながら言った。

「ここにルーシーだけほっといてもついてきそうだし、本当の万が一のときに繋がれたままじゃマズいから、つなぐわけにもいかん。連れていくしかないだろ」

　ルーシーが繋がれたまま放置されていたら、ジゼルさんたちがなんとかしてくれるような気はしないではないが、そんな保証はないしなぁ……。頼んでおくのも何か違う気がするし。

「エイゾウ工房の家族全員ってことか」

　サーミャが身を乗り出して言った。仲間はずれが出なかったからか、少し嬉しそうだ。うちの家族の中ではサーミャとリケが一番付き合いが長いからだろうけど。

「そうだな」

　俺は頷いた。「家族全員」。うちにいる以上、今までも鍛冶屋として収入を得たりして、間接的にその生命を預かっていたのは俺だ……と思う。

　今回はより直接的にそれを守ることになる。が、俺は個人の戦闘能力はともかく、前の世界ではただのプログラマーだったし、この世界では腕前はさておき鍛冶屋でしかないのだ。圧倒的に力が足りない。

　俺は皆に頭を下げながら言った。

「今更ですまんが、皆の力を貸してくれ。ちょっと手に余るかも知れん」

　一瞬の静寂。しかし、それはすぐに破られた。

「本当に今更だな。最初っからそのつもりだよ」

「大丈夫ですよ！　いやまぁ、戦うのは厳しいかもですが、それ以外はなんでも！」

「こう言うときくらいは任せなさいよ、ねぇ？」

「補助は私が出来ますし、安心していただいていいかと」

「アタイを誰だと思ってんだ。そもそもワクワクしてんだから、気にすんなよな」

「こういう経験、一度してみたいと思ってたのよね」

「クルルル」

「わんわん！」

　口々に言う俺の家族たち。俺は目から零れそうになるものをこらえながら、頭を上げる。

　さて、ウジウジとするのはここまでだ。やると決めたことを、しっかりこなそう。俺たちの“いつも”に戻るために。

## フォーメーション

2021年1月29日

「軍隊だと弓兵を前にして、射掛けたら下げる、んで槍兵で槍ぶすまを作って徐々に前進ってのが普通か」

「そうだな」

　俺が言うと、ヘレンが頷いてくれた。向こうはワンマンアーミーみたいなもんだし、こっちも少数精鋭の部隊として動くのもありかなと思ったわけである。

　おとがいに手を当てながらディアナが言う。

「問題は、それが通じる相手かどうかね」

「理想は弓か投槍であっさり倒れてくれることだけどな」

「それならアタシら獣人だけで大丈夫だから、こっちには頼まないだろ」

「それもそうだ」

　投射武器だけで倒せそうなら、獣人族総出でやる案でいったはずだからな。その場合、うちに対する依頼は矢じりと投槍を用意してくれってことになるだろう。

「じゃあ、どう動くかな……」

　その辺に転がしてあった木の端材（井戸を作った時のあまりかなにかだろう）を手に取って、ナイフで適当な大きさに切り分けてコマのような物を作り、テラスに並べた。

　大きな１つ――

　２つの方を指差して俺は言った。

「サーミャとリディで弓手をやってもらうのは良いとして、洞窟の中だからな……」

「斜めに射つのは難しいでしょうね」

「うん」

　リディの言葉に俺は頷く。曲射は無理だろうなぁ。直射してもらうしかないが、それも常に射線が確保できるとは限らないのだ。

　ヘレンが２つのコマから指を大きな１つに動かして言った。

「それでも、次に矢が飛んでくるかも、って意識させるのはいいと思う。まぁ、アタイ達が取り付いたら射ちにくくなるけど、２人共隙があったら狙ってほしい」

　誤射を考えれば、味方が接近戦をしている最中に投射武器で攻撃するのが褒められたことでないのは言うまでもない。にも関わらず、ヘレンがサーミャとリディに頼んだということは、それだけ実力を買っているということだろう。２人とも力強く頷いている。この２人なら滅多なことにはなるまい。

「後はもう俺たちでワッとかかるか？」

　俺はサーミャとリディのコマの後ろに、４つを置いた。さらにその後ろに３つ置く。３つはリケとクルルとルーシー、つまり今のところ非戦闘員として考えている３人だ。

　並んだコマを見てヘレンが言った。

「うーん、同士討ちにはならないと思うけど、リーチの差はどうかな。ディアナは槍は全然だっけ？」

　一番得意な武器を構えた状態でリーチが長いのは勿論アンネだ。巨人族の身長に長く大きな両手剣。短槍と同じくらいある。

　ヘレンは短剣なので武器としてはリーチが短い。ただ、それを補って余りある速さを持っている。大黒熊もあっさりと斬り捨てた“迅雷”の真骨頂だ。

　この２人は槍を持っていく必要はあるまい。槍と同じリーチか、それくらいの間合いは一瞬で詰めて再び離れることが出来るという２人だ。

　となると、槍を持っていくのは俺とディアナと言うことになる。しかし、全然使えない物を持っていってもデッドウェイトになるだけで、それも意味はない。

　俺が聞かれないのは魔物討伐のときに使ったのが槍だったからだろうな……。

「うーん、全く使えないってことはないわね」

「じゃあ持っていこう。出来るだけ離れて戦えたほうがいい。ディアナとアンネは牽制だけしてくれれば大丈夫だから」

　ヘレンがテキパキと指示して、ディアナとアンネも頷く。やっぱり、こういうのはプロに任せるに限るな。

「じゃあ、接近してやりあうのは俺とお前ってことか」

「おう。よろしくな、相棒」

　ニィッっとヘレンが笑った。引き受けたのは俺だし一番危険なところに回るのは、言われずとも立候補するつもりだったし、そばに最強の傭兵がいてくれるなら心強い。

「よし、じゃあ後は実際に動きを確認しよう」

　俺が言うと、皆は互いに顔を見合わせる。その顔は、決意に満ち溢れていた。

## 訓練

2021年2月1日

　ヘレンにコマを動かしてもらって動きを確認した後、庭にデカい丸太――切り出してそのままにしてあった材木――を立てて、

　仮想邪鬼からかなり離れて、ヘレンとサーミャが先頭、すぐ後ろに俺とルーシー、その後ろにリディが控え、アンネとディアナが並び、リケとクルルが最後尾という隊列を組む。

　ルーシーが前の方にいるのは嗅覚と勘の鋭さをあてにしてのことで、身体が小さいから不意を狙われたとしても俺が庇うことが出来るとの判断である。勿論、邪鬼にエンカウントしたらその時点で即座に後方へ下げる。

　得物はヘレンが短剣二振りとメイス、俺は槍と薄氷、サーミャとリディが弓。アンネが大剣と投槍、ディアナが長剣と槍で、リケは投槍と斧である。

　仮想邪鬼に向かって少しずつ近づいていく。弓で直射出来る距離まで近づくと、ヘレンが合図してサーミャとリディが前に出た。俺とヘレンはその真後ろに付き、ルーシーはリケが身振りで呼んで下がっていく。

　サーミャとリディが仮想邪鬼に向かって弓に番えた矢を放つ。ほんの僅かに弧を描いて、矢は丸太の上の方、頭部と見立てたあたりへ２本とも命中した。実戦でもあのあたりに命中して終わってくれれば楽なんだがなぁ。

「さがれ！」

　ヘレンが大声で叫んだ。サーミャとリディを下がらせる合図だ。合図に従って２人は後ろに下がっていく。その間隙を埋めるように俺とヘレン、そしてアンネとディアナが前に出た。

　その状態で全員前に進んでいくと、

「しゃがめ！」

　ヘレンが再び号令をかけた。俺とヘレンがしゃがみ、直後アンネが投槍を投擲する。

　あの投槍は命中ではなく牽制を期待してのものだ。これで邪鬼がたたらを踏んで、一時的にでもその場に留まるようであれば、その瞬間にサーミャとリディが再び射掛ける手はずになっている。移動も邪鬼がこちらへ向かってくるようなら行わない。

　アンネが放った投槍は仮想邪鬼の中ほどに命中した。貫通こそしていないがかなり深々と刺さっている。もしこれが実戦で起きれば、致命傷ではないもののかなりのダメージを負うはずである。

　しかし、実戦で必ず起こることを期待して戦術を組み立てるわけにはいかない。ここまで命中したものすべて命中しなかったものとして、つまり、邪鬼が無傷であるものとしてやっていくべきだろう。

　リケが持っている投槍と斧はイタチのなんとやら用で、邪鬼に直接当てる目的はまったくない。逃げるときに投槍を投げつけて時間を稼ぎ、それでもどうしようもなくなったら一か八か斧で、というわけだ。そうならないように全力を注ぐつもりではあるが。

「かかれ！」

　投槍が命中した直後ヘレンは号令をかけた。その瞬間、彼女の姿が掻き消える。“迅雷”の二つ名の由来を見せつけるかのように、彼女は一瞬で仮想邪鬼への間合いを詰める。

　俺を含む前衛３人は左右に散って、ヘレンを追いかけるように仮想邪鬼に駆け寄る。その間、ヘレンは立ち位置を変えながら撫でるように仮想邪鬼の表面を斬りつけ続けている。

　ここは申し訳ないが、あの剣でヘレンが本気で斬りつけると丸太くらいなら一瞬で細切れにされてしまうので、手加減をお願いした。

　これまた邪鬼が実戦で細切れになって消えてくれるなら、それに越したことはないのだが、あっさりそうなるとも思えないので俺たちも戦闘に加わる場合を想定する。

　ブゥン、と音がしてアンネの大剣が振り下ろされる。空気どころか空間ごとぶった切られそうな、重みののった一撃。それは仮想邪鬼を両断した。斬るというよりは完全に砕いている。

「やめ！」

　ヘレンの号令がかかり、俺とディアナは仮想邪鬼が両断されているのも構わず槍を突き出した格好で止まった。もちろん槍はどこにも刺さっていない。

　俺もディアナも槍を引っ込め、皆もそれぞれに構えを解く。

　大して動いていないはずだが、槍と刀をさげての短距離走はなかなかだった。少し乱れた息を整えながら、俺はヘレンに聞いた。

「どうかな」

「全部上手くいけば瞬殺もいいとこだな」

「だなぁ」

　俺の見たところ、並の相手なら少なくとも４回は死んでいる。

「まぁ、そうそう上手くいくとも思えないし、あともうすこし試したいな。矢じりはいっぱいあるんだよな？」

「ん？　ああ。合間を見て作ったのがそれなりの数あるはずだが」

「じゃ、それを使ってアタイ達が動いてる間の援護射撃の練習をしよう。さっきのを見てたらサーミャもリディも当てられそうだし。当たったら痛いだろうけど、丸めてあれば大怪我にはならないだろ」

　ヘレンの言葉を聞いて、全員が了解の声を返す。俺はふと空を見上げた。今日もいい天気で、ここらには日が差している。なんとなく、その中天にはまだ早い太陽の光が、俺たちを応援してくれているような、そんな気がした。

## 昼飯前という言葉はないけれど

2021年2月3日

　昼飯前に、ざっと援護射撃の訓練をした。矢じりを

　ヘレンを除く前線組３人が新しく用意した丸太の周りを取り囲み、ちょこまかと動き回る。

「よっ」

　俺は刺さらない程度に槍を突き出したりする。隣にアンネがいて、彼女が振り回す大剣のリーチも考えて動かないといけないので、こっちはこっちで気楽というわけでもないな。

　丸太は攻撃してこない。なので、ヘレンが木剣でちょっかいをかけてくるようにした。突きおわった隙を狙ってきたり、狙ってくるだろうなというタイミングを絶妙に外してきたりと、なかなか厄介だ。

　そんな中、槍から俺の手にすごい衝撃が伝わってくる。ヘレンがはたき落とそうとしているのだ。俺は即座に槍を捨て薄氷に持ち替える。

　これも訓練の１つで、下手に踏ん張って手を怪我したりしないよう、また槍が使用不能になった場合に即座に持ち替えることが出来るようになるためだ。前の世界で言えばライフルで排莢不良が起きたら、即座に拳銃に持ち替えるようなものである。

　そんな攻撃を俺たち３人にして平気な顔をしているのだから、“迅雷”の二つ名と最強との呼び声は伊達ではないということだろう。「アイツ１人で良いんじゃないかな」という言葉が脳裏をよぎるが、そういうわけにもいかないだろうな。

　サーミャとリディに対してヘレンからの号令はない。各自の判断で射て、ということだ。俺たちがヘレンを相手している最中、俺とアンネの間が大きく空いた瞬間に、鋭い音を立てて矢が丸太めがけて飛んでいく。

　飛んでいった矢はガツッと鈍い音を立てて、丸太の上半分あたりに命中した。矢じりを鈍らせているからだろう、刺さることはなくそのまま地面に落ちる。

　弓矢組は慎重に射っているのだろう、一度も前線組に当たることなく、全てを射ち終えた。

　時間的には日が中天を少し過ぎたあたりだ。休憩を入れるにはちょうど良いだろう。そろそろ腹も減ってきたことだし。

　俺はみんなに声をかけた。

「そろそろ昼メシにするか」

『はーい』

　訓練とはいえ戦闘の後の張り詰めた感じが一気に弛緩していく。クルルとルーシーも、そこらを駆け回って喜んだ。

「そういや、エイゾウとリディが行ったときはどんなだったんだ？」

　テラスで昼メシを頬張りながら、ヘレンが言った。クルルとルーシーは既に食べ終わって（クルルは元々食事量が極端に少ないのもあるが）再び２人でかけっこをした後、庭の端の日が当たらないところへ行って、お昼寝をはじめている。

　魔物討伐遠征隊についていった話はかいつまんでしたことはあったが、具体的にどうだったかは話をしたことがなかった。リディにとってあんまりいい思い出でもなかろうと、俺は思っているからだ。

　ちらっとリディの方を見ると彼女が頷いたので、口の中のスープを飲み込んでから、俺は口を開いた。

「あのときはそんなに広い洞窟でもなかったし、なによりゴブリンがやたらいたな。そっちは兵士の人達に任せたけど」

「私達で大きいのを仕留めたんです」

「最初リディの魔法で倒したかと思ったんだけどなぁ」

　あれもなかなかのものだった。「やったか！？」と叫ぶのは自重したが、結局、結果的には同じ話だったなぁ。

「結局仕留めきれなかったですね」

「ヒヤヒヤしたよ」

　俺はカップに注がれている茶を一口啜った。

「まぁ、なんとか俺が槍で仕留めたんだけど。ああでも、とどめは結局剣だったな。真後ろに飛んだところへ槍を投げて、倒れたところでとどめをさした」

「へぇ」

　ヘレンが興味深そうに相槌を打った。

「結局、とどめはささないといけないのか」

「ぽいな。心臓なんかもないみたいだが、その辺りを狙ったら消えたし、ゴブリンたちは兵士が首を刎ねたりしたら同じことになってたから、特別『ここを狙わないと効果がない』みたいなのがあるわけでもないらしい」

「動いている間は食事と呼吸、そして血が流れない以外は普通の生物のように振る舞いますよ。弱点……と言って良いんでしょうか、急所も普通の動物と変わりません」

「なるほどな」

　俺の後をリディが引き取り、ヘレンは腕を組んでしかつめらしく頷いた。魔力から発生する魔物って本当に不思議生物だな。いや、生きてはないのだったか。あくまで生きているかのように振る舞うだけで。

「まぁ、吸血鬼みたいなものがいたとして、そいつがどうなってるのかとかは分からんけどな」

「吸血鬼っておとぎ話の？」

「ああ」

　ヘレンが聞いて、俺は頷いた。頷きはしたが、おとぎ話に出てくるのは知らなかったので、半分出任せではある。しれっと言ったので、サーミャの嗅覚にも引っかからなかったらしい。横目に様子をうかがうと、彼女は３枚めの肉に取り掛かっているところで、何の反応もしていない。

　リディも何も言ってこないので、認識としては正しいのだろう。

「

「たぶんね。首を刎ねるなら……アンネの出番かなぁ」

　俺の言葉にアンネがスプーンをくわえたまま、こちらを向いた。おひいさま、はしたのうございますぞ。

　どれくらい首が大きいかはともかく、転がしてしまえばアンネの大剣で断てない首はないだろう。俺の特製かつ巨人族の腕力、そして剣本来の重量もあるのだ。前の世界で「実際に“魔女”の首を刎ねた」という“処刑者の剣”を見たことがあるが、あれと比してもかなり大きいし。

「まぁ、動きを止めるのは俺とヘレンの仕事として、最後を頼むかも知れないってことだ」

　アンネはそのまま頷いた。午後はその辺りの訓練も含めよう。俺がそう言うと、ヘレンも頷く。さて、昼メシを片付けたら訓練をして万全に少しでも近づけていくか。

## 後は仕上げを

2021年2月5日

　頂点付近に矢が刺さった丸太の下部に、俺は槍を突き刺した。ディアナも俺と反対側を同様に突き刺している。

　その間を一陣の風が過ぎ去る。ヘレンだ。彼女はその勢いのまま、丸太を蹴りつけた。ズシン、と音がして丸太が地面に倒れる。俺とディアナはそれに合わせて槍を抜き、今度は丸太の上部に突き刺す。

　直後、大剣を振りかぶりつつアンネが駆け寄り、丸太が

　動きを止めるところまでは午前中と同じだが、そのあとヘレンが地面に倒してからアンネがとどめをさす流れを、昼食後に動きを確認して練習している。これはその１回目だ。

「１回目にしては動きがいいな。普段、狩りで連携取ってるからかな」

「ああ、それはありそうだ」

　互いに肩で息をしながら、俺とヘレンは会話を交わす。午前中もいい動きをしているなと思っていたが、普段から狩りであれこれ連携しているのが、こういうときに役に立つんだな。

　刺さったり弾かれたりしている矢をサーミャとリディが回収しているのを横目で見ながら、俺は言った。

「俺が足を引っ張らないようにしないといけないな」

　狩りに出ていないのは俺とリケの２人だ。アンネだって何回か狩りに出ていて、勢子やなんかを務めている。前に出ないリケはいいとして、問題が起きるとしたら俺のところでだろう。

「ちょっと間を広く取って、後ろにいたほうがいいかな」

「んー」

　ヘレンは腕を組んだ。ガシャリと身につけたものが音を立てる。

「エイゾウはアタイとやりあえるくらいだから、なるべく前にはいて欲しいんだよな」

「ふむ」

　うちを戦力、と言って良いのかどうかは分からないが、そういうもので順位をつけるとしたら、チートをもらっているからではあるがヘレンの次が俺であることは間違いない。その後は接近戦でいうならディアナだろう。しかし、そこまでは大分隔たりがある……らしい。前にヘレンがそんな事を言っていた。

　となれば、ここで俺が後ろに下がって、その分戦力を減じてしまうと痛いのはわかる。

「“首を落とせば勝ち”なんだから、ある程度エイゾウに合わせて周りが動いたほうがいいと思う。多少動きが悪くなったとしても、エイゾウが抜けるよりはいいはずだし」

「なるほど」

　戦闘のプロがそう言うのであれば、俺はそれに従うだけである。専門家の言うことは素直に聞いておくのが一番だ。

「よし、それじゃあもう１回やるか！」

　ヘレンがパンパンと手を叩き、俺達は「うぇーい」と少々気の抜けた返事をしながら、配置に戻った。

　それから手頃な丸太が無くなりそうなくらいの回数練習をした。ヘレンが丸太を倒す方向も毎度違っていたし、丸太を倒さないパターンや槍だけで仕留めるパターン、それにあまり想定したくはないが、数名戦闘不能になった場合も考えて動きを確認した。

　そこではっきり分かったことがある。

「分かっていたけど、想定上はヘレンが倒れたらガタガタだな」

「そりゃあ、自分で言うのもなんだけど、アタイだからなぁ」

　ヘレンが倒れたと言う想定で、仮想邪鬼としてヘレンが全力で俺たちにちょっかいをかけた結果、ほとんど手出しが出来ずに撤退の選択肢を選ぶ他無くなってしまった。

　援護射撃の練習のときもちょっかいをかけてきていたが、あれは本気ではなかったということだろう。

「再挑戦が何回出来るかは分かんないけど、アタイが倒れたら一旦退いて態勢を立て直したほうがいいだろうな」

「そうだな」

「その時はちゃんと回収してくれよ？」

「当たり前だろ。多少無理してでもそうするさ」

　俺がそう言うと、ヘレンは少し顔を赤くして、「へへっ」と笑った。

　俺は全員を一旦丸太のところに呼び寄せた。丸太はやはり天辺あたりが砕けている。俺とサーミャ、ヘレンにクルルとルーシーは地面に直接座り、他のみんなは丸太に腰掛ける。

「撤退のときについて、ちゃんと確認をしておこう。ヘレンが戦闘不能になったら即座に撤退する」

　俺が言うと、全員が頷いた。分かってるのか分かっていないのか、クルルとルーシーも返事をして、俺は思わず笑みをこぼす。

「次に俺とディアナかアンネのどちらかが戦闘不能になったとき、この場合も撤退だ。態勢を立て直す」

　再び全員が頷く。

「あとはそうだな……」

「あとは適宜判断だけど、状況が酷くなりそうなら撤退する。命があれば再挑戦もできるし」

　俺が言おうかなと思っていたことをヘレンが言ってくれたので、俺は大きく頷いた。

　気がつけば日がだいぶ傾いていて、夜がもうそこまで来ている。時間は限界か。あとは明日、本番で上手くいくことを祈るしかないな。

　俺が訓練の終了を皆に告げると了解の声が返ってきて、各々身体の汚れを落としに家に戻っていくのだった。

## 出陣

2021年2月8日

　翌朝、朝メシは軽めにしておいた。まぁ、あまり食わないほうが動きやすいとかそういう話ではなく、単にヘレンを除く皆が緊張であまり食えなかっただけなんだが。

　ヘレンはさすが本職というべきか、普通にモリモリ食べていた。

「さすがだなぁ。緊張はしてないのか？」

「いや？　普通にしてる。やりあったことのない相手だし。緊張してるかどうかと胃袋を切り離せるようになっただけ」

　俺が聞くと、ヘレンは事もなげに言った。その言葉を態度で表すかのように、無発酵パンの２枚めにとりかかっている。

「食えるときに食っとかないと、次いつ食えるか分かんないことが多かったし」

「なるほどなぁ」

　ここに住むようになってから随分穏やかになったが、ヘレンはプロの傭兵である。場合によっては数日飲まず食わずということなんかもあったのかも知れない。その結果、いかなる時でも食えるときに食っておけ、となったのだろう。

　色々頼まれすぎとはいえ、基本的には鍛冶屋のオヤジである俺が常在戦場の心構えである必要はないと思うが、こうやってプロがその心構えでいてくれるのはなんとなし安心感がある。

「緊張し過ぎも良くないけど、相手をナメてかかるのはもっと良くないからな。皆も……もうちょっと緊張をほぐしてもいいとは思うけど、昨日やったことを思い出して動けば滅多なことにはならないさ」

　素早く２枚めのパンをスープで飲み込んだヘレンがそう言った。皆の間の緊張した空気が多少ほぐれたのを感じる。専門家のお墨付きの効果だな。傭兵時代にもこうやって新人を励ましたりしたんだろうか。あるいは自分がそう励まされてきたとか。

　俺は「さて、準備準備」と慌ただしく席を立つヘレンを見ながら、そんなことを思った。

　鍛冶場に柏手の音が響いた。家族全員フル武装状態で手を合わせる。今日願うのは言うまでもなく、皆の無事と

　しんと静まり返る鍛冶場。身じろぎ一つすることなく、皆願っている。大丈夫だとは思っていても、万が一が起こらないでいて欲しいのは皆変わらない。

　やがて、誰からともなく一礼をした。ガチャっと音を立てたのはヘレンの胸甲だろう。皆の装備もそれぞれの音を立てている。

　顔を上げて神棚を見ると一瞬、女神像が輝いているように見えた。誰も反応してないし、日がよく当たるような場所でもないので気のせいだろうが、祝福されたような気分にはなれたし、上手くいくような不思議な確信がある。

　……太陽の光を反射させて、朝夕拝む時間だけ光が当たるようにするとかはありかも知れんなぁ。そんな益体もないことを考えられるくらい、緊張がほぐれてもいる。これ以上ない御利益だな。

「火の始末はできてるな？」

「できてるわよ」

「戸締まりは確認したか？」

「はい。鍵は私が持ってます、親方」

　いつものお出かけのときのようなやり取り。皆無事にここへ帰ってくると決めたのだから、当たり前のことではある。

　クルルとルーシーも小屋から出て、２人とも俺たちのそばでお座りをした。俺たちの緊張と決意が伝わっているのだろうか、なんとなしに顔がキリッとしているように見えなくもない。

　ディアナがそっとルーシーの頭を撫でる。クルルもアンネが頭を撫でてやっていた。

　それから時間にすれば５分もかかっていないのだろうが、それよりも遥かに長いように感じられる時間が過ぎていく。ジリジリと暑さが身体に染み込んで来るような気がする。

　水は持ったっけ、頭の中で自分が水筒を荷物に入れたかどうか思い出そうとしていると、空中から滲み出るように女性が姿を表した。

　この“黒の森”の主である

　リュイサさんは挨拶もそこそこに話を切り出した。

「おはよう皆さん。早速案内をしようと思うけれど、準備はいいかしら？」

　俺たち家族は無言で力強く頷く。リュイサさんは満足そうに微笑んだ。

「ありがとう。それじゃ、向かうわね」

　俺たちは再び頷き、リュイサさんを先頭に歩き出す。俺たち家族全員の覚悟の一歩が今踏み出されたのだった。

## 行軍

2021年2月10日

　俺たちは狩りのときにもしないようなフル武装をして“黒の森”を進んでいく。いつもなら狼の群れにあたらないか、猪や大黒熊に出くわさないかを警戒しながら進むのだが、今は違う。

　俺たちの装備が大きな音を立てて、熊よけの鈴のようになっているからということもあるが、一番の理由は先導しているのがこの森の主――リュイサさんだからだ。

　まさか森の主にちょっかいをかけようというものはそうはいまい。いたとすれば澱んだ魔力から生まれた魔物くらいだが、今回

　ちなみに、現地までテレポートみたいなので移動せず、徒歩で移動しているのはなぜかと言うと、「自分１人ならともかく、他の人間を伴う場合は色々問題があるし手間がかかる」からだとか。

　俺は思わず、「他人を伴うときはテレポート利用許可申請書を書いて捺印が必要」みたいなイメージを浮かべてしまった。まだまだ前の世界の感覚が抜けていない。

「こういうときにリュイサさんに聞くのも何かとは思うんですけど」

「あら、いいわよ」

　見た目には平和そのものの森の中を歩きながら俺がおずおずと切り出すと、リュイサさんは気軽に応じてくれた。俺たちの緊張をほぐそうとしてくれているというよりは、単にこれが彼女の素なんだと思う。

「澱んだ魔力から生まれるにせよ、澱んだ魔力によって変性するにせよ、どうしたって魔物が発生してしまうのは正しいですよね？」

「そうね」

　なるべくジゼルさんたち妖精族が魔力の澱みが出ないように日々腐心しているが、それでも全てを防ぎ切るのは不可能だ。……うちのルーシーのように。

「今回は厄介なのが発生したから我々の出番なわけですけど、そうでもない場合はどうしてるんです？」

「んー……」

　リュイサさんは少し考え込んだ。知らない、というわけではないだろう。俺たちに言っていいかどうかを悩んでいるのだと思う。

「ま、エイゾウくんたちならいいか。私はどうもしないわよ」

「えっ」

　しれっと言い放つリュイサさんに俺は足を止めかけた。まさかの放置である。

「大抵は狼さんたちに当たって倒されるわ。弱いのは鹿ちゃんが倒しちゃうし、ごくごく稀にだけど出くわした獣人さんが片付けることもある」

　俺は少し後ろにいるサーミャの方を振り返った。目を丸くして首を横に振っている。少なくともサーミャは聞いたことがないのか。

「獣人さんが出くわすのは１００年に１回もないから、サーミャちゃんは知らないかもねえ。そこに私は関与しないし」

　俺の動きに気づいて、リュイサさんはそう付け足す。俺は少し身を縮こませた。サーミャは口を尖らせる。

　しかし、鹿に倒されるくらい弱い魔物というのは若干語弊があるな、と俺は思った。この森には角鹿と呼ばれる気性の荒い鹿がいる。サーミャによれば「結構厄介」らしいので、どちらかというと「魔物を倒してしまうような鹿がいる」のだ、この森には。

　もしかすると角鹿がこの森にいる理由はそれなのかもしれない。大きな生命体としての森の自己防衛機能、それに角鹿が含まれるというのは、そう突飛な発想でもないだろう。

　リュイサさんはクスリと小さく笑ってから続けた。

「多少強くても熊ちゃんが倒しちゃうからね」

「なるほど。あれは強いですからね」

　俺が頷きながら言うと、リュイサさんも頷いた。魔物になりかけていたのか、はたまた純粋に強かったのかはともかく、俺は一度１対１でやりあったことがある。最初に死ぬ可能性を考えたのはあの時だ。２回目はあっさり倒せてしまったが、あの時は俺１人じゃなかったし、ヘレンもいたから楽に見えただけで強敵であるのは間違いない。

　魔力が動物に影響して生まれた魔物の場合はともかく、魔力から直接生まれた魔物の場合は“死ぬ”と雲散霧消してしまう。それに当たった大黒熊はさぞかしガッカリすることだろう。多少の同情を禁じえない。

　さて、翻って考えると今回俺たちが出張る理由とは、まぁ分かってはいたし、やや遠回しに言われてもいたが、「熊でも倒せないから」だろう。つまり、俺たちは少なくとも熊より強い相手を退治しに今向かっているわけだ。

　だろうなとは思っていたし、その想定で昨日１日訓練をしたわけだが、いよいよ実感がましてくる。

　迂闊に聞かなきゃ良かったかな、そんな若干の後悔を胸に、俺たちは森の中を進んでいく。この森のいつもどおりを取り戻す、そのために。

## 突入

2021年2月12日

　しばらく森の中を歩いたが、まだもう少しかかるとのことだったので小休止を挟んだ。持ってきた水で水分を補給することにした。皆水筒を下げているが、今はクルルが背負った小さな樽から汲み出している。いざと言うときに水筒の水が少ないという事態を避けるためだ。

　今回の補給物資はクルルが背負っている。水の他には包帯代わりの清潔な布や血止めの薬草、それに洞窟に入るから松明などだ。一応干し肉も入れてあるが出番はないだろう。

　干し肉でどうしても食事をしないといけないほど時間がかかるようであれば、一度退いて仕切り直したほうがいい。帰りに少しでも腹に入れておきたければ出番かも知れないが。

「ふう」

　俺は水を二口ほどで飲んで、息を吐いた。道中はほぼ日陰だし風も吹いているので、夏の盛りではあるが思ったほど暑くはない。

　だが、全く汗をかかずに行軍できるかというと、それは無理というものだ。それなりに体から水分が失われている。

「もう少ししたら着くから、もうちょっと頑張ってね」

　リュイサさんが言うと、皆から「うぇーい」というような返事がある。変に緊張してるよりはこの方がいいな。

「こんな範囲に洞窟があるんだなぁ」

　洞窟といっても山の中腹に穴を開けているようなものではなく、地面の裂け目のような感じらしい。降りていくためのロープなどは必要ないと言われた。

　まぁ、降りるのにロープが必要なら、蜘蛛かなにかでもない限りは登るのにも道具が必要なわけだし、その場合こんな緊急に俺たちが倒しに行く必要はない。俺たちが行く時点で少なくとも出入りすることは自由な状態だと考えていいだろう。

「狩りのときはウロウロしてて、移動してるようでしてないからなぁ。今は一直線に向かってるから、かなり遠くまで来てるよ」

「ああ、それはそうか」

　水をゴクゴクと一気に飲んだサーミャが言って、俺は頷いた。狩りのときの目的は獲物を探すことだから、ある程度の範囲を決めてその中をウロウロすることになる。

　翌日に回収することも考えたら、家からあまり離れたところまでは行かないのは言われてみれば当たり前だ。

　それに今は装備を身に着けているとはいえ、重い荷物は全部クルルに任せているので、行軍速度が稼げている。思ったよりは遠くまで来ているというのも納得だ。

　時間にして１０分ほど休憩して、俺達は再び歩き出す。歩くにつれ最初は結構聞こえていた小鳥や獣の声が徐々に減ってくる。

　やがて、小鳥たちの声が聞こえなくなり、なんだかんだ適当に話をしていた俺たちも皆口を噤んだ。俺達の移動する音だけが“黒の森”に響く。

　いよいよ近そうだ、というのを肌身で感じるようになってきた頃、リュイサさんが言った。

「着いたわ、ここよ」

　そこには地面にポッカリと空いた穴がある。思っていたよりもかなり大きい。この大きさの穴が続いているならクルルも余裕で入れるだろう。不謹慎かも知れないが、俺は少し興奮を覚えた。

　クルルから人数分の松明を下ろし、火を付ける。穴に松明をかざしてみると、斜めにおりていっているようなのが分かった。

「どう思う？」

「通れると思う」

　念の為、ヘレンに聞いてみると、あっさりした返事が返ってきた。なら皆一緒に行くか。俺たち――クルルとルーシーも――は顔を見合わせて頷いた。

「それじゃあ、行きます」

　俺がリュイサさんに言うと、リュイサさんは終始にこやかだった表情を引き締めて、俺達に頷いた。

「悪いけど、私はここで待っているわ。中に入ったらどこにいるかはリディちゃんが分かるはず。私が言うことではないかも知れないけれど、頑張ってね」

「はい。ありがとうございます」

　元より、リュイサさんに着いてきてもらう

　俺たちは松明をかかげて、洞窟へと足を踏み入れた。

　洞窟の中は当然ながら真っ暗で、照らす範囲以外には何も見えない。中の空気はひんやりとしていて、暑いときには助かるはずなのだが、どこか不気味さを感じてしまう。

　俺とヘレンが最前、その後ろにディアナとアンネ、そしてサーミャとリディ、リケにクルルとルーシーの順で進んでいく。そして、澱んだ魔力を読み取れるリディが行く方向を指示するのだ。

　長い時間をかけてじっと神経を集中させていたリディが大きな声で指示をした。

「そこは右です」

　リディの指示で分岐を進んだ後、立ち止まって周辺を警戒する。この時、最後尾にサーミャとアンネが回る。基本的には戦闘能力のない３人が不意打ちを食らうわけにもいかんからな。リュイサさんの話ではゴブリンみたいな小さいのはいないということだったが、いつ生まれているかも分からんし。

　その時、松明の炎が俺たちの背後、つまり入ってきたほうに向かって揺れた。

「空気の流れはあるんだな」

「……みたいだな」

　ヘレンは俺の言葉を聞いて、自分の松明を見上げた。その松明も入ってきた方向に向かって揺れている。これなら窒息する心配は今のところなさそうだ。

　俺たちはゆっくりとゆっくりと、洞窟の中を進んでいく。積み重なってくる不安を、お互いへの信頼で振り払いながら。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

KADOKAWAさんの「2021年、激推しタイトル13作!!」に本作も入っております。本日の朝日新聞朝刊には１面広告も掲載されておりますので、こちら、機会ありましたら御覧ください。

https://kimirano.jp/special/cp/gekioshi2021/

また、「蜘蛛ですが、なにか？」アニメ放映記念企画にも参加しておりますので、こちらも合わせてご確認いただけると幸いです。

https://kimirano.jp/special/cp/kadokawabooks202102/

Amazon、BOOK☆WALKERにて電子版１～２巻割引などにも参加しております。

https://www.amazon.co.jp/dp/B08CRZ5ZGV?ref=cm\_sw\_tw\_r\_nmg\_sd\_rwt\_8pJKCWcneXVAf

https://bookwalker.jp/tag/5345/?order=rank&np=1

こちらも合わせてご確認いただけますと幸いです。

## 決戦へ

2021年2月15日

　俺たちはどんどん奥へと進んでいく。進んでいくにつれ、ひんやりと、しかしジメッとした風が俺の肌を撫でる回数も増えてきた。こういった洞窟は魔力が澱みやすいと聞いた。俺がついていった遠征のときも、こんなふうに風は動いていたが、魔力の澱みやすいらしい洞窟だったな。

　ここであそこみたいな異常事態が発生したらどうするべきだろうか。今のうちを放棄してよそに移り住むべきか？ いや、最悪の場合はリュイサさんが地形を変えてでもなんとかしてくれるだろう。本人もそんなふうなことを言っていたし。

　あまり他人に頼るのもな、とは思うのだが、なにせ“森の主”様である。地域の危機は支配者に解決してもらおう。

「魔物が出るってのがなけりゃ、こういうところで物を冷やすのはありなんだけどなぁ。それか氷があれば持って帰るんだけど」

　俺がふと漏らした言葉に、ヘレンが食いついた。

「冷やしてどうするんだ？」

「冷やしたほうが食い物とか保つんだよ」

「へえ」

　この“黒の森”は広い。探せばもっと気温の低い氷穴のようなところもありそうだ。そこで直接保存するなり、氷があれば切り出してくるなりして食品なんかを保存できればいいのだが、この世界ではそう言った場所には魔物がわきやすいのがネックだな。

　うちは街から離れている。畑や狩りの獲物で新鮮なものが手に入るが、それでも基本的には乾燥させたり塩漬けにした保存食が中心になっている。もし氷で食品を保存できるようになれば、うちの食生活も広がりそうなんだけどなぁ。

「冬場のほうが多少長持ちするだろ？ あれと同じだよ」

「ああ、そう言えばそうだ」

「それに冷やしたほうが美味いものもある」

「ほほう」

　一部の果物なんかは冷やしたほうが俺は好きだ。それに、アイスクリームみたいなものはそもそも低温でないと作れないからなあ。素材がそれなりに入手できるなら作ってみることも考えるのだが。

「うちには氷室があったわよ」

　会話に入ってきたのは俺達の後ろにいるアンネだ。そりゃ帝国の宮殿ともなれば氷室もあるか。

「氷室？」

　サーミャが聞き慣れない言葉を耳にして首を傾げる。この間も全員周囲に目を走らせ気配を探ることは止めていない。

「冬の間に雪とか氷とかをそこへしこたま詰め込んで、夏に取り出したりするのよ」

「えっ、アンネん家はそんなんがあるのか」

「そうね」

　アンネが頷く。サーミャは「ほへー」と感心しきりなようだ。

「ディアナのところは……なかったみたいね。あんまり驚かないところをみると、エイゾウのところにもあったのかしら」

　ディアナは小さく首を横に振った。王国の伯爵家にもないとなると結構貴重な設備だと言える。まぁ、冬のものを夏まで保存しようなんて贅沢がそうそうできるわけもないか。

　そして俺の場合、あったかどうかで言えば、あったと言うしかないだろう。３ドアでちょっと大きめのいいやつが。そう言えばあれ、前のが壊れて買い替えてからそんなに経ってなかったな……。

「うちにはなかったけど、知り合いのとこにはあったからな」

　俺はとりあえずそう言っておく。どうやら結構上の方の貴族の出だと思われているっぽいし、これで通用するだろう。そんな俺の思惑通りか、はたまた違うのか、アンネは「ふぅん」とだけ返してくる。

　そんなくだらない話を遮るかのように、リディが緊張した声で言った。

「……いますね」

　今まさに分岐が見えて、態勢を整えようとしているところだった。今まではどの先にいるのか特定するのに時間が掛かっていたりしたが、それも徐々に短くなってとうとう分岐より前に分かるようになった。

　いよいよ、と言うことだ。念の為、鼻が利くサーミャを前に出して臭いを確認してもらう。いつの間にかルーシーも足元に来ていて、２人一緒に鼻をひくひくさせている。

　やがてサーミャは小さな声で言った。

「臭いはしてこないな……でも気配はうん、なんとなくわかる」

　魔物は生物とみれば殺す。だが食ったりはしないので、うっかり迷い込んで殺されてしまった生物がいれば、それに関連する臭いがしてくるはずだし、もしも

　そのどちらでもなく気配があるということは、おそらく邪鬼はこの先で健在ということだろう。

「今のうちに最終確認をしておこう」

　ヒソヒソ声でヘレンが言った。もう既にガシャガシャと音は立てているので今更ではあるのだが、大声で会話する必要もないからな。

　俺たちは頷いて、自分の身の回りを確認する。ややあって、再び皆で顔を合わせると頷き、昨日の練習通りの隊形に並び直す。

「よし、あとは手はず通りに行くぞ。前進！」

　ヘレンが号令をかけた。俺たちは雄叫びこそ上げなかったが、どこか高揚した気持ちで決戦場へと足を踏み入れた。

## 戦いの始まり

2021年2月17日

　俺とヘレンを先頭に、サーミャとリディ、アンネとディアナ、そしてリケとクルル、ルーシーの隊形で進んでいく。

　皆押し黙り、言わずとも歩調を揃えていて、今だけを見ると小さな軍隊のようだ。

　そのまま、通路のようになっているところを抜ける。そこはいかなる要因によるものか、薄明るくなっており、ぼんやりとだが広い空間であることがわかった。

「うっ」

　その言葉を発したのは俺だったか、それとも他の誰かだっただろうか。それくらい無意識に漏れた言葉。臭いではない。濃密な何らかの気配。リディに確認するまでもない。

「松明！」

　鋭い、しかし沈着冷静なヘレンの声が空間に響いた。リケ以外の全員が松明を放り投げる。投げられた松明は地面に落ちてなお、あたりを照らす。すると、空間の明るさが一気に増した。

　どうやら、この空間にはヒカリゴケのような植物が生えているらしい。壁面や地面の一部が明るくなっている。もっと暗い環境での戦闘を覚悟していたが、これはありがたい。

　空間は大きなホールのようになっていた。天井はヒカリゴケ（仮）があまり生えていないせいか、暗くて高さが分からないが、広さはかなりあるらしい。奥の方までは光がちゃんと届いていない。

　地面は多少の凹凸はあるにせよ、走ったり踏ん張ったりするのには支障なさそうだ。

　そして、その空間の中央に佇む巨体。

　鼻そのものはないが、鼻孔らしき穴のある、乱ぐい歯をむき出しにした

「日の光で弱体化、というよりは目がないから外に出ると不利ってことか」

　目の有無は遠距離で早期に獲物や敵を発見できるかどうかにもかかってくる。夜間ならいざ知らず、昼間にノコノコと出ていけば袋叩きにあうだろう。

　生物ではなく魔力から生まれた魔物なので、目がないのが進化の過程によるものかどうかはわからない。ホブゴブリンも感覚器官を使っているようだったし、そこらは生物と共通らしいのが救いだな。

　理由はわからないが、何故かこの状況にあってもぼんやりと佇んでいる。身体は俺達から見て斜めを向いているが、射撃するのに支障はなさそうだ。

「接敵！ 射撃用意！」

　相手が態勢を整えるのを待ってやる義理もない。目標を認め、ヘレンが号令する。俺とヘレンは左右に別れ、その間からサーミャとリディが弓を手に前に出た。後ろでガチャリと音がする。アンネが投槍を準備しているのだろう。

　サーミャとリディは弓に矢をつがえ、弦を引き絞る。２つの弓はキリキリと力を蓄えた。

「放て！」

　ヘレンの号令で２本の矢が空間を切り裂くように飛んでいく。矢は見事に邪鬼の頭に命中し、深々と突き刺さった。

「ギィヤァァァァァァァァァァ！！！」

　巨躯に見合わぬ、空気を切り裂くような、悲鳴にも似た咆哮を邪鬼が上げた。これでそのまま倒れてくれれば、拍子抜けではあるが一番いい展開だ。

　しかし、そんな淡い期待は打ち砕かれる。邪鬼は鼻孔を動かすとこちらに目のない頭を向け、

「キャオオオオオオオ！！！」

　さっきのとはまた違う咆哮を上げた。よく見れば耳朶もない。どうやら臭いだけでこちらを把握しているらしい。ズシン、と身体もこちらへ向ける。

「チッ、さがれ！」

　ヘレンが舌打ちをして号令する。サーミャとリディは号令に従って素早く後ろに退いていく。邪鬼はこちらを向いて、もう一歩足を踏み出した。

「しゃがめ！」

　サーミャとリディが俺たちより後ろに下がったのを確認して、ヘレンは次の指示を下した。俺とヘレンは素早くしゃがみこむ。

　直後、ブンと低い音がして、銀色の光が一条、邪鬼へ向かって飛んでいく。こちらに来ようとしていた邪鬼は、その光を腹に受けた。三度の咆哮。耳に心地よいとは言えない音が耳に叩きつけられる。

「前列前進！ やつの悲鳴だけなんとかなんねーかな！！」

　ヘレンが号令と同時にうんざりした顔で愚痴を漏らす。

　立ち上がり、槍を構えて前進しながら俺はヘレンに返す。

「同意するが無理だろうな」

「残念だ！」

　ヘレンは俺に速度を合わせて進みながら言った。まだ愚痴を言ってやり取りする余裕があるなら平気だな。

　邪鬼は腹に刺さった投槍を棍棒を持っていない方の手で掴んで抜いた。血液を巡らせている生物ではないので、血は出ない。それは分かっていたのだが、そこに空いた穴がみるみるうちに塞がっていくのはあまり予想していなかった。

「澱んだ魔力による回復です！」

　俺たちの後ろからリディが言った。ホブゴブリンも魔力で回復はしたが、ここまで早くはなかった。

「厄介だな」

　ヘレンがため息まじりにつぶやいた。俺は頷きながら返す。

「こうなったらやるっきゃねぇだろ。やつが消えるまで何度でも倒し続けるだけだ」

「だな」

　俺の言葉にヘレンはニヤリと笑って同意する。傷が塞がった邪鬼は俺たちに向かって走りだした。図体の割には素早いが、昨日１日だけとは言え、俺達は“迅雷”の攻撃を受けてきたのだ、という自信が恐怖心を打ち負かす。

「止まれ！」

　ヘレンの鋭い号令。俺たちは足を止めた。邪鬼はもうすぐそこまで迫ってきている。

　俺たちはヘレンの次の号令を待つ。そして、それはすぐに下された。

「かかれ！」

## 「やったか！？」

2021年2月19日

　号令と共に、ヘレンの姿がかき消えた。訓練の時とは段違いの速度で、一気に

　本来なら暗闇でのみ行動する魔物だ。嗅覚と皮膚感覚のみで相手を捉えて素早い動きで攻撃するのだろう。

　しかし、今のヘレンはそれで捉えきれるような速さではない。青い光が２条、邪鬼に向かって奔ると、邪鬼はろくに反応も出来ずに棍棒を持った右腕の肘から先を切り飛ばされた。

　切られた腕はそのままサラサラと空気に溶けるように消えていく。

「よし！」

　ディアナの声が響く。さすがにあれで仕留めきれないにしても、最大の武器を封じこめることができたんなら上々だ。

　と、思っていたのだが。

「薄々そうじゃないかとは思ってたけどな！」

　俺は駆け寄りながら言った。邪鬼が耳障りな咆哮をあげると、右腕の肘から先がズルリと再び生えてきたのだ。後ろで息を呑んだのはリディかリケだろう。

　前の世界のアニメなんかでは度々見たが、

「魔力を大量に使っています！」

　リディの声が響いた。魔物は澱んだ魔力で回復も行う。俺がホブゴブリンと戦ったときも、少しの切り傷くらいなら回復していた。今回のはそれどころの話ではないが、あれは澱んだ魔力を大量に使うことで高速回復しているのだろう。

　腹に刺さった槍の穴がすぐに塞がったのもなにかの間違いではなく、同じ理屈で回復したに違いない。ゴブリンみたいな小物が湧いて来ないのも、その辺りに理由がありそうだ。わざわざ実験しようとは毛ほども思わないけどな。

　この場にどれくらい澱んだ魔力が残っているか分からないが、それが尽きるまでは回復し続ける可能性がある。なるべくなら持久戦は避けたいところなんだが……

　家を発つ前の自分の見通しの甘さに苛立ちを覚える。弁当も含めてもう少ししっかり準備してくるべきだった。皆強いし、俺もそこそこだから意外とあっさり片付くだろう、と心のどこかでたかをくくっていたのかも知れない。

　俺は頭を振った。反省は後からすればいい。今はこいつを倒すことに専念だ。

「ヘレン！」

「分かってる！！」

　鈍い唸りを上げて振り回される邪鬼の左腕を素早く回避しながら、ヘレンはその腕を切った。今度は肩口からバッサリだ。邪鬼は回復を優先するかと思いきや、残った右腕をヘレンに振るおうとした。

　しかし、鋭い音がして、その腕に矢が突き刺さった。サーミャとリディのどちらなのかは分からないが、訓練が奏功したと言っていいだろう。

　邪鬼が苦悶の声をあげて、腕を振るうのを止めた。それにしてもあの声、ホントに何とかならんかな。「黒板に爪」クラスの不快感があるんだが……。

　その隙を見逃すヘレンではない。

　両腕を復活させた直後、俺とディアナは槍を邪鬼に突き刺した。少しの抵抗感のみで、槍は邪鬼の身体へと穂先を潜り込ませていく。

　ディアナはある程度のところで槍を邪鬼の身体から抜いて離れた。ヘレンは簡単に切り飛ばしているように見えるが、あの腕で殴られればただでは済まないだろう。なるべく間合いを空けて戦うためだ。

　一方の俺は出来る限り槍を突き刺した。危ないのは俺もそう大差ないが、さっきの腕のスピードなら、なんとか躱せそうだ。それならば、なるべくダメージを与えられるほうがいい。

　切り飛ばせばそこから先はなくなる。そして、そこを復活させるには魔力を消費する必要がある。多少持久戦になろうとも、常に魔力を消費する状況に持ち込むには、切り飛ばしてしまうほうが効率が良さそうだ。

　深々と突き刺さった槍から手を離して、俺は腰に下げた薄氷を抜き放つ。ヘレンの持つ２つの青の他に、もう１つ加わった。

　動きが少し鈍った邪鬼は、ディアナの空けた穴を塞ぎ、俺が突き刺した槍を抜こうとしている。その瞬間にヘレンが左腕と左足を、俺が槍を掴んだ右腕を切り落とした。

　邪鬼はたまらずバランスを崩す。その瞬間を見て、俺は右足に斬りつけた。俺も態勢が悪かったのか、切り落とすまではできなかったが、深々と傷をつける。

　鋭く息を吐くヘレンの声。

「フッ」

　次の瞬間、邪鬼の頭は胴体と泣き別れになっていた。

## 決着

2021年2月22日

　これまでは立っていた

「アンネ！」

　ヘレンの鋭い声。アンネは「フッ」と息を吐き、大剣を振り下ろす。頭も手足もほとんどがなく、唯一残った右足も動かないのでは避けようがない。アンネの大剣が邪鬼の胴体を普通の生物なら心臓があるあたりから両断した。

　俺は叫んで注意を促す。

「油断するな！ 倒せたなら全部が消えるはず！」

　全員頷きあうと、油断なく両断された胴体を取り囲んだ。少しの間固唾を呑んで見ていたが、消えたのは胴体の下半分だけだった。という事はつまり……。

　ズルリ、と無くなったはずの胴体が再び生えてきた。間髪を入れず、アンネの大剣が邪鬼の身体を襲い再び両断した。どういう条件でそうなっているのかは分からないが、両断された上体の首から頭が生えてくる。

　そちらはすごい速さでヘレンが切り飛ばした。あの声を上げられるのが余程嫌だったのかも知れない。そうだったとしてそこには同意しかないが。

　複数回胴体を両断されても、そのどちらからも身体が生えてくるということはない。

　こうなってくるとほぼ勝負はついていた。再生する先から、俺、ヘレン、アンネの誰かが切りとばす。腕だけで活動する可能性もあるにはあるが、そこはディアナの槍とサーミャとリディの弓に任せる。

　邪鬼は全ての部位を同時に再生させたりもしたが、胴をアンネが、片腕を俺が、残りの腕と頭をヘレンが素早く落としてしまうので、邪鬼は“手も足も出ていない”。

「いつまで復活するんだこいつは……」

　ヘレンが愚痴をこぼす。彼女が首を切り飛ばすのも、もう何度目になるか分からないから無理もない。勝負がついている、と言うことと、戦いがいつまで続くのかは関係ないのだ。邪鬼が雲散霧消するまで戦いそのものは続く。

　救いなのは魔物なので血も出ないし、“死んだ”部位は消え去ることだ。これが通常の生物なら切り飛ばすたびに、その部位が残り、あたりは文字通りの血の海になっていたことだろう。とは言え、何度も見たいと思うような光景でないのも確かだが。

「せいっ！」

　これも何度目になるか分からないが、アンネが大剣を振り下ろした。またもや狙い過たず胴体を両断する。少しアンネの攻撃に遅れが生じてきているような気がする。

　このまま俺たちが邪鬼を倒し切るのが早いか、俺達の体力の尽きるのが早いのかの持久戦になってきて、少し勝負の雲行きが怪しい。

　俺も自分の薄氷を振るい、時間差で生えてきた腕を斬る。俺は違和感を覚えた。

「生えてくるのが少し遅いか？」

「そうだな」

　俺が疑問を口にすると、ヘレンが今度は更に時間差で生えた頭を飛ばしながら同意した。となると……。

「リディ！」

「減ってます！」

　俺が叫んでリディに確認をすると、思った通りの答えが返ってきた。邪鬼は周りの澱んだ魔力で再生する。再生する元になるものが減ってくればどうなるかといえば……。

　もう少し同じことを繰り返していると、明らかに様子が変わってきた。

「さっきから腕と頭しか生えてこないな」

「だな」

　俺とヘレンは頷きあう。おそらく邪鬼の、というか澱んだ魔力が限界を迎えているのだろう。ズルリ、と一瞬で生えてきていた腕も今はかなりゆっくり生えてきているし、その間隔も広がってきている。

「ヘレン」

　俺が声をかけると、ヘレンは再び頷いて両手の剣を閃かせる。邪鬼のほとんど残骸の様になってしまったそれは、一瞬でいくつかの塊になってしまい、１つの塊を残して全てが消え去る。

　残った大きめの塊が身じろぎをするようにうごめいていたが、やがてそれも動きを止め、溶けるように消え去った。

「リディ！」

「はい！」

　俺が言うと、リディは弓から手を離し、目を閉じて神経を集中させる。そっとサーミャとディアナが近くに寄った。まだ完全に油断はできない。

　俺たちも間隔を空けて周囲を警戒する。今のところ俺には何も感じないが、ヘレンのようなプロではないし、チートだよりの俺の感覚だ。どこまでに当てにしていいものやら。

　しばらく身じろぎ一つせずに集中していたリディが、大きく息を吐いた。俺はそっとリディに尋ねる。

「……どうだ？」

「引っかかりません。この場の澱んだ魔力はなくなったようです」

　という事はつまり……。

「やりました！」

　リディは今日一番の大声をあげ、俺たちもワッと歓喜の声をあげる。討伐は成功だ。ドッと疲れが押し寄せてくる。

　きっと同じなのだろう、へたり込んだアンネに駆け寄ってやるヘレンを見ながら、俺も地面にゴロリと転がった。胸の内は喜びで満たされている。

　俺はその状態で大きく、大きく息を吐いてから立ち上がり言った。

「さあ、凱旋しよう！」

====================================================

今週末の2/27にコミック第１巻が発売となります！

書店様によっては特典もついてきますので、ぜひお求めください！！

詳細は公式サイトまたは各書店様のサイトにてご確認ください。

## 小さな凱旋

2021年2月24日

　魔物の討伐は物としては何も残らない。ただ俺たちの中にさっきまでの死闘（最後は囲んで叩いてただけだが）と、その勝利の記憶が残るだけだ。

　それに今回は軍隊についていったわけでもないから、大規模な凱旋とはならない。知っているとして、リュイサさんとジゼルさん達妖精族くらいなものだ。

　それでも、自分たちの居場所を守るため、必死に戦ったという事実は変わらない。各々松明を掲げ、暗い洞窟を戻っていく。

　その姿はどこか誇らしげだ。ルーシーも威風堂々と歩いているが、まだ様にはなっていない。いずれ彼女も立派な大人になったら、あの姿も格好良く見えるのだろう。その時が早く来てほしいような、なるべく遅いほうがいいような、複雑な気分だ。

「クルルもルーシーも暴れたりしなくて偉かったな」

　戻りながら、俺は２人のことを褒める。

　まぁ、戦いでそれどころでなく、思い至ったのは戦いが終わった直後だったので、そこは大いに反省するところである。もしそうなっていたら、この複雑な洞窟の中を探して回る必要があった。場合によっては置いていく選択はどうしても必要だなぁ。

　リケが空いている方の手でクルルの首を撫でながら言う。

「２人ともビクともせずに皆を見てましたよ」

「もしかすると、剣の稽古と同じくらいに思ってたのかもなぁ」

　ディアナとヘレンがウンウンと頷いている。２人によれば、

「危ないから離れてな、って言うと大人しく見てるよ」

「ルーシーもいつも静かに見てるわねぇ」

　とのことなので、２人からすれば「いつもの延長」くらいの感覚なのかも知れない。

　一刻も早く洞窟を抜け出したいのは山々だが、途中で一度休憩を挟んだ。大きな怪我はないと言っても、身体を酷使したことに変わりはない。

　クルルに積んでいる水と、非常用にと持ち出した干し肉で軽く補給もする。

「補給に関しては失敗だったなあ」

「そうだな」

　俺がボヤくと、ヘレンは頷いた。彼女は干し肉を口にしながらも周囲に目をやり、警戒を怠らない。

「こういうときは最低限丸一日分の補給物資は持ってくるべきだったな。アタイもちょっと緩んでた。指摘するべきだった。すまん」

「いや、決めたのは俺だし、今日のところは実際問題なかったからな。次回から気をつけ……たいような、気をつけたくないような」

　俺がそう言うと、洞窟内に笑い声が響く。実際のところ、こんな仕事は受けなくて済むならそれに越したことはないのだ。ただの鍛冶屋だし。

「でも、今回で実力を示しちゃったからね。今回選択肢が用意されてなかったのも事実だけど」

　アンネがため息をついて言った。多数対１体、多勢に無勢ではあるが、俺たちなら大怪我もせずに邪鬼１体を討伐できる。今回その事実がリュイサさんに知られるわけで、それが今後どう転がるか、不安の種ではあるだろう。

「あんな化け物を無傷で倒せる部隊なんて、お父様が知ったら放っておかないでしょうね」

　アンネは続けた。リュイサさんが言うように“黒の森”の最強戦力であることは、少なくともこの近辺では最強と言って過言でないこととイコールだ。そんな戦力を遊ばせておく道理は、特に色々抱えていらっしゃるあの御仁にはないだろう。アンネは「お父様には絶対に言わないけど」と付け足すことも忘れなかったが。

「まぁ、そのへんは今心配しても始まらんだろう。なるようになるさ。最悪、カミロかマリウスか……あるいは侯爵の手を借りるかも知れないけどな」

　俺がそう言うと、皆頷き、休憩を終えた。

　それからまたしばらく歩いていく。松明の明かりを見るに、さほど時間は経っていないはずだが、外は何時くらいなのだろう。こういうとき携帯できる時計の有り難みを実感する。

　前の世界でもあってもなくても変わらないような仕事ではあったが、それでも世間と時差を出さないために、腕時計（ボーナスで買ったＦ１チームにもスポンサーしているブランドのやつだ）で時間を確認していたものである。

　やがて、目の前に差し込む光が見えてきた。出口だ。俺たちの足が早まる。出口の光はどんどん大きくなっていき――

「ありがとう！ “黒の森”の主として、あなた達に感謝します！」

「私達、妖精族からも感謝を！」

　そこから出た俺たちを待っていたのは、リュイサさんとジゼルさん達妖精族の拍手だった。

====================================================

今週末の2/27にコミック第１巻が発売となります！

書店様によっては特典もついてきますので、ぜひお求めください！！

詳細は公式サイトまたは各書店様のサイトにてご確認ください。

## ささやかな報酬

2021年2月26日

　拍手に包まれて空を見上げる。日は中天を過ぎていたが、暮れるにはまだまだ時間がありそうだ。

　リディの案内でまっすぐ目的地に進めたのと、ヘレンたちのおかげであっさり片付いたのが大きいだろう。俺１人では相当に苦労していたに違いない。家族には感謝しないといけないな。

　明るいところに出てみると、ヘレンの防具には細かいキズがたくさんついていた。全て華麗に避けていたように見えても、ずっとギリギリのところを行っていたんだな。

　汚れ具合については洞窟を進んだのもあって、クルルやルーシーも含めてみんなどっこいどっこいだ。帰ったら早速井戸が大活躍しそうである。

　怪我はしていなくとも汚れと疲れでボロボロだ。しかし、その顔は成し遂げたことでキラキラと輝いているように見える。

　俺たちはリュイサさんの前に横一列に整列する。盛り上がっていた場が静まり返った。

　俺は一歩前に出てリュイサさんの目を真っ直ぐに見て言った。

「ご依頼、これで達成でよろしいですね？」

「ええ。もちろん」

　リュイサさんはニッコリと微笑んだ。後ろでサーミャ達が「やったぜ！」と手を打ち合わせている。妖精さんたちも再びワッと盛り上がっている。

　ニコニコと微笑んだリュイサさんが、なんでもないことのように言った。

「あなた達は依頼を達成したのだから、ちゃんと報酬は支払わないとねぇ」

　そうだ、すっかり忘れていたが報酬だ。俺としては、事情を知っているのに見逃してくれている時点で貰っているようなものなのだが、まぁ、他の家族の手前それをいうわけにもいくまい。

　それはそれ、これはこれとして受け取ろう。

「まずは腹の足しにもならない報酬からね」

　リュイサさんはお茶目っぽくウインクをしながら言った。彼女は表情を引き締めると、続けて宣言する。

「あなた達には“

“黒の守り人”。“黒の森”と掛詞にしているのだろうか。リュイサさんの言葉に合わせて、ジゼルさんを含めた数人の妖精さん達が俺達の前に並んだ。リージャさんとディーピカさんもいる。

　妖精さんたちは黒っぽい金属製の小さなブローチのようなものを手にしていた。ヒーターシールドのような形状に、木の意匠が盛り込まれている。彼女たちはペコリと一礼すると、俺達の胸元に（胸甲をつけているヘレンは肩口に）それをつけた。

「これをつけていれば、この森で襲われなくなる……なんてことは残念ながらないけれど、この森の妖精や精霊達はあなた達のお願いをなるべく聞いてくれようとするし、他所の森でも一目置かれるからね。他所の森で

　なにか名前だけかと思ったら、一応それなりのメリットはあるらしい。他所の森で使うことはないだろうし、そう願いたいところだが。

「“めんどくさがりの鍛冶屋”が珍しく気合を入れて作ったんで、売ったり捨てたりしないでくださいね」

　離れる前に、クスリと笑ってジゼルさんが言った。めんどくさがりだから、俺が妖精さん達の製品を作ったら喜ぶだろうと言っていた人か。

　元よりこうして貰ったものを捨てる気はない。俺たちが成し遂げた証でもあるのだし。めんどくさがりが頑張って作ったと聞いては余計に捨てたりする気にはならない。

　そういえば、クルルとルーシーはどうしたんだろうと思って少し振り返ると、２人は首からペンダントのように下げてもらっていた。ルーシーなんかはいつにも増して誇らしげに胸を張っている。

「後はそうねぇ……どっちから言おうかしら」

　リュイサさんがおとがいに手を当てて考える。

「それじゃあ、こっちからかな。少しは“森の主”らしいところを見せないとね」

　キラキラと、しかし少しいたずらっぽい表情を浮かべるリュイサさん。“森の主”らしからぬ軽い感じだな、とは内心思っていたが気にしていたのだろうか。

　いや、違うな。あれはそれっぽいことをしたいだけだろう。

「と言うことで、あなた達のお家の近くの水脈のうち、お湯が湧くものの場所を教えてあげましょう！」

　どうだ、と言わんばかりに胸を張るリュイサさん。ルーシーも「わん！」と一声上げて対抗するように再び胸を張るのだった。

====================================================

明日2/27にコミック第１巻が発売となります！

早いところではもう入荷していると思いますので、ご確認いただけると幸いです。

書店様によっては特典もついてきますので、ぜひお求めください！！

詳細は公式サイトまたは各書店様のサイトにてご確認ください。

## 残りの報酬

2021年3月1日

　温かいお湯の湧く水脈、つまりは温泉である。俺はおぉ、と思ったが、家族の皆はいまいちピンと来るものがないらしく、キョトンとしていた。俺は元日本人として大変に喜ばしいのだが。

　リケも実家近くに温泉があったと言っていたが、しょっちゅう行くものでもないので実感がないのだろう。俺が「冬くらいにはできればいいな」くらいのつもりでいたので、あまり熱心に普及活動に励んでいなかったせいもある。

「あ、あれ？」

　思いの外、反応が薄かったことにリュイサさんが困惑した。場が急に静まり返る。どうしたもんかな。

「それがあると嬉しいのか？」

　助け舟はサーミャから出た。俺は大きく頷いて肯定する。

「冬の寒い時期に温まるのはもちろんだが、この暑い時期でも湯に身体を浸けて汗を流すのは気持ちいいぞ」

「北方の風習か」

「いや……まぁ、そんなようなものかな」

　もちろん、この世界にも入浴の概念が皆無なわけではない。だが、貴重な燃料を使って大量の湯を沸かして浸かり身体を清めると言う行為が、上流階級はともかく庶民の間で日常的にできるかと言うと無理なので普及はしていない。

「ありがたく頂戴します」

「喜んでもらえるようでよかった」

　リュイサさんがほっと胸をなでおろす。俺としては大変ありがたいのは事実だ。温泉堀りと湯殿の建築が待っているのが何だが。

「それで、最後はお腹の膨れる話……と言っていいのかしらね」

「おっ」

　思わず声を上げたのはヘレンだ。ここまでの報酬については、傭兵としてはあまりうまみのあるものではない。“黒の守り人”が案外役に立つのではと思うのだけどなぁ。

　だが、直接的な報酬があるとなれば別だろう。ガメついというよりは、単に成果に見合う報酬を、ということだろう。実務的とも言えるかも知れない。

「金貨……は流石に用意できなかったから、いくつか宝石を渡すわね」

　そう言って俺の前に差し出されたリュイサさんの手のひらに、赤や青、あるいは緑の宝石が数個現れた。

　なんかもっと概念的なものか、あるいは貴重な金属でもくれるのかと思っていたので、ある意味では拍子抜けだが報酬に貨幣かそれに替えられるものを用意するのは当たり前と言われればそうである。

「“森の主”で“大地の竜”といえども、私はそのごく一部だから、今用意できるのはこんなものだけどね」

　そう言ってウィンクをするリュイサさん。詳しい価値はカミロのところへ持っていって鑑定してもらわないといけないだろうが、結構な価値になるんじゃなかろうか、これ。

　腹の膨れない報酬（それにプラスして居住権の認定）もあるし、辞退しようかとも考えたが、背後からくるプレッシャーに負け、

「では、こちらもありがたく頂戴いたします」

　と、俺は推しいただくようにそれを受け取った。受け取った宝石類をすぐに後ろにいたディアナに渡す。横からアンネが少し覗き込んで、目を輝かせていたので、ざっとした価値は後でアンネに聞けば分かるかも知れない。

「それじゃ、みんな疲れてるでしょうし、今日のところは帰って休むといいわ。水脈の位置については後日、ジゼルちゃんか誰かをやるわね」

「ええ。今日明日必要なものでもないですし」

　リュイサさんの言葉に俺は頷いた。地図かなにかでも良かったし、口頭で伝えてくれても良いと思うのだが、詳しい場所を知らせるのにそれでは何か不都合があるのだろう、と俺は思うことにした。

「今回は本当にありがとう」

　リュイサさんが手を差し出す。俺はその差し出された手を掴み、握手をした。何度目かの拍手が起こる。

　その時、リュイサさんは拍手に紛れて、俺にだけ聞こえるような声で言った。いや、言ったというのは語弊があるかも知れない。彼女は口を動かさなかったからだ。しかし、

「ちょっとお話があるから、また今晩ね」

　その言葉はハッキリと俺に届いたのだった。

====================================================

コミック第１巻が発売となりました！ 各書店様にてご確認いただけると幸いです。

書店様によっては特典もついてきますので、ぜひお求めください！！

詳細は公式サイトまたは各書店様のサイトにてご確認ください。

## 我が家の後片付け

2021年3月3日

　俺たちは拍手の中を帰路に着く。ジゼルさんたちには「病気でなくても、いつでもお越しくださいね」と言っておくことを忘れない。ジゼルさんたちは「ぜひ！」と笑顔で返してくれた。

「よし、疲れてるところすまないが急ぐか。松明はまだ使えるだろうが、なるべく早めに帰ろう」

　皆で大きく手を振ったあと、拍手を背に俺は皆に言った。皆特に異論はないようで、返ってきたのは頷きだ。空を見上げるとギリギリで日が落ちる頃には家に戻れそうである。

　急ぎはするが、周辺への警戒はしておく。“森の主”の依頼後とはいえ、自然の獣たちにとってそんなことは関係ない。獲物であると判断されれば襲われるだろう。

　帰り道もリュイサさんに送ってもらえば、その心配はないのだろうと分かってはいる。しかし、あんまりお世話にはなりたくないなぁ、色んな意味で、と思ったので家族だけで帰ることにしたのだ。

　リュイサさんは断って妖精さんたちだけは来てもらうってのも変だしな。

　そんなわけで、静かな森の中を俺たちは歩いていく。来たときと同じく、風が吹いていて日陰も多いので幾分マシだが、夏の太陽はしっかりと暑さをもたらしている。

　俺は流れる汗を拭きながら愚痴る。

「こうなると洞窟の涼しさが恋しいな」

　あの中はひんやりしていて、季節が違うのかと思うくらいの気温だった。俺は前の世界でエアコンを知ってしまっているので、それに似た快適さが恋しいのは仕方のないことである。多分。

「じゃ、あそこに引っ越す？」

　隣を進んでいたディアナが混ぜっ返す。俺は肩をすくめた。

「“黒の森”の更にそこの洞窟に住む鍛冶屋か。怪しいにも程があるな」

「それだったら私は来てないかも」

　俺が言うと、アンネの声が追いかけてきた。普通は１人で“黒の森”を進めという時点で二の足を踏むらしいのに、更にその奥にある洞窟へ行けとなると来られる人間は更に限られるだろう。

　ディアナと挟んで反対隣にいるヘレンもウンウンと頷いている。彼女レベルが来ないとなると、来ようと思う人間は皆無だろう。

「依頼してくれる人が全く来られないのは困るな」

「昼か夜か分かんないのも厳しそうだなぁ」

　俺より少し前に出て遠くを伺いながらサーミャが言った。足元ではルーシーも同じ方を向いて鼻をクンクンさせている。なにか獣がいるのかも知れない。

　サーミャがそんなに緊張していないということは、狼や熊なんかの肉食動物ではないのだろう。角鹿なんかの危険な草食動物であれば迂回すると言うだろうし。

「魔法の明かりが使えますけど、それは辛そうですね」

「資材の搬入で迷いそうです」

　リディとリケがサーミャに続く。

「俺も

　俺の言葉に、「違いない」とサーミャが笑い、そよそよと葉擦れの音が響く森に笑い声が加わった。

　帰りの道中は何事もなく家にたどり着くことが出来た。日はもうほぼ落ちていて、“黒の森”を更に黒く染めようと夕闇が包み込みはじめている。

　俺たちはテラスに集まった。我が家の凱旋はこれにて終了ということになる。

「皆、今日は俺のワガママにつきあわせてすまなかった。ありがとう」

　家族相手なのでしゃちほこばるのもな、とは思ったが、こういうのはケジメだ。前の世界で豚が主人公のアニメでも賊の頭領がそう言っていた。

「誰も大きな怪我をすることなく戻ってこられて、本当に良かった。まぁ、諸々は後に回して、これにて依頼は終了だ！ おつかれさん！」

　わ―っと暗くなってきた森にささやかな喝采が響いた。クルルとルーシーの喜ぶ声も一緒に響く。

「それじゃ、皆身体を綺麗にしておいてくれ。今日の夕食は豪勢にしよう」

　皆は「はーい」（と「クルルルル」「わんわん」）という了承の声を俺に返し、クルルの荷物を下ろした後、森の中の我が家へと入っていった。

## 宴とその後

2021年3月5日

　ざばり、と汲んだばかりの井戸水を頭からかぶる。夏の暑さを知らぬかのように冷たい水が素肌を流れ落ちる。それは気温と今日の討伐で火照った身体を清め、冷やしてくれた。

　と言っても、３０歳（中身は４０歳）のオッさんの素肌ではあるのだが。俺が先に身体を綺麗にさせてもらって、夕食の準備をはじめる。

　その準備の間が女性陣、つまりはクルルやルーシーも含めて俺以外の全員ということだが、彼女たちの順番だ。

　俺は濡らした身体を濡れた布でこすった後、もう一度頭から水をかぶって、濡れた身体を乾いた布で拭いた。

　風呂でなくてもさっぱりした気分にはなるし、これでも十分と思えなくもない。しかし、温泉が湧くところがあるときくと、それが恋しいのも確かだ。

　俺は若干の寂寥感も覚えつつ、着替えに用意した服を着て、倉庫に寄ってから家に戻った。

　今日の夕飯は豪勢にする。とはいっても“黒の森”にぽつんとある我が家である。今から街へ買い出しにも行けないので、倉庫の肉と調味料をふんだんに使うのと、量を多くするのとだ。

　胡椒マシマシでパストラミみたいにはしないにしても、いろんな味の品があるだけで、それなりに豪勢とは言えるし。

　まだ焼くだけでも食えそうな猪肉を味噌焼きにしたり、干された鹿肉をワイン煮のようにしたりする傍らで、無発酵パンを焼いたりと準備を進める。

　アレコレと作業をしていても、時々は手の空く時間が出てくる。最初は「にがりがあれば大豆と井戸水で豆腐ができそうだな」とか、「あの洞窟の深さくらい掘れば、ある程度気温の低い貯蔵庫が作れるんじゃ」とか、生活に関してとりとめのないことが頭をよぎった。

　いや、正確に言えば、あえて考えを頭から押し出していたのだが、すぐに思考は「今夜リュイサさんが何を言ってくるのか」になってしまう。

　あの様子だと俺にだけ伝えたい、あるいは伝えるべきことなのだろう。そして、リュイサさんは俺がこの場にいる理由……つまり転生してきたということを知っている。まぁ“森の主”の管理領域に、唐突に鍛冶場つきの家が出現すれば、それが分からんはずもないのだが。

　となれば、その辺の何かの話なんだろうな。一度居住許可は出してくれたわけなので、朝令暮改に「出ていけ」と言われることはないだろうが、それでもその可能性がないという保証は誰もしてくれないのだ。不安にもなろうというものである。

「ま、なるようにしかならんか」

　コトコトと湯気を立てる鍋をかき回して、俺はひとりごちた。せっかく貰った余生だし、なるべく穏便にかつのんびりと過ごしたいと思ってきた。

　しかし、あんまり意識したくはないことだが、それでも俺はこの世界から見てストレンジャーであることには違いない。家主から出て行けと言われれば大人しくそれに従って、なんとかしていこう。

　そして、また一から“いつも”を作っていくのだ。その時に誰がついてきてくれるだろうか。

　そう思ったとき、ガチャリと家の扉が開いて、サーミャが顔を出した。鍛冶場の方からくぐもった鳴子の音が聞こえる。

「お、いたいた。みんな終わったぜ」

「おう、こっちももうほとんど済んでるから、運び出してくれ」

　頭から暗くなりがちな思考を追い出して、俺は努めて明るく言った。サーミャには大きな感情の動きを察知されてしまうからな。杞憂かも知れないことで心配させるのもなんだし。

「おう。おーい、エイゾウのメシもいいって！」

　一瞬サーミャは怪訝そうな顔をしたが、扉の向こうにいる皆に声をかける。すぐに皆がドヤドヤと入ってきて、準備してある料理を外のテラスに運び出していく。

　これが最後の宴になるかも知れないな、そんなことを思いながら、俺も料理を持ってテラスに運んだ。

「それでは、討伐成功を祝して乾杯！」

『かんぱーい！』

　我が家流で始まった討伐成功の宴会はこうして始まり、そして盛り上がった。心のどこかにわずかばかり残った恐怖を流すには一番いい方法だ、と俺は思っている。

　ワイワイと話をしながら食べ物を食べた。いつもの味と言っていいくらいに食べてきたが、シチュエーションが違うと若干美味さも変わってくるな気がする。ましてや今は身体が欲している状態だから尚更だ。

　結構な量を作ったつもりだったのだが、皆でモリモリと食べると、食事はあっという間に無くなった。

　普段ならすぐに片付けてお開きなのだが、今日はなんとなく皆そのままおしゃべりを続けている。

　やがてヘレンが歌を口ずさみ始めると、それに合わせてサーミャがテーブルを叩いてリズムをとる。リケとリディはそれぞれの踊りを庭で焚いていた火の周りで踊り、続いてディアナとアンネが貴族のダンスを披露する。

　俺たち家族の、いつもとはちょっと違う、しかし、素敵な時間はこうして過ぎていった。

　そして夜半。俺はふと目を覚ますと、まっすぐに家の外に出る。暗いが勝手知ったると言っていいくらいには馴染んだ我が家だ、けつまずいたりすることなく、表に出る。

　今は前の世界で言えば何時なのだろうか。月が中天に差し掛かっていて、月明かりが庭を照らしている。草花が青白い光を反射して幻想的だ。

　その庭に、俺は１人の影を認めた。影にはもちろん見覚えがある。

「リュイサさん」

「こんばんは、エイゾウくん」

　リュイサさんはニッコリと微笑んだ。

「それじゃ、早速お話を始めようかしら」

　月を背負ってそう言ったリュイサさんに何故か迫力を感じ、俺はゴクリとつばを飲み込んだ。

## 夜の話

2021年3月8日

「そんなに身構えなくても大丈夫よ」

　月明かりの中、リュイサさんはそう言って微笑んだ。そう言われたからとあっさり信用できるかと言えば、それは別の話だが。

「立ち話もなんですから、あちらへ」

　俺は手でテラスへと促した。あそこにはまだ椅子が出してあるはずだ。

「それじゃ、お言葉に甘えて」

　リュイサさんは俺の前を歩き出した。別に隠している施設ではないし、場所は分かっている、ってことだろう。

　トーガのようにも見える服をまとった背中を無防備に晒しているが、これが俺への信頼なのか、それとも俺が危害を加えられないと分かっての自信なのかは分からない。

　一応ナイフは懐に忍ばせてあるが、こいつの出番があるとしてもリュイサさんに向けることはないだろう。“森の主”とやりあって勝つ見込みがわずかでもあると思うほど、俺は無邪気じゃないからな。

　俺とリュイサさんはテラスの椅子に向かい合って座る。前の世界でちょっと見た対談番組のようでもある。

　リュイサさんは、ほうと息を吐いてから言った。

「さて、それじゃあ始めましょうか」

　俺は頷いた。はてさて、一体どんな話が飛び出すのやら。

「こうやって２人だけで話ってことはある程度分かっていると思うけど、エイゾウくんの身の上のことよ」

「でしょうね」

　他に俺以外が聞くとまずそうな話はない。

「まず、もう言ったけど、あなたがここで暮らしていくことは“森の主”たる私もだけど、本体の“大地の竜”も認めているわ。『元はこの世界の人間でない』としてもね」

「ありがとうございます」

　俺はその言葉に頭を下げた。とりあえずここに居ていいお墨付きがあれば怖いものはない。こうなったら、侯爵閣下なんかのほうが厄介とさえ言えるだろう。

　そうは言っても、だ。俺のそんな心を知ってか知らずか、リュイサさんは言葉を続ける。

「で、その上でなんだけど」

　そら、来なすった。

「時々、ジゼルちゃんでも他の妖精族の子でもいいから、とにかく妖精族に『前の世界の知識』を教えてあげて欲しいのよ」

「前の世界……ですか」

「ええ」

「それを知ってどうするんです？ この世界の技術ではたとえ魔法があっても、実現不可能なものも多いですが」

“万年時計”のように電気を用いないが精巧な機構や、ちょっとした電気仕掛けのものならなんとか可能かもしれないが、階差機関以降のコンピュータは無理だろう。

　動力も蒸気機関くらいまでで、内燃機関までは到達できまい。魔法か何かで機関内部で爆発を起こせたとしても、普通は必要な精度で部品が製作出来ない。

　将来的に可能になるとして、今知る意味ってはたしてあるんだろうか。言い方は悪いが、江戸時代の人間にスマホの話をしたところで意味があるとも思えない。

　それに、だ。

「私としては、あまりこの世界に影響を及ぼしたくないのですが」

　そのために、板バネのサスペンションを導入するか迷ったし、井戸に手押しポンプをつけることも見送ったのだ。

　ウォッチドッグの説明から言えば、俺１人がジタバタしてもさほど世界に影響はないのだろうけどな。それでもわざわざ時計の針を俺の指で進めるような真似はしたくない。

「なるほど。エイゾウくんは生真面目なのねぇ」

　うふふ、とリュイサさんは笑った。

「そう言うだろうとは思ってたけど。だから妖精族の子に、って話なのよ」

　リュイサさんの言葉を俺は一瞬飲み込めず、目を白黒させた。しかし、少し考えれば分かることだった。

「妖精族の言うことを信じるような人はそうそういないから……？」

「ご名答」

　俺の言葉にリュイサさんは音をさせずに手を打ち合わせた。

「そもそも存在を知ってる人がそんなにいないし、この世界ではよく分からない理屈を言ったところで“妖精の戯言”と思われるのがオチでしょうね」

「この世界では実現不可能なものも多いですが、逆に言えば実現可能なものもあるんですけど……」

「そういうのは基本漏らさないようにするし、漏れたところで“妖精が授けてくれたインスピレーション”にカウントされるでしょ。いずれエイゾウくんが気に病む必要はなくなるわけ」

「ふむ……。そうそう、大事なのことを聞いてませんでした」

「なにかしら」

　リュイサさんは微笑みを絶やさず言った。そこになにか裏の意図を感じる人間であれば、相当に警戒しそうな微笑みだ。

「そもそも、この依頼の意味はなんですか？ どこに漏らすでもなく、単に情報をおさえておきたいだけなら、他にも方法があるのでは？」

「ま、普通はそう思うわよね」

　リュイサさんは頬に手を当ててため息をついた。

「これはどちらかといえば“本体”の要求なのよ。なので、細かいところまでは私もわからないのよね」

「“大地の竜”の？」

「ええ。そして、私はそのごく一部に過ぎない。私から“本体”の全てを把握することは不可能なのよ。エイゾウくんには申し訳ないけどね」

「いえ、それは仕方ないです」

　とはいえ、だ。そうなると「よく分からんがとにかく教えてくれ」という話になる。ここまで誰にも言わずにいたことを、じゃあ、と教えていいものだろうか。

　俺がウンウン唸っていると、リュイサさんは小さく笑った。

「返事は今でなくてもいいわ。後日、温泉の水脈を教えるって言ってたわよね？ そのときジゼルちゃんにでも返事をしてくれれば、私に伝わるから」

「……わかりました」

　それじゃあね、とリュイサさんは手を振り、姿が掻き消える。俺は椅子に深く座り直して大きな大きなため息をつくのだった。

## 知恵のありか

2021年3月10日

　リュイサさんがかき消えてから、俺は月を眺めながら考える。

“大地の竜”がなぜ、俺の知識を欲しているのか。この世界が順調に前の世界のような歴史を重ねるとしたら――この世界には魔法があるし、地理条件も異なるので全く同じような歴史にはならないだろうが――俺は未来からやってきたのと同じことになる。

　未来に何が起こりえるのか、技術情報なんかから知っておきたい、ということだろうか。

「ただの知的好奇心ってことは……ないか」

　俺は独りごちて首を振った。そんなことなら妖精さん達に伝えさせるような回りくどいことはしないだろう。

　可能なら、ではあるが本人が来て聞けば良いだけだし。それをしない理由があるのだ。“大地の竜”だけが知っていても仕方がない、みたいな。

　もしかすると、それこそ妖精さん達が気まぐれに誰かに伝えることを期待しているのだろうか？ 他のさまざまな理由よりは、それが一番有り得そうに思える。

　リュイサさんも言っていたが、それが実現可能な技術の話なら天啓だし、不可能だったり理解できなければ、ただの戯言だ。

　それに、俺は妖精さんに伝えるだけだから、それがどう影響するかについては俺の関知するところではない、ということもできる。単純な板バネ構造だから、と作ってカミロに教えたサスペンションも、見てインスピレーションを受けた誰かがとんでもない発明をしないとも限らないわけだが、そうなったときのことまでは正直面倒を見きれない。

　で、あるならば、だ。核分裂反応みたいな概念的にも説明しにくい（し、俺もそんなに理解してない）ようなものはともかく、それ以外のものは伝えても良いかも知れない。

「王様の耳はロバの耳」ではないが、秘密を抱えないことで精神の平穏をはかることができるかも知れないし。

「よし、これで明日の朝に妖精さんが来ても大丈夫だな」

　俺は大きく伸びをして、自分の寝室に戻った。今からでも多少寝る時間はあるだろう。ゆっくりとベッドに横になって、俺は“いつも”に戻っていった。

　翌日。夏になって暑いこと以外は、皆昨日の出来事なんてなかったかのように、いつもどおりふるまっている。

　クルルとルーシーは朝一の水汲みに意気揚々とついてきたし、朝飯も神棚へのお祈りもいつもどおり、鍛冶仕事を手分けしてワイワイと、集中しないといけないところは静かにやっていた。

　それでも本当に何もなかったようにはできない。昼メシや晩メシのときには話題に上る。

　今も晩飯の鹿肉を焼いたものを頬張りつつ、ヘレンが熱弁している。

「アタイが思うに、あの叫び声さえなけりゃ、もっと楽だったはずなんだよな」

「あれで一瞬怯んでタイミングを逃した場面は確かにあるな」

「そうそう。幸い臭いはなかったんだし、怯む要素はあれくらいだった」

　無論、

「今回は洞窟だったから仕方のない面もあるけど、やっぱり間合いの広い武器はもう少し揃えたほうが良いんじゃないかしらね」

「それも考えないといけないな。相手が誰になるのかはさておくとしても、この辺りで戦闘になることを考えたら、長いに越したことはない」

　うちにある短槍はせいぜいが俺の身長と同じかもう少し長いくらいだ。それでも十分と言えなくもないが、やはりもう少し長い武器も用意しておくほうがいいだろうなぁ。

「ここに籠もるなら、

　次の肉にかぶりついて、ヘレンが言った。俺は片眉を上げてヘレンに返す。

「鍛冶屋にか」

「鍛冶屋にだよ」

　ニヤッとヘレンが笑った。目は彼女が本気であることを物語っている。

　いや、そこにロマンを感じないかと言われると、感じてしまうのだけども。自分の家に秘密兵器があるとかワクワクしないわけがないのだ。４０代でも男の子だしな。

　まぁ、例えば俺もヘレンもディアナもいない時に、滅多なことでは来られないとはいえども、万が一にも熊なんかがここに来たら厄介な事態になることは火床の火を見るより明らかなわけで。

　そんな時に対応できる兵器を備えていたほうがいいのではないか、と考えれば荒唐無稽とも言い難い。

「考えとくよ」

　そんなことを考えながらの返事に、ヘレンだけでなくリケも目をキラキラさせ、俺は小さく苦笑するのだった。

## 次のいつもを

2021年3月12日

　我が家の要塞化計画はさておくとして、とりあえず整備しておきたいものがいくつかある。

「クルル達の小屋と倉庫への渡り廊下なぁ」

　サーミャがスプーンを咥えて言った。いつもならリケがたしなめるところだが、彼女は今４杯目の火酒で肉にとりかかっていて、忙しいらしい。

「うん。近くに温泉が湧くなら、そこに湯殿を建てるだろ？ あとからそこにも繋ぎたいし」

「湯殿？」

　スプーンを咥えたまま首を傾げるサーミャ。

「……ろくに人っ子の来ない“黒の森”の中だといっても、周りから丸見えのところで風呂に入るわけにもいかんだろう？ ちゃんと目隠しになるような建物を建てるんだよ」

「へぇ」

「服の脱ぎ着もその建物で出来るようにすれば便利だろ？ 俺も皆も家にいる間、何も気にしなくて済むようになるし」

　今は各自の部屋で体を拭いているので、部屋に侵入でもしなければ女性陣の裸を見てしまうことはない。それに長い時間、部屋にこもるようにもしている。

　しかし、俺が部屋の外に急ぎの用事（だいたいは生理現象だろう）があって、その時に何かで出くわしてしまわないとも限らない。

　だが、建造物として独立していれば、その心配もほぼ皆無になるわけである。俺も気兼ねなく家の中をウロウロ出来る。

「そういうもんかね」

　鼻の頭にシワを寄せてサーミャが言った。俺が最初に助けたときには見たかどうか気にしてたと思うが、これは家族に対する気安さのあらわれだろうか。嬉しいような、引っかかるような微妙な気持ちである。

「そういうもんだ。まぁ、温泉の場所が確定してから全部まとめて建ててしまうのもありっちゃありだが、１日じゃ絶対無理なんだし、必要だと分かってるなら今のうちに建てられるものから建てていったほうがいいんじゃないかと思ってな」

　あれだけの魔物を倒したのだ、しばらくは湧いてくるまい。であれば、当面はいつもどおりの納品をしていれば事もなしのはずである。後々必要になると分かっているものをさっさと片付けるなら、そういうときにやっておくに限る。……とか言ってると忙しくなっちゃったりするんだけど。

「後から渡り廊下を追加で建てると、形がいびつにならないですか？ 最初からきれいな形に設計したほうがいいかも知れませんよ」

　静かな声でリディが言った。後付けの施設に何らかの無理が生じるのはよくあることなのは否定できない。

「畑のど真ん中とかでもない限りは結構融通がきくんじゃないかな、と思ってるんだけど、甘いかな」

　俺がそう返すと、リディは細いおとがいに手を当て、つぶやくように言う。

「ここの庭、広いですからね……」

「温泉が湧くところがちょっと離れてるとかだと、そんなに長い渡り廊下は建てないでおこうってなって、待ってる時間もったいないかもだし、近場なら調整出来だからさっさとやっちゃいたいな、なんて」

　何となく、欲しかったカメラを追加購入すべく奥さんにプレゼンしている旦那のような言い方になってしまった。心境的にはさほど違いはないが。

「どのみち必要なのは確かですし、必要になってから慌ててやるよりはいいかも知れませんね」

「だろ！？」

　少しの時間考え込んでいたリディの言葉に、俺は思わずテンションを上げてしまう。リディは「困った人だなぁ」とでも言うように、クスリと笑う。

「皆もいいかな」

「アタシは構わないよ」

「親方の言う方でいいですよ」

「私も絶対にやっておきたいことはないし、良いわよ」

「アタイも」

「住みよくなるのなら私も賛成」

　積極的かはともかく、皆賛成してくれた。これで倉庫のものを出し入れするときにも雨を気にしなくて済むようになるし、クルルたちの小屋へも雨の日だろうと気軽に行けるようになる。そうして、晴れの日も雨の日も、同じようにいつもの暮らしが出来ればいいな。

　ささやかな生活向上ではあるが、俺は出来てからのことを思いつつ、どういう計画にしようか、考え始めるのだった。

## 暑さ

2021年3月15日

　それから数日間、納品するための品物を作っていた。その間、夏の暑さについては厳しくもあったが、倒れる者も出ずに過ごすことができた。元々暑い鍛冶場で働いている家族ではあるが、それでも事故なく過ごせたことはよかった。

　今のところ井戸を掘っておいて良かったと思えたのは、

　しかし、足りなくなるかもと思った日もあったので、あれで本当に足りなくなっていたら井戸の出番であったわけだ。今後そうなる可能性は十分にあると考えれば、慌てて作った甲斐がある。

　そうして、納品の日。いつもの通り荷物と俺達を積んで、クルルの荷車は森の中を進み出す。今日も太陽が照りつけていて、森の中であってもなかなかの暑さをもたらしていた。

「この木陰が多い森の中でもこの暑さかぁ」

「親方は北方出身だからか、暑さに弱いんですね」

「いや……うんまぁ、そうかもな」

　正確には長年のエアコン生活（ほぼ家と職場を電車で往復するだけの生活で、その全てでエアコンが効いている）に慣れきってしまった面が大きいと思うのだが、それを話して理解できるのはリュイサさんくらいなものなので、そういうことにしておいた。

　実際のところはと言うと、日本の夏のように蒸し暑いらしい。インストールされた知識にはそうある。ここらは湿度もそれなりにあるにはあるのだが、より日光が直接暑い感じで、暑さの質が違うから体が戸惑っているのもあるだろう。

「街道はもっと暑いのかしらね」

　膝の上でぐでっとなっているルーシーを撫でながらディアナが言った。なお、ルーシーがぐでっとなっているのは暑さにバテているのではなく、単に力を抜ききっているだけである。

「草原の草は伸びてたけど、日の光は遮られそうにないから、暑いんじゃないか？ ルーシーには布か何かで日陰を作ってやるといいかも」

　俺がそう言うと、ヘレンが荷物を漁って布を取り出した。まだ森の中なのでかぶせたりはしない。尻尾をパタパタさせているルーシーを見て、ヘレンは相好を崩す。

　荷車をさすりながら俺は言った。

「これも改良して幌でもつけたほうが良いかな。日差しを遮るし、雨の時にも荷物を大きく濡らさずに移動が可能だし」

「でも、森の中を進むからねぇ」

「枝にぶち当たるんじゃないかなぁ」

　周りを見回しながらアンネが言って、サーミャが引き取った。。鬱蒼とした森である。樹々は奔放にその枝を伸ばしている。幸い座っている間はその枝葉にぶち当たるということはないが、アンネなら今この状態で立てば頭をぶつけてしまうだろう枝がいくつか見える。

　そして幌は中で立てるくらいの高さが欲しい。ということはつまり、その高さで幌を作るとあちこちに引っかかるだろうことが容易に想像できた。

「まぁ、何かしら考えておくか」

　俺はそう言って視線を前に戻す。森の出口が見えていて、その向こうではより強く日が差しているのが分かる。

　そよそよと揺らぐ緑の草原が広がっている。すっかり背を伸ばし、所々では日光を求めてだろうか、人の背丈ほどもある箇所が見える。

　風がその表面を撫でていくのが、なびく草の動きでわかった。

「これはこれで綺麗ですね」

　リディがその様を見て感心したように言った。暑さ、というファクターを除けば、美しい光景であることには違いない。

「日が直接差すとやっぱり違った暑さがあるな」

　刺すような、といえば良いのだろうか。頭や背中を焦がすような鋭い暑さがやってくる。

　ルーシーはさっきへレンが取り出した布を屋根のように荷物にかけて作った日陰に潜り込んでいる。多少は風も通るらしく、快適そうに尻尾を振り回していた。

「クルルは平気そうか？」

「クルルルルルル」

　俺はリケに聞いてみたのだが、「本人」から返事がきた。あの声の感じは機嫌がいい時のだから、きっと平気なのだろう。

「キツくなってきたら、ちゃんと止まるんだぞ」

「クルー」

　分かった分かった、とでも言うように、クルルは軽く頭を振って一声鳴く。せっかく機嫌がいいのに余計なことを言ってしまったかな。

　あるのかどうか分からないが、もしクルルに反抗期が来てしまったら、俺は相当なショックを受けるに違いない。見ればディアナも複雑そうな表情をしているから、同じことを思っているようだ……多分。

　そんな未来の杞憂も載せて、クルルの牽く竜車は暑い夏の日差しの中、一路街へと街道を進んでいった。

## 街の夏

2021年3月17日

　日の光がジリジリと体を焼く。これは幌とまではいかずとも、屋根みたいなものは付けた方が良いかもしれないなぁ。

　四隅に長い棒を立てて、布を張るみたいな方式なら森の中や荷物の積み下ろしの時なんかには畳んでしまえるからありかも知れない。

　問題はいささか見た目がよろしくないということだが、利便性に優先するものはあるまい。別にこれで諸国漫遊したりするわけでもないし、うちは貴族でもない。いや、２人ほど貴族はいるのだが。

　それでもまだ前の世界の夏ほどではないし、風が吹けば森の中ほどではないにしろ涼しさはあるので、更に暑くなるようなら考えよう。すぐ出来るし。

　暑いと獲物を待つのも命がけになってくるからなのか、野盗のたぐいが出ることもなく、街の入り口に辿り着いた。

「どうもー、今日は暑いですねぇ」

　いつも入り口で見かける衛兵さんに声をかける。彼は軽く手を上げて返事をしてくれた。

「おー、あんたらか。すっかり夏だなぁ」

　彼はそう言って、腰に提げた水袋から一口飲む。さすがに金属鎧を着けて立ちっぱなしだからなぁ。水分補給の重要性を知っているのも、科学的なものというよりは経験則からくるものに違いない。

　彼はふぅと一息ついたあと、一瞬だけ俺たちに視線を飛ばすと、すぐに視線を街道に戻す。

　俺たちは通って良い、ということだ。顔なじみであっても最低限のチェック（本当に最低限ではあるが）だけは欠かさない。

　そんな彼に何事もおこらないことを内心祈りつつ、通り過ぎるときに頭を下げた。

　街の賑わいはそんなに変わらない。少しだけ人の出が少ないかな、というのと、街に住んでいるのであろう人々の服装がやや軽装ということくらいだ。

　一方、他所から来たっぽい人達はすこし着込んでいる。防寒というよりは純粋に身体の保護だろうな。我慢できなくて脱ぐほどではないのだろう。つまり、多分この場でいちばん暑がっているのは俺なんだろうな。

　いつもの強面で通りを睨むように座っている屋台のオッさんも、いつもより少し薄着で小さく荷台のルーシーに手を振っていた。クルルが見えたであろうくらいからちょっとソワソワしていたので、楽しみにしてくれているのだと思うとちょっと嬉しい親心である。

　気がついたルーシーが「わんわん！」と声を上げ、尻尾をブンブンと振るとオッさんの相好が少し崩れた。あのオッさんが何者かは知らないが、そのうち撫でるくらいのことはさせてやろう……。

　カミロの店の倉庫に荷車を入れ、荷車から外したクルルとルーシーも連れて裏手に行くと、いつもの丁稚さんが飛び出してきた。彼も半袖短パンになっている。少年という言葉そのままの風貌にはよく似合っていた。

「やあ、暑いねぇ」

「そうですねぇ。あ、クルルちゃん達はあっちへどうぞ」

　丁稚さんが指した先には、壁に長い木の板が立て掛けてある。結構広い範囲で、クルルでも余裕で座ることができそうだ。

「あそこだと日陰になるので」

「おお、すまないな、ありがとう」

　俺はそう言って、丁稚さんの頭をガシガシと撫でる。丁稚さんはちょっとくすぐったそうにした後、クルルとルーシーと一緒に移動していった。ルーシーが足元に体を擦り付けているが、あれは丁稚さんの脚をもつれさせようとしているんだろう。

「“おいた”したら、遠慮なく怒ってくれていいからな」

「いえ、大丈夫ですー！」

　丁稚さんはつっかえつっかえ、日陰に入っていった。俺たちは微笑ましい気分でそれを見送りながら、中に入る。俺の肩のＨＰは順調に減っていた。

「暑くなってきたのにすまんなぁ」

　カミロは商談室に入ってきて、開口一番そう言った。番頭さんはいない。先に品の確認をしに行ったんだろう。

「仕事だからな。ここからの収入がなかったらメシが食えないよ」

　俺は苦笑してそう返す。……そう返しはしたが、嘘といえば嘘である。家族がクルルとルーシーも含めて９人いたとしても、しばらくは何とかできるだけの蓄えがある。

　それに、食料も燃料もある程度は自前で調達できている。もし今この瞬間、契約打ち切りのようなことになっても、１～２年くらいはもたせられるだろうな。どうしようも無くなってきたら、皆にはそれぞれの場所へと移って貰うしかないが、それはだいぶ先の話のはずである。

「そうか。まぁ、雨季と違って雨が続いたりとかじゃないからな。来てくれるなら俺も助かる」

「売れてるのか」

「まぁね」

　カミロはニヤリと笑う。これはなんかある時だな。俺の近くに座っているヘレンから僅かばかりの殺気が放たれた。これはイラッとしたんだな、きっと。

「お前から預かってた、というか教えてもらったやつがあっただろう？」

「教えた……？ ああ、サスペンションか」

　俺が言うと、カミロは「そうそう」と頷く。

「あれの量産を始めることができてな。手始めにうちの馬車につけていくことにしたんだよ。いやぁ、あれはいいな」

「おお、そうか！」

　ちょっと前に「そろそろ量産が始められそうだ」とは言っていたが、とうとう始まったのか。これで物流が少しスムーズになっていくはずである。

　そして、物を運ぶことがスムーズになるということは、すなわち軍隊なんかの輸送もスムーズになるということだ。それが何を引き起こすのかまでは、神――大地の竜でもいいが――ならぬ俺には分からない。

　なるべく世界が平穏でいてくれると嬉しい、と願うより他ない。もしかするとリュイサさんが接触してきたのは、その辺もあるのかも知れないが。

「で、ちょっと遠くまで運べるようになったんで、その分、お前のものも遠くまで持っていってるんだよ。今のところは売れ行き好調ってところだな」

　カミロの言葉に、小さく「おぉ」と言ったのはサーミャとリケだ。ここに卸す商品には彼女たちの手になるものも含まれている。それがよく売れていると聞くのは純粋に嬉しいだろう。俺だってそこは嬉しい。

「なるほど。数を増やしたりとかは……」

　俺がそこまで言ったところで、カミロが首を横に振る。

「ま、ここに持ってくりゃいくらでも捌いてやるけどな。わざわざ増やしてもらう必要まではないよ」

　ふーっとため息をついたのは、うちの家族の誰かだ。誰かまでは分からなかったが。ガチャリと扉を開けて、番頭さんが入ってきた。カミロは言葉を続ける。

「で、あのサスペンションと合わせて、今回はこれくらいだろうってことになった」

　番頭さんは手にしていた革袋をテーブルに置いた。俺は中を確認する。

　置いたときの音からまさかな、と思っていたが、そこにはたくさんの金貨が詰まっていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

書籍版４巻が５月８日に発売となります。まだAmazon様などで予約が始まっておりませんので、始まりましたらあらためてお知らせいたします！

https://kadokawabooks.jp/product/kajiyadehajimeruisekai/322101000189.html

## 報酬と前払い

2021年3月19日

「おいおい、こりゃあ一体なんだ」

「なんだって、金だよ」

「いや、そりゃ分かってるが……」

　すっとぼけた答えを返したカミロに俺は苦笑する。俺が聞きたいのがそこでないことは彼も理解しているだろうとは思うが。

「それはサスペンションの分だよ」

「いらないと言ったと思うが」

　俺がそう言うと、カミロは大きく溜息をついた。

「そうは言うがな、エイゾウ。俺はこれからサスペンションで儲かるわけだ。まぁ、まだ他所には売ってないから、これは俺の予測だけどな」

　俺は頷く。前の世界の知識から見ても、ほぼ確実に売れると思う。そのあたりの権利の概念なんてほぼないも同然だから、ガンガン真似もされるだろうし、早晩頭打ちにはなるだろうが、それまではカミロの独占状態だ。

　カミロのことだ、その頭打ちまでの期間をなるべく伸ばす方策も練っているに違いない。でなければ、彼がおいそれと外に出すわけがないのだ。

「その時にタダで儲けていたら、売れるたんびにお前に申し訳なく思わなきゃいかんわけだ」

　俺は小さく鼻を鳴らす。

「へっ、お前がそんな

「心外だな。わりと繊細なんだぞ」

　わざとらしく悲しそうな顔をしてみせるカミロ。しかし、すぐに笑顔に戻る。

「ま、それはともかくだ。お前はもう少し儲けることを覚えた方が良いな」

　大きくウンウンと頷くリケ、ディアナ、アンネ。たびたび言われていることではあるんだが、いまいち実感が湧かないんだよな……。

　その一番の理由は、俺が作っている色々な製品が、今のところチートの手助けで作っているということだ。いわば「借り物」の力なので、それで儲けるのは気がひけると言うかなんというか。

　しかし、この理由をカミロを含め皆に言うわけにはいかないしな。俺は腕を組んで、首をひねる。

「うーん、そういうもんかね」

「そういうもんだ。正当な仕事には正当な報酬、そうしたほうが俺も気兼ねがないってのは本当だしな」

　からから笑うカミロ。ふと見ると、番頭さんとも目が合ったが、彼もほほえみながら頷く。

「そういうことなら、これはありがたく頂戴しておくよ」

　俺は金貨の詰まった袋の口を締めようとして……その前に、１０枚ほど抜いてテーブルに置いた。それを見てカミロは片眉を上げる。声の位置からしてアンネのものらしき、「あっ」という声も聞こえた。

「……これは？」

「前払い。北方の“コメ”と言うものを入手してほしい。栽培は考えてないから、食料としてでいい」

　前の世界の日本人が想像する、水田で育てる水稲が成長するにはなかなかに厳しい気候条件や作業が必要である。水稲に比して食味や収量に劣る陸稲なら、あの森でもワンチャンなんだろうけどな。とりあえず前の世界のものほど美味くなくても、一度米を口にしておきたいのである。元日本人だし。

「それと……」

「まだあんのか」

　大げさに驚くカミロに、俺は頷く。

「珍しい金属があればなんでもいい。入手しておいてくれ。金はここから出してくれていいし、足りなければまた持ってくる」

　カミロはさっきついたのと同じくらい大きなため息をつく。

「物好きだなぁ」

「まぁな」

　そう言って笑いあう俺とカミロ。

　ふと見ると、珍しい金属と聞いてリケが目を輝かせ、ディアナが大きくため息をついている。リディもアンネの肩に手をおいて、「ああいう人ですから」とよく分からない慰めをしていた。サーミャとヘレンはこのあたりに興味はないらしい、姉妹みたいに揃ってあくびをしている。

　カミロはそれを見てニヤニヤと笑って言った。

「勝手に前払いして良かったのか？」

「いや……まぁ……大丈夫……だと思う」

　俺は少しだけ背中に冷たい汗が流れるのを感じながらそう言った。金貨１０枚というとかなりの大金ではあるのだが、うちには鍛冶屋としては不相応なくらいの蓄えがあるし、今貰ったぶんでも袋に残る金貨のほうが多いくらいなのだ。

　ディアナが再び大きくため息をつく。

「あなたが作ったもので稼いだんだからいいんじゃない？」

　語気にやや鋭いものがあるが、仕方ないなぁと苦笑しながらディアナが言った。皆も頷いている。とりあえずこれで事後承諾ではあるが了承を得た。

「じゃ、じゃあ、用事も済んだし早く帰ろうかな。また２週間後に来るよ」

　俺は慌てて席を立つ。カミロは今日一番の呵々大笑をしながら、

「おう、またな」

　と“いつも”の商談を終えるのだった。

## 防犯

2021年3月22日

　商談室を出ると、ほんの僅か暑さが増したように感じる。廊下は日が差すからな……。

　階段を降りて裏庭に向かう間、俺にアンネが話しかけてきた。

「宝石はよかったの？」

「ん？ ああ、あれか」

　アンネが言っているのは、

「今すぐ換金しなけりゃならんこともないし、金貨に替えるよりはあのままのほうがかさばらんで済む」

「まぁ、そうねぇ。結構価値のありそうなのもあったし」

「鍛冶屋目線だと“面白そう”なのは無かったけどな」

　ちらっとチートで確認した限り、貰った中に希少な金属は含まれていなかった。本当にただの、と言っては語弊があるだろうが、宝石以外の何物でもない。

　その価値を今知っておく意味もそんなにはなさそうだし、しばらくはあれもうちの資産としてしまっておかれることになる。

「でも、そろそろ金貨だの宝石だのをしまっておく場所は考えないといけないかもなぁ」

　こうして２週間に１回なんていうペースで街と往復していると忘れてしまいそうになるが、他に誰来ることもない“黒の森”の奥にある我が家である。気楽に行き来ができるような場所ではない。

　迂闊に足を踏み入れれば迷う鬱蒼とした樹々に、天然の警備兵として機能してしまっている狼達もいる。イレギュラーにはなるが熊や猪、鹿たちも本来は相応に危険な生物なのである。それに出くわせば無事では済むまい。

　よしんば付近まで来られたとして、“人避け”の魔法があの家の周囲にはかかっている。それを突破できなければ我が家へたどり着く事はできないのだ。警備が厳重な基地の中に住んでいるようなものである。

　逆に言えば、これらを全て突破できる人間（例えばヘレンやアンネだ）は相応に実力と、それに運があるということになるわけで、そんな人間に留守を狙われたら、多少の防犯をしていたところで意味はない。

　なので、防犯については軽く考えがちなのも、いたしかたないことなのである。しかし、それは今後も無防備なままでいい理由にはならんわけで……。

「隠し金庫まではやりすぎとしても、ちょっと盗むには厄介な何かが必要かも知れないわね」

「俺が本気を出せば、宝剣でもなけりゃ砕けない金庫は作れると思うし、作って倉庫にしまっておくのはありだな」

　苦労して倉庫から運び出し、ちょっと離れたところで中身を確認……と思っても周囲は全て“黒の森”だ。中身の確認をしている間も常に危険がつきまとう。

　かといって、重い金庫を森の外へ運び出すのも、それはそれで大変に苦労するだろう。そんなものを盗んでいこうと思うやつはそうはおるまい。

「倉庫に？ 目が届かないわよ？」

「家でこそ泥と出くわして万が一の目に遭うよりは、知らん間に持っていってくれたほうが、まだ俺たちの危険が少ないだろ」

「クルルたちは？」

「あの子らは賢いし勘が鋭いから、ヤバけりゃ逃げてくれる。そうでなきゃ、そもそもどこに置いてあろうと俺たちに警告してくれる……はずだ。全く繋いでないし」

　ドヤドヤと実力者複数人に押し寄せて来られた場合も、諦める他ない。家と鍛冶場の放棄も想定に入れて動く必要がある。

　アンネは大きくため息をついて言った。

「エイゾウも重々自覚してるとは思うけど、うちには“森の中の鍛冶屋”としては分不相応な金品があるってのは覚えておいたほうが良いわね。カミロさんもエイゾウに何かありそうなら排除しようとするだろうし、それは侯爵閣下や伯爵閣下も一緒だろうけど、それでも抗えないときってのはどうしてもあるから」

「それは……そうだな」

　王国においてはほぼ最高レベルの人間とつながりがあるとは言え、それが安全を保証してくれるわけではない。例えば帝国皇帝陛下が直接手を下したり、といったことも非常に難しい話ではあるが不可能ではないのだ。

　なにせ知らない人間から見れば、俺はただの鍛冶屋のオッさんでしかないわけだし。いや、実際に鍛冶屋のオッさんでしかないんだが。

　それにずっと気になっているのは、マリウスの――エイムール家の騒動のときに、カレル（エイムール家の次兄で、伏せられているが今は故人である）に手助けをしたのは誰かという話だ。

　あれはマリウスもディアナも「カレル１人で出来ることではない」と言っていたし、相応の人物が手引していたと見て間違いない。それは関わった人間全ての見解でもある。それを考えれば……。

「うーん、我が家の要塞化と、避難用の家の建築も視野に入れるべきか……？」

　ポツリと漏れ出た俺の小さな言葉に、喜ぶ声とドン引きする声が混じって裏庭に響いた。

## すれ違い

2021年3月24日

　カミロの店の裏庭に、それはあった。大きくそびえ立つ木の板に囲まれたそれはさながら要塞のようでもある。

　いや、それは流石に言い過ぎか。丁稚さんがそうやって作ってくれた日陰で、うちの娘２人は寝てはいないものの、ゴロリと転がっていた。

　寝転んでいるうちの娘さんたちのそばで座っていた丁稚さんが、俺たちがやってきたことに気がついて立ち上がる。

「あ、どうも」

「いつもありがとうな。これ大変だったろ」

「いえいえ、お店のみんなも手伝ってくれましたので」

「へぇ、なるほど」

　いつもお守りに借り出してしまって悪いなと思っていたのだが、案外この店の皆も丁稚さんとうちの娘達とのやり取りを微笑ましく見守ってくれているのかも知れない。

　それならばと、俺はいつも渡しているチップをいつもよりかなり多めにしておいた。働きには報酬で報いるべし。俺が言っても微妙に説得力がないような気はする。

「手伝ってくれた店のみんなとわけてな」

「いつもすみません」

「なに、こちらこそ」

　ペコリと下げた丁稚さんの頭を、俺はガシガシと撫でた。

　気がつけばクルルとルーシーは起き上がり、ルーシーはディアナの周りをトテトテと走り回っている。ディアナは、

「こらこら、危ないわよ」

　なんて言っているが、デレッデレなのを隠しきれていない。ルーシーが足元にいるので、俺はディアナのそばにいなかった。つまり、俺の肩は今のところ無事ということだ。

　クルルは倉庫の方へ向かうリケとリディの後ろをついていった。自分が何をすればいいのか完全に理解しているように見えるのだが、親バカというものだろうか。まぁ、自慢の娘だ、多少の贔屓目はしかたない。

　荷車を繋いだら、すぐに皆乗り込んで街を後にする。何もなければ次に来るのは２週間後になる。

　次来るときにはこの街は様子を変えているだろうか。それとも同じだろうか。そんなことを考えながら、俺は街行く人々を眺めていた。

　帰りの道中も何事もなく、無事に家へと帰り着くことができた。基本何事も起きないので、もしかしてこの世界は安全なのではと勘違いしそうになる。

　しかし、街道では衛兵隊の巡回が頻繁であること、森ではサーミャが面倒なところは避けてくれているのが大きい。このどちらかがなければ、結構な確率で厄介事に巻き込まれていたに違いない。

　そのぶんの反動なのか知らんが、厄介事が起きるときにはたいてい大事なのが難ではある。でも、これは衛兵隊もサーミャも関係のない話だからな……。

　いつものように家に帰って、荷物をおろしていると、先に家の方に行っていたリケに呼ばれた。何事かと行ってみると、彼女は木切れを手にしている。

「これが扉の前に置いてありました」

　リケに差し出された木切れを手に取る。見ると表面に傷をつけて小さな文字が書かれていた。それを読むと、

“エイゾウさんへ　今日寄らせていただいたのですけど、お留守のようなのでまた来ます　ジゼル”

　とある。スッとした文字で傷を入れただけにしては読みやすい。これ、俺があげたナイフで書いたのかな。

「ジゼルさん、来てたのか」

「みたいですね」

　おそらくは温泉の場所の話をしに来たのだろう。“病気”の方なら帰らず待っていただろうし。温泉の場所の話は、早いと嬉しいが遅くても困らないというやつだし、次来たときにはおもてなしするか。

「こう言うときに来たのが分かるなにかを作ろうかなぁ」

　ほとんど客の来ない家ではあるし、目的があれば待っていてくれる客のほうが多いが、それでもたまに来てくれる人の利便を考えてバチが当たることはあるまい。

「いいですね！」

　と、新たに何かを作ることにワクワクしているリケを家の中に入れると、俺は荷物をおろしに荷車の方へと向かった。

## 渡り廊下

2021年3月27日

「ということで、渡り廊下の製作に入ろうと思います」

　納品のために街へ行ってから１週間ほど。次に納品するナイフ、剣（長短両方）、槍とを作り終えた日の夕食の席で俺はそう宣言した。皆「おお～」とか拍手してくれる。

「そう言ってはみたが、どういうものを作るのかはまだ決めてないんだよな」

「どういうもの？ 渡り廊下に種類があるのか？」

　サーミャが首を傾げた。俺は頷く。

「やるかどうかは別として、地面からの高さをつけるか、とかその辺だな」

「あんまり高いと渡り廊下を横切れなくなりますね」

　そう言ったのはリディだ。彼女はクルルとルーシーを除けば、家族の中で一番庭をウロウロしていると思う。

　リケはあんまり庭に出ないし、他の４人は稽古に表庭へは毎日のように出ているが、畑や竜小屋、倉庫のある裏庭へはそんなに行かない。単純に用事がそんなにあるわけではないからだ。

　俺は再び頷いた。

「クルルとルーシーも繋いでないから、あんまり高いと移動できなくて困るだろうし、高くするのは無しかな」

「そうねぇ……」

　ディアナがおとがいに手を当てて首を捻る。娘たちのことは“ママ”の意見を容れるに限る。

「普段ももちろんだけど、いざというときにあの子たちの動きを阻害するのは良くないわね」

「だなぁ」

　例えば火事のときに逃げ場を塞ぐようなことがあっては一大事である。

　もちろん、いざと言うときには渡り廊下も家も一切合財を打ち壊してでも、クルルとルーシーを守るつもりでいるが、それが可能な状況ばかりとは限らない。

　そんなときに後悔しなくてすむのであれば、普段の快適や利便、デザインその他あらゆるものをうっちゃる覚悟だ。

　スッと小さく手を挙げて話しはじめたのはリディである。

「雨の時にも小屋と倉庫へ、ゆくゆくは湯殿へ行けるようにする、という目的を達成できればいいのであれば、地面に板を敷くのとかでも良いのでは？　そうすれば、計画が変更になった時も比較的楽ですし」

「そこに屋根をかければ目的は果たせるか」

　コクリ、とリディは小さく頷いた。これからできる施設が湯殿(温泉)だけとは限らない。そのときに作り換えるなら楽なほうがいいか。土の上に敷くのではいずれガタが来るだろうが、そうなったら都度メンテナンスすれば良い。

　前の世界でも似たような感じで整備されている山中の遊歩道(さすがに屋根はなかったが)を見たことがあるし、そう荒唐無稽な話でもない……はずだ。森の中も似たようなもんだろうし。

「じゃ、柱を立てて屋根をかける。廊下部分は板……というか、小さな柱のようなものを並べて作るってことで、早速明日からはじめよう」

　俺の言葉に皆から同意の声が返ってくる。なんとなくそういう気分になって、俺たちはそのまま乾杯をした。

　翌日。水汲みや朝食を終えて、一家は娘２人も含めて庭に集まっていた。

「さて、役割分担だが、希望はあるか？　他のことがしたかったら別にそれでもかまわんぞ」

　これが部屋の建て増しとかであれば、力が強くて体の大きいヘレンとアンネをどこに回すかが重要になってくる。速度やらが段違いだからだ。

　しかし、今回はそうではない。さすがにすぐ柱が倒れてくるようなことがあれば問題だが、多少なら倒れない程度の強度が確保できればいい。

　日常的に通る場所でもあるし、危なそうならすぐに分かるから、危険箇所は発見次第補修すれば問題はあるまい。

　それに、多少時間がかかるくらいは問題なかろう。今までのものとは違って、あったら嬉しいことは確かでも、無くて今すぐ困るようなものではないからだ。

　であるならば、だ。同じやるなら少しでも楽しくやりたいし、他にやりたいことがあるならそっちを優先してもらいたい。

　幸いにして、他のことがやりたいと言いだす家族はいなかった。まぁ、都と違って何ができるというわけでもないからな……。

　娯楽の少なさはこの森暮らしの欠点だ。繕いものをはじめとして身の周り品の修繕など、日常的にやらねばならんことも結構あるから、今のところ目立ってはないが。

「よし、それじゃあ、はじめるか。廊下の道筋を引いていくから、それに沿って柱を立てていこう」

　森の中に賛同の声が響く。それは、この森にささやかながら新たなものが産まれる小さな小さな産声のようでもあった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

コミカライズ第８話も公開されております。

是非こちらもご覧ください！

https://comic-walker.com/contents/detail/KDCW\_AM19201711010000\_68/

## 小さな道

2021年3月29日

　テラスの脇に棒を立てて紐をくくる。紐をピンと張ったまま伸ばしていき、限界のところでそのまま保持して貰う。

　あとはそれに沿って線を引けば、ほぼ直線になるというわけだ。多少の歪みが発生してもそれは愛嬌である。

　地面は硬いので、うちにある槍（もちろん売り物でないやつだ）の石突を使って、線を引いていく。思ったよりも長い直線が引けたが、これはまだ第１段階に過ぎない。

　一旦紐を回収したら、別の棒切れを用意した。長さ的には１メートルくらいだ。これをさっき引いた線の始点と終点に宛てがって、１メートルの間隔を開けて平行な線を引くというわけだ。人が２人並べるくらいの幅なので、渡り廊下としては十分だろう。一応ではあるがクルルも通れる。

　同じことを繰り返して、まだその存在すらない渡り廊下は小屋の近くへと繋がった。小屋と渡り廊下の間にも屋根をかけても問題ないだろう。高さを稼がないとダメなので、屋根の意味がどれくらいあるのかは疑問だが。

　その終点から横に向かって線を伸ばす。今度は倉庫に到着した。これで一通り線を引き終わったことになる。後は柱を立てて、屋根をかけ、木を敷いて通路にするだけだ。言葉にすれば簡単だが、それなりに大変な作業ではある。

「それじゃあ、分かれて作業するか」

　俺がそう言うと、了解の声が返ってくる。もちろん「クルルルルル」という声と、「わんわん！」も一緒だ。

　柱と屋根の作業は部屋の建て増しを繰り返してきた我が家ではそれなりに手慣れた作業になってきた。一定間隔で穴を堀り、穴の底を固めて、穴に木を立てる。これは力の強いリケとヘレンにアンネ、そしてクルルが担当した。

　もちろん、他のメンツもその間のんびりしていたわけではない。サーミャとリディは屋根にする木の板を切り出していたし、俺とディアナも通路に敷くための木を切り出していた。

「これはこう言う形でいいの？」

　ディアナが木を手に言った。長辺が１０センチ、短辺が５センチ、長さが１メートルほどの角柱である。太い木から切り出しているので結構な数を切り出せるはずだ。

「そうそう。大きさはまぁ大体でも問題ない」

　俺はうなずいた。「板を敷く」方式よりは、枕木みたいな板を少し埋没させて敷設していけば地面から多少の高さが出るので、よほどでないかぎりは雨が降っても水が上がってくることもあるまい。どうしても水が貯まるようなら排水用の溝をつけることも考えてもいいし。

　静かな森に、作業の音が響き渡る。元々ここは“黒の森”の中でも魔力が濃くて普通の生き物は近寄らないという話だが、これくらい音がしていると警戒して寄ってこないだろうなぁ……。

　そろそろ、この森の狼や熊の方々にも「あそこは寄っちゃダメ」と認識されているのではなかろうか。鹿や猪については逃げられると貴重な食料源が無くなってしまうので大変に困るのだが、狼や熊といった危険な動物は近寄らないでいてもらうに限る。

「わんわん！」

　そんな俺の考えを知ってか知らずか、ルーシーが作業しているみんなの間を駆け回る。穴を掘ったり、小さな木切れをくわえて運んだり、忙しそうにしているので本人は手伝いをしているつもりなのだろう。

　助けになっているかといえば、それはもちろん全くなっていないわけなのだが、こういうのは気持ちの問題である。

「いずれ手伝えるようになるのかなぁ」

「そうかもね」

　ルーシーは木から払った枝をくわえて、サーミャとリディのところへ意気揚々と運んでいく。それを眺めながら、俺とディアナは言った。ディアナの目尻は完全に下がっている。多分、俺も同じようなものだろう。

　親にとって頑張る娘の姿は、どう見たって可愛いのだ。たとえ今後ルーシーが体高２メートルの超巨大な狼になろうとも、それはいつまでも変わらないことだろう。

　今はまだ線しか引かれていない渡り廊下を通るルーシー。小さなまだ道ともいえないような道を小さな体が通るその姿が、一瞬、立派な渡り廊下を歩く優美な狼の姿に、俺には見えたのだった。

## 家のこと

2021年3月31日

　まる一日を費やして、柱チームの作業はほぼ終わり、道と屋根チームは材料の切り出しを完了して明日以降は組み上げに入ることになる。

「時々やってるけど、こう言う作業もたまにはいいなぁ」

　作業上がり、片付けも終えた俺はそうひとりごちた。サーミャ、ディアナ、ヘレン、アンネの剣の稽古組はテキパキと片付けをすると、そのまま訓練用の木剣を取るため、飛び込むように家に戻っている。

　ここらでは最強と言ってさしつかえないヘレンから毎日のように稽古をつけてもらっている他の３人は、メキメキと実力を伸ばしているらしい。

「もう１ヶ月か２ヶ月か、それくらい鍛えたら、都のあのなんとかって騎士団長より強くなると思う」

　と、最近ヘレンが言っていた。なるほどリュイサさんがこの森の最強戦力と太鼓判を押すわけである。

　サーミャはともかく、他の２人は預かっている、ということにはなっている。例えばアンネを帝国最強の剣士として帰すことになるのもどうかとは思う（まぁ、あの皇帝陛下なら喜ぶかも知れんとも思うが）のだが、ニコニコと話すヘレンを見て、俺は「ほどほどにな……」と返すのが精一杯だった。今日もクルルとルーシーに見守られながら、ワイワイと過ごすのだろう。

　そんな４人を見送りながら、使っていた道具を担ぐと、リケが辺りの様子を感慨深そうに見ていた。俺もぐるりと見回してみる。

　最初はこぢんまりとした家と鍛冶場だけだったが、部屋が増えてテラスも出来た。裏庭が中庭になり、そこにはリディのおかげで立派になった畑がある。表庭の隅には試しうちや訓練のための的も立ててあって、そこだけ訓練場のようにも見える。

　そして、クルルとルーシーの小屋が建てられ、その隣には２つの倉庫もある。そして母屋と小屋、倉庫を繋ぐ渡り廊下を建築中である。水は今も湖へ汲みにいっているが井戸もあるので、水不足に困ることはあまりないだろう。今度温泉も湧く予定だし。

　部屋も今は空き部屋があるが、万が一アレが埋まって更に部屋を増やす場合、今のところどんどん延伸するつもりでいる。だが、それよりも離れのようなものを作ってそれを建て増したほうが良いかも知れない。

　俺がそう思ったのを察知したかのように、リケが言った。

「そのうち、ここが村になってしまったりしないですかね」

「う、うーん……」

　そうやって離れだなんだと居住空間を増やしていくと役割分担も進み、それぞれの生活というものが生まれてくる。全員が家族であろうことに変わりはないが、共同体と言っていいレベルまで達してしまえば、その地域をなんと呼ぶかといえば「村」とはなるだろう。

　水も食料もあてはあるので、多少人数が増えたところで生活を支えていくのに困難になることはあまりないだろう。成立できるだけの条件は整ってしまっているのだ。

「元々住んでたサーミャと弟子のお前はともかくとして、ここで匿わなきゃいけない人間もそうそう増えないだろ……」

　ディアナは王国伯爵家令嬢、アンネは帝国第７皇女、リディは希少な知識を持っているエルフだ。ヘレンは傭兵だがここらのパワーバランスに関わりかねない腕っこきである。そもそも生活に魔力が必要なエルフのリディは選択肢がないのもあるが、いずれ街や都で匿うにも差支えのある立場だ。

　そんな人間に村を作れるほどゴロゴロ出てこられたら、この世界の統治はどうなっているんだと言わざるを得なくなってしまう。それこそリュイサさん経由でもいいから“大地の竜”に猛抗議を入れなければいけないだろう。

　そういうふうなことをリケに言うと、彼女は懐疑的な目をして言った。

「ここらだと共和国もありますし、親方は厄介事に巻き込まれやすいですからね」

「はい……気をつけます……」

　４人には失礼だが、まるで捨て猫をどんどん拾ってくる子供をたしなめる母親のようだなと思いながら、俺は身を縮こまらせるのだった。

## 立つ位置

2021年4月2日

　夕食の時、ふとうちには王国と帝国の人間がいるんだよな、という話になった。そのときに出たのが「今のエイゾウ工房はどういう立場なのか」である。

　結論としては「周りから見れば中立」という話にはなったのだが、いざ何かが起きた時のために、どう振る舞うかをあらかじめ決めておくのも大事ではないか、とアンネが言い出したのだ。

「とは言ったものの、前にも言ったけど

「うちは王国だけど、兄さんもそう言うでしょうね」

「俺も前に言ったけど、実際のところどっかに属してる意識はないからなぁ」

　たまたま居を構えた……というか、家を貰ったのが“黒の森”だったというだけで、これが帝国の山岳地帯ならそこで暮らしていただろう。

　リュイサさんの態度から見るに、“黒の森”なのにはある程度なんらかの意図あるのだろうな、というのは分かるのだが。ここらは他の家族には言えない事情である。

「居住地と巡り合わせで王国の上の方に友人が出来たというだけで、いざ王国と帝国が戦争だなんてことになったときに、『じゃあ王国の手助けをしてやろう』ってことでもないし。個人としてのマリウスを助けるということなら異論ないが」

　俺が知っているかどうかで言えば、王国の国王は見たこともないが、帝国の皇帝には会ったことがある。その流れだけで言えばまだ帝国のほうが親近感を持てる。だからと言って助けよう、とならないのは帝国も王国も変わらない。

　しかし、友人を見捨てるようなことをしたくないのも確かではあるのだ。アンネが大きくため息をつく。

「結果として王国寄りということにならない？ 伯爵から依頼があればそれをこなすつもりがある、ってことでしょう？」

「うーん、まぁ、それはそうなるかもなぁ……」

　マリウスに「すまんが剣１００本用意してくれ」と言われたらどうするだろうか。最上級のものを用意しないにしても、受けるような気はする。

「振る舞いという意味では来た依頼は基本断らない、て事になるとは思う。帝国からも依頼が来るんじゃないのか？」

「ああ、それはありそうね」

「だろ？ で、俺はそれも断るつもりはない」

　距離とかルートの話でマリウス……王国側のほうが話が通しやすいというだけで、帝国も今はカミロにルートがあるから、多少の困難はあるにせよ依頼は出来るはずなのだ。

　その意味ではカミロはうちに近い立場かも知れない。なるほど、家族が「悪友三人組」と呼ぶわけだ。

「俺の……俺達の作ったもので人が傷つけあうし、なんなら死ぬということについては、もう飲み込むしか無いと思ってるよ。その事実を忘れるつもりもないけどな」

　これはまだここに来て間もない頃。サーミャとリケとディアナしかいなかった時に吐露した俺の心情だ。どうすれば良いのか、あのとき迷いはしたが俺はもう迷わないと決めたのだ。

「どちらの依頼も受ける、ってことね」

「そうなるな」

　やはり立場としては中立になる。仮に魔王と勇者（こっちはいるか知らんが）の両方から依頼を受けても、俺はどっちの剣も打つだろう。

　直接的に利害のある２人も、結局この結論には文句がないようだ。他の「まぁ、住んではいるけど……」な４人はというと、

「アタシは王国と帝国とかで、どっちがどうと言われても興味ないなぁ」

「アタイも同じく」

「私もあまり……」

　この“黒の森”に住んでいたサーミャは国家というものの実感がない。町暮らしの獣人族であればまた違うのだろうが。

　ヘレンはヘレンで傭兵である。ちゃんと金を払ってくれるなら陣営はあまり関係なさそうだ。帝国には嫌な思い出があるから同条件なら王国を選ぶかも、くらいだろう。

　リディについてはエルフということもあって、ある程度世間とは隔絶しているようなものだからなぁ……。

「私は親方の選択に従いますよ！」

　と、力強く宣言したのはリケだ。それを見て、周りの皆が「やっぱりな」と「やれやれ」の混じった表情になり、話は終わった。

## 道と来客

2021年4月5日

　一夜明け、再び渡り廊下の建築に取りかかる。柱チームのアンネとリケは屋根チームに転属、ヘレンは道板チームだ。背が高いヘレンを屋根の方に回さなかったのは、リケのほうが屋根を作るのには慣れているから、という理由である。その代わりと言ってはなんだが、うちで一番背の高いアンネも屋根の方に回している。

　柱を立てるのに重機として大活躍していたクルルは、運搬を受け持つことになる。チアリーダー（ウルフ？）のルーシーはその大事な役目を引き続き行ってもらうことにした。

　屋根チームは柱と柱をつなぐようにテキパキと梁や桁を組み上げていく。流石に今日明日では終わらないだろうが、それも可能なのではと思うくらい早い。

　一方、道板チームは枕木――鉄道がないので“のようなもの”だが――を埋めるためにショベルで地面を掘り、枕木を並べていく作業だ。これはこれで今日明日では終わらないだろう。

　早めに終わらせてはおきたいが、どうしても急がねばならない作業でもないし、次の納品日に納品するものはもう作り終えているので、次の次の納品に影響が出なければとりあえずは良し、である。

「じゃあ、俺が掘っていくから、皆は木を並べていってくれな」

『はーい』

　どういうことなのか、生産の方のチートがこの作業にも適用されるみたいなので、それに従って俺が掘っていき、他の皆で枕木を並べ、埋めていく方式を取ることにした。多少は平らで無かったりするかも知れないが、あまりにも歩きにくい以外は目をつむることにするのだ。多少道に凹凸がある程度も気にしないとダメなほど慎重になって運ばないといけないものは、そもそも倉庫に入れずに家の物置の方に入れるし……。

　増強された筋力とチートによって、この森の硬い地面でもどんどん凹字に掘れていく。時には石も出てくるが、それをヘレンが取り除く……というか、小さいものはものすごい速度で遠くへ放り投げている。

　同じ方向に投げ続けているので近寄る人がいたとしても、その方向からの接近を避ければ良いのだが、運悪く通りすがった鹿でもいたら仕留められているかも知れないな……。サーミャもルーシーも反応しないので恐らくは大丈夫なのだろうと思うが。

　石を取り除いてできた穴には掘り出した土を埋めて軽く叩いて固めている。そこに枕木を横に並べていって、隙間にはやはり土を埋めていく、という作業を繰り返していく。

　その合間合間に、ヘレンが放り投げた石をルーシーが喜び勇んで拾ってきて、褒めていいやら悪いやら（結局褒めたので再び拾いに行ったりした）などという一幕もあったりしたが、順調に作業は進み、そろそろ日も暮れるから作業を終わろうかと声をかけようとしたところ、覚えのある声がした。

「ごめんください」

「はいはい」

　声のした方に向くと、小さな人形のような姿があった。妖精族の長、ジゼルさんである。俺はまず頭を下げて謝る。

「この間はすみません」

「いえいえ、お気になさらず。この“黒の森”で住む場所の違う互いの都合が運良く一致するほうが本来は珍しいんですから」

　ジゼルさんは鈴の鳴るような声で言ってコロコロと笑う。うちは鍛冶屋なのでしょっちゅう家にいるが、この森で暮らす“人間”はそうでない人のほうが多い。アポも取りようがないとなると、なるほど定期的な連絡が難しいのは確かだ。

「ジゼルさんがいらしたということは」

「ええ、そうです」

　ジゼルさんは満面の笑みを浮かべる。

「温泉の場所をお伝えしに伺いました」

　その話だと分かっていても、やはり嬉しいものは嬉しい。その時の俺の喜びようを、後にディアナが回顧して言うには「自分に子供が生まれてもあそこまで喜ぶだろうかと思った」とのことだったので、相当に喜んでいたらしい。

「ささ、どうぞどうぞ」

　それほどまでに浮かれていた俺は、片付けもそこそこにジゼルさんを家に案内し家族に呆れられるのだった。

## 森の姉妹

2021年4月7日

「なんだか催促してしまったようですみません」

　ジゼルさんはそう言って頭を下げた。今は夕食で、ジゼルさんにも同じものを出したところだ。俺は顔の前で手を振る。

「いえいえ、ジゼルさんくらいだと何の負担でもないですよ」

　実際のところ、ジゼルさん達妖精族の人たちは全くと言って良いほど物を食べない。それはクルルと同じく身体の維持をほとんど魔力で行っているからだ。

　それに彼女たち妖精族は肉はあまり好きではないそうだ。そんなわけでスプーン１杯かもう少しくらいのスープのみを用意することになるのだが、それが負担になるかと言えば全くならないに決まっているのである。

　ジゼルさんの前にはうちで一番小さいカップにちょろっとだけスープが入ったものが置かれている。小さいと言っても、ジゼルさんの体の大きさからすると、ポリバケツみたいな感じに見える。

「そろそろ、皆さん向けの食器や家具も用意しないといけないですね」

　うちには巨人族や妖精族など、人間族かそれに近い大きさではない種族向けの食器や家具は存在しない。いつか用意せねばと思ってはいるものの、必須のものでもないので結局用意せずじまいである。妖精族向けのものは、ジゼルさんが温泉の場所を伝えに来るのは分かっていたのだから渡り廊下より先にしても良かったな。

　巨人族向けは今のところ使うとしたらアンネの母親（つまりは皇妃なのだが）くらいなので、全く急がなくても問題はない……はずだ。皇妃様にホイホイ来られても困るし。

　とは言え、いつまでも作らないと普通の巨人族のお客さんが来た時に困るだろうから、渡り廊下を作ったあと温泉に取り掛かる前に両方ちゃちゃっと作っておくか……。

　ジゼルさんは目をまんまるに開いた。お人形さんのような顔なので、実に可愛らしい。ディアナとアンネがホクホクしている。

「いえ、そんな！」

「私達にとっても手先の練習になるんで、丁度いいんですよ。滞在していただくこともあるでしょうし」

　多分、家族の皆は「病気の治療」の話だと思っているだろう。しかし、俺の場合は「前の世界の知識を妖精族に教えてほしい」という“大地の竜”の頼み事も含んでの話である。あんまり長く居続けるのは不審があろうが、たびたび短期間の滞在があることは同じ森暮らしのよしみということで、あんまり疑われまい。その滞在中にスキを見て伝えていくのだ。

「うーん……私が持ってくるという方法もありますが……」

「うちは鍛冶屋ですからね。カップは木を削って作るとして、スプーンやフォークなんかは任せてください」

「ナイフの出来からしてもそうですよねぇ……。じゃあ、お願いします」

「ええ」

　先の都合が無かったとしても、友人夫妻の無事という十分過ぎる報酬を前払いで貰っているのだ。逆にこれくらいはしておかないと収まりが悪いように思うので、やらせてもらえるようで良かった。

「へぇ、やっぱりエルフとは違うんですねぇ」

　夕食を食べながら、そう言ったのはアンネだった。エルフと妖精族はやはり違うのか？ と興味を示したのが彼女だった。ちなみに隠すことでもないとリディ自身が言っているので、エルフも身体の維持に魔力が必要であり、そのために町なんかではめったに見かけないのだということはアンネにも伝えてある。「なるほど父様が后に迎えられないわけだ」が聞いたときの第一声だったが。

「私たち妖精族は魔力のほうに近い存在です。それが人間族みたいな存在に寄った感じですね」

「ジゼルさんの言葉を借りれば、私のようなエルフは人間族のような存在が魔力に少し寄ったもの、になりますね」

　身体の大きさこそ違えど、姉妹であるかのように似た部分がある２人は微笑んだ。心なしか微笑み顔がそっくりに見える。なるほど、アンネが気になるわけだ。

「魔力が必要な量が違うのはそのあたりなんですねぇ」

『そうですね』

　うんうんと首を縦に振りながら言うアンネに、やはり２人は揃って返す。本当に姉妹のようだな、と思いながら俺はスープを一口すすった。

## 宝の地図

2021年4月9日

　そうして夕食が終わったあと、ジゼルさんが宣言した。

「さて、それでは特にエイゾウさんはお待ちかねの温泉の話ですね！」

　パチパチと拍手が響く。ジゼルさんは少しだけ誇らしげにしている。

「と、宣言したところで申し訳ないんですが、何か書くものあります？」

　即座にすまなそうにするジゼルさん。リディがリビングの片隅に置いてある戸棚からインクとペン、それに紙を持ってきた。

　筆記用具はあるのだが、妖精族サイズではない。もしかして、あの小さな体でよいしょよいしょとペンを使うのだろうか。それはそれでちょっと見てみたいところではある。ディアナとヘレンも似たようなことを思ったらしく、瞳が輝いていた。

「現地をご案内してもいいんですけどね。いろいろなお礼がてら、ちょっとお見せしようと思いまして」

　そう言って、ジゼルさんはインクの入った小さな壺（うちにはガラスビンはない）の蓋をよいしょと開けた。今ディアナの隣りに座ってたら、肩のＨＰが減ってただろうな……。

　ジゼルさんはインク壺を前に、そっと手を結んで目を閉じた。神様に祈っているようにも見える。やがて、ジゼルさんがぼんやりと淡いピンク色に輝き出した。

「綺麗……」

　と言ったのは誰だろうか。お人形さんのような姿が淡い輝きに包み込まれ、祈っているところは確かに可愛らしさよりも神々しさを強く感じる。

　光はインク壺も巻き込んだ。淡く輝くインク壺が若干シュールに見えてきた……と思ったら、中から細い糸のようなものが出てくる。

　糸のようなものはインクのようだ。インクはもともと生物であったかのように緩やかにうねり、体を伸ばしながら先端を紙に着地させる。

　その着地点からじわりとインクが広がる。真っ黒な点が周囲を飲み込むように、ではない。それは何かを描き出していた。じわりと炙り出しをしているかのように描かれたそれは、見覚えのある建造物の形をしている。

「これは……うちか？」

「みたいね」

　覗き込んだ俺が言うと、同じく覗き込んだディアナが同意した。煙突があり、レンガ造りと木の壁の部分、そして建て増しした部屋の部分、中庭の畑にクルルとルーシーのいる小屋と倉庫、そして井戸。それらが徐々に、ややディフォルメチックに描かれている。

　家の周辺の見覚えのある地形も描かれていき、やがて俺と娘たちが水を汲んでいる湖のほとりらしきところまで到達したところで止まった。

　そこにあるのはシンボルこそデフォルメチックで可愛らしいが、その位置関係などはかなり精緻なこの周辺の地図だ。とは言ってもここは“黒の森”の中、大半が木で覆われているのだが。しかし、ちょっと小高くなっている場所なんかもちゃんと表現されている。

　出来上がった地図を前に、俺達は拍手喝采する。ジゼルさんはもじもじと照れながら、

「あんまりこういうことはしないんですけど、今回は特別ということで」

　と言った。いやぁ、いいもの見せてもらったな。一方で、

「あれって魔法？」

「いえ、ああいうのは聞いたことないですね……」

「エルフで聞いたことないなら、普通の人は知らないか」

　小声でアンネとリディが会話を交わしている。まぁ、魔法で精確な地図が出来るなら欲しいに決まってるよな。勝手に作られないようにしたい、のほうかも知れないが。

「これ、いいなぁ」

「なんで？」

「ここを守るときの計画が立てられる」

「はー、なるほどなー」

　やや物騒な感想なのは、ヘレンとサーミャだ。防衛計画についてはプロに任せるとしよう……。

　地図には見慣れないものが１つ描きこまれている。泉のような形をしているそれは、このあたりにはないものだ。サーミャでなくてもあれば気がついているだろう。となれば、答えは一つ。

　リケがそのマークを指差す。

「これが温泉ですか？」

「そうです。これで場所わかります？」

　心配そうに俺に聞いてくるジゼルさんに、俺は答えた。

「バッチリですよ。今からでもいけるくらいです」

　温泉の場所はうちの小屋からまっすぐ西に向かってすぐのところのようだ。となれば、渡り廊下は小屋前を経由した状態で作ればいいし、今作っている渡り廊下の計画を変更する必要もなさそうである。

　いざとなれば作り変えは出来るような計画にしていたが、それでも変更がないのに越したことはない。俺は内心でホッと胸をなでおろす。

　胸をなでおろしたのは俺だけではなかったようで、

「良かったです。最初から案内していれば良かったなんてことになったらどうしようかと」

「いえいえ、こう言うのありがたいですよ」

　温泉の位置という情報を抜きにしても、この周辺の地図という時点で大変にありがたいものである。この世界じゃ国土地理院の地図を本屋で買うなんてことは出来ないからな……。いや、俺が作ればよかったんだろと言われたら返す言葉もないのだけれど。これは今後の建造物の検討に活かさせてもらおうっと。

　地図を前にジゼルさんも交えてワイワイとこのあたりの地形について話す。歩いてると気が付かなかったけど意外と起伏があるんですね、とかそんな話だ。

　そうしてすっかり夜も更けていき、ジゼルさんが帰る時間になった。

## 夜半の授業

2021年4月12日

「別に泊まっていっても大丈夫でしたのに」

　俺が言うと、ジゼルさんは静かに首を横に振った。

「嬉しいですが、色々とやらなければいけないこともありますので」

「それじゃあ仕方ないですね」

「はい」

　それで俺達家族とジゼルさんは微笑みを交わした。手を振りながらふわふわと飛んで去っていく。リュイサさんと違うのは突然出たり消えたりするような「はしたない」ことはしないところだ。

「さて、それじゃあ片付けて明日に備えるか」

　はーいと返事をするみんなを家に入れて（ルーシーは“お姉ちゃん”のところへ走っていった）、俺は家の扉を閉めた。

　窓からは月の光が差し込んでいる。ベッドから体を起こして外を見ると、月明かりに照らされた庭がなんとも幻想的だ。

　俺は寝ていて目を覚ましたわけではない。そもそも寝ていなかったのだ。

　ゆっくりと、足音を立てないようにベッドから抜け出して部屋の扉を開ける。いつものベストなんかも今は着ていないし、履物も柔らかいものなのでほとんど無音で部屋から出た。まぁ、無音だと思っていても、サーミャあたりが聞けばかなりの音がしているのかも知れないが。

　そのままそーっと、やはり足音を立てないように家を出る。まるで女性と密会をするかのようだ。いや、密会であること自体は間違ってないか。

　そっと家の扉を閉める。こういうとき、うちの扉に鳴子が繋がっているのが恨めしい。幸い鳴子はガラガラと派手な音を立てることもなく、扉が俺と家の中を隔てた。

　これで小さな任務が一つ片付いた。ほっと胸をなでおろす俺に、鈴の鳴るような、そして小さな声がかけられた。

「こんばんは」

「こんばんは、さっきぶりですね」

　声がかかるのは予想していたので、「ぎゃあ」などと声を上げてしまうこともなく俺は挨拶を返すことが出来た。そこにいたのは帰ったはずのジゼルさんである。

「作った地図を元にリージャさんでもディーピカさんでも良かったのに、ジゼルさんが来たってことはそう言うことかなと思ってましたが、やはりそうでしたか」

「エイゾウさんの察しが良くて助かりました」

「私が来なかったらどうするつもりだったんです？」

「その時はそのまま帰るだけですねぇ。睡眠はどうとでもなるので……」

「なるほど」

　身体のほとんどが魔力だ、ということは実際には睡眠はいらないも同然だったりするのだろう。待たせてしまったことは申し訳ないが、これも“大地の竜”の頼み事だからなぁ。仕事としてお互い割り切ってやっていこう。

「さて、何からお伝えしましょうかね……。希望ってあります？」

「私達にとっては未知の情報ですからねぇ……」

「そりゃそうですね。じゃあ……」

　俺は“蒸気機関”について掻い摘んで話をすることにした。湯を沸かすと蒸気が出る。その蒸気の圧力で物を動かすことが出来る仕組みである。蒸気をタービンに当てて回転させるものと、シリンダーで往復運動をさせるものとに大別出来るそれは、前の世界では前者は大小様々な発電機関に、後者は名前からそのままだが蒸気機関車に用いられている。

　今回は蒸気機関車に用いられるようなやや複雑な機構の話はせず、蒸気の圧力でタービンを回して仕事をさせる部分についてだけ話をした。全部話してるとそれこそ夜が明けるからな。

「風の代わりにお湯を沸かした湯気で風車を回す仕組みと考えてもらえれば、そんなに違いはないかと。理屈は先程お話したとおりです」

「エイゾウさんのいたところには、そんなものがあったんですねぇ……」

「まぁ、“内燃機関”と言ってもっと複雑なのもありましたが、これはまた今度にしましょうか」

「ええ。今日はもうなんだかお腹いっぱいです」

　ポンポンと自分のお腹を叩いてみせるジゼルさん。思わず大声で笑いそうになって、慌ててそれを引っ込め、２人でクスクスと笑う。ジゼルさんはその後すぐに「それじゃあ、本当に帰りますね」と言って去っていった。

　こうして、１回目の深夜の授業は終わり、俺はちゃんと寝るべく、そうっと家の扉を開けた。

## 道はまだ半ば

2021年4月14日

　しんと静まり返った家。はじめてこの家に入ったときのことを思い出した。あれからそれほど経っていないのに、この家も随分とにぎやかになったし俺も以前からそうであったようにそれを受け入れている。

　もしこの家からみんな旅立っていってしまったら、俺はどう思うんだろうな。そんなことを思いながら、閂をかける。

　振り返ると、人影があった。一瞬「ぎゃあ」と叫んでしまいそうになるが、俺は必死にそれを飲み込む。

「なんだ、リディか」

　そこにいたのはリディだった。さっき家の中を見たときはいなかったはず（もちろん見落としていたら別だが）なので、今ここに来たんだろう。

「外にいたんですか？」

「え？ あ、ああ。ちょっと月でも眺めようと思って」

　いたのがサーミャじゃなくて良かった。彼女だったら１００％バレていたことだろう。

「そうですか」

　リディは静かに微笑む。しかし、なんとなく迫力というか、いわゆるところの“圧”を感じる。ヘレンでも気圧されるんじゃないかと思うくらいだ。

　彼女はエルフで細身で、あまり身長も高くないから雰囲気としては凛としているというか柔和なほうなのだが、ニルダが来たときみたいに妙に迫力を感じることがたまにあるんだよな……。

「別に変なことはしてないから安心してくれ」

「なら、良かったです」

　そう言って、リディは足音もなく自分の部屋へ戻っていく。

「俺も早いとこ寝よう……」

　緊張のドキドキのせいで素直には寝付けないだろうが、少しでも寝ておかないと確実に明日――前の世界基準だとそろそろ日付が変わってそうだが――に響く。部屋に戻り、ベッドに横になると心配していたよりも早く俺は眠りに落ちていった。

　翌朝、今日の天気は曇りである。夏の気温に森の雰囲気が相まって、若干の陰鬱さをもたらしている。気温が高いとは言っても、日光がない分僅かばかり過ごしやすいのがせめてもの救いだろうか。

「降るかな」

　天を仰ぎ見ながら俺が言うと、サーミャも同じように空を見てから鼻を動かして言った。

「いやぁ、これは平気だろ」

「サーミャが言うなら平気かな」

「１０回に１回くらいは外れるけどな」

　そう言ってサーミャは笑う。前の世界の某ロボットが出てくるゲームでないなら、９０％当たるなら十分な的中率だと思う。今日がその１０％にならないことを祈るだけだ。

　俺は笑ってサーミャの頭をくしゃりと撫でると、クワを担いで作業場所へ向かった。

「かなり出来てんなぁ」

　テラスで昼食を取りつつ、ヘレンが渡り廊下を見て言った。昼までは雨も降らずにつつがなく作業が進んだのと、屋根チームも作業に慣れてきたからか思ったより早く進んでいる。俺たち道板チームも、もう残すところあと僅かと言ったところだ。

　昨日今日では終わらないと思っていたが、今日でほとんど片付いてしまうのではなかろうか。それは全然悪いことではないのだが。

「こうして繋がっていくと、あっちも家の一部って感じがするわね」

　そう言ったのはアンネだ。その言葉に家族全員頷く。離れた建物、となるとやはりどうしても隔てた感覚になるが、オープンエアーなものであっても繋がっていると母屋の一部になっていっている感じがある。

「やっぱり早めに作ってよかっただろ」

　俺はわざとらしくドヤ顔を決める。最初に返ってきたのは苦笑ではあるが、

「まぁ、結果論だけどそうね。クルルとルーシーが仲間外れにならないもんね」

　とディアナが言って、「そうですね」とリケが続く。こうして午後のやる気を充填した俺達は、昼飯をやっつけてしまうと、再び家族と家族をつなぐ作業に戻った。

## 繋がる家族

2021年4月16日

　日が落ちかかる頃、道板を並べ終えた。まだ土で隙間を埋めたあと軽く叩いて締める作業が残ってはいるが、それはともかく一通り家から小屋と倉庫が繋がった。

　場所は知れどもまだ見ぬ温泉ともいずれ繋ぐ必要はあるし、屋根もまだ全てにはかかっていないので作業としては完了ではないが、こうやって繋がると達成感はある。あるのだが……。

「凝って石畳にしなくて良かった」

　俺は思わずそう呟いた。安心したのは時間がかからなかったことにではない。石畳だったらそれこそ街路のようで、ここが町になるみたいな話にわずかばかりでも信憑性が生じてしまっていただろうが、そうならなかったことにだ。

　変更が容易ならずとも大変とまではいかない板敷の通路にしておいて本当に良かった……。

　翌日、ヘレンを屋根チームに回し、俺とディアナで残りの作業を行うことにした。屋根の方ももう半分以上は出来ており、今日燦々と照りつけている太陽の日差しを遮っている。雨が降ればそれも遮ってくれるはずだが、このあたりは雨がそんなに降らないので完全な本領発揮となると来年の雨季になるだろうな。

　枕木を敷くために掘った土を今度は枕木と枕木の隙間に詰めて、ドンドンと全体を丸太で叩いて締める。前の世界でこんな感じの作業する機械があったな。ランマーだっけ。まぁアレほどの速度や力、仕上がりは必要でもないしやろうとも思ってはないが。

　ディアナが土をショベルですくう。枕木の間にそれを落としたら、俺が丸太で叩く。体積が少し減るので、そこにもう少しだけ土をかぶせてまた叩く。それの繰り返しだ。

　ずっと２人で同じ作業……だと思っていたのだが、もう１人手伝いがいた。ルーシーである。

　俺たちの作業を遠巻きにジッと見ていたかと思うと、作業の終わった箇所にいって、立ち上がるように両方の前足を持ち上げて体重をかけてドスンと下ろした。それを何回も繰り返している。

　しばらくそれを行った後、場所を変えて繰り返す。

「パパとママのお仕事の真似かね」

　俺は一旦手を止めて、ディアナに聞いた。ルーシーの様子を見ていたディアナの状況は言うまでもないだろう。

　ディアナは祈るように手を組み合わせて言った。

「そうね。私達の作業を見て何をしたらいいかわかるなんて、天才かしら」

　元々相当に賢いらしいこの森の狼の知性が魔物化することで強化されているとしたら、完全に何をしているか理解して手伝っていることもありえるだろう。

　さすがうちの子である。俺はディアナの言葉に大きく頷いた。向こうでは屋根に上がって作業しているリケにクルルが口にくわえた木材を器用に渡している。

　あっちはもうそれなりに見慣れてきた光景なのだが、自分が何をすればいいか理解していないと出来ない。ドラゴンなので頭がいい、ということなのだろうか。将来が楽しみなような不安なような。

　その屋根の方からは釘を打つ音も響いてくる。今は俺とディアナが手を止めているが、先程まではおそらくディアナが土をかぶせる音、俺が丸太で叩く音も混じっていただろう。

　それはきっと小さな演奏会のように“黒の森”に響いていたに違いない。俺自身が客観的にそれを鑑賞するすべがないのが少し恨めしい。

　渡り廊下という即物的なものではあるが、それぞれの作業が繋がってひとつのものが出来あがるということ。そんなことも“いつも”になればいいなと、足元にきて褒めてくれと尻尾を振るルーシーを撫でながら、俺は思った。

## 繋がりの完成

2021年4月19日

　ルーシーの手伝いもあって（精神的な助けは“こうかはばつぐん”なのだ）か、道板の敷設は夕方までに終わった。屋根ももうほとんど終わっていると言っていい。

　明日の昼飯までには終わりそうである。それを眺めながら、俺はディアナに言った。

「明日俺たちも手伝ったらすぐ終わるかな」

「そうねぇ。私もなんだかんだ慣れちゃってるし、速度が上がればすぐね」

「わんわん！」

　どうやら明日もルーシーは“お手伝い”をしてくれるらしい。俺は何度目になるかわからない、なでなでをルーシーにしてやって、この日の作業を終えた。

　翌日、昼前には屋根も全てが完成する。落ち着いたＢＧＭに「なんということでしょう」というナレーションが聞こえてきそうである。あのＴＶ番組、まだ前の世界でやってるのかな。

　最後の釘をアンネが打つと、パチパチと森の中に拍手が響いた。本人は「私でいいのかしら」と言っていたが「こういうのは経験だし」と家族全員でやらせたのだ。

　こうして森の中の鍛冶屋とその倉庫と小屋が繋がった。廊下が完成したら、もう１つセレモニーがある。

「じゃあ、失礼して」

　そう言って俺は倉庫前から小屋を経由し、母屋まで渡り廊下を歩く。「楽しそうだ」と思ったのだろう、クルルとルーシーが俺の後をついて歩いた。“渡り初め”とでも言えばいいのだろうか、とにかくそういう感じのことだ。

　俺も「誰が最初に使っても一緒だろう」とやんわり言ってみたのだが、「ここは家長が最初に使えば気兼ねがなくなる」と、これもアンネのときと同じように家族全員の意見でやることになった。

　ただ渡り廊下を歩く、というだけのことなのだが、なんとなく厳かな感じになる。そのうち北方からしかるべき装束でも取り寄せたほうがいいのだろうか……。

　母屋まで渡り廊下を進むと、再び家族から拍手が起きた。クルルとルーシーもよく分からないなりに嬉しいらしく、庭を駆け回っている。

「いやぁ、なんか照れるな、こういうの」

「でしょ！ 私もさっきそうだったんだから！」

「今は気持ちがよく分かる」

　鼻息も荒くまくしたてるアンネに俺はそう言った。

　こうやって完成したときに毎度何かをするのは気恥ずかしさもあるが、区切りという意味では大事なことだろう。家族と家族が繋がった節目と言えるものでもあるのだ、派手に祝っても神罰が下ったりはすまい。

　そんなわけで、今日は昼から豪勢にいった。肉をふんだんに焼き、家にある調味料を総動員して様々な味をつけたものを出して、ワインと火酒の両方も解禁である。

　リケはそれを聞いて、早速渡り廊下を経由して一樽倉庫からテラスへと運んで来たりしていた。流石に酒が入った状態で火を扱う作業は危険なので、午後に時間ができたとしても、そこは許可できないのだが、今日のところは全員ゆっくり休むだけにするつもりだったそうなので問題あるまい。

「それでは、新しい建造物の完成と家族のつながりに乾杯！」

「乾杯！」

　こうして昼下がりの“黒の森”の中、知らぬ人が見れば相当場違いに見えるだろう、ささやかな宴が始まるのだった。

## 黒の森の民

2021年4月21日

　渡り廊下が完成してから納品までの数日は皆思い思いのことをして過ごした。

　温泉については今は一旦保留にしてある。“森の主”直伝の場所なのだから、１００メートル掘れ、などということもないのだろうが、湯殿の整備とあわせて考えると２～３日でどうにかなるものでもないし。

　森の中にぽつんとあるのだから、最初は衝立のようなものを設置するだけでも良いと考える向きもあろう。

　うちは“黒の森”の奥の方にある。まぁ、人が来ない要因はそれだけではないのだが、ほとんど人が来ない。

　それなら、そこまで用心する必要も無いのでは、と言われればきっとそうなのだろう。それでも年頃の娘さん達なのである。用心に用心をしてもしすぎることはない……と俺は思っている。

　そんなわけで、めいめい狩りに出たり、傷んできた身の回りの品を補修したり、追加で作ったりして過ごした。

　俺もこのところ色々あったことだし（半分くらいは俺も原因なのだが）、新しく何かをすることはせずに、農具の手入れと追加だけにしておいた。

　ヒヒイロカネやアダマンタイトの加工なんて普通に手探りだし、魔宝石の生成についてはもっとよく分からんからな……。

　そうして納品の日。いつものように荷車に荷物を積み、森の中を進んでいく。今日も日差しが強いが、少しだけ弱くなっているようにも感じる。

　俺はジリジリと地面を焦がそうとするかのように照りつける太陽を、木々の隙間から仰ぎ見ながら言った。

「今日はちょっと涼しいな。そろそろ夏も終わるのかね」

「そうだな。ここらのはそんなに長くない」

　サーミャが同じように仰ぎ見る。その顔に木漏れ日が当たってサーミャは目を細めた。

「つってもまだもうちょっと暑いのは続くぞ。エイゾウには厳しいかもな」

　こっちを見てニヤッとサーミャが笑う。俺は肩をすくめた。

「いくら鍛冶場で暑いのは慣れてるとはいっても、外に出ても暑いのは早いとこ終わって欲しいもんだね」

「全くね」

　俺の言葉の後を引き取ったのはディアナだ。彼女も暑いのはあまり得意ではないらしい。避暑地に引きこもるほどではなかったそうだが。

　森の中に笑い声が響く。これも俺たちの“いつも”の１つだ。

　森の中も、街道も何事も起きなかった。夏の太陽が最後の仕事を「もう一踏ん張り」とばかりに頑張っているだけだ。野盗もこの暑さでは仕事をする気にならないのかも知れないが。

　街の入り口の衛兵さんに挨拶をし、ほんのわずかばかり人出の減った道を進む。ルーシーが来るのを楽しみにしているらしい、強面のオッさんだけは今日もその仏頂面に汗を浮かべながら小さくルーシーに手を振っていたが。

　やがて、カミロの店が見えてきた。裏手に回って荷車を倉庫に入れると、丁稚さんが駆け寄ってくる。彼の顔にも汗が浮いている。彼の場合は作業をしていて、なのかも知れないが、暑さが後押しはしただろう。

「まだ暑いな」

「そうですねぇ」

　丁稚さんはいつもの屈託のない笑顔で言った。元気があるのは良いことだ。

　チラッと見ると、前に作った日陰がそのままにしてある。今日も丁稚さんとうちの娘達はあそこで過ごすのだろう。

「それじゃ、すまんが今日も頼むな」

「ええ、お任せください」

　胸を叩いて請け合ってくれる丁稚さんと、その丁稚さんに頭をこすりつけるクルルとルーシーを後に、俺たちは商談室へ向かった。

　商談室でいつもの通りに話をした後、カミロが切り出してきた。

「これは一応聞いておくんだが」

「ん？ なんだ」

　カミロが「一応」と断りおくのは珍しい。彼ならそもそもそんな話は俺に持ってこない。自分のところでシャットアウトしてしまって、俺の耳に入れないだろう。

　そうしなかったということは、形式上だけでも聞いておいた実績を作っておかねばならないところからの話なんだろう。

「お前に『都に来ないか、万難は排しておくから』って話があってな」

　カミロの言葉に、家族が息を呑む。俺は間髪を入れずに答えた。

「無理だな」

「だろうな」

「侯爵か」

「ああ。まぁ断ったからと言って何かしてくるようなことは無いよ」

「何かしたらどうなるか分かってるだろうし？」

「そうだな」

　カミロは苦笑する。わかりきった答えなのはカミロも侯爵も理解しているだろう。

　うちにいる家族の何人かはあの森で匿うのが一番だろう、ということで滞在しているから、おいそれと動けない。それも侯爵は分かっているはずなのだが。

　そのあたりを解決するコストを払ってでも、俺が都にいたほうが何かと「便利」なのは間違いない。俺も儲けだけを考えればそうした方がいいんだろう。

　だが、俺があそこにいる理由の１つは魔力だ。あの魔力が無くては生産が立ち行かない。都にはそれがないからな。

　しかし、俺が即答で都行きを断った最大の理由は魔力ではない。

「家族がいてこそでもあるが、“黒の森”での暮らしが気に入ってるんだ、俺は」

　俺の言葉にカミロは今度は呵々大笑した。

「お前はもう完全に“黒の森”の民ってことだな」

「俺は最初からそのつもりだったさ」

　俺は笑って言った。この世界がどうあろうと、俺は一介の鍛冶屋で、そして“黒の森の民”でありたいと思うし、そうあるつもりだ。

　家族が安堵の声を漏らす中、俺は、

「あら、ありがとう」

　そんな、リュイサさんの声を聞いた気がした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

１０章はこれにて終了となります。

つきましては４/２３～５/５の連載をお休みいたします。

次の連載は５/７となります。少し長いお休みをいただきますが、どうぞご寛恕いただければと思います。

# 累計合計１億PV＆書籍４巻発売記念特別編

## 都の家族

2021年5月1日

今回はカクヨム様と小説家になろう様の累計PV合計１億突破と、４巻発売記念の特別編となっております。

この内容は本編には影響しませんが、有り得たIFの1つかも知れません。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「よいしょ」

　俺は腕に抱えていたものを下ろした。いや、「もの」と言っては彼女たちに失礼か。

　なにせ愛娘２人なのだ。

「よいしょー」

「よいしょおー」

　緑の髪と、灰色の髪をした２人は床に降り立つと、そう言ってキャッキャとはしゃいだ。

「先に手を洗うんだぞ」

「「はぁい」」

　２人はパタパタと台所の方へ走り去っていく。

　ここは都にある俺の工房だ。伯爵の庇護を受けた俺はここで「良い腕」の腕前の鍛冶屋として暮らしている。

　なにせこの都には魔力が無い。その状況では俺の腕も十全には振るえない。

　しかし、「それでも良いから来てくれ」と言われ、“ママ達”にも「娘達には一度都での暮らしを体験させておいた方が良い」と説得されては、俺も頷くよりなかった。

　魔力が無いと言ってもチートは変わらず使えるようで、そのおかげで「王室お抱えと同じかそれ以上」と言われる程度の腕前は保てており、娘２人を含めた家族を養う程度のことは出来ていた。

「もう都で暮らし始めて２年くらいになるのか」

　夕食をつつきながら、俺は呟いた。確か……あれ、何が片付いた時だっけ？ 何か大きなことが片付いて……それでマリウスに頼まれて都に越してきたはずなのだが、その大元になった出来事が思い出せない。

　そんな大事なことなら忘れるはずもないのだが、寄る年波には勝てないと言うことだろうか。いや、でも……。

　そんな違和感は、サーミャの言葉でかき消えてしまう。

「そんなになるかぁ」

「こちらの生活にも慣れてきましたね」

　サーミャの言葉はリディが引き取った。あれ？ 確かリディは……。

「私は元々こっちだったから、違和感なかったけど」

「私も似たようなものね」

　ディアナとアンネが言って、それで新たに覚えた違和感はかき消える。

「アタイはまだちょっと落ち着かないなぁ」

　小さく口を尖らせたのはヘレンだ。ずっと根無し草の生活だったからだろう。当たり前だが“黒の森”の中と違ってここいらは人も多いし。うんうん頷いているから、サーミャも感覚的には同じ思いなのだろう。

「私はどっちでもないですねぇ。山とは言っても、そう人里離れたところでもなかったですし」

　そう言ったのはリケだ。うちの元の工房が“黒の森”にあるのが異様なだけで、本来人里離れすぎたところに工房を構えるものはあまりいない。

　前の世界では地域や時代によっては賤業であったが、この世界の今は違っている。住居にほど近い場所に工房を構えても問題になることは少ない（騒音などで小言を言われる可能性はあるだろうが）のだ。

　町住まい、とまでは言わずともほど近いところに住んでいたのなら、都暮らしにもあまり違和感はないだろう。

　ちなみに“黒の森”にある元の工房はそのまま残してある。いざというときにはあそこで妖精族の治療を行うこともあるし、いずれ都からあそこへ戻るからだ。

　家の手入れは治療代と言うことで、たまにジゼルさんたちが溜まったホコリなんかを払ってくれている。

　この２年で１度だけ妖精族の治療が必要になったので戻ったが、そのときもかなり綺麗だったので、思ったよりこまめに綺麗にしてくれているのかも知れない。

「今日はパパとどこ行ってたの？」

「きょうはねー、はくしゃくおじさんのところとー」

「いちば！」

　ディアナが２人の愛娘に聞くと、２人は元気よく答えた。

　マリウスも彼女たちにかかれば「おじさん」か。まだそんなに歳はいってないはずなのだが。

　ディアナもそう思ったのか、クスクス笑っている。

「楽しかったか？」

　優しい声音で、ヘレンが聞いた。暮らしにはなかなか慣れないようだが、都に来てからというもの、母親のような雰囲気が増してきた。

　ヘレンの問いには、緑の髪の少女が答える。

「ううん。なんか、パパと2人で難しいお話してたの。あ、でもおばさんはお菓子くれたよ」

「お礼は言ったか？」

「うん！ ちゃんと２人で言ったよ！」

「そうか、偉いぞ」

　ヘレンが緑の髪をグシャリと撫でると、娘は「きゃー」と言って喜んだ。

「市場では何を見たんですか？」

　リディがふんわりと微笑みながら、灰色の髪の少女に尋ねる。

「うんとねー、キラキラした石とか、パパが作ってるみたいなナイフとか、いっぱい！ あと、しょくどうに行ったら、サンドロとボリスとマーティンのおじちゃんも色々くれた！」

「色々なところを回ってきたんですね」

「うん！ 楽しかった！」

　リディは優しく灰色の髪を撫でる。「うふふ」と灰色の髪の少女は笑った。

　サーミャとリケも、今日何をして遊んだのかとか、今度はどこへ行きたいか聞いたりしていた。

　夕食を食べ終わって、口元を拭き終わると、２人はもうすっかりおねむのようで、コックリコックリと船を漕いでいる。アンネが「仕方ないわねぇ」と呆れたように、しかし、嬉しそうな声色を隠せないまま、緑の少女を抱える。灰色の髪の少女はヘレンだ。

　２人をベッドに運んでいくのを見て、俺は「こういうのも悪くないのかもな」などと考えた。

　いや、おかしいな。もう２年はこの暮らしを続けているはずで……。そうであればこれはこれで“いつも”であるはずなのだ。

　その違和感が膨れ上がったところで、俺は意識は暗転する。これで元に戻れる、そんな妙な安心感とともに。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

４巻は５月８日発売予定となっております。緊急事態宣言発令中でもあり、該当地域の方々には是非書店へとは言いにくいのですが、各種通販サイトなどご利用いただければと思います。

# 第１１章 北方からの来訪者編

## 夏が終わる

2021年5月7日

　あれからまた納品の日を越えた。その間に太陽はすっかり勢いを弱めていて、風もその冷たさで次の季節が近いことを知らせてくれている。

　その間、特に何事もなくゆっくりと毎日が過ぎていったわけである。ある意味、望んだ通りのスローライフを満喫していると言えなくもなかった。

　だがしかし、やらねばならないことが山積していることも自覚しており、若干の焦りも感じていた。

　この日はサーミャたち狩りチームの獲物を引き上げてきた午後で、俺とリディは畑に植えていた作物（いくらかの野菜と香草のたぐいだ）の収穫と、次に植えるために耕す作業をしていた。

　この間まで同じ作業をしたら滝のように流れていた汗も、今はそれほどでもない。首にかけていた手ぬぐいで額の汗を拭う。ちょうどタイミングよく風も吹いてくれて気持ちがいい。

「夏が終わるなぁ」

「そうですねぇ」

　同じように汗を拭い、樹々を見ながらリディが言った。ここらの樹木は低木はもちろん、高木になるものでも広葉樹が多く、木葉鳥はそれらの樹木の葉に擬態している。

　サーミャ曰くはそのほとんどが常緑樹らしい。そのため、木葉鳥や猪は体色が緑っぽいものが多いわけだが、いくらかは落葉するようで（厳密に言えば常緑樹も常に少しずつ落葉し、少しずつ新しい葉が生えてくるだけで、全く落葉しないわけではないものが多いのだが）、全体の色が変わりつつある木もちらほらと見受けられる。

　湿度が低めのせいか、やや涼しくはあるがごく普通の気候のわりに常緑樹が多いのは、この森の魔力のせいだろうな……リュイサさんに聞いておけばよかったかな。

「過ごしやすくなるのは助かるよ」

「ふふ、本当にエイゾウさんは暑いのが苦手なんですね」

「そうだなぁ。寒いほうが強いかな」

　雪国出身というわけでもないのだが、前の世界の出身地が冬にはそこそこの寒さになる地域だったせいか、寒い方はわりと耐えられるのだ。

　雪国の人はガンガンに暖房をかけると聞いたから、雪国ではないがそれなりに寒い地域だからこそかも知れないが。

「エイゾウさんがここに来たのは最近なんでしたっけ？」

「随分経ったようにも思うけど、まだ１年経ってないからな。ここの寒さはサーミャから聞いてるだけでよく知らないんだよな」

「この“黒の森”はわかりませんが、あの森のあたりはけっこう寒かったですよ」

「うーん、防寒も一応準備すべきか」

　ここいらで防寒っていうとなんだろう。猪や熊の毛皮だろうか。マタギと聞いて思い浮かべるような姿の自分を想像して、俺は苦笑した。

　そう言えばみんな革製らしいコートを持ってたな。旅装の一部なんだろうけど、風雨を遮断するのなら防寒にも役立ちそうである。

　いや待て、寒いと言えば一番大事なものがあるじゃないか。

「そろそろ温泉の準備を始めるか……」

　やらねばならないことの１つ、温泉である。俺も大期待していたし、場所はジゼルさんの地図で詳細に分かっているので後は作業にかかるだけなのだが、湯殿やその他諸々を考えるとちょっと億劫で手が出ていなかったのだ。

「いいですね。井戸掘りも楽しかったですよ」

「そう言ってもらえると助かる」

　俺は苦笑交じりの微笑みを返す。「本当ですよ」とむくれるリディをなだめながら、この日の畑仕事を終えた。

「ということで、そろそろ温泉にかかります」

「よっ、待ってました」

　囃し立てたのはヘレンだ。夏の間、井戸の水での水浴びを毎日する生活が気に入ったのかも知れない。傭兵だから汗の流れるままに放置しているのに慣れているといっても、その状態を好んでいるわけではないだろうしなぁ。

「基本的な作業は井戸の時とほぼ同じだけど、溜めた湯の周りに体を洗うスペースと、目隠し、それに服を脱ぎ着する建物を作ります」

「それとそこへの渡り廊下？」

「そうだな」

　ディアナが言って、俺は頷いた。雨の日には小走りに湯殿へ向かうというのも風流かも知れんが、ちょっとなぁ。

「わん！」

　俺の返事に合わせるようにルーシーが吠えて、場が笑い声に包まれる。見るとそろそろ子狼と呼べなくなってきそうな狼が胸を張っていた。

「お前も急に大きくなってきたなぁ」

「わんわん！」

　撫でてやると、彼女はパタパタと尻尾を振る。食べる量は増えたが、体の大きさに見合ってない気がするのは、彼女が魔物になっているからで、おそらくは実体としての体を成長させる分だけを食っているのだろう。

「小屋の拡充か、ルーシー専用の小屋も考えないといけないかも知れませんね」

　リケが俺たちの様子を眺めながら言った。俺は少し眉根を寄せて言う。

「やること満載だな」

「飽きないからいいんじゃねぇの。アタシは色々やるの好きだぜ」

　最後に残った肉を口に運びながらサーミャが言い、確かにと家族のみんなが頷いてこの日は終わりになった。

　さて、明日からまた頑張るとしますか。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

明日5/8に書籍版第４巻が発売になります。帯のついている紙の本ですとASMRボイスドラマのトラック２など特典もついてきますので、緊急事態宣言発出下の地域も多い折ですが、書店様で見かけられましたらぜひ。

詳しくは近況ノート、カドカワBOOKS様の公式サイトをご確認ください。

## 温泉掘り始めの一歩

2021年5月10日

　翌朝、神棚に今日の作業の無事を家族全員で祈って外へ出ると、昨日のように太陽が燦々と照りつけていた。だが、夏の盛りのように、切りつけてくるような陽射しではない。

　さりとて冬のようなほの暖かさ、とは言えないくらいの熱量がある。風が渡れば過ごしやすそうだ。

　地図を見れば目と鼻の先ではあるが、クルルに道具や昼飯などの荷物を持ってもらい（彼女自身はご機嫌だ）、ほんの１００メートルくらいを移動する。

「これって、この辺だよな？」

　俺は地図と実際の土地を交互に指差しながら言った。見た目には他の場所と変わりない、多少草の茂っている普通の地面に見えるのだが、文字通りジゼルさん渾身の地図が示しているのはここのようである。

「アタシにもそう見えるな」

「私もですね」

　元々この森に住んでいたサーミャと、ここではないが森の住人であるリディが同意した。２人がこの地図を見て言うなら間違いあるまい。

　多少開けたそこへクルルに積んだ荷物を下ろす。クルルはディアナに鼻をこすりつけて少し残念そうにしていたが、なに、今日はこれからが本番だ。掘り出した土の運搬という大事な作業が待っているからな。終わったら思う存分褒めてあげるつもりだけど。

　兎にも角にもまず温泉を出さないことには他の建造物の位置を決めるのも難しい。先に脱衣所を建ててから、温泉はその真下で湧きましたとかなったら、目も当てられない事態になるのは炉の火を見るより明らかだ。

「ぴったりここ、ってわけでもないだろうから、多少面倒かも知れんが広めに掘るか」

「そうねぇ。変に見定めて外すよりは良いんじゃない？」

　地図と現場を見比べながら、アンネが言った。ディアナとヘレンも頷いており、分かっているのかいないのか、ルーシーも「わん」と吠えている。

「ようし、じゃあこのあたりを掘っていくか」

　俺がそう宣言すると、みんなから了解の声が返ってきた。めいめい手に道具を持つ。

　俺とリケ、ヘレンとアンネの“力持ち”組が掘削担当で、サーミャ、ディアナ、リディとクルルは出た土を運んだり、土留の板を運んできたりと言った作業になる。ルーシーは癒やし係かな……。

　最初のひと掘りは俺の担当ということらしいので、俺は家族の見守る中、ショベルを地面に突き立てる。チートでその性能を強化されたショベルは“黒の森”の硬い土に突き刺さり、最初の１盛りをその大地から取り除いた。

　小鳥がさえずる森の中に拍手の音が響く。こうして、それなりに長い期間かかるだろう温泉掘りの作業が始まった。

　最初は４人で黙々と地面を掘り下げていく。いずれリケが出られないくらいに掘ったら、土留と坂道の整備をしなければならないだろう。露天掘りなので空気は大丈夫……だと思う。井戸のときもなんとかなったし。

　ルーシーが「ほりほり」をしてくれたり、土を運んではディアナに褒められてクルルが機嫌を取り戻したりと、和んだ空気の中で作業は進んでいった。

「温泉のお湯って水を張って稲を育てるのには使えないのかな……」

　昼休憩にしよう、と敷物の上でリディが用意してくれたハーブ茶を飲み、昼飯の簡単イノシシ肉サンドを頬張りながら、俺は言った。

　水田を作る上でもちろん土の養分だの透水性だのと言った要素は重要であるが、最も重要なのはどの時代でも水利だ。なんせリュイサさんおすすめの泉源である。無限に……とはいかないだろうが、少なくとも俺が生きている間に涸れることはあるまい。

　もちろん、そのまま流せるような水温（湯温？）ではないのだろうが、無尽蔵に使える水源があるなら、溜池のように溜めて冷ましてから導入する方式で行けるかもと考えたのだ。

　小さなおとがいに手を当てて、サーミャに茶を注いであげていたリディが言った。

「うーん、温泉の効き目って植物にいいんですかねぇ」

「ああ、そうか」

　温泉にはそれぞれに異なってはいるが泉質というものがある。溶け込んでいる成分によって効能が違ってくるわけだが、例えば塩化ナトリウムが溶け込んだ食塩泉だったら植物を育てるどころか「カルタゴ滅ぶべし」になりかねない。

「その辺は湧いてから、ちょっとずつ試すしかないか」

「そうですね」

　リディは頷いた。そう言えばpHを測るものも用意しないといけないかもだな。

　俺はまだ湧いていない温泉の皮算用と一緒に、頬張ったイノシシ肉サンドを飲み込むのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

5/8に書籍版４巻が発売になりました。ありがたいことに好評を頂いておりまして、いくつかの書店様では売り切れも出ているようです。

緊急事態宣言延長の地域などもあるご時世ではございますが、見かけられましたらお早めに確保いただけますと幸いです。

いくつかの書店様では特典もございますので、詳しくはカドカワBOOKS公式サイトをご確認ください。

## 岩

2021年5月12日

　それから数日が過ぎた昼下がり。井戸を掘ったときのように板壁に囲まれたかなり深い穴が出来上がっていた。一箇所だけはスロープにしていて、穴の底に降りられるようになっている。

　ドンドンと源泉に近づいている……はずなのだが、水も出ないとなると、

「ここで合ってるのかな……」

　ポツリとアンネが呟いた。まぁ、こう言う不安も出てくるよな。俺もそう思う。

「地図だとどう考えてもここなんですよね」

　リケが板壁に貼られた地図を見る。汚損や紛失を避けるため、家と温泉の辺りだけを新しく複製したものであるが、どういう判定によるものなのか、恐らくは生産のチートのおかげでかなり精確に写し取れている品である。

「まさか、とんでもなく深く掘らなきゃいけないとかかな」

　ショベルに山盛りになった土を後ろに放り投げて、ヘレンが俺に尋ねる。

「とんでもなくって、どれくらいなんだ？」

「山ができるくらい」

　俺がそう返すと、ヘレンは「うへぇ」と舌を出した。

　前の世界、東京あたりでは１０００か１５００メートルも掘れば大概のところで温泉が湧く……そうだ。真偽の程はもう確かめようがないが。

　ともかく、ここの温泉がそれと同じだとしたら、１０００メートルは掘り下げないといけないことになる。

　ボーリングならともかく、露天掘りでそれをすると、つまりは１０００メートル積み上がるだけの残土が出るわけで、そんな標高にはならないとは言え、山一つを人力のみ（竜力と狼力もあるが）で作り出すという話になってくる。それは無茶だな。

　ジゼルさん経由ででも、リュイサさんに詳しい位置を再確認するべきだろうか。いや、そもそも２人に連絡を取る方法が分からんな。気忙しくないのがこっちの良いところではあるが、緊急時にカミロやマリウス、そしてジゼルさんには連絡を取る手段が何か欲しいところだな……。

「まぁ、今日明日でもう少し掘ってみよう。ダメだったら一旦中止して場所の確認からになるけど」

　俺がそう言うと、３人から了解の声が返ってくる。あまり元気がない感じなのは致し方ないだろう。

　ザクザクと更に掘り続けて翌日。深さ的には結構なところまで来た。井戸よりも深くなってきている。今のところ息が苦しいとかそういったこともないが、そろそろ気をつけないといけないかも知れない。

　それよりも、まだ進展が見えてこない。延々と土を掘り、それがクルル達によって運び出されていく。

　あの土も埋め戻しをした残りをどうするか考えないといかんな。

　そう考えたのは半分は現実逃避のためだったが、

「おっ」

　土を放り投げ、次の土を掘り出そうとしていたヘレンがそう声を上げた。

「どうした？」

「見てくれよ」

　土を掘っていた３人がヘレンのところに集まる。ヘレンはショベルでかき分けるように土を除けた。

　そこには石……大きさから言えばこれは岩だろうか。いや、ヘレンが掘っていたここだけ少し作業が進んでいた。と言うことは。

　ヘレン以外の３人はバッと散って土を掘る。さっきまでの緩慢な動きではない。ルーシーが「ほりほり」をするかのような勢いだ。

　すぐに俺のショベルにもガツッと硬いものが当たる感触が伝わってきた。顔を上げると、リケもアンネも同じように顔を上げている。

「そっちもか？」

　俺が言うと、２人は頷いた。石ならかなり出てきたし、岩と言っていいんじゃなかろうかと思う大きさのものもあった（そしてクルルが喜び勇んで運び去った）のだが、流石にこの穴の底と言って良いような大きさのものはない。

　つまりこれはおそらく――。

「岩盤だ。ここを突き抜ければ多分出るんだろう」

　俺がそう言うと、３人からワッと歓声が上がる。なんだなんだと寄ってきたサーミャやディアナ、リディ、そしてクルルとルーシーにも「もう少しで到達できそうだ」と伝えると、彼女たちも喜んだ。

　さて、となると差し当たっては、

「岩盤を砕くものが必要だな」

　俺がそう言うと、一瞬シン、と静まり返る。

「作るぞ」

　その言葉に、リケが１番だが家族みんな再びワッと歓声を上げるのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

5/8に発売された書籍版４巻ですが、早くも重版が決定いたしました。これも皆様の応援のおかげです。ありがとうございます。

３巻の再重版も決定しておりますが、売り切れもあるようですので、見かけられましたらお早めにどうぞ。

## ”岩砕き”

2021年5月14日

「さてさて、どういう方式にしようかな」

　翌朝、神棚に手を合わせてから炉と火床に火を入れたあと、俺は接客スペースの方で腕を組んだ。

　他のみんなはとりあえず納品物を作っていくらしい。十分な数は１週間かそこらで安定して作れるようになったのだが、「空いてる時間で余分を作っておけば不慮の事態でも納品できるから」と言っていた。

　狩りには出ないのかと聞いてみると、「肉が十分あるから」とのお答えであった。うちはかなり消費が多い方ではあると思うのだが、どっかに卸すとかでもなけりゃどんどん余っていくよなぁ。余計な殺生をすることもあるまい。

　とりあえず、岩盤を砕く道具だ。素直に考えればツルハシになるだろう。岩盤の厚さがどれくらいかにもよるが、それで少しずつ掘り砕いていくのがテッパンだとは思う。

　あとはクサビと鎚か。クサビを鎚で打ち込んでいき、割って除去するのである。

　これらの手法の問題点は圧がかかっているであろう帯水層から湯が吹き出したときに避けにくいことである。

　水温がどれくらいかにもよるが、80℃の熱水を浴びせられたら大変なことになるのはどの世界でもあまり変わらないだろう。金属の鱗を標準で持っている世界なんかだと分からんが。

　リュイサさんの様子からして、恐らくは直接かかっても大事故には繋がらないくらいの温度なのだとは思う。あの人の“目的”から言って、俺が死んでしまう事故につながるのであれば警告してくるだろうし。

　ただまぁ、色々とスケールが俺たちとは違う人でもある。「忘れてたテヘペロ」の可能性も考えれば、用心はしておいても良かろう。

　となるとだ、前の世界の知恵をちょっと借りるか……。

「ちょっと使うぞ」

「どうぞどうぞ。親方の作業より優先するものはないですから」

　長剣をこしらえるため、火床を使っていたリケに声をかけると、彼女はにっこり笑ってそう言った。

　個人的にはリケたちの作業のほうが生計に繋がるのだから重要なのではと思うのだが、ここはお言葉に甘えることにした。

　板金を３枚まとめて積み上げ、火床に入れる。赤い火がその表面を染めるように包み込み、鋼も赤く染まっていく。

　温度が十分に上がったら、取り出して叩いて１つの塊にしていく。ここではまとめるのが目的なのでまだ魔力は込めない。大変になるし。

　出来上がった塊を再び加熱したら円筒形に整えていく。普段よりも鋼の量が多い分だろうか、叩いたときの音が若干低いような気がする。

　かなり大きく、重い鋼の円筒ができた。前の世界でＳＷＡＴがドアをぶち破るのに使うバッテリングラムの持ち手を取り払ったような感じだ。これに持ち手をつければ実際その用途で使えるだろう。

　だがもちろん、今回はその用途で作ったわけではない。円筒の片方をチートを使って魔力を込めつつ、扁平にしていく。大きさが大きさだけに時間はかかったが、マイナスドライバーの先端のような形状ができた。

　家の建て増しや渡り廊下を作ったときに出た端材をまとめているところから、少し大きめの物を選んで外に運び出す。岩盤を砕こうとしているものを家で試して床を壊すのはちょっと避けたいからな……。

　昼飯は食ったので、それよりは時間がかかった自覚はあったが、端材を置いて空を見上げるともう少しで日が暮れそうな頃合いである。

　秋に差し掛かって日が暮れるのが早くなっているだろうことを考えても、思ったより時間かかってるな。それなりの大きさだったから仕方ないが。

　ともかく、今は実験だ。俺は鍛冶場へと戻る。

「よいしょ」

　かなりの重さの“岩砕き”を抱えて、再び外に出るとクルルとルーシーが置いた端材のところでちょこんと待っていた。

「よしよし、危ないからちょっと離れててな」

　俺の予想では大丈夫だと思うのだが、万が一ということもある。離れておいてもらったほうが良かろう。

　２人の頭を撫でると、素直に少し距離を置いた。いい子だ。

　その頃には「またエイゾウがなにかやるらしい」と家族全員手を止めて出てきていた。まだ実験のような段階なのだが、このところ土掘りと鍛冶仕事しかしてないのだし、気晴らしになるならいいか。

「よし、それじゃやるか。よいせ」

　再び重い“岩砕き”を持ち上げ、扁平な側を下にして手を離すと、落下していった“岩砕き”はズドンと音をさせて着地する。

　そう、着地である。間にあるはずの端材はまるで最初からそうであったかのように、真っ二つに断ち切られている。

“岩砕き”の先端は大きな音に比例するかのようにその先端を土に埋めている。実験としては成功……だろう。あとは明日、実地で試せばいいか。

「成功したのか？」

　地面に突き立つ“岩砕き”を指差して、サーミャが言った。俺は頷く。

「そうだな。これで比較的安全にあの岩を砕けると思うよ」

「おー」

「流石ですね！」

　感心の声を上げたサーミャ。それをかき消すような大きなリケの声が、夕暮れ迫る“黒の森”に響き渡った。

## 岩を穿つ

2021年5月17日

「当たり前だけど、あんなゴツいのも作れるのねぇ」

　上品な仕草で鹿肉を嚥下したアンネが言った。

「そりゃあ、ナイフや剣なんかよりも、ずっと単純だからなぁ。デカいぶんは大変だけど、デカさで言ったらアンネの両手剣の方がずっとデカかったんだし」

「それはそっか」

　うんうん、と腕を組んでアンネは頷く。時折若干の“はしたなさ”みたいなものが垣間見えるのは、周りに影響されているのか、それとも元々こんな感じだったのか。

　食事の時は大抵静かに話を聞いているリディが珍しく話に入ってくる。

「実用一辺倒、と言うんでしょうか。かなり荒々しいですよね」

「使うとして今回こっきりの予定だし、鎚目も消してないからなぁ……」

「自然な感じが良いと思います」

　ああ、なるほど。そこが気になってたのか。本人は意識しているのかどうか知らないが、リケが斧を持ったときとは違う、「らしさ」を感じてしまう。

　こっちは斧を持った時の「らしさ」がものすごいリケが続く。

「今回こっきりってことは、他には使わないんですか？」

「他の使いみちもないしな。持ち手をつけて破城鎚にはできるだろうけど、うちじゃ出番なさそうだし」

「それはそうですねぇ」

　あれで実際に試したら、もしかしたら都の城門でも粉砕できるかも知れない。粉砕というか切断というかだが。

　まぁ、そんなことをすればお縄につくのは間違いないので知ろうとは思わないが。

　あるいは家の庭に突き立てておいて、意味ありげなふうを装うのもいいかも知れない。「ここから入るな」とか「罠の存在を示している」とか思わせておいて、実際には何もないと言うやつだ。

　そういえば、前の世界ではインドに錆びないとか言われてる鉄柱があったな。ナイフや剣はいざという時に使えないと困るので手入れを続けているが、魔力をまとった鋼がどれくらい錆びないのか試すのに、野ざらしにするのはありかも知れない。

　もちろん、折角作ったものを野ざらしにするというのは、かなり気が引けるが。

「下手したら、この家にあるものであれが一番危ないものかもね」

　破城鎚と聞いて一瞬目を輝かせたアンネが言った。

「重いけど１人でも持ち運べて、もしかしたら鋼の扉でも一発で開けてしまうわけでしょう？ 」

「そうだな」

「そりゃ危ないな」

　アンネの言葉に俺が頷くと、ヘレンが苦笑しながら引き取った。

「そんなのがあったら助かったのに、って思い当たる場面が１つや２つじゃきかないぜ」

　攻城戦は滅多にないのだろうが、砦攻めくらいならかなり経験がありそうなヘレンが言うと説得力がある。

「本気で作ったやつだし、外に出すつもりはないよ。かなり重いから盗もうにも難儀するだろうしな」

　一部の例外を除いて、本気で作ったものをおいそれと外に出すつもりはない。それがただの棒切れのようなものでもだ。……例外が割とあるのではと言われると肩身が狭いのも事実なのだが。

　話の最中、ディアナに上品なスープの飲み方を教わっていた（なかなかに厳しいのでアンネ以外は口出しできない）サーミャが、最後の一口を飲み込んで言った。

「そういや、あれってどう使うんだ？」

「ん？ あれはな……」

　翌日、俺たちは穴の上にいた。傍らにはクルルがここまで頑張って持ってきた細長い丸太がある。

　丸太は前の世界でいうところの足場丸太のようなものである。使い道も近いのだが。

　穴の上に丸太で簡素な櫓を組む。三角錐の底辺以外の辺が丸太になっているような形だ。焚き火で使うトライポッドと同じ形状と言ってもいいかも知れない。

　縄でくくった頂点部分には、井戸から外した滑車が取り付けてある。涼しくなってきたし、ここに居る間は井戸には行かないので大丈夫だろうと判断してのことだ。

　その滑車には別の縄が通してある。穴の底に落ちた縄の端に昨日作った“岩砕き”をくくりつけた。

　あとは落ちる箇所が一定になるように、足場丸太でガイドをつけた。摩擦で落下速度が多少下がるだろうが、そこはチートで作った俺の製品である。カバーできる威力はあるだろうと信じている。……あるよね？

　穴を狭めなかったのはいくらか砕いても湧くなり噴出するなりしない場合は、岩盤の中でも特に分厚いところと判断して位置をずらす予定だからである。

　本当は落とす“岩砕き”も、もっと複雑な形状をしていた記憶はあるのだが、特殊すぎてよく覚えてないんだよな。キッチリ用を果たしてくれると良いのだが。

「上でこれを引っ張り上げて、手を離せば高いところからあれが落ちて岩を砕いてくれるって寸法だ」

「言われてもピンとこなかったけど、こうやって見ると分かるな」

　サーミャはほほうと感心した顔で言った。耳がピコピコ動いてるのでテンションも上がっているらしい。

「よーし、それじゃあ始めるか」

　俺が言うと、クルルがひときわ大きな声をあげて、森の中に家族の笑い声が響いていくのだった。

## 一歩ずつ

2021年5月19日

“岩砕き”にくくりつけた縄の端をクルルが咥える。時折は俺たちも手伝うことになるとは思うが、これが温泉への次のステップを踏み出す第一歩になる。

「クルルルルル」

　クルルは軽快な足取りで縄を引いていく。多少進行方向がよれても吊り下げた滑車がそれに合わせて動くので問題ないのだが、クルルは綺麗にまっすぐ縄を引く。

　元の地面よりも少し上くらいまで“岩砕き”が上昇してきたところで、クルルに声をかける。

「クルルー、離していいぞー」

「クルルル」

　クルルがパッと咥えた綱を離すと、“岩砕き”は重力に引かれて（だと思うのだが、物が落ちるのが重力によるものなのかはインストールになかった）落下していき、岩盤にぶち当たる。

　岩盤に当たった“岩砕き”は土の地面と違ってぶっ刺さってそのまま、というようなことはなく、弾かれるように軽く跳ねて、再び着地した。

　俺は坂を降りて穴の底へ向かった。温泉が出る、とわかるとなんとなく暑くなってきているように感じる自分の体の現金さに思わず苦笑が漏れた。

　穴の底につくと、岩盤の上には“岩砕き”が立っている。突き刺さっているわけではなく、ガイドに支えられているだけだ。

　俺はゆっくりと“岩砕き”に近づいていく。あの一撃でいきなり温泉が噴出するということはないと思うのだが、用心はしてもよかろう。

　用心しいしいマイナスドライバーの先のようになっている先端部分を見てみると、僅かだが岩盤にめり込んでいる。周りに細かい砂や小石があるから、おそらく、これはその分削れたのだろう、と思う。

　とりあえず、どれくらいやらなければいけないかはともかく、これで用を果たせるようだ。俺は上に向かって叫んだ。

「いけそうだ！」

　穴を覗き込んでいた家族たちからワッと歓声が上がる。やがて、俺の目の前でスルスルと“岩砕き”が上昇していくのを見て、穴の底から立ち去った。

　岩盤掘りは順調……なのだろうか。初めての経験すぎてよくわからないが、時折クルルを休ませ、家族みんなで“岩砕き”を引っ張りあげたり（微力ながらルーシーも加わった）しながら、延々と“岩砕き”を岩盤にぶち当てていく。

　前の世界だと圧縮空気を利用した機械もあるのだが、俺の送風の魔法では「圧縮」と言えるようなものではない。それはリディクラスでも同じだ。

　ちなみにリディに聞いてみたところによれば、彼女が起こせる最大風速は「風に向かって歩けない程度を短時間」だそうである。小枝くらいは折れるらしいので、結構なもんだと思う。

　それはさておき、そもそも圧縮空気を使った機械となると、当然文明的にはかなり先のものだし作るわけにはいかんので、地道に作業を繰り返すよりない。

　地面に立てて順繰りにハンマーで叩く方式もありかも知れないが、その場合はやはり噴出した湯をかぶることになりそうだからなぁ……。

　何度か作業を繰り返し、“岩砕き”が半分ほどその身を岩盤に沈めた頃合いで昼の休憩を取ることにした。

　もぐもぐと角煮サンドを頬張りながら、リケが言う。

「親方が作った、あのレベルのものでも時間がかかるんですねぇ」

　まぁ相手岩盤だからな……そう思っていると、ディアナがリケに返した。

「エイゾウのものだから、こんなに早いと言えるのかも知れないわね」

「それは確かに」

　頷くリケ。機械でなく手作業で、それも１回あたりに時間をかけている割には早いと言っても良いのだろう。多分。合間合間に出た岩のかけらなんかを取り除いたりもしてるし。

　前の世界でもう少し土木作業について詳しく知っていれば、更に作業が早く済んだのかも知れないが、いかんせん素人知識の付け焼き刃である。どうにもチートも働いてくれないし、ここはコツコツと作業しろということなんだろう。

　午後も頑張るべや、となったところで、ヘレンが既に３つめの角煮サンドを平らげて、リケに言った。

「そう言えば、リケは決まったのか？ あれ」

「あれって？」

「エイゾウと２人で何してもいいとかいうやつ」

　ああ、そう言えばバタバタしていて棚上げになってたな。しかし、何してもいいとか言った記憶はないんだが……。

「あー、あれね。候補は絞り込んできたけど、まだ」

「ふーん」

「ヘレンが決まってるなら先でもいいわよ」

「ううん。順番は守るよ」

　俺としてもどっちが先でも同じ話ではあるので、譲り合ってやってくれても「私は一向に構わん」なのだが、ヘレンも律儀なところあるからな。

「焦らずに決まったら教えてくれ。知っての通り辺鄙な森の鍛冶屋だから時間はある」

　俺がそう言うと、リケは、

「はいっ」

　と返事をしてくれた。岩を削るのと一緒で、家族のことも一歩一歩でいいから進めていこう。午後の作業を始めるべく大きく伸びをしながら、俺はそんなことを思った。

## 命の泉

2021年5月21日

　前の世界には雨垂れ石を穿つ、という言葉があったな。現象として起こりうる以上、こっちにも似たような言葉はあるんだろうか。

　今岩盤に落ちているのは雨垂れどころか、鋼の刃なのだが。

“岩砕き”は途中まではガイドに沿って落ち、途中からは自ら穿った穴へとその身を落としていく。全長はそう長くないが、まだ姿を穴に隠すほどではなかった。

　しばらくその様子を見たら、サーミャとヘレンが穴の底へ降りていく。穴の中に貯まった岩（だったもの）を掻き出すためである。

　前の世界だと圧縮空気で先端を動かしたあと、その空気で外へ排出する機構になっていたりするらしいが、この現場で使っているのはご覧の通りのものである。そんな洒落たことはできていない。

「気をつけろよ！」

「分かってるよー」

　俺が声をかけると、サーミャは気楽そうに手を振って返した。彼女たちはそっと“岩砕き”のところまで近寄ると、スコップでササッと掻き出す。

　この作業は何回繰り返していてもハラハラする。“その時”は確実に迫っているのだし、何かの拍子でドカーン、ということもあるかも知れないのだ。

　作業の担当がサーミャとヘレンなのは「足が速いから」だ。そのドカーンのときにちょっとでも足が速いほうが良いだろう、ということなのだが、実際に起きたら多少足の速さに違いがあってもな、というのもそれはそれとしてある。

　天に祈るような――この場合は素直にリュイサさんに祈るべきだろうか――気持ちで作業を眺めていると、無事に終えた２人がゆっくりと戻ってくる。

　そんなことを繰り返していると、“岩砕き”の姿がかなり見えなくなり、それに合わせるかのように太陽もその姿を隠しはじめたので、作業を終えることにした。

　これで明日頑張ってダメなら、別の場所を試すことになる。そうならんようになって欲しいところだが、それは神ならぬ“大地の竜”のみぞ知る、と言ったところだろう。

「ひゃー、結構汚れるもんだな」

「そりゃあ、サーミャならそうなるだろ。って、アタイも結構ついてるな」

「あはは、背中のほう叩こうか？」

「頼む」

　後片付けの最中、サーミャとヘレンがパタパタと体を叩くと土埃が舞う。こういうときこそ温泉の出番なのだろうが、その作業での出来事であることに俺は妙なおかしみを覚える。

「こういうときに湯で体を流せるように、ってのが温泉のいいとこの１つだからなぁ。多分もう少しだろうから頑張ろうや」

　湯殿の建造を含めてやることは山積しているが、湧いた湯を貯められて、目隠しが出来て、排水に問題がなければ使用開始できるのだ。

　湯船さえ出来てしまえば、湯殿は建築中でも仕事上がりにひとっ風呂と洒落込むこともできるはずである。

　しかし排水か。湧いた湯はかけ流しになると思う。となれば湯船に溜まりきった湯は森に垂れ流し、ということになる。家とここはそれなりに離れているので、凝ったものにしなくてもいいとは思うが多少は考えておくか。温かい川が新しく生まれる可能性もあるわけだが。

　それまでにリュイサさんに確認しておきたいところなのだが……。やはり連絡手段の確立が急務だな……。

　翌日、今日は出ると良いなと思いながら、穴へ向かう。今日でダメだったら場所を変えるわけだが、その前に納品やらの通常業務をこなす必要がある。一旦お預け、ということだ。

　穴に到着した俺は、そうならないよう“大地の竜”に内心お願いしながら、今日の作業の準備をはじめた。

「クルルルルル」

　クルルが縄を引っ張り、離す。何十度目になるかわからない作業だが、クルルが飽きていないっぽいことは救いだな。もちろんそれは、

「わんわん！」

　お姉ちゃん頑張れ！とでも言うように、縄を引っ張るクルルの周りを駆けまわるルーシーの存在もかなり大きいだろう。娘たちが喜んでくれるのなら、時折、俺の肩のＨＰが減ることくらいはなんでもない。

　ルーシーは俺たちが引っ張るときも同じようにして応援をしてくれる。多分、本人（本狼）も加わりたいのだろうが、それを控えているように見えて、一旦区切りがついたら思い切り甘やかせてやるか、などとディアナと話をしたりした。アンネが若干呆れ顔だったのは見なかったことにしよう。

　作業を繰り返して昼を挟み、いよいよこれは変える場所の見当をつける必要がありそうだな、と思い始めたころ。

「クルッ」

　パッとクルルが咥えていた縄を離す。スッと落ちていく“岩砕き”は自ら穿った穴に呑み込まれて姿を消し、すぐに鈍い音だけを響かせる。

　何度も何度も見てきた光景。代わり映えがしなさすぎて、何事も起きていないかのようにすら感じる。

　その時、今まで耳にしなかった「ピシッ」という音が響いた。

「お、おい、今の……」

「聞こえましたね」

　俺が言うと、少しだけ耳を動かしてリディが後を引き取る。他の家族も頷いた。何か変化が……。

　そう思う間もなく、変化は訪れた。

　ドウドウと音を立てて、穴から湯が溢れ出して来たのだ。何メートルにもにはならないが、確かに噴出している。

　その光景を見て、俺達は一斉に快哉を叫び、互いに体を抱きしめ合うのだった。

## 温泉

2021年5月24日

　とりあえず、喜んでばかりもいられない。クルルとサーミャ、そしてヘレンとアンネに“岩砕き”の回収を指示して、木の板と杭、槌を手に穴の底へ向かう。

　湯が噴出はしたが、どうやら“岩砕き”が噴き出すところをせき止めていて圧力が増し、派手に噴出したようで、クルルたちが引っ張って“岩砕き”が完全に抜けた今はそこまで派手に噴出もせず、滾々と湧き出す泉のよう（いや、温“泉”なのだから泉なのだが）に、湧いてきている。

　穴の底にはわずかばかり湯が溜まっていた。一瞬手を浸けてみるが、熱さは感じない。では、とゆっくり触ってみたが、やはり熱いというよりは温かい。心地よい温かさで、この温度ならそのまま浸かれそうだ。湧出口から離れているから、かなり温度が下がっているのだろうか。

　もし、元々の湯温が低いのだとしたら、入浴には湯沸かしが必要かも知れないなぁ。まぁ別に源泉１００パーセントかけ流しにこだわっているわけではないので、いいっちゃいいのだが。

　靴を脱いで入っても大丈夫そうではあるのだが、足の裏をケガするのは避けたい。少し逡巡していると、パチャリと音がした。

　見るとルーシーがいち早く入って、まだ水位の低い穴の底を走り回っている。たぶん本人的には湖に行っている時と同じような感覚なのだろう。……今ゴロゴロをしてディアナが慌てて駆け寄っているし。いや、もう間に合わんと思うのだが。

　それはともかく、２人の様子を見れば一目瞭然なのだが、大丈夫そうなので俺も靴のまま穴の底に入る。今日は別にここで湯に浸かろうというわけでもないし。

　ジワリ、と温かい湯が靴の中に入ってくる。ちょうど心地よいくらいなのだが、とすればやはり源泉はここより少し温度が高いくらいだろうか。

　ひとまずその確認をするため、俺は湧出口に近づく。

　少しずつ少しずつ近寄るのだが、慣れてしまっているのか靴の加減か、熱さが一向に足を襲ってこない。手を浸しても温かいままである。

　ままよ、と一気に近寄り、もうほぼ湧出口のところまで来たが、勢いはともかく温度の方は大したことがない。

　何かの成分で保温効果が高いとかだろうか。パシャパシャとルーシーとリケ、ディアナとリディも近づいてきた。

「普通、こういうのって湧いてるところが１番温度が高いと思うんだが」

「そうですね」

　リケが頷いた。彼女の地元の温泉でもそうだったのだろう。とすると概ね俺の認識はここでも通用する……はずなのだが。

「でも、普通に温かいわよ？」

「わん！」

　キョトンとした顔のディアナに、胸を張って一声吠えるルーシー。

「うーん、向こうとあんまり温度が変わらない気がするんだよな」

　鍛冶のチートが使えれば概ねどれくらいの温度か、少なくとも相対的な温度はわかるのだが、残念ながらここで鍛冶のチートが働くことはないだろう。

　リディはというと、俺の言葉を聞いて足元からひと掬い、湯を掬ってまじまじと見始める。

「これは……やっぱり……」

「なんか分かったのか？」

「ええ」

　リディは強く頷く。目は真剣だ。

「やはり“黒の森”と言うべきでしょうか。それともあの方が教えたところだからかも知れませんが」

　俺は思わずごくりと生唾を飲み込んだ。何かとんでもない状態なのだろうか、この湯は。もし不老不死になれるとかだったら、葉っぱと踵には気を付けないといけなくなる。

　リディはそっと言葉を続ける。

「この湯の魔力濃度は桁違いに高いです」

## 魔力泉

2021年5月26日

「魔力が……？」

「ええ」

　リディは頷いた。掬った湯が手のひらから少しずつ零れ落ちる。キラキラと輝いているが、これは陽光を映して煌めいているだけではなく、魔力を含んでいるからなのか。

「魔宝石ほどではないですが、かなりの濃度ですね」

「魔力泉、とでも言えばいいのか」

「他に何が入ってるかは分かりませんが、一番含まれているものという意味ならそうなりますね」

「なるほどなぁ」

　俺は顎に手を当てた。魔法石ほどではないということは、妖精族の病気の治療には直接は使えない、ということだ。だが治療後の湯治には十分そうには思える。今度ジゼルさんが来たら話してみよう。

　よくよく考えれば、“大地の竜”のある意味お膝元であるがゆえに、この“黒の森”の魔力濃度は高いのだ。これも多分“大地の竜”の影響ということなのだろう。この森の動物たちはもちろん、獣人たちや妖精たちが岩盤の下まで掘ってみよう！ とは思わないだろうから、今までこういう状態であることが知られずにいたのだ。

　どこかに自然と湧出している場所があるのかも知れないが、そこは広大な“黒の森”である。それを見つけた者も多くはないだろうし、見つけたとして魔力が多いことまで察知できるかどうかはまた別問題だからな。

　そこで俺はふと気がついて、顎から手を離す。

「ん？ じゃあ、ここと向こうで湯の温度があまり変わらないのも？」

「おそらくは魔力が原因でしょうね」

「ずっと温度が下がらないのも困ると言えば困るんだがな……」

　排水を考えたらそれなりの間、温かいのはまぁ許容範囲と言えるだろうが、ずっとその温度が保たれていずれ川へ、とかになったらまずかろう。

「さすがにそれはなさそうですよ。魔力も徐々に抜けてはいきますし、温度もずっと維持されるわけではないと思います」

「ここに溜まった湯で魔物が生まれたりは？」

　再び湯を掬ったリディに、俺は尋ねた。リディは手のひらの湯をじっと見つめながら答える。

「はっきりしたことは分からないですが、それもなさそうです。魔力が水の中の移動しているようなので」

「ふむ」

　ここにリヴァイアサンが誕生しそうだってなことになったら、今から急いで全て埋戻しせねばならんが、その心配もない、と思って良いのかなこれは。

　水棲の魔物自体はどうもいるらしい――らしい、と言うのは話をしてくれたヘレンも伝聞でしか知らなかったからだ――のだけど、ここの状態とそこは違うのだろうか。はたまた魔物だと思っているだけで、そういう生物なのかも知れない。

「とりあえず、この温度が維持されて、なおかつ魔物が湧かないってことなら、このまま温泉にしちまえばいいか」

「ええ、そうですね」

　魔力濃度の高いこの湯は他にも使いみちがたくさんあるのだろうが、それを探るのは後回しにし、まず櫓が取り払われた湧出口の周りを板と土、杭を使って囲う。

　幸い何十メートルも噴き上がっているわけではないので、なんとか作業を進めることができる。櫓を片したクルルとサーミャ、そしてヘレンとアンネとともにミニ井戸のようなものを作った。

　湧出量が結構あるので作る先から溢れているが、そこに蓋をして更に上から土をかぶせた。すると、圧力に負けて多少漏れてはいるものの、なんとかこらえてくれているようである。まぁ、ダダ漏れにならなければとりあえずはよしとしよう。

　僅かばかり溜まっていた湯も周囲の土に吸収されたらしく、その量を減らしているので、明日からはまた別の作業だな。ふと顔を上げれば切り取られた空はすでに橙色になっている。結構時間食ったな。

「よーし、今日はこれでおしまい。もしここがめちゃめちゃになってたらその時考えよう！」

　そう俺が宣言すると、賛成の声が夕暮れの森の中に響いていった。

## 連絡

2021年5月28日

「そう。連絡手段。カミロ、これはマリウスも兼ねてだけど、こっちのほうもそうだし、ジゼルさんとリュイサさんにも互いに連絡できる方法は確立しときたいんだよな」

　夕食時、俺は塩漬けにしていた鹿肉をローストしたものを１切れ飲み込んでから言った。

「カミロのほうは、ディアナのときには他になさそうだったから、森の入口まで俺が毎日手紙を確認しに行く、って手段にしたけど、特になにもないときに空振りが続くのもな」

　自宅のポストが４～５キロメートル先にあったとして、毎日見に行こうと思う物好きはそう多くはあるまい。あらためて考えると前の世界の通信手段が恋しくなってしまう。

　なんとなく、スマホを手に「あら、メールはどうやったら送れるのかしら……。ついったー……って何？」と戸惑っているリュイサさんが思い浮かび、慌てて脳内から追い出す。

「まぁ、今の人数なら森の入口近くに手紙入れを作っておいて、誰かが持ち回りで見に行くのはありかも知れないんだが……」

「やっぱり、場所が森の入口というのがネックですかね」

「そうだな」

　火酒の２杯目に取り掛かっているリケに俺は頷く。サーミャ、ヘレンとアンネはともかく、リケ、ディアナ、リディは１人で森を行くこと自体にリスクがある。サーミャ達も常に無事である保証もないわけだし。特にサーミャはうちに来た経緯が経緯だ。同じことが起きないとも限らない。

　それに、少なくとも名目上はディアナ、ヘレン、アンネはここに身を隠しているのである。よそ者が入り込める森の入口まで１人で向かわせたくない。

「じゃあ、２人ずつで行く？」

「いずれにせよ、身を晒す可能性があるのがなぁ……」

「そんなの今更でしょ」

「うーむ」

　ディアナの言葉に俺は腕を組んだ。言われてみれば街まで頻繁に行っておいて今更ではあるな。であれば、戦闘に長けている組とそうでない組――と言っても、ディアナは剣の腕が立つのだが――の組み合わせにクルルとルーシーを入れればいけるだろうか？

　幸いというか、温泉の湯殿と渡り廊下が完成すれば、しばらくは何かを建築することはない……はずである。家族が増えても空き部屋があるからそっちは大丈夫なので、建築があるとして倉庫か小屋の建て増しくらいか。それくらいなら、一時的にでも人手が足りなくて困る、という事はあるまい。

　クルルとルーシーも散歩になって丁度いいかも知れないし、ひとまずはそうするか。

「とりあえず皆が手間でないならそうしよう。ヤバそうと思ったらすぐ戻ってくる。時間がかかってたら残った全員で様子を見に行く、ってことで今度からやってみるってことで」

　同意の言葉がみんなから返ってきた。これで新しい日課が出来たな。無事にこれが上手くいってくれることを期待したい。あんまりうまくいきすぎて、片目が自分の父親の妖怪少年のポストみたいなことにならないと良いのだが、ということは誰も理解できないだろうと思うので言わないでおく。

「問題はジゼルさんとリュイサさんの連絡手段なんだよなぁ」

　腕を組んだままの俺にサーミャが言った。

「お互い毎日見るような何かだよな」

「言えば見てくれるんだろうけどな」

　向こうから用事がある場合は良いのだ。基本的に俺たちはここにいる。２週間に１回の納品の時には確実に「いない」し、その他突発的な理由で家を空けることはあるが。

「１日１回はうちに来てくれるのが確実ではあるんだけど」

「ジゼルさんはともかく、リュイサさんはなぁ」

「そうなんだよな」

　サーミャの言葉に俺は頷く。ジゼルさんたちは妖精族である。最悪１人～２人くらいここへ寄越してもらうくらいのことは可能だろう。“例の件”を抜きにしても互いにメリットがある話なのだし。

　問題はリュイサさんである。結構な天然っぷりなので忘れがちだが、彼女は“大地の竜”の一部なのである。同様の人物（？）がどれくらいいるかは知らないが、少なくとも彼女は個人としての存在でもあるようだし、力もある。

　そういう人をここへ「毎日来いよな！」と呼びつけるのは、まぁ、普通に気がひけるよねという話だ。

「こっちから伝える方法があればね」

　アンネが最後に残った肉を平らげて言った。同じ肉を狙ったらしいヘレンのフォークは虚空を突き刺したまま止まっている。

「夜空にコウモリのマークを照らすわけにもいかないしなぁ」

「なにそれ？ 北方にそんな風習あるの？」

「いや、流石にないよ」

　あの金持ちがこの世界に転生している可能性はなくはないが。ＮＩＮＪＡにもなっていたわけだし。

　ともあれ、その後食事が終わった後も、狼煙はどうだとか、大木をハンマーで叩いて大きな音を出すのは？ とか、“大地の竜”ならば地面に杭を突き刺して知らせることは出来ないのかとか、喧々囂々の様相を呈し、いずれも決定打とはならずにいたが、議論はノックの音で一旦止まる。

「はい。今出ます」

　とリディが応え、扉を開けると、そこには見知った姿があった。

「どうやら、お困りのようね。ノックしないといけないってジゼルがうるさかったからノックしたわ」

　リュイサさんである。天からの、いや、この場合は大地からの助けに俺は心の中で感謝をしながら、リュイサさんを招き入れるのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

本日コミカライズ版第9話が公開されています。どうぞそちらも御覧ください！

https://comic-walker.com/contents/detail/KDCW\_AM19201711010000\_68/

## “森の主”の呼び出し手段

2021年5月31日

「お困りのようねとは言ったけど、温泉が湧いたみたいだから来てみたら困ってた、ってだけなのよね」

　すっかり夕食が無くなったテーブルに着席した（夕食を用意しようか聞いたら「私はご飯は食べないのよ」だそうだ）リュイサさんは、そう言って小首を傾げた。美人ではあるので動きが

　少なくともこの“黒の森”の主であるはずなのだが。

「ま、まぁ来ていただけたのはありがたいです。こちらから連絡取れないですしね」

　俺がそう言うと、リュイサさんはポンと手を打った。

「あら、そう言えばそうね。大きな異変があれば察知はできるんだけど、私を呼び出すのに毎回地形を変えるわけにもいかないわよね」

「当たり前です」

　俺は苦笑した。可能か不可能かで言えば、今の家族総出でやればある程度可能であろうとは思う。

　だが、かかる労力と環境への影響の割にできることと言えば「リュイサさんを呼び出す」の１つっきりなのである。目的と手段が入れ替わっている感じが否めない。

「で、困っていたのはまさにその連絡手段でしてね。今回もちょっと聞いておきたいことがあったんで、どうしようかなと皆で考えていたところなんです」

　俺が説明すると、リュイサさんは微笑んで言った。

「ちょっと時間がかかって良いなら、ジゼルちゃん達に言づてしておいてくれれば、私にも伝わるわよ」

「ちょっと、ってどれくらいです？」

　ここで「ん～、１年かしら！」と言い出しかねないのがリュイサさんだと思っている俺は、おずおずと尋ねた。

「長くても１週間くらいかしらね。早ければ翌日。色々あるのよ」

　リュイサさんの回答に、家族一同ホッと胸をなで下ろす。

　しかし、おとがいに指を当てたリディが言う。

「あれ？ それなら妖精族さんたちは、リュイサさんが治療すればいいのでは？」

　そう言えばそうだな。リュイサさんは

　妖精族からリュイサさんにメッセージを伝える手段があるなら、伝えて治療してもらえば良いのでは……。

　しかし、リュイサさんは横に首を振った。

「そうしてあげたいのはやまやまなんだけどね。私は特定の生き物に直接手出しはできないのよ。そんなことをすれば、この森で不慮の死が無くなってしまうでしょう？」

「確かに」

　リディは小さく頷いた。だが、アンネが続いて疑問を発する。

「

　確か邪鬼討伐の時、リュイサさんは俺たちが討伐に失敗した場合、「最悪地形が変わるけどなんとかする」と言っていた。

　もし俺たちが失敗していたら、魔物という生き物に直接手出ししていたのではないだろうか。まぁ、純粋に魔力から生まれた魔物を生き物と呼んで良いのかについては疑問の余地があるだろうし、助けるのと仕留めるのとではまた話が変わってくるのかも知れないが。

　リュイサさんは肩をすくめて言った。

「今だから言っちゃうけど、例えば洞窟が崩落して、それに何が巻き込まれるかは私は知らないからね。あの洞窟で崩落が起きれば、地上も広範囲に陥没するでしょう？」

「ああ……」

　アンネは溜息をつく。なるほどな。「邪鬼を倒すために力加減の効かない大きな力を振るう」のではなく、「邪鬼を倒すには何かの巻き添えにする必要があって、邪鬼レベルだと地形が変わってしまう」のか。

　前の世界のゲームっぽく言うなら、コンストラクションモードだけなので、地形はいじれるが直接攻撃はできない、みたいなもんか。

「うまく邪鬼だけを巻き込めるとも限らないから、この森の最強戦力であるあなたたちにお願いしたのよ」

　その状態でピンポイントに取り除きたいものがあれば、小回りのきく俺たちに頼むしかないのは、どのみち同じ話である。

「なるほど。ともかく、連絡はジゼルさん達に言づて、と。ああ、それで聞きたいことって言うのは、温泉の排水についてなんですけどね」

「ああ、適当に流しちゃっていいのか、ってこと？」

「そうですそうです」

　俺は頷く。流石に面と向かっては言わないが、そこが片付けばしばらくこっちから連絡する用事も今のところはないのである。

　俺が返事をしてからしばらく、リュイサさんは腕を組んで考えこんでいた。え、もしかしてリュイサさんもノープランだったとかか。

　沈黙が続く。結構長い時間経ったんじゃないか、俺たちから何か案を出した方が良いのかも知れない、などと思いはじめたとき、リュイサさんが口を開いた。

「南側に浅い池を掘ってそこに溜めておいてちょうだい。そこから地下に流れるようにするわ」

「わかりました」

　俺は再び頷いた。これで問題は解決だ。明日にでも取りかかるか……。

　その時、リュイサさんがグイッと身を乗り出した。俺は一瞬ドキッとする。何を言われるんだろう、と言う緊張でだ。

　リュイサさんはゆっくりと口を開いた。

「それより、いつくらいから入れるの？」

　盛大にずっこける俺とリディ以外の家族。「まだ先ですよ」と冷静なリディの声がなんだか妙に頼もしかった。

## 温かい池

2021年6月2日

「すみませんが、やっとこ湯が出てきたとこなんで、明日いくらか埋戻しして湯殿を建てて……ってやってたら結構先ですね」

「あら、そうなのね。じゃあ楽しみにしてるわね」

　なんでもないことのように、リュイサさんは俺の言葉に頷いた。時間の感覚も異なっているだろうし、多少先になったところでと言ったかんじか。

「ああ、そうそう、ジゼルさんに一度こちらへ来てもらうよう、伝言をお願いできますか？」

「こっちへ？ ああ、連絡の話ね」

「ええ。そもそもジゼルさんに定期的に連絡を取る手段がないと、どうしようもないですし。温泉のところか、ここにいるので。街に行くときも昼を回ったくらいには戻ってますから」

「わかったわ」

　リュイサさんは再び頷く。よし、これで連絡はなんとかなりそうだ。まぁ、リュイサさんの場合、確実に連絡を取れるまでに出来れば１週間は見ておかねばいけないわけだが……。

「それじゃ、また来るわね」

「ああ、温泉が完成したら連絡ルートの確認も兼ねて連絡しますよ」

「ありがとう」

　立ち上がりながら、にっこり微笑むリュイサさん。家族皆で玄関まで見送り、入ってきたときとは違って静かに彼女は帰っていった。

　翌日、朝早くから掘った温泉のところへ行く。「蓋」が吹っ飛ばされたりしていないか心配ではあったが、そのようなことはなく、隙間から多少漏れているかなといった程度で済んでいる。

「あれなら埋め戻しに影響はないかな」

「そうですね。大丈夫そうです」

　俺が言うと、リケが力強く頷いてくれる。彼女のお墨付きなら平気だろう。とは言え、あんまりのんびりもしていられない。出来れば今日中に埋め戻しと排水のための池までは終わっておきたい。うちの家族の人数と能力ならそれが可能……なはずだ。多分。

　サーミャとリディを池を掘る方に回し、他の全員で掘り出した土を穴の底に戻していく。土を持ってくるだけでも大変なはずなのだが、そこはクルルが大活躍である。

　重機さながらに土を運び、下ろしていくクルル。彼女のおかげでかなり作業が捗っているのは間違いない。クルルを応援するルーシーの愛らしさに、時折肩のＨＰが減るのも許容範囲と言えよう。あんまりやられると作業に影響するが。

　やるべきことは井戸のときとあまり変わらない。板壁を立てて、その外に土を敷き詰め、固めるという作業の繰り返しだ。完成すれば、方形の穴を登って湯は上まで到達する……はずである。

　そのために井戸のときよりはかなり細い穴になるように壁を立てていく。ということは戻す土の量も多いわけで、クルルがいなかったらどれくらい時間がかかっていただろうか。

　そのうちクルルにもなにかご褒美をあげないとなぁ。彼女の希望を聞けないのが非常にもどかしいが。

　ほんの僅かな昼休憩を挟んで再び作業をし、結局「これくらいでいいかな」となった頃には、もう夜の帳が下りかけていた。

　夜っぴて作業する気は無かったけど、多少の“残業”は覚悟しており、松明は持ってきてあったので、それに魔法で火をつける。ここから家までは、ほんの僅かな距離だが当然ながら街灯一つない“黒の森”の中である。明かりがなければちょっと家に帰るのも厳しい。

　揺らめく松明の明かりに照らされて、湧き出している湯がキラキラと光る。湯は何とか想定通りに上まで登ってきてくれたのだ。溢れた湯は掘った溝を通って、サーミャとリディが掘ってくれた池に溜まっていっている。

　池のほうは掘るのを優先したので、周囲に土がそのままになっているのだが、これはまた後日だな。溝を通る湯に手を付けてみると、下で触ったときと同じように感じる。

　やはり、魔力で保温がされているらしい。これなら池のために貯める場所を別に作るだけで、浸かることができそうだ。

　湯がたまりつつある池に家族の皆も手や足をつけてはしゃいでいる。

「おっ、温かい」

「どれどれ……ホントね」

「こうなってくると俄然楽しみになってくるわね」

「早く湯殿を建てたいですね」

「怪我にも効くと良いなぁ」

「効くんじゃない？」

　こうして一通りはしゃぐと、まだ見ぬ湯殿に思いを馳せながら、俺たちは徐々に水位を上げている「温かい池」を後にし、短い家路についた。

## 森の温泉

2021年6月4日

　とりあえず、浸かるところまでいけていないにしても、後は湯船を含めて湯殿の建築と、渡り廊下の周辺施設を作る段階までは来た。

　また見に行かないといけないとは思うが、ひとまず温泉が湧いて排水できるところまでは済んでいるため、最悪目隠しさえ作ってしまえば、湯浴みするための施設としては機能するだろう。

「ま、それはさておき、だ」

　翌日、皆が作業をはじめている鍛冶場の中、俺は呟いてヤットコで掴んだ板金に鎚を振り下ろす。十分な蓄えがあるとは言っても男１人女６人に娘２人の所帯である。何もせずとも将来安泰、と言えるほどではない。

「こうやって日々の活計を立てる必要はあるんだよなぁ」

　ボヤき気味に言って、再び鎚を振り下ろした。それをかき消すように、金属と金属が打ち合う硬質な音が響く。ボヤきはしたが、別段この生活に不満があるわけではない。

　こういう自分の好きな仕事で生活していけるのはありがたいし、それに追われて他に何も出来ないというわけでもない。それに多少社会との関わりは続けたほうが良さそうだということもある。

　仮に前の世界で１０兆円の資産があったとして、それを元に毎日ぐうたら過ごすか？ と問われれば、俺は週に１日、いや、月に数日でもいいから外で働いて社会とつながっておきたい、と思う人間なのだ。その意味ではワーカホリックと言われても仕方ない面があるのも確かである。

　そんな益体もないことを考えながらも、仕事を進めていく。火床に板金を突っ込んでから、こちらをチラっと見たリケが言った。

「ボヤいてるのにちゃんと出来てるのがズルいですね」

「ありゃ、聞こえてたか。いかんいかん」

　あまり大声にならないようにとは思っていたのだが、リケにはしっかり聞こえていたようだ。弟子にこういうボヤきを聞かれるのは非常に恥ずかしい。

　ただでさえチートで賄っていて色々と忸怩たるところがあるのに、ボヤいていたなんてのはバツが悪い。「しがない鍛冶屋」であり「鍛冶屋の親方」である身として恥ずかしいものを作るわけにもいかないし、ちゃんと身を入れて作業をしよう……。

　その日の仕事終わりに家族皆で温泉の様子を見に行ってみると、排水のための池から湯が溢れ出して川が、ということはなく、池に湯が溜まっているだけであった。これならしばらく放置して問題になることはなさそうだ。

　池とはいうものの、その日の突貫作業でできた程度の容量で、大した深さはなく縁の方がすこし浅くなっている平たい逆ピラミッド形状をしている。俺たちが浸かるにはちょっと厳しいのだが……。

　どこから聞きつけたのか、狼たちとタヌキっぽいのが一緒になって湯に浸かっていた。彼（彼女？）らにとっては丁度いいらしく、目を閉じてじっとしている。耳や鼻は動いているので警戒はしているようだが、俺たちが比較的近くまで行っても逃げ出す様子はなかった。俺たちも今ちょっかいをかけるつもりはないので、ある程度距離を取って見守る。

　珍しいことに俺の肩は無事だった。ディアナの右腕がルーシーを抱きかかえていたからである。ルーシーは温泉に浸かっている狼たちを見ても、特に混ざりたがりはしなかったのだが。それが嬉しいような悲しいような複雑な感情を覚えさせたのは確かだ。

　ずっとうちの娘でいてくれるものかな。できればそうして欲しいなと思うが、こればかりは彼女の人生……いや、狼生だからゆくゆくは彼女の選択に任せる他ない。

　ちなみにディアナの左腕が俺の肩を掴んで力いっぱいユッサユッサと揺さぶったため、全くのノーダメージでも無かったことは申し添えておく。

「あの様子だと、池を湯船に改修するのは諦めて、別に湯船を用意したほうが良さそうだな」

　熊がしょっちゅう来るようになったりしたら考えどころだが、俺が対峙したことのある大きさのだとあの池では小さすぎるから来ないだろう。湯殿の外壁を多少強化してやる必要はあるかも知れないが。鉄板でも仕込もうかなぁ。

　一瞬、足湯している熊が脳裏をよぎる。平和にしていてくれるなら、それでも構わないっちゃ構わないのだけど、危険ではあるからな……。

「せっかくの森の恵みですからね。“黒の森”のみんなで分け合いたいところです」

　温泉から戻る僅かな間だが、リディがニコニコとしながら言った。彼女は彼女で目をキラキラさせながらオオカミたちが入浴する様子を見ていたからな。同じくらいテンションが上っていたのはヘレンもである。

　彼女たちが喜ぶのなら、あの池はそのまま維持しよう。そう考えながら戻ると、見知った小さな姿が家の前で手を振っている。

「おーい、エイゾウさんたちー！ 良かった。入れ違いにならずに済みました」

　妖精族のジゼルさんが、うちに来たのだ。さてさて、これはまた少し真面目な話をせねばなるまい、とさっきの光景で緩んでいた頭を再び引き締めながら、俺は挨拶を返すのだった。

## 伝言板

2021年6月7日

「なるほど、確かにそっちのほうがいいかもですね」

　俺たちと一緒に夕食をとった後、小さな口でお茶を一口飲んで、ジゼルさんは言った。俺が「定期的な連絡手段があった方がいいのではないか」と持ちかけたことに対する返答である。

　今回の問題は「ジゼルさん側にはあんまりメリットがない」ことなのだ。いくらかの例外はあるにせよ、俺たちはここから動かない。ジゼルさんが連絡を取りたければ、こちらに来ればそれで用が足りてしまう。

　それを越えてこちらのメリットのために協力してくれるかどうか、である。幸い今回は

「まぁ、普通の人間相手なら定期的に連絡を取れる手段の確保、なんてしないんですが、エイゾウさん達ですからね」

　ふにゃり、と微笑むジゼルさん。ヘレンがプルプル肩を震わせているのは何かを我慢しているのだろうが、そこは見ぬ振りをしてやるのが武士の情けだろう。

「ありがとうございます」

「いえいえー」

　俺が頭を下げると、ジゼルさんは手を振った。

「それで方法なんですけど、どうしましょう。定期的に見たりする場所ってあります？」

「そうですねぇ」

　ジゼルさんは小さなおとがいに指を当てる。今度はリディがプルプルしていた。うちの家族は可愛いもの好きが多いのだ。

「私たちは定期的に森の中の巡回もしてます。魔力の澱んでいる場所がないかを実際に見てチェックするためですが、そのついでにここに立ち寄るのも含めましょうか」

「ここってちょっと外れた場所だと思うんですけど、いいんですか？」

「ええ。そんなに時間も変わらないですし、病を考えれば、この場所を知ることは我々にもメリットがありますからね」

「ああ、なるほど」

　妖精族は身体のほとんどが魔力でできているが、その魔力が減少していく病気があり、その時はこの工房に来て、俺が作る魔力の結晶で減った魔力を補って治療する必要がある。

　なので、どの妖精族の人でもこの工房の場所がわかる、というのは結構なメリットだろう。

「じゃあ、伝言板みたいなものを用意しておきますね」

「はい。こちらから何かあるときも、そこに伝言を残しておきます」

「どれくらいの頻度で来ます？」

「そうですねぇ。２～３日に１回くらいだと思います」

「わかりました」

　俺は指を差し出す。ジゼルさんはそれを手で握って上下に振った。手の大きさが違うが握手である。これで“黒の森”で連絡を取るべき相手への手段は確立できた。

　とは言え、活用される機会はあまりないに越したことはなさそうなので、その辺は“森の主”たるリュイサさんに頑張ってもらうとしよう。

　その後は森の中の話を聞いた。最近は魔力の澱みも少なく、迷い人も余りいないそうで平和そのものと言うことだった。澱んだ魔力は

　まれに迷い込んでくる人間もいるにはいるのだが、大抵森の辺縁地域で見つけているため、「内緒の方法」で外に誘導しているらしい。この工房に辿り着いてしまいそうな人間は１人もいなかった、ともジゼルさんは付け足していた。

　まぁ、かなり分け入ったところにある上、“人除け”の魔法までかかっていたら、そうそう辿り着くものでもあるまい。

「それじゃあ、また」

「はい。何かあったらよろしくお願いしますね」

「ええ、もちろん」

　そろそろ寝るか、となった頃、ジゼルさんは帰っていった。泊まっていけばいいのに、と言ったのだが用事があるそうだ。呼びつけてしまってちょっと悪かったかな。

　ふよふよと浮かんで森の中へと消えるように去って行くジゼルさんを見ながら、俺はどんな伝言板を作ろうかなと、気が逸るのだった。

## 三文字

2021年6月9日

　納品に行く２日前、一通りの納品物が出揃った。つまり、明日は再び自由ということになる。とは言うものの、だ。

「湯殿を作るには微妙だな」

　朝、クルルとルーシーを拭いてやりながら、俺は呟いた。湯殿はいずれ１日では完成しないので、明日進められるところまで進めてもいいっちゃいいのだが、その後納品で１日空いてしまうし、その後また１週間程度は作業に入れることを考えれば明日急いでやる必要もあんまりないのではと考えると……。

「伝言板を作るか……」

　と言っても、黒板そのものを作る……というのはなぁ。黒板とチョークって、確か前の世界でもかなり時代が進んでから出てきたものだった記憶があるし。

　移動式のホワイトボードのような形状で、白板部分を黒くした鋼にして、石筆を使う、黒板もどきにするか。雨があまり当たらないよう

　凝ったものでなければ今日一日で作れそうだし。納品物のマーキングに必要になるかもと思って、石筆もカミロのところから何本か仕入れてある。納品がそんなに多くないので、今のところあまり役に立っていなかったのだが、これで役に立つ日が来たな……。

　朝のルーティーンを一通りこなし、俺とリケは他の皆を送り出す。今日は狩りに行ってくるらしい。このところ遠くには行ってなかったから、息抜きにも丁度いいだろう。

「いってらっしゃい。気をつけてな」

「おー」

　そう言ってブンブンと大きく手を振るサーミャと他の家族、そして、その周りを「わんわん！」と吠えながら走り回るルーシーの姿が森の中に消えていくのを、俺とリケも手を振りながら見送った。

「さてさて。作業としてはつまらんかも知れないが、いっちょはじめるか」

「はい！親方」

　やたら気合の入っているリケと一緒に鍛冶場に戻った俺は、炉に火を入れて鉄を沸かす。その間に、いつもは剣をつくるときに使っている砂で、木の板を雄型にして砂型を作っていく。

　剣を砂型でやらないのは量産性の問題だが、今回は完全ワンオフだし、表面がざらついてくれている方が目的に合うからな。

　砂型に詰めた砂を木の棒で突き固める。筋力の増強された俺とドワーフのリケの２人がかりでやっていくと、かなりガチガチに固まってくれた。半分で割って木の板を取り出し、湯口になるところに刺してあった木の棒を抜いて戻せば砂型の完成だ。

　そうやって出来た砂型に、炉で温度が上がって流し込めるまでになった鋼を流し込んでいく。真っ赤な、どろりとした液体を飲み干すように砂型は溶けた鋼をその中に取り込んでいく。

　やがて、湯口のところまで鋼が上がってきたので、そこで注ぐのを止めた。あたりはもうもうと湯気が立ち、湿気も気温も上がっていて、俺とリケは汗だくになる。

　作った鉄板が冷えるまでの間、俺とリケは飛び出すように鍛冶場を出て避難する。

「いつも暑い暑いと思ってたが、大きさが違うからか今日はひときわ暑かったな」

「そうですねぇ。それにしてもお見事でした」

「まだ流しただけだけどな」

「もうその時点で半分以上決まりますからね」

「まぁ、それはそうだが」

　それもチートで加減を調整しているだけなので、ちょっと気がひけるところである。いつかは自分で見極めがつくようになるのだろうか。そこは俺もリケと変わらず修業が必要なところだな……。

　しばらく涼んだ後、出来上がった鉄板のバリ取りは簡単に済ませ、板を加熱して黒くする。ヘレンの胸甲を青くしたときと要領的には近い。そうして黒っぽい鉄板が出来上がると、それを持って外へ出る。

　転がしてあった丸太のうち、大きめのものを適当な長さで切り、鉄板の厚みの溝をノコギリを駆使して入れたものを２つ作る。これが土台だ。並べた土台に鉄板を差し込めば、伝言板としては用をなすようになった。

　だが、このままでは雨が降った時に濡れ放題の錆び放題になりかねないので、

「あとは庇か」

「そうですね。枝を持ってきます」

「ああ」

　長めの枝に土台と同じような溝をつけ、鉄板の上に嵌める。その枝に庇になる板を釘で打ち付ければ……。

「出来ましたね！」

　リケがパチパチと拍手をした。出来上がってみると、前の世界で山道にある案内板のような佇まいである。あのコンクリートでニセ木の枝になってるアレだ。違うのは案内板のところに何も描かれておらず、黒い鉄板が佇んでいるということだ。

　その完成した伝言板に、倉庫から持ってきた石筆で試しに三文字書いてみた。

「よし、ちゃんと読めるな」

「これはなんて書いてあるんです？」

「うーん、秘密の文字かな……」

「へぇ。そういうのも知ってるんですね、親方」

「いや、うん、まぁ、そうだな」

　黒い鉄板に、前の世界のアルファベットの最後三文字。俺は自分自身に苦笑して、それをこすって消すと「今日は伝言ありません」と、この世界の言葉で書き記した。

## 訪問者

2021年6月11日

　狩りに出かけた皆が戻ってくるまでには多少時間がありそうだったので、転がっていた木材の切れ端にナイフで工房のマークを入れ、伝言板に取り付けた。

　しかしこれ、事情を知らない人が見たら誰に当てる伝言なのかさっぱり分からないだろうな……。

「そう言えば、うちには看板がなかったなぁ」

　できあがった伝言板を見て、俺は呟いた。まぁ、作ったところで見る人間はごく限られるのだが。

「リケの実家はどうだったんだ？」

「うちですか？ 一応つけてましたよ。金槌と金床に“モリッツ”とだけ入ってるシンプルなやつでしたけど」

「へえ、そういう決まりとか？」

「いえ、つけないところもありますしね。うちの場合は初代が作ってそのままらしいです」

「なるほど」

　苦笑するリケに、俺は笑って返す。初代もきっと気まぐれで作ってそのままなんだろうな。

「そのうち、うちのマークを入れた看板でも作るか。誰見るものでもないだろうけどな」

「初代は責任重大ですよ？」

　リケはそう言ってクスクス笑う。俺も「そうだな」と言って笑い、２人で家に戻った。

　翌日、今日は納品の日だ。別にカミロの店にいつ行くとは言ってないし、手分けすれば回収も解体もすぐに済む（クルルのおかげが大であることは言うまでもない）ので、昨日仕留めた獲物の回収を先にすればと提案したが、帰ってからにするらしい。

　皆でお出かけとは言うものの、行程の大半はクルルの牽く荷車に乗ってるだけだし、大丈夫か。回収するまでに食われてなきゃ良いが。

「そりゃそん時だ。朝イチに行っても食われてるときはあったし」

　荷物を荷車に積み込みながら、俺が懸念を伝えると、同じく荷物を荷車にどさりと置いたサーミャが事も無げにそう言った。彼女がうちで暮らすようになってからはそう言う話を聞いたことがない。湖のそれなりに深いところに沈めているから、臭いもしにくくなるし、物理的にも滅多なことでは奪われないのだろうが、幸運も手伝っていたんだろうな。

　まぁ狩り１回分の肉が消えたとて、うちの食料庫にはまだ十分な量がある。それに収穫した野菜もあるし、早々に飢えることはない。

「じゃあ、行くか」

「クルルルルル」

　俺の声でクルルが声高く鳴き、荷車はゆっくりと森の中を進んでいった。

　森でも街道でも、渡る風にはもう夏の気配はなく、秋の匂いが乗ってきている。ここらの秋はどんなものなのだろう。周囲に目を配ることを続けながら、俺はそんなことを思う。

　ふと、ディアナの膝の上に乗っているルーシーが目に入る。毎日見ているとやや実感がないが、こうやって見ると確実だ。

「ルーシー、大きくなったな」

「そうなのよ」

　その膝の上のルーシーを撫でながら、ディアナは言った。保護した頃はディアナの膝の上でもちょこん、と言った感じだったが、今はどでーんと鎮座ましましている。

　そろそろ膝の上は卒業して、床で丸くなるのかも知れない。ママにとっては寂しいだろうが、それも成長だからなぁ。

　顔もやや凛々しくなってきた。それでも可愛らしさを強く感じるのは、まだルーシーが幼いからか、それも親バカか。

「どっちもか」

　俺はそうひとりごちて、風で揺れる草原に目を戻した。

　いつものとおりに街に着き、衛兵さんに軽く手を上げて挨拶をして、露天のオッさんを和ませながらカミロの店に着く。

　裏手にクルルとルーシーを連れて行くと、これもいつものように丁稚さんがすっ飛んできた。今日はどこかへ片付けたのか、それとも売っぱらったのか、木の板でできたあの日陰はない。これからの季節には不要そうだからなぁ。

「いつもありがとうな」

　と、俺は丁稚さんの頭に手を伸ばす。俺は違和感に気がついた。

「ちょっと大きくなったか？」

「え？ そうですか？ えへへ」

　嬉しそうにはにかむ丁稚さん。この子もどんどん成長しているんだなぁ。ガシガシと頭をなでて「それじゃ頼むな」と言った俺に「任せてください！」と胸を張る彼を残して、俺達は商談室へ向かった。

　その後、カミロと番頭さんを交えた納品の話は恙無く終わった。その後は２週間に１度、俺と家族がその情報を仕入れられる、貴重な“カミロニュース”の時間……だが、今日はその前にやっておくことがある。

　さて、それではとなったところで、俺は話を切り出した。

「そうそう、連絡手段を確立しておこうと思うんだが」

「連絡手段ねぇ」

　口ひげをいじりながらそう言ったカミロに、俺は頷く。

「２週間に１回のこの機会でも良いんだけど、それよりも早めたい緊急の場合ってあるだろ？ まぁ、お前も俺の工房の場所は知ってるし、依頼でなけりゃ複数人で来ても良いからなんとか出来るかも知れないが、やり取りする手段はあったほうがいいと思ってな」

「ふむ……」

　この話はカミロにとってもメリットがある。即座に乗ってくるだろうと思っていたが、どうにも若干渋っているような、そうでないような……。

「ぶふっ」

　真面目くさった顔をして思案していたカミロだが、唐突に吹き出し、笑い始めた。当然俺たちはキョトンとしてしまう。

「わはははははは！ いや、悪い悪い。ちょうどこっちもその辺を考えててな。あんまり渡りに船すぎて、思わずもったいぶっちまった」

　豪快に笑いながらカミロは言った。彼のちょっとした悪戯心、というわけだ。俺はわざとらしくむくれて見せる。

「まったく、お前といいマリウスといい……」

「わはは、許せ許せ」

　うちの家族にも“悪ガキ三人組”と見られるのは、この悪戯心が抑えられないのもあるんだろうな。ディアナに言わせれば「似た者同士」でもあるんだろうが。

「それで、どうする？ こっちとしては森の入口に文箱を用意しようかと思ってたんだが」

「それも悪くないが、お前達にも回収の手間があるだろ。もっと良いものを用意してある。ま、ちょっとした条件付きだが」

「条件？」

「すぐに分かるよ。ちょっと待ってろ」

　そう言うとカミロは一旦商談室を出た。

「なんだろうな」

「ロクでもない話だったら、断ったほうが良いんじゃない？」

　眉をひそめたのはアンネである。

「まぁ、連絡手段と引き換えってことっぽいし、よっぽどでなけりゃいいだろ」

「エイゾウが良いなら良いけど、明らかに悪い話だったら口を挟むわよ」

「そこはそうしてくれ」

　俺は苦笑しながらアンネに言った。立場上、帝国第七皇女のお言葉であればカミロも聞かないわけにいかないだろうし。

　やがて、ガチャリと扉が開いた。入ってきたのはカミロだけではない。その後ろに女性がついてきている。

　彼女の肩には左右それぞれ小さなドラゴン――四脚ではなく、前脚にあたる部分が翼になっていて、鳥のようでもある――が乗っている。

　それも目をひく部分ではあるが、彼女には爬虫類のような尻尾がついている。そしておそらく全身を覆っているのであろう鱗。顔はほぼ人間のようだが、ところどころに鱗があった。

　いわゆるところのリザードマン、あるいはドラゴニュートと呼ばれる種族の女性だ。

　少しあっけにとられていると、カミロが言った。

「こちらがお前をたずねてきてな」

　カミロの言葉で、女性はスッ……とお辞儀をした。

「はじめまして、私はカレン・カタギリと申します。

　そう言って頭を上げた彼女の縦長の瞳孔をもった瞳がスッと細められる。それが笑顔なのか、それとも別の意味を持つのか、俺にはすぐに分からなかった。

## 北方からの

2021年6月14日

「北方から、ですか」

「ええ」

　俺が思わず言うと、カタギリさんは頷いた。カミロが口を開く。

「彼女は俺の北方との取引先の縁でな。前に“コメ”が欲しいって言ってただろう？」

「そうだな」

　元日本人として食卓に欲しいものナンバーワンと言って過言ではない。品種の差なんかで前の世界のものと味は比べるべくもないとしてもだ。

「『南の商人が“コメ”を欲しがるってなぜだ？ そう言えば、最近北方の食品を欲しがってたな』ってところで興味を持たれたらしい」

「なるほどね」

　俺は小さく溜息をついた。完全に俺が藪を突いた結果だな。

「それだけではないですけどね」

　カタギリさんが透き通ったガラスの鐘のような声で言った。

「エイゾウさんが作った品を見て、一度特注品を拝見したいと思いまして」

　カタギリさんは俺の家名を言わなかった。当たり前だが、どの土地でも家名を知っていたらそちらで呼ぶのが通常の礼儀である。

　俺だって公式の場ではマリウスのことは“マリウス”ではなく、“エイムール伯爵”と呼ぶ。

　なのに、タンヤを言わなかったのは俺の家名を知らないということだ。鍛冶屋だから無くても不思議はないし。

「失礼ですが、それは刀ですよね？」

　カタギリさんは俺が傍らに立てかけておいた“薄氷”を指さす。

「ええ」

「拝見しても？」

「どうぞ」

　俺は薄氷をカタギリさんに手渡した。俺の側で小さく金属音がしたのはヘレンが自分の得物に手をかけたのだろう。

　カタギリさんは「では」と恭しくお辞儀をして、薄氷を鞘から抜いた。仄青く光る刀身が姿を現し、そこだけ温度が下がったかのようである。

「すごい！

「ええ。ちょっとした伝手で手に入れましてね。まぁ、このカミロからなんですが」

　正確には情報はマリウスが入手してくれて、そこから先を俺が金を払ってカミロに任せた形である。

「ここまで出来る人がいたんですね……」

　ウットリとした表情で薄氷を見つめるカタギリさん。リケがウンウンと腕を組んで大きく頷いている。

「ありがとうございました」

「いえいえ」

　かなりじっくりと見た後、頭を下げながら、鞘に収めた薄氷をカタギリさんは差し出した。俺が受け取って再び傍らに置くと、小さく息を吐く音が聞こえた。

「で、通信手段と交換ってこれだけなのか？」

　俺はカミロに向かって言った。彼はわざとらしく肩をすくめる。

「まさか」

「だよな」

　これだけのために、わざわざここまでは来ないだろう。カタギリさんがモジモジしながら、話を続ける。

「大変不躾なお願いですし、この子達を取引の手段にするのは正直気の引ける部分があるのですが……」

　少しの逡巡。北方からここまではインストールの知識によれば結構な距離がある。そこから出向いたのだ、希望があるなら早く言っても良さそうなのだが、それが出来ないのだな。

「エイゾウさんの工房にお邪魔できませんか？」

　カタギリさんは真っ直ぐに俺の目を見ながら言った。ドデカい溜息が周囲から聞こえる。

「それが小竜を貸し出す条件、だそうだ。彼女は今お前の工房の場所は知らないし、１人で行けるほど腕が立つわけではない」

　口ひげを触りながら、カミロが付け足す。なるほどね。

「カタギリさんの武器を打ってくれ、という依頼では無いんですね？」

　俺を見るカタギリさんの目を、俺も真っ直ぐ見返しながら聞いた。武器を頼むのであれば、１人で来いというあの条件に引っかかるが、そうでないなら、こちらの胸三寸の問題だ。

「ええ。それは間違いなく。と言うより、エイゾウさんに作ってもらっては困るんです」

　カタギリさんは小さく眉根を寄せた。多分俺も同じような顔になっているに違いない。彼女は顔を伏せながら続ける。

「と、言われても分からないですよね。私に教えてくれ、とは言いません。側で見るだけでも結構ですので、私の手で一振の刀を作れるようにならなければいけないんです」

　そう言って、顔を上げた彼女の顔にはもう逡巡の色はなく、決意だけが漲っていた。

## ２人目

2021年6月16日

「なんとなくの事情は理解しました」

「では！」

　ズイッとこちらに近寄るカタギリさんを、俺は手で制した。

「とは言えですよ、『はいそうですか』と受けるわけにもいかない事情がありまして……。話しにくいことだとは思いますが、そちらの事情を聞かせていただいても？」

　俺がそう言うと、カタギリさんは目を泳がせた。知り合って間もない人間に事情を聞かせろと言われて、「はいそうですか」といかないのは彼女も同じだろう。

　とは言え、俺は元はこの世界の人間ではない。北方に“タンヤ家”があるかどうかは知らないのだ。それに、彼女も既に聞いているかも知れないが、ディアナとアンネは実際どうであるかはさておき、うちに身を隠している状態だ。

　さらに、うちには“黒の森”の主である“大地の竜”に近しい人（厳密には人ではないが）や、妖精も来るのである。

　まぁ、２～３日、あるいは長くても１週間程度のお客さんならともかく、さっきの話を聞いていてもそれだけで済むようには思えない。よほど腕が良いのなら別だろうが、それならそもそもこんな依頼はしてこないだろう。

　少しの逡巡の後、カタギリさんは再び決意の漲った眼差しで俺を一度見てから、大きく頷いた。

「わかりました。それではお話しします」

　カタギリさんは息を吐き、続ける。

「私の家はサムライ――ええと、エイゾウさんはお分かりかと思いますが、こちらで言うところの騎士や貴族のようなものでして」

　彼女の話はこうだった。リザードマン（ドラゴニュートではなかった）の彼女の先祖は、600年前の魔族との大戦の頃に戦功をあげ、領主（ダイミョウと言っていた）に召し抱えられたらしい。

　それ以降、着実に地歩を固め、その領地ではかなり重用されるような立場になったのだそうだ。そうなってくると家どうしの繋がりが非常に重要視されるようになってくる。

　実際、カタギリ家もあちこちに姻戚がいるのだそうで、王国で言えば侯爵のところみたいなもんだな。

　そうなってくると、生まれてくる女子は大体が政略結婚の材料になっていく。この世界はかなり女性の社会進出が進んでいるみたいだが、前の世界から見ても旧態依然とした部分もかなりある。これは今現在体面的にはディアナやアンネがそうであるのと同じだ。当然、カタギリさんもそうなるはずだったのだが――。

「ある時、家宝の刀を見てしまいまして」

　彼女は照れくさそうに言った。

「私もあんなものが作れるようになるだろうか、作りたいなと思っていたら、居ても立ってもいられなくなり、父の知っている鍛冶師のところへ出入りするようになったんです」

　そこである程度の研鑽を積み、そろそろ自分の刀も見えてきたかなと思い始めた頃、それが父親にバレた。

「父はもうカンカンで、一時は鍛冶師を斬るとまで言っていたのですが、なんとかおさめてもらいました。まぁ、それで私の諦めがつけば良かったんですけどね」

　カタギリさんは小さくため息をつくと、苦笑した。

「どうしても自分で刀を一振り打ちたいのだと訴えたんです。それで父が言ったのが……」

　一瞬口を閉ざすカタギリさん。それこそ研ぎ澄まされた刀のような緊張と静寂が場に訪れる。

「『北方以外の場所でワシの目にかなうような刀を打てるならばよい』でした。それで、どうしたものかと思案していたら、カミロさんのところで“ミソ”だの“コメ”だのを求めていると伺いまして」

　それを聞いて、カミロはうんうんと頷き、俺を指差す。

「こいつから頼まれてましたからね」

　実際に北方に行っているのはカミロの店の誰かだったりするのだろうが、同じことではあるか。今度はカタギリさんが頷いた。

「ええ。それで、欲しがっている人は北方人に違いない、であれば王国で刀を打てる鍛冶屋を知っているかもと思い聞いてみたら、そもそもその欲しがっている北方の方が鍛冶屋だと言うではないですか」

「それは完全に渡りに船ですねぇ……」

「はい。作ったものを見せていただいても素晴らしい出来のように見えましたので、この小竜を連れてこちらに参った次第です」

「それで先程の話、と」

「そうです」

　カタギリさんがまたジッと俺の目を見つめる。要は父親の鼻を明かすのも含めて俺に弟子入りしたい、ということである。

　ううむ、と俺は腕を組んで考え込む。正直、俺がキッチリ教えられることはなにもない。俺自身の力ではないからだ。リケがいない状態でこう頼まれていたら断っていた可能性はある。

　だが、今は親方として忸怩たる思いはあるにせよ、リケを頼れるのだ。彼女はかなり強引な手段で俺に弟子入りしてきたが。

　ジッと俺を見る視線を感じる。カタギリさんからではない。家族からだ。相談しても「エイゾウに任せる」ってことだろうな。俺は大きくため息をついた。

「わかりました。しばらくの滞在を許可しましょう」

　俺の言葉を聞き、花が咲いたように喜色の笑みを浮かべるカタギリさんを見て、俺はこれからどう対応したものか、頭の中で考えるのだった。

## ようこそ“黒の森”へ

2021年6月18日

「ありがとうございます！」

　ペコリと頭を下げるカタギリさん。彼女の黒く長い髪と相まって、一瞬前の世界に戻ったような感覚すら感じる。

　俺はカタギリさんに言う。

「いえいえ、まだなにか成果が出たわけでもないですからね……。とりあえず、うちへ行きましょう」

　カタギリさんは顔を上げて、「はい」と頷いた。

「“小竜”についてはもう聞いてるんだろ？」

　そう言って俺がカミロの方を見ると、彼はぐっと親指を立てた。じゃあいいや。俺たちは１人増えた状態で、いつものように商談室を出た。

　裏庭へクルルとルーシーを迎えに行く。うちの娘は２人とも人懐っこい。丁稚さんと遊んでいる間でも、他の店員さんたちが来ると駆け寄ることもあるそうだ。

　なのでカタギリさんが増えていたとしても特に問題はないと思いたいが、こればっかりは会わせてみないことには分からない。もし、どちらかが完全にカタギリさんを嫌うようなら、一度良いと言った手前ではあるが、お断りをせねばならないだろう。

　結論から言えば、それは全くの杞憂であった。２人ともカタギリさんを見るや、クルルは顔を擦り付け、ルーシーも尻尾をブンブンと勢いよく振って足元を走り回っている。

　カタギリさんの肩に止まっている２匹の小竜たちはと言うと、クルルがカタギリさんに顔を擦り付ける時にクルルの背中に飛び移り、毛づくろいのように翼を舐めて手入れし始めた。クルルもそれで特に気にした様子はないし、ルーシーも２匹に向かって威嚇するようなこともない。

　問題があるとすれば俺の肩のＨＰが順調に減っていることくらいだ。そろそろヒャッハーな肩甲でも用意したほうがいいだろうか。

「この２人がうちの娘……みたいなもので、走竜がクルル、狼がルーシーです」

「よろしくね」

　カタギリさんがそれぞれを撫でて挨拶をすると、２人とも嬉しそうに鳴いて歓迎していた。

　カタギリさんの荷物も荷車に積み込み、若干呆れたような視線を送る衛兵さんに軽い挨拶をして街を出る。もうお互いに慣れっこと言えば慣れっこになってしまった。荷車に女性を満載して男が俺１人という状況が周りからどう見られるか、は今更言うことでもあるまい。

「ええ！？ 温泉ですか！？」

　晴れ渡った空の下、緑色を失いつつある草原の傍らを走る街道で、カタギリさんは大声で驚いた。うちの話をしている時に、ディアナが「温泉がある」ということを言ったのだ。

「ええ。まだ使えるような状態ではないですが」

　瓶に湯を汲んで来て家で使うくらいの事はできるかも知れないが、何もない野ざらしのところに源泉と排水のための池、それを繋ぐ水路があるだけなので、衛生面を無視したとしてもうら若い女性が入浴できる状態ではない。

「温泉に反応するとは、やっぱり北方の方なんですね。エイゾウさんも、温泉が出ると分かったときはものすごい喜びようでした」

　しみじみとリディが言って、他の皆がうんうんと頷く。俺の場合は正確には北方人でなく元日本人だからだが、それは言わないし言えない話である。

　サーミャが指を振りながら言う。

「あー、北方と言えばなんだっけ？ 朝に鍛冶場でやってるアレ」

　これにはアンネが答えた。

「カミダナ」

「え、神棚もあるんですか？ あ、でも北方出身の方の工房なら当たり前か……」

　ふむ、とカタギリさんはおとがいに手をあてる。

「まぁ、簡易なものですし、特に誰をお祀りしているとかはないので、気分だけみたいなものですけどね」

「いえいえ、出奔されても心意気を忘れないのはご立派だと思います！」

　俺の言葉にブンブンと手を横に振るカタギリさん。サーミャが荷車の外を向いて肩を震わせているのは、警戒しているのではなくカタギリさんの態度がツボに入ったのだろう。サーミャは時々、俺をこうやってからかうのだ。俺はそれを見てため息をついた。後で覚えとけよ。

　その後、家の習慣の話が続いた。水汲みを弟子であるリケでなく、俺がやっていることには驚いたようだが、運動と娘たちの散歩も兼ねていることを説明すると納得したようだった。

　そうこうしているうちに、クルルの牽く竜車は森の入口に差し掛かる。“黒の森”の名は北方にも伝わっているらしく、

「こ、ここが“黒の森”……」

　カタギリさんはゴクリとツバを飲み込んで、体を強張らせる。

「ええ、“迷えば二度と戻ってこられない”、“凶暴な獣がうろついている”」

　俺は思わず小さく笑みを浮かべて、続けた。

「我が愛すべき家のある場所です」

## 伝書竜

2021年6月21日

　鬱蒼とした森の中に木漏れ日が差し、涼やかな風が通り抜けていく。茂みを走って行くのは狼だろうか、猪だろうか。木々の隙間から見える遠くでは、鹿が木の芽らしきものを食んでいる。

　木々の枝には鳥やリスが留まっていて、鳥は時折歌うようにさえずっている。

　俺たちにとっては“いつも”の風景。街道よりもよっぽど安全だと思える、この“黒の森”も、１人にとってはまだそうではない。

　その１人、カタギリさんにとって、ここは獣人族以外の手の入らぬ魔境なのである。ただ、その肩に留まっている小竜２匹はのんびり欠伸をキメておられるので、彼女（聞いたところ、２匹とも雌なのだそうだ）達にとっては、俺たち同様さほど恐ろしい場所ではないらしい。

「慣れればこの風景ものんびりしたものに感じられるようになりますよ」

「え、ええ……」

　俺が声をかけるとカタギリさんはぎこちなく微笑んだ。リケやディアナが馴染むのが早かっただけで、こういう反応が普通なんだろうな。

「まぁ、アタシたちといれば危ないことは何にも無いし、気楽に気楽に」

　カタギリさんの様子を気にしたのか、珍しく（と言っては失礼だろうが）サーミャがニッコリ笑って言った。実際「黒の森の最強戦力」でもあるわけだしなぁ……。

　それを知っているわけでもないだろうが、カタギリさんの表情がやや和らいだ。

　そこへ追い打ちとばかりに、ルーシーが膝に乗ってカタギリさんの顔をペロペロやる。

「きゃっ！？ こら、くすぐったい！ アハハハ」

　ルーシーの攻勢にカタギリさんの緊張はすっかりほぐれてしまい、家に着く頃には辺りをのんびり見回すくらいにはなっていた。

　家に到着したら、荷物を下ろすのだが、リディにカタギリさんを任せて、俺たちだけで荷物を下ろしていく。今回は種などの植物系の品は入ってないし、問題ないだろう。

　手分けすれば倉庫や家に荷物を運び入れる作業はあっという間に終わる。そして、普段であればこの後はそれぞれ自由時間だが、今日はもう一仕事あるのだ。

「別に俺たちは残ってても良いんだけど、ちょうど良い機会だしカタギリさんにも一緒に来てもらうか……」

　昨日仕留めた獲物の回収と解体である。十分な人数もいるし、手伝う機会もそう多くはないだろうが、いざ手伝ってもらいたいときに全くの未経験であるよりは、一度でも見るなり体験するなりしておいてもらった方がスムーズだろう。

　荷物を客間――物置の隣の予備だったほうなので、今後しばらくはカタギリさんの部屋――に入れたカタギリさんにその旨話してみると「是非」とのことであった。

　家の外に再び集合する。カタギリさんの肩には小竜２匹が相変わらず留まっていたが、「出かける前に」と彼女は片方に話しかけた。

「それじゃあ、あっちでもよろしくね、アラシ」

　それを聞いた小竜は「キュー」と一声鳴いて、もの凄い速度で飛び去っていく。サーミャが放つ矢もかくやと言わんばかりの速度だ。

「アラシとハヤテはこの場所とあの店を覚えましたから、これでいつでも往復できます」

「その時に文書を持たせるわけですね」

「そうですね」

　伝書鳩ならぬ伝書竜と言うわけだ。通常、伝書鳩は猛禽に襲われるなどの事態を想定して、それなりの数を同時に放つらしいのだが、鳩より更に賢く強い竜であれば１人でも十分任に耐えるのだろう。

　さっきの速度で文書を運ぶとしたら、かなり早く届くんじゃなかろうか。小さな郵便配達員さんはかなり優秀らしい。

「アラシちゃんとハヤテちゃんで、さっきのがアラシちゃんということは、こっちに残ったこの子がハヤテちゃんですか」

「ええ」

　カタギリさんがハヤテの頭を撫でると、ハヤテは気持ちよさそうに目を細めた。

「よろしくな、ハヤテちゃん」

　俺がハヤテに目の高さを合わせて言うと、ハヤテは「キュッ」と短く鳴いた。威嚇や攻撃の素振りは見せてないようなので、これは返事してくれたと思っていいのだろう。

「可愛い家族がまた増えるわけだ」

「あら、じゃあ私もあいさつしないとね」

　可愛いものには目がないうちの

## “黒の森”の湖

2021年6月23日

「さて、それじゃあ出発するか」

　カタギリさんとハヤテちゃんも含めて、全員から了解の声が返ってくる。クルルとルーシーも今日２回目のお出かけが嬉しいらしく、２人とも跳ねるように歩いていった。

　皆のんびりと森の中を歩いていく。先程、荷車から見ていたのとは違う景色。見通しが少し悪くなり、この森をよく知らない人であれば恐怖を感じるというのは仕方のないことなのだろう。俺やヘレンでも徒手空拳の無警戒でぶらぶら散歩できるようなところではないわけだし。

　カタギリさんがキョロキョロと辺りを見回しながら言った。

「それにしても随分と深い森ですねぇ」

「やたら広いらしいですからね」

　俺も見回しながら答えた。俺の場合は周囲の警戒だが。

「私もまだ反対側までは行ったことないんですよね。あの工房は“黒の森”全体から見ると東側にあるんですが」

　工房の位置は厳密に言えば東南東といったところか。サーミャがチラッとこっちを見た。彼女はもともと西から北にいたのだが、その湖を回り込むように東に来て……俺と出会うことになったわけだ。

「北と西の外はアタシも出たことないから、どこに出るのかは詳しくは知らないけど、あっちもこっちとそう変わらないとは聞いた。山があって、それは見えたことがある」

　サーミャが続ける。その山は湖からも見えたことはないし、北方では常に雪が溶けない山があると聞いて驚いていたので、そう高くはないのだろうが。

　しかし、“黒の森”の近くの山か。“大地の竜”も絡んでいることだろうし、必要がなければあまり立ち寄らないほうが良さそうな気がする。

　小竜に効く薬草や好みの果実があるなら今後採集の時に確保することを考え、道々それらが生えている辺りをカタギリさんに教えながら、湖の岸辺にたどり着いた。

「うわー、広いですね！」

「ええ。正確な広さはうちの家族では誰も知らないです」

　驚くカタギリさんに俺は頷いた。山が見えないのはともかく、この湖も向こう岸が見えないくらいに広い。東から中央にかけて存在するらしいのだが、サーミャも南側の方へ回ったことはないため、正確な広さは分からないのだが。

　この森の西側を散策するためにボートでも作って測量もするべきだろうか。その時にうまくチートが働いてくれたらな。

　でもそうなると、桟橋を作ってボート小屋も整備して……となると結構な作業量になるから、確実にまた今度になる。それに、このあたりにはないだけでどこかにはボートを運用している人もいるだろう。

　最初は湖をグルっと回ってボートを使っている人がいないか探すのも悪くないな。この湖固有の形式があるかも知れないし。

　そんなことをぼんやりと考えながら、俺はサーミャを手伝って獲物を引き上げた。今日は樹鹿だ。体高にして１メートル８０センチはあろうかという大物である。

　そもそもが相当重たい上に毛皮が水を含んでいるが、それでも力自慢の我が家の面々は岸辺への引き上げを難なく完了した。

「ひゃー、こんなデッカいのがいるんですね」

　カタギリさんはこの森に着いてからずっと驚き通しだ。北方にないような環境だろうからなぁ……。

　獲物をリケが切り出した丸太で組んだ運搬台に乗せるのを手伝いながら、「北方の鹿はせいぜい、ここで言う角鹿くらいの大きさだ」と説明するカタギリさん。

　その彼女が帰り道、ふと運搬台を指差した。

「あれ、そう言えば、これっていつの間に切り出したんですか？ 引き上げるまでそんなに時間なかったですよね？ 前日までにいくらか切り出しておいたとか？」

「ふふん、親方の斧ですからね！ どんな太い木も一撃ですよ！」

　カタギリさんの質問に、リケが斧を担いだままふんぞり返った。以前は気持ち悪いくらいだなどと散々だったが、性能については誇らしいようである。

「……じ、常識外……！」

　俺はまたもや驚くカタギリさんを見て、今後この人がどれくらい驚くことになるだろうか、と益体もないことを考えるのだった。

## 歓迎会

2021年6月25日

　重い重い獲物を運んだあと、その獲物を文字通り吊し上げたクルルは、ディアナをはじめとする家族みんなに大層労われ、機嫌良くしている。

　この後はいつも「ルーシーと２人で遊んできて良いよ」と声をかける。だが、狼のルーシーはともかく、クルルもみんなが解体しているのを眺めて過ごすことが多い。

　しかし、決して遊ばないわけでもない。解体が終われば普通にルーシーとそこらを駆け回ったりしているからだ。単純に皆がワイワイやってるところを見るのが好きなのだろう、と俺は思っている。

　鹿の解体自体はそれなりの人数でやることもあって素早く終わった。腱や毛皮、角など後から使えそうな素材は倉庫にしまう前に乾燥させておき、すぐに消費しない肉も塩漬けや乾燥に回す。

　一通り終えると、もうすぐ日が暮れ始めるころになった。ディアナ達は今日も稽古をするらしい。カタギリさんはハヤテちゃんと一緒にそれを見学するそうだ。

　俺は晩飯の準備を始めなきゃな。となれば、残った生肉は当然――。

「かんぱーい！」

　家に乾杯の声が響く。ようこそカタギリさんの歓迎会の開始である。

「まぁ、何もない森の中の工房なもんで、大したものは出せませんが」

　俺がそう言うと、ワインを煽ったカタギリさんは、

「いえいえ！　とんでもない！　こんな豪華な歓待、恐縮ですよ」

　そう言って実際に身を縮こまらせる。今日のメニューはカタギリさんがいることもあって、味噌漬けにした鹿肉を焼いたものと、焼いた鹿肉をうちで採れたニンニクっぽいのと醤油を合わせたタレで味付けしたもの（味付け前の一部はルーシーとハヤテちゃんの腹に収まった）である。あとは無発酵パンといつもの野菜と塩漬け猪肉のスープ。ちょっとだけ手間がかかってはいるが、いつもの食事とそう大差はない。

　ニンニク醤油の方はカタギリさんにも、うちの家族にもなかなか好評だった。俺としてもほんのりと前の世界の味のようなものを感じて、少し心が踊る瞬間だ。

「そう言えば確かに、いろんな方がいますね」

　カタギリさんが言った。歓迎会の途中、皆の自己紹介が終わったあたりで「うちはいろんな種族がいるから」という話になったのだ。虎の獣人、ドワーフにエルフ、巨人族、そしてリザードマンである。

　人間族が俺とディアナ、ヘレンなので元々そうだが人間族とそれ以外、という話になれば人間族のほうが少ないことになる。

「ええ。種族的なことでも、他のことでも何かあったら遠慮なく言ってくださいね。大体のことは解決出来ると思います」

　カタギリさんの言葉に頷いてそう返したのはリケである。面倒見の良さでは我が家の「お姉ちゃん」と言って過言では無くなってきたな……。彼女が色々と気を回してくれるので、俺もついつい頼りがちになるが負担が大きくならないように気をつけよう。

　一番多く話題に上ったのは当然というべきか、カタギリさんの北方での暮らしである。俺があまり話さない――と言うよりは話しようがないのだが――こともあって、衣服や文化について尋ねられていた。

　この世界の北方のうち、カタギリさんが住んでいた地域（正確には北方の“諸国連合”の一邦である）、これはつまり俺が住んでいたことになっている地域でもあるのだが、安土桃山か江戸前期くらいの日本に近しいようである。

　和服のようなものが有り、食事も前の世界にかつてあったようなものが多いらしい。広大な海岸線を有していることもあって漁業が盛んでもあるのだそうだ。刺身は完全に不可能としても、〆鯖のような酢で防腐処理した魚が入手出来ればいいのだがこっちも厳しいだろうな……。魚の“開き”が手に入るようなら頼んでおこう。

「そう言えば、服は

「ええ。こちらへ来るのに、あの服では目立ってしまいそうでしたので」

　俺が言うと、カタギリさんは「貴方もでしょう？」と言わんばかりに見返してくる。俺の場合は端っからここだったので、着替えるも何も無かったわけだが、それを言っても仕方がないので「ええ、まぁ」と曖昧に頷いておく。

　カタギリさんの服はうちでいえばヘレンの服に一番近い。上は緑のシャツ、下はショートパンツだ。どこをどう見ても北方の服ではない。

「うちの場合どのみち目立つから、あまり気にしないでいいですよ」

　ワインの杯を干してディアナが言った。彼女が指しているのはさっき話題になった種族のことだろう。他はともかく、エルフまでいるのだ。どこへ行こうと目立つことは避けられない。

　俺がそんな事を言うと、ヘレンが奇妙な顔をしてから吹き出し、その笑いが家族に伝播していく。俺が困惑していると、リディが静かに言った。

「全員が人間族でも、男１人なのは結局目立つと思います」

「ああ……」

　俺はうなだれた後、胸に湧いた奇妙な納得感を珍しく火酒で流し込むのだった。

## 一日の始まり

2021年6月28日

「本当に師匠自ら水汲みをしてるんですね……」

「ああ、まぁね……」

　翌朝、俺がクルルやルーシー、そしてハヤテと一緒に水汲みから戻ってくると、起きていたカレンに言われ、俺はそう返した。

　呼び方が変わっているのは昨晩の歓迎会の最後に遡る。

「皆さん、本日はこのような祝いの場を設けていただき、大変ありがとうございます」

　そろそろお開きにしようか、と皆が言い始めたとき、カタギリさんはそう切り出した。

「私はこれからしばらくこちらへお世話になります。つきましては、どうぞ遠慮無くカレンとお呼びください」

　その言葉に家族から了承と歓迎の声が上がる。微妙に家族とはズレている状態だが、ニアリーイコールで家族と言って過言ではないだろう。

「それで、リケさんはエイゾウさんをどのように呼んでらっしゃるんですか？」

「私は“親方”ですね」

「なるほど……」

　おとがいに手を当てて、考え込むカレン。“親方”呼びのこそばゆい感じにもようやく慣れてきた――現実としてどうなのかはともかく、そう呼ばれることが日常になってきたというだけだが、またぞろ変な呼び方が増えるのでは、と警戒していたら出てきたのが、

「じゃ、私は“師匠”で。先輩たるリケさんと同じ呼び方もなんですから」

　であった。なんだその気の回し方はと思ったのだが、家族、特に当のリケが了承したので、俺としてもやや不承不承ながら頷くよりなかった、というわけだ。

　そんなカレンに俺は改めて説明する。

「まぁ、こんな感じで、この工房では朝の水汲みは俺の仕事だ。クルルやルーシー、今はハヤテもか。彼女たちの散歩と水浴びを兼ねてる面が大きいからな。水が足りなくなったら、表にある井戸の水を使ってくれ。誰かに断る必要はない」

「わかりました、師匠」

　カレンは大きく頷いた。こういうのに慣れていくのは徐々にだな。お互い。水汲みにハヤテがついてきたのは、実は少し驚きだったが、他の２人と同じようにしてやるとご機嫌に「キュイキュイ」と鳴いていたから、多分明日もついてくるだろう。

「そういえば、昨日の今日だし、もう少し起きてくるのが遅いのかと思ったが、起きてくるの早いな」

　俺はカレンにそう言った。ちなみにアンネがまだ起きてきていない。大体俺が水を汲んで戻ってきてから少し後に起きてくるので、いつもどおりと言えばそうなのだが。

「今日から早速作業ということで緊張と興奮でパッと目が冴えてしまいました」

「ふむ」

　まぁ、初日ならそんなもんか。普通に寝ていたアンネが豪胆過ぎるのだろう。皇女様だが、ここまで独力で来られる実力者でもあるからなぁ……。

「いい仕事はいい飯といい睡眠からだ。美味い飯の方は俺がなんとか出来るとして、ぐっすり眠るほうは俺がどうしてやることもできないから、そっちは自分で頑張れ……というのもおかしいけど、よく眠るようにな。相談があったら俺とか、リケに聞いてくれ」

　リディが「安眠」の魔法を知ってたりするかも知れんがそこはそれである。とりあえずは自分で眠れる方策を立ててもらうのが先決であろう。

「はい！ 師匠！」

　未だ慣れないカレンの返事に、僅かばかりの苦笑をしながら、俺は食事の準備に取り掛かった。

「わぁ、本当に神棚があるんですね」

　食事後、カレンが最初に目をやったのは神棚だった。カミロの店でもマリウスの家でも見たことがない（客に見せないところに小さな祭壇があったりするのかも知れないけど）ので、うちで北方らしいものと言えばこれになるだろう。

「二礼二拍手一礼で」

「わかりました」

　前の世界でも出雲大社では二礼二拍手一礼ではないし、そういう事があれば問題だなと思ったので断りおくと、カレンは素直に頷いて皆と一緒に二礼二拍手一礼をした。北方でも一般（カレンの実家はお武家様なのでやや特殊なのだが）に知られている方法ではあるらしい。

　こうして今日の作業の無事を神様にお祈りをして、我が家の一日が始まった。

## 腕試し

2021年6月30日

「じゃあ、まずはナイフを作っているところから見てもらおうかな」

「はい！」

　俺が言うと、カレンは勢いよく返事をした。気合が入っていて良いことである……のだが、「いきなり親方が出張るのは流石にちょっと」ということで、俺が見せるのではなく、まずはリケが作って見せることになった。

　別に俺が作ってもいいと思うのだが、見て覚えろしかできない俺があんまり偉そうなのも忸怩たるところがあるので、素直にリケの言葉に従ったのだ。

　板金を熱し、金床で叩いて形を作り、焼入れをして研ぐ。その一連の作業をリケはスムーズに、手早くこなしていく。以前より早く、そして丁寧になっている。魔力を込めるのもだいぶ上達しているようだ。以前とは量が違ってきている。

　あれならいつでもどこでも、それこそ帝国帝室のお抱え鍛冶師にだってなれるんじゃないだろうか。

　その作業の途中、あっという間に形を作っていくリケを見て、カレンが言った。

「“弟子”でこのレベルなんですか」

「まぁね」

　俺は肩を竦めた。カレンは再びリケの作業に集中する。時々手を動かしているのは、作業のコツをつかもうとしているのだろう。

　そうこうしている間に仕上がったナイフをリケは俺に見せる。

「親方、どうでしょう？」

　俺は受け取ってじっくりと眺める。チートで確認をしても俺の「高級モデル」と遜色ない。実際混ぜても全然分からないんじゃなかろうか。

「いい出来だな。どこでも通用すると思うぞ」

「いえ、そんな。親方に比べればまだまだで……」

「レベルが違いすぎるのよエイゾウは」

　俺とリケの会話に、アンネが割って入る。俺はリケの作ったナイフをカレンに渡した。

「正直、今でもエイゾウの代わりに帝国に連れて帰ったらお父様が喜ぶと思うけどね」

　じゃあ、帝国のお抱え鍛冶師になれそうだという俺の見立ても合ってるのか。本人に聞いたところで断られそうな気がするが。

「ま、本人に一切その気がないんじゃ、どうしようもないわね。私は人質だし」

　そう言ってウインクをするアンネ。リケもそれを見てニヤリと笑った。俺はリケのナイフをじっと見ていたカレンに声をかける。

「さて、それじゃカレンの番だな。とりあえず思ったようにやってみてくれ」

「は、はい！ それでは……」

　一瞬驚いたらしいカレンは言って俺にナイフを返すなり、自分の顔を両手で張って、ヤットコで板金を掴んで火床に突っ込んだ。魔法で自動的に風が送られ、炭がゴウゴウと燃え盛る火床で板金はその赤みを増していく。

　ベストより少しズレた温度で、カレンはそれを火床から取り出すと、金床に置いてから、鎚で叩いていく。当然のことながら、魔力についてはなんのサポートもされていない。鋼が鋼のまま形を変えていくのを見るのは久しぶりだな……。

　僅かばかり低い温度だが、結構スムーズに形を整えていくカレン。

「筋はいいな」

「そうですね」

　俺とリケは小声でそう言って頷きあう。習得しなければいけないことは多いかも知れないが、思ったより早くここから発てるんじゃなかろうか。

　作業の速度もモタモタしている感じではない。焼入れの温度も少しズレているが、普通に使う分には支障ない範囲の話だ。

　そうして出来上がったナイフを、カレンはおずおずと差し出した。

「ど、どうでしょう……」

　差し出されたナイフを俺が受け取り、眺めた。組織のムラのようなものが結構残っていたり、魔力がほとんどこもっていないなど問題がないわけではないが、出来としては十分だろう。言葉を選ばずに言えば、そこらの鍛冶屋と比較して決して劣るようなものではない。

　それでもカレンの父親のお眼鏡には敵わなかった……と言うよりは認めたくなかったのかも知れないが、どちらにせよこの状態でダメだとなったら、そんじょそこらの鍛冶屋以上になるしかない。

「ものとしては悪くないと思う。まぁ、まだやることはたくさんあるだろうが……」

「はい……リケさんのを見て痛感しました……」

　肩を落とすカレン。その肩を俺は軽く叩く。すると、リケがいたずらっぽい笑みを浮かべながら言った。

「それじゃあ、もうちょっと痛感してもらいましょうか」

　俺はため息をつくと、ヤットコをひっつかんだ。さてさて、一番弟子の期待に応えるとしますかね。

## 目標

2021年7月2日

　俺のすることも、基本的にはリケやカレンと工程は変わらない。その精度であったり、といったことが違ってくるだけである。まぁ、その違いが大きいのも確かなのだが。

　火床に入れた板金が赤みを増す。他の２人とは違い、俺はどこまで加熱するのがベストなのか、それがハッキリとわかる。火床から取り出した板金を金床に置き、鎚で叩く。

　叩かれた板金はスムーズにその形を変えていく。もちろん、魔力も鎚の一振りごとにこめられる限界量をこめる。

「親方、また早くなってらっしゃる」

「じゃあ、これ以上早くなる可能性も……？」

「あるでしょうね」

「ええ……」

　そんな風に呟くリケとカレンの声を余所に、俺は集中を深めていき同じテンポで作業を繰り返す。それはある種の機械のようでもあっただろう。家族の皆には「機械」というものが分からなかったとしても、その動作をするための機構であるという感想を抱いたかも知れない。

　やがて、形になったナイフを熱する。ここだ、と言うタイミングで火床から取り出し、水に沈めるとジュウと音を立ててナイフは硬くなっていく。

　ベストな頃合いで水から引き上げ、金床で軽く調整し、エイゾウ工房製の証たる猫のマークを彫り込んでから、砥石でその全身を研ぎ澄ませれば完成だ。

　俺はそれを頭上にかざして眺める。

「うん、いい出来になったかな」

　火床や炉の火を反射して鈍く輝くナイフ。その身には魔力を湛え、零れだしそうですらある。いや、実際入り切らなかった分は溢れて散っていくので、これ以上こめればその分は零れだすのだが。

　出来上がったナイフを俺はリケに手渡した。うやうやしく受け取ったリケはそのナイフを光にかざしたり、ためつすがめつしている。

「あの早さでここまでのものを作られたら、辞めてしまう鍛冶師が多そうですね」

「さすがに量産は出来ないけどな」

「それはそうです。こんなのが世の中に溢れたら大変なことになりますよ」

　リケの言葉に俺は苦笑しながら頷いた。鉄をも切れるナイフなんか、世の中にガンガン出回って良いものではないことだけは間違いない。

　リケがナイフをカレンに手渡す。リケ以上にうやうやしく、例えて言うならば王から剣を下賜される騎士のようにカレンはナイフを受け取った。

　そのカレンも俺のナイフをためつすがめつ、粒子のひと粒すら見逃すまいとするかのように眺める。

「刃には気をつけろよ」

「はい、分かってます」

　本当に分かっているのかどうか若干怪しいが、真剣な表情をしているので俺はそれ以上何も言わないでおいた。

　日が暮れるまで、とは行かないが結構な時間をかけてナイフを見たカレンは、リケにそっとナイフを返す。

「すみません、長いこと」

「いいえ、いいんですよ」

　微笑むリケ。俺はちょっとした悪戯心で混ぜっかえすことにした。

「最初にリケが俺の剣を見たときはもっと長かったしなぁ」

　あれはまだ俺が自由市で直販していた頃の話だ。もう何年も前の話のような気すらしてくる。あの時リケに出会っていなかったら、どうしてただろうなぁ。大黒熊のときにあっさり移住していた可能性もある。

「あれは……まぁ、そうでしたけど」

　再びナイフを眺めていたリケは俺にナイフを返しながら口を尖らせる。その直後に笑っていたので、ご機嫌を完全に損ねたわけではない……と思う。

　ナイフを受け取った俺は、カレンに向き直った。

「さて、それじゃあカレン」

「は、はい！」

　カレンはビシッと気をつけの姿勢になった。なにか軍事系の訓練を受けたことがあるのだろうか。いや、単に緊張の表れか。

　俺はカレンにナイフを差し出した。怪訝そうな顔をするカレン。

「これを作れるようになれ……とは言わない」

　チートの手助けがなければ俺でも絶対に無理だしな、とは言わないでおく。

「目指す先にはこういうものもある、とだけ覚えておいてくれ」

「はい！」

「それじゃ、これはお前のだ」

「えっ！？」

「うちに住んでる“家族”は皆もってる。お前にも渡しておく」

　カレンはおずおずとナイフを受け取った。さっき眺めた時以上におっかなびっくり、という感じである。

「『よく切れる』から気をつけてな。扱い方はサーミャかリケに聞くといい。持ち手やなんかは自分でやってくれ」

　カレンは手に持ったナイフを見つめながら、静かに頷いたのだった。

　その後、「なんですかこれはーーー！」と言う叫び声が表から聞こえてきたが、それはまた別の話というやつである。

=====================================================

コミカライズ版１０話が公開されていますので、併せてご覧ください。

https://comic-walker.com/contents/detail/KDCW\_AM19201711010000\_68/

今回で原作１巻にあたる分が完結になります。

そして、原作２巻にあたる「エイムール家騒動編」も引き続き日森よしの先生の作画にてコミカライズが続行することになりました！

こちらもぜひお楽しみに！

## 温泉客

2021年7月5日

　俺の作業が終わり、今からもう一仕事するには中途半端なので今日の作業を切り上げたあと、カレンを剣の稽古をする皆と一緒に外に出してから鍛冶場を片付けてしばらく。

「せっかくだし、温泉へお湯を汲みに行かない？」

　と言い出したのはディアナだ。秋も深まってきて涼しくなってきたとは言っても、鍛冶場の暑さは汗をかくのに十分だし、稽古で体を動かせば更にだろう。温泉の湯に浸からずとも、それで身体を清められれば気持ちいいだろうな。

　となれば、家族の皆も特に反対意見はなく、クルルと俺だけでも十分なところでも、ちょっとした散歩代わりにと全員で連れ立って汲みに来たのだが……。

　平和そのもの、と言っていい光景がそこにあった。俺の肩のＨＰは順調に減り続けている。

　排水用の池に狼と狸に鹿、そして兎が一緒になって浸かっていた。これを平和と言わずしてなんと言うだろうか。一様に目を閉じてうっとりしている。それなりに間隔を空けているのは互いへの配慮だろうか。

　しかし、この様子だと時間帯が違うだけで、猪や熊、虎も浸かりに来ている可能性が高いな。まぁ、それはそれでここらで“悪さ”をしなければ、別段止めだてするつもりもないのだけど。

　クルルやルーシー、ハヤテの様子を見ても「なんか皆来てるね」くらいの感じで、特に警戒や威嚇はしていないので、悪さを働くような動物は今のところいなさそうだ。

　もしかすると、リュイサさんあたりがそうなるように手を回しているかも知れない……というか、俺たちが来そうにない昼の時間にあの人が入ってる可能性は結構あるな。

「わぁ、凄いですね」

　目を輝かせてカレンが言った。滞在がしばらくの間とはいえ、これから先何度か目にする光景にはなるだろうが、楽しんでもらえるならそれに越したことはない。

「こっちは皆が浸かってるから、水路の方で汲むか」

「そうだな」

　俺が言うと、サーミャが頷いた。森の皆の邪魔をしても悪いし、衛生的にも良いとは言えなさそうだしな。

　空きの瓶２つほどを水路に沈めて湯を汲む。傍らではカレンが水路の湯に手を付けていた。もちろん瓶で汲んでいるより下流側である。

「本当に温泉が湧いてるんですね。よく探し当てましたね」

「まぁね」

　感心しきりのカレンに俺は答えたが、実際にはこの“黒の森”の主であり、この世界の根幹である“大地の竜”の精神体の一部に直接場所を聞いたわけなので、外しようがない。

　それは今はカレンに言っていいことでもなさそうなので。控えめに自慢するに留めておく。

「まだ浸かれないんですよね？」

「森の皆が浸かってるのは排水用の池だからなぁ。あそこに浸かれなくはないだろうが、目隠しも何もないし、浸かれるように整備もしてないからオススメはしない」

「と、言うことは湯殿か何かを作るんですか？」

「そうだな。湧いているあそこと排水用の池の間に湯殿を建てて、そこで湯に浸かれるようにするつもりだよ」

「私がいる間に建てるならお手伝いしますね！」

　カレンは勢い込んで言った。温泉と聞いて居ても立ってもいられないのは、前の世界でもこの世界でもあまり変わらない性なのだろうか。１人でも人手が多い間に着手するのは有効だと思うので、本人がいいなら早めに取り掛かることも考えるか……。帰る期間がその分長くなってしまうが。

　少しして、湯で満たされた瓶２つをクルルの首にかける。彼女は一声嬉しそうに鳴いて、そう家から離れていない距離を戻る。

　温泉の湯は身体を拭いたりするのには良さそうだが、まだ飲用や食事に流用する勇気はない。衛生的な話もあるにはあるが、魔力が多く含まれている水（湯）が身体にどう影響するのかがよく分からないからだ。

　森の動物達が浸かっているので、少なくとも浸かる分には何も起きない……はずだが、経口摂取するとなるとまた話は変わってくる。

　前の世界の神話でも「異界の食事を口にすること」は特別な意味を意味していたわけだし、特別なものを飲む、食べるといった場合の影響は多少気にしたほうがいいだろうな。この世界の食事をさんざん口にしている俺が言うことではないかも知れない。

　そうして戻ってくると、伝言板の上に小さな影を見つけた。俺や他の家族も知っている姿だ。

「アラシ！ 戻ってきたのね！」

　カレンに言われて、アラシは「キュッ」と短く鳴くとこちらに向かって飛んできた。足にはかなり小さいが手紙らしきものがくくりつけられている。カミロからの通信だ。

「俺が開けても？」

「ええ、もちろん」

　俺の言葉に頷くカレン。俺はそっとアラシの足から手紙を外すと、固唾を飲んで見守る家族の視線の中、手紙を開いた。

## カミロの手紙

2021年7月7日

　カミロの直筆なのだろうか、あまり達筆とは言えない文字で手紙に書かれていたのは大した内容ではなかった。

　要約すると「しばらく街を離れるので、次の納品は３週間後でも良いか？ ２週間後でも番頭さんが応対できるからどっちでもいいけど、どっちにする？」という話である。

　そこに都では侯爵とマリウスがドタバタしてるっぽいが詳細は現在不明、というちょっとしたニュースのようなものが付け足されてはいたが。

「これは、内容がどうこうよりも単に手紙が届くかどうか試したかっただけだな」

　納品日を３週間後にするのかどうか確認しておきたかったのは確かだろうが、どっちでもいいならとりあえず番頭さんを残しておけばいいだけだ。この世界では貴重な通信手段である小竜を使うまでもない。

　すわ一大事か、と身構えていた家族達はすっかり「なぁんだ」と肩を落としている。俺も心情的にはそっちに近い。

「まぁ、いざ使おうと思った時に実は届いてなかった、とかあると困るからなぁ」

「それはそうです」

　俺が言うと、リディが頷いた。彼女は自分の住んでいた森が大変なことになったわけだし、その時にこういう高速な通信手段があれば、と思ったのかも知れない。

　そんないざという時に困らないよう、こういう比較的どうでもいい内容で事前に確認しておいたほうがいい、というのは道理だと思う。最悪、返事が来なければ番頭さんを置いておけばそれで問題ないのだし。

「さて、早めに返したほうがいいかな。アラシ達は日が沈んでも平気なのか？」

　俺はカレンに向かって言った。あたりはもう暗くなりつつある。視覚にのみ頼っているとしたら、今日返すのは止めにして明日の朝イチにしたほうがいいだろう。むざむざ迷子にさせることもない。だが、カレンは頷いた。

「一度こことあそこを行き来してるので、もう行き方は覚えてると思います」

「分かった」

　カミロはそのあたりも見込んでこの時間に着くようにしたのかな。いざという時が晴天の昼間とは限らないわけだし、ある程度の悪条件を見込んでおくのも当然ではあるか。

「それじゃあ悪いが、ササッと返事を書こう」

　俺が言うが早いか、リケが家に飛び込むように戻り、紙とペン、インクを持って戻ってくる。「ありがとう」と言ってから受け取り、紙には簡潔に「じゃ、３週間後で」という内容を記した。

　侯爵とマリウスの件も気にはなるが、今聞いてどうこうなるものではなさそうだしな。

　書いた手紙を確認していると、横から覗き込んできたカレンが言った。

「字、綺麗なんですね」

「そうか？」

「ええ」

　カレンは頷き、今度は俺の目を見て言う。

「やっぱり、

「まさか」

　俺は苦笑した。実際この世界での教育は受けていない。字が綺麗なのはウォッチドッグに貰ったチートの影響でしかないのだ。

　そのように説明するのは、それこそまさかなので言ったりはしないが。今のところ家族も俺の家名は伏せてくれている。カミロからの手紙にも「エイゾウ」としか書かれていなかったし。いや、待てよ。

「魔法使ってて教育を受けてないってことはないと思います」

「あー……」

　そうだった。いつものことなので、食事の準備や作業の準備でホイホイと使ってしまっていた。まぁ、あれも教育を受けて使えるようになったわけではないのだが……。

　インクが乾いたのを確認して、アラシの足にくくりつけてやった後、俺は小さくため息をついた。そして、カレンに名前を告げる。

「エイゾウ・タンヤだ」

「タンヤ家……？」

　怪訝な顔をするカレンに、俺は肩をすくめる。「タンヤ家」が実際に北方に存在するのかどうか、細かいところは“インストール”の知識は教えてくれなかった。

　存在するならするで「隠し子の出奔」ということにするし、しない場合は「偽名」ということで通す。今のところ俺はこの“黒の森”から離れず、ここで鍛冶屋としてのんびり過ごしていくつもりをしている。つまり“黒の森に住んでる鍛冶屋のオッさん”ということさえ分かればよく、名前はどうでもいい……とカレンも思って欲しいものだが、それはちょっと調子が良すぎるだろうか。

　一瞬の沈黙と緊張が走ったが、結局カレンは「タンヤ」という俺の家名についてはそれ以上触れなかった。代わりに、カレンはアラシの頭を撫でる。

「それじゃあ、お願いね」

　アラシは「キュイキュイ」と鳴き、ハヤテの「キュッ」、クルルの「クルルゥ」、そしてルーシーの「わんわん！」という声に送られて、カミロの店へと飛び立って行く。

「さーて身体を拭いたら飯の支度だ！」

　それを見送った俺は、大声でそう言って家の扉を開いた。カレンに怪しまれないままは難しいだろうな、どう説明したものか、そんなことを考えながら。

## 部屋

2021年7月9日

　温泉の湯は、魔力を含んでいるからだろう、汲んでから結構時間が経ったのにまだ十分に暖かかった。

　うちではそれぞれの部屋に湯を持っていって身体を拭いている。リケやヘレン曰く、それは「贅沢な話」であるそうだが、居間でうら若い女性がもろ肌脱いでってのは転生してきた身としては看過しにくいんだよな……。

　リディは個人の部屋だったらしいが兄と２人暮らし、サーミャはそもそも森を転々とする暮らしなので、この辺のことはピンと来ないらしい。いわば「どっちでもいい組」とでも言うべきカテゴリである。

　アンネはもちろん、ディアナの「お嬢様チーム」は実家では個人の部屋があったので違和感はないそうだ。なので、「身体を拭くのは自分の部屋でね！」って要求が俺が元貴族だった説を補強している状況なのである。

　そして夕食時カレンに聞いてみると、

「自分の部屋ですか？ ありましたよ」

　とのことだった。家の様子を聞いてみると、概ね俺が想像したような“武家屋敷”と言った感じのようだ。つまり、

「えーっ！？ 紙で仕切られてるの！？」

　ディアナが飛び上がらんばかりに驚いた。障子や襖のようなものが存在するのはこの世界でも同じらしい。この工房も鍛冶場だけは耐熱も兼ねてなのか石積みの箇所があるが、基本的には木製だからな。

　俺は苦笑してディアナに言った。

「木の骨組みの引き違い戸に紙を貼り付けてあるから、紙で仕切ってるてのはちょっと誤解があるな……」

　スマホなんかで実物を見せることが出来ればあっさり解決するのだろうが、想像だけではそう言った誤解も仕方のない部分はある。前の世界のマルコ・ポーロのようなものだ。

「もちろん、木だけで出来ているものもありますよ。私の部屋とかはそうです」

　いわゆる板襖で襖紙を貼らないタイプのやつかな。前の世界だと檜板に日本画が描かれているものがあったりして、なかなかいいなと思ったものだ。一般の（前の世界で言う）現代的なご家庭に導入するようなものではないが。

「うちに畳はないが、不便だと思ったらカミロに頼んでおくから言ってくれ。戸襖なら作れると思うし」

　爺さんの家では畳に布団だったのを思い出し、少し懐かしさを感じながら俺は言った。流石に壁を襖に替えるのは無理だが、扉を戸襖に替えるくらいのことはしてもよかろう。施錠はつっかえ棒とかで可能だろうし。いや、俺にとっては懐かしのねじ込むアレでもいいな。

「いえ、大丈夫ですよ。昨晩も寝る分には普通に寝られましたから。師匠だって慣れたんでしょう？」

「いや……うん、そうだな……」

　俺の場合は慣れたというか、実家も一人暮らしになってからも洋間にベッドだっただけなのだが。それは言わずに置いておく。洋間にベッドのほうが慣れてるのは事実だ。

「家にも板の間がありましたし、平気です」

「それならいいんだ。なんかあったら言ってくれよ」

　俺はホッとして頷いた。食うものと寝る場所は後から響くからな……。気持ちよく寝られないと、いずれ心身ともにガタが来る。しばらく会社での椅子寝を続けたことがある俺の実経験だ。

「それで、３週間……納品物の作業を除けば２週間まとまって空いてしまったわけだが、どうしようかね」

　俺は話題を切り替える。いつもの２週間なら１週間を納品物の製作にあてて、１週間でカレンの修行に付き合いつつ、俺もなにか新しい物をと考えていたのだが長く時間が取れるのなら、以前も考えたように今のうちに人手が欲しい作業――つまりは湯殿だが――を進めるのが得策なようには思う。

　だが、当然ながらその分カレンの帰還が遅れるわけで、一刻も早く帰りたいだろうカレンにとっていいことではあるまい。

「湯殿を作りましょう！」

　しかし、真っ先にそう言ったのはカレンだった。

「えっ、いいのか？ 帰るの遅くなっちゃうだろ？」

　当然の疑問を口にしたのはサーミャだった。うんうんと他の家族も頷きながら心配そうにカレンを見ている。

「ええ！ 先程の湯は大変良いものでした！ 早く浸かってみたいです！」

　キラキラと目を輝かせ、今日一番元気なんじゃないかというテンションでそう言ったカレンに、俺たち家族は慈しむような、残念な子を見るような、そんな複雑な視線を送るのだった。

## 湯殿建築開始

2021年7月12日

　そして俺たちは湯殿の建築を始めた。もちろん目標はこの２週間（厳密に言えば２週間弱ということになるが）での完成だが、それが厳しいことも自覚はしているつもりだ。

　なんせ作るべきものが部屋の増築とは異なるうえ、その数がそれなりに多いからである。つまりは半分手探りということになるわけだ。

　多少はチートのおかげで楽ができるだろうとは思うが、それでも限度はある。まぁ、最低限女湯が整備できれば目標達成、と言えるだろう。男湯は「付けたり」のようなものだし。

　それでも、ないのとあるのとでは大違いであろうと、まずは設計図から始めることにしたのだが、かろうじてチートが手助けしてくれる範囲のようで、あまり時間をかけずに設計図が出来上がった。

　それを囲んでリケが言う。

「ははぁ、ここで服を脱ぎ着するんですか」

「そうそう、その後ここで体を洗ってから、ここで湯に浸かるんですよ」

　答えたのはカレンだ。後ろから覗き込んだヘレンが疑問を口にする。

「そのまま入ったらダメなのか？ アタイは泉で水浴びするときはそのままだけど」

「温泉の場合は、北方ではあまり行儀のいい話ではないですね……」

「へぇ」

　カレンの答えに、ヘレンは感心したように頷く。行軍中の水浴びはのんびりするわけにもいかんだろう。そもそも冷たい水ではそこで温まるという概念がないだろうし、仕方のないことであるとは思う。それにだ。

「どのみち身体を綺麗にするのに、綺麗にしてから入るのか？」

　そう言ったのはサーミャだ。まぁ、そうなるよな。言っていることはよく分かる。今回はかけ流しだから、湯も入れ替わるわけだし、湯の汚れを気にする必要があるのかと問われれば、そこまではいらないかも知れない。

「浸かってみたら分かるよ」

「そんなもんかね」

「そんなもんだ」

　言って俺は小さく笑う。あの感覚は慣れないと分からん気はする。うちだと魔法もあって実感しにくいが、湯というものは本来燃料と水を消費するものなのである。

　薬効的なものがあるとはいっても、貴重な燃料と水を大量に消費してやることが基本的には身体を温めることだけ、というのは理解しにくくてもしかたのない話だろう。

「よし、とりあえず木材の運搬と区割りをはじめるぞ―」

　俺がそう言うと、皆から「はーい」とか「おう」とか返ってきて、家の外にぞろぞろと出ていった。

　木材の運搬、それはつまり、うちではクルルの独壇場である。俺とヘレンも手伝いはするが、クルルが引っ張っていく効率に比べると遥かに劣ることは否めない。１本でも運んだほうがマシではあるので、腐らずにエッホエッホと比較的軽いものをヘレンと一緒に、あるいは手分けでして運んでいる。

　その間に他の皆は設計図を参考に、「このあたりに柱」「このあたりは壁」「ここから湯を貯めるところ」などを、杭やその他を使って示す作業をしていく。

　木材の運搬とこれが終わったら、後はそれに従って作っていくだけではある。もちろん、そんな簡単な話ではないのだが。

　杭打ちはリケとディアナがやって、縄で区割りをしていったりするのはその他の皆、ルーシーとハヤテは応援団である。

　当初ハヤテは特にやることもないし、お留守番かなと思っていたのだが、カレン曰くは「ついて来たがってる」とのことだったので連れてきた。

　木材運搬の合間に見てみると、今は一旦応援をお休みしているらしいルーシーの背中でくつろいでいる。こうして見るとルーシーも大きくなったなぁ。少なくともそろそろ子狼は卒業だろう。小狼ではあるかも知れないが。

　いずれ立派な狼になるのだろう。そのときの彼女がどういう選択をするか、その選択の結果はしっかり見守っていこうと思う。

　夕暮れ前、ようやく必要そうな木材の運搬を終えた。ここからは足りなければ周囲の木々から調達することになる。リュイサさん曰くは「気にしなくても、ここらの木が減ったくらいじゃなんともないわよ。将来的にも大した影響は出ないわ」だそうなので、その時が来たら遠慮なく伐採するつもりではある。

　まぁ、それでも少ないに越したことはなさそうだし、何よりその分作業時間が増える――伐採は一瞬だが――ので、この獲物の引き上げのたびに切ってきた木材で足りてくれるといいんだが。

　区割りをしている方も終わったらしく、設計図を見ながら「ここで脱いで」みたいなことを皆でキャッキャとしている。先はまだまだ長いが、俺にはそこでのんびりと過ごす家族の姿が見えたような気がしたのだった。

## 役割分担

2021年7月14日

「こうやって改めて見てみると、なかなかの規模だな」

「これくらいなら大丈夫でしょ」

　建築の前準備をした翌日、区割りを終えたところを眺めて言った俺の言葉にディアナが返して、俺は頷いた。

　女湯の方だけでもうちの倉庫くらいの広さがあるだろうか。逆に言えば、既に建築した経験のある大きさだということである。なので、そちらのほうはあまり心配していない。

　むしろ気になるのは湯船の方だ。それなりの広さを掘る必要があるし、そこまで湯を持ってこないといけない。魔力のおかげで中々冷めにくい湯なので、湯の流れるルートを確保してしまえばなんとかなるのが救いだな。

　湯船はとりあえずは大きな木の浴槽でよかろうということになっている。設置箇所を掘るのは縁の高さを下げて湯を流しやすくするためで、そのまま浴槽にしていくわけではない。

　前の世界の露天風呂よろしく、石で組もうかと思ったがやめたのだ。もちろん、この“黒の森”にも石はある。スリングの弾にしようかと思う程度には転がっているし、畑を耕したときにもそれなりの数が出てきた。

　しかし、大きな浴槽にするのに適した大きさや数が揃えられるかと言うと、若干厳しいのも事実なのだ。大きな岩でも埋まっていて、そこを掘れば浴槽になるのなら、こんなに簡単な（作業としては大変だが）ことはなかった。

　そこを愚痴っていても始まらない。俺はショベルを持つと、硬い土に突き刺した。

　掘るのは俺とヘレンの仕事である。通常このときに活躍するはずのクルルは、重機として建築のほうで頑張っている。

　力持ちチームの一角であるアンネも背の高さを活かすこともあって、建築のほうに回ってもらっている。サーミャとリケは俺よりも建築については経験があるので、２人も建築に回ってもらったのだ。

　まぁ、そんなに他のみんなとは離れていないので、もし厳しくなればサーミャかリケか、あるいはディアナの手を借りるようにすればいいだけである。

「よいしょ」

　ショベルに載せた土を、影響のない方に向かって勢いよく捨てる。掘り起こされた土がペイントのように地面の色を変える。掘り終わったら土を纏めてどこかに置いておかないとな。石もいくらか混じっているので、あとで大きめのものだけ適当に分けておこう。

　ヘレンの強さは速さにあることは間違いない。だが、速いだけで敵を打ち倒せるわけがないのも道理だ。彼女の引き締まった肉体はその膂力も十分高いレベルで備えている。

　今、俺の目の前でその力を遺憾なく発揮していて、大きなプリンをシャベルで食っていくが如き早さで土を掘っている。

　とは言え、俺が一度掘る間に二度三度と掘っていくヘレンも、体力が無尽蔵にあるわけではない。まぁ、無尽蔵でないかと思うほどであるのも事実なのだが。

　彼女が一息入れたところで、俺は話しかけた。

「いつも凄いと思ってたけど、久しぶりに相対してみると実感するな」

「なにを？」

「お前の速さと力だよ」

「そうかな？」

「傭兵に戻ったら引く手数多だろうな、と思うくらいにな」

「アタイはこういう何も考えなくていいのは得意だからね。あっちみたいなのも嫌いってわけじゃないけど」

　そう言ってヘレンは振り返った。向こうは向こうで柱を建てたり、筋交いを入れたり、板を切り出したりとワイワイやっている。

　陣頭指揮はリケが取っているようで、ごく狭い範囲ながらもあちこちに行って忙しそうだ。

「ここでのんびりしてるのも、実はアタイの性に合ってると思ってるんだよな」

　眩しそうに目を細めて、ヘレンは他の皆を見やる。

「ほとんど毎日、剣の稽古で身体も動かせてるし、クルルとルーシーもいるし」

　掘っているところへ向き直ったヘレンは、ザクッと音をさせてショベルを地面に食い込ませる。

「戦ってるのが嫌だったってことでもないけど、もうしばらくはここにいさせてくれ」

　ショベルに盛られた大量の土をヘレンは放る。力が入りすぎたのか、結構な広範囲にそれは散らばった。彼女は「あちゃー」と言って、ショベルを器用に使って掘った土が小山になりつつあるところへ纏めた。

　彼女がここにいたいのなら、それを断る理由は俺にはない。

「もちろん、追い出したりはしないよ」

　俺がそう言うと、ヘレンはにっこりと笑って、ショベルを地面に突き刺した。

## 休憩

2021年7月16日

　ヘレンが機嫌よく掘ってくれたおかげもあってか、風呂桶設置予定場所の掘削はスムーズに進んだ。

　傍らにはちょっとした小山が出来ていて、振り返れば前の世界のパルテノン神殿のように柱が林立した光景がある。その脇で１人、へたり込んでいる姿。カレンだ。

　俺は運んできた水瓶からカップに汲んだ水を飲む。横ではヘレンが同じようにして水分補給をしている。

　別のカップに水を汲んだ俺は、それをカレンに差し出した。

「休憩は適度に取れよ。水もちょいちょい飲んどけ」

「はいー、皆さんにもそう言われましたぁ。それでここで休んでるんですー」

　差し出されたカップの水を一気に飲み干すと、尻尾でペチペチと地面を叩きながらカレンは言った。作業の邪魔になりそうだからだろう、長くてスッと流れていた髪を今はひとまとめにしていた。やったのは「みんなのお姉ちゃん」リケだろうか。

　カレンは人心地がついたのか、ふう、と息を吐き、忙しなく動き続ける皆を見て言った。

「私のいる部屋とかも皆さんで作られたんですよね？」

「そうだな」

　最初に用意してもらっていたのは、居間に書斎と寝室、そしてトイレに台所というシンプルな住まいと鍛冶場だけだ。サーミャとリケの部屋からは自分たちで作ったものである。

　増築に増築を重ねた、カレンのいる居住棟……と言っていいのだろうか、まぁそんなようなところは言わずもがなで、空いている部屋は物置代わりの１部屋のみとなっている。

　あそこもいずれ増築するんだろうか。そろそろ２階建てなんかを考えたほうがいいのかも知れないが、鍛冶場の熱気が流れ込んだりしたら厄介なので、もしやるとなったら考えないとな。

「私にもそういう経験があれば良かったんですけど」

「いや、言い方は悪いがうちのがおかしいだけだ」

　再びため息をつきつつのカレンの言葉に、俺は苦笑しながら返す。エルフとドワーフはともかく、建築経験のある伯爵家令嬢と帝国皇女はどう考えてもおかしいでしょうよ。

「アンネさんは身分の高い方だと伺いました」

「うん。本来は俺が拝謁賜われるかどうか怪しいくらいのな」

　今ここではただのアンネとして、俺や家族から指示を出したり手伝ってもらったりしているが、本来あくまで一介の鍛冶屋のオヤジでしかない俺が、継承権最下位クラスとはいえ帝室に名を連ねる人物に対して、おいそれとお目通りがかなうはずがないのである。

　カレンにはまだディアナとアンネの本当の身分は明かしてない。情報セキュリティの観点よりも、「これ以上情報を与えてパンクさせたくない」ほうが大きい。なので、いずれ伝えることになるとは思っているし、ディアナやアンネの判断で伝えることは特に制限していない。

　彼女もディアナの方はある程度察しがついているかも知れないが、アンネの方はどうだろうな。かなり身分が高いことは分かっているだろうが、皇女殿下とまでは思ってなさそうだ。

「それなのに、ああやって働いていて……」

　フッと目を細めるカレン。

「なんだかいいなぁ、って思いますね」

「本当に？」

「本当ですよ！」

　俺がからかうと、カレンはわざとらしく怒ってみせた。うちでは彼女だけがゴールが見えている。リケも見えてはいるのだが、かなり遠いので一旦はノーカンだ。

　そんなに長くならないだろうが、馴染んでくれるといいな、そう思っていると、

「カレン！ ちょっとここ手伝ってくれない？」

「はいー！ 今行きます！」

　アンネがカレンを呼び、カレンはパタパタと走っていった。どうやら俺の心配は杞憂に終わりそうだ。なんとなく嬉しくなりながら、俺はヘレンと作業に戻った。

## 浴槽

2021年7月19日

　浴槽、と言うと大層なものに思えてしまうのだが、要は前に作った貯水槽と同じものではある。今回は中に人が入ることもあって底もキッチリ作り切る、というだけだ。

　ちなみに貯水槽は新しく井戸が出来てその日の水については困らなくなったことで、すっかり出番を失いつつあるが、それでも消火その他緊急用水としての役割は果たすだろうとそのままにしてある。

　飲用や調理用には使わないので、いずれ苔むして良い感じの侘び寂び感が出るだろうか。今うちでそれが理解できそうなのはカレンだけだが。ただの黒カビとかだったらやだな。

　浴槽の設置スペースはそれなりの大きさになった。ということはつまり、浴槽もそれなりのサイズになる。

　幸いにして、と言っていいのかはわからないが、たんまりと作ってもらった板材は元の木が大きかったこともあって“枠”を作るには十分なサイズだ。

「とりあえず、大きさを決めちまうな」

「おう」

　俺はヘレンに声をかけて、板を手早く長方形に組む。板は端を凹の字と凸の字に切り欠いて、それを噛み合わせ、釘でとめる。釘は半ば仮固定のようなもので、水気を含んで膨らんだ板がそれぞれ噛み合ってとまってくれる……はずだ。

　水圧で緩んでこないかという問題については、掘った穴に埋めることで解決できる……と思いたい。ギリギリ生産という判定なのか、そのあたりはいまいちベストが出てこないのだ。

　ひとまずは手早く１列だけ組んで穴にあわせてみる。こっちはバリバリの生産なので、一発でピッタリのサイズなのが分かった。後はこれに底と横をつければ完成である。

　上に板を積むように重ねていく都合上、上辺と底辺に当たる部分も凸凹が噛み合うように加工する。底板の場合はそれが左右の辺で必要になるというわけだ。

　ほとんど同じ作業を繰り返すので、俺は凸凹を彫っていく作業に集中し、組み上げるのをヘレンに任せることにした。彼女なら力もあるし、育ての親の影響もあってか手先もそれなりに器用なのだ。

　完全に器用でないのは生みの親……前の世界風（？）に言うと遺伝子は侯爵のほうだからな。豪放磊落を絵に描いたようなのに知恵も回るあの御仁だが、決して手先が器用そうではない。

　俺は脳裏に器用に刺繍をこなしていく侯爵の姿を思い浮かべ、頭を振ってそれを追い出した。まぁ、俺も前の世界ではちょっと手芸（ニードルフェルトとかぎ針編み）を嗜んでいたりもしたし、見かけや性別年齢で“ないない”とするのは失礼かも知れないし。

　日がそろそろ作業の終わりを告げる頃になったが、まだ浴槽は半分程の高さまでである。そうは言っても今日の作業量を考えれば十分すぎるくらいの進捗と言っていいのだし、不満はない。

　そして振り返ると……。

「おー、結構進んでるじゃないか」

「だろ？」

　俺が感心すると、ドーンとサーミャが胸を張った。こちらもまだ完成には程遠いと言えるが、それでも「どんな感じの建物なのか」は分かるくらいになっている。柱が立ち、屋根の梁がかけられている。地面からそう高くはないが床板は一部がもう張られていた。

　これはもしや２週間要らないかも知れないな……。いや、建造物に時間がかからずとも、その後に湯を引いてきたりといった作業まで入れれば、結構な時間をとることは想定できる。

　まだまだ時間はあるのだ。焦らずに、時間が余れば休日にすればいいやくらいの気持ちでやっていこう。今後何十年とお世話になるはずの施設なんだし。

「よーし、それじゃあ今日は終いにしよう」

　俺がそう言うと、皆から「はーい」と返事（もちろんクルルとルーシー、ハヤテからも）が来て、俺達は道具を一箇所にかため、短い家路についた。もちろん、帰る前に温泉の湯を汲んだことは言うまでもない。

## 活力

2021年7月21日

　今日みたいに何かを具体的に作り上げていった日は、飯が進むような気がする。

　作業量的には昨日の木材運搬や縄張りもそれなりに大変だったし、俺とヘレンについては昨日のほうが肉体を酷使したとすら言えるのだが、それとどれくらい身体が食事を欲するかは別なようだ。

　まぁ、そんなわけで並べた飯がモリモリと減っていっているわけである。前の世界のアニメ映画で、空賊一味がこんな感じになってるシーンがあったな。あれは料理を作ったのは女の子で、食ってるのが男だったけど。

「食材の備蓄は足りてるよなぁ」

　そんな心配が口をついて出るほどには皆モリモリ食べている。俺の言葉を聞いたリディが上品に口の中のものを飲み込んでから言った。

「物置の食品棚のはないですけど、倉庫に塩漬けのと干したのとがまだ沢山ありますよ」

「じゃあ、食料の確保という点では狩りに出る必要はあんまりないのか」

「そうですね」

　リディは頷く。ちなみに彼女は所作が上品に見えるだけで、食べるスピードは他と負けず劣らずである。

　うちにおける食材は、消費より貯蔵するペースのほうが若干早い。倉庫の保存食は徐々に増えている状況だ。今は古いものから消費していけば大丈夫だが、そのうち廃棄を考える時が来る可能性は十分にある。

　そこで、燻製することにより長く保存できるようにすれば貯蔵しておける期間が延びる。なので、燻製小屋を建てて燻製を作れるようにしておくのは意味のあることだろう。

　ただ、そこまでして貯蔵可能な量を増やさねばならないという程でもない。１人とちょっと分消費が増えて、消費と貯蔵のバランスが良くなったわけだし。温泉の湯殿が終わった後に何を作るかは別途考えどころかも知れない。

　とは言え、だ。今現在、食材の乾燥設備として役に立っているのは鍛冶場なのである。火や高温の物体を扱っていて気温の高い時間が長く、空気が乾燥している、という点が何かを乾燥させるのに適しているのは確かだ。

　確かなのだが、いささか生活感が出過ぎなのが、ずっと引っかかっている。まぁ、森暮らしの鍛冶場と考えれば、逆に風情があると言えなくもないし、鍛冶場も生活空間の一部と言われればそうなのだけれど。

　煙を煙突から排出するかどうか選択できるような、ストーブのようなものを置いた小屋を用意すれば乾燥小屋としても、燻製小屋としても使えそうだし、鍛冶場の生活感問題も解消するのだ。いつ切り出すかはさておき、いつかは進言してみるか……。

「森の中でこんな生活できたら十分すぎますよ」

　ワインをあおりつつ、そうヘレンに言っているのはカレンだ。ヘレンは「そうだよなぁ」とか言いながら笑っている。カレンが来てまだ２日かそこらなのだが、すっかり我が工房に馴染みつつある。“同じ釜の飯”の効果だろうか。今も醤油と果実ベースのタレで猪肉を煮豚っぽくしたものを「おお……これは……」などと言いながらモリモリ食べている。

「確かにこれは酒とまでは言わなくても、米が欲しくなりますね」

「そうなんですか？」

　カレンの言葉にリケが相槌を打ち、カレンは頷いた。リケはまだくだけた話し方にはなっていない。

「北方の私達のあたりは何でもかんでも米と一緒に食べようとするんですけどね。米の上にこういうのをのっけて食べる人もいました。行儀が悪いからって、うちではできませんでしたけど」

　リケがほほぅと感心し、その横で俺は黙って頷いた。あらゆるものを一旦は米の上にのせて丼として食おうとする文化があるのは、こっちでもそう違いがないらしい。

　一方で、丼ものを「行儀が悪い」と忌避する感じも根強くあるようだ。少なくとも「お武家様」のところで出せるような食事ではないようである。

「作業のほうはどうだ？ 鍛冶とは勝手が違うし、まだ慣れてないと思うが」

　言ってから、娘に様子を聞くお父さんみたいだなと思ったが、まあいい、心情的にはそう変わらない。カレンの年齢次第では、実際に親子くらい歳が離れているかも知れないんだし。

「そうですね、今は慣れてなくて大変ですけど、みなさんもいますし、すぐに慣れると思います」

　カレンはそう言って小さく笑った。ワインをぐいっとあおったアンネが続ける。

「手先は器用だし、言われたことの理解も早いから、エイゾウが心配するようなことは今のところないわね」

「そうか、しばらく鍛冶の仕事じゃなくてすまんが、頼んだぞ」

「はい！ 師匠！」

　カレンが冗談めかして返事をすると、食卓に笑い声が響く。そしてそれは、確実に明日の活力に変わっていった。

------------------------------------------------------------------------------------------------

書籍化作業その他によりまして、7/23(金)の掲載はお休みをいただき、次回の掲載は7/26(月)とさせていただきます。

どうぞご理解、ご寛恕のほどよろしくお願いいたします。

## 娘たち

2021年7月26日

　最初、俺は自分の目を疑った。しかし、それはすぐに納得へと変わっていった。

　いつか、こうなるとは思っていた。そうならないはずがなかったのだ。今までを考えてみれば当然だ。

　俺は目にしたものを言葉にした。その光景を確定させるかのように。

「虎……だよな？」

「虎だな……」

　俺が口にした言葉に、サーミャが返した。俺の肩のＨＰは今日も順当に減っている。

　俺たちが目にしているのは、鹿や兎、狸と一緒にのんびりと湯に浸かっている虎だ。傍らでは小鳥も羽で湯を巻き上げて気持ちよさそうにしている。

　その湯が虎にもかなりかかっているのだが、虎は意に介した風もなく、目をつぶってのんびりしている。そして、その耳はこちらに向いているから、こちらの存在にも気がついているはずだ。

　それでも、虎はのんびりと湯に浸かったままである。

「まぁ、特に何もしないで浸かってるだけならほっとくか……」

「そうだな……」

　俺とサーミャは顔を見合わせてそう言った。さて、作業にかかろう……。

　今日の作業はいわゆる「昨日の続き」だ。俺とヘレンが浴槽を作り、他のみんなで湯殿を建てていく作業になる。釘を打ったり、木を削ったりする音が森の中に響く。

　作業のとき、皆の間にはあまり会話はない。時々、言葉少なに指示や相談の声が飛び交うくらいだ。そこに、時折ルーシーの「わんわん！」という声が混じる。

　ふと見てみると、ルーシーとハヤテが追いかけっこをしていた。カレンによれば年齢はともかく、ハヤテはあの大きさで既に成竜なのだそうだ。あそこより大きくなられても困るのも事実だが。

　ともあれ、“一番上のお姉ちゃん”（クルルはまだ成竜ではないらしいので）のハヤテが“妹”のルーシーをかまってやっている状態である。

　自分が子供だった時、親父もこんな気持ちで俺を眺めていたのかなと、少し感慨深い気持ちになりながら、俺は自分の作業に戻ろうとする。そこへ、ヘレンが声をかけてきた。

「エイゾウ、なんだか今すごく優しい目をしてた」

「そうか？」

「ああ」

「まぁ、うちの可愛い娘たちだからな。親が見ればそうもなるさ」

「ハヤテも？」

「そうだな。もうウチの娘みたいなもんだなぁ」

　来てそんなに経っていないのだが、「うちの家族に優しくするのはそいつも家族だ」みたいな、ちょっと暑苦しいかもしれない認識がある。

　俺の答えに、ヘレンは「そうか」と優しい顔で微笑むと、彼女も自分の仕事に戻った。

　作業の間に昼食や休憩（クルルたちと遊ぶの含む）、そして排水池の様子を見に行ったりした。虎はいつの間にか立ち去っていて、姿が見えなくなっていた。暴れた様子は見受けられないので、大人しく浸かって帰っていっただけのようである。

　今は比較的おとなしい類の動物たちが浸かっていて、森狼もいないので肉食獣がここに来ることはそんなにないのかも知れない。まぁ、時折様子を見て、事故があるようならその時に対策だな。危なそうなら草食獣のほうが勝手に逃げてくれるとは思いたい。

　そうして、順調に時間は過ぎていき、浴槽は完成した。湯殿や目隠しの壁がないので、森の中に突然浴槽があらわれたような見かけになっている。

「俺たちが入る分には問題なさそうだが、こっちに小さい子……小さい動物が入っちゃわないように蓋しておくか」

「そうだな。板持ってくるよ」

「頼んだ」

「おう」

　そう言ってヘレンは駆けていった。そちらには壁の一部が出来上がりつつある湯殿の姿が見える。今であの様子なら明日に出来るということはないだろう。男湯のほうもまるまる残っているし。

　あらためて浴槽を見る。地面に半ば埋まっている浴槽だ。まだギリギリ明るいので浴槽だと分かるが、夜中になれば一種の落とし穴として機能しかねない。

　明日もここへは来るから、万が一落ちてしまって上がれなくなった動物がいたとしても、救助は出来ると思うのだが、数が多かったりすると厄介だし、少しの間でも怖い思いをさせるのは本意ではないからな。

　パタパタとヘレンが板を担いで戻ってくる。そこそこの重さだろうに、軽い足取りだ。浴槽が完成したのが嬉しいのもあるだろうな。

「持ってきた！」

「おう、ありがとう。じゃ、軽く打ち付けとこう」

「わかった」

　俺とヘレンは浴槽の上に少なめの釘で手早く板を打ち付けた。打ち付け終わったところを一見すると大きな井戸のようだ。

　俺は、木の板でなく、湯をはったところを早く見てみたいなと思いながら、道具を片付け始めるのだった。

## 道半ば

2021年7月28日

　翌日。今日も空は抜けるように青く高く、森のみなさん向けの温泉は賑わっていた。今日は肉食獣は来ていない。

　しかし、野生の動物たちがこうも浸かりにくる、ということは泉質的な何かがあるんだろうか。

　今のところ揉め事も起きていないようだし、リディも何も言わないので悪影響があるわけではないみたいだから特に何か対処しようとは思わないが。いずれ俺たちが浸かるようになったら分かるか。

「今日は昨日と同じ感じで、男湯の方だな」

「わかった」

　ショベルを担いだヘレンに俺が言うと、彼女は大きく頷いた。

　今日これからやることは昨日までと全く一緒だ。しかし、地面を掘る範囲は狭く、作る浴槽は小さい。そして、最近やったことのある作業で習熟度合いが維持されたままである。

　となれば、当然のことながら……。

「結構あっという間に片付いたなぁ」

「そうだな」

　今度はヘレンに言われて、俺が頷いた。目の前には地面に埋まった浴槽がある。大きさは女子とは比べるべくもない。２～３人が入れるかな、くらいだ。なぜかうちには男があまり来ないからな。なぜなのか問いただせるならウォッチドッグに問いただしたいところだが。

　時間はまだ昼飯を食い終わってからさほど経っていない。日暮れまでにもう１つ同じものを作れと言われてもできそうだな。

「今日は一旦向こうを手伝おう」

「そうだな」

　肩をぐるぐる回しながら、俺とヘレンは皆がトンカンやっている湯殿に向かう。と言ってもほとんど真後ろだ。

　その湯殿にしても、もう床はだいたいはりおわっていて、後は壁と屋根の一部を残すのみという感じまで進んでいたのだが。

　俺は陣頭指揮を取っていたディアナに声をかける。

「もうこんなに進んでるのか、早いな」

「あら、エイゾウ。そうね。カレンの要領もいいし、手分けできてるからね」

　ディアナはちらりと浴槽の方を見てから、俺に答えた。カレンの手先の器用さは、彼女が示した鍛冶の腕前で俺も知っているし、このところ作業しているところを見ても大丈夫そうだった。

　北方から来る前に何をどれくらいやってきたのか、まだその全てを聞けてはいないが、うちの工房で作業していくにあたって何らか支障のあることはない、と思って良さそうだな。

「こっち手伝おうか？」

「う～ん、そうねぇ」

　ディアナはおとがいに指を当てて考える。下手に俺たちが入って作業が遅れてもよろしくはない。その判断は作業を指揮していたディアナに任せよう。

　少しして、ディアナは判断を下した。

「こっちは今のメンバーで大丈夫だと思うわ。それより、お湯を引いてくる樋か、ここまでの渡り廊下の準備をしてもらったほうがいいかも」

「なるほど、それはそうだな。わかった」

「よろしくね」

「おう、任された」

　俺は胸をドンと叩く。ディアナと俺は顔を見合わせて笑った。

　ヘレンのもとに戻った俺は、早速彼女に相談した。まずは樋をやるか、廊下をやるかだ。

「てことで、どうする？ 俺はどっちでもいいが」

「体動かせるほうがいいかなぁ」

　頭の後ろで手を組んだヘレンが言った。ふむ、それなら。

「廊下をやるか。ちょっと伐らないといけない木もあることだし」

「おっ、それなら任せとけ！」

　ヘレンは袖を捲くりあげたかと思うと、斧を取りにすっ飛んでいく。俺はそれを笑いながら見送る。ヘレンは“迅雷”の二つ名を体現するかのように、すごい早さで戻ってきた。

「で、どれを伐るんだ？」

「えーと、家があっちだから……」

　家のある方角を見た。なるべく木に被らないルートを取ったとしても、避けるのでなければ数本の木がルート上にある。それらは伐採して取り除き、ありがたく木材として再利用させてもらうのだ。

　俺はその伐採する木に近づいた。

「これと……これと……ここもか」

　どれを伐ればいいのか分かりやすいよう、ナイフでバツ印をつけていく。あんまり深くつけるとその部分が使いにくくなるが、浅いと今度は見えにくい。ただのマーキングだから、あまりチートも働かないのでやや慎重に行った。

「よっしゃ任せろ！」

　マーキングを終えると、ヘレンがそのうちの１本の前で斧を構え、勢いよく振りきる。前の世界のプロ野球選手もかくやというほどの見事なスイング。それが木に当たったところで「コーン」と大きな、しかし小気味よい音が森に響いた。

　斧が当たった木は一見すると何事も起きていない。だが、俺達は知っている。このあと何が起きるのか。

　はたして、思ったとおり木はズルズルと斧が当たったところからズレていき、やがてズズンと音をたてて倒れた。切り口は製材したかのように綺麗である。

「次はどれだ？」

　倒した獲物には興味がない、と言わんばかりに次の標的を探すヘレン。さすが歴戦の傭兵、と妙な感心をしながら、俺は「あれだな」と次の標的を指示するのだった。

## 切り株

2021年7月30日

　木を伐ったとして、大事なことがある。それは「切り株の始末」だ。いつもなら、木を伐った後はそのまま放置している。

　サーミャ曰く、

「根っこが生きてりゃ、また伸びてくるのもある」

　らしいので、森林環境の保全的な意味でもそのままにしているのだ。それもあってリュイサさんが「好きに伐っていい」と言っているんだろうけどな。

　次に同じところまで育つにはかなりの時間がかかるだろうが、それでも死ななければ次があるのだ。

　だがしかし、である。今回は渡り廊下を通す。となれば切り株があっては当然ながら邪魔になるのだ。

「よし、行くぞー」

「おう！ よい……せ……っとぉ！」

「クルルルルルルル」

　俺が声をかけ、ヘレンとクルルと一緒に切り株に結びつけた縄を引っ張る。

　俺とヘレンの筋力が他の家族より優れているほうだと言っても、どうしても重機のようなものの手助けが必要になるので、しばらくクルルの手も借りることにしたのだ。

　あっちの効率が多少落ちることにはなるが、向こうも力自慢の家族はたくさんいる。

　……というか、リディとカレン以外は大体力が強いからな。太い柱を立てたり、梁をかけたりといった作業は終えていて、あとは板くらいなものなので、効率が落ちると言ってもさほどではない、という俺とディアナとの判断である。

　一応、そっちの進捗がヤバくなったら教えてくれとは言ってある。

　切り株は周囲を含めて軽く掘りだし、太い根っこも切ってあるが、それでも巨体を支えていた根は

　長らく抵抗を続けていた切り株ではあったが、それでもいつまでも抵抗できるものではない。やがて、ズズッ、ズズッと地面から引き剥がされていく。

　そして、なかなか派手な音を立てて横向きに倒れた。根っこの太さや長さが、この木のこれまでを物語っていた。その後にはポッカリと大穴が空いている。

「すまんな」

　思わず俺は手を合わせた。実際に神様や“大地の竜”、それに樹木精霊に妖精族なんてものがいるこの世界ではあるが、この木にもこの木の歴史があったのだろう。それを思うと、なんとなくだがそうしたくなったのだ。

　それを見てなのか、ヘレンも手を合わせ、クルルも目を閉じて頭を下げる。俺がよしよし、とクルルの頭を撫でると、クルルは嬉しそうに「クルルルル」と小さく鳴いた。

　空いた穴には浴槽を埋めるために掘り出した土をあてた。温泉掘りの時に出た土も使えるので、多分埋めきれるはずだ。

　穴を埋めたら次に取り掛かる。またも３人の全力だ。

「ふぬぐぐぐぐぐぐぐ」

「うぉりゃああああああああ！」

「クルルルルルル！」

　力を合わせて、力いっぱい縄を引っ張る。ミチミチ、と縄が音を立て、切り株を引き起こしていく。そうやって２つ終えた頃には作業を終えるのにいい時間になっていた。

　いや、いい時間でなくても切り上げただろう。なぜなら、

「さすがに……限界だ」

「そうだな……」

「クルルゥ……」

　３人とも疲労困憊だったからだ。いや、クルルは俺たちに付き合ってるだけにも見える。普段重い荷物を運んでも平気だし。でもまぁ、マラソン的な力と短距離的な力では力の出しかたが違ってくるだろうし、その影響も多少はあるだろうな。

「よーし、帰るか……」

　俺はそう言って、皆にも作業の終了を伝える。皆から返ってくる了解の声を聞きながら、明日は筋肉痛で動けない、とかなってないと良いんだがと思いながら、腰をトントンと叩くのだった。

## 監修

2021年8月2日

「かなり助かってるわよ？」

　夕食のとき、カレンは慣れてきたか？ という話になった。まぁ、来て間もないのでしょっちゅうそういう話になるのは避けられまい。

　そこでディアナから返ってきたのがこの返事というわけだ。

「器用だし、何より“温泉”のことを知ってるから、どういうものを作ればいいか分かってるしね。カレンがいなかったら、エイゾウに聞かないといけないことがあったと思う」

「ああ、なるほど」

　そう言えば、浴槽を埋める時も、渡り廊下の作業中も特にディアナ達に呼び止められるようなことはなかった。気がつけば作業が進んでいて、床や壁、そして天井の面積がモリモリ増えていた。

　その功績はカレンに帰するところ大、というわけだ。そのカレンはディアナの評価が嬉しいのか、少し目がキラキラしている。

　俺はカップのお茶を一口飲むと、ディアナに向かって言った。

「じゃあ、もう完全にそっちに任せちゃおうかなぁ。分かんないとこはまずカレンに聞いてくれる方式のままでいいし」

「え、いいんですか？ 師匠の理想の体現でしょう？」

　そう言って、カレンが目を丸くした。俺は苦笑を返す。

「いや、体現てほどじゃない。他に北方っぽいのを知ってる人間がいないだけで」

「ううむ。しかし、今更ですが出しゃばりすぎていませんか？」

「うちは来てすぐでも関係なしだから気にしなくていい。ディアナ達に何か聞かれて迷ったら、遠慮なく俺に回してくれていいから」

　ここに来て本当に間もない人間にいきなり監修をぶん投げる、というのはなかなかにブラックな気もするがフォローはするし、もうそれなりに湯殿が出来てきている今、新たに確認しなければいけないようなことは少ないはずだ。

　それなら任せてしまって、こっちはこっちの作業に集中したほうがよい……と言うのは甘いだろうか。あとはちょっとの難関を乗り越えたほうが仲良くなりやすいのでは、ということもある。前の世界だと文化祭の準備で急に仲良くなることがあるような。

　まぁそれで仲良くなれるかは「人による」としか言えないので、これで逆にギクシャクしはじめるようなら、渡り廊下チームに組み込んで、ディアナたちがわからないところは俺が随時対応する形をとるようにしよう。

　そんな俺の思惑を知ってか知らずか、カレンは少し考え込んでいる。あまり無理強いするのもよろしくないな、パワハラっぽくなってしまうな、と思ったとき、

　カレンはグッと自分の胸の前で握りこぶしを作り、

「分かりました！ がんばります！」

　と気合いを入れた。どうやら乗り気にはなってくれたようだ。

「あんまり気負いすぎても良くないから、程々にな」

　俺は小さく苦笑し、残っている鹿肉の醤油ベース焼き肉（風）を口に運ぶ。俺もお気に入りだが、カレンがことのほか気に入ったようだ。作業で空腹だったこともあるのだろうが、うちで一番の健啖家のリケに負けず劣らずのペースでヒョイパクと口に運んでいた。

　そのカレンにはサーミャとディアナが狩りについての話をはじめ、今度の狩りには一度カレンもついていくという話が進んでいた。

　早速仲良し作戦の効果があった、と思って良いのだろうかこれは。狩りに行けば１日鍛冶の仕事を見る機会が減るわけだが、もう既に湯殿の建設という全く関係ないところをやってもらっているし、そこの監修を任せようというのだから、それこそ今更の話というものだろう。

　カレンのここでの暮らしが少しでも楽しいものになればそれでいいかと、何を狩ろうかワイワイ打ち合わせをする家族を見つつ、俺はもう１つ焼き肉を口に運ぶのだった。

## 脱衣所

2021年8月4日

　のんびりと、しかし、確実に湯殿と渡り廊下の建築は進んでいく。作業をはじめて１週間を迎える頃、湯殿は外観も出来てきていた。

　監修を任されたカレンが張り切ったのか、正面には和風……いや、北方風の

　いや、なかなか良いものだなと思って眺めていると、隣に来て屋根を見上げながらディアナが言った。

「湯船の周りはまだなんだけどね」

「じゃあ、脱衣所のあたりはもう出来たのか？」

「ええ」

　ディアナが胸を張って答える。他の家族も誇らしげにしている。それでは、ということで確認も兼ねて、脱衣所まで入れてもらうことになった。

　入り口は正面の時点で男女に分かれている。今回は広いほう、つまり、女風呂のほうに入っていく。今しか入れないからな。

　なんとなく悪いことをしているような気分になりながら、北方とこのあたりの文字で「女」と書かれた入り口を入り、すぐのところにある引き戸を開ける。戸には鳴子が取り付けてあって、それが派手に鳴り響いた。万一誰か入ってきたらこれで分かる、というわけだ。

　ここに戸があるのは排水池に動物たちが入っているのを鑑みて、湯殿には入って来ないようにするためである。向こうは向こうで折を見て拡張して入れる数をふやせないか検討しよう……。

　恐る恐る中に入った俺の目があるものを捉えた。立方体の箱が並んだ形をした棚がある。下段に小さい箱が、上段にはそれが大きくなった箱が並んでいた。

「おお、ちゃんと下足箱が別にある」

「ゲソクバコ……ですか？」

　俺が感心すると、リディが小首をかしげた。ここらだと裸になるときは全部まとめるのが普通だから馴染みがないか。うちでは俺も脱がないし。

「脱いだ靴を入れておくところだよ。脱いだ服を入れておくとことは別になってる」

「へぇ」

　前の世界では確か元は脱いだ草履だの下駄だのを言わば人質のように預かっておく意味があったとかなんとか聞いたことがある。真偽の程は定かではないが。

　下足箱、といえば木札の鍵が定番ではあるのだが、ここのには戸はなく開口したままだ。基本家族しか使わないしなぁ。

「さすが、お目が高いですね師匠」

「いやぁ、北方人的には気になるよなぁ」

　カレンに言われて頭をかきかき、ぐるりと目をやると脱衣所の隅にちょっと中途半端な大きさのベンチが２つほど設えられている。多分、あれは端材でリケあたりが作ったのだろう。端材だから大きさが中途半端なんだな。温泉で火照った身体を冷ますにはちょうど良さそうだ。

「良いじゃないか。男湯のほうも同じになってるんだろ？」

「ええ。大きさが違ってて左右対称なだけで同じですよ」

　俺が聞くと、リケが答えた。基本そこを俺１人で使うことになる。ちなみに、１つだけにして時間で男女を分けることをしなかったのは、男の客が来たときに面倒がないようにすることがまず１つある。

　他には広いところを贅沢に１人で使うのは俺の気が引けるのと、気分的なものでおっさんと共用は嫌だろう、ということでそうしたのだが、別にしてあるのはそれはそれでなんだか申し訳ない気になってくるな。

「自分で図を作っておいてなんだけど、出来上がってくると印象が違うなぁ」

　なんとなし、感慨深い気持ちになりながら、湯船の方の入り口に立つと突然景色が抜けた。

　まだ湯船のところまでの床（少し高くして排水できるようにする）と、壁が出来ていないから、森の景色が広がっていて、その中にぽつんと浴槽が鎮座している。これはこれで風流、と言えなくもないが……いや、流石に駄目だな。俺は苦笑しながら頭を振った。

「結構適当にぶん投げたのに、良く出来てる。良いと思うよ」

　俺が振り返ってそう言うと、湯殿を作っていた皆から歓声が上がる。

「それじゃあ、明日は休みにするか」

「いいのか？」

　サーミャが目を輝かせた。狩りに行くタイミングを見計らっていたのだろう。次のにはカレンも連れて行く約束をしていたから、待ち遠しかったに違いない。

「ああ」

　サーミャに俺が頷くと、案の定サーミャを含めた皆はそれじゃあ狩りに行くか、誰が何をして……という話をはじめる。

　今後はここがそういう話をする場になるのかな。そんなことを思いながら、俺達は湯殿を後にした。

## 休めない休日

2021年8月6日

「あれ？ 師匠と先輩は行かないんですか？」

「ん？ ああ、俺とリケはお留守番だよ」

　目を丸くしてカレンが言い、俺は頷いた。何回か誘われてはいるし、俺もリケも体力的には問題ないのだが、足手まといになるのはな、という事で遠慮しているのだ。俺は一度サーミャと２人で行ったことがあるけど、俺が弓の扱いに慣れていなくて危うく獲物を逃がすところだった。

　それでも前の世界で弓を扱ったことがない俺が、完全に狙いを外して明後日の方向に矢を飛ばしてしまうということもなかったから、ウォッチドッグの言う「最低限」の能力は貰えているのだろうと思う。

　とは言え、餅は餅屋だ。“黒の森”のプロたるサーミャに一切を任せ、後は希望者で行くのが良かろう、ということでこの体制なのである。

　ええ～、とかなんとか言っていたカレンだったが、皆に促されると弓を担いで出ていった。何かあったときのためにと、ハヤテも連れて行っている。

　今までなら連絡手段がなかったため、何かあっても俺たちは家でやきもきしながら待っているしかなかった。家の周りくらいなら平気だが、それ以上となると迷うリスクがあるし。

　今回はハヤテがいてくれるので、何かあれば彼女が名前の通り疾風の速さで飛んできてくれる。手紙がついていなくて彼女だけ戻ってきた場合は相当の緊急事態が発生した、ということになる。それが分かるだけでもかなりありがたい。

　前の世界で親が俺にポケベル（のちに携帯電話に換わったが）を持たせた気持ちが少し分かったような気がした。

「さてさて、俺達もちょっと仕事しますかね」

　俺は家の中に戻りながらぐいっと伸びをした。１週間……いや、３～４日もあれば納品物を揃えられるので、かなり余裕はあるが、予め用意しておいて損になるようなものでもない。

　時間が余ったらのんびり出かけるなり、カレンに鍛冶の手ほどき――と言っても見取り稽古とリケの指導になるが――なりすればいい。

　朝の拝礼は皆が狩りに出かける前に済ませてある。鍛冶場に入った俺は火床に火を入れた。

　火床に火が熾り、その熱を上げ、板金を加工するのに適した温度になった。ヤットコで板金を掴み、火床に入れて熱する。やがて適した温度になったら、金床において鎚で形を作っていく。

　コンコンと熱された鋼を鎚で叩く音が鍛冶場に響く。やがてそれはリケのものとあわせて合奏のようになっていった。

　いくつかナイフを仕上げた頃、リケが火床に入れた板金の様子を見ながら言った。

「そろそろ獲物を見つけた頃ですかね」

「運が良ければそうだろうな」

　時間は昼少し前。獲物が見つからなければ一旦昼飯にしようかと言っているだろうが、運が良ければすでに獲物を追っていてもおかしくない。今日は猪と鹿のどっちだろうな。

「まぁ、それが勢子をやらなきゃいけないカレンにとって、運のいいことかどうかは別だけど」

　獲物が早く見つかるということは、それだけ早く勢子の役目が回ってくるということでもある。獲物を射手が待ち構えているところに追い出す役目、ということはつまりそれだけ動く必要がある。

　最近はルーシーが猟犬ならぬ猟狼として優秀らしいのだが、まず勢子をして森の様子を知るのはうちの伝統だ……と、アンネの時にサーミャとディアナが言っていた。

　いつの間に伝統になったのかは知らない。サーミャはともかく、ディアナはこの森に来てそんなに経ってなくないかと思うのだが、あまり森に出ていない俺と違ってディアナのほうが詳しいのは確かだから黙っておいたが。

「カレンさん、大丈夫ですかね」

「ここまで来るくらいだし、このところ力仕事多かったけど、すぐへばったりしてる様子もなかったから平気だろ」

　カレンはお武家様の出である。うちには伯爵家ご令嬢で体力があるのと、帝国皇女で体力があるのがいる。それにカレン自身もここまで来る度胸もあるわけだし、なんとかなるだろうと俺は思っていた。

「もう……無理です……」

　そんな俺の考えは、床に転がったカレンという形で否定された。え、そんなに？

「今日は一段と長く追いましたからね」

　リディが静かにそう言った。エルフも意外と体力がある。元々森に暮らす種族なのだから当たり前と言われればそれまでだが。

　アンネが苦笑しながらカレンを抱きかかえる。

「私がはじめてやったときはあそこまで長くなかったけど、それでも完全にへばったからね」

　そう言えばアンネも床に転がってたな。ここで暮らし始める前だったかすぐだったか。もう随分と昔の話のように思える。

「森の動きは草原や町とは違うからな。慣れてなかったら仕方ない。アタイでも慣れるまではちょっとかかった」

　アンネを手助けしながら、ヘレンがそう言った。体力に自慢のあるヘレンでそれなら、恐らく並か少し上のカレンでは厳しかっただろう。ちょっとで慣れてしまうヘレンが化け物レベルとも言える。

　俺は各々の部屋に引っ込んでいく皆の背中に声をかける。

「夕飯の支度を進めとくから、皆は身体を綺麗にしといてくれな。湯は汲んできてあるから、自由に使ってくれ」

「はーい」と全員から（カレンはかなり弱々しかったが）答えが返ってきて、俺は台所へ向かった。さて、今日は疲労を回復できるようなメニューにしますかね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

以前お知らせしましたとおり、来週いっぱいは連載をお休みさせていただきます。

次回掲載は8/16（月）の予定となります。どうぞご了承のほどよろしくお願いいたします。

## 来るのが遅くなるやつ

2021年8月16日

　翌朝、カレンは身体のあちこちを揉んでいた。聞いた話ではコケたりはそんなにしていなかった、と言うから打ち身や擦り傷よりも筋肉痛だろう。筋肉痛って炎症だから揉まないほうが良いんだっけ？

　そういうわけなのかはわからないが、リディお手製の解熱の薬草を磨り潰したペースト（臭いはあまりよろしくない）を使った湿布を貼ってもらっていたので、すぐに治るだろう。若いみたいだし。俺に言わせれば、そもそも翌日に来てくれるのが若さの証だ。

　俺も少し若返っているので今はそれほどでもないが、この世界に来る前はなかなか来てくれなかったりしたものである。この世界でも年々来るのが遅くなるんだろうな……。そんなに体を動かすことがどれくらいあるのかはやや疑問だが。

「ま、今日のところはあまり無理しないようにな」

「はい。師匠」

　肩を落とすカレン。その肩をサーミャが軽く叩くとカレンが「うっ」と少し痛がり、サーミャがオロオロしてヘレンに、

「すぐ治るし、命に関わるようなもんじゃないから平気」

　と教えられたりしていた。サーミャは筋肉痛になったことがないのだそうだ。羨ましいような、そうでないような。

　カレンがそんな状態なのだが、一応我が家のルーティンとして昨日仕留めた獲物の回収と解体には付き合ってもらうことにした。もちろん、彼女に力仕事はさせずに、何をするのかを教えるため見ていてもらうだけであるが。

　いつものとおりにクルルとルーシーも含めてみんなで湖へ赴き、獲物――今回はとんでもなく大きな猪だった――を岸に引き上げたあと、木を伐って作った運搬台に載せてクルルが引っ張っていく。

　ちなみに今日は、ルーシーも少しだけ引っ張るのを手伝ってあげていた。クルルが引くロープの一部を咥えて、よいしょよいしょと歩く。どれくらい助けになっているかはわからないが、こういうのは気持ちの問題だ。俺の肩のＨＰは今日も順調に減ったが。

　そのお手伝いも長くは続かず、ルーシーはすぐにクルルの隣より少し前に並んで歩き始め、そのまま家までたどり着いた。もうかなり大きくなってきて、子狼から「子」をとってもいいんじゃないかなと思える体躯になってきたが、それでもまだまだクルルのお手伝いを十全に果たすには力が足りないのだ。

　ルーシー自身はあまりしょげたりせずに、ちょっとでも手伝えたことが満足なようで、家に着いてからクルルの前に“おすわり”をして尻尾をパタパタ振っていた。そして俺の肩のＨＰがまた減るわけである。なんかカレンの肩よりも俺の肩を心配すべきではないかと思えるが、それは言わぬが華というものであろう。

　家族みんな手慣れたもので、大きな猪はあっという間に肉の形になる。カレンはそれをキラキラした目で眺めて言った。

「皆さんナイフの扱いがお上手ですね」

「もうそれなりの回数やってるからねぇ」

　若干の苦笑をしつつ、そう答えたのはディアナだ。彼女はここに来た当初、どうやって肉にしているのかも知らなかったほどだ（それについては俺も大差ない）が、今はテキパキと解体をこなすようになった。

　そのうち、カレンもチャチャッとこなすようになるのだろうな。俺が彼女にそう言うと、

「頑張りますね！」

　と気合を入れていた。これから、それこそそれなりの回数こなすことになると思うし、鍛冶の腕を上げるとともに頑張ってほしいところである。

「さて、それじゃあ建築の続きをやりますか」

　俺が言うと、全員から了解の声が返ってきた。そして俺は、道具を持って行こうとするカレンに声をかける。

「カレンくん、君には重大な仕事を与える」

　そう言われたカレンは怪訝そうな顔をした。俺はエヘンと咳払いをして宣告した。

「君には今日一日、“ルーシーの遊び相手係”を命じる！ 筋肉痛が酷くならない程度でよろしくね！」

　ワンワンと尻尾を振って喜ぶルーシー、もう完全に顔に「それ、私がやりたい」と書いてあるディアナ。そんなことをして良いのかと若干オロオロするカレンをよそに、我が工房の家族は道具を持って湯殿建築へと向かっていった。

## 疾風

2021年8月18日

　黒い疾風が地を駆けていき、そして戻ってくる。

「わん！！」

　疾風は咥えていたものをカレンの前に置くと、きちんとおすわりをして尻尾をパタパタと振った。疾風とは言うまでもなくルーシーのことである。

　再びカレンが縄で作ったボールを筋肉痛にやや苦労しながらも放り投げる。ルーシーは放物線を描いて飛ぶボールの落下点を見極めて走っていき、地面に落ちる前にキャッチした。

「いつの間にか随分と成長してたんだなあ」

　俺は渡り廊下として敷く木の板を肩に担ぎながら、カレンとルーシーのやり取りを見て言った。いや、その体躯が大きくなっていることは分かっていた。普段は彼女なりに遠慮して抑えていたのであろう能力を、解き放てばどうなるのかを実感する瞬間が今になったのだ。

　同じく木の板を担いでいたヘレンが、またボールを投げてもらい全力で走るルーシーを見て言う。

「狩りのときに毎回連れてってるからなぁ。地面がガタガタなのにすげぇ速度で走る。山岳には連れてってないからわからないけど、森の中を含めた平地なら、とっくにアタイより速いはず」

「そうだったのか」

　ヘレンは頷いた。かなりの間合いでも一瞬で詰めてくる速度を誇る彼女だが、それよりも速いとなると疾風だと思った俺の感覚はおかしくないってことだな。

　作業を続けながらも様子を伺っていると、あの速さで何往復もしているのに、ルーシーはあまり疲れた様子もない。おそらくは魔物化していることが一番の要因だろうと思う。

　俺がルーシーの遊び相手に任命したカレンも「ただの狼にしてはやたらとスタミナがある」ことにはとっくに気がついているはずだが、何も聞いてこないということは、ここが“黒の森”であるからと自分を納得させているのがありそうだ。

　まぁ、それは誤解ではなく真実も含んでいるので、今のところルーシーがどうであるか、カレンに説明はしないが。

　しかし、ずっとボールの遠投というのも疲れるだろう。休み休みやっているので、ある程度維持できてはいるが、やはり徐々に到達距離は短くなっている。

　そうするとルーシーが戻ってくる時間も早くなり、ボールを投げる回数が増えるという循環が出来てしまっているようだ。あんまりやってると、身体への負担になってしまうだろう。

　俺はヘレンに断って、一時作業の手を止めた。材木置場にしているところから、半端の木材を拾い上げ、ナイフで加工する。生産のチートがきいてくれて、思った形に加工するのはすぐに出来た。

　出来上がったのはごく薄い木製の円盤である。俺はそれを持って、ボールを投げているカレンの元へ向かった。

　俺が行くと、カレンはちょうど休んでいるところで、傍らでルーシーが尻尾をパタパタ振っていた。俺は苦笑しながら声をかける。

「遊び相手を命じたけど、もっと休んで良いんだぞ」

「はいぃ。私も休みはしてるんですけど、ルーシーちゃんにキラキラした目でまだかまだかと見られるとですね……」

　俺は「それな」と言いかけるのを呑み込んだ。ルーシーが遊んで欲しいと待っているのに休むと、なんか悪いことをしているような気になってしまうのはよく分かる。

「とりあえず、これを使ってみてくれ」

　俺は手にした円盤をカレンに見せる。彼女は小首を傾げた。

「これは？」

「これはな……ルーシー」

　円盤を今度はルーシーに見せると、おすわりしていた彼女がスッと腰を上げ、「わん！」と吠えた。彼女の準備が出来たので、俺は円盤を胸に抱え込む感じで構え、手首のスナップも効かせて勢いよく前方へ投げる。

　手から離れた円盤はスーッと滑るように空中を飛んでいく。飛び方は優雅に見えるが、その速度はなかなかのものだ。それをルーシーがものすごい速度で追いかける。

　疾風と化したルーシーは円盤に追いつき、ジャンプして空中でキャッチした。距離にして４０メートルほどだろうか。その距離を再び疾風となってルーシーが戻ってくる。

「よしよし、えらいぞ」

　ルーシーが咥えた円盤を受け取りながら、頭をなでてやると、振っている尻尾の勢いが格段に増した。

「よし、次は待ってからだ」

「わん！」

　俺は再び円盤を投げ、すぐに「待て」とルーシーに命じる。分かるかどうか一瞬不安がよぎったが、ルーシーは実にお利口さんに、すぐに走り出せる体勢で続く俺の号令を待っている。

　円盤が２０メートルほどを過ぎたあたりで、俺は次の命令をした。

「行け！」

　ルーシーは一声も発さずに、疾風となる。円盤との距離がぐんぐんと近づいていき、やがて６０メートルほどだろうか、それくらいの距離で高度を落とし始めた円盤をキャッチすると、行ったときと同じような速度で戻ってくる。

「よーしよし。本当にお前はお利口さんだな」

「わんわん！」

　さっきと同じように頭を撫でてやると、さっきよりも更に勢いよくルーシーの尻尾が振られる。俺はずっとこれをやっていたい衝動を抑えて、カレンに言った。

「じゃ、続きはカレンに任せた」

「あ、はい。同じようにすればいいですか？」

「うん。休み休みでいいから」

　そして俺は作業に戻る。聞こえてくるカレンの「待て」「行け」の声に羨ましさを感じながら、日暮れまでそれは続くのだった。

## もう少し

2021年8月20日

　この森の魔力によるものか、はたまた若さゆえか、翌日にはカレンの筋肉痛はおさまったようである。

「今日からまた頑張りますよ！」

　とは本人の言だ。尻尾をブンブン振りながら言っていたので、かなり調子を取り戻したらしい。ちょくちょく様子をうかがったが、確かに普通に動けている。

　まさか魔物化しつつあるんじゃなかろうなと、念の為、作業の合間の休憩時間に、こっそりとリディに確認したところ、フルフルと首を横に振っていたのでそういうわけでもないらしい。

「そもそも人が魔物化することはめったに無いですよ」

　リディは静かに言った。この場合の「人」とは人間族だけでなく、リザードマンや獣人、ドワーフにエルフ、そして巨人族も含まれる。

「まあ、そのめったに無いが起きたのが魔族と言えなくもないんですが」

　魔族も大本をたどればエルフとほぼ同じであるらしい。エルフは生命の維持に魔力を必要とする。なので、魔力の薄い街や都では生活していくのに支障が出てしまうため、リディはこの“黒の森”の我が工房にいるのだ。

　そして、魔族とはつまりエルフと同じように魔力が必要だが、澱んだ魔力しか得られなかった者たちが順応していった結果である、とされている。肌が褐色であること以外の身体的特徴も個人差のあるもの以外はエルフと同じなのも、元は同じ種族だったことの証左と言えるかも知れない。

「逆に言えば、それくらいしかないってことか」

「そうですね」

　つまり、純粋な魔力から生まれるのでなければ、吸血鬼だのバンシー（こっちは精霊や妖精に近いだろうか）といった人型の魔物はこの世界では存在しない、ということになる。インストールにも該当するような知識は無いようだが、元々ないのかインストールに無いだけなのかは分からない。

「とにかく大事にならないなら良かったよ」

「それは大丈夫だと思います」

　専門家のお墨付きをもらったので、カレンの回復は若さだろうと俺は結論づけ、若さとは羨ましいものだよな、と頭から追いやった。

　湯殿と渡り廊下の建築は順調に進んでいった。湯殿は入浴するところの床を張り終えている。廊下は柱を建てるのは終わっているので、長さはあるが舗装と屋根の作業を繰り返すのみだ。

　２日もすれば、それぞれの作業は終わってしまった。

　渡り廊下はその全てが完成した。これで家から温泉まで雨にあんまり濡れずに移動できる。湯殿もほぼ完成している。「すのこ」のように湯の溜まらない床が地面より少し上にあった。床から下に落ちた湯は湯殿のそばに排水用の小さな池（森のみんなが浸かっているのとは別のやつ）に流れ込むようになっている。

　これで、体を洗ったり入浴した後に土で汚れず、湯が溜まって木を駄目にしてしまいにくいというわけだ。当然、定期的なメンテナンスは必要になると思うが、降雨も少なくどちらかと言えば乾燥気味なここならその回数も多くはないだろう……と思う。

　そして、それらがスポンと外から筒抜けになっていた。そう、まだ壁ができていないのだ。壁ができていない理由は一つである。

　ほとんどが出来あがってきた。もうこの時点で結構感慨深いのだが、まだ詰めの作業がある。俺は筒抜けの浴場の前で腰に手を当てていった。

「さて、いよいよ作業も大詰めだな。まずは湯を引っ張ってこないと」

「

　リケが言って、俺は顎に手をやる。

「そうだなぁ」

　樋を作って湯殿まで湯を引っ張り、それがそれぞれの浴槽に注ぎ込まれるようにする。浴槽から溢れる分はやはり排水用の池に流れるようにして、そこから更に森のみんなが浸かっている方へと回せばそれで使い始めることができるだろう。前の世界のテレビ番組で、無人島で長い長い水路を作っていたのをふと思い出した。

　それはともかく、樋を作って浴槽のところまで持ってくるのに壁があると邪魔になるので、まだ作ってないというわけだ。どっかの段階で樋だけつくる方式でも良かったかなとは今更ながらに思っているが、これはこれで問題はなかろう。

「それで進めよう。なにか問題が起これば再度検討だ」

「わかりました」

　リケが頷き、いつの間にか集まってきていた家族の方を振り返ると、彼女たちも頷いている。

　完成に向けて、俺達は今日のところは英気を養うべく、暮れていく森の中を家へと戻っていった。

　そうして家に戻ると、見たことのある姿があった。人型ではない。小さな竜の姿。カミロのところに行っているアラシだ。

　アラシが伝言板のところに佇んでいて、俺達に気がつくと小さく鳴いてカレンのところへ飛んでくる。その足には手紙が入っている筒がくくりつけられていた。

　このタイミングで連絡を寄越すということは、どこかに行っているので３週間後に、という話だったが帰還の予定が早まったりしたのだろうか。

　そう思いながら、俺は手紙を開いた。

## 流れる水

2021年8月23日

　小竜に運んでもらうにしては大きめの紙に書かれていたのは、だいたい次のような内容である。

　カミロは今回北方へ赴いたらしい。とは言うものの、北方は１～２週間でたどり着けるような“近場”ではない。例え馬車にサスペンションが組み込まれていたとしてもだ。

　となればそれでたどり着けるところに用事があったわけで、つまり先行して北方からは南下して来ている人がおり、途中で合流したのだ。

　そこで落ち合った相手とは、カタギリ家の人物であるらしい。ご当主様ではなかったみたいだが。かいつまんで言えば、カレンがここに来たのは計算違いであったそうなのだ。

　北方以外で、とは申しつけたものの、ギリギリ外（つまりはカタギリ家がすぐに手を出せる範囲）か、実際には北方の中で修行に出るだろうと思っていたら、いつの間にか南方の商人に伝手ができており、それを頼ってはるばる南方に流れてしまったため、カタギリ家は結構慌てたらしい。

　すぐに連れ戻そう、という話も出たらしい。今のところ、その案は不採用なようで、その旨読み上げるとカレンはホッとしていた。まぁ、そりゃあ当主が「出ていけ！ 一人前になるまで戻ってくるな！」と言ってしまった手前、「そこまで行くと思ってなかったから戻ってこい」となかなか言い出せないのはそれはそうである。

　カレンにしても「絶対に一人前になってギャフンと言わせる」のを目標にして出てきたし、その覚悟はしっかりとあるので、「ありゃあ、すまんかった」と言われて「そうですか。それでは帰りますー」とはいかないのもそうだろう。

　これでは意地の張り合いですなぁ、ワハハハで終わるのかと思いきや、さにあらず。どうやら落ち合った人物は先触れで、すぐに追ってご当主様がいらっしゃるらしい。

　カレンを連れ戻す、という話では無いそうなのだが、ではどういう話なのだろう。その詳しいところは帰ってから、つまり、当初言っていた３週間後、今から見れば１週間と少し後の話になるそうだ。

　そこで先触れの人から話を聞く手筈になっていると言うから、先にあったようにカレンをとにかく連れ戻すという話でなさそうなのは確かだ。結果的に戻ることになる可能性は十分にあるが。

「まとめると、この人から話を聞くまでは不明だが、ここまでくるのは想定外だったので一度話し合いをして今後を決めたい、ってことみたいだな」

　俺が言うと、カレンも皆も複雑そうな顔をした。そうしていないのはクルルとルーシー、それにハヤテとアラシのうちの娘さんたちだけである。

「先に手紙を寄越したのは、カレンが戻る可能性を考えて、だろうな。アンネのときは結果的には戻ってきたわけだけど、随分とバタバタしたし」

　カミロの書いた内容からすると、出先から早馬のようなものでカミロの店に届けて、そこからアラシ便で届けてくれたようである。早馬も安くはなかろうに、そういうところは気が利くんだよな……。

　場がシン、と静まり返る。お互い長い付き合いになると思っていた間柄だ。ある程度の余裕があるといっても１週間とちょい。何かをするにはちょっと短い時間だ。まだギリギリ温泉も完成していない。

　俺は静寂を破るように、しかし、あまり大きくない声で言った。

「温泉を完成させよう。１週間後には戻ることが決まったとしても、カレンには『南方で立派な温泉に入ったことがある』ってのを思い出にして欲しい。どうだろう？」

　皆から声は返ってこなかった。しかし、ハッキリとした頷きが返ってきた。明日から忙しくなるな、そう思いながら、俺はアラシを労い、家に入った。

## 月下の会議

2021年8月25日

　汚れた身体を綺麗にし、夕食を終えて「それでは明日また頑張ろう」と皆寝入った後。

　俺はそっとベッドから出て、そのままゆっくりと自室の扉を開ける。シン、と静まりかえった家。外から月光が差し込み、家の中をほんのりと明るくしているが、それがかえって静けさを強調していた。

　ゆっくりと、抜き足差し足忍び足で家の外への扉に近づいて、閂をゆっくりゆっくり外すと、やはりゆっくりと扉を開けて、外に出た。

　俺は目の前の光景を見て、小さく声を漏らす。

「おお」

　家の前の庭が、月明かりでちょっとしたステージのようになっていた。ここで叙情的な歌劇でもやればさぞかし盛り上がるだろう。

　流石にそのチートはもらってないし、今からするのはそんなロマンチックなものではないが。

　俺は庭をそっと横切って、月光があちこちにスポットライトを照らしている木々の間まで入っていき、木の幹の影に隠れる。

　そして待つことしばし。開け放っておいた扉から人影が出てきた。俺には一目でそれが待っていた人物であることが分かった。

　俺が木の幹から出て、手振りでその人物を呼び寄せると、気がついたのだろう、そろりそろりと近づいてきた。

　月光に照らされた端正な顔。そして高い上背。俺が待っていたのはアンネである。

「すまないな」

「ううん。いいのよ」

　俺の言葉に微笑むアンネ。月下美人、という単語が頭をよぎる。まぁ、あれは花の名前だが、花に例えても良かろうと思うくらいには綺麗だ。

　それを一旦頭から追いやって、俺とアンネは再び木の幹に隠れる。

「あの話、どう思う？」

「偶然、と言ってしまえばそれまでだけど、ちょっとタイミングが良すぎる気はするわね」

「だよな」

　カレンが北方を出奔してからうちに来てそろそろ２週間が過ぎる。何かを掴むには十分な時間だ。

　彼女の鍛冶の腕前はよかったから、鍛冶の経験があるというのは嘘ではないだろう。早く帰る可能性を知らなければ、北方人として温泉を優先させたがるのも辻褄は合っているように思う。

　しかし、うちに来た理由が鍛冶師としての経験を積むことではないとしたら？

　腕前が良かったのは、ナイフを作ることだけを練習していたからで、狩りについて行きたがったのも、それ以外を作らなくて済むようにするためだったとしたら？

「なるべくボロが出ないよう、鍛冶以外の作業をやりたがった可能性を捨てるのはよくないように思うわね。湯殿を作っていることは知らなかったでしょうけど。湯殿の件がなければ、ナイフをひたすら極める――ことにするつもりだったかも知れないわね」

　アンネは鍛冶場のほうをチラッと見た後、俺に向き直る。

「そういう策だったらと思って、乗っかったんでしょ？」

「実は鍛冶はどうでも良いんだとしたら、あれ以上教えてやる義理はないからなぁ」

　俺はため息をつく。本当に弟子入りしたくてうちに来たんだったら、この後は出来るところまで叩き込んでやる……のは出来ないので、カミロが驚くほどの数を生産し続けて、その一挙手一投足の全てを見逃さないようにと言ってやるべきだっただろう。

　だが、少しの疑念が生まれ、無実の確信が持てなかった。それで、湯殿の続きを行うことにしたのだ。

　もしカレンが弟子入りを望んでいて、この後待っているのが帰還だとしたら、かわいそうなことになる。

　その場合、俺は本当に申し訳ないことをした、ということだ。そのときの良心の呵責や、カレンからの恨みは甘んじて受け入れよう。

「そうね。その場合、何が目的だったか、だけど」

「『親方を失ったことは、北方にとっては大きな損失だと思います』、か」

「へえ。リケ、分かってるじゃない」

「前に言われたんだ。俺が作った剣の出来を見てね」

　アレはリケがここに来て間もない頃だったか。俺が言うと、アンネは頷いた。

「リケの言うとおりだと思う。『最近、南方から出来のいいナイフや剣が時折流れてくるようになったな。作ったのはどういう奴だ？ 何？ 北方人？ これを作ることができる奴が、我が北方から出ていったと言うのか！』」

　アンネは小声でだが、少し芝居がかった言い方で言った。即興にしてはなかなか堂に入っている。こういう状況でなければ拍手をしていたかも知れない。

「で、作ったのが本当に俺なのか、そして、俺が誰なのかを知りたがった、か」

「そうでしょうね」

「弟子入りを断れば良かったかな」

「それはどうかなぁ」

　アンネはおとがいに手を当てた。

「そうなれば別の手を打つだけでしょうね。

「そのつもりはない……のは知りようがないからな」

「それに、北方の場合は

「俺は一介の鍛冶屋だからなあ。お上には弱い」

「まだ言ってる」

「事実だぞ」

　俺は眉間に軽くしわを寄せた。場合によっては俺を拉致ることも出来るのだろうが、それは色々とリスクが高い。ならば、政治的解決を目論むのが次の手だろう。

　その第一歩として俺について調べるための、弟子入りだったのかも知れない。

　そうだとすると、俺から離れる時間が長かったのも好都合だったはずだ。俺から根掘り葉掘り聞くと怪しまれるようなことでも、他にいる家族に分散して聞けば根掘り葉掘り感はないし、家族に馴染もうとして俺のことを聞いているように見える。

　アンネに聞くと実際、「出身はどこと言っていたか」くらいのことを聞いていたそうである。この質問だけなら、

「同郷の人間なのによく知らないし、師匠は自分のことをなかなか話さないので、アンネさんに聞いてるんですよ」

　と言われたら「そういうもんか」で終わるだろう。

　それをやろうとしていたとして、そこに計算違いがあるとすれば、俺の素性は「ない」から話せないだけだ、と言うことだが。

「そもそも連れ戻すだけなら、わざわざ先触れを出したりせずに納品の時にでもカミロさんのところで待っていれば勝手に来るのよね。２週間後には」

「それはそうだな」

　俺は腕を組んだ。アンネは小さく溜息をつく。

「私も家族になるかも知れなかった人を疑うことはしたくないし、全部がたまたまならいいと思ってるけど……用心はしたほうがいいわね」

「相当手遅れかも知れんし、今更態度も変えられないけどな」

「ま、侯爵と伯爵が手放さないでしょ。そこで手放すなら帝国に引っ張ってるはずだし」

「そうだといいがな」

　俺は苦笑した。俺の肩を軽くアンネが叩く。

「とりあえず、明日からも俺の態度は変えない。ヤバそうな場合はあとでカミロやマリウスに相談する」

「そうしたほうがいいわね」

「ありがとう。助かったよ」

「どういたしまして」

　月光の下、ニッコリと微笑むアンネ。俺とアンネの２人は来たときと同じく、タイミングをずらしつつ、誰も起こさないよう静かに静かに、家に戻っていった。

## 樋

2021年8月27日

　翌朝、何事もなかったように朝の色々を終わらせた。

　カレンの様子も特に変わったところはない。もし潜り込むのが目的だったとして、もしバレていると気づいたとしても、

「フハハハハ！ そうだ！ 私はここに潜り込むのが目的だったのさ！」

「な、何ィ！？」

　とはならないだろうしなあ。どちらにせよ、あと１週間かそこらだ。その後にカレンの去就が決まる。その時にどういう判断をすればいいか、俺はしっかり考えておかないとな。

　それを一旦頭から追い出す。今日からは樋を作って源泉から湯を引っ張ってくる作業だ。家の外に並べた道具を手に手に、クルルとルーシー、それにハヤテを含めた俺たち家族は、温泉の方へと向かっていった。

　こんこんと湧き出している温泉。そっと皆で排水池を確認しに行くと、今日も森の温泉は千客万来で、肩に連続した衝撃を感じたりした。

「ここで工事するのは、なんかちょっと憚られるな」

「驚かせちゃうものねぇ」

　俺が言うと、肩に衝撃を与えていたディアナがおとがいに手を当てて言う。

　一時的にいなくなるだけでいずれ戻ってくるものとは思うが、驚かせてしまうのも本意ではない。

　幸い源泉から排水池までは距離があるし、湯殿からの排水側はそこの溝に接続すればいいようには思う。

　それでどうだろうと家族に提案してみると、問題ないのではないかということだったので、それで進めることにした。排水側は後からでも多少の融通がきくので、難しければ改修することにしよう。

「それじゃ、分かれて進めていこう」

『おー』

　こうして、湯殿の最終工程が始まった。

　作業は樋を作る組、それを支える支柱を立てていく組、湯殿の排水桝（のようなもの）から、排水溝を掘っていく組に分かれる。

　樋を作る組は俺とリケ。排水溝を掘る組がヘレンとディアナ。クルルを含めた他の皆が支柱を立てていく組だ。

　アンネを排水溝ではなく支柱に回したのは背の高さもあるが、カレンについて何か掴めそうなら、ということだ。

　俺とリケは材木の丸太から板を切り出していく。それなりにやってきた作業なので、丸太はあっという間に長い板に姿を変えていった。

　木の板は凹字型に組み合わせて樋にしていく。多少の水漏れは仕方ないとしても、なるべくそれが少なくなるように、基本的にはかみ合わせで組み立てる。

　その時、水を含むと少し膨らむので、その分も計算に入れる必要がある。組み立て段階であんまりギチギチで組んでしまうと膨張したときに不具合が出かねない。

　かと言って緩すぎると水がダダ漏れになるわけで、ちょうど良いところでやっていく必要がある……が、俺はチートで、リケは経験でそこを補って、手早く組み上げていく。

　樋は源泉から水をひく最初のところに、小さな板で湯殿へ行かないように分岐したものが１つ必要になるのでそれも作っておく。掃除やなんかのときはこれで水を止めてからするわけだ。

　作業の合間に支柱の方を見ると、なかなかの速度で進んでいた。湯殿はここから少し離れている（源泉に寄せすぎると家からは遠くなりすぎるため）ので、枝葉の無い木が規則正しく生えているようにも見える。

　幅についてはこちらで樋の底と同じ幅の木切れを渡してあるので、それに合わせてもらっている。

　いずれここに組み上げた樋が乗り、湯殿まで湯を運んでいってくれるわけだ。

　そして、その湯は浴槽に溜まり、今排水池で森の動物たちがそうしているように、俺たちを癒やしてくれるものになる。

　俺はそんな光景を並ぶ支柱の先に見ながら、樋を作る作業に戻った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

本日、日森よしの先生描き下ろしのコミカライズ版１０．５話が公開になっております。

こちらもどうぞお楽しみください。

https://comic-walker.com/contents/detail/KDCW\_AM19201711010000\_68/

## 湯殿の完成

2021年8月30日

　結局の所、特に何事もなく樋作りも、支柱も排水溝も作業は進んでいった。

　カレンが何か腹黒いものを抱えていたとしても、誰かに手出しできるような状態ではないしなぁ。

　今、何かあれば下手人が誰なのかは一目瞭然だし、カレンにはこの森から独力で抜けられるだけの能力はなさそうだ。

　これはヘレンと何度か剣を合わせて実感したことからのフィードバックでの判断なので、念入りに隠していたりすれば分からないが。

　こうして粛々と進んでいき、樋の設置に取り掛かっていく。樋から浴槽へ流れるお湯は、三叉に分岐している樋で男湯と女湯で分割するようにした。

　樋の１つは女湯、１つは男湯、残りの１つは直接排水溝へ向かうものだ。一応、湯元の方で湯殿へ湯が行かないルートにもできるが、こちらで女湯男湯双方を止め、排水溝ルートのみ残して、それぞれに湯が来ないようにできるようにした。

　もちろん、男湯ルートを塞いで、女湯と排水溝を残せば女湯のみに湯が行くようにすることもできるし、その逆もできる。湯元から湯殿間のメンテナンスが不要で、ちょっとお湯を止めたい場合にはこちらで出来たほうが良かろうとの判断である。

　最後に、湯殿を囲う壁を樋の設置と前後して開始した。外から覗き込めないよう、壁の前後の樋には蓋もつけ、壁との隙間ができないようにした。

　工夫すべき場所、といえばそれくらいなもので、あとは壁を作っていくだけだ。壁は横木の桟に千鳥に木の板を打ち付けていく。横木の表、裏、表、裏の順で、それぞれの端が重なるように。

　こうすればある程度の通気性を確保しつつ、外から見えないようにできる。まぁ、壁は浴槽や洗い場から離して設置してあるので、よほど近づかなければ見えないのだが。

　屋根から壁の上端までは結構空けてあって、そこからも湯気が逃げるようにしてある。雨の日でも入浴は可能だが、あまりに強い日は吹き込んでくるかも知れない。そんなときはそもそも渡り廊下を行く間に雨で濡れてしまうだろうが。

　そうして、明日には納品用の品を作り始めないといけなくなる頃。つまり、カミロのところへカレンを連れていくまで、あと３～４日と迫った頃、俺は大声で言った。

「よーし、それじゃあやるぞー」

　少し離れたところにいるから「おー」と声が返ってくる。俺がいるのは湯元のところ、湯殿と排水側の切替部分。湯殿の切替部分で女湯と男湯に湯が流れるようにしてあるのは何度も確認した。

　つまり、ここで今は排水側になっており、音を立てて排水側へ流れている湯を湯殿側へ切り替えて、いよいよ湯殿に湯を回していくのだ。

「よいせ」

　俺は湯殿側にささっている止水栓の板を引っこ抜き、排水側へさしなおす。すると、勢いよく樋を湯が走り始めた。

「おー、来た来た！」

　サーミャがはしゃいで、他のみんなもワッと拍手した。ルーシーも「すっかり重くなってきた」と嬉しそうにボヤくディアナに抱っこされ、樋の様子を見て尻尾を勢いよく振っている。

　湯はみんなのところまであっという間に到達した。それをみんな走って追いかけると、程なく湯殿にたどりつく。そこには壁だ。みんなは回り込んで湯殿に飛び込んでいき、やがて、中からやんやと騒ぐ声が聞こえてきた。流れる音もしているから、無事に浴槽へと湯が入り始めたのだろう。

　俺はと言うと、そんなみんなを見守りつつ、樋から大幅に湯が漏れ出していないかを確認しながら、湯殿へ向かう。浴槽に湯が入る瞬間を見たかった気もするが、なに、今後掃除のときなんかにでも見られるだろう。

　湯元から湯殿の間の樋は、ところどころでじんわりと水が出ているようだが、どれもいずれ湯で水分を含み膨らめば止まりそうだった。点検は必要だろうが、当面は心配なさそうである。

　俺はみんなの後を追って女湯に入った。これで俺が女湯に入るのは最後になるだろう。次からは絶対的な不可侵領域だ。

「おお、なかなかじゃないか」

　源泉の湯量が多いので、全部はこちらに回していない。しかし、それでも樋からはかなりの量の湯が音を立てて浴槽に流れ込んでいる。

　浴槽に湯が貯まりきるには今しばらく時間が必要だろうが、ここらの後片付けなんかをしてもう一汗かいたあとには十分入れそうである。

「このあと浸かるのが楽しみですね！」

　そう真っ先に言ったのはカレンである。彼女もこの２週間近く、慣れないであろう作業を一生懸命にこなしていたように思う。

　疑いが晴れているわけではないが、その部分については純粋に労うべきだろう。そう思い、俺は彼女に笑顔で、

「そうだな。北方人としては待ち遠しいよなぁ。よく頑張ったな」

　と、言うのだった。

## 入浴

2021年9月1日

　完成した湯殿は早速今日から使いはじめることになった。完成したけど使わないと言う話はないしな。

　まず先に使った道具をすべて片付けた。もう少ししたら日が落ちてきそうなので、バタバタと急ぎ足なのは仕方がない。一応魔法の明かりも用意はできるし、今日は晴れていて月明かりも十分だと思うが、日が完全に沈んでからの入浴はあまり考えていないのだ。

　井戸水で道具を洗ってから水気を切ったあと、鍛冶場に並べた。そろそろメンテナンスも必要そうだし。

「整理整頓と倉庫にしまうのはまた今度、だな」

「そうね」

　俺が言うと、ディアナが頷いた。雑然と接客スペースに道具が並んでいて、妙な生活感を出している。客が来たら少し困るが、そのときはみんなで物置にでも放り込んでしまおう。

　片付けが済んだら、みんなで渡り廊下を歩く。期待からか、みんなの足取りは軽い。それは俺も変わらない。クルルとルーシー、ハヤテは迷ったのだが、「来るか？」と聞いてみると、３人揃って小屋の方へ向かったのでディアナとも話して連れて行かないことにした。明日の朝にキレイにしてやらないといけないな。

　念の為、魔法の明かりを男湯と女湯に１つずつ用意した。男湯はもちろん俺がつけられる。女湯の方も、リディが「特に問題ないですよ」と言っていたので、リディに任せることにした。

「それじゃあ」

「おう」

　サーミャが片手を上げて女湯に引っ込む。俺も手を上げて応じた。前の世界の歌みたいに上がった後に待っていると言うことはない。基本的には順次帰宅……と言うにも距離が短いが、まぁとにかく家に戻るのだ。

　ただし、念には念をという事でリケとリディ、そしてカレンは、サーミャ、ディアナ、ヘレン、アンネの誰かと一緒に帰ってもらう。カレンについてはお目付けも込みなので、おそらくアンネがつくことになるはずである。

　ガラリと戸を開けると、規模は小さいが女湯と同じように脱いだものを入れておく棚と、下足箱代わりの棚が備え付けてある。俺は靴（ブーツ）を脱いで下足箱に放り込むと、テキパキと服も脱ぎ、軽く汚れをはたき落としてから畳んで棚に放り込んだ。

　前の世界で時折スーパー銭湯に行っていたことを思い出す。サウナの「ととのう」感じは結局分からずじまいだったな……。冷たい井戸水と温泉があるので、いずれこちらの世界で「ととのう」ことができないか試してみる価値はあるかも知れない。

　浴場に入ると、控えめの湯けむりが出迎えてくれた。風の通りが良いことと、温泉の温度があまり高くなく、周囲の気温もそこまで低くはなっていないのが理由だろう。

　浴槽には音を立てて湯が流れ込み、溢れている。ここに辿り着くまでに女湯にも湯が回っているはずなのだが、それでも結構な湯量だ。

　湯を桶に汲んで、頭からひっかぶる。いつもの湖の冷たい水とは違う、温かい湯が身体を流れていく感覚。こっちに来て半年かそこら、湯を沸かしてもそれで体を拭くくらいなもので、贅沢にぬるま湯にして被るなんてことはしてこなかった。

　ザバッと再び桶に湯を満たしてかぶる。久しぶりの感覚に、そうそう、こんなだったと感慨深くなった。欲を言えばシャワーが欲しいような気もする。

　確か前の世界でも古代ギリシャだか古代ローマくらいには牛の膀胱か何かを使ったシャワーヘッドがあったらしいし、この世界で似たようなものを取り入れるのは問題ないようには思うので、ちょっと考えておこう。

　いつもは沸かした湯を含ませて身体を拭いている布を使って身体を洗っていく。少しずつ冷めていく湯を少しずつ使うのではなく、温かい湯をそのままザブザブと使えるのはありがたい。

　数度身体を流しても落ちきらなかった汚れは、これで綺麗になった。石鹸を使ってないので多分そんなことはないのだが、いつもより綺麗になったように思えるのは致し方のないことだろう。

　ゆっくりと身体を浴槽に沈める。思わず「あぁ～」と声が出てしまうのも致し方のないことだ。なんせ中身は４０のオッさんなのだし。

　半年ぶりの湯はじんわりと、身体を溶かすかのように染み渡る。高い濃度の魔力が含有されていることと関係あるだろうか。体中のコリがほぐれていく気がする。

　前の世界にあったら、整骨院で「岩のよう」と評された肩を持つ俺が週３で通っていたことは間違いない。

　見上げると、暮れてゆく森の空が広がっていく。青かった空は一部をオレンジに侵食され、わずかばかり木々の緑に縁取られている。

「思ったよりいい眺めじゃないか」

　俺がそうひとりごちたとき、

「もうちょっと綺麗にしないと浸かっちゃ駄目ですよ！」

　そんな声が女湯の方から聞こえてきた。キャッキャとはしゃいでいるのは先程から聞こえていたのだ。なんせ他に人のあんまりいない森の中。男湯と女湯の間の壁は覗いたりできないように高さがあるし、足場になるようなものも近くにないが、上は空いていて声は素通しである。

　声の主はどうやらカレンのようだった。その後少しだけ聞こえてきた不平の声から察するに、サーミャが湯をかぶるのもそこそこに浴槽に突入しようとしたのだろう。北方人的なマナーとして看過できなかったことは容易に想像がつく。

　基本他に入る人もいないので、あんまり気にしなくてもとは思うのだが、それはそれとして基本的なところを教えていてくれるのは、たとえ誰であろうと助かる。

　というか、先に俺が教えておくべきだったような気がしないでもない。

「まぁ、良いか」

　不満が飛んできたら考えておくが、今はとりあえずこの気持ちよさを堪能しよう。全ての悩みを湯に溶かすべく、俺は浴槽に深く身を沈めた。

## 悩みのタネ

2021年9月3日

　疲れを湯に溶かしながら、今後のことを考える。カレンの真意は納品、というかおそらく彼女の家族が迎えに来た時に直接切り出すのもありかも知れない。

　それですんなり教えてくれるかどうかは怪しいところだが、出方で真意の一部でもわかれば御の字だ。

　アンネがどう思っているかはわからないが、俺は真意を直接問いただすのもありかなと思っている。すっとぼけるなら、それはそれで“そういうこと”なのだろう、と納得できるし。

「悩み事も溶けて流れていってくれればいいんだがな」

　俺は隣に聞こえないような大きさで愚痴る。その愚痴は、流れる湯の音に紛れて流れていった。

　その日の夕食の時である。当然の話ではあるが、温泉の話題が出た。

「アタシは温泉にまだ慣れないかなぁ……。なんか変な感じがする」

「サーミャは水に浸かるのも慣れないって言ってたものね」

　サーミャの言葉に、リケがフフっと笑う。この２人はディアナが来る少し前くらいにも時々２人で湖に行って身体を綺麗にしていたが、どうにもサーミャが慣れなかったらしく、最近はその回数も減っていた。

　かなりドロドロに汚れた場合のみ、女性陣全員で連れだって湖へ行っていたのだが、今後温泉でその回数が増えれば、虎も入るくらいなのだし、いずれ気持ちよさがわかるだろう……多分。

　それとは対象的に、

「あれだけの温泉はなかなかないですね！」

　と言ったのはカレンだ。うんうんと頷いているのはアンネである。

　ここは別に謀略とは関係のないところだからな。意見に対して素直に同意しているだけだろう。アンネは自国の温泉に行ったことがあるとか言ってたので、そのときと比べているようである。

　ヘレンがのんびりと口の中の肉を呑み込んでから言った。

「毎日湯に浸かる貴族がいるとは聞いたことあるけど、納得はできるなぁ」

「まぁ、ほんのごく一部だけどね」

　引き取ったのはディアナである。ディアナはカップを干してから続ける。

「毎日身体を浸けるのに十分なお湯を、浸かるのに丁度いい温度で用意するなんて、普通は『バカげてる』の一言で終わっちゃうわよ」

「アタイたちのところで言い出したら『正気か？』って言われるなぁ」

「でしょ？」

　浸かるために貴重な燃料まで使って湯を沸かす、というのはまだまだこの世界では一般的でない。場所によっては水が豊富に手に入るわけでもないしなぁ。

　ここみたいに燃料になる木が豊富にあって、ほど近いところにいくら汲んでも大丈夫そうな水場があってさえ、風呂を作るところまでは踏み切れなかった。

　今回はその貴重な燃料や水資源を直接消費することのない温泉を確保できたから作っただけで。

「でも、あれのおかげでスッキリした気分になった気がしますね」

「魔力か何かが影響してるのかしらね」

「はっきりとは断言できませんが、そうかも知れません」

　リディとアンネが会話を交わす。アンネが一瞬カレンの方を見たので、アンネの質問にはカマかけの意味もあったのかも知れない。

「ああ、そう言えば、前の狩りから日にちがあいたから、明日は狩りに行くならそれでもいいぞ」

「えっ！？」

　俺の言葉に、サーミャが喜び半分、驚き半分で目を丸くした。

「あ、でも、納品はいいのかよ？」

　すぐにしょんぼりした顔になるサーミャ。俺は笑って言った。

「前のときにある程度作ったし、今日の作業を高級モデルメインにして、明日明後日で量産すれば間に合う」

　まぁ、間に合うもなにも、納品物の数はきっちり決まっているわけではなく、「カミロのところへ持っていった分だけ買い取る」という契約なので、「作れるだけ作って持っていけばそれでOK」なのだ。

　普段はその売上とカミロから買う生活用品の代金を相殺しても、こちらに収入があるくらいの量を持っていっている。もし売上が足りなければ、差額を支払うだけだ。

　いつも生活用品は「予定する消費量より少し多めの量」でお願いしていて、備蓄としては１ヶ月か２ヶ月くらいはもつだけの量があるし、仮に入手できる量が１回減ったところで問題ない。備蓄のために倉庫を建てたのだしな。

「大丈夫だよな？」

「ええ。大丈夫だと思います。」

　リケはしっかり頷いてくれた。それで、まだ少し迷っていたサーミャも、

「それなら行こうかな」

　と、あっさり行く方に傾く。「みんなも行っていいんだぞ」と俺が言うと、「私も」「じゃあアタイも」とみんな一緒に狩りの方へ行くことを表明する。

　そして、その中にはカレンも含まれていた。ちらっと視線を交わす俺とアンネ。まだもう少し、俺の悩みのタネは消えてくれそうになかった。

## 作業の合間

2021年9月6日

　朝の日課を終えて、家族の皆を見送った。いつも通り、と言えばいつも通りの朝だ。鍛冶場に火を入れると、ジワジワと温度が上がっていく。俺はこの時間が結構好きだ。温度の上昇とともに、やる気が漲ってくる。

　しかし、今日は少しだけ違った。ゆっくりと赤さを増していく火床と炉を眺めながら、ぼんやりと物思いにふける。

　サーミャは嘘を見破れる。しかし、それは匂いによるものなので、「暴こう」と意識していないとわかりにくいし、言っていることが「嘘ではない」場合には見破る（使うのは視覚でなく嗅覚だが）のは難しいのだそうだ。

　つまり、カレンが話したこと、それが大筋では嘘ではなかった場合にはバレにくい、ということだ。

　彼女が語ったことをかいつまめば、「地元を追い出され、いっぱしの鍛冶師になるまでは戻ってくるな、と言われたのでうちに弟子入りしに来た」である。

　これは「任務として地元を追い出され、いっぱしの鍛冶師になるという名目で、しばらく弟子入りしろ」という話でも、大筋は嘘ではないことになる。語った内容から言えば本当でもないが。

　今からでも問い詰めることはできるわけだが、その場合、最終的な意図をはぐらかされる可能性もあるわけで――。

「……かた。親方！」

「おっと」

　リケに呼びかけられ、意識が引き戻される。見れば火床も炉も十分に熱されていた。

「すまんすまん、それじゃあ、はじめようか」

「はい！」

　一瞬怪訝そうな顔をしたが、リケは元気に返事をしてくれた。さて、今日の仕事を頑張らなきゃな。

　昼飯の時間より少し前まではナイフを作っていく。板金を火床で熱し、適温で叩きつつ魔力をこめて形を作り、焼入れと焼戻しをしてから研ぐ。

　特注モデルの場合ならともかく、今回は高級モデル、それも変わった素材ではなく扱い慣れた鋼だ。作業はスムーズに進んでいく。

　正直、目をつぶっていてすらできるのではと思うが、さすがにそこまで舐めた真似はできない。一つ一つの製品の出来については、俺が責任をもってやらなければいけないのだ。

　剣は型に鋼を流して冷えるのを待つ必要があるので、みんなが作り置きしておいてくれた型にどんどん溶けた鋼を流し込んでいく。型に流すのも俺がやるときには容器の傾け具合だのがチートでわかるので、それに従ってやっていく。

「うーん」

　一通り流し終え、昼飯にしようかというタイミングで手伝っていたリケが首をかしげる。何か手違いでも起こしただろうか。ちょっと今日は気もそぞろすぎるな、いかんいかんと思っていると、リケが言った。

「いえ、ちょっと不思議に思いまして」

「不思議？」

　今度は俺が首をかしげる番だった。リケが頷く。

「カレンさんはなんであっちに行ったんでしょうねぇ」

「ああ……」

　まぁ、疑問に思うわな。サーミャは分からんが、ディアナあたりも薄々思っていそうな気はする。

「とりあえず、それは昼飯を食いながらにしよう」

「え？ あ、はい、分かりました」

　俺は火床と炉の火を一旦落とす。火床の方は送風を止めるだけだが。そうしてから、２人で家の方に戻った。

「密偵……ですか？」

　スープを呑み込んだリケが言った。俺はパンを頬張りながら頷く。

「まぁ、可能性としてありえるという話だがな」

　俺はそう前置きして、先日アンネと話したことをリケにも説明した。

　姉妹弟子だからということもあってか、リケはなにかとカレンを気にかけていたので、もう少しショックを受けるかと思ったが、

「なるほど」

　意外と反応はあっさりしていた。いつもの、ともすれば可愛らしいとあらわせる表情はさほど曇っていない。

「驚かないんだな」

「ああいえ、驚いてますよ。ただ……」

　リケの顔に一瞬の逡巡が走る。しかし、それは外で風の音がするのと同時に消えていた。

「なんと言えばいいんでしょう、違和感があったんですよね」

「違和感？」

「ええ。腕前は確かでした。そこらの鍛冶師と遜色ないくらいに」

「そうだな」

　それは俺も認めるところだ。少なくともあのナイフの出来は、外に出して恥ずかしいものではない。改善の余地が多々あるのは確かでもあったが。

「逆にそれがおかしいなと思ったんですよ」

「え？」

「彼女、もしかして――」

　リケは匙を置き、まっすぐに俺を見た。

「

　俺は自分が目を見開くのを自覚した。

「それは、つまり、『うちであまり鍛冶仕事をやりたがらないのは実力がないのがバレるから』ではなく、『もっと実力があることがバレる機会を減らしている』と？」

「ええ」

　リケは力強く頷いた。

「よく考えてみてください。それなり以上の品質のものが作れる鍛冶屋に素人を向かわせても、『見たし、貰ったけど確かに凄かったから多分あの人がそう』で終わってしまうのでは？」

「それは……そうだな……」

　なんで気が付かなかったのだろう、と思うくらいシンプルだ。特注モデルを彼女に渡した。凄いものだということは使えば誰にでもわかるだろうが、その出来栄えを評することが例えば街の主婦に分かるかといえば分からないだろう。

　前の世界で言えばゾリンゲンと堺や関の包丁を比べて、どれも良く切れることは誰でも分かるが、どこの製品なのか分かる人間はそんなにいない、というのと同じだ。

　俺たちの疑念がただの疑念でない場合、その「どこの製品なのか」を知る必要がカレンにはあるわけで、それにはある程度以上に目利きができなくてはいけない。つまり、それなり以上の経験がないと厳しい。

　となれば、カレンの本当の鍛冶の腕前は……。

「親方」

　再び考え込んだ俺に、リケが心配そうに声をかけた。

「親方は、もし北方に帰らないかと言われたら、帰りますか？」

　じっと見つめてくるリケ。俺はすぐに首を横に振った。

「いや。俺はここが終の棲家だと思ってるよ。北方に帰る気はさらさらないね」

　努めて明るく俺は言った。北方に行ったところで誰がいるわけでもない。俺が守りたいのはここでの“いつも”であって、それ以外ではないのだ。

　大きくため息を漏らしたリケの頭を、久しぶりに俺はガシガシと撫でるのだった。

## お嬢様は泥遊びがお好き

2021年9月8日

　昼飯を食った後は、２人で剣を作るのに集中した。

　型に鋼を流し、冷えて固まるまで待ち、型から外したらそれを熱して形を整え（そして魔力をこめ）、焼入れ、焼戻し、刃付けとこなしていく。

　慣れた２人の作業なので、作業はスムーズに進んでいく。途中で型が足りなくなるかと思ったくらいだ。

　やがて、結構な数の剣が鍛冶場の片隅に積み上げられた。ナイフは木箱に入れてある。当然ながら個包装はしていないのだが、鞘には入れてあるので刃が傷んだりすることはない。

「数としちゃ、こんなもんかなぁ」

「十分だと思いますよ」

　鍛冶場の中はまだ熱気が充満している。俺とリケは汗を流しながら、今日の“戦利品”を眺めた。一昨日までと大きく違うのは、この後、風呂に入って汗を流せることだな。

「普通のは明日から量産するわけだし、これは余裕で間に合いそうだな」

「ですね。まぁ、こんな速度で量産できるのがおかしいと言えばおかしいんですけどね」

「それはそうだ」

　普通なら３週間をまるまる使うような量である。ここに来はじめの頃なら俺も３週間かけていたかも知れない。

　だが、ここに来てしばらく、色んなものを作ってきた。中には一筋縄でいかないものもあった。未だにチートを頼りにしているのは変わらないのだが、少しずつそれが馴染んできたような感覚もある。

　鍛冶屋としてのんびり暮らしていくという目的だけなら、今くらいでゆるゆるとやっていくのも悪くないんだろうな。まぁ、せっかく貰ったチートなのだ、どこまで何ができるのかは知っておきたいので、もう少し頑張っていこうとは思っているが。

　少し早めだが今日はあがりにしてしまい、火を落として後片付けを済ませていると、ドヤドヤと外から声が聞こえてきた。どうやら狩りに出ていたみんなが戻ってきたらしい。

　俺とリケは表に出て出迎えることにした。そして、そこで俺たちが見たものは。

「うわぁ、ドロッドロじゃないか」

　ヌタ場でドロ浴びを満喫した猪でもここまでにはなるまいと言うほどに、頭の天辺から足の先まで泥に塗れた家族の姿だった。

「今日は猪を追いかけてたんだけど、途中にぬかるみになってるところがあってさぁ」

　手足に生えている毛に泥をこびりつかせたサーミャが鼻の頭に皺を寄せて言った。

「よりによってそこで倒れたもんで、みんなで仕留めようとしたら暴れる暴れる」

　言葉を引き継いだのはヘレンだ。彼女もあちこちに泥をまとわりつかせていた。それでも他の家族よりも泥の量が少ないのは“迅雷”の面目躍如……でいいのだろうか、この場合。

「やっと仕留めたと思ったら、クルルとルーシーがはしゃぎまわってしまって……」

「ああ」

　リディが続き、俺はため息を漏らした。リディもその綺麗な髪にまで泥がついていた。クルルとルーシーから見れば、みんなで泥遊びをしているように見えたのかも知れない。さぞかし喜んで泥の中をはしゃぎまわったことだろう。容易に想像がつく。

　当の娘さんたちはよほど楽しかったと見えて、今もご機嫌にあたりを走り回っている。

「これでも湖に沈めたときに少しは落としてきたんだけど、もう早いこと家に帰って温泉に入ったほうが良いんじゃないかって」

　そう言ったのは、娘たちの様子を微笑ましさ半分、困り顔半分で見ているディアナである。せっかく出来た設備だから有効活用するのは良いことだと思う。

　しかし、落としてきてこれ、ということは落とす前はもっと酷かったってことだ。いつになく皆が疲れ切った顔（それもアンネなんかは泥でわかりにくいが）をしているのもむべなるかな、である。

「俺とリケも今日の分は終えたとこだし、このまま温泉に浸かりに行こう。家には泥をあげないようにな。靴は温泉に入る前に井戸水で綺麗に流しておくこと」

　俺がそう言うと、ハキハキとは決して言えない返事が、まばらに帰ってくるのだった。

## ようやくの

2021年9月13日

　温泉が早速の役立ちっぷりを発揮して翌日。今日の午前中は獲物の回収、そして午後からは量産品を生産する予定だ。

　水汲みや身支度を終えて、朝飯を食う。

「そういえば、ここの朝ご飯って北方風じゃないんですねぇ」

　のんびりとした声でカレンが言った。すわ情報収集かと元々あった疑念が頭をもたげるが、この程度知ったところで何になるわけでもあるまい。

「味噌も醤油も手に入ったけど、米がまだでな」

「いずれ手に入ったら、北方風に？」

「魚は干物か、この森のものでいいから、たまにはそれも良いかもな」

　俺は味噌汁ならぬスープを口に運んで言った。塩漬けの肉の塩味と干し野菜の旨みがある。ここにそのまま味噌を入れてしまうと塩が強すぎるのでそうはしないが、肉を抜いて味噌を入れてもいいかも知れない。

　出来れば昆布と鰹節も欲しいところなのだが、前の世界では初期の味噌汁は出汁もなにもなく味噌を湯に溶いて実を入れたものであったと聞くし、この世界でも似たようなものがあるみたいなので、いずれ米と一緒に食したいところだな。

「いいですねぇ。食べてみたかったです」

　カレンはすっかり郷里に戻されるものとして話している。カミロの手紙ではすぐに戻されるような話ではなかったが、彼女としては戻される可能性が高いと見ている、ということだろう。

　……それが本当は計画のうちなのかどうかはともかくとして。

「帰らないって話になったら食えるだろ。そもそも帰る話じゃあないってことらしいんだし」

　いち早く朝飯を平らげたサーミャがそう言った。リザードマンは獣人に近いからなのか、それとも一緒に狩りに行った仲だからなのか、このところサーミャはカレンに気安い。

　今後の展開次第ではサーミャにも悲しい思いをさせかねないのだが、疑念をサーミャに伝えることはなんとなく憚られた。

　アンネやリケには伝えたのに、我ながら不思議というか中途半端だなと思うのだが、疑念が本当だったとして、カレンについて何も知らずただの思い出として記憶しておいてくれる家族がいて欲しかったのかも知れない。

　俺はサーミャの言葉に「そうね」と笑うカレンを複雑な気持ちで見るしかなかった。

　朝飯が終わって軽く片付けをしたら、神棚に拝礼をする。北方出身のカレンのそれは他の家族に負けず劣らず堂に入っている。

　こうして１日の作業の無事を祈願したあと、家族全員で獲物を回収に向かった。

　獲物の回収はスムーズに済んだ。いつもと少し違ったのは、獲物がやたらデカかったことだ。

「こんなデカブツ追い回してたら、そりゃあ泥だらけにもなるな」

　湖に沈んだ図体を見た時、俺は思わずそう呟いたものだ。サーミャ曰くはたまにこういうやたらとデカいのが現れるそうで、これは魔力の影響も多少あるだろうとリディが補足していた。

　デカいだけでやることはいつもと変わらない。木に吊るして皮を剥ぎ、肉に切り分けていく。いつもよりかなり多くの肉になって、今後の家族の胃袋を満たしていくことになる。

　そこにカレンがいるのかどうか、それが分かるまで後数日だ。

　獲物を回収してきたときのお楽しみ、大量の肉のうち、保存しないものを焼いて味噌や醤油、そしてワインでそれぞれに味をつけたものを昼飯として出す。今日は午後も普通の作業なので、ここで精をつけておいてもらわなきゃな。

　鍛冶場の炉と火床に火が回ると午後の作業開始だ。これもみんな手慣れたもので、テキパキと作業をこなしていく。

　俺の作業はカレンに見ておいてもらうことにした。勉強になるのかどうかはわからんが、ここで見せないのも不自然だと思ったからだ。

　今日から作る量産品と高級モデルは仕上げの違いだけで鎚で２、３度叩いて完成するというものでもない。思惑の有無はさておき、それなりに見ておくところはあるはずだ。

　俺が見取り稽古を言うと、カレンは一も二もなく頷いた。そして俺の一挙手一投足、その全てを一瞬たりとも見逃すまいと作業を見ている。

　こうやってカレンの様子を見ていると、疑念はただの杞憂で、いもしない幽霊にビクビクしているだけなのでは、と思えてくる。そうであればいいなとさえ。

　俺は手早くナイフを作っていきながら、ちゃんと教えるつもりでやるのはこれがはじめてだったなと、ようやっと気がついたのだった。

## 納品へ

2021年9月15日

　３日――正しくは２日と半日――の間、剣とナイフを作り、カレンはそれを見てとり、１日の作業の終わり頃に実践するということを繰り返した。

　リケの見るところでは「わずかながら上達している」そうである。俺が見ても同じ意見だった。まだ判断するには早計だが。

　納品の前の日、確定はないが送別会として夕食を少し豪華にした。北方に戻るかも知れないのに北方風もあるまい、と思ってワインやブランデーをメインにしたソースでとっておきの鹿肉やイノシシ肉のソテーにしてある。

　サラダ……は無理なので湯がいた野菜と香草をあわせたものや、果物などもテーブルに所狭しと並んでいる。

「場所が場所なんでこれくらいが精一杯だが」

「いえいえ、とんでもない。とっても美味しいです」

　カレンは顔の前でブンブンと両手を振った。いただきますと乾杯をした後、サーミャとヘレンは無心に肉を頬張っているし、リケは酒をあおっている。ディアナとリディは比較的穏やかに食べているが、ワインのペースがいつもより少し早い。

　途中からは、北方でこういうときにどうするのかを皆がカレンに聞いていた。ゆったりと尻尾を揺らしてカレンが答える。

「そうですねぇ、やることはそんなに変わらないですよ。ごちそうが出て、お酒が出て」

「北方のお酒ですか」

　リケが聞いて、カレンが頷いた。前の世界でいうところのどぶろくや清酒はもちろんだが、清酒の酒粕からアルコールを蒸留して作った粕取焼酎のようなものもあるのだ、とカレンが説明している。

　焼酎の話になると、リケの目が輝くのはご愛嬌か。もし今後も北方の物が手に入るならカミロに頼んどいてやるか。

　ごちそうについても、加熱しない魚肉は刺身のようにそのまま食べることもあるにはあるのだが、基本的には酢〆のようなものが主だそうだ。後は煮付けや少し山の肉を焼いたりしたものが中心らしい。

　つまりは時間や手間がかかるか、食材そのものの入手何度が高いものがごちそうとして並ぶ。ここらは前の世界とも大差はないな。

　かまぼこみたいなものもあるそうで、カレンはそれが好物だそうだ。彼女がリザードマンだから好きなのか、個人的なものなのかまでは流石に聞けなかったが。

　日持ちがするなら食べてみたいところではあるが無理だろうなぁ。こっちで作るか。

　ささやかながらもにぎやかな送別会はいつもより少しだけ長く続き、俺達は納品の日を迎えた。

　朝の日課を人通り終えたら、荷車を引っ張り出して納品する品を積み込んでいく。

　纏めて簀巻きにされた剣と、通り函に収まったナイフ。これがうちの「主力商品」だ。日用品は自由市で売れなかったので作っていない。主力以外には時折、槍を納品しているくらいか。

　カミロに聞くところによると「あれはあれで結構売れる」とのことだった。カミロの知人の商人も「自分の護衛に」と買っていくらしいので、今後売れ行きが伸びていくこともあるかも知れない。

　久しぶりに街までお出かけということを察してか、娘たち3人ははしゃいでいる。来た当初はもう少し大人しかったハヤテも、このところ少し感情のようなものをあらわすようになった。

　今日みたいに走り回るクルルとルーシーのそばを小さく鳴きながら飛んでいる。まぁ、もしかするとお姉ちゃんとして窘めているのかも知れないが。

　そうやってはしゃいでいたクルルと荷車を繋いで、全員が乗り込んだら出発だ。ルーシーも荷車に飛び乗るのがさまになってきた。体つきもどことなくガッシリした感じが増したように思う。

　それでも可愛らしい我が子だと思ってはいるが、そろそろ「子狼」から「子」をとってもいい頃合いなのかもなぁ……。

　いや、猫は１歳くらいでもまだギリギリ子猫と呼べるはずだ。つまり狼も同様と考えれば、あと半年かもう少しくらいは「子狼」と呼んでいいはず。

　そんな俺の内心を知ってか知らずか、足に頭を擦り付ける我が子の頭を俺はそっと撫で、クルルと、彼女の頭に止まったハヤテの上げた声で、荷車は一路街へと向かっていった。

## 街道と街

2021年9月17日

　ガタゴトと荷車は揺れる。あまり幸先のよろしくないことに、出かける段になって空には雲がかかり、“黒の森”を照らすスポットライトは全ての照明を落としてしまった。

　晴れの日でも暗いこの森が、より一層の暗さを得る。もうこの暗さに慣れてきた俺でも、不気味さが増してるなぁと思うほどなので、この森に住んでいない人間なら尚更だろう。

「あらためて凄いところにいたんですねぇ、私」

　あたりを見回しながらカレンが言った。彼女は今ここにいる誰よりも滞在した期間が短い。そういう感想になるのもむべなるかな、である。

「それはね。私も時々はそう思ってるからね」

「私もですよ」

　ディアナとリディもそれに乗った。アンネとヘレンは口には出さないが、頷いているので、そういう感覚は残るものらしい。サーミャはともかく、リケが頷いていないのは慣れの問題だろうか。

「ま、だからこそ、みんなここに来たってのもあるわけだが」

“黒の森”は「うかつに立ち入れば死を免れない」とまで言われている。そんなヤバいところに住んでいるはずがない、住んでいたと分かったとして手の出しようがない、というのがうちに滞在する最大のメリットだ。

　これは表向きにはしていないが、うちには“人避け”の魔法もかかっているので、到達できるような人間も限られている。

　そう言えば、カレンがもし北方へ戻るってなったら、ハヤテたちはどうなるんだろう。俺はクルルの頭に止まっているハヤテを見やった。

　彼女は今、鳥のように翼の一部を綺麗にしているところだ。表現はアレだが買取みたいな形なので、カレンが戻ってもハヤテたちを戻さないといけない道理はない。

　だが、それはまっとうにうちで修業を終えて円満に戻っていく場合の話で、「全てご破算な」という流れになる可能性は十分にある。そうなった場合は当然、ハヤテたちの買取もなくなるだろう。一応対価は払っているので粘るつもりもあるが。

　それでも一緒に戻るとなると、新しい連絡手段を構築する必要がある。その時は……別の小竜をカミロに調達してもらうのが良いのかな。

　その時の名前はコガラシとかフブキとか、ハヤカゼとかそう言う名前にしようかな。器用なことにクルルの頭の上で居眠りをしようとしているハヤテを見て、できればそんな未来にはなってほしくないと願いながら、俺は気を紛らせた。

　晴れの日には気持ちよい青空と草原を見せてくれる街道だが、そこも今日は生憎の曇天でいつもの気持ちよさはなく、陰鬱な感じをまとっていて、いつもならそっと草を撫でていく風も幾分乱暴になっていた。

　時折、上空を優雅に舞っている猛禽らしき姿も今日はない。俺たちは周囲の警戒を強くした。

「今日みたいな日は何が出るか分からん。風も強いし、少し警戒を強くしよう」

「伯爵閣下のおかげでここいらはかなり安全だけどな」

　俺の言葉にヘレンが返した。口調は気軽だが、その目は周囲を鋭く見ている。サーミャも頭を動かしながら、クンクンと臭いでも警戒を続けていた。

　俺たちは時折こうして街へ出かけはするが、姿を晒しているのは半日もない。ただ、それは定期的なものなので、襲うつもりがあればこのタイミングだろう。

　しかし、こうして異常を察知するのに長けているサーミャとヘレンがいるのだ。そうなれば俺たちはたちまち“黒の森”に引っ込む。

　久しぶりの街道は、曇天であることが残念な以外はいつもどおり、平和に通行することが出来た。３週間ぶりの街の入口が見えてくる。普段と１週間しか変わらないのに、随分と懐かしいような気がするな。

　俺たちが入り口に差し掛かると、ちょうど街道の巡回に出ていくらしき衛兵さんたちとすれ違った。動きやすいようにだろうか、装甲箇所を減らした甲冑を着て、手には槍。腰には剣を佩いていて、なかなかに物々しい。

　隊列を組んで進んでいく中に、顔見知りの顔もあったので、俺は声をかけた。

「今から巡回ですか？ ご苦労さまです」

「おお、あんたらか。あんたらが何事もなく到着したってことは、今んところ街道は大丈夫そうだな」

　顔見知りのうちの１人がそう言って笑う。俺も「ええ、皆さんのおかげで」と笑って返し、互いに軽く手を振って別れた。

　入り口にはいつもの衛兵さんが立っていて、ニヤッと笑い、片手を挙げるだけで通してくれる。俺たちはそれに頭を下げて、久しぶりの街へと入った。

　雨の降らないうちに用事を済ませたい、ということなのだろうか。いつも来るときよりも道に溢れる人の数が多い。ルーシーはいつも通りに荷台から顔を出して、いくらかの人を一瞬ぎょっとさせ、強面の露天商のおっさんを含む人々を和ませている。

「こうして見ると、大きくなったなぁ」

　荷台の縁から背伸びをするようにしてかろうじて頭を出していたルーシーは、今その背伸びをしなくても頭を出せるようになっている。

　俺は将来の懸念を一つ口にした。

「今はいいけど、そのうち出しちゃだめって言わないといけないかな」

「噛みつかなかったら良いんじゃない？」

　ディアナがルーシーの背中を撫でてやりながら言った。

「そういう素振りを少しでも見せたら駄目にする、で大丈夫でしょ」

「街の決まりとかには……ないよな」

「そうね」

　他ならぬこの街の領主の妹様のご発言である。時折、忘れてしまいそうになるが。ともかく、それなら俺もあまり反論はない。俺は頷くことで了解の意を示した。

　やがて、荷車はカミロの店に到着した。曇天だからだろうか、それともこの後に待っているものが、もしかしたらあまり気持ちの良いものでないと、俺が思っているからだろうか。

　俺ははじめて、この店が少し不気味に見えたのだった。

## 会合

2021年9月20日

　俺の印象はともかく、カミロの店はいつもどおりそこにある。店頭は人で賑わっているようで、外を通りがかると喧噪が聞こえてきた。

　俺たちは店頭には用はないので、そのまま裏手に回っていく。そちらはいつもどおり、少しのんびりとした空気が流れていて、俺たちの姿を認めた丁稚さんが駆け寄ってきた。

「おはようございます！」

「ああ、おはよう」

　まだ倉庫に荷車を入れてなかったので、丁稚さんにも手伝ってもらって荷車を倉庫に入れておく。この後の作業は俺たちの仕事ではない。

「それじゃ、今日もよろしくな。今日はもしかすると、出てくるのが遅いかも知れないが……」

「大丈夫です！ お任せください！」

　ドンと胸を叩いて請け負う丁稚さん。その頭にポンと手を置いて、俺はいつもの商談室へと向かった。

　いつもなら、俺たちが先に商談室に入って、その間に俺たちの到着を店員さん達がカミロに知らせてくれる流れになっている。

　だが今日は、商談室に入ると既にカミロと番頭さんが待っていた。倉庫に荷車を入れるのに手間取ったわけでもないので、ずっと朝からここにいたようだ。机には普段は置いてない書類がいくつか広げられている。

　うっかりいつもの調子で扉を開けてしまった俺は少し面食らった。

「おお、来たな」

「すまんな、突然扉を開けてしまって」

　いつもの調子で挨拶をするカミロに、俺は素直に謝った。今日は別の客がいるかも知れない日である。いきなり扉を開けるのはどう考えても迂闊だ。

　カミロは苦笑すると、手をヒラヒラと振った。

「なぁに、この辺なにも言ってなかった俺も悪いんだ」

「ありがとう」

　そう言って、俺たちは着席した。とりあえずは今日の商談である。商談自体はつつがなく進んでいく。

「他のことをやっててなぁ。それでも納品物の数は十分あるはずだから、確認しておいてくれ」

「わかった。うちにあるもので追加で必要なものはあるか？」

「今は特にないかな。北方のもので新しいのが入ってきてたら欲しいところだが」

「今回は無いなぁ」

「だろうな」

　俺は肩を竦めた。今回の件ではカミロが直接出張ったのだ、別ルートで仕入れや逆に卸しをしていたにしても、それどころで無かったのは間違いない。

　カミロが合図すると、番頭さんは一度部屋を出て、すぐに戻ってきた。今日の諸々は別の人に任せたらしい。

「それじゃあ、今日の本題に入ろうか」

　カミロの言葉にゴクリ、と生唾を呑み込んだのは、俺だったかカレンだったか、それとも他の誰かだったろうか。

　カミロが再び目配せをすると、番頭さんが出て行った。

「お前達はこっち側へ回っておいてくれ」

「あの、私は……？」

　おずおずとカレンが手を挙げた。俺たちはとりあえずカミロの座っているほうに移動する。

「お嬢さんは……こちら側へ」

　言われてカレンは俺たちのいる方へと回ってきた。端っこのほうにいようとするので、流石にそれはと真ん中の辺りに移動してもらった。

　ややあって、商談室の扉が開けられる。最初に入ってきたのは番頭さんで、手で入室を促していた。

　それに従って入ってきたのは、数人のリザードマン達。皆北方風の服装――つまり、俺から見れば和服だ――を身に纏っていた。顔はトカゲのような顔ではなく、ごく普通の北方人の顔に鱗のようなものがちょくちょくあるくらいだ。

　一番の特徴は顔では無く身体のほうで、皆トカゲのような尻尾が生えている。そのせいもあってか、並んでは部屋に入りづらいらしく、少し間隔を空けて入ってきていた。

　チラリとカレンの様子を窺うと、目を見開いている。これはもしやと思っていると、

「カンザブロウ・カタギリと申す。カレンの父親であります」

　年かさのリザードマンがそう言って頭を下げた。カタギリでカレンの父親。今回来ないであろうと思われていた人だ。確か聞くところによれば旗本でかなり偉い人のはずなのだが、その前情報に反して腰が低く、フットワークは軽い。

　まぁ、今まで会った中で偉さの割にフットワークが軽かったのは、帝国の皇帝陛下だが。

「私はケンザブロウ・カタブチでございます。南方で言えばカタギリ家の“お付きの者”と思ってくだされば結構です」

　そう言って、年若いリザードマンが頭を下げる。合わせて２人ほどいる若い女性のリザードマンも頭を下げて、それぞれあまり大きくない声で名乗った。どうも２人も“お付きの者”っぽい。

　そして、伝令として来たのはどうやらカタブチ氏だったようである。

「これはご丁寧に。私が“エイゾウ工房”のエイゾウでございます」

　立ち上がった俺はそう言って頭を下げた。頭を戻すと、カレン父の眼がスッと細められている。

「確かタンヤ家と……」

「北方を出てくるときの事情がありまして、基本、家名は名乗らないことにしているのです。この見た目ですし、出身が北方であることは隠せないので、名前はそのままですが」

　俺は予め用意しておいた理由をさらりと答えた。これはあながち嘘でもないので、サーミャでも気がつかないはずである。

　俺の家名を知っているかどうかは半々だなと思ったが、どうやら知っていたらしい。

　カレンは家名までは知らなかったようなのだが、まぁアレから時間も経っているし、何かのルートで調べれば分かる可能性はあるか。

「なるほど」

　もう少し食い下がるかと思いきや、カレン父はあっさりと引き下がった。家名はどうでも良いと思っているか、適当な家名をでっち上げたと思っているかのどっちなんだろうなぁ。

　ディアナが続いて名乗ろうとしたが、俺は後ろ手に合図し家族の皆を名乗らせずにおいた。１つでも余分に情報を渡さないためである。

「それで、カレンの師匠がそちらだと？」

「ええまぁ、そういうことになっていますね」

　ジロリ、と今度は俺の肚裏を見透かそうとするかのように、ほとんど睨みつけている視線でカレン父が言い、俺は何でもないことのように返した。

「ふむ……失礼だが、それは刀ですか？」

「ええ。素人拵えですが」

　俺たちは店に入るときも一応腰のものは外さずに入る。着席するときには邪魔になるので一旦脇に立てかけて置いたりはするが。俺の“薄氷”ももちろんだが、アンネの両手剣などは背中に担いだままでは着席にも支障があるしなぁ。

　それはともかく、俺はその脇に置いたものを差し出した。

「どうぞ、ご覧ください」

　ヘレンがスッと俺の斜め後ろ辺りに陣取った。彼女はショートソードなので、２つとも身につけたままだ。俺を挟んで反対側にはディアナも立っている。

　いざという時はディアナが俺を引き倒し、ヘレンが応戦する肚だろう。

「では」

　と、カレン父は小さく頭を下げ、“薄氷”を抜いた。アポイタカラ製の薄青く光る刀身が姿を現す。俺は部屋の温度がほんの少し下がったような錯覚を覚えた。

　カレン父は“薄氷”を青眼に構えたり（ヘレンが柄に手をかける音がした）、横にして輝きを見たりと、しばらく“薄氷”の刀身を眺める。

　カレン父が一通りそういった動作をして、“薄氷”は再び鞘に収まった。

　手にした“薄氷”はまだ俺の手には戻っていない。ヘレンには「居合」の話を以前にしていたからだろう、後ろから漂ってくる殺気が少し強まったのを俺は感じた。

　カレン父は一度大きく息を吐いた。感嘆なのか、呆れなのかは俺には知るよしもない。

　そして、朗々たる声でこう言った。

「エイゾウ殿、貴方には一つ頼みたいことがある」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　次回9/22の投稿ですが、３周年記念ということで特別編をお送りする予定です。

## 連載３周年記念特別編：街の家族

2021年9月22日

　今回は連載３周年記念の特別編になります。本編とは関係のない、“もしも”あるいはエイゾウの見ている夢のようなものになりますので、ご承知おきください。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　カミロの強い薦めもあって、俺たちは今エイムール卿、つまりはマリウスだが、彼の治める街へ一時的に居を移していた。

　きっかけは大量注文がカミロのところに入ったからである。今回は武器だけではなく、いくつかの農具なんかも頼まれているし、量がとんでもなかった。

　ただ、それらは高級モデルである必要すら無く、量産品でいいらしかった。であれば、“黒の森”の魔力に頼る必要も無い。リディも、

「時々は森へ戻って魔力を得る必要はありますが、しばらく滞在するぶんには問題ないですよ」

　とのことだったし、それならば納品するのに面倒が少ない方がいいと、思い切ってカミロに頼んで居宅兼作業場を見繕ってもらったのだ。

　流石に鍛冶場付きなんて家は無かったので、作業スペースが確保出来る家を小改造させてもらい、そこに火床と炉を置く形になった。

　壁の内側にいる“お抱え”の鍛冶屋と軋轢を生んでしまうといけないので、うちが作る製品は全てカミロのところへのみ納品することになっている。

「納品」とは言うものの、毎日夕方くらいにカミロの店の人が取りに来てくれる手はずになっていて、俺たちは作ることに集中すれば良かった。

「お父さん！ お仕事まだ！？」

　緑色の服を着て、服と同じような緑色の髪をしたショートカットの少女が俺の袖を引いた。それをスラッとした双子の女性が窘める。

「いけませんよ、クルル。父上の邪魔をしては」

「ルーシーもですよ。リケ母上の邪魔をしてはいけません」

　リケに近づき、姉のクルルの真似をしようとしていた、毛先がワイルドにランダムな方を向いている黒い長髪で灰色の服の少女……ルーシーはその声でビクッとなって袖を引くのを止めた。

　双子は２人とも、青みがかった灰色の服を着ていた。爬虫類のような尻尾が生えているところを見ると、リザードマンらしい。

　いや、らしい、ではないな。俺は２人がリザードマンであることを

　俺はその様子を見て苦笑する。

「まぁまぁ、もうすぐ片付くんだし、ハヤテもアラシも、そんなに目くじらを立てなくてもいいじゃないか」

　俺が言うと、双子は揃ってこちらを見た。射竦めるような視線に、一瞬クルルと一緒に身を縮こまらせてしまいそうになるが、２人は俺に負けず劣らず目つきがあまり良くないだけなのだ。

　あまり背は高くないが、顔つきからして成人はしているらしき２人は言った。

「父上がそう甘やかすから」

「クルルもルーシーも甘えるのです」

　２人による波状攻撃の矛先は俺に向かってきた。俺は幾分か身を縮こまらせる。

「そのうち甘えるどころか、逆方向になる日が来るんだし、それまではもうちょっとこう、手加減というか」

　それくらいの反論をする精一杯だ。そんな俺を見て、２人はため息をついた。

　彼女たちはリザードマンのカレンが連れてきた子らだ。血縁関係にはないらしいのだが、３人並んで立つと姉妹のようにしか見えない。

「２人とも、妹が可愛いのは分かりますが、あまり父上を困らせるものではないですよ」

『すみません、カレン母上』

　その２人をカレンが窘めた。母上と言っているので、シングルマザーを弟子にするのかぁ、と思っていたのもなんだか懐かしいように思う。

　俺は今日最後の作業を終えると、皆に言った。

「よーし、今日は結構出来たし、食堂へ行くか」

『おおー』

　街に来たことで比較的手軽に色々な食材が手に入るようになり、その分レパートリーも増えたのだが、こと食生活においては外食の選択肢が出来たのは大きい。“黒の森”で外食は「どこに行こうというのかね」としかならんもんなぁ。

　そんなわけで、時折は街の食堂へと繰り出している。「食堂」とはいうものの、基本的にはほぼ酒場のようなものである。前の世界で言えば居酒屋飯が近い。

　ただ、当初はそれこそ酒場然としたところへ行っていた――そして時折、お母さん達がその戦闘能力の高さを発揮していた――のだが、少し前に食堂よりの店を見つけて、そこの居心地の良さと料理のうまさを気に入り、以来「食堂へ行く」と言えば、その店のことになった。

　俺たちは鍛冶場の後片付けをすませた後、身体の汚れを落とし、連れ立って街へと繰り出した。

「いらっしゃい」

　食堂の扉を開けると、若い女性が出迎えてくれた。彼女はこの店の店主で、両親を亡くしてからずっと１人で切り盛りしているのだそうだ。

　その応援をしてあげたいという家族の意見があったことも、この店をよく使う理由である。

　入り口に比較的近いテーブルに座って、ゆっくりと食事をとっている老人も、同じ理由だろうと俺は見ていた。その老人も俺たちが入ってきたことに気がついた。

「あんたたちか。こんばんは。おや、クルルちゃんにルーシーちゃん、また大きくなったんじゃないかい？」

「こんばんは。どうかな。毎日見てるから、小さい変化は分かんないなぁ……」

「子供が大きくなるのは早いぞ。見逃さないようにな」

「ええ、それはもちろん」

　この店の常連である老人の言葉に、苦笑半分敬意半分の笑顔を返す。

　そして、老人はクルルとルーシーに、

「じいちゃんこんばんは！」

「こんばんは！」

　と挨拶をされ、

「おお、いつも挨拶できてえらいねぇ」

　目を細めて２人の頭を撫でる。２人は「へへー」と照れくさそうにはにかみ、その様子を老人以上に目を細めながらディアナが見守っていた。

「最近は西地区が物騒らしいわね」

「へえ。なんで？」

　頼んだ料理を運んでくる女性の言葉に、ヘレンが尋ねた。今現在はうちの警護担当みたいなものなので、こういう話題には敏感だ。

「どうも“崩れ”の一団が来たらしくて。衛兵さん達が重点的にまわってるらしいんだけど」

「ああ……。あいつらも大変だなぁ」

　ヘレンは軽く眉間に皺を寄せた。

　遺跡を探索し、そこに眠るお宝を取ってくる“探索者”。ただ、当たり前だが毎回収入が得られるわけではない。時には赤字になることもある。それでにっちもさっちも行かなくなり“かけている”連中をさして“崩れ”ということがある。

　まだ何もしてはいないが、いずれなにかしてしまいそうだ、ということである。「何もそこで追い打ちをかけるような呼び方をせんでも」と思わなくもないが、この辺は前の世界の感覚が抜けきってないところのようにも思う。

　傭兵であるヘレンも、なにかあれば途端に無収入になるわけで、それを思えば「明日は我が身」となったのだろう。

　まぁ、ヘレンの場合はうちに来れば片付く話ではあるし、彼女の腕を買わない人間がそう多いとも思えないので、心配はいらないが。

「皆は大丈夫だと思うけど、一応気をつけてね」

「子供もいるからなぁ。わかった。ありがとう」

「いいえ、ごゆっくり」

　店主の女性はそう言ってテーブルから離れていった。後はにぎやかな食事の時間だ。今日の疲れを癒やし、空腹を満たすべく、テーブルに乗った鶏の肉を焼いたらしき料理に俺は手を付けた。

　料理がどんどん家族の腹の中に消え、そろそろ帰ろうか、となった頃。２人のちびっこは食欲を満たし、睡眠欲との戦いに赴いていた。

「お姉ちゃん、抱っこー」

「おんぶー」

「はいはい。仕方ないですね」

「では、私がルーシーをおんぶします」

　いや、睡魔には抗う術がない、と悟っているのだ。あっさりと白旗を揚げて、双子の姉たちに救援を要請した。

　双子は困った声を出しながらも、嬉しそうに２人を抱っことおんぶする。来る前に「甘やかすな」と言っていた割には、ものすごい甘やかしようだなと思うが、それは言わぬがなんとやらだろう。

　さっさと支払いを済ませて、寝息を立てる２人の娘の様子を伺いながら、家路についた。

　普段なら寝る前にはサーミャがちょっとかけっこのようなことをしてやったり、アンネが抱えあげて遊んでやったり、あるいはリディがお話をしてやったりといったこともあるのだが、今日はそんな暇もなく夢の世界に行き、すやすやと幸せそうだ。

「うーん、これはこれで幸せなのかもなぁ」

　俺は頭の片隅に違和感を覚える。クルルとルーシーはこうだったか？ カレンはこうも馴染んでいただろうか？ ハヤテとアラシがリザードマンだと思っているのはなぜだ？

　それらを考えようとすると、思考に靄がかかったようになる。俺は一旦それらを「そういうもの」として呑み込んで、今はこの“いつも”を楽しむことにしたのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　今日で連載３周年となりました。ここまで連載を続けられたのも、読者の皆様あってのことです。ありがとうございます。

　もちろん、まだまだ続けていくつもりですので、どうぞ本作を４年目もよろしくお願いいたします。

## 頼み

2021年9月24日

　カンザブロウ――カレン父が“薄氷”をテーブルに置いた。背後からの殺気がほんの僅か薄らぐのを感じる。

　俺は置かれた“薄氷”を手元に持ってきて、口を開いた。

「まだご依頼を伺う前で失礼ですが、我々に言っていないことがあるのでは？」

　カレンに対する疑惑の話のつもりだった。下手くそだが、カマをかけた形ではある。サーミャに視線を送ると、彼女は小さく頷いた。これで嘘をついたら分かるわけだ。

　カレン父はピクリ、と片眉を上げた。キレさせてしまっただろうか。悲しいかな、理不尽な怒りには前の世界で耐性が出来てしまっているので、多少のことでは動じないのだ。

　しかし、俺の懸念とは逆に、カレン父は深々と頭を下げた。

「これは大変失礼をしました。我が娘を預かっていただいた上に、ご足労いただいた御礼をまず申し上げるべきでした。大変申し訳なく」

「ああ、いえ……」

　前の世界でトラブルがあったとき、客先にうちの瑕疵でないことを説明しに行ったら、そこの社長が頭を下げてきたようなもので、俺は面食らってしまった。

　だが、これで煙に巻かれたままなのもな。もう少し踏み込んでみるか。

「いえ、そちらではなく、カレンさんの本当の目的を教えていただきたいのです」

　カレン父は今度は怪訝そうな顔をした。これはもしかして、カレンのスパイ疑惑は全くの杞憂だった……のか？ そうだとしたら、平謝りするのはこちらの方だ。

「本当もなにも……」

「父上……いえ、伯父上、正直に話されたほうが良いですよ」

　しばらくの沈黙の後、カレン父が話そうとするのを遮って、カレンが笑いながら言った。うちでも時々見せていた表情。今度はカレン父……いや、カレン伯父が面食らった顔になる。

「獣人のサーミャさんは『嘘が分かる』そうですので」

　カレン伯父はぎょっとした顔でサーミャを見たあと、俺を見た。俺は頷く。狩りのときにでも話してたんだな。

「失礼ながら、伏せさせて頂いておりました」

　苦々しげな顔になるか、憤慨して退室するかと思ったが、カレン伯父は真剣に考え込んでいる。嘘をつかず、さりとて言って良い範囲はどこまでなのかを検討しているのだろう。

　少なくとも怒りなどでごまかして有耶無耶にするつもりはなさそうだ。

「カレンさんは『思い立って』などではなく、ある程度ちゃんとした鍛冶の経験がある方で、職人としては一人前。今回は私の腕前を見計らい、何者であるのかを探るためだけにやってきたのであって、どうあろうと弟子入りは中途で切り上げるつもりだった、と私は見てますよ」

　俺の近くから、小さく「えっ」という声が聞こえた。俺が言うと思ってなかったアンネの声と、このあたりの話をしてなかったディアナの声だ。……ディアナには後で謝っておこう。

　本来であれば、バカ正直にここまで言う必要はない。だが、これを否定する場合に嘘が含まれればそれが分かる。

　この期に及んで何か嘘を言うなら、俺はそこで退室するだけだ。カミロの顔に泥を塗るかも知れないし、そうなったら卸し先をまた探さないといけなくなるだろう。

　そうなれば四方八方に迷惑をかけてしまうし、我侭であることは分かっているのだが、折角のこの世界での暮らし、あまりそういう我慢はしたくないのだ。

「まぁ、大体合ってます。ですが、半分ですね」

　そうして、カレン伯父が返答を迷っている間に、カレンがあっけらかんとそう答えた。

　今度は俺が怪訝な顔をするターンだった。

「半分？」

「ええ。師しょ……エイゾウさんの考えは半分あっています」

　そこでチラリとカレンは伯父を見た。伯父はため息をついて、大きく頷く。

「エイゾウさんの身元を探ること、これが一番の目的であったことは確かです。ですが……」

　カレンはそこで息をついた。

「我々より腕が良いと判断した場合、弟子入りしてエイゾウ工房の技術を身につけること、それが目的だったことも確かなんです」

「長くいれば身元を探る機会もあるから？」

　思わずだろう、そう口を挟んだのはアンネだ。カレンは苦笑する。

「結果的にそうなってしまったかも知れませんが、純粋にはそうではないですよ」

「北方から出てしまったものを、王国から無理やり引き戻すのは色々問題がある。ならば、というわけで、カレンをやったのです」

　カレンの言葉を伯父が引き取る。俺は思わず尋ねた。

「では、頼みというのは何か武器を作ってこい、とかではなく？」

「ええ。それをしてもらえればありがたいですが」

　カレン伯父が笑いながら頷いた。

「いろいろ話が前後してしまい申し訳ないですが、うちの姪御を改めて弟子にしていただきたい」

　そう言って、頭を下げるカレン伯父。どうしたものかと、俺は再び考え込むのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　本日、コミカライズ版で原作２巻にあたる「エイムール家騒動編」の連載がスタートしました！

　週明けの9/27日は原作１巻「森での暮らし編」後半となるコミック２巻の発売日ですので、併せてよろしくお願いします！

## ひとまずは

2021年9月27日

「すんなり『お引き受けします』とは言いがたいのが正直なところです」

　俺はそう言ったが、カレン伯父とカレンに極端にガッカリした様子はない。

「貴方のところをスパイしてましたけど、弟子入り良いっすか」で「はい」と答える人がそういないことは理解しているようだ。

　家族からの反応は無い。放置というよりはまぁ、弟子の話なら判断するのは基本俺だし、口出しするのははばかられる、と思ってくれているのだろう。

「北方から技術力の流出、という面では理解はしますが、一度信用できなくなってしまった方を弟子として置いておけるほどの心の広さは私にはありません。申し訳ないですが」

　一瞬だけ逡巡したが、せめてもの礼儀として俺は頭を下げた。

　あとはできて腰のものを見せてやるくらいのことで、それもヘレンが守ってくれるだろうという甘えがあってのことだ。あれも後でヘレンにも怒られそうだな。

　俺の技術を得る、という点においてはリケも変わらない。押しかけてきたし、ドワーフの弟子入りの風習だと言われたが、インストールに該当する知識は無かったので、疑う余地はいくらでもあっただろう。

　まぁ、インストールにはこの世界で生きていく上で困ること以外の知識はあんまりない。

　例えば貴族に対して極端に無礼な対応をして、打ち首になってしまわないように、その辺りの簡単なお作法の知識があるし、動物が食べられるかどうか、傷や熱に効く薬草など、生命活動を行う上で重要になりそうな知識もあるのだが、細かい地域や種族の風習、動物の生態については入っていない。

　そういうものは自分で調べるなり会得したほうが楽しかろうという、ウォッチドッグの計らいだろうと思うことにしている。

　それはともかく、最初はなし崩しではあったが、ゼロスタートからここまでの経緯で信用を得てきたリケと違い、カレンはマイナススタートだ。

　少なくともゼロにしてからでないと、受け入れることは難しい。

「……そうですか」

　眉尻を下げ、カレン伯父はふう、と息を吐いた。ため息というよりは、つかえたものを吐き出すかのような、そんな吐息。

「本当に申し訳ない」

「いえ、こちらこそ。調子が良すぎました」

　再び頭を下げる俺に、カレン伯父も再び頭を下げる。頭の下げあいっこにならぬよう、頭を下げるのは１度だけにしておいた。

　頭を上げたときにカレンの様子を窺った。あまりガッカリした感じはない。さりとて、にこやかにしているわけでもないので今どういう感情なのかはよく分からない。

「それではこれにて失礼仕ります。小竜はそのままで結構ですので」

　驚くほどあっさりと、北方使節団（のようなものだが）は部屋を出ていった。多少慌てたように番頭さんが付き添って出ていく。もう少し食い下がるなりするものかと若干身構えていた俺は拍子抜けをした。

　ハヤテとアラシはカレンに懐いていたし、少し悪いことをしたような気になったが、一度は条件を呑んだのだ、正当な手続きであったと思うことにしよう……。

　そうして、部屋に一気に弛緩した空気が流れた。だが、もう１つ確認しないといけないことがある。

「で、だ」

　俺はカミロの方を見やった。

「お前はどこまで知ってたんだ？」

　言われたカミロは真剣な表情で口ひげを触った。「何をどこまで伝えていいか」を悩んでいるときの奴の癖だ。雰囲気でヘレンが焦れているのが分かったが、ここを急かしてもなぁ。

　ややあって、カミロは口を開いた。

「カレン嬢が密偵のようなものだ、と言うのは知らなかった、てのだけは信じてほしいところだが」

「お前ほどの商人が裏を取らなかったのか？」

「裏は取ったさ」

　カミロは苦笑した。流石に俺に紹介するのに、連絡手段欲しさに何もせずにいたわけではないらしい。

「ただ、お前も北方、向こうさんも北方ってことで多少甘かったのは確かだ。そこはすまなかった」

　今度は頭を下げるカミロ。俺とカレンたちは同郷の人間ということになっているわけだし、「北方同士ならそういうもんか」くらいで見逃してしまった部分があるんだろな。

「頭を上げてくれ。その辺はお前に任せっぱなしにしている俺も俺だ」

　俺もかなり迂闊であったことは間違いない。もう少し前から気にして、早めに指摘ができていれば、ここまでカレンにマイナスをつけることもなかっただろう。

　そうすれば最低限、話を前に進められたかもしれないのだ。そこは俺の反省するところだと思う。

「それで、随分とあっさり引き下がったように思ったが」

　一旦話を切り替え、俺は先程の様子に対しての疑問をカミロにぶつけた。

「この後、彼らは都に行く予定だからな。とは言え、ここまでさっさと行くとは思ってなかったが」

「ほう。あ、もしかして」

　俺には思い当たることがあった。３週間前、最後にここに来たときに少し話した事柄。

「そう、侯爵と伯爵に会いに行くのさ」

「その内容は……」

　カミロは首を横に振る。あまり俺が知る必要のないことだ、ということらしい。

「何かあればすぐに教える。なに、今度はヘマはしないさ」

　ニヤリと、しかしどこか怒気をはらんだ笑い方でカミロは笑ったのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　本日コミック２巻が発売になりました。書籍版１巻の内容がこれにて完結となります。

　まだコミックの１巻をご覧でない方は是非１巻と併せてよろしくお願いいたします。

## 僅かな平穏

2021年9月29日

　とりあえず他に用事も無い。俺たちは今日のところは帰ることにした。

「次はまた２週間後でいいか？」

　椅子から立ち上がりながら、カミロに尋ね、彼は頷いた。

「ああ。何かあったら連絡する」

「分かった」

　今度は俺が頷いて、納品したものから購入したものを差し引いたぶんの代金を受け取って、部屋を出た。

　いつものとおりに丁稚さんにチップを渡し（ハヤテのぶん今回からわずかばかり額を増やした）、娘たちをお迎えしたら、クルルに買ったものを満載している荷車を繋いで出発である。

　この間、皆ほとんど何も言わなかった。丁稚さんが小首を傾げるほどだったので、相当に静かだったことは確かだ。

　リケが手綱を操るとゴトゴトと音を立てて、荷車は街路へと出ていった。

　街路は来た時と同じく人でごった返している。空の女神様はいよいよ今にも涙を零しはじめそうで、早めに用事を済ませようとしているのか、両手に荷物を抱えた人が多い。

　クルルがその人の波を上手にかき分けながら、荷車は街の外へと出ていった。

「さて、それじゃあリディ」

　街の入口の衛兵さんに挨拶をしてしばらく。俺はリディに声をかけた。リディはこちらに顔を向ける。

「ちょっと見てくれないか」

「……ああ。わかりました」

　一瞬頭に疑問符を浮かべたリディだったが、俺がついとハヤテに手を伸ばすと頷いた。

　カレンがいないことを理解しているのかいないのか、ハヤテは俺の腕に乗り移ってから落ち着いている。

　リディがそっとハヤテに手をかざした。ハヤテは小首を傾げているが、特に嫌がる様子はない。

　しばらく撫でるように手を動かし、リディは手を遠ざけた。

「どうだった？」

「大丈夫そうです」

　俺はほっと胸を撫でおろす。ハヤテは翼の手入れを始めた。それを見ていたディアナがおずおずと言った感じで尋ねてきた。

「今のは何をしたの？」

「ハヤテに何か魔法がかかっていないか確認して貰った」

　俺が気にしたのは、ハヤテの視覚なり聴覚なりを共有する魔法がかかっていないかどうかだ。

　もし、そのたぐいのものがかかっていたら、俺達のことは筒抜けになるかもしれない。まぁ探られて痛い腹でもないし、気にしなければそれまでなのだが。

「この子には何もかかってませんでした。もし“遠見”の魔法を使われたら、この子は関係ないですが、あの場所に限っては大丈夫だと思います」

　リディは荷車の上の皆に聞こえるくらいの声で言った。

「あの場所に限って、ってのは？ あそこにまだ何かあるのか？」

　そう尋ねたのはヘレンだ。他の家族も思ったらしく、ウンウンと頷いている。

「あそこは魔力が濃いので、その場で魔法を使ったりするぶんには都合がいいんですけど、“遠見”みたいな離れた場所から使う魔法の場合、かき乱されやすいんですよ」

「はー、そういうのもあるのかぁ」

　感心したようにヘレンが言う。なるほどなぁ。あの場所……つまり、我が工房は魔力が強くて木々も避ける（草は少し生えている）ほどで、普通の動物は近づかないし、“人避け”の魔法のおかげで普通の人間は分かっていても近寄れない。

　それだけでも十分な防犯なのだが、遠距離からの監視などにも対応しているとは。

　アンネが口を開いた。

「じゃ、仮に“遠見”の魔法が使えるからいいやと思ってさっさと帰ったんだったら」

「今頃がっかりしてるかも知れませんね」

　ニッコリとリディが微笑む。“遠見”の魔法はある程度場所を知っていないとつかえないらしい。仮にリディが“遠見”を使えたとしても、極端な話ここから北方を見に行くことはできない。

　カレンをうちに寄越したのは、その辺の意図もあったのかも知れない。リディはそう付け足した。

「まぁ、とりあえずは何事もなさそうで良かったよ」

「そうねぇ。それはともかく」

　俺の言葉に、ディアナが反応する。

「家についたら、説明してくれるんでしょうね？」

　表情はにこやかだが、確実に、ハッキリとした迫力のディアナに俺は頷くしかなかった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

近況ノートにもありますが、10/1はワクチン接種のため連載をお休みします。

何卒ご寛恕ご了承のほどよろしくお願いいたします。

## 夜半の来訪者

2021年10月4日

「じゃあ、途中で気がついてたってことね」

「そうなるな」

　家に帰って一通りの用事を済ませた夕食後のこと。ディアナとリディがため息をつき、サーミャが感心をしている。

「と言っても、確証があったわけでもないぞ。『こう考えたら、一番自分が納得できる説明がつくな』って話で、結果としてそれが正しかったというだけだ。言い訳にしかならないけど」

　俺が言うと、ディアナは再びため息をつく。

「まぁ、わかったわ。貧乏くじを引いたのが私達なのか、アンネなのかは難しいところだけど」

　それを聞いたアンネが肩をすくめた。余計なことにちょっと巻き込んでしまったのは反省点ではあるのだが、周囲から見たら気のせい以上のものでなかったりするかも知れんからなぁ。

「アタイはそれより、“薄氷”を渡したほうがヒヤヒヤしたよ」

「ああ、あれは……いや、すまん」

　ボヤくヘレンに俺は素直に頭を下げる。アレは完全にヘレンに甘えてたからな。

「今回は大丈夫だったけど、あの爺さんは結構やるぞ」

「そんなにか？」

「ああ」

　ヘレンが頷いた。すぐに彼女はニヤリと笑う。

「ま、こっちもアポイタカラ製の武器だからなんとかできただろうけど」

「それなら……」

　そんなに気にする必要はないのではないか。そんな楽観的な言葉は続かなかった。ヘレンが真剣な眼差しになる。

「だからと言って、ホイホイ渡して良いもんじゃないのはちゃんと理解しろよ」

「……はい……」

　俺の“薄氷”はアポイタカラ製だ。普通の剣で受けようとすれば、剣ごと斬り裂くことができてしまうだろう。

　そんなものを、怪しむべき相手にホイホイ渡してしまうのは迂闊だろうと言われても、それは仕方がない。今後、見せる可能性も考えて、鋼で脇差を一振り打つのも良いかも知れないなぁ。

「それはさておきだ」

　我ながら無理矢理な話題転換だったが、皆乗っかってくれたらしく、俺に視線が集中する。

「カレンたちはどうしてくると思う？」

　俺が言うと、皆考え込んだ。ややあって、アンネが口を開いた。

「都に行った、と言うことは、上の方から無理やり突っ込んでくる可能性はあるわね」

「兄様がそうするかしら」

「エイムール伯爵は友誼とデメリットを考えたら首を縦には振らないでしょうね」

　どこかしらホッとするディアナ。そこへリディが口を挟む。

「となると、侯爵ですか」

「来るとしたらね」

「でも……」

「そう、エイゾウの機嫌を損ねたら、帝国に出奔しかねない……と思うでしょうね」

　アンネの言葉に俺は口をとがらせた。

「そんな偏屈なオヤジに見えるかね」

「あら、実際北方からは出てきたわけでしょう？」

「うっ……」

　笑って言ったアンネに、俺は言葉をつまらせた。そうだった。事情があって北方から出てきた実績がある――ということになっているのだ、俺は。

　その事情は侯爵に説明していないし、この森でないと十全に力を発揮できないことも説明していない。周りから見たとき、俺は厄介事を嫌って北方を出、“黒の森”などというこの世界でも有数の辺鄙な場所に隠れ住むようにやってきた鍛冶屋、なのだ。

　そんな男が王国での厄介事に巻き込まれた時、どういう行動をしそうだろうか。しかも、帝国の皇帝と直接会ったことがあり、皇帝の係累が直ぐそばにいるのである。

「それに以前、偏屈な鍛冶屋だって親方自身でおっしゃってませんでした？」

「言った……気がする」

　リケが意外と容赦なく俺に追い打ちをかける。俺は堪らず両手を上げた。

「分かった分かった。その点については認めるよ」

　そう言うと、家族全員から笑い声が漏れる。

「俺の偏屈さはともかくだ、もし王国に対する何らかの条件と引き換えに、カレンを預かることを承諾しろと言われているから、すまんが頼まれてくれと言われたらどうするかね」

「それに応じないといけない義理は、正直あんまりないわね」

　アンネがおとがいに手を当てる。俺が応じないことで王国に多少の不利益が生じても、俺にとって「知ったことではない」のは確かである。

　確かなのだが、しかし。俺は頭の後ろで手を組んだ。

「かと言って積極的に断る理由も、実際にはあんまりないんだよなあ」

　弟子入りかと思って受けたら産業スパイでした！ みたいな話ではあったのだが、単純に技術を身につけて帰りたいだけなら、それは弟子入りではあるのだ。

　家族に累が及ぶ可能性もなくはないのだが、それをしていよいよ北方から心離れるようなことはすまい。となれば、後は俺の感情だけになってくる。実際カミロの店で断ったのは、俺の心情の問題も大きかった。

　そしてそれは大きな理由ではあるが、呑み込んでしまえばなかったことにできなくはない。それで腹を壊すこともなさそうだしな。

　侯爵と伯爵に貸しを作るメリットと天秤にかけてどうなのか、と言われるとなぁ。

　なるべくいい形に納めたいのはそうなんだが……。

　俺がそう思った時、家の扉がノックされた。家の中は水を打ったように静まりかえり、カチャリ、とヘレンがナイフを手にする音がやけに響く。

　クルルやルーシー、ハヤテが騒ぐ声は聞こえなかった。多分知り合いだろうと思うが、用心したほうが良い状況に違いはない。

「はーい」

　俺は朗らかに聞こえるよう努力しつつ、そっと扉の方へと向かった。

## 湯治客……？

2021年10月6日

　後ろにヘレンがついてくる気配を確かに感じながら、俺は閂を外し、そっと扉を開けた。そこにいたのは、

「リュイサさんじゃないですか」

「どうもー」

　リュイサさんは相変わらずの軽いノリでやってきた。よく考えたらリュイサさんは突然出たり消えたりできるんだし、“黒の森”の管理者なんだから、直接この家の中に出てこれるんじゃないのか。

　テーブルに案内しながら、それとなく水を向けてみると、

「だってそれはお行儀が悪いんでしょう？ ジゼルが言ってたもの」

　とのことだった。それは確かにそうなのだが。ジゼルさんにお説教されるリュイサさんかぁ。

「それに、生きている植物が近くにないとちょっと大変なのよ」

「へぇ、そうなんですか？」

「私、

「ああ、なるほど」

　どうにも不思議お姉さん感が先に立ってしまうが、樹木精霊だから生きてる植物が近くにあったほうが良い、と言われれば納得である。俺のイメージの通りの言動をしてくれているだけかも知れないけど。

「今日はどういうご用件で？」

「別に大したことじゃないのよ」

　前の世界のおばちゃんの如く、リュイサさんは手を振った。俺よりも遥かに、へたをすれば1000年単位で年上なので、おばちゃんでも間違いはあんまりないのだが、そう言ったり思ったりするのは憚られるので、うっかりしないように気をつけよう。

「温泉ができた、って聞いてね」

「ああ」

　なんだかバタバタして報告をし忘れていた。掲示板は今日も「何もありません」の伝言が書かれているはずだ。いつもの納品でも、出かけるときは書くようにするか……。「急患」があるかも知れないのだし。

「別に黙って入っていって貰っても平気でしたのに」

「いやぁ、流石に私が最初だったら気まずいじゃない？」

　あ、そういうところ気にするのか。なんかもっと傍若無人なのかと思っていた。さすがに排水用の池で動物たちと浸かるようなことはすまいとも思ってはいたが、知らない間に勝手に湯殿に入るくらいのことはあるかと想定には入っていたのだが。

　そして、俺達はそこまで気にするような人間達でもないし。まあ多少の残念さを感じただろうことは仕方ないが。

「完成してから夕方頃には毎日入ってますから、入ってもらって大丈夫ですよ」

　今日も帰ってきて、色々と済ませた後に一旦入浴している。なので、リュイサさんに入ってもらうのは問題ない。なんなら今からジゼルさんを呼び出して一緒に入ってもらってもいいくらいである。

　しかし、俺の言葉にもリュイサさんはもじもじしながら、少し困った表情をした。

「入り方がわからなくて」

「なるほど」

　これはアレだな、そのへんの泉に毛が生えたくらいのものなら黙って入って帰ろうとしていたが、思いの外立派な建造物があったので、何かやらかしてはいけないと思ってこっちに来たんだな。

　失礼な想像かもしれないが、大筋では外れてないだろうという予感もある。そして、その配慮は素直に受け取るべきか。

「……皆でついていってやってくれないか」

　俺が頼むと、全員あっさり頷いてくれた。２回めの入浴にも関わらず、あっさり頷いたのは気に入っているということだろうか。男の俺は、種族はともかく女性のリュイサさんを手伝うことはできない。

　魔法のランタンに光を灯し、それをリディに預けて、湯殿に向かう皆を俺は見送る。ほわほわと、柔らかな光が遠のいていったのを確認して、俺は一旦家に入ろうとした。

　バサリ、聞いたことのある翼の音がした。見やると、掲示板のところに見覚えのある小竜の姿があった。ハヤテではない。アラシのほうだ。足元には手紙らしきものがついている。

　そう言えば、あの店を出るときにアラシの姿を目にしなかった。北方使節団が都に連れていき、直接ここへやったのだろうか。

　カレンに聞いた話から言えば、アラシはここの場所を覚えている。航続距離が十分なら、ここへ来ることもできるだろう。

　俺ののんびりしきっていた頭はどっかに飛んでいき、思わず生唾を飲み込む。そして、アラシの足元にある手紙を手にとったのだった。

## 顧問

2021年10月8日

「よしよし、ご苦労さん」

　手紙を外した俺がアラシの頭を撫でると、彼女は俺の手に頭を擦り付けた後「キュッ」と短く、そして小さく鳴いて飛んでいった。ハヤテに挨拶をする暇もない。

　アラシは街と都のどっちに戻るんだろうな。そんなことを思いながら、暗闇を斬り裂く矢のような彼女が飛び去るのを眺めた。

　暗闇にアラシが消えてから、俺は手紙を開いた。文字そのものに見覚えはない。だが、使ったのであろう筆記具は推察できた。筆だ。

　流暢な筆使いのくずし字で書かれたそれは、前世で見た戦国武将の手紙によく似ている。内容の前に署名を確認すると、カレンの名前があったが、彼女の直筆なのかそれともカタブチ氏が祐筆をつとめたのかまでは分からない。

　カレンの名前の隣に、マリウスの名前も署名されていたので、この内容は一応彼も確認したということだろう。嘘を書かれていてもわかりにくいという問題はあるが。

　その手紙の内容はというと、大きく予想を違えるものでもなかった。

　北方の一国と王国とのやりとりとしては、

「腕のいい北方出身の鍛冶屋の引き渡しを」

「そんな人物は王国に定住していません。どこかに流れたのでは？」

「そうですか。残念です」

　で決着したようである。少なくとも公式に残る文書ではそういうことになったようだ。

　つまり、俺は公式の文書の上では王国には住んでいないことになっている。

　これは以前、税については聞かねばと思ったときにマリウスやカミロから聞いた話だが、確かに“黒の森”は王国にあるが完全に管轄できているかというと、そうではない。したがって、王国領内にあって領してはいない認識なのだそうだ。魔物討伐隊のときの俺の扱いはどうなってるんだろうなぁ。

　実際、森の獣人たちからは税を取り立てておらず、人口の把握もしていないらしく、サーミャも「そんなのしたことない」と言っていた。

　つまり、“黒の森”に住んでいる俺とその家族も扱いとしては同じになるのだそうだ。王国としてきっちり管轄していないからこそ、身を隠すのにも好都合なのだが。

　まぁ有り体に言って、この辺は茶番である。実際に俺がいるところをカレンは見ているのだから。ともかく、北方としても王国としても俺は公式には存在しない状態のほうが都合が良いようである。これは表立って頼めないものも数多くあるからだろうな。

　俺としてもそっちのほうが自由に動けるメリットが大きいし、後世に名前が残ってしまったりしなさそうなのも助かる。

　きっちり調べれば同じ地域から「デブ猫印の製品」が出続けていることは分かってしまうかも知れないが。

　そして、今回の一件については「弟子入りの話は一旦ご破算。だが、カレンは王国に残る」ということになったそうである。

　ん？ と思って読み進めてみると、北方は割とゴタゴタしていて、何かあった場合に備え、直系でないにせよカタギリ家の係累であるカレンを外に出しておきたかったのも事実で、修行の名目で都には残るのだそうだ。

　ある程度の腕があったら、うちに弟子入りしてもさっさと免許皆伝さようならということになりかねず、それを避けるために実力を隠していた可能性はあるし、これが本心なのか、なにかのカバーなのかは分からない。

　何れにせよ、最初からそう言ってくれていればもっと素直に事が運んだのにな、と思わずにはいられない。

　それはともかく、問題はさらにその後の文章だ。

「ついてはエイゾウ殿には顧問として時折腕前を見ていただきたく」

　そこにはそう書いてあった。顧問ねぇ……。方法について打ち合わせをしたいので、都合のいい日時をカミロの方に伝えてくれともあった。ハヤテはカミロの方しか知らないからな。

　どう返事をするべきか悩みながら、俺は家の中へと戻るのだった。

## 計画

2021年10月11日

　手紙の話はリュイサさんには関係ないので、彼女が帰ってからにしようと思っていたが、彼女はめっぽうな長風呂派だったらしい。

　ゆっくりと湯に浸かった後、脱衣所で存分に休んで戻ってきた彼女らを待っていたら、結構な夜更けになってしまっていた。

　仕方なく話を翌日に回すことにして、ご機嫌で帰っていくリュイサさんを見送ったあと皆寝床に入った。

　今日は朝から晩まで盛りだくさんだったな。そう思いながら寝床に入ると、速やかに睡魔が訪れ、俺の意識を刈り取っていった。

　翌日、いつもの通りの作業――今日は量産のナイフだった――を終えた夕食後である。

「実はだな、昨日こういう手紙が届いた」

　俺は皆に手紙を見せつつ、中身をかいつまんで話した。全員に話をしたのは反省もあるが、これからの生活ルーチンに変化がある可能性も考えてだ。

「なるほどねぇ」

　アンネが腕を組んだ。

「不審なところはあんまりないわね。そこまでエイゾウに拘るのはなぜ？ という疑問は若干残るけど」

「都で暮らしていくんでたまには寄ってね、じゃないのがな」

「積極的に出来を見てほしい、ってことはいずれの弟子入りも考えて欲しいってことでしょうし」

　アンネの言葉に、頷きながらリケが口を挟んだ。

「親方の腕前なら、弟子入り希望が殺到してもおかしくないと思いますしね」

「うーん、それもなんだかなぁ……」

　俺の腕前は概ねチートと魔力によるもので、完全なる俺の実力とは言い難いのが実情である。その状態でリケとあと１～２人程度ならともかく、何人もと言うのは色々憚られるな。

「で、まずはこの顧問という話なんだが」

「受けるかどうか？」

　ディアナが言って、俺は頷いた。

「条件次第ではあるんだろうが、その条件もどうしたものかなと思ってな」

　条件については、向こうの出方を見て誠意を図る方法もなくはない。１回見るたびに銀貨の数枚も払うというなら、かなり破格の条件と言えるだろう。だがしかし。

「あんまり、そういった試すような方法は取りたくないんだよな」

　試すやつは試される。そういう前の世界でのやりとりは俺にとっては億劫で苦痛なものだった。最低限、ここでの暮らしが守れるなら、それ以上望むことはあんまりないのだ。

　勿論、されたことというのはあるので、全くの手ぶらでもＯＫとはならないのも確かではあるのだが。

「こちらとしても北方に繋がりができるのは無意味な話ではないし、ここで繋がりが切れて“見えなく”なるのは避けたいわね」

　アンネが言った。あくびをしているのはサーミャとヘレンだ。リディはニコニコと笑っているが、あれは多分そんなに分かってないな。

「あ、もちろん、『こちら』っていうのはこの工房のことよ」

　アンネが慌てて付け足す。俺は苦笑しながら言った。

「わかってるよ。そもそも今の状態じゃ、帝国と繋がりが持てないだろう？」

　アンネはうちに預かりの身で、連絡もままならない状態ではあるのだ。やろうと思えば何かのタイミングで出来るだろうし、それを止めるつもりもないがそうしているような気配はない。俺は続けた。

「貴族と違って守らなきゃならんメンツもほとんど無いが、経緯を考えると五分五分というわけにはいかないか。多少の金銭をプラスして、とかのこちらに利益があるなら受けてもいいって感じかな」

「そうねぇ」

「それでいいと思うわ」

　アンネ、ディアナが続けて頷いた。

「皆もそれでいいか？」

「そういうのはアタシはエイゾウに任せる」

「アタイも同じく」

「私も親方におまかせします」

「私も同じです」

　他の皆も同じか。俺はゆっくりと頷いて意思を確認する。

「わかった、みんなありがとう。で、あとは日時だが……」

「次の納品を１週間後に早めて、そこでいいでしょ」

　あっさりとディアナが言い、他の皆もウンウンと頷いた。頼もしさすらある。俺は今度は笑いながら首を縦に振った。

「よし、それじゃあそこにしよう。早速手紙をしたためるかな……」

　俺は席を立ち、筆記用具を取りに自室へと向かうのだった。

## お疲れ様

2021年10月13日

　翌朝、娘３人と水汲みを終えた後、書いた手紙をハヤテに託す。ハヤテの脚には革製の小さな筒がくくられていて、ベルトで蓋が閉められるようになっている。俺はその筒に書いた手紙を丸めて入れた。

「それじゃあよろしく頼むな」

「キュイッ」

　一声鳴いて、ハヤテは青空へ溶け込むように飛んでいった。彼女の脚にある手紙には次の納品の日時と、顧問の話はその時にすることが書いてある。話を受けるかどうかは条件次第とも付け加えておいた。

　これで俺たちが行くまでに話がどう転がるかだな。

　その日の作業を開始してから、もうすぐ昼飯の時間になるかなといった頃、外が少し騒がしくなった。

　何が起きたのかと鍛冶場の扉を開けてみると、クルルとルーシーが今戻ってきたらしいハヤテに、遊んで遊んでと騒いでいる。微笑ましい光景ではあるのだが、ハヤテの仕事はまだ終わっていないのだ。

　ハヤテはたまらず俺の右肩に飛んできた。すると、それを目で追ったクルルとルーシーの視界には俺が入るわけで、「お父さんもいる！」と思ったのか２人とも駆け寄ってくる。肩にハヤテを載せたまま、俺は２人の頭を撫でた。

　そんな２人を俺と一緒に出てきたディアナとヘレン（出てきたのは全員だけど）が相手を引き継ぐ。

「クルルとルーシーはこっちでママたちと遊びましょうね」

「ママ！？ アタイも！？」

「え、今更？」

　そうしている間に俺が右肩のハヤテに左腕を差し出すと、彼女はスッとそちらに移る。女性に体重のことをあれこれ言うのは失礼だろうが、見かけほどの重さはかかってこない。鳥みたいな骨の構造になってるのだろうか。弱い部分を魔力で補ってるとか……。

　色々と興味は尽きないが、今はハヤテの脚にある筒の中身だ。

「ちょっと代わりに筒を取ってくれないか」

　俺は左腕のハヤテをリケに差し出す。サーミャやリディ、あるいはアンネでも良かったのだが、手先の器用さはリケが一番だからな。無用にイライラさせる必要もあるまい。

　リケは頷くと、ハヤテの脚にある筒をそれごと外した。すると、ハヤテはクルルの頭に飛んでいく。彼女のお仕事はこれで一旦終わりだからな。クルルとルーシーも姉ちゃんと遊んでもらえるわけである。

　空いた手にリケから差し出された筒を受け取って、中身を確認すると手紙が入っていた。返事にしてはやたら早いし、もしかするとハヤテは返しただけかと思っていたが、そうではなかった。

「時間的に大したことは書かれていないだろうが……」

　なにせ朝イチに送って昼前には返ってきた手紙である。思った通り、カミロのあまり綺麗ではない字で書かれたそれは、彼にしては珍しく多少の修飾はあったがつまるところ「了解。待っている」というシンプルな答えだけが記されていた。

「どう思う？」

　俺は傍らから一緒に覗き込んでいたアンネに尋ねる。ここに何らかのカミロの意図が感じられるかを確認したかったのだ。彼女は少し首をひねったあと答える。

「これだけじゃなんともってのが正直なところね。すぐに返すあたり、かなり気を使ってるなとは思うけど」

「それはそうか」

　俺は肩をすくめる。時間的に来てすぐに返したわけでもないだろうが、カミロのところに北方の人たちがいたとしても話し合いが紛糾したということもなさそうだ。

　カミロの直筆で美辞麗句と言えないまでも言葉に気を使ったあとが伺えるあたり、今回の件については彼もなにか思うところがあるのだろう。多分。

「後は仕上げを御覧じろ、かな」

　俺はそう言って空を見上げる。そこにはそんな下の様子など知ったことではないとばかりに太陽が今日も燦々と輝いていた。

　ま、これ以上気を揉んでも仕方ないか。俺は大きく伸びをして言った。

「早いけど昼飯にしようか。表で食べよう」

　森の中に家族の「わあい」という喜びの声が広がる。理解しているのかまでは不明だが、クルルとルーシー、ハヤテもそれぞれに喜んでいるように見える。

　ただの先送りかも知れないが、今のところはのんびりと“いつも”を過ごすことにしよう。俺はそう思いながら、鍛冶場の扉を開いた。

## “いつも”と街へ

2021年10月15日

　この“黒の森”にいる間、世間からは文字通り「隔絶」されている。いや、今はハヤテとアラシという通信の方法を手に入れたので、完全にそうであるとは言い難いが。

　しかし、それも無視してしまえば俺たちの動向は外に出ることは無いだろう。肉を中心に食事を考えれば自給自足にかなり近いところまで来ているし、それなりの期間“黒の森”から出ないでいることも可能だと思う。

　実際には塩や燃料などの必需品や、鍛冶をするための鉄石が足りなくなってくるので、完全に森に引きこもって暮らすというのは現実的でないが。

　だが、遠慮したのがカミロなのかカレンなのかはともかく、１週間弱の間、何の連絡も来なかった。おかげで俺たちはのんびりと“いつも”の１週間を過ごし、街へ向かう準備を整えていったのだ。

　今回はごくごく普通にナイフと短剣のみで、高級モデルもあまり数は作っていない。

　クルルが牽く荷車に荷物を積み終え、サーミャが言った。

「うーん、なんだか久しぶりだな。これだけしか作らないのも」

「ああ、前は１週間毎に街に行ってたからな」

　俺は頷いて、以前のことを思い出す。当初は勝手がわかってないこともあって、大した数も作れなかった。今は量産するだけなら結構な速さで仕上げることができるようになっている。

　これは俺がチートに馴染んで来たこともあるが、リケやサーミャ、そして他の皆が作業に上達してきたこともある。ディアナもそろそろ量産のやつくらいなら鎚を持てるんじゃなかろうか。

　ヘレンにしてもいつになるかはともかく、傭兵稼業に戻ったときに自分で手入れできるようになっていれば、役立つことも多いだろう。

　リディも森の世界とはいえ鉄製品を作る場面はそれなりにあるだろう。アンネだけはあまり役に立つ場面というのはなさそうだが、特定のものとはいえ技術に明るい人間が為政者側にいて損にはなるまい。

「あの頃は色々先行きのこともありましたからね」

「そうだな」

　リケの言葉に俺は再び頷いた。スローライフを満喫できる体制へと少しでも早く移行しようとした結果、なんだかワーカホリック気味になってしまったんだった。

　思い返せばなんだかんだと巻き込まれたりして、あんまりスローライフ感のない生活を送りがちな気がする。

　荷台に載った荷物は今日はいつもと比べてかなり少ない。ただ“いつもどおり”を繰り返してきたつもりだったが、家族以外に増えたものもある、ってことだな。

　そんなことを考えながら、俺は皆に出発を合図した。

「今日はいつもより少し気をつけたほうが良いかも」

　ヘレンがそう言い出したのは、“黒の森”を出る少し前だった。

「知ってる人間もいるわけだし、無いとは思いたいけどな。北の人間が何かするなら、この機会が最後になる。用心するに越したことはない」

　表向きにはうちの工房は存在しないことになっている。そして、俺も“黒の森”なんてところに定住していることにはなっていない。

　とは言えそれは表向きの話で、実際には俺はここに存在している。もしなにか起こせば裏では大問題になる……と思う。

　伯爵がその一存で戦を起こすことはできないだろうし、侯爵が絡んだとしても大遠征になる挙兵の大義名分なんかそうはない。

　表向きは別の名目で王国に滞在していることになっているアンネに何かあれば皇帝陛下御自ら陣頭指揮を取ってのあれやこれやがあるんだろうが、それも裏での話になるはずだ。

　一方で万が一の場合を考えれば、北方が積極的に手を出すことも難しいのではないかと思う。１人の鍛冶屋が北方から出ただけで、調べても一子相伝の技術をもつ工房の出ということもない――そもそも何者かよくわからないのだから当たり前だが――オッさん１人を取り戻す、あるいは害するにしてはリスクが見合わない。

　だが、それは全くありえないことを指すわけでもないのだ。感情として許しがたし、ということになればどういう行動に出るのかを推し量ることは難しいだろう。

「分かった。今日はいつも以上に気をつけていこう」

　俺が言うと、家族は皆頷いた。ルーシーも話を理解したのか、幾分精悍になった声で「わん！」と一声上げ、荷車の上は笑い声に包まれたのだった。

## 手仕舞いをはじめよう

2021年10月20日

　普段、街道で警戒するときは主に野盗の出現に備えるものだ。街の衛兵隊が職務熱心なこともあってか、幸いにして出くわしたことはない。

　俺たちは“黒の森”に住んでいるから、狼たちが滅多に森の外に出ないことを知っている。リスクを覚悟で街道や草原に出なくても、森の中で獲物を捕らえることは十分に可能だからだ。

　うちの家族以外にそれ知っているのは森に住む獣人達くらいで、彼らも街の住人達には積極的に教えたりとかはないらしく、普通の人は森からの襲撃も気にしていたりするらしい。

　そして今の俺達は、と言うと、

「気配を隠されるとアタイでも厄介だな」

「アタシの鼻が利くから、それでカバーするよ」

「アタイも見てるけど、任せた」

「おう」

　北方使節団からの襲撃を警戒しているわけだ。彼らには手練も混じっている。気配を消すことができるものもいるだろう。

　ヘレンはそれ以上の手練ではあるのだが、完全に気配を消されると見つけにくいのは確かだ。しかし、それでも匂いまでは消しきれるものではない。

　消そうと思えばどこかに無理が生じる。それを見逃す（嗅ぎ逃す？）ほどサーミャは甘くない。そして見つければサーミャとリディの弓が、接近してもヘレンにディアナ、そしてアンネに不肖俺がいるので、見つけることさえできれば対応は可能なはずだ。

　こうして、いつも以上の警戒で街道を進んでいった。

　結果から言えば、警戒は全くの杞憂で済んだ。警戒をしていることは明らかな状態ではあったので、逆にそれを警戒した可能性もある。少なくともそこらの野盗が潜んでいたら、手を出そうと思わない状態だったのは確かだ。

　街の入口でぼーっと突っ立っているように見える衛兵さん――もちろんぼーっとしているようでも、全くそうではないのだが――を見たとき、一瞬緊張が解ける。

　だが、すぐに引き締め直した。カミロの店につくまでは完全には気を抜けない。いつものとおりに衛兵さんに挨拶をしても、一瞬怪訝な顔をされるくらいには警戒を解かなかった。

　街に入っても警戒は解かない。と、言っても人出がそこそこあるし、それにルーシーがいつものように荷車の周囲からひょこひょこと顔を出している。

　もし手を出そうと思っても、ルーシーに見つかるかも知れないと考えれば、二の足を踏むことだろう。本人は単に周りを見たいだけなのだが。

　いや、今日はやけに鼻をヒクヒクさせている。もしかすると彼女も荷車の雰囲気を察して、警戒をしてくれているのかも知れない。家に帰ったらねぎらってやるか。

　その警戒のかいもあってか、街中でも襲撃されることはなく、カミロの店に到着した。

　いつものように倉庫に荷車を入れ、裏手へ回る。すると、いつものように丁稚さんがすっ飛んできた。ヘレンが俺の前に回ろうとしたが、俺は後ろ手にそれを遮った。

　疑って損はないのだろうが、この子まで疑ってしまうのもな。

　実際、丁稚さんはいつもの笑顔で、

「いらっしゃいませ！ 皆さんお待ちですよ！」

　と出迎えてくれた。俺はポンポンとヘレンの肩を優しく叩く。叩かれたヘレンは肩をすくめて、先に店に入っていく。多分、チェックしておいてくれるのだろう。

「ありがとう、今日もこの子たちを頼むな」

「はい！ お任せください！」

　くしゃり、と丁稚さんの頭を撫でると、彼はくすぐったそうにした後、「おいで」とクルルとルーシーを呼んで、駆け出す。

　その彼をいつものように、

「クルルル」

「わんわん」

　まるで「待ってよー」とでも言うかのように、２人の娘が追いかけていった。

　それを微笑ましく見守った後、これから待ち受けているであろうものを考え、少しだけ気分を重くしながら、今ヘレンが開けてくれた扉をくぐった。

## まずはここから

2021年10月25日

　俺を先導してヘレンが進む。とりあえずは商談室だ。街道上ならなんとかごまかす方策もあるだろうが、この建物内で何かあれば、それはカミロの責任とメンツに関わってくる。

　まぁ、国から見れば俺はしがない鍛冶屋、カミロもそこそこ名が知れてはいるが商人“でしかない”ので、何も起きないかと言われると断言できないのだが。

　ヘレンが警戒してくれているのは半分は職業病のようなものもあるだろう。無駄に終わっても「ああ良かった」で済む話だから、特に止めさせたりはしない。

　ヘレンが商談室の扉を開けてくれた。中から殺気が飛んでくることも、刀なり槍なりが突き出されることもない。

　そこまでして、ということではなさそうでほっと胸をなでおろす。これから胃が痛くなるかも知れないが、そっちは慣れっこっちゃ慣れっこだ。

　商談室に入ると、見慣れたカミロと番頭さんの他に、２人いた。

　１人はカレンだ。ニコニコとまではいかないが、少なくとも神妙な面持ちではない。

　もう１人はこの街の領主であるエイムール伯爵――つまりはマリウスだ。

　他の北方の人々はこの場にはいない。隣の部屋にいたりするのかも知れないが。

「やあ、エイゾウ」

　気さくな様子でマリウスが手を挙げた。俺も片手を挙げてそれに応じる。

「おう、どうだ、新婚生活は」

「思ってたより楽しいよ」

「それは良かった。本当に」

　俺は心底そう思って笑顔になる。あの奥さんと幸せに暮らしているのなら、友人としては何よりの話だ。

　そこでカミロがパン、と手を打つ。

「さて、最初に商売の話だが……」

「いつもどおりだよ。今回は欲しいものも一旦はなしだ。次のときでいい。売りたいものがあるなら別だけど」

「いや、今日はお前たちに売っておきたいものはないよ。ありがとう」

　と言ってカミロが頷き、番頭さんに目をやると、番頭さんも頷いて部屋を出ていく。

「さて、それじゃ早速こっちの話をさせてもらおうかな」

　口を開いたのはマリウスだった。とりあえず俺は話を聞く姿勢になる。が、

「その前に、カレンさんはともかく、北方の方々がおられないようですが」

　珍しくディアナが口を挟んだ。俺の隣に座っていた彼女は少し腰を浮かせている。声色は幾分冷たいもので、怒気をはらんでいるようにも聞こえるが、まだ感情を爆発させるところまでではないようだ。

　とはいえ、腰を浮かせ、口を挟む時点でディアナとしては思うところがあることの表明である。

「ああ、そこに悪意はないよ。エイゾウを見くびっているわけではないことは理解して欲しい」

「でしたら」

　若干の苦笑とともに返ってきたマリウスの言葉に、食ってかかりかけたディアナをマリウスは手振りで制し、そこへカレンさんが続ける。

「北方の関わることでもあり失礼にあたることは承知ですが、あまり顔を合わせたくないでしょうから、と申しておりました。もう既に北方へ向けて出立し、はや数日が経っております」

　変に顔を合わせて話がこじれてしまうほうを北方の人々は避けた、ということか。

　その説明でどこまで納得できたかはともかく、ディアナも浮かせかけていた腰を下ろした。

　俺は肩をポンポンと叩いて無言で感謝を示す。大きなため息が隣から聞こえてきて、一旦はそれで落ち着いたようだ。

　小さく息を吐いて、マリウスが続ける。

「さて、概要はカミロ殿からの連絡で知っているだろうし、こちらの提示する条件次第とのことも承っているが、こちらのカレン嬢と北方の話だ」

　自然、視線がカレンさんに集まり、彼女は幾分身を縮こまらせた。

「ここであまり駆け引きもしたくないから、ぶっちゃけた話をするぞ」

　俺は頷く。悪い話でなければ受け入れて損はないのだ。感情的な話もあるにはあるが、何を差し置いてもやだね、というところまでではない。

「僕と侯爵閣下としては、たとえ密偵に近しいものであったとしても、これまで王国とはあまり繋がりのなかった北方と、繋がりを強められるならこれは大きなメリットになると考えている」

「侯爵派の得点にもなる」

　ボソッとアンネが混ぜかえっした。少し苦笑したが、マリウスは続ける。

「それにエイゾウたちには王国に留まっていて欲しい。であるならば、エイゾウ工房への条件はなるべく良いものを提示して、一挙両得を図るというのが結論なんだ」

「おいおい、随分とぶっちゃけたな」

　俺から反感を買うかもとは思っていないのだろう。これを舐めてかかられている、ととるかは人によるだろうが。

「他の皆はともかく、俺は公式には住んでない人間だぞ」

「そうだな。まぁ、そこはなんとかできると思う。ほら、あの遠征のときの文官がいただろう？」

「ああ、フレデリカ嬢か」

　フレデリカ嬢は俺も従軍した魔物討伐の遠征のとき、補給や報奨やらの管理を任されていた文官で、なんというか小動物っぽい人だった。

「彼女が非常に“優秀”でね。気がついたのはつい最近なんだが、彼女なら任せられるよ」

「俺が知ってる人なのはいいけど、変な巻き込み方をするなよ」

「わかってるさ。友人を守るために、働いちゃいけないところに不義理を働くわけにもいかないからな」

　マリウスは肩をすくめ、俺は大きく頷いた。

「まず最初に、北方が公式にも秘密裏にも、王国、というか侯爵閣下や僕の頭越しに君たちに接触することは今後はない。君たちは王国に定住してないのだから当たり前だけどね」

　そこまで言って、マリウスはウィンクをする。イケメンのウィンクは様になっていてズルいな。俺ではああはいかない。

　これを断言できる、ということは何らかの密約を北方と交わしているのだろう。その内容についてはあまり知りたいところではないが。

　マリウスは小さく息を吸って、言った。

「それで、君たちに提示する条件なんだが……」

　なぜだか場が静まり返った。誰かがゴクリとつばを飲み込んだ音が聞こえたような気がする。

「月に１度か２度、このカミロのところへカレン嬢ができたものを送る。エイゾウはそれを確認して出来を判断する」

「ふむ」

　ここは聞いていたところだ。特に疑問も不満もない。

「１回の確認ごとに銀貨をこれだけ支払おう」

「えらく多いな」

　マリウスが出した指の数は、ちょっと良い品……高級品と特注品の間くらいのものを打ったときくらいだった。毎月この収入なら、俺はほとんど働く必要がない。

　いや、こういうので稼いで「やったぜ働くのは辞めだ」とするつもりはあんまりないのだが。

「その代わりと言ってはなんだが、１つだけ聞いてほしいことがあるんだ」

「なんだ？」

　俺はマリウスに先を促す。しかし、答えたのはカレンさんだった。

「すぐにとは言いません。いつか弟子入りを認めてほしいのです」

　そう言って、カレンさんは深々と頭を下げた。小さなため息をつく声が聞こえる。それが自分のものか、それとも家族の誰かのものか、一瞬自分でも分からなかった。

## 新しい関係を

2021年10月27日

「虫のいい話だということは重々承知しています。当初、目的を半分隠していたことも申し訳ないと思っています」

　頭を下げたまま、カレンさんは言った。

「すぐにとは言いません。言えるはずもないんですが……」

　顔を上げるカレンさん。さっきまでのどこかぼうっとした感じはもうない。キリッと引き締まってはいるが、泣き出しそうな危なっかしさもある。

　俺は家族をぐるっと見回した。俺と目が合うと、みんな小さく頷く。「判断は任せる」ということだ。

　メンツも含めた感情でいえば、拒否し怒鳴り散らすこともできるだろう。おそらく、それは受け入れられる。そうしたい衝動もなくはない。

　だが、冷静に今後を考えると多少なりと動きがわかりやすい人間を１人作っておくことは有効なのだ。一番怖いのは暗闇からの一撃である。

　それを避けるなら、ここで彼女を王国に留めておくのは有効だろう。もうとっくに他の人間に伝えた可能性もあるが、彼女はうちへの道のりを伝聞ではなく知っている人間でもあるのだ。

　それなら、この話自体は受け入れても良いんじゃないか、と思う。された仕打ちを放り出して、情に絆されている面がないとはとても言えない状態であることは自覚している。

　しかし、弟子入りは何年後でもいい、と言っているのだし、俺が本当に彼女を信用できるようになれば、その時にうちに迎え入れればいい。

　それまでに彼女が諦めてしまえばそこまでの話だ。その時は家の周囲を多少要塞化するか、魔力の強い土地を探さなくてはいけないかもしれないが。

　それにまぁ、俺に瑕疵がまったくないかと言われれば、そんなこともない。「どうせ理解はできないから」と「北方出身と名乗っていることの真実」を誰にも打ち明けてはおらず、秘密を抱えたままであるのだ。

　沈黙が流れる。時間そのものが止まってしまったかのような気さえする。

　俺はゆっくりと口を開いた。

「わかりました」

　俺の口から出たのはその言葉。カレンさんの顔がパッと明るくなる。

「ですが」

　だが、俺は付け加えることも忘れない。

「今回だけです。次は無いと思ってください。何かあれば私はどこかへ移住することも視野に入れます」

　カレンさんが息を呑むのがわかった。マリウスが苦笑しているのは後段に彼への牽制も含まれていると思ったからだろう。当たらずとも遠からじというやつだが。

　友人とは無条件に融通する間柄のことではない。そこに利害が発生することもあるし、それが常にプラマイゼロになるとは限らない。それをどれくらい気にするかの度合いが、家族と友人と他人の違いだと、俺は思っている。

「承知しました」

　再び深々と頭を下げるカレンさん。

「いえ、こちらこそよろしくお願いします」

　俺も彼女のように頭を下げる。一応立場的には上ではあるのだろうが、下げて減る頭でもない。

「これでまとまったかな」

　気をつけていないと分からないくらい、小さくため息をついてから、マリウスが言った。

「なんとかね」

　顔を上げた俺はニヤッと笑った。マリウスと違って、さまにはならないが。

「色々とズレてしまったけど、これから、一から進めていこう。君も、俺も」

　俺は、顔を上げたカレンさんに右手を差し出した。“南方式”だ。

「……はい！」

　明るさを取り戻したカレンさんは、俺の手を取った。ここから、新しく関係をはじめていこう。その関係の先にあるのが何かは分からないが、俺と家族なら多分なんとかやっていけるだろう。

　マリウスはカレンさんと先に戻っていった。部屋にはカミロと俺たち家族。他愛もない話をカミロとしていると、番頭さんが戻ってきたので、俺たちもおいとますることにした。

　来たときよりは心は晴れている。意気揚々、とまではいかないが足取り軽く部屋を出て行こうとしたところで、俺だけカミロに呼び止められる。

　皆には先に行っておいてもらい、俺とカミロだけが商談室に残る。

　カミロは一息おいてから言った。

「本人は言わないだろうから、一応俺から伝えておくが……」

　一瞬の逡巡。

「譲歩としてこの条件でなんとか纏めたのがマリウスらしいんだよ」

「と言うと？」

　なんとなく想像はできるが、きちんと知っているならカミロから聞くべきだろう。

「お前の腕前は伯爵と侯爵が知っている。当然評価もされているわけで、“主流派”としてはお前を手放したくないわけだ」

「ふむ」

　のんびり過ごすのには手放しには喜べない情報だが、ありがたい話ではある。

「だが、北方の方々がああも派手に来てはな。“公爵派”の目に留まってしまうのも仕方がなかったわけだ」

「“主流派”ではないほうか」

　カミロは頷いた。彼は口ひげを指先でいじりながら続ける。

「“黒の森”に住んでるのは伏せて、エイムールの街に出入りしてるとか、名前であるとかは誤魔化して大部分隠しおおせたが、そうなればお前はちょっと腕の良い、ただの鍛冶屋だ」

「実際そうだけどな」

　俺の言葉に苦笑するカミロ。

「『ただの鍛冶屋を北方が迎えにきた？ 拗れる前に引き渡してしまえ』って話が出てもおかしくないわけだな」

「ああ、まぁそれはな」

　今度は俺が苦笑する番だった。今のところチートだよりの腕前を除けば、ただの鍛冶屋だ。そんなものをリスクを負って守らなければいけない道理はない。

　無理に守ろうとすれば、「言っている以上に重要な人物である」ことを証明しているようなものだ。

「そこをお前が自分の街にいることと、カレン嬢が都に残ることとをあわせて条件を整えて、抑えこんだのがマリウスってわけだ」

「なるほど……」

　ちょっと妙な条件だなとは思っていたが、俺の友達は思った以上に身を削っていてくれていたらしい。

　俺は笑いながら言う。

「今度何かでそれと分からないように埋め合わせをしておくよ」

「そうしとけ」

　同じように、カミロが笑った。

　カミロに見送られ、「じゃあ、またな」と俺は商談室を後にする。

　こうして俺は、形を変えた“いつも”に戻っていった。

# 第１２章

## なんでもない夕方

2021年10月29日

　うちの周りには木が生えていない。リディ曰くは「魔力が濃いから」なのだそうだ。

　それで気になって以前に伐った木の切り株を確認してみると、普通切り株を囲むように伸びてくるはずの“ひこばえ”（切り株の周りに生える新芽）も、うちのあるほうには伸びていない。

　かといって、木の生えていない言わば庭の部分は土と石塊だけかといえばそうではなく、普通に草花は生えているので不思議なものだ。

　畑の作物もすくすくと成長し、エルフの種の「すぐに次の収穫ができる」という特徴を存分に発揮していた。

　そんなポッカリと空いた領域に剣の稽古をするヘレンとディアナ、そしてアンネの気合の乗った声が響く。空は橙色を連れてきており、もうしばらくすれば今度は夜闇を連れてくるだろう。

　スコン、といい音をさせているのは弓の練習をしているサーミャにリディ、そしてリケだ。後ろにいるならせめて長射程の武器を練習したい、とリケが申し出て、サーミャとリディが教えている。

　クルルとルーシー、ハヤテは３人で追いかけっこのようなことをしている。空を飛べるぶん、ハヤテが少しだけ有利なようだが、飛ぶと体力を使うのだろう、時々クルルの背中で体を休めていた。

　そんな賑やかな暮れていく庭の片隅、俺は包丁を魔法のランタンの光にかざした。

「やっぱり綺麗だな」

　カレンさんと契約をした日からもう一度納品の日を迎えた。その時にカミロから手渡されたものがある。それは３本の包丁だった。

　その包丁を個別に包んだ布には、ものすごく読みづらい字ではあったが、それぞれに名前が書かれていた。ボリスにマーティン、そしてサンドロのおやっさん。“金色牙の猪亭”の面々である。

　以前に「送ってくれたら研ぎや調整をする」と言ってあったので、送ってくれたのだ。

　作業に入る前の包丁を並べて見てみると、それぞれに彼らの顔が浮かんで見えるようだ。

“金色牙の猪亭”のみんなはゴツい風体をしているが、包丁の扱いは実に丁寧である。チートが無ければ僅かな歪みや、微妙な欠けなどに気がつけなかったかも知れない。

　これくらいの歪みであれば、熱して直す必要はない。金床もいつも使っているゴツいのではなく、小さい方でも直せそうなので、研ぎの道具一式と一緒に外に持ち出し、風を浴びながら作業をしようと言うわけだ。

　明かりにかざし、微妙な歪みを確認したら、金床に置いた包丁をごくごく軽い力で叩いていく。こんな作業でも、気を抜くと割れや折れに繋がるのだが、俺には手助けがある。

　その力も借りて、小さな金属音をさせつつ、魔力がこもりすぎないように（うっかりするとすべてを切り裂く包丁になってしまう）コツコツと歪みを取っていく。

　あらかたの歪みがとれたら、今度は研ぐ工程だ。水を砥石にかけ、慎重に刃を研ぐ。

　シュリシュリと、さっきまでとは違う音をさせながら、１本の包丁が元の姿を取り戻していく。研ぎ上がった包丁を光にかざすと、キラリと刃が光を反射して輝いた。

　そして３本目、気がつくと追いかけっこをしていたはずの娘たち３人が間近で興味深そうに眺めていた。普段は鍛冶場の中でやってて見る機会がないからだろう。

　たまには親の仕事を見せるのもいいかと思い、

　「危ないから、あまり近寄るなよ」

　そう俺が言うと、３人共了解だろう声をあげる。俺は慎重にゆっくりと研ぎの作業を進めるが、少し気合が入ってしまったのは致し方ないことだろう。サンドロのおやっさんの包丁なので、どっちみち多少の気合は入れていたかも知れないが。

　何度か砥石の上で包丁を往復させ、最後に水で流し、布で拭う。あたりが少し暗くなってきた中、ランタンの明かりにかざすと、その包丁はやはりキラリと輝き、娘３人は囃し立てるように声を上げる。

　それを聞いて誇らしげな気持ちになりながら、俺はそろそろ冬の足音が近づく我が家の“いつも”を終えたのだった。

## 冬支度

2021年11月1日

　朝食をとりながらのひととき。まだ肌寒いとまではいかないが、近頃は朝方の気温が低くなってきたような気がする、という話題になった。

　有り体に言えば秋が過ぎ、冬が近づきつつあるということだ。以前、このあたりで雪が降ることはめったにない、とサーミャにディアナが受けあっていたが、それでも準備は必要だろう。

　我が家には温泉という大変素敵な身体を温めてくれるものがあるわけだが、湧出場所や工事、建築の都合もあって少し離れたところに構えているし、常に湯に浸かっているわけにもいくまい。

　冬になる前に、家全体を暖めるようなものが必要だろう。

「あっちの新しく追加した部屋の方は離れてるからねぇ」

　ディアナがそう言って、部屋から廊下のほうを見やった。その廊下にも部屋はあるが、途中で直角に曲がっており、コの字型の上の部分にあたるそこにも部屋がある。

　今俺達が食事をとっているこの居間辺りまで、かまどや鍛冶場の熱が多少流れてきていることもあるのだが、自然に任せた状態で家全体に行き渡らせるのは無理だろう。

　そう、うちには高温を発する鍛冶場がある。鋼が溶ける高温になる炉が設えられているので、その熱を利用できればと思うのだが、

「問題は仕事しないときは火を落としてることだな」

　俺は顎に手を当てて言った。夜間はもちろんのこと、それ以外に炉を使わないときもある。炉を使ってなくても、火床には火が入っていることは多いが、発する温度は炉と比べて低い。

「肝心の夜中に寒くなっていくのはまずいかもねぇ」

　俺と同じようにディアナが顎に手を当てる。サーミャとヘレンがそれを見て笑いをこらえているようだった。

「そういえば暖炉がないのよね、この家」

　あたりを見回しながらアンネが言った。ウォッチドッグが何を思って省いたのかはわからないが、彼女の言う通りこの家には暖炉がない。もしかすると「冬までには作ってるだろ？」という、ちょっとした試練くらいのつもりだったのかも知れない。

「そういや、獣人たちはどうしてるんだ？ 焚き火か？」

「いや、着込むだけ」

　この森の元々の住人たるサーミャに聞いてみると、実にシンプルな答えが返ってきた。なるほど。雪が降らないくらいなら、それでなんとかなるのだろう。

「アタシたちは皆とは身体が違うから耐えられるけど、皆が耐えられるかはわかんないぞ」

「そりゃそうか」

　サーミャが続けて、俺は頷いた。なるほど、獣人の身体には元になった（？）動物の被毛がある。サーミャの場合は虎だ。俺が知っているのは猫そのものだが、あれでなかなかの保温性がある。

　それがない俺たちが同じように着込むだけで一冬耐えられるかは分からない。雪もめったに降らないということは、逆にいえばたまには降るのだ。

「そういやエイムール邸には暖炉があったな」

「そりゃあるわよ」

　そのままディアナに聞いてみると、エイムール邸の暖炉はセントラルヒーティングよろしく各所に熱が回るように煙突がもうけられているらしい。

「うちにも暖炉があったわよ」

　俺が聞く前に、アンネが答えた。仕組み的にはエイムール邸のとあまり変わらない。ただ、規模が違ったり、身分のあれやこれやで火を焚く箇所の違いがどうたらとかもあったそうだが。

「うちはそんなに寒くはならなかったので！」

　リケが胸を張るように言った。彼女の住んでいたあたりは鉱山が近いと聞いていたのだが、地熱かなにかでそこまで気温が下がらない、ということらしい。あまり広くないところにみんなで集まって寝てるので、それもありますけどね、とは付けたしていたが。割とバカにできないんだよな、人熱……。

　別のところだが、サーミャと同じく森暮らしのリディの家にも簡易の暖炉というか、囲炉裏に近いものはあったらしい。冬場はそれで乗り切れるのだそうだ。

　傭兵のヘレンは決まったところに住んでいたわけではない。大体は焚き火で温まれれば御の字で、時には友人と身を寄せ合ってということもあったと笑っていた。

「これで方針は絞られたわけだな。１、暖炉を作る。２、暖かい毛布なんかを用意するだけにしておく」

　俺は指を立てて数える。

「んで、暖炉を作るにしても、暖房専用の暖炉を作るか、鍛冶場の熱を利用するか、温泉をこっちまで引いてくるか、あるいはその複合になるな」

「暖炉を作ると時間がかかりますねぇ」

　リケがのんびりした声で言う。俺は頷いた。つい最近温泉でかなり時間を使ったところだ。そろそろ鍛冶仕事のほうにも力を入れないと。

　かと言って、寒くなってから作りますでは間に合わない。ストーブみたいに買ってきて設置すれば良いというものでもないのだ。

　ん？ ストーブ？ 俺はちょっと閃いた。そうだ、その手があったな。

「俺にいい考えがある」

　あ、これもしかしてヤバいやつなんじゃないかと自分で思いながら、俺は皆に内容を説明するのだった。

## 暖房器具

2021年11月3日

　あまり前の世界由来の、文化して時代が進んだものを取り入れるのはどうかなと思ったが、ものとしては至極単純だし、技術的にも大したものではない。

　前の世界でも原型のようなものが生まれたのは紀元前と聞くし、サスペンションのように「放っておいても遅かれ早かれ同じか似たものが出てくる」と思って良さそうだ。

「こう、ドラ……寸胴の筒の中で火を焚いて、その熱で暖まるのはどうだろう。煙は鋼の管で外に出るようにすれば、ある程度までならそこからも熱が得られるはずだ」

　要は薪ストーブである。つくりとしては実に簡素だ。要は火を焚く部分と、煙を外に出す煙突だけが主要なパーツだし。うちには木炭がたくさんあるし、木もそれこそ売るほどある。

　家が木造なので、火の粉が散りにくいようにするとか、火を焚く箇所は床から離しておくとかは必要だろうが、必要なのはそれくらいだ。

「解体移動できるようにすれば、使わない季節は倉庫に放り込んでおけばいいし」

「いいじゃん」

　俺の説明にサーミャが乗って、皆が頷いた。

「じゃあ、ちょっとずつそれを作るってことでいいかな。今日はいつものとおりの仕事ってことで」

　俺がそう言うと、皆から了承の声が返ってきた。とりあえずは今日の仕事を頑張るとするか。

　その日の夕食後、話はストーブのことになった。

　リディが淹れてくれた湯気の立つ茶を飲みながら、ヘレンが言った。

「それって北方のやつなのか？」

「いや？」

「じゃあ、エイゾウの発明か。荷車のあれみたいな」

「うん？ うーん。まぁ……そうだな……」

　俺は少し首をひねりつつ肯定する。それを見て、サーミャが怪訝な顔をした。本当の話ではないからな。当たり前だが前の世界で薪ストーブを開発したのは俺ではない。きちんとした薪ストーブを開発したのはアメリカの何とかさんという人だ。

　だが、この世界で最初に作り出すのは俺だ。で、あればこの世界では俺が発明したのと大きな違いはない。

　このあと普通に完成してしまえば、サスペンションと同じく世界的には今出現しても良い技術ということになる。大きなIFは存在しない、というのがウォッチドッグの説明だった。

　その理屈で言えば好き勝手してもダメなら止まるんではないか、とも思えるが、止められる過程で何が発生するか分かったものではない以上、試すようなまねは最低限に留めておいたほうがいいだろう。

「それはともかく、納品物が揃う目処もついてきたなぁ」

「早速作ります？」

　リケがワクワクを隠さず、身を乗り出すようにして聞いてきた。

「うーん、色々あったし羽根を伸ばしたいのもあるけど、いずれ作らなきゃいけないもので、今は大量発注も無いことだし、手が空いてるうちに片付けちまうか」

　そう答えると、リケは手を叩いて賛同を示した。他の皆もリケのように賛同とまではいかないが、特に反対する意見も無いようなので、次はストーブを作ることにした。

　とは言え、温泉の湯殿を建築したときのような大掛かりなことにはならないだろう。せいぜい煙突を突き出す穴を開けたり、それを塞ぐ仕組みを作ったりで、品物はあっという間にできそうである。

　なので問題になるとしたら、ストーブそのものというよりは、

「いくつ作ってどこに置くかだなぁ」

　俺たちのいる居間はある程度暖かい、だが十分に暖められるかと言うと若干怪しい面もある。となれば、ここには１つ必要だろう。

　あとは各人の居室をどうするかだ。

「別に１部屋に１つでも良いんだけどな」

　寒さへの耐性は個々人によって違ってくる。サーミャはある程度寒さに強いが、リケはそうではない。

　温度を調節できるようにするなら１部屋に１つ置いて火の管理も個人に任せる、としたほうが良いようには思う。

　この場合の問題は当然作る数がそれなりにあることだ。客間もあるしなぁ……。

「２～３部屋に１つにしておいて、寒がりの部屋にストーブを置くようにするか。あと俺の部屋」

　俺の部屋は特権ではなく、客間にはストーブを置かずに煙突経由で熱を送り込むためである。そのほうが安全だろうし。

　こうして、どの部屋に設置して、煙突をどう回すかなんかをああだこうだと言い合っているとき、ふとリディが切り出した。

「そういえば、北方の暖房ってどんなのがあるんです？」

「北方の暖房か……。カレンさんとこがどうか知らんが、こう、小さなテーブルに布団をかけて、その中に小さな火鉢をいれたやつとかかね」

　言うまでもなくコタツである。一度足を入れれば二度と出てこられなくなる悪魔の暖房器具だ。

「それは作らないんですか？」

「うーん、こもったところで炭を使うからな……事故が起きるほうが怖いかな……」

　電気のヒーターや温泉熱の床下暖房的なものならまだしも、火の場合は少し用心したいところだ。

　前の世界で婆さんから聞いた話だが、豆炭あんかを利用したコタツを使っていて、知らず入った動物が中で……という事故もあったらしい。

　うちの場合だとルーシーがそうなりかねない、ということを前の世界の話をぼやかしながら皆に話すと、

「それはうちにはなしね！！」

　ディアナがそう高らかに宣言して、俺達は笑いながらもしっかりと同意するのだった。

## それとは別に

2021年11月5日

　暖房器具についてはある程度の目処がついた。作るのもそんなに手間はかからないだろう。見映えはともかく、ってことにはなりそうだが。

「ああ、あと……」

　いくつか、俺には作っておきたいものがあった。

「最近リケが弓の練習をしてるよな？」

「ええ」

　俺が言うと、リケは頷く。手先の器用さが弓の腕にどれくらい影響するものかは俺にもわからないが、サーミャやリディに褒められているところを見かけるので、なかなかの命中精度を誇っているようだ。

「それはそれでいいとして、クロスボウも作っておいたほうがいいかなと思ってな」

　前の世界では「キリスト教徒には使用禁止」とまでされた武器である。まぁアレは「死んじゃったら身代金取れないでしょ」という意味も多分に含まれていたわけだが。

　それはさておき、連発性に欠けるが威力の高いクロスボウをいくつか作っておくはダメな話ではないだろう。

　リケは筋力がある。弓でも強めの弦が引けるし、普段の鍛冶仕事を見ている限りでは背筋も結構あるようで、アレなら腰で弦を引っ張り上げる方式のクロスボウでも、かなりの強さの弦を引くことが出来るはずだ。

「弓は弓で連射も出来るし有用だけど、今後“何か”と対峙することも考えると、あって損はないと思うんだ」

　邪鬼のときみたいな魔物討伐ではもちろん、万が一ここに立て籠もる事態が発生したときにも役に立ってくれると思う。そのときは火矢対策も必要になってくるが。

「クロスボウかー。あれ意外と厄介なんだよな」

　話を聞いていたヘレンが天を仰ぐ。傭兵時代のことを思い返しているのだろう。

「ヘレンの脚でもか」

「いやまぁ、なんとかならなくはないんだけどさ」

　なるんかい、という言葉を俺はグッと飲み込んだ。

「速いし当たると致命傷だしでヒヤヒヤする。こっちが固まってると誰かには当たっちまうし」

「ということは移動ルートがある程度絞られる場合は有効か」

「この森みたいに？」

　頭の後ろで手を組んだまま、こっちに顔を向けたヘレンに俺はニヤッと笑いかけた。

「荷車が通れるくらい幅があるところもあるけど、それより狭いところのほうが多いからな」

「じゃ、バリスタも考えたほうが良いかな？」

　俺が言うと、ヘレンは苦笑した。

「そりゃ、防衛するならあって損はないけど、そんなもんがあったら、いよいよ砦だな」

「“黒の森”の砦かぁ」

　ディアナが目を輝かせる。そういえば、こういうの結構好きなんだよなディアナ……。

「まずはバリスタまでは必要にならないようにしておきたいところね」

　ため息をついて、アンネが言った。それも然りだ。

「とりあえずは、持ち運びもできるクロスボウをいくつかだけで良いんじゃないでしょうか。私が使えるかはともかく、サーミャさんやヘレンさん、アンネさんは弦が引けるでしょうし」

　コクリと茶を飲んだリディが言う。アンネの身長と筋力を考えたら、彼女のは

「ああ、あと」

「まだあんのか」

　サーミャが呆れたように言った。俺は頷く。

「森の中で使いやすい武器も揃えたほうが良いのかもしれないなと」

「短剣ならもうありますよ？」

「売るほどね」

　俺の言葉にリケが返し、ディアナが乗っかって、家族が笑う。

「あれはあれで有効だと思うが、メイスみたいなのだな」

「なるほど。ある程度適当に振ってもなんとかなりそうなやつか」

　ヘレンがポンと手を打った。

「あとは殺さない武器かな」

「ボーラとか？」

「ネットとかな」

　ボーラは複数の球体を紐で繋いだもので、これを投げつけると球体の重さで紐が相手に絡みつくという武器である。ネットは要するに人や獣用の投網だ。細めの縄でできていることもあれば細いチェーンで編まれていることもある。

　チェーンのは当たりどころが悪ければ結構致命傷になりそうだが。

「またなんでそんなのを？」

「そりゃ相手を殺したらまずそうな時に使うんだよ。相手がそれで大人しくしてくれるかは別だけど」

「なるほどねぇ」

　ヘレンは再び天を仰ぐ。非殺傷武器にはあまり興味がないらしい。

「でも、あれこれ作るわけにはいかないでしょ？」

　アンネが割と大きめのため息をつきながら言った。俺は頷く。

「さしあたりは生活に必須の暖房を作って、その後クロスボウをぼちぼち揃えよう。上手く出来るようになってきたら、カミロに卸しても良いかも知れないし」

「クロスボウは兄さんが欲しがりそう」

　少し呆れる感じでディアナが言って、「違いない」とヘレンが笑い、釣られるように家族全員の笑い声が今に響くのだった。

## つくるもの

2021年11月8日

　まだストーブやクロスボウを作る前、いつもの納品物を作っていた休憩中のことだ。

「そういえば、ここって武器しか作らないの？」

　ふと、そんなことをアンネが言った。

「いや、特にそう決めたわけじゃないぞ」

　言って俺は鍛冶場においてある飲料水用の水瓶から柄杓でカップに水を汲んで飲み干す。

「初めて街へ行ったときは鎌なんかもあったよな」

　サーミャが懐かしむようにそう言った。あれももう半年以上になるんだっけか。

　その後、武器に専念してリケが来てカミロのところに品を卸すようになって……。

「そもそも今使ってる斧だの鍬だのはここに来てから作ったやつだぞ」

「あの使いやすいの、売れるんじゃない？」

　再びアンネが俺に言った。まぁ、俺も最初はそう思って意気揚々と街へ鎌だのを持っていったわけだが。

「それがなぁ、ことはそう簡単じゃないんだよな」

　街には領主お抱え、つまりはエイムール家お抱えの鍛冶屋がいて、農具を作ったり修理したりといったことは、その鍛冶屋がすることになっている。

　それでことが足りてしまうため、売って売れないこともないのだろうが、基本的には誰も買っていかない。

　今も作っているナイフは下町の農業をしない人達が買っていってくれるので、なんとかなったわけだが。

「それ以外のものも、あんまり売れそうに無かったからなぁ」

「鍋とか？」

「だな」

　よほど傷んだなら買い換えるのだろうが、ちょっとした穴あきなんかは鋳掛け屋の領分で、直して使い続ける家のほうが多い。

　となれば、そうそう売れるものではない。下町の人々の感覚からすれば、安いもんでもないし。まぁ、そのたまの機会を狙うのもありだったかもだが、嵩張るからな……。

「かといって、小物は作る手間に比して儲けがな」

　大物でない金属製の食器の需要は庶民にはない。うちで使っているスープ椀やスプーンも木製だし。

　逆にマリウスのとこなんかだと金属製のスプーンなんかもあるんだが、銀製だったりする。無論、そんなものが庶民に買えるはずもない。

　釘やかすがいみたいなものなら多少は需要もあるみたいなのだが、その手間に対して数を作ってもそう大した儲けにはならないのだ。

　いきおい、そこそこの手間で儲けられる武器を作ることが多くなってしまうというわけだ。

「そうは言うけど、大抵のものはもうカミロさんが買ってくれるんじゃ？」

「それはそうなんだけどな」

　アンネの言葉に、俺は肩をすくめた。何を作っても「売るあてはある」と言って買ってくれるだろう。それこそ銀食器でも。……銀で食器作る時って鍛冶屋のチートきくのかな。

　そしておそらく実際に売ってしまうのがカミロの才覚というやつである。自惚れがすぎるのもなんだが、これまでの話でもあったように俺の作ったものでも売れないときは売れない。

　そしてカミロは不良在庫をいつまでも抱えているようなタイプではない。だからこそ帝国や北方にまで手を広げることができたのだろうが。

「もうちょっとのんびりやっていける確信が持てたら、そういうのをメインに作っていくのも悪くないかもな」

　俺が言うと、なぜだかアンネはニッコリと笑った。

「ま、カミロが困らん程度に、だけど」

　今度は他の皆も笑う。

「さ、続きをやっていこう」

　皆の了解の声と、火があげるゴウゴウという音が鍛冶場に響いて、俺たちはいつもの作業に戻っていった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　明後日の11月10日に書籍最新５巻が発売となります。

　早いところでは明日にも入荷するところがあるかと思いますので、是非書店にお立ち寄りください。

## 冬の衣装

2021年11月10日

「世はなべて事もなしか」

「そうだな」

　俺が言うと、カミロは口ひげをいじりながら頷いた。

　冬に備える、ということでストーブを作り始める直前、俺たちは納品物が揃ったので先にカミロのところに納品に来ていた。もちろん、事前にハヤテに連絡してもらっている。

　ハヤテはカレンさんが都に留まり、“北方使節団”が北方へと帰った当初こそ多少の戸惑いが見えたが、今はのんびりしたここの暮らしにも慣れてきたようだ。

　もし、時折飛ばしてあげたほうが良さそうなら、あまり用事がないときでもカミロのところに飛ばしてあげようかなと思っていたのだが、どうやらその必要はなさそうでそこはホッとした。

　それはともかく、納品のときに色々カミロから話を聞いたが、都でも今は特に何も動きはないそうだ。北方からも特に連絡はなし。

　カレンさんがそろそろ作ったものを送ってくるかもな、くらいなもので、マリウスの領地――つまりはこの街だが――でも特に大きな問題は起きてないらしく、特に遠征なんかもないそうだ。

　いや、遠征はちょこちょこ行われてはいるみたいなのだが、マリウスが家督を継いだあとにポンポンと成果をあげてしまったため、しばらくはそういう「わかりやすい」仕事はないらしい。

　侯爵あたりも忙しくはしているようなのだが、いずれ俺のところにまで回ってくるような話はないらしい。「あの人なりにお前に気を使ってる部分がある」とはカミロの言だが。

「じゃあ、何かあったら遠慮なく連絡をくれ。次は連絡したように３週間後だ」

　そう、１週間と少しで納品物が揃ったので、先に納品して間を長くとり、そこで冬支度を整えてしまおうというわけである。２週間弱冬支度その他の作業に打ち込み、その後の１週間で納品物、そして納品というスケジュールにしたわけだ。

　作業が早く終われば、本格的に寒くなる前にちょっとしたお出かけもありかな、と考えている。本格的な寒さ到来となれば外に出る機会も減るだろうしな。

　そうして納品を済ませ、荷車に戻ると３週間分の炭や鉄石だのといった仕事に使うものの他に、どーんとでっかいものが乗っていた。布と羊毛である。家族

「そういえば、暖房があるから家の中はともかく、外に出る時に寒いよな」

「そうねぇ。一応みんな外套はあるけれど。それとも、何か北方には良いものがあったりする？」

「そうだなぁ……。ああ、あるよ。ちょうどお誂え向きのが。よそ行きには向いてないけど、近くをうろつくくらいなら十分だ」

　来る途中、かなり冷たくなってきた風を感じながら俺とディアナはそんな会話を交わした。それを作る材料がカミロのところにあれば仕立てるということになったのだ。

　ストーブを作っている間は俺とリケがメインで、他のみんなは多少手伝ってもらうことがあるにせよ、手が空くことが増えてしまうだろう。その手持ち無沙汰の解消でもあった。

　丁稚さんにいつものようにチップを渡し、街路を進み、衛兵さんに挨拶をして街を出た。

　街道で、少し窮屈な荷台の上、窮屈さの原因である小山を見ながらリディが言った。

「“ドテラ”でしたっけ？ カレンさんが着てた服みたいなやつですよね？」

「近いけど、どっちかと言うと彼女の伯父さんが着てたほうが近いかな」

　カンザブロウ氏は羽織を羽織っていた。あんな感じの上半身だけのコートで、綿とか羊毛を入れてモコモコした感じにしたやつ、というアバウトな説明をしたのだが、なんとなく伝わったようである。

　どっちかというと「鎧下みたいなもんか」とヘレンが納得したのも大きいようだが。鍛冶屋に生まれ育ったリケがそれで納得できるのはともかく、ディアナとアンネが「なるほどな！」という顔をするのはなんだろう、どことなくおかしいような気がしないでもないが、今更か。

　まぁ、そんなものではあるが、着るものということに違いはない。女性陣（つまりは俺以外の全員だが）はデザインはともかく、どこかに誰のものかわかるようなアップリケをつけようだの、クルルやルーシーのはどうしようだのと盛り上がっている。

　それをにこやかに眺めながら、クルルの牽く荷車は街道を進んでいく。そして、荷車が森に入る直前、準備を後押ししてくれているのか、とびきり冷たい風がビュウと吹きつけ、否が応でも冬への備えを意識するのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　本日、書籍版最新５巻が発売になりました！ どうぞ書店や各種電子版にてお求めください！

## 暖かさの元

2021年11月12日

　ゴウゴウと火床の炎が舞い上がる中、ガンガン、と板金を叩いて延ばす。俺が今作っているのは薄くて細長い板だ。

　少し離れたところでは、サーミャとリケも板金を叩いている。できないわけではないのだが、サーミャは裁縫があまり得意ではない。主に手の構造の都合なのだが、無理に裁縫をやらせてもなぁ、と思っていたところ、

「サーミャの分はこっちで作っておくわよ」

　とディアナが言ってくれたので、それに乗っかりサーミャはストーブの方で手を借りることにしたのだ。

　ストーブ本体の構造はサーミャとリケに教えておいた。と言っても、前の世界のもののようにキッチリ２次燃焼までしてくれるような複雑な構造ではない。耐熱ガラスの窓もないので、「鋼で覆った焚き火台」、あるいは「口の広いロケットストーブ」のようなものである。

　そして、今サーミャとリケが作っているのはそのストーブ本体部分である。

　で、俺が作っているのは何かと言うと、排気用のパイプだ。パイプの作り方はいくつかある。円柱を作ってからくり抜くように伸ばして穴をあける方法が手っ取り早いし、継ぎ目も少なくて済む。

　問題はくり抜くための道具の長さ以上のものは作れないことで、そこで一旦区切って継ぎ合わせて長いパイプにしていくことになる。

　一方、薄い板を螺旋状に巻いていき、縁を継いでいく方法。これは長さの分だけ継ぎ目が出来ることになるが、理屈の上ではどこまででも長いものが出来るはずだ。

　本来なら継ぎ目の長いこの方法は煙を排出するパイプにはあまり向いていなさそうなのだが、そこはチートの援助を借りれば文字通り水も漏らさぬパイプを作ることが出来る俺である。

　逆に言えば、うちの工房では俺が担当するのが一番良いということだ。

　なので、そのパイプを作るべく、薄く細長い板を作ろうと金床に熱した板金を置いて一生懸命に叩いているわけだ。

　細い金属板の需要がそれなりにありそうだし、うちの作業でも何かと便利なのは間違いないので、圧延機みたいなものを作ってもいいのかなと思うこともある。

　水車動力を使えない我が工房で動力源をどうするのかという問題はあるが、今もこんこんと湧き続けている温泉から湯を引っ張ってくることも不可能ではないし、時々しか使わないならクルルにお願いすることも出来るだろう。

　ただ、前の世界だとレオナルド・ダ・ヴィンチのアイデアスケッチにあったとかなんとかって話で、ギリギリ導入できなくはないのだろうが、この世界だとちょっと新しいんじゃないかって気がするんだよなぁ。

　そのあたりを気にしなければ、何だって出来そうだとは思う。弾丸をどうするかを別にすれば、ハンドガンくらいならなんとかなるだろう。

　ただ、それをしてこの世界に悪影響を及ぼしたくはない。たとえ世界の強制力が働いてそうはならなかったとしてもだ。

　それに今回の場合、圧延機を作ればそれは「均質な金属板を安定して大量に作れる機械」なわけで、ディアナやアンネは外に出すこともあまりないとは思うが、それ以外の客人なりが外に出した場合、軍事力に大きな差が出かねない。

　まぁ、サスペンションも同じく軍事力の差には繋がるだろうが、あくまで間接的なものであって、武器の大量生産につながる（多分）のとはちょっと話が違う、と俺は思っている。

　そう言う国家間の力の差を作ってしまうことも、出来れば避けたいのだ。

　その逆で、例えば勇者と魔王のどっちにも同じ武器を渡してやる、とかならいいだろう。まぁ、そんな機会はまずないと信じたいが。

　そんなわけで、頑張って手作業で板を作っているわけだ。

「ふう」

　ビロンと伸びた鋼の板を木の棒に巻いていく。これ、このままゼンマイに使えそうだな……。前の世界で製麺機で延ばした生地を棒に巻き取っていく映像を見たことがあるが、ちょうどそんな感じである。原理的には一緒か。

「そっちはどうだ？」

「まぁまぁできてますよ！」

　一息入れるついでにリケに声をかけると、朗らかな声が返ってきた。ゴツい金属製の箱のようなものが少しだけ形を見せようとしている。

　その傍らではサーミャが鎚を振るい、同じように形を作っていた。リケのと比べてはいけないのだろうが、そうでなければ悪くないように見える。

「筋が良いな」

「ですよね。手伝ってもらってきた影響ですかね」

　サーミャは時々リケがやっている作業を手伝っている。ちょうど今みたいに、だ。

「そう言えば、この３人だけで鍛冶場にいるのも久しぶりか」

「あ、そうですね」

「なんかめっちゃ昔の気がする」

　俺とリケの言葉に、手を止めたサーミャがあたりを見回して言った。

　静かに、しっかりと音を上げる火床。それ以外には俺たちだけ、というのはディアナが来るよりも前以来の話だ。

「少しづつ増えていって、今があるんですねぇ」

「リケがうちの婆ちゃんみてぇ」

「なっ！ ちょっとサーミャ！」

　そう言って怒ってみせるリケ。俺とサーミャが笑い、リケもつられて笑う。さて、ここから増えた家族のためにも、もうひと踏ん張りするか。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

書籍版５巻が一昨日の１１／１０に発売になっております。全国書店様にてお求めいただけるかと思いますので、ぜひよろしくお願いいたします。

## 彼らの冬

2021年11月15日

「そういえば、ここらの動物は冬ごもりするのか？」

　夕食後のひととき、俺は茶をすすりながらサーミャに聞いた。生物学的な話が知りたかったのもあるが、そっちは「おまけ」みたいなもんで気にしているのは、

「食料の確保が問題になるかなぁと思ってさ」

　今現在、我が家の食料庫には十分な備蓄がある。家と食料庫を含めた複合的な防御施設として構築すれば、周囲からの補給がなくても１ヶ月ほどはなんとか耐えられるはずだ。武器の補充もできる設備が整っているし。まぁ、最後の方は大分悲惨な事になっているだろうが。

　十分と言っても９人家族ともなれば、消費の激しさはそれなり以上なわけで、クルルやルーシーもほとんど食べないが、それでも体格に応じての消費はあるのだ。

　リケ、ヘレン、そしてアンネのよく食べる組もいれば尚更である。別に食わないほうがいいと思っているわけでもないが。

「うーん、ここらは寒くはなるけど、滅多に雪は降らないし、草なんかが埋もれたりするわけじゃないからな」

「ふむ。一応狩りはできそうか」

「だな。でも、あんまり出歩きはしないから多少苦労することにはなると思う。アタシは１人だったから、あんまり焦ったことはないけど、エイゾウに言われてみれば、人が増えたら必要そうだって思えてきたな。今のうちにちょっと多めにとってくるのはありじゃないか」

　冬眠するほどではないが、動きは鈍るか。寒いと動いたときの消費カロリーは増える。前の世界の軍用レーションでも北欧のはかなりの高カロリーを誇っていたはずだし。

　そうなると同じ距離を移動したとしても、摂取すべきカロリーは増えることになり、摂取するために動くと消費カロリーがと、効率が悪くなっていってしまう。人間がダイエットする場合（この世界ではあまり縁のない概念だろうが）には有効だが、野生の動物にとっては死活問題である。

「狼達は？」

「たまにいるけど、あいつらもあんまり動かないな。固まって寝てるところのほうをよく見る」

　サーミャが言うと、ガタンという音がディアナの方から聞こえてきた。その場面を見てみたいのはよく分かる。前の世界のキツネ村でモフモフのキツネが固まって寝ているところを思い出した。

「狼達の寝てるところは機会があれば見られるとして、少し多めに狩ったとしても食料庫はまだ空いてたよな？」

「空いてますよ。この間、芋を入れたときは十分そうでした」

　答えたのはリディである。彼女は中庭にある畑担当でエルフの種からできる作物を収穫しては食料庫に運んでいるので、彼女が即答するなら大丈夫そうだな。

　獣人たちの風習として「狩りの翌日はすぐに狩りには出ない」という決まりがある。あまり狩りすぎないようにするための配慮なのだろう。この広大な“黒の森”と言えど、すべての獣人が毎日狩りをするようになれば動物の数は漸減していく。それを防ぐためなら仕方のない話だ。

　だが、逆に言えば「間をあければ、また狩りに出ても良い」ということでもある。実際「１週間に２回出ちゃダメという決まりはない」らしい。

　実際そのスパンで出ていくかはさておき、ストーブの製作とクロスボウの合間合間でこまめに行こうということになった。その間もメインの俺とリケは鍛冶場に残って作業しているから、作業スピードが落ちすぎてマズいということもないだろう。多分。

「鹿も猪も、脂を蓄えてるんだろうなぁ……」

「あー、そうだな。動きが遅いのはそれもあるかもな」

　脂肪というのは生命活動の維持にはなかなかに有効なやつなのである。あまりつきすぎたりすればよろしくないが、野生の鹿や猪にメタボの懸念はいらぬ心配というものだろう。

　燻製器、という単語が頭をよぎった。ちょうどストーブを作っているし、改良すれば作れそうな気はする。しかし、これは鍛冶場組の手が空いたらだな……。

「とりあえず、そのへんは任せるから、行くのに良さそうな日があったら教えてくれ」

「わかった」

　サーミャは大きく頷く。俺はそれを見てから、茶を飲み干し、いつものように「先に寝る。おやすみ」と言い残して、自分の寝室に引っ込んだ。

## ちょっとした成長

2021年11月17日

　少しずつ厳しくなっていく朝の冷え込みと、わずかばかり早くなっていく日の入りが、秋を終えて冬に入りつつあることを示していた。

　まだベッドの布団に鹿の毛皮あたりを追加しようと思うほどではないが、いずれそうする日は近そうだ。

　森の中の一軒家、気密という概念にはあまり縁がない。ある程度は隙間も塞がれているのだが、あちこちから気温の違う空気が流れ込んでくる。

　まぁ、ストーブを使うにあたって酸欠状態にならなさそうなのは朗報ではあるか。暖房の効率は悪くなってしまうが。

　今日はそのストーブ作りを続けている。サーミャとリケが本体、俺が煙突。とりあえずは試作のようなものを作り、いつも飯を食べている居間の方で試すのだ。

　ガンガン、カンカンと金属同士のぶつかり合う音が鍛冶場に響く。

「親方、ここなんですけど」

　時折、リケに尋ねられて教える以外には静かなものだ。サーミャも俺が教えている横でふんふんと頷いているが、言葉は発しない。轟々と炎が舞い上がり、再びカンカンと音が響く。

　そんなときである。バタンと鍛冶場と家を繋ぐ扉が開いた。何事かと一瞬手を止めると、そこにいたのはディアナだった。

　いや、ディアナだけではない。ディアナの横にいるのは、助けた頃と比べるとかなり大きくなってきたルーシーだ。

「ほら、見てみて」

　ディアナはルーシーを前にそっと出した。明るい桃色のウェアを着せられて、尻尾をパタパタさせている。ルーシーのドテラができたらしい。

「ルーシーのから作ったのか」

「小さいし、ハヤテと違って翼じゃないからね。練習にもちょうど良かったのよ」

「なるほど。ここは暑いから一旦そっちで見せてくれ」

「作業は？」

「丁度いい頃合いだし、昼にしよう」

　俺がそう言うと、サーミャとリケが頷き、仕事道具を置き場所に戻す。火は完全には落とさないようにして、鍛冶場の扉を閉めた。

　肌寒いが天高い空の下、俺達は食事を広げていた。折角なので、クルルやハヤテにも見せてやりたいとの希望もあってのことだ。昼飯は炙った干し肉と焼き立て無発酵パン、スープにお茶というラインナップで、基本的に温かいものばかりなので肌寒さを凌ぐには十分である。鍛冶場組はちょっと前まで暑い中作業をしていたし。

　ルーシーは尻尾をフリフリ肉を平らげると、あたりを走り回る。足をドテラにつけた紐のループに通すようになっていて、走り回っても大きくズレる事はなさそうだ。その後をクルルとハヤテが追いかける。

　地からはクルルが、空からはハヤテだ。ルーシーは２人の追撃をフェイントも織り交ぜながら、巧みに躱していく。片側にだけつけられた、花のアップリケの可愛らしさと対照的な機敏な動き。

「最近は夕方にあんなのしてるのか？」

　俺が夕飯の支度をしている間、家族のみんなは外で涼んだり、剣や弓の稽古をしたりしている。その時、うちの娘さんたちは追いかけっこなりして遊んでいるらしい。

　前に時間に余裕があって見たときは、あそこまでではなく、本当にチビっ子達がおいかけっこしているような感じだったのだが。

「こないだアタイも追いかけっこに混じって、ルーシーを捕まえたんだよ」

　そう言ったのはヘレンだ。“迅雷”の二つ名を持つ彼女の脚は非常に速い。前の世界でなら、さぞかし有名な陸上選手になったことだろう。人類未踏の記録を打ち立てたかも知れない。

　その彼女に追われたら、この森で最速を誇る生物に数えていいだろう狼のルーシーも太刀打ちできなかったというわけだ。幾度となくあった光景のはずなのだが。

「そしたらさあ、突然クルルとハヤテとあんな感じでやりだした。とりあえずアタイ達よりもあっちのほうが重要らしくて、あんまり遊んでくれないんだよな」

　ヘレンは若干口を尖らせる。これではどっちが親かわかったものではない。俺は苦笑した。

「ヘレンを負かせる自信がついたらまたやってくれるだろ」

「ルーシーが勝てなかったら？」

「そりゃまた修業の日々だろうな」

「わざと負けようかな……」

「ルーシーだからなぁ、バレるんじゃないか？」

「ぐぬぬ……」

　ヘレンはギリギリと歯ぎしりをした。まぁ、子が成長しようとしているのだ、親としては見守ってやろう。

「いずれ堂々と負かされる日が来るさ」

　俺はそう言った。その時、ルーシーはどういう選択を取るのだろうか。もしこの家を去ることになったとしたら、それはとても寂しいことだが、同時に喜ばしいことだろう。

　そう思いながら、地面を桃色の風のように駆け回るルーシーの姿を目で追うのだった。

## 暖かさ

2021年11月19日

　夕食を終えた後、俺達は居間の片隅に集まった。そこにはどでん、と四角い箱が鎮座している。箱は鋼鉄製で、４本の脚が生えていた。

　箱からはパイプが伸びていて、その行く先は壁に空いた穴を経て外だ。

　鎮座した箱は言うまでもなく完成したストーブである。パイプからの輻射熱は居間に設置するストーブでは考えないことにした。ストーブにはちょっとした彫刻と、我がエイゾウ工房のマークが刻みこまれている。

　ストーブの周りには柵も置いた。クルルは家には入れないから良いとして、ルーシーとハヤテが触れないようにだ。２人とも賢いからある程度理解はしているだろうが、念のためと言うやつである。

　一瞬、前の世界で「ひどい火傷にならないくらいの温度の時にわざと触らせる」という方法があったのを思い出したが、それはすぐに頭から振り払う。あまり物騒なことはしたくない。

　ストーブの側には割った薪が積まれていて、その分少しだけ居間が狭くなっているが、日々の生活に影響するほどではない。元々それなりに広いからな……。

　うちの薪――というか、木材は乾くのが速い。普通よりかなり速いことを知ったのはつい最近の話だ。

　居間に設置する前、正真正銘ただの箱と言っていいくらいのときに、試しに薪を入れて燃やしてみたのだが、そのときにリケがボソッと呟いた一言がきっかけである。

「いつも思うんですが、“黒の森”の木は乾くのが速いですねぇ」

　その言葉に、俺とサーミャは目を丸くした。長くても１ヶ月くらいで乾くのが普通だと思っていたからだ。実際に庭の片隅に転がしてある伐採した（獲物の運搬台をバラしたものも含まれるが）木材はそれくらいか、もう少し短いくらいで乾燥していたので、建材だの燃料だのに使っている。

　家族が住んでいる部屋は建て増ししたので、全てそういった木材でできている。クルルとルーシー、ハヤテのいる小屋もそうだ。

「えっ、そうなのか……？」

　驚きながらも、おずおずと聞いたのはサーミャだった。俺は上手く声が出せないでいた。

「あれ、知らなかった？」

　リケがサーミャに言った言葉に、俺とサーミャが揃って頭をブンブンと縦に振る。

「普通は早くても半年、大体１年とかそれくらいはかかるわよ」

「そうですね」

　ため息をつきながらディアナが言って、リディが引き取る。ディアナが知っているのはなぜなのかはさておき、リディも言っているということは、

「アタイはてっきり分かってるもんだと思ってた」

「同じく」

　ディアナのようにため息をつくヘレンとアンネ。知らぬは俺とサーミャだけだったようだ。

　家族のみんなに聞いてみると、俺とサーミャ以外は「これは“黒の森”だからだな」と思っていたようである。俺とサーミャは「切り出した木」はここのしか知らないので「木とは押し並べてこういうものだ」――俺の場合はこの世界の、が頭につくが――と思い込んでいただけなのだが、何も言わないので皆は「当たり前過ぎて言わないのだろう」と思っていたらしい。大きな誤解である。

　とりあえず薪をストーブに放り込んで魔法で着火し、パチパチと爆ぜる音が静かに響き始めると、自然と乾くのが早いのは何故かという話になった。乾燥が早くて曲がりや歪みが大きくなるということもないし、燃やした時にやたら煤が出るということもないみたいなので困ることは何一つ無いのだが、分からないのは納まりが悪いような心地になるからだろう。俺もその１人だが。

　雨が少ないからか？ いやいや、それならば街でもそう変わりないだろう、他に早いところはどこだろうか、帝国は比較的早かったけど、この森ほどじゃないわねぇなどと話していると、

「おそらく、この森の樹木は生長に魔力も併用してるんじゃないでしょうか」

　と、リディが言った。

「クルルみたいに魔力を併用していれば、水や養分が少なくても大きく育つのは不思議じゃないわね」

「水が少ないから、乾くのも速いってことか」

　ディアナが言って、アンネが続き、リディは頷く。

　遠くに山はあるものの、平原の真ん中と言っていい場所に広大な森があるのも何かおかしいなとは思っていたのだ。一番の問題は、雨季があるにしても森の規模に比して降雨量は大したことがない。俺は湖で湧く以外に伏流水などがあって、そのおかげで木々がここまで広がったのだろうと推測していた。

　実際に掘れば井戸は湧くし、温泉も出た。排水できるところもあるし、そうおかしな推測でもないと思っていたのだが。それでも忌避されるうちの魔力よ……ん？ まてよ？

「畑の作物が普通……と言ってもエルフの作物での普通だけど、とにかく特に枯れたりしないのはなんでだろう？」

　畑はうちの中庭にある。ある意味一番魔力が濃いところにあるはずなのだ。エルフの作物は魔力があることで成長が早くなり、年に数度の収穫ができるものすらある。

　エルフの森以外で育てると普通の作物と変わりなくなってしまうのは、魔力の有無の違いだと、リディが言っていた。

「私達エルフと同じで無尽蔵に吸収しているわけではないからというのも考えられますね」

　エルフは生命の維持に魔力を必要とする。街や都でエルフをほとんど見かけないのはこれが理由だ。エルフのリディも故郷の森を追われたあと、都などではなくうちに来たのは魔力のことがあってである。

　そして、魔力の濃い“黒の森”にあって更に濃いうちにいても、リディが「魔力酔い」のような事にならないのは、魔力をガンガン吸い上げたりしているわけではないから、だそうである。

　エルフの作物も意思があるわけではないだろうが、何らかの仕組みで一定以上の魔力を吸収しないようにしているなら、普通に育ってもおかしくはない。

「ふむ……」

　俺は顎に手を当てて唸った。ん？ あれ？ なんだか、鍛冶場にいるような気になってきたな……。

「あ、そうか」

　くるりと見回すと、自分はここにいると言わんばかりにストーブが熱を放ちはじめている。それで俺のところまで暖かい空気がやってきて、火床に火を入れたときのように感じたようだ。

「おおー、ちゃんと暖かいな」

「いいわね、これ」

　あまり寒さには強くないらしいディアナが、俺の横に来てストーブに手をかざす。

「あんまり近づきすぎるなよ」

「分かってるわよ」

　そう言うディアナに小さく苦笑しながら、開いたストーブの口に薪というご飯を入れてやるのだった。

## 森の動物たち

2021年11月22日

「それじゃ行ってくる」

「行ってらっしゃい」

　出かける準備を整えたサーミャ達を、家の出口から見送る。彼女達は今から狩りに出るのだ。

　メンバーは俺とリケ以外の全員で、クルルにルーシー、ハヤテも同行する。

　ハヤテは少し迷ったのだが、さしあたって連絡すべきことも無いので、同行させて何かあれば手紙をつけるつけないによらず、ここへ帰すように言ってある。

　ハヤテが帰ってきて手紙がなければ、最後に放たれたところへ俺（とリケ）が急行する手筈である。万が一その場に留まっていなくとも、探す範囲は多少絞られるので、全くのノーヒントよりはマシだ。

　最悪の場合はリュイサさんに頼って居場所を教えてもらったりすることも検討するが、それは最後の手段にとっておきたい。

　彼女とは特に敵対はしていないどころか、友好度で言えばかなり上位だが、なにせ人間の想像と力の及ぶ外にいる存在だ。借りをあまり作らない方が得策だろうと考えている。今のところ貸しの方が多いような気がするから、その辺りを盾に取ることはできるだろうけど。

　まぁ、何か危険な目に遭うとしたら、サーミャ達よりも俺達だろうが。何せ戦力差がすごいからな……。

　やはり砦化を考えたほうがいいかな。負傷させるような罠とまでは言わずとも、不意に近づくと侵入者に警告を与えるようなものか、仕掛けで家に警報を発報するようなものがあったほうが良いだろうか。この辺は追々考えるとしよう。

　狩りの最中、ハヤテは普段はクルルの背中に止まっているらしい。クルルは狩った獲物を運ぶときに大活躍をする。基本狩りの道具は各々が持っているので、行き帰りの道中でクルルが持たされるような荷物は存在しない。

　それでだろう、移動中のハヤテのお気に入りプレイスはクルルの背中で、揺られながらのんびりくつろいでいるらしい。人間の年齢になおせば一番年上のはずだが、妹に甘えてはいけないこともないからな。一番身体が大きいのはクルルだし。

　クルルの背中以外ではアンネの肩か頭に止まることが多いと聞いた。背がかなり高いからだろうと思う。この話をしたとき、重くないのかアンネに聞いてみたが「多少の重みはあるけど全然」とのことだったし、本人も少し嬉しそうなので注意することもないと思って何もいってない。

　クルルは素早い動きで勢子としても優秀らしい。その間はハヤテの休憩所としての役目はなしだ。ハヤテも樹上に上がってあれこれ鳴いているそうなので、俺達には分からない「娘たちだけに通じる言葉」で指示をしている……というのがサーミャの推測だ。

　ルーシーもかなり大きくなってきて、狩りでも活躍の場が増えているようだ。魔物化している影響らしいのだがかなり賢く、猟犬ではときに獲物に文字通り「食いつく」ことがあるが、ルーシーはそういったことを全くせずに獲物の動きを封じたら、それ以上のことは言われるまでしないそうである。

　このあたりはディアナが目尻を下げながら力説していた。

　うちのすぐそばにはあまり動物たちが近寄らない。魔力が濃いゆえで、少し間違えばルーシーと同じく魔物化してしまうリスクがあることを自然と理解しているのだろう。

　その代わりなのかどうかは知らないが、多少魔力の少ない温泉の方にはよく動物が来る。正確には湯殿には入れないようにしているので、排水用の池にだが。

　そこには狼や猪、鹿はもちろん、狸に虎もやってくる。小さい方ではリスや小鳥たちも浅いところで水浴びをしているところを見かけるので、今のところ熊以外にこの森でよく見かける動物は一通り見かけることになる。

　前の世界のテレビ番組ではジャングルの中の監視小屋に滞在して、虎だと騒いだ挙げ句が鹿だったとかあるが、ここではそんなこともなく色んな動物が白昼堂々見放題と言うわけだ。

　ちなみにメインは池が溢れたりしていないかのチェックであって、湯に浸かっている動物を見てほっこりすることではない。断じて。

　池にいる動物たちは狩りでは狙わない、というのがうちの家族の暗黙の了解になっていた。やっていることに大差ないと言われても、くつろいでるところを仕留めるのは気が引けるしな。

　そんなわけで、時々こっちを振り返る娘３人の姿が森の木々に覆い隠されるまで、俺とリケは手を振るのだった

## 小さな収穫祭

2021年11月24日

　数日後、俺達はテラスの外にテーブルを運び出して、屋外で夕食をとっていた。

　これからはもっと寒くなり、これをするには厳しい季節になっていく。なので、できるうちにやり納めをしておこうというわけである。

　今日は畑でとれた野菜もふんだんに使っている。生野菜、というわけにはいかないが、温野菜にワインビネガー（わざわざ買ったわけではなく、新しくワインを買ったときに残りで作った）を使ったドレッシングをかけたのも用意した。

　あとは猪肉や鹿肉のソテーに芋やニンジンっぽいのを湯がいて付け合わせにしたり、だ。

　いつもは魔法の明かりと焚き火が１つきりだが、今日は焚き火を２つに増やしてある。だからというわけでもないが、まだ調理していない、串を刺して塩コショウしただけの肉も用意しておいた。適当に炙って食うのもたまには良いかなと思ったのだ。

　そこにワインと火酒があれば、ささやかだが十分なごちそうである。

　乾杯の声が澄み渡り、星々がさんざめく夜空の下行われる小さな収穫祭に響く。いつもなら家族だけの小ぢんまり――と言っても総勢１０名の大所帯でもあるが――とした宴に、今日はゲストがいた。

「北方風の味のものってはじめて食べたけど、美味しいわね！ これ！」

　そう言って大層ご機嫌に肉を頬張り、ワインを呑んでいるのはリュイサさんだ。彼女は

「喜んでいただけるのは嬉しいんですが、その……大丈夫なんですか？」

　俺は思わずそう言った。この森の自然の頂点とも言えるリュイサさんが、この森でとれたもの（ワインは違うけど）に舌鼓を打っている姿には若干の違和感を覚えないでもなかったからである。

　だが、彼女はキョトンと目を丸くしている。

「え？ なにが？」

「いや、出しておいて言うのもなんですが、その肉って、この森の動物のものなわけですけど良かったのかなと」

「ああ」

　リュイサさんはニッコリと微笑んだ。「慈母の微笑」というタイトルで絵を描けと言われたら、今の彼女をモデルにするかも知れない。

「こうして捕らえられて、食べられるのは自然の営みの１つでしょ？ エイゾウくんが気にすることないわよ」

「それなら良いんですが」

　俺は苦笑した。聞きたかったのはそこではないのだが、本人がいいと言うなら気にしないようにしておこう。

　そしてその傍らで、

「ほわぁ」

　と声をあげたのは小さな、人形のような姿。妖精族の長であるジゼルさんだ。炙ったばかりの肉をディアナに切り分けてもらい、頬張ったところのようである。

「こういうのは普段食べないので……」

　クスリと笑ったディアナに向かって、照れくさそうにジゼルさんは言った。体が小さいから、捕まえたとしてウサギあたりが限度だろうし、猪や鹿の肉にはあまり縁がないだろう。以前うちに来たときにも食事は出したが、それとはまた違ったものだし。喜んでくれているなら出したかいがある。

　２人がなぜいるのかというと、リュイサさんは温泉に来たついでに立ち寄ったところ、ジゼルさんは連絡がないかと確認に来たところで、丁度俺達が準備をしているところに出くわし、そのまま誘ったのだ。

　最初ジゼルさんは「いえいえ、悪いですし」と遠慮していたが、十分に量があることと、そもそもジゼルさんは身体の大きさ的にもそんなに食べないでしょうと説得すると興味はあったのか、あっさり参加を決めてくれた。

　リュイサさんは俺達が誘うより前に、何の準備か説明した時点で参加を決めていた。準備を手伝ってくれたけど。

　やはり、森の動物達も冬支度をはじめているらしい。リュイサさんが温泉に来たのはその見回りのついでだったのだそうだ。本人曰くは、だが。

　ジゼルさんも同じように、植物たちの様子を見るついでに連絡板を見に来てくれたらしい。最近はあの奇病が発生することはなく、リージャさんもディーピカさんも健康に過ごしているそうだ。

「全ての命が他の生命によらず生きていければ良いんでしょうが、そうはいかないですからね。それはそれとして、いただくものに感謝するのはとてもいいことだと思います」

　ふんわりとお人形さんのようなジゼルさんが笑った。なんだか彼女のほうが“黒の森”の主っぽいなと、失礼なことを内心思ってしまう。

　こうして、期せずしてこの森での最賓客を迎えた収穫祭は、焚き火の火が消えるまで続いたのだった。

## 冬よ来い……？

2021年11月26日

　そして数日が過ぎた。物自体はシンプルなのが功を奏してか、ストーブは十分に揃い、熱を伝えるための煙突も巡らせてある。

　居間に大きめのが１つ（これは最初に完成したやつだ）あり、俺の部屋にも１つ、これは客間も暖めるようになっている。もちろん、色んな意味で客に火を扱わせるわけにはいかないからだ。

　ディアナ達のはディアナの部屋に１つ置くことになった。一番寒がりなのは彼女だったからだ。ディアナ、サーミャ、リケの部屋を暖める。

　比較的寒いのに慣れている３人のは、アンネの部屋に置くことになった。

　リディは森で暮らしていたし、ヘレンは傭兵ということもあって厳しめの環境にも耐性がある（と言葉は違うが言っていた）ので、帝国がここよりやや寒冷な気候だと言っても、そこは皇女様ということもあってアンネの部屋になったのだ。本人は「気にしないのに」と言っていたが、家では暖炉もあったと言うし、あったほうが良かろうという結論になった。

　期せずして、うちでは身分の高い２人……そう思われている、と言うことであれば俺も含めて、居間においてあるものを除いては全て身分の高い（高かった）人間の部屋に設置されたことになる。

　ディアナもアンネもなんか少しワクワクしているみたいなので、それならそれで良かったかも知れない。

　クルルたちの小屋については意見が割れた。時間はあったので、もう１つ作って小屋に設置しようかという話も出たのだ。

　ただ、当然それには危険が伴う。何せ火だし、小屋は木造だ。裸火にならないように出来るが、それでも事故を防げるわけではない。朝起きたらクルルやルーシー、ハヤテが火傷していたなんてことは避けたい。

　それはそれとして、寒いのはかわいそうだ、との意見も出た。まぁそれも大いに分かる。寒空の下、凍えてやしないか、と思うとそれはそれで気が気でないし。それに、うちの娘達は非常に賢い。火傷をするような真似はそうそうしないだろうと言われれば、俺も頷く。

　しかし、結論としては小屋にストーブを置かないことになった。

　その話になった夕食後のこと。

「ルーシーはこの森の生まれだからなぁ。将来を考えると、ここを居心地良くしすぎるのも良くないかも知れん」

　俺はそう言った。かなり体が大きくなってきて、子狼から子が外れつつあるルーシーだが、将来的にここを離れて暮らすという選択肢もあるのだ。もし彼女がその選択をするなら、俺にそれを止める気はないことは常日頃から言ってある。

「それはそうねえ……」

　ディアナがやや口を尖らせる。彼女もそのあたりは理解しているのだが、感情としてどこか納得いかないのだろう。それはそれで理解できる。俺もそうであることには変わりないからだ。

「ずっとうちにいるだろうクルルとハヤテ……ハヤテはもしかするともしかするかもだけど、まぁ２人のことがあるのも承知はしてるけどな」

「走竜が広く、暖かい地域の生き物なら……というところですけれど、走竜の大半は少し寒い森で暮らしてるそうですからね。エルフの村の中には大規模に走竜を飼っているところもあるらしいので」

　俺の言葉に、リディが続いた。彼女の言うとおりであれば、クルルも森での生活には慣れているか、これが初めてにしても極端な事態には陥らなさそう、ということだ。まぁもしマズいことになるようなら、カミロも俺に譲ったりはしなかっただろうが。

「んで、ハヤテは北方生まれだよな」

　更にサーミャが続く。この世界の北方が極寒の地域である、ということではないが、ここよりも寒いらしいことはカレンさんとの何気ない会話の中で出てきていた。

　そこで大人になるまで成長してきたハヤテなら大丈夫だろう。

「温泉のとこの池もあるから、寒かったら行くんじゃないか？」

　そう言ったのはヘレンだ。池というのはこの森の動物が浸かりに来ている、温泉の排水を流している池のことだ。あそこなら結構広いし、体を温めるには十分だろう。湯冷めが心配になるが。

　ちなみにヘレンは剣の稽古でディアナとアンネでやるときなんかに足の速さを活かして、池の動物を見に行っているらしい。ディアナが大層羨ましがっていた。増えたりしないだろうな、“迅雷”。

　そんなこともあって、最近はディアナとやり合う機会が増えたらしいアンネがディアナに言う。

「それに、ドテラを着せていたら平気なんじゃない？」

「それもそっか」

　そう、俺とサーミャとリケがストーブを作っている間、皆はドテラ作りを進めていたのだ。それも人間のものよりも娘たちのを優先して。

　それで、桃色のルーシー、薄緑のクルル、黄色のハヤテ、と色違いのドテラを着て飛び走り回っているところを最近は見かける。

「いつもみたいに、羽織らせてあげれば大丈夫だと思うよ」

　皆お茶の中、１人夕食のときに少し飲み残した自分のワインを飲んで、リケが言う。

　娘たちも身体を動かすと暑くなるのか脱ぎたがるのだ。それで紐をくくらずにまとめておき、羽織るだけにしておいてやると自分たちで脱いだりしはじめたので、最近は最初からそうしている。

　流石に脚を通すのは難しそうだが、ひっかぶるくらいまでなら、これも自分たちで出来る（大体はクルルが他の２人にやってあげているが）ようで、気がつけばドテラをひっかぶってウトウトしていたりする。そして俺の肩のＨＰが減ったりもするわけだ。

　さておき、そんなこんなで、危険性が高くなるストーブを設置するのは一旦見送ろうということになったのである。

　これで我が“エイゾウ工房”の冬支度は整ってきた。この世界での初めての冬はどんなだろうか、俺は不安とワクワクを半分半分に感じながら、その日は眠りについたのだった。

=====================================================

本日コミカライズ版１２話が公開になっております。こちらもぜひ御覧ください。

https://comic-walker.com/contents/detail/KDCW\_AM19201711010000\_68/

## 作るもの

2021年11月29日

「やっぱり鎧は作らないんですか？」

「鎧なぁ……」

　一通りの冬支度を終え、ちょっと空いた時間でクロスボウの試作品に取りかかり、まずは機構を作ってみるかと部品に取りかかった俺にリケが聞いてきた。

　俺は手を止めずに答えた。

「ヘレンのは家族だし作ったけど、やっぱりありゃあ時間がかかりすぎる」

　日用品を作らないのは他の鍛冶屋の商売敵になる機会をいたずらに増やしたくないからだが、鎧を作らないのは単純に手間の問題だ。

　要所要所を覆うだけの、ただの鉄板のようなものでいい（それこそビキニアーマーのようなもの）ならどうとでもなるが、そうもいかない。身体の動きを阻害せず、しかして致命箇所は守らなければいけないとなると、チートによってほぼ一発で形を作れるとしてもそれなりの時間をかける必要がある。

　それも、作れるのは板金の部分だけで、そこに鎖帷子もとなると、チートを持ってしても１ヶ月で出来るかどうかといったくらいではなかろうか。

　あれ、輪っかを１つ１つ作った上で、それを繋いでいかないとダメなんだよね……。

　そして、そうまでしても作れるのはたった１人分なのだ。最初に作ったものがナイフや剣だったせいなのか、はたまた前の世界の職業ゆえか、なるべくなら大勢の人に自分の製品を使ってもらいたいという思いが強い。

　二度目の人生で若返っているとはいえ、いつまでも出来るものでもないだろう。１０年も経てば前の世界の身体年齢に追いついてしまうし。

　もう少し若い年齢であれば良かっただろうか、と思うこともないではないが、それなり以上の腕前の鍛冶屋となれば、２０代そこそこでは天才にもほどがあって怪しすぎるだろう。

　今でも十分過ぎるくらい怪しいのに。

「親方の作る鎧って興味ありますけどね」

「よほど珍しい素材でも入手できればかな……」

　例えばドラゴンの鱗とかな。俺は見たことないけど、ドラゴン。アダマンタイトにヒヒイロカネはうちにあるし、あれはいずれ何かの武器に仕立てようと思っているから、やはりドラゴンの鱗なんかの、イメージとして剣にはしにくそうな素材が手に入ったら、だな。

「うーん、残念」

　心底がっかりしたように言うリケの頭をクシャリと撫でる。鍛冶場には今、他に誰もいない。

　サーミャ達は今日も狩りに出ている。とは言っても、肉は十分に得たので半分は休みみたいなもので、どちらかと言えばパトロールに近いことをしてくると、サーミャが言っていた。

　前の世界でも冬眠し損ねた熊は凶暴であるという話があった。実際にそれで大きな被害が出た事件も発生している。

　サーミャ達がやるのはその兆候がないかのチェックらしい。やけにあちこちをうろついている足跡がないかや、変に食い散らかされている跡がないかだ。

　前者の足跡のトレースはサーミャが得意なのは勿論、ヘレンも傭兵の嗜みとでも言おうか、「最近は獣のも分かるようになってきた」そうである。

　そのうち

　後者についてはリディも分かるらしい。「森の危険、という意味ではあそこも同じですからね」とのことだった。あそことはリディ達が住んでいた森だ。

　この“黒の森”がここらでは一番危険な場所らしいが、どこだろうと森である時点で、ある程度危険なことには変わりない。ここに住んでると色々忘れそうになるけど。

　何せ“黒の森”の主認定の「最強戦力」らしいからな。鍛冶屋の身でそれもどうなのかと甚だ遺憾に感じる部分はあるが。

　ともあれ、そうやって森の危険度を探りつつ、もしこの時期にとれる木の実や薬になる植物があれば、それを採集してくるという重大な任務を今、サーミャ達は行っているわけである。

　……娘３人はピクニックくらいに思ってそうだけど。

　森の中を白い息を吐いて走り回る娘達の姿を思い浮かべながら、俺は再び自分の作業に戻るのだった。

## クロスボウのからくり

2021年12月3日

　クロスボウの機構は、物凄く乱暴に言ってしまうと、張った弓の弦につっかえ棒を立てておき、それを取り外せば矢が放たれる、というものである。

　とは言え、本当にそのままの機構ではうまくいかないので、もう少し凝った機構にしないといけないが。

　実際に組み込む機構は、中心を固定した円盤の一部が凹字に欠けていて、そこに張った弦を引っかける。勿論そのままでは弦のテンションで円盤がくるりと回ってしまい、すぐに矢が放たれてしまう。

　なので凹字の反対側に切り欠きを作り、回転を抑えるように別の部品を組み合わせ、その部品が動くと抑えられていた回転が弦のテンションで行われ、同時に切り欠きに引っかかっていた弦が解放されて矢が放たれる、という仕組みにする。

　動く部品、というのが銃にも存在する引き金に当たる部分だ。逆鈎と連動して固定された撃鉄を解放するあたりもよく似ている。

　引き金は引いた後、元の位置に復帰させなければいけない。単純には引張コイルばねあたりを使うのだろうが、今回はUの字にした板バネにする。

　前の世界では火縄銃についていて、形状から松葉金や毛抜き金、あるいは弾き金と呼ばれるのと似たようなものである。

　実用的なコイルばねは今のこの世界からいうともう少し先の技術になるからだ。前の世界ではあの大天才、レオナルド・ダ・ビンチがスケッチに残しているというから、同様の天才が現れればその時間は早まるだろう。

　だが、俺がダ・ビンチになるつもりはあんまりない。元になる技術はかなり昔から存在していた――それこそ弓もある意味そうと言える――板バネの応用でのサスペンションがギリギリのラインだと考えている。

　それで言えば、渦巻バネの一形態であるゼンマイもギリギリOKかもと思っているのだが、今のところ、こちらは使う場面がないので、出番はしばらく来ないだろう。

　ゼンマイ動力を使ってやりたいことって、ルーシーのおもちゃくらいしか思いつかないしな……。

　そして、引き金は細いのがにゅっとした、引き金と聞いて思い浮かべる形状ではなく、レバー型のものにした。

　いわゆる機関部と言われるものの部品をコツコツと作っていく。チートのおかげでスムーズに作業は進む。剣や刀のような製品そのものでなくとも、助けを得られるのは心強い。

　まぁ、剣も刀も１人で作るには部品を作る必要があるので、“もののついで”として手助けしてくれているのかも知れないが。

　鎚で叩くだけでなく、時折タガネで切り落としたりといった作業を終えたら、それぞれを組み合わせる。軸の代わりに釘、固定先はただの木の板だ。とりあえず動作を確認するだけならこれでも問題なかろう。

「試すんですか？」

「ああ。見るか？」

「もちろん！」

　様子を窺っていたらしいリケが勢いよく答える。クルルたちがいたら何事かと様子を見に来たであろうことは間違いない。

　円盤には凹字の切り欠きがあり、切り欠きが上を向いている。反対側はΓの形に切り欠かれ、そこにはまるように引き金となるレバーの先端が回転を抑えていた。

　レバー先端の下にはヘアピン状の板バネが敷かれていて、テンションでレバー先端を上に押し上げ、後端は軸を中心に押し下げられている。

　俺は円盤の凹字に指をかけて、前にテンションをかける。せっかくなので、レバーの操作はリケにやってもらうことにした。

「いいんですか？」

「動きを見るだけだし、問題ないよ。やってくれ」

「わかりました。では」

　恐る恐る、リケがレバー後端を押し上げた。レバー先端が下がり、板バネを圧縮する。

　先端が円盤から外れると、抑えられていた回転がくるんと始まり、凹字の切り欠きが前を向いた。これが弓の弦であれば、この時点で解放され矢が放たれることになる。

　下がったレバー先端の上には、円盤の一部が乗っかるように少しだけ入り込む。

　俺は円盤にかけていた指を離し、リケを促してレバーから手を離して貰うと、板バネのテンションでレバー先端が上昇し、何の力もかかっていなかった円盤はレバー先端に押されて、凹字の切り欠きが上になるように回転する。

　すると、円盤とレバー先端は再び噛み合い、固定された。これで最初の状態に戻ったことになる。

　実際にクロスボウとして運用する場合は、この後もう一度弓の弦を切り欠きに入るように張り、矢（専用の太矢だ）をつがえて、発射準備完了ということになる。

「うまくいってますね」

「うん、あとは実際に組んでみてちゃんと動いてくれるかだな」

　こうやって試したときはうまくいっていても、実際に組んでみるとあれやこれやでうまくいかない、なんてことは普通にありえる話だからな。

　前の世界でも開発中はうまくいっていたのに、いざ本番になると思った動作にならなくて難儀したことは１度や２度ではない。

　俺はそうなりませんように、と祈りながら、仮に組んだ機構を本番に移すべく、取り外していった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ListenGo(リスンゴ)さんにて、本作書籍版１巻のオーディオブックが配信になりました。

来年１月３１日までは４５％オフのスペシャルプライス、また、１２月２８日（火）までに購入・応募いただいた方全員に私とキンタ先生のプリントサイン入りステッカーをプレゼントしているそうですので、こちら是非どうぞ。

（プレゼントには応募も必要ですのでお忘れなく）

## 銃床

2021年12月6日

　クロスボウで一番大事な部分が機関部であることは間違いないと思っているが、機関部と弓の部分をつなぎ、直接身体に押し当て構えるための台座――銃で言えば銃床に当たる部分も大事になってくるだろう。

　ここを上手く作らないと、狙ったところに飛ばない、なんてことにもなりかねない。ある程度の誤差は許容されるのも事実ではあるが、前の世界でウィリアム・テルが息子の頭の上においたリンゴを射抜いたのもクロスボウである。

　つまり、それなりの精度を持たせることは可能だということだ。まぁ、「１射目を外して息子を射殺すことになっていたら、２射目でお前を殺すつもりだった」と言っているように、確実なものではなかったのも確かだが。

　ともあれ、台座と言うか銃床は鎚でトンカンやる部分ではない。鍛冶のチートが有効でない可能性は十分にある。生産することにもチートは働くのだが、鍛冶に比べると数段劣るのが実情だ。

　例えば、もし家具を作ることになったとき（実際何回か作っているが）、俺もある程度のものは作ることが出来る。「これなら金を貰ってもいいかな」と思える程度のものが。

　しかし、戦闘ではヘレンのほうが上だし、料理ではサンドロのおやっさんのほうが上なように、世間には俺が作るもの以上の家具を作ることが出来る人間が存在していて、俺はその人には敵わないだろう。

　だが、それを気に病んで腐っていてもしょうがない。うちの家族の中ではガッチリはしていても小さい方であるリケの身体に合わせつつ、他の家族も使えるくらいの大きさというところで作っていこう。

　クロスボウは大量生産の予定はない。もし、１０台２０台と作るのであれば治具を作って同じものを生産できるようにするところだが、そうではないのでチートの助けを得て寸法はいわゆる「現物合わせ」で行う。

　最初に全体の大きさを決める。リケの肩に床尾になる部分を当て、構えをとってもらう。前の世界でちょっとだけサバイバルゲームに興じていたこともあり、狙撃銃風の構えをさせてしまったが、近しいから大丈夫だろう。

　構えたときの腕の位置を板に軽く刻んで、それよりもほんの僅かだけ大きめに作ることにした。リケには少しだけ大きくなるが、他の家族には窮屈でない程度の大きさだ。

　板に機関部をあてがう。おおよその位置を見るためだ。特にレバーを変な位置に持ってきてしまうと、射撃どころではなくなるので、慎重に決めておきたい。

　レバーが銃床に沿うように配置し、大きさの見当をつけ、構えた時の目印から形の見当をつける。あとは切って加工だ。

　こういうとき、糸鋸があれば細かく切れるのだろうが、ないのでナイフで大まかに切ってから整えることになる。今後出番があるだろうし、糸鋸も作っておこうかな……。

　使うナイフは勿論、愛用の“よく切れる”ナイフだ。それとチートのおかげで、加工自体はスムーズに進んでいく。

　やがて、知る人が見れば上が平らな銃床とでも言うべきものができあがった。いやまぁ用途的にはまさしく銃床と同じなのだけど。

　そこまでで一度リケに構えてもらう。

「大きさはどうだ？」

「ちょっとだけ大きいですけど、構えるのが大変そうとかはないですね」

「重さは？」

「ここに色々乗っかるとして、リディさんでもいけるんじゃないでしょうか」

「じゃあ大丈夫か。とはいえ、ああ見えて割と力あるからな……」

　身体は華奢でいかにもエルフといった佇まいのリディだが、畑仕事をこなし、結構強い弓を扱うところからも分かるように、力が弱いわけではない。

　剣が達者だったり、巨人族だったりドワーフだったり獣人だったり、はたまた筋力が不思議な存在によって増強されていたりと周りが「強すぎる」というだけで、おそらく平均から見れば筋力が強い方ではあるのだ。

「それ、リディさんに言っておきましょうか」

「それだけは勘弁してくれ」

　ニヤリと笑うリケに、俺は苦笑を返した。うちの家族で誰を怒らせてはいけないかという話になったら、ダントツでリディの名前が挙がるだろう。そのランキングの開催自体、怒りを買うので出来っこないのだが。

「本人が気にしてる様子はないけど、触らぬ神に祟りなしだ」

「それは北方の？」

「そうだな。余計なことをしなければ厄介事を抱え込むこともない、って意味だよ」

「なるほど」

　そう言って今度は朗らかに笑うリケ。俺は何か言い返してやろうかと思ったが、それこそ「触らぬ神」であることに気がついて、銃床に機関部を組み込むべく、自分の作業に戻るのだった。

## 構える

2021年12月8日

　機関部を組み込めるようにするべく、彫ったり削ったりを繰り返していると、カランコロンと鳴子が鳴った。

「もうそんな時間か」

　作業の合間に昼食を挟んだことは覚えているが、それ以降は自分の作業に集中してしまっていた。窓から外を見てみると、日が落ち始めていた。もうすっかり冬の様相なので、夏と比べれば早いのも当然ではあるのだが。

　完全にリケを放ったらかしにしていたことに気がつき、彼女の様子を窺ってみると、かなりの数のナイフができあがっていた。

「おお、凄いじゃないか」

　俺はリケに目で確認を取ると、彼女は頷いた。並べてあるナイフの１本を手に取る。見てみると、魔力をこめることで、スピードを上げた分のばらつき（みたいなもの）を抑えてある。一般モデルとしてなら十分すぎる出来だ。

　リケは少し眉根を寄せた。

「いえ、親方みたいに実力だけで仕上げられるようにならないと。これは小手先もありますから」

「ナイフとしては十分使えるし、卸しに回すけど良いか？」

「ええ、それはもちろん」

　リケは微笑みながら頷いた。ドワーフという種族によるものか、もしくはリケだからなのか、この辺の覚えが早い。仕上げるスピードもかなりあがっているように思う。

「師匠が良いからですよ」

「いやぁ……」

　俺は頭を掻いた。基本、見取り稽古しかさせていない――というか、チートによる部分は教えようがなくてできないのだが――ので、忸怩たる思いだ。

「魔力の扱いもかなりできるようになってきたみたいだな」

「いえ、実は今のところ、それくらいが限界で……」

　今度はリケが頭を掻いた。リケは最近もちょっとした時間にリディから魔力の手ほどきを受けていた。魔力や魔法について学ぼうとしているのは今のところリケだけで、他のお嬢さんがたはもっぱら剣のほうが大事らしい。

「リディが言うには積み重ねだそうだし、焦らずやっていこう」

「そうですね」

　リケがそう言ったところでガチャリと鍛冶場と家の間の扉が開いた。

「ただいま」

「おう、おかえり。みんなも」

　最初に入ってきたのはサーミャだ。ディアナとリディの姿が無いが、ディアナは娘たちとまだ外に、リディは畑の様子を見に行ったらしい。

「どうだった？」

　俺がサーミャに聞くと、やや思案顔である。

「どうした？ なんか悪いことでもあったか？」

「いや、そうでもないんだけど……」

　サーミャにしては歯切れが悪い。促してみると、あちこちの兆候から、今年は少し寒さが厳しくなりそうということのようだ。

　それは果実の実りかたであったり、うろついている動物たちの様子であったり、俺や他の家族では分からないところからの判断らしい。

　リディも同意していた、とアンネがいつの間にか自分で淹れた茶を飲みながら言っていたので、確実と言っていいのだろうな。

「ストーブが活躍する感じか」

　俺が言うと、サーミャは頷いた。

「もう何回か様子は見に行くけど、まぁ、あって良かったと思うことになるはず」

　せっかく作ったので役に立ってほしいのは確かなのだが、大活躍！ となるときはつまりエラく寒いときだということなので、手放しで喜べるもんでもないな。

「とりあえず、薪やなんかは数を確保できるようにしよう。場合によってはカミロのとこへの納品を減らしてもいい。あんまり寒いならどのみち遠くまでは運べないだろうし、それくらいならもう大分売ってきているはずだ」

　道が凍るところまでいくかはわからないが、もしそうなれば馬車での往来は絶望的だろう。

　あの街での商売、ということになるが、今まで卸してきた数量を考えると売れ行きにはあまり期待できそうもない。

　俺の言葉に、リケを含むみんなが頷いた。冬支度はすっかり済んだと思っていたが、まだやることは残っていたらしい。

　そういえば、ヘレンが静かだなと思っていると、彼女はチラチラと何かを見ていた。

　何かとは勿論クロスボウの銃床部分である。まだ機関部を組み込むにはいたっていないが、単体で構えるには十分なそれが気になっているらしい。

「いいぞ、構えても」

　ヘレンは少し身を竦ませた。視線が恐る恐る俺の方に移動してくる。目が合ったので、俺は頷いて促してやる。

「そ、それじゃあ」

　そう言って、ヘレンはゆっくりと構える。リケには少し大きめにしてあるが、俺より身長がやや高いヘレンだと思っていたとおり小さいようで、腕を縮めるような構えかたをしている。

「どうだ？」

「ちょい窮屈だけど、構えられないこともないし、いいと思う」

　僅かに上半身を屈めていたヘレンは身を起こした。

「ふむ。ヘレンで扱えるなら俺たちでも平気だな」

「じゃあ、私も試してみようかしら」

　次に立候補したのはアンネだ。巨人族でうちで一番大きな彼女が扱えそうなら、うちの人間で扱えない者はいないことになる。腕前はさておき。

　アンネはヘレンよりもさらに腕を縮めているが、ギリギリなんとかなりそうだ。

　俺が言うのは気が引けるが、彼女は大きいのでそれが邪魔になったりしないかと思ったが、そんなこともなかった。

　これなら、うちの人間は大丈夫だな。俺はそう思ったが、結局のところ、サーミャもやると言いだし、外から戻ってきたディアナやリディも試したいと、構えてみたりしたので、全員が試すことになったのだった。

## クロスボウ完成

2021年12月14日

　翌日。リケが納品物のナイフを頑張ってくれたこともあって、少し時間が稼げたので、俺は今日もクロスボウに専念させてもらうことにした。

　サーミャ達、普段狩りに出ている組も今日も外を回ってくるらしい。パトロールと、今日は薪や焚き付けに使えそうな枝があれば回収してきてくれるように頼んである。

　普段、俺が森の中をついて行くときも、あちこちに枝が落ちていた。いつもは事足りているし、他に目的もあるので拾ったりはしないのだが、手分けして拾えば結構な量になるはずだ。

　今日はクルルも背中に載せるものが多くて機嫌が良くなるかも知れない。ハヤテは少し乗る場所を考えないといけないだろうが。

「行ってらっしゃい」

『いってきまーす』

　皆の声に「クルルル」「ワンワン！」「キュー」と娘達の声も加わる。森の中に皆の姿が消えていくのを見送って、俺とリケは家に引っ込んだ。

　今日はある程度仕上げにかかっていく。機関部を組み込んで、弓を取り付けるところまでだ。

　機関部の組み込みはもう少し削りこんで、機関部をピンで留めれば完了になる。

　本当はネジ止めにでも出来れば良いのだろうが、原理はともかくおいそれと使えるようなものでもない。

　前の世界でもよく使われるようになったのは、旋盤が出来て精度の良いものをたくさん作れるようになってからみたいだし。

　ピンの頭を少し潰して、簡単には抜けないようにすれば特に問題は無かろう。

　何度か機関部になるところを当てて様子を見て、銃床を削り、当てて様子を見て削り、と繰り返す。

　やがて、弓の弦を引っかけるところ、レバー、バネの全てが綺麗に収まるようになった。

　ここまで来たら、後は弓といくつかの部品を取り付ければ完成となる。

　弓は木材と金属の複合も考えたのだが、思い切って鍛冶だけで出来る金属製にすることにした。魔力で硬さと弾性を調整すれば、複合素材に近いものが出来るだろう。

　クロスボウだから多少硬いと言うか、引くのに力が必要でも問題なかろうと言うこともある。

　板金を火を入れた火床で熱し、金床で叩いて伸ばす。このときにチートの助けを借りて、硬さよりも弾力を重視して弓として機能させつつ、ちょっと強くなるちょうどのところを見極める。

　最後に弦を固定するための切り欠きの部分を作れば、弓の部分は完成だ。もちろん、弦を張る前と後では反り返る向きを逆にしてある……といっても、今の状態ではあまり分からないが。

　弓を銃床の先端に取り付ける。弓が上下にずれてしまわないよう、コの字の金具を用意するのだが、その金具にはD字の金具が一緒になっている。これも板金をコツコツ叩いて作ったものだ。こっちは耐久性を重視して作ってある。他にもいくつか、耐久性を重視した部品を作った。

　弓をクリップで留めるように、コの字型の金具と一緒に銃床の先端に複数のピンを打ち付けて固定する。

　D字の金具は銃床の先から生えるように飛び出していて、これは弦を引く時に「あぶみ」の役割を果たしてくれる。ここを踏んで直接弦を引っ張り上げたり、器具を使ったりするわけだ。

「すまん、ちょっと手伝ってくれ」

「はい」

　俺はリケに声をかけた。ここからの作業は１人で出来ないこともないが、手助けがあった方が遙かに楽だからだ。

　サーミャに見つくろってもらっていた、特に強い弦（樹鹿の腱を加工したもの。鹿なのは猪と比べて脚が長く、つまり腱も長いからだそうだ）を弓の片方に固定する。今は前方に反っている弓を、逆方向に反らせつつ、もう反対側に固定すれば出来るのだが、無論生半可な力で出来るようなものではない。

　だがしかし、筋力が増強されている俺と、ドワーフのリケ、２人がかりならなんとか出来るだろう。

「よし、やるぞ」

「はい！ ３、２、１！」

　タイミングを合わせて引っ張り、片側が反対に反り返ったところで、素早く弓が縦になるようにする。

　２人がかりで体重をかけ、反発を俺が抑え込んでいる間に、リケがもう片方の切り欠きに弦を固定した。

「おおー」

　とうとう銃床に弓を取り付けることができた。あぶみも機関部も組み込まれて、形としてはクロスボウが完成している。

「助かったよ、ありがとう」

「いえ、弟子の仕事としては普通なので」

　俺が感謝の言葉をかけると、リケは笑って言った。

「さてさて、あと一歩だな」

「これで完成じゃないんですか？」

「まぁ、これで完成、と言っても良いんだけどな」

　あと２つ３つ、すべきことがあるのだ。

　俺はまた板金を熱して加工した。機関部の弦を固定するところを覆う大きさの、靴べらのような形状のものだ。

　リケがそれを指さして聞いてくる。

「これは？」

「弦を引くときに、ズレすぎないようにするためのものだ」

「なるほど！」

　リケは目を輝かせる。この靴べらと留め具の間に弦が入るように引けば、うまく留め具に弦がかかる……はずであるし、不用意に留め具に触れてしまうこともない。

　俺は最後、その靴べらに重なるように、小さな鉤を取り付ける。

　再びリケが俺に尋ねた。

「この部品はなんでしょう？」

「これはな……」

　俺は鍛冶場にあったやや短めの紐の両端に、やはり鉤状の部品をカシメて固定する。鉤縄のようなものができあがった。

「こいつをこうして」

　俺はクロスボウのあぶみを踏んで、弦に鉤縄の鉤を左右に分かれるように引っかけた。

「こうして……」

　鉤縄の縄部分の中心を、クロスボウの小さな鉤に引っかける。両手で持ち上げると、鉤縄はM字になった。

「こうする」

　M字の頂点部分を引っ張り上げる。弦はすんなりではないが、思ったよりも軽く持ち上がった。要は俺の手の部分が滑車の役目を果たして、少し少ない力で弦を引けているのだ。

　俺はそのまま弦を引っ張り上げ、靴べらの下に潜り込ませる。手応えがあって、そっと力を抜くと、弦は引っ張られたまま、形状を維持している。

　緩んだ鉤縄を外し、そっと持ち上げてみてみると、留め金の凹字に弦が入り込んでいる。

「これであとは矢をつがえるだけだな」

　パチパチとリケが拍手をした。俺はリケにクロスボウを差し出した。

「矢がないが、１回試してみてくれ」

「え、私で良いんですか？」

「コイツを主に使うのはリケになる予定だから、リケに試して貰うのがいいだろ」

「確かに」

　意外とあっさりリケは頷いた。試してみたくはあるが、俺の手前、ってとこか。気にしなくてもいいのにな。

　それでは、とリケはクロスボウを受け取り、銃床の床尾を肩に当てる。右手はレバーにかかり、左手は銃床の前方を握っている。「ボウガン」とは、日本で元は商標名だった呼称だが、まさに銃のような弓と呼ぶに相応しい姿だ。

「いきます！」

「おう」

　リケはそう宣言すると、右手にグッと力を込める。レバーが留め金を解放し、音を立てて弦も解放された。

　ビィン、と弦の鳴る音が思いの外、鍛冶場に響いた。とりあえずこれでクロスボウとしては機能する、ということだ。機械的な耐久性とかは追々だな。

「どうだ?」

「すごいです！ 初めて使いましたけど、違和感もありません！」

「よしよし、それじゃあ早速試射できるようにしないとな」

　キラキラと目を輝かせながら鼻息も荒く言ってくるリケの頭に手を置きながら、俺は少し苦笑気味にそう言った。

## 試射

2021年12月16日

　クロスボウに使う矢は普通の矢とは違うものを使う。違う、とは言っても矢じりがあり、軸があり、安定して飛翔させるための矢羽根もついている。違いは太さだろうか。

　弓に使うものは細い、といって良いものだが、クロスボウ用のものはそれよりやや太い。

　それがどういう効果を生むものかインストールにもないし、前の世界で的に向けてですら射たこともないので、詳しいところはよく分からないが、より重い物をより速く投射できれば運動エネルギーがその分大きくなることだけは分かる。

　まぁ、逆に言えば、それ以上のことは全く分からないってことだが。

「よし、出来た」

　俺は普段サーミャが作っている矢（矢じりは俺が作っているが、矢羽根の調整なんかはサーミャが自分でしている）を思い起こしながら、やや太めの矢を作った。

　理屈は分かっていなくとも、チートのおかげでうまく出来上がった。……多分。

「リケ」

「なんでしょう？」

「それが一段落したら、ちょっと試してみよう」

　鎚を振るっていたリケに、太矢を軽く掲げて声をかけると、やはりと言うか目を輝かせる。

「はい！」

　リケが２本ほど短剣を仕上げている間に、俺も太矢をいくつか作り足した。

　俺とリケは外に出た。太陽はとっくに天辺を過ぎている。暑い鍛冶場から、すっかり寒さが増してきた外に出ると、むしろ少し気持ちが良い。

　前の世界であんまりサウナに好んでは入らなかったが、こうしてみるともう少し入ってても良かったかなと思えてくる。

　こっちでも作れないこともない。温泉はあるし、石もそこらから集めてくることはできる（水をかけたりするので、どんな石でもいいわけではないらしい）が、まぁ、作るとしても相当後だろうな……。

　それはさておいて、俺は手にした少し厚めの鉄板を、いつもサーミャやリディが弓の練習をするのに使っている的にくくりつけた。

　太矢の矢じりも、この鉄板も魔力をふんだんに篭めてある。練習用として、少しでも長持ちしてくれればと思ってのことだが、矛盾の故事そのままの状況になってしまっていることに気がついて、くくりつけながら俺は苦笑する。

　的の向こうは少し開けていて、逸れたときに不意に誰かが現れて当たってしまったりしないようになっている。

　あれはあれで、前の世界の銃の射撃場よろしく盛り土でもすべきかも知れないな。温泉周りの時の残土がまだ幾分あるし。

「それじゃ、自分で装填してみてくれるか？」

「はい！」

　あぶみに脚を置くと、リケは道具を使って弦を引っ張り上げる準備をした。もしリケで厳しければ、てこの原理を使って弦を引く道具か、歯車で引く道具でも作るつもりをしている。

「よっ」

　リケは一息に弦を引っ張り上げた。そのまま留め金に弦を引っかける。これでまず弦を張るのは完了だ。

　続いて俺が差し出した太矢を、銃床に彫られた溝に置いたあと、手前に滑らせて弦が固定されている部分ギリギリに矢の後端が来るようにした。

　そして、そのまま床尾を肩に当てた。前の世界ならスコープであるとか、ダットサイトを搭載するのだろうが、当然この世界にそんなものはない。

　ライフルのアイアンサイト的なものもないので、照準は弓のようにつけることになる。

　リケがレバーを握りこむ。「カン！」と音がして、矢が放たれる。空中に線を引くように矢は飛んでいき、的に当たって「バキャン！！」と派手な音と火花をあげ、ポトリと落ちた。

　少なくとも矛は盾を貫けなかったということだ。

　的に近づいてみると、矢が当たったところがかなり凹んでいた。こっちはこっちで無傷ではなかったか。

　矢を拾い上げてみると、先端がグシャリと潰れている。

　これまた前の世界で、鉄板を銃で撃って貫通しなかった、という動画を見たことがあるが、鉄板も矢もちょうどそんな感じである。

　これをもって銃並みに威力があるとは言えない。今回は的を外さないよう、リケの腕前も考えてかなり近距離から放っているからだ。しかし、それでも武器としては十分だろう。

「盾を構えていても、貫通してそのまま刺さりそうです」

　リケが鉄板の衝突跡を撫でながら言った。俺は頷く。あの鉄板は魔力で補強されていた。それならば貫通を防げる、ということは裏を返せば普通の鉄板では貫通を防げない、と言うことだ。

「いずれドラゴンもこれで倒せるかなぁ」

「いけるんじゃないでしょうか」

　俺は冗談のつもりで言ったのだが、本気の空気を含ませて返してきたリケの言葉に、俺は少しだけ苦笑するのだった。

## 故障

2021年12月17日

　威力については十分……というか、やや過剰なくらいであることは分かった。後は耐久性だ。

　いつまでも末永く使える、なんてことは期待していないが、ある程度の回数使えるようでないと困る。

「……うん？」

　リケが射撃した後のクロスボウを確認してみると、違和感があった。２回しか動かしていないはずなのに、それよりも使い込んだというか、ちょっと考えにくいくらいに傷んでいるような。

　チートの手助けを借りて見てみると、弓の部分に歪みが出ているようだ。

「うーん」

「なにかまずいことでも？」

　俺がクロスボウを手に首を捻っていると、リケが覗き込んできた。

「うん、ちょっとここを見てくれ」

「はい。では失礼して……」

　クロスボウをリケに手渡し、弓の部分を指差した。リケはその部分をためつすがめつしている。

　やがて、眉根を寄せつつボソリとつぶやいた。

「あぁ……これは……」

「歪んでないか？」

「ええ」

　リケは俺にクロスボウを返しつつ頷いた。やはり歪みが出ているようだ。

「多かれ少なかれ、どんどん傷んでいくものだとは思いますけど、普通のもここまで早いものなんでしょうか」

「いやぁ、それだと武器として成り立たないだろ」

「ですよねぇ」

　発射から再装填して再発射まで時間がかかる代わりに扱いやすさと威力があるのがクロスボウの利点だと思うが、２回かもって３回しか使えないとなると武器としては少々厳しいのではなかろうか。

　何でも切り裂けるが、２回斬ったら必ず壊れる魔剣を戦に持っていこうと思うやつはあんまりいないだろう。使いみちがないわけではないが。

「うーん、何かを間違えたかな」

「組み立てとかですか？」

「そういうところじゃないと思うんだよな……」

　組み立ての時点で間違っていれば、鍛冶か生産か、その辺のチートで分かったんじゃないかと思うのだ。それが分からなかったということは、完成するまでの間になにか間違いがあったわけではない。

　とすると、その後の行動だろうか。でもなぁ。

「動かしたのは２回こっきり」

「ですね。それで壊れるようなものではなさそうですし」

　そうして、原因をあれこれ推測していると、

「あれ、２人でどうしたんだ？」

　サーミャの声がした。声のした方を見ると、土に汚れた家族のみんながいる。

「いや、クロスボウができあがったんだが、それよりおまえたちこそどうした」

「え？ ああ」

　怪訝な顔をした俺に、サーミャも一瞬怪訝な顔になったが、すぐに自分たちの様子に気がついたらしい。

「珍しく途中にヌタ場があってさ」

「あー」

　俺はそれで事情を察した。ヌタ場とは、猪が身体の汚れや、身体についた虫を落としたりするのに泥浴びをする泥場のことだ。

　ルーシーのほうを見やると、どうしたの？ とばかりに小首を傾げているが、彼女もかなり泥にまみれている。

　多分ルーシーが突撃したんだろう。その時の阿鼻叫喚が目に浮かぶようだ。

　パタパタと尻尾を振るルーシー。あまりにも無邪気なので、怒らねばという気はどこにも芽生えてこなかった。

「で、そっちは？」

「え？ ああ。これなんだけどな」

　俺が手にしたクロスボウを指差すと、みんなが集まってきた。その中からヘレンがズイと前に出る。まぁ、武器のことなら彼女だろう。

「２回しか撃ってないんだけど、弓のところがもう歪んできてるんだ」

　そう言いながらクロスボウを差し出す。ヘレンは受け取ると、弓の部分を見つめたり、指でなぞったりして確認を始めた。

　ヘレンは歪んだところでピタリと手を止めると、静かな声で言った。

「これ、２回とも矢はつがえたのか？」

「ん？ いや、最初は動きを見たくて、矢はつがえなかったが……」

　俺が言うと、ヘレンは小さく息を吐いた。

「それだ。弓はな、矢をつがえないで射ると傷むんだよ。なんでも矢を射る力が弓に全部かかると良くないんだとか言ってたっけな」

「えっ、そうなのか！？」

　俺は驚きを隠さずにそう言った。それを聞いたヘレンが笑う。

「なんだ、エイゾウでも知らないことがあるんだな」

「言ってるだろ、俺はただの鍛冶屋だって。でも、その辺はちゃんと確認しとくべきだったな」

　言って俺はうなだれた。少し慢心があったかも知れない。あれだけの威力の矢を放つ機構だ。その負荷が大きいことくらいは想定してしかるべきだった。

「でも、さすがエイゾウの作るモンだな。２発目まではなんもなかったんだろ？」

「あ、ああ。リケが撃ったが、ちゃんと的に当たったよ」

　俺は的を指差す。ヘレンは目を細めてそれを確認した。

「あの凹んでるのか！ やっぱりスゲえな！」

　バンバンと俺の肩を叩いて呵々大笑するヘレン。いつもとは違う肩への衝撃と、褒められてはいるがやらかした気恥ずかしさとで、俺はどう反応して良いか、すっかり困惑してしまうのだった。

## 修理

2021年12月20日

「むむむむ……」

　クロスボウを前に、俺は唸っていた。クロスボウでの空撃ちが厳禁であることは、前日にヘレンに教えて貰った。

　その厳禁であるはずの空撃ちしてしまって歪みが出ている以上、修理をしなければいけないのだが、その方向性だ。

　一つは耐久力を上げる方向。弦を引きにくくはなるだろうが、器具などで補助すれば問題はないだろう。空撃ちしてしまった時に、少しでも壊れにくくするのだ。

　もう一つはシンプルに普通に直してそれで終わりとする方向。よろしくない、と分かっていて空撃ちをするほど、俺もリケも迂闊ではないつもりだし、気をつけて扱えば、それで問題はない。

　クロスボウは銃のように扱うことが出来るが、銃のように発射可能状態をそこそこ長時間保つものではないらしい。

　発射すべき可能性が生じてから弦を張り、矢をつがえるので、本質的に空撃ちは生じないもの、というようなことをこれまた前日の晩飯の時にヘレンに説明された。

　まぁ、前の世界でも、銃も長く使わないときは弾を抜いて撃鉄を落としたうえで安全装置をかけておいたりするものらしいので、同じと言えば同じか。

　日が明けてから、リケやヘレンと相談し、普通に直すことにした。いざという時、出来れば力だけで弦を引けた方が良いだろうとの判断だ。

　クロスボウは健在なのに、器具が壊れていて使えない事態だけは避けた方がいい、というのがヘレンの意見で、もしここに立てこもる事態にでもなったときの備えを考えれば同意する以外の選択肢はなかった。

「トラップを仕掛けることも考えるべきかな」

　外の木々を眺めながら、俺はなんとなしに呟いた。木々は季節が巡っていることをあまり感じさせないが、入り込んでくる風が冷たい。もう冬と言って良い時期が来ているように感じた。

「どうだろうな。そもそも天然の衛兵が巡回しているような土地だからな」

　俺の呟きに、同じように外を眺めながらヘレンが言った。彼女の言う「天然の衛兵」とは主には狼たちのことだろう。そこに猪や、ともすれば虎や熊も加わる。

　さすがにドラゴンまでは期待できないだろうが。

　そして、リケが続く。

「リュイサさんは守ってくれないんですかね」

「どうだろうなぁ。俺たちをえこひいきして良いのかにもよるだろうけど。どのみち、彼女がここを守ろうと思うと地形を変えないといけないからな」

　リュイサさんはこの“黒の森”の主ではあるが、直接的な攻撃手段を特に持っていない。そこで、サンドボックスゲームの土地造成だけでダメージを与えようとした場合に、地形を変えるしかないのと同様、彼女もそうする必要がある。

　当然、それはこの森にとって良いことではない。そうまでして守る価値があると判断しているなら、そうしてくれるだろうし、そうでないならしないだろう。

　できれば地形を変えてでも、と思ってくれていればいいんだが。温泉のついででもいいから。

「さて、それじゃ始めましょうかね」

　俺は一伸びした。リケは自分の作業に、ヘレンは他の家族と一緒に外に出た。今日は森のパトロールではなく、畑の手入れ……というか、今年最後の収穫をするらしい。

　冬に育てられるものもあるらしいし、そもそも季節を問わずに育つエルフの種子ではあるが、あまりその事実を広く知らしめ過ぎないためと、土を休ませるために冬の間は休耕するらしい。

　連作障害はなくても、養分とかの問題はあるってことだろうか。

　ともかく、外からワイワイ（時折クルルルルやワンワン、キューも）と聞こえてくる中、俺はクロスボウの弓部分を外し、火床に入れるのだった。

## 罠

2021年12月22日

　クロスボウの修理は程なく終わった。歪んでしまったところを戻すだけではあるのだが、直そうと思ってホイと直せるものでもない。

　しかし、俺の場合は“手助け”がある。それでもホイホイ直せるほど気軽な話でもないが、一般的な修理とは作業速度が違う。

　そうして直したクロスボウだが、なんとなく試し撃ち、と言う気にはなれず、一旦は鍛冶場の隅に立てかけておくことにした。機構そのものが正常に動作することもリケが扱えることも確認は済んでいる。問題はあるまい。

　どことなく前の世界の銃大国で自衛用に置いてあるショットガンのような雰囲気を感じる。実際に行ったことや見たことがあるわけではないので、完全にイメージだけだが。

　まぁ、次に遠出するか街へ行くときまでは、本当にその役目を果たして貰う感じではあるのだが。

　俺は窓から少々騒がしい外を眺めて言った。

「外、寒いかな」

「朝方はどうだったんです」

「寒かった」

　リケの言葉にそう返すと、リケは笑った。

　朝方、娘たち３人と湖へ行ったのだが、これまでいつもしていた水浴びをする気には全くなれないくらいには寒かった。まだ息が白くなるほどではないのが救いか。

　温泉の建設には手間も時間もかかったが、急いで良かった。少なくとも寒さを理由に身体を清められない、と言った事態は発生していない。むしろ、毎日積極的に入っているくらいだ。

　まぁ、鍛冶場が暑かったり、身体を動かしたりで汗をかく機会は多いから、当然と言えばあまりにも当然なのだが。

　ふと、排水用の池……というよりは最早、動物たちの憩いの場になっている「動物温泉」を思い出した。

　何故か狼も熊も虎も、普段は喰らっているだろう兎や鹿がいても気にする様子はない。

　兎たちも、遠目にでも発見すれば即その場を離れるだろうに、あの場所でだけは全ての動物たちに等しく権利があると主張でもするかのように、平気の平左で過ごしている。

　うちから、あの「動物温泉」まではさほど距離はない。建物のあるあたりは魔力が強すぎて、普通の動物は近寄ろうとしない、というのがまだこの家に住んでいなかった頃のリディの説明だった。

　クルルは走竜だし、ルーシーは狼に見えるが狼の魔物。ハヤテも竜の一種ということで、あまり気にはしていないようだ。

　逆に言うと、そういう動物が他にいたら特に気にせずやってくるというわけで……。

「あそこに惹かれてやってくる魔物っていないのかな」

　多少寒さが和らいだ日差しの下、俺は飯を頬張りながら言った。

「土で汚れているので、あまり家で食べるのは……。まだギリギリ外にいられるくらいの寒さだし、この後もまだ作業もあるし」

　と、外に出ていた皆の意見で、外で昼食をとっているのだ。勿論、手は洗ってもらっている。

　肩に留まったハヤテに、猪肉の切れ端を食わせてやりながら、リディが言った。

「どうでしょう。以前お話したとおり、魔物と言ってもルーシーみたいに動物がなるものは、元の動物の気質がかなり影響しますから、どの動物も温泉に興味があるなら寄ってくる可能性はあります」

　自分の名前が出たルーシーが嬉しそうに尻尾を振って、ディアナに頭を撫でられていた。

　魔物には２種類いる。どちらも澱んだ魔力が影響しているのだが、ルーシーのように澱んだ魔力が生物を変性させてしまうものと、ゴブリンのように澱んだ魔力から「発生」する“純粋な”ものだ。

「もちろん“純粋な”魔物もここにくる可能性がある」

「ええ」

　俺が言うと、リディは頷いた。なぜなのかは分かっていないし、“インストール”にも理由はなかったが、純粋な魔物たちは生き物をとにかく殺そうとする。

　温泉がなくとも、近辺で生物が定住しているのはここくらいなものだ。もし近くに発生した場合、目指すのはここだろう。

「ここを要塞化するかはともかく、やはり罠を作っておこう。危害を加えるものじゃなくて、警告や警報を主な役割にしたものがいいかな。不幸な事故は避けたい」

　人も動物もひとっ風呂浴びて意気揚々な時の出会い頭で思わず手が出て、怪我をさせてしまうようなことは、お互いに避けたいだろう。

　かなり今更ではあるが、色々揃ってきて、ようやくこの辺りに思い至るくらいには余裕が出てきた、ということでもある……と思うことにする。

　ヒュウ、とヘレンが口笛を吹いてその目がギラッと光り、アンネが顔を輝かせる。

　俺はちょっとだけ苦笑しながら、

「お手柔らかにな」

　そう言うのだった。

## 罠の算段

2021年12月27日

　罠、というか警報の設置をすることにはなったが、昼飯の前にはクロスボウの修理を済ませているとはいえ、納品物をリケに任せっきりにするわけにもいかない。

　弟子なのだから任せても良いのでは、という向きもあろうし、実際に当のリケがそう言ってたりはするのだが、自分の仕事だからというところがどうしても抜けきらない。

　前の世界で「自分でやった方が早い」と後輩に任せず、ちゃちゃっと自分でやってしまったりしたが、あれに似た感覚ではある。「あまり良くないですよ、それ」と後輩に叱られたりもしたのだが、なかなか抜けきらないところだ。

　まぁ、納品物は単に金品との交換以外にも、情報を得るための材料でもある。この世界における世間的な「今の」情報は、マスメディアやインターネットのないこの世界では、カミロが教えてくれるものがメインになってくる。街や都へはあまり行かないし。

　カミロは元々行商をメインとしていて、今は店を構えてはいるが、あちこちに人をやっていたりするので、市井の情報が集まってきやすい。

　そもそも彼のような商売をする人間にとっては、そう言った情報は商売の上でも重要になってくる。

　それに、彼の情報源は貴族の方にもいる――王国だと主にマリウスと侯爵だが――ので、どちらの情報も得られるというわけだ。

　そんなわけで、２～３週間おきのニュース番組として彼が整理してくれた情報が役に立っているのだが、それをしてもらえるだけの働きは自分でやらなきゃ、と俺は思っている。

　それで今、俺は“いつもの通り”に板金に鎚を振るっているわけである。外に出て飯を食っているときは、少し肌寒さを感じたのだが、今はその全く反対だ。

　今日は炉の方を動かしていない（仕上げる短剣も十分な数が揃っている）ので、その分はマシだが、火床だけでも結構な温度になるし、その上全力で鎚を振るうのである。かなり汗をかいている。

　今のところ、汗をかいた先から冷えていくということもないので、湯冷めのような状態を気にする必要はなさそうだが、暑さが続くのもなぁ、といったところだ。

　しかし、これはこれで「作業をしている」という気になっていい。無心で鎚を振るうのも嫌いではない。ややワーカホリックにも思えるが。

「ああ、そうじゃん」

　そして数本のナイフを仕上げ、合間に水分補給をしながら、俺は思いついた。

「アラシにカミロの情報を持ってきてもらえばいいんじゃん」

　アラシもハヤテに会えるし、俺は１週間前後のスパンで定期的に情報が得られる。悪くないアイディアのように思えた。

　この辺の話は一度ディアナやアンネに聞いてみるのが良さそうだ。俺はそう判断して、自分の作業に戻った。

「うーん。アイディアは良いと思うんだけどね」

　１日の作業を終え、温泉で身ぎれいにし（湯冷めしないよう素早く家に戻った）たあとの夕食。話を切り出した俺にアンネが首をひねった。

「なんか気になることが？」

「小竜が定期的に行き来してるとこって怪しまれるかも、ってことでしょ」

　アンネの代わりにディアナが答えて、続けた。

「私なら、どこまで行けるかはともかく、気になったら後を追うわね」

「“黒の森”まで入ってくるかなぁ……」

「そこは賭けになるでしょうね」

　引き取ったのはアンネだ。今度は彼女が続けて言った。

「あの人の場合は元々それなりに名の知れた行商人だった上に、店を構えて大きくしていってる。そんな商人がやりとりをするのに小竜を使うことは十分にあり得るから、そもそも不審がる人が少ないかも知れない」

　一瞬、弛緩した空気が流れかけるが、アンネは更に続ける。

「ま、逆に言えばそこで不審に思う人はそれなりの手練の可能性があるってことだけど」

　俺は部屋の温度が下がったような感覚を覚えた。

　ゴクリと生唾を呑んだのは俺か、はたまた別の誰かだっただろうか。「あってもおかしくないこと」を不思議に思う人間が普通でないのは確かだ。

　ストーブの中で薪が爆ぜる音がやけに大きく聞こえる気がする。

　そこへ、呑気な感じでサーミャが言った。

「じゃ、罠を張るのは正解ってことだな」

「あ、そうね。それは確かに」

　アンネが頷く。

　こっちには“森のプロ”（リディのことだ）と“黒の森のプロ”（もちろんサーミャ）がいるし、それに伴う道具は俺が作る。それなりの手練でも引っかかる罠ができるだろう……できて欲しいな。

「そういうのは役に立たないに越したことはないし、カミロさんの持っているものだけとは言え、定期的な情報に魅力があるのも確かね……」

　おとがいに手を当て、アンネがつぶやく。ディアナが小さく手を挙げる。

「私が兄様のところに手紙を出して、送ってもらうようにしようか？」

「そっちからのも届けてもらうのか」

「うん。結局カミロさんのとこ経由なのは変わらないけど」

「ヤツもマリウスの情報は無碍にしないだろ」

「そうね。それをしたら立場上あまり良くないしね」

　その後、あれやこれやをみんなで話し合った。うちの家族はこういうときも結構生き生きとしている気がする。自分たちの生活に直に関わってくるからだろうか。

　最終的に、次の納品の時にカミロに打診することにした。OKならディアナからマリウスに宛てた手紙も届けてもらう。

　その手紙では、マリウスには俺たち（公式には帝国の第七皇女たるアンネも含めて）に教えて良い範囲で適宜情報を送ってもらうよう要請する。伯爵閣下を顎で使う感じになってしまわないかと、スパイの嫌疑がかかってしまわないかが心配だったが、

「妹に手紙を送る兄で通るでしょ」

　とディアナが気楽な様子で言ったので、そこは気にしないことにした。そもそも今更でもあるしなぁ。

　もちろん、カミロにもマリウスにも相応の謝礼は払うつもりだ。

　罠の設置は急ぐものでなし、次の納品後か、もしそこで気温やら何やら的に厳しそうであれば、春になってからでも良かろうということになった。

　しばらくはバタバタと“しない”、のんびりした生活になりそうだな、そんなことを思いながら、俺は晩飯の片付けを始めるのだった。

=====================================================

お知らせしておりましたとおり、今年の投稿は本日が最後になります。

また来年の1/5（水）より投稿いたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

皆様、本年中はありがとうございました。重ねてになりますが、また来年もよろしくお願いいたします。

## お出かけの朝

2022年1月5日

　罠については一度棚上げにし、コツコツと納品物を作り続け、その合間に狩りをする組は何回か森の見回りを行い、そして納品の日がやってきた。

　朝、目を覚ますと、ストーブの火はすっかり消えていて、毛布をめくると寒さが襲いかかってくる。

「“こっち”も冷えるなあ」

　前の世界でもなかなかの寒暖差を経験してきたが、文明の利器によるサポートがあった。今のところ、骨の髄まで凍るような寒さは感じていないが、文明の利器のありがたみを思い知るほどの寒さになるのだろうか。

　手早く家を出る準備をし、水瓶を抱えて外に出る。俺は自分の吐いた息がほのかに白く形を作っていることに気がついた。日に日に寒くなっているというのは俺の肌感だけではないようだ。

　俺が家の扉を閉めると、バタバタと娘たち３人が寄ってきた。彼女たちの息も白い。狼であるルーシーの息が白いのは当たり前のように思えるのだが、クルルとハヤテの息も白い。２人ともドラゴンあるいはそれに近しい種なので、見かけが爬虫類っぽく、変温動物のようなイメージを受ける。

　しかし、触ったときには蛇のように滑らかな手触りとともに、確かに温もりも感じるのだから、身体が熱を発しているのは間違いない。このあたりは前の世界の常識が全く通じないところである。

「寒いから今日も水浴びはなしだ」

　俺がそう宣言すると、ルーシーが尻尾を下げ、クゥーンと遺憾の意を表した。

　俺は苦笑しながら、ルーシーの頭を撫でる。以前と比べて屈む距離……というか、まぁそういうものが減ってきた。今も膝をつかずに腰を曲げるだけで頭に手が届いている。

「夕方にお母さん達に湯で拭いて貰うんだぞ」

　そう付け加えると、しょんぼりしていたのはどこへやら、すっかり機嫌を直したルーシーは、尻尾をふりふり一声吠えた。その声もどことなし精悍さ――女の子に適切な言葉かどうかはともかく――がついてきている。

　それでも、幼い頃と変わらず水浴びが好きなので、どうにも子供扱いが意識から抜けないな。

「よし、それじゃあ行くか」

　クルルとハヤテも撫でてやり、その温かさを手のひらに感じてから、俺たちは湖へ向かった。

「うーん、やっぱり一段と寒いな……」

　湖はさざ波を立てていて、凍るといった現象からは今のところ無縁のように見える。

　だが、湖面をいく風が元々冷たいところに冷やされるのか、身を切るようなと表現する一歩手前くらいまで寒さが来ている。

「水を汲んだらすぐに戻ろう。今日は納品があるからお出かけだ」

　その言葉に、娘達はやんやと喝采をあげた。多分。身体を清めるのは温泉があるし、農作業には井戸の水がある。従って水は基本飲用や調理用にしか使わないので、夏場よりは少ない量だけを汲むと、足早に帰路についた。

　家に戻ると、ストーブが活躍していて、ほのかな暖かさが身体を包んだ。一番最後に起きてきたらしいアンネが“本気”の時とは全く異なるポワンとした表情で顔を洗い終えたところらしく、タオルで顔を拭いている。

　タライからはほのかに湯気が立っていた。それについて聞いてみると、ヘレンが、

「ひとっ走り行ってきた」

　と事もなげに返す。うーん、水汲みは２日に１回とかにして、「お湯汲み」にした方が良いだろうか。そうすれば朝に娘達を湯で拭いてやれるし。湯冷めしないよう、すぐに乾くようにしてやらないといけないが。

　俺がそう言うと、ヘレンは首を横に振った。

「夕方の稽古だけじゃ鈍るかも知れないし」

　とのことである。すぐそこだし、ちょっとしたジョギングみたいなものか、と俺は納得して、それ以上は何も言わなかった。

　一方で、リケが苦笑半分ウキウキ半分の表情でアンネの髪を梳ってやっている。この後パパッと三つ編みを結ったり、色々と髪型を作ってやるのが、リケの楽しみなのだそうだ。

「妹にやってあげていたのもありますけど、自分の髪がこの通りですからね」

　リケの髪……と言うかドワーフ族の髪質は一般的にかなり頑固なようで、出来る髪型も少ないのだそうだ。

「ドワーフであることを残念に思うことはあまりありませんが、こればっかりはもう少し柔らかい髪の種族であればなぁと思いますね」

「今度エイゾウに頼んで、髪にいい香油なんかを買ってもらいましょうよ」

　様子を見ていたディアナが混ぜっ返す。ブンブンと手を横に振るリケ。

「ええ！？ そんな、悪いよ」

「春になったら、髪に良い薬草が採れますから、それも探しに行きましょうね」

　そこにフンスと鼻息も荒くリディも加わってきた。彼女の髪は櫛を通さずともサラサラと流れるようである。エルフだからだろうな、と思っていたが、なんらかの秘訣もあるのかも知れない。

　……俺も再び４０が巡ってきて前髪が撤退戦を始めてしまう前に色々聞いておこうかな。

　髪が女性の強い関心事の一つであることはこの世界でも変わらないらしく、ワイワイと、あの香油が良かったとか、あの薬草は効果が高いだとか、あそこのはあまり良くなかった、なんていう話で盛り上がっている。

　俺はその喧噪をBGMに、額にそっと手を当てると、朝食の支度を始めるのだった。

## 冬の森を行く

2022年1月7日

「準備はできたか？」

「おう」

「こっちも大丈夫です」

　いつものお出かけ服に少し服を足した状態のサーミャとリケが返事をする。遠くへ行くときの旅装に近いと言えなくもない。

「そう言えば、みんなここに来るときはそんな感じだったな」

　元々この“黒の森”に住んでいたサーミャと、帝国から救出したヘレン以外は、大抵ちょっとした旅をしてここに辿り着いている。その時の格好を思い出したのだ。

「まぁ、移動しようと思うとどうしてもね」

　そう言ったアンネが着ていたのは、最初はそうは思わなかったのだが、一度見せて貰うと、かなりしっかりした生地で、そのままもっと遠くへ行っても問題なさそうだった。

　皇女に下手な服は着せられない、と言うのはまぁあるよな。さすがに皇女を示すような意匠は何も入ってなかったが。

　クルルやルーシー、ハヤテに着せたドテラみたいな服を見ながら荷車に乗り込み、ディアナが言った。

「もう少し寒くなったら、モコモコに着込んだほうがいいのかしらね」

「その間はなるべく家に引っ込んでたいところだけどなぁ」

　俺は荷車に乗り込みながらそう返す。うちの備蓄もかなりあるし、食料や燃料、材料は一月か二月かくらいであれば耐えられるだろう。

　夏みたいに家でじっとしていても変わらないならともかく、籠もっていれば快適であるなら、あんまり出ていくのもなぁ。

　ルーシーが自分でピョンと荷車に飛び乗り、自慢そうに胸を張っている。その頭を「えらいえらい」と撫でていたディアナは、その顔をペロリとされると相好を崩した。

　ハヤテはクルルの背中に留まっている。ドテラがあるので滑ってしまいやしないかと思ったが、意外と大丈夫なようで、スッと身を縮こまらせてウトウトする体勢に速やかに移行した。

　俺たちを乗せて“黒の森”をクルルの牽く竜車が進む。いつものように、といかないのは何だかんだ騒がしい森の中が、今日は静かなことだ。静まりかえる、というほどではないが、鳥や虫の声がかなり少ないように感じる。サーミャに聞いてみると、

「気の早いのが冬ごもりをはじめたかな」

　と辺りを見回しながら言った。早いに越したことはない、と考えるものもいるということだろうか。サーミャはぐるりと一通り周囲に視線を走らせたあと、俺の方を見ると言った。

「さっき家に引っ込む、って言ってたけど、うちも早速冬ごもりするのか？」

　俺は顎を撫でながら思案する。

「籠もるかどうかは食料だのなんだのと相談ってとこだな。嫌なタイミング……思ったより食料が早く減ってる、なんてところで雪が降ったり地面が凍らないとも限らないから、カミロのところには行けるときに行ったほうが良さそうでもあるんだがな……」

　雪そのものも厄介だが、地面が凍ってしまったり、それが溶けたときに泥濘が生まれてしまうとしばらくはロクに動けないだろう。凍った地面と泥濘はどちらも前の世界ではチョビ髭殿の軍隊の進撃を食い止めた猛者である。

　そこまでの状況になることはほぼないとはいえ、もしそうなってしまったら、さすがにその猛者たちに立ち向かおうとは思わない。その前に冬営する軍隊よろしく食料をかき集め、“黒の森”での引き籠もり生活に備えたいところだ。

「アタイが見た感じだと今日手に入れる分を含めたら、しばらくは大丈夫だと思うけどね」

　そう言ったのはヘレンだ。彼女も新たに手に入れた布を使って新しく仕立てた外套を着ている。ディアナやリディがメインだが、自分でもコツコツ作業したものらしい。

　ともかく傭兵の、つまりそれこそ冬営のプロ（多分）である彼女がそう言うのだ、量的には問題ないと見て間違いあるまい。

「何があるか分からないから、なるべく確保しておいた方が良い、ってのにも賛成だけどな」

「ふむ……」

　俺は再び顎を撫でて思案する。

「情報の話のついでに、納期の間隔を延ばすんでなしに、森に籠もるかも知れないことをカミロに相談するか」

　俺がそう言うと、家族みんなは――リケはクルルの面倒を見ているので無理だが――頷いた。

　そして、通るのは今年最後になるかも知れない街道へと、竜車は進んでいくのだった。

## 街道から街へ

2022年1月10日

　街道に出ると、すっかり夏の勢いを失った草原が茶色く広がっている。野盗も動物たちも、身を隠すには不都合な季節だ。

　動物はともかく、野盗達はいつ来るかも分からない獲物を、巡回の衛兵達に見つかるリスクを冒してまで寒空の下待ち続けるのは、あまりにもメリットが少なすぎる。

　そのため、冬は比較的野盗の発生が少ないらしい、という話をアンネがしていた。

「まぁ、私が知っているのは帝国のほうだけど、王国でもそんなに変わらないでしょ」

　と、アンネは締めくくる。

「好き好んで冬に活動しようと思うやつはそんなにいないからなぁ」

　ヘレンはそう言いながらも、周囲に視線を走らせて警戒を怠っていない。一か八かに賭けるところまで追い込まれている野盗もいるだろうからな……。

「持っては来たけど、こいつの出番がないに越したことはないからな」

　俺は傍らにおいてあるクロスボウを持ち上げた。弦はセットしていない。今の状況を考えると不要そうだからだ。

　投槍もあるし、弓の名手が２人いる。接近すれば“迅雷”の双剣に、及ばずながら“薄氷”の俺、“剣技場の薔薇”の剣技、皇女殿下の大剣が迎え撃つわけである。

　そして、これを使うことになるリケはクルルの手綱を握っている。これでは出番はほとんどないだろう。

　皆も荷車の上で頷いた。

　ビュウと寒風が吹く。湖を渡ってきた風ほどではないが、やはり冬の風は冷たい。それでもクルルはしっかりと荷車を牽いていく。

　リケが手綱を握っている、とは言え最近はもう半分形だけみたいなもので、何事もなければ「勝手知ったる」と言わんばかりにクルルは自分のスピードで街道を進んでいく。

　もし不審なところをサーミャかヘレンが見つければ、声をかけてリケが手綱を操り、クルルがスピードを落とすことになっている。

　それも最近ではリケが操るまでもなく自分でスピードを落とすらしい。

　では、リケはもう手綱を握らないでいいのでは？ と思わなくもないが、万が一の時に指示が出せないとマズいとのことで、リケが担当してくれている。

　しかし、そろそろ他の人間も出来た方が良かろうという話は出ているので、いずれ誰かがやることになると思う。

　この話が出たとき、真っ先に手を挙げていたのがディアナであるのは言うまでもない。

　それはともかく、時折寒風がやってくる以外には今のところ平和な街道を、俺たちを乗せた竜車はのんびりと街へ向かっていった。

「お、あんたらか」

「どうも」

　街の入り口にさしかかると、顔見知りの衛兵さんが声をかけてきた。夏や秋口と違い、鎧の上からマントのようなものを羽織っている。

　マントには見覚えがある紋章があしらわれていた。言うまでもなく、この街の領主たるエイムール家の紋章である。防寒用途として羽織っているのだろうが、その役にどれくらい立っているのか、寒そうな様子を全く見せない。

　もしかすると、彼ら独自の防寒の秘訣とかがあるのかも知れない。機会があったら聞いてみたいところだ。

「寒くなったな」

「そうですねぇ。皆さんも寒さで病を得ないようにお気をつけて」

「もちろん。あんたらもな」

「ええ、ありがとうございます」

　いつもは挨拶を交わすとすぐに目を街道にやる衛兵さんが、珍しく季節の挨拶のようなものをしてきた。

　それだけこの時期は――“比較的”という前置きが必要だろうが――平和だということだろう。

　人通りも少ないのかと思っていたが、予想に反して思ったよりは人通りがある。まだ本格的な冬というわけではないし、今のうちに支度をしておくのは街の人間も同じなのだろうか。

　幾分大きくなったルーシーにもこっそり手を振る無愛想な露天のオヤジさんを横目に見ながら、クルルの牽く荷車は人々で賑わう目抜き通りを進んでいくのだった。

## 最初の一つ

2022年1月13日

　肌寒い中を人々や馬が行き交う。馬の中には早駆けしたのだろうか、身体からほのかに湯気をたてているものもいる。

　人々があちこち忙しそうにしているところを見て、“師走”と言う言葉が頭をよぎった。

　ふと見ると、壁の向こうに立ち上る煙が見える。火事……ではなさそうだ。おそらくは壁内の家で暖炉に火を入れているのだろう。

　そう言えば、早々にマリウスと知り合ったので、この街にどんな人達が住んでいるのか知らないな。壁内に入ったこともないし。

　本来は立ち入ることが難しい都の内街の方がまだ馴染みがある。

「ああ、代官の他には騎士が数人てところよ。結構広いからね、うちのとこ」

“街の領主”と聞くと、この街だけを治めているように思ってしまうが、無論そうではなく、この周囲にある農地も領地であるらしい。

　全体を代官が取り仕切り、騎士達が補佐をしているらしい。街と農地からくる「あがり」の一部も彼らの収入になるし、いざ事が起きたときに、まず矢面に立って戦うのは彼らなのだと、大筋をディアナが言って、ところどころアンネが補足していた。

　アンネが隣国の事情に通じているらしきことはこの場は目を瞑っておこう……。

「いずれルロイが越してきて、今の代官さんは晴れて隠居か」

「いつになるかはともかく、そのはずね。前に兄さんが言ってたし」

　その少しだけ新しい街も、いつもの街になっていくのだろうか。そんなことを少しだけ思った。

「あ！」

　荷車をカミロの店の倉庫に入れた後、みんなと一緒に娘達を連れていった裏庭に、明るい声が響いた。この店の丁稚さんだ。利発そうな目に喜びの色が宿っている。

　……この子の事を考えると、冬の間来ないのもかわいそうかな、などと考えてしまう。店の人達も良くしてくれているようだし、きっと街に友達もいるんだろうが、この時間にうちの子達と一緒に過ごすのも、丁稚さんには良い経験になっていると思うからだ。

　だが、丁稚さんはよその子、カミロなり番頭さんなりから頼まれない限り、気遣いが過ぎればそれは嫌味になりかねないし、控えておくべきか。

「寒くなったなぁ」

「そうですね。なので……」

　丁稚さんが庭の隅の方に目をやった。裏庭に入ってきたときから目にはついていたが、昼なお赤く燃える焚き火がそこにはあった。

「用意してくれたのか」

「ええ。寒いといけないので」

　いずれ走り回るのだろうし、そうすれば汗をかくほど身体が温まることは間違いないのだが、汗をかいた後にそれが冷えると、体温を奪われてよろしくないこともある。焚き火でそのへんの調節が出来そうだ。

「ありがとうな」

　俺は丁稚さんの頭を撫でると、すっかり見慣れた裏口から店の中へ入っていった。

　いつもの商談室に入ると、程なくカミロと番頭さんがやってきた。

「よお、急に寒くなったな」

「そうだなぁ。夜は火が欠かせないよ」

「昼も夜も火が必要ってわけか」

「だな。ありがたいことだよ」

　そんな他愛もない話をカミロと交わした。ちょうど気温の話も出たことだし、俺は話を切り出す。

「寒いと言えばだ。次の納品をいつもより先延ばしにしようと思うんだ。あまり寒い中を行き来するのもな」

　番頭さんが淹れてくれた何かのハーブの茶を啜る。暖かさが喉から身体に染みこんでいくのを感じた。

「とは言っても、延びて困るようなら別にそれを蹴ってまで冬ごもりしようってわけでもないんだ。その辺どうかと思ってな」

「ん。そうだな」

　カミロは口ひげをいじりながら天井を仰いだ。

「あればあるだけ嬉しい、というのが正直なところだな。在庫が多少出ようとも売る先はあるし」

「ふむ……」

「ま、無けりゃ無いでどうとでも出来るさ。さすがにいつまでもない、ってのも困るが……」

「さすがに完全に春になって木々が青々とするまでは来ない、なんてつもりはないよ」

「それを聞いて安心したぜ。さすがに延々と売り切れなのは困るからな」

　ニヤッとカミロが笑った。かと思うと、少し表情を引き締める。

「じゃ、今回は６週間分くらい持っていくのか。運べるか？」

　カミロが言って、俺はリケとリディの方を見やる。彼女達は２人ともコクリと頷いた。

「大丈夫そうだ。なに、いざとなれば久方ぶりに俺が担ぐよ」

「おいおい、それで身体壊したりするなよ」

「まだまだ平気さ」

　今んとこはな。あと１０年もしたら厳しくなってくることはもう知っている。

「何かあったら、アラシをやってくれ」

「そうだな。そうするよ」

　そう言ってカミロは番頭さんの方を見る。番頭さんはいつもの作業をしに部屋を出て行った。

「ああ、アラシなんだが」

「なんだ、また何かあるのか？」

　苦笑するカミロに俺は頷いた。

「ほら、いつもここでしてくれる話があるだろ」

「ああ、あちこちで仕入れてくる噂だとかか」

「あれを手紙に纏めて、週に一度くらいの頻度でアラシで送ってくれないか？」

「他に世間の話を知る術もないか」

「そうなんだよ。それですぐに何か困る、ということもないんだろうが……」

「知っておいた方が良いこともあるだろうからな」

　俺は再び頷く。そして、マリウスの話しをしようとした。

「じゃ、伯爵閣下にも都の話やらを聞いておくか」

「それも頼もうとしてたんだよ」

「そりゃ。話を欲しがっているわけだからな。察しはつくさ」

　カミロは大げさに肩をすくめる。商人であればこれくらいは普通に思いつくか。鍛冶屋の俺が思いつくくらいだし。

「勿論、金は払うから」

「おっ、いい稼ぎになりそうだ」

「お手柔らかにな」

　カミロが大きく笑い、俺は苦笑する。

「が、金は少しで良い」

「ん？ ちゃんとかかった金と手間賃くらいは取ってくれよ。そっちの方が互いに気が楽だろ？」

「いやぁ」

　カミロはそう言って頭を掻いた。

「お前んとこだけじゃなくて、他にもうまく売れそうだなと思ってな。値引きはその分だ」

　少しだけ決まりが悪そうに、しかし、少年のように目を輝かせてカミロは言った。

　もしや、俺は新聞のはじまりのようなものに手を貸してしまったのでは……。

　いや、大規模に印刷できるようになるまでは、情報が大規模に拡散することもそうはあるまい。大きな告知は蜜蝋を塗った立て札の表面を引っ掻いたものでなされたりするくらいだし。

　あまり大儲けはしてくれるなよ、俺はカミロにバレないよう、心の中でこっそりとそう思うのだった。

## 曇り空

2022年1月18日

「で、都のほうはどうなんだ？」

「ん？ ああ、大きなことはない……んだが」

　カミロは茶に口をつけた。一口飲むと、口ひげをいじる。彼が話をしようかどうか迷っているときの仕草だ。

　俺は自分も茶を飲んで、カミロが話すかどうか決めるのを待った。ヘレンが焦れている気配がするが。

「一応、お前の耳には入れとくか。話を売るって話もしたし」

　カミロはもう一度茶を啜ると、俺を見据えた。

「北方から人が来ただろ？」

「ああ」

　色々なすれ違いで、不幸な出会いになってしまった一件だ。そう言えば、カレンさんの作品（？）を見る約束をしていたな。届いたら俺だけでも街に出てくるか……。

「あの時、俺なりに裏は取ったんだよ。で、大丈夫だと判断した。でなきゃお前のとこにはやらんからな」

　カミロの言葉に、俺は深く頷いた。その辺りは俺も大きく信頼を置いているところだ。

「で、あれがあってから、もう一度調べてみたんだが、どうも俺のところにくる情報が意図的に妨害されていた感じがある」

「ほう」

　カミロくらいになれば複数の情報源、情報網を持っていてもおかしくない。それこそ、マリウスですら知らないような。

　それを妨害できるほどの力を持っているとすれば……。

「“公爵派”か」

「だと、俺は睨んでいる。ま、そこで尻尾を出すような連中でもないからな」

「だろうな」

　そこであっさり尻尾を掴まれるようなら、サッサと侯爵とマリウスが排除していることだろう。“主流派”と呼ばれる派閥と丁々発止やりあうなら、そんなうっかりでは務まるまい。

「そんなわけで、お前に売る話に妨害されたものが混じる可能性がある。伯爵閣下のはそのままソックリ渡すが、そっちもまぁあくまで“主流派”から見た話だ、ってのは覚えておいてくれ」

「分かった」

　まぁ、情報というものは多かれ少なかれ主観やなんやが混じってしまうことがあるのは仕方ない。シマウマを白地に黒縞だと思ってそういうか、黒地に白縞と思ってそういうかだ。シマウマの場合、実際には後者らしいが。

　それはさておき、俺が“新聞”に期待しているのは、この世界全体の空気というか、匂いのようなもので、大まかに何が起きているかを知りたいのだ。

　基本的には“黒の森”に籠もってるからな。どのみち、例えば明日ふらっと旅に出たとして、この世界で俺が知り得る範囲はかなり狭いだろう。それはそれで楽しい人生だと思うが、それをしたいならウォッチドッグにそう言ってるからな。

　その点、カミロであれば自身は動かずとも、あちこちから色々な話がやってくるに違いない。いずれ興が乗ればかなり遠いところの話も仕入れてきてくれるかもだし。

　それでまぁ、鍛冶屋仕事のヒントみたいなものがあればなお良いな、といったところだ。うちにある希少な鉱物たちも一筋縄ではいかなさそうだし。

「それじゃ、とりあえず頼んだ」

「おう」

　こうして、この冬最後になるかも知れない商談をつつがなく終え、俺たちは商談室を後にした。

## “公爵派”

2022年1月20日

　商談室を辞して、俺たちは裏庭に戻る。すると、うちの娘たちと丁稚さんの４人はパタパタと走り回っていた。いや、ハヤテは飛び回っていたが。他の店員さんも相変わらず微笑ましげに見守っている。

　しばらくはこの光景も見られないと思うと、自分で決めたこととは言え、若干の後悔のようなものも感じるな。

「あっ」

　出てきた俺たちに気がついた丁稚さんは駆け寄ってきた。どうやらかなり走り回っていたようで、吐く息の白さがそれを物語っていた。

　後ろから慌てたようについてきた娘達も、負けず劣らず白い息を吐いていて、更に裏付けている。

　その原因について、丁稚さんは短く白い息を吐きながら言った。

「ルーシーちゃん、速くなりましたねぇ」

「そうか？」

「ええ、とっても。身体も大きくなってきましたし」

　丁稚さんはニッコリと笑う。そういう彼もどことなし、子供っぽさが抜けてきているような。いや、人間の成長はさすがにそこまで早くはないか。

　俺は彼の頭を撫でて、お守り代とお小遣いとして貨幣を１枚渡す。丁稚さんはペコリと頭を下げる。

「ありがとうございます！」

「こちらこそ、いつもありがとう」

　丁稚さんは、竜車が離れるまで勢いよく手を振り、それを荷車の後ろから見ていたルーシーの尻尾も勢いよく振られている。

　それを発見したディアナの声にならない歓声と同時に、久方ぶりに俺の肩のHPは減っていった。

「どう思う？」

　荷物を満載したクルルの牽く竜車が街を出て（ルーシーが衛兵さんに愛想良くして和ませていた）、俺は皆に言った。

「あの男の子？」

「いやいや……」

　ディアナが言って、俺は苦笑する。丁稚さんは良い子である、というのは間違いなかろう。わざわざ聞くまでもない。

　もし、あれでとんでもない裏があったら、俺はしばらく人間不信に陥ることうけあいである。

「“公爵派”の話？」

「うん。そう言うのには疎いからなぁ」

「そうねぇ……」

　話はアンネが引き取った。一応北方出身の家名持ち、と言うことになっている俺ではあるが、実際にはそんなことはまったくないわけで、政治というか宮廷的なあれこれはピンと来ない部分が多い。

　その辺りは専門家……と言うにもいささか豪華すぎるようには思うが、ディアナやアンネに任せるに限る。

「カミロさんの見立ては正しいと思うわよ。“公爵派”としてもこれ以上“主流派”の勢力を伸ばすわけにはいかないでしょうしね」

　なんせ“主流派”とまで言われている派閥だ。今でも勢力として大きいだろうに、それ以上伸びられてもな。

　しかし、だ。

「北方の一団の話がカミロにちゃんと伝わると勢力が伸びるのか？」

「エイゾウってその辺り無自覚ね。そう言うのもあって北方を離れたのかも知れないけれど」

　アンネは大きく溜息を吐く。ガタゴトと結構な音を立てている荷車の音を乗り越えてくるような大きさだ。

「周りにいる人達を見てみなさいよ」

　言われた言葉そのままに、俺はぐるりと頭を巡らせる。途中目が合ってルーシーの頭を撫でたりしたが、アンネの言わんとするところはなんとなく分かったような気がする。

「ここにいる人達だけでも、“黒の森”の獣人、ドワーフ、伯爵家令嬢にエルフ、腕っこきの傭兵とそして帝国皇女」

　アンネは指を折っていく。挙げられたサーミャ達が一瞬怪訝な顔をした。

「ここにいない人だと、“主流派”の筆頭といっていい侯爵に伯爵、気鋭の商人。王国付きの文官。それに市井にも知人友人が沢山」

　指を全部折ると、アンネはパッと手を開いた。俺の脳裏には今挙げた人々の顔がよぎる。

「全容は把握はされてないでしょうけど、魔族からも依頼があったって聞いたし、“黒の森”の主リュイサさんに妖精族の人達もいるわけでしょ」

「そうだな」

「何をどうするかはさておいて、それら全てに繋がりがあるのが貴方よ、エイゾウ」

　アンネはそう言うと、表情をキリッと引き締めた。

「もしあそこでカミロさんに情報が伝われば、ちゃんと正面から説明したほうがいいってことになって、話が綺麗にまとまったかも知れない。そうなれば、今挙げた人達の他に北方への繋がりをも持つことになる」

　そこまで言って、クスッと笑うアンネ。

「ま、そこの妨害は半分以上失敗してるけどね」

「カレンさんが都に残ってるからか」

　アンネは頷いた。

「繋がりとしてはまだ維持されちゃってるからね。本当は破局を狙いたかったところを、伯爵が奔走した結果、逆に妨害した形でしょうね。もっと強力な繋がりのはずが弱まってはいるでしょうけど」

「ふーむ。俺はただの鍛冶屋だから、そんな影響力を発揮しようとは思わないけどなぁ……」

「でしょうね。“主流派”の人達もそうは思っているはず。でもそれは“公爵派”には分からないし、直接説明したところで信じないでしょうからね」

　アンネは遠くを見やった。警戒なのか、それともその他の何かか。

「ちょっと気をつけておく必要があるかも知れないわね」

　車上の全員がハッとした顔になる。俺の背中に走った寒気が、今吹き付けた寒風によるものか、はたまた別のものなのか、俺には判別がつかなかった。

## 寒風

2022年1月21日

「うーん、多少危険度が上がっているなら、少しでも警報装置だけは作っておくか」

　納品を終えて帰る街道の上、俺は言った。

　とりあえずは紐に脚なりなんなりを引っ掛けたら、鳴子がカランコロンと派手に鳴るだけでも良いのだ。それを俺たちが実際に聞きつけるかどうかはどちらでも良くて、目的は「聞きつけられたかも」と侵入者に思わせることにある。

　派手な音が響いたが、何も起きないし聞こえてこない。これは果たして気がついてないのか、それとも何かの方法で覚られずに待ち伏せの態勢を整えているのか。……と思わせられれば、その時点で撤退することもあり得るだろう。

　俺たちは“黒の森”に住んでいる。文字通りの地の利を得ることが可能だ。待ち伏せを警戒しても、それには限界があると考えてくれるだろう。多分。

　もちろん、合わせて矢でも飛ばせれば警告としては上々だろうが、ひとまずは見送っても問題あるまい。

　と言うことを続けて皆に説明する。気がつけば、周りはシンと静まりかえった森になっていた。

「そうですねぇ……」

　リディがおとがいに手を当てている。さっきまで話を聞きながらもあちこちに視線を巡らせて警戒していたヘレンも、同じようにして考えてくれているようだ。

　森に入ってしまえば、俺たちにとっては街道よりも安全だからな……。

　それでも、全く気を抜いているわけでもなさそうではある。俺も周囲に目をやると、いつもならそれなりにいるはずの動物達の姿があまりない。

　群れをはぐれたか何かだろうか、かなり遠くの方に大きいらしい樹鹿の姿を１頭見かけただけだ。

「春を待ってからでも良いと思ってましたけど、鳴子だけでもつけましょう」

　ややあって、少し俯き加減になっていた顔をあげたリディがそう言った。ヘレンも頷いている。

「うちには優秀な子もいるけど、なるべくは止めといたほうが良いだろうからな。来るか来ないかも分からない、ってなら用意しといた方が良さそうだ」

　そう言ってヘレンはルーシーを撫でた。彼女は狼の魔物である。最近成長著しい彼女なら、言葉は悪いがさぞ優秀な衛兵であることだろう。

　しかし、基本的にはうちの子達にあまり物騒なことをさせたくないのはヘレンも同じらしい。

「狼たちもこの時期はお休み、ってなら余計にかな」

「そうだな」

　もう少し暖かい時期なら、この“黒の森”を狼たちがそれこそ衛兵のように歩き回っているので、多少は警戒を任せることも出来るだろうが、冬の時期は動きが鈍いとサーミャも言っていたし、そもそも別にうちを守ろうと巡回してくれているわけではない。過度な期待は禁物である。

「よし、それじゃあ明日からはその辺をやっていくか。今日は全面的にお休みにしよう」

　俺がそう言うと、皆から了解の声が返ってくる。その声は冬の風が渡り、葉擦れの音だけが聞こえる森の中に響いた。

　翌朝。俺は寒い朝の日課を終えて家に戻ってくる。居間では湯で皆が身支度を調えていた。俺はかまどに火を入れて、軽く手を温めた。

「なんだか降ってきそうだったな」

　あまり大きくない声で俺はそう独りごちる。さっき娘達と水を汲みに行くとき、雲が空を覆っているのに気がついた。

　雨……の割には雲が重くなさそうだったので、降るとしたら雪か。冬本番にはまだもう少し早いと聞いていたが、「あわてんぼうのサンタクロース」よろしく、少しだけ急いでやってきたのかも知れない。

　などと思いながら朝飯を済ませ、今日の作業をするべくリケと２人で鳴子に使う木材や紐を用意していると、

『わぁっ』

　と表から皆の声が聞こえてきた。

　何事かと俺とリケで慌てて外に飛び出すと、空からふわふわと落ちてくる綿毛のようなもの。

　そう、雪がこの“黒の森”を白く染め上げるべく、降ってきたのだった。

## 白

2022年1月25日

「降ってきたのか」

　チラホラと落ちてくる雪を見て、俺は言った。ハーッと大きく白い息を吐いたディアナが隣に来る。

「積もるかな？」

「どうだろうな。これくらいだとあんまり積もらなかったりした記憶があるが」

　とは言え、それも前の世界の知識である。大きめのが降って地面を冷やし、その後粉雪に変わると綺麗に積もったりしていた。

　今降っているのは大きめのではあるが、雪量がそこまででもないので果たして積もるかどうか。

　ふと見れば、うちの娘３人がはしゃぎ回っている。ハヤテはもう立派に成人ならぬ成竜しているらしいのだが、幼子に混じっていると童心に返るのだろうか。

　いや、はしゃぎ回っているのは娘たちだけではない。娘“さん”たちもである。サーミャとヘレンとアンネが一緒になって走り回っていた。

　リディは傍らで手のひらに雪を受け止め、興味深そうに眺めていて、横からリケが覗き込んでいる。

　ルーシーが器用に降ってくる雪をヒョイパクヒョイパクと口に入れはじめた。雪って核になる粒子があるから、見た目に反して綺麗なものでもないのだが、あんまり目くじらを立てるのも野暮だろうか。

「あんまり食べ過ぎると、お腹壊すからほどほどでやめとくんだぞ」

　俺が言うとルーシーはこっちを見て、

「わん！」

　と大きな一声をあげる。そのあと、あまりヒョイパクはせずに、クルルやハヤテと純粋に舞う雪を追いかけ始めたので、どうやら理解はしたらしい。

　肩に連続した衝撃を感じながら、俺はこの後の作業に使う道具や材料を取りに、鍛冶場に引っ込んだ。

「よーし、それじゃあ始めるか」

『おー！』

「クルルルルル」「わんわん！」「キュー！」

　寒さが辛くなってきたらあたるための焚き火を前に宣言すると、元気の良い返事が返ってきた。雪の寒さでテンションが下がっていたらどうしようかと思ったが、完全な杞憂だったようだ。

　皆分かれて、ここが良さそうだ、あそこはどうだと話している。

　あれから雪は降り続いていて、うっすらとだが地面を白く染めている。勢いはかなり弱まってきたので、１センチも積もったりはしないだろうが。

　ふと、前の世界のテレビ番組で、雪の森の中でツリーハウスを作っていくのがあったことを思いだした。

「ツリーハウスか……」

　ツリーハウスと言えば、なんとなしログハウスに次いでスローライフの代名詞のような感じもするな。アメリカなんかだと子供の秘密基地的なものとして親が作るんだっけか。

　うちの場合はクルルの体格が体格なので作っても入ることは難しそうだ。

　どっちかというと、大人達がのんびり過ごす離れのようになるだろうか。

　いや、多分同じ番組でやっていた動物観察小屋みたいになるな。寄ってこないだけで動物多いし。

　もしくは監視小屋だ。状況から考えると、その目的でなら作っても良さそうな気がしてくるな。そのうちヘレンかアンネに相談してみるか。

　単に作りたいだけ、というのも否定しにくいところだが。

「１つはここにしましょう」

　俺とディアナ、そしてリディがここでもない、あそこでもないとワイワイやりつつ家から離れながら検討し、やがてリディが指し示したのは、冬の時期になお青々とした下生えを残す一角だった。

　ここだと家からギリギリ見えなくもない場所で、「聞こえたかも」と思わせられるし、逆に警報装置があることによって家の位置をバラしてしまうこともなさそうだ。

「じゃ、ここに罠を張るか」

　俺が言うと、２人は頷いた。

　テキパキと縄を張る２人を見ながら鳴子をササッと組み立てつつ、これが役に立つようなことがあんまり無いと良いのだけどな。俺はそう思った。

## 警戒網

2022年1月27日

　俺はいくつか鳴子を作り終わるとリディ達に引き渡す。ディアナが振ると、鳴子は軽快な音を立てた。しんと静まりかえっている――厳密にはうちの家族がはしゃぐ声が聞こえているが――“黒の森”に思いの外大きく響く。

「これなら鍛冶場で作業してても誰か気がつくかもなぁ」

「そうね」

　ディアナがそう言った。リディも頷いている。ちなみにエルフのリディは耳が長いが特段音が良く聞こえるとかではないらしい。人間（とドワーフと巨人族）と比べれば多少は聞こえるそうだが。

　うちで一番耳が良いのは獣人のサーミャである。狩りの時もその聴力で獲物を見つけたことがあるらしい。

　さておき、これだけ響けば引っかかった者に自分がドジを踏んだであろうことを知らせるには十分だろう。

「よし、それじゃここは頼んだ」

「うん、分かった」

　ディアナが頷く。俺は他の警報の位置を確かめるべく、その場を離れた。

「ふっふっふ」

　ヘレンが不敵に笑っている。うちに来てから機嫌の悪いところをあまり見てないが、今日は特に機嫌が良さそうである。

　罠を仕掛ける、というのが久方ぶりで嬉しいとかだろうか。彼女が見る先を俺も見てみると、かなり目立つように縄が張ってある。慣れていない素人でもすぐに分かりそうな張り方だ。

　ヘレンがうっかり目立つように張ってしまったとも思えない。とすると、あり得そうなのは……

「ダミーか？」

　俺は近寄ってそっと手を出した。特に止めてこないので、そのままグイッと縄を掴んでみると、カランコロンと高らかに音が鳴る。

「よしよし」

　振り返ると満足そうなヘレンがアンネとハイタッチをしていた。文化としてそういうものがある、というよりは感情がそう動いた結果っぽいな。

　それを少し微笑ましく思いつつ、ダミーと見せかけて本物とはやるな……と感心しながらふと見ると、下生えに隠れているところに別の縄があるのに気がついた。

　そっちも掴むと、やはりカランコロンと鳴子が鳴った。それと同時に、ダミーだと思っていた縄が少し揺れる。

「ははあ、繋いだのか」

「ご名答」

　縄はダミーを乗り越えても引っかかるような、絶妙な位置にも仕掛けてある。

　そもそもダミーと思えるものであっても、鳴子が鳴るものが１本でも含まれていれば、全てについて警戒せねばならない。

　それで警戒して乗り越えようとすれば、そこにも仕掛けてあると言うわけだ。

　流石プロと言うべきか。短時間なのにブービートラップのお手本みたいな仕掛け方をしているのだ。

「流石だな」

　ヘレンはそう言った俺の言葉を聞いて、ニンマリと笑う。そのヘレンの後ろでは、金槌を持ったアンネがどうだと言わんばかりに腕を組んで立っている。

　俺はその２人の肩を叩いて、リケとサーミャのいるほうへ向かった。

「おお、これはまた……」

　発想としてはサーミャたちもヘレンたちに似たところに至ったらしい。こちらは視線を誘導しておいて、その死角になるようなところに仕掛けてあった。

　俺はまんまと引っかかり、カランコロンと派手な音を聞く羽目になったのだ。

　それも１つに引っかかってそれから離れるように動けば次のに引っかかる、と言った具合で律儀にほとんど片っ端から引っかかってしまったが、位置は良く確認できたので結果オーライということにしておきたい。

「こりゃまた凝ってるな」

　俺が素直に感心すると、サーミャがフンスと鼻息も荒く胸を張った。

「動物を捕まえる罠の応用らしいですよ」

「へえ」

　リケが言って、俺は辺りを見回す。引っかかってきた場所から考えると、ちょうどここが罠の中心になりそうだ。なるほど、大きく網をかけるように仕掛けられているのだな。いつの間にか中心に寄せられてしまうわけだ。

　狩りの時は中心に来たところで弓で仕留めるのだろう。今回は別の罠でも仕掛ければ高い効果を得られるかも知れない。

「流石サーミャだな、見事なもんだ」

　俺の再びの感心に、サーミャはさっきより一層鼻息を荒くし、一層ドンと胸を張るのだった。

## 寒空の下で

2022年2月1日

　結局のところ、雪は早々に降り止んでしまった。娘たちが名残惜しそうにわずかばかり白くなったあたりの雪を触っている。

　当初の勢いのまま降り続けていれば、それなりに積もっただろうから、娘たちにとってはいささか残念な状態だ。

　だが、それだけ降ったり積もったりすると言うことは、すなわちそれだけ寒さが続くと言うことに他ならないわけで、あまり良いことでもなさそうではある。

　このちょっと遊べるくらいがちょうど良い塩梅だろうな。

「あとはもう籠もるだけか」

　そう独りごちると、言葉は白くなって口から出てくる。昼をやや回っているし、雪も降り止んではいるが気温は相変わらず低いらしい。体を動かしたので、多少体温が上がった影響もあるだろうが。

「完全に籠もるだけと言うわけにもいかないだろうけど、狩りも休みで森から外に出ないからな」

　サーミャが腕に束ねた縄を持ちながら言った。

　いよいよ、せいぜいが温泉かあるいはちょっと何かを取りに行くくらいの日々が始まる。

　納品物はその間も作り続けるし、生活はあるのだが、６週間……つまり、１か月もの間出不精状態で過ごすのは、前の世界を含めても初の経験だ。

　のんびりと暮らしたいと思っていたのに、なんだかんだと忙しい日々が続いていたしなぁ。

　その後はまた２週間に１回納品に行く日々が始まるが、多少羽を伸ばしたところで罰が当たることもなかろう。

　時間はたっぷりあることだし、希少鉱物の加工を試してみるのもありかなぁ。

「よーし、遅くなったけど昼にするか」

　これから来るのんびりした時間をワクワクした気持ちで楽しみにしながら言うと、家族の皆から返事が返ってくる。

　それは静まりかえった“黒の森”の冬籠もりの一声のようにも、俺には聞こえた。

「そう言えば、畑は大丈夫なのか？」

「畑ですか？」

　干し肉を戻して、畑の野菜と一緒に炒めたものをつつきながら、俺はリディに聞いた。

　この野菜もちょっと前に収穫したあと、干して保存していたもので、ニンジンっぽい根菜が主である。葉物野菜は基本採ってすぐ食べちゃうからな……。

　数少ない例外がこの炒めものにも入れた干しキャベツ（みたいな野菜）だ。元の世界ではそのままでも十分甘みを感じる野菜だったが、この世界のものはえぐみが少し強い。

　元の世界でもキャベツが虫害にあうと身を守ろうとして苦みのもとになる成分を出すと言うが、それに近い状態なんだろうなぁ。

　品種改良を続けて、虫害やその他の害からキッチリ守れれば甘くて美味いキャベツのような野菜になりそうな気はするのだが、それをやるなら鍛冶屋ではなく農家のチートを貰っておくべきだっただろうな。

　異世界でのんびりと農家か……。なんだか子沢山でどんどん家が村へと発展していきそうだ。そういう生活も良かったかも知れないが。

　それはさておき、干したことによるものか若干苦みが薄れたキャベツも当然畑でとれたものなわけで、いかにエルフの種が魔力によって尋常ではない成長をすると言っても、寒風吹きすさぶ中すくすく育つほどではあるまい。

「寒さで野菜がやられてしまったりしないのか？」

「ああ」

　リディはポンと手を打った。

「根菜がメインですし、ここは魔力が豊富ですからね。さすがに葉物野菜は少し厳しいでしょうが」

「根菜と言っても、葉っぱがやられたら育たないんじゃ？」

「よくご存じで」

　リディの目がスッと細くなる。いかん、うっかり専門でもないと知らないことを言ってしまったか。

「他の野菜を見てたらわかりますか」

　しかし、助け船がそのリディから出てきた。それなりの期間、畑の様子を見ていたから、そこから類推できるだろう、という話だ。

　俺はその助け船に乗っかった。リディが助け船のつもりだったかどうかはこの際関係ない。

「そ、そうだな」

「なるほど」

　リディは再び満足そうに頷く。俺は内心でホッと胸をなで下ろし、サーミャが一瞬怪訝そうな顔をした。

「それで、冬の間はどんな作物を作るんだ？」

「ええとですね……」

　俺が水を向けると、リディは嬉々として今後育てたい野菜の名前を挙げはじめる。

　俺と家族みんなは、野菜の名前を聞いた後、その味や出来そうな料理の話で盛り上がるのだった。

## たまにはのんびりと

2022年2月3日

　昼食も終えて午後。とは言っても、元々昼食が遅めだったこともあって、今から鍛冶場に火を入れて作業をするには中途半端な時間だ。

　もちろん、ちょっと遠出するのも厳しいだろう。出来て周辺の散歩くらいか。

　そんなわけで、今日の午後は好きなことをする、つまりは休みと言うことにした。午後休……懐かしい響きだ。

　家のことをしていたとは言っても、なんだかんだで働く時間が多かったし、それに比例させて、のんびりする時間を増やすのは悪い話ではないだろう。

「さて、何をするかな」

　家の片付け……とも思ったが、実はちょいちょい片付けているので、やることもないんだよな。

　そもそも家には物があまりない。ここでの生活に必要な物品がそう多くはないからだ。生きていくだけなら、今日今からここを放棄してもなんとかなりそうなくらいの物しかない。

　まぁ、鍛冶屋としてやっていくなら、ここから着の身着のままで飛び出すのは大きな痛手になるから、それは遠慮しておきたいところだが。魔法の火床や炉はおいそれと手に入るものではないだろうしなぁ。

　娘たちの相手はサーミャにディアナとアンネが張り切って出て行ったので、彼女達に任せよう。俺も加わって問題は無いと思うが、毎朝一緒に水汲みに行ってるからな。チャンスのあるときはなるべく他の家族に任せたい。

　リケとリディは畑の手入れをしにいくそうである。そっちもすっかり任せっきりなので、たまには手伝おうかなと思っていると、服の裾を引かれた。

　こういうとき、大抵一緒に出て行くヘレンが珍しく残っている。

「どうした？ 何かあるならなんでも言ってくれていいぞ。知っての通り暇だからな」

「いや、うん。剣の調子を見て欲しくてよ」

「ああ」

　アポイタカラ――青く光る特殊な鉱石――を鋼でサンドイッチした構造の彼女のショートソード二振りは、俺がチート全開で作ったこともあって、そうめったに傷むものではない。

　だが、それは全くノーダメージのままかと言えばそうではない。振るえば多少の歪みなどは避けられない。とんとその機会も遠のいてはいるが、狩りやなんかの際には出番が回ってくることもあるのだと言う。

「聞いてる限りなら火を入れるまでもなさそうだし、いいぞ」

「やった！」

　多少の歪みを鎚で叩いてとるくらいなら、火床に火を入れずとも出来る作業だ。夕食の準備（ヘレンは夕方の剣の稽古）までの時間を過ごすにはちょうど良かろう。

　俺は思いの外はしゃいでいるヘレンに、ショートソードを持ってくるよう言ってから、鍛冶場への扉を開ける。カランコロンと鳴子が鳴る音が、なんだか少し機嫌良さそうに聞こえた。

「どれどれ……」

　俺はヘレンから手渡されたショートソードを眺める。勿論チートを使いながらだ。自分でも手入れはしているのだろう、鋼の部分の輝きが曇っていることはなく。柄の握り革は巻き直した跡があった。

　聞いていた使用頻度からすると、握り革の痛みが早いような気もするのだが……。

「ん？ ああ、そりゃそっちで訓練することもあるし」

　そこを指摘すると、ヘレンからはそう返ってきた。何かに斬りつけたりすることはなくとも、振るうだけをすることは結構あると言うことか。

「俺で巻き直せるけど、どうする？」

「いや、いいよ。アタイに馴染んでるし」

「わかった」

　こういうところは下手に俺が手を出すよりも、慣れている本人が馴染む方法でやるのが一番だ、と俺は思っている。

　これが例え剣の研ぎでも俺はそう思うだろう。俺のほうが精度良く、切れ味も良いとしても、本人にとって使いにくければ、そんなことは些末なことでしかない。

　そしてその刃の部分は特に欠けたりということはなかった。アポイタカラの特性なのだろう。ただ若干鈍っているように見えるので、研いでやる必要がありそうだ。

　あとは全体がほんの僅かばかり歪んでいるくらいだ。これなら、ちょっと調整してやれば大丈夫だろう。

「どうだ？」

「これくらいなら、すぐ直るよ」

　僅かだけ心配の色をにじませてヘレンが聞いてきたので、俺は正直な見解を答えた。

　ヘレンはホッと胸をなで下ろす。

「万が一ヤバかったらどうしようかと思ったぜ」

「その時はまた俺が打つだけだよ」

「いいのか？」

「ちょうど試したい鉱物もあるしな」

「ちぇっ。アタイのはついでかよ」

　ヘレンがわざとらしくむくれる。俺は苦笑しながら、

「折角貴重な鉱石を使うんだ、一端以上の使い手の手に渡らんとな」

「わかってるじゃないか」

「だろ」

　俺とヘレンはそれで向かい合って笑う。さてさて、当代随一の強者の愛剣だ。キッチリ新品同様にして返して差し上げるとしますかね。

## 炎のかけら

2022年2月4日

　コチコチ、と控えめな鎚の音が静かな鍛冶場に響く。火を入れてないときの鍛冶場はかなり静かだ。

　ヘレンのショートソードの歪みはあると言ってもほんの僅かだから、あまり強く叩く必要もない。

　叩き、まだ差し込んでいる日の光にかざし、また叩く。少しずつ少しずつ、ショートソードは生まれた時の姿を取り戻していく。

　チートのおかげで鎚跡もほとんど残らない。最後にそれでもかすかに残る鎚跡を砥石で均せば終わりだ。

「はい。これでどうだ？」

　俺は調整を終えた１本をヘレンに手渡す。受け取ったヘレンは俺から少し離れると、ブンブンと振った。ブンブンと、は比喩ではなく実際にそういう音がしている。

　空気すら切り裂いて、“かまいたち”でも起きそうな勢いだ。あの勢いで斬りかかられたら、盾を構えていてもあまり意味はないだろうな……。

　よしんば斬撃を盾で防げたとして、衝撃までは防げない。流石にもげるところまではいかないだろうが、折れるなり外れるなりはするかも知れない。少なくとも痺れてしばらくは使えなくなるだろう。

　ほとんど腕の力でその状態なのだ。ヘレンにはスピードという、もう一つの武器がある。あの斬撃にそのスピードが乗っかったときの威力がそれこそチート級であることは想像に難くない。

「さすがはエイゾウだなぁ」

　しばらくショートソードを振るっていたヘレンが、わずかばかり肩で息をしながら、ショートソードを眺めて言った。

「大丈夫そうか」

「元々そこはあんまり心配してないんだよな。念の為ってやつさ」

　俺が改めて調子を確認すると、ヘレンが笑いながら返してきた。俺は苦笑する。それが半分照れ隠しであることは否定できないが。

　俺は残ったもう１本を手に取ると、金床の上に置いた。

「なあ」

「うん？」

　やはり控えめな鎚の音が響く鍛冶場。普段の大声――多分に職業柄もあるのだと思う――からは想像できないような小声でヘレンが聞いてきた。

「エイゾウはどうなるつもりなんだ？」

「うーん……」

　考えながら、ちらっと見るとヘレンの目は金床の上に注がれている。思わず聞いた、ってことだろうか。

「ここに来る前が忙しすぎたからなぁ、ここでずっとのんびり暮らしていけたら良いと思ってるよ」

　忙しい、の内容はヘレンの想像が全く及ばないところではあるが、それは如何ともしがたい。チクリと罪悪感のようなものが胸を刺したような気がする。

「偉くなろうとかは？」

「思わないなぁ。鍛冶屋だし。そういうのは俺の手には余る」

「即答だな」

「まぁね」

　今でも十分に厄介事に巻き込まれたりしてるからなぁ、とは言わなかった。偉くなってしまうと、今以上に厄介事を抱え込む可能性は上がるわけで、それはちょっと遠慮したいところだ、

「じゃ、ずっとここにいるつもりなんだな」

「そのつもりだよ。世の中がどう言うかは分からないけど、ここは住みやすいし。のんびりしていくには十分だと思ってる」

　言って俺はショートソードを陽光にかざした。キラリ、と白い光が青い光を伴って輝く。もうほとんどこれで終わりかな。

　俺がここを離れようと思わない理由。それはここの火床や炉、あるいは魔力の話もあるにはあるが、一番は俺がここを気に入っているということ。

　そりゃあ、命の危険を感じたこともないではない、というかこの短い間に何度もカウントしたが、それは自然を相手にするときのご愛嬌みたいなもので。

　死んだらそのとき、とまでは達観できているわけじゃないけど、それに近い心境もあったりはするのだ。

「じゃあさ……」

　もう２～３回も叩くかと、ショートソードを金床においたとき、ヘレンが辛うじて聞き取れるような小声で何かを言おうとした。

　俺は聞き取ろうと鎚を振り下ろすのを止める。

　その時である。

「え？」

　俺はわずかに熱を感じた。普段から感じ慣れている熱だ。しかし、今はそれを感じることはないはずだ。火床にも炉にも火は入れていない。熱源になるようなものは、今この鍛冶場には無いはずなのだ。

　何かを言おうとしていたヘレンも、途中で言葉を止めた。

「お、おい、エイゾウ……」

　おそらく言おうとしていたのはこの言葉ではないはずだが、ヘレンから溢れてきた言葉は驚愕に染まっている。俺は熱を感じた火床の方に顔を向けた。

　そして、俺は思わず目を見開いた。熱を感じた火床には、炎……いや、炎をまとった小さな人間のような姿があったからだ。姿は言った。

「こんにちは！」

「えっ、あっ、こんにちは」

「こんちは」

　笑っているかのような声。そこに敵愾心は全くない。警戒すべき場面だろうが、俺もヘレンもすっかり仰天して、普通に挨拶を返してしまうのだった。

## 炎の子

2022年2月8日

　その外見は、一言で言えば「燃えているジゼルさん」である。人形のような少女の姿をしているが、燃えている。

　衣服もちゃんと纏っているが、ジゼルさんが比較的今風――この世界においての、ではあるが――なのに対し、彼女はもう少し時代の古そうな、一枚布のワンピースのような服を着ている。

　前の世界で言えば、古代ギリシャの服が近いだろうか。腰の辺りがキュッとすぼまっていて、それはそれでオシャレにも見える。

　さっき彼女からは結構な熱を感じたと思ったが、火床に若干残っている炭に火が移っている様子はない。ただただ彼女が炎を纏っているだけで、さっき感じた熱さも今はない。

「色々伺いたいんですが、ちょっと待ってくださいね」

　俺はその人……いや、明らかに人間ではないだろうが、とにかくそこでニコニコと燃えている人に断りを入れる。

　彼女は勢いよく頷いてくれたので、ヘレンに頼んで皆を呼んで貰ってくる。俺とヘレンの２人だけで話を聞くのもちょっと不安だし、聞く耳と頭は多いに越したことはない。

　とりあえず飲むかどうかは分からないが、お湯の準備をしに俺も少しだけ席を外させて貰うことにした。

　皆が居ないあいだに高温になられると困るが、今の様子を見て大丈夫だろうと判断したのだ。

　そっと家への扉を閉めるとき、彼女が明るい色を発しながらパタパタと手を振っているのが見えて、俺はほんの僅かばかり安堵のため息を漏らした。

　エイゾウ工房の一同が鍛冶場に集合した。居間に通して良いものか分からなかったので、ひとまずは火床の上にいて貰うことにしたのだ。

　うちの皆はめいめい商談スペースから椅子というか、丸太を切った簡易椅子だが、それを持ってきて座っていた。火床がちょっとしたステージで俺たちはその観客のようでもある。

「こんにちは」

　燃える彼女はペコリとお辞儀をした。ますますアイドルのコンサートのようである。

　俺はともかく皆はそんな文化は知らないはずだが、

『こんにちは』

　と声を合わせて挨拶をしている。勿論、俺もなのだが。

「私の名前はマリベル。ええっと、皆さんで言うところの炎の精霊かな」

　そこでフッとマリベルさんは笑った。纏っている炎がユラユラと揺らめく。熱さは感じない。

「精霊……ですか」

「ええ」

　口に出したのはリディだった。マリベルさんは頷く。精霊と言えば、リュイサさんも精霊ではあったな。行動を除けばのんびりお姉さんって感じなので時々忘れそうになるが。

「精霊がこんなところに来ることってあるのか？」

　俺は思わず本人を前にしてリディに聞いてしまった。

「そうですね……。魔物は澱んだ魔力から生まれるでしょう？」

「精霊は純粋な魔力から生まれる？」

「正解！」

　マリベルさんはパチパチと手を叩いた。炎が揺れているので、薪が爆ぜたように錯覚する。

「ここで色々してたでしょう？」

「ええ、鍛冶屋ですからね。鍛冶の作業を」

「魔力も使って？」

「そうですね」

　俺は頷いた。精霊に隠し事をしても無意味だろう。ましてや「ここで生まれた」と言っているのだから。

「ここではよく炎を扱うし、皆さんほとんど毎朝、あの祭壇にお祈りをしてるでしょ？」

　そう言ってマリベルさんが指を差す。その先にあるのは俺が作った簡易神棚だ。俺たち家族全員が頷いた。

「まぁ、そんなわけでここで生まれてしまったわけです。いわば皆さんの子供も同然というわけですね！」

　朗らかに宣言するその言葉に、俺たち全員は顔を見合わせるのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

今回で６００話になりました。これも読者の皆様のおかげと思っております。

これからも頑張ってまいりますので、どうぞ応援のほど宜しくお願い致します。

## 小さな同居人

2022年2月10日

　このエイゾウ工房のある場所は“黒の森”の中でも魔力が高い。木々があまり伸びないうえ、草花も限定的なくらいに。

　そんなところで表現として合っているかは分からないが、高濃度の魔力を扱い、実際に神々がいる（と言われている）ところで信心深いように見える行動をしていたら、精霊の１人や２人生まれるのも無理はない。

　いや、流石にそんなことはないと思うのだが、今のところマリベルさんが自称していることを信じる以外に対応がない。

「にしても、生まれたてなのに、固有名も知能もあるんだな」

　俺は疑問を口にした。いや、“マリベル”が固有名ではなく、

「あー、そこはね」

　マリベルさんはポリポリと頬を指で掻く。そして、俺たちのやや猜疑心が含まれた視線に気がつくと、慌てて顔の前で手を振った。

「ここで生まれたってのは嘘じゃないよ。ただまぁ、ちょっと語弊はあるかも」

「語弊？」

　俺が言うと、マリベルさんは頷いた。

「うん。生まれたのはそうなんだけど、“前のこと”を覚えてるんだよね」

「死ぬ前……いや、

　輪廻転生の概念がある（実際にどうなのかは分からないが）世界から転生してきた俺にとってはすんなりと腑に落ちる話だが、家族はどうだろう。

　こっそり様子を窺うと、皆一様に分かったような分からないような顔をしていた。なんとなし「生まれ変わり」の概念自体はわかるっぽい。

　そう言えば、いつぞやディアナとアンネが悲恋系の「生まれ変わっても一緒になる」みたいな話について語り合っていたような。

「そうそう。身体を新しくして生まれてくるから、名前もあるし、ちゃんと話したりも出来るってわけさ」

「その身体ってのが……」

「魔力だよ。この森に

「じゃ、“大地の竜”が彼女の名前をつけたわけじゃないのか」

「そうだと思うよ。まぁ何百年、何千年前の話だか分かったもんじゃない……おっとこれを言ったのは彼女には内緒だよ」

　そう言ってパチリとウインクをするマリベルさん。しかし、彼女はすぐに居住まいを正すと、ピンと背筋を伸ばした。

「さてさて、それじゃあ後ろのエルフさんも気にしてるみたいだから、ボクの当面の目的を話しておこうかな」

　言われたリディは身を縮こまらせた。家族の間に小さな笑い声が漏れる。

「とは言っても大したことじゃ無いよ。ボクをここにおいて、皆の仕事を見せて欲しいってだけなんだ」

「それだけ？」

「うん。それだけ」

　ニッコリ笑うマリベルさん。何を言いだすかと少し身構えてすっかり拍子抜けしてしまった。

「火をつけたりくらいのお手伝いは出来るけど、それ以上はちょっと厳しいんだ。なんせ“生まれたて”だからね」

「なるほど」

　精神的に大人びている……いや、実際に精神年齢は相当なものなのだろうが、身体は赤ちゃんのようなものってことなのだろう。振るう力に制限があるようだ。

「あ、ボクはクルルちゃんやルーシーちゃん、ハヤテちゃんみたいにご飯はそんなにいらないからね」

「多少は食べられるんですね？」

「ここの魔力なら、まったく食べないことも出来るけど、ちょっと寂しいからね」

　そう言ってマリベルさんはいたずらっぽく笑う。まぁ、１人に満たない食い扶持が増えるくらいなら備蓄は十分なはずだ。

「じゃ、とりあえずよろしく」

　マリベルさんは手を差し出した。俺は指を差し出す。一瞬、焼けてしまいやしないかということが脳裏をよぎったが、そんなこともなくマリベルさんは俺の指を握った。

　こうして、我が家にはもう１人の同居人が増えることになったのだ。

## 食事

2022年2月17日

　部屋はいらない、とマリベルさんは言った。普段はクルルやルーシー、ハヤテと一緒のところに居るつもりだそうだ。

「ボクは暖かくなれるしね」

　最初は多少かしこまった話し方だったのに、どんどんくだけた話し方になってきている。慣れ方が急速だが困る話でもないな。

　本格的に「寝る」ときはあのなんちゃって神棚に引っ込んだりできるらしい。いよいよ神様っぽい。

　もしかすると、あの女神像もなにか寄与してしまったのではなかろうか。いや、深く考えるのはよそう。

「じゃあ、寒くなったら頼もうかな」

「任せて！」

　ぐっと力こぶを作るマリベルさん……いや、マリベル。あまり便利使いも心苦しいが、お姉ちゃんとして妹たちの面倒を少しばかり見てもらうことにしよう。

「おっと、こんな時間か」

　ふと外を見ると日が傾きつつある。皆の手を止めてしまったし、少しでも戻って貰うか。俺はその間、晩飯の準備だ。

「おっ、じゃあボクもクルルちゃんとルーシーちゃん、ハヤテちゃんにも挨拶してこようかな」

　俺が準備でしばらく離れる旨を伝えると、マリベルはそう言った。サーミャのほうを見ると小さく頷いた。とりあえずは皆に任せれば大丈夫そうだ。

　――もしもの場合はリディとヘレンに頼むことになるが、そっちの可能性はなるべく考えないでおきたい。

　俺は嫌な考えを振り払おうと頭を振って、台所に向かう。

「あっ」

　家への扉を開けたとき、俺はハタと気がついた。かまどに火を入れるのにマリベルの手を借りるのを忘れていた。

「まぁ、いいか」

　俺が着火の魔法を使えなくなったわけでもないし、かまども魔法対応ですぐに火が着く優れものだ。

　頭を掻き掻き、俺は扉を閉めた。

　夕食はいつも通りの無発酵パンにスープ、塩漬け肉を焼いたものである。マリベルにはワンプレートっぽく、一枚の皿に小さく盛り付けたものを出した。

　マリベルはむんずと焼いた肉を掴むと、口に運んだ。

「おいしい！」

「そうか。口に合ったんなら何よりだ」

　精霊だから食料は実はいらないらしいのだが、食べ物を口にすることは出来るし味も分かるらしい。消化はしないで体内で燃焼しきるとかだろうか。女性の身体の話だし、詮索はよしておくか。

　勢いよく食べる様を、家族のみんなが微笑ましく見ている。精神年齢的には娘の中でも最年長だろうが、ここに来た順番で言えば末の娘だ。

　唐突にできた家族ではあるが、お人形さんのような姿の（熱くない炎を身に纏っているが）少女がパクパクと食事を口に運んではニッコリと微笑む様は単純に愛らしい。

　愛らしい……のだが……。

「うーん、やっぱり専用の食器を作るか」

　今日のところは皿に盛り付け、手掴みでモリモリやってもらっているが、やはり行儀はよろしくない。ジゼルさん達妖精族のこともあるし、早めに小さな食器も作っていくことにしよう。

　礼儀作法は幸いと言って良いのかは分からないが、伯爵家令嬢と皇女殿下がいるから、バッチリ教えることが出来る。教えるのは俺じゃないけども。

　公式の場に出ることはあまりないだろうが、これまでの間にそういうことを学ぶ機会がなかったのなら、「今回」の思い出になるように覚えて貰うのも悪い話ではないだろう。勿論、マリベルに聞いた上でだが。

　同じことを思っていたのか、ディアナと目が合って、お互いに頷きあう。

　娘３人に加えて、新しい「娘」にも何をしてやれるだろうか。そんなちょっとした幸せな考えを、スプーンにすくったスープと一緒に俺は呑み込んだ。

## 娘達と湖へ

2022年2月19日

　夕食を終えると、マリベルの手は勿論ベタベタになってしまっていた。ディアナがちょっと嬉しそうにそれを拭いてやっている。

　精霊であるマリベルの身体サイズは人間（や獣人やドワーフやエルフに勿論巨人族も）の子供と比べても小さすぎるのでまるで親子のよう、とはいかないがそれに近しいものがある。

　マリベルはそれなりに知能は高いっぽいのだが、外見が外見な事もあって子供扱いしてしまう。

　生まれたてに違いはないし、本人も今口元を拭かれているが、嫌がる様子も無いので、「ちょっと賢いうちの娘」くらいのつもりで接するのが良いように思う。

　うちの娘は皆賢いからな……唯一普通に言葉が通じるのがマリベルだけ、と言うわけだ。

　手やら口やらさっぱりしたマリベルは、他の娘達が眠るところへ行くべく、扉を開けた。着いていこうか、とサーミャが声をかけたが、マリベルは「大丈夫！」と宣言する。

　まぁ、目と鼻の先であるから、滅多なことはあるまい。何かありそうなら、それこそクルルやルーシー、ハヤテも騒ぐだろう。

　闇の中に少しだけ明るく光るマリベルは、そのままふよふよとクルル達の元へと飛び去っていった。

　翌朝。冬でも水汲みは欠かさず続けている。一層冷え込みが厳しくなって来て、俺はいつもの服に毛皮を追加している。猟銃でも持てばマタギに見えるかも知れない。猟犬ならぬ猟狼のルーシーもいるし、鷹ならぬ竜のハヤテもいるわけだし。

　そう言えば、熊を倒したこともあったな。最初は“こっち”に来て間もない頃だったか。季節も変わらないときのことだ。もう随分と昔のことのように思える。

　その次はルーシーを保護したとき。ルーシーの母親を害したらしき熊だった。最初と違ったのは、既にヘレンがうちにいたことで、俺が苦労をしたのはなんだったのかと思えるほど、あっさりと倒せてしまった。

　良いことではなかったが、どちらも思い出深い出来事だ。

　そんな出来事を思い返しながら、俺は水瓶を担ぐと扉の外へ出た。

「おはよう！」

「クルルルル」

「わんわん！」

「キューゥ」

「ああ、おはよう。皆元気だな」

　扉の外ではうちの四姉妹が待っていて、マリベルが元気に挨拶をした。それに合わせて、恐らく同じ事を言っているのだろう、クルルとルーシー、ハヤテが鳴き声を上げる。

　俺はそれぞれの頭を撫でてやって、クルルの首に水瓶を提げると、皆一緒に湖へと歩き出した。

「ははあ、それで朝から元気なのか」

「たぶん」

　マリベルは火（炎）の精霊だ。今もその身体に煌々と炎を纏っている。しかし、昨晩に家を出たときもそうだったが、そこまで明るさも熱も感じない。

　湖への途中でそれを聞いてみると光も熱も、どっちも調整できるらしい。それで娘達は温々と過ごすことが出来たようである。

「調節できないと夜中眩しいし、あちこち火がついちゃうよ」

「それはそうだ」

　精霊という存在がどれくらい人々と関わるのかは知らないが、生み出した神かなにか、とにかくそういったものも、上手くやっていけないようにはしていないらしい。

　その辺りの意思が介在しているとして、何を目的にマリベルをうちにやったのかはわからない。

　もしかしたら、俺たちにとってはよろしくない目的である可能性もある。つい最近、それであまり愉快とは言えない事態になってしまったところなので、ほんの僅かばかりの警戒心が心の隅で小さな信号を送っている。

　しかし、湖へ向かいながら、他の娘達とキャッキャとはしゃいでいるマリベルの姿を見て、俺はさしあたり、その信号をそっと無視することに決めたのだった。

## 水汲みの帰り

2022年2月22日

　水を汲むと、すぐに家に戻る。マリベルがいて、彼女に頼めば身体が乾くくらい暖かくしてくれるのだろうが、娘に負担をかけるのもな……。

　ということで、今日も水浴びはなしである。また夕方にでもディアナ達が温泉で綺麗にするはずだ。

「そう言えば、マリベルは水に浸かっても平気なのか？」

　水を満載した水瓶を担ぎながら、俺はマリベルに聞いた。

　炎の精霊、と言うからには水に弱いみたいな話がありそうな気がする。RPGじゃないんだから、と言われればそれまでではあるが。

「平気だよ」

　マリベルはあっさりとそう言った。

「何日もかぶってたら弱るけど」

「そりゃ俺たちでも一緒だ。というか、普通に死んじゃうよ」

　諜報機関の拷問でもあるまいし。弱るだけで済むほうが驚異だ。そこは妖精より上位存在らしき精霊であるということか。

「じゃあ、風呂も入れるわけだな」

「風呂？」

「ああ。沢山のお湯だよ。うちは温泉て地面から湯が湧くところがすぐそこにあって、それを溜めてるから、何人かで入れるぞ」

「へー、楽しそう」

「皆は気に入ってるみたいだ」

　昨日はマリベルが来たこともあって、素早くお湯を運んで身体を拭くくらいだったが、ちょっと時間がとれるときは皆でワイワイと湯殿に向かう。

　クルルとルーシー、ハヤテも一緒に行っているが、クルルは一度外で“森のみんな”と共に入り、その後綺麗にしてもらっているらしい。

　俺はと言うと、少し時間をずらして向かっている。晩飯の準備を軽く済ませてからになるからなのだが、気恥ずかしさがないと言えば嘘になる。

　それもあって少し時間が違うのだ。大体俺が入ってすぐくらいに女性陣は出て行っている。俺のほうは男の一人湯だから、身体を綺麗にして湯船で温まったらすぐに上がってしまう。

　どっかで時間を取って昼にひとっ風呂もいいかも知れないなぁ。前の世界ではスーパー銭湯へ行って時折やっていたことだ。風呂上がりのフルーツ牛乳が楽しみだった。この世界ではかなり贅沢な話だろうと思うが。

「ボクも入って良いの？」

「もちろん。だから水が平気か聞いたんだ」

「やったー」

　そう言って飛び回り、喜びをあらわすマリベル。ハヤテが一緒になって飛び回り、ルーシーも駆け回っている。

　クルルはお姉ちゃんであるからなのか、水瓶を提げているからなのか、その様子を微笑ましそうに見守っている。

　精神年齢的には既に成長しているらしいハヤテも、時々ああやって羽目を外すときがある。あれで街へ行く途中は勿論、狩りのときもツンとすましているらしいのだから、そのギャップが可愛らしい。やはり彼女もうちの娘であるのだよな。

「あまり飛び回って木にぶつかったりするなよ」

「しないよー」

　小さくむくれてみせるマリベル。しかし、そう言いながらも飛び回るスピードを落とし、それとなく周囲を気にしている。

“黒の森”の木々は当然ながら人の手が入っていない。狩りに出るときや、森を進むときに荷車が通れるくらいに間隔が広がっているところもあるが、それよりかなり狭くなっている箇所も多々あるのだ。

　流石に人１人分くらいは開いているとは言っても、飛び回ればすぐにぶつかってしまうだろう。精霊の頭にたんこぶが出来るかどうか、確認しないで済むならそれに越したことはない。

　マリベルとハヤテは興がのったのか、２人して辺りを飛び回る。もちろん、木々に激突しないように気をつけてだ。その下ではルーシーが負けじと走り回っている。

　そんな様子を“父親”たる俺は、

「気をつけろよー」

　そう言って、微笑ましく見守るのだった。

## 小さいもの

2022年2月24日

　朝食はやはり賑やかだった。まぁ、マリベルがいなくても大抵は賑やかなのだが。無発酵パンとスープの簡素だが十分な朝食。マリベルはパンのほうは問題なく食べることができているが、スープのほうはやはり多少難儀するようだ。

「あまりちゃんとしたご飯って食べたことないし」

　と、本人は言っていた。まぁ、精霊が飯を食う、という話も俺は聞いたことがない。

　ジゼルさんたち妖精族は食べていたが、同じ精霊であるリュイサさんはちょうどというか何というか、飯時を外して来るので、一緒に食卓を囲んだことがないんだよな。

　逆に言えば俺たちの知らないところで何か食べてから来ている可能性もあるが。

　俺は前の世界でサラリーマンのオッさんが一人で飯を食ったり、OLが一人で酒飲んだりするドラマを思い出した。リュイサさん、ああ言うのが似合いそうだ。

　朝食をそんな話で終えた後は仕事の準備に取りかかる。火床と炉に火を入れた。マリベルがやろうかと聞いてくれたのだが、自分の仕事なのだしと自分の魔法を使ってやることにした。

　彼女の力もどこかで借りることがあるとは思うので、その時は満を持して貸して欲しいところだ。

　今日はナイフを作っていくことにした。が、今日のメインはカミロのところに卸すもののうち、一般モデルのほうである。

　こっちはリケを中心に、サーミャも歩留まりは多少悪いものの、販売回せるくらいのものが出来るようになってきていて、ディアナやヘレンのもなかなかのものだ。なので、生産量も以前と比べて格段に増えている。

　リディは膂力の問題で、アンネも不器用ではないのだが、いかんせん身体のパーツが大きい不利が多少ある。それでも、いずれそれぞれに合った何かが作れるようになってくれればと思っている。

　つまり、俺も生産に加わることが出来るが、逆に言えば加わらなくても大きな問題はない、ということである。もちろん、何か問題がありそうならすぐに加わるが。

　なので、今日は皆に断りおいて、俺は別のものを作ることにした。

　最初に用意するのは小さな鉄片だ。板金を熱したら、タガネで小さく切り分けていく。かなり小さいので、油断して落としてしまうと見失いそうだ。

　前の世界でプラモデルの小さなパーツを組み付けようとして「パチン」と飛ばし、小一時間探したことを思い出す。そんなパーツに限って「無くてもいいや」と思えるような箇所でなかったりするんだよな。ああいう経験をこっちの世界ではあまりしたくないところである。

　切り分けた鉄片を熱して、小さな鎚（普段は彫刻するのに使っているもの）で叩く。チートの手助けを借りることも忘れない。普段なら結構派手な音がするのだが、今日はコチコチと控えめな音だ。

　つくづく老眼が始まる年齢でこっちに来なくて良かったと思う。まず老眼鏡なり拡大鏡なりを作るところから始めなければいけないところだった。

　とても小さい、というだけで、作るものの形状が変わるわけではない。ないのだが、小さいということはそれだけで難度が跳ね上がるものなのだな。

　元々鍛冶屋の経験なんかないことを差し引いても、チートがなければ手出し自体が難しかったのではなかろうかとさえ思えてくる。

　しばらくして鉄片は形を変え、見慣れた姿になっていた。スプーンとフォークにナイフのセットである。それが数セット分ある。

　もちろん、これらはマリベルと妖精族の人のものだ。

　前の世界ではフォークが利用されはじめたのは思ったより時代が下ってからで、この世界と同じくらいであろう頃にはまだ使われていなかったが、いかなる要素によるものか、この世界ではもう使っているところも多く、庶民間でも普通に利用されているので合わせて作った。

　ナイフは１本だけ余分に作っている。食事に使うものではない。俺たちが懐に忍ばせているものと同じものである。これを用意した意図は言うまでもないだろう。

「わあ！ なんだかすごいね！」

　ひらりと宙を舞うように……いや、実際に宙を舞ってやってきたマリベルが言った。

「今日の夕飯からはお前もこれを使って食べるんだぞ。使い方はディアナやアンネに教わるといい」

「わかった！」

　ニッコリ笑うマリベル。名前が出てきたからか、アンネが溶けた鉄を流し終わったあとの汗を一拭きして言った。

「エイゾウも少し覚える必要があるんじゃない？」

「ええ……」

　困惑する俺を他所に、アンネの傍らでディアナがうんうんと頷いている。

「エイゾウの付き合いを考えたら、“そういう場所”に出て行かなきゃいけないこともあるだろうから、覚えて損はないわね」

　そう言ってニヤリと笑うディアナ。俺は肩を落とす。

「お手柔らかに頼むよ……」

　そんな俺の言葉に、鍛冶場の中が笑い声で満たされるのだった。

## テーブルマナーの初歩の初歩

2022年3月2日

　さて、カトラリーは作った。あとは器だな。

　普段俺たちは木製の器を使っている。マグカップのようなものは金属でも良いのかも知れないが、この森の木は硬い割に加工性もよい。

　俺が本気で魔力をこめれば相当に頑丈な鉄製のマグカップが出来る――それこそちょっとしたハンマーにできるくらいのものが――のだろうが、「森の中の家」ということもあるし、ここへ来たときに用意されていたのも木製だったので、追加を作るときも木で作っていたのだ。

　となれば、マリベルのものだけ違う材質というわけにもいかないだろう。妖精族の人が来たとき用のも用意しよう。

　鍛冶ではないので、そちらのチートの手助けはない。その代わりに生産のほうのチートが手を貸してくれそうだ。

　なるべく綺麗で乾いた木材を見つくろい、普段は鞘の加工に使っている工具と、自分のナイフを駆使して、皿と椀、カップの形を作っていく。カトラリーほど小さくなくていいのが助かる。

　皆がカンカンと鉄を叩く音を響かせる中、俺は１人シャッシャッと異質な音を立てている。

　その音をさせながら、小さな皿が出来上がった。子狼の頃のルーシーならさぞかし喜んだことだろうが、今の彼女にはやや小さい。

　同じようにして椀とカップも木を削り出して作る。うちの強化されている工具と、質の良い“黒の森”の木材、それにチートの手助けが合わさってスイスイと加工できるが、普通ならこうはいくまい。カップ１つでもかなりの時間がかかってしまうはずだ。

　日の暮れる頃、俺は小さな木製食器に植物油を塗りおえた。これらは乾くまで少々時間がかかる。晩飯には間に合うまい。

「ええ～～」

　出来上がった器を喜んでいたマリベルだったが、今日の夕食では使えないと知ると、露骨にガッカリした。

「まぁ、明日の朝飯には間に合うだろ」

　暑く乾燥している鍛冶場も、これから火を落とし、外の寒さもあってすぐに冷えていくとは言え、しばらくは暑さも残ったままである。冬場であっても乾燥時間は短くて済むはずだ。

　俺がそう言うと、

「やったー！」

　マリベルは鍛冶場の中を文字通り飛び回る。その様子に、家族から笑みがこぼれる。

　うちの末の娘は、俺たちが鍛冶場の片付けをしている間、楽しそうに並んだ食器を眺めていた。

　翌朝、食卓にキラキラと目を輝かせたマリベルが座っていた。目の前には小さなカトラリー一式と木製の器と、そこに盛られた料理。

　そんなマリベルの両隣にはディアナとアンネ。最初は厳しく教えるつもりはないらしい。

「はじめから剣を上手く振れる人はいない」

　とはディアナの言葉だが、そこで剣を持ち出すのがディアナらしいというか何というか。

　今朝のメニューは切って焼いた肉とスープに無発酵パンのスタンダード我が家の食事だから、基本は肉をフォークで、スープはスプーン。無発酵パンは手で食べる。

　なので行儀作法などはあまりない、と言っていい。そもそも持ち方もうまく出来てないのだ。ぐっと握るようにスプーンを持つ手を、ディアナが優しくなおし、どう運べば上手に口に入れられるかをアンネが教えている。

　伯爵令嬢と皇女殿下揃い踏みでのテーブルマナー初歩の初歩である。若干スプーンの持ち方が怪しかったサーミャも、２人の教える内容を聞きながらほほうと感心しているし、ヘレンも持ち方はともかく「今は出来なくてもいいから、こう食べましょうね」といった内容を横からではあるが真剣に聞いている。

　俺はと言うと、そのうち待っているかも知れないスパルタ教育に備えて、予習のためにある意味サーミャやヘレン以上に、真剣に聞きいるのだった。

## 銀の世界

2022年3月3日

　数日の間、俺も加わって納品するナイフやショートソード、そして槍なんかを作っていた。

　我が工房における生産速度はちょっとした工場並、と言うとちょっと盛りすぎではあるのだが、まぁ普通の工房ではちょっと難しいかも知れないくらいの数を量産できている。

　そんなわけで、長期の“森篭もり”ともなればペース的に全く製作をしなくても良い日が出てくる。

　冬になる前はそういった日を利用してあちらこちらに行っていた。街や都に行けなくとも、森の中を散策したり、釣りに出かけたりだ。

　釣りも以前は夕食にと当てにしていた（俺の釣果はさておくとして）ものだが、それなりの大家族となった我が家においては、それもそろそろ厳しかろうなぁ。

　純粋にレジャーとして楽しむ釣りに出かけるのはありだろうけど。

　そして、今日はそんな「休日」なので、クルルとルーシー、そしてハヤテの散歩、それにマリベルも付近にどういうものがあるのかは知っておいたほうが良かろうと、付近の散策に出ようかと思っていたのだが、朝起きてすぐにそのプランは水泡に帰した。

　水瓶を用意し、ドアを開ける。ため息をつかずとも、吐く息は白い。娘達４人も白い息を吐きながら、寄ってこようとする。

　するのだが、わずかばかり足下が覚束ないような感じで、いつものような素早さがない。

　我が家の周囲が真っ白に染められているからだ。

　そう、夜の間に雪が積もったのである。

　我が家の周りには木が生えていない。普段はそれが日当たりの良さをもたらしてくれていたのだが、こういったときには完全に逆効果、と言っていいのだろうか。

　とにかく、遮るものがないので遠慮無く積もってくれたようだった。木から雪が滑り落ちてくるのに気をつけながら過ごすのとどっちが良いかは迷うところだが。

　ギュッギュと雪を踏みしめる音を立てて、娘達が寄ってきた。

　マリベルは飛べる（あまり高度はとれないらしい）のだが、雪の感触が楽しいのか、彼女も歩いている。

「寒くても平気か？」

「うん、だいじょぶ」

「そうか。こう寒いとお前がうちに来てくれて本当によかったよ」

「そう？ えへへ」

　俺が言うと、マリベルは嬉しそうにはにかんだ。今もほんのり暖かさを放っていて、彼女の周りだけ雪がかなり緩んでいる。

　この寒さだし、昨晩はマリベルが暖かさを姉妹に分けてくれたに違いない。ガシガシと、俺は末の娘の頭を撫でた。

　クルルがそんな俺の顔に頭を擦り付ける。水瓶を寄越せと催促しているのだ。

「冷たくないか？」

「クルルゥ？」

　水瓶を首にかけてやったあとそう言うと、クルルは小首を傾げた。冷たくて厳しいということは無いらしい。見た目は爬虫類に近いので、それこそ冬眠でもしそうだなぁとクルルには失礼なことを思ってしまうのだが、そこはやはり竜であるらしい。

「わんわん！」

「ルーシーも大丈夫か？」

「わん！」

　ルーシーも「頭を撫でて！」と身体の前半分を持ち上げる。俺は屈んで撫でてやった。ルーシーは見た目は普通の狼なので、足の裏が霜焼けになってしまいやしないかと心配になったが、前の世界のシンリンオオカミなどは雪の上で寝こけていたりすることもあるくらいだし、多分平気なのだろう。

　このあたりもかなり寒くなることはあるとサーミャも言っていたし、生物としての備えが出来ているのだろう。魔物になっていることも一因かも知れないが。

　そう言えばどことなし毛足が夏場よりも長くなっていて、毛の密度も増している……有り体に言えばモフモフ度が増しているような気もするな。

　ハヤテは娘達の中では唯一、雪の地面がお気に召さないようで、クルルの背中にいたあと、俺の肩へと移ってきた。

　それでもはしゃいで走り回っているルーシーの姿を見て、パッと一瞬だけ地面に降り立ったが、

「ピャッ」

　と短く鳴くと、再び俺の肩に戻ってくる。

「俺はどっちかと言えばお前と同じ気分だよ」

「キューゥ」

　足下に幾重にも布を巻いて対処はしているが、それでも当然吸湿発熱や防水ではないのでジワジワと冷たさが染みこんでくる。もしかしなくても一番霜焼けに近いのは、俺だろう。

「よーし、寒いし今日はサッサと済ませよう！ ただし、コケたりしないようにな」

　俺は娘達にそう言って森へ進み出す。歳がいくと雪なんて憂鬱なばかりだともっていたが、娘達とこうして進む雪景色はなんだかんだテンションが上がるのだった。

## 戦の支度

2022年3月5日

「いやぁ、寒いな！」

　いつもより少し時間をかけて水汲みから戻ってきた俺は、足を包んでいた布ごと靴を脱いで、家族の誰かが火をつけてくれていたストーブに足をかざす。

　じんわりとストーブの熱が俺の足を溶かしていく。温めるのもあるが、濡れてもいるし、キッチリ乾かしておかないとな。

　季節的には多少平気だろうが、あまり白癬菌たちの繁殖を許したくはないものである。俺の足に諸君らの安住の地はないのだと知らしめる必要がありそうだ。

　……リディに魔法か薬草か、効きそうなものを早いうちに聞いといたほうがいいかな。

　ストーブの熱によって部屋の中は暖かさを保っている。頼めばマリベルも暖房として働いてくれるのだろうが、ここではそれは無しだ。

　リケに髪を梳かしてもらっているアンネがぽわぽわとしているが、あれは部屋の暖かさとは関係ない、いつも通りの光景だ。

　リケも元々自分の妹たちのをやってあげていたこともあるが、毎朝のことなのですっかり手慣れて素早く髪を結っている。

　その横では一通り用意を終えたヘレンがサーミャと一緒にストレッチをしていて、ディアナは自分の髪を梳かしながら、マリベルの足を拭いてやっているリディとおしゃべりをしている。

　絵に描いたような平和な朝のひとときが流れていた。いつもはすぐに台所へ行ってしまうので、俺があまり見ることのない光景だが、たまにはこうやって眺める日を作るのも良いかもなぁ。

　ひとしきり温まり足も乾いたので、ストーブにかけてある加湿器代わりの鍋に水を足して、俺は朝食の準備をしに、台所へと向かった。

「ああ、外に出たのか」

「おう」

　朝食の時に、雪の話題になった。俺の言葉に返事をしたのはサーミャである。

　外の様子がいつもと大きく違うことは、起きれば気がついただろう。雪が積もるとやたらに静かだし。たぶん雪が吸音材のような役目を果たすからだと思うが。

　それで家の中から外を覗けば、風景が一変していることはまさに一目瞭然だ。

　なので、あまり雪に慣れていないというみんなは外に出ずに家に籠もっていたのかと思ったが、サーミャとリケ、それにヘレンは少しだけ外に出たらしい。

　ディアナとリディは寒いのがあまり得意でないから、アンネは単に朝が弱いから出なかったそうである。

「アタシははじめてじゃないけど、楽しいな」

「でも、寒いし朝の用意もあるからすぐ戻ったんだよね」

　サーミャが言って、リケが補足する。女性陣の朝はあれこれやることがある。普段からして誰来ることもない“黒の森”、ましてや積雪を乗り越えてまでとなると皆無どころか絶無と言っていいだろう家で準備とは、と思う部分もオッさんなので正直なところあるが、どう考えても言わぬが花である。

「アタイはもうちょっといても良かった」

　そう言って、なぜかふんぞり返るヘレン。ふむ。

「今日は休みにしようと思っていたんだが、この雪じゃあ遠くまで行くのも難しそうだな」

「ずっと家にいる？」

　スープを一口飲んだディアナがそう聞いた。俺は少し考えてから、首を横に振る。

「いや、折角の機会だ。もう雪は降り止んでるから、このままだと今日にも溶けちゃうだろうし、娘たちと一緒に楽しもうじゃないか。寒いけどな」

　俺が言うと、サーミャが勢い込んで聞いてきた。

「楽しむって何やるんだ？」

　サーミャの目は期待に輝いている。これは期待に応えねばなるまい。彼女を含めて我が家は活発な子が多い。となれば……。

　俺は皆を見回して言った。

「雪合戦をしよう」

## 雪合戦

2022年3月9日

「よーし、それじゃあ始めるか」

『おー』

「クルルル」「わんわん！」「キューゥ」

　俺の言葉に、皆が腕を上げ、出来ない娘達は声を上げた。今から我が家では雪合戦を開始する。

　チーム分けは俺とサーミャ、リケ、ディアナ、そしてクルルとマリベルのクルルチーム。対するはリディ、ヘレン、アンネにルーシーとハヤテのルーシーチームである。

　クルルチームの戦力が大きいような印象を受けるが、ヘレン１人でかなり強いからなぁ。

　最初は「ヘレンが１人でも問題ないのでは」という意見も出ないではなかった。

　しかし、流石にそれはちょっと……となり、なんとなしでバランスを取ることになったのだ。

　サーミャやヘレンは普段露出が多めの格好なのだが、今日ばかりはキッチリ着込んでいて、ややモコモコした状態になっている。

　いや、モコモコしているのは皆似たり寄ったりだ。あまり寒さが得意と言えないディアナは服ではない布地も動員しているので、余計にモコモコしている。

　少し前から冬毛っぽくなっているルーシーとどっこいどっこいだ。

　リケやリディもいつもより着込んで、リディは普段被らない帽子も被っている。

　比較的薄着なのはアンネだ。身体が大きいこともあるのだろうか。とは言っても、サーミャやヘレンよりも１枚ほど着込んでないくらいで、いつもよりモコモコなのは変わりない。

　普段と変わらないのはマリベルだが、彼女は炎の精霊だからな。特に気温でどうこうなるということはないらしい。雪に触れると消えてしまったりもしない。

　結構な広さを誇る我が家の庭。そこが今は雪で真っ白になっている。

　ところどころ、クルルとルーシーの足跡があるが。あれは俺たちが朝飯を食べてる間に駆け回ったのだろう。

　その白い庭にモコモコな皆が集まり、クルルチームとルーシーチームが対峙する。

　対峙してはいるが、特に負かしてやろうとか、そんな雰囲気は無い。サーミャやディアナ、ヘレン、そして娘達４人がやる気に満ちた顔をしているが。

「じゃ、ルールを説明するぞ。と言っても、雪玉を作って投げて、当たったなと思ったら一旦退場だ」

　俺が言うと、皆静かに頷いた。呼吸をしているだけでも、白い息が皆の鼻から出てきて、それが気合いを入れているようにも見える。

「はいはい！ クルルやルーシー、ハヤテは？」

　マリベルが手を挙げて言った。３人は流石に雪玉を作って投げるのは難しいだろう。俺に視線が集まった。

「皆が作って渡してやってくれ。３人とも投げる……くわえて放り投げるのは出来るはずだから」

　クルル達がオモチャにしている木の球なんかを放り投げているところを、俺は何回か目撃していた。アレが出来るなら射程や正確さはさておき、参加は出来るはずだ。

　最初は加減が掴めずに潰してしまったりもするだろうが、なに、そこは経験していけばすぐに慣れるだろう。

　前の世界では雪合戦にもちゃんとしたルールがあって、障害物の大きさやなんかも決まっているらしいのだが、うちでレクリエーションとしてやるだけなら、厳密なルールはいらない。そもそもキッチリ勝敗をつけてどうこうしようという話ではないのだし。

　――ないはずだったのだが。

「なんでこう、うちの子たちは本気になっちゃうかね」

　開始早々に退場と相成った俺は、“戦場”から少し離れたところから、凄い速度で飛び交う雪玉と、やはり凄い速度で駆け回る家族のみんなを眺めていた。

## 終戦

2022年3月10日

「あんまり硬く握るなよ！」

　手持ち無沙汰に観戦していた俺は、自分も雪玉を作りながら言った。ギュッと硬く、氷の塊寸前にまで固められた雪玉は普通に凶器になり得るからな。特にうちの家族の場合は。

　投石、というと少し危険な子供の遊びくらいのイメージを持ってしまいがちだが、反して普通に殺傷できるだけの威力がある。勿論、石を投げる人間の能力にも左右される部分はある。

　だが、能力の面において、石を殺傷能力のある武器に出来る人間がうちには多くいるからな……。氷の塊をその力でぶん投げたらどれくらい危ないかは言うまでもないだろう。

　俺はまちまちに返ってくる返事に苦笑しながら、作った雪玉をフィールドの端に置いた。

　それは、雪合戦を開始してすぐのことだった。ビュンと風切り音がするかと思うほどのスピードで雪玉が飛んできた。

「うぉっ」

　俺は仰け反り、それを辛うじて避けた。ある程度の戦闘能力を貰っていなかったら、この時点であっさり終了していただろう。

「クソッ、やっぱ無理だったか」

　小さく舌打ちしてそう言っているのはヘレンだ。目がかなり本気である。投げ返そうと足下の雪をごそっと拾い、丸める。

　ギュッと握ってしまうと崩れそうなので、俺はやや弱めに握り、野球のピッチャーの要領で、しかしあまり力を入れすぎずに投げる。

　俺の放った白い球は、それなりの速度でヘレンに向かって飛んでいく。先ほど俺を襲ったものと比べるとかなり遅い。予想通り、ヘレンはすんなりと避けた。

「おりゃっ！」

　だが、ヘレンが避けた先にもう１つの白弾が飛んでいった。俺の影から次弾を放ったサーミャのだ。かなりの速度でヘレンへ吸い込まれるように飛んでいく。

「おおっと」

　ある程度の剣達者だとしても、この二段構えをそうそう打ち破れるはずはない。２発目に放たれたサーミャの弾で仕留められるはずだ。

　しかし、ヘレンはそんじょそこらの剣達者ではない。“迅雷”の二つ名は伊達でないところを見せた。

　気楽な様子の声に反して、姿がかき消えるかと思うほどの速さでヘレンは雪玉を避けた。積もった雪の上、決して全力は出せないだろうと思うのだが、それでも圧倒的である。

　うーん、やはり戦力だけで言うならヘレンは１人でも良かったな。

　そして、あまりヘレンにだけ注目しているわけにもいかない。身体が大きく、その面では不利だが手足の長さがあるアンネもなかなかの球を放ってくる。

　今はリケとディアナがアンネに牽制を放っているので、あまり俺とサーミャのところには来ないが、ヘレンのを避けてホッとしたところに潜り込んでくるような雪玉が飛んできたりする。

　娘達も負けじと雪玉を放っているが、飛距離も速度も言うまでもなく、だ。その代わりと言ってはなんだが、時々雪玉が飛んでいくものの、クルルとルーシーは地を駆ける速さ、ハヤテとマリベルは空飛ぶ速さでかなり余裕を持ってかわしている。

　４人とも楽しそうに走り回り、飛び回っている。これが見られただけでも提案した甲斐はあったな。

　そうして、始まってから１０分か、あるいは２０分ほどだっただろうか、俺はヘレンの雪玉を避け、その先に来ていたアンネの雪玉も避けた。

　しかし、俺が感じたのはドスとやや重めのものが背中に当たる衝撃。雪玉が命中したのだ。

　はて、俺はヘレンのもアンネのもかわしたはずと思って振り返ると、そこにはニッコリと微笑むリディの姿。

　そう、彼女はここまで気配を消して必殺の機会を窺っていたのである。

　俺は両手を挙げて場外へと出て行きながら、「一番怒らせてはいけない相手は誰か」を考えるのだった。

## 決着はつかず

2022年3月12日

　勝負はなかなかつかなかった。最後までサーミャとヘレンの２人が残っていたからだ。いや、厳密には娘４人が“ノーカン”（とっくに４人とも雪玉にぶつかっていた）なので、動いているのは６人だが。

　２人は雪上にも関わらずものすごい速度で動きながら、雪玉を投げあっている。その光景を見て、前の世界のゲームがとても上手な「TASさん」という人を俺は思い出していた。限界のその上ってあるんだな。

「行くよ！」

「クルルルル！」

　クルルの背に乗ったマリベルが号令をかけると、クルルが走る。その背中の上からマリベルが雪玉を放る。

　クルルのスピードと、マリベルの狙いによってフワッと浮いた雪玉は、サーミャの雪玉を避けたヘレンに吸い込まれるように向かっていった。

　ヘレンの体勢は崩れている。俺なら確実に雪玉を食らっている……いや、それ以前に派手にすっ転んでいそうだ。

　だが、ヘレンはそのどちらでも無かった。いかなる足の運びをしたのか、すんでのところで雪玉を避け、体勢を立て直した。

　サーミャも負けじと、ヘレンの豪速球を躱し、ルーシーの放り投げる雪玉と、ハヤテが空中から投下する雪玉を器用に避けていた。

　２人が避けるたびに家族からは拍手喝采が巻き起こる。試合として凄く見応えのある内容にはなっている。なっているのだが……。

　あんまりにも勝負がつかないので、適当なところで仕切り直しにした。昼飯前にもう１戦くらいして、まだやりたければ昼飯を食べてから再開しよう、と言うことだ。

　結局、昼飯の後も引き続き２戦ほど行った。２戦で済んだのはヘレンを除く皆が疲れたからだ。

「流石のサーミャも厳しいか」

　テラスの床でぐでっとなっているサーミャに声をかける。彼女はそのまま手を挙げてヒラヒラと振った。声を出すのも億劫らしい。

　彼女の身体から湯気が立ち上っている。どれほど運動したかが窺い知れるというものだ。それは再び（というか、４戦全部）早々に退場してすっかり体温の下がった俺以外の皆も似たり寄ったりだ。

　ディアナもモコモコに着込んでいたうちの何枚かを脱いで放熱を図っている。流石に暑かったらしい。

「あんまり身体を冷やしすぎないようにな」

　俺が言うと、バラバラと返事が返ってきた。

「そう言えば、来ませんでしたね」

　俺の次くらいに退場して、すっかり息が整っているリディがぽそりと言った。

「ん？ 誰が？」

「リュイサさんです」

「ああ……」

　昼を挟んで、それなりに長い時間レクリエーションをしていたのだ、いつもリュイサさんなら「わたしはどっちにつこうかな」と参加しに来るか、少なくとも「ここで見てていい？」と見学すると思うのだが。

「まぁ、あの人もこの森の主だから、忙しいんだろう」

「温泉には結構来てますけどね」

「そう言えば言ってたな」

　うちに温泉ができてから、リュイサさんは足繁く通っているらしい。一緒に入った日は家族の誰かが大概報告してくれていて、そこから頻度を察するとかなりの回数来てることになるな。

　そんな彼女がこんな楽しそうなことを見逃すか？ と言われると、確かにちょっと考えにくいな。“黒の森の主”相手に不遜な考えでもあるが。

「何もなけりゃ良いんだが……」

　有り体に言えば、フラグと言うやつだろう。少し情緒のある言い方をすれば、虫が知らせたと言えるかも知れない。

　ビュウ、と寒風が吹いたと思ったら、そこにはリュイサさんが現れていた。

　寝転んでいた皆も思わず体を起こす。立ち上がるところまでは出来ていないが。

　リュイサさんはいつもの柔らかな表情ではなかった。いつになく真剣な顔をしたリュイサさんの様子に、俺たちの表情も引き締まる。

「突然ごめんね、エイゾウくん」

「いえ……」

　リュイサさんはそう切り出した。この様子だと、あまり気楽に聞いていて良さそうな話じゃなさそうだな。

　そう思い、俺は居住まいを正してリュイサさんの話を聞く体勢を整えるのだった。

## 教育……？

2022年3月17日

「あまり、いい話ではなさそうですね」

　俺のほうからそう切り出した。気がつけば、寝転んでいた皆も俺の周りに集まってきていた。

「そうねぇ……」

　リュイサさんがおとがいに指を当てる。少しおどけた様子にも見えるので、少なくとも俺達の身に危険が迫っているとかではないようだが。

　……そう言えば、この雪では鳴子があまり役に立たなさそうだな。音が響きにくいだろうし、雪が乗っかって鳴らないこともありそうだ。

　ここまで積もることは滅多にないらしいが、なにか考えるか。

　と、リュイサさんが手招きをした。俺にではない。マリベルにだ。マリベルは小首を傾げたあと、俺のほうを見た。

　俺は頷く。リュイサさんは“黒の森の主”である。「この森の最強戦力」の機嫌を損ねるようなことはしないだろうし、もし何かあるなら“黒の森”の行く末に関するものだろうから、聞ける範囲のことは聞くつもりだ。

　マリベルはおずおずといった感じで空中を浮遊し、リュイサさんに近づいた。一瞬、リュイサさんの顔が緩む。

　もしかして、単に新たに生まれた炎の精霊を見たかっただけなのでは。

　そう思ったが、すぐにその揺るんだ顔がほんの僅か引き締まった。

「あなたね。最近ここで生まれたのは」

　リュイサさんの言葉に、マリベルは頷いた。その様子をリュイサさんは眺めている。

　恐らくだが、マリベルが生まれたのはイレギュラーな事態のはずで、その確認をしにきたのはあるはずだ。“黒の森”の生態系に影響が出そうな魔物の発生も把握していたし。

　どうやら危ないものではないと分かっていても、実物の確認をしにくるのはおかしい話ではない。ない、のだが。

　それなら、わざわざ雪のこんな日の日中に来ずとも良さそうなものだ。日を改めるなり、うちの家族が温泉に行くときに合流するなりで済ませれば良いはずだ。

　つまり、それなりに急ぎでもある、と言うことらしい。

「良いところで生まれたわね」

　少し怯えた様子だったマリベルは、リュイサさんにそう言われて破顔した。リュイサさんも小さく笑ってマリベルの頭を撫でた。

「さて、それじゃエイゾウくん」

「はい」

　リュイサさんは真っ直ぐに俺の目を見た。俺もリュイサさんの目を見返す。沈黙が流れた。いつにも増してシンとした空気になる。積雪のせいもあるだろう。それそのものが吸音することに加え、空気が冷たくてより静謐に感じる。

　しばらく逡巡していたリュイサさんが、口を開いた。

「この子をしばらく私に預けて欲しいの」

　俺は思わず目を見開いた。他の家族も似たり寄ったりの表情をしていたと思う。マリベルがうちに来てまだ数日でしかないが、すっかりうちの娘として俺達も接していたところだ。

「期間はどれくらいになります？」

「それはちょっと明言できないわ。季節が一巡りすることはないと思うけど」

「理由も言えないやつですかね」

「そうね。本当に申し訳ないのだけど。ただ、この子に害があるようなことは絶対にしないと、それは約束するわ」

　今度は俺がおとがいに手を当てて考える番だった。“黒の森の主”が預かって何事かをうちの娘にすると言う。

　教育か何か、そういったものを施すのだろうか。リュイサさんもマリベルも精霊である。人間には及びもつかない種々のことがあるのかも知れない。それなら言ってくれても良さそうなものだが。

　俺はチラッと家族のほうを見る。ディアナが一番心配そうにしているが、まぁ皆似たり寄ったりと言っていいだろう。

　可愛い末の子をしばらく手もとから離す、という話をさらっと流せるわけもない。ましてや詳しい理由も分からないのだ。

「マリベルはどうだ？ 行っても平気そうか？」

　俺はマリベルに聞いてみた。あまり良い手段ではない。この辺の判断がちゃんとつくかも分からないのに、判断を任せるのは無責任だとの誹りを受けてもおかしくないだろう。

　それでも、マリベルに聞いてみないといけないと、そう思ったのだ。

　マリベルは困った顔をした。そして、リュイサさんのほうを見る。

「行かなきゃダメ？」

「そうね……。来なかったらお仕置きなんてことはしないけど、来てくれたほうが貴方のためになるわ。エイゾウくん達のためにも。そこは私が“黒の森の主”として約束する」

　真剣な目をするリュイサさん。マリベルは俯く。俺は思わず唇を噛んでいた。それが自分の不甲斐なさを誤魔化すためか、それとも他の何かなのかは分からずじまいだったが。

　やがて、マリベルは顔を上げた。

## かわいい子には旅をさせよ

2022年3月19日

「ボク、行ってくるよ」

　マリベルは言った。小さいがその顔にはちゃんとした決意が漲っている。ただの子供のように扱っていたのが少し恥ずかしくなるくらいにしっかりした決意。

　ある程度は“前世”のことが継承されると言うこともあるだろうが、それだけではないように思える。

「それでみんなの役に立てるなら、ボクはその方がいい」

「わかった。ありがとう」

　すまない、とは言わなかった。それを言ってしまうと彼女が大事にしたものをないがしろにすることになると思ったからだ。

「それじゃ、このあとすぐ行きましょうか」

「え？ そうなんですか？」

　リュイサさんの言葉に応えつつ、俺は僅かばかり息を呑んだ。辺りがしんと静まりかえる。

「ええ。色々あってね。早い方が良いのよ」

「そうですか……」

　随分と急な話だ。送別会のようなものをしてやろうかと考えていたのだが。

　いや、ものは考えようか。ほんのしばらく、例えば修学旅行か何かに出かけるたびに送別会をするなんて話は聞いたことがない。いずれ帰ってくることはリュイサさんも保証してくれたのだし、それを信じて今は行ってらっしゃいだけを言うことにしよう。

　そう思い、俺は少し乱暴にマリベルの頭を撫でる。すると、横から手が延びてきて、マリベルを抱きしめた。ディアナだ。多分、ディアナは「行かなくてもいい」と言いたいだろうな。少なくとも「今じゃなくてもいい」とは。

　一緒に過ごした時間はいくらにもならないし、マリベルに決断をぶん投げてしまったのは俺だが、ディアナがどれくらいの思いを持っているかはそれとは関係ない。

　ディアナ以外の皆も同じだ。手を握ったり、俺よりも乱暴に頭を撫でたり。涙こそ浮かべていないが、末っ子とのしばしの別れを惜しんでいる。

　俺たちがそうしているので察したのか、クルルとルーシー、ハヤテも寄ってきた。ディアナが抱いていたマリベルをまだ雪の残る地面に下ろしてやると、３人ともペロペロやりだした。

「みんな、くすぐったいよ」

　マリベルはそう言ってはしゃいでいる。それを聞いて、クルルが笑うように鳴き、それにつられて、皆から笑い声が起きた。雪の冷たさが足下を容赦なく冷やしているが、そんなものは気にならないくらい俺達は笑顔に包まれている。

　俺達の誰かが、長く離れることがこの先あるだろう。送別会はその時にとっておこう。笑いながら俺はそう思った。

「なるべく早く帰ってこられるようにはするから」

　リュイサさんはマリベルの肩に手を置いてそう言った。マリベルは胸を張っている。それが空元気なのかまでは俺には分からない。だが、今は空元気だったとしても、すぐに本当の元気になってくれるはずだ。

「ああ、そうそう。行く前に聞いとかなきゃな」

「？」

　俺が言うと、マリベルは小首を傾げた。

「帰ってきたら、何が食べたい？ なんでもいいぞ」

「え、なんでもいいの！？」

　マリベルは目を輝かせる。こういうところは見た目そのものと言うかなんと言うか、だ。

　マリベルは腕を組んでうーんうーんとうなり始めた。「好きなものをなんでもリクエストして良い」と言われて困るのは昼飯時のオッさんも、炎の精霊も変わらないらしい。

「あ、細かくした肉を焼いたってやつ食べたい！」

「ハンバーグか」

「そうそれ！」

　俺がチラッとサーミャに視線を送ると、サーミャは頷いた。保存してある肉で事足りそうだ。

「わかった、任せとけ」

　俺はドンと自分の胸を叩く。マリベルがやったー！ と両手を挙げて喜んだ。

「それじゃあね」

「行ってきます！」

　マリベルは大きな声で出発を告げる。俺達はもちろん、雪よ溶けよと言わんばかりに大きな声で言った。

『行ってらっしゃい！』

## 新しい武器

2022年3月24日

　俺達が挨拶を済ませると、リュイサさんとマリベルの姿がかき消えた。チクリと胸が痛んだように感じるが、俺はすぐにそれを振り払った。

「行っちゃったわね」

　ボソリと、ディアナがそう呟いた。

「そうだな」

　俺が言うと、他の皆も頷く。キュウ、とハヤテが細く鳴いて、クルルとルーシーもいつもの元気な声よりはかなり小さな声で鳴いた。

　その後、元々疲れていたこともあり、温泉につかって走り回った疲れと汚れを落とそうということになった。

「ああ～」

　熱めに感じる湯に浸かると、口から声が漏れる。オッさんくさいとは自分でも思うのだが、実際オッさんなので仕方あるまい。

　ゆっくりと身体から疲れが湯に溶け出していくような感じがある。炭酸泉でも硫黄泉でもない、“魔力泉”だからだろうか。

　いや、普通に湯に浸かればそうなるだろうと言われればそうなのだが。

　まだ日の落ちきらない空を眺める。雪雲はとっくにどこかへ去っており、のどかに白い雲が浮かんでいた。

「ふぅ」

　俺は小さく息を吐く。湯船から立ち上る湯気に俺の白い息が混じる。湯に溶ける俺の疲れのようだな、と思った。

　あちこちから疲れが抜け出ていく。目を閉じると、一瞬笑ったマリベルの顔が浮かんで、それも湯に抜け出ていき、意識も同じように抜けていった。

「エイゾウー！」

　次に意識を取り戻したのは、俺を呼ぶ声でだった。すっかり寝入ってしまったらしい。

「いかんいかん」

　俺はひとりごちる。風呂で寝るのはほぼ気絶と同様とか前の世界で聞いたことがある。あまり良い傾向ではない。疲れが溜まっていただろうか。一度ベッドから出ないタイプの休日を過ごすことも考えたほうが良いかな。

「エイゾウー！？」

「すまん！ 起きた！ すぐ出るよ！」

　湯船でぼんやり考える俺を再び呼ぶ声に慌てて返した。気がつけば日が暮れかけていた。時間にするとかれこれ１時間を超えて入っていることになる。

　スーパー銭湯であれこれ湯船に浸かりつつサウナも、などとしているならともかく、ここで１時間浸かりっぱなしだったことは一度も無いからな。心配されてしまうのもむべなるかなである。

　俺は慌てて湯船からあがると、手早く身体を拭いて服を着、湯殿から飛び出すのだった。

　そして夕飯時。

「確かになぁ」

　ヘレンがカップを手に頷きながら言った。俺はスープを呑み込んでから言う。

「だろ？ 今日、雪合戦をやってみて、やっぱり射程のある武器をもっと増やしたほうが良さそうだと思ったんだよ」

「森の中だけど、周りも開けてるしな」

「うん」

　俺は頷いた。クロスボウはリケ用に作ってある。他の皆は大体弓を操れる……のだが、なんというかもう少し気楽な攻撃手段もあったほうがいいな、と今日数度雪玉を食らって思ったのだ。

　それこそ投石みたいなものでもいい。それが十分武器たり得ることも今日の雪合戦で判明したことの一つである。

「じゃあ、石を集めるのか？」

　サーミャが聞いてきた。俺はスプーンを咥えたまま腕を組む。「行儀が悪い」とディアナに窘められて、慌ててスプーンを口から出した。

「それじゃあエイゾウ工房らしくないよなぁ」

「何か作ります？」

　今度はリケが目を輝かせて聞いてきた。

「そうだな……」

　鍛冶からは少し離れる部分が多いが、冬籠もりでもあるし、材料はたくさんあることも確認済みだ、アレを作るか。

　俺がそれを皆に告げると、賛成の声が返ってきた。よし、それじゃあ、それを作るか。

　のんびりぐだぐだする日を設けたほうが良かったんじゃと気がついたのは、ベッドに潜り込んだ後だった。

## スリング

2022年3月27日

「アレは結構キツいからな」

　革を細く割いた紐を編んでいたヘレンが肩をすくめた。この中でリアルに投石の恐ろしさを知っているのは彼女だけだ。戦闘経験は魔物退治で皆あるのだが、軍同士が戦う戦場へ赴いたことがあるのはヘレンだけのはずだ。

　あと可能性があるのはアンネくらいだろう。うちはリケを除いて皆強いから忘れそうになるが、元々“お姫様”らしからぬ強さだった。

　それなら、前線に赴いて鼓舞するとかそういうくらいのことはあったかも知れない。だが、干戈を交えるところまではしてなさそうではある。万が一があったらえらいことだからな。

「やっぱりそうか」

　俺が言うと、ヘレンは頷いた。

「弓もそうだけど、それ以上に数が飛んでくるからな。ここの皆だったらその全部が無視できないし、ましてやそれがスリングで飛んでくるんだろ？」

「そうだな」

「食らう側には回りたくないな」

　うへぇと舌を出すヘレン。そう、今回はスリングを作るのだ。

　形状を簡単に言えば石を挟む部分もしくは石を置くカップの部分があり、その両端から紐が伸びているだけである。

　伸びている紐の片方を手首などに結わえて石をセットし、もう片方を握りこんで振り回してスピードが出たら離すと石が飛んでいく、という仕組み……というかなんというか、まぁ、そういうものである。

　そんなわけで、皆鍛冶場に集まっているが、単に広い作業場がここなだけで、今日は特に火を使わない。

　別にマリベルのことを意識したつもりではないのだが、シンとしているのがなんだか彼女の不在を意識させるようでもある。

　今はサーミャとリディがなめしておいてくれた革を細く割いたものを、皆で編んでそれぞれ紐にしているところだ。自分の身体にも合わせられるし。

　作るのが一番上手なのは、やはりリケだった。器用にスイスイと紐を編み上げていく。前の世界でミサンガとか、パラコードブレスレットとか編むの上手な人がいたけど、そんな感じにも見える。

「こっちだとリケに敵わないなぁ」

「そうですか？」

　俺もチートのおかげで決して下手な出来では無いのだが、いかんせん鍛冶のほうでは無く生産のほうの故か出来映えは数段落ちる。俺のは編み目がリケのと比してかなり不揃いである。

　リケの次に上手だったのはヘレンだった。意外と、と言うと彼女に怒られそうだが手先が器用なのだ。そのうち鍛冶仕事で細かいのも任せてみようかな。勿論、ヘレンが嫌でなければだが。

　リディも上手で、彼女だけ微妙に編み方が違うらしく、編み目で綺麗な模様が出来ていた。リケとは違う上手さなので実際のところは比較しにくいところではある。

　サーミャ、ディアナ、アンネも下手なわけではない。サーミャもディアナもそつなくこなしている。アンネだけが手が大きい不利もあってか、やや大雑把なようだが彼女が自分で使うことを考えれば十分問題の無い範疇だろう。

　今回は携帯性を考えて、カップの着いたものではなく、中心部分にやはり革で石を包む部分を取り付けることにした。

「それ、大きくない？」

　ディアナが指さしたのはヘレンのものである。ディアナが言うとおり、他の皆のものよりも石を包むところが1.5倍くらい大きい。

「アタイはこれくらいでいいんだよ」

「まぁ、力あるしなぁ……」

　純粋な出力で言えばリケとサーミャ、そしてアンネがかなりのものなのだが、上手く力を使う事に関してはやはりヘレンに一日の長がある。

　運動エネルギーは重さにも比例してくるから、大きな石を投げることが出来るなら、そっちのほうが良いという考えだろうな。

　こうして思い思いに出来上がったスリングを手に回してみる。当然石をセットしてないので上手く回せないが、そんな状態でほどけてしまうということもないようだ。

「よし、それじゃ試すか」

　バラバラと了解の返事が返ってきて、俺たちはスリングを手に表に出るのだった。

## 投石の恐ろしさ

2022年3月29日

　雪はほとんどその姿を消していた。寒さはあるが、雪を維持するほどではなかったようだ。僅かに日の差さないところで特に溜まっていたらしいのが残っている。

　うちの庭には木が生えていないので日当たりが良い。なので、昨日雪合戦をしたフィールドはバリケードにした塊の一部がちょっと残っているだけだった。

　その残っているのを、クルルが鼻先、ルーシーが前足、ハヤテも鼻先でちょいちょいとして、雪の名残を惜しんでいた。

　朝の水汲みの時よりもだが、その時よりも更に減っている。滅多に降らないということは、次に出会えるのは来年かも知れない。それまでしばしのお別れになるはずなので、娘達にはほんの少しでも今の間に触れられるだけ触れておいて欲しいところだ。

　まぁ、雪が残っていたら石を探すのも一苦労なので、俺達としては気候に感謝すべきところだろうな。

　適当に散らばって、適当な大きさの石を集める。もちろん、あまり大きいと挟んで振り回すのに都合が悪いので、あまり大きくないものをだ。

　半時ほど皆で手分けすると結構な数が集まった。小さく山になっている。すぐにこれくらい集まってくれないと「いざという時に弾の入手が容易」というメリットを活かせないからな。

「よーし、アタイから行くか！」

「手本を頼むわ」

「おう！」

　ヘレンはスリングの片側の紐を輪っかにすると、そこに手を通し手首で固定されるようした。次に手首に通してないほうの端を握りこんだ。見た目には大きな革の輪を手に持っているようにも見える。

　そして、石ころを１つ摘まみあげると、布のようになっているところにセットする。テキパキと進めていて澱みがない。過去にどこかの戦場で使ったことがあるんだろう。

「よぅし」

　ヘレンはそう言うと、ブンブンと振り回しはじめた。勿論俺達は距離を取っている。ヘレンに限って滅多なことは無いと思うが、用心せずに事故を起こすほうがマズいことは言うまでもないからな。

　標的はいつも弓の練習に使っている的だ。何度も使っていて表面のささくれが酷くなっている。そろそろ替え時でもあったし、命中して粉砕してしまっても問題はない。

　最初はゆったりと振り回していたが、数回かなり素早く振り回したかと思うと、普通に投げる時のような動作をした。

　パン！ と派手な音が辺りに響いた。一瞬皆が身をすくめる。

　音は的が弾け飛んで起きたものではない。離したほうの紐の先端が波打つことで一瞬だけ音速を超え、その衝撃波で破裂音がしたのだ。鞭を振るったときにも起こる現象である。簡単なところでは長いチェーンを波打たせると、最終的に先端が音速を超えて音が鳴る。

　その派手な音とは裏腹に、ぽーんといった風情で石が飛んでいく。狙ったところに飛ばすにはそれなりに練習がいるはずだが、低い山なりに飛んだ石は的に向かって飛び、見事に命中した。

　パカンと石が砕ける。あまり硬い石ではなかったようだ。では的のほうにはあまりダメージが無かったかというと、さにあらず。

　元々かなり傷んでいたこともあるだろうが、命中したところが石の形に砕け散っている。これが頭に命中したら、兜を被っていたとしても致命傷であることは間違いない。

　俺達はそれを少し背筋を寒くさせながら見ている。

「こんなもんだろ。よっし、それじゃあ練習しようぜ！」

　生き生きと話すヘレンに、俺達はコクコクと頷くのだった。

## 守るために

2022年3月31日

　パシッと鋭い音が森を渡る。一部が森の木々に

　今のはサーミャがスリングで投石したときに響いた音だ。彼女は弓を扱い慣れているからか、器用に的に命中させている。

　当たるたびに娘達３人がそれぞれの声でキャッキャとはしゃいだ。

「流石だな」

　とは少し後ろに下がって腕を組んで見守っているヘレンの評である。ヘレンは俺のほうを見ずに続ける。

「ほとんど初めてであれだけ当てられたら上出来だよ」

「だろうな」

　ヘレンのサーミャに対する評価には同意する他ない。鍛冶のような専門技術が必要なものはともかく、そうでないものについてサーミャはなんでも器用にこなす。

　その意味ではうちの家族で一番だろう。今も試してみる前に２、３コツをヘレンから聞いただけで、ポンポンと的に命中させ、そのたびに娘達が沸いていた。

　ディアナも時折外すものの、大体的の辺りにはまとまっている。狩りに使うならもう少し練習が必要そうだが、ここを守るための牽制でなら十分すぎるくらいの精度だ。

「守る、か……」

　ピシッという音が響く中、俺は小さな声で言った。今のところは鳴子やこうした備えは「考えすぎ」と言われてもしかたないところではある。

　それでも少数精鋭で来られた場合の備え、あるいは魔物に対しての備えはあってもいいだろうし、接近しない攻撃手段はあって困るものではない。なるべくなら使わないに越したことはないのだが。

「逆茂木まではやりすぎかな」

「あー……」

　ヘレンが少し頭を掻いた。逆茂木は先を尖らせた木の枝を相手側――うちの場合は外へ向けて――設置し、侵入を防ぐものだ。前の世界でも歴史的にはかなり古いものである。

　魔物への対応というなら、バリケード的に逆茂木を設置するのもありなのではと考えたのだ。それに人間相手にも役に立つはずだし。

　どっちも逆茂木程度で諦めてくれるかは別の話だが。労多くして功少なしとなってもなぁ。それにそういったものを設置して事故が起きないという保証も無い。命を落とすところまではいかないだろうが。

「意味が無いことはないと思うけど、手入れが大変だろ」

「あー……」

　今度は俺が頭を掻く番だった。なるほど、前の世界での日本の森ほどの湿度がないとは言っても木製ならそれなりに傷むだろうし、それを補修整備する必要がある。

　そんなにしょっちゅうやらなければいけないものではないが、設置の手間に手入れの手間というコストをかけてまで設置しなければいけなさそうかと言われるとなぁ……。

「そういうのは相手がよほど大軍で来るのが分かってるときで良いと思うぜ。その時はこの周りだけじゃなくて、もう少し遠くにも設置することになるだろうけど」

「なるほど」

　俺は頷いた。いや、正確には鉄条網の存在が頭を過ったのだが。俺ならほぼ間違いなく作れるだろう。有刺鉄線もトゲのものと剃刀状のものがあるが、どちらでも問題ないに違いない。

　ただ、この世界ではかなり先のものになってくるだろう。この森の中だけならとも思ったが、皆いつここを出て行くとも知れないわけだし、余計なものを教えてしまったあとで口止め、というのも心苦しい。

「ま、ここにはアタイもついてんだ。滅多なことにゃさせないさ」

　今も石を投げ続けている皆を見るヘレンの目がスッと細められた。少なくともこの地域最強の彼女がいるのであれば、相手はそれ以上の戦力も用意しなければならないだろう。

「それもそうだな」

　俺がそう言うと、ヘレンは「そうかそうか」と笑って、珍しく俺の肩をバシバシと叩く。

　ディアナのそれとは違う衝撃と痛み。普通なら不快に感じるのであろうそれに、俺は頼もしさを覚えるのだった。

## 急を告げる

2022年4月2日

「スリングをそれぞれ持ったことだし、マリベルが戻ってきたら全員で家を守る訓練はしたほうがいいかな」

　しばらくスリングの練習をしたせいか、じわりと傷む腕をさすりながら俺は言った。今は夕食後のひとときである。温泉にも浸かったが、どうにも筋肉痛には効果がなかったらしい。

　それよりも思いの外筋肉痛が早く来たことを喜ぶべきか。前の世界では次の日に来るのが当たり前になってたからな。若返りの恩恵と言って良いかはともかく。

「魔物討伐の時みたいに？」

　湯で割ったワインを飲みながら、ダイニングのストーブ近くに椅子を運んで暖まっていたディアナが言った。冬に入ってから、夜はああするのが彼女のお気に入りらしい。俺は頷く。

「何事も訓練しておかないと、いざという時に身体が思うように動いてくれないからな。あの時も訓練してなかったら、どう動けば良いか迷っただろうし」

「それぞれどうするのか確認しておいたほうがいいとアタイも思う」

　こっちはリケと一緒に火酒を呷っていたヘレンだ。

「皆の剣も大分良くなってる。……ディアナは剣筋が素直すぎるだけで、前からそこらの兵士よりは強かったけどさ」

　そんなヘレンの言葉に、アルコールもあるのだろう、ディアナの顔がパッと輝く。

「教えることはそりゃあるけど、稽古の時間を少し減らしてでもそっちをやったほうが良いかもな」

「私もですかね」

　ヘレンと火酒を呷っていた片割れのリケが俺を見て言った。うちで一番戦闘能力がないのは彼女だが、それでも自分の身を守る程度のことはできる。

　リケは自分が足を引っ張ってしまわないかが心配なのだろう。魔物討伐のときに彼女が足手まといになってしまった記憶はないので、完全に杞憂だとは思う。

　単に他の面々の戦闘力が高いだけだ。特にディアナとアンネは身分を考えるとちょっとおかしいと言われかねないくらいである。ヘレンと言う師を得て更に磨きがかかっているし。

　そのヘレンが自分の頭の後ろに両手をやりながら言う。

「まあ、万が一を考えるとな。まぁ、毎日じゃなくて、週に一度……そうだな、街に出かけた日にやる、とかくらいでいい」

「それくらいなら大丈夫そう」

　リケが小さく息を吐いた。鍛冶屋としてあんまり戦闘能力の向上に邁進するのも、とは俺も思うので、ヘレンの言うペースには賛成だ。“黒の森”の主直々に最強戦力とまで言われておいて今更ではあるが。

「具体的に何をするかとかは追々考えていこう。対応を急がなきゃいけなさそうな相手も今はいないし」

「そうだな」

　ヘレンは頷いて、テーブルに置いてあったカップの火酒を飲み干すと、今日はもう寝るのだろう、そのカップをゆすぎに台所へ向かった。

　大抵は俺が自室に引っ込んだ後も起きているらしい皆も、今日はスリングを作って練習してとやったので疲れているらしい。ヘレンのその動きでお開きとなった。

　そして数日が経ち、そろそろカミロのところへ納品に向かう頃だな、納品物の数を一応チェックしておかねばならないなと思いはじめた夕方、鍛冶場を片付けていたら、バンと勢いよく扉が開けられた。

　開けたのはサーミャだ。彼女もこの時間はリディと畑の手入れや弓の練習をしていて外にいる。

「エイゾウ！ アラシがきた！」

　サーミャは俺にカミロのところにいる小竜の名前を告げた。普段は新聞宜しく定期的に王国の情勢を伝える手紙を運んでくれている。このところは「なべて世は事も無し」であると聞いていた。

　サーミャが少し焦っているのは、その手紙は大抵朝早くに届けられる――大体俺が水汲みに行って戻ってくるくらいのタイミングだ――のだが、今はその時間では無いし、「新聞」が届くタイミングでも無い。

　つまりは、何か緊急の連絡があったのだ。俺は片付けもそこそこに、サーミャが開け放った扉から外へ飛び出した。

## 真贋

2022年4月7日

　アラシの脚にはいつもなら手紙や新聞を入れた筒だけが括り付けられている。だが、今日はその他にもう一つ大きめの包みもついていたらしい。

　そこそこの大きさだったため、アラシが来てすぐにディアナが外してやったのだそうだ。

　今、俺の目の前に差し出されているのがそれだ。引き取って手に持ってみるとそこそこ重い。

　これはもし鳥に運ばせようと思えば、大型の猛禽類に託すしかないように思える。

　それを平気で運んでこられるのは、アラシが竜であることの証明、ってことでもあるだろうな。

「よく頑張ったな」

　俺が頭を撫でてやると、アラシはキュウキュウと鳴いた。喜んでくれているのだろうか。すぐにハヤテとじゃれ合いを始めたので、どうだったのかはよく分からずじまいになってしまった。

「さてさて」

　俺はその少し重い何かを包んでいる布を取っていく。不穏ではあるが、どこかしらプレゼントのような感じもあって、皆が少しワクワクしているのが伝わってくる。

　そして布を取り払ったあと、中から現れたのは小ぶりのナイフだ。

「これは……」

　ナイフが現れたとき、一番目を輝かせていたリケが絶句する。いや、俺も負けず劣らずだったかも知れない。

　姿を現したナイフの形状には見覚えがある。それもそのはず、何度も見たことのある形だからだ。

　ナイフはうちの工房の形状ソックリそのままだったのだ。

「はぁ、これは……」

　アンネがナイフをためつすがめつしている。今はテラスに明かりを持ち込んで、そこでナイフの品評会だ。アンネがナイフを動かすたびに、キラリと明かりを反射する。

　やがてアンネはナイフをテーブルに置くと、ため息を吐きながら言った。

「うーん、違うのは分かるけど、何がどうと言われると難しいわね。エイゾウの作ったほうが遙かに綺麗なのは分かるけど」

「形はそっくりだからなぁ」

　俺は見えない天を仰ぐ。木製の天井。俺達家族で作り上げたものだ。ナイフだって俺一人だけのものではない。板金を作ってくれたりした、家族の協力あっての部分も少なからずある。

「出来はどうなの？」

　と、ディアナが言った。性能的にうちのを脅かすようなものかどうか、と言うことだろう。そんなものが出回ったら、商売あがったりだからな。

　俺はテーブルの上で鈍く明かりを反射しているナイフをチラリと見て言った。

「まぁ、うちの“高級モデル”には及ばないな。“一般モデル”だとどうかな。たまには良い勝負するかも知れん。うちが圧勝するとは思う」

　それを聞いて、ディアナはホッとため息をついた。

　鑑定は勿論チートである。見たところ、叩いた後のばらつきがかなり目立つ。そもそも形状はそっくりだが、あちこちに粗が残っていることが簡単に見て取れるのだ。

「カミロさんからの手紙もそのナイフについてですね」

　静かな、しかし明らかな怒気をはらんだ声でリディが言った。彼女が広げている手紙を横からヘレンが覗き込む。

「都の市で見つけた……か。まさか」

「いやぁ、それは無いと思うぞ」

「だよな」

　俺が否定したのは「これを作ったのがカレン」という話だ。彼女は今都にいる。そして、うちのナイフを知っている。猫の刻印に至るまでだ。

　その猫の刻印もしっかりこのナイフに入っていた。最初に見つけたのはサーミャだったが。

　さらには鍛冶の修行をしているのだ。このナイフを作る事が出来る容疑者を挙げろと言われて真っ先に思い浮かべてしまうのも無理はない。

　だが、彼女にはそうするメリットがない。すぐに自分だとバレてしまうような事をして、今後俺達の協力を得られなかったら、今まで都にいた意味が無い。彼女の伯父が帰国するときに一緒に帰っていたほうがまだ良いだろう。

　そう思いたい、というのも否定できないところではあるのだが。

「どうもちょくちょく出回っているらしいですね。それで確認するのに現物を入手して送ったのだと」

「俺達がよそにも回しはじめた可能性があるからな」

　カミロのところには品を卸す約束をしている。だがそれは専属契約的な制限のある約束ではない。となれば、うちとしては良い条件があればそこにも品を回すことは可能だ。

　それはカミロの側から見たエイゾウ工房も然りだが。カミロがどこから何を仕入れようとも、うちから仕入れている限りは文句を言われる筋合いはないのだ。

「偽物かぁ……」

　商標や意匠を登録して保護する、という概念はまだこの世界にはない。貴族のエンブレムを勝手に使えば下手すりゃ極刑だが、それとはまた意味合いが違うしな。

「で、結局なんなんだ、このナイフは？」

　テラスの手すりに腰掛けて、脚をぶらぶらさせているサーミャが言った。俺は苦笑しながら返す。

「これが具体的にどういうものか、と言うのは分からん」

　サーミャが小さくフンと鼻を鳴らす。俺はそのまま言葉を続ける。

「だが、これが誰か――あるいは誰か

　俺がそう言うと、皆が俺のほうに顔を向けた。その顔は、これからについてとことんやってやろうという意志に満ち始めている。俺にはそんな風に見えるのだった。

## 守りたいもの

2022年4月8日

「まぁ、そうは言ってもさしあたって出来ることはそうないな。強いて言えばカミロに『こりゃ間違いなく偽物だ』って返事するくらいか」

　ガタリと家族全員が身体のバランスを崩した。有り体に言えばズッコケた。

　この偽物の流通が攻撃であろうことは確かだ（と俺は判断している）が、攻撃の意図や最終的な目的が見えていない。

「コイツが偽物だった場合に……いやまあ偽物なんだけどさ、誰が一番被害を被るかってカミロだしなぁ。街に行くのを待つんじゃなくて、慌てて送ってきたのはそのへんもあると思うぞ」

　偽物が売れた場合、単純にその分の売り上げが減っていてもおかしくない。ナイフなんかはそう大した値付けをしていないと思うし、短剣にしてもその他のものにしても高値でガンガン売れるようなものではないが、チリも積もればということを考えるとバカにできないだろうな。

　俺達はカミロのところに卸した代金はその都度貰っているから、こう言ってはなんだがその後についてはどうなっていても関係ない。カミロだけが損している形だ。

「でも、この状況のままだとマズいわよね」

　静かな声でアンネが言った。俺は頷く。

「この状況が続いて、俺達のがカミロのところに卸せなくなったら、商売あがったりだからな。カミロのところに卸せなくなったときは他所にも卸せないだろうし」

　要はエイゾウ工房の製品について需要がなくなっている状況だ。カミロだろうと誰だろうと引き取って売ろうとはしないだろう。そうなれば俺達もいずれ干上がっていく。

「どのみち情報が少ない。その辺も一旦カミロに任せて、俺達はその情報で方針を決めていこう」

　今は防御するにも迎撃するにも、どういったものを揃えれば良いのか全く分からないからな。

　俺は偽物のナイフを手に取った。形はうり二つ。しかし性能としては“一般モデル”にも劣っていることをチートが教えてくれていた。

　俺は脳裏に今手持ちの金がいくらだったかを浮かべた。家族全員となるとやや厳しいが、頑張れば１年か２年はもつくらいはある。もし最悪の事態になってもある程度の立て直しを図れるくらいの余裕はありそうだな。

　どのみち、俺が多くを敵に回してでも守りたいのはそういうものではない。クルルにルーシー、ハヤテを含めた家族と、彼女達との“いつも”の生活が一番だが、それ以外でとなると製品の評価になるだろう。

　俺の直接の評判とは少し違って（そっちは元々望んでないし）、ここで作り出し世に送り出してきたものが「取るに足らないもの」として扱われるかも知れない、というのは職人として堪えがたい恐怖だ。

　たとえ、俺がここに来て――つまりは鍛冶屋をはじめて――１年にも満たないとしても。

　それに、ナイフは俺以外にもサーミャやリケが作ったものもある。その辺りの評価、評判が貶められるのは腸が煮えくり返る思いがする。

　今のところ、そんなことにはなっていないとカミロの手紙にはあったが。

　いつの間にかディアナが持ってきてくれていた筆記具と紙。そこに俺はシンプルに「これは偽物である」旨を大きめに、堂々と記した。

　その紙を丸めてアラシの脚にある筒に納めると、その頭を撫でてやる。

「それじゃあ、よろしくな」

「キュイッ」

　アラシは短く、鋭く鳴くとスッと飛び立った。夕闇が迫ってくる空を切り裂くような速度であっという間に去って行く。

　俺達エイゾウ工房の面々は、工房の未来の一部を運んでいくアラシを、その姿が消えてもしばらく見送っているのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

書籍版６巻の表紙イラストが公開になっています

https://kadokawabooks.jp/product/kajiyadehajimeruisekai/322201000227.html

レーベル公式からはまだリンクされておりませんが、Amazonさんなどで予約がはじまっておりますので、こちら是非ご予約いただければと思います。

## できること

2022年4月13日

「……大丈夫？」

　アラシを見送った俺に、ディアナが問いかける。ふと見ると、皆も少し心配そうに俺の方を見ていた。

「うん、まぁ、多少動揺はしてるけど、ジタバタしても仕方ないしな」

　俺は笑顔で答えたつもりだったが、妙な表情をしたディアナの様子を見るに、うまく笑えてはいなかったらしい。元々、笑顔が苦手ではあるが、今は多分そういう感じではないんだろう。

　森の中では打つ手も限られる。ネットのある前の世界ならなにかしら調べるなり、メールするなりして対応を考えられるが、そんな便利な手段が普及していないこの世界ではどうしようもない。

　せいぜいがハヤテに頼んで手紙をカミロに届けて貰うくらいだろうな。

　その状態でジタバタしたり、必要以上に気を揉んだりしてもあまり益は無い。慌てても仕方ないときには慌てない。前の世界の仕事で（ブラックではあったが）得た少ない役に立つ事柄の一つだ。

　そう思っているつもりだったのだが、どうやら心の底の方はそう思っていなかったらしい。

「いずれ偽物が出回るかも知れない、という可能性も考えてはいたつもりだったんだけどな」

　空を仰ぎ見る。アラシが切り裂いていった空はもう星が輝きはじめている。

「出所はもちろん知りたいところだけど、一番知りたいのは動機かなぁ……」

「動機ねぇ」

　ヘレンが言って俺は頷く。

「偽物を作るからには何か理由があるはずだ。それが俺達にとって好ましくない理由の場合もあるだろう」

「金儲けしたかっただけとかか？」

「そうだな。正面からぶつかり合うことになっちゃいそうだしな」

　サーミャの言葉に、小さく苦笑する。可能性として一番納得できて、かつ、あり得そうなところがそれだからだ。

　そしてその場合、同じもの（性能は違うが）を売っているもの同士、パイの奪い合いということになる。

　しかし、場合によっては一番話が早いかも知れない。例えば“一般モデル”より更に性能としては落とした、謂わば“大量生産モデル”とでも言うべきものを作って、カミロに卸し、カミロはそれを偽物ナイフの連中に更に卸し、それで金儲けをしてくれればよいのだ。

　うちの負担は増えることになるが、作る速度を上げて良いなら今まであまり手伝って貰っていなかったアンネにも積極的に手伝って貰えばいいし、義理も何もかなぐり捨てる勢いなら、都にいるカレンに頼んで作って貰う――一種のOEMのような体勢もとれなくはない。

　最後のはそれをするくらいなら出来を見て弟子に取ったほうが早いだろうな。あまりにも打算的にすぎるのでそれもちょっと、と言ったところだが。

　ともあれ、金儲けが目的なら一緒にある程度は儲けさせてやり、それで丸く収まれば万々歳だ。それに……。

「ま、他に何か……そうだな、金儲けにせよ、その事情なら手伝ってやろうかな、と思えるようなことならそうするのも良いな」

　いささか上からの目線のきらいもあるが、とにかく事が穏便に収まるなら俺としては文句は無いのだ。少なくとも俺の脳は今のところそう言っている。心の動揺のゆくえ次第ではちょっと分からないけれど。

「甘いかな」

「甘いわね」

　ぴしゃりと言ったのはアンネだ。ほんわかした肩書き通りの見た目とは裏腹に、怜悧冷徹さを持ったアンネは商売敵を許しはしないだろうな。

　アンネはそこで大きくため息を吐いた。

「ま、でもエイゾウらしいんじゃない？」

「そうね」

　アンネの言葉をディアナが引き取る。サーミャやリケもうんうんと頷いている。

「結局、そんな状況で頼まれたら断り切れずに助けに行っちゃうんだろうしな」

　頷きながらサーミャが言った。うんうんと家族の皆が大きく大きく頷いた。心なしか娘達も同じようにしているように見える。

「とりあえずは出来ることもないし、明日の仕事に備えよう」

　俺がそう宣言すると、皆から分かったの声が返ってきた。

　俺は再び空を見上げる。寒空に浮かぶ月が、俺達を見下ろしている。願わくば、変な方向に転がりませんように。俺はそう、祝福を地面に降り注がせている月の女神に心の中でそっと祈った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

書籍版６巻が発売になります。

https://kadokawabooks.jp/product/kajiyadehajimeruisekai/322201000227.html

Amazonさんなどで予約がはじまっておりますので、こちら是非ご予約いただけると嬉しいです。

## 腕前

2022年4月14日

　この日は皆が夕食を作ってくれることになった。そこまで気をつかわなくてもいいとは言ったのだが、どうしてもと言われたのであまり固辞するのもよろしくないなと、甘えることにしたのだ。

「落ち着かないな……」

　普段なら俺が夕食の用意をしている時間帯。俺は湯に浸かっていた。家にいても落ち着かなさそうだし、少しでもリラックスできればと来たのだが、落ち着かなさ具合はここでもさして変わらない。

　この世界で暮らしはじめて、もうすぐ１年になろうとしている。ほとんど毎日やっていることだから、時計が無くとも時間を身体が覚えてしまったらしい。

　都にいるとか遠征中だとか、普段とは全然違う環境に身を置けば、また感覚も違ってくるんだろうが、今は普通に家にいるからな。

　せっかくの家族の好意を無駄にしてしまうのもよろしくないなと空を見上げると、月がその歩みを進めている。俺が手に湯を掬ってみると、月はそこに姿を写していた。

「なかなか風流だな」

　掬えたとして手に入れたわけではないのだが、盆栽的に手もとにあるような錯覚を覚える。

　月は前の世界で見たのとは違っている。見かけの形状が円（満ち欠けがあるので球だろうとは思うのだが、それを確認できるものがない）なのは同じだが、こっちの世界の月にはクレーターがない。

　つるっとしているように見える月が淡く光を放っている。それが反射によるものなのか、はたまた自発的に発光しているのかは分からないが、前の世界と同じく眺めていて飽きない光であることは確かだ。

　俺はしばらく身体を温めながら月を眺めたあと、手の上の月を解放してやると、ザブンと湯船に頭まで潜り、湯船から出た。

「おお、美味い！」

　肉を一切れ頬張った後、自然と感想が飛び出た。醤油ベースにニンニクと植物油を混ぜたタレで焼いたものだ。俺が時々出すやつが近い。

　俺の感想にディアナが胸を張った。

「そうでしょ！」

「味をしっかり覚えてたのはリケだけどな」

　ディアナの隣でサーミャがスープを啜りながら言った。やや狼狽えながらもディアナが反論する。

「私も焼いたりしたし」

「それはそうだけど」

「まぁ、焼き加減も大事だから」

　リケが少し困った顔をしながらフォローを入れる。なるほど分業。味付けのほうはともかく、火加減焼き加減の見極めはディアナもかなり腕を上げたようである。

「こっちは今日とれた野菜を入れてますよ」

　ずずいとリディがよそったスープを差し出してくる。朝に俺が作ったときには入ってなかったオレンジっぽい野菜が入っている。

「おお、これもうまいな」

　オレンジのはニンジンっぽい味がした。干したものは良く入れるが、とれてすぐはなかなか入れない。やはり新鮮なほうが味もフレッシュ……な気がする。干して味が凝縮されたようなあの感じも嫌いではないが。

　俺が言うと、リディはふわりと微笑んだ。少しドキッとしてしまいそうな感じだ。俺は慌ててテーブル中央に積んである無発酵パンに目をやった。

「と、するとこれは３人でやったのか」

　サーミャとヘレン、そしてアンネが頷いた。どちらかと言うとパワー系の３人だ。生地をこねるのに力はそこまで必要ではないが、一枚取って齧るとコシというか歯ごたえが俺の作ったときよりしっかりしているような気がする。

　もぐもぐと咀嚼して嚥下するまで、食卓には沈黙が訪れ、３人がじっと俺を見る。

「これもうまいよ」

　俺が言うと、３人はホッと胸をなで下ろす。俺の作ったものも多少はチートが効いているとはいえ、ズバ抜けて凄いってものでもないんだから、気にしなくても良いのにな。

　しかし、これなら当番制でやるのも良いかもなぁ。そんな風に思っていると、サーミャがポツリと漏らす。

「うーん、やっぱエイゾウのが一番いい気がする」

　その言葉に頷く俺以外の全員。それを見て俺は当番制のプランがガラガラと崩れる音を、僅かな嬉しさと共に聞いたような気がした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

書籍版６巻が発売になります。

https://kadokawabooks.jp/product/kajiyadehajimeruisekai/322201000227.html

Amazonさんなどで予約がはじまっておりますので、こちら是非ご予約いただけると嬉しいです。

## 冬の森へ

2022年4月16日

　それから３～４日は“いつも”のとおりに過ごした。その間はマリベルが帰ってくることもなければ、カミロから続報が来ることもなかった。先に控えた納品日に向けて淡々と製品を作っていくだけだった。

“新聞”の状況も気にはなるが今はそっちにリソースを当てられる状況ではないだろうしなあ。

　その日の仕事を終え、片付けをしていると作り終えた品が山積みになっているのが目に入る。

　俺は同じく片付けをしていたリケに言った。

「うーん、結構な数になったな」

「そうですねぇ」

　あれやこれやしつつではあったが、集中して作った製品はそれなりの量になっている。流石に６週間分と言うにはいささか心許ない量だが。

「今更だけど、クルルに載るかな。俺たちも乗るわけだし」

「うーん」

　リケはおとがいに指を当てる。

「大丈夫だとは思いますよ。行き帰りに見ててもまだ余裕がある感じしますし」

「ふむ」

　普段クルルが牽く竜車の手綱を握っているのはリケだ。その彼女が言うのであれば確かだろう。ちょっと重い方がクルルは張り切るっぽいのもあるし。

「重いのは行きだけだし、いざという時は俺たちで担いで歩こう」

「遅くなっちゃいますけど、その時はしかたありませんね」

　ある程度はマンパワーでなんとかするしかなさそうだ。幸い、うちの家族はみんな一騎当千である。荷物を抱えてクルルと同じ速度というわけにはいかないだろうが、一般的な人より早く進むことができるとは思う。

「そう言えば、荷車がないときは俺が担いで行ってたなぁ」

「ああ、そうでしたね」

　あの頃はほぼ１日くらいかかっていたように思う。それから比べると随分と往復が早くなったなぁ。

　今回は帰りは早いし、行きがちょっと遅れるくらいなら問題ないだろう。他のみんなにもとりあえずそのつもりでいてもらうか。

　夕食の時にみんなにその話をした。人にはよって程度は違うが、みんな察してはいたようで、特に異論は無いようだった。

　むしろディアナなどは、その時になって判断するのではなく、最初からそのつもりでいたほうが良いのではと提案するくらいだったので、俺が言い出すまでもなかったみたいである。

「あれ、それじゃあ、明日はちょっと時間空くのか？」

　一通り次の納品の時の話が終わったところでサーミャが言った。俺は頷く。

「暇かと言われたら当然そうじゃないけど、休みを入れる余裕はあるな」

　元々、毎回納品する数も確約はしてないのである。なんとも気楽な契約だが、それで良いと言ってくれている間は甘えておこう。もしいつかキッチリ決められるようになるとも限らないのだし。

　などと考えていたら、サーミャが少し身を乗り出すようにして言った。

「じゃ、みんなで一緒にちょっと森へいこうぜ」

「森へ？」

　獲物がいないから家にこもっている、と聞いていたが、狩りにでも出るのだろうか。

　俺がそんなようなことをサーミャに聞くと、

「獲物はいないんだけど、森の様子が変わってないか見にいきたいんだよな」

　とのことだった。向こう5週間ほど全く森の様子が分からないまま、狩りに復帰というのもリスクがあるか。

「分かった。じゃ、明日は空けておくよ」

　出ている間にカミロの手紙……つまりはアラシが来るかも知れないが、丸々１日待たせるようなことにはならないだろう。

　それこそドラゴンに命を狙われるとかでもなければ。

　明日遊園地に行くぞ、と言われた子供のようにあれこれ話をして盛り上がるみんな。この賑やかさのためなら、もし１日分の納品が減ったとしても、行く価値はあるな。俺はそう思うのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

書籍版６巻が発売になります。

https://kadokawabooks.jp/product/kajiyadehajimeruisekai/322201000227.html

Amazonさんなどで予約がはじまっておりますので、こちら是非ご予約いただけると嬉しいです。

## 森を往く

2022年4月19日

「うーん、寒いな！」

　暖かい家の中から外に出ると、ピュウと風が吹いた。まるで刃物が混じっているかのような冷たさだ。

　雲はないから、日がもっと上がってくればマシになると思うが。

　ディアナとリケがクルルに装具をつけている。途中、良さそうなところがあれば弁当や釣りの時間にしよう、ということになったので、その荷物を積みこむための装具だ。

　装着し終えると、クルルの背中に籠が乗っている。その中には敷物や弁当箱――木製の行李みたいなもの――や道具に食器が積み込まれていた。籠の脇からは水を入れておくための袋が下がっていて、朝汲んできた水を入れてある。

　他にも細長いものを入れておくための筒がつけられていて、いざという時は槍をここに据えることもできるが、今は釣り竿が入っている。

　一通り荷物を積み終えると、クルルは満足そうにフンスと鼻から息を吐いた。ルーシーがキラキラした目でそれを見上げている。いつかは自分も、と思っているのだろう。

　しかし、クルルはいわば専門家で、ルーシーはそうではない。でも、そこらにいる狼くらいの大きさになれば、マリベルを背中に乗せて駆け回る事は出来そうだ。

「うーん、マリベルも来られれば良かったわね」

「そうだなぁ」

　キャッキャとはしゃぐ娘達を見て、ディアナが言い、俺は頷いた。ここに４人目の娘がいたら、更に賑やかだっただろう。初めてのお出かけにワクワクして、３人と一緒にはしゃぐ姿が目に浮かぶようだ。

　その光景が今見られれば良かったのだが、マリベルがリュイサさんと一緒にどこかへ出かけてからまだそんなに経っていない。望んでも詮ないことだ。

「いずれちゃんと帰すとリュイサさんの太鼓判もあることだし、その楽しみはもう少し先に取っておくことにしよう」

「そうね。早く帰ってこないかなぁ」

　残念な気持ちを微塵も隠す気のないディアナ。それに家族からの同意の頷きが帰ってくる。ともあれ、これで準備は整った。

「よし、それじゃあ出発だ」

『おー！』

「クルルルル」「わんわん！」「キュイー」

　それぞれのかけ声で気合いを入れた俺達は、寒風何するものぞと言わんばかりに、森の中へを歩みを進めていった。

　今日は目的があるわけでもないから、森の中を進むスピードはのんびりしたものだ。サーミャもヘレンも周囲に配る目がそこまで厳しくない。街道を行くときのほうがよっぽど警戒している。

　その辺についてサーミャに聞いてみると、

「この辺りは慣れてるからなぁ」

　と言うことだった。その後をヘレンが引き取る。

「基本的に人が来ないし、大きな獣もそう数は多くない。アタイでもそんなに気を張らなくても大丈夫だよ」

　なるほど。この辺りはせいぜい狼くらいだが、彼らが俺達を襲うことはあまりない。襲いかかってくるとしたら熊か魔物くらいなものだが、それはそこまで鼻が利かなくても気がつくと言うことか。

「街道のほうは人間がいるから、アタイにとっては厄介だね」

「確かにあっちの方が視線が鋭いな」

　俺が言うと、肩口に軽く衝撃が走った。ディアナの連続したやつに比べたら、大した衝撃ではない。

「ま、この時期でそんなに獣たちもいないし、そこまでピリピリしなくても大丈夫だよ」

　その様子をやや呆れた様子で見ながら、サーミャが言った。

　冬だから動物たちも籠もっているのかと思いきや、外に出ることを選んだものもいるようで、時々茂みや木の枝が揺れたり、チッチッと小さな声で鳴いているのがいたりする。

「あれは何かしら？」

「あれはですね……」

　ほんの僅か姿を見せている小鳥やリスなんかをアンネが指さし、リディが答えている。

　こうして、冬の森をのんびりと散歩するように俺達は進んでいった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

書籍版６巻が発売になります。

https://kadokawabooks.jp/product/kajiyadehajimeruisekai/322201000227.html

Amazonさんなどで予約がはじまっておりますので、こちら是非ご予約いただけると嬉しいです。

## 冬の花

2022年4月22日

“黒の森”には色々な動物がいる。ということは、それを支える様々な植物もあるわけだ。

　この森には常緑樹が多い。最初は普通に種としての常緑樹が多いのかと思っていたのだが、どうも魔力の影響もあるらしく、リディ曰く、

「あの木は私のいた森では冬には葉が全部落ちていましたね」

　という木が結構な数あるようだ。それがこの森全体にどういう影響をもたらしているかは、森の精霊ならぬ身の俺には分からないことである。

　いや、リュイサさんに聞いても「わかんない☆」とか言われそうな気がするな……。

　それはともかくとして、時折季節外れなはずの果実が収穫できることがあるのも、その辺りの特性があるらしい。

　サーミャとしてはそれが当たり前だったので違和感などはなかったらしい。まぁ、「それが普通」であればそうなるのは当たり前ではある。

　俺だってリディに聞かなければ、この世界の植物はそういうものであると思っていただろう。インストールには動植物の知識があまり入っていない。

　致命的に危ない植物――前の世界で言うところのトリカブトとか――などはその葉の形なんかが入っていた。うっかり食ったり、薬として服用したりしてしまったらおしまいだからだろうな。

　ともかく、この“黒の森”ではエルフの種のように、季節が違っても果実が実ったりすることがある、ということだ。

　そうは言っても冬はピークではないということで、その数もかなり減るらしい。

「十分の一採れたら良いほうのやつもあるな」

　サーミャが言った。普段２０個採れるとして、２個採れたら良いほう、というのはまとまった量を期待していいものではないな。

　実際、気温が下がって冬になってからは狩りのついでに採取する量は減っていたように思う。

「エルフの種もすぐに育ったりはしますけど、やっぱり冬よりは春や夏のほうが良く育つんですよ」

　とはリディの言葉である。安定して収穫できているように思ったが、そこはリディの腕によるところのようだ。手塩にかけて育てているだけあるな。

　そうやって皆でワイワイ歩いていると、ディアナがあちらこちらに視線を走らせているのに気がついた。カサリとでも音がすればそちらの方を見ている。

　我が家随一のかわいいものハンターであるところの彼女は、きっとなにかかわいいものを探しているのだろう。

　同じようにヘレンとアンネも反応しているのだが、彼女たちの場合は純粋に警戒だろう……と思ったが、特に何もないと分かるとその目にややガッカリした雰囲気が宿る。ディアナとあまり変わらなかったか。

　まぁ、結果的に周囲の警戒にはなっている。それに今日は狩りとかではなく、おかしなところがないか見回りのようなものなのだし、そっちでも無意味な行動ではないから、俺が目くじらを立てることもないな。

「あっ」

　そうやって木漏れ日の差す森の中を進んでいると、ディアナが声を上げた。ヘレンが腰の剣に手をかける。カチャリというかすかな音が俺の耳に届いた。

「あ、ごめんね。なにか危ないものを見つけたわけじゃないの」

　ディアナの言葉にヘレンは剣から手を離した。

「あれかな？」

　アンネが同じものを見つけたらしく、目の上に手を当てて眺めた。視線の先を俺も見てみる。

「うーん？」

　俺には何が見えたのかよく分からない。冬なのに青々としている葉が見えるだけだ。トトトとディアナが何かを見たらしいところへ近づいていく。

「お、おい」

　俺達はその後を小走りに追いかける。クルルとルーシー、ハヤテも一緒だ。

「ほら、あれ！」

　追いついた俺達に、ディアナは指し示した。その先を目で追うと、ほんの僅かに残った雪のように、小さな小さな白い花が集まって咲いている。

　全部を合わせても、普通の花よりかなり小さい。しかし、儚さや頼りなさのようなものは感じない。冬の寒さの中、これが自分たちの生き方であると言うかのようだ。

　俺はその姿を見て、あることに思いが至る。

「大きな木の中で寄り集まって生きてるのね。私たちみたいだわ」

　俺が思ったことを、ディアナが口にした。皆も同じことを思ったのか、頷いている。俺も頷きながら、

「そうだな」

　ピョンピョンと跳ねて一緒に見ようとするルーシーを抱っこしてやりながら、そう言った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

書籍版６巻が発売になります。

https://kadokawabooks.jp/product/kajiyadehajimeruisekai/322201000227.html

Book☆Walkerさんなど、電子書籍版の予約もはじまりました。こちら是非ご予約いただけると嬉しいです。

## 兆し

2022年4月23日

　抱っこしたルーシーを花に近づけてやると、尻尾を振りつつクンクンと花の匂いを嗅いだが、食べられなさそうだと分かったのか、今度は下ろせと少し身をよじる。

　俺は要求に従って地面に下ろしてやった。随分大きくなったなとは思うが、こういうところはまだ子供だ。我が儘、と言えばそうなのだろうが微笑ましいほうが強いな。

　地面に降りたルーシーはフンフンと空気の匂いを嗅ぎ始めた。

「近くに何かいるのかな」

　その様子を見た俺が言うと、サーミャもルーシーと同じように鼻を動かす。ルーシーとクルル、ハヤテに次いで鼻が利くのはサーミャだ。

「うーん、アタシには分かんないな」

　サーミャは首を横に振った。リディがスッと目を閉じ、しばらくそうしていたが、やはり首を横に振った。

「魔力の乱れも特にないですね。近くに魔物はいるわけでもなさそうです」

「ふむ……。じゃあ、特に何もいないってことか」

「でも、ルーシーが何もなく反応するかしら」

　ディアナがそう続ける。子供っぽい部分も多いとは言え、成長してきてもいるし、賢い子だ。ディアナの疑問ももっともだな。

　ヘレンがサーミャに声をかける。

「ちょっと辺りを探るか？」

「うーん」

　サーミャがおとがいに手を当てた。異常やその兆候がないかのチェックも今回の目的だ。それを考えれば、移動メインにするのはここらで終いにして、探索をメインに切り替えてもいいかも知れない。

「うん、ちょっと辺りを探ってみよう。アタシも気になるし」

　サーミャは頷いたあと、皆を見回すようにしてそう言った。普段、狩りに出ているときもこんな感じなんだろうな。

　ずっとこの森で暮らしてきたサーミャを中心に、それぞれで意見なんかを出して判断する。

　俺の知らない皆の姿が少し見えた気がして、なんとなく嬉しさを覚えた。

　花のあったところの周囲を、渦を描くように何かがないかを探す。足跡や血痕のような分かりやすいものは勿論だが、匂いのような分かりにくいものも、である。

　しかし、探すものが明確ならばともかく、あるかないか分からないものを探すのは難しい。何もないと思っても、本当にないのか、それとも見落としているのかは判別できないからだ。

「やっぱり何もないのかなぁ」

　俺達より頭一つくらい高い位置から辺りを見渡してアンネが言った。彼女の役割はその身長の高さを活かして、ざっくり周辺に何かないかを探ることだ。

　アンネのレーダーには何もかからなかったらしい。だが、ルーシーは時折立ち止まっては鼻をヒクヒクさせているし、頻度は低いがクルルもだ。

　２人の様子からすると本当に何もない、と言うわけではなさそうだ。

　ルーシーの鼻ヒクヒクの頻度から言って、何か見つかるならそろそろ見つかる、逆に言えば切り上げても良さそうなくらいの時間が過ぎた。

「うーん、よし！」

　屈んで足跡（もちろん人と獣の両方のだ）を探していたサーミャが立ち上がった。これは異常なしと判断したかな。

　茂みを探していたリケもその手を止めてサーミャのほうを見た。それに気づいたサーミャが頷き、リケも頷く。

「そろそろ……」

　サーミャがそこまで言ったときだ。

「わんわん！」

　少し離れたところで、ルーシーが茂みに向かって吠えはじめた。茂みからは何も聞こえてこない。俺達には可愛らしいとさえ思える声だが、そこそこにしっかりした身体の狼に吠えられているのだ、全く無反応でいられるだろうか。

　ルーシーを歯牙にもかけないような“何か”であれば、吠えられたところで無視することもあるか。その場合、危ないのは――。

　俺とディアナは同時に同じことに思い至ったらしい。２人ともヘレンもかくやのスピードでルーシーと茂みの間に割って入る。

　すぐにディアナがルーシーをなだめる。俺はそれを見てから、ルーシーが吠えていた茂みを、“薄氷”の鞘でそっとかき分けた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

書籍版６巻が発売になります。

https://kadokawabooks.jp/product/kajiyadehajimeruisekai/322201000227.html

Book☆Walkerさんなど、電子書籍版の予約もはじまりました。こちら是非ご予約いただけると嬉しいです。

## ６巻発売特別編「一日最初の“仕事”」

2022年5月10日

　今回は６巻発売記念の特別編となっております。

　この内容は本編には直接影響しませんので、ご承知おきください。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　ふわふわと、なんだか気分が良かった。たとえて言うならぬるま湯に浸かっているような。この状態がどういうものかはなんとなくわかる。

　俺は今、完全に寝ている。なぜだかそれが客観的に意識できた。この状態なら普通はもうすぐ目が覚める頃合いのはずだが、今のところそんな気配が全くなく、それがなんだか引っかかる。

「お父さん」

　そう呼ばれると同時に、ゆさゆさと身体が揺さぶられる。この声には聞き覚えがあった。

　俺はゆっくりと目を開ける。目の前には思った通りの少女の顔が、満面の笑みを浮かべていた。

「ルーシー」

「えへへ」

　一層の笑みを浮かべたその黒髪の頭を、俺は寝転んだまま手を伸ばして撫でてやる。昔は寝転んでいても楽に頭が手が届いたものだが、今は少し厳しい。顔も幾分大人びてきた。子の成長は早いものだな……。

「よし、起きるか」

「クルルお姉ちゃんとハヤテお姉ちゃんも待ってるよ」

「わかった。すぐ行くから外で待ってな」

「はぁい」

　ルーシーはパタパタと小走りに部屋を出て行った。扉が開けっぱなしだ。俺は苦笑して身体を起こす。

　その開けた扉から、ヒョイと別の顔が覗いた。肩の辺りで切りそろえられた銀髪に緑の瞳。リディだ。大抵はリケが早起きなのだが、今日はリディも早かったらしい。

「やっぱりルーシーちゃんでしたか」

「うん。開けっぱなしで行っちゃったや。まぁ、すぐ出るから良いんだけど」

「大きくなっても、やんちゃなのは変わらないですね」

　そう言ってリディはクスリと笑う。ルーシーの髪は黒だが、やや灰色がかってもいるので本当に親子みたいな感じがする。

　ルーシーは時々「リディお母さんと畑に行った」話を嬉しそうにすることがあるから、余計にそう思うのかも知れないな。

　パパッと手早く出かける準備……と言っても上着を羽織って靴を履き、髪をざっと纏めるだけだが、それを済ませて部屋を出る。

「肩に木くずがついてます」

　パタパタと俺の肩をリディが払ってくれた。

「ありがとう。昨日に鞘作ったのがまだついてたかな。じゃあ、行ってくるよ」

「はい。いってらっしゃい」

　今度はパタパタとリディが手を振る。「お母さん」に見送られて、俺は家を出た。

「お父ちゃん遅い！」

　家を出るなり、俺は緑の短髪の少女――クルル――にドヤされた。今にも走り出しそうに足踏みをしている。傍らには水瓶が用意されていた。

「クルル、あまり父上に無理を言うものでは無いですよ」

　そう言ったのは黒くて長い髪のリザードマン、ハヤテだ。クルルよりも年上なので、うちでは年長のお姉さんとして振る舞っている。

「今日はちょっと寝坊だったかも知れんなぁ」

「父上は昨日まで大仕事をこなしておられたのですから、仕方ありません」

　そう言えば何か大変な仕事をこなしたような気がするな。鞘もそれで作ったんだっけか。爆睡したのもそれで疲れてベッドに倒れ込んだ……ような記憶がある気がするな。

「一緒に水汲みに行くのも３～４日ぶりになるか」

「その間はお母ちゃんと行ってた！」

　大仕事の間の水汲みはアンネにも頼んでいた。力という点では彼女がかなり上位に位置するからだ。

　実際、仕事の合間にはクルルが興奮気味に「アンネお母ちゃんが凄かった」話をしていた。アンネお母ちゃんは複雑な表情でそれを聞いていたが。

「よし、じゃあ行こうか」

　めいめい１つずつ水瓶を持つ。クルルやルーシーはまだ身体が小さいのに軽々と頭の上に水瓶を乗せて、トテトテ歩き出した。

　その後ろから、俺とハヤテがゆっくりとついていく。さあ、これから朝の一仕事だ。

　クルルとルーシーの足取りは危なげない。完全に「勝手知ったる」だな。小さい頃から手伝ってくれてたから、目を瞑っても余裕で湖まで辿り着けるかも知れない。

　……うっかりそれを言うと本当にやろうとするだろうから言わないけど。

「カレンとアラシはまだ北方から戻ってこないんだっけか」

「一昨日にあともう少し滞在すると文があったばかりですよ」

「そうだっけ」

「そうですよ」

　カレンもアラシもリザードマンだ。一見して姉妹であるかのように見えるが、実は血縁ではなかった。アラシとハヤテが似てるなぁと思っていたら、そっちは実の双子であったが。

　彼女達は都合でこちらを離れて、北方に帰っていた。すぐ帰る、と言っていたように思うのだが、少し遅れるらしい。

「父上は本当に家族想いなのですね」

「そうかな」

「そうですよ」

　そう言って、クスクスとハヤテは笑った。半分は照れ隠しに空を見上げる。木々に阻まれながらも、抜けるような青い空がそこに広がっている。

　”いつも”の朝がそこにある、と俺には思えた。――少しの違和感を同時に抱きながら。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

書籍版６巻が発売になりました。

https://kadokawabooks.jp/product/kajiyadehajimeruisekai/322201000227.html

特典などもありますので、是非ご確認ください。

## 森の子

2022年5月12日

　鞘でかき分けた茂みの中、そこには一抱えより少し小さいくらいの、茶色くてモコモコしたものがあった。

　そのモコモコしたものは収縮を繰り返している。どうやら呼吸をしているらしい。一見するとクッションのようでもあるが、呼吸をしている以上は何らかの生物だろう。

　よくよく見ればピンと尖った耳らしきものも見えるし。

「……生き物？」

　しかし、ディアナが思わずだろう、そう言ったのもむべなるかな、である。

　しかし、ルーシーの声にも反応しないとは、肝が据わっている……にしてもあまりにも反応がない。ルーシーを取るに足らずと判断したとしても、さっきまで俺たちがそこらをウロウロしていたし、今は俺が茂みをかき分けたから、頭を起こしてこちらを見るくらいのことは例え熊でも虎でもしそうなものだ。

　それに呼吸もゆったりしたものではなく、やや速いようにも見える。

「見たところ辛そうだが、怪我してるんだろうか」

「血の匂いはしなかったけどな」

　サーミャが鼻をヒクヒクさせている。彼女の鼻にかからなかったということは、大怪我ではないのだろう。

「だとすると、病かも知れない」

「もしそうなら助けてあげたいけど……」

　ディアナが言葉に困惑の色を載せて言った。病気なら魔力の乱れも血の匂いもなかったことの説明はつく。だが、その場合に問題になるのは……。

「病の場合、それがクルルとルーシー、ハヤテはもちろんだが、俺たちにうつらないかだな」

「そうですね」

　リディが頷く。幸いにして１年弱過ごす中で多少の体調不良はあれど、病に臥せった家族は俺も含めていない。

　万が一のために解熱をはじめとして痛み止めや腹痛に効くものなど、薬効のある植物は色々と採取して倉庫にストックしてあるが、それらが有効な病気ばかりとも限らない。

　もしこの生物が厄介な病気を抱えていて、俺達がかかってしまったら、この“黒の森”の中では基本的にはどうしようもない。

　例えば、かかったのが前の世界で言う狂犬病のようなものなら助からない。いや、あれは前の世界でも罹患、発症したら助からない病気だったが。

　そこまで致命的でない病気であっても治療法を求めるなら一番近いところで街だが、この森の薬草で駄目なものが街でなら治る保証はどこにもない。

　まだジゼルさん達妖精族が治療法なりなんなりを知っていることに賭けたほうが目がありそうだ。もしくはリュイサさんに大きな借りを作るかだが、都合よく動いてくれるかはちょっと怪しいな。

　ともかく、それらの危険を冒してでもこの生物を助けるかどうか。助けるべきかどうかの確認段階でも既にリスクがあるのだ。

　ここで手を差し伸べたとして助かるとは限らない。手を出して何かの病気にかかったが助からなかった、となったら目も当てられない。

　ディアナの困惑はそのあたりを懸念してのものだろう。別に彼女が冷たいわけではなく、家族のことを考えれば当たり前の懸念だと思う。

「とは言えだ」

　俺は誰に言うでもなくつぶやいた。このまま放って自然に任せるのも気が引ける。たとえそれが本来あるべき姿だったとしてもだ。

　手は伸ばそう。俺だってある意味伸ばされた手を掴んだからここにいるのだし。

「どうなっただろうとずっと気にするのも夢見が悪い。少なくとも大丈夫なのかは様子を見よう。助けたほうが良さそうだと判断したら助ける」

　俺のちょっとした決意にみんな頷いてくれた。

　ただし、決意をしたからといってリスクが減るわけではない。当たり前だけど。俺はそろりとモコモコに手を伸ばす。後ろからカチャリ、と音が聞こえた。おそらくヘレンが何かあったら「対処」できるように構えてくれているのだろう。

　かなり近くまで手が近づいた。大丈夫ならこのあたりで飛び起きてもおかしくない。だが、モコモコは動かない。とうとうモコモコに手が触れた。

　フワリと柔らかいかと思いきや、結構硬い感触だ。それにザラリとしている。硬いのは野生の動物の毛が硬いのは当たり前だとして、ザラリとしたのは……これは土か？ 土が毛についていて、サーミャが匂いを感じづらかったとかかな。

　モコモコは手が触れた瞬間、一瞬ピクリと動いた。そして、ゆっくりゆっくりと２つの尖ったものがあるところ、つまり頭をこちらに巡らせた。

　クリクリとした目が俺を見据える。顔はまるまるとしてちょっと狸っぽい。その目が一瞬驚きに満ちたが、そのままコテンとこちらに目を向けたまま頭を倒した。やはり、あまり状態は良くないようだ。

「ちょっと失礼するよ」

　俺はそう言って、狸（？）を抱える。おそらくは獣なので体温が高いことは想定していたが、それにしてもかなり熱いような気がする。

　そして、狸は俺にされるがままだ。流石に自然の獣が人に抱きかかえられて無抵抗、というのはおかしい。懸念していたように、どこか具合が悪いに違いない。

　狸を抱きかかえたまま、俺が皆の方を見ると、皆は再び頷いた。誰からともなく足早に家へと向かう。もちろん、俺にルーシーを近づけないように（本人は俺に抱っこされているのが何なのか知りたいようだったが）だ。

　ヒュウと寒風が肌を撫でた。俺の頭からはさっきまで散々悩んだ懸念がすっかり消え去っているのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

5/9に最新6巻が発売になりました。既に在庫の少ない書店様などもあるようですので、どうぞお早めにお求めください。

https://kadokawabooks.jp/product/kajiyadehajimeruisekai/322201000227.html

## 森と獣と人と

2022年5月15日

　日が昇り、幾分明るさを持った“黒の森”を俺たちは足早に進んでいく。ルーシーもみんなの様子からある程度事情を察したのだろうか、あまりはしゃいだりすることなく、先頭を行くサーミャのすぐ後ろをついていっている。

　俺は急ぎながらもなるべく腕の中に衝撃が伝わらないよう、そして温もりが消えないように祈りながら歩を進める。

　俺の後ろにはヘレンがいた。誰来ることのない“黒の森”ではあるし、まだ肌寒いので獣たちもそうそう出歩いてはいないと思うが、全くいないわけではない。

　結構な早さで進んでいてもしっかり警戒できるのはヘレンとサーミャくらいだ。俺も２人に比べれば大分落ちる。

　サーミャは先頭を進んでくれているから、ヘレンが後ろを見てくれているのは非常にありがたい。

　色々探しながら進むのと、真っ直ぐ迷い無く進んでいくのとでは速度が段違いだ。程なく家に帰り着くことが出来た。

　帰ってきた家族は皆テキパキと準備を始めた。居間の片隅に寝床を設え、湯を沸かし、解熱の薬草を煎じる。

　俺が何も言わない間にそれらが進んでいく。鍛冶のほうでも何言わずとも連携出来ているようだし、こういうときにもそれが発揮されているみたいだ。

　俺は事態を忘れて少し嬉しい気分になったが、頭を振ってそれを追い出す。

　暫定狸はずっと大人しくしている。正しくは大人しくしているというより、あまり身体を動かしたりしたくないってことだろうけど。

「そうそう、ゆっくりゆっくり。良い子ですね」

　出来上がった簡易の寝床に狸を横たえてやると、程なくして調合された解熱の薬をリディが持ってきて、狸の口元に差し出した。差し出された匙の中が少しずつ減っていき、やがて無くなった。

　”黒の森”産の薬草ではあるが、流石に小半時で体調が回復するわけもない。それでも心なしか呼吸が穏やかになってきているようにも見える。

　定期的に薬を与えつつ、交代しながら様子を見るというのがひとまずの方針と言うことになった。最初は俺がそれを買って出る。この子から病気がうつるとしたら、接触時間の長い俺から発症するだろうし。

　スヤスヤと寝息が聞こえてきそうな狸を眺める。

　今回はたまたま俺達が――というかルーシーが――この子を見つけて、うちでなんとか出来るかも知れないから、こうやってうちに連れ帰ることができたが、いつもそうできるとは限らないし、片っ端から保護していくわけにもいかない。熊だろうが虎だろうが保護していたら、前の世界にいた北海道の動物一家みたいになっていってしまう。

　それはそれでのんびりした暮らしを送れるのかも知れないが、俺が目指している方向ではない。そっちの方のチートは貰ってないしな。

　どこかで、この森に暮らす人間としてどの辺を落とし所にするかは考えていく必要がありそうに思う。

　思うのだが、いざ目の前にしたときにどうしてしまうかは、今目の前で少しずつ呼吸が整いつつあるこの狸を見ると自明な気もしてくるな。

　そっと狸を撫でてやる。幾分呼吸が整い、抱きかかえていたときのあの熱さも落ち着きつつあるように思う。

　さて、この子が元気になったらどうしようかな。また皆と相談しないとな。

　眠る顔を見てやってくる睡魔と少しばかり格闘しながら、俺はそんなことを考えるのだった。

## 黒の森の人

2022年5月17日

　仮称狸の看病を２回ほど交代する。最初はリケで、その次はリディだ。その間、狸は徐々に寝息が穏やかになっていった。

　俺は一応みんなからは少し距離をおいていた。２メートルほど離れればとりあえずは大丈夫そうだが、ずっと離れているわけではないし、正直なところ気休めだな……。

　その辺の知識を詳しく伝えすぎるのも、ちょっと迷うところだし。

「大丈夫そうかな」

「そうですね。もう少し様子を見てというところではありますけれど」

　そっと狸を撫でるリディ。狸は目を瞑ったまま少しだけフンフンと鼻を鳴らしたが、すぐにまたスヤスヤと寝入る。

　この様子なら万が一俺たちにうつったとしても、同じ薬草が効くはずだ。それならば最悪でもなんとかなるだろう。ちょっと見通しとしては危なかったかもだが、結果オーライと思いたい。

　時間的にはちょっと鍛冶の作業も出来そうだったが、大きな音でこの子の眠りを妨げるのも憚られるしということで見送ったのだ。なので、看病していない間は部屋の隅で皆の様子を眺めたりしていた。

　それならば、ずっと俺一人で看病していれば良かったのではと俺も思ったのだが、みんなに「多少は交代しろ」と言われての交代だから仕方ない。

　多分、皆もちょっと近くで見守っていたいのがあったのだろうな。

「さてさて、この子はどうしようかね」

　俺は椅子を持ってきてリディの隣に座った。どうしようか迷いはしたものの、うちにいるならそれはそれでいいかなと、ちょっと思いはじめている。

「この子に任せるのがいいんでしょうね」

　いつの間にか俺の隣にやってきていたディアナがそう言った。彼女は繕い物をしていたと思うのだが、休憩だろうか。

　それに、ディアナなら「是非うちにいて貰おう」と言い出すかと思っていたのだが、彼女の口から出てきたのはそうではなかった。

　俺が少し驚いた目でディアナを見ると、目を合わせようとせずにディアナが言った。

「ルーシーみたいな事情があったらともかく、そんな毎回毎回言わないわよ。それに――」

　ディアナは遠くを見るような目をした。

「ずっとこの森で暮らしていれば、また出会うこともあるでしょ」

「……うん、そうだな」

　俺は頷いた。“黒の森”は広い。この世界でも有数の広さを誇る森だ。狸が一度森に戻ってしまえば、次に出会える率は限りなく低いだろう。

　だが、それは皆無であることを意味しない。であれば、今後何年も暮らしていけばそのうち出会えることもあるかも知れない。

　それなら、この森で暮らし続けて、その再会に期待しようということには俺も賛成だ。

　しかし、話はそれで終わりではない。俺はずっとこの森で暮らすつもりだが、ディアナもそうするつもりであることをほんの少し婉曲的にだが言った。

　つまり、ディアナは当面は街か都に行く気は無いってことのようだ。

　それをどう受け取るべきかは……今はまだ、ハッキリさせないでおこう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

KADOKAWAさんのボイスドラマ配信サービスmimicleさんでディアナのASMRボイスドラマも配信となりました。

mimicleさんでの独占配信となります。是非どうぞ。

https://mimicle.com/

色紙プレゼントキャンペーンや、録りおろしボイスの公開などもやってますので是非ご確認ください

https://kadokawabooks.jp/blog/entry-1565.html

## おすそわけ

2022年5月20日

　リディ（とディアナ）に後を任せて、夕飯の準備をしていると、カリカリとドアを引っ掻く音がした。

　パタパタとサーミャが走ってドアを開けてやると、なぜかフンスと鼻息も荒くルーシーが入ってきた。

　ルーシーは家に入るなり俺に駆け寄ってきて、前脚でたしたしと俺の足を叩いた。

「なんだ、もうお腹がすいたのか？」

　いつものご飯の時間には少し早い。お出かけもしたし、いつもより腹が減るのが早いのだろうか。

　幸いにしてルーシーのご飯には味をつけないので、先に準備を済ませてある。あまり熱々で出せない、と言う理由もあるが。

　ともかく、今要求されてもすぐに出せる状態だ。

「わん！」

「よしよし、じゃあ準備しような」

　しゃがんで頭を撫でてやると、パタパタと尻尾を振るルーシー。俺は立ち上がると、先に焼いて切り分けておいた肉を皿に取って、テーブルのそばまで運ぶ。

　その間、ルーシーは尻尾を振りながら俺の足下をグルグルと回る。

「こらこら」

「わんわん」

　蹴飛ばしてしまったりしないように、気をつけて運ぶ。特にこぼれたりするようなものではないが、スープを運ぶような慎重さになってしまった。

「エイゾウはルーシーに甘いんだよなぁ」

　そんな様子を眺めていたサーミャが腕を組み、ため息をつきながら言った。

「あら、クルルとハヤテにも甘いわよ」

　狸の様子をリディと一緒に見ているディアナがまぜっかえす。何故か少しドヤ顔である。

　ううむ、あまり自覚はないのだが、言われてみればそんな気もする。今もまだメシの時間ではないのに、ルーシーにご飯をあげようとしているわけだし。

「いや、でもこれくらいは……」

　と、無駄と分かりつつ抵抗しようとしてみたが、その場にいる全員から「そういうとこだぞ」と言わんばかりの視線を浴びてしまった。ですよね。

　俺は少し身を縮こまらせて、テーブルのそばに皿を置く。ルーシーは置かれた皿の肉をガツガツと食べ始めた。

　火の様子を見ていないといけない工程ももうないので、俺はルーシーが食べる様子をちょっと離れて眺める。

「デカくなってきて……るよなぁ」

「そうねぇ」

　いつの間にかディアナが隣に来ていた。チラリと狸のほうを見ると、ディアナと入れ替わるようにアンネが見ている。

　さっき扉を開けてやっていたサーミャはというと、居間の片隅でリケから裁縫を教わっているようだ。うちで一番器用なのはリケだからな。サーミャは手が身体に比して大きいので、多少苦戦しているようである。

　そんなわけで、今ルーシーを見ているのは俺とディアナの２人である。

「明らかに皿が小さくなったように見えるよな」

「うん。前は頭よりもお皿のほうが大きかったもの」

　もちろん、皿の大きさは変わっていない。つまりはルーシーが大きくなったということだ。

　まぁ、ぶつかってくるときの勢いとか、荷車に一発で上がれるようになったとか成長を実感する瞬間は様々あったが、こう見ると改めて実感があるなぁ。

「そのうちシュッとするのかね」

「森の子たちみたいに？」

「うん」

　この“黒の森”にいる狼たちは基本シュッとしている。ルーシーの母親もそうだった。いつかはルーシーもシュッとした格好いい狼になるはずである。厳密には狼の魔物だけど、基本的な外見はあまり変わらないだろうとリディも言っていた。

「少なくとも食べてるもののせいでコロコロとしている、なんてことは避けたいな」

「それは……うん、そうかも」

　ディアナは少し間を空けてから頷いた。彼女の考えたことは分かる。

「コロコロしたルーシーも可愛くていいのではないか」

　ほぼこれであっていると思う。俺も少しそう思ったし。でも、流石に獣医などいないこの世界である。肥満で身体を壊してもその治療は難しいだろう。その方面での負担はかけないようにしてやらないとなぁ。

　やがて、ルーシーは満足したのか、自分の口の周りをペロリとやった。しかし、見てみると皿にはまだ肉が一切れ残っている。

「ルーシー、まだ残っ……」

　俺がルーシーに言おうとすると、彼女はその残った肉を咥えた。デザート代わり、ということだろうか。

　そう言えば、時々小屋のほうに肉を持って帰るときがある。毎回ではないので、気が向いたときのお姉ちゃんたちへのお土産にしているか、後で夜食にでもしているのかも知れない。

　今回もきっとそれだろう、と思っていたのだが、違っていた。

　ルーシーは肉を咥えたまま、トテテテと狸のほうに小走りで近寄ると、ポテリとそばに肉を置いたのだ。

　久方ぶりに俺の肩に衝撃が走る。そう言えば最近はちょっと離れてたりしたから無かったなぁ……。

「賢いわねぇ」

　ディアナの顔は俺からは見えないが、デレッデレの声を聞けば見るまでもないことは誰でも分かろうというものだ。

　近くに肉を置かれた狸がもぞり、と動いた。もふもふした毛の塊のようだったところにから、ぴょこりと頭が生えてくる。その頭は丸っこくてやはり狸のように見える。

　狸は頭をぐるりと巡らせる。鼻先が肉のあるほうに近づくと、ぴょこりと体を起こした。毛の塊に頭と足が生えたようなフォルム。

　印象としてはやはり狸だが、さらに丸っこく見える。文福茶釜の茶釜部分も毛、みたいな。もちろん前の世界でそんな生物は見たことがないので、こっちにしかいない生物なのだろうな。呼び方としては狸で問題なさそうだけど。

　そのコロコロとしたのが、肉に近寄るとむしゃむしゃ食べ始めた。しまった、床から食わせてしまった。ルーシーのでいいから皿を持ってくればよかったな。

　そんな俺の焦りを他所に狸はあっという間に肉を平らげていく。すっかり全てを胃に収めたかと思ったら、けぷりと小さくげっぷをするような動きをした。

　いや、多分タイミング的にげっぷのように見えただけで、多分他の何かだろうが。

　狸は周囲をキョロキョロ見回す。今、その目には俺たち家族とルーシーの姿がうつっているはずだ。

　その狸の目が少し見開かれたような、そんな風に見えた次の瞬間、狸はぺたりと地面に伏せた。

　すわ、何かあったのかと心配したが、その次に聞こえてきたのはスヤスヤと安らかな寝息。

　とりあえず何か危ないことではなさそうだが、今度起きた時にどうしてあげるのがベストだろうか、俺はルーシーの頭を「えらいぞ」と撫でてやりながら、そんなことを考えた。

## 別れか、否か

2022年5月21日

　ルーシーはしばらく狸を眺めた後、すぐに出ていった。

「あの子なりに気にしていたみたいだな」

「そうねぇ」

　今はもう閉まっている扉の方を見てディアナが言った。帰ってくるときも子供たちは近寄りたそうにしていたからなぁ。状態が分かってない以上近寄らせるわけにもいかなかったが。

「とりあえず、夕飯の用意を済ませるよ」

　狸は相変わらずスヤスヤと寝息を立てている。肉を食った後パタリと寝入ってしまったが、リディが元の場所に戻した。

　リディがこちらを見て頷く。狸もとりあえずは大事なさそうだ。俺は肩をグルグル回しながら台所へ向かった。

「そうだなぁ……」

　俺は天井を見上げた。夕食後、片付けを終えて皆が好きな飲み物を楽しんでいる時間。勿論話題に上っているのは今も片隅でスヤスヤと寝ている狸のことだ。

「俺とディアナ、あとリディもかな。３人はあの子に任せる、で一致はしてる」

「いつの間に」

　そう言って目を丸くしたのはアンネだ。

「飯の準備を始めるちょっと前かな」

「ああ、あの時」

　俺は頷く。アンネも納得がいったのかうんうんと首を振っている。

「でも３人がそう言ってて、そのうち１人が親方ならもう決まってませんか？」

　リケが火酒を一口呑んで言った。俺とディアナとリディは決まっていて、そうでないのはサーミャ、リケ、ヘレンとアンネだ。人数で言えば決まってないほうが多いのだが、リケにしてみれば１人の差は関係ないらしい。

　まぁ、世帯主がそうすると言ってしまうと、この世界のこの時代ではなかなか反対する感じにはならないか。

「と言うか、アタシはそうするもんだと思ってた」

「アタイも」

　サーミャと、彼女に続いてヘレンが意見を表明する。これで人数的にも過半数を超えてしまった。

　流れでリケとアンネが乗り遅れた形にはなったが、

「私も反対じゃないですね」

「わたし一人反対してもねぇ……。反対する理由もないし」

　結局のところ、満場一致になった。何が何でも留めておかなければいけない理由が……ないこともないが、特にはないと言っていいだろう。

　それにそもそもクルルもルーシーも、ハヤテも状態としては変わらないのだ。特にどこかに繋いでいるわけでもないし。

　特にルーシーは森に帰るならそれはそれで彼女の選択を尊重しようと思っている。例え魔物であったとしても、ルーシーはこの“黒の森”生まれなのだから、むしろそっちの方が自然ではあるのだ。

　とは言え、一度うちで預かると決めたものをホイホイと放棄してしまうのも無責任の誹りを免れまい。居なくなったら総出で探すだろうな。

　ほぼ間違いなく責任感から、というわけではないだろうが。

　サーミャが半分はふざけてだろう、手を挙げて言った。

「それじゃ、ちょっと扉開けとくか？」

「確かに、朝起きたときに勝手に出て行けるようにしておいたほうがいいかも知れないなぁ。お互いに気兼ねがない」

「だろ？」

　少し得意げにするサーミャに俺は頷いた。ほんの僅かの時間しか接していなくとも、別れというのは寂しいものだ。「ああ、いないのか」で終わるのも寂しさはあるだろうが、その場合はすぐに諦めがつくように思う。

　悪意あるものの存在があるうえで防犯を考えれば、まったく褒められた対応ではないだろうが、“黒の森”の奥地、家の戸を一晩少し開けていたくらいなら平気だと思う。

　それにめいめいの部屋には別に閂があるのだし、即座にマズいことにはならないだろう。

　俺はみんなにそれを言った。

「確かにそうね」

　うんうんと頷いているのはディアナだ。

「皆寝てても、何かあればアタイが起きるよ」

　と、ヘレンが胸を張る。ここでの生活にすっかり馴染んだとは言っても、プロの傭兵だからな。夕方にやっている剣の稽古――稽古、と言うより訓練に近くなってきているらしいが――の話を聞いても鈍っているようなことはあるまい。

「周囲に鳴子を仕掛けてあるし、ドアにもついてる。狸が通れるくらいにだけ開けておいたら、人間が通ろうとしたら分かるでしょうね」

　と、これはアンネだ。少しずつ要塞化してきてるからなぁ、うち。出入り口もそのうちなんらかの強化を図ろうかな。

「よし、それじゃあサーミャの案でいこう」

　皆から了解の声が比較的小さく響く。狸が寝てるからな。

　起きた時、あの子がそこで寝ているか、はたまた居なくなっているか。どっちだろうと思いつつ、皆に「今日は早めに寝るんだぞ」と言い残し、俺は自分の部屋に引っ込んだ。

## 朝が来て

2022年5月25日

　カリカリ、とドアを引っ掻く音で目が覚めた。はて、うちの子にそんな習慣あったかな、と思いながら体を起こす。

　ヒヤリとした空気が背中を撫でて、ブルッと身を震わせる。そこらに置いてある上着を羽織って、扉の閂を開けるとドアを引っ掻いていた主が現れた。

　朝早いと言うことが分かっているのだろうか、吠え声を上げずに尻尾だけパタパタと振ってお利口さんだ。

「よしよし、えらいぞルーシー」

　俺は小声でそう言いいながら、昨晩は扉を開けっぱなしにしていたことを思い出した。それでルーシーが入ってきたんだな。

　ルーシーはやはり大声を上げることなく、尻尾の速度をあげた。

　うーん、これはキャット……いや、ドッグ……でもないな、ウルフドアの設置を考えたほうが良いだろうか。

　しかし、今後この子はもっと大きくなるはずだ。森で見かけたことのある大人の狼の大きさを考えると、ドワーフやマリートたち、比較的身体の小さな種族なら余裕で入れるくらいの穴を開けないといけなくなる。

　それはちょっと防犯上問題があるな。毎朝機嫌良く家の中を歩くルーシーの姿を見てみたいが、ちょっとそれは諦めたほうが良さそうだ。

　ルーシーのお迎えで水を汲みに出る。家を出る前に、部屋の片隅を見てみた。扉を開けっぱなしにしていた理由が昨晩はそこにいて、出たければどうぞと開けっぱなしになっていたはずだから、気が向けばとっくにそこに姿はないはずだ。

　しかし、そこにはすやすやと寝入っている狸の姿があった。もうすっかり安心しきっているのか、丸まらずにだらんと伸びきっている。野生が失われつつあるな。

　まぁ、それならそれで問題は無い。狸が増えたくらいでうちの食糧事情が悪くなることはない。

　根菜を含む野菜についてはまだカミロのところから仕入れるもののほうがまだ多いが、リディ渾身の畑が順調で最近はそっちで採れたものもかなり使っているし、肉は貯蔵に回す分も十分だからと、敢えて狩りに行かない週もあるくらいなのだ。

　鍛冶屋の稼ぎが無くても、しばらくはもつのである。まぁ、それはのんびり暮らすという目標を達成しつつあるというよりは、ここで籠城できるようにという真逆の目的が占めつつあるのだが。

　ともかく、新しくここで暮らすことになるかもしれないその姿を見て、俺はルーシーに向かって口に人差し指を当てた。それを見てルーシーは立ったまま尻尾の勢いよく振る。

　俺とルーシーはなるべく足音を立てないよう、家の外へとそろりそろりと出て行った。

　水汲みをクルルとルーシー、ハヤテと行ってきた。いつもの通りにつつがなく、であるが水の冷たさが若干ゆるんでいたような気がする。夏の盛りでも各所で水が湧いているからか、年中冷たいのは確かなのだが、冬の最中に行ったときよりはだいぶマシなように思えた。

　とはいえ、

　娘達も同じ考えのようで、足をつけてパシャパシャと歩き回りはしたが、深いところへザブザブ水をかき分けて進んでいったりはしなかった。

「夕方、お母さん達に温泉に連れてって貰うんだぞ」

　俺がそう言うと、娘達は小さく了解の声をあげた。

　そんな水汲みが終わって、家に戻ってくると皆が目を覚ましてきていて（アンネはちょうど起きてきたところだったが）、いつもの朝の風景がそこにはある。

　いつもと違うのは片隅に狸の姿があることだ。すっかり良くなったのか、身体を起こしてちょうどお座りの体勢で皆が朝の支度をしているのを、まん丸の目でぼんやりと見ている。

　その狸は、俺が戻ってきたのに気がつくと、

「ぷきゅう」

　と声を出した。一瞬、その狸の声だとは思わなかった。何の音だろう、と思ったのが正直なところだ。

　それが狸の声だと分かったのは、再び彼（彼女？）が頭を上げて同じ声を出したからである。

「えっ、この子こんな声で鳴くの？」

「かわいい」

「確かにかわいいですね」

　わっとうちの女性陣が狸の側に集まる。すると、狸は三度、

「ぷきゅう」

　と声を出した。今度は頭を下げながらだ。俺にはそれがお礼を言ったように見えた。

　いや、そう思ったのは俺だけではなかったらしい。

「今お礼した？」

「お礼したわね」

　ディアナとアンネが言った。他の皆も頷いている。皆にもあれがお礼に見えたと言うことだ。

　しかし、このタイミングでお礼と言うことは……。

　俺が考えたとおり、狸はぴょこんと身体を起こすと、扉のほうへ向かっていく。家の外へ出るほうだ。

　慌ててサーミャが少し開いていたその扉を開け放ってやる。

　狸は扉からゆっくりと外へと出て行く。ディアナが引き留めたそうにしているのが、後ろからでも分かる。

　狸は最後に扉から家の中を覗き込むと、

「ぷきゅう」

　そう頭を下げて、扉の向こうへ消えていった。

## 森の娘

2022年5月26日

「出て行っちゃったなぁ」

　狸は最後に礼をしたあと、戻ってくることはなかった。とりあえず俺は朝飯の準備に取りかかる。

　他の皆は少しの間出て行った扉から外を見ていたが、やがて自分たちの時間に戻っていく。

　ここから出て行くのはあの狸が自分で選択したことだ。あれこれ言って連れ戻せば良いという話ではない。生きていればいつか会うこともあるだろう。

　あまり名残を惜しんで心を痛めるよりは、知己が増えたと思っていつも通りに戻ったほうがいいのは確かだ。

　今後、どれくらい同じような出会いがあるだろうか。こうやって森の中にどんどん知り合いが増えるのも悪いことではないのかも知れないな、俺はそう思いながら、グラグラと沸きはじめた鍋の湯にパラリと塩を入れた。

　この日は二手に分かれた。納品物を作る俺とリケが残り、他の皆は「昨日の続き」だ。昨日は狸の騒動で中断したし、あれが流行病のようなものだったら、他にも同じく弱っている獣がいるかも知れないからだ。

　俺とリケが残るのは納品物の製作がメインなのは確かなのだが、やはり昨日の狸が罹っていた病のことで、森の誰かから相談なりが来ないとも限らないからである。

　通信手段として伝言板を設置したので連絡自体はできる。しかし緊急の場合、“森の主”であるリュイサさんなら俺たちの前にヒョイと（ジゼルさん曰くは「はしたない」方法だ）現れれば済むが、ジゼルさん達妖精族はそうはいかない。

　最悪の場合は“黒の森”の中、俺たちを探し回る羽目になる。

　そんな場合を想定して、誰かは残ったほうが良いかもということになり、それならばと俺とリケで残って納品物を作れば問題なかろう、と話が決着したのだ。

　森の中をウロウロするのとは違い、勝手知ったる我が家で慣れた作業である。滞りなく進んでいった。

　やがて鍛冶場に短剣やナイフがうずたかく積まれていく。リケの製作速度も随分と速くなった。それに魔力の具合も良くなってきている。

　俺のこの腕前はチートによるものだが、そのチートを見て覚え、リディの指南で魔力の扱いも身に着け、１年足らずで急成長を遂げた。

　もう既にそこらの鍛冶屋、それも人間のではなくドワーフの鍛冶屋でもそうそう太刀打ち出来るようなのはいないくらいの腕前になってると思うんだよな。

　そして、ドワーフは弟子入りしてある程度技術を吸収したら一度自分の工房に戻ってその技術を伝える。普通は数年かかるだろうところを１年足らずで身に着けたように見える。

　真のチートはリケなんじゃないかとさえ思えてくるのだが、その話をしてもリケは首を横に振って、

「いえ、まだまだですよ。例えば――」

　と、自分がやりたいことに届いていないことを力説する。そこまで謙遜しなくともと思うのだが、俺から何かを学び取って目標を高く掲げ、そこに向かって進んでいきたいのなら、それを止めるほうが余程野暮と言うものだ。

　俺はただ「そうか」とだけ言って、後片付けをはじめるのがいつものことで、今日も概ねそんな感じで１日の作業を終えた。

　それに気がついたのは外から戻ってきた皆だった。いつもならすぐに家に入ってくるのだが、今日は家の外で何やら騒いでいる。普段は家に入るまで気がつかないのに、今日気がついたのはそれでである。

　俺とリケは顔を見合わせて、鍛冶場の出入り口から外に出る。ワイワイと騒いでいるのは、家の玄関口のほうらしい。俺とリケはそちらへ回った。

「あ、エイゾウ、リケ」

　俺たちが姿を見せたのに気がついて、玄関前にいたディアナが手を振った。俺とリケはそちらへと近づく。

　他の皆は玄関前を囲むようにして、何かを見ている。辿り着いた俺の目に飛び込んできたのは、ちまっと並んだ草である。

「薬草？」

「ええ」

　思わず口から漏れた俺の言葉に頷いたのはリディだ。

「これも色々な病や怪我に効く薬草です。見つけるのは相当難しいはずなんですが」

　そう言ってリディは薬草に目を戻した。リディがそこまで言うものが、ほんの僅かだが軒先に並べられていた。根っこには土がついていて、乾ききっていない。今日採取してここへもってきたらしい。

「誰が……って聞くまでもないか。これは結構なお礼を貰っちゃったかな」

　俺が言うと、皆頷く。あの狸が持ってきてくれたのだろう。実に律儀な話である。

　この日から時々軒先に薬草が並んで置かれるようになった。俺たちは軒先に高さのない台を作って、そこに干し肉を置いておくようになり、その干し肉は薬草が置かれる日には必ず無くなっているのだった。

## 尻尾

2022年5月28日

　そして、２週間ほどが過ぎた。寒さはまだ残っているがかなり緩んでいて、春の到来が近いことを肌に教えてくれる日々が続いている。

　２週間の間にもう１度、森を見回りに行ってきたが２、３歩も行けば喰われると言わんばかりの世間の風評とは正反対に平和なものだった。

　まぁ、“森の主”が折り紙に太鼓判を捺した「最強戦力」だ。そうそう襲おうと思うようなのがいない、ということなのだろう。

　世間の風評も、それとは異なって滅多なことでは獣たちに襲われることがないのも俺達にとっては有利な状態なので、払拭しようとは思わない。

　まかり間違って「大したことが無い」って話が流れ、大規模入植、なんてことになってもなぁ。その辺りの懸念は「いや、本当に普通の強さだとヤバい」とサーミャが自信をもって請け合ってくれた。

　“黒の森”の獣人達が子供の間家族と暮らすのは「普通の強さ」を超えるまでは、ということなのだそうだ。

　多分、なんか独り立ちの儀式みたいなのもあるんだろうなぁ。またいずれ聞かせてもらいたいところだ。

　見回っていると鹿や狼に猪たちの姿が目立った。いよいよもって春が来るのだなと感じられる。そこからしばらくすると子供が生まれたりもするだろう。

　自然の営みとして生命のやりとりがあるのはいたしかたないとして、それ以外では皆すくすくと順調に育って欲しいものだ。そうでなかったからルーシーはうちに来たわけだけど、彼女のような子は少ないに越したことはない。

　ちなみに狸には会わなかった。ちょこちょこ来てはそのたびに薬草を置いていってくれているので遠くまでは行ってなさそうだが、姿を表さなかった。

　どういう理由からかは知る由もない。単純に広い森ですれ違っているだけの可能性が一番高いけど。

　その間、偽物についての情報がカミロから来ることは無かった。一度、都の状況というか、サンドロのおやっさんとこから包丁の研ぎの依頼が来たことと、それと同時にカレンさんの習作が届いたことが記された“新聞”が届いたが、そこに偽物の情報は含まれていなかった。

「何もなかったの？」

「そうだな、一言も書いてない」

　新聞越しに聞いてきたアンネに、俺は新聞を少し下げて答えた。都から届いた品は次の納品の時に対応でいいとは書いてあるが、その他にはない。

　アンネが顎に手をやって言った。

「情報を何も掴めなかった？」

「うーん」

　俺は天井を仰ぎ見る。

「カミロが本当に何も掴めていないなら『何も情報が得られていない』と一言添えるくらいのことはするだろうな」

　さすが商売人と言うべきか、意外と細やかな配慮ができる男なのだ。話を振っておきながら、その後のフォローをしないということは考えにくい。せめてもと進捗くらいは教えてくれるはずなのだ。

　アンネは顎に当てた手に鼻を埋めるように俯いた。

「なのに何も書いてない。つまり……」

「大なり小なり何かを掴んだが、伝えるべきかどうか迷ってるんだろうな」

　ここで適当に嘘をつく、ということが出来ないのが商売人として良いのか悪いのか。少なくとも俺はそんなところを好ましく思っているが。

　いや、下手に嘘をついて不興を買うよりは、との判断かも知れないな。

「ともあれ問い詰めるにせよ、一切任せるにせよ、納品の時だな」

　俺がそう言うと、アンネは頷いた。さてさて、鬼が出るか蛇が出るか。厄介事の尻尾はどんな形をしていることやら。

## 春の街道へ

2022年6月2日

　木々が花の芽をつけ、それがほころびつつある日、俺たちは準備を進めていた。

　俺は荷台に沢山のナイフ（樽に入っている）を積みながら空を仰ぐ。

「街道はどうだろうな」

「まだ青々とはいかないだろうな」

　その隣に同じくナイフの入った樽を置きながらサーミャが言った。普段なら１樽で済むが今日は２つだ。

「夏になったらうんざりするほど青々と長くなるけど、今はちょっと時期が早い。そんなに伸びるの早くないし」

「そういえばそうだった」

　そうか、俺がここに来て１年が過ぎようとしているのか。もう何年もここにいるような錯覚すら覚えるな。

「夏が来るくらいまではずっと向こうまで見えてたな」

「そうだろ？」

「うん」

　街道の向こうに緑の絨毯を敷いたような草原が広がっている光景は今もハッキリと覚えている。

　俺がこっちの世界に来て、はじめて見た広大な風景。この“黒の森”に来たときよりも、あの時が一番違う世界であることを意識したかも知れない。

　もちろん、元の世界では見たことがないような動物がいたり、サーミャと出会ったりした段階で違う世界に来たことを意識したものだ。

　しかし、改めてそれを意識しつつ、「戻れないのだな」と思い、なんとなしに割り切った気分になったのはあの時だったような気がする。

「俺にとってはこっちに来て最初か。ちょっと楽しみだな」

　俺が言うと、サーミャは何も言わず、ただ笑顔で返してくれた。

　どんどんと荷台に荷物が積み上がっていく。さすがに６週間分の納品物となると量もなかなかになるな。まるで一家で夜逃げ……いや、昼逃げでもするかのようだ。

　定番のタンスが積まれていないのが惜しいと思ってしまうくらいには。どっかのタイミングで作ってみようかなあ。

　今のところ不便無く過ごせているので、そのあたりの品はどうしても後回しになりがちだ。

「うーん、クルルが牽けるかしら」

「クルルルル！」

　心配を口からもらすディアナに対して、これからこの荷車を牽いて街まで行く当の本人は「何が問題なのか」とでも言いたげに高らかに鳴く。俺はその首筋を撫でてやりながらディアナに言った。

「本人も任せろと言ってるぞ」

「そうみたいね」

　ディアナは苦笑した。

「まぁ、本人がいいなら問題ないわね」

「とは言え、かなり量が多いのは確かだから、いざという時は俺たちで分担して運ぶぞ」

「それは勿論」

　パチンとウインクを寄越すディアナ。どこで磨きをかけたのかサマになっている。俺はそれに苦笑を返すと、荷台に乗り込んだ。

　ぴょいとルーシーが荷台に飛び乗ったら出発時刻だ。既に自分で飛び乗るのが恒例になった。最初の頃は抱っこしてやらないと行けないくらいだったのにな。

　ハヤテはとっくにクルルの背中でのんびりと羽繕いのようなことをしていた。

　リケが手綱でクルルに合図を送る。いつもならスッと進むのだが、今日はジリジリと進んでいく。

　これでスピードが上がっていけば良し、そうでなければ一旦止まって荷物を下ろすことになる。

　どっちだろう、と思っていると荷車は少しずつ速度を上げる。

「おお、凄いなクルル」

「見かけには分かりにくいけど、クルルも成長してるのね」

　俺たちがそう囃すと、荷車の速度はさらに上がる。子供のような面を見せることがあるなと思っていたが、肉体的にもまだ伸びる余地があったのだな。

　そんな我が子の成長を風として感じながら、街道の様子はどうだろうかとまだ見ぬ景色に俺は思いを馳せるのだった。

## 春の街道

2022年6月4日

　森の中にはほとんど冬の空気は残っていない。わずかにひんやりとした空気の気配があるが、それを押し出すようにふわりと柔らかい風が森の中を渡っていく。

　遠くの方を見ると、鹿がのんびりと木の枝から葉をちぎり取っているのが見える。狼や虎など肉食の獣は何の理由によるものかは分からないが見当たらない。

　それで俺たちはヒヤヒヤすることもなく、のんびりした森の中を楽しむことが出来ていた。

「クルルルル」

　クルルも久しぶりに荷車を牽けるのが嬉しいのかご機嫌である。喉を鳴らすように鳴いている。

　もしクルルが疲れた素振りをみせるようなら遠慮無くすぐに止めるよう、手綱を握るリケには言ってある。

　しかし、快調な速度で飛ばしていくところを見るとどうやら杞憂に終わったようだな。

　いや、まだ森も抜けてないし、街道もある。油断は禁物か。

　サスペンションもあまり柔らかくはしていなかった。簡単な仕組みでまともな減衰装置もないので、柔らかくしすぎるとぐわんぐわんと揺れ続けてしまいそうだったからだ。

　今はそれが功を奏して、荷物を満載していても底付き――バネが伸びない状態にまで重さがかかってしまうこと――にはなっていない。時々ガツンと突き上げるような衝撃は来るので、ややサスペンションの機能が損なわれていそうな感じもあるが。

　この辺は帰ってきたら大丈夫かチェックするか……。どのみちメンテナンスも必要だしな。

　のんびりと、しかし、それなりの速度で（速度を出しているのはクルルだが）森の中を抜ける。

　今まで俺たちの頭上を覆っていた樹木が無くなると、一気にその場を光が満たす。

　一瞬眩んだ目が光りに慣れると、そこには一面に青が広がっていた。

「うわぁ」

　俺は、いや、皆も思わず感嘆の声を上げた。こっちに来てからはじめて見たときもなかなかの光景だと思ったが、今はその倍は感動している。

「花か」

「うん。この時期の数日しか咲かない。運が良かった」

　サーミャは目を細めながら言った。俺が来たときは既に時期を過ぎていたか、森に引っ込んでる間に咲いたか、とにかくタイミングが合わなかったことは間違いない。

「しかし、見事なもんだ。咲くって分かってたら花見にしたかったところだな」

「花見？」

　遠くを見ていたアンネが俺の方を見る。俺は頷いた。

「北方に桜って木があってな。それが花を咲かせる時期に集まって花を見る」

「へえ」

「てのは半分は建前で、本当の目的は花を見ながら酒を呑んだり飯を食ったりだな」

「あら。でも、なるほどね。いいわね、そういうの」

　アンネは目を丸くしたあと、微笑んだ。

「確か、わっと花を咲かせる木が森にもあったような……」

　そう言ってサーミャが首を捻る。リディがコクコクと小さく頷いた。

「それなら私も心当たりがあるかも知れません。故郷の森にも多分同じ木がありましたから」

「お、じゃあ今度の狩りの時に探すか」

「はい、そうですね」

　サーミャとリディが顔を合わせて笑う。

「私も私も！」

「もちろん」

「わんわん！！」

「わかったわかった、お前もだな」

「わん！」

「キュイッ！」

「もちろんハヤテもな」

　ディアナとルーシー、ハヤテが花見の木探しに立候補し、サーミャがルーシーの頭を撫でた。

　そんな様子をヘレンが眺めている。

「ヘレンは良いのか？」

「まぁ、どのみち狩りにはついていくし」

「それもそうか」

　狩りには基本、俺とリケ以外全員参加だ。ヘレンも言わずもがなついていく。狩人としての腕前ももちろんだが、純粋に戦力としては我が家随一……と言うよりはこの地域近辺では右に出る者無しとまで言っていいくらいなので、一緒に行ってくれていて随分と助かっている。

「花が咲くかどうかってあんまり気にしたこと無かったなぁ」

　ヘレンは花咲く草原を眺めた。俺はその横顔に向けて言った。

「ちょっとずつ覚えていけばいいと思うぞ」

　ヘレンは俺のほうを見てキョトンとしたが、すぐに満面に笑みを湛え、

「そうだな！」

　大きな声でそう言った。

　そして、クルルの牽く荷車は街の入り口へとさしかかった。

## 春の街

2022年6月7日

　街の入り口ではいつもの通りに衛兵さんが街道を行く人々の中に怪しい者がいないか、目を光らせていた。顔見知りの人だ。

　険しい顔をしていた彼が、少し顔をほころばせる。少し離れたところから大きめの声で声をかけてきた。

「おお、あんたら」

「どうも」

　俺は片手を挙げて衛兵さんに挨拶をする。他の皆も軽く頭を下げた。

「長く見なかったな」

「雪とかありましたからねぇ」

“黒の森”で軽く積もるほど降ったのだ、ここらも降ったはずである。

　うまいこと全ての雪雲がこの街を避けた可能性もあるが、他のどこかでは降ったはずで、その話は衛兵であれば耳にしているに違いない。俺が雪の話をしても特に違和感はないだろう。

　俺の思ったとおり、衛兵さんは頷いた。

「ああ、あれは少し驚いたな」

「だもんで、少し暖かくなるまで待ってたんです」

「なるほど、気をつけてな」

「ええ、ありがとうございます」

　俺が会釈をすると、衛兵さんはヒラヒラと手を振って、再び険しい顔を街道に向けた。

　いつもなら人が多いと言ってもそこまででは無い時間帯のはずだが、今日はピーク時に負けず劣らず（ピークはまだ自由市に行っていた頃に知った）の人出で、目抜き通りはあちこち色んな人でごった返している。

「今日はまた人が多いな」

「春だからなぁ」

　辺りに目をやりながらヘレンが言った。そう言えばヘレンはこの辺りを知っててもおかしくないか。

「そろそろ山を越えられる時期だし、商人達が準備を始めてるんだよ」

「なるほど」

　俺――とヘレン以外の家族も――がキョロキョロと見回してみると、確かにそれっぽい感じの人が多い。同じ商人、と言っても扱ってるものが違うのだろう、背嚢や馬に積んでいる荷物の大きさは千差万別だ。

　ルーシーもキョロキョロしているが、あの子の場合は単に人が多いのが珍しいだけだな。顔つきには精悍さも出てきたが、まだまだあどけなさが抜けない、可愛らしい顔をしている、と親としては思っている。

　実際、いつものように一瞬ギョッとした人の中にも、にこやかにルーシーを見やる人が結構いる。いつもの露天のオッさんも、一瞬驚いた顔をしたが、それより短い時間相好を崩していた。

　あちこち行き交う人々の間を、今日はいつもより重い荷物を牽いているにも関わらず、クルルは器用に抜けていく。

　その背中ではハヤテがキリッとした顔で周囲を見回していた。多分、あれも警戒してくれているんだろうな。

　走竜も小竜もこの世界ではある程度の数がいて、この街は人の行き来も多い（“黒の森”を避けて通るならほぼ確実に経由するからだ）ので、見かける機会はそれなりにあるはずだが、珍しい存在でもある。

　なので、走竜と小竜、２匹もドラゴンがいる光景にそれはそれで驚く者が少なくない。そんな視線を感じてか、２人とも心もち胸を張り、俺たちはその様子を微笑ましく見守った。

　春になって変わったこと、その最後はやはりここだった。カミロの店の裏庭、そこにはチラホラと花が咲いている。

　荷車は倉庫に入れて、家族とともに身軽になったクルル、そしてルーシーとハヤテをここに連れてきている。

「こんにちは！」

　俺たちの姿を見て、丁稚さんがパタパタと走ってきた。この子も顔つきに男らしさが出てきたような……いや、男子三日見ざれば刮目して見よとは言え、さすがにそれは言い過ぎか。

　しかし、少しガッチリしたような感じは受けるなぁ。

「こんにちは。元気そうでなにより。少し大きくなったか？」

　俺は思わず完全に親戚のオジさんみたいな事を言ってしまう。まぁ、似たようなもんと言えば似たようなもんか。

　丁稚さんは少しはにかんで、

「え？ そうですか？」

　と笑う。俺は頷いた。

「うん、少し見ない間に大きくなるもんだなぁ」

「えへへ」

　俺はクシャリと丁稚さんの頭を撫でる。丁稚さんは少しくすぐったそうにしたあと、うちの娘達を呼んだ。

「それじゃ、よろしくな」

「ええ、お任せください！」

　丁稚さんに娘達を任せ、俺たちはカミロの店へと入った。